
とある神主の幻想録

空ノ鎖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある神主の幻想録

【Nコード】

N2652Q

【作者名】

空ノ鎖

【あらすじ】

幽かな夢は幻の果てに詠まれる。
墨に染まり咲き誇る桜は今はなく。
あゝ、八分咲きの妖よ。
願わくば、その許で永久の眠りを……

頁一、『事の始まり』（前書き）

あまりに酷かったのでしつかりと作りなおしました。
詳しくは活動記録を参照してください。

この作品は独自解釈、設定を含みます。
お気に召さない方はお戻りください。

頁一、『事の始まり』

世界が逆転する。

天が地に。

嘘が真に。

生が死に。

現実が幻想に……

「って逆転しているのは俺の頭だったか……」

そう言つて一人の男が呟いた。

その男の格好は酷く乱れており、とてもただの寝起きの状態には見えないことだろう。

それもそのはずだ。

目が覚めたというのに男が居るのは寢所などではなく、縁側。

更にいえば頭は外へと投げ出されており、あと頭一つ分でも飛び出していれば庭と熱い接吻を交わすことになっていたことだろう。

これでは男が世界が逆転していると勘違いを起こしても仕方がないだろう。

実際のところは男が言ったようにただ頭が逆さになっていただけであったのだが。

「……そう言えば、昨夜はここで寝てしまったんだっただな」

身体を起こし、縁側に腰を落ち着けたところで男は頷く。

男の側には数枚の羽織が置いてある。

元々は男が羽織っていたものなのだろう。

恐らくは男が眠っている間に脱げてしまったのだ。

「さて、落ち着いたところで今日も奉仕に勤しむとしますか」

着崩れていた浴衣の乱れを整えると男は藍染の羽織を抱え立ち上がる。

この男の名を『神代流司』。

この場所の名を『博麗神社』という。

そして、『神代流司』は『博麗神社』の神主であった。

流司の朝は早い。

日が登り始めた同時に目覚め、朝靄が晴れぬ間に境内の清掃を始める。

そして、朝靄が晴れる頃には境内の掃除を済ませて朝食の準備に取り掛かっている。

『博麗神社』の境内はそれほど広いと呼べるものではないけれども、それでも一人で掃除をするとなるとだいぶ手間がかかることだろう。

それを流司は流れる作業で淡々とこなす。

これが他に巫女の一人でもいれば話は変わってくるのだろうが、境内には流司以外の姿は見られない。

それもそのはずであった。

流司は現在、『博麗神社』に一人で過ごしているのだから。

『神代家』は代々神職に携わっている家系であった。

その起源は大和朝廷が最盛期であったときまで遡るといっただから驚きと言うものだろう。

一説には『神』と交わったこともあるというのだから、その歴史の長さは計り知れない。

だが、時代の流れというものは人を、世界を変えていく。かつて、その一族の全てが神職に携わっていた『神代家』も現在では極僅かの者しか携わることとはなくなってしまうていた。流司とその父親はそれに含まれる少数の一人であったのだ。

「今日は参拝者は来なさそうだな……」

朝食後、社の清掃を済ませた流司はぼつりと声を漏らした。神社にとって参拝客が来ないことは信仰の減少に繋がる一大事であるのだが、流司はこれもまた仕方のないことだと考えていた。

流司が『博麗神社』で暮らしているのは父親である『神代隆斗』からの命令もとい試験であったからだ。

この国では基本的に神職に関しては世襲制をとっている。その為、一度潰れてしまうとすぐに新たな神官を仕えさせるということとはできにくいのだ。

故に神職者が潰えてしまった神社というものは他の神社の神官に管理が任されることが多かった。『博麗神社』は『神代家』に管理が移譲された神社の一つであった。

流司は修行の一貫として父親から『博麗神社』の管理を命じられたのであった。

だが、この『博麗神社』、随分と長い間管理されていなかったのか流司が訪れた時は悲惨という言葉で表すことも難しい程の状態であった。

長い間風雨に晒されていた為に屋根の一部は抜け落ち、社に繋がる石畳は所々剥がれてしまっていた。

それでも修繕をするだけで生活することができるようになったのは、それだけ『博麗神社』が頑丈な造りをしていたからであろう。

流司の日々の努力の甲斐もあり、今ではその本来の美しさを取り戻すことができていたのであった。

しかしながら、参拝客がこないことの原因はそこではない。

無論、長い間廃れてしまっていたことや参拝をしにくい立地にあるということも参拝客が少ない原因であると流司は考えていたけれども、最大の原因は『祭神』が不明であることだと流司感じていた。

『博麗神社』の『祭神』は不明であった。

これは極めて異常なことである。

祭るための社があるにも関わらず、祭るべき存在がないのである。参拝客というものはそこに祭られている神様の御利益に肖るために参拝をする。

神様はそれによって得られる信仰の代わりに御利益を人にもたらすのである。

『祭神』が不明ということは信仰をしたことによって得られる御利益が何であるのか分からないということである。

それでは信仰が薄れてしまい、『博麗神社』が廃れてしまったのも当然であると流司は思っていた故に仕方がないと感じていたのであった。

「では、予定通り“倉”の整理をしましょうか」

一向に参拝客が見られないことで見切りをつけた流司は賽銭箱の隣から立ち上がり、神社の裏手へと向かう。

木の陰になり日の光が届きにくい場所にそれはあった。

薄汚れ年期を感じさせながらも破損は見られず、中に納められているものを嚴重に守り抜いているだろう倉がそこにはあった。

流司とてこの神社の管理を任されたことには現状が良くないことは理解できていた。

全くといっていいほど途切れていた参拝客の数が若干ながら戻ってきたとはいえ、まだまだ少ないといえるだろう。

そこで、流司は“倉”の中から『博麗神社』の『祭神』に関して分かるものを探し出そうと前々から考えていたのだ。

“倉”の中が無事であることは以前確かめたときに流司は分かっていたので、迷いなく鍵を取り外し“倉”の扉を開け放ち……………全身を埃で染め上げるのであった。

「げほつげほつ……………これだけ埃が溜まっているというのに、ここまで状態がいいとはな」

扉を開け、新鮮な空気と光を取り込んだ倉の中を流司は手掛かりを探しながら呟いた。

以前の調査でこの倉にあるものがある程度状態が約束されていることは流司は知っていたが、ここまで完全な状態で残っているとは思ってはいなかったのだ。

風雨から防ぐことができるとはいえ、長い間放置されていれば湿気も溜まり黴も生えてくる。

中に納められているものも時折虫干しにしなければ、状態は酷くな

るのが当然のことであった。
その上、盗賊の類から狙われるという可能性も高いことだろうことは明白であった。

しかしながら、“倉”の内部は埃こそ大量に溜まってはいたものの、それさえ払ってしまえば保存された当時の状態と全く同じではないかと感じてしまうほどに綺麗な状態であったのだ。

流石のこれには流司も首を傾げてしまう。

この手のことにはそれほど詳しくはない流司であったが、怪しむまゝでこの“倉”だけ外界と接していなかったのではないかと。

「これは……」

所蔵されていたものの選別を続けていた流司の目に一冊の書物が目に入る。

ほとんどか祭事で用いるものであるのに対してその書物だけは明らかに毛色の違っているものであった。

その書物の名を、

『幻想郷縁起』

というのだった。

頁一、『事の始まり』（後書き）

というわけで書き直しました。

まあ、原型とどめてませんね。

こう言った感じの方が書きやすいです。

この作品は三人称表現の練習でもありますのでご意見、指摘など随時募集しています。

内容に関しても勿論同じです。

頁二、『幻想郷縁起』（前書き）

後半が少し欠けていました申し訳ありません。

頁二、『幻想郷縁起』

「これは“風土記”の一種ということでもいいのか……？」

流司は“倉”から持ち出してきた『幻想郷縁起』をパラパラと捲りながら首を傾げる。

内容は“幻想郷”と呼ばれる地での人々の生活について記しており、風土記の類であると流司は思っていた。

『幻想郷縁起』には“幻想郷”で暮らす者の様子が編纂者の関点も含めた上で克明に記されている。

しかし、そのことが同時に流司を現在進行形で悩ませるに至っていたのだ。

この国には“幻想郷”などと呼ばれている土地は存在していない。過去の記録を洗い流せば見つかるかもしれないが、少なくとも現在は存在していない土地である。そして、

「妖怪ね……」

流司を悩ませるに至った最大の原因はそこであった。

『幻想郷縁起』にはまるでそこで暮らすものの一部であるかのように鬼や天狗といった妖怪の存在が記されていたのである。

古今到来、妖怪という存在が信じられることは不思議ではない。

科学技術が発展した現在でこそ、想像上の存在として扱われているが、昔は当たり前のようにその存在が信じ込まれていた。

流司はその家系上、その類の記述をされている文献に触れるという

ことも多くあったのだ。

この国の“神”の多くは“妖”とは対局であり同等の存在であった。人知の及ばない存在のことを時として“神”として崇め、時として“妖”として畏れたのだ。

神様に仕える神官はその性質上、そういった人知の及ばない事が起こったときに率先して行動を起こす立場にある。

それは『神代家』も例外ではなく、これまで数々の祭事を執り行ってきたとの記録がある。

曰く、怒り雷雨を齎す神を鎮めるため。

曰く、日照りによる被害を解決するために雨を司る神をお呼びするため。

といったようにだ。

その逆に“妖”を退治したという記載も残っている。

疫病は蔓延させる悪霊を退治したなどの記述がそれにあたる。

かつて、“陰陽師”と呼ばれる人々が実在していたことから、“神”や“妖”の存在はともかくとして、人々の生活において密接かつ重要な存在として“神”や“妖”が信じられていたということは紛れもない事実だと流司は理解していた。

それ故に“妖”の存在は比較的“抽象的”に表現されることがあった。

それは人々に不確定の得体の知れないものと伝えることで“畏れ”を抱かせることでその存在を軽視させないためにあるだろう。

具体的に記述があるものであっても、“人では及ぶことのない力を持つ”、“人を攫う”、“子供や女性の肉を好む”といったより恐怖を促す記載となっているのが一般的であった。

だが、『幻想郷縁起』は違う。

鬼や天狗は宴会が好きや河童は可笑しな技術を持っているなどという“畏れ”を抱かせるには不十分な記載が数多く見られているのだった。

“人間を食べるので近づかないこと”という内容もあることにはあるが、それもまるで実際に目にしたかのように書かれているのである。

代々の神職の家系に生まれた流司でも、いや流司であったからこそ、その奇怪さが際立って感じてしまうのであった。

「編纂者は……八代目“阿礼乙女”『稗田阿弥』か。知らない名だな……」

流司はそう呟いたものの“阿礼”という言葉と“稗田”という苗字には覚えがあった。

『稗田阿礼』。

かの『古事記』の編纂に携わったとされる類い希なる記憶力を有していたとされる人物である。

『稗田阿礼』は天鈿女命を祖とする猿女君氏の一族であり、大和国添上群稗田、今でいう奈良の大和郡山市稗田町を本拠地としていた舍人だ。

生没年、性別ともに定かにはなっておらず、一説には『竹取物語』の車持皇子のモデルである『藤原不比等』の別名だとするものもある。

全国に“稗田町”という名が残っているように稗田一族の一部は今でも残っており、同じ神職に携わる一族同士として『神代家』とも浅くない縁があったのだ。

けれども、流司は『稗田阿弥』という名にも『幻想郷縁起』という書に関しても全く聞き覚えがないのであった。勿論、門外不出の可

能性も少なくはないと流司は考えてもいたが、それでも数々の疑問は流司の頭の中に氷解されることなく残り続けるのだった。

「今度、朱祢さんに訊いてみることにするか」

何時までも悩んでいたところで致し方ないという結論に至った流司は実家に戻ったときに親身に行っている稗田の家系の人物に訊ねてようと決め、『幻想郷縁起』を閉じる。

「貴方がこの神社の神主さんかしら？」

ふと、女性の声が届いたのはそれと全く同時のタイミングであった。

顔を声のした方へ向けた流司はその声の主の端正な顔立ちにしばらくの間、見惚れてしまっていた。

黄金律をそのまま表現したようなバランスのとれた容姿に、陽光に映える金紗の長髪。

日傘をさし微笑む姿は神社の境内には不釣り合いではあった様になっ
ていると流司は感じていたのであった。

「そんなに見つめられると恥ずかしいですわ」

「あつ、すみません」

女性のどこか照れるようにいう声にハツとなった流司は慌てて頭を

下げて謝る。

いくら様になつていたからといって初対面の女性の顔を眺めてばうっとしてるのは失礼のほかないだろう。

「いえ、見惚れられるのは女としては嬉しいことなのでそこまで恐縮になることはありませんのよ。神主さん」

そう言う女性の言葉に流司は赤面する。

年はそれほど変わらないと流司は思っていたが、その雰囲気は父親を相手にしているような熟練されたものを流司は感じているのだった。

「ごほん。今日は参拝でしょうか？」

火照った顔を咳払いを一つすることで誤魔化し流司は女性に問う。そんな様子も女性には見透かされていると流司は気付いていたが、無理矢理にその意識を外へ向ける。

「ええ、少し気になつたもので……」

珍しいと流司は内心で呟いた。

現在では外国人が観光で神社を訪れることもそれほど珍しいということではない。

しかし、あくまでもそれは有名や神社であり、とてもではないがつい最近まで廃れてしまっていた『博麗神社』に参拝に来るとは流司は思えなかったのだ。

「意外そうですね？」

「ええ、まあ。ここに仕えている私が言うのも何ですが、つい最近

まで酷い状態で参拝をする人など全くいませんでしたので」

「ふふつ、だからこそですわ。確かにそうでしたわ。酷く寂れていて、とても神を祭っている場所には思えませんでしたわ」

そう言う女性の言葉で流司は納得に至る。

この女性は観光でここを訪れたのではなく、普段から『博麗神社』を見かけるような状況にあったのだと。

だからこそ、最近になって整備の整い始めた様子が気になったのだらうと流司は思った。

「近くにお住まいで？」

「ええ。とても近く、ですがとても遠い場所に」

流司は女性の言い回しに違和感を感じるももの、すぐに理解する。

この『博麗神社』の周りにも民家は少なからず存在しているが、快適な生活を送ろうとすれば駅前まで居住区を移さねばならない。

駅前からのアクセスは悪く実際の距離に比べてかなりの時間がかかってしまうのだ。

「それにしても綺麗になりましたわ。これなら、御利益がありそうですわね」

女性は数枚の硬貨を取り出すと綺麗な作法で御参りを済ませる。

流暢なこの国の言葉を話すことからこの国での生活は長いのかも知れないと流司は思った。

「よろしければまたいらしてください」

「縁があれば訪ねさせていただきますわ」

そう言うと女性は鳥居を潜り階段を降りていくのだった。
流司がその優雅な姿に再び見惚れることになったのは全くの余談である。

頁三、『里帰り』（前書き）

前回、後半が少し欠けていました。
気になる方は申し訳ありませんが、修正しておきましたのでご確認ください。

頁三、『里帰り』

「どつやら、上手くやっているようだな」

「なんとかね。あそこまで酷いとは聞いてなかったんだけど」

流司は非難するような視線を込めながら、その言葉に答える。

質問した中年半ばの男性・『神代隆斗』はその思いに異も返さないようにケラケラと笑う。

「いいじゃねえか。修行にはなっているだろう？神職試験の勉強をするよりよ」

「実践的ではあるよ。確かに……」

流司にはこれ以上父親である隆斗に何を言った所で無駄であるといふことが嫌というほどに理解できていたので、早々に諦めて溜め息をつくように頷くのだった。

流司が実家に帰ってきてから2日。

父とは丁度入れ違いになつてしまい、『博麗神社』の管理について報告したのは2日目の日が沈んだ後であった。

現、『神代家』当主である隆斗はその立場が故に全国の『神代家』またはその分家が管理する神社を訪れなければならないことが多々ある。

時には1ヶ月以上戻らないということもあるので、2日待つだけで済んだ流司は幸運だったと言えるだろう。

「そうだろうとも。ところでこっちにはどれくらいの間いるつもりなんだ？」

「元々、一週間の予定だから後5日かな。明日は朱祢さんのところへ行く予定だけど」

「ほう、稗田の嬢ちゃんのところへか。何かあったのか？」

隆斗は流司の言葉に少し驚いたように声を漏らした。

比較的親しい間柄にあるとはいえ、よっぽどの事がない限りは両家の関わりはなかったので、昔ならいざ知らずわざわざ会いに行くと言った流司の言葉が意外であったのだろう。

「ちょっと気になる物を見つけてね。まあ言うよりも見た方が早いな」

流司は側に置いておいた鞆から『幻想郷縁起』を取り出して隆斗に差し出した。

「『幻想郷縁起』か……聞いたことがないな」

隆斗はそう呟くと『幻想郷縁起』を真剣な表情で吟味しながら読み出した。

しばらくの間、無言の静寂が部屋には作り出され、それを打ち崩すのは隆斗が『幻想郷縁起』を捲る音だけであった。

「確かにこれは気になるな」

十分ほどしたところで隆斗が『幻想郷縁起』を閉じる。

その顔には興味深さと若干の困惑が入り混じった表情が浮かんでお

り、流司は『神代家』当主である父であっても『幻想郷縁起』についてはよく分からないのだと察することができた。

「『博麗神社』の倉の中から出てきたんだけど。恐らくは今から一五〇年前ほどの物だと思う」

『幻想郷縁起』には編纂された詳しい時期が記されていないが、一緒に保存されていたものからだいたいそれくらい前の物であろうと流司は推測していた。

「一五〇年前となると江戸末期、嘉永の頃か」

「そうだと思う」

父の呟きに流司は頷く。

一五〇年前となれば代々江戸の末期、かの黒船が来航していた頃であつた。

比較的技術が発展を迎え始めた時期でもあり、“風土記”としての『幻想郷縁起』の記述にもその時代のものに似たようなことが書かれていたので流司の推測はほぼ確信と言えるものであつた。

「となると記述に関してもそうだが、ここまで“妖”に関してついて書かれているというのも妙な話だな」

「そつえば……」

父の言葉に流司はとあることに気付いたように口を開いた。

“妖怪”について畏怖の対象として信じられていたのは陰陽師の台頭の時代からも平安が最盛期であり、江戸の末期ともなれば一種の娯楽として伝えられることが多かった。

そのように考えた場合では“風土記”として“妖”の存在を記載するのではなく、“物語”として書き綴るのが一般的であった。

しかしながら、『幻想郷縁起』には少なからず“幻想郷”という地で暮らす人々の生活が書かれていることから“風土記”の一種であることは間違いないかったのだ。

つまり、“幻想郷”という地では“畏怖”の対象として“妖”の存在が信じられていたことになる。

これは当時の世俗からはズレていたと考えるしかないものだ。と隆斗と流司は思っていた。

「恐らくはこの“幻想郷”という地は巷からは離れた場所にあった人里なのだろうな」

「『博麗神社』がある辺りがかつてはそう呼ばれていたということ？」

「その可能性も少なくはないだろう。あの辺りはこの国の原風景が残る数少ない土地だからな」

「そうだな……」

『麗神社』の辺りにある民家の様子を思い浮かべる。

そのいずれもが古来からの木造建築で、コンクリートによる近代的な家はほとんど見られてはいなかった。

「尤も駅前からの開発が進めばじきに消えてしまっただろうが」

「……………」

人はよりよい環境を作り出すために自然を切り崩していく。
父が言うようにいつかはあの風景も失われてしまう時が来るのかと
思うと流司は押し黙ることしかできなかったのだった。

「さて、話が少しそれてしまったが、少し思い出したことがある」

「思い出したこと？」

「そうだ。“幻想入り”という言葉を知っているか？」

「いや、知らないな」

父の言葉に流司は首を振る。

流司には全く覚えのない言葉であった。

「これはあの辺りにおける“神隠し”の別称なんだがな、どうやら
“神隠し”にあうことを“幻想の存在”と称していたようだ。まあ、
強ち間違っていないことだろう」

父の説明に流司は確かに納得のいくものだと思いを示していた。

“神隠し”は“現実”から露と消えてしまうこと。

それを“幻想”の存在となることだと考えてもそれはおかしくはな
いだろう。

“幻想入り”。

言えて妙だと流司は内心感心しているのだった。

「その“幻想入り”が『幻想郷縁起』と関係あると？」

「そういうわけではないが、“幻想入り”したものが辿り着くのが

“幻想郷”。その風土に関して記したのが『幻想郷縁起』だとすれば辻褄はあつたらうか?」

「なるほど」

突拍子もない考えではあると流司は思ったが、辻褄が合うということも正しいものであった。

確かに“幻想”となった“妖怪”が暮らしている様子を人が描けば『幻想郷縁起』のような物が作り出されるかもしれない。

「なにより、そう考えた方が面白いだろう」

「それは……」

父のどこかこの謎を楽しむような笑顔に流司も笑顔で返す。血は逆らえないということか流司も僅かながらの楽しさを感じているのだった。

「なら、この話はここまでだ。流司。時間があるようなら守矢の嬢ちゃんの所に顔出しておけよ」

「早苗に?」

「ああ。あそこも色々大変みたいだからな。相談に乗ってやるといい」

隆斗は少し暗い表情になって言う。

相談に乗るならば当主である父の方が適任ではないかとも流司は思ったが、結局口に出すことはなく今後の予定についての思案を始めるのであった。

頁四、『稗田家』

井草の独特の香りが包み込んでいる部屋で瞼を閉じた流司は静かに正座の型を取り続ける。

決して眠っているわけでも物思いに耽っているというわけでもないだろう。

瞑想。

流司の心はただ無心、真白に支配されているのであった。

カコンツ。

鹿威しの何度目かの打つ音と同時に流司は瞼を開ける。

それと同時に閉ざされていた襖が開け放たれ一人の人影が部屋に入り込んでくる。

「お待たせしまい申し訳ありません」

入室してきたのは妙齡の女性。

腰まで伸ばした髪を結び上げた女性はこの部屋の香りと同様に独特の存在感を醸し出しているのであった。

「いえ、突然の申し入れを受けて頂いたのはこちらですから。『稗田家』当代『稗田朱祢』様」

流司はその女性に深々とまるで三つ指をつくかのように礼をする。

『稗田家』現当主、『稗田朱祢』。

それがその女性の正体であった。

「また、そんな他人行儀な真似をするのことはありませんよ。知ら

ない仲ではないのですから」

「一応の礼儀ですから」

「そういうことでしたら、我が『稗田家』は貴方様の来訪を歓迎しますわ。『神代家』次期党首『神代流司』様」

朱祢は流司の正面に腰を降ろしながら微笑む。

柔らかい物腰ながらその姿は流司の父である『神代隆斗』と同じく当主としての威厳に溢れていた。

『神代家』と『稗田家』の繋がりには実に平安の頃まで遡る。

当時、混迷の状況にあった『稗田家』を『神代家』が助けた事が関係の始まりであった。

以来、各地にその名が分かれたることとなって“猿女”の役割を受け継いでいる本家に当たる家系との関わりは途絶えることなく現代まで続いているということであった。

「お久しぶりですね、流司さん。以前お会いしたのは五年程前でしょうか？」

「……そうですね。私の元服式に出席して頂いたときが最後でしょうから」

朱祢の言葉に流司は少し間をおいてから頷くように肯定の言葉を述べた。

『神代家』には“元服式”というものが存在している。

これは男であれば十二、女であれば十四に行われる儀式であった。

無論、この国の法律では成人となる年齢を二十と定めているので成

人になることを示している訳ではない。

元来の元服が氏神の前で執り行われることから派生して『神代家』では祭神への御披露目、正式に仕える年齢を記念して行われるものであった。

つまりところの神官としての“成人”ということである。

儀式自体は男女共に髪を一房奉納するという単純なものであるが、『神代家』に関わりのある家系の当主を招き大々的に行う儀式であった。

現在、『神代家』の嫡子は流司ただ一人であるために“元服式”は流司の、六年前に執り行われて以降開かれてはいないのだった。

「そんなに経つのですか……見違えてしまうものです。立派になられましたね」

「いえいえ、未だ若輩の身です」

朱祢の懐かしむような声に流司は恐縮するように頭を下げる。いくら、次期『神代家』当主であるとはいえ、“次期”と“現”には明確な差が存在している。

長い歴史を誇る『神代家』や『稗田家』ではその点の礼儀に関しては厳格であった。

「ふふっ、そうですね。修業の方は順調ですか？」

「なんとか、と言ったところですよ。毎日が遣り繰りの繰り返しですよ」

流司は当初の『博霊神社』の状態を思い出しながら苦笑し答える。何度思い返してみてもよく今の状態にまですることができたと自分

ながらに流司は感じていた。

「では、私の微細ながらその協力をさせていただくとしましょう」

「よろしくお願いします」

「事前の話によると“稗田”のものが編纂に携わった書物と伺っておりますが……」

「その通りです。まずはご覧になっていただこうかと」

流司は『幻想郷縁起』を取り出して朱祢へと差し出す。

朱祢はそれを興味深そうにしながら受け取ると、

「では、拝見させていただきます」

と前おいて読み出す。

隆斗が読んでいた時と同様に部屋の中には『幻想郷縁起』の捲られる音だけが響く。

朱祢が『幻想郷縁起』を読み終えたのは実に一刻ほど経ってからのことであつた。

「まず、結論から申し上げますとこの『稗田阿弥』たる人物にも『幻想郷縁起』という書物には心当たりがございません」

「そう、ですか……」

朱祢から告げられた返答に流司は少くない落胆の色を示す。

『神代家』の当主である父にも分からなかったものなので、『稗田家』の当主である朱祢に分からなければ事実上『幻想郷縁起』の正

体を明かすことは不可能であったからである。

「ですが、この一代目『稗田阿一』という名に関しては全く知らないという訳ではありません」

「それは本当でしょうか？」

落胆の色に染まっていた流司であったが、朱祢の思いもしない言葉に若干の期待の色が戻ってきていた。

「ええ。流司さんは勿論『稗田阿礼』という人物をご存知ですね？」

「はい。“古事記”の編纂に携わった生没年、性別ともに定かではない人ですよ」

流司は朱祢の質問に対して一般的に知れ渡っている『稗田阿礼』の人物像を答える。

「そうです。その『稗田阿礼』に関しては我が『稗田家』でもほとんど資料が残っておらず、今流司さんが仰ってくださいましたように“古事記”の編纂に携わったということ以外はほとんどが不明としかいえませんが、その『稗田阿礼』に子供がいるとの記載がある資料があるので」

「……その子供が『稗田阿一』という訳ですか？」

「その通りです」

「なるほど……ですけど、それは……」

『稗田家』の当主である朱祢が言うことなのだから信用ができるものではあると流司は思っていたが、それだと説明がつかないことがあることにも気付いていた。

「年代が合わないということですね？」

「はい」

流司が疑問に感じていたのは時代が合っていないということであった。

仮に『稗田阿一』が『稗田阿礼』の子供だとしたならば、今から二〇〇年以上前の人物であるということになる。

しかし、『幻想郷縁起』が編纂されただろうのは今から一五〇年程前であった。

そして、編纂者の『稗田阿弥』は『稗田阿一』から数えて八代目だという。

つまるところ、『稗田阿一』と『稗田阿弥』の間には一〇〇〇年程の時間の差があるにも関わらず八代しか継承されていないのである。

喩え時代の割に長命だったとしても有り得ないことであると流司、朱祢の両者が考えていた。

「ただの推測でしかありませんが、この“阿礼乙女”というのは単なる当主のことを指し示しているのではなく、何らかの条件が満たされた時に継承できるものなのかもしれません。“乙女”というくらいですので“女性”限定であるとか。それでも辻褄は合わないかもしれませんね。」

「そうですね。何にしろこれだけではどうすることもできませんか

……」

『幻想郷縁起』の中には『博麗神社』に関しての記載もあり、この秘密を明かすことが『博霊神社』の“祭神”に関して知る手掛かりになるだろうと流司は考えていたので残念だというように呟いた。

「すみません。お力になれなくて……」

「そんなことはありません。私一人で考えていたのでは知り得ないこともありましたので収穫がなかった訳ではありません」

『稗田阿礼』と『稗田阿一』の関係などは流司一人が考えたところで知ることのできることはなかった。

そういう意味では成果が上がらなかったということではなかったのに流司は心の底から朱祢に感謝しているのだった。

「そう、言っていただければ幸いです。こちらの方でも詳しい資料を探してみますね」

「ありがとうございます」

「朱祢様。お茶のおかわりをお持ちしました」

流司が頭を下げたところで襖の外より声がかかり、お茶のおかわりを持った『稗田家』の使用人が姿を現す。

「では、お茶も来たことですので昔話にも花を咲かせることとしましょうか」

「お手柔らかにお願いします。私にとっては恥ずかしいことばかり

ですので……」

「あらあら」

その後、流司と朱祢は逢魔が時になるまで昔話に華を咲かせるのであった。

流司がその話に赤面することになったのは言うまでもないことだろう。

頁四、『稗田家』（後書き）

『稗田阿礼』と『稗田阿一』の関係に関しては独自設定です。
明言されてないので。

頁五、『守矢神社』

階段というものは登りよりも降りの方が気をつけなければならないということとは一般的にも知られていることだ。

しかし、果ての見えない階段を登るというものは体力、精神的には降りよりも辛いと言える。

流司は「これを降らなければならぬのだよな」と脳裏に思い浮かべながら一段一段足を踏みしめていく。

流司が階段を登り始めてから半刻。

階段を降ってくる他人にも流司は既に曖昧な会釈しか返すことができなくなっていた。

降ってくる人もそれが分かっているのか、あるものは苦笑し、あるものは微笑みながら流司の脇を通り過ぎていく。

「着いた」

流司は最後の一段を踏み越え鳥居を潜り抜ける。

『博麗神社』の階段でだいぶ慣れたと流司は思っていたが、この階段は一味も二味も違つたということを再認識する。

境内の中には疎らながら参拝客の姿がある。

流司とは異なりあの階段を参拝の為だけに登り降りするのだからこの神社は未だに根強い信仰があるとだろうと流司は考えていた。

『守矢神社』。

それが階段の遙か頂にある神社の名であった。

『守矢神社』は『博麗神社』と同様少々特殊な神社である。
『博麗神社』が祭神が不明であるのに対して、『守矢神社』には祭神が二柱いるのだ。

一柱は『建御名方神』。もう一柱は『洩矢神』。
『建御名方神』と『洩矢神』とは日本神話における“諏訪大戦”で勝利した神と敗北した神である。
その為、『建御名方神』に『洩矢神』は従属し、『建御名方神』は諏訪の地に幽閉されることで大和神たちに逆らったことを看過されることとなった。
これが“諏訪大戦”の顛末である。

現に諏訪大社は『建御名方神』とその妻とされる『八坂刀売神』を祭神として現在まで祭り続けている。

しかし、こと『守矢神社』で伝えられている内容は異なっている。
“諏訪大戦”で『建御名方神』に『洩矢神』が敗北したということ
は変わらない。
けれども、『建御名方神』が“諏訪”の地に侵攻したのは大和神に逆らったことよって逃げ出したのではなく、大和神の命令に従い
ためであり、断じて幽閉されたわけではないとなっているのであ
た。

また、『洩矢神』の扱いに関しても世俗的に伝えられている内容ではただの支配下になっただけであるが、『守矢神社』に伝えられているものは異なっていた。

『建御名方神』の支配後もこの地の人々は『洩矢神』の祟りを畏れ、『建御名方神』の支配がスムーズに行われることがなかった。

そこで『建御名方神』は己の力だけでこの地を支配することを諦め、新たな神を『洩矢神』と融合という形で君臨させることで対外的に支配するに至ったのであった。

その神の名が『守矢』であり、『守矢神社』の始まりである。

つまりは『建御名方神』はこの地では『守矢神』として存在し、この地以外では大和の神である『建御名方神』として存在しているのである。

それ故に『守矢神社』は祭神が二柱存在しているのであった。

この『守矢神社』でのみ伝えられていることはあくまでも異説という扱いであり、一般的には全く浸透してはいない。

あまりにも、突拍子過ぎることであるためか、多々ある異説の一つとの見解が大半であるためだ。

その点に関しては『神代家』も同様の考えであった。

但し、異説には異説なりの成因があるとの考えがあつてのことである。

故にこの地で信仰が集まらなかったらうことは真実であろうと『神代家』では考えている。

この地では古くから『ミシヤグジ』という存在が土着信仰の象徴として信じられてもいた。

そこで『建御名方神』と『洩矢神』を『ミシヤグジ』と同一視することによって信仰の統一を図ったのだ。

この事は『建御名方神』と『洩矢神』を『ミシヤグジ』と見做すという説が多く残っていることから十分に信用できることであつた。

「それでも、以前よりもだいぶ少なくなっているか……」

土着信仰から繋がる根強さは確かに今もなお参拝客を呼び込むこと

にはなっている。

信仰はなくなることはない。

それは流司自身が信じ確証を持っていることではあった。

だが、信じるものの数は少なくならざるを得ない。

信仰は頹廢する。

特に狭く深く信じられていた『守矢神社』ではその影響が顕著であった。

力のある神であればあるほど、その存在を維持するための信仰は多くなければいけないという。

信仰が維持するだけに満たなくなってしまうえば、神は“現実”から“幻想”となる。

いつのことになるかはわからないが、それはこの『守矢神社』でも避けられないことかもしれないと流司は漠然と感じているのだった。

「流司さん、ですか……？」

手水舎で清めていた流司に声がかかる。

「久しぶりだな。元気そうだなによりだよ、早苗」

口を清め終えた流司が振り返るとそこには巫女服をまとった一人の少女の姿がある。

『東風谷早苗』。

それがその少女の名であり、『守矢神社』の巫女であった。

頁五、『守矢神社』（後書き）

拙作での『建御名方神』 〃 『神奈子』 説の扱いは『守矢神社』 周辺でのみ伝えられているという扱いにしています。

まあ、色々意見が割れる話題です。

パラレルワールドって扱いで万事解決なんですけどね……

頁六、『団樂』

ズズツ。コツ、はあく。

「御馳走様でした」

「お粗末様です」

流司はお茶を飲み終えた湯呑みを置く。

五臓六腑に染み渡るといふ言い方は妙ではあるが、食後の身体中に染み渡っていることが理解できているのであった。

何故このようなことになっているのかといえば、それは単純に流司が早苗に昼食を振る舞われていたからである。

流司とて『博麗神社』では一人暮らしであるが故に炊事洗濯の類はお手の物であったが、誘いを断つてまでしたいとは思っていないかった。

その上、戻っていたのでは中途半端な時間になってしまい、『神代家』の使用人の方にも迷惑がかかると考え、そもそもが早苗と話をするためでもあったので言葉に甘えることにしたのだ。

「早苗も春から高校生か……早いものだな……」

流司には関係のないことではあったが、今は世間でいう“春休み”の時期であった。

その為、学生である早苗が日中にもかかわらず『守矢神社』にいるのである。

「なんだか、孫の成長の楽しむおじいちゃんみたいですよ。流司さん、私と2つしか変わらないじゃないですか」

「そうはいつでも早苗のことはそれこそ生まれた頃から知っているからな」

流石に早苗よりも2歳しか上でない流司の言葉には無理があるというものであったが、実際のところ物心が着いた頃から早苗のことを流司が知っているということには違いはない。

『神代家』と『東風谷家』の間には『稗田家』のような家系的な繋がりは元々ない。

にもかかわらず、流司が物心ついたときから早苗のことを知っているのは彼らの母親にあったのだ。

先代の“風祝”、つまり早苗の母親と流司の母親が親友同士であったが為に親交があったのである。

それだけであるのなら、ただの親交で終わっていたのだが『神代家』当主である隆斗が“風祝”という言葉に興味を示したことで結果的に家ぐるみの付き合いとなるようになった。

“風祝”というのはかつて諏訪大社におかれていたという“風を鎮める為の神職”である。

現在では絶えてしまっていたその神職がこのような形で受け継がれているとは隆斗でも予想外だったらしく非常に興味を持ったのだ。

尤も、『守矢神社』でも“風祝”は形骸化してしまい名前のみが残っているものであり、実際の役割は巫女とほとんど変わるものではなかったけれども。

現在では流司、早苗の母親共に亡き人となっているが、親交自体はこうして続いているのである。

「それはそうですけど……」

「だから、ことう……早苗は妹みたいなものだからねえ」

実際、流司は早苗のことを歳の近い妹のような存在だと思っていた。『神代家』には流司以外の子はおらず、流司の母親も亡く、隆斗も再婚する予定もないだろう為に流司に家族が増える可能性はほぼ無いに等しいものであった。

それ故に物心ついた頃から関わりのある早苗を実の妹、家族のように感じていた。

それは流司の父である隆斗も同じであり、だからこそ流司の様子を見に行くように言ったのだらう。

「……………」

「?どうかしたか、早苗?」

「……………なんでもありません」

そんな妹の成長を喜ぶような兄の表情を見せる流司に早苗はどこか不機嫌そうである顔を浮かべる。

「そうか」

流司は早苗もそういうことに対して多感な年頃なのだろうと事故既決して頷く。

実のところを言えば、流司の至った結論は全く持って反対のものなのだが、流司がそれに気付くことは少なくともしばらくはないだらう。

「それにしても高校か……俺には縁のない場所だな……」

「流司さんは家業を継ぐってことになっていきますからね」

流司は高校には通っていない。

通っていたら『博麗神社』の神主などはしてられないのだから当然ではある。

「家を継ぐ選択をしたことには後悔をしてはいないけど、やっぱり憧れはあるな。勉強自体はしているけれどな」

『神代家』、ただ一人の跡取りである流司に“家を継がない”などという選択は現実としてないことであつたが、それでも隆斗は流司に対して選択権を考えていた。

事実、流司が断った場合は現在仕えている神職の中から次期当主を選出することも視野に入れていたので、それは隆斗の偽りない思いであつたのだろう。

それでも、流司は『神代家』を継ぐことを決心した。

確かに拒否することができるような状況ではなかつたものの、流司は自らの意志で『神代家』を継ぐことにしたのであつた。

そうは言っても、流司もまだ齡十八にも満たない。

学校という存在に未練はある。

義務教育の終了をもって学校を卒業した流司にとって高校は一つの憧れの場所でもあつたのだ。

「……流司さんが先輩……いいかもしれません」

「どうしたんだ、早苗？急にぶつぶつとして……」

「は、はひっ！！なんでもありません！！なんでもありませんから！！！」

急にぶつぶつと呟き出す早苗に流司は怪訝そうな表情をするが、早苗のあまりにももの否定に押されそれ以上の追求を止める。

「だから、ここで“風祝”をしながら高校にも通う早苗は凄いよ……」

「いえ、そんなことは……」

純粹に感心した思いを告げる流司の言葉に早苗は顔を赤らめる。

高校には行かず神職としての修業に専念した流司からしてみれば、ただ一人で『守矢神社』の“風祝”としての役目を果たしながら高校にも通う早苗は尊敬にあたる存在であったのだ。

そう、早苗には母親だけでなく、父親も既にいらない。

その時に『神代家』に来るといふ提案を隆斗がしたのだが、『守矢神社』を放っておくことはできないと早苗が言い張ったことでその話はなくなっていた。

そんなこともあるので隆斗は何かと早苗のことを気にかけることも多かったのである。

「話つてのはそのことが……」

「えっ？」

流司は顔を赤らめる早苗の表情に若干の不甲斐なさの色が現れているのを見逃さなかった。

「大方、参拝客が減っていることに責任でも感じているだろう？」

早苗は良くも悪くも真面目であった。

この時代、参拝客の数が減っていつてしまつのは仕方のないことであるのに、それを自分の責任だと一心に感じてしまっていた。

「まあ、話してみる。直接、問題の解決には至らないかもしれないが気分的に楽にはなるだろう？」

「流司さん……はい、実は……」

そう、ぽつぽつと言葉を紡ぎ出す早苗の声に流司は静かに耳を傾けていくのであった。

頁六、『団樂』（後書き）

早苗さんのターン!!

次回もですね。

いつものごとく設定は捏造っばいですけど……
両親ってか親戚ってどうなってるんだらう……

頁七、『信仰心』

「なるほどな……」

流司は新たにお茶の注がれた湯呑みを置き呟いた。

流司の推測通り、早苗の悩みというのは年々減り続ける参拝客の数についてに関してのことであった。

父が“あそこも大変だから”と言っていたことである程度の予測はできていた流司であったが、早苗の口から直に聞くとその深刻さがよく理解できるといふものであったのだ。

だが、参拝客が、信仰が減ってしまうということは今という時代には致し方ないことである。

それは流司自身が『神代家』を継ぐことを決心する以前から感じていた揺るぎない思いであった。

“新興”による“信仰”の頹廃。

その他ならぬ人の手で作り出された流れは人の手では余る、どうしようもないものにまでなってしまった。

元来、“人間”という存在は欲深い。

そうであったからこそ、人はより快適な空間を求めここまでの発展に至った。

逆にそうであったからこそ、“信仰”は生まれ、衰退するに至った。

もし、“人間”が“今”という環境に満足であったのならば、全てを受け入れ“神”という存在に縋ることはなかっただろう。

しかし、“人間”はそのような不確定なものに縋るだけでは満足しなかった。できなかつた。

故に“科学”は生まれ、より確実な形での変化を求め為し始めたのだ。

“信仰”の類廃は誕生から決まっていたある種の運命さだめの様なものだ。一度手にしてしまった快適さを手放すことのできる“人間”など滅多にいないのだから。

「お母さんが先代を務めていた時はもつと活気があったのに……やはり、私が……」

だからといって、涙すら流しそうな早苗を前にして“仕方がない”という一言で済ませることができるような性格を流司はしていない。だが、抜本的な解決策がないということもまた事実であった。

「そうだな、まずは今の参拝客の方を大切にすることだな」

「今のですか？」

「そうだ。新しい信仰を呼び込むことが必要ないということではないけど、こういったものは家々で継がれていっていくものだからな」

“信仰”もまた受け継がれるものである。

親から子へ、子から孫の世代へと脈々と受け継がれる。

特に土着信仰の色が強い『守矢神社』ではその傾向が強い。

今のままでは“信仰”が途絶えてしまうのも間違いないが、今参拝に来ている人を蔑ろにしてはその流れが加速することは流司とって十分に予測のできることであった。

それは流司の『博麗神社』での経験がものをいうからこそであった。確かに『博麗神社』は寂れてはいたものの周辺の住民からの関心は多少なりとも存在していた。

よって、ある程度であれば流司が来たことですぐに参拝客が戻って

きたのであった。

このことに関しては『守矢神社』も同様である程度であれば信仰の回復も比較的容易にできるだろうと流司は考えていたのだ。

今の信仰を守り、参拝客の減少を緩やかなものにする。

それが早急にとることのできる手段の一つであった。

「俺に言えるのはこれくらいだ。もっと気の利いた案でもあれば良かったんだが……」

「い、いえ、そんなことは!」

そう言っ頭を下げる流司に対して早苗は慌てるように手を振る。

「まあ、何かあったときは遠慮なく『神代家』を頼るといいよ。何ができるかは分からないけど、父さんなら悪いようにしないはずだ」

父さんも早苗のことを家族のように思っているからなと付け加えて流司は笑う。

「そんなっ、隆斗さんにまで迷惑をかけるわけには……」

「つまりは俺には迷惑をかけていいと……」

「そ、そういう意味で言ったんじゃない、あう……」

暗い顔をして顔を俯ける流司に早苗はわたふたと慌てて声をかける。しかし、そのほとんどが声になっておらず、声になったものも支離滅裂としてしまっているのだった。

「ははっ、冗談だ。そもそも俺も父さんも迷惑だなんて思っていない。むしろ、頼ってくれない方が迷惑だよ。なんと言っても母さんが枕元に立つからな」

「またまた、冗談を……」

「いや、これは本当の話。何でも“早苗に何かあったら一生呪う”と父さんの枕元で母さんが囁いたらしい」

顔を青くして起きてきた父の顔を思い出すように流司は呟く。隆斗がそれを経験した頃は家のことで手一杯で、余所を気にしていられなかったのだが、その後すぐさま早苗に連絡をとったのは言うまでもないことであった。

「という訳だから、何かあった時は遠慮はいらないさ。あの顔は思い出すだけでも心に悪い」

「そういうことでしたら……」

「ああ、そうしてくれ。さて、俺はそろそろお暇するかな」

「えっ、もうですか……」

立ち上がる流司に早苗が驚きと残念さを混ぜ合わせたような声をかける。

「明日には神社に戻らないといけないからな。余りゆっくりとはしていられないんだ。準備もあるし、悪いな」

神代本家から『博麗神社』まではほぼ1日かけなければならないほ

どの時間がかかる。

その為、流司は明日の朝には神代本家を出なければならず、それを鑑みると『守矢神社』に長居をしているわけに流司はいかなかったのだ。

「そういつことなら、止めるわけにはいきませんね。お見送りします」

「悪いな」

靴を履いた流司は境内へと出る。

既に空は茜色に染まり始めており、ひんやりとした外気は二人の頬を撫で水を打つのだった。

「あつ、そうだ」

ふと、何かを思い出したような声をあげると流司は身体を翻し寶錢箱のある場所まで戻る。

財布の中からお金を取り出すと、

二礼。

二拍。

一礼。

それは誰もが魅了されてしまいそうな洗練されている動きであった。見るものによっては舞のように見えていたかもしれない。

「いきなり、戻るので何があったかと思いましたよ」

「神社に来ておきながら御参りしないなんて罰当たりだからな。本当はもう一つの方も行くべきなんだが、今日はこれで勘弁してもらおうよ」

若輩ながらも神職者である流司が他の神社に御参りというのも妙な感じがするが、それが流司にとっては至極当然のことであった。

「大丈夫ですよ。その信仰はしっかりと伝わっていますから」

「やけに自信があるじゃないか」

「えと……それは、そう！女の勘です！！」

少し目を泳がせた早苗はすぐに自信を持ったように断言する。

「そうか、それは信用できるな。それじゃあ、早苗。機会があればまた来る」

「はい。何時でもいらしてください」

流司は境内を見渡し、社の近くからこちらを見つめてくる親子であるろう参拝客に一礼すると鳥居を抜け階段を降っていくのだった。

「そういえば、あの親子連れ最近はいつも見ているな……」

「やっぱり、私たちのこと“見えている”な」

「そうだね。明らかに私たちに向かって礼をしてたからね」

ショートカットに髪を切り揃えた女性の呟きにその足元にいる不思議な帽子を被っている少女が答える。

その二人は最後に流司が挨拶をした親子連れであった。

しかしながら、女性の方は兎も角として、少女の方は明らかにその容姿と話し方がそぐわないだろう。

「どうかなさいましたか？神奈子様、諏訪子様」

そこへ流司のことを見送り終えた早苗が近づいてくる。

「いやね、あいつ、『流司』だったか……やはり、どうも“私たち”のことが“見えている”ようなんだよ」

「さつきも礼してくれたしね」

神奈子と呼ばれた女性が早苗に説明し、諏訪子と呼ばれた少女が補足を加える。

「流司さんが……御二方のことを……？」

その言葉を聞いた早苗は信じられないと言った表情で口を開く。

「間違いないね。ここ最近来たときは確実に私たちのことを認識しているからね」

「考えてみれば、見えてもおおかしくないんだよねえ。素質はあるは

ずなんだから」

「ただ、妙ではある。どうして今さらに見えるようになったのか」

「だよねえ。こういうのはそうそう後天的に見えるようになるものでもないし」

「そうですか、流司さんが御二方のことを……」

早苗はどこか嬉しそうにしながら呟く。

「おや、そんなに嬉しいのかい？早苗？」

「そりゃそうだよ。早苗は“彼”に懸想しているんだからね」

「ツ！？諏訪子様っ！！」

顔を真っ赤に染めた早苗が少女に詰め寄る。

その原因は明らかに夕日だけの所為ではないだろう。

「まあ、それは追々聞くとして。あいつに話すことは別に止めやしないよ。なんだかんだ言っつて、早苗同様小さい頃から見ているんだからね。どんな奴なのかは十分分かつている」

「あんな純粋な信仰はなかなか得られるもんじゃないしね」

「ただ、話せば色々と込み入ったことも説明しなければならぬから判断は慎重にね、早苗」

「まあ、私たちは早苗の判断を尊重するから安心しなよ」

「ありがとうございます。神奈子様、諏訪子様。少し考えてみますね」

そう言うと早苗は既に流司の姿は見えない鳥居の方角へと目を向けるのであった。

頁七、『信仰心』（後書き）

うーん、口調がわからない……
色々な二次を読んでいるとごちゃごちゃに……

明日はメインの二つも更新します。

時間は九時になるかと。要望が多いので。

まだ募集中ではあるので、詳しくは活動記録を。

頁八、『日常』

「戻ってきた……」

朝目覚め、見慣れ始めた天井に流司はどこか懐かしさを感じていた。流司が『博霊神社』で過ごしている時間はさほど長いものではない。にも関わらず、まるで長年過ごしてきた家に帰ってきたような感覚を流司は感じているのだった。

「逆に昨日まで実家に戻っていたってのにな……」

身を起こした流司は苦笑しながら身を解す。

襖を開くと未だに冬の名残を感じさせるような空気が部屋の中へと入ってくる。

流司はブルツと身体を振るわせると今やお馴染みとなった神主服へと着替え始めるのであった。

今日もまた流司の朝は早い……

ペラ。

春の近づきを感じさせる木漏れ日を一身に浴びながら流司は一人書を読みふける。

早朝に掃除を終え、日が昇ってからは時々訪れる参拝客の対応をする。

それが流司が『博霊神社』の神主となつてからの変わらぬ日常である。

った。

この世には“変わらぬこと”を美点と感じる人間と汚点とを感じる人間がいるだろう。

流司の場合は前者であった。

勿論、それは変化というものを嫌っているという訳ではない。

ただ、同じリズムで刻まれる時間というものを流司は好んでいるだけである。

ペラ。

境内には参拝客の姿はない。

日は空高く上がり、今がお昼時であるということを知らせている。

だいが、『博霊神社』へと足を向けるようになった比較的近くに住んでいる住民は多くなったものの、昼時に訪れる参拝客などというのはほとんどいない。

いるとすれば時々、流司に差し入れを持ってきてくれる参拝客ぐらいいであった。

その参拝客の人にも流司はしばらく神社を空ける旨を伝えていたので今日はやってこないようである。

ペラ。

故に流司は黙々と書を読み続ける。

「やはり、特に進展するようなことはないか……」

読んでいた書を閉じ、新たなものへと手をかけながら流司は呟いた。流司の横には山のように書が積み上げられている。

そして、そのいずれもが妖怪に関して書かれているものであった。

妖怪や神の起源は皆、“人の理解の及ばないもの”である。それが為に特に“自然”などは神格化されやすいものであった。“雷様”、“御天道様”など“自然”や“自然現象”に対して敬称を付けている言葉が今もなお残っていることからそれら容易に理解に至ることだろう。

また、民族学上の“妖怪”の定義は

“信仰の普遍性が失われて零落した神々の姿”である。

つまりは“信仰を失った神は妖怪へと身を墮落させるのである”。

これはこの国での“神”の定義が外国とは異なっているからだろう。外国では“唯一神”や“絶対神”などのように崇めるべき神を唯一つとする傾向が見られるが、この国では『神さび』という言葉があるように長い年月を経た物はそれだけで“神聖”と考えられてきた。なので、長い年月を経た物には神が宿る、所謂『付喪神』という概念が生まれたのである。

『付喪神』というのは“喪われたものに付く神”という意味からきているのだろう。

『付く』は『憑く』。

『喪』は『百』。

見なすことができることから“あらゆるものに憑く神”と言い換えることもできるだろう。

また、『付喪』という字は当て字にあたり、正しくは『九十九』と表す。これは『九十九年』という長い時間の経過を示しているのである。

一方の“妖怪”も別表現で“もののけ”といい表すことができる。勿論これは“物の怪”。詰まるところ、“物に憑いた怪”である。

即ち、『付喪神』と『物の怪』は同じ物を指しているのだ。

故に代々神職に携わってきた『神代家』には妖怪に関して記載されている書も数多く残っていた。

流司の両脇に堆く積み上げられている妖怪に関する書はその一部であった。

流司は『幻想郷縁起』を紐解く参考になるかと考え、本家から拝借してきたのだが……

「知識としては様々なことをすることはできたけど、これが役に立つとは思えないな……」

妖怪に関しての知識は読む前とは比べものにならないほど増えただろうが、それが『幻想郷縁起』の謎を解く鍵になるかと問われれば流司は首を傾げるしかなかった。

「あら、随分と面白そうな物を読んでいますのね」

流司が次のページへと手を伸ばしたところで、突如陽光が何者かの影に遮られ、変わりにどこか凜としている女性の声が流司に降り注いだ。

「貴女は……」

流司が顔を上げるとそこにはいつだか参拝に来た金紗の髪の女性が日傘をさして微笑んでいるのであった。

「御機嫌はいかがでしょうか？しばらく、ここを空けていたようですけれど……」

「ああ、すみません。実家の方に少々用事がありまして、もしかして参拝にいらしていました?」

「いえ、少し気になった程度ですから。そこまで気になさる必要はありませんわ」

その返答に流司は苦笑いを浮かべる。

気にしていないということを楽しむべきか、少し気になった程度という言葉に悲しむべきか判断がつかなかったからだ。

「そうですか。今日も参拝に?」

「そのようなところですね。後は読書に集中している姿が目に入ったので……それも神主としての務めかしら?」

女性は積み上げられた書の表紙を興味深そうに見つめながら流司に尋ねる。

積み上げられた書の全てが妖怪に関してのものなので、興味を持つのも頷けるだろう。

「そのようなところですね。倉の掃除をして出てきたものに関して調べようと思ひまして」

「何か曰く付きのものでも出てきたのかしら?」

「いえ、そんなものではありませんよ。ちょっとした風土記のようなものです」

女性は妖怪という言葉から曰く付きの道具のことを推測したのか少

し眉を顰める。

そんな女性に対して流司は笑って否定する。

確かに『幻想郷縁起』も見方によれば曰わく付いたものではあるだろうが、女性が想像したようなものではないことは間違いないからだ。

「宜しければ、ご覧になれますか？ちょうど、お昼時ですので昼食もご馳走しますよ」

「いいのかしら？」

「構いませんよ。正直なところ秘匿すべきかの判断も難しいものですから。昼食に関しても一人分作るのも二人分作るのも手間はほとんど変わりませんから」

首を傾げる女性に流司は説明する。

神社には門外不出とされる資料なども沢山あるが、『博霊神社』の倉の中の物に関して現状でその判断をつけることのできない物が数多くあった。

『幻想郷縁起』もその一つであった。

歴史的価値のあるものであることは確かであったが、だからといって他の人の目に触れないように厳重に保管する必要がないものもある。

であるならば、希望をする人に関しては見せてあげてもいいだろうと流司は判断したのだ。

「では、御言葉に甘えさせていただきますわ」

「でしたら、こちらへ」

女性の了承の言葉を受けた流司は女性を引き連れて居住区へと戻るのだった。

頁八、『日常』（後書き）

次回も のターン!!

伏せる必要がないって？それは一応ね……

まあ、外だと絡ませられるキャラが限定されるので仕方がないんですが。これは基本的に11時〜12時に更新します。

なるべく毎日。

うん、頑張る。

頁九、『幻想』

「これが……」

「ええ、御自由に御覧になられて結構ですよ」

昼食後、流司は『幻想郷縁起』を取り出し、金紗の髪の女性『八雲紫』の前に差し出す。

紫は興味深そうに目を細めると『幻想郷縁起』を受け取りページをパラパラと捲り、目を落としていく。

その様子を見た流司は流しへと下がり食器を洗い出す。

作った食事は極簡単なもの。

『博霊神社』に戻ってきたばかりで特に材料があるわけでもなかった。たので仕方がないことではあった。

よって、流司が作ったのは分けてもらった岩魚の塩焼きに山菜の天ぷらなどといった古き良き家庭の食卓を思い浮かべるような品々であった。

その出された食事を紫が丁寧な箸使いで口に運んだことに流司が驚いたのは余談である。

「如何でしたか？」

流司が洗い物を終え居間に戻ったときには既に紫は『幻想郷縁起』を読み終え閉じている。

それ程、洗い物に流司は時間をかけてはいないので紫が『幻想郷縁起』を読む速さがかなりのものであったということだろう。

「大変興味深いものでしたわ」

「そうですね。それは良かった」

流司は『幻想郷縁起』を仕舞い代わりに湯呑みに緑茶を注ぐ。コポコポという音と共に注がれたそれは湯気を立ち上らせながら仄かに独特の苦味を感じさせる香りを漂わせるのだった。

「どうぞ」

「あら、ありがとう」

流司は湯呑みを紫に差し出し自分もその正面に座る。

春の訪れを感じさせる柔らかな日差しと同じような穏やかな時間が二人の間には緩やかに流れるのだった。

「ところで神代さんは“幻想”についてどうお考えですか？」

「流司で構いませんよ。“幻想”ですか……？」

名前がいいと紫に断りを入れながら流司はその言い回しに妙な引っ掛かりを覚えていた。

『幻想郷縁起』を読んだのだから“幻想”という言葉が気になるのは頷けることではある。

しかし、区切る部分はそのではなく“郷”までを含んだ“幻想郷”というところだろう。

それならば、“どう考える”という言葉にも流司が引っ掛かりを覚えることもなかったはずである。

しかし……

「ええ、“幻想”についてですわ」

紫は微笑みながら流司の言葉に肯定を示すだけであった。

『幻想』。

その言葉を辞書で引いてみれば、“現実にはないことをあるように感ずる想念”などのような文章で説明されていることだろう。

つまりは“ありえないと理解していながらも思う想像”であるといえる。だから、“将来”は幻想にはなり得ないが、“過去”は幻想になりうるのだ。

「……………現実の“影”ですかね」

長い沈黙を置いて流司は呟いた。

導き出した答えは流司なりに吟味を重ねた先の答えであった。

「“影”……………」

「はい。光のあるところに影は必ずあります。“幻想”は“現実”という光によって作り出された“影”と言えるでしょう」

“幻想”は“現実”と対比して初めて“幻想”と足り得る。

現実という“あり得ること”が存在するからこそ、幻想という“あり得ないこと”も存在するのだ。

流司はそう“幻想”に関して考えた。

仮に“幻想”だけで世界が構築されれば、それは“幻想”といえるのだろうか？

断じて、それは否であろう。

その世界は“在る”のだから“現実”になる。
故に“幻想”から見た“現実”は“幻想”なのだ。
まさしく、その関係は“光”と“影”そのものである。

「では、“現実”と“幻想”の境界はどこにあるのかしら？」

「勿論それは人の意識の中でしょう」

その質問に対して流司は間髪入れずに返答する。

「人が“ある”と信じるからこそ存在は“在る”。これは信仰の基
本ですよ」

神の存在は信仰によって肯定される。

それが流司の持論であった。

その存在を信じ敬うことこそが信仰の在るべき姿だと流司は考えて
いる。

そして、それは“信仰”に関してのことだけではない。

「Je pense, donc je suis.」この言葉
をご存知ですか？」

「ええ、勿論。“Cogito, ergo sum”、『われ思
う、ゆえにわれあり』。有名な言葉ですわ」

流司の問いに紫は事もないというようにスラスラと答える。

「この言葉を提唱した人物が込めた意味は“疑いという行為は常に、
疑いがどれほど遠くまで及んでいようと、疑いなく存在する”と
いうものです。つまり、“どれだけ疑わしくても『疑う』というこ

とに揺らぎはない”ということですよ」

流司の言葉に紫は黙って耳を傾ける。

それは決して理解ができていないからではなく、全てを理解している上で流司の言葉を促しているからであった。

「信仰も同じです。信じるからこそ神は存在する。仮に神の存在が疑わしくても信仰に意味はあるのですよ。“幻想”も同様、“現実”の中でそれを思うことによって“幻想”は存在する。喩えどれだけ疑わしくても……」

まあ、若輩者の戯れ言ですけどねと付け加えて流司は話を締めくく

る。長々と話したことで渴いてしまった喉を潤すために流司は湯呑みを傾けるのだった。

「ふふっ、流石はここで神主をしているだけありますわ」

紫は流司の答えに満足したように微笑みを漏らす。

「神主といってもまだ資格はないのですけれどね」

「そのようなことは些細な問題ですわ。それこそ、私が流司さんをごこの神主だと信じることに疑いはないのでしょうか？」

「それは一本取られましたね」

紫の言葉に流司は参ったというように笑みを浮かべるのだった。

「とじろでどじろしてこのようなことを？」

「気になったからと言ったところかしら？」

「気になった？」

紫の表現は曖昧であった。

その目的語にあたるのが“幻想”に関してなのか、それとも……

「ええ。ですが、それももう解決しましたわ。私にとって好ましい形で」

「お役に立てたようで幸いです」

流司はほっとするように口を開いた。

今まで述べてきたのはあくまでも自分なりの考えであり、万人に受け入れられるものではないだろうということは重々理解していたからだ。

そのような考えであっても紫の役に立ったということを本人の口から聞いたことは流司の胸に安堵をもたらしたのだった。

「今日は色々楽しかったですわ」

「こちらこそ、充実した時間が過ごせましたよ」

紫が『博霊神社』を後にしようとしたのは宵闇が近づいてからのことであった。

昼前から『博霊神社』にいたことを考えるとかなりの時間流司と紫が話し込んでいたことが分かる。

「それは良かった。では、またお会いできることを楽しみにしていますわ」

「ええ、暇なときにはまたいらしてください。歓迎しますよ」

流司がだいぶ一人で暮らすことに慣れたとはいえ、時に人が恋しくなるのは人として当然のことであった。

そんな時に今日のように紫と話すことができることは実に流司にとって心地よいことでもあったのだ。

「私も貴方がいらっしゃることはいつでも歓迎しますわ」

「それはお誘いと解釈しても？」

「どうかしら？……は全てを受け……ますわ。けれども、それ……れは残酷……ことですわ」

「えっ？」

紫の言葉は風に流されて途切れ途切れにしか流司の耳には届かない。まるでそれは風が流司にまだ知るなど言っているようであった。

「流司さんの仰ったように“現実”と“幻想”は表裏一体。灯台下暗し、案外近くに“幻想”は潜んでいるものですね。それでは御機嫌よう」

紫は優雅に礼をすると階段を降り姿を消す。

その姿は流司にとってまさしく幻想的と思える景色であった。

頁九、『幻想』（後書き）

というわけでフラグが立ちました。
幻想入りのな意味で。

紫は話したが（公式設定）なので、これくらい話してもおかしく
はないはずです。

この作品のコンセプトは読み終わると少し賢くなった気がするです
（笑）

なので小難しいことや知らなそうなことをちよくちよく入れていき
ます。

この作風がいつまでも続けられればいいのですが……

少なくとも次回では幻想入りしないのであしからず。

『長い物には巻かれる』。

その言葉の意味は“権力や勢力の強い者には反抗せず、おとなしく相手の言いなりになっておくほうが無難で、得策だ”というものだ。流司にとっては父からの命に従うことがそれであり、その結果『博麗神社』で神主を行っていると言えるかもしれない。尤も流司本人も好んで仕えている訳でもあるが。

「く、苦しい……」

現在、流司は『長い物には巻かれる』という言葉で“文字通り”の意味で経験していた。

否、“巻かれる”ではなく“巻かれる”であり、“していた”ではなく“し続けている”というほうが正しいと言えるだろう。

「し、死ぬ……」

顔は徐々に蒼白へと変化していつている。

流司の二十年にも満たない生が閉ざされかねないというにも関わらず、そこにはどういいうわけか緊迫感の欠片も感じることができなかった。

それは偏に流司の首に巻きついているものに起因されることだろう。流司の首に巻きついているのはロープでもなければ人間の手でもない。

その物体は蠢いていることから“生き物”であることは間違いないかった。

これが蛇などであれば、恐怖を感じることもできただろうが、その

生き物には“毛”が生えている。

それもフサフサとした高級感に溢れる金色の毛である。
正確には“狐色”というべきであろう。

「キユ」

その生き物から発せられる鳴き声には喜怒哀楽の“怒”に通じるようなものは一切感じることはできない。

むしろ、“喜”や“楽”という感情ばかりが感じることができるとろつ。

つまりは流司の首に巻きついている謎の生き物にとってこの行動は愛情表現の一つであったのだ。

流司もそれを理解しているからこそ、苦しげにしていながらもその声に怒りの色はないのである。

しかし、だからといって流司が無事であるかといえばそういう訳でもない。

「もう……ダメ……」

薄れゆく意識の中で流司は己の顔に顔を擦り付ける円らかな瞳の生き物を目に焼き付けるのだった。

数刻前。

「ゴホツ、相変わらず凄い埃だな……」

舞い上がった埃に流司は咳込みながら眩きを漏らす。

一度、倉の中に舞い上がってしまった埃が再び落ち着きを取り戻すにはかなりの時間を要する。

「仕方がないな」

流司は覚悟を決め、その黒い髪を白く染めながら動きを再開する。

『灯台下暗し』。

その言葉を紫から流司が聞いてから数日。

流司は唐突に思いついた。

“倉の中にはまだ手掛かりがあるのではないか？”と。

今まで流司は『幻想郷縁起』に関しての資料を外へ外へと求めていたが、“内”を探すことは一切なかった。

蒼天の霹靂、まさしく『灯台下暗し』であった。考えてみればどうして今まで考えつかなかったかと思ってしまうほど当たり前なことではないかと流司は自信を罵った。

そして、思い立ったら吉日というように、すぐさま流司は“倉”へと足を向けたのだ。

しかし、現実がそう都合良くいかないということは様々な先人たちからあらゆる言葉で伝えられている。

流司は現在進行形で己の見通しの甘さを呪っていた。

『博麗神社』の“倉”の難攻不落さは流司の想像を遙かに超えているのであった。

『博麗神社』はかなりの歴史を誇っているのか、“倉”に納められている品々の数は相当なものであったのだ。

その上、そのほとんどが歴史的価値を見出すことのできる物ばかりである。

つまり、扱いは慎重を期するものが大半なのだ。

その為に“倉”の中の探索は困難を極めていた。舞う埃、扱いが大変な品々。

流司が今まで“倉の中を探す”という選択を思いつくことがなかったのはこの困難を本能的に悟っていたからかもしれないだろう。

これで手掛かりの一つでも見つければ流司の苦労も報われるというものであったが、やはり現実はその甘くはない。

「ないな……」

白い神主服を更に白くした流司は途方に暮れるように頭を下げる。見つけたした物は途方いずれもが博物館が歓喜しそうな物ばかりであったが、流司の目的とする『幻想郷縁起』に関わるものは何一つとして見つかることはなかったのだ。
更には……

「何なんだ、これは……」

流司の前に広がっていたのは一見しても二見しようともガラクタにしか見えない品々であった。

指針のない時計に骨しくない扇子、鍵のない箱に箱のない鍵。

どれもこれもが丁寧に保管されていたものではあったが、流司には全くその用途や意味を理解することはできなかった。

丁寧に保管されていたといっても御札などで封印を施されていたという訳ではない。

木箱の中に綺麗に梱包されていたのであった。

曰く付きの物ということではないのだろうと流司は判断していた。

「それにこれは……」

流司が手にしたのは細身の筒。

漆塗りで表面に装飾をされているそれは

美術品の一つと思ってもおかしくはない美しさを醸し出している。

しかし、流司にはそれが美術品ではないということが分かっていった。以前に同じような物を目にする機会に恵まれていたからである。

『煙管入れ』。

それがその筒の正体であった。

かつて、喧嘩煙管など庶民にも一般的であった煙管も煙草が普及した現在となつては姿を見ることはほとんどないだろう。

同様にその保管のための入れ物も目にすることはない。

流司が『煙管入れ』だと一目で理解できたのは曾祖父が使っていた煙管の一式を目にしたことがあったからだ。

そうでなれば、流司がその正体に気付くことはなかっただろう。

しかし、知っていたが故にその『煙管入れ』がおかしいことに流司は気付いていた。
軽いのだ。

何かが入られているということはその重さから判断できていたが、その中身が“煙管”にしては軽すぎると流司は感じていた。

煙管はある程度の強度をもたせるために金属の部品が幾つか存在す

る。

なので、重量はそれなりに重くなるはずであるのだが、流司の手にしている『煙管入れ』からはその特有の重さを感じることができなかったのだ。

「ともかく開けて見るか」

いくら中身を想像したところで仕方がない。

流司は『煙管入れ』の蓋へと手をかけ、解き放つ。

「うおっ」

そして、流司は中から飛び出した謎の生き物に襲われるのであった。

頁十、『倉』（後書き）

さて、出てきたのはなんなのか？
まあ、バレバレなんですけどね。

求聞史記の二弾がでないかと思う今日この頃。
緋想天以降だろうから人数的にも大丈夫だと思うのだけど……

古来より、“狐”という存在は神格化されもすれば災厄の象徴とされる生き物である。

前者であれば“お稻荷様”が有名である。

後者であれば“九尾の妖狐”が有名だろう。

“きつね”という言葉の語源には諸説あるが一説には鳴き声を示す「キツキツ」に神格的な敬称を示す「ね」がついたことが由来であるともされている。

この事からも古来から“狐”が信仰の対象となっていたことは容易に分かるはずだ。

そもそも、“狐”が神格視される根本には神話の中で神の使いとして登場したということがある。

そのことが転じて、“狐”は“山の化身”となり、人々に敬われることになったのだ。

“山の化身”ということは当然山に害をなす存在にとっては邪悪なものとなる。

“妖怪”としての“狐”の存在はそこに起因しているのであった。

俗に“妖狐”と言っても様々な分類がある。

最も簡単な分け方が“善い”か“悪い”かによる“善狐”と“悪狐”。

次いで分かりやすいのが“尾”の数に関してだろう。

前者に関しては人の価値観にのみ決められることであるので、図々しいことこの上ないのであるが、結局“善悪”というものはそういうものである。

後者に関しては“妖狐”にとっては尻尾の数がそのまま力の大きさを示しているからだ。

妖狐は初めは一本である尾を年月を経るとともに二本、三本と数を増やしていき、その一つの完成形が“九尾”である。

だが、これはあくまでも“悪狐”に關してであり、“善狐”はその後尾を四本、零本と減らしていくとされてきた。

特に四本の時のことを“天狐”、零本まで至つたものを“空狐”と称している。

故に“九尾”であるからといって、必ずしも災厄を齎す象徴というわけではないのだ。

このような固定観念のようなものが人々の中に生じてしまったのはあまりにも“白面金毛九尾の狐”、つまりは“玉藻前”のイメージが強く残っているからであろう。

現在、流司の前に鎮座している生き物もまた“妖狐”であった。

その体軀は蛇のようで実に細長い。

一見してみれば“狐”には見えないだろう。

流司も本家から持ってきた書の山を読む前であつたのならば、その存在の正体には気づかなかつたかもしれない。

「お前は“管狐”でいいのか？」

流司は机の上に寝そべり、首を上げて見つめてくる円らな瞳に尋ねる。

返答があることを期待して尋ねた訳ではなかつたが尋ねざるを得なかつたのだ。

『管狐』。

妖狐の一種として伝えられている“妖怪”である。

これがただ見ただけであれば、流司も夢か何かだと納得できただろう。

けれども、流司は管狐に巻き付かれて死にかけている。もう少しで三途の川で昼寝をしている死神に声をかけるところだったのだ。

流石にこれだけのことを経験して起きながら、夢という言葉で片付けることは流司にはできなかった。

「クオン！」

流司の言葉に管狐は一声鳴き、首を上下させる。どうやら、流司の言葉は理解できているようであった。

「そうか……いや、しかし……」

本人ないし、本狐の確認もあつたからには目の前にいる存在は正銘の“管狐”であるのだと流司は理解していた。

だが、目の前に“妖怪”がいるという状況を納得できるかといえばそんなことはない。

まだ、ツチノコを発見したということの方が信憑性があるというものであった。

「クウーン？」

その首（どこまでが首で、どこからが胴、どこが尻尾かは流司には判断できていなかったが）を可愛らしく傾げる管狐を撫でながら流司は思案する。

管狐という存在は憑き物と考えられるのが一般的である。

だが、管狐は座敷わらしと同様に個人ではなく家に憑くとされている

る。

けれども、この管狐は明らかに流司にな“つい”ていた。

こうなると流司は似非神主から狐憑きへと晴れてジヨブチェンジを果たしたわけであるが、それを喜んでいいかは流司には分からないのだった。

“狐憑き”というものはどちらかといえば忌み嫌われるものである。神職の家系の子供である流司にとっては被う対象であるのだ。

そんな流司が“管狐”に取り憑かれ“狐憑き”となったのだから、到底素直には喜べるものではないだろう。

「よし。兎も角、お前は“管狐”、間違いないな？」

「クオン！」

本人と本狐は至って真面目であるのだが、端から見れば流司は誰も見えない空間に話しかけているようにしか見えない。

まさしく、“狐憑き”の姿であった。

「お前の姿をみれば確証を得たようなもののだが、他にもお前が正真正銘の管狐だということを証明してほしいと思う。できるか？」

「クウ？」

その姿を見れば、ただの狐ではないことは明らかであったが、流司は更なる確証を得るために管狐に尋ねる。

しかし、当の管狐はよく分からないように首を傾げるばかりである。

「ああ、そうだなあ……」

その様子に流司は知っている限りの管狐の知識を総動員して、何か具体的な指示を出すことができないかと考える。

管狐といえば、その大きさはマツチ箱に入ってしまったくらいなはずではあるが、この管狐は一尺をゆうに超えている。

あの煙管入れに入っていたとは思えないほどの大きさであった。

「あゝ、お前つてもしかして数を増やせたりする？」

流司が思いついたのは一つの伝承だった。

“妖狐”の類でありながら管狐はその尾の数を増やすことはない。

その代わりに管狐は存在を増やしていくのだ。

最終的な数は75匹までなるというのだから、驚きというものだろう。

尤も何故75匹なのかは委細不明であったし、流司も予測はできていないことではあった。

「キユキユ！」

ポン。

まるで漫画を思わせるような白煙が管狐を包むと次の瞬間にはその体躯が二匹に増えている。

「おおっ!?!」

流司もこれには声を上げて驚いた。

海星ではないのだから、その数を増やすことのできる生き物などいないだろう。

それも一瞬にしてである。

このことは紛うことなき“管狐”の存在の証明であり、少なくとも

ただの生き物ではないという確証を流司は得るに至っていた。

ポン。

「ちよつと待て!！」

「「「「キユ?」「」「」

倍々で四匹まで数を増やした管狐が流司の言葉に一齐に首を傾げる。管狐は流司の言葉に素直に従い動きを止めるが、逆に言えば流司が止めなければこれまた流司の言葉に素直に従ったことでその体躯を限界まで増やしていただろう。

「お前が“管狐”だと言うことは十分理解できたから元に戻ってくれ」

「クオン!」

ポン。

一匹まで戻った管狐の姿に流司はホツと胸を撫で下ろす。

一瞬ながらも、75匹まで増えた管狐に囲まれて悶死する自分の姿を思い浮かべてしまったからだ。

洒落にならない……

流司はブルツと身体を震わせるとこれからのことを考える。

この発見を知るところに知らせれば大騒動が起ころうことは間違いないだろう。

流司としては今も愛らしく己の腕に絡みつきじゃれている管狐をそ

のような騒動に巻き込みたくはなかった。
だからといって、このままにしておくわけにはいかないという状況は流司の頭を大変悩ませていたのであった。

「とりあえずは飯にするか……」

事が一段落ついたことで流司は強烈な空腹を感じていた。

“腹が減っては戦はできぬ”というわけではないが、空腹のままでは良い考えも浮かばないと思った流司は食事をとろうと動き出す。
尤も、

「味噌つてあつたかな……？」

流司の心は完全に狐憑きとなってしまうようであった。

頁十一、『管狐』（後書き）

管狐に抱かれて悶死しろ！！

いや〜死にますね。確実に。

管狐のイメージは伝承の方ではなく、XXXHOLICの無月を思い浮かべてください。

伝承の方って足とかあるんですよ。

管狐の好物は油揚げではなく味噌です。

管狐に取り憑かれると味噌を無性に食べたくなるそうですよ。

何で75匹まで増えるかは分からないですよねえ……

7と5が完全数だからか、75から8までの二乗数をそれぞれ引くと全て素数になるからか……

何はともあれ、“狐憑き”にジヨブチェンジを果たした主人公でした。

タイトルを変えるべきか……（笑）

頁十二、 『御神籤』 (前書き)

投稿時間間違えたので投稿し直しました。

「今日はおいでいただきありがとうございます」

「いえ、困ったときはお互い様ですので」

流司は頭を深く下げる巫女服を着こなした女性に気になさらないでくださいと声をかける。

漆色の髪を長く伸ばしたその女性はまさしく大和撫子を体現しているといえるだろう。

女性の名を『梁守瑞希』。

ここ『梁守神社』の巫女である。

「まさか、神代の御息がいらっしやるとは思いませんでしたので」

「子息といつても、まだ若輩者ですから」

流司が『梁守神社』を訪れた理由は祭事の手伝いの為であった。

本来は瑞希以外にも『梁守神社』に仕える神職はいるのだが、急病で祭事を行うことができなくなってしまったのだ。

その事情をどういっわけか知り得た隆斗が流司に救援に行くことを指示したのである。

「それでその“こ”は……」

どこか申し訳なさそうな声をあげ、瑞希の視線が流司の頭上へと向

かう。

そこには……

「クオン！」

一匹の“子狐”がいた。

「すみません。どうやら荷物に紛れてついてきてしまったようで……」

今度は申し訳なさそうな顔をするのは流司の番であった。

流司の手荷物は小さな鞆が一つあるだけでいくら子狐であろうとも紛れるのは本来難しいはずなのだが、それでもついてきてしまっていた。

それもそのはずであった。

何故ならば、荷物に紛れていた時点では“子狐”ではなかったのだから。

「“朔”、じつとしいてくれな。後で味噌田楽あげるから」

「クオン、クオン！」

瑞希に聞こえないようにこっそりと流司は子狐 朔に話しかける。

朔は流司の言葉に尻尾を振りながら鳴く。

『朔』。

それが流司が倉で見つけた“管狐”に付けた名であった。

あの後、流司はとりあえずはと思い、父である隆斗に連絡を取った。

隆斗も初めは信じていなかったが、流司の声色に冗談が感じられなかったことに半信半疑になり、最終的には流司の言葉を全面的に信じるという件になったのだ。

そこで隆斗が流司に告げたのは、“お前が面倒をみる”との一言。つまりところは流司の判断に一任するということであった。

そんなも投げ槍にも思えなくはないが、それだけ隆斗が流司のことを信用していたということだろう。

よって、流司は管狐に『朔』と名付けて『博霊神社』で面倒をみることにしたのであった。

管狐が味噌が好きだという伝承は真実であったようで

、朔は味噌を使った食事、特に味噌田楽を目にするとどちらが頭でどちらが尾か判断ができなくなるほどにまで尻尾を振るほどであった。

「構いませんよ。それでは境内を案内しますのでついてきていただけますか？」

「分かりました」

鳥居を潜る瑞希の後に流司はついていく。

境内の中には参拝客の姿が多く見られ、『博霊神社』とは比べられないかと流司は心の中で苦笑する。

「ところで、流司さんはここの祭神をご存知でしょうか？」

「はい、一応は。“瀬織津姫”ですよね？」

『瀬織津姫』。

別称、『瀬織津比売』とも呼ばれる被戸四神の一柱にも数えられる被神、水神である。

被戸四神とは被戸大神 神道において“被”を司る神 の中における、『瀬織津比売』、『速開都比売』、『氣吹戸主』、『速佐須良比売』の四柱のことを示す。

神職において祭祀を行う際の“被詞”ではこの被戸大神に対して、“諸々の禍事罪穢有らむをば被へ給ひ清め給へ”と祈るほど重要な神である。

また、被戸四神のそれぞれには独立した役割があるとされており、『瀬織津比売』は諸々の禍事・罪・穢れを川から海へと流し、『速開都比売』は海の底でそれらを待ち構えて飲み込む、『氣吹戸主』は飲み込まれたのを確認すると根の国 海の底にあるとされる国に息吹を放つ、『速佐須良比売』は根の国に持ち込まれたそれらをさすらつて失わせる。

これによって、この世の“厄”は被われると信じられているのであった。

「その通りです。流石は神代の嫡子様です」

流司の返答に瑞希は満足したようににこやかに答える。

「しかし、ここは比較的“宇治”に近い為かそれだけではないのです」

「と言いますと？」

足を進めながら話す瑞希の背に流司は訊ねかける。

「宇治の『橋姫神社』では『瀬織津姫』様と『橋姫』様を同一のものに見做すことがあるように、ここ『梁守神社』でもそのような流れがあるのです」

「なるほど、それでこんなにも女性の参拝客の方が多いのですか……」

瑞希の言葉に流司は『梁守神社』にいる参拝客のほとんどが女性であることに得心がいった。

『橋姫』は橋を守る水神というものが一般的な見方であるが、“宇治”ではそれに加えて“嫉妬”や“縁切り”を司るともされている。その為か、“縁結び”の神同様に女性の参拝客が多く見られることが多いのである。

「はい。“梁守”という名もそこが由来となっていますから」

その言葉に流司は確かにと頷きを漏らす。

“梁”という字は“はし”とも読む、言い換えてみれば『橋守神社』と呼べるだろうことが流司には理解できたからだ。

「なので、『梁守神社』を訪れる参拝客の方は“厄祓い”だけでなく“縁切り”を願う方も多くいらっしやるのです」

「そうですか……ん？あれは……？」

流司の視線の先には不思議な光景が広がっていた。

一本の木の周りに無数に散らばっている紙の山。

見ようによっては誰かがごみ箱をひっくり返したとも見えなくはないものであった。

しかし、よく見てみればその紙が千切れた御神籤であることが流司には分かった。
木の枝にも結び付けられていることから御神籤であることは間違いないだろう。

だからこそ、流司には妙に感じれたのだ。

結び付けるのに失敗をして御神籤が千切れてしまうということはない話ではないと流司も思っていたが、その木の周りは明らかに結び付けられているものよりも千切れてしまったものの方が多いのである。

「ああ、あれですね。確かに他ではあまり見られることはないですよ」

瑞希は流司の視線に浮かぶ疑問の意味を理解すると仕方がありませんよんよというように呟いた。

「先も申し上げたようにここは“縁切り”の神社です。なので、“結ばず”に“切って”いるのですよ」

内容の方も悪いものが出やすくなっていますからねと瑞希は付け加える。

確かに“縁切り”の神社で“縁を結んで”も逆効果だと流司は納得する。

「流司さんもお引きになってみますか？」

「よろしいので？」

「ええ。尤も結果には期待しないで欲しいのですけどね」

そう笑うと瑞希は流司を御神籤所まで案内し、流司が選んだ御神籤箱を渡す。

ジャラジャラ。スポツ。

「九十四……」

番号からして既に不吉だと流司は思った。

それだけではなく、番号を知らせたときの瑞希の顔が心なしかひきつっていることに流司は気付いていた。

「……こちらになります」

若干の沈黙を置いて瑞希から流司は一枚の二つ折りにされたみくじ籤を手渡される。

流司は受け取り開くと……

『極大凶』

の文字が燦然と輝いているのだった。

字を見ただけで数ある凶の中でも一際悪いということが分かるだろう。

なんとといっても“極”である。

この神社以外の場所で引くことがあればしばらくの間は立ち直ることができないかもしれないと流司は思った。

「まさか、そちらをお引きになるとは……」

呆然とするような瑞希の声に流司は御神籤から顔を上げる。

「そんなに珍しいことなのですか？」

「はい。そちらは数ある御神籤箱の中でも一つしか入っていない番号なので。」

それは逆に運が良かったのではないかと流司は漠然と思った。

折角、引いたのだからと思い流司は再び御神籤へと視線を戻した。

『凶大極』

万事上手く行かず。

外出は厳禁、室内も危険なり。

幾度となく、危険と遭遇せり。

もはや、どうすることもできないだろう。

悪いことが書いてあるということは分かっていた流司だが、あまりの酷さに笑いすら浮かぶことはなかった。

「個別の運勢は……」

- ・願望……叶わず
- ・健康……命危ぶまれる
- ・恋愛……女難あり
- ・金運……皆無なり
- ・転居……意図せず果たされる

「……………」

「あの……流司さん……？」

「ああ、すみません。まさかここまでだとは思ってもいけませんで様々な御神籤を見てきた流司であったが、ここまで救いのない御神籤を目にするのは初めてであった。

全体運から個別運まで一貫して良いところがない。改めて、“極”の意味を流司は体感していた。

「まあ、そういうものです……ですから、是非とも“縁切り”を」

「そうですね……」

瑞希の言葉に素直に従い流司は木の袂まで歩き、枝にみくじ籤を結び、そのまま引き……………千切れなかった。

「……………」

これには瑞希、流司の両者とも沈黙するしかない。

流司の力が弱いというわけではない。

どういうわけか、引き千切ることがどうしてもできないのだ。

「……………流司さん。そちらはこちらで供養しますので、一先ず社の方へ向かいますようか」

重々しい空気の中、口を開いたのは瑞希であった。

流司もこれ以上は何も言うまいと黙ってみくじ籤を瑞希に渡す。
気まずい空気が立ちこめる中、朔の尻尾だけが元気に揺れているの
だった。

「クオン！」

頁十二、『御神籤』（後書き）

というわけで書き直しました。

まあ、原型とどめてませんね。

こう言った感じの方が書きやすいです。

この作品は三人称表現の練習でもありますのでご意見、指摘など随時募集しています。

内容に関しても勿論同じです。

『流す』という言葉には様々な意味がある。

基本的な意味は“移動”であるが、そこにはあらゆる捉え方が存在している。

例えば“上”から“下”への移動。

例えば“有”から“無”への移動。

また、“流れ”というものは絶対的なものと考えられ、故に“流れに逆らう”ということとは悪しきことだと信じられているのだ。

『水』というものは清らかなるものであると一般的に考えられている。

それは『水』が“無色”であることが原因であった。

“無色”はなにものにも“染まる”のではなく“なる”ことができる。

まさしくそれは至上の清らかさと呼ぶことのできるものだろう。

「“縁流し”ですか？」

流司はその聞き慣れない言葉に首を傾げた。

「はい。それが明日、3月の3日に『梁守神社』で行う祭事になります。やはり、ここまでのご存知ないようですね」

「すみません。“雛流し”なら知っているのですが……」

流司は頭を下げながら言葉を呈す。

3月3日といえば、“桃の節句”として有名であろう。

“節句”というものは“節供”とも表し、元来は特定の日に神に食物を供する意味の言葉であり、それが転じて特定の日そのものを示すようになったのだ。

江戸の時代に、五節供と呼ばれる、1月7日の『人日』、3月3日の『上巳』、5月5日の『端午』、7月7日の『七夕』、9月9日の『重陽』というものが定められた。『人日』を除く全ての節供が数字の重なる日であるのは陰陽思想において奇数は“陽”の数であり、奇数が重なる日は陽の気が強くなりすぎるために不吉とされていたことが由来であった。

現在は『上巳』、『端午』、『七夕』などの一部を除く節供は廃れてしまっているが、その名残は根強く残っているだろう。

『御節料理』などはその典型的な例であり、“節”の字から分かるように元々は節供に供される料理のことであった。

“雛流し”とは現在の“雛祭り”の原形の一つとも考えられている呪術的な意味を孕んだ行事である。

それは川へ紙で作った人形を流して穢れを祓うというもので、そのことが雛人形が“災厄除け”とされる理由だと思われる。

「意味合いとしては“雛流し”と“灯笼流し”を混ぜ合わせたものだと思えるのが分かりやすいと思います」

「“灯笼流し”もですか？」

「はい。“縁”というものはあらゆるものに存在しています。それは当然、生き物だけではなく物や病、運氣にさえ。そういったあらゆる“縁”を流すのが“縁流し”なのです」

瑞希は流司が静かに傾聴していることを確認すると更に言葉を続け

ていく。

「“雛流し”は穢れを流す、つまりは穢れとの“縁”を流すことであり、“灯籠流し”は死者の魂の送り火、死者のこの世との“縁”を流していると言えるでしょう」

「確かに」

「『梁守神社』の祭神であられる『瀬織津姫』様は“穢れ”を流す神であられ、同一視されている『橋姫』様は“縁切り”の神であります。その二つの意味合いが混ざり合い“縁流し”というものが誕生したのです」

地域によって独特の風習が生まれることは『守矢神社』のことがあったので流司はすんなりと受け入れることができるものであり、素直に感心するほどであった。

しかしながら、流司の脳裏には一つの疑問が浮かんでいるのであった。

「しかしまた、何故『上巳』に？」

流司の疑問も尤もであった。

単に“厄”を流すという意味であれば他にも適した日は数多くあり、『上巳』が最も適した日であるとは言い難いものであるからだ。

「詳しくは伝わっていないのですが、“三”という文字を二つばらすと“八”と“六”字にすることができます。また、重ね合わせれば“六”に掛け合わせば“九”にもなります。このことから“八九”を“六”にするという意味合いを込めているという説もあります。“六”という字も“八”に“（ふた）”をしているというとりか

たもできまるから」

神道では言葉にあらゆる意味を込めようとするので瑞希が説明したことは全くのデタラメというわけではない。

『端午』が男の行事となつたのもその時期に咲く“菖蒲”を“尚武”と揆つたことでもあるくらいだ。

これだけ説明のつく内容であれば信じるに値するだけの由来だろうと流司は納得していた。

「まあ、“縁流し”を行う川はそれほど水流が速いというわけではないので、雪解けの時期を狙つたということが最も有力なのですが」

「流れなかつたら、元も子もないですからね……」

流したはずのものが留まってしまうことほど、この手の行事にとって不吉なことはないだろうと流司は思った。

“縁流し”を行い始めた時にもこのような現実的な問題があったかもしれないと考えると流司は何となくいたたまれない気持ちを感じる。

「ええ、本当に。では、具体的な仕事についてお話ししましょう」

「お願いします」

幾分か空気が和らぐ。

全くもって本題はこちらであるはずなのだが、瑞希にとっては今までの話の方が重要であつたのだろうと流司は察していた。

それと同時に流司はいつか己もこれだけ自らの仕える神社、祭神に真剣になれるようになりたいと思つていた。

無論、今までが不真面目だったとは流司自身欠片も思つてはいない

が、今の瑞希と比べると自身のお粗末さが身に染みて理解できていたからである。

もしや、父はそれを理解させるために己をここへ行かせたのではないかと流司はふと思い、父親の思慮の深さに軽く身震いを覚えるのであった。

頁十三、『縁流し』（後書き）

縁は流れても、紫は流れないのであしからず（笑）

今回も作者の想像ってか妄想全開でお送りしました。

尤もらしく書いたつもりですが、“縁流し”なんてものありませんからね。

分かるとは思いますが、この作品では『瀬織津姫』、『橋姫』と緑眼の方は同一視してません。

『橋姫』はともかくとして役割を考えると『瀬織津姫』の方は回る方の方が近い気がします。

何から神になつたかは明かされているのでイコールではないことは確かなのですが。

ただ、集めたものを何という神に渡しているかは分からないので妄想のしがいがありますねえ……

この切り口から二面ボスを関連付けたのは私が最初のはずだよね……？

頁十四、『流れ行く』

「キヤー、可愛い！！撫でてもいいですか!？」

「ええ、少しだけでしたら……」

「「ありがとうございます!！」」

今日何度目かとなる繰り返された似たような問いに流司は答えると朔の身体を撫でる二人組の女性に気づかれないように息をはいた。

「クウ……」

撫でられている朔も大人しいというよりは元気がないといったほうが正しい状態であった。

それもそうであり、昼からことある事に撫でられ続ければ、いくら正体が管狐である朔といえども疲れるだろう。

そう思った流司は女性が撫で終えたのを確認すると朔を抱きかかえて膝の上へと乗せる。

「後で好きなもの食べさせてあげるから、もう少しここで大人しくしていてくれな」

「キユウ……」

朔は力なく返事をする子狐の状態から元の姿に戻り丸くなる。

誰かに気付かれるようなことがあれば一大事ではあるが、ここならばバレることはないだろうと考え膝掛けで朔の身体を流司は隠す。

「次の方、どうぞ」

“縁流し”は午前と夕方で二度行われる。

儀式的な意味を持たせたものは午前中に済ませ、夕方からのものは一種の観光行事に近いものであった。

とはいうのは、“縁流し”では死者を弔う場合は灯籠を、病の治癒を願う場合は病を患っている箇所印をつけた人形を、そのほかの場合は願いを書いた短冊を流す。

夕闇の川に流れる灯籠や色とりどりの紙ははとも幻想的であり、流司は瑞希から見せてもらった写真で確認しただけであったが、それだけでも一見の価値はあると思っていた。

当然、多くの観光客がその光景を一目見ようと訪れる。

そうなってしまうと厳粛な儀式というわけにもいなくなり、いつの頃からか二度“縁流し”を行うようになったのであった。

流司が呼ばれることになったのは午前の儀式的な“縁流し”に関してであったのだが、折角だということで夕方の部も手伝いを申し出たのだ。

そういう理由があったために現在流司は訪れた観光客に対しての受付を行っているのだが、あまりの人の多さに驚きを隠せていなかった。

受付を訪れるのは実際に“縁流し”に参加する人だけである。

それでさえ、これだけの人数がいるのだから実際に観光に来ている人数は流司には想像がつかなかった。

「流司さん」

「瑞希さん、お疲れ様です」

宵も近づき受付を訪れる人が少なくなってきたところで流司は背後から瑞希に話しかけられた。

「流司さんもお疲れ様です。もうピークも過ぎたので終わりにしてもらってかまいませんよ。後は変わりますので祭の様子でもご覧になってください」

「しかし、瑞希さんこそ朝から動き続けているでしょう？」

“縁流し”を取り仕切っている瑞希は早朝から動き続けていた。

その運動量は凄まじいもので成人男性であってもバテてしまうだろうと流司が思うほどであった。

「毎年のことです。もう慣れていきますよ。それに今年は人数が少ないところを手伝っていたので楽な方です」

「これで楽ですか……」

瑞希の言葉に流司は啞然とする。

確かに瑞希は全く疲れた様子を見せてはおらずこれも経験の違いかと感じた流司は瑞希の言葉に甘えるのだった。

「旨いか、朔？」

「クオンー!!」

ハムハムというよりかはガツガツという擬音が似合うような勢いで油揚げを頬張る朔に流司は絶え間なく油揚げを渡す。

姿も形も戻って現在朔は子狐状態で流司の頭上にいる。

その為に様々な視線を流司は集めるといふ結果に至っているのだが、今までの朔の頑張りを労うという意味でも仕方がないと流司は諦めていた。

しかし、

ペチャ。

「あのさ、朔。油揚げはなくならないからもう少し落ち着いて食べてくれないか？」

「クウ？」

ペチャ。

妙な温かさをもった液体が流司の額を中心に滴り落ちている。

その正体は言わずもがな朔の唾液であった。

妖狐であるからか、それとも人の言葉を理解できているかなのかは流司に判断することはできなかったが、朔は基本的に大人しく物静かな行動をとる。

食事をするときもゆっくりと料理の味を楽しむかのような丁寧な食べ方をするくらいであった。

好物の味噌や油揚げを目にすると千切れんばかりに尻尾を振るものの、食べるときは大人しくなっているのだ。

しかし、今の朔には大人しいなどという言葉は似合っていない。栗鼠を思わせるような頬をした朔はその膨らみが小さくなるとすぐさま流司をせかすように額を前足で叩くか、尻尾で流司の首筋を撫る。

その所為で流司は時々高い声を上げ、それがまた視線を集めるという結果を呼び込んでいるのであった。

「満足したか？」

「クオン、クオン！」

小さめのビニール袋に一杯になっていた油揚げの山を平らげた朔が流司の問いに答えるように鳴き声をあげる。

尤もこれだけ食べておきながら満足しなかった場合は流司の懐が壊滅的なダメージを受けることになっていたので、流司としては是非とも満足してもらわなくてはならなかったのだが。

「それは良かったよ。本当に……」

「クウ〜」

そんな流司の胸の内を知ってか知らぬか、朔はそのまま流司の頭上で寝息を立て始める。

流司は頭から朔を抱え上げて胸に抱く。

「さて、そろそろいい頃合いかな？」

すっかり辺りは夕闇に包まれ、群青に支配され始めていた。

流司が瑞希から聞いていた“縁流し”の光景を一番美しく見られる

時間帯というのはこのぐらいであった。

人混みを外れ木々の生い茂る獣道を流司は歩く。

この辺りは一般の観光客などは立ち入りが禁止となっているので、祭の喧騒も流司の耳には遠くに聞こえるだけであった。

半刻もしないうちに木々に囲まれていた視界が開ける。

そこにあつたのは……

「……………」

流司は純粹に言葉を失った。

そこに在つたのはまさしく“幻想”であった。

灯籠の炎は水面みなもに映り込み輝きを増やす。

人形と短冊は灯籠の隙間を鮮やかに染め上げる。それは“空虚”な美しさであった。

酷く儂げで曖昧で、じつと見つめていると己の存在までもが虚ろになつていく錯覚さえ流司は感じていた。

時が流れいるにも関わらずそこだけは時が止まっていた。

否、世界が誇つて止まっていたのだ。

一秒と二秒の間に、

この世とあの世の間に、

外と内の間に、

現実と幻想の間に挟まれ続ける。

進むのでもなく、逆巻くのでもなくただそこにあり続ける。

流司がその場から動き出したのは空が闇に埋め尽くされた後であるのだった。

それは一つの“終わり”だ。

“終わり”は裏返り“始まり”となる。

“外”は“内”へ。

“現実”は“幻想”へ。

そう、世界は裏返る。

彼を中心に、彼だけを取り残して……

頁十四、『流れ行く』（後書き）

これにて一幕終了。

次回から幻想入りを……………しません。

いえ、しますけど導入って感じになるので正確に辿り着くのは二話ぐらい後かと……………

因みにスキマによる幻想入りではありません。

あんなこと言わせたのにねえ〜（笑）

頁十五、『春の訪れ』

とてもとても不思議な夢であった。

その舞台は知らない場所ではない。

『博麗神社』。

よく知った、よく知っている場所であるはずであった。

でも、知らない。

そこは知らない場所であったのだ。

境内も社も賽銭箱も全てが何一つとして変わってはいなかった。

そう、ただ欠けていたのだ。

己という存在が。

代わりにいたのは一人の巫女であった。

少女というには大人びていて、女性というにはどこか幼い。

そんな巫女であった。

彼女の日常は己と変わらないようで異なっていた。

境内を竹箒で掃き、賽銭箱を確認して、参拝客を待つ。

ただただ、それを繰り返す。

平坦だけど平穏な日常。

そんな毎日が続いているはずだった。

はずなのに……

彼女の周りには非常も溢れていた。

いいや、そうじゃない。

非常が日常だったのだ。

逆転。

己とは重なりながらも逆転した毎日。

それも当然であった。

だって彼女は博麗の……

ふと一人の男が目を見ました。

その男の名を『神代流司』という。

年齢は未だに成人には至っていない若輩者の似非神主、兼、狐憑きである。

「朔……寝ているときに首に巻き付くのは止めてくれ。冗談抜きで死ぬから」

身体を起こした流司はそう呟きながらの首に巻き付いていた狐色の生き物を布団の上に置く。

「クウ……」

その生き物は寝ぼけているといった様子でフワフワと浮き上がると、まるでそこに対して帰省本能があるとしてもいうような自然な動きで流司の首に絡みつく。

その生き物を管狐、名を『朔』という。

「はあ、まあいいか。まだ早朝は寒いしな」

流司は首に朔を巻き付けたまま神主服に着替え外に出る。

梅の花も散り、桜の花が開き始めた春であっても早朝の空気は身を刺すような冷たさを保っていた。

そのような外気にも負けずに流司は境内を掃除し始める。

『春眠暁を覚えず』。

妖狐もまだ眠り続ける春の朝も『博麗神社』の神主たる流司は例外であるようであった。

「死者二十万人を超える”か……」

流司の日課の一つに新聞を読むというものがある。
流司の咳きは新聞のとある記事を眺めてのものであった。

流司が現在、目を通していているのは年の瀬に外国で起こった地震の被害に關してのものであった。

その地震はかなりの規模を誇ったもので震源が陸に近いということもありかなりの被害がでてしまっていた。
更に悲惨なのはその余震も落ちてきてきた頃に再び大規模な地震が新たな震源として発生してしまったことであつた。

これによつて被害は壊滅的と呼べるほどまで増え、死者は現時点で二十万を超え、今後も増え続ける見通しであると記載されているのだつた。

「しつかりと供養できてればいいのだけど……」

そう呟いたのは流司の人柄故かそれとも職業柄が故か。
どちらにせよ、流司が本気でその災害で亡くなつてしまつた人々の魂の安寧を求めていた。

「キユウ……？」

「そんな顔をしなくても大丈夫。少し心配なだけだから」

不安そうな表情を浮かべてすり寄ってくる朔の身体を撫でながら流司は答える。

流司が朔と生活を共にし始めて既に1ヶ月余り。

お互いの気持ち伝えあうには困らない程までに流司と朔の關係は

良いものになっているのだった。

尤も朔の流司に対する好意は初めて出会ったときからどういっわけか最大と呼べるほどであったので、流司が“妖狐”という存在に対して慣れたとだけであるといえるだろう。

「さて、外に出るか。朔もついてくるなら“子狐”になってくれよ？」

コクコクと朔は頷くと流司の頭の上まで移動して、その姿を子狐へと変化させる。

いくら、流司が慣れたとはいえ、“管狐”という存在は一般的には“幻想”の存在であった。

その為、人が訪れることのない早朝ならともかく、参拝客の訪れる可能性のある日中に朔が外に出るときは子狐に変化をしてもらっているのだった。

この状態であるのならたとえ境内を走り回っていたとしても、自然に囲まれた『博麗神社』ならば怪しまれることもないと流司は考えていた。

とはいっても、子狐状態の時は基本的に流司の頭上から動くことはなく、その所為ですっかり朔は参拝客の中では飼い狐として定着してしまっていた。

外へ出ると流司は早朝の寒さが嘘のような穏やかな春の陽気に包まれる。

もはや、定位置となった賽銭箱の横に腰掛けると流司は久々に取り出してきた『幻想郷縁起』を開く。

未だに『幻想郷縁起』に書かれていることの真偽は定かになっておらず、進展と呼べるものは流司の“妖怪”の存在に対する考えが朔を見つけたことで肯定的になったことぐらいであった。

「博霊の巫女か……」

流司が開いたページはかつていたとされる『博麗の巫女』に関して書かれているページである。

『博霊の巫女』に関して載っていることはほとんどない。精々、“代々異変解決を生業としている”ということが分かることぐらいであった。

“異変”というものが、何を示しているのかは流司にとって預かり知らないことであったし、“異変”を解決する理由が生活費を稼ぐためだというどうでもよいようなことが書いてあったりすることで流司は全くといっていいほど気にしてはいないのだった。

「それと……」

『博麗の巫女』に関して綴られているページを閉じ、流司はあるページを求め紙を前へと捲る。ピタツと。

その手が動きを止める。それは流司には聞き覚えのある文字であった。

「『八雲紫』……」

流司の脳裏に浮かんだのはしばらく前に言葉を交わした女性の顔。

流司がそのページに気が付いたのは『幻想郷縁起』を見つけたしてから随分とたった後である。

それ記述を見つけた際には流司は我が目を疑ったほどであった。

単に名前が同じだけであればそれほどまでに流司が驚くことはなかっただろう。

余りにも似ていたのだ。

『幻想郷縁起』に記載されている内容から想像することのできる顔と実際に流司が出会った紫の顔が。

以前の流司であれば、凄い偶然もあるものだ。

だが、“管狐”というある種の“超常的”な存在を知った流司にはそこに何か裏が隠されているのではないかと漠然と感じていたのだ。

「“幻想郷”は全てを受け入れる……それはそれは残酷なこと……」

流司は知らずの間にそう呟いていた。

それは流司が思い出したのか、知っていたのか……

ただ、その言葉は静かに清らかに風に乗り此処ではない何処かへと運ばれて行くのであった。

頁十五、『春の訪れ』（後書き）

お気に入りが入りが100件超え。

ありがとうございます。ただ、これが早いのか遅いのか……

ユニークが地道に上がっているからには様々な方が見てくださっているのでしょうか。

毎日投稿なんてしていませんでしたからね。

というわけで、今回から第二幕、ようやく幻想入りします。

まあ、今回は最後のフラグでしたが。

頁十六、『夢の現』

その日も流司の日常は通常のままに過ぎ去った。

訪れた参拝客と取り留めもない会話をして、日の入りで家へと戻り、夕餉を作って、風呂を沸かして入浴。

そして、就寝と至る。

そんな日常が明日も明後日も続くだろうと流司は疑わずに意識を闇へと落としていく。

故に知らなかった。

目覚めたときにそこが『博霊神社』であって『博霊神社』でない場所であるだなんて一欠片も流司は思うことなどはなかったのだ。

「ふあっ……寝過ぎしたか……」

流司が目覚めたのはいつもよりも四刻ほど遅い時間であった。

襖の間からは日差しが差し込んできており、朝靄は晴れてしまっているだろうことは一目で分かることであった。

もし、流司が学生であったのならこれほど悠長にしていられなかっただろう。

しかし、『博霊神社』の神主という立場の流司には四刻ほど寝過ぎたところで、微々たる問題しかない。

結局のところすることは決まっております、毎日時間が余っているからだ。

「んっ……」

首に朔を巻き付けたまま流司は伸びを一つする。

何度言い聞かせても流司が寝ている間にその首へと巻き付いてしまふ朔だったが、流石に夏が近づいてくると寝苦しくて仕方がないことになるだろうと流司は考える。

そうなる前にも早く手を打たなければならぬと流司は思っているも、具体的な案は出てくるはずもない。

流司は寝ぼけている目を覚ますためにも洗面所へ足を運んでいくのだった。

『博霊神社』の居住区には水道がない。

それどこか、ガス、電気といった文明の利器といったものは一切なかった。

その為、必要な水は井戸を使うか近くの川から汲んでこなければならぬという一世紀どころか二世紀ほど前の生活を流司はしていた。

「ん？」

洗面所まで辿り着いた流司は妙な温かさを肌と感じた。

まるで湯気に包まれているような独特の湿った暖かさが流司を包み込んでいた。

洗面所には風呂も併設されているので、状況が状況ならば湯気が洗面所に蔓延していたところでおかしくはない。

しかし、『博霊神社』には水道、電気、ガスのいずれも通っていないことから分かるように、風呂が自動的に沸くなどということはあ

りえない。

それ故、朝目覚めたばかりで洗面所でこのような暖かさを流司が感じるなどおかしいことこの上ないのだが、未だに完全に覚醒を迎えていない流司は違和感を感じながらも洗面台の前に立つ。

洗面台には比較的大きめな鏡がつけられている。顔を洗おうとした瞬間、その鏡に流司以外の人影が映り込んだ。

「……………」

バシャツ。

その人影に気付きながらも流司は勢い良く冷水を顔に浴びせる。否、気付いたからこそ、即座に顔を洗ったのだ。

現在、『博霊神社』で暮らしているのは流司ただ一人である。

なので、鏡に他の人影が映り込むことなどあつてはならないのだ。

流司は恐る恐る顔を上げ、鏡を確認する。

だが、そこにはやはり人影が映り込んでいる。

もはや、“幽霊!?”とも流司は思ったが、その割にはしっかりとした存在感を放っていた。

ならば、“座敷わらしか?”と考えもしたが、流司はその思いも即座に否定する。

それは“わらし”と呼ぶには映り込んでいる人影が成長していた姿であつたからと。

なにより……

「（風呂に入る座敷わらしなんて聞いたこともないからなあ……）」

そうその人影はまるで風呂から上がったばかりのような姿であった。

少女と称するのは些か失礼に値するだろう。

少女と女性の丁度中間とも思えるその人影は頬をほんのりと上気させたまま、この状況が理解できないといった表情で固まってしまっていた。

その手に持ったタオルがなかったのならば、流線型の美しい裸体を惜しげもなく晒していたことだろう。

流司もまた年頃というには歳をとってしまったているが、まだ成人を迎えていない青年である。

そのような光景を見れば、欲情の一つもしようものだが、余りにも信じがたい光景であったがためにかえって冷静になってしまった。

考えてもみてほしい。

一人暮らしをしているはずであるのに、朝目覚めて顔を洗いに洗面所まで移動したら、風呂上がりの美少女と遭遇するなど誰が想像しようというのだ。

少なくとも、流司にはそんなこと考えつくはずもなく、もっと直接的な淫夢の方がまだ現実味があるだろうとさえ思っていた。

バシャツ。

故に流司は再び顔を洗う。

次に鏡を見たときにはこと馬鹿げた光景も掻き消えているだろうと信じて。

「……………」

相変わらず鏡にはその人影があつた。

流司はギギギと錆び付いたドアが開く音が聞こえてきそうな動きで身体を振り返らせる。

そこにはやはり人影があつた。

鏡を通していないぶん、より現実的で、寝ぼけているにしては度が過ぎていると流司は思い始めた。

しかし、流司が状況を正確に理解し始めるには少々時間がかかりすぎていた。

流司の目に間違いなく映っている少女の肩が小刻みに動き始める。

それと同時に流司は今まで感じたことのないような威圧感を感じる。

その色は明らかな“怒気”。

少女の表情には驚愕やら羞恥やら様々な感情が浮かび上がっているようであったが、それらを塗り潰して怒りの色が次第に濃くなっていることを流司にはできるようになっていた。

ツウー。

冷たい汗が一筋流司の背中を流れる。

ヤバい。

流司は本能的にも理性的にもその一点に思考が集束していた。

とはいえ、時が戻るようなことがあるはずもなく、流司がこれを“現実”だと理解するには何もかもが遅かった。

故に……

「え、えと、どちら様？」

「それは私の台詞よッ！……！」

流司に残された選択肢は素直に意識を刈り取られるという一択しか残されてはいなかったのだ。

頁十六、『夢の現』（後書き）

というわけで“幻想入り”。

数多くある東方のSSでも博麗神社の中に直接“幻想入り”を果たした主人公はいないだろう。

当初の予定では風呂の中直接だったんですよ（笑）

まあ、某トラブル漫画と同じってか逆でしたね。ただそうすると“幻想入り”直後に“三途の川に入水”しかねないのでこのような形に。

さてさて、ここからは少し軽い感じでいこうかな。今更ながら“博麗”の間違いに気付いて落ち込んでいる作者でしたorz
だって変換だと“博霊”なんだもの……

頁十七、『幻想入り』

「私は『博麗霊夢』、『博麗神社』で“巫女”をしているわ」

「俺は『神代流司』、『博麗神社』で“神主”を務めている」

流司は正座をした脚の上に漬け物石を乗せられるという拷問を受けているような体勢で、己の前で仁王立ちする少女 『博麗霊夢』に答える。

強制的に意識を刈り取られ、強制的に目覚めさせられた時には流司は腕を縄でぐるぐる巻きに縛られてこの状態であった。

流司の首に巻き付けていたはずの朔は得体の知れない御札の貼られたガラス瓶の中に封じ込められている。

「ええ〜っと、自己紹介が済んだところで縄を解いて欲しいのだが、そもそも、俺は何故こんなことに？洗面所まで行ったのは覚えているのだけど……」

流司は頭部に鈍痛を感じながら首を捻る。

そもそもが目の前の少女は自分のことを“『博麗神社』の巫女”だと言っていたが、流司には巫女を雇った覚えは一切なかった。

父である隆斗が何か関わっているという可能性も流司は考えたが、いくらなんでも何の連絡も寄越さないというのは妙な話であった。

「お、覚えていない？これは喜ぶべきかしら、でもこの怒りはどうすれば……」

流司を縛ったままにして霊夢はぶつぶつと呟き出す。

流司は流司で現在の状況を少しでも理解しようと思考に潜ってしまつたので、その眩きが流司の耳に届くことはなかった。

「だから、縄を……」

「却下よ。つて言いたいところなんだけどね。仕方がないわ」

霊夢は疲れたような表情を浮かべながら流司の縄を解いていく。縛られていた流司の意に反して縄はあっさりと解かれる。

男ひとりが動けなくなるほどキツく縛られていたにしてはおかしなほど簡単であつた。

「それと朔の奴も出してやってほしいんだが」

流司はガタガタと揺れる瓶を指差して呟く。

「朔？ああ、あんたのペットなのこの管狐？」

朔の入つた瓶に視線を向けながら霊夢はなんともないといった感じで流司に言葉を返す。

それに驚いたのは流司であつた。

霊夢は管狐のことを知っているどころか、それに対して驚くこともしていないのだ。

「……驚かないのか？そいつは管狐なんだぞ？」

「確かに珍しいとは思つけど、九尾の知り合いがいるんだから別に大したことないわよ」

霊夢は瓶を手にとるとそのまま流司に投げ渡す。

「札を取れば出られるようになるわ」

霊夢の言葉に従い、流司は瓶の蓋を本体と

固定するように張り付けられている御札を流司が取り外す。

瞬間。

「キューツ!!」

瓶から飛び出してきた朔は流司の首に巻き付き、霊夢の方を向くと威嚇するように唸る。

尤も、その唸り声は可愛いらしいもので全く迫力がないものであった。

「落ち着けて、朔。俺は何ともないからさ」

「キュウウウ〜?」

心配そうに、そしてどこか不満げな表情を浮かべて朔は流司の顔を覗き込む。

流司はその胸を撫で朔を落ち着けていく。

「さて、話はもういいかしら?」

「ああ、悪いな」

そんな流司と朔の様子を眺めていた霊夢がしびれを切らしたように口を開く。

その顔にうつすらと青筋が立っているのは流司の見間違いではない

かもしれない。

「はあ、じゃあ、改めて自己紹介するわね。私は『博麗霊夢』、
“幻想郷”の『博麗神社』の巫女よ」

『幻想郷』。

それは“現”で在ることができなくなった“夢”が息づく郷。
内と外の逆転は“通常”を“非常”に“非常”を“通常”へと変化
させる。

故に“幻想郷”は全てを“受け入れる”。

喻えそれがいかに残酷なことであったとしても……

「“幻想郷”は実在していたのか……」

霊夢の説明を聞き終えた流司はぽつりと呟いた。

朝目覚めたら幻想入り。

どこか語呂の良さを感じる言葉も実際に経験した流司としては笑い事
ではない。

寝ている間に別世界に飛ばされる。

SF映画も顔負けの状況を経験している流司であったが、その様子
は実に冷静で理性的であった。

「思ったよりも驚かないのね」

霊夢はそんな流司の様子に少しだけ驚きを見せる。

これまでも何度か外来人と出会ったことのある霊夢だったが、大

抵の外国人は状況に取り乱し話をするともままならないことが多かったからである。

「“朔”と出会ったことで“非常”に対しての感覚が鈍くなっているからな」

“有り得ないなんてことは有り得ない”という現実を流司は十分に理解していた。

それ故に“幻想郷”という存在も比較的容易に流司は受け入れることができていたのである。

「“真実”というものは否定できる事実を全て取り除いた時に残っているもの。喩えどんなに信じることができなくてもね」

とある著名人の言葉を借りて流司は言う。

現実として流司の目覚めた部屋以外は何もかもか流司の知る『博麗神社』とは異なるものへと変貌してしまっていた。

つまるところ、この場所が自分の知る『博麗神社』ではないという確証を流司は得るほかなかったのである。

「それもそうね。私もここの部屋だけがその中身ごと“幻想入り”するなんて考えたことはなかったわ」

“幻想入り”というものは決して珍しいことではない。

過去には家が丸ごと幻想入りしたこともあったぐらいである。基本的な“幻想入り”の定義は外の世界で幻想の存在となる。

即ち、人々からその存在を適度に忘れ去られるということだ。

なので、誰も住まうことのなくなった家が、廃墟や幽霊屋敷などと噂され幻想を帯びるようになれば家が丸ごと幻想入りすることも有

り得ないことではない。

しかしながら、今回の“幻想入り”に関してはそれが当てはまることはなかった。

部屋一つだけをその中にいる存在ごと人々が忘れ去るなどそうそうできることではない。

ましては流司は社交的でもあったので忘れ去られるという可能性は限りなく低いものであった。

「こんなことをできる存在に心当たりはあるけど……恐らくの原因はそいつね」

霊夢は流司の首に巻き付いている朔のことを真っ直ぐ指さす。

「朔が？」

「そうたぶんその管狐が幻想入りをするのにあんたや部屋は巻き込まれたのよ。その管狐、見掛けによらずかなりの力を持っているわ。私の一番の御札を使って封じるのがやっとだったのだから」

「朔、お前そんなに凄い奴だったか？」

「クオンー!!」

流司の言葉に朔はどこが胸だか判断できない胸を自信満々といった表情で張る。

霊夢のいう一番の御札で封じことしかできなかったというのがどのような力を持っていることであるのか流司には分からなかったが、少なくともただの管狐ではないのだろうと流司は漠然と思った。

「そうか……ところで俺は外に戻ることができるのか？」

流司はそう霊夢に訊ねる。

幻想郷に来ることができたのは喜ばしいことであると流司は思っていたが、それでも流司は外の、『神代家』の跡取りであった。そんな流司がいきなりその存在を消してしまうことはできないことではない。

「できるわよ。ただし、あんた一人だけたけどね」

「えっ？」

「当然でしょ？ “外” で管狐が存在することは難しい。だからこそ、“幻想入り” が起こった。その管狐を “外” へ戻したらよくて再び “幻想入り”、最悪は消滅するわよ。跡形もなく、ね」

「……………」

元の世界に戻れると安心した矢先の霊夢の言葉。

それは流司の言葉を奪うには十分すぎるほどのものであった。流司も、そして朔も互いに愛着がある。

いきなり、そのようなことを言われても戸惑ってしまうのは自明の理であった。

「まあ、よく考えることね。私は少し出掛けてくるから」

そういつと霊夢は立ち上がる。

「出掛けるってどこに？」

「そりゃ、「異変」の解決によ」

障子を開けるとそこには色とりどりの花々が咲き誇る“幻想郷”の姿が映し出されているのであった。

頁十七、『幻想入り』（後書き）

霊夢の行き場のない怒りは妖怪に向かうこととなります。

因みに霊夢の幻想入りに関しての推測は遠くもなく近くもないという感じです。

さあ、異変解決だ！！

って、主人公がいつて行くことはありません。

幻想郷にも当然人は住んでいる。

人という存在があるからこそ、“幻想”は生まれ語り継がれていく。故に人のない世に“幻想”の生存はない。

“幻想”を殺すのも人であるならば、“幻想”を生かすのもまた人であるのだ。

「どうしようか……」

「クオースン……」

俺の声に朔が力なく声を上げる。

現在、流司を悩ませているのは二つのこと。

一つは言うまでもなく、今後の方針であった。

“外”に戻るか、否か。

結局のところ流司に“戻らない”という選択肢はない。

“外”に大して何も未練や関わりがないというのなら話は別であっただろうが、流司は『神代家』ただ一人の跡取りである。

戻ることができるといふのなら何が何でも戻らなくてはいけない立場であった。

しかし、戻るとなると流司は朔のことを置いていかなければならぬ。

それが朔の為を思うのなら一番であるということとは理解できていたが、納得ができるかと言えはそうではない。

何よりも朔自身が流司から離れようとしなかった。

今も朔は流司にべったりとくっ付き一時も離れようしないほどである。

「そつくつつかなくて。今すぐ、別れなくてはいけないじゃないんだからさ」

「キユウ、キユツ!!」

“別れる”という言葉に反応した朔が懸命に首を振って嫌がり、更に流司に強く抱きつく。

「朔の気持ちも分かるけど、お前だって死にたくはないだろ？」

再び“幻想入り”を果たしてしまうということだけであるのならば、朔を連れて行くという考えも流司の中にはあった。

しかし、“死ぬ”可能性が高い以上、連れて戻るということは流司にとってありえないことであつたのだ。

「キユウウ……」

朔もそのことは理解しているようで、流司の言葉を聞くと頭を垂らして目に見えて落ち込んでいく。

「ともかく、ゆっくりと考えよう。どうやら、数日の時間はあるみたいだからな」

流司は咲き乱れる色彩豊かな花々を眺めて呟いた。

“異変”。

実際に経験してみるまではその言葉を流司は上手く理解はできなかつたが、実際に経験してみると確かに“異変”だと頷くことのできると納得の色を流司は示していた。

桜に菖蒲、秋桜に彼岸花と同時に咲く花々はもはや節操がないと流司に思わせるほどである。

流石の幻想郷といえどもこのようなことが、常日頃起こっているわけではない。

よって、“異変”なのだ。

『博麗の巫女』である

霊夢はその解決へと出掛けたのであった。

今回の異変は今までのものよりかはただ花が咲いているだけ危険性は少ないと流司は霊夢から聞いていたけれども、十分に危険だと思ってしまうのは流司が“外”の人間であるからだろう。

尤も、今までの異変に関して流司が詳しくは知っていないことが原因の一つでもあるのだが。

よって、現在霊夢は異変の解決を目指し幻想郷中を飛び回っているところであった。

その為に流司が現在いるのは『博麗神社』ではなく“人里”と呼ばれる人間が暮らす集落であった。

「何だかタイムスリップをしたみたいだな……いや、実際似たようなものなのか」

人里を歩きながら流司はそう呟いた。

時間が余りなかったことから流司は簡単にしか霊夢に説明を受けていなかったが、その話の中で“幻想郷”が外界との関わりを断つたのは江戸の末期だということを流司は聞いていた。

流司の目に映っている人里の様子はまさに江戸の情緒を思わせるものが大半でタイムスリップをしたと流司が思うのも頷ける。

「でも、ちくはぐなんだよな……」

流司がそう思ったのは人里の家の中には西洋風の建築を思わせるものや洋服を着ている人をちらほらと見かけているからである。

例えるならば、人里は鎖国が終わらず、止まってしまったと錯覚してしまうほど緩やかに発展している外の世界なのだ。

いくら関わりを断ったとしても“幻想入り”という形をもって外の情報伝は伝わってくる。

そのことが“人里”を外の人間である流司にとっては“ちぐはぐ”と感じてしまう形へと発展させていたのであった。

生活様式が変わらずに文化が混ざり合い新たな文化となる。それが人里の歩んできた歴史であった。

「さて、霊夢から教えられた家とは……」

人里には守護者と呼ばれる存在があり、その者に事情を話せば計らってくれるだろうということ流司は霊夢から言われていた。確定でなく、推測であるところが流司は不安に思っていたが、他に行くあてもなかったので素直に流司はその言葉を信じていた。

「えっと……あつたここか……」

霊夢の言っていた場所で流司が目にしたのは周囲の家と比べると一回りほど大きい家であった。

守護者という肩書きが家にも影響しているのかと流司はふと考えたけれども、ここで立っていても仕方がないと思家扉を叩く。

「すみませーん。どなたかいらっしやいませんか？」

シーン。

「留守なのか……」

「クォーン？」

流司と朔がいくら待てども返事が返ってくることはない。聞こえていない可能性も考えた流司は何度か声を上げたが、結果が変わることはなかった。

「参ったなあ〜これは……」

家がここにある以上待っていればいつか家主が帰ってくるだろうことは簡単に分かることだったが、日がまだ高い時間帯から家主を待たなくてはいけないという事態に流司は途方に暮れる。

「待つしかないよな……」

「ク〜ウン」

人里の見学をしているという手も流司にはあつたが、選んだのはここで待つことだった。

それはすぐに家主が戻ってくるという一縷の可能性にかけた判断ではあつたが、現実がそう甘くはないということは当然のことで瞬く間に時間は流れていく。

尤も流司にとっては酷く長い時間であつたが。

「暇だなあ〜」

流司が空を見上げると高かった太陽は下り始めている。

天頂に上りきる前にはこの場に流司は辿り着いていたので、それは随分と流司が待っていることを端的に示していた。

「ん？」

ふと流司が空から視線を外すと物陰から様子を窺っている視線に気付く。

流司がよく見てみるとその視線の主はすぐさま物陰へと引っ込んでしまう。

「君はこの家の子かな？」

視線の主が年端も行かぬ女の子であることに気付いた流司は物陰へと優しく訊ねる。

フルフル。

恐る恐る物陰から出てきた女の子は首を振ることで流司の問いに答える。

「じゃあ、何か用事なのかな？」

コクコク。

女の子は首を縦に振り流司の質問に肯定する。

「そっか……でも、どうやら留守のようなんだよね。一緒に待つかい？」

流司は自分の横の地面をポンポンと叩いてみせる。

女の子はしばらくその様子を黙って見ていたが、流司が何もしない

ことを理解するとトテトテと駆けて流司の隣に腰を下ろすのだった。

「俺は流司。君は？」

「……亜紀」

それ以上会話が続かない。

流司も何を話していいのか分からなく、亜紀も流司のことを警戒していたからであった。

共に無言のまま時が流れ続ける。

「……お兄ちゃんは“外来人”なの？」

沈黙を破ったのは意外なことに亜紀の方であった。

「“外来人”……？ああ、そういうことか。そうだよ、だからこの家の人に助けてもらおうと思ったんだけどね」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった流司であったが、すぐに意味を理解すると困ったように口を開く。

「そっか、大変なんだね」

「そう、大変なんだよ」

どことなく軽い感じの亜紀に流司は苦笑しながら答える。

「君はどうしてここに？」

「亜紀でいいよ。私は先生に質問があったの」

流司の素性が知れたことが幸いしたのか、亜紀は警戒心を解き流司に答える。

「先生？」

「うん。慧音先生に分らない所を教えてもらおうと思ったの」

亜紀は手にしていた本を流司に見せる。

流司はそれを受け取ると中身をパラパラと確認する。

その中に書かれていたのは小学校中学年程度の算数の問題であった。

「なるほど、先生をしているのか……」

「知らなかったの？」

「ここを教えてくれた人はそこまでは教えてくれなくてね」

首を傾げる亜紀に流司は再び苦笑する。

尤も霊夢が伝えなかったのはただ面倒なだけだったのだが、それを流司が知ることは叶わないだろう。

「ところでお兄ちゃん。それって何？」

亜紀は流司の首元を不思議そうな瞳で見つめてくる。

「ああ、こいつはな。朔っていうんだよ」

「クオン！」

流司の首から離れた朔は亜紀の前に浮かぶと一鳴きする。

「……妖怪？」

「まあ、そうだけど、大人しいから大丈夫だよ。触ってみる？」

コクリと亜紀は頷くとゆっくりと朔へと手を伸ばしていく。

「温かい……」

「そりゃ、生きているからね」

亜紀は朔のことを抱きかかえると優しく撫で始める。

朔も満更ではないのか、気持ちよさそうにつぶらな瞳を細める。

「わわっ!?!」

「あ、こら朔!?!」

撫でられることに満足したのか、朔は亜紀の手から離れると服の中へと身を潜らせていく。

その体格故か朔は包み込まれるような狭い場所を流司の首の次に好んでいた。

それは流司の首にいられないときは大抵服の中に潜り込んでいるくらいである。

別にその行動自体は問題ないのだが、如何せん、

「あ、はっ、くすぐったいっ」

非常にくすぐったいのである。

しかも、朔はその反応を楽しむ癖があるのかなかなか出てこようと

はしない。

「こら、じっとしてろって朔」

くすぐったさで涙を流す亜紀に、その原因である朔を捕まえようとする流司。

角度によっては非常に危ない構図であろう。

幼女に青年が襲いかかっているとしか思えないからだ。

当然、こんな状況を見られてしまえば勘違いもする。

そう、彼女のように。

「貴様は私の生徒に何をしているッ！！！！」

「えっ？」

ガンッ！！！！！！

振り向いた瞬間に流司の頭部に走る衝撃。

その強烈な痛みに流司は本日二度目の気絶を迎えるしかなかったの
であった。

頁十八、『人里』（後書き）

主人公が“幼女趣味”^{ロリコン}に（他人から見て）ジヨブチエンジしました。さて、次はじゅく……冗談はさておき、二度目の気絶。
三度目はないはずだよ、きつと……

「ほんとおおおにすまなかつた。この通りだ」

「いえ、勘違いしても仕方がない状況でしたし……」

幻想入りを果たして二度目の気絶から意識を取り戻した流司は額に氷嚢を当てながら、今にも頭を土の中へ埋めてしまいそうな勢いで頭を下げる女性 『上白沢慧音』に声をかける。

「大丈夫？お兄ちゃん？」

「ああ、問題ないよ。少しヒリヒリするけどな」

そんな流司を朔を抱きかかえた亜紀が覗き込むように見つめてくる。実ところを言えば、今もなお流血していないことが不思議なくらいの痛みを流司は感じていたのだが、それを言ってしまうえば本当に慧音の頭が地面に埋まってしまいかねないと思った流司は苦笑いを浮かべる。

事の原因の朔は頭の手の中でスヤスヤと寝息を立てており、流司は非常にやるせない気持ちに駆られているのであった。

「慧音先生のいくらお兄ちゃんが“変態”にしか見えなかつたとしても、いきなり頭突きなんて“救いのない”勘違いだよ？」

「「あぐっ！！」「」

「えっ、どうしたの？お兄ちゃんに慧音先生？」

流司と慧音は亜紀の無垢なる一言が突き刺さり声を上げる。

その言葉は慧音にとっては止めとなり、流司にとっては予想外の一撃に大きなダメージを受けていた。互いになまじ心当たりがあるためにその威力は計り知れないものがあつたのだ。

「そうだよな……私は救いよつのない馬鹿だよな……」

ずーんという擬音が聞こえてきそうなほど落ち込んでしまった慧音は膝を抱えていじけ出す。

「あ、あれ……？」

「亜紀……止めを刺したのはお前だからな」

戸惑っている亜紀に流司は声をかける。

「止めて、さっきのお兄ちゃんが“幼女趣味”って奴のこと？」

グサツ。

「そうさ、俺は誰がどう見ても“危ない人”だったさ……」

「お兄ちゃん!？」

流司は慧音と同様にその場にしゃがみ込んで足を抱えだす。

この無自覚に笑顔で止めを刺す姿に流司は漠然と既視感を感じているのであつた。

「俺（私）は貝になりたい……」

「改めて挨拶しよう。私は『上白沢慧音』、ここで寺子屋の教師をしている」

「『神代流司』です。知つての通り“外来人”です。で、こいつは『朔』と言います」

「クオン」

亜紀が自分の家に帰り、流司と慧音が二人きりになったところで二人は改めて向かい合った。

紆余曲折の末にこの状況に至ったためか流司と慧音の顔には若干の疲れが見えており、外もすっかり日が落ちきってしまった。

「ということとは、“保護”ということでもいいのか？今日はもう暗いので『博麗の巫女』の所へ連れて行くのは難しくてな」

「いえ、霊夢には既に会っています。何でも、“異変”を解決するまでの間、人里で世話になるようにと……」

「なるほど、それで私の所へ来たということか」

流司の説明に慧音は得心顔をする。

「なので、宿か何かがあれば紹介してもらいたいのですがってありませんよね」

旅人が訪れる可能性のない幻想郷に宿のようなものが存在するとは流司は思えなかった。

あつたらあつたで、どうやって採算をとっているのか気になるところだろう。

「流石にな。それなら私の家に泊まるといい」

「いいのですか？」

「構わないさ。霊夢の奴もそのつもりだったのだろう」

「なら、御言葉に甘えして。ありがとうございます。上白沢さん」

流司には行くあてがあるはずもないので素直に慧音の言葉に甘える。最悪、野宿をする可能性もあつたので、渡りに船だと流司は思っていた。

「野宿でもされて死なれては後味が悪いからな。折角、運が良かったのだから、わざわざ死ぬような真似をすることもないだろう」

「死ぬって大げさな……」

春といえども夜はまだ寒い。

とはいえ、外で一夜を過ごしたところで凍死するような気温でもないことは確かだろう。

「……霊夢の奴、肝心なことを話していないじゃないか」

「えっと、何か……？」

「いやな、“幻想郷”がどのような場所かは分かるか？」

「“幻想”が息づく場所だとは……」

慧音の真剣な表情での問いに流司はおずおずと答える。

「その通りだ。つまりは“妖怪”の類だっごころといる。ほとんどの場合妖怪の根源とも呼べるものは“恐れ”だ。そして、“恐れ”を最も簡単に人間に感じさせるのはどうするのが楽だと思う？」

「……………あつ」

慧音の言おうとしていることを理解した流司は顔を青くする。

それは野宿をすることがどれだけ無謀なことであるかに気付いたからであつた。

「理解が早くて助かるよ。何も死ぬというのは比喻じゃない。ここでは簡単に起こり得ることだ。妖怪に襲われ食べられることだな」

人間に最も簡単に恐れを抱かせる方法は“命”を危険に晒してしまふこと

である。

生きている以上“死”というものには敏感にならざるを得ない。

それは遣伝子にまで刻み込まれているある種の呪いのようなものであつた。

「でも、正直に言ってしまうえば“妖怪”ってものにいまいち実感が湧かないんですよね」

そう流司は頭を掻く。

朔という存在のこともあり、“妖怪”の存在に対して否定の概念を持つことがなくなっていた流司であったが、朔以外の妖怪にであったことはない。

故に“妖怪”の存在に対して実感を流司が持つことができないのも仕方のないことであった。

「まあ、すぐに理解しろというのも無理な話か。因みに言っておくが私は純粋な人間ではないからな」

「えっ?」

流司は慧音の思わぬ告白に声を上げる。

慧音の姿はどこをどう見ても人間のようにしか流司には見えなかったからだ。

「私は俗に言う“半妖”という奴だ。“白澤”とのはな」

「えっ……」

その言葉に流司は違う意味で驚きを隠せなかった。

「ん?どうかしたか?」

流司の驚きのイントネーションの違いに反応した慧音が首を傾げる。

「いや、ええーつとですね……」

流司は齒切れが悪く口どもる。

その原因は流司が“白澤”という存在に関して少なからずの知識を有していることであった。

『白澤』は大陸に伝えられる伝説上の妖怪、どちらかといえば“聖獣”という存在である。麒麟や鳳凰と並び称される存在であるといえば、その神聖さが分かるというものだろう。しかしながら、神々しいという感じを受ける麒麟や鳳凰と姿を比べるとそう……

平たく言って、“気持ち悪いのだ”。

具体的には牛のような胴体に人面。顔に三つ、胴に六つの目。額に二本、胴に四本の角を持った姿で描かれるのが一般的であった。

その姿を流司が始め知ったのは小学生の低学年のことであり、一期トラウマになるほどだ。

流司はトラウマ自体は克服したものの、いくら神聖とはいえ崇める気にはなれないという思いは抱き続けている。

「……………“白澤”」

「!?!」

「そうか、お前は知っているのかあの姿を……………」

「いや、それが上白沢さんと関係があるとか、気持ち悪いとかいうわけではありませんわけです……………」

流石は賢い白澤というだけあって察しがいいと流司が馬鹿なことを考える暇もなく、慧音は沈むように膝を抱えだす。

その光景は数刻前にもかかわらず作り出されていたものを再現しているようであった。

「いいさ。どうせ私はあの“白澤”との半妖さ……」

「あの〜上白沢さん……？」

慧音のパンドラの箱を開けてしまった流司にもはや為す術はなかった。

周囲に黴が生えてしまいそうな勢いで落ち込む慧音。

それをあの手この手で慰めようとする流司。

この場が混沌としていることは言うまでもないことであった。

「ええ〜と、もしかしなくてもお取り込み中……？」

「へっ？」

ふいにかげられた声に反応した流司が目にしたのは白髪紅眼の少女。この存在がこの混沌とした場を落ち着けることになるのかは神すら知らないことであった。

頁十九、『白澤』（後書き）

あれ……どうしてこんなことに……

慧音がめっさネガティブってか、弄られ……？

白澤、あれはトラウマものです。

小学生の頃、日光東照宮の事前学習（白澤は東照宮で奉られているってかどっかに絵っぽいものがあつたはず……）で絵を見たんですけれどね。

もう、ね。夢にまで出てきましたよ、ホント。

Wikipediaに載っているのは違う奴でしたが。

Wikiのはもうおっさんだと思えます。

日曜とかにテレビを転がりながら見られても困りますけどね（笑）

口調は悩んだ末に二次でよく見られる形になりました。

最後に登場のあの方は微妙に原作っぽくかな？

追伸

誤って折角の感想を消してしまいました。

サラミさん申し訳ありません。

この場をお借りして謝罪の言葉とさせていただきます。

頁二十、『滴落つ』

「へー、朝目覚めたら、それは災難だったね」

「そうなんだよな。おっ、このレバー美味しいな。焼き加減がなんとも……」

流司はレバーの美味しさに舌鼓を打ちながら白髪紅眼の少女 『藤原妹紅』 に頷き返した。

食卓に並べられている焼き鳥の数々、それは皆妹紅が作ったものであった。

得意料理が焼き鳥だと流司が聞いたときは焼き鳥に得意も何もあるのかと首を傾げたが、実際に口にしてみるとなかなかどうして今まで食べたことのないような美味しさが広がり流司は素直に感心しているのであった。

「当然よ。火加減には自信があるからね」

そう胸を張る妹紅に勧められるようにして流司は次々と焼き鳥を口に運んでいく。

「ほら、朔。口を開ける」

「クォーン!!」

流司はまるで親鳥が雛に餌をあげるように朔の口の中へと焼き鳥を放り込んでいく。

管狐状態の朔だと鶏肉一つもかなりの大きさになるので、口一杯に

なりながら朔は咀嚼していく。

「管狐なんて珍しいわね。流司のペットなの？」

「ペットというか何というかな。相棒みたいなものだな。ここでも珍しいのか？」

流司が朔に焼き鳥を与えている姿を珍しそうに見つめながら尋ねてくる妹紅に流司は少し悩みながら答える。

流司にとって朔がどんな存在かといえば、妹紅の言うようにペットというのも近いものがある。

だが、それだけでは流司にはしっくりとこなかった。

それ故、流司は朔のことを相棒と称したのであった。

「幻想郷だしいないことはないだろうけど、余り聞くことはないわね」

「そっか……」

妹紅の言葉に流司は少なからずの落胆の色を示していた。

管狐が群れを作るとは聞いたことがなかったが、朔を幻想郷に置いていくとすれば誰かが傍にいて欲しいと流司は考えていたからだ。

現在、朔が懐いているのは流司を除けば、亜紀しかいない。

故に亜紀に預けることができれば一番良いのだが、紛いなりにも朔は妖怪である。

亜紀自身が了承しても周りがそうだとは限らない。

朔はともかくとして、管狐には周囲の人を不幸にするという謂われもあった。

実際に妖怪が息づく幻想郷ではそのような迷信も信憑性の高いもの

となる可能性もある。
それを考えれば、亜紀に朔を任せることが難しいのは誰の目からも
明白なことであろう。

「ほら、そんな暗い顔してないで食べなって」

「ああ、済まないな。ありがとう、妹紅」

妹紅が流司の取り皿へと焼き鳥を取り分け、それを流司は感謝しな
がら受け取る。

未だ出会ってから僅かな時間しか経っていない二人であったが、互
いによく知っている旧友のような雰囲気醸し出しているようであ
った。

「……………どうして二人はいつの間にそんなに仲良くなったいるん
だ？」

「あつ、上白沢さん。お先にいただいています」

「復活リザレクションしたなら早く食べたらず？冷めるよ？」

ゆらりと立ち上がり穏やかな様子で談笑する流司と妹紅を見て慧音
が啞然とした表情で呟いた。

対する流司と妹紅はというと。

流司は丁寧な頭を下げ、妹紅は新たに取り皿へと焼き鳥を取り分け
ながら慧音へと返事を返していた。

「そつだな……………ってじゃなくてだな！」

空いている場所に腰を下ろしたところで慧音が叫ぶ。

「理由なんてないわね。何となく話が合いそうだなって」

「強いて言えば、上白沢さんが復活するまでの間ってところでしょ
うか？」

「……そうか。ところでそこまで畏まる必要はないぞ？呼び捨てで
構わない」

「なら、俺も呼び捨てでいいですよ」

口調を変えて流司は慧音に言う。

流司は『神代家』の跡継ぎとしての教育を受けてきていたので、初
対面の人には大抵敬語で話すようにしていた。

特に目上の人に関しては例外なく口調が崩れることはない。

尤も強制されているわけではないので、相手から了承されれば砕け
た口調になるが。

「流司はやっぱ“外”に戻るの？」

「ああ、家族を放っておくわけにもいかないからな」

「確かにな。それがいいだろう」

妹紅の問いに流司が答え、その答えに慧音が賛同の意を示す。

「折角、新しい話し相手ができただけだと思っただけだね」

「悪いな。数日はいる予定だから、その間はよろしく頼むよ」

「ん？すぐに戻るんじゃないの？」

「“異変”の所為でしばらくは戻すことができないそうだ」

首を傾げる妹紅に慧音が説明する。

その言葉に妹紅も理由を察したようであった。

「なるほど、巫女が出払っているわけね」

「そういうこと」

「危険性が少ないといっても“異変”だからな。これに高じて中には活動を活発にしている妖怪もいるようだ。多少は警戒しておいた方がいいかもしれない」

慧音の言葉に妹紅が頷く。

基本的に“人里”の人間は襲ってはいけないという協定が幻想郷の妖怪の間にはある。

しかし

ながら、中にはその協定を破る妖怪もあり、その為慧音のような守護者と呼ばれる存在がいるのであった。

「妖怪か……危険だつてのは分かるけど色々と見てみたいよなあ…

…」

妖怪に関する知識を色々と身につけた流司には実際に妖怪を目にすることが出来る機会だけあり、どうしても興味を断つことはできなかつた。

「やめときなよ？帰るって決めているんだから死に行くようなこと……」

「分かっているよ。でも、気にするなっるのが無理な話だ」

「ならば、“稗田殿”の所へ行ってみたらどうだろうか？まだ、今代の『幻想郷縁起』は完成していないようだが、話は色々聞くことができるだろう」

そんな慧音の言葉に流司は静まり返る。

それはそのはずであった。

『幻想郷縁起』。

その存在が流司を“幻想郷”へと導いたと言ってもいいかもしれない。

静かに静かに、やがて岩をも穿つ一滴が流司の中で滴り落ち始めたのであった。

頁二十、『滴落つ』（後書き）

うがうが。

GATE 7が面白いです。

と言ってもまだ読み切り合わせて二話なんですけどね。

ここが本当の意味で始まり。

これから、“幻想郷”に染まる決定的なことが起こります。

“異変”には全く関与していませんね。

この異変の時期ということに意味があるので仕方がないのですが。

しばらくはキャラは顔見せ程度でどんどんと出てくると思います。

次はご存知あの方です。

お気に入りユーザーが60人を超えました。

ありがとうございます。

どの作品を気に入ってくれたのか、どれも頑張らなくてはなりませんね。

そこは厳かという表現が実に似合う空間であった。

香る井草、注がれた玉露、障子を通して差し込む光。

それらの見事なまでの調和は厳かと感じさせながら、癒やしをもたらす。

まさしく、“わびさび”というものをこれ以上ないというほどに体現しているのであった。

そのような空気の中、流司は何となくであるがその雰囲気には既視感を感じていた。

その既視感というのは見覚えがあるというような類のものではない。この空気と似たような空気のことを知っていたのであった。

「お待たせしました」

そう言いながら流司のいる部屋に入ってきたのは一人の少女であった。

山吹色の着物を羽織っている少女の顔には未だ幼さが残っている。そうであるにも関わらず、流司はその少女に対して歳には似つかわしくない存在感を感じているのだった。

「こちらこそ、突然の訪問でありますのに歓迎を感謝します」

「頭を上げてください。私も“外”の方の話を伺うことができるのは大変好ましいことですから」

少女は頭を下げる流司に微笑みながら声をかけ、流司の正面へと腰を下ろした。

「では、初めまして私が九代目“阿礼乙女”、『稗田阿求』です」
「『神代流司』です。“外”の『博麗神社』に使えさせていただいています」

挨拶を終えた流司は阿求の姿を改めて確認するように眺める。
外見的には亜紀と同じくらいであるか少し上といった感じである。
けれども、阿求から感じる凛とした独特の雰囲気はその外見とはそ
りがあっていないようにも流司は感じていた。

阿求はどことなく大人びていたのだ。
それも子供が背伸びをしているようなものではなく、ごく自然な形
で大人っぽい印象のする少女であった。

「それで今日はどういったご用件で？」

「まずはこちらをお返ししようかと。返すというのも妙な感じなの
ですが……」

流司は一冊の書を取り出して阿求の前に置く。

「これは！？前回の『幻想郷縁起』！！これをどちらで？」

「“外”の『博麗神社』の倉を整理していたときに見つけたもので
す」

流司が取り出したのは『幻想郷縁起』であった。
流司の部屋に保管されていた『幻想郷縁起』は奇しくも共に幻想入
りを果たしていたのだ。

流石にこれには流司も導きのようなものを感じなくはられないのだった。

「そのご様子だと、やはりこちらで管理されていたはずのものなのですね？」

「はい。基本的に今までに編纂された全ての『幻想郷縁起』は私たちのもとで保管しています。ですが、前回の阿礼乙女、『稗田阿弥』の代に編纂されたものだけ所在が不明となっていたのです。まさか、“外”にあるとは……」

阿求は驚きを隠せないようで、呆然と流司から渡された『幻想郷縁起』を見つめながら流司に答える。

「何せよ、元の持ち主へと戻ったのでしたらこちらとしても幸いです」

「本当にありがとうございます。“阿礼乙女”だけではなく私自身としても御礼を言わせていただきます」

「ところでその“阿礼乙女”というのは一体……？」

流司は初めて『幻想郷縁起』を目にしたときから気になっている疑問を阿求に問いかける。

「そうですね。それを説明するには私たち『稗田家』に関して知っていただけで必要があるのですが構いませんか？」

「ええ、よろしければ教えていただきたいと思います」

「では、お教えしましょう。そもそも」

「なるほど、つまりは『稗田阿礼』の転生体であり、“求聞持”^{くもんじ}の力を有して生まれた子を“御阿礼の子”といい、特に女性であれば“阿礼乙女”と言うのですね」

「その通りです」

「それにしても“転生”ですか……本当にここは今までの常識が全く通用しませんね」

“阿礼乙女”の真実を知った流司は余りにも予想とハズれていた事に改めて“幻想郷”という土地の規格外さを認識する。

実際には流司と“外”の『稗田家』の当主である朱祢の予測はそこまでの外れというものではない。

しかしながら、その予測を事実としていた真実が到底考えつくようなものではなかったのだ。

期間に対して圧倒的に数の少なかった“阿礼乙女”の絡繰り、特別な存在が“阿礼乙女”の名を冠するという流司と朱祢の予測は正しいものであった。

だが、特別な存在となる条件が“転生”だとは思いつくはずもないだろう。

『転生』。

『輪廻』でもいいが、共に“生まれ変わる”という意味の言葉である。

無論、そこには科学的な根拠などは存在してはいない。だがしかし、“転生”という事象が起こっているのは事実でもあった。

自分のことを“転生者”だと言い、前世の記憶を話す人間は少なからず存在しているからだ。

“証明”はできても“実証”はできない。

それが“転生”というものに関しての流司の認識であった。

よって、“幻想郷”での『稗田家』に“稗田阿礼”の生まれ変わりが一定の期間ごとに現れているとは想像もできないことであった。しかし、阿求の説明を流司が聞く限りは納得をせざるを得ないことであり、“幻想郷”であるということから比較的容易に流司はその言葉を信じるに至っていた。

「“幻想郷”とはそのような場所ですから。尤も『稗田家』は特に特殊でもありますが」

「流石に人里の人間が全員“転生”を繰り返しているなどは考えたくもありませんね……」

流司は自分のした想像に口をひきつらせながら笑う。

もし、そうであれば僅かな時間であったとしても流司に人里で過ごすことを考えるのは無理であっただろう。

「それにしても、これでようやく『幻想郷縁起』の編纂を始めることができます。一応、記憶はありますが、実物があるのとないは違いますから。本当にありがとうございます」

「いえいえ、心残りなのは稗田さんが編纂した『幻想郷縁起』を読むことができないことですね」

「やはり、“外”に戻るの？」

「はい。そのつもりです」

幻想入りを果たしたものの中には幻想郷に残る者もごく稀にいるようであったが、流司にはそのつもりは一切なかった。

「貴重な知識を有している方が増えると思ったのですけど残念ですね」

「すみません」

「いえ、責めているわけではありませんから。“外”には“外”の暮らしがあるというのは当然のことですし……」

「代わりと言ってはなんですが、今日は様々なことをお教えいただければと。特に“妖怪”に関したことなどをお教えいただきたいのです。私の方も“外”のことで伺いたいことがあるようでしたら出来る限りお答えします」

「でしたら堅い口調はここまでにして気楽になってください。いつまでもその様では疲れるでしょう？」

流司の願いに快く答えた阿求は一つ一つ自分の知る妖怪の姿に関して語り出す。

空が黄昏時になるまでその部屋からは楽しげな会話が止むことはないのであった。

頁二十一、『阿礼乙女』（後書き）

気付けばこれも二十話を超えて……

携帯で閲覧した時に新しいページの始まりも『幻想郷縁起』という……狙ったわけではないのですけれどね。

というわけで阿求登場。そしてフェードアウトです。ただちよくちよく出てくるキャラですね。

次は急転直下というわけではありませんが、第二幕の終わりへ向けてという感じになります。

ここでようやく流司の……
おっとこれ以上は……

ご期待いただければと思います。

頁二十二、『逢魔が時』

『逢魔が時』。

この言葉は元々『大禍時』という言葉が転じたものである。

読んで字のごとく『大禍時』とは“大きな禍が起こる時刻”という意味で、具体的には“酉の刻”のことを示す黄昏時のことだ。

古来より移り変わる節目の時刻というものは不吉に捉えられることが多い。

『逢魔が時』というものはその典型的な例であろう。

酉の刻とは日が沈む時刻のことだ。

それは即ち、人間が支配する“昼”から化生が支配する“夜”へと移り変わる時刻である。

その為、人と人ならざるものが遭遇しやすく、“魔と逢う時”、『逢魔が時』と転じたのだ。

朱に染まった空の下、流司は家路を急ぐ。

阿求との会話が流司の想像以上に長くなり、すっかり辺りも冷え込んできているようであった。

「ん？あれは……？」

「キユウ？」

ふと流司の視界の端に人里から外へと駆けていく小柄な人影が映った。

幻想郷に来て間もない流司であっても、それには違和感を覚えた。

夜に人里を離れることがどれだけ危険かということは十分に慧音から説明を受けていたからだ。

夜は妖怪の天下。

そのような時間に人里の外に出ることなど自殺行為の他ない。そのようなことは流司が心配するまでもなく、人里で暮らすものならば例外なく知っているはずなのだ。

「少し様子を見に行ってみるか……」

走り去っていった後ろ姿に見覚えがあった流司は静かにその人影を追いかけていくのだった。

ガサガサ。

人里から程近い森の中、一つの小柄な人影が蠢く。夕闇の光も僅かしか届かない森をまるで何かを探し求めているかのように音を立てながら彷徨い歩く。

「ないなあ……」

その人影から発せられたのは幼い少女の声であった。着物を着ておかつぱの頭をした少女は人里の少女らしい少女であった。

「何がないんだ？」

「はひゃっ!!」

突然、背後からかけられた声に少女は文字通り飛び上がった。驚く。少女は周囲には自分以外の存在がいるとは考えていなかった。その驚きようも領けるものではあつた。

「つて、お兄ちゃんか……驚かせないでよぉ」

「ごめんごめん。だが、こんな時間にこんなところまで来て何をしているんだ？」

驚いた少女 亜紀は驚かせた青年 流司に頬をぶくつと膨らませて怒る。

流司は頭の後ろを掻きながら謝り、亜紀に疑問を投げかける。

この時間帯に人里の外に出掛けることが危険であることは亜紀も重々承知しているはずである。

「ちょっと探しものをしてるの」

「探し物？何か落としたのか？」

「ううん。花を探しているの」

「花？」

亜紀の答えに流司は首を傾げる。

基本的に花というものは明け方や日中に開花するものがほとんどで夕暮れ時では萎れてしまうものも少なくはないからだ。

「そう。『時鳴草』って言うてね。本当はこの時期に咲く花じゃないんだけどあるかなって」

「あるかなってあるわけ……そういうことか」

流司はすぐさま亜紀の言葉を否定しようとしたが、“今”の幻想郷の状態を思い出して口を噤んだ。

「うん。今なら色々な花が咲いているからあるかなって思ったの」

「なら何で昼間の内に探さないんだ？」

今、幻想郷で起こっている異変では四季折々の花が時期に隔たりを持たずに一斉に咲いている。

それは咲く時間帯も例には漏れず、朝顔、昼顔、夕顔、夜顔が同時に咲いている光景を目にして流司は目を丸くしたことがあった。

「昼間も探したんだけどなかったんだ。だから、やっぱりこの時間じゃないと咲かないのかなって」

「元々この時間に咲くものなのか？」

「うん。でも、帰らなきゃいけないよね……」

「仕方ない、俺も手伝ってやる」

「えっ？いいの？」

まさか、流司が手伝ってくれるとは思ってなかったのか亜紀は俯けていた顔を上げ輝かせる。

「と言っても少しだけだ。危険なことには変わらないからな」

「うん。分かってる!！」

「で、その“時鳴草”ってのはどんな花なんだ？」

「えっとねえ……これくらいの大きさで雪みたいに白いんだ……それで……」

亜紀は身振り手振りで流司に“時鳴草”の姿を教えていく。

その拙いながらも懸命な亜紀の姿に流司は微笑みながら共に探し出す。

「しかし、その大きさとなると見つけるのは大変だな」

「でも、見間違えることはないはずだから……」

「確かにな……」

亜紀の説明を聞いた限りでは“時鳴草”の大きさはかなり小さいものであったが、花自体は特徴的であるようなので見間違えることはないだろうと流司も考えていた。

「クオン、クオン」

「どうかしたか？」

流司の首に巻き付きながら寝ていたはずの朔がいつの間にかに目覚めていて、ある方向を示すように鳴く。
その方向を流司と亜紀が見てみれば、

「あつた！」

朔が示した方向には一輪の花の姿。

儂げという言葉を体現したかのような細かい花であった。

流司と亜紀はその花に駆け寄ろうとして、唐突に足を止めた。

止めざるを得なかった。

ドスッ。

大地を踏みならずようにしてその影は現れた。

パツと見では大柄な人に見えないこともないかもしれない。

しかし、流司と亜紀にはそれが人ならざるものであるということが
発せられる存在感から理解することができていた。

「ひっ……」

その姿の全貌が露わとなったとき亜紀が息を呑みながら悲鳴を上げる。

すぐさま流司は亜紀を庇うようにして背に隠す。

「グルルウウウ」

朔がかつて出したことのないような唸り声をあげる。

その外見からは想像できないほどに低く野太い声であった。

「鬼熊……」

「逢魔が時」。

それは人と人ならざるものが邂逅する時なり。

頁二十二、『逢魔が時』（後書き）

というわけで、ピンチ！！

“時鳴草”という花は作者の想像ですが、“鬼熊”は実際に伝えられている妖怪です。

“鬼”という文字を冠していますが、あくまでも“熊の妖怪”です。成因は化け猫とかと一緒にすし。

それでも、只人が勝てる相手ではありませんが。

『鬼熊』とは歳を経た熊が妖怪になった存在である。

人のように直立歩行をし、特筆すべきなのはその力の強さであろう。

その力は大人が十人がかりでも全く動かすことのできない大岩を軽々と投げ飛ばし、猿などの動物を手で押さえつけただけで容易に押し潰してしまふほどである。

人前には滅多に姿を現さないとされるが、夜更けに家畜を奪ったり、当然人を襲うこともあると伝えられる妖怪であった。

そのような妖怪である『鬼熊』が流司と亜紀の目の前に現れているのであった。

「……………」

蛇に睨まれた蛙と言うわけではないが、その威圧感のあまり流司は思うように動くことができないでいた。

こうして実際に妖怪とであった流司には慧音たちが言っていた言葉がありありと理解できた。

勝てない。

目の前の存在は人知を遥かに超えた存在だ。

早くこの場から逃げ出せと流司の頭の中ではけたたましく警鐘が鳴り響く。

「亜紀、俺があいつを引きつける。その隙に逃げるんだ」

「えっ……お兄ちゃん？」

だが、流司は己を逃がすことよりも背に隠れている亜紀の安全を優先した。

それはこの極限の状態であっても流司が冷静さを失っていない、もしくは流司の本能的な正義感がされた行動であった。

「朔、亜紀を人里まで必ず連れて行くんだ。わかったな？」

「クオン！？」

流司は『鬼熊』のことを見据えながら唸り声をあげている朔に指示を出す。

朔は流司と共にこの場に残るつもりであったのか、流司の言葉に驚いたように鳴くのであった。

「朔は紛いなりにも妖狐だ。安全に人里まで亜紀を連れて行くことはできるはずだ」

「それなら、お兄ちゃんも！！」

「無理だ」

亜紀の叫びを流司は一刀のもとに切り捨てる。

流司には全員が逃げ出したところで逃げきれないはずがないということが分かっていたのである。

「今、必要なのは一刻も早い助け。だったら一人があいつを引きつけている間にもう一人が助けを呼びに行くのが確実だ。そして、その確実性を高めるためにも朔には人里までの安全を保証してもらわ

ないといけない。分かるね？」

流司の言葉はこの場における選択肢の中で最善のものであった。亜紀が一人で『鬼熊』に立ち向かうことができない以上は流司が困となる他の手段はない。

「でもッ!！」

「なに、亜紀が助けを呼んで来てくれればいいんだよ。一刻も早くね」

流司の言葉が虚勢であるということは亜紀にも分かることであった。だが、ここで二手に分かれるということは生存率を高めることではない。

生存率の分配比率を変えることにしか繋がっていないのだ。

それは1：1で分けられていたものを1：2に分け直すことで、一人の生存率を下げることで一人の生存率を上げているに過ぎなかった。

自分が何を言っているのかということとは流司自身分かっていた。

それを証明するように歯を食い縛っていないければそれはガチガチと鳴り、地面をしかと踏みしめていなければ膝はガタガタと震えて崩れ落ちてしまうだろうことは誰の目から見ても明白であろう。

「分かったね？」

流司の優しい声の中には有無を言わせぬ強さがあった。

それに当てられては亜紀も朔も押し黙り頷くことしかできないのであった。

その様子を見た流司はジリジリと『鬼熊』との距離を広げ、

「今だッ!！」

ダッ。

亜紀は流司の声を受けて一心不乱に朔を連れて走り出す。

当然、『鬼熊』はそれを追いかけてよつとその強靱な身体を動かすが、
ゴッ。

「ガアッ？」

亜紀のことを捉えていた『鬼熊』の側頭部に軽い衝撃が走る。
傷を与えるような衝撃ではないものの、それは『鬼熊』の注意を引くには十分すぎる一撃で、

「さて、リアル“鬼”ごつこの始まりだ」

木の枝を『鬼熊』の頭へと投げつけた流司は不適な笑みを浮かべて空威張りをするのであった。

一方、人里でも動揺と不安が広がっていた。

亜紀の姿が何処にも見られないという情報は瞬く間に広がり人里で暮らすものたちには皆心配の色が浮かんでいるのだった。

「一体何処へ行ったというんだ……」

辺りを落ち着きがないようにうるうるとする銀髪の女性 『上白沢慧音』の狼狽えようは表情を暗くさせている亜紀の両親と同等、下手をすればそれ以上のものであった。

「少しは落ち着きなよ、慧音。じっと待っていても動いていても結果は変わらないんだから」

そんな慧音を宥めるように『藤原妹紅』は声をかける。

「しかしだなッ!！」

「慧音がそんなに動揺していたのでは他の人里の人間も落ち着けない。総出で探しているんだからすぐに見つかるよ」

何でそんなに落ち着いていられるんだと言うように声を荒げる慧音に対して妹紅は冷静にそう告げる。

動揺は伝染する。

人里の守護者とも呼ばれる

慧音がこれだけ動揺してしまえば、人里の人間が落ち着けないのも事実であった。

「そう、だな……」

「ところで流司の姿も見えないけど、あいつも探しに行っているの？」

「いや、昼過ぎに稗田殿のところへ行ってから戻ってきていないが……」

妹紅が周囲を見渡ししながら慧音に訊ねるが、慧音も昼に顔を見てから流司の姿は見ておらず、今何をしているのかは見当がついていないのだった。

「慧音せんせいッ！！！！」

その時であつた人里の外に広がる森の一角から頭や身体に木の葉を付けた亜紀の姿が現れたのは。

「亜紀！！！」

その様子を見た人里の人間は慧音や妹紅を含めて皆一様に安堵の表情を浮かべる。

しかし、亜紀の表情は依然として険しく、切羽詰まったような顔であつた。

「一体何を……」

「お説教もお仕置きも後で受けるから、今はお兄ちゃんを！！！！！」

亜紀は慧音に掴みかかるように駆け寄ると口早に状況を説明する。

「あの馬鹿ッ！！！」

亜紀の説明を聞いて血相を変えた妹紅が人里と外へと駆け出していく。

「あつ、朔が場所を教えてくださいからッ！！！」

「クオン！！！」

亜紀の首に巻き付いていた朔は飛び出していった妹紅に併走すると

そのまま森の中へと妹紅と共に消えていく。

「慧音先生……お兄ちゃん、大丈夫だよね……？」

「ああ、大丈夫さ」

今にも泣き出しそうな亜紀のことを抱きしめながら慧音が見上げた空は、鮮やかな朱は消え去り暗雲がたちこめはじめているのであった。

頁二十三、『鬼熊』（後書き）

さて、主人公の運命はいかに？次回に続く！！

頁二十四、『逃走』

「グオアアアアアツツ！！！！」

まるで獣を思わせる叫びに流司は瞬間的に動きを止める。

それは『鬼熊』が流司のことを獲物として捉えたことによる喊声であつた。

ギロリと『鬼熊』の両眼が流司を直視して、微細な動きにも反応できるかのように視線をそらせることはしない。

対峙する流司と『鬼熊』。

先に動き出したのは流司の方であつた。

手にしていた木の枝を再び投げつけると一目散に駆け出す。

一瞬の間を置いて追いかけてくるだろう『鬼熊』が追いかげづらいうように木と木の間隔が狭い方向を選んで流司は森を縫うように走っていく。

流司の目的は助けがやってくるまで逃げ延びることであつて『鬼熊』と対峙することではない。

対峙したところで結果は考えるまでもないので流司が生きるためには逃げるほかの選択肢はないのである。

ドゴツ、バキバキ。

「くっ、化け物かよ。って正真正銘化け物か」

木々を押し倒しながら追いかけてくる『鬼熊』を見て、流司は悪態をつく。

その大きな身体では思うように動けないだろうと細い道を選び走っている流司に対して『鬼熊』はそんなこともお構いなしに木々を倒すことで道を作りながら追いかける。

これでは流司が道を選んだ意味がないのは一目瞭然であった。

「さて、どうするか……」

走りながらも流司は頭を悩ませる。

このまま助けが来るまで流司が逃げ続けられるかと問われれば、それは否である。

流司とて体力がないというわけではなかったが、妖怪と人間では根本的に身体能力に差がありすぎる。

幸い『鬼熊』の速力はそれほど速くはないために流司は未だに捕らえられることはなかったが、その体力に決定的な差がある以上捕まえるのは時間の問題であった。

流司の体力が限界を迎えるか、助けがくるのが早いのか。

それ故に流司は人里の周辺を目指して逃げようとしていたが、『鬼熊』にそれを考えるだけの知性があるのか、偶然か。

人里の方角に『鬼熊』は立ちふさがり流司は人里から離れていくように逃げることにしかできなかつた。

「これは厳しいか……」

その時であった。

「グッ!!」

『鬼熊』が吹き飛ばした人の腕ほどの太さのある木の枝が流司の背中に直撃する。

その衝撃で流司の身体は前方へとバランスを崩してゴロゴロと転がっていく。
上手く受け身をとることができ目立った傷を負うことがなかったのは流司にとって不幸中の幸いであったといえるだろう。

下手をすれば枝が突き刺さり即死していたかもしれない状況でもあったくらいである。

「畜生ッ!!!」

若干の痛みが残るからだを起き上がらせ流司は再び走り出す。
歩みを止めた先に待っているのは明確なる死。
あらがう術は逃げることのみであった。

「ハッハッハッ……」

流司の荒い息づかいが森の静寂を切り崩していく。

依然として『鬼熊』と流司の距離は十分に離れてはいる。

しかし、何時しか降り出した春にしては冷たい雨は容赦なく流司の体力をガリガリと削っていく。

降り注ぐ春時雨は流司の火照った身体を冷ましていくが、それと比例して足取りも重いものになっていく。

逃げ始めてから相当な時間が過ぎ、流司の体力は限界が近かった。
それに重ねて流司の体力を奪っていく雨。

流司にとって残された時間が僅かであることは間違いないのだった。

流司の体力の消耗を決定づけた時雨は思わぬところでも弊害をもた
らしていた。

そう、流司を助けるべく森へと向かった妹紅と朔にである。

「朔！あいつが何処にいるのか分からないのかッ!？」

「キユウウ」

妹紅の叫びに朔はうなだれるように首を竦める。同じ光景というも
のは人から方向感覚というものを奪う。

“迷いの竹林”ほどではないもののそれは人里の周辺に広がる森で
も同じことであった。

しばらくは押し倒された木々を目印に流司を追跡していた妹紅と朔
であったが、倒される木々がなくなったことで朔の嗅覚を頼りに流
司を捜すようになっていた。

だが、降り出してしまった雨によって匂いが流れ落ちてしまい妹紅
と朔は流司のことを追うにも追えなくなってしまったのだ。

「兎に角捜すしかないッ!！」

「クオン!！」

妹紅と朔はその身に走る焦りを活力に変え走り続ける。

けれども、一向に流司の姿どころか生き物の影すら捉えることはな
い。

妹紅は叫び声でも上げてくれればと淡い期待をするが、それに答える声が上がることもないのであった。

「拙い……」

流司の前に現れた妖怪がどの程度の力をもった妖怪であるのか妹紅には見当がつくことはなかったが、そろそろ流司の体力が底をつくだろうということは薄々ながら予測ができていた。

いくら流司が男であっても一般人。

到底長い時間妖怪から逃げ続けることなどできるはずもない。

人間の中にも妖怪に匹敵する

力をもつ者もいるが、あくまでもそれは少数である。

外来人である流司がその少数に含まれるはずもないのであった。

妹紅はふと脳裏を過ぎった最悪を頭を振り霧散させる。

しかしその最悪は時間をかければかけてしまっただけで現実味を帯びてきてしまうものであった。

「無事でいて……」

妹紅にできることはそう祈りながら走り続けることだけであった。

頁二十四、『逃走』（後書き）

タイトルでネタがバレるといふ……

Gガン見たいですね。

色々な方から感想を頂くとああ呼んでいただいているのだなという感慨が浮かびます。

他作者様が感想が栄養素と仰るのも頷けますね。勿論、毎回感想くださる方には感謝感激です。

果たして主人公の運命はまた明日のこの時間にお会いしましょう。

頁二十五、『逆さ時雨』

「こりゃ、いよいよもって限界かな……？」

既に流司の足はもうほとんど動かなくなっていた。

木の陰に隠れ、その幹に寄りかかる。

流司の全身は汗と雨でびっしょりと濡れ冷え切ってしまった。

「グルウウウウウ」

唸り声を上げる『鬼熊』の姿は流司のすぐ傍まで迫ってきており、流司が見つかるまでに対した時間は残っていなかった。

「亜紀はちゃんと人里まで逃げきれたかなあ……」

流司は一人雨に打たれながら逃がした少女のことを思う。

あの時にした決断を流司は後悔するつもりはなかったが、無事を確認できないことは心残りであった。

その上、このまま自分が死ぬことになれば罪悪感を亜紀に背負わせしてしまうのではないかと流司は考えていた。

それを回避するためには流司が生き残る以外の方法はないのだが

……

「厳しいよな……」

チラリと様子を見た流司の瞳には辺りを彷徨う『鬼熊』の姿がしかと映った。

夜であることと雨で鼻が利かないことで迷っているようだが、諦めるつもりがないことは流司の目でも理解することができていた。

一方の流司は完全に力尽き動くこともままならない。申し訳ない程度に握り締めた木の棒では抗うことなどできるはずもないだろう。

ドス、ドスッ。

『鬼熊』の足音は確実に流司へと迫っていき、さながらそれは流司の残り時間を刻んでいる時計の針のようであった。

「未練があれば地縛霊になれるかもな、ここなら……」

まだ“幽霊”には幻想郷でも出会ったことのない流司であったが、幻想が息づくこの地であるならば地縛霊になってもおかしくはないと笑みを漏らす。

実際、幽霊や亡霊といった存在は幻想郷にいるのだが、今の流司にはそれを知ることなどできはしない。

迫る足音に息を潜めて身を縮み込ませる。

逃げ出すチャンスがあるとすれば『鬼熊』が周りこんできたときの一瞬を突くほかなかった。

ドスッ。

足音が止まる。

そして、

ドガッ、バツ、バキバキ。

「なっ、がッ!」

流司の身体が背も垂れていた巨木ごと吹き飛ばされる。

あるうことか、『鬼熊』は木ごと流司に対して襲いかかったのである。

まるで風を前にした塵のように宙を舞った流司の身体は受け身をとることもできずに地面に打ちつけられる。

「カアッ……」

その激しい衝撃と痛みに身体中の酸素が抜け出したようにも流司は感じていた。

腹部や腕から伝わる鈍痛は骨折を意味していることも流司には理解できた。

「ゲオアウツ」

横たわることしかできない流司を見据える『鬼熊』の表情は歓喜の笑みを浮かべており、流司にはそれが死神の微笑のように思えるのであった。

何とかして身体を起こしたものの痛みで動くことはできない。

手にした枝など巨木でさえ易々と倒してしまった『鬼熊』の前では紙切れにも等しいだろう。

「さあ、来るなら来いよ？」

この期に及んで、流司は『鬼熊』を挑発する。

“窮鼠猫を囓む”という言葉があるが、流司は手負いの兎であり、

『鬼熊』は手を抜くことはない獅子であった。

そんな流司に『鬼熊』は容赦なく、そして油断なく襲いかかる。

「ゲアア、アアッッ！！！！」

瞬間、時雨が逆巻いた。

走る。

野太い獣の叫びが聞こえた方向へと妹紅はひたすらに進んでいた。

奔る。

身体に落ちる雨粒は身体から滲み出る炎によって一瞬して気化していく。

馳る。

流司はあまり人と接することが得意ではない妹紅にとって、珍しく気楽に話すことのできる人間であった。

挺る。

何故、こうも易々と気楽に話すことができたのか妹紅自身分かってはいなかったが、“助けたい”という思いは紛れもない本心であった。

轟る。

流司が“外”に戻ることが原因で別れることは仕方がないことであったが、死に別れるなど妹紅にとってさらさら御免であった。

「クソッ!」

走れども走れども姿を捉えることはない。

それでも近づいているだろうという確証はあった。けれども、その確証は最悪を思わせる事実からもたらさせる確証であった。

雨に流されながらも微かに妹紅に届く鉄の匂い。

その匂いが錯覚でなんかではないことは妹紅の傍を飛ぶ朔の様子からも伺うことができる。

この匂いを妹紅はよく知っていた。

今までに何度も流し流させた匂い。

そう、“血”の匂いであった。

そこから推測されるのは“死”という単語。

その匂いが濃厚になるほど妹紅と朔の表情は険しくなっていく。只人と妖怪。

どちらが怪我をしているかなど考えるまでもないことであった。

「……………」

その場に辿り着いたとき妹紅は言葉を失った。

目の前に見えているのは暗い森の中でも分かるほどの一面の赤。

その中心には生き物であったものが物言わぬ骸となり果てているのであった。

「何なんだよ、これ……………」

その骸の正体は『鬼熊』であった。

腕はあらゆる方向へと折り曲がり、胴は平らにひしゃげてしまっている。

まるで何か大きな力によって押し潰されてしまったようであった。

「あいつが、流司がやったのか……？」

呆然としながら妹紅は呟いたが、すぐさまその言葉を脳裏で否定する。

それは一般人である流司にそのようなことができるはずもないという思いとこの場に流司の姿が見えないことが原因であった。最も考えられる可能性は……

「こいつをこんな風にできる妖怪が現れたって……」

その事実はあまりにも絶望的であった。

だが、流司の姿が見られないことが、妹紅の推測を裏付けしていく。

「朔、捜すわよ」

「クオン!!」

僅かな可能性にかけて妹紅と朔は流司を捜す。

しかし、雨と濃厚な血の匂いで完全に匂いが掻き消えてしまった流司を夜の森で捜すことは難しく、結局見つかったのは流司が身につけていた根付けだけであった。

その場所には雪が舞っていた。

否、それは雪ではない、“胞子”であった。

その胞子には毒素があり、大抵のものは人間はおるか妖怪ですら近付くことはないほどのものだ。

そんな胞子の舞う中を一つの人影が動く。
その人影はある洋館の前で倒れると二度と起き上がることはないの
であった。

頁二十五、『逆さ時雨』（後書き）

さて、一体主人公の運命は!?

ってまあ、わかりますね……

第二幕は残すところ事後処理って感じですね。

それは泥の中から引きずり出されるような目覚めであった。全身の軋むような痛みに流司は瞼を開けることすら億劫に感じていた。

「（あの世にしては随分な目覚めだな……）」

どうせ死んだのなら痛みや怪我を帳消しにして欲しいものだと思流司は内心愚痴る。

碌に身体を動かすこともできないので、自分の状態を確かめることは流司にはできなかつたが、腕にはギプス、腹部には包帯のようなものが巻かれているだろうことは分かっていた。

まるで自分が生き残ったかのように思えるが、そんなはずはないと流司は首を振る。

『鬼熊』の止めを受ける瞬間から目覚めるまでの流司の記憶は欠落していて、見上げている天井にも流司は全くの見覚えがないのであった。

もし、これが生き残っているならば慧音の家で見知った天井であるはずだろうという安直な考えからくる予想であつたが今の流司の状態を考えればそう思うのも当然であつた。

「（さて、これは一体どういう状況なのか……）」

自分が死んだということは流司は理解していたが、この摩訶不思議な状況を理解するまでには至ってはいなかつた。

三途の川を渡つたわけでもなく、気付いたらベッドの上で身動きが取れなくなっている。

ここまでくれば、“生きている”という可能性を考えた方が良いでしょうに思えるのだけれども、明確な死を意識してしまったが為に流司は自分が死んでしまっていると信じ切っていた。

ひゅ〜〜、ポテツ。

ふと、何かが流司の視界を過ぎりそのまま寝ている流司の腹の上へと落下する。

瞬間、チクリと傷の痛みが響き流司は顔をしかめるが声には出さず己の腹の上にいる存在を凝視する。

それは“少女”であった。

ただし、それは“小さい女の子”であって“小さい女の子”ではなかった。

少女の体長は流司の指先から肘ぐらいまでの大きさしかなく、どちらかと言えば“小女”と示した方がいいだろう存在である。

少女は流司の腹の上に乗ったままじつと流司のことを見つめ続ける。流司も流司で一体どうするべきか悩んでしまっていたのでその視線を無言で受け止めていた。

もしここで流司が何か言葉を発していたのであればこの後の展開は変わっていたのかもしれない。

だが、それを今言ったところで致し方のないことである。

「蓬莱？ダメよ、怪我人なんだ……か、ら……」
「すみませ……ん」

流司が顔を動かした先にいたのもまた少女であった。

今度はちゃんとした人間であるようで霊夢と同じぐらいの年齢だろうと流司は瞬時に判断した。
金の髪を肩筋まで伸ばしている少女。
パチリとした丸い瞳はその端麗な容貌を際立たせており、陶磁器のような白い肌も実に髪に合っている。

「……………」

流司は言葉を失った。

だが、それは少女の姿に見惚れてしまったからではない。
少女の姿に問題があったことにはあったのだ。
そう、幾分か白い肌に見える面積が広がった。
言うまでもなく、流司が目にしたのは着替えの真っ只中の状態であったのだ。

「……………」

「……………」

少女と流司の視線が交錯して痛いほどの沈黙が流れる。
流司にはこの沈黙の方が身体中を走る痛みよりも辛く感じていた。

無言。無言。無言の沈黙。

思考。思考。思考の果てに口を開いた流司の言葉は

「ありがとうございます」

感謝の言葉であった。

「ッ

!?!」

それが自分が助けられたということを理解しての感謝の言葉であったのか、それとも違う意味を持つての言葉であったのかは定かではない。

ただ、今の流司にできることは顔を真っ赤に染めた少女の手から投げ放たれた辞書のような分厚さの本がぶつかるときの痛みと衝撃に備えることだけであった。

ゴンツツ！！！！

数ミリのズレもなく流司の額へと直撃したそれは流司の予想を遥かに超える痛みを流司にもたらす。

流司はその痛みに既視感を感じながら泥のような眠りへと再び誘われるのであった。

「やあ、おはよう」

「ホウラーイ？」

二度目で真なる覚醒を迎えた流司は目の前の少女、というよりも人形に挨拶をする。

どういう返事なのか流司に理解はできなかったが、取り敢えず意思が通じているということは確かでありそうであった。

「」
「どつやら起きたようね」

「おかげさまで」

目覚めた流司視界に金の髪にカチューシャをつけた少女の姿が映り込む。

内心、危うく二度と目覚めることはなかったと思った流司であったが、喻え口が裂けたとしても声に出すことはないだろう。

ああいった状況で悪いのはいつも往々にして男であるのだ。

今もなおこうしてベッドで寝ることができていることを流司は純粹に感謝していた。

「動ける……わけはないわね？」

「上半身を起こすのがやっとですね」

改めて自分の身体の状態を確かめた流司であったが、生きているのが不思議なくらいなほどにボロボロであった。

右腕と左脚は折れてしまっているのかギプスが取り付けられ、胸は包帯がぐるぐる巻きになっている。

「生きているのが不思議って顔をしているわね。まあ、それは私も同じだけど。正直に言って、棺桶を作った方がいいかとも思っただらいよ」

そう言う金髪の少女の言葉に流司は些かの納得を感じてしまう。流司の記憶は『鬼熊』の止めを受けたところで途切れてしまっていた。

それだけに今の状況の把握は自分が生きているということと目の前の少女に助けられたということしか流司は理解できていないのであった。

「それは……助けただきありがとうございます。私は『神代流司』といいます」

「そんなに畏まらなくていいわ。私は『アリス・マーガトロイド』。魔法使いよ」

それが流司と人形使いの少女との数奇とも呼べる出会いであるのだ
つた。

頁二十六、『目覚め』（後書き）

というわけでアリスさんの登場でした。

たぶん、第二幕はこれ含めて後三話。
勿論、締めはあの人です。

「シャンハイ！」

「ホウラーイ？」

「ホンコーン！！」

「何をしているのよ……貴方たちは……」

アリスは疲れたような声で流司たちに話しかけた。

流司の腹の上では二体の人形、『上海』と『蓬萊』がじゃれ合うようにして声を上げている。

そんなノリに付き合うかのように流司もノリで声を上げる。

勿論、そこには何の意味もない。

流司が目覚めてから既に三日の時間が流れた。

依然として流司がベットから立ち上がることはできなかったが、アリスの作った魔法薬のおかげで常人よりもかなり早く傷は治っていた。

アリスの見立てではあと数日もしない内に完治することになるので、それを流司が聞いたときは顎が外れてしまうほど驚いた。

瀕死の状態から何の後遺症もなく一週間足らずで完治に至るといふのだからそれも仕方のないことであった。

「ああ、お帰り、アリス」

「ええ、ただいま」

流司はベットから上半身を起きあがらせると上海と蓬萊を抱えてアリスに向き直る。

抱えられた上海と蓬萊は流司の腕から早々に抜け出すとロクククライミングをするかのように腕をよじ登り、流司の肩、そして頭へと乗っかる。

この場に朔がいたのならば壮絶な戦いが起こりそうではあるが幸いなことに朔の姿はない。

「本当に貴方は人形に好かれてるわね。私は“様子を見て”という命令しか出してないのだけど……」

上海と蓬萊にはある程度の意味はあるが、あくまでも半自立型の人形でしかなくアリスが命令をしないかぎりはそこまで自由に行動をすることはできない。

しかし、そうであるにも関わらず、上海と蓬萊はどういうわけか“流司の様子を見る”という命令が“流司と仲良くする”という命令と間違えたかのように流司に懐いていたのであった。

「確かに犬や猫には良く懐かれたけどな……ああ、最近狐もか」

「私の人形をそこの犬や猫と同じにしないでもらいたいのだけども……」

「それは分かっているけどね」

とは言ったものの流司には上海と蓬萊に懐かれていることを犬や猫と仲良くしているような感覚という他に言い表すことができなかった。

それはアリスも理解していることなのか、それ以上言葉を続けるようなことはしていない。

「それで体調はどうかしら？」

「良好だな、お陰様で。今すぐにも家の外へ出ていけるぐらいにまあ、出て行くと体調が悪くなりそうだけど……」

そう言うと流司は窓の外に見える森の様子を見て苦笑する。

窓の外は雪が降っているのではないかと見間違えてしまうほどに“胞子”が宙を舞っている。

『魔法の森』と呼ばれるこの森は一年中胞子が宙を舞っており、この胞子には毒性があることから妖怪も滅多に寄り付かない森であった。

そのような場所にアリスの家があるのは彼女が“魔法使い”であるということに要因があった。

魔法の森に舞う胞子の成分は魔法使いにとって有用なものであり、好んで魔法使いはこの場にいるのである。

アリスの話によればもう一人魔法の森には魔法使いが住んでいるようだ、家から出ることのできない流司はまだ出会ったことがないのであった。

「人間にとっては毒以外の何物でもないものね。大人しくしてないさい」

「分かっているって。恩人の言うことは素直に聞いておくさ」

折角拾った命を捨てるほど流司は考えないではない。

流司は素直にアリスの言葉に従い外を向いていた視線を戻す。

「ただの気紛れなんだからそこまで感謝する必要はないわ。それに

報酬もちゃんともらっているのだから」

リンツ。

アリスは薄汚れた鈴を手に取ると一振りして音を響かせる。

「それがそんなに良いものだとは思っていないんだけどな……」

アリスの持つ鈴に流司は目をやりながら呟いた。

鈴の音が“魔除け”の意味を持つということは一つの常識であろう。だが、流司には、『神代家』にとってはもう一つ意味がある。

それは“神を呼ぶもの”としてである。

これもまた拝殿にある鈴や神楽の際に巫女が持つ巫女鈴のことを考えれば比較的思い浮かべやすいことではあろう。

しかしながら、『神代家』の考え方は独特であった。

『神代家』では鈴の音が“神を呼ぶもの”であったが為に忌避するものと考えている。

それは“神”を“呼ぶ”という行為が人の身には余るものだと思想のもとにある。

故に『神代家』として管理する神社の拝殿には鈴は取り付けられない。

よって、『神代家』では“鈴”という存在自体を“魔除け”の象徴として、その音が鳴らないように常に携帯するという奇妙な慣わしが続いているのであった。

尤も実際に『鬼熊』に襲われた流司にしてみれば、“魔除け”にも“熊除け”にもならなかったものであるのがありがたみを何一つ感じてはいなかったが。

「正直、おいそれとあげるようなものではないわよ？神具としてはおろか、魔法具としても一級品なもの」

「でも、家には腐るほどあったからなあ……この場合は錆びるほどか……」

流司は鈴を受け取ったときのことを思い出す。

流司の父である隆斗が“さあ、好きなものを選び”と鈴の入ったダンボールの山を見せてきたときには流司も驚くどころか顔がひきつってしまったのだった。

「兎も角、正当過ぎるほどの報酬はもらっているのだから、貴方は大人しくしていなさい」

「了解。そーいや、今日はだいぶ外へ出ていたようだけど、遠出でもしていたのか？」

「え？ああ、今日は人里へ行っていたのよ。この家にもそれなりに備蓄はあるのだけど流石に二人分となると足りないから。私は最悪食べなくても何とかなるけど、貴方はそうはいかないでしょ？」

アリスはテーブルの上に乗せてある食料の詰まった袋を流司に見せて説明する。

魔法使いであるアリスはともかくとして、人間であり怪我人でもある流司が食事を抜くことは怪我の治りを遅くするほかなかつた。

「本当に悪いな……」

「だから気にしないでいいって言うているでしょ？それに雰囲気もなんだか辛気臭かったし……」

「辛気臭い……?」

「そう。何でも人が一人妖怪に殺^やられたそうよ。女の子を助けるために困^こになったんだって……」

「……………」

「いくら、困^こになったからって死んでしまったら意味は……ってどうしたのよ!? その汗!? 体調でも悪くなったの!?」
額から滝のように汗を流す流司の姿を見て、アリスは驚いたように声を上げる。

「……………だ」

「何? よく聞こえないわ?」

ぼそぼそと呟く流司の口元へとアリスは自分の耳を近付ける。

「たぶん、その死んだ人間って俺のことだ……………」

「……………はっ?」

アリスに助けられてから三日。

ここで初めて流司は自分がある意味で“死んでいる”ということに気づいたのであった。

頁二十七、『療養』（後書き）

アリスのもっている人形に名前つて原作ではありませんでしたよね？
いや、あつたのか……？

ともかく、拙作でも多くの作品で見られるように“上海”と“蓬萊”
”でいきます。

まあ、まだ増えるかもしれませんが……

アリスの設定としては“求聞史”での阿求の推測をベースにしてお
きます。

旧作を絡めるにしても相当待たないと無理です。

文中で“食事をとらなくても”的なことを言っていますが、あく
までもそれは“健康な人間が一食ぐらい抜いても大丈夫だ”という
感覚のもとであるということです。

何か違和感や不明な点がある場合は感想にてご質問ください。

さてさて、次回は第二幕の最終回。

忘れられていたあの人含めて全員集合です。

といつても“外”の人は除きますが。

最後にお気に入りが200件を超えていることに驚きを隠せません。
ありがとうございます。

頁二十八、『帰りし始まり』

「ここまでで大丈夫だよ、アリス」

「そうね。これ以上一緒だと厄介事に巻き込まれそうだし……」

「あははは……」

まさにアリスの言う通りであつたので、流司は空笑いをするしかなかった。

流司死亡説の理由は極めて単純であつた。

アリスは流司のことを幻想入りした“ばかり”で妖怪に襲われた外来人であると考えていた。

一方の流司はアリスが自分の無事を人里に伝えてくれているのだと思つていたので。

結果として人里では流司が命を落としたものだと思われるに至つていたので。

「シャンハイ……」

「ホウライ……」

「上海に蓬莱もそこから降りなさい」

アリスの声でしゅんとした様子で上海と蓬莱は流司の両肩からアリスの元へと戻っていく。
その様子はまるで捨てられた子犬でぴたっと垂れた耳と尻尾が幻視できるようであつた。

「また、会いに行くからそれまで元気でな」

「シャンハイー!!」

「ホウラーイ!!」

流司は上海と蓬萊の頭を撫でながらそれぞれに別れを告げていく。いずれは“外”へと帰る外来人の身である流司であったが、怪我が治りきるまでは幻想郷に留まる予定であったし、何かと世話になったアリスに何も告げずに帰るような神経はしていなかった。

「来るのは構わないけれど、今度は怪我をせずに来て欲しいものだわ」

「善処するよ……」

アリスのジトツとした視線に流司は顔をひきつらせて答える。アリスとしても流司と会う度に治療をしていたのでは疲れる一方である。

「それじゃあね。幸運を祈るわ」

「ああ、色々と助かった」

手をひらひらとさせて去っていくアリスに一言かけると流司は目前まで迫った人里へと足を進めていく。

喜ばしい帰還であるはずなのにも関わらず、流司の胸の内は不安で一杯なのであった。

「お兄ちゃん!!」

がばっ。

流司の姿を見るなり亜紀は流司に飛びつく。

まだ、怪我が完治しているわけではなかったのだが、心配をかけた罰だと考えて流司は甘んじてその痛みを受け入れていた。

「本当に流司なのか……？まさか亡霊だったとかいうオチはないだろうな？」

「正真正銘、“人間”の『神代流司』だ。心配をかけたな」

“亡霊”かと疑うところが実に幻想郷らしいとかんじながら啞然とした様子の慧音に流司は亜紀を抱き締めたまま向き直り答える。

「よく、無事だったな……」

妹紅からの報告を受けたときはもうダメだと思ったのだが……」

「俺も死んだと思っていただけだが、どういうわけか“魔法の森”まで行き着いてアリスに保護してもらっていたんだ」

流司は慧音、亜紀と共に歩きながら大まかに事情を説明した。

とは言え流司自身詳しいことは覚えていない。

目覚めた当初ほどの記憶の混濁はなかったが、思い出すことができたのはいつの間にかに『鬼熊』から逃れアリスの家の前で倒れたということだけであった。

肝心の『鬼熊』から止めの一撃を受ける瞬間のことは一切思い出すことができていないのだった。

「何はともあれ無事で良かった」

「何とか生き長らえることができたって感じだけだな……」

確かになど慧音は流司の全身を見渡しながら呟いた。

流司の身体には痛々しく包帯が巻かれていることが服越しでも見えてとれた。

あくまでもギプスが取れて一人で歩くことができるようになっただけで、まだ安静が必要なことは間違いなかった。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「大丈夫、ではないけど、こうして生きているからね。亜紀は大丈夫だったか？」

手を握りしめながら見上げてくる亜紀に流司は優しい笑顔を浮かべる。

大丈夫ではないことは亜紀にも分かっていたことであつたので、素直に答えたのは流司なりの優しさであつたのだ。

「うん。私は朔もついていたし……」

「そうだ、朔の姿が見えないけど……」

流司は朔の姿が見えないことをいぶかしみながら周囲をきよるきよると見渡す。

すると……

「ああ、それなら「きゅー……!!」……来たようだな」

「うおっ!? 朔、元気だったか?」

「キュツ、キュー!!」

遠方から飛来してきた朔が流司の顔へと擦りよる。

千切れんばかりにその尾を振り流司との再会の喜びを全身で表しているようだった。

「本当に生きてる……」

「随分ないようじゃないか、妹紅?」

「当然よ。あの状況で生きていると思う方が不思議なはずだわ」

慧音と同様に妹紅も啞然とした様子で流司のことを見つめるが、流司が話しかけるとすぐに軽口を言い合う。

心なしかその表情は綻んでいるようにも思えるのだった。

「なんであなたそんな怪我しているのよ。折角、呼びに来たというのにそれじゃあ送り返すこともできないじゃない……」

「えっ?」

流司が驚いたように振り返るとそこには驚きたいのはこっちだと言
いた

げな表情を浮かべた霊夢が立っているのだった。

「いや、何とかという色々あったんだよ。霊夢こそ異変の解決は済んだのか？」

苦笑を浮かべながら流司はそんな霊夢に尋ねる。

「ああ、“異変”ね。後は時間が解決してくれるそうよ。そもそも、私が出なくてもじきに治まったみたい。厄介な奴には絡まれるし、とんだ無駄骨だったわ」

驚いた表情を一変、げっそりと疲れた表情に変えて霊夢は言う。
流司にはそれがどの程度の苦労だったのか知ることではできなかったが、霊夢が相当参っていることだけは察することができていた。

「何だかお互い散々だったようだな？」

「そうね。それじゃあ、あなたの怪我が治り次第“外”に戻せばいいのかしら？」

「そうだ「その必要はありませんわ」……へ？」

流司の声を遮るようにして何者かの声が響く。

そして次の瞬間、空間に切れ目が現れそこから一人の女性が姿を現した。

「紫さん!？」

その流司の驚きは幻想郷に来てから一番のものであった。
何しろ現れたのは流司が“外”の『博麗神社』で出会った『八雲紫』、その人であったからだ。

「紫、今の言葉ってどういう意味よ？」

「それは今から説明しますわ。それよりもまずは……」

空間の切れ目から完全に姿を現し紫は音もなく地面に降り立つ。

そのまま流れるような動作で流司の正面に立ち、

「『神代流司』さん。ようこそ、“幻想郷”へ」

艶やかな笑みを浮かべて流司にそう告げるのであった。

頁二十八、『帰りし始まり』（後書き）

これにて第二幕の終了!!

やっぱりとりは紫でない。

次回も胡散臭さに怪しさと不思議さをブレンドしてお送りします。

可愛らしいゆかりんは他の作者様が書いていらっしゃるので拙作は
ひたすら胡散臭さを……

たぶん、デレないなあ……

あるとしても相当後、うん。

結局のところ花映塚の異変って霊夢が出張る必要ってなかったです

よね？

もう随分と前だから忘れている……

どうでもいいですが、ホリックが最終回を迎えました。

克蘭プらしい終わり方だけど、まさかあのオチは……

頁二十九、『対談』

「さて、何から話しましょうか？」

「まずは貴女のことから話していただけると助かるのですが……」

『博麗神社』の一室。

外来人、『神代流司』は目の前の妖艶な雰囲気醸し出している女性、『八雲紫』におずおずと手を上げるようにして訊ねる。

この場にいる“影”は流司と紫を含めて三つ。

しかし、この場にいる“人間”は流司を除けば幻想郷の『博麗神社』の巫女、『博麗霊夢』しかない。

つまりは『八雲紫』は“人ならざるもの”、即ち“妖怪”であった。

「あら、私のことを知りたいなんて……」

「いえ、そういった意味で言ったわけではなくてですね……」

広げた扇子で口元を覆い、作り物じみた恥ずかしさを表現する紫に流司は幽かに呆れを含めた声で呟いた。

霊夢は霊夢で我関せずというように湯呑みに口をつけて黙っている。

「あら？つれないのね」

「流石にこの状況で冗談を言えるような神経はしていませんので」

“外”で会ったはずの紫と今こうして相對しているという状況は流司にとって想定外というものであり、そのような状況下で冗談を言っているような冷静さは流石の流司も落ち合わせてはいなかつ

た。

流司の声色に怒りや苛立ちといった色は見られなかったが、少なくとも平静さもそこには感じることはできないだろう。

「それは仕方がありませんわね。既に流司さんもお分かりのように私は人間ではなく、“境界を操る程度の能力”を持つ“妖怪”ですわ」

「そうですか……その“能力”ってのが一体どのようなものなのかは分かりませんが、それが“外”で私と紫さんが出会った原因と考えても？」

「それはどうして？」

「簡単な推測です。“幻想郷”がどのような場所であるのかは聞いていますから。そう簡単に“外”と行き来ができないことも含めて仮に全ての妖怪が簡単に行き来ができるのであれば、食事の度に“外”に出てこられて人口は激減してしまっているでしょうから」

流司は粛々と事実を並べるように紫に語る。

霊夢や慧音による説明で流司は“幻想郷”という地に関する概要を理解していた。

その知識に照らし合わせれば“外”で出会った紫は“妖怪”の中でも異端であると流司は考えていたのだ。

「更には“幻想郷縁起”に“空間の裂け目から自在にあらゆる場所に移動することができる”という同姓同名の妖怪の記述がありましたから」

これでどうです？」

得意気な表情を浮かべる流司に対して、紫は驚いたのではなく満足したように微笑んで口を開いた。

「相変わらずの聡明さで安心しましたわ」

「聡明だなんて……ただの推理ですよ」

「ぐだぐだ話していないでさっさと要件を話したらどう？私も暇じゃないのだけど……」

湯呑みを鳴らすようにして置いた霊夢が目を半分細めるようにしてお世辞を言い合う流司と紫に声をかける。

「全くせつかちね。嫉妬かしら？」

「なんでそうなるのよ。いいわ、話さないのなら私から訊くから。まず、さっきの“その必要がない”というのは紫が送り返すということでもいい？」

紫の言葉など全く相手にせず、霊夢は紫に尋ねる。

少々強引なようにも流司は思っていたが、霊夢の質問は流司自身気になっていたことなので口を挟むことはしなかった。

「いいえ、“帰る必要がない”という意味ですわ」

「「はっ？」」

紫が余りにも自然にそう言った為に流司と霊夢は二人揃って間拔けな声を上げてしまっていた。

「それは俺が“外”に戻れないということか!？」

内心の動揺のためか流司の口調が普段のものに変わってしまったが、そんな流司の態度にも気にすることはなく紫は、

「ええ、流司さん。貴方は“外”には戻しませんわ」

「っ!?!」

きつぱりと流司に向き直りそう告げる。

その堂々たる様に流司は一瞬息を吞むがすぐに落ち着きを取り戻す。深呼吸を一つし、冷静さを取り戻した視線で紫のことを見据えるとゆっくりとした動作で流司は口を開く。

「つまりは戻すことができるがそうしないわけがあると……」

「ふふっ、その通りですわ」

流司は紫の言葉の裏に隠されていた意図を見抜き尋ねる。

“戻しません”ということは“戻さない”というのは紫の意思であることの証明であった。

動揺している状況にありながらその言葉に気付くことができた流司は流石としか言いようがないだろう。

「で、その理由は何なのよ？」

霊夢が焦れつたさを隠そうともしない苛立たしさを込めた声で紫に訊く。

「それは流司さんの信仰する神。いえ、『神代家』の血脈にあると

いうことが大きな理由となっていますわ」

「私が信仰する神ですか？」

「そういえば、流司は神主だったわね。すっかり忘れていたわ」

真剣な表情を浮かべる紫、要領が得ず呟く流司、思い出したように手を打つ霊夢。

三者三様の在り方

がなんともいえないような空気をこの場に醸し出していた。

「で、あなたは何の神を信仰しているのよ？」

霊夢は流司が“外”の『博麗神社』で神主をしていることは聞いてはいたが、何を信仰しているかまでは知らなかった。

これが『博麗神社』に“祭神”があるのならばそのようなことを訊ねることはなかっただろう。

しかし、ここ“幻想郷”においても『博麗神社』の“祭神”は不明であったのだ。

「霊夢、貴女はそんなことも分からないのかしら」

流司に訊ねる霊夢を見て紫は呆れたように溜め息をついた。

「だったら、紫。あなたは分かるってどういうの？」

「当然でしょう？ “名は体を表す”、“外”で名乗り合った時に気づいているわ」

何を馬鹿なこととでもいうように紫は霊夢に呆れの視線を向けた

まま答え、そのまま説明し出す。

「『神代』は言うまでもなく、“神の依り代”。即ち、“神の意を述べる者”、“神官”の意味……」

紫はそこで言葉を区切り広げていた扇子を閉じて装いを新たにす。

「そして、『流司』という名は書き換えれば『龍仕』。“龍に仕える”という意。流司さん、貴方の家系は代々『龍神』を祭り上げている家系ですわね？」

頁二十九、『対談』（後書き）

第三幕の開始です。

ここから主人公の幻想郷での生活が始まるはずで

とりあえずは主人公の秘密的なものを公開ですね。

故に次回は説明回みたいなのですね。

結構重要な部分となるかもしれないのでしっかりと見て頂きたいかなあゝ

さて、誰を出すか考えねば……

頁三十、『龍神』

『龍神』。

それは“神”という概念の頂点に君臨する究極の神である。

“神”が信仰する“神”とさえ称され、最終的に総ての信仰は『龍神』に集まるとさえ言われている。

『龍神』が司るは“森羅万象”、ありとあらゆるものである。

言い換えてみれば、“概念”というものを支配していると言える。

故に『龍神』の前には“過去”も“現在”も“未来”も存在してはいない。

“世界”という概念でさえ『龍神』が創り出したと伝えられているぐらいである。

「はい、その通りです。私たち『神代家』では代々『龍神』様を祭り上げています」

紫の言葉に流司は真剣な表情を浮かべて静かに答える。

その姿は既に“流司”ではなく、“神代”流司であった。

“外”の世界において『龍神』を祭り上げている神社は『神代宗家』が仕えている『神代神社』しかない。

流司が『博麗神社』の神主して仕えることができたのは『龍神』にとっては“神社に仕えること自体が最終的に『龍神』に仕えることと変わりがない”からであった。

言わば、『龍神』からしてみれば己よりも下位の神の元で修業をさせているようなものなのだ。

「『龍神』ってあなた……」

予想外の存在の登場に霊夢も言葉を失ってしまったている。

“幻想郷”においても『龍神』はそれだけの存在であるのだ。

「これだけではないわよ、霊夢。そうでしょう？流司さん」

紫は驚いている霊夢に声をかけると意味深な視線を流司に対して投げかける。

「よく御存知で。確かにそれだけではありません」

そんな紫の視線に流司は微笑むように言葉を置くと話し始める。

「真実かどうかは分かりませんが、『神代家』は『龍神』様の血脈を継いでいる一族。即ち、『龍神』様の“眷属”と伝えられています」

“外”の世界において『龍神』を祭り上げている神社が『神代神社』しか存在していないのはそういう理由があった。

眷属である『神代家』以外は『龍神』は己を直接祭り上げることが許していないのだと伝えられ信じられているのだ。

そうであるが為に“神社”に仕えるものにとって『神代家』というものは絶対的な存在であったのだ。

「……………」

霊夢はもう口を開くことすらできずにいた。

“幻想郷”でも最高神である『龍神』の眷属だと目の前の男、流司の口から告げられたのだ。

慌てることすらできないほどの衝撃であった。

“現人神”という概念
が存在しているが流司のそれはそれとは比べものにはならない。
流司の言っていることが真実であれば文字通り流司は下級神と同格
の“神”と言えるほどであるのだから霊夢の驚愕も仕方のないこと
であった。

「しかし、『神代家』が『龍神』様の“眷属”であるとしてもそれ
が“神”と同格であることを示すわけではありません。むしろ、逆
に“神”ではあつていけないとされています」

霊夢の心中を知ってか知らずか流司はゆっくりとした口調で語り出
す。

「そもそも『神代家』の始まりは『龍神』様が予見なさった信仰
の頹廃した未来においても『龍神』様への信仰を確実なものにし続
ける為です。そういった意味では正しく『神代家』は『龍神』様の
“眷属”であるといえます」

流司の言葉が意味することはつまり、『龍神』への信仰の為だけに
『神代家』が存在していると言っているのと同義であった。

これは支配下にあるという“眷属”という存在として当然のもので
ある。

「『神代家』の初代当主と『龍神』様との間にどのような取り決め
があつたのかは残念ながら分かりません。しかし、その時より『神
代家』では“龍仕”^{リュウジ}、“龍祈”^{リュウキ}、“龍舎”^{リュウヤ}、“龍為”^{リュウタ}、“龍徒”^{リュウト}の
五つの音を持った名前を繰り返して受け継いでいるのです」

“龍に仕える”、『リュウジ』。

“龍に祈誓する”、『リュウキ』。

“龍を舎どす”、『リュウヤ』。

“龍の為と為る”、『リュウタ』。

“龍の徒にある”、『リュウト』。

まさしく名は体を表しており、『神代家』はその血と名を途絶えさせることなく流司の代まで続いているのであった。

かつての当主の者には『神代家』の直縁の者ではない者もいたが、その者を『神代家』の血筋と“結婚”もしくは“血混”させることで効果のほどはさだかとして血が絶えることは一度もなかったのである。

「ですので、私がこの地に留まることはなるべく避けなければなりません。故に留めると言うのなら納得できるだけの考えの提示をお願いできますか？紫さん？」

『神代家』、次期当主たる様で流司は紫に問う。

流司が“外”に戻ることがなければ『神代家』の血が途絶えてしまう可能性は格段にあがる。

無論、現当主である流司の父、隆斗がいる限りは最悪は避けることができるかもしれないが、それでも流司の“外”へ戻らなければならぬという意思

は確固たるものであった。

「ええ、勿論説明いたしますわ。流司さんに“幻想郷”に留まっていたきたい理由は多々ありますが、何よりも『龍神』様に対する信仰の象徴としてあって欲しいのです」

流司の真剣な表情に紫も笑みを殺して口を開く。

「つまり、それは“外”での『神代家』と同じ役割を“幻想郷”でもして欲しいと？」

「そうですね。“幻想郷”でも『龍神』様への信仰は絶えることなく続いています。しかし、そこには“象徴”たる存在が居りません。確かに『龍神』様の言葉を伝える存在はありますが、あくまでもそれは“伝達者”であって信仰の“象徴”とはなりえません」

「なるほど……」

「こちらの意を押し付けているだけです、なるべく便宜は計らいますわ。何をしろというのではなく、『龍神』様を祭り上げている家系の存在が“幻想郷”にあるというだけでいいのです。“外”にも里帰り程度で宜しければ帰ることも構いませんわ。しかし、流司さんには“幻想郷”に“永住”していただきたいのです」

紫の言葉を熟考するように流司は瞼を閉じてひた黙る。

カチカチカチと秒針が時を刻んでいく音だけが居間には広がっていく。

「紫さんの仰りたいことは十分に理解できました。その重要性も。しかし、私一人の一存で決めることはできません。一度、“外”に戻り現当主である父と相談したいのですが……」

数刻の後、流司は口を開くと保留の意を示すのであった。

流司は“次期”当主でしかないので、己の一存だけでこの案件に判断を下すことはできなかった。

『神代家』に対して多大な影響を与える以上は隆斗の判断がなければいけない。

それ故の保留の意であった。

しかし、紫は、

「ふふっ、その必要もありません」

妖しげで、怪しげな笑みを浮かべると一つの封筒を取り出して流司に差し出した。

「これは流司さんの父、『神代家』、現当主の『神代隆斗』様からの手紙ですわ。ご確認くださいな」

「……確かに」

流司は紫から封筒を受け取ると封をするように捺されている捺印と封筒の表面に書かれているサインの二つを確認してそれが紛れもなく父が書いたものであると理解する。

封をするように捺されている捺印は『神代家』の花押に当たるもので宝玉を握り締める『龍神』の手を表現したもので、表面に書かれているサインは『神代家』の当主となった際に先代より与えられる“証押”と呼ばれるものであった。

この二つがあるということは間違いなく『神代家』の“当主”としての正式な手紙であるということを示している。

流司は受け取った手紙の封を開くと便箋を広げて内容を確認する。

『流司へ』

この手紙を読んでいるといることは実に稀な経験をしていることだろう。

私も同じようなものだ。

突然、何も無いところから金髪の美人が現れたかと思えば、流司を必要としていると懸命に乞われるのだから。

初めは何かの冗談かと考えていたが、こうも不可思議なことを目の前証明されては信じるしかあるまい。

そこで流司、異例ではあるがお前をこの手紙を見た時より『神代家』、当主とする。

『八雲紫』殿の意に習い“幻想郷”での『神代家』としての役割を果たすことを前当主として命ず。

“証押”については後に記載しておくので確認しておくように。

なお、この継承はあくまでも秘匿されたものであり、“外”では変わらず私が当主を勤めるものとする。

正式な扱いに関しては後々決めていくこととするが、何分異例尽くしのことであるためどうなるかは私も判断はできていない。

ともかくとして、流司、お前は“幻想郷”で『龍神』様に対してしかと仕えるように。

お前の幸運を祈っている。

追伸。

どうせなら、そちらで“嫁”でも見繕ってこい、さすれば『神代家』も安泰だ。』

「最後の一文で全てが台無しだよッ！……！」

最後の最後でしつかりとオチをつくるところが、この手紙を隆斗が間違ひなく書いていることが流司にはありありと理解できた。とは言つたもののこれで流司は『神代家』の当主の命として“幻想郷”に留まることになつたのであつた。

「で、いいがでしょうか？」

紫が息を荒げる流司に尋ねる。

手紙の内容を知っているのかは分からないが……ニヤニヤとした胡散臭い表情から流司は確実にしつてゐるだろうと判断したが、息を落ち着けて紫と向き直り流司は、

「不肖の身ながら精一杯努めさせて頂きます」

と頭を下げるのであつた。

頁三十、『龍神』（後書き）

次回から主人公の嫁探しの旅が始まりま……………せんから安心して
ください。

すつごく深い話だったはずなのに一気に軽くなった気がします。

今回の話は世界観と主人公の境遇を織り交ぜた感じでした。

主人公が『博麗神社』の神主になれたのも、他の神社の手伝いに出
れたのも、妙に敬われたのもこういった理由です。

ああ、裏話的なものですが、『神代家』に代々伝わる名が五つなの
は『五行』にかけてあるのと『五爪』というのが『龍』にとって最
高位を示すからです。

これがどんな意味を持っているかはまだ秘密。
つてか大した意味はないかも（笑）

ともかく、晴れて幻想郷に“永住”が決まった主人公でした。

空は青い。

それは“幻想郷”でも変わることはない。

雲は白い。

それもまた“幻想郷”でも同じことである。

「暇だなあ……………」

「そうねえ……………」

「クオーン……………」

縁側に腰を降ろし湯呑みをもった流司が呟き、お茶を啜った霊夢が頷き、味噌煎餅を抱きつくように食べる朔が欠伸をするように鳴き声を上げる。

幻想郷の空はどこまでも青く尊く澄んでいる。

流司が“幻想入り”を果たしてから早数ヶ月。

梅雨も明けジリジリと照りつける太陽が鬱陶しく思える時期となり始めている。

そんな季節を迎える今日の『博麗神社』も閑古鳥が巢を作ったかのように全く人気がないのであった。

流司の住まいは暫定的であったが『博麗神社』が一つであった。

これはもう仕方のないことだ。

部屋ごと幻想入りするとかつてない方法をもって幻想入りを流司は果たしたので半ば決まっていたようなものである。

部屋ごと幻想入りした理由は“外”と“幻想郷”を分ける結界が緩み幻想入りをし易くなっていた状態で、『博麗神社』という“外”と“幻想郷”境界に建っている場所から朔という管狐が幻想入りを果たす際に『龍神』の眷属でもある流司が巻き込まれるようにして幻想入りをしたからであった。

限りなく低い可能性ではあったがゼロではなく、実際に起こってしまったものはしょうがないということでなし崩し的に流司の住居の一つは『博麗神社』に決まったのだ。

一つというのは流司の住居はもう一つ人里にもあるからである。

流司の役目は『龍神』崇拝の“象徴”。

つまりは人の目が多い場所にいるべきなのであった。

「暇なら人里に行つてきなさいよ、流司」

「いや、ね。俺が行くと騒ぎになるからって熱が冷めるまで慧音に人里への出入りを自粛するように言われているんだよ。昼間は特にね……」

疲れた表情を浮かべて流司は霊夢に答える。

流司が人里ではなく『博麗神社』を行動の起点としているのにはそう言った訳があった。

流司は『龍神』に仕える神官である。

『龍神』崇拝が根強く残る幻想郷ではその存在はやはり一線を描くものであった。

故に流司が亜紀のことを命がけで助けたこともあって過剰なほどに人里に受け入れられてしまったのだ。

流司の住居には連日人が詰めかけ、流司が外を歩けば拝まれる始末であった。

この状況を好ましく思わなかった慧音が流司に

人里への立ち入りをしばらくの間自粛するように言ったのであった。流司自身、人々の過剰な視線には参ってしまったので素直に言葉に従い『博麗神社』での生活を主としていた。

「でも、流司の目的を考えたらいつまでもそうは言っていられないんじゃないの？」

「そうでもないみたいなんだよな。紫が言うには“指向性の見えなかった信仰が俺という因子を通して安定化されている”だそうだ」

「……どういうことよ？」

「要は俺という存在が認知されたことで信仰の統一が果たされたらしい」

“流司”という存在が人々に知られることで全ての『龍神』への信仰が“流司”というものを通して『龍神』に伝わることになる。

これは流司が実際に人里にいらなくとも“幻想郷”に“いる”という事実があれば問題のないことであった。

故に紫は流司に特に何もする必要はないと述べていたのだ。

「つまりは何の問題もないってことね」

「そついうことだ」

問題がなければ気にすることも無いというように霊夢は湯呑みを傾け空を見上げる。

流司もそれにつられるように空を見上げるが、相変わらず空は白い雲が浮かぶだけで実に平和であった。

「さて、することも無いし、練習でもし始めるか」

流司は湯呑みを置くと境内の石畳の上に立ち集中をし始める。

初夏を感じさせる爽やかな風が吹く中、そこだけが時間が止まってしまったようであった。

すると、唐突に流司の身体が宙に浮かび始める。

“霊力”の操作を覚える。

それが流司の専らの日課であった。

代々の神職の家系だけあり、流司にも人間としてはかなりの力有していた。

“外”の世界ではまず使うことにはない力であったが、“幻想郷”ではいざという時に身を守るためにも力の使い方を覚えることは必須事項であった。

流司は人間であるので“霊力”を扱うことができる。

『龍神』の系譜に連なることもあり“神力”も微細ながら有してはいたが使うことができるような量ではなかったので“霊力”を扱う訓練しかしていない。

「流司もだいぶ様になってきたわね」

危なげなく宙に浮かぶ流司の姿を見て霊夢が感慨深そうに呟いた。

「そりゃ、ここ数ヶ月これだけを練習してきたからな。進歩してない」と困る

「それもそうね」

“靈力”の扱い方を覚えるにあたって、二種類の方法が流司にはあった。

一つは今流司が行っている“空を飛ぶ訓練”。

もう一つは“弾幕”作り出す為に必要となる靈力を込めた弾を作る方法だ。

この二つはどちらも必要なことではあったが、流司が優先したのは“空を飛べるようになる”ことであった。

それは単純に危機に立ち向かうよりも危機から逃れることを優先としたからであった。

実に後ろ向きな考え方ではあるが、“幻想郷”への永住が決まったとはいえ流司は元々“外”の人間。

妖怪を見たら即退治と言った靈夢のような考えに染まるにはまだ時間がかかるのであった。

それが良しとすべきことなのかは疑問が残るがそれに関しては時間が解決するだろう。

「号外だよー！ー！！」

「あつ、危ない」

「は？」

ゴン、ガンッ！！

突如、空から落ちてきた新聞は見事流司の頭へとぶつかり、バランスを崩した流司は顔面から石畳に墜落する。

まだまだ、精進が必要なことは言うまでもないことである。

頁三十一、『風の号外』（後書き）

因みに文屋と主人公に面識はありません。

慧音が一切の取材を力づくでシャットアウトしており、主人公が『博麗神社』にいることも秘匿されています。

故に『博麗神社』は相変わらず貧乏です。

つか、早苗が幻想入りしたときの最大の敵は主人公になりそうなの……
姿を表さなくとも人里の信仰を一手に引き寄せる主人公でした。

遂に三十一話、1ヶ月連続投稿の達成……
頑張ったなあ！

頁三十二、『足の意味』

「落雷多発。民家に妖精に直撃。梅雨明け寸前の飛行は注意か……飛行の注意を促す号外で墜落したんじゃ世話ねえな……」

「全くよ」

己の額に傷をつくる原因となった新聞を広げて流司は呟いた。

そんな流司に霊夢は馬鹿ねえと言いたげな視線を向けながら社の影の下で涼んでいる。

「ってか、これってあれだろ？サニーたちの奴……」

流司はしばらく前に雨も降っていないにも関わらず虹が『博麗神社』の上空にかかっていたときのことを思い出す。

雨が降っていないだけでも不思議だというのに、そのかかっていた虹が上下逆さまの逆さ虹であったが為に流司の記憶によく残っていることだった。

「そういえばそんなこともあったわね。ほんと妖精って面倒ばかり起こしてくれるわ。退治してもキリないし……いっそのことどっかに封印してしまおうかしら」

「怪我の治療でここまで言われなきゃならないサニーが不憫に思えるよ……」

苛立たしく話す霊夢の言葉を聞いた流司は今日も幻想郷の何処かで戯れているだろう妖精の一体のことを憂い心の中で合掌をする。

流司には霊夢を止める術などはなく、出会わないことを祈るしかない

かった。

『妖精』という存在は“自然現象”を具現化したようなもので良くも悪くもほぼ不死身である。

その媒介となつて自然がなくならない限りはその身にどのようなことがあるうともいわずれ復活する。

そのことを妖精自身も幻想郷に住まうものも理解している為に、妖精は死を恐れずに悪戯を仕掛けるし、妖精以外の存在は遠慮なく妖精に仕返し鬱憤を晴らし滅する。

なんとも絶妙なバランスの関係であつたが、流司の妖精に対する考え方が180°変わってしまったのは語るまでもないだろう。

幻想郷の妖精は外の世界のようなファンタジーのような存在には思えないのである。

「それにしてもまた一つ勉強になつたな」

「何がよ？」

読んでいた新聞を閉じた流司が霊夢から湯呑みを受け取りつつ呟く。そんな新聞に学ぶところがあるとは思えなかつた霊夢は流司の顔を不思議そうに見つめる。

「いや、“幻想郷”の号外は一週間もした後に配られるだなど。本当に“外”の常識は通用しないなあ〜」

のんびりとお茶を啜りながら流司がのたまう。

基本的に号外というものは緊急を要する内容を急遽知らせるためのものなので、一週間も後にその上たいした内容でもないことを書いてある号外など

は確かに流司の常識外のものであつた。

「……お願いだから、間違った幻想郷の常識を身につけないでくれないかしら」

「違うのか？」

「流石に言葉の意味を変えてしまうほど幻想郷も常識をやめてないわ」

呆れた霊夢が流司に声をかけるも流司は素の表情で霊夢に尋ね返す。幻想郷には常識外れとしか思えないことが多々あったが、霊夢が言うように言葉の意味が変わってしまうようなことは流石にほとんどない。

「ふーん、そうか……」

頷きながら流司はお茶を一口空を見上げる。

流司が幻想郷に来てから流れ行く雲の行方を真剣に考える回数が増えたのは流司の気のせいではなにかはないだろう。

「なんだ、その傷？また落ちたのか流司？」

「今回は不可抗力だよ、魔理沙」

ふと流司の顔に影が落ち、流司の顔をのぞき込むように顔を傾ける少女の顔が現れる。

なんとも魔法使いらしい魔法使いの姿をした普通の魔法使い、『霧雨魔理沙』であった。

「号外が頭に当たって落ちることが不可抗力なら、幻想郷で起きることのほとんどが不可抗力になるわね」

「号外つて。流石、流司。期待を裏切らないぜ！」

「ありがとよ」

しれつと真実を霊夢が告げ、魔理沙が腹を抱えて笑う。

そんな態度にはもう慣れたのか流司に至っては感謝までしてしまっている。

「大体、そんな簡単に飛べるようになれば苦労しないっての」

流司の言葉も尤もなものである。

今まで全く“霊力”という存在に触れてこなかった人間が扱えるようになれというのが到底無理な話で、数ヶ月の訓練でほぼ無意識に近い感覚で宙に浮かぶことができている流司は上達が早い方であった。

「こんなもん慣れよ慣れ。やればその内できるようになるわ」

「そうは言ってもな。慣れで空を飛べるなら何の為に足はあるんだ」
「よ」

慣れだと言ってコツの一つも教えようとはしない霊夢に流司はふて腐れるように言う。

とは言うものの霊夢がコツを教えることができない理由を流司は知っていたのであくまでもそれは表面上だけである。

霊夢は“空を飛ぶ程度の能力”の持ち主である。

故に霊夢にとって空を飛ぶことは当たり前前の感覚となってしまうコツ云々のものではないのだ。

今でこそ能力に頼らずとも自在に飛び回ることができるが、感覚的なものは変わってはいない。

よって霊夢自身、流司できるアドバイスは“慣れる”の一言だったのだ。

「足のある意味ね。そんなのは当然、“蹴る”為でしょ？無いと困るわ」

「足がないと箒にも跨がれないぜ」

「霊夢と魔理沙に訊いた俺が馬鹿だったよ」

用途としては間違っていないが、欲しかった答えからはだいぶ離れてしまっている霊夢と魔理沙の回答に流司はがっくりとうなだれる。

「クオ〜ン……」

そんな流司の胸元で朔が大きな欠伸をする。

やはり、幻想郷の初夏はどこまでも平和に時間が流れるのであった。

「クオ……ンっ……」

頁三十二、『足の意味』（後書き）

魔理沙登場。

まあ、前回の題名で来ることは分かっていたでしょうが。

Q、足って何の為にあるの？

A、蹴る為（踏む為）

作者なりにはかなりじっくりとくる霊夢の回答かと。

うん、言いそうだ。

次はあの人の登場。

みんな大好きなのかな……？

まあ、作者は好きですよ。

俺は一体何をしているんだ……

流司は唐突にそう思った。

何もそれはど忘れを起こしたというわけではない。

正確には流司は自分が何処で何をしているかもすっかりと理解している。

流司が今いる場所は人里の甘味所。

目の前には黒蜜ときながたつぷりとかかった葛餅が置かれており、いつの間にかに流司の首を離れていた朔が頭を突っ込んで食べている。

朔は口元をきなこ塗れ、黒蜜塗れにして正直どっちが葛餅なのか分からない状態であったのだが、それは流司にとってどうでもよかったことであつた。

店内にいる客の視線はやはり流司が独占してしまっており、居心地が悪いことこの上ないと流司は感じていたが、それもまた今の流司にとっては些細なことであつた。

「どうかなさいましたか？」

「いや、特には……」

特にどころか色々と流司には思うところがあつたのだが、思うように頭が働かず言葉にすることができないでいた。

一方、この状況を作り出した張本人はというと洗練された動きで紅茶の味を吟味するかのように味わっている。

流司と共にいることでその身もまた数多くの視線に晒されているのだが、全くの自然体であり気にする素振りの一つすら感じさせてはいないのだった。

性別は女性。

歳は見た限りでは流司と同じく十代の後半のように見えるだろう。髪色は青みかがっている銀であり、肩を少し超えた辺りで整えられている。

そして、特筆すべきはその女性がエプロンドレスを身に着けていることだろう。

要するにその女性は俗にメイドと呼ばれる姿をしていた。

当初、流司がその姿を見かけたときは“メイドも幻想入りしたんだなあ”と何ともの外的な感想を口にしたのだが、まさかそのメイドと甘味所でお茶を共にすることになるとは流司は考えてもいなかっただろう。

実際、流司はこのメイドの女性の名前すら知らない。

目があった瞬間に、“失礼します”と目の前に立っており、あれよあれよのうち今の状況に至っているのがあった。

これがもし“幻想郷”でなく“外”の世界であったのならば確実に詐欺の類のことであつただろう。

考えれば考えるほど流司の頭は混乱していき、糖分を欲していく。仕方なしに葛餅へと手を伸ばすが、その器は綺麗に洗ったかのごとく輝いていて、葛餅の代わりに朔が丸まっている。

虚しく手を膝へと戻した流司は溜め息を一つ浮かべ再び思う。

俺は一体何をしているんだ……

「初めまして。私は『十六夜咲夜』、紅魔館でメイド長を勤めていますわ」

「はあ、『神代流司』です……」

テーブルの上がすっかり綺麗に片付いたところで流司の前に座る女性 『十六夜咲夜』が口を開く。

咲夜の瀟洒な身なりに対して流司は間の抜けたような声をあげる。

流司は名乗り名乗られはしかもの未だに訳が分からない状態であった。

「神代様、それとも流司様とお呼びした方が？」

「ああ、“流司”でお願いします。あと敬称はなくて結構です。色々大変なので……」

人里の人間の中には流司の顔を知らぬ人はいたけれども、“神代”という名に関してはほぼ100%の認知度があった。

故に“神代”という名や敬称をつけられると色々と厄介な事態を引き起こしてしまうきっかけとなり、流司もまた敬称をつけられることに疲れてしまっていたのだった。

「わかりましたわ」

咲夜はまたきびきびとしているわけではないが、洗練された動きで流司の言葉に頷きを示す。

そんな咲夜の姿に流司はどことなく懐かしさを感じた。

『神代家』の本家はそこで暮らしている人の数に比べて敷地が非常に大きい。

具体的には流司を含めても十人に届かないにも関わらず、部屋の数は一桁を優に超えるほどであった。

そんな『神代家』をたった一人で保っているお抱えのお手伝いがいる。

その名を『久鷲乙女』 俗に“トメ婆”と呼ばれる齡七十にも近付こうという歴戦の勇者である。

流司が物心ついたときには既に“婆”であり、本当に七十に近いのかと流司が疑問に思ってしまうほど元気溍刺としたトメ婆であったが、普段はおしゃべりな人であるが家事を一手に引き受ける姿はまさにお手伝いの鏡と思わせるほどである。

流司は咲夜の姿をトメ婆とだぶらせていた。

咲夜自身“メイド長”と名乗っていたこともあり何か通ずるところがあるのではないかと思わずには流司はいられなかった。

「ところでどうして私をここへ？」

名乗りあったことから咲夜は流司のことを『神代流司』として甘味所へつれてきたわけではないことは伺えるだろう。

また、流司が外来人らしい姿をしていれば物珍しさという理由がなくもない。

しかし、今の流司の姿は着流しと作務衣を足して二で割ったような格好をしており、人里の中で珍しいような姿ではなかった。

それ故に流司には咲夜が己

のことを連れてきた理由に全くの検討がつかなかったのだ。

「それは我が主レミリアお嬢様の命だからですわ」

「はあ……」

咲夜の答えに再び間の抜けた声を上げた。

とは言え、それはその名に聞き覚えがなかったからではなく、逆に聞き覚えがあったからであった。

流司も“幻想郷”に住むことが決まったからには“幻想郷”についての知識を学ばざるを得なかった。

その中で霊夢に説明された“幻想郷”での有力勢力の一つが紅魔館の主、吸血鬼『レミリア・スカーレット』であった。

尤も霊夢からの忠告は“見たまんまの奴よ”という全く為にならないものであったが。

「すみませんがもう少し詳しく話してもらってもいいでしょうか……？」

紅魔館のメイドである咲夜が主であるレミリアの命に従ったという理屈は流司にも理解はできたが、レミリアと全くの面識のない流司が巻き込まれる理由はさっぱりであった。

「わかりましたわ。あれは今日の朝のことです……」

「いえ、そんなモノローグ調に言う必要はありませんから」

「そうですか？お嬢様には好評だったのですが……」

流司の言葉を受けて話を淡々なものに変える咲夜を見て流司はトメ
婆と咲夜が同じような垢の抜け方をしていると再三にわたって思う
のであった。

頁三十三、『拉致』（後書き）

突発的後書き企画。

IFな一幕。

仮定：1

『もし、流司が咲夜に見惚れていたら……』

流司は目の前の女性の洗練された美しさに見惚れてしまっていた。確かにこの状況にも流司は混乱していたが、それ以上に惚けてしまつてたのだ。

「どうかなさいましたか？」

「いえ、何でも！！」

流司は取り繕うかのように慌てて手を振り、その勢いそのままに葛餅へと無意識に手を伸ばして口に運ぶ。

ハムッ。

「ギュイッツ！！」

「！？」

葛餅と間違えられ口に運ばれた朔が流司の口の中で悲鳴を上げる。

そんな様子に流司は勿論のこと女性も目を丸くしてしまうのだった。

俺は一体何をしているんだ……

な展開があつたかもしれない……

あつたかもしれないNGでした。

もし朔に気がつかなければこうなつてたかも……？

『IFな一幕』は突発的な企画なので閃かなければありません。
人気があれば頑張つて閃きます。（何かおかしい）

Wikiの人気投票では霊夢とセブレットが貫禄の一位だったよ
うで。

早苗は下がつて咲夜が返り咲きましたね。

キャラは出てきてるキャラが大体好きなキャラなので言うまでもな
くとして。

曲だと『フォールオブフォール』『秋めく滝』や『少女が見た日本
の原風景』、『ラストリモート』が好きですね。

盛り上がりかたがハンパないです。

ボス曲なら『妖精大戦争』『Family Wars』や『プレイン
エイジア』がいいですねえ！

二次曲だとりすとらのファンなので『メイガスナイト』のアレンジ
で『GIRL'S WAR』が最近では好きです。

皆様はどつでしよつかね？

頁三十四、『運命の先』

紅魔館。

そこには姉妹の吸血鬼が存在する。

その吸血鬼の姉である『レミリア・スカーレット』は極めて稀有である能力を有していた。

『運命を操る程度の能力』。

実に抽象的な能力であるが、それが事実というのなら無敵であると言っても過言ではないだろう。

運命とは人生とイコールで結んだとしてもおかしくはないものだ。だとすれば、『運命を操る程度の能力』ならば人の幸も不幸も思うがままというわけである。

「咲夜、いるかしら？」

「はい、ここに」

レミリアが声を上げた瞬間にその従者でありメイドである咲夜が姿を表した。

それは呼ばれることが分かっていたかのような早技であった。

そんな咲夜に満足するようにレミリアは笑みを浮かべると口を開く。

「咲夜、貴女に少し面白い運命が見えるわ」

「面白い、ですか？」

小首を傾げて尋ねる咲夜に対してレミリアは暇を持て余していた子供が新しいおもちゃを見つけたような愉快さを声に潜めながら頷い

た。

「そう。とても面白いわね。咲夜、貴女は今日人里に買い出しに行くつもりでしょう？」

「はい。そろそろ食材が足りなくなる頃ですし……」

レミリアの言葉に瞬時に残っている食材の量を思い浮かべて買い出しの内容を決める。

「なら、人里に入ってから初めて目があった男とお茶をしてきなさい。これは命令よ」

「分かりました。お嬢様」

……

……

…

「… ということがあったのです」

「その言葉に従った結果が今と……」

「その通りですわ」

即答する咲夜に流司は啞然としてしまい言葉も出なかった。

運命を操ることのできる能力があるという事実以上に主の言葉に何の疑いもなく従った咲夜の従者の鏡たる行動に言葉が思いつかなかったのだ。

「何か不思議なことでも？」

「いや、少しは疑いを持たなかったのかと……」

「主の言葉に疑い背くなど従者がすることではありませんもの」

この主至上主義はまさしくトメ婆の生き写しだと流司は思った。勿論、髪色から容姿、年齢と何から何まで似通っている部分など感じることはできなかったが、ただ一つ“従者たる姿勢”だけは瓜二つであると流司は感じたのだった。

トメ婆も『神代家』に絶対の忠誠を誓っていた。

それは喻え全世界が『神代家』の敵となろうともトメ婆だけは『神代家』の味方であり続けるだろうと流司が確信を持つことが出来るほどである。

そして、目の前にいる咲夜もそれは同じことだろうと流司は思った。

「何かおかしいのでしょうか？」

「いや、そうではありません」

思わず笑みを漏らしてしまっていた流司に咲夜が訊ねる。咲夜にしてみれば、当然のことを言ったままであり何もおかしいことではないので、笑みを漏らす流司が不思議に移ったのだ。

「なら……」

「知り合いに貴女とよく似た人がいるんですよ。姿がってわけなく、考え方がですが」

流司はそう言っただけで今日も元気に働いているだろうとトメ婆の姿を思い浮かべる。

流司が幻想郷へ来てから既に季節が一つ過ぎていたし、トメ婆は神代の本家にいるので流司はもう半年近くトメ婆と出会っていないことになる。

物心ついたときには働く姿を見ており、祖父祖母のいない流司にとっては本当の祖母のような存在の人であった。

「それは興味深いですわ」

「少しお話ししましょうか？と言っても私の主観になってしまいますが」

咲夜も自分に似た人、しかも考え方が似ているということに興味を示したのか含みをもったような声を上げる。

流司も思い出話に耽るのも悪くはないと感じていたおり、咲夜に断りを入れた上で提案するのだった。

「よろしければ」

「分かりました。ではそうですね ……」

そうして、ぽつりぽつりと流司は話し始めるのであった。

「悪いな。長々と話してしまっ」

「いえ、私としても実に為になる話だったので」

流司が話し終える頃には互いの敬語がとれるようなほどには流司と咲夜は親しくなっていた。

周囲からしてみれば、とても拉致された人間と拉致した人間には見えな

「それは良かったよ」

そういう流司の顔はうつすらとひきつっている。

咲夜が特に興味を示したのが隆斗に難癖をつけてきた相手や流司が幼少の頃に流司のことを虐めようとしていた相手を如何にして陥れようかと画策していたトメ婆の話であったからだ。

余計な知識を咲夜に与えてしまったかと流司は思わざるを得なかったが、時既に後の祭りである。

「それよりも時間は大丈夫なのか？ 買い出しもあつたようだけど…」

空の色は朱。

いくら主の命だったとはいえ、メイドの責務が疎かになっているのではないかと思つた流司が咲夜に尋ねる。

しかし、咲夜は自信ありげに、

「私にはとっておきがあるので」

と笑顔を浮かべて一礼して文字通り流司の前から一瞬で姿を消す。

「能力持ちってことか……」

そう呟いた後、流司もそそくさと人目から逃れるようにして人里を後にする。

当然、咲夜ようにはいくわけもなく気付かれた住民に拜まれることにはなるのであった。

「咲夜、それで今日はどうだったかしら？」

「お嬢様の命通り、初めて目のあった男性とお茶をしました」

レミリアは食後のワインのグラスを傾けながら傍に控えている咲夜に話しかける。

「そう。どんな相手だったの？」

「そうですね。良い人ではあるかと思えます。色々と為になる話も聞かせて頂きましたし……」

「なるほどね。今日はもう下がってもいいわ、咲夜」

「分かりました。お休みなさいませ」

レミリアが指示を出すと瀟洒に一礼をしてみせて咲夜は姿を消す。一人残されたレミリアは笑みを浮かべて呟く。

「“良い人”ね……あの咲夜が。ふふっ」

赤い雫を口に流し込みながらレミリアは酷く愉快そうに笑う。

「この運命は弄らないでおきましょう。これだから運命つてものは面白いのよ」

グラスを空にしたレミリアは窓から空に浮かぶ月を眺め立ち上がる。

「早く会ってみたいものね。是非ともB型であるといいのだけど……」

月を見上げるレミリアの姿はその外見からは考えられないほどに妖艶な笑みを浮かべ続けるのであった。

頁三十四、『運命の先』（後書き）

IFな一幕。

仮定：2

『もしレミリアが紅茶をご所望だったら』

レミリアはティーカップを傾けて愉快そうに……………ではなくその独特の甘さに顔を歪めた。

「咲夜、今日は何を入れたのかしら？」

「本日は通常のアールグレイです」

どう考えてもレミリアにはただのアールグレイの甘さには思えなかったのだが、咲夜が嘘をついている様子は見られなかった。

「ただ、砂糖の代わりにきなこで甘さを調整してみました。葛餅を食べているのを見て閃きましたので」

「……………もう、下がっていいわ」

「分かりました。お休みなさいませ」

一礼すると咲夜は音もなく姿を消す。

一人残されたレミリアは、

「今日、お茶に行かせたのは失敗だったかしら……」
と後悔の言葉を漏らすのだった。

的な展開があつたかもしれない。

お嬢様がカリスマ全開でお送りしました。

主人公の知らぬところで狙われるという……

本格的な登場はまだ先ですね。

IFな展開は咲夜のおかしなお茶シリーズでした。

福寿草で紅茶を淹れるくらいなのでこれくらいはしてくれらるでしょう。

では、また明日〜。

頁三十五、『迷いの竹林』

『迷いの竹林』。

それは人里のすぐ傍に広がる竹林である。

竹の成長が早い為にすぐ景色が変わってしまう上に地面に緩やかな傾斜があることで平衡感覚を失い迷ってしまうことからその名がついている。

更には妖怪となった獣が住み着いているので、いくらそこに生える筈が非常に美味しいものであったとしても熟練の筈狩り以外はまず立ち入るものはない場所であった。

そんな迷いの竹林を迷いなく進む二つの影がある。

一つは狐色をした空飛ぶ襟巻、もとい管狐の朔。

もう一つはその飼い主というか主である流司であった。

流司はすいすいと竹の間を縫うように空を行く朔の後をついていく。管狐である朔は嗅覚にも優れているために迷いの竹林でも迷うことはない。

ただ、問題は後をついていく流司にあった。

「朔、毎回思うんだが、もう少し通りやすい道を選んでくれないか？」

「キュウウウ？」

朔は管狐。

流司は人間。

当然のようにその身体の大きさには明確な違いがある。

朔が楽に通ることのできる竹と竹の隙間でも流司にとっては通るの

が一苦労なことも少くはない。

だが、流司が一人で迷いの竹林を進んだところで結末は見えており、朔に道案内をしてもらうほかないのであった。

流司の懇願に朔はしばらく迷ったようにふらふらと飛び回ると再び進み出す。

その道は流司でも比較的に通りやすいような道を選んでいるようであった。

「ありがとう、朔」

「クオン！」

朔に感謝をして着崩れた身なりを整えて流司は朔の後に続く。

しばらく、足を進めていると竹の竹の間に一軒の小屋の姿が流司の目に入る。

ここまでくればもういいだろうと朔は流司の首に巻きつく………のではなくその小屋へ、正確には小屋の前に立っていた少女のもとに飛んでいった。

「キュー〜!!」

「あ、こら、朔。くすぐりたいから止めなさいって」

朔はその少女に飛びつくようにして服の中に潜り込む。

これで雄ならばとんだエロ狐のだが、どうも朔は雌に属するようでもともと朔の愛情表現の一つであった。

朔がここまで懐いているのは流司を除けば、人里の亜紀とこの少女妹紅だけである。

霊夢や魔理沙、慧音、アリスといった者たちにも懐いてはいたがここまでのもではなかった。

それはともかくとして朔は雌だが、流司は男である。

朔とじゃれあうようにして服を着崩していく妹紅の姿はそれは流司とっ

ては酷く目の毒でしかなく。

妹紅のどこか嬌声にもいた声が治まるまで小屋に背を向けて竹林の中に佇むだけであった。

「あつ、そこはっ……ダメッ!？」

「キュウィツ!！」

「……………いらっしやい」

「……………お邪魔します」

満足げに首へと巻き付いた朔を伴って流司は妹紅の言葉に従い小屋の中へと入る。

ほんのりと頬を桃色に染める妹紅に、そんな妹紅を何となく直視できない流司。

気まずい空気が二人の間には流れていた。

朔の行動自体は毎回のことであったが、通常はこの場に慧音もいるのでここまで空気が気まずくはならなかった。

しかしながら、今回はその慧音の姿はなくどうしようもなくどうしようもない空気が蔓延していたのだ。

「……………とりあえず、これ、いつもの」

重いとも初々しいとも思えるような空気を押しつけ流司が口を開いて、手にしていた包みを妹紅へと渡す。

包みの中身はある程度常温であっても保存のきく料理である。

『博麗神社』での家事の分担は基本的に流司に一任されている。

理由はたった一言、“居候”である。

よって流司は朝目覚めて境内掃除をし、朝食を作って、霊夢を起し、家の掃除に洗濯、買い出しと、それはもう“内助の功”と呼んでもおかしくはないほどに“専業主夫”をしているのである。

結婚どころか付き合っすらいないのにも関わらず、『博麗神社』は完全に霊夢のかかあ天下であった。

幸か不幸かそれによって流司の家事、特に炊事の技術はここ数ヶ月で格段に上達しているのである。

とはいうのは、諸事情（単純に貧乏なだけ）あって望んだ食材を必要な分だけ手に入るわけではなく、流司がお裾分けされた限られたものを使って料理をしていく間に、否が応でも上達したのだ。

そこで流司は世話になった人（といっても、慧音、妹紅、アリスぐらいである）に時々差し入れをしているのであった。

「あつ、うん、ありがと……………」

妹紅は流司から包みを受け取り抱え込む。

そして、再び流れ始める沈黙。

「……………」

「……………」

「スウ スウ スウ……………」

この状況を作り出した根本的な原因である朔は呑気に寢息を立てる。妹紅の元々寡黙な性格が災いして静寂は続く。

互いに互いをそういう存在として意識しているかと問われれば双方とも疑問であったが、片や男に片や女、異性として意識するなとというのが無理な話であった。

「そ、そう言えば、どっかに出掛けるようだったが人里にでも行くつもりだったのか？」

「あ、あれは違う場所よ」

明らか過ぎる流司の話題の転換であったが、妹紅も折角の機会を見逃すはずはなく吃りながらも流司の言葉に答える。

「違う場所？」

そんな妹紅の言葉に流司は首を傾げてしまう。

妹紅が余り人と関わろうとしていないことは流司も知っていた。排他的というわけではなかったが、基本的に妹紅が関わる人を流司は自分以外では慧音ぐらいしか知っていなかったのだ。

「そう、別の場所、だから今日は……………」

「どうかしたか？」

言葉の途中で妹紅は突然、ぶつぶつと何かを考え出す。

流司が声をかけてもそれは止まることはなくしばらくしてようやく止まり妹紅は含みを持った声で、

「流司も来る？」

と尋ね返すのであった。そんなことを言われても流司には全く検討がつかなかったので、素直に流司は妹紅に再び訊ねる。

「来るって何処に何をしにだよ？」

そう言う流司に妹紅は何時になく好戦的な笑顔を浮かべて、

「殺し合いよ」

と笑うのだった。

頁三十五、『迷いの竹林』（後書き）

もこたんINしたお（朔的な意味で）

さりげなく、『似非神主兼狐憑き』から『似非神主兼狐憑き兼専業主夫』にランクアップしていた主人公でした。完全に尻に敷かれています。はい。肩書きは段々増えていくんじゃないでしょうか？外国の名前みたい

に。
現状の有力候補は『ドール・アテンダント人形奴隷』や『ブラッド・ボトル血液筒』かな？
格好良さそうで悲惨な気がしないでも……

頁三十六、『不老不死』

指が吹き飛ぶ。
足が吹き飛ぶ。
肩が吹き飛ぶ。
股が吹き飛ぶ。
腕が吹き飛ぶ。
耳が吹き飛ぶ。
腰が吹き飛ぶ。
口が吹き飛ぶ。
胸が吹き飛ぶ。
目が吹き飛ぶ。
首が吹き飛ぶ。
顔が吹き飛ぶ。

「……………」

事実だけを書き並べるとスプラッター映画も顔負けの光景が流司の目の前では繰り広げられていた。
そのような光景を流司は無言で眺め続ける。
そのような光景を流司は無言で眺め続ける。
気を失ってしまったというわけではない。
ただ単にもう既に言葉を上げることにも驚きを露わにすることにも疲れてしまっただけである。
かれこれ数刻もこの光景を見せ続けられれば、嫌でも慣れてしまうだろうし、流司の常識などとくに吹き飛んでしまっていた。

「男連れで来るなんていい度胸しているんじゃないッ！……！」

黒髪の美女が左腕を吹き飛ばされながら叫ぶ。

「ハッ、昔にあれだけ男誑かせていたお前だけには言われたくないなッー!!」

右足を吹き飛ばされながら白髪の美女が言い返す。

「……………」

そして、流司はそんな様子を無言で眺め続けて。

「スウスウ……………」

首に巻き付いた朔はけたたましく鳴り響く爆発音にも目を覚まさずに寝息を立て続ける。

混沌という言葉を生み出す為のごとくこの場は混沌としていた。

流司にこの場を納めることができるような力はない。

むしろ、危機一髪というか釜中之魚であり、一刻も早くこの場から逃げないことには命がいつなくなってもおかしくはなかった。

「貴方もこちらに来たら？そこだと危ないでしょう？」

そんな命の危機に瀕している流司を招くように声がかかる。

その声に気付いた流司はこそこそと戦地から撤退する兵士のような足取りでその場を離れていく。

あながち冗談にも思えないことが実に笑えないであろう。

「助かりました。ええつと……………」

「八意永琳よ。それでこっちが……………」

「鈴仙・優曇華院・イナバです」

流司が移動した先にいたのは独創的な格好をした妙齡の女性とその影から出てきて一礼をした少女であった。

ひょい。

「これはどうもご丁寧に、神代流司です……………耳？」

流司は挨拶に応えながらも視線がある一点に集まってしまつた。

それは鈴仙と名乗った少女の頭の上にそびえ立っていた。

アンテナを思わせるような細長い二本の棒のような、それは耳しかも兎の耳であった。

「あの一……………」

ひょこひょい。

じつと、耳を見つ

める流司の視線に居心地の悪さを感じたのか鈴仙はおずおずと口を開くが流司は全く反応を示すことはない。

そればかりか、

ぴと、にぎにぎ、びよ〜ん。

「ほ、本物だ……………」

流司は確かめるように鈴仙の耳を摘むと右へ左へ、果てには上へと弄り驚いたそれでいて感心したような声を上げる。

「ツツ！！！！な、何するんですかッ！！！！」

ガバツという音が聞こえてきそうなほどの勢いで鈴仙は顔を真っ赤に染め上げて永琳の背中に隠れるように流司から距離をとる。

そんな鈴仙を見て永琳はあらあらといった笑顔を、流司はしまったとハツとした表情を浮かべる。

「す、すみません。余りの衝撃に思わず」

なら、現在進行形で身体の一部を吹き飛ばしあっている二人はどうなんだというツツコミが何処からか聞こえてきそうだが、鈴仙の頭の兎の耳は流司にとってぶっ飛んではない適切な驚きだったのだ。その上、“外”にいた流司にとっては“兎の耳”はある意味では珍しいものではない。

そのこともあって思わず手を伸ばしてしまったのだ。

「神代流司さんといいましたね。では、貴方がしばらく前から人里で噂になっている……」

気まずそうな顔をしている流司に永琳が何かを思い出したように話しかける。

「ええ、まあ、どういう噂かは知りませんが」

「何でも、“外”から『龍神』様の使徒がきただそうよ」

近からず遠からずと言ったところであろう。

ある意味では流司の存在は『龍神』の使徒とも呼べるものだが、そこまで大層なものではないことも確かであったからだ。

「そんなことに……」

「ほら、優曇華も。彼も悪気があったわけではないのだから」

「本当にすみません」

永琳の声に未だ流司に警戒を見せながら、鈴仙が姿を現す。

何処からどう見ても悪いのは流司であったのでひたすらに流司は頭を下げ続ける。

もうそれは土下座せんばかりの勢いでとても『龍神』に仕える神官の姿には見えないだろう。

「いえ、私も少し過剰だったというか、そこまで謝れたのでは何も言えないといえますか……」

先程とは打って変わって互いに頭を下げ続ける鈴仙と流司。

積極的のように思えて実は消極的な性格が共にあるために一向に事態が進展を迎えない。

「はいはい、そこまで。今回のことに関しては水に流すってことでいいわね」

「はい、師匠」

「こちらとしてはそうしていただければ

……」

埒のあかない二人を永琳が間に入って止める。

永琳が止めなければ下手をすれば日が暮れるまで同じことを繰り返

していたことだろう。

「神代さんは色々と気になることがあるのではないかしら？」

「まあ、それなりには。鈴仙さん、は妖怪ですよね？」

「はい、私は種族としては妖怪兔になります。尤も少し特殊なんです
すが」

「やっぱり、“外”から来た人間としては妖怪は珍しいかしら？」

「そういうわけではないのですが……」

流司も妖怪自体はその恐怖含めしつかりと理解している。

人の姿をする妖怪が多いということも実体験に加えて霊夢からの説明でも知ってはいたことだ。

とは言っても、そう簡単に慣れるまでには流司の幻想郷で過ごした時間は短く、知り合いには獣人のような姿をしたものがいなかった（満月の日に慧音に流司は会ったことがない）ので尚更であったのだ。

「それよりあつちより優曇華が気になるなんて、貴方も妙な人ね」

「あれに関してはもう頭が理解しようとしていないんですよ」

視線を激戦を繰り広げ続けている二人に永琳が移したのにつられるように流司も苦笑しながら眺める。

吹き飛ばしては吹き飛ばされ再生するという蜥蜴や海星も驚くような状態に戦い続ける二人はあったが、そんなあり得ないような光景に対して流司は既に考えることを諦めていた。

「それこそ、ここになら“不老不死”の一人や二人いてもおかしくはないかなと」

「その考え方はもうだいぶここに染まっているものよ？」

「変に慣れたくはないんですけどね……」

世間話のようなものをしながら殺し合いを眺める永琳と流司の二人。もしかしたら、この二人も大概吹っ飛んでいるのかもしれないだろう。

「それにしても、不老不死ってのは服も再生するんですねえ……」

「あれはもう幻想の不思議よ」

「輝夜あぁッ！……！」

「妹紅おおッ！……！」

頁三十六、『不老不死』（後書き）

IFな一幕

仮定：3

『もし、優曇華の耳がアレだったら』

流司はまるで魅了の魔法にかかったかのように“それ”へと手を伸ばしていく。

びゅんぎんぎんぎんびゅん。

ブチッ。

「に、偽物だ……」

流司は驚愕に目を見開いて己の手に摘まれているものを見つめる。
妙齡の女性 永琳も余りの出来事に口をあぐりと開けてしまっている。

「優曇華、あなた……」

「ツツ！……！！……！！な、何をするんですかッ！……！！返してくださいッ！……！！」

的な展開があつたかもしれない。

というわけで一話まる

まる戦つていただくことになりました。

本格登場は次回です。

永琳と優曇華は登場しましたが、基本的にスルーです。

だってメインは違いますから。

因みにこのシリーズが第三幕最後。

後、三話もあるんだよ……

愛が溢れすぎたWWW

欄外、『とある朔の幻想録』（前書き）

本日はなんと二本立て。まずはこちらからどうぞ。

欄外、『とある朔の幻想録』

吾輩は管狐である。名前は既にあり、“朔”という。

どこにどういった共通点を見つけ出して名付けられたのかは分からぬが、響きも良く気に入っているので文句などはない。

どこで生まれたかんと見当がつかぬ。そもそも、“管狐”として生まれたかどうかも忘れてしまった。

気付いたときには既にあの煙管入れの中にいたことだけは記憶している。

どれだけ長い間そこでそうしていたかは分からぬ。

十年か、百年か、千年か、万年か。

まあ、結果として今の御主人に出会えたのだからこれもまた気にすることではない。

御主人はその清浄な靈力に似合った御仁である。

少々、押しに弱くいつもあの巫女にいいように使われているようにも思えるが、それも御主人の美德だと考えれば目を瞑ろう。

普段は御主人の首に下がり、健やかな眠りに落ちているが今日は少し遠出をしようと思う。

縁側で心地良さそうに眠る御主人に別れを告げ空を飛ぶ。

無論、何か目的があったというわけではない。

単に少し出かけたくなっただけである。

偶にはそういう日もあるだろう。気にすることではない。

ふと、空の散歩を楽しんでいると見覚えのある三つ影がある。

あれは御主人が“妖精”たる存在と言っていたはずだ。

まこと“幻想郷”には奇怪な生き物が多い。

管狐である我が言うところではないらしいが、御主人と出会う以前

の記憶のほとんどを失ってしまっている故によくは分からぬ。
はて、何か大切なことを忘れてしまっているような気がしなくもな
いが、思い出せるわけもなく気にしたところで仕方があるまい。

「あれ？こいつって……」

三つの影の内の一つ、赤い面妖な服を着た妖精が我に気付き声を上
げる。

確か名は………そう、『太陽牛乳』だ。

如何せん、名前が覚えにくくて仕方がない。

皆、妹紅殿のように覚え易ければいいものを。

「あの神主のペットじゃないの」

「そうねえ……こんな所に一匹でどうしたのかしら？」

帽子を被った『月童子』に青い布を頭につけた『星青玉』が『太陽
牛乳』の声に反応し、私の周りに集まってくる。

「逃げ出して来たんじゃない？」

む、失敬な、我が御主人のもとを離れることなどあるはずがないで
あろう。

抗議の意味を込めて首を胴ごとぶんぶんとして左右させる。

「違うんじゃない。首？を振っているし……」

「分からないわ。もしかしたら、神主でなく巫女から逃げて
きたのかもしれないわ。神主は優しいけど、あの巫女は怪我妖精に
も容赦がないから」

確かに霊夢殿は時に鬼と化す。

我も時には逃げ出したくなることもあるというのに、そんな霊夢殿を苦笑しながらも御しきるとは流石は御主人である。

「じゃあ、多分散歩よー!!」

「クオンー!!」

『太陽牛乳』の言葉を肯定するように一鳴きする。

この身だと大きく鳴き声を上げるのも一苦労である。

子狐に変化すれば鳴くのは楽なのだが、空を飛べなくなり、御主人の首に下がったり、袖の中に入れなくなってしまう。

まあ、頭の上も心地よいのだが、やはり首や袖に勝るほどではない。

「ほら、私の正解!」

「正解も何も勝手に間違えて、勝手に正解しただけでしょ……」

『太陽牛乳』と『月童子』が話しているのを眺めているところに一本の腕が伸びてきて我を抱き止める。

避けることもできたが、敵意もないようだったので『星青玉』に我は大人しく抱きしめられている。

丁寧に撫で上げてくれているようだが、御主人の撫で方には遠く及ばない。

あれはもう神の手だ。

何気なく撫でているのはずであるのになんだあれは。

もはや、中毒だ。

次点で亜紀殿と妹紅殿。

その後に霊夢殿や慧音殿だ。

魔理沙殿、あれは駄目である。

「ああーっ、スターずるい私も!」

「私も、興味あるわ」

「あつ、引つ張らないでよ!」

ぐぐっ、ち、千切れる。

かくなる上は、

ポンッ。

我は身体を三つに増やす。

これで争うこともなくなるであろう。

「「「ふ、増えたあー!」」」

む、そんなに驚くようなことなのだろうか?

御主人から訊ねられてできそうだから当たり前のことだとかんがえていたのだが……

閑話休題。

紆余曲折あつて我は三人の妖精の腕の中にある。

我が身体を増やしても意識は一つである。

視界や感覚は複数に増えるのだが、これといって不思議な感じがするわけでもない。

やはり、これは我にとって当然の感覚のようだ。

「この撫で心地最高ね……」

「もう、連れて帰っちゃおう？」

「さんせーい」

反対じゃ。

我はするすると腕から逃げ出して一匹に戻る。

そろそろ夕暮れ、御主人と御主人の料理が我を待っている。

「……あつ」「」

驚き呆けている『太陽牛乳』らを後目に家路を急ぐ。

まあ、今度会うときがあればまた抱きしめられてもよいかもしれない。

ただし、『太陽牛乳』、御主はダメだ。

あれは魔理沙殿に匹敵する。

夕日を背に『博麗神社』を目指す。

おや、御主人が待っていてくれたようだ。

「朔、何処へ行っていたんだ？心配したぞ？」

「クオン……」

申し訳ない。

何か御主人に知らせる術を考えた方が良かったかもしれん。

「まあ、無事に帰ってきてくれればいいさ。今日は朔の好きな味噌田楽だぞ？」

なんと!!

それは一刻も早く行かなくては!!

そうして、我は御主人の首に巻きつきながら首を揺らして御主人の足を急かすのであった。

おわり。

欄外、『とある朔の幻想録』（後書き）

ginggaさんリクエストで朔と三月精のほのぼのな一幕。

というわけで朔のとある一日でした。

実はこんな口調だった朔。

これでも雌です。

次は150踏んだ人をお願いしますようと思います。

いつ辿り着くだろうか……？

次は本編です。

頁三十七、『なよ竹のかぐや姫』

『いまは昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さかきの造となむいひける。』

この国に住まうものなら知らぬ者はいないと言えるほどに有名な冒頭文である。

喩え、この文を知らないとしてもこの文で始まる物語を知らない人間はほとんどいないはずである。

『竹取物語』。

作者、成立年共に不詳のこの国で初めての『作り物語』かつ『伝奇物語』である。

恐らくは平安前期に成立しただろうされており、登場人物の多くが実在した人物をモデルにしていると考えられている。

物語の中で登場する5人の求婚者の誰もが求婚に失敗することには痛烈な社会批判が込められ、帝もの求婚をも拒否するのは地上の価値の否定であり、永遠の世界を憧憬する作者の思想がうかがえるだろうことだ。

人間の限界を示すと同時に永遠の美を思慕する浪漫的な精神を表現している『竹取物語』だが、“作り”そして“伝奇”という位置付けにあることから竹取翁説話や羽衣伝説などのいくつかの民俗説話をふまえて社会風刺を兼ねさせてある物語であった。

つまりはあくまでも伝説であり、実際の史実を曲解したものではないというのが一般的な考えであった。

これはかぐや姫が三ヶ月で成長したことや月から迎えが来たなどという突拍子もない設定があることからもうかがえる。果てにはかぐや姫「天女説もあるくらいで、こういった伝奇的な要素を加えることで社会批判をしたことに対する隠れ蓑とするためのものであると推測されている。

さて、『迷いの竹林』の中にある一軒の屋敷 『永遠亭』へと招かれた流司は一人の女性と対面していた。

今は“姫”のようなお淑やかさを流司に感じさせる黒髪の女性だが、数刻前までは流司の隣で不機嫌そうな顔をしている妹紅と壮絶な殺し合いを繰り広げていた張本人であった。

「改めて挨拶するわ。『蓬萊山輝夜』よ。“外”では“なよ竹のかぐや姫”って方が有名かしら？」

「……………」

流司はその言葉に無言を貫き通す。明らかに輝夜が顔をじっと見続けている。

そんな流司の様子を妹紅は面白くなさそうに睨み続け、輝夜は当然とでも言うように誰もが見惚れてしまいそうな笑顔を浮かべている。そんな中、流司はじつくりと輝夜の顔を見続けた後、初めて口を開いて、

「不細工ですね」

とのたまった。

「はっ？」

「ゲツ……」

流司のこの発言は予想外だったのか、輝夜は間の抜けた顔をし、妹紅に至っては肩をプルプルと震わせて懸命に笑いを堪えているようであった。

「今、なんと仰ったかしら？」

「いや、かの“かぐや姫”と聞いたので、改めてよく拝見して見たところ思っていたよりも“不細工”だと……」

「な、あつ……」

「くつくつく、あつはははは。流司、あんた最高よ!!」

流司の嘘偽りない言葉に輝夜は言葉を失い青筋を浮かべる。

妹紅はそんな輝夜の姿に耐えきれなくなって腹を抱えて笑い出す。

幾人もの男性と話すことがあっただろう、“かぐや姫”も第一声で“不細工”だと言われたことはなかっただろう。

「なんですってええっ!!!!」

輝夜は今までのお淑やかな空気を一転、先程までの殺し合いにも匹敵するような勢いで流司に掴みかかる。

「一体どういことよ!!」

「ど、どういとも、何、も事実を、言っただけでっ」

「それがどういことって聞いているのよ!!」

流司を首元に掴みかかり激しく揺らす輝夜に流司はガクガクと揺れる頭で素直に答える。

それがまた輝夜を煽る結果にない流司の頭の揺れは更に激しくなる。自分の美貌に自信のあつた輝夜としては流司の言葉は聞き捨てのならないものであつたからだ。

「いや、だから、平城や平安の頃にして、はありえないほど、不細工だな、と」

「へっ？」

切れ切れになりながら言つた流司の言葉をもつてようやく輝夜の手の動きが止まる。

「その頃であれば、“おかめの面”に似た顔が好まれる筈なのに貴女は全く違うので……」

輝夜から解放された流司は頭を押さえながら言つ。

美人の定義とは時代によって変わるもので。

“かぐや姫”がいるならばそれは平城後期から平安前期の時代である。

その時代では様々な屏風絵にも描かれているように眉は小さく、頬がふっくらとした“おかめの面”のような顔が美人だとさえていた。実際、『竹取物語』に関して描かれたものでもかぐや姫の姿はそのように描かれている。

しかし、輝夜の顔は今でいう端正な顔立ちであつて、その当時では美人だとされるような顔どころか、それこそ“おかめ”とされる顔

であった。

故に流司は輝夜のことを“かぐや姫にしては”不細工と称したのであった。

「なんだ、そう言つこと……」

「となると、当時から美的感覚はあまり変わっていないのか？だとすれ

ば伝えられている絵画は醜女を描いていたということか？そんなことが……」

安心するように息をつく輝夜を後目に流司はぶつぶつと考察をし続ける。

完全に自分一人の世界に入ってしまったっており周囲の状況になど気付く様子が見られない。

「ねえ、妹紅？」

「なによ？」

輝夜の声に妹紅は再びどことなく不機嫌さを取り戻した声で応える。

「コイツっていつもこうなの？」

「流司？うーん、そうね。慧音と話しているときに偶にこうなるかな？代々神官の家系だつて言つし、こういったことには興味があるみたい」

「そうなの……」

「となれば、今までの前提は全て変わるような……能面などはどう……」

流司の果てない探求による独り言はお茶を持った鈴仙が姿を現すまで永遠に続くのだった。

頁三十七、『なよ竹のかぐや姫』（後書き）

ぶっちやけちやった主人公。

妹紅爆笑。

姫様御乱心ですw

事実は時として残酷です。

あの時代だと今の美人はモテません。

いや、ZUN絵ならいいのか……？

次回、独自解釈入ります。

「では、輝夜様が“なよ竹のかぐや姫”であることは間違いないと……？」

「輝夜でいいし、敬語もいらさないわ。堅苦しいのって嫌いな。間違いないわ、私が“なよ竹のかぐや姫”よ」

輝夜との一悶着を終え、落ち着きを取り戻した流司が改めて尋ねる。今まで物語の人物だと思っていた人間が実在しているのだから疑いも仕方のないことだろう。

「わかった。それで妹紅も輝夜も“蓬萊の薬”とかいう禁薬を飲んで不老不死だと？」

「忌々しいことにね」

本当にそう思っているのか妹紅がイライラしたような口調で流司の問いに答える。

「ふむ……」

流司は顎に手を当ててしばらくの間口を嚙んだ後、言葉を呈した。

「輝夜と妹紅の関係性。それも殺し合うほどの関係が俺には理解できないのたが……」

互いに不老不死であってもそれが殺し合いをするような直接の理由にはなることはないだろうと流司は考えていた。

もしそうだとしたら、輝夜も妹紅もえらく物騒な性格をしているだろう。

「あんだ、話してないの？」

「だって、話すことのほどでもないし……」

流司の言葉に輝夜は意表を突かれたように妹紅に尋ねるが、妹紅はぼそつと答えるだけであった。

「竹取物語……かぐや姫、求婚……難題……」

そんな中、流司は再び思考の海に潜り始める。

「藤原……道長、鎌足……あつ、不比等かつ!!」

ポンつと手を叩くようにして流司は声を上げる。それは一つの推論に至ることができたからであった。

「妹紅つて、あの藤原不比等というか、車持皇子と関係があるのか？」

今でこそ“藤原”という性は“外”では珍しいものではないが、『竹取物語』が実話であると考えた場合、“藤原”という性は特別なものであった。

そもそも、“藤原”の性の起源は『中臣鎌足』がその臨終時に『天智天皇』から賜ったのが始まりである。

そして、その息子である『藤原不比等』が以後平安の時代まで続くことになる藤原氏隆盛の基礎を作ったのであった。

この『藤原不比等』は『竹取物語』に登場する5人の求婚者の一人

『車持皇子』のモデルとされており、『竹取物語』が実話だとすれば『藤原不比等』は『車持皇子』ということになるかもしれないだろう。

「……………その人は私の父親よ」

「まさか、『藤原不比等』に妹紅なんて子供は……………」

「私は隠し子だったからね。それで父様に恥をかかせた輝夜を恨んでいるってわけ。納得いった？」

この話はもう終わりだと言いたげに妹紅は簡潔に話して口を閉じてしまう。

しかし、流司は全く違うことを考えていた。

「えっ、恥も何も『藤原不比等』は望んで求婚を失敗させたのではないのか？」

「「はっ?」「」

流司のこの発言には輝夜も妹紅も驚きの声を上げてしまう。

「そりゃ、自分の父親が首ったけ何だから子供である『藤原不比等』は手を引くしかないだろう。となると、アレは妹紅のこと……………」

「ちよっと、その部分詳しく!」

また思考に潜り込んでしまいそうになる流司に今度は妹紅が掴みかかりガクガクと揺さぶる。

「わかった。わかったから放してくれ」

「あっ、うん……」

再三に渡って乱れた襟元を流司は正す。

因みに首に巻きついていた朔は流司が輝夜に掴みかかれた時に流司の膝の上にへと避難している。

「俺が訊くのもどうかと思うんだが、妹紅は自分の祖父のことを知っているか？」

「鎌足御祖父様のこと？」

「やっぱりか……」

首を傾げながらも答える妹紅に流司はやはりと納得の表情を浮かべる。

「確かに『藤原鎌足』も『藤原不比等』ではあったが正確には違う。『藤原不比等』は『天智天皇』の落胤だ。そう、妹紅と同じ隠し子ってこと」

「「!？」」

『藤原不比等』は表向きには『藤原鎌足』の次子と言うことになっているが、正しくは“養子”であり、『天智天皇』の落胤であった。

「『天智天皇』と『藤原鎌足』は共に『大化改新』を成した間柄だったからな。そこで『藤原不比等』を『藤原鎌足』が引き取ったのだろう。“不比等”という名も領ける話だ」

通常の貴族であれば隠し子の一人や二人どうということはないかもしれないが、“天皇家”となればそうは言ってられない。

跡継ぎの問題が如実に表れてしまうため落胤は看過できる存在ではなかった。

そこで気心の知れているだろう『藤原鎌足』の養子として預けたのだ。

“不平等”などという“並び立つ者がいない”という大層な名前をつけられていたもの“天皇”の子であるとすれば納得のいく話である。

「『帝』といえば『天皇』のことだ。自分の父親、しかも天皇がくぐや姫に首つたけであるのに子供である『藤原不平等』が求婚を成功されるわけにもいかないだろうさ」

「……………」

輝夜、妹紅共に啞然としてしまっている。

自分たちも知り得なかった

ことを遥かに後の時代の人間である流司がすらすらと語ってしまったのだからそれも当然だろう。

それがしつかりと理屈の通っている内容であるのだから尚更である。

「そう言えば、さっき気になることを呟いていたわね。妹紅がどうか……………」

「ああ、それが」

輝夜が思い出したように流司に尋ねると流司はつらつらと説明し始める。

「時の権力者と神社というものは切っても切れない間柄にあった。皆、神の加護を願うからな。当然、“藤原氏”ともそれなりの関係はあった」

権力者は皆、己の存在に箔をつけるためや一族の繁栄を願って神を信仰することは当たり前のことであった。

その当時から神社としての最高位にあった『神代神社』には名だたる権力者が^{こそ}挙って参拝に来ていたのだ。

「そんな中、“藤原氏”から『神代家』に対して養子の申し出があった。当然、当時の『神代家』の当主はそれを断った」

権力者との間に結びつきができることは、純粹な『龍神』への信仰する『神代家』にとってあってはならないことであった。

『龍神』を信仰するものは皆等しく平等なのである。

「しかし、何度も何度も頭を下げ頼み込むものだったから、当主は一つ条件を出した。養子にする場合、“名を捨てさせ一切の“藤原氏”との関係を断たせる”という条件をね。これでは取り入れることもできないから流石に諦めるだろうと当主は考えていた」

名を捨てさせ、完全に関係を断つてしまえば、天皇の親族となったような取り入り方をすることはできなくなる。

『神代家』の養子となった時点で赤の他人となってしまうのだから。

「けれども、それを了承したんだ。驚くべきことにな。まあ、結局養子には誰も来ることはなかったのだけだ」

「それじゃあ……」

「そう、頼み込んだのが『藤原不比等』。妹紅が隠し子だと聞いて筋が通ったけど、妹紅を守るために『神代家』に入れようとしたのなら名を捨てさせるといふ条件に頷いたのも分かる話だ。『藤原不比等』自身が落胤であったから思うところがあつたのだろうからないやあ、人生何が起こるか分からないなあ……」

そう長々とした話を締めくくった流司はお茶を啜って息をつく。

その場には千年越しに知った事実悲哀のこもった表情を浮かべる妹紅とそんな様子をまるで見守るような視線で眺める輝夜の姿があるのだった。

独自解釈というかこの小説での設定になります。

簡単にまとめると小学生、少なくとも中学生の頃習った、“生ゴミの塊”こと“中臣鎌足”が死んだ時に“天智天皇”（大化改新での相棒ってか首謀者の“中大兄皇子”）から賜った氏が“藤原”です。そんでもってこの“藤原氏”が力付けてその最盛期が『このよをば』の歌で有名な“藤原道長”ですね。

さて、“藤原不比等”がどんな人かというと、まあ謎なんですわ。一般的には“中臣鎌足”の次子で“藤原氏”隆盛の基礎を作った人ということですよ。

しかし、実は“天智天皇”の隠し子なんじゃないだとか、果てには“稗田阿礼”その人ではないかとも言われています。

それで『竹取物語』ですが、まあこれは“物語”であって架空のものですね。

ですが、多くの人物にモデルがいる、またはいるとされています。そこで登場するのが“車持皇子”。

物語では“蓬萊の玉の枝”の難題出された人物で、偽物であったとはいえかぐや姫も“やばっ”って思ってしまうほどの出来栄えのものを持ってきました。

職人が乱入しなければ求婚を受け入れなければならなかったくらいです。

このモデルが“藤原不比等”ではないかと言われているます。

理由は“藤原不比等”の縁者の中に“車持氏”という人がいるからとも言われています（確か……）。

注目してもらいたいのが“皇子”という名。

日本でいう“皇子”といえば“天皇の子”であり、仮に“藤原不比

等”がそうだとすると見事なまでに辻褄が合うんですね。

ということ、 “輝夜” 〓 “かぐや姫” が公式設定に加えて、この小説では “藤原不比等” 〓 “車持皇子” 〓 “天智天皇の子” 〓 “妹紅の父親” という設定になっています。

うわっ、全然簡単にまとまってない……

次回もシリアスちっく？

でもなあ……

お楽しみに。

「……………」

「……………」

無言。

それは書いて字のごとく言葉のないところである。

そろそろ、夕暮れの近付いてきそうな迷いの竹林にはただ人二人分の足音が響くだけであった。

「……………」

「……………」

無言。

無言という言葉には『無言の行』といい、言葉を発さない修行という意味もあるが、迷いの竹林に行く影がそれを実践しているわけでは当然ないだろう。

「……………」

「……………」

無言。

その沈黙が重苦しさや気まずさから来ていたのあれば色々と状況を変化させる手立てはあったことだろう。

だが、二つの影、流司と妹紅の間に漂う静寂はそのようなものではなかった。

だからといって、その空間にどこか安らぐような沈黙が広がっているというわけでもない。

ただ単に“無言”たる“無言”があるだけであった。

「（何だか今日は黙ってばかりだな……）」

道案内をするように前を浮かぶ朔のことを眺めながら流司は心の中で呟いた。

その原因、少なくとも現状の沈黙の原因は間違いなく流司にあったので、今の状況を仕方のないことだと流司の呟きの中にはある種の諦めにも似た思いがあった。

この静寂は誰がいけないというわけではなかった。

確かに流司の言動には少し配慮の足りないものがあったかもしれないが、流司がこれからも妹紅と関わり合っていく以上はいつか露呈したことであったはずである。

そう言った意味ではあの場、輝夜に妹紅と当事者が揃っている状態で話をするのができたのは幸いだったと言えるかもしれない。

「……………」

「……………」

無言。

ひたすらにそこには無言の空間が作り出され続けていた。

そんな空気を察してか目覚めているならば、大抵は流司にじゃれついている朔もただただ案内をするように先を進むだけである。

妹紅がこの状態であったので朔が自然と先頭を進み始めたことは朔なりの心遣いだったのだろう。

流司も妹紅も黙り続ける。

一方は何を話しているのかが分からず、話すことを良しとしていなかったため。

一方は何を話せばいいのかが分からず、話すことができなかったからであった。

互いが互いを妙に考えあった結果の沈黙は永遠亭を後にしてから途切れることなく流れ続けているのであった。

やがて斜陽はほぼ水平に流司と妹紅の姿を染め上げていく。

それでもなお流司と妹紅の二人がその足を速めるようなことはなかった。

ゆっくりとゆつたりと小川を流れる木の葉のような足取りで家路を刻み続ける。

故に流司と妹紅が妹紅の住む小屋に辿り着いたのは辺りがすっかり宵闇に包まれた後であった。

「着いたぞ?」

「……うん」

流司が声を発したのは小屋の扉の前に立つてからであった。

長らく開いていなかった口は乾ききっていて、たった四文字の言葉を発するにも大変な労力を必要としているように流司は感じた。

それは妹紅も同じだったのか、流司の言葉に頷くだけにだいぶ時間がかかっているようであった。

「どつするの?」

「どうするもこうするもないさ。最悪、人里まで戻ればいいからな」

妹紅の言葉の意味を悟った流司が答える。

辺りは真っ暗闇に包まれてしまっている。

朔がいるので道案内には困らないが、進む流司は人間であったので月明かりもない闇夜では思うように歩くことはできないだろう。

それに気付いての妹紅の言葉であった。

とは言え、人里にも家がある流司ならば、最悪『博麗神社』に戻らなくても人里に戻るだけのことだ。流司自身そこまでする気にはいなかった。

それはある程度の逃走能力を有していることでの安心感があったからのことかもしれない。

「まあ、あんなことが滅多にあるはずもないだろうし、大丈夫だろ」

流司は自分が命の危険に晒された時のことを思い出して言う。

確かに朔という守護獣にも近い存在がいる以上、以前と同じことになることは限りなく少ないだろう。

流司はそれが失言だったことに気付いてはいなかった。

妹紅と朔が目にした異常ともとれる光景を知らなかったからだ。

よって、流司の言葉を聞いてその光景を思い出した妹紅はゆっくりと口を開き、

「……………泊まっていくな？」

流司の時間が止まったことは言うまでもないだろう。

「……………」

「……………」

「スウ スウ……………」

すぐ傍で寝息を立てる朔のことを流司は無言ながら恨みがましく見つめていた。

昼間あれだけ寝ておきながらこれだけ寝付きがいいと朔はコアラかナマケモノではないかと流司は思ってしまっただけであった。

「（全然、眠れねえ……………」

流司の反応は至極当然のものであるといえるだろう。
考えてもみよう。

Q、普段一人暮らしで人の訪れることのほとんどない妹紅の小屋に人が二人寝ることができる設備があるか？

A、設備は一人分しかない。

となるのは明白なことであろう。
つまりは流司と妹紅は同じ布団で寝るしかないわけであって、どちらが布団を使うかという実にベタなやり取りを経て、一緒に寝るといふドラマの脚本のような展開を迎えたのであった。

「（事實は小説よりも奇なり……少し違つか……）」

他愛もないことが次々と流司の頭の内を過ぎるのは語るまでもなく緊張の為であろう。

流司とて男。

こんな状況に落ち着いていられるはずもない。

むしろ、落ち着いてしまったら、それはそれで不味いことであろう。

『沈黙は金なり』という言葉があるが、今の流司としてはこれ以上ない苦痛かもしれない。

まあ、ある意味では金以上のものであるので、断りきれなかった己の身を呪い、幸福という名の不幸に流司は頭を悩ませるしかない。

「起きてる？」

「っ、ああ……」

突然の妹紅の声に流司は一声置いて返事をした。

「流司の話聞いてね、正直どうしていいか分からなかった」

「……………」

「父様がそう考えていたのだとすれば、私がしてきたことはただの逆恨みだったのだからね」

父親に恥をかかせたことを恨んで輝夜と殺し合いまでしてきた妹紅にしてみれば、流司の話はその大前提を覆すものだったのだろう。父親が望んで求婚を失敗させたのいうのだから、妹紅が輝夜にしてきたことは逆恨みのようなものであった。

「それに父様がそこまで考えていてくれたのに“蓬萊の薬”を飲んで不老不死にまでなつて馬鹿みたいね」

自分と同じ境遇として生まれた妹紅のことは『藤原不比等』としては何としてでも助けるべき存在であつた。

だからこそ、『神代家』に頭を下げ続けて願つたのだらう。

確かに『神代家』であれば下手な貴族に預けるよりも身の安全は保証されている。

喩え、家族としての繋がりがなくなろうとも『藤原不比等』は妹紅の幸せを願つていたということである。

それを無碍にしまつた妹紅にとっては耐えられないものがあつたのだらう。

僅かにだが流司は妹紅の声が震えているように思えた。

勿論、背中越しに聞いているだけなので正しいところは流司には分からないだらう。

「まあ、いいんじゃないか？」

「えっ？」

「時に馬鹿なことをするのも人間の特権だらう？」

流司には妹紅に対して気の利いたことを言える自信がなかつた。

なので、流司は思ったままに

口を開いていた。

「正直に言えば、妹紅がしてきたことは意味がないのかもしれないだらうさ。でも、してきたこと自体には意味があるだらう？」

「……………」

「妹紅の父親がどう思っていたかは別として、輝夜が原因で恥をかいたというのは変わりようがない事実だ。だとすれば、そんな父親の為にしてきたことは別に意味がなかったわけじゃないはずだ」

虚空に思いを浮かべるようにして語る流司の言葉を妹紅は黙って聞いていた。

「それにさ、こういうのも現金というかなんなものだけど、俺は妹紅が“蓬萊の薬”飲んでいてくれて感謝しているだよな」

「……………どうして？」

「だって考えてもみろよ。妹紅が『神代家』の養子となっていれば下手をしたら俺は生まれていなかったからな」

妹紅が『神代家』の養子となった場合、それは妹紅が『神代家』の遍歴に関わる可能性もあるということだ。

それは末裔である流司の存在を間接的に脅かしかねないことでもあった。

「じゃあ、私は流司の命の恩人ね」

「んまあ、そうだな」

妹紅が“蓬萊の薬”を飲んでくれたことに流司が感謝したのはそれだけではなかったが、その理由を流司が実際に口にする事はなかった。

「（俺がこうして妹紅と話せるものって言えるわけないだろ！！）」

「流司？」

「な、なんだ？」

流司が静まりかえってしまっているのを不思議に感じたのか、もそもぞと身体を動かす音と同時に妹紅が流司に話し掛ける。

「うっん、何でもない。ただ呼んだだけだから」

「そう、か……」

表面上は冷静を装っていた流司であったが、内心はバクバクだった。先ほどから流司は妹紅の声を妙な位置に感じていたのだ。それこそ、妹紅の吐息が後ろ髪にかかっているようにさえ、流司は感じていた。

「……………」

「……………」

小屋の中が静まりかえるが、寝息は依然として朔のものしか聞こえることはない。

この沈黙がなんによるものかといえば、確実に気まずさが先行したものであった。

流司は動揺を隠し通そうとひたむきな努力を重ね続ける。

ふと、雫が一滴落ちる。

無論、それは比喩であり、静寂を優しく乱すようなその音の広がり

は流司の心を落ち着けるように染み渡っていくのだった。

「（ありがとう、か……）」

既に流司には妹紅が目覚めている気配を感じることはできなかった。それが本当に寝てしまったのか、狸寝入りをしているのかは流司の預かり知らぬところであったが、微笑みを浮かべ流司は、

「どづいたしまして」

と妹紅の囁きを子守歌に静かに眠りへと落ちていくのだった。

頁三十九、『無言の果てに』（後書き）

afterな一幕

そこには鬼がいた。

無論、それは流司の知っているへべれけなどではない。

「朝が帰りとはいいい度胸しているじゃない……」

「ひっ」

その威圧感はかつて出会った『鬼熊』を遥かに凌駕しており、流司はその身を震わせる他の術を持っていなかった。

「私がどんな思いで待っていたと……」

「霊夢……」

途端に俯き肩を震わせる霊夢の名を流司は呟く。確かに当初は『博麗神社』に戻る予定であったので、力の持たない流司が戻らなければ心配するのも当然であった。ましてや、流司には死ぬわけにはいかない理由がある上に前科もあるのだ。

「……すまな」

「私の晩御飯どうしてくれるのよッ!」

「そっちかよッ!?!?」

まさしく、神速のツッコミであった。

流司が思わず声を上げるのも当たり前というものでもあったが。

「私の空腹の恨み今こそ……」

夢符『二重結界』

「馬鹿、それはッ!?!」

「問答無用!?!」

この後のことは語るまい……

折角、本編綺麗な感じ終わったのに……

これにて第三幕終了。

明日から新幕。

遂に流司の……

ではでは、また明日。

頁四十、『来訪の秋』

その影はまるで何かを求めるときのように蠢き彷徨っていた。月に照らし出された容貌はまさしく化け物たる姿である。

生き物であることは間違いがない。

だが、それが何の生き物であるかということを理解することは不可能だろう。

それは虎の胴をしていた。

それは蜘蛛の脚を生やしていた。

それは般若の顔をしていた。

“妖怪”。

確かにそれは妖怪であった。

妖しく、怪しい存在。

もはや、それはおぞましいとしか言えないほどにまでに奇しいものであった。

それは一步足を踏み出した。

何かを探すように。

それは二歩足を進めた。

何かを求めるときに。

それは三歩足を動かした。

何かを願うように。

時は木々が色とりどりに染まり、実がたわわに実る秋。
中秋が近付いた月に照らされるようにしてその“妖怪”^{バケモノ}は“幻想郷”へと現れた。

秋は食べ物美味しい。

それは幻想郷でも変わることはない。

むしろ、自然がありのままの姿を残している幻想郷ではそれが顕著であるだろう。

「おう、神代の兄ちゃんじゃないか。今日はいい栗が入っているよ。焼いてもよし、炊いてもよしだ。買っていかないかい？」

「栗か……じゃあ今日は栗御飯にするか。一籠くれるか？」

「まいどありー!!」

八百屋の掛け声につられて流司は思わず今日の献立を栗御飯に決めて栗を購入してしまう。

全くもっていいように誘導されてしまった結果であるのだが、そんな日があるのもいいかもしれないと流司は感じていた。

流司が“幻想郷”で暮らし始めてから半年近く、霊力の扱いはようやく空を飛ぶ姿が様になる程度であり、霊力弾などは精々二、三発が限度と妖精にも劣るような成長しか至ってはいなかった。

尤も回避能力に関しては霊夢の弾幕を避け続けるというスパルタ特

訓の成果もあつてかなりのレベルにまで達していた。時々、魔理沙も面白がつて参加して来るものだから避ける流司としては命がけでありたまつたものではなかつた。

そのおかげで今の流司は弾幕は妖精以下、飛ぶのが様になつたといふレベルにも関わらず、避けることだけに關しては達人級の嗅覚を得るようになったといふなんともバランスの悪い力を有しているといふことになつていた。

「はいよ。おまけしておいたよ」

「いつもありがとうな」

流司は八百屋の店主から栗の入つた袋を買つてお礼を言つ。

流司が住み始めて半年もしたことで、流石に人里での騒ぎも収束を迎え、流司も気兼ねなく人里を歩き回ることができるようになつていた。

しかしながら、流司が人里の家に帰るのは週に一、二回程度であつた。理由は言うまでもなく靈夢にあつた。

流司がいることによる楽さに味を占めた靈夢が流司をとある条件を達することができるようになるまで、『博麗神社』での居住を命じたのだ。

その条件とは“スぺルカードルールによる決闘で流司が靈夢を下す”といふことであつた。

『スぺルカードルール』とは“幻想郷”で近年広まり始めた決闘法であり、弾幕の美しさや避け方を競う決闘法である。

これによって“妖怪”と“人間”が平等に闘うことができるようになったのだ。

だが、弾幕どころか弾も現状録に作ることでできない流司には決闘をする資格すらない。

確かに『スペルカード』も持っていないような状況で『博麗神社』の庇護下から離れることは少々危ういことではあったが、『スペルカード』に基づいての決闘であれば幻想郷屈指の実力を持つ霊夢に流司が勝つことなど夢のまた夢である。

要はこれは霊夢が合法的に流司を『博麗神社』に押し留める奇策であつたのだ。

流司もなんとなくそれを察してはいたがどうしようもなかったので、取り合えずは決闘をすることを目指して日々鍛錬に励んでいるのだ。

「おっ、咲夜」

流司は前方を歩く見慣れたメイド服をきた女性に声をかける。

その女性 『十六夜咲夜』は声に振り返り、流司が並び立つのを待つようにして口を開いた。

「久しぶりね。大体、二週間ぶりくらい？」

「そうだな。前回会ったのがシチューの作り方を教わった時だったからそれくらいだな」

牛歩の速さで力をつけている流司であつたが、唯一料理の腕に関しては天狗並みの速さで上達していった。

元々、流司にその手の才能があつたのも理由の一つであるが、大半の理由は霊夢の要求に律儀に応え続けた結果と咲夜から料理を習っ

ている成果であった。

メイドである咲夜の料理の腕は語るまでもなく、主であるレミリアの要望に応える為に和・洋・中を始めあらゆる料理を一人で作る事ができる。

そこで流司はいつからか時々咲夜に料理を習うようになり、格段の上達をみせるようになったのだ。

尤もそれが霊夢の要求を更なるものに行っている原因でもあるのだが、残念なことに流司はそれには気がついていなかったのだ。

「どうやら、相変わらずみたいね。噂は聞いているわ」

「噂ってどんなのだよ……」

「聞きたい？」

「……いや、止めておく」

流司がそう答えると咲夜は賢明ねと納得の色を帯びながらもどこか残念そうな表情を浮かべる。

そんな咲夜の顔を見て流司はますます噂のほどが気になりはしたが、『知らぬが仏』、その精神力を駆使してなんとか衝動に耐えるのであった。

「神代の旦那、今日は珍しい魚が入ってるよ。見ていかないかい？」

「珍しいって……秋刀魚じゃないかっ!？」

魚屋の声に流司は軒先に並べられている魚を見て驚きの声を上げた。

そこに並べられていたのは刀のような形をした細長い魚。
秋の代名詞とも呼べる“秋刀魚”であった。

秋が旬である秋刀魚が魚屋に並べてあることは特別珍しいことではないだろう。

しかし、幻想郷では少々事情が変わってくる。

幻想郷には“海”がない。

よって、海で取れる秋刀魚が並ぶことはありえないことであったのだ。

「へい、今朝方、妖怪の賢者様が仕入れてくださったんですわ」

「なるほどなあ……」

“外”との行き来が自由である妖怪の賢者 『八雲紫』 ならば当然かと流司は頷く。

“海”がない幻想郷では海から取れるものは紫が何処からともなく仕入れてくる。

流司の知らぬところであったが、以前には鯨を丸々一頭仕入れてきたこともあったくらいである。

「で、どうしますかい？」

「二尾くれ。あと、そっちの鰯も四匹ほど頼む」

「了解でっせー!!」

海洋魚が幻想郷の魚屋に並ぶことはあまりないので流司は干物にでもしようと同じように並んでいた鰯の笹も一緒に指差して購入を決

めたのであった。

「ほい、お待ち。山女魚をまけといたんで今度の“祭”頑張ってください
だせ
え」

「あまり期待し過ぎないでくれよ？緊張するから」

流司は苦笑しながら魚の入った包みを受け取って別れを告げ、咲夜のもとへと戻る。

「悪いな、待たせた」

「いえ、それよりも“祭”って？」

咲夜は聞こえてきた魚屋の店主の言葉に疑問を持ったようで流司に尋ねる。

「ああ、今週末に行く収穫祭だ。まあ、神代では『神座参かみま』って呼んでるけどな」

そう前おいて流司は咲夜に説明を始めるのであった。

頁四十、『来訪の秋』（後書き）

第四幕の開始です。

季節は移り秋となります。

基本的にシリアスな感じかと……

なので、IFな感じの奴はなかなか書きにくいですね。

閃いたら書きますけど……

取りあえず、主人公が『博麗神社』を脱する日はくるのでしょうか

……？

書いたのは私ですけどねえ（笑）

頁四十一、『神座参』

『神楽』。

その語源は『神座』。

その字が示す通り“神の座す場所”を意味している。

神楽の起源は天鈿女命の天の岩戸前での舞としている考え方が一般的である。

よってそこから『神楽』には神を鎮めたり降ろしたりする意味があるという考えに発展していったのだ。

『神楽』には様々はバリエーションが存在しているが、こと『神代』に伝えられている神楽は少々特殊であった。

神に対して舞を捧げるということに関しては一般的なものとは変わらないだろう。

ただし、『神代』の神楽はその考え方から“神を降ろす”ではなく“神のもとへ参る”のである。

よって、『神座参』と伝わっているのである。

そしてもう一つが……

「ぶっ……ふふふふ……」

「笑うなよ、アリス。俺も似合わないのは分かっているんだから」

流司は目の前で懸命に笑いを堪えているアリスに言う。

「いえ、あまりにも似合っているからおかしいのよ。くっ……」

流司は人里で咲夜と別れた後、そのままアリスのもとを訪れていた。

『神座参』で必要となるとあるものの作成を流司が依頼していたからであった。

「似合うって言われても正直嬉しくないんだが……」

それもそうだろう。“巫女服”が似合うと言われ喜ぶことのできる男性がいるとすれば、それは特殊な趣味をもった人間だけである。無論、流司にはそのような趣味などありはしなかった。

では何故、流司が“巫女服”などを来ているかということそれは『神座参』を舞う際に“男”と“女”の四度舞う必要があるからであった。

『神座参』とは同時に『風間』も意味している。

『風間』とは“風が止んでいる時”という意味であり、逆に“風が吹いている時”という意味もある矛盾した言葉である。

それに肖っているのかは定かではないが、風の止む、“朝風”と“夕風”の時間帯に“巫”として舞い、昼と夜に“颯”として舞う習わしであるのだ。

『神座参』を舞うのは『神代家』の代々の当主か次期当主の“一人”と決められている。

その為、当代が“男”であれば女装を、“女”であれば男装をしなければいけないのであった。

よって、流司はその衣装合わせとして“巫”に扮しているのであった。

「シャンハイ……」

「ホウライ……」

「オーエド……」

「お前らその気遣いが染みるよ……」

ぼんぼんと流司を慰めるように三体の人形が

流司の頭を撫でる。

可愛らしい人形に慰められる巫女服を着て女装をした青年。

ある意味で絵にはなっているが、あらゆる意味で見るに耐えられない光景であった。

流司の顔が中性的であったり、女っぽければまだなんとかはなっていただろう。

しかし、流司はどちらかと言えば男っぽい（男であるのだから当然ではある）。

儀式の本番の時は歌舞伎の女形のように化粧をすることもあり、実際には問題ないと言えるのだが、今は衣装合わせであったので化粧などしていかない。

よって、ただの青年が巫女服を着ているという女装とも呼びがたい状況となっていた。

「ん、まあ、似合っているって言葉に嘘はないわ。確かにその顔はいただけないけど、雰囲気はその割にははまっているのよ」

「そりゃ、着るのは一度や二度のことではないしな。何というか慣れる」

アリスが言うように見た目はどうしようもないものであった。

けれども、流司が感じさせる雰囲気は郷に入ったようなまとまりを

見せているのである。

その理由の一つには流司が全く恥ずかしがる素振りを見せていないことにあるだろう。

『神座参』の舞は一朝一夕にできるようになるようなものではない。それ故に流司は幼少の頃から何度となく巫女服をまとい人前にすることもあった。

慣れることなどは当然のことであり、歴とした神事であるのでそこには一切の躊躇いなどあるはずがないのだ。

「それで寸法は大丈夫かしら？少し余裕があるように作ってはいるのだけど……」

「ああ、大丈夫だ。手も十分に隠れているからな」

流司が『神代』として幻想郷に住まう限りは『神座参』は欠かすことのできない神事であった。

しかし、『神座参』は『神代神社』での神事であったので、衣装や祭具もその全てが『神代神社』に保管されている。そこで流司はアリスに衣装の作成を依頼したのだ。

流司は袖の中に手の甲を隠しその場でゆっくりと衣装の具合を確認するようにして一回転する。

その姿は実に様にはなっているが、再三に渡って述べているように流司は“男”である。

「そう。ならば、あとは微調整を加えて明日には仕上げてしまおう」

「そうか。悪いな」

流司は仕切りの中に身を隠していつもの着流しに着替えていく。
『神座参』が執り行われるのは一週間後であったので十分にアリスの仕事は間に合っているだろう。

「それでこの後はまた人里に戻るのだっけ？」

着替え終えた流司からアリスは巫女服を受け取り尋ねる。

「そうだな、『稗田』様のところへ。さっきは都合が合わなかったから、午後に伺う約束になっているからな」

「貴方も色々大変ね」

「それが俺の役目だから、これくらいの苦労は喜んで下さ。それじゃあ、頼んだよ」

流司は上海や蓬莱、大江戸とじゃれあっていた朔を連れてアリスの家の外へと出る。

「分かったわ。明日中に『博麗神社』の方に届けに行くから」

アリスの返答に流司に頷くと地を蹴り空へと飛び出していくのであった。

「これって……」

流司を見送り家の中へ戻ったアリスがテーブルの上に置かれたあるものを見つける。

それは流司が忘れていった栗や秋刀魚の入った買い物袋であった。

「今から追いかけてもいいのだけど、どうせならさっさと微調整を済ませてしまつて『博麗神社』の方へ一緒に届けてしまつた方がいいわね」

そう言つとアリスは裁縫道具を取り出して作業にとりかかる。

この時はまだ誰もこの忘れ物が流司の命運を大きく左右することになるとは本人を含めて思つてもいなかったものであった。

頁四十一、『神座参』（後書き）

男の娘なんて幻想だ！！
つてだつたらいるじゃん！！

ウチの主人公は女顔ではありません。

まあ、儀式的な女装なので許してください。

例大祭行くか悩んでいます。

先行販売される橙のフィギュアが作者好みのいいできました。
でも、金がないんだよなあ〜

「それでは引き受けて頂けると？」

「はい。近々、編纂を始める予定の『幻想郷縁起』の参考にもなり
そうなので私としても是非」

「ありがとうございます」

笑顔で流司の依頼を了解した阿求に流司は深々と頭を下げた。

『神楽』の起源はアメノウズメ命の舞である。

『神座参』も『神楽』の派生の一つという見方ができる以上はその
点は変わることではなかった。

話は変わるが、“外”の『神代家』と『稗田家』には只ならぬ縁が
ある。

『神代家』に『稗田家』が関わるのはそのほとんどが神事の際の来
賓に近いものであったが、唯一『稗田家』の存在がないと執り行う
ことのできない神事があった。

それが『神座参』であった。

『神楽』の起源がアメノウズメ命の舞であることから、『神座参』
ではアメノウズメ命の“猿女君”である『稗田家』を神事に招き一
つの役割を依頼していた。

それが『逆舞』と呼ばれる『神代』の人間がする舞と対をなす舞で
あった。

『逆舞』は全部で四部に分かれている『神座参』の中で夜の部でし

か執り行わない『神座参』の中でも特に特殊である舞である。

夜にしか執り行わないのには幾つかの理由があるが、取り分けて大きな理由は二つある。

一つは夜が『神代』が“男”を演じる部であるからである。

“猿女君”とは“女”という字が含まれていることから分かるように女性が代々務めるものであった。

それ故に“対”をなすために『神代』が“男”を演じる昼、もしくは夜が好ましいものであったのだ。

そしてもう一つがアメノウズメ命の舞は“天照大神”を天岩戸から出させる為のものであったからだ。

よって、太陽の上がつている“昼”ではなく、沈んでしまっている“夜”にのみ行うのである。

以上のことから『神座参』にのつての『稗田家』はなくてはならない存在であるのだ。

しかし、“幻想郷”に“外”から『稗田家』の当主を呼ぶわけにもいかない。

そこで流司は“幻想郷”の『稗田家』の人間である阿求に『逆舞』の依頼をしたのであった。

「とは言いますが、私にそれほどの大役が果たせれば良いのですが……」

頭を下げる流司に阿求は不安げに声を上げる。

引き受けたはいいものの不安が残ってしまうのは致し方がないことであった。

そんな、阿求を流司は安心させるように微笑みを浮かべ口を開いた。

「『逆舞』自体はそこまで難しいものではありませんから、心配なさらなくても大丈夫ですよ。それこそ、半日もあれば十分ですので」

「そうなのですか？」

阿求は流司の言葉を意外に思い首を傾げる。

『神座参』に関しては阿求も十分過ぎるほどに説明されていたので、当然『逆舞』も荘厳なものを阿求は考えていたのだ。

「はい。問題は互いにつられないことですね。『逆舞』は私とは全ての動作を逆に逆さから舞うことになりますから」

流司が舞う本式の舞と『逆舞』は何から何まで逆になっている。本式が右手を上げる動きならば、『逆舞』は右手を下げる動きに変わり、更には舞の順序も逆さとなるのだ。

独特の動きはあるものの、基本的に単調かつ緩やかで素人であっても数日で様になるようなものであった。しかし、動き自体は本式と変わらないため対峙して舞をした場合どうしてもつられがちになってまうのである。

「では、早速？」

「そうですね。明日からにでも」

阿求の言葉に流司は頷く。

時間的には十分に足りていたが、早いことに越したとことなかった。流司は明日からの練習の開始を提案する。

「分かりました。明日のこの時間からよろしくでしょうか？」

「はい、ではよろしくお願いします」

「さて、用事も済んだことだし戻るとするかな？」

まだ夕暮れには少しばかり早い空に向かって流司は伸びを一つする。流司が空を飛べるようになってからというものの移動に必要となる時間が格段に減ることになり、時間に余裕をもって行動ができるように流司はなっていた。

「それにしてもいい秋空だな、朔」

「クオン！」

相も変わらず首に巻き付いている朔に流司は声をかける。

夏の間は地獄のような鬱陶しさを流司に感じさせていた朔であったが、人間はやはり現金なものでそろそろ肌寒くなる季節とあって流司は朔の存在にありがたみを感じるようになっていた。

「それは私も同感だが、そう道の真ん中で立っていられると少々邪魔だぞ？」

「確かに邪魔かもね。まあ、らしいといえはらしいんだけど」

「随分だな……おっと、少しは自制しような、朔」

「ギョツ!？」

背後から聞こえていた声に流司は酷い言い草だと答えながら、その声の主に飛びつこうとした朔を掴み押さえる。

流司の手の中でじたばたとする朔はまるで鰻のようであった。

「息災で何よりだ。しばらくはこちらにも戻っていないようだったからな。少し心配していたぞ？」

「そうだな、人里には買い出しに来ていたけど、家には最近戻っていないかったな」

腰に手を当てながら口を開いた女性 『上白沢慧音』に流司は宙を見上げるように考え答えた。

基本的に週に一、二日は人里の家に戻っていた流司であったが、最近は『神座参』を『博麗神社』で行うことになっていたためにほとんど戻ってくることはなかったのだ。

「どうせ、“巫女”にこき使われているんでしょ？それこそ、雑巾みたいに」

「雑巾って……言えて妙なだけに何ともなあ……」

朔の動きに身構えていた妹紅が朔がしゅんとしながらも流司の首に落ち着いたのを確認して口を開いた。

先程にもまして酷い言いようではあったが、事実が事実であっただけに流司は何も言うことができないでいた。

「大体、流司はあの巫女に甘過ぎるのよ。確かに言うことに一理あ

るのも事実だけど、空をある程度飛べるようになって、傍には朔がいるんだから……」

「……どうしたんだ、急に妹紅は？」

突然、マシンガンのような勢いで愚痴を紡ぎ出す。

そんな様子に少し押されたように流司はその隣でまたかと言ったような表情を浮かべている慧音に訊ねる。

「……気にするな、いや、少しは気にしてくれた方がいいのか？」

「全く話が見えないんだが……」

「まあ、忙しいのは分かるが、偶にはこっちに戻るようにしてくれ。妹紅やつも話し相手が私だけでは退屈だろうからな」

「そういうことか……」

流司が納得の呟きをしたことに慧音はこっそりと溜め息をついたのだが、それに流司が気付くようなことはない。

「それで今日は今から買い物なのか？」

未だに愚痴を言い続けている妹紅を慧音は無視して流司に問う。

「いや、買い物は午前のうちですませて……しまったー!!」

「どうした？」

「ちょっと、買い出したものを忘れてきたみたいだ。今から取りに行ってくるから、今日は悪いけどここで」

そう言うなり流司は慧音の返答を待たずに地面を蹴って空を飛んでいく。

「あつ、つて行ってしまったか……」

「……だから、あれ流司は？」

「なんでも、忘れ物を取りに行ったようだ。伝えることもあったのだが……」

妹紅の声に慧音が困ったように声を上げる。

「伝えるって今度の祭関連で？」

「いや、何でも見慣れない妖怪の目撃情報があったんだ。一応は注意をしても
らおうと思っとな」

「咲夜、ちよつといい？」

「はい、なんでしょうか？」

紅魔館に戻った咲夜を出迎えたのは主であるレミリアであった。咲夜は手に持っていた荷物を消すとレミリアの傍へと寄る。

「しばらく前に私が面白い運命がとか言ったことがあったでしょう？」

「はい。伺いましたが……？」

「その時に会った人間のことを覚えているかしら？」

「流司のことですか？覚えていますが……」

あの日以来、レミリアは一度も咲夜に流司のことどころか、名前すら聞いていなかったのので、突然そのようなことを尋ねてきたレミリアに咲夜は若干の困惑した顔をする。

「そう、流司と言うの……ああ、やっぱり……」

咲夜から名を聞いたレミリアは少し思索した後、得心のいったというような表情になる。

「それでそれがどういった……」

「ああそうね、彼、流司だけ……」

理解ができずに尋ねようとした咲夜を顔を見てレミリアは思い出したように口を開いた。

淡々とそれが一つの決まってしまった事実のように、

「このままだと死ぬわよ」

頁四十二、『忍び寄る』（後書き）

ということでは不穏な進展を。

お嬢様使い勝手いいなあ（笑）

あっ、もう一つも進展がありましたね。

まあ、ひとまずはスルー。

なんだか、一昔前今回のレミリアのような決め台詞があった占い師
がいたような……

「暇ねえ……」

空高く上がる鰯雲を見つめて『博麗霊夢』は一人呟いた。

傍には急須に湯のみ、饅頭と完全にリラックスモードであった。

ぽつりと呟きを漏らしてはお茶を啜り、お茶を啜っては饅頭を一口口に運ぶ。

そして、お茶を注いで空を眺める。

その繰り返しであった。

ほのぼのとしているといえば聞こえはいいかもしれないが、結局のところは怠惰の限りを尽くしているようにしか今の霊夢の姿は見えないかもしれない。

「今日の晩御飯は何かしら……」

霊夢が新たに思索し始めるのは数時間後には己の腹の中に収まるだらう晩御飯の献立。

自分で料理をしないだけで食事が出てくるだけでも十分であるのに、流司の料理は回を増すごとに上達し美味しいものとなっていた。

これでは霊夢が流司を『博麗神社』から手放さないのも頷けてしまふという話だらう。

一応の“当主”であるはずなのに“従者”としての技術が上達している流司にはどう声をかけていいものか分からないという話でもあるが。

「そんなに暇なら掃除の一つでもしたらいいと思っぜ」

「今は秋よ？するそばから落ち葉が積もるのだからする必要はないわよ」

霊夢と同じようにお茶を啜りながらいう『霧雨魔理沙』の言葉に霊夢は素っ気なく答える。

当然のように霊夢と魔理沙は並んでお茶を飲んではいるが、時たまお湯を足しているとはいえ元々は急須も湯のみもお茶菓子も流司が用意したものである。

つまりは流司が昼前に『博麗神社』を出てから、これまた流司が作っておいた昼食を食べるとき以外はこうしてまったりとした時間を霊夢と魔理沙は過ごしていたのだ。

「だとしても、だらけすぎたぜ」

「あんたに言われたくはないわよ」

どちらにもそのような言葉を言う権利がないことは言うまでもない。

「それにしても、晩御飯の献立は気になるなあ……」

「何よ、また食べていくつまりなの？魔理沙が食べていく食事だつてただではないのよ？」

霊夢の言葉は最もであるのだが、それを言う資格も霊夢にはない。

現状の『博麗神社』の財源は流司八割、霊夢二割である。

基本的なものは流司に対するお裾分けがほとんどで、相変わらず『博麗神社』への賽銭は皆無であった。

因みに人里の流司の家には賽銭箱などありもしないが、郵便受けが同じ働きをしている。

実際に御利益があるかは分かったものではないが、人里の人間からしてみれば

『博麗神社』よりは御利益があると判断したのだろう。

事実、流司はその見返りとして『神代』として以外にも人里の住人の相談にのっていたりもしているので人里の住人の選択は決して間違ったものではない。

「早く帰ってこないかしらね……」

無論、霊夢の心情としては流司と晩御飯の割合が半々もあればいいだろう。

「今日の晩御飯は栗を使った料理、栗御飯辺りが妥当だと思うわよ」

「おっ、アリスもご相伴に預かりにきたのか？」

袋を片手に抱えながら降り立ったアリスに魔理沙が声をかける。

「貴女と一緒にしないでくれるかしら？」

「何言っているのよ。あんただって時々流司に差し入れをもらっているじゃない」

「うっ、あれは……」

心外だというように呟いたアリスに霊夢はすかさず言い返す。

アリスとて霊夢に言われたくなどはないだろうが、霊夢が言っていることも正しすぎるほどに正しかったので言い返すことはできずに言葉を詰まらせる。

「なんだ、アリスも同じ穴の貉だぜ」

「う、五月蠅いわね！今日はただ忘れ物と届け物をしにきただけよ！」

そう言っただけアリスは手にしていた袋を二つ霊夢たちの座る横に置く。

「これは？」

「流司から頼まれていたものと忘れ物よ」

「そう言えば、栗がどうか言っていたわね」

食材の詰まった袋の中身を霊夢は確認しながら呟いた。

「この様子だとまだ帰ってはきていないようね」

アリスはきよるきよると周囲を見渡して流司が帰ってきていないことを確認しながら呟いた。

「それは困ったわね」

すたつという音と共に新たな人影が霊夢たちの前に降り立つ。

「今日は千客万来ね。言っておくけどお茶なんてださないわよ、咲夜？」

「結構よ。それにいつもお茶を出すのは霊夢じゃなくて流司なの」

最初からあてになどしてはいないのか、霊夢の不機嫌そうな声にも

咲夜は意も返さずに答える。

「それであんたも流司に用事っていつわけ？ご覧の通りまだ帰ってきてはいないわよ？」

「分かっているわよ。だから、困ったと言ったんじゃない？」

咲夜は頬に手を当ててあからさまに困ったという表情を浮かべる。その姿は本当に困っているようには見えないはずであるのにその瞳はどこまでも真剣な色を見せているのであった。

「何？厄介事？」

「厄介と言えば厄介ね」

「じれったいわね。さっさといいなさいよ」

咲夜の歯切れの悪い言い方に霊夢は苛々しながら声を上げる。

「そつ？なら言っけど、どうもこのままだと流司は死ぬらしいのよ」

「「「は？」「「「

咲夜の予想を遥かに超えた言葉にこの場にいる咲夜以外の人は揃って間の抜けたような声を上げる。

「だから、お嬢様が言っていたのだけど、流司の“運命”が途中から感じられないらしいのよ。まるで予期せぬことで死んでしまうみたいらしいわ」

「「「……………」「「「

咲夜があまりにも淡々と話すために霊夢はおるか、魔理沙にアリスまでもが黙り込んでしまう。

それぞれが咲夜の主たるレミリアの能力について知っていたのでその言葉が冗談では済まされないものだとして理解していたからだ。

「探すわよ」

霊夢が表情を引き締め立ち上がる。

その顔は既に“博麗の巫女”としてのものであった。

「でも、探すと言っても何処を探すんだ？確かに流司の行動範囲は限られているけど……」

「人里だと思っわ。私の所に来た後に『稗田』の家に行くと言っていたから」

魔理沙の疑問にアリスが答えると皆無言のままに空へと身を躍らせる。

空はまだ青い。

しかし、その青さが妙にたまらない不気味さを皆の胸に感じさせているのだった。

頁四十三、『予期と予感と』（後書き）

すれ違いと。

さて、流司の運命は？

今号のコンプエースでやろうとしたネタが出されてショックを隠せません……

付録に誘われて買ったなら……

読んでも人がどれだけいるか知りませんが、『雀百まで踊り忘れず』の“踊り”とは雀が地面を移動するとき跳ねるようになっていることを指します。

実際の踊りではないんですよねえ……

深々と舞う孢子の中を流司は歩いていった。

辺りは静まり返り妖怪どころか生物の気配すらない。

それもそのはずであった。

宙を舞う孢子を吸い込んでしまえばその毒によってただではすまされないからだ。

無論、それは流司とて除かれることではない。

流司が無事であるのはあらかじめアリスから孢子の毒を無効化する解毒薬をもらい服用しているからであった。

この解毒薬であるが、朔には必要のない。

ある程度の妖怪であれば孢子の毒に影響されてしまうのだが、朔は全く影響されることがない。

尤もそれが朔の固有の力の為か、朔が孢子の毒の影響を受けないほどに力を有しているかは定かではなかった。

「やけに静かだな……」

流司は魔法の森の様子を確かめながら進み呟いた。

空を飛べるはずの流司が今は歩いているのは単なる疲労からの理由である。

霊夢から、“本当に飛ぶことに慣れてしまえば疲労を感じることはほとんどなくなる”と流司は聞いていたが、まだ流司は僅かな飛行であつても疲れを感じてしまつていたので、魔法の森のように妖怪の現れないような場所では基本的に徒歩で移動していたのだ。

魔法の森が静かであることはいつものことではあつたが、流司はそれ以上に妙な静けさを感じていた。

アリスの家を訪ねることがあり、午前中にも魔法の森に来ていた流司には漂う静寂の些細な違いにも気付くことができていたのだ。

静かであった。

あまりにも静か過ぎる。まるで“何か”に怯えて生きとし生けるものがこの一体から逃げ出してしまったような静けさであった。

そんな静寂に不気味さを感じた流司は心なしか駆け足でアリスの家を目指す。

「アリス、いるか？」

アリスの家まで辿り着いた流司はノックをしてアリスの反応を待つが、一向に反応があるような気配を感じることはできずにいた。

「留守、なのか？」

窓から様子を窺おうにもカーテンが閉められ流司は様子を窺うことはできずにいた。

逆に言えばこのようなカーテンが閉められているということはアリスの不在を示しているということなのだろうと判断した流司はその場でしばし悩み始める。

「弱ったなあ……」

流司は途方に暮れてしまったような声を上げる。

すぐに現状で『博麗神社』にあるもので作ることでできる料理を思い浮かべるが、どれもこれも碌なものではなかった。

これでは霊夢に何を言われるか分からないと流司は頭を

抱えてその場にしゃがみ込もうとするが、それは思わぬ唸り声によって阻まれることになる。

「グルルウウ」

「朔？」

己の首から離れてアリスの家の奥に広がる森を睨みつけて唸る朔をいぶかしむように流司は声を漏らす。

朔が睨みつけている方向に視線を流司はゆっくりと向けていく。

そこには“何か”がいた。

その全貌は木々の影によつて流司が知るには至らなかったが、そこには確かに“何か”がいる。

自然と流司の表情も強ばつていく。

生物が近寄ることがほとんどできない魔法の森で“何か”と遭遇したということはそれだけその“何か”が力を持っているということであるからだ。

流司にはうつすらと確認することのできる影からその“何か”が少なくとも“人”の形をしていないということが理解できていた。

そして、“何か”は流司の前にその姿を全て現した。

「おいおい、冗談は止めてくれって……」

「グルルウウ！！」

流司はその姿を目にした瞬間、“それ”が何であるのか理解した。

それも流司が“妖怪”に関して調べる前から知っていたほどに有名な妖怪であった。

その体長は優に流司の三、四倍はあるだろう。あの『鬼熊』でも流司の二倍ほどの大きさであったことからそれが破格の大きさであることが分かるというものだ。

胴体は虎のようでもあるがそこにある顔は鬼、否、般若のみたいであった。

そして何より胴から伸びる細長い複数の脚。

それは獣のものではなく虫。

そう、蜘蛛のものであった。

「『土蜘蛛』ッ！！」

流司は額から汗を流しながらも『土蜘蛛』を睨みつける。

『土蜘蛛』といえば、かの『酒吞童子』を討伐したという『源頼光』が退治したという伝承が有名であろう。

その糸は容易く人を縛り付け、その腹からは千を超える遺骨が見つかったという。

確実に『鬼熊』よりも格上の妖怪であった。

流司も過去に『鬼熊』と出会ったときよりかは成長をしている。

空を飛んでしまえばいくら『土蜘蛛』とはいえども流司に襲いかかるのは難しいはずである。

しかし、流司は一つの懸念から空に飛び上がることができずにいた。

それは言うまでもなく『土蜘蛛』の“糸”の存在であった。

本来、蜘蛛の出す糸というものは獲物に対して飛ばすような使用法は大抵の蜘蛛がすることはできない。

糸を張り巡らせることで巣を作り、獲物が引っかかるのをただ待ち続けるのだ。

だが、『土蜘蛛』は“妖怪”。

蜘蛛に対しての常識を考えてはいけないと流司は思っていた。

「朔、俺を守りながらあいつを倒すことができるか？」

現状として朔に縋ることしか方法のなかった流司は、『土蜘蛛』を威嚇し続けている朔に声をかける。

朔は流司の言葉に少し考えるように唸り声を止めると、

「クウーン……」

申し訳なさそうな表情を浮かべて首を横に振った。

「だよな……」

そんな朔の答えを流司は予想がついていたように頷く。

どちらかといえば力のある朔とて所詮は“管狐の割には”というものである。

魔法の森にいながら何の影響も受けていない様子の『土蜘蛛』を流司を守りながら相手にするのは難しいというものであった。

流司もそのことは予想ができていたので朔の返事にも落胆の色は見せていなかった。

「そう、落ち込まなくていいさ。なら、すべきことはただ一つ……」

流司は『土蜘蛛』に睨みをきかせながら間合いを推し量るように身体力を抜いていく。

そして、『土蜘蛛』の注意がそれた刹那を狙い。

「逃げるぞ!!!」

「クオンー!!」

『土蜘蛛』とは真反対の方向へ駆け出すのだった。

頁四十四、『土蜘蛛』（後書き）

つうことで命が危ない主人公。

作者のヤバイ……

活動報告に書けたらかきます。

頁四十五、『反旗疾走』

「なあ、朔。俺はさ、逃げることに關していえばだいぶ成長したとおもっているんだ」

「クオン？」

流司は顔のすぐ傍に浮かぶ朔に声をかける。

朔はいきなりなんだというように首を傾げながら返事をする。

実際、流司は逃げる又は避けることに關していえばかなりの実力を持っていると言える。

霊夢の放つ弾幕ときにはスペルカードをも避けてきただけあり、飛行能力が覚束ない部分とはいえ“避ける”という一点に限れば流司の実力は“幻想郷”であつても上から数えた方が良いと思えるほどであつた。

「なのにな……」

流司は自らの置かれた状況を確認するように周囲を見渡しながら呟いた。

「あつという間に追い詰められている体たらくは……どう思うよ？」

「クウ……」

流司の言葉に反応を示す朔の表情も流司は心なしか困惑しているように思えた。

現在、流司が置かれている状況は流司にとって極めて危ういと言えるだろう。

前方は虫である“蜘蛛”とは比べものにならないほどの頑丈な『土蜘蛛』の糸に遮られ、後方には『土蜘蛛』の姿がある。頼みの綱の上空も前方同様、木々に張られた『土蜘蛛』の糸によって覆われてしまっていた。

まさに絶対絶命。

糸で隔離された流司のいる空間は一種の闘技場「コロシアム」のようであった。

勿論、相対するのは流司と『土蜘蛛』。

圧倒的なまでの戦力差であった。

流司は“袋の鼠”。

“窮鼠猫を噛む”という言葉があるが、流司ネズミごときの抵抗かみつきでは『土蜘蛛（猫）』が怯むことはないとは目に見えたことであった。

「さて、どうしたものか……」

そう考えることのできる流司は極めて稀有存在であるだろう。

流司が『鬼熊』に襲われた時もそうであったが、命の危険に晒されているというのにも関わらず異常なまでに流司は冷静であった。

それが流司の利点であるというのならばそうであるのだろうが、大抵の人間であれば恐れおののき思考することすらできはしないだろう。

しかし、流司には“それ”ができていた。

だからといって、流司は『土蜘蛛』に恐怖をしていないというわけではない。

当然のように利点は“死”が迫っているという事実恐怖をしていない。

でありながら、極めて冷静沈着。

まるでそれは“動揺”しながらも“冷静”であるという一見してみれば矛盾しているとしか言いようのないことであるだろう。

「拙いな何も思いつかない

……」

状況を考える限りでは流司に残された手立ては『土蜘蛛』と戦うことだけたなのだが、真正面からぶつかって戦えるような相手ではないだろう。

「朔、お前はあいつのことを攪乱させてくれるか？」

「クオンー!!」

流司の言葉に任せるとでもいうように鳴き声を上げると朔は『土蜘蛛』の前に躍り出てその小さな身体を生かして『土蜘蛛』の注意を引いていく。

その姿を確認した流司は意識を集中させて霊力を集めて手のひら大の光球を作り出す。

試しに行く手を阻んでいる糸にぶつけてみると光球は糸を貫通する。しかし、周囲の糸が重なり合いすぐに空いた穴を塞いでしまう。

「やっぱり無理か……」

流司は自分がこれを突破することは不可能だろうと判断して、『土蜘蛛』の様子を伺いながら再び霊力を集め始める。

現状で流司が維持することのできる霊力弾の数は手のひら大のもの二つが限界であった。

これでは流司が通ることのできるほどの穴を糸に開けることはでき

ない。

どう考えても流司に残された術は『土蜘蛛』と戦うことだけであった。

「これがどこまで通用するか……」

今持てる最大限の精度で流司が作り上げた霊力弾であったが、それが『土蜘蛛』相手にどこまで通用するのは流司には検討がつかなかった。

恐らくは普通に当てたのでは意味をなさない。

それは流司も薄々感づいていることではあった。

「となると“口”か……」

喩え、威力をそこまで見込めない霊力弾であっても“体内”に打ち込まれてしまえばかなりのダメージを与えることができるだろうと流司は考えた。

しかし、その為には口を狙うしかなく、流司は今たっている場所から狙い撃つことができるほど器用に霊力弾を操作できるほどではない。

「その為には近付かなければいけない、と」

よって流司が『土蜘蛛』に確実な一撃を与えるには懐まで潜り込んで霊力弾を放つしかなかった。

余りにも分の悪い賭である。

朔が攪乱しているとはいっても流司が近付いてしまえば『土蜘蛛』は流司へと攻撃の対象を変更するだろうことは確実であったからだ。

「まあ、やらないよりはやって死んだ方がマシってな」

右手の上に浮かぶ霊力弾の光球を維持しながら流司は『土蜘蛛』と朔の動きを伺い飛び出すタイミングを推し量る。

「逝くぜ？デカブツ」

『土蜘蛛』の顔が完全に朔へと向かい流司から逸れた瞬間を狙い流司は『土蜘蛛』へと目指して駆け出す。

『土蜘蛛』は虚を突かれた形のなり流司の行動に反応を示すのが遅れてしまうが、すぐさま長い脚を器用に操り流司を襲う。しかし、

「なもん喰らうかつ！！こちとら、霊夢の弾幕を避けているんだよッ！！」

振り上げられた脚の角度から着地点を一瞬にして判断した流司は最低限の動きで脚の届かない位置まで移動する。

流司の駆ける速度は決して速いものではないが、空を飛ぶ応用で地面を思いつき蹴り加速を得て、『土蜘蛛』の一撃をかわす。

「ツウツ！！！！！？」

回避行動から再び『土蜘蛛』への接近へと行動を変えた流司が声にならない悲鳴を上げる。

加速からの急激な切り返しに身体に強烈な負担がかかり流司の骨が軋みを上げたのだ。

刹那、流司は動きを止めるもののその身体はすぐに動き始める。

だが、流司の動きにすぐさま対応したのは『土蜘蛛』も同じであっ

た。

流司の一瞬の硬直が解かれる瞬間を狙い流司を一筋の線が襲う。

「チツ！！」

流司は左腕にまとわりついた糸を見て舌打ちをするが、そのような暇はなかった。

ようやくもって流司のことを捕らえた『土蜘蛛』は言葉では表せないような雄叫びを上げ、力任せに糸を引っ張る。

『土蜘蛛』の強力な力を前に流司の身体は釣り針にかかった魚のように軽々と『土蜘蛛』へと手繰り寄せられてしまう。

「や、ヤバい！！」

宙を浮かびほとんど自由の利かない身体に流司は焦りの表情を浮かべるが、『土蜘蛛』の力と拮抗するような強さで空を飛ぶことのできない流司には体勢を整えるのがやっとであった。

流司の抵抗など一切の意味をなさずに『土蜘蛛』の間近まで手繰り寄せられた瞬間、

「なんてな？」

流司は不適な笑みを浮かべて光球を大きく開けた『土蜘蛛』の口の中へと叩き込む。

爆ッ！！！！

喉元で爆発した光球によっても『土蜘蛛』の頭は血飛沫を上げて吹き飛ぶのであった。

頁四十五、『反旗疾走』（後書き）

ストックラスト。

土曜までに書ければいいけど……

主人公頑張ったんだし、俺も、頭痛が……

頁四十六、『再起逆境』

「ふう……」

『土蜘蛛』の首を吹き飛ばした流司は軽く息をついた。タイミングを間違えていれば確実に死んでいたのだからそれからそれも仕方がない。

「クオン……？」

「心配しなくても大丈夫だ。少なくとも身体は動かせるからな」

心配そうにすり寄ってきた朔に流司は笑顔で答える。

加速の際の痛みが若干流司は残っているように感じたが、それもじきに治まるはずだと流司は考えていた。

『土蜘蛛』という強力な妖怪を相手にして五体満足どころか傷一つなく生き残ることができていたのだから十分過ぎる結果であった。

「ただ、見た目はなあ……」

だが、流司の外見は散々たるものであった。

『土蜘蛛』の血飛沫を至近距離で浴びた為に頭から足先まで身体のあらゆる部位に返り血が飛んでしまっていた。

これでは見方によっては流司が大怪我をしているようにしか見えな
いだろう。

また、左腕腕にねつとりと絡み付いた『土蜘蛛』の糸もそう簡単には取れそうにはないのだった。

「どうしようか……」

自分の状態を見て流司は先程までとは違った意味で途方に暮れる。流石に洗ったところで今着ている服は使い物にはならず、また新調する必要があった。

「まずは風呂とこの糸を何とかしないとな」

逃げようとしていた方向は糸で遮られていたので流司は『土蜘蛛』の亡骸の脇を通り抜けるようにして歩き出す。

それがいけなかった。

「クオンツ！！」

朔小さな身体が流司へとぶつかり流司は予想外の力に身体が大きく傾ける。

その瞬間、

ギュンツ。

流司の真後ろを“何か”が空気を切り裂くような音が通り抜け、

ドンツ。

“何か”が叩きつけられたような音が鳴り響く。

「朔………？」

「キユウウ〜…」

流司が振り返ると足下には力なく横たわっている朔の姿があった。

流司が振り返るとそこには首を失っている『土蜘蛛』の身体が脚を大きく振りかぶっていた。

「クツ!?」

流司は朔の身体を抱き上げるとすぐさまその場を飛び退く。

直後、流司が立っていた場所には『土蜘蛛』の鋭利な脚が深々と突き刺さっているのだった。

「化け物かよ……」

目の前の存在が“妖怪”^{バケモノ}であることも忘れ、流司は『土蜘蛛』の“身体”を見上げて呟いた。

頭部を失って動くことのできる生き物などいない。

蛸などはしばらくの間は切り落とされた脚が動くこともある。

だがそれはあくまでも筋肉の萎縮によって一時的に動いているにしか過ぎず、当然のことながら意思を持つてのものではない。

けれども、『土蜘蛛』の身体は確実に流司のことを狙っていた。

生きていることが驚きであるのもさることながら、流司のことを捉えているという事実も驚愕であろう。

故に流司は“化け物”の“それ”のことを称した。

既に“それ”を流司は『土蜘蛛』とも“妖怪”とも思つことはできなかった。

もっと違う“何か”。

そう、もはや“生き物”ではなく……

流司は一目散に空へと飛び上がり、その魔の手から逃れようとするが、

ギョーンッ。

再び空を切り裂く音が流司に迫る。

「グツ！！」

直撃はしなかった。

しかし、流司の右足をその一撃は掠め、走った激痛に流司はバランスを崩して地面へと落下する。即死してしまうような高さと角度ではなかったものの地面に身体を打ちつけた流司は身を起こすのがやっとであった。

頭を無くした『土蜘蛛』の胴体が血を滴り落としながら流司へとにじり寄ってくる。

流司は動くことができなかった。

それは脚の痛みの所為？

違う。

それは『土蜘蛛』に恐怖したから？

違う。

それは逃げ場がなかったから？

違う。

逃げようという“意思”、“願望”、“思考”、その全てに反して流司の身体はその場から動くことができなかつた。

手も足も十分に動かすことができるにも関わらず、流司は『土蜘蛛』の脚が振り下ろされるその瞬間までじっとその異様な姿を朔を抱えて見続けるだけであつた。

「しばらく前に帰つたそうよ」

稗田の家から出てきた霊夢が外で待機していた咲夜たちに言う。

「失敗した。私と入れ違いになつてしまったのかも……」

ハッと気付いたようにアリスが口を開く。

流司が忘れ物に気付いたとすればアリスの家に引き返すのは道理であつたので、何も全員で行動する必要などはなく誰か一人でもアリスの家へと戻つておくべきであつただろう。

「仕方がないわ。さつさと……」

「また、妙な顔が揃っているな」

「異変？ だつたらこんなところには来ないか……」

咲夜の言葉を遮るようにして霊夢たちの前に慧音と妹紅の二人が現れる。

「ちょっと迷子を捜しているんだぜ」

「迷子？」

魔理沙の返答に妹紅が首を傾げる。

全くもってその言葉を理解することができなかつたからである。

それは慧音も同様であつて要領の得ていない顔をしている。

「まあ、迷子と言えば迷子ね。そうだ、あんたたち、流司のことを見かけていない？」

「流司だったらしばらく前に忘れたものを取りに行くとかで慌て飛んでいったぞ。ただ、場所までは分からないが」

「やっぱり……」

霊夢の問いに慧音が答えた言葉にアリスがやはりと頷く。

「ところで“魔法の森”の近くでかなりの大きさのある妖怪を見かけたという人がいるんだが、何か知っていることはないか？」

「……!?」「」「」

一呼吸置いて慧音が霊夢たちに尋ねる。

しかし、霊夢たちが慧音の望んでいた返答をする事はなく、皆絶句したように目を見開くのだった。

「いやな予感がするのだけど……」

「私もだぜ」

「拙そうね……」

「これは時間があまり……」

口々に言っとなりそれぞれ空へと飛び上がる。

「ちよつと一体……」

「気になるならついてきなさいよ。飛びながら話すから」

霊夢を呼び止めようとした妹紅に霊夢は言い放ちその場を去っていく。

妹紅は訳が分からないという思いにあったものの、慧音に一声かけると霊夢の後を追っていくのだった。

頁四十六、『再起逆境』（後書き）

まだ熱があつて布団から出れない。
でも更新w

まあ、頭痛はほとんどないので安静というだけなんですけどね。
熱も7度の後半辺りで済んでいるので。

思考がはつきりしている分暇。

ただ、声は出ない。

明日には大丈夫かなあゝ家からは出れないけど。

主人公再びピンチ。

オーバーキル部隊の到着は間に合うのか？

頁四十七、『転逆』(前書き)

今日は二話掲載です。
まずは本編をどうぞ。

頁四十七、『転逆』

その光景に流司は見覚えがあった。

自分へと真つ直ぐに伸びてくる“死”。

それを受ければ、皮は裂かれ、肉は抉られ、血は舞い散り、臓物は吹き飛び、骨は砕かれることだろう。

そんな光景に流司は覚えがあった。

「（ああ、あの時だ……）」

流司は忘れていた『鬼熊』に襲われたときの記憶を取り戻した。

『鬼熊』が振りかぶった一撃は今流司の目前まで迫っている『土蜘蛛』の胴体の一撃と変わらず“死”を確実にもたらさるうものであった。

「（あれ、あの時はどうやって……？）」

目の前にまで『鬼熊』の爪が迫っている光景までは流司は容易に思い浮かべることができた。

だが、その後のことが思うように浮かばない。

欠落しているのではなかったが、霞んだように所々が薄れ流司は完全な形で思い出すに至っていなかった。

「（確か……）」

流司は何かに導かれるようにゆっくりと手を翳した。

実際には迫り来る“死”を前にしてのものであったので、咄嗟の行

動であったのだけれどもそれに流司が気付くことはなかった。

瞬間、記憶が逆巻いた。

反己せよ。

『これでお別れですわ』

『“幻想”が閉ざされるか。ならば、これも語るべきことではないか……』

逆行せよ。

『それはいつかその身を滅ぼすと思っただけどなあ……』

『それでも私の願いは変わりません』

反経せよ。

『どうか私の娘を』

『仕方がありませんね』

逆流せよ。

『主の靈力は本当に清いのう』

『ええいつ、そうくつつくな』

反故すべし

流司の頭をあらゆる記憶が流れ、逆巻き、過ぎ去った。それらは全て紛れもない“リュウジ”の記憶であった。

血の中に潜み刻まれた記憶の奔流が流司に襲いかかる。そうでありながらも“リュウジ”は“流司”であった。

故に流司は思い出した。

あの時に自分が何をしたのか完全に。

迫る“死”に流司はただ一言。

転逆せよ。

刹那、流司へと振りかぶられたはずの脚の動きが止まる。否、そうではない。頭を失った『土蜘蛛』の振り降ろした脚はあらぬ方向へと折れ曲がっていたのだ。

「……………?!?!?!」

それは声にはならない叫びであった。もしも、頭があった状態であれば『土蜘蛛』は凄まじい叫び声を上げていたことだろう。

だが、今の『土蜘蛛』には頭がない。

よって『土蜘蛛』の胴体にはその身を崩れ落とすことでしか、その激痛を表現することはできなかった。

『土蜘蛛』の脚は関節とは“逆”方向に折れ曲がっていたのだ。

「なんとかなったか、だが今は……………」

流司は痛みに堪えながらも立ち上がり横たわる『土蜘蛛』の胴体ごとを見据える。

そして、再び右を『土蜘蛛』の身体へ向け、

「転逆せよ」

バキッ。

瞬間に残っていた七本の脚も関節とは逆方向に折れ曲がる。

『転逆する程度の能力』

それが流司の能力であった。

“転逆”すなわち“逆転”。

事象を反転させ実際とは“逆”の方向へと“転ずる”ことのできる力である。

その力をもって流司は『土蜘蛛』の脚の可動範囲を強制的に“転逆”した。
よって、全ての脚はあらゆる方向へ折れ曲がり使い物にはならなくなってしまうのだ。

『鬼熊』の時も流司は無意識に同じことをしていたのだ。
ただし、『鬼熊』の際には背骨などにも同じことをしたので骸はひしゃげてしまっていたのであった。

「これが限界か……」

そう流司は呟くと片膝を地面につく。

流司の服は赤く染まっていた。

土蜘蛛の血ではなく、“流司”自身の血で。

流司が『土蜘蛛』の攻撃を受けたのは脚だけであって、それ以外の場所に血が流れるような怪我はなかった。

そう、この傷は能力の“反”作用であった。

事象を反転させるということはあらゆる概念を肯定し、否定することである。

“生”を“死”へ。

“有”を“無”へ。

“過去”を“未来”へ。“現実”を“幻想”へ。

それは人の身には出過ぎた力である。
大いなる力には大いなる責任が伴う。
なので、流司は起こした事象に対して代償を支払ったのだ。

このまま、『土蜘蛛』の身体を潰してしまうことは流司には容易なことであった。
しかし、その為に代償を払った場合流司の身体も無事では済まされず、脚を使い物にならなくすることによって流司はこの場を凌いだのだ。

「はあはあ……」

それだけではない。

莫大な霊力の喪失感が流司の身体を襲い、流司は肩で息をしていた。故に気がつくことができなかった。朦朧とする意識の片隅で静かに動く物体を。

“それ”は流司の背後に密かに回り込み決定的なタイミングで流司に飛びかかった。

「ッ!？」

流司はその存在に気がつくことはできた。背後から流司に襲いかかったのは子蜘蛛。

『土蜘蛛』の腹から這いだしていた無数の子蜘蛛が流司に気付かれないように背後まで忍び寄っていたのだ。

『土蜘蛛』の亡骸を操っていたのもまたこの子蜘蛛であった。流司が『土蜘蛛』の身体に気を取られている間に襲いかかる。ただそれだけの目論見のために周到に罠を張り巡らせ、まさしく蜘蛛のように流司が疲労困憊へと至る瞬間を待ち続けていたのだ。

そして、その目論見は今まさに達せられようとしていた。

もはや、流司は思うように身体を動かすことも“反”撃をすることもできはしなかった。

子蜘蛛たちは勝利したのだ。

そう、それが油断であった。

この世には蜘蛛の糸すらもものとはしない絶対的な強者の存在があるということ。子蜘蛛はまだ知らなかった。

『デフレーションワールド』

突如として現れた数多ものナイフが子蜘蛛に突き刺さる。

否、それは既に刺さっており、刺さるはずだったものである。

呪符『ストロードールカミカゼ』

そこへ追い討ちをかけるように藁人形が降り注いだ。

仲間が次々に蹂躪されていく姿に恐怖したのか、子蜘蛛は再び無理矢理に『土蜘蛛』の骸を動かそうとした。

神技『八方鬼縛陣』

だが、その動きは不可視の力によって束縛される。

そして、

虚人『ウー』

振り下ろされた炎の爪が『土蜘蛛』の身体を四分割にしてただの塊へと姿を変える。

恋符『マスタースパーク』

降臨した極光がそれを包み込むように踏み潰す。光が収まったときにはそこには何もなかった。

子蜘蛛たちは断末魔の叫びをあげる暇もなく完全に駆逐された。

「……………」

流司は一瞬の出来事に呆然と言葉を失ってしまった。

ある意味では理解する時間も与えられずに消滅してしまった子蜘蛛たち以上に混乱していただろう。

「無事ではないみたいだけど、どうやら生きているみたいね、流司」

「ははっ、なんとかな」

「全くどれだけ貴方は妖怪と縁があるのよ。流石に二度目は看病しないわよ？」

「誰も望んではないっての」

「そこは縁があったと思って諦めた方がいいぜ」

「そんな縁なんていらねえーよ」

「大丈夫？」

「ああ、服は困難だけだな」

「まあ、死ななかつただけ良しということね」

「それは俺のセリフだ」

流司は近寄ってきたそれぞれの影の言葉に応えると背中を地に預けるように倒れ、助かった命を
噛み締めるのだった。

頁四十七、『転逆』（後書き）

漸くの伏線回収。

覚えていますか？

“世界が逆転する”でこの物語は始まっているんですよ。ということ、主人公の能力が発現しました。

その名も『転逆する程度の能力』。

なんともチート臭い能力ですが、そんなことはない。

関節八本砕くだけで反作用でボロボロに。

なんと燃費の悪い……

詳しいことは後々ですかな。

『土蜘蛛』及び『子蜘蛛』ゴメンな。

出てきた瞬間に運命は決まっていたんだ……

まさにオーバーキル。

スペカではありませんが、各々力上乗せで本気で殺しにかかっていますから。

こりゃ無理だ。

そういえば、一つ謎解決したのに三つほど謎を作るといっ

なんつうー迷惑な……

熱は小康状態に。

ただ、安静＋隔離なのでパソコンには触れられない。

携帯でフルブラウザで見るのがやっとですねえ……

暇だ。

の結果、欄外を書き上げましたのでどうぞ続けてご覧ください。

欄外、『とある神主の回想録』

「そういえば、流司。あなたは向こうでどんな生活をしていたのよ？」

「“外”でか？そうだなあ……」

よく晴れた昼下がりに。

暇を持て余した霊夢の一言によって流司の昔語りは始まった。

……

……

…

「おい、流司。起きろ」

「んっ、燧希？朝か？」

「いや、放課後だ」

硬い背もたれに寄りかかり伸びをした流司に燧希は呆れたように答えた。

『篠之女燧希』。

見るからに女のような名前であるが、歴とした“男”である。燧希自身の過去に幾度となく間違えられてきて、その度に落ち込ん

できたほど間違いやすい名前である。

「そうか、もうそんな時間か……」

「周りが必死で勉強している中、よくもまあ寝ていられるよな」

肩を解すようにしながら荷物を片付けて鞆を持った流司に燦希は皮肉るように言う。

今は11月も終わりに近付き高校受験の迫った教室内はピリピリとした空気が流れ始めているのであった。

そんな空気の中、流司は一人熟睡していたというのだから呆れや皮肉の一つや二つ出ても可笑しくはないだろう。

「まあ、俺には縁のない話だからな」

「ってことは決めたのか？」

「ああ。昨日、父さんに家を継ぐことにしたと話したよ」

流司が中学校を卒業するにあたって流司の父親である隆斗は二つの選択肢を流司に与えていた。

一つは高校へ入学しそのまま大学と学業を修めて、家を継ぐことなく就職を目指すというもの。

もう一つは高校へは行かずに『神代家』の次期当主としての修業を行うものである。

齢十五の子供にこれからの人生の選択をしろというのだから、それには厳しいものがあると言わざるを得ないだろう。

しかし、そこには明確な理由があった。

『神代家』の習わしとして実子に家督を譲る場合は二十までに譲らなくてはいけないというものがある。

余りにも早い相続であるが、これはかつて寿命が短かった時に安全に譲ることができるということを考慮した結果生まれた習わしであった。

その為、家を継ぐための修業は最低でも四、五年はかかってしまうために流司は中学の卒業時には選択をしていなければならなかったのだ。

「なんだ、学年きつての秀才は受験無しかよ」

「そういうことになるな」

狡いとも言いたそうな顔をする燧希に流司は簡潔に答える。

流司とてこれまでは受験の為に勉強に勤しんできたので学習面での頭の良さは

学年きつての実力を誇るほどであった。

そんな流司が高校への進学を目指さないというのだから燧希そう口にしてしまうのも頷けるだろう。

「でも、神職になるのって国家試験なかったっけ？」

「国家試験ってわけじゃないけど、似たようなものはあるよ。だから、勉強自体は独学で続けていくことになると思う。下手をすれば大学には進まなくてはいけないからな」

「それって、普通に高校に行った方がいいんじゃないか？」

「そうも言ってもらえないんだよ。これから基本的なことを覚えたら、

何処かの『神代家』で管理を請け負っている神社の管理を行わなくてはいけないからな。学校に行っていていられるような時間はとれないんだよ」

『神代家』を継ぐということはただ『神代神社』を継ぐだけではなく、『神代家』が管理を請け負っている神社全てを継ぐということであった。

それは『神代神社』の特異性が表れる故のものであったが、それぞれ祀る神も様々いる全てを正確に把握しなければならぬのだから、かなりの困難を要することは間違いないだろう。

「よくは分からないが、色々大変なんだな。もしかして、今日一日中眠そうにしていたのは……」

「昨日、父さんにこれからの心構えとかについて深夜まで話されて少し寝不足なんだ。午前はなんとか耐えたけど、午後は無理だった」

「お前は窓際だものな。確かにそれは無理だ」

腹が膨れた後の授業というものは誰もが耐え難い子守歌と化す。そこに窓際の日差しという要素が加わってしまえば、耐えることのできる人間はそうそういないだろう。

流司もその例には漏れるず、抵抗空しく陥落したのだった。

「おっと、流司、お客さんだぞ？」

「お客さん……？ああ、早苗か」

靴を履き替えたところで燧希がとある場所を指差す。

そこには手持ち無沙汰そうにしている早苗の姿があった。

「行ってやれよ」

燧希も流司と早苗が知り合いであるということは随分と前から知っていたので流司に笑顔で言う。

「いや、しかしだなあ……」

「俺のことは気にするなって。どの道、今日は用事があるから門までだったからな」

「用事？」

「塾だよ塾。日数増やしたんだ。お前と違って俺は受験があるからな」

「ははっ、じゃあ悪いな。勉強頑張れよ？」

「おう、また明日な」

流司は燧希に別れを告げると小走りに早苗のもとへと向かう。そんな様子を

燧希は微笑ましいものを見るような視線で眺めるのだった。

夕暮れ時の住宅街を二筋の長い影が歩いていく。

「そうですね。おめでとございますって言うのもおかしいですけど、おめでとございます」

「ありがとう。まあ、これからが大変になるんだけどな」

流司は早苗にも燧希と同じように『神代家』を継ぐと決めたことを話した。

既に『守矢神社』の風祝としての役割を持っていた早苗には流司は何度か相談を持ちかけたことがあったのだ。

自分よりも年下にそのようなことを相談するのはどうかと流司は考えもしたが、同じような境遇の存在など探してもそう簡単にはいるはずもないので流司は昔からの顔馴染みである早苗に相談をしたのであった。

「それでは流司さんは卒業後は『神代神社』で修業を？」

「卒業ってか年明けてしばらくしてからだな。ある程度のことができるようになったら何処かの神社の管理をすることになると思う」

つかず離れずの距離を保ちながら流司と早苗はゆっくりと足を進めていく。

見るものが見なくともそのような関係に見えなくともないのだが、少なくとも流司にはそのつもりは全くない。

どこまでも緩やかな時間が流れていくだけであった。

「早苗はどうするんだ？」

「どうするですか？」

「高校のこと。まだ一年の早苗に言うことではないかもしれないけど

な

首を傾げた早苗に流司は言う。

「高校かあ……たぶん、行かないと思います」

「本当かつ!？」

「は、はい。高校に行かなければ今まで以上に神社に仕えていられますし……」

流司が驚いたように上げた声に少し圧されるようにして早苗は答える。

「まあ、俺がとやかく言うことではないけど、父さんは悔しがるだろうな」

「隆斗さんですか？」

「早苗が中学に入学したときも“今度は高校だ”と我が子のように喜んでいたのであらなあ」

早苗の両親が亡くなってからというもの隆斗は早苗のことを我が子のように可愛がっていた。

一時は養子にすることも考えていたくらいであったが、ある時からぱったりとその考えはなくなっていた。

流司が理由を聞いたところ“そんな回りくどいことをする必要もない”だそうだ。

呼び方は双方、“守矢の嬢ちゃん”に“隆斗さん”と他人行儀では

あつたが、第二の子と親の関係のようであることは確かであつた。

「そうですか……見たいですか」

？（流司さんが）私が高校生になつた姿」

「（父さんは）見たいだろうな」

流司と早苗の間に妙な行き違いがあつたようだが、これはお互い知らない方が幸せと呼べるのかもしれない。

「なら、高校にも行くことを目指してみようと思います」

「そうだな。勉強はしっかりと続けて、どちらの道も選べるようにしたらいいと思うよ」

「分からないところは教えてくださいね？」

「構わないけど、早苗にはほとんどないだろう」

流司もそうであつたが早苗もまた真面目であるので成績は決して悪いものではない。

なので、実際早苗が流司に訊ねなければならぬとようなことは全くなかつた。

「無理矢理でも作ります!!」

「いやいや、意味が分からないから……」

「そうですね?」

「地なのな……」

長い影は何処までも長いまま伸び続ける。
そんな黄昏に二人の声は響くのだった。

…

……

……

「とまあ、そんなこんなあって、『博麗神社』の管理をした結果」

「“幻想入り”ってことね」

「そっついで」と

さして盛り上がりのある話ではなかつ

欄外、『とある神主の回想録』（後書き）

ということでスコープオンさんリクエストの“外”での主人公の一日（早苗あり）でした。

と言っても下校だけという……
考えてみたら基本的に主人公の“外”での様子は変わらないので、
こんな一幕になりました。

燧希はまた出てくると思う……たぶん？

次は2000!!

さあ、どうなるのか？

「痛てっ。もう少し優しくだなあ……」

「十分優しいわよ。今日は晩御飯作らなくていいって言ってるのだから」

「言っではなんだがそれは当然だから」

包帯を巻くのに難儀していた流司を見かねた霊夢が流司から半ば奪い去るように包帯を受け取りサクサクと巻き上げていく。

一見して乱雑そうに見える巻き方であったが、注視してみれば丁寧に固定されていることが分かるだろう。

傷付いた流司を『博麗神社』へと回収した後、咲夜などの霊夢以外の顔ぶれは早々に各々の家へと帰っていた。

薄情にも思えるかもしれないが、実際のところ流司が負った傷は脚の傷を除けば打ち身と能力の弊害による裂傷ぐらいなもので誰かが付きつきりにならなくてはならないような重傷には遠く及ばないものではあった。

よって、流司がそれなりに動くことができるようになったことを確認するとそれぞれ『博麗神社』を後にしたのだ。

「だって、流司は十分に動けるはずよ？脚はともかく手が動くのなら包丁は握れるわよ」

「……………鬼だな」

包帯を巻ながら事も無げに言う霊夢に聞こえないように流司は呟く。

確かに手が動けば料理ができないことはないだろうが、だからといって立派な怪我人に晩御飯の用意をさせるといふならば、それは鬼と言つほかないはずである。

「何か言つた？」

「！？いや、まあ俺が無事なのは朔が庇ってくれたからなんだけだな」

「クオーン……」

霊夢の鋭い視線を受けた流司は誤魔化すようにして首に巻き付いている朔を撫でる。

流司を庇つようにして『土蜘蛛』の一撃をその身に受けた朔は相当のダメージを受けていたが、治療の甲斐もあつて命には別状はなかった。

本当であれば流司は朔にどこかでゆつくりと休んでいてもらいたかつたのだが、断固として流司の首から離れることはなかつたので、流司は仕方なしに朔を首に巻き付けていたのだ。

「傷ぐらい流司の『転逆する程度の能力』だっけ？それでなんとかならないの？」

「それだと逆に傷が開くことになるんだよ」

「へっ？」

傷という事象を反転させれば傷は治るように思えるかもしれない。だが、実際はその逆であつた。

傷の治癒は目に見えるほどの早さではないが確実に行われている。つまり、傷に対して流司の能力を使用すると“治ろうとしている作用”が“転逆”して“傷が開く”という状況に陥ってしまうのだ。

「まあ、時間の経過を“転逆”させればできないことはないんだが、一瞬ならいいとして今から怪我を負う前までとなるとたぶん死ぬ。時間を“転逆”させるということは容易なことではない。

既に傷ができてからしばらく時間が経ってしまったので、それだけの時間を“転逆”させた場合の“反”作用が途轍もないものになることは容易に考えつくことができるものであった。

「どれだけ使えない能力なのよ」

「使えないって……」

霊夢の身も蓋もない言いように流司には反論することができなかった。

確かに応用のきく能力であったが、使うのがこつも難しいとなると“使えない”と言われても仕方がないことではあると流司もまた理解していたからだ。

「はい、これでお終いと。どう、大丈夫だと思うけど」

「ああ、大丈夫だ。ありがとう、霊夢」

流司は具合を確かめるように脚を軽く動かす。

じんわりと傷に染み込んでくる薬の痛み以外はほとんど違和感がなく流司には感じられていた。

「そう、なら私は晩御飯の用意をしまつから流司はじっとしていなさい。一応、怪我人なのだからね」

「正真正銘の怪我人だつての」

流司の言葉に、はいはいと応えるようにして霊夢は薬箱を手にしながら居間を後にする。

残されたのは怪我人一人と怪我管狐一匹。

ただ、いつの間にかに朔は寝入っており実質的には流司は一人であった。

「月でも眺めるか……」

そう呟くと流司もまた居間を後にする。

流司が縁側に出たときには月はもう登り始めていた。

「満月は過ぎたから既望といったところか」

縁側に腰をかけ手をつきながら流司は一人空を仰ぐ。

月は若干欠け始めており、満月ではなかった。

「まあ、確かに咲夜に希望を繋いでもらったのではあるがな」

“既望”とは“既に望が終わった”月のこと。

即ち、“十六夜”のことであった。

結果的に流司は皆に助けてもらったことになるが、それは咲夜が動いたからのことであった。

もし、咲夜が行動を動かさなければ流司が今こうして月を眺めていることもなかっただろう。

「今度菓子折でも持って挨拶に行くべきだろうか？」

流司が咲夜に聞いたところ咲夜が動く切っ掛けとなったのはその主であるそうだったので、一つの礼儀として挨拶には出向いた方がいいと流司は考えていた。

「悪いけどまたしばらくしてからになってしまっけどな」

目下の目標として『神座参』を行わなくてはならない流司にはそのような暇は残されてはいない。

怪我が軽いものであったのは本当に僥倖であったと言えるものだった。

「それにあの記憶は……」

流司が思い返したのは一瞬流れた記憶の数々。

既にそれらは形を失い、今では微かに声を覚えているだけであった。

確かにそれらは“リュウジ”の記憶であった。

“転生”とはまた違う。

“流司”はあくまでも“流司”であり、“リュウジ”ではない。

今覚えている“リュウジ”の記憶も直に忘れてしまっただろうことは、

“流司”の感覚として確かであると分かっていた。

「“転逆”に“反故”か……」

流司自身、『神代家』が特殊な家系にあることは理解していたが、それが当たり前ということもあって必要以上のことを考えようとはしていなかった。

けれども、今回の一件は流司に自身のことを考え直させるには十分過ぎる切っ掛けを与えていたのだった。

「それも今は置いておくとするか、ともかく“俺”が“俺”であることには間違いないからな」

止めどない思考を断ち切った流司は再び空に浮かぶ月を眺める。

「月が綺麗だ……」

そのまま、流司は晩御飯の支度を終えた霊夢が呼びに来るまでひたすらに眺め続けるのだった。

頁四十八、『既望へと』（後書き）

後始末の一幕。

と言つても『土蜘蛛』は跡形もないのですけどね。

能力についての補足ですね。

『転逆する程度の能力』では基本的に事象の逆転をすることになります。

つまりは、表に対する裏が無いようなものにはつかうことができません。

なので、今回のように“傷”というものに使う場合は“治癒”という働きが逆転して“傷”が“最も酷い状態”に戻ります。

勿論、“時間”や“有”というものを“転逆”させれば治すことはできますが、リスクが非常に高いので実用的ではありません。

特に“有”を“無”への“転逆”は人では身に余るほどです。

自分に対して能力を使う場合、反作用を抑えることができるのは“己”に能力を使ったことよって“他”への影響を及ぼすと見なされるからです。

とまあ、分かりにくいと言つたらありやしない能力なんですけど、基本的にはぶっちゃけ凄すぎる能力だから人間である主人公には使いこなせないと思つていただければいいと……

そうですねえ、凄いソフトなのにCPUが処理が追いつかなくてフリーズするみたいな感じです。

次で第四幕も終了。

大体一幕十話前後で風神録までは進めていきますね。

一週間遅れながらも東方も13作目ですか。

「とうほうしんれいびょう東方神霊廟」 Ten Desires .」

らしく、神霊がテーマみたいです。

タイトルの赤・緑・青の物体がボウライやダンゴに見えて……

これが神霊なんですかね？

自機は霊夢・魔理沙・早苗に霊つてことで妖夢らしいです。

それいにしても早苗、神霊を利用して仮にも巫女だろうが……

今作も通常運転のようので安心です。

頁四十九、『反故』

それは静寂が包み込んでいた空間であった。闇に支配されているはずの『博麗神社』の境内には灯りが灯っている。

パチツ、パチ。

篝火が焚かれぼうと闇夜に浮かぶ『博麗神社』は静かであった。それは人がいないからというわけではない。

むしろその逆であり、『博麗神社』は近年稀に見るほどの多くの人々が訪れていた。

人々が一心に見つめるのは境内に造られた一つの祭壇であった。四隅に松明が置かれたそれは舞台のようにも見えることだろう。それは決して間違いという訳ではない。

これからそこでは“舞”が行われるのだ。まさしく、そこは“舞台”であった。

祭壇には既に一人の影がある。四方へと影を伸ばしたそれは“巫”であった。

扮するは『稗田阿求』。巫女服のような祭服をまとい、そこにあるべくしてあるように静かに存在していた。

そして、もう一つの影が現れた。

“覡”の祭服をまとったその影は月のない夜空の下を篝火と松明の灯りに照らされるようにして祭壇へと歩んでいく。

扮するは『神代流司』。

“外”であっても“幻想郷”であってもたった一人の『神代』の血の末端。

『龍神』に最も近く、最も遠い末裔であった。

祭壇まで辿り着いた流司は左手に持った扇を開き、顔の左半分を隠す。

阿求は逆に右手に持った扇で顔の右半分を隠した。

その光景に境内は波紋一つさえ見せない水面のように一層の静まりをみせる。

静寂を乱すのは微かな息づかいと篝火と松明が弾ける音だけであった。

シャン。

流司の右手、阿求の左手の鈴が振り下ろされ音色が響く。

シャン、シャンシャンッ。

鈴の音に重なり合わさり紡いでいくように朗々とした詩も響き渡る。

それは神を讃える詩だ。それは神を感謝する音色だ。

信仰を背負った“カンナギ”は徐々に神の座す場所へと参っていく。

『神座参』には『風間』以外にももう一つあてている字がある。それこそ、

『翳信』かひま。

これがこの儀式を行うにあたっての最も重要な意味であった。

『翳信』とは字のままに“信仰を翳すこと”。
すなわち、“信仰の譲渡”を意味している。

『神座参』は年に一度『神代』が集めた信仰を『龍神』に明け渡す儀式なのである。

勿論、『神代』を通して『龍神』を崇拜する者がほとんどだろうが、中には『神代』自体を崇拜してしまう者もいる。

そこで“神の座す場所に参り”、“信仰を翳す”ことで『神代』を“人”として留めるのだ。
その為、『神代』は最も神に近く、最も神から遠い“人”であり続ける。

それは“反故”の繰り返しであった。
“『龍神』の末裔”たる存在に反故し、“『人間』の神官”たる存在に反故する。
故に“神”の“代”であるのだ。

詩の終わりは流司が“人”への反故した証。

月のない宵闇の下、流司は静かにたたずみ続けるのだった。

「お疲れ様」

「ああ、ありがとう」

四度に渡る舞を終え、普段の装いへと戻った流司に霊夢が湯呑みを手渡す。

『神座参』の終了した『博麗神社』は本当の意味で静寂に包まれていた。

今までの人々での賑わいが嘘のように『博麗神社』には静けさばかりが広がっていて、流司はそれを妙に心地良く感じていた。

それは流司がどちらかというとな静かな雰囲気好む性格が表れているのかもしれない。

だが、雲によって遮られ星すら見えない空を見上げどこか安らいでいる流司にの心にはそれ以外の理由があったのかもしれない。

「静かだな……」

「そうね。今日は一日中騒がしかったから」

霊夢もまた流司の隣へと腰掛け何も移ってはいない夜空を見上げる。夜更けというわけでもないが、霊夢は既に髪を下ろし単衣に襦袢じゆばんという就寝前の姿であった。

それは流司にもいえることで寝間着用の飾り気のない着流しに霊夢と同様に襦袢を羽織っている。

「それもそうだな。『博麗神社』（ハクレイ）にしてはあり得ないほどの賑わいだ」

「失礼ね。普段だってそれなりに賑やかよ」

「人外で、だろ？」

「……………」

流司の尤もな言葉に霊夢は口を噤む。

『博麗神社』の参拝客の少なさは“外”でも“幻想郷”でも変わらないことを理解するには十分な時を流司は“幻想郷”で過ごしていた。

そればかりか、“外”の『博麗神社』の参拝客が少ない原因は“幻想郷”の『博麗神社』の影響が表れた所為ではないかと考えることすら流司はあった。

「…………で、もう“幻想郷”には馴れたの？」

「どうか？まだ知らないことは色々あるよ。ただ……………」

流司は軽く手を降ると光のない空に月を作り出した。

当然、それは本物の月ではなく、霊力弾の喩えである。造作もなく流司は次々へと光球を浮かび上がらせては空へと散りばめて弾けさせていく。

「あなた……………」

「ああ、なんとなくだが、“コッ”が分かってな。このくらいなら片手間でもできるようになった」

しばらく前までは一つの霊力弾を作り出すことですら苦労していた流司が数十個の霊力弾を易々と操っている姿に霊夢は少し驚いたように口を開く。

「とは言っても弾幕を作ることができるようになるのはまだ先だろ
うけどな」

全ての光球を弾けさせ再び空が光を失ったところで流司は言った。
確かに以前に比べたら格段の進歩を迎えていた流司であったが、靈
夢たちのような弾幕を作るためにはまだ数が足りないことは明確で
あった。

「そう。なら、これからも頑張ることね。じゃないと一生ここで暮
らすことになるわよ？」

「それもいいかもしれないな」

「へ？」

流司の予想外の返答に靈夢は間抜けな声を上げてしまう。

「いやな、このまま『博麗神社』の神主つてのも有りかなくなって思っ
てな」

「有りつてそんなのダメに決まっているじゃない。そもそも、あん
たは『龍神』を祀っているでしょうが」

「そうか？『博麗神社』って神様が不詳だろ？これって本来ならあ
りえないことだ」

おどけたように流司は言っているが、その瞳は真剣なものであった。
確かに信仰を集めるはずの神社に神がないということは神社の存
在意義を廃するようなことである。

「じゃあ、流司は『博麗神社』が『龍神』を祀っているとでも言いたいのか？」

「当たらずも遠からずと言ったところかな？」

「はつきりしなさいよ」

「分かったから、そう睨むなって」

煮え切らないような物言いをする流司を霊夢は睨む。

流司はそんな霊夢を手で制しながら己の考えを語り出した。

「俺の推測でしかないが、『博麗神社』は“神”という概念自体を崇めているのだと思う。この国には元々八百万の神がいるように何か一つだけの神を崇拝するという考えが薄いからな」

物にはそれぞれにそれぞれの神が宿る。

それが八百万の神という考え方をもたらした。

人間が生きていく為には一つの物だけに頼るわけにもいかず、あらゆる神を崇拝することになっていった。

このことが現在においてこの国の中で宗教同士の軋轢を生みにくくしているのだろう。

「『博麗神社』には祀りあげる特定の神がない。にも関わらず、“神社”として成り立っているのは『博麗神社』が“神”そのものを祀っているんだとすれば辻褄があうだろう？」

特定の神を

祀ってしまった時点で、その神社はその神のものとなってしまふ。

故に“祭神”を明確にしないことで漠然と“神”を祀ることにする。そうすることで、神社でありながらも祀る神がないという状況が

作り上げられるのだ。

「そして、全ての神は『龍神』様に通ずる。即ちそれは『龍神』様が“神”の象徴であるということだ」

『龍神』は神すらも崇拜する最高神である。

ならば、『龍神』が“神”という概念そのものだと言っても過言ではないだろう。

「だとすれば、俺が『神代』として『博麗神社』にいることは何もおかしなことではない。むしろ、自然なことだと考えられるだろう？」

「なるほど、ね」

流司の推測は霊夢に納得をもたらすのに十分な説得力を有していた。証拠や裏付けというものはほとんどないに等しいのであくまでも推測でしかないが、筋はこれ以上ないというほどに通っているのだ。

「とは言ったものの、早く『博麗神社』から巣立てるだけの力をつけなきゃいけないことは変わらないけどな。今回もまた色々借りを作ってしまったし」

そう言うと流司は霊力弾を作り出して弄びながら、今回借りを作ってしまった相手を指折り数えていく。

間接的なものも含めるとその数は片手では足りないほどにまで上るのだった。

「そう。なら、早く私に勝てるようになりなさい」

「その条件は変わらないのな」

「当然よ。それに……」

霊夢は立ち上がると欠伸を一つし、部屋の中へと足を向ける。

「勝てなかったときは一生私の面倒をみさせてあげるわ」

「それはまた、光栄なこと……」

流司は苦笑するように霊夢に伝えて部屋の中に入っていく。
月の見えない秋の夜長は虫の囁きに乗り深まっていくのだった。

頁四十九、『反故』（後書き）

第四幕終了!!

遂に目覚めた能力に、更なる主人公の秘密。

果ては『博麗神社』の意味と十話ほどの中にかなりものを詰め込んだ気がします。

その辺りはゆっくりと回収していきます。

つか、まだ一年経ってないよ。

風神録辿り着いていないよ。

早苗はどうした早苗は!!

という皆様に朗報です。

第五幕では彼女の再登場。

さて、それは一体どういうことなのか!?

明日のこの時間にご期待ください。

たぶん、幕のタイトルで分かっけてしまえますけどねえ……

幻想郷は幻想的な景色に支配されていた。

尤もそれは知る者にはどうということではない単なる純白の風景である。一面の銀世界というには些か語弊があるかもしれないが、ほとんど見渡す限りが白銀に包まれている。

息をすれば白くなり、外を歩けば唐傘も白く染まる。

白に素。

どこまでも、単純で美しい世界が広がっている。

とはいえ、遮るもののない寒さは身を凍てつかせる。

氷精や雪女は喜ぶかもしれないが、猫や人間は温かさを求め布団や炬燵から抜け出すことができなくなることだろう。

中には冬眠を行うものまでいるくらいだ。

「はあ、ぬくいぬくい」

『龍神』の末裔たる人間、『神代流司』もまた温かさを求めて彷徨いとある場所に行き着いた一人であった。

「君はいつまでそうやって暖を独占しているつもりだい？」

「それは気が済むまでだ。飛んでも歩いてても寒いっただらありやしな
い」

流司は手の感覚を確かめながら温めている手のひらを開いたり閉じたりしている。

「なら、部屋から出ずにいればいいものを。君の家にだって、『麗神社』にだって暖をとるものはあるだろう？」

「分かってないな、森近。これにはこれの良さがあるんだよ」

眼鏡を掛け直しながら呆れたように言う男性 『森近霖之助』に流司は甘いと言いたげな声色で目の前の四角い物体を指差した。

暖風を吐き出し続ける四角い物体の正体は言わずも知れた“ストーブ”である。

そうはいえ、こと“幻想郷”では“ストーブ”の存在は異端である。

“幻想郷”で暖をとる方法と言えば炬燵や湯湯婆と言ったものが大抵であった。

明治時代の初頭に“外”とは隔絶された為に文明の利器というものはほとんど“幻想郷”には存在していなかった。

流司が暖をとっている部屋の様子を窺えば、ストーブ以外にも“幻想郷”には不釣り合いな代物が所狭しと、まるで何かの“店”のようにならべられていることが分かるはずだ。

これらは全て“外”から流れてきたもので、この場所は『香霖堂』、“外”から流れて来たものを“一応”売っている店である。

「まあ、便利だとは思っけど流司の言う良さというのは分からないな」

「この灯油が燃える独特の匂いが妙に冬を感じさせるんだよ。そういや、コーラは無いのか？」

「君も好きだね。僕はあんな薬みたいな飲み物好んでは飲みたくない

いよ
「

霖之助は黒い液体の入った瓶を流司に手渡しながら言う。

雪の中にも埋めてあったのか瓶の表面には溶けかけた雪が残っており、見ただけでも中身がよく冷えているだろうことが分かる。

「んくつ、俺も特別好きって訳じゃないさ。時々、飲みたくなるんだよ“外”を感じさせるものをな」

瓶の蓋を開け中身を傾けながら流司は霖之助に言う。

独特のほろ苦いような甘みが流司の口の中に広がり、気泡が弾け舌がピリピリとする特徴的な味を流司はどことなく懐かしく感じていた。

「それは“ノスタルジア郷愁”ってことかい？」

「かもな、一年前はこんなことをしているとは思ってもいなかったしな」

半分ほど中身を飲み干した瓶を置いて流司は答える。

流司が“幻想郷”に来てから二度季節は変わり、この厳しい寒さが過ぎれば再び春がやってくる。

郷愁を感じる程度には十分な月日が流れていた。

「まあ、僕としてはここにあるものの使い方を知っている人が増えて喜ばしいのはあるけれど。僕の能力は君みたいに便利ではないからね」

霖之助の有している能力は『道具の名前と用途が判る程度の能力』

というもので、一見便利そうではあるが“使用方法”までは判らない為、中途半端と言うしかない能力であった。

特に“外”の世界の道具は見た目では使い方の想像しにくい道具も多いので、元々“外”の世界の人間である流司の存在は霖之助にはありがたいものであった。

「便利……？確かに生活には役立っているな……」

流司は霖之助の言葉に首を傾げながらも今までの自分の能力、『転逆する程度の能力』の主な使用法を思い浮かべて頷いた。

流司が能力の検証を重ねた結果、例外はあるものの“逆”というものがはっきりしたものや能力を使わずとも自然に起こすことができることに關しては比較的容易に能力を使うことができることが分かった。

例えば前者は、“振り下ろす”という動作の“逆”は“振り上げる”である。

これは“逆”がはっきりしているので流司の能力は比較的に使いやすい。

しかし、“殴る”という動作の“逆”ははっきりしていない。

この場合だと流司の能力は使い難いものとなる。

後者は例えば、“燃える”の“逆”は“消える”であり、燃料となるものがなくなればそれは自然と起こるものである。

このようなことに關しても流司の能力は有効性が高かった。

また、自分より弱いものに関するても能力はリスクを伴わずに使うことができるということも流司は把握することができていた。

以上のことから流司の能力の使用例は、

- ・ “腐敗”の“逆”として“新鮮”を捉え食材の鮮度を保つ
- ・ “濡れる”の“逆”として“乾く”を捉え洗濯物を一瞬で乾かす
- ・ “散らばる”の“逆”として“集まる”を捉えゴミを一カ所にまとめ

といったものであった。

これによって流司の炊事・洗濯・掃除の技術と速度は格段に向上されることとなった。

まさに流司一人で主婦にとっての三種の神器を満たしているのである。

これを便利と言わずして何を便利と呼べばいいと言えるだろうか？
尤も戦闘に関しては現状として弾幕を反射させるという使用法しか
思いついてはいない。

それも相手が放った弾幕には有効ではないので自分の放ったものだけである。

これはある程度の実力が伴えば能力がなくともできることであったので、実質として全く役には立っていないかった。

「戦いなんてそうそう起こるものじゃないんだから、生活で使えるのならこしたことはないと思うよ」

「それもそうだな」

「そうそう、この前こんなものを見つけたんだ ……」

頷いた流司に霖之助は“外”から流れたものを見せていく。

流司はそれらの使い方を説明しながら人工的な暖かさで包まれた店内で時間を過ごしていくのだった。

「ふう……寒いな」

流司は軽く身震いをしながら帰宅の途についていた。

マフラー代わりの朔はまるで猫のように『博麗神社』の炬燵で丸くなっている為に今は流司の首にはいなかった。

大寒が過ぎ、再び日が延び始めたとは言えどもまだまだ日が落ちるのは早い。

それを見越して比較的早くに流司は『香霖堂』を後にしていたが、どんよりとした空の所為で既に辺りは暗くなり始めているように流司には思えた。

「向こうなら街灯があるから明るいんだけどな」

“外”であるならば都会でなくとも大抵の道には街灯が立っている。煌々と照らすにはほど遠いだろうが、それでも随分違うだろう。

「カイロがあれば……ってさっきから“外”のことばかり考えているな」

霖之助の言った“郷愁”という言葉に触発されてか先程から“外”のことばかり考えていた自分に流司は苦笑する。

「確かに懐かしいと感じれる程度には“幻想郷”に馴染んだか……うん、懐かしいな。父さんたちは元気だろうか？」

“外”と隔絶さ

れた“幻想郷”では連絡をとる術もない。

一度考えてしまつとなかなか思考というものは止め辛く次々と流司の脳裏には“外”のことが思い浮かぶ。

「トメ婆も元気だといいいけど心配だなあ……………」

「なら、一度里帰りするのはいかがかしら？」

「は？」

瞬間、流司は突如として開いた両端にリボンのついたスキマに飲み込まれる。

スキマの外に映る白い世界には金の髪を揺らした妖怪が胡散臭い笑顔を浮かべているのを流司は確認しながら落ちていくのだった。

……………

……………

…

その空は茜色に染まっていた。

流司の目の前には見慣れた、それでいてしばらく見てはいなかった鳥居が立っている。

「戻ってきた……………？」

そう、それは“外”側に位置する『博麗神社』の鳥居であった。眼下には何軒かの民家の姿も流司の目には映っていたので間違いないという確証を流司には持つことができた。

ひらひら。

呆然とする流司の前に一枚の紙が舞い降りてきた。

それを流司は掴むとそこに書いてある文字を読み出す。

『当初の約束通り、一時の里帰りを差し上げます。

明日から数えて一週間後の夕暮れにこの場所へ迎えに参りますので、それまでの休暇をお楽しみくださいな。

八雲紫』

紙には達筆な文字でそのようにかかれていた。

『神座参』や年末年始の参拝もあり、十分に流司の存在が“幻想郷”に知れたことで一時的であるのならば“外”に戻ることも可能になつてのことであつた。

「ん？裏に続きが……」

『おまけもついていますので宜しくお願いいたしますわ。関係各所には説明はしてありますので、御安心を。

尚、返品は受け付けておりませんのであしからず。

では、健闘をお祈りしますわ』

「おまけ？健闘？はっ？どついつことだ？」

おまけといったもののそれらしきものは落ちてはいない。

“健闘”という言葉も流司には全く心当たりがなかった。

何かの間違いかと流司が『博麗神社』の中へ戻ろうとした時、流司の耳には聞こえてはいけない声が聞こえてしまった。

「ここは『博麗神社』かしら？」

「神社なんてそれ以外にないと思うけど？」

「あの妖怪も突然こういうことしないでほしいわね」

「な、なんでここにいるんだ……？」

ギギギとまるで錆び付いた扉を開くような動きで流司はその三つの声の主に尋ねる。

「なんでって突然、スキマが開いて」

「飲み込まれたら」

「ここにいたわ」

その言葉を聞いて流司には紫がこれ以上ないというほど胡散臭い、否、愉快げな笑みを浮かべている姿を幻視した。

「あのくそ賢者があつ……！」

三つの視線、『アリス・マーガトロイド』、『藤原妹紅』、『十六夜咲夜』の存在にも気にせず流司は叫びを上げる。その叫びは鮮やかな茜空に反響していくのだった。

頁五十、『雪隠れ、雲隠れ』（後書き）

その頃、あの人は……

其の一、『博麗神社』編

「里帰りねえ……」

「そうですね。そういう約束でしたので」

炬燵で身体の外側を、熱いお茶で身体の内側を温めながら霊夢は息をもらした。

「そういうのって事前に説明しておくもんじゃないの？」

「突然の方が面白くていいでしょう？」

扇子で口元を隠して紫はふふつと笑みを浮かべる。

「全く、あんたって奴は……」

「怠惰は猫をも殺しますわ。時に刺激を与えてこそその“生きる”というものですもの」

“幻想郷”では良くも悪くも同じ毎日が続く。

同じことをひたすらに繰り返すことは“生きる”と言えるのだろうか？

そうではないだろう。

特に時間の経過による肉体的変化が少ない妖怪などの存在にとっては“暇”というのはこれ以上ない“毒”なのだ。

故にその繰り返しを乱す為、“異変”を求め、起こすのだ。

「でも、良かったの？流司以外の奴を“外”に出しても？」

「あらあら、それは一人残された癖み？それとも嫉妬かしら？」

「そうじゃないわよ。彼女たちは“幻想”でしょ？」

「……ええ、でも、大丈夫ですわ。彼女たちは妖怪ではない、いえ、“彼”が傍にいるなら妖怪であつてもね……」

紫は何処か懐かしむような遠い瞳を浮かべて呟いた。

「それって一体……」

「では、私はこの辺でお暇しますわ。それでは一週間、久方ぶりの一人暮らしを」

「くらっ……はあ」

紫は霊夢の制止も聞かずにスキマを開いて姿を消す。

「嫉妬って私を“幻想郷”から出すつもりはないんだから……」

霊夢が一人残された『博麗神社』の居間にはそんな呟きが広がっていくのだった。

ということが始まっちゃった第五幕。

久しぶりの“外”です。

その上、おまけつき。

人選は分かっていたと思いますが、それなりに理由が作れる人、かつ好きだからというテキトーさ。

まあ、なんとかなるはず。

“外”なのであの方も。

どうなるかはまだ秘密ですが、神様たちが苦勞するかなあ〜（笑）

本当は霖之助だったんだけど、それだと面白みが全く……

ごめんよ、こーりん。

それにしても主人公の能力がこんな形で使われるとは思いもしなかった。

狙ったわけではないんですけどねえ……

偶然って凄い。

弱い定義は結構曖昧。

少なくとも捕食関係の低位であれば弱いかな？

頁五十一、『状況整理と計画方針』

『博麗神社』の居住区の中にある居間で向かい合う一人の男と三人の女。

流司、アリス、妹紅、咲夜の前には流司が淹れた緑茶が湯飲みから湯気を立てているが誰一人としてそれに手をつけようとはしていなかった。

『博麗神社』にこの四人の姿があるのは別におかしな話ではない。ただしそれは“幻想郷の”という前置詞がついた場合である。だが、この『博麗神社』についているのは“外の”という前置詞であった。

「つまり、ここは『博麗神社』でも“外側”の『博麗神社』ってことね？」

「そういうことだ」

一通りといっても、大したことを話したわけではなかったが、説明を終えた流司にアリスが確認の意味を込めて尋ねる。

それに対して流司はどこか疲れた表情を浮かべながらも真剣な瞳で頷いた。

「それで私たちは明日から数えて一週間後までは帰れないと？」

「そうだ」

アリスの言葉を継ぐように妹紅が流司に訊く。

一週間後に迎えにあがるということは、一週間後までは帰ることが

できないということでもある。つまり、どうあがこうとも妹紅たちは一週間は“外”で暮らさなければならなかった。

「お嬢様に連絡はいつているのでしょうか？」

「たぶん、な……」

咲夜の言葉には流司は多少の引っかけかりを覚えてしまった。

関係各所には説明をしてあると書いてはあったが、それが真実だとは限らない。

流司が紫と顔を合わせるのは“幻想郷”に来てからも数えるほどしかなかったけれども、紫の人となりではなく妖怪となりは大まかに理解していた。

今回のことに関していえば紫の流司にとっては好ましくない性格が表れた故のことであった。

「えっと……流司の能力で向こうに帰ることはできないの？ “外”と“内”をひっくり返すみたいな感じで」

「できないこともないけど、今回に限っては無理だ。相手が紫だからな……」

妹紅が尋ねたように流司の能力を使えば“幻想郷”に帰ることは本来であれば容易であった。

四人分に相当する“転逆”は流司にかなりの代償を必要とさせるが、『博麗神社』の中にあるものに関しては元々入れ替わりやすい状態にあるので流司の能力で切っ掛けを与えるだけで後は自然に入れ替わるのだ。

「どづいづことかしらっ。」

「いやな、“転逆”させるといふことは表と裏の間に“境”がある
ことだ」

「それって……」

「ああ、紫の『境界を操る程度の能力』と
俺の『転逆する程度の能力』の相性は最悪だ」

流司の能力は謂わば、二つの相対する事象の間に境界を作り出し、
それを起点に“転逆”させる力である。

即ち、“境界”を自在に操ることのできる紫の前には流司の能力は
全く意味をなさないのだ。

よって、この一件が紫の仕業によるものである以上、流司はあらが
う術を持っていないのだ。

「他にも俺は会ったことがないけど、“幻想郷”の閻魔様が使つと
いう『白黒はつきり付ける程度の能力』との相性も最悪だな」

また、流司の能力が二つのものから一つを選ぶという性質を孕んで
いる為に“白黒”をつけられてしまつてはなす術がないのだった。

「結局、どうしようもないってことね」

「仰るとおりです」

溜め息をつくように結論を述べたアリスに流司は首を竦めて肯定す
る。

「で、どうする？こうなってしまった以上、選択肢はほとんどないんだが。一週間分の食料を調達してここで暮らしてもらうのが一番楽だと思うけど。幸いここが『博麗神社』であることは変わりないからな」

“外”側とはいえ『博麗神社』であることには変わりがない。

間取りなども全く一緒であるので、時々『博麗神社』に訪れることのあるアリスや咲夜にとっては勝手知ったる場所であろう。

「流司はどうするの？」

「悪いけど俺は本家に戻らせてもらう。元々、里帰りの為だからな」

妹紅の問いに流司は答える。

予想外の状況にはなったものの流司の家に帰るという当初の目的はぶれてはいない。

むしろ、これで戻らなければ何のために“外”に戻ったのか分からないというものだろう。

「なら、私もついて行くこうかな？」

「はっ？」

「ほら、流司の家ってことは父様のことに関して分かるものが何かあるかも知れないし」

妹紅の突然の言葉に流司は驚きの声を上げたが、続く説明に流司は黙るしかなかった。

確かにその可能性は高く、流司自身もあるという確証を感じていた

からだ。

「そういうことなら、私も行くわ」

「な、何で……？」

「流司の本家に仕えているというお手伝いの方に興味があるのは知
っているでしょう？この機会を逃すわけにはいかないわ」

そういう咲夜の顔は心なしかわくわくしているように流司には見え
た。

それと同時にトメ婆に咲夜のことを会わせてはいけないという漠然
とした予感も流司は感じたが、もはや止めることはできないだろう。

「じゃあ、アリスは……」

「私もついて行くわよ。一人暮らしは慣れてるとはいえ、よくも
知らない土地でするほど愚かじゃないから」

「……ですよね」

“外”であることは変わらないので、アリスが一人で『博麗神社』
で待つというのは危険がないとは言いつれない。

それが分からないほどアリスも頭は悪くないのでこの選択は半ば決
まっていたようなものだった。

「まあ、仕方がないか……ところで、アリスと妹紅は体調に問題は
ないのか？」

「えっ？どうして？」

「体調なんて私に聞いてどうするのよ」

「いやいや、ここは“外”だぞ？“幻想”は廃れてしまっている世界だ。咲夜は人間だからいいとしてアリスや妹紅はそうではないだろう？」

「「あつ……………」」

流司の言葉に今更ながらアリスと妹紅は驚きを浮かべる。

咲夜は“人間”であるので問題はないとしても、アリスは“魔法使い”、妹紅は“不老不死”である。

“外”に出たことで何か問題が起こってもおかしくはない“幻想”の存在であった。

「言われてみればそうだけど、特に問題はないわね」

「私も。まあ、一応、“人間”ではあるからね」

「そうね。私も妖怪や神のように“畏れ”や“信仰”を必要としているわけじゃないから、大丈夫なんじゃない？」

自分の身体の具合を確かめるように手や足を動かすアリスと妹紅だが、お互い目立った異変はないようであった。

「一番の問題は大丈夫か。なら、次は……………」

流司はアリス、妹紅、咲夜の順に姿を見比べて、徐々にその表情をしかめていく。

そして、口を開いて告げたのは、

「服を何とかしないといけないか……………」

とじつは細く思えて最も重くなじびであった。

頁五十一、『状況整理と計画方針』（後書き）

その頃、あの人は……

其の二、『紅魔館』編

「へえ、咲夜に休暇をね」

「従者にしっかりと休みを与えてこそその主。使っだけが主の正しい姿ではないわ」

薄紫色のネグリジェのような服を着た少女 『パチュリー・ノーレッジ』の感心したような声に“紅魔館”の主、『レミリア・スカレット』は得意げに胸を張った。

その威厳ある姿は見るものを魅力するようなカリスマ性に溢れているのだった。

「確かに咲夜は働き過ぎの部分もあったから、休暇をあげるのは賛成だけど……」

「どうしたのよ？やけに歯切れが悪いわね、パチエ？」

その言葉とは裏腹にパチュリーの声は重く、レミリアの選択を非難するようであった。

「でも、レミィ。咲夜がいないってことは妖精メイドも使い物にならないってことよ？洗濯や掃除はいいとして食事はどうするの？」

紅魔館には妖精メイドが多数いるが、自発的にできることといえば自分の服の洗濯と自分の食事の準備ぐらいである。

メイド長の咲夜が不在の今、妖精メイドの存在はあってないようなものであった。

当然、レミリアたちの食事の用意ができるはずもない。

「……………吸血鬼は一週間ぐらい食事がなくても平気よ」

「魔法使いも大丈夫だけど、門番はどうかしらね」

苦肉の策と言うようにして口にしたレミリアの言葉をパチュリーはフオーするようでさりげなく留めを刺す。

吸血鬼であるレミリアも魔法使いであるパチュリーも一週間ぐらいの絶食はわけのない話であったが、紅魔館の門を守っているはずの妖怪にそれが通用するかは疑問と言わざるを得ないだろう。

「人里で出前とかしていないかしら……………？」

「少なくともここまできてくれるような酔狂な出前はないと思うわ」

それから数時間後、紅魔館に絶望の声が響いたのは語るまでもないことである。

更なる応用のきく主人公の能力。

やりようには“外”と“幻想郷”の行き来も自由です。

でも、紫と映姫には勝てんのよ。それこそ逆立ちしてもね。

“転逆”ということは“境”を基準に反転させることなんで、その“境”を弄ることのできる紫には勝てません。例えば、“弱い”を“強い”に“転逆”させようとも“強弱”の“境界”を操られてアウトです。紫ヤバいね、ヤバい。

更には“転逆”ってことは対称であることが必要なので“白黒”はつきりさせられるとダメ。

“弱い”を“強い”に“転逆”させようとも、“弱い”と“白黒”つけられるともう降参です。

映姫もヤバいね、ヤバい。

相性がいいのは飲んだくれ。

密度の“濃い”、“薄い”は主人公の方が自在に操れますね。

ただ、相手が鬼だから、代償がとんでもないことに……

あれ？結局だめなんじゃ……

「明るいわね……」

「そりゃまあ、電気がついてるからな」

エスカレーターを上がる四つの影は周囲の人々の視線を否が応でも集めてしまう。

視線を集めているのは正しくは流司を除く三人であるのだが、それを伴っている流司がそれに巻き込まれるのは仕方のないことであった。

「（向こうとは逆だな……）」

二階から三階へと繋ぐエスカレーターへと乗り換えたところで流司は思った。

この注目のされ方はかつての自分に対しての視線の集まりを彷彿とさせるものであった。

とはいえ、閉店間際を狙ったこともあり、これでも視線は少ない方である。

これがまだ人の多い昼間や休日、都会と呼べるような場所であったらと考えると流司はぞつとせざるを得ないのだった。

流司がアリス、妹紅、咲夜の三人を引き連れてやってきたのは大型ショッピングモールであった。

広大な土地を必要とするショッピングモールやアウトレットモールというものは基本的に郊外と呼ばれるような場所や再開発が進められているような場所に建てられることが多い。

比較的郊外と呼ばれるような場所にある『博麗神社』の周囲にも再開発や区画整理の影響が表れ始め、進む過疎化に歯止めをかけるべく市が誘致をした結果、大型ショッピングモールが建設されたのであった。

流司が幻想郷で過ごしている一年にも満たない僅かな時間であっても、めまぐるしい開発と発展が進んでいた。

最寄りの駅の付近には高層ビルが迷いの竹林の竹を思わせるような速さで伸びていき空を狭くしていく。

そんな光景を見てこの辺りが“都会”になるのもそう遠くはない未来なのかも知れないと流司は感じた。

「（“国破れて山河あり”とは言ったものだ……）」

その言葉は今の世界にとっては皮肉以外のなにものでもないだろう。次々と山河は国に潰されていく。

神への信仰は廃れ、代わりに人々は科学を信じていく。

神を畏れ、妖怪を恐れることもなくなり、人の恐怖の対象は人ではなくなる。

じきに人々は過去への敬意を忘れていき、未来への展望に支配されていく。

仕方のないことだ。

そうは理解していたもののやはり流司は素直に頷くことのできない思いが胸の中にあることを感じていた。

それは“幻想郷”という地に流司が少なからず染まっていたことを如実に示していたのだろう。

「どうしたの？暗い顔をして？」

明るい店内とは対称的に表情を
暗くさせて先導していた流司に妹紅が声をかけた。

「いや、人はどれだけのものを“幻想”にすれば気が済むのかわ
つてな……“外”の人間である俺が言うのもおかしい話なんだが」

その時の流司は恐怖していたのだろう。

新たなものを作り出しては忘れていく人という存在に流司は同じ人
でありながら恐怖していたのだ。

『龍神』への信仰を生活の基盤としている流司にしてみれば、確か
にそれは恐ろしいことであつたかもしれないが流司の考えは少々異
端であるだろう。

もしかしたら、その恐怖は『龍神』の末裔たる『神代流司』が本能
的に悟つたものであつたのかもしれない。

「それは永遠と続くのではないかしら？いくら悔やんでも過ぎてし
まつた“時”を戻すのは大変なのよ」

「咲夜が言つと説得力があるな」

苦笑いに似た笑みを浮かべて流司は言つた。

『時間を操る程度の能力』。

それが咲夜の能力であつた。

ある意味では流司以上に人間としては破格の能力を有している咲夜
であつたが、時間を操るといふのは主に“停止”と“進行”に関し
てで“逆行”に関しては移動していた物が元の位置に戻る程度であ
つた。

それだけ、“時”を巻き戻すということは有り得ないことであるのだ。
その点、代償さえ支払えば“時”を“逆行”させることさえできる。流司の能力はやはり破格のものである。
決して家事の為に使う能力ではないのだ。

「さて、着いたか」

四階まで上がったところで流司が足を止めた。

「ここなの？」

「まあ、ここなら大抵揃うだろ。そうだな、咲夜に預けとくか」

流司は妹紅の言葉に答えながら咲夜に財布を手渡す。

「そこに入っているので十分はずだ。この階がしまるまで二時間はあるから大丈夫だと思うが……」

「服を選ぶだけなんだからそんなにかかるわけないでしょ？」

「どうだかな……」

アリスの声に流司はどこか達観したような口調で応えた。

それは二時間あっても足りないと分かっているような声色であった。

「まあ、分からないことがあれば店員に聞けば大丈夫だろう。服に関していえばアリスもいることだしな」

「流司はどうするの？」

「俺はあそこで待つてる。服に関しては基本的に和服で生きてきたから分からねえ。特に女物なんてな。餅は餅屋だ」

流司の今の服装も流司が持つ数少ない洋服の一つであった。

『神代』の本家では基本的に和服で過ごし、学校では制服、『博麗神社』では一日中神主服を着ている流司はほとんど洋服というものを着る機会がなかったのだ。

手をひらひらとさせると流司はフロアの一角にあるソファアに腰を下ろし、自動販売機で買った缶コーヒを傾けて咲夜たちが買い物を終えるのを待つのだった。

「とまあ、結局閉店ギリギリと」

「わ、悪かったわね。だって、こんなに沢山の“外”の服を見る機会なんて次があるか分からないじゃない!!」

顔をうつすらと赤く染め上げてアリスは流司の呆れたような言葉に答える。

結局、服を選ぶのに一番時間がかかったのはアリスであった。人形使いのアリスにとっては服の造形もそのスキルを支える重要なものであったからだろう。

尤もこれくらいの時間が最低でもかかることは流司も分かっていたし、仮に魔理沙や霖之助をつれてきた場合どうなるかは分かっても

のではないと思っていたので、流司は本気で呆れていたわけではない。

「それにしても、だいぶ余ったな……」

「それって、相当な金額だったんじゃないの？財布を出したとき店員の顔が引きつっていたわよ」

「確かに金額がかなりあることは確かだが、これくらいはかかると訊いたんだがなあ……」

咲夜から返してもらった財布の中身が思っていた以上に残っていたことに流司は首を傾げる。

確かに、財布に入れておいた金額は流司が“外”の『博麗神社』で暮らした場合の半年分の生活費であったので相当な金額であることは流司も理解していた。

しかし、流司は以前早苗から本気で全身をコーディネートするなら二桁は必要だと言うことを冗談半分で聞かされており、純粹にそれを信じていた流司は少ないかもしれないとさえ思っていたのだ。

「余ったんだから問題はないと思うけど……」

「それもそうだな。つか、妹紅はそれで本当に良かったのか？」

「ひらひらしたのよりは楽かなって。おかしい？」

「いや、おかしくはないと思うけど……」

アリス、妹紅、咲夜の服装はそれほど“幻想郷”の時の服装と雰囲気壊しているという訳ではない。

アリスはワンピースを基調にカーディガンにブーツに防寒用のコート。

咲夜は変わらずミニスカートで、ロングブラウスにネクタイでアクトをつけている。

そして、妹紅はというとジーンズにTシャツ、ジャケットで装い、いつものリボンの代わりにニット帽をかぶっている。

因みに流司はというとジーンズにデザインワイシャツとナロータイという一見するとそぐあわなそうなものを見事に着こなしていた。その落ち着いた雰囲気は流司の性格が表れたのか、コーディネートしたものの腕が発揮されているのか定かではないが似合っていることには間違いがなかった。

「さて、適当に何か食って帰るとするか……」

「流司はあまり外食が好きではなかったんじゃないの？」

流司は基本的に自炊で食事を済ませていた。

元々外食が好きではなかったことに加えて、“幻想郷”で暮らし始めてからは格段に料理の腕が上がったので、まず外食をすることはなかったのだ。

「そうだが、神社にあった食材は全滅していたし、明日には家に帰ることになるからな。外食するのが無難だろう」

「そうね。私は“外”の食事がどんなものなのか楽しみだわ」

「咲夜が満足するようなものはないと思うけどなあ……」

和・洋・中とあらゆる料理がプロ並みの咲夜の参考になるような料

理がショッピングモールにある食事処にあるとは流司には思えなかったが、他に選択肢もなかったので流司たち一行はレストラン街へと向かうのだった。

頁五十二、『変わりゆく現』（後書き）

その頃、あの人は……

其三、『寺子屋』編

「では、授業を始めるぞ」

「慧音先生」

「ん？なんだ？亜紀？」

授業を開始しようと声を上げた慧音を止めるように亜紀が手を挙げる。

「今日はおに……流司先生の授業じゃないの……ですか？」

そう言った亜紀の言葉につられるようにして教室にいる他の子供たちも口々に声を上げる。

流司は月に二、三回ほど寺子屋の授業を受け持っていた。とはいえその内容はまちまちで、しっかりとした授業を行うこともあれば、世間話のようなもので終わってしまうこともあった。

そうは言っても、寺子屋に通う子供たちにとって流司の時折“外”のことを交える話は一つの御伽噺のようなものであり、子供たちが一際楽しみにしていることであった。

「ああ、流司、先生は里帰りだ」

「里はここだよ？」

慧音の言葉に子供たちは一斉に首を傾げる。

確かに“里”といえは“人里”のことであり、“里帰り”と言葉は子供たちには理解の及ばないものであった。

「“里帰り”というのは自分の生まれ育った場所に帰ることだ。流司先生でいうなら“外”ということになるな」

「ええーっ！！流司先生、“外”に帰っちゃったの！！？」

一人の声を皮切りに“嫌だー”とか“帰ってきて”などと言った声が教室内に響き渡る。

それだけ、流司が子供たちに慕われているということであった。

「こらこら、落ち着け。あくまでも、一時的に帰っただけだ。一週間もすれば戻ってくるはずだ」

「本当に？」

「そつだぞ。多分、お土産もあると思うぞ？」

子供というものは現金なもので慧音の“お土産”という言葉に反応して各々に期待を膨らませていく。

これで流司が手ぶらで帰ってきた暁にはどうなるか分かったものではないだろう。

口は災いの元とは言ったものである。

「（済まない、流司……）」

自分の引き起こしてしまった事態に気付いた慧音は心の中で頭を下げるのだった。

お買い物　お買い物

これってどこに行くCMだっけ……？

服のイメージは読者の皆さんの脳内補完でよろしくお願いします。

絵なんて碌に書けませんから……

デザイン的な奴ならそこそこできるんですが。

地震大丈夫でしょうか？

この小説を読んでいる方に東北の方がいらっしやるかは分かりませんが。

仙台の津波の影響はLIVEで報道を見ていましたが、正直言葉がありませんでした。

無事の方をお祈り申し上げます。

外を流れる風景はあっという間に過ぎ去っては変わっていく。緑は次第にその数を少なくしていき、代わりに無骨なコンクリートや鉄骨で造られた建物が数を増やす。

「昨日の店もそうだけど、こういったものに乗ったり、このような風景を見ると改めてここが“外”だって理解するわね」

「確かにこれはある意味で文明の利器の極だろうな」

外の風景を見ながら言う妹紅に流司は説明するような口調で口を開いた。

『電車』というものは確かに文明の極地の一つであった。

多くのものをより早く、より遠くへ運ぶという欲の先に生まれた電車は蒸気機関、ディーゼル、電力、リニアと様々な形に変わるとはいえ、潰えることはないだろう。

「いいのか？妹紅は寝ておかなくて。まだしばらくは時間がかかるぞ？」

「いいわ。こうしていつもと違う景色を見るのも新鮮だから」

流司は静かに寝入っている咲夜とアリスに目を一瞬向けた後、隣に座る妹紅へと声をかける。

『博麗神社』のある場所から『神代』の本家までは一日近い道のりである。

それは距離が離れているという訳ではなく、公共の交通機関を使った場合どうしても遠回りになってしまふからであった。正直な話、直線距離を飛んでいけば半日ほどで着くのだが、それはできないので通常通りの方法で向かっていた。

現在、流司たちが乗っているのが最後の乗り継ぎの電車であり、このまま『神代』の本家の最寄り駅まで辿り着くことができる。

咲夜とアリスは慣れない環境に精神的に疲れてしまったのか、仮眠をとる程度に時間があることを流司が伝えるとすぐに寝入ってしまったのだった。

「それにしても妹紅はそこまで疲れていないように見えるよな。俺も最初はうんざりするような道のりだったんだが」

「まあ、一日かけて移動することは昔は普通だし、乗り心地が良いだけ楽ね。牛車なんて最悪なんだから」

「ああ、それは辛そうだな」

舗装も何もされていない道を牛車で移動するのと電車では天と地ほどの差があるというものだろう。

牛車での移動を知っていたのなら妹紅がそれほど疲れていないのも頷けると流司は感心した声を上げていた。

「こっちの流司の家もあんな感じなの？」

妹紅は外を流れる一般的な住居を指差して流司に尋ねる。

「いや、俺の家は一般家庭とは言えないからな。武家屋敷と寝殿造りが混ざったような感じだな」

流司は少し考える

と天井を眺めながら妹紅に答える。

「よく分からないんだけど……」

「そうだな、妹紅なら馴染みのある感じだと思っ」

「そうなんだ……」

そんな流司の説明に妹紅は少し沈んだ頷きを示す。

「残念か？」

「少し」

「まあ、家の中はこっちでいう“現代風”だからそれなりに楽しめると思うぞ」

「そっか。期待してる」

揺れる座席はどうしようもなく流司と妹紅に眠気を促すような心地よさを与えてくるが、二人は眠ることはなく会話を弾ませていくのだった。

「随分とこの辺りは雰囲気が違うのね」

「まあ、この辺りは文化遺産の指定区域だからな」

電車での長旅を終え、歩き始めてから三十分ほど過ぎたところで咲夜が唐突に声を上げた。

それもそのはずである。空を埋め尽くすように聳え立っていたコンクリート製のビルはなりを潜め、変わりに木造のこの国古来の建造物が辺りには広がっていたからだ。

今までが“外”らしい風景だとすれば、今流司たちが歩いている辺りは“幻想郷”に近いものを感じさせるかもしれないだろう。

「文化遺産？」

「指定区域？」

聞き慣れない言葉にアリスと妹紅の二人が首を傾げる。

「この辺りは『神代家』を筆頭とした『龍神』様の氏子の一族が昔から住んでいる土地だからな。文化的に貴重とされる建物が多いんだよ。それで保護の為に文化遺産として景観を壊さないようにしているってわけだ」

『鱗龍文化保護地区』。

それが『神代神社』を中心に広がる氏子、又はそれに連なる家系のものが古来より生活をしてきた地域である。

その歴史は京都や奈良に匹敵する、もしくはそれを上回るとされている。神社や仏閣に値するものは『神代神社』以外には存在していなかったが、それぞれの家屋が少なくとも半世紀はくだらない歴史を持つものであったことから文化遺産の指定を受けることになったのだ。

「観光客やなんやで色々大変なんだが、これからもこの風景が残っていつてくれることは純粹に嬉しいよ」

そう言い流司は顔を綻ばせる。

それは変わらぬ風景があるということを中心に喜んでのものであった。

「おつ、流司の坊ちゃん。久しぶりじゃねえーか？」

「晋さん。どうもご無沙汰しています。だいたい、一年ぶりですからね」

流司の姿を見つけた屈強な体つきをした男性が声をかけてくる。

『志羽晋』、流司の幼少の頃からの知り合いである。

「聞いたぜ？なんでも、『神代神社』の分社を任せられているんだってな。まだ、成人もしてないってのに大したもんだ」

「えっ、あ、はい。何とかですけど頑張っています」

一瞬、晋の言葉を理解できなかった流司であったが、すぐにその意味を理解すると晋の言葉に合わせて答える。

つまりは“表向き”はそういうことになっているのだ。

「ところで後ろの別嬪さんは流司の坊ちゃんの“これ”かい？」

「違いますよ。彼女たちは向こうで御世話になった人たちです。帰郷のついでに案内でもしようかと思ひまして」

小指を立てて流司にそつと耳打ちする晋に流司は同様を見せることなく平然と答える。

とはいうのは晋は流司が女性（主に早苗だが）と一緒に歩いている度に似たような発言をしているものだから流司も今ではこれも晋の挨拶の一つだと思つうようになっていたのだ。

「がっははっ、そりやそうか。ちと待ってな、そういうことなら」

晋は豪快に笑うと己の店の軒先まで戻り、商品である幾つかの団子の包みを手渡してくる。

「流司の坊ちゃんか世話になつたんだってんなら俺が何もしないわけにはいかねえだろ？ 持っていきな」

「いつもいつも、悪いですよ……」

「いいつてことよ。流司の坊ちゃんにも食ってもらいたいしな。それじゃあ、浮気もほどほどにな」

流司に包みを手渡した晋は再び豪快に笑うと店の中に引っ込んでいってしまう。

そんな姿に流司はまた懐かしさを感じるのだった。

「なんだか、随分と元気というか、豪快な人ね」
店から幾分か離れたところでアリスが口を開いた。

「そうだな、小さな頃からよくしてもらっているよ。もう一人の父さん、いや親父つてのがしっくりくるかな？」

晋はというよりも、この辺りに住む人は皆、流司にとっては家族のようなものであった。

実際、遠い血筋にあたる家系も存在しているので嘘ではない。

「さて、着いたぞ」

「じじい？」

「ああ、『神代』の本家の裏手にあたる場所だな。表は神社の方に隣接しているから基本的にはこつちを使うんだ」

流司たちの前には裏手と呼ぶには似合わないような立派な門がある。基本的に裏手が表口の役割をしているとはいえ、そうそう目にすることはできないようなものであるだろう。

「では、おいでませ、神代家へ」

そう言って流司は一年ぶりとなる本家への門を開くのだった。

頁五十三、『息づく歴史』（後書き）

新キャラといっても脇キャラなので次出るかは……
ようやく到達。

長い……

先程、これを書いている時間ですが、仙台にいる知り合いから連絡があり、安堵したところです。

この小説の連日更新を止めないことが、読者の皆様の変わらぬ日常の一欠片、僅かな心の寄りどころとなることができれば幸いです。
顔も言葉も文字も交わしたことのない読者の皆様がほとんどですが、今日、明日、明後日と変わらずこの小説を楽しんでいただけることをお祈り申し上げます。

頁五十四、『神代家』

『神代神社』と隣接している『神代家』の敷地面積はかなり広い。具体的にいうのだとすれば稲作するのに十分過ぎる面積は優にある。

『神代神社』の本社と居住区は繋がっており、わかりやすく言うのならば『呂』という字の下側が神社の本社であり、上側が『神代家』の家であると言える。

このような隣接した造りになっているのはできるだけ傍仕えができるようにという考えからのものであった。

「流司様？」

「ああ、トメ婆。今帰ったよ」

流司は咲夜たちを引き連れ、ちょうど本殿の前で玄関先の掃除をしていた年配の女性に声をかける。

『久鷲乙女』。

『神代家』に仕える唯一のお手伝いである。

「はっ、ごうしてはおられません。流司様、そして、お客様方、しばし失礼いたします」

トメ婆は流司たちに頭を下げると姿を消し、

「旦那様ああー……っ……!!……!!……!!」

という声が次の瞬間には本殿の中から聞こえてくる。
能力でも使ったかのような早業に流司以外の誰もが呆気にとられて
しまっていた。

「……………流司、今のが……………」

「そつだ、ここのお手伝いのトメ婆だ」

妹紅やアリスよりも一足早く我に返った咲夜が流司に尋ね、流司は
苦笑しながら頷く。

“幻想郷”でも実力者である咲夜たちでさえ呆気にとられてしまう
ような行動を易々としてしまうトメ婆に流司は疑問を抱かざるを
得なかった。

「ず、随分とまた元気ね……………」

先ほどの晋といいトメ婆といい、あまりの力強さにアリスは圧され
っぱなしであった。

「因みに今年で晴れて米寿を迎える」

「……えっ……」

米寿といえは、八十八のことである。

純粹な人間であればいつぱっくり逝ってしまってもおかしくはない
年齢であった。

それだけに咲夜たちは再び啞然としてしまう。

妖怪などの人間より遙かに長生きするものの中で生きている咲夜た
ちであったからこそ、人間の寿命に關してもよく理解していたから
であった。

「妖怪なんじゃないのかな……」

「俺もそう思えてきたよ……」

妹紅の失礼極まりない言葉にも流司は疑いどころか、それが真実だ
というように納得してしまうのだった。

「それじゃあ、っ!?!」

流司が咲夜たちを家の中へ案内しようとした瞬間、

「かあああつつっ!?!?!」

上空から声が降りかかってくると同時に流司へと凄まじい速さで茶
色の細長い物体が迫る。

流司は飛来するものの正体を見抜くと手を翳し両手で挟み込むよう
にして受け止める。

「むっ、避けるでなく受け止めるとは……腕を上げましたな、御子
息」

「何度か、死にかけたんでね。嫌でも成長しましたよ」

所謂“白刃取り”で木刀を受け止めた流司は木刀を振りかぶった老
人『白雲吏妖』に微笑んだ。

「ふおっふおっ、それは僥倖。ようやく、俺も本気が出せそうだの
う」

「毎日、鬼のように鍛えられているんで勘弁願いたいけど……」

木刀を納めると更妖は顎髭を撫でながら笑う。

死にかけたことを引き合いに出す流司もそうだが、死にかけたことを僥倖と笑ってのける更妖もだいがいおかしいだろう。

トメ婆に続き、またもや表れた強烈な個性をもった存在に“幻想郷”の住人たちである咲夜たちももはや完全に言葉を失ってしまった。

「おや？こちらのお嬢さん方はもしや……」

「なんだ、雲爺うんじいは知っているのか。まあ、俺の命の恩人と言ったところかな」

呆然としている咲夜たちに気づいた更妖こと雲爺は実力を推し量るように目を細める。

「ふむ。女子おなひにして……儂も向こうで後継者を捜すかのう」

「まだ、見つかっていないのか……いい加減にしないとくたばつちまうぞ？」

「ふえふえっ、まだ逝くわけにはいかんわい。筋では御子息の友人であられる燧希殿が一番なんだがのう」

「分かったから。とりあえず、咲夜たちに挨拶をしてくれるか？」

「おおっ、これは済まんかった。儂は『白雲更妖』。『神代家』で御庭番をしておる」

流司の言葉に促されるようにして雲爺は咲夜たちに頭を下げる。

「十六夜咲夜ですわ」

「……藤原妹紅」

「アリス・マーガトロイドです」

咲夜たちも未だ戸惑いは隠せていなかったが、おずおずと頭を下げて応えるのだった。

「流司、御庭番って……？」

「御庭番ってのはなあ……」

「場師のようなものだと思ってくれれば結構じゃよ」

「それもそうだが……うん……」

妹紅の問いに流司が答えようとしたところを雲爺が簡潔に説明する。そんな説明に流司は齒切れが悪く首を傾げる。

『御庭番』という言葉が一般的に示すのは江戸幕府における職名のことである。

その仕事は普段は庭番をするが、將軍などの命を受けて諜報活動をすることで、現在でいう“スパイ”のことであった。

しかし、『神代家』における『御庭番』とは少々意味が変わる。

まず、その起源は平安の後期まで遡る。

『御庭番』とは“庭を守るもの”、つまりは『神代家』の当主を守るための存在であった。

『神代家』は中央に対しての影響力が少なからずありながらも、絶
対な中立を保ってきた。

それを疎ましく思った者より当主の命が狙われることもあったのだ。
そこで“庭の番をして侵入者を防ぐ”ということが『御庭番』の始
まりであった。

それが現在では形を変え、庭師としての役目と『神代家』の嫡子に
護身術の一環として剣術指南するということになっているのだ。

「とはいえ、御子息は全く剣の才はなかったがのう。回避や防御に
関してはそこそこの才じゃったが……」

「これでもそれなりの腕はあるんだけど……」

説明を終えた流司を雲爺は才がないとはっさりと切り捨てる。

流司も自分でいっているように決して弱い訳ではない。

とは言ってもそれは凡人としてはそこそこと言ったものでしかない。

「かつかつ、そうじゃのう。儂の木刀を白刃取りするとは、久しぶ
りに揉んでやるとするかのう」

「その前に私が揉んでさしあげましょうか？」

「と、トメ……」

「あなたは庭の手入れの途中でしたでしょう？それとも、今ここで
あなたの庭を手入れしてあげましょうか？」

いつの間にかに姿を表したトメ婆は雲爺の長い髭と淋しくなり始め
た頭を冷たく見つめて言う。

そこからの雲爺の行動は早かった。

「じめんつかまつる」

と言い残すと先程のトメ婆を彷彿とさせるような速さで流司たちの目の前から姿を消すのだった。

「部屋の準備ができましたので御案内致します。申し訳ありませんが、流司様は自室にお召し物を御用意しましたので着替えをお願いします。私はお客様方を御案内しますので」

「分かった。俺の恩人だからくれぐれも失礼のないように頼む」

「畏まりました。では、こちらへ」

深く頭を下げたトメ婆の後に続き流司たちは家の中へと入っていきのだった。

頁五十四、『神代家』（後書き）

その頃、あの人は……

其の四、『香霖堂』編

「つてよ。聞いているのか？香霖？」

「ああ、聞いているよ。魔理沙こそ、さっきから何度同じことを言っているのか分かっていていいのかい？」

霖之助は下がっていた眼鏡をかけ直すと読んでいた本を閉じてうんざりするようになり、魔理沙へと顔を向けた。

魔理沙は『香霖堂』を訪れてからというものと同じこと。流司が“外”へ一時的に帰ったこと。しか話していない。

「だってよ、香霖。狡いとは思わないのか？」

「ああ、思わないね」

魔理沙の言葉をばつさりとし、霖之助は切り捨てる。

流司が“外”へ里帰りしたことに同伴者がいることを知ったときは霖之助も羨ましく思ったが、よくよく考えてみるとそうでもないということが分かっていった。

「どうしてだ？」

「“外”はそれほど良いものではないからさ」

「まるで“外”に行ったことがあるような言い方だな？」

「そうだと云ったら？」

霖之助はほくそ笑むように魔理沙に言う。

実際、霖之助は“外”へ行ったことがある。

否、“外”に行ったような夢を見たことがあった。

それを思い出す限りは特別“外”へ行きたいとは霖之助は思わなかったのだ。

“外”の道具に興味はあるが、“外”自体に情景は全くない。

自分にはここではない道具屋をしている方が似合っているということ。霖之助はよく分かっていた。

「魔理沙、隣の家の芝は青いんだよ」

「？」

そう、“隣の家の芝は青い”。

だが、手にしてしまえば一緒。

むしろ、筆ってしまったために色褪せてしまっているかもしれないだろう。

「（本当に得難いものはそれを知っている友人なのかもしれないね……）」

そんな考えを巡らせながら霖之助は再び本を開き、隣の家もこの家の芝の色も知っている友人の帰りを待つのだった。

完全で瀟洒なお手伝い、トメ婆こと『久鷲乙女』。
辻斬り御庭番、雲爺こと『白雲吏妖』の登場でした。

雲山とは全くの関係はありませんのであしからず。

主人公の回避能力の上達にはこんな理由が……

因みに吏妖は乙女ほど年はいっていない設定です。
次回は親父の再登場です。

頁五十五、『鬼灯之信仰』

「やはり、こちらの方が落ち着くな……」

洋服から用意されていた着流しに着替えた流司はほつと息をつくように呟いた。

長年の習慣というものはそう簡単には薄れず、学校へ通っていたことから洋服にも慣れてはいた流司であるが、どうしても和服の方が落ち着くと感じていた。

コンコン。

「どつぞ」

「失礼します」

襖を叩く音に流司が応えんとトメ婆が頭を下げて入室してくる。

「旦那様よりこちらを預かって参りました」

「これは……」

トメ婆が流司に差し出したのは藍染めの布と音の鳴らない鈴のついた根付けであった。

その正体、特に藍染めの布の正体に気付いた流司は驚き目を少し見開いた。

「これを父さんが？」

「はい。これからは流司様のことも“当主”として扱うように承
っております」

流司はトメ婆の手からそれら二つの物を受け取り尋ねる。

トメ婆は頭を下げたまま流司の問いに淀みなく答えるのだった。

「そうか。この後は父さんのところへ行けばいいんだな？」

「はい。旦那様は御自室でお待ちしておられます」

「分かった。下がっていいよ」

「失礼します」

トメ婆の態度はそのままに流司が“当主”であることを示していた。
それに流司もならい“当主”としてトメ婆に接したのだ。

そこには年齢などを感じさせない、主と臣としての関係があるだけ
だった。

「まさかこんなにも早くこれに袖を通すことになるとはな」

藍染めの布の正体は背に『神代家』の家紋の描かれている羽織であ
った。

これは『神代家』の当主以外が羽織ることは許されないものである。
即ち、流司の父である隆斗が流司に羽織を渡したということは正真
正銘、流司は『神代家』の当主として認められたということなのだ。

「それに鬼灯おにとうか……」

渡された小さな絵馬を思わせる根付けに描かれているのは流司の証

押であつた。

これもまた当主となる際に渡されるものである。

流司の証押は“鬼灯”を基としているものであつた。

鬼灯の花言葉は“心の平安”、“不思議”、“欺瞞”など多岐に渡る。

“転逆”という能力を持った流司を示すものとしては狙つたように的を得ているだろう。

“動揺”しても“冷静”といられるのは“心”を“平安”と“欺瞞”しているからであり、それは“不思議”としか言いようがない。

だが、流司に与えられた意味はそれらのいずれでもない。

隆斗が流司に鬼灯を模した証押を与えたのは“自然美”の意味を込めてであつた。

それは自然体での信仰をし続けられるようにという思いからのものであつたが、ある意味でそれ以上の意味を持っているだろう。

“自然美”^{あじのまみ}とはまさに『龍神』の末裔として正しい姿である。特に“転逆”という力を持ち、“自然”を“自分”を変えることのできる流司にしてみれば“自然美”とは反故すべき己なのだ。

故に流司は“空”でありながら“実”のある存在であつた。

能力を発現した流司は恐らくは『神代』の中でも久しく先祖に返っている。

だが、それに反して『神代』の末端である流司は最も神から遠ざかり、限りなく人に近いのである。

種族でいえば流司は間違いなく“人間”だ。

けれども、純粹な“人間”ではない。
それは流司だけにあらず、『神代家』に族する全てのものに言える
ことである。

「さて、行くかな？」

そのいつそのこと空虚とさえいえるような“流司”という存在がど
ういった意味を持たされ、持つのかは未だ誰も知ることは叶わない。
それこそ、『龍神』のみぞ知るのだろう。

部屋に入った流司を向かい入れたのは厳肅な雰囲気を纏った隆斗で
あった。

それは“父”ではなく“当主”としてのあり方であった。
だがそれは流司とて同じことであった。

「失礼します」

敬語を使つてはいるが、流司は以前までのような敬意をそこには込
めていない。

流司もまた“子”でもなければ“次期当主”でもなく“今代の当主
”として隆斗に対していたからだ。

“藍染め”を纏うということはそういうことであった。

隆斗は無言で流司に座るように促す。

流司はそれに肅々と従い隆斗の前に座すのだった。

「まずは無事にこうして顔を合わせる事ができたことを嬉しく思う。よく、帰ってきたな」

「ありがとうございます」

顔を伏せていた隆斗が流司を見据えて言い、流司は頭を下げる。

「して、務めの方は？」

「滞りなく済んでおります」

「そうか……」

流司と隆斗は必要以上の言葉を交わしはしなかった。

それはあくまでも“事実”のみを必要としていたからであろう。

「そちらは？」

流司の言葉から敬語が消える。

今までは“当主”から“次期当主”への命であったが、確認がとれた時点で正真正銘の“当主”と“当主”の関係へと至ったからである。

「「こちらが変わらぬ。否、緩やかな盛衰の繰り返しと言っべきか……」

それを隆斗はどんな思いで口にしたのか。

変わらないというのは“平均”で見た場合のこと。

正しくは“平衡”であって、“隆盛”と“衰退”の釣り合いがとれているに過ぎない。

具体的いえば、特定の時期が賑わっているということであった。

それは『神座参』であったり『初詣』であったりと行事であるから賑わったのであって、純粋な信仰としてのものではないことは流司には十分に窺い知ることができた。

「……………」

なので流司はその言葉に対して無言の返答を返した。

“信仰は頹廃する”

それは流司と隆斗、双方が一致した見解であった。

少なくとも“科学”が進歩を止めない限りは“信仰”潰えずとも廃れるのだ。

その結果、消え逝く“神”がいるのだとしてもそれはどうしようもないことであった。

「堅い話はこちらまでにするでしょう」

「そうだな……………」

唐突に、張りつめ重々しかった空気を隆斗は霧散させる。

それに同調し流司も顔を綻ばせる。

両者ともにそれは“諦め”だったのかも知れない。

一人は“頹廃”を受け止め“滅亡”のない未来に希望を見いだした。

一人は“変貌”ありきの“不変”に揺るがぬ先を感じたのだ。

そう、それは共に“鬼灯”のように実がありながら実のない信仰の形であった。

頁五十五、『鬼灯之信仰』（後書き）

ちよつと、シリアスなターン。

次回は……？

「元気そうでよかったよ。何だか会う度に言っているようだかな」

「何が元気そうだよ、勝手に全て決めやがって。晋さんに尋ねられたとき焦ったじゃないか？」

「悪い悪い。でも、らしい建て前だろう？」

「まあ、な」

隆斗の軽い口調に流司も笑いながら答える。

既にそこには朗らかな空気が流れていた。

“当主”同士でなく、“親子”として流司と隆斗は会話を始めていたからだ。

「間違えるというほどではないが、少しは成長したようだな」

「色々とし難い経験をしたからね。馬鹿でもない限り、成長の一つや二つしていないと情けないっての」

確かに一歩間違えれば死ぬような経験をしておきながら、何の進歩も見せないようであれば、それは馬鹿以外の何者でもないだろう。

「はっはっはっ、そうかそうか」

そんな流司の非難めいた視線にも隆斗は笑い声を上げるだけであった。

それは隆斗が流司の経験したことを何一つ知ってはいないからだろ

うが、隆斗であれば知りながらも笑い飛ばしてしまうのではないだろうかという予感が流司にはあった。

隆斗のそれは決してその細い身体からは考えられない豪胆さからくるものであった。

心が強いということであれば流司もその質を受け継いでいる。

だが、隆斗はそれだけではない。

当主であるがこそその豪胆さ、そして狡猾さ。

“黒い”というわけではないが、“白い”わけでもない。

そんな“灰色”のあり方はまだ若輩の流司には真似ることのできな
いものである。

尤もそれは流司がまだまだ青く若いということであり、このまま経
験を積んでいけばそれに近い賢さを身につけることだろう。

晋の言葉にすんなりと合わせる事ができたあたりにその片鱗を感じ
させているかも知れない。

「それで俺は“分社を請け負った”ということになっているんだな
?」

「そうだ。真実を知っているのは極一部。乙女に吏妖、後は“支奉
家”のそれぞれ当主ぐらいだ。勿論、了承は得ている。『龍神』様
の信仰の為だ、快く理解してくれた」

「妥当なところか……ありがとう、父さん。助かったよ」

「なに、独断で決めてしまったようなものだからな。これくらい
責は負う。まあ、“至奉家”の当主には挨拶をしてくれると助かる
がな。」

「分かった」

“支奉家”というのは『神代家』から見て“四方”に位置している家のことである。

東の『篠之女家』。

西の『菅依家』。

南の『伊那縁家』。

北の『斎都名家』。

のことである。

これらの家系は『神代家』の遠い分家にあたり、『神代家』に跡取りがない場合はこれらのいずれかの家の人間が『神代家』の跡取りとして養子になることが習わしであった。

“支奉”というのは“四方”の当て字ではなく、“『神代家』を支え奉る”ということからきているもので、後に“四方”に因んで家を置いたのだ。

今では『神代家』との関係も形骸化し、どの家も神職には携わってはいない。

ただ、形として『神代家』の当主が何かを決めるときは“支奉家”に挨拶をするということは現在でも残っているのだった。

「それと何か“幻想郷”のことを証明できるようなものがあるといい。私と違って“支奉家”の当主は紫さんにも会っていないからな」

「証拠ね………こんなのでいいか？」

隆斗の言葉に流司は霊力弾を作り出して浮かべてみせる。

「おおっ！？これは？」

「靈力を具現化したもの。まあ、超常的な力だと思えばいいよ」

ふうと息をつくとき流司は靈力弾を霧散させる。

“外”であることがどう影響してくるか心配を流司はしていたが、特に問題はないようであった。

「なるほど……だが、できることならもう二、三何かあるといい。言っちゃ悪いがそれだけだとインパクトに欠ける」

「確かになあ……」

弾幕でも作り出せれば靈力弾であっても十分な衝撃を与えることができるだろうが、流司にそこまでの実力はない。

また、“外”で弾幕を作り出したとしたらどのような騒ぎになるか分かったものではないと流司は思っていた。

コンコン。

「旦那様、流司様。お客様方をお連れしました」

「入れ」

流司が腕を組み考え始めようとする思考に待ったをかけるようにトメ婆の声が響く。

隆斗は流司に正面から自分の横に来るように目配せすると短く入室を促す。

「失礼します」

「ほう……」

声を漏らしたのは当然のように彼女たちのことを初めて目にする隆斗であった。

トメ婆に促されるように部屋へ入ってきた咲夜たちは先程までのような姿をしてはいない。

だからといって、“幻想郷”での装いかといえはそういうわけではない。

そう、強いて言うのだとすれば『神代家』らしい姿であろう。

咲夜、妹紅、アリスの三人ともが一様に単衣を纏っ

ていた。

『神代家』 〃 『和服』 というわけではないが、基本的には隆斗もトメ婆も雲爺も皆、和服を主として着ている。

その方が古くからのこの国の家として威厳があるというのが隆斗の言い分であったりするのだが、実際は親から子、子から孫へと和服を着る習慣が受け継がれてしまったに過ぎない。

咲夜たちが和服を着ているのもトメ婆が服を洗うと言って着替えさせたからであった。

隆斗は真剣な表情で咲夜たちのことを見つめる。

それは彼女たちが『神代』に仇なすものなのか冷徹に見定めているようであった。

そのような隆斗の威圧感に咲夜をはじめ、妹紅とアリスも部屋に入っただけの腰をおろすこともできずにいた。

“幻想郷”でも実力を持つ咲夜たちをその眼光と存在感だけで怯ませる隆斗の存在に隣に座る流司は計り知れなさをひしひしと感じるのだった。

ガシッ。

組んでいた腕を解くと隆斗は向かい合うようにして流司の肩をしっかりと掴む。

何事かと、隆斗を除く四人の間に緊張感が走る。流司はツウーと背筋に冷や汗が流れたことを感じていた。

隆斗は流司の肩を掴んでいた右手を離し、振りかぶる。そして、

「流司、よくやった。これで『神代家』はあん……」

「言わせねえッ!!」

ガンッ。

拳を振り抜いたのは流司の方であった。

その勢いは凄まじく、死ぬことのない程度に霊力が込められていたことだろう。

結果、隆斗は畳に顔を叩きつける。

これが然るべき場所であったのなら、それは見事な“顔拓”ができたはずだ。

「た、い……だ……」

「「「……………」」」

「まあ、気にするな」

言葉を失ってしまった三人に流司は振り抜いた腕を回しながら座るようにと促す。

畳に顔を埋めた隆斗の横顔はどこか満足げで、その右手の親指が高

々と聳え立っていることを後述しておく。

頁五十六、『右手』（後書き）

期待を裏切らない親父でした。

サブタイトルはこれだけのためという。

前回との温度差が激しい……

またまた、新キャラの予感があるかもしれませんが、登場は……

“外”だとしてもオリキャラが増えてしまいますねえ……

因みに親父のターンはまだ終わらない！！

頁五十七、『当主』（前書き）

二本立て、二本立て
でもこれで三回目。
まず本編です。

頁五十七、『当主』

「この度は我が愚息が大変世話になったようで、感謝してもしきれません」

「いえ、私は何も……」

そう言う隆斗は咲夜、妹紅、アリスの顔をそれぞれ見て頭を深く下げた。

それは当主として、そして、父親としてできる最大の感謝であった。顔が赤く腫れていながらも咲夜たちが恐縮してしまうような存在感を出しているのは流石の『神代隆斗』であろう。

流司が咲夜たちのことを説明した後、隆斗は流司のことを下がらせた。

最初は流司も余計なことを言うのではないかと訝しんでいたが、隆斗が真剣な顔をしていることを察して素直に部屋から出て行った。それ故に今、この部屋にいるのは隆斗、咲夜、妹紅とアリスの四人だけであったのだ。

「流司が貴女方に救われたというのならそれは確かなことでしょう。まだ至らぬところの多い息子ではありますが、悪意のある嘘はつかない奴ですから」

そう言う隆斗の顔には若干の笑顔が浮かんでいた。

それは隆斗が流司のことを信じているということの表れだろう。

「そつね」

妹紅が頷くと残りの二人も首を縦に振る。

流司が“幻想郷”に慣れたように妹紅たちも『神代流司』という存在をある程度知るには十分な時間が過ぎていた。故に隆斗が言わんとしていることも分かっていた。

「それにしても……ふむ……」

隆斗は三人を特に妹紅とアリスを見比べるように視線を左右に移動させる。

「あの……何か……？」

そんな視線にたまらずアリスが声を漏らす。

誰であったって初対面の気心の知れない相手からじろじろと見られてはよい気持ちではいられないだろう。

これが遠目ならまだしも、密室された空間で対面している形であるならなおさらというものであった。

「ああ、これは失礼しました。年頃のお嬢さん方には不配慮でしたか。いえ、年頃とは言い難いですかね？」

「!？」

隆斗は意味深な笑顔を妹紅に向ける。

「それに貴女は人とは少し違うようで」

「ッ!？」

隆斗は妹紅に向けたのと同じ表情をそのままアリスに移す。

「貴女は人間であるようですが……そうですね、乙女と同じですが、主は私とは比べ物にならないようですね。人ではないのでしょうか？」

「!！」

最後に隆斗は微笑みを崩さないままに咲夜に顔を向けるのだった。

流司は咲夜や妹紅、アリスのことを恩人だということ以外は何も話しては
いなかった。
話そうとしたところを隆斗が制し、流司を部屋から退出させたためだ。

それ故に隆斗は妹紅たちが“何者”であるかは一切知らないはずであった。
にも関わらず、隆斗は妹紅たちの顔を見ただけでそれぞれのことを見抜いたのだ。
咲夜に至ってはその主のことまでをも推測を立てていたくらいである。

にこやかに笑う隆斗の笑顔の裏に妹紅たちは底知れなさを感じていた。
例えるならば、そう、妹紅たちはまるで“妖怪の賢者”と対している錯覚を感じていた。

「そのようすだと凶星ですかね。私の勘もなかなかにあてになるようです」

「勘……?」

「はい。これでも“当主”ですから人を見る目はそれなりにあるつもりですので。今回は“人”ではないようでしたけどね」

朗らかに隆斗は笑うもののその姿には全く油断することができないだろう。

流司も“神代”と“流司”とでは印象をかなり変えるが、隆斗のそれはもはや別人と言ってもいいかもしれない。

流司に対して“当主”として接していた威圧感はない。

だが、得体の知れないような存在感を妹紅たちは受けていた。

“幻想郷”の実力者たろう三人が一介の人間たる隆斗に冷や汗を感じていたのだ。

「そう、警戒しないでください。貴女方が“何者”であろうとも息子の恩人であることは変わりないですから。有り体に言えば“どうでもいい”のですよ」

どうでもいいと言いきる隆斗。

それを胆力や豪胆という言葉で片付けるのは些か難しい。

確かに『神代家』ほどの名家の当主となれば、胸に一物も二物も抱えていなければやってはいられないだろうが、それにしても底が知れないだろう。

それは決して流司の前では見せることのない顔であった。

「どうでもいい……」

「ええ、貴女方が流司に危害を加えないことは分かっていますから」

「仮に危害を加えたら……？」

妹紅のその発言には意志などは全くない仮定であった。だが、その発言は失言でもあった。

「その時は我が『神代家』が全力をもって御持て成ししましょう」

それは底冷えするような一言であった。

そして、ただの人間であるはずの隆斗が“幻想郷”の住人を圧倒した一言であり、妹紅たちがただの人間であるはずの隆斗に恐怖した一言であった。

震えることすら許されないような威圧感。

一瞬にして身体は硬直に至り、身動きがとれなくなる。

それは絶対なる

強者を前にした弱者のような姿であった。

「まあ、そんなことはないでしょう」

「……その根拠は？」

威圧感を霧散させた隆斗に咲夜は恐る恐るといったように口を開いた。

咲夜の質問に隆斗は三人の顔を見比べてから、笑顔を浮かべる。

その笑顔は先ほどのような冷や汗を流すようなものではなく、悪戯を思いついた子供が浮かべるような無邪気さを感じさせるようなものであった。

「勘ですよ、勘。この勘は前例があるだけ十分に信用できるものです」

勘と言う隆斗であったが、その瞳には確かな確信があるようであった。

「貴方は一体……」

その言葉を口にしたのは誰であったか？

少なくとも三人が同じ思いを胸にしていることは間違いないだろう。

「私はちよつと息子のことが過保護な父親ですよ」

そう言う隆斗の顔は確かに息子を思う親の顔をしているのであった。

頁五十七、『当主』（後書き）

親父の本気です。

『神代家』も人外魔境です。

少なくとも重鎮は。

まあ、考えてみれば“当主”である上に紫とさしで話し合うことが
できますからこれくらいは当然です。

隆斗の“勘”は霊夢を超えます。

どちらかという経験則からの“推測”ですね。
続いて、欄外です。

欄外、『とある神主の邂逅録』

飛び交う光弾。

その中を着流しを着た男、『神代流司』は絶妙のタイミングを計りすり抜けていく。

右へ左へ、上へ下へ、縦横無尽に動く流司の行動には一切の乱れがない。

すべくべきしてする。

最も避けるべきタイミングで流司は全ての光弾をかわしていた。だが、

「あつ、馬鹿っ」

「しまった!!」

まだ、未熟さが抜けてはいないことは否めないものであった。

霊夢の声も虚しく出力を抑えられた光弾は流司へとぶつかり何度目かわからない闇の淵へと流司を誘うのだった。

「……は……?」

流司が目覚めたときに目に映った風景は見知らぬものであった。何処かの川のほとり、“幻想郷”では見かけたことのない光景である。

「ここは“三途の川”、尤もあなたは“臨死”で来ているようだけどねえ……」

「なるほど、理解した」

流司は自分のおかれた状況を把握すると横になっていた身体を起こして立ち上がる。

流司の目の前には対岸の見えない川が広がっていた。

“三途の川”と言われてみれば納得のできる川であると流司は理解の色を示す。

「信じるのかい？」

「“妖怪”とはもう出会った、“死神”と会ってもおかしくはないだろう？」

「それは違くないねえ……」

流司の言い分に鎌を担いだ女性は感心したように呟いた。

“三途の川”に“鎌”を担いだとなれば、流司がその女性のことを“死神”と称するのも頷けると言うもので、実際その推測は正しいものであった。

「で、戻るにはどうすればいいんだ？このまま“三途の川”を渡るわけにはいかないだろう？」

「無銭乗船はいただけないね」

「乗船？」

「ああ、あたいは船頭だからね」

死神の女性が屋敷指差した方角へ視線を向けると流司の目には一舟の渡し舟がある。

しかし……

「ボロくないか？」

それはお世辞にも立派とは呼べないものであった。

あらゆるところが損傷しており、乗ったら最期違う意味でも二度と戻ってこれないだろうことは明白であった。

「あたい自慢の“三途のタイタニック”さ」

「いや、それはダメだろう」

“三途の川”に氷山が浮かんでいるとは流司には思えなかったが、あまりにも不吉な名前であった。

喩え、“三途の川”の渡し舟だとしても沈没するという前提があるような舟には乗りたくないと言司は心の中で漏らす。

「あたいだってそれくらいは分かって

いるさ。“三途の川”の川で死神が溺死だなんて目も当てられないからねえ。でも、渡し舟は地獄からの支給でね、“財政難”と言って再三の申請にもかかわらず全く相手にもしてくれないんだよ。酷い話だろう？」

「まあ、そうですね」

流司は少し圧され気味に相槌を打つ。

正直に言えば、“財政難”というなんとも世知辛い理由があること

に驚いてしまっており、流司は頷くことしかできなかつたのだ。
“地獄の沙汰も金次第”とは言ったものだと感じてしまうほどであった。

「そうだろう、そうだろう。その上、“人件費削減”とかで余計な仕事も増えるしやっつてられないよ」

「へえ、私の仕事は余計ですか、小町？」

「し、四季様？」

小町と呼ばれた死神が額からだらだらと汗を流しながら振り返る。

そこには一満面の（背筋の凍る）笑顔を浮かべた少女がいる。

死神の女性が“様”と敬称をつけたことから、上司なのだろうと流司は思っていた。

人は見かけによらない、そしてあの笑顔には見覚えがあると流司も無意識に冷や汗を流す。

「頼んだ仕事もせず、消えたと思ったらこのようなところで油を売って……真面目に船頭の仕事をしているようなら大目に見ようと思っただけですが、なんですかこの体たらくは！！？それも霊でもないものと雑談など、死神としての自覚が本当に貴女にはあるのですかッ！？いいえ、欠けていますね。こうなったら私が徹底的に教え込んで差し上げます！！その貴方もそうですよ？“三途の川”の近くにいたりということはそれだけで“死”が近づいてしまうということですよ。折角“臨死”で済んでいるのですから、そのところをしっかりと理解してください。いいでしょう、こうなったら貴方にもちゃんと己というものを理解してもらいます！！まず、貴方は甘いんです。確かに優しさというものは貴方の美德ではありますが、そ

れも度が過ぎれば悪影響しか与えません。ですから、あの巫女もつけあがってしまうのです。当然、それは巫女の責任でしょう。そうです、その通りです。しかし！！そのようにさせてしまった貴方にも少なからず責任はあるのです。なので、時には相手を責めてちゃんと自分というもの自覚させなければなりません！いいですか？甘やかすばかりでは自分にとっても相手にとっても良いことではないのです。時には心を鬼にしなければなりません。それが自分も相手も幸せになることができることなのですから。小町のようにいくら言ってもサボりを繰り返すものだっています。あの巫女がそうだとはいませんが、貴方ほど真面目ではないことは間違いありません。自分を律し他のものも律するのです。さすれば……

怒涛。

腰に手を当て説教を始める少女の勢いに流司は腹立たしいや訳が分からない、どうして自分のことを知っているなどといった感情や疑問を置き去りにしてただただ啞然としてしまっていた。

「こうなったら、日が暮れるまで話し続けるよ。諦めるんだね」

「えっ？」

やれやれだよというように首を振る隣の死神の態度に流司は絶句した。

そもそも目の前の少女は死神の怠慢を注意するはずなのにどうして自分がそれに巻き込まれているのだろうかという疑問がどうしても流司の頭には沸いてしまう。

「二人とも聞いているのですかっ!？」

「は、はいッ!?!」

結局、流司は『博麗神社』で意識を取り戻すまで絶叫に付き合わされていたのだ。意識を取り戻したときの流司の顔が曇っていたのは言うまでもなく、後にこの少女との再会で流司が驚愕してしまうのは全くの蛇足である。

欄外、『とある神主の邂逅録』（後書き）

ということ、サラミさんからのリクエストで説教させる主人公。まあ、まだ映姫様とは出会ってないのでこんな感じですか？

サブタイは“臨死録”にしようかとも思ったのですが自重しました。

次は250の感想踏んだ人です。にしても今回は早かったです。

頁五十八、『立ち合い』

刺すような視線がぶつかり合う。

その視線の主たちは睨み合ったまま動きだそうとはしない。

ただ、ひたすらに精神を研ぎ澄まし、動くべき瞬間を待ち続ける。

この張りつめた空気の中では雫が落ちる音でさえ騒音と化してしま
うだろう。

意図的に作り出された静寂に包み込まれた流司と吏妖の二人は互い
に手にした木刀の切っ先を向き合わせる。

疾ッ！！

吏妖が均衡を崩して流司に迫る。

そのまま上段から袈裟斬りに木刀を振り抜く。

流司はそれを見据えるとしかと自分の木刀で受け止める。

カンッ。

乾いた音が響き木刀がぶつかり合う。

だが、それで終わった訳ではない。

吏妖はもう一本の木刀をすぐさま横薙ぎに振る。しかし、流司は鏝
迫り合いから抜け出し、横薙ぎを弾き飛ばして再び距離をとるよう
にして吏妖と睨み合う。

「やはり、腕を上げましたな、御子息。身体の動かし方、判断力、
瞬発力が見違えるようでしたぞ」

吏妖は構えていた二本の木刀を下ろすと嬉しそうに笑う。

少し見ない間に流司が驚くような成長を遂げていたことを心の底から喜んでいたようであった。

「まあ、地獄を見てきたからな。それにしても雲爺が二刀を使えるなんて初めて知ったんだが……」

吏妖の言葉に答えながらも流司は驚くような口調で呟いた。

幼少の頃から流司は吏妖に剣の指南を受けていたが、吏妖が二刀を使うところは今日初めて見たのだった。

それも付け焼き刃などではなく洗練された動きのもので、それが吏妖の本来の型なのだと確信を流司は持っていた。

「ほっほっ、儂は元々二刀の流派ですので。昨日の御子息の動きを見て少し本気で手合わせしてもいいと思ったのでな。予想通りだったわい、はっはっはっ」

「少しって……」

笑う吏妖に対して流司はげっそりとした表情を浮かべる。

一連の吏妖の攻撃に対処することができたとはいえ、それは流司にとってギリギリの動きであった。

それを少しと言う吏妖は化け物じみていることは確かだろう。

「とは言ったものの、剣捌き自体はだいぶ鈍ってますのう」

「そりゃあ、一年以上握ってないもので」

流司は剣客を目指している訳ではないので、護身術の延長程度でしか剣を嗜んではない。

『神代家』の本家にいる頃は吏妖にしごかれていたが、『博麗神社』

はれては“幻想郷”に行つてからは一度も剣を握ることはなかった。それでは腕も鈍つてしまふというものだろう。

尤も、基本的に剣を握ることのない流司にしてみれば体術さえ忘れなければ良かったので、霊夢に地獄のように鍛えられている流司に剣の練習をする気などなく、できるはずもなかった。

「それは後で鍛え直すとして。御子息、何かを殺めましたな？」

更妖は表情を真剣なものに変えると流司に訊ねる。

「……ああ、妖怪や狩りをね」

流司は時折、人里での狩りを手伝つたりすることもあった。

猪などの動物は人里では貴重なたんぱく源なのだが、森に行かなくてはならない為、護衛が必要となる。

流石に流司一人で護衛をするのは無理であつたが、妹紅と偶に護衛を受けることもあり、狩りを手伝つこともあつたのだ。

最初こそ、実際に命を狩るという行為に躊躇いがあつたものの、次第にそれに慣れることができていた。

慣れるといつても、それは悪い意味ではない。

どちらかというと“覚悟”ができるようになったと言つた方がいいだろう。

「御子息は聡明故に言うことは特にない。その目じゃと十分に理解できているみたいだからのう。まあ、“飲まれるな”とは言つておく」

「心得とくよ」

吏妖の言葉にしっかりと流司は頷く。

「では、もう一本。次はこれで立ち会おうしょうかのう」

吏妖は脇に寄せてあった二つの包みを手に取るとその一つを流司へと投げ渡す。

流司が受け止めるとその手にずっしりとした重みがのしかかる。

「これって……」

包みから中身を取り出した流司が呟く。

「勿論、真剣じゃよ。ちゃんと許可はとっておるから安心せい」

「や、やっぱり……ってそういう問題じゃないから！！真剣で打ち合うって馬鹿なの！？」

包みの中身は刀であった。

その剣が名刀であることは流司にも鞘越しでわかるほどのものであった。

とはいえ、そのようなことは流司にとってはどうでもよく、真剣で真剣に打ち合おうとする吏妖の頭を疑うように声を上げる。

わざわざ、刃を潰してもいない真剣で訓練をしたいような人間は現代でそうはいないだろう。

少なくとも、流司はしたいとは思っていなかった。

「馬鹿とは随分じゃのう……妖怪が跋扈する地におるのじゃ、命をやり取りする経験は多い方がいいのではないかのう？」

「いや、まずはその状況にならない努力をするから……」

「努力が実を結ばないからこそ、死にかけたのではないかのう、御子息？」

「うぐっ……」

史妖の言葉に流司は言葉を詰まらせる。

全くもってその通りであったのだから仕方がないだろう。

「さて、殺りますかのう」

「絶対、字が間違っているよな。でも、いいのか？雲爺、それって家宝とか言っただけじゃなかったっけ？」

「『ざんごくけん 斬黒剣』のことかのう？」

「そうそう、そんな名前だった」

史妖は流司に手にした刀の刀身を見せる。

その刀身は漆黒とはいわれないが黒く光り、確かに“ざんごく”という名が似合いそうに流司には思えた。

『ほり 斬黒剣』は『白雲家』に伝わる家宝の刀で、ち 斬を黒で染め上げるという妖刀である。

その凄まじい切れ味に斬った者も斬られた者も躊躇いを覚えるという。

その為、『白雲家』以外、もしくは流派を継承したものでない扱えないという曰くがあるのだ。

「刀は振るってこそ意味を持つというものじゃ。偶にはいいじゃろ」

「その“偶には”で妖刀と対峙される身になって欲しいんだけど…」

「御子息！！以前より『塹黒剣』は妖刀ではないと言っておるじゃろう！！これは…」

流司の言葉に憤慨した吏妖が『塹黒剣』の由来について語り始める。こうなってしまうたら、長いと知っていた流司はあからさまにしまったという表情を浮かべている。

これは流司が幼少の頃から『塹黒剣』のことを“妖刀”と口にしてしまつ度に繰り広げられていた光景であつたからだ。

「流司、終わった？」

どうしたものかと頭を悩ませていた流司のもとに妹紅が顔を見せる。

「終わってないけど……いつか」

流司は幸いだと手にしていた刀をおいて妹紅の方へ歩いていく。熱く語っている吏妖にはその姿は見えていない。

「いいの？あれ？」

「ああ、その内、トメ婆が見つつけてなんとかするだろうからな。蔵だろ？今案内するよ」

流司は妹紅を連れて吏妖をそのままにその場を後にする。

吏妖の絶叫が屋敷に響き渡ったのはそれから間もないことであった。

頁五十八、『立ち合い』（後書き）

しごかれる主人公。

まあ、主人公が剣を持って戦うなんて、主人公らしいことはしないでしょうが。

ここから、妹紅のターン。

明日はシリアス？

「入っても大丈夫なのかな？」

「いいだろ？父さんにも許可は貰っているし、俺も“当主”だからな」

薄暗い蔵の中に明かりを灯した流司が、依然として蔵の扉の前で立つたままの妹紅の問いに答える。

『神代家』の蔵には歴史的に価値のあるものがごろごろとそれこそ腐るほど保管されている。

隙間なく積み重ねれば、十畳の畳の上に四メートルほどの山ができることだろう。

それでも、博物館などに寄贈や貸与しているので少ないほうであった。

そのような場所に部外者である妹紅を何気なく入れようとするのだから、妹紅が戸惑ってしまうのも当然であった。

流司が何気なく許可をしているのは“当主”である隆斗にも断りを入れており、流司もまた“当主”であることから自由に立ち入ることができるからであった。

「それに持ち出そうという訳ではないんだ。ここにあるものだって一般開放されているものがほとんどだしな」

基本的に『神代神社』の蔵にあるものは全て一般開放されている。量が量であるので常に全てという訳ではないが、三割ほどは『神代

神社』の境内にある宝物殿に展示してあるのだ。

それ故、『神代神社』では蔵所蔵のものに関しては見せることには
厳しくない。

“当主”である流司の立ち会いがあるというならば、実質見ること
のできないものはないだろう。

「さて、あるとすれば……」

薄暗い明かりに包まれた蔵の中で流司が呟いた。

ある程度の整理がされているとはいえ、相当数ある中から目的の
ものを探し出すのは非常に骨が折れるというものであった。

基本的に保存されている場所は古くより変わってはいない。

つまりはこの蔵の中には千年以上前から同じ場所に置かれているも
のも存在しているのだ。

これでは探すだけで数日が過ぎてしまってもおかしくはない。

「流司、無理なら別に………それにあるかも分からないし………」

それを薄々と理解しているのか当事者である妹紅も心なしか消極的
であった。

確かに『神代家』と妹紅の父親である『藤原不比等』に関わりがあ
ったといえ、謂われのものがあるとは限らない。

むしろ、『神代家』の立ち位置を考えればない可能性の方が高いで
あろう。

「いや、ある」

「えっ？」

流司の確信の持った声に妹紅は声を上げる。

今まで流司がこの蔵に入ることはほとんどなかった。

それこそ、両手で数えることのできる程度にしか入ったことはなかった。

だが、“ある”と言いきった流司。

それはあまりにも不自然なことであろう。

「あるんだ。絶対に……確か……」

どこか迷うように呟く流司であったが、その足取りは迷うことなく蔵の一角を目指して進んでいく。

「あつた……」

積み重ねられた物をずらし現れた木箱の中にそれはあつた。

木箱の中身は重箱のような漆の塗られている箱であつた。

箱の中に箱というのは妙な話であるが、それが間違いなく流司の探しているものであつた。

「（必要なときに思い浮かぶんだから……随分と都合のいい記憶だこと）」

流司は苦笑を浮かべながらその漆の箱を取り出した。

この箱の場所は“流司”が知っていたのではない。“リュウジ”が知っていたのだ。

能力の発現以来、流司は稀に“リュウジ”の記憶が脳裏に浮かぶことがあつた。

それは今のよう“リュウジ”が知っていることを“流司”が必要としているときにふと脳裏に浮かび上がるのである。

普段はそのような気配すら感じさせないのだから、実に都合のよいものであつた。

「これ……?」

「そうだ。『藤原不比等』がたった一つだけここに納めた、預けたと言った方が正しいか……」

後にも先にも、『藤原不比等』が何かを納めたのはこれだけであった。

少なくとも、“リュウジ”の記憶が“流司”の脳裏に浮かぶことはない。

つまりは“知らない”、または“知る必要がない”ということなのだろうと流司は思っていた。

「開けてみな。流石に何が入っているかまでは分からないんでな」

流司は妹紅に箱を手渡す。

箱はその大きさの割には恐ろしく軽い。

中身があるかどうかさえ怪しいというものだろう。

妹紅は受け取った箱を床に置くと静かに紐を解く。

入っていたのは小さな包み。それは不自然なまでに綺麗であった。

「なるほど、櫛か……」

包みから出てきたのは箱と同じ漆作りの櫛であった。

それを見て流司はこれが確実に妹紅へあてたものであると思う。

淡麗な作りではあったが、厄払いならまだしも櫛を神社に奉納するものなどいないだろうからだ。

「流司……」

「ああ、分かっているさ。父さんにも説明はしておく。本来の持ち

主の手に戻ったんだ文句などあるわけないだろう」

千年の時を越えて持ち主の下へ渡る櫛。

それだけで下手な物語はできてしまうのではないかと流司は思う。

「（“偶然” には出来過ぎている

。 “必然” には不確定過ぎるか……）」

流司には到底これが“偶然” には思えなかった。

だが、“必然” であるという保証もあるわけがない。

「（あるべくしてあるか……まあ、気にし過ぎるのも毒だな）」

「流司？」

「っああ、案外早く済んだな。時間もあるし外の観光でもするか…

…」

覗き込むようにして自分を見つめていた妹紅に答えるとそそくさと蔵を後にするのだった。

頁五十九、『櫛』（後書き）

今回、短いすね……

二千ギリギリ越えたあたりなので、
次回の引き続き妹紅のターンです。

頁六十、『斜陽の影』(前書き)

後書きが本編？

頁六十、『斜陽の影』

「あれは？」

「ホテルだ。まあ、この辺りでは一番の高級だがな」

「ふくん、あんなに高くする意味ってあるの？」

妹紅を連れて駅前まで出てきた流司が質問に答える。

その答えに妹紅は意味が分からないというように疑問を呈する。

「横に広いのでは土地代が高くつくが、縦に引き伸ばすぶんには土地代は変わらないからな。特に宿泊施設なんかはああなるんだよ」

『鱗龍文化保護地区』という観光名所や付近にある観光地へのアクセスがし易いという為に、再開発の進む駅前の土地は割高となっている。

妹紅が指を向けたのも近年新しく造られたホテル内蔵型のビルであった。

下層部分がショッピングモールやアミューズメント施設になっており、中層以上がホテルとなっている。

流司も何度か燧希や早苗と足を運んだことがあり、“随分と技術が発展したものだ”と老人のような発言をして呆れられていた。

「気になるなら行ってもいいが、どうする？」

「いいよ、外から眺めるだけで十分だし」

妹紅は残っていたソフトクリームのコーンを口に放り込むと素っ気

なく答える。

あくまでも周囲から頭一つ分飛び出しているビルが気になっただけで、妹紅にはそこまでの興味があるわけではなかったからだ。

「なら、他に行きたい場所はあるか？つても分かるはずもないか……」

「そうね。分からない。流司に任せる」

「任せるって言われてもな……」

妹紅は流司に一任するが流司は困ったように頭を悩ませる。

自分が今の“外”の状況に疎いということは流司自身理解していたので、どう行動したらいいのか見当がつかないのだ。

こんなことであるならば、トメ婆に何か聞いておくべきだったと流司は今更ながらに思う。

あの“完全で潇洒なお手伝い”ならばわけもなく流司が必要としている情報を与えてくれたであろう。

とは言っても、後悔は先に立たない。

現状が好転するような要素はないのだった。

「そんなに悩まないでも流司が行きたい所にすればいいんじゃないの？久しぶりの“外”なんだから……」

「正直に言っていない」

妹紅の言葉に流司はきっぱりと答える。

元々が里帰りという意味で“外”に戻っていたので、既にその目的が果たされたからには流司にあまり“外”でも目的はなかった。

また、流司は特殊な環境で育ってきたために同年代の青年とはだいぶ感覚にズレがある。

“幻想郷”ではそれがいい影響として表れていたが、今回ばかりは悪いものであった。

「じゃあ、戻る？」

「それも中途半端だと思っただよな」

目的がないことには妹紅が言うように家に帰ることが得策であった。しかし、今から戻っても中途半端に時間を持って余ってしまうのは明らかであった。

「時間を無駄にするよりかはいいと思うけど……海とも山ともつかないんだから、早く帰る分にはいいでしょ？」

「それだ!!」

「え？」

ガバツと顔を上げて流司が声を上げる。

それは妹紅の言葉を受けての閃きであったが、妹紅には全く訳が分からないことであった。

「“海”へ行こう」

『神代』の家があるのは周囲を山に囲まれた所謂盆地、内陸部である。かつてはその閉塞された環境から参拝に行くことが信仰心の強さを表していたという。とは言ったものの、技術の発展した現代では海岸線まで往復で二時間とかからずに行くことができるようになっていた。

「しまった……」

駅前を離れたのは昼を僅かに過ぎてから、時間は十分にある。だが、流司は訪れた“海”を前に呆然と立ち尽くしている。何故ならば……

「今は冬……寒ッ!?!?」

吹きつける海風に流司はたまらず身体を震わせる。凍てつい冬の海から吹く風は全くの容赦を流司に与えてはいなかった。

「流司って、偶に抜けているところがあるよね……」

妹紅は少し呆れを滲ませた声で震えている流司に声をかける。少し考えてみれば分かったことだろう。好き好んで真冬の海を眺めに行く物好きなどほとんどいるわけもない。

これが絶景であるならばまだしも、流司と妹紅が訪れたのは“海”としかいいようがない単なる海岸であった。

夏は多くの海水浴を目的とした人で賑わう砂浜も殺風景に広がるだ

けで人影などが流司の視界に移ることはなかった。

「妹紅は寒くないのかよ……？」

「寒いことには寒いけど……我慢できないことないから。それに“海”だからね」

妹紅は表情を綻ばせると波打ち際まで足を進めていく。

波がかかるかかからないかというギリギリを歩く妹紅は楽しげに流司には見えた。

“幻想郷”には“海”がない。

それは結局のところ“幻想郷”は“外”と陸続きにあることから仕方のないことであつた。

それ故に“幻想郷”に住まう者は“海”という存在を知っている者はいても、実際に見たことのある者は一部を除いていなかった。

妹紅もまた見たことのない一人であつたので心が躍るような感覚に不思議と身を委ねていた。

「そうかい、そりゃ良かったよ」

投げやりと言つたような流司の口調ではあつたが、顔には笑顔が浮かんでいる。

それは選択は間違つていなかったという安堵感と、流司自身が海に惹かれるものがあつたからだ。

懐かしい。

そう、流司は感じていた。

“海”は“生命の母”というぐらいであるので間違つてはいないだ

ろう。

人間である流司も海から生まれた生き物の一つであるのだから、懐かしさを感じたところでそれは真つ当な感情である。

「流司」

「ん？」

パシヤ。

「冷たッ！！」

流司の顔に霧雨のような細かい水滴が降りかかる。

声を上げた流司の前には悪戯に成功した子供のような笑みを浮かべた妹紅の顔があった。

「何するんだよ」

「ぼうつとしてたから起こしてあげようと思って」

妹紅は手に付いた水滴を払いながら流司の非難する視線に応える。確かにそれは流司に責があるので妹紅に責められる謂われはない。その方法も許容範囲内であるだろう。

「おかげでばつちりと目覚めたよ」

「ふふっ、どういたしまして」

流司は潮の香りを間近に感じながら顔に微かに付いた水滴を拭う。妹紅は海水の中に入れたことで赤くなっていた手を温めるように擦

り合わせている。
見るからに寒そうな姿であった。

「ほら」

「りゅ、流司ッ!?!」

それを見かねた流司は妹紅の手を己の手で包み込む。

「懐炉なんていう気の利いたものは無いんでな。これで勘弁してくれ」

焦ったような妹紅の態度を気にすることもなく流司は妹紅の手を握り締める。

ひんやりとした手が仄かな温かさを保つ手に包まれることで温度を取り戻していく。

妹紅の顔が冷たくなった手以上に赤くなっていたことに流司が気付かなかつたのは沈みゆく太陽の助けがお節介が。

「どうした?」

「う、ううん。何でもないから!」

「そっ、そっか……」

俯いていた妹紅に声をかけた流司に妹紅は勢い良く首を左右に振る。その気迫に流司が思わず撃いでいた手を離そうとしたのだが、それは思わぬ力によって叶わない。

やはり、幸か不幸か流司が動揺した一瞬のことであったので、流司がその感触に気付くことはなかった。

「さて、日が暮れると一気に寒くなることだし、そろそろ帰るか？」

「うん」

妹紅の頷きを確認したところで流司は水平線の太陽に背を向ける。

朱い光は砂浜に二つの影を映し出し、その影はしばらくの間繋がったままであるのだった。

頁六十、『斜陽の影』（後書き）

風祝は見た！

『守矢神社』。

そこは『神代神社』とはいかないものかなりの歴史を持つ神社である。

土着信仰という意味においてはその信仰心は『神代神社』のものを上回ることであろう。

そこには一人の風祝と二柱の神が住んでいる。

神社というのは“神の社”であるのだから、神が住んでいることは当たり前かもしれないがそういうわけではない。

そこには文字通りの意味で神様が住んでいるのだ。

「今日の夕食ごはんはなんだろなっ！！」

小躍りをするように『守矢神社』の母家を駆ける一つの小さな影がある。

その影の主の名を『洩矢諏訪子』。

『守矢神社』に祀られている神の一柱である。

しかし、その姿は少女、否、“幼い”と称した方が正しいだろう。多く見積もっても年齢は一桁を一つ二つ超えたところ。

とてもではないが、到底神には見えない。

頭に被る奇抜な帽子が神の証だと言われれば確かに、“常”ではないということとは証明できるかもしれない。

だが、このようななりでも諏訪子は“神”。
それも、崇り神として有名な“ミシヤグジ”と同一視されるほどの
神様であった。

「早苗、今日の御飯は、ヒツ!？」

諏訪子は台所で夕食の用意をしているだろう。『守矢神社』の風祝、
『東風谷早苗』に声をかけようとして言葉に詰まる。
「いや、声をあげることができなかったというのが正しい。」

ダンッ。

何かを叩きつけるような音が台所に響く。

それは包丁とまな板がぶつかり合う音であった。
それだけなら、夕食の準備だと納得することができた。

けれども、その叩きつける強さは料理をするときにでるような音で
はない。

まな板の上には数匹の魚が並べられている。

「ふふふっ、誰ですか、あの女は……」

ダンッ。

その内の一匹の頭が切り落とされ吹っ飛ぶ。
早苗が握っているのが、肉切り包丁や菜切り包丁であれば力任せに
切っても頭を落とすことはできるかもしれない。
だが、早苗が手にしているのは極一般的な包丁であった。

「久しぶりに見かけたと思ったら、あんな楽しそうに二人で歩いて」

ダンッ。

「ヒッ……早苗……？」

早苗の細い腕からは考えられないような力で早苗は魚の頭を落とすていく。

心なしが諏訪子にはまな板まで包丁が突き刺さっているように見えた。

「諏訪子様？じきに用意ができるので神奈子様と居間で待っていてくださいね？」

「はっ、はいっ！……！」

諏訪子は脱兎の如く、その場を後にする。

底知れぬ恐怖に諏訪子にはそれ以上その場に一人で居続けられる度胸がもてなかった。

「確かに流司さんと私はそういう関係じゃありませんけど、帰ってきているなら一目顔を見せてくれてもいいじゃないですかっ！！！」

ダンッ。

『東風谷早苗』。

『守矢神社』の“現人神”にして、“祟り神”『洩矢諏訪子』の遠い末裔である。

ダンッ。

『守矢神社』の食卓の行方はどっちだ!!

ダンッ。

続く？

この結末を誰が予想できただろうか？

本編、かなり書いてて痒くなつたのに後書きこれだよ!! (笑)

そろそろ、恋愛のタグ入れてもいい気がする……

でも、イチャイチャはしない。

むず痒くなりそうなシーンは書くけどね!!

やっぱり、妹紅が一番ヒロインしています。

満を持して早苗の登場。やはり、真打ちは最後じゃないと。

たぶん、つか絶対続きます。

では、明日。

次は咲夜のターン。

つか、2ヶ月経ってるし……

吃驚だよ!!

頁六十一、『味噌汁』

「ん？」

「むう……」

「ふむ」

それに気が付いたのは三人同時のことであった。

流司、隆斗、吏妖の三人は何かを訝しむように眉を顰めると再び手にしている御椀を口元へと近付ける。

そして、再び、

「うん……」

「むむっ？」

「ほう……」

三者三様の反応を示すのだった。

一樣にして吟味するように味わい更に眉を顰めていく。

「乙女」

「はい、旦那様」

隆斗は御椀と箸を御膳の上に置くと傍らで控えているトメ婆に声をかける。

「今日の味噌汁は少し味付けを変えたのか？」

「少し濃いめだのう……」

「味噌の味が際立っているな」

隆斗の問いに続くように吏妖と流司がそれぞれ呟く。

それはほんの些細な変化でしかなかった。

実際、『神代家』で朝食を取るのが二度目である妹紅やアリスは分かっ
ていないようで、味噌汁を口に運んでも首を傾げるだけであっ
た。

長年、トメ婆の作る味噌汁を飲み続けてきた隆斗、流司、吏妖の三
人であったからこそ気付くことのできる程度のものであった。

「やはり、旦那様方は御気付きになられましたか。いいかがでしょ
うか？」

隆斗たちが気付くことが分かっていたかのようにトメ婆は頷くと隆
斗たちに感想を求める。

「美味しいことには変わらない。しかし、違和感が残るな」

「そう？俺はこの味付けの方が好きだけど……？」

「俺は今までの方がいいのう」

隆斗は当たり障りのない回答を、流司は好みだと断言し、吏妖は渋
い表情を浮かべる。

それは偏に年齢による嗜好の差が表れたのだろう。

「なるほど。流司様は好みですか……?」

「そうだな。だけど、どこかで知っているような味でもあるんだよな……」

そう言うと流司は再び味噌汁を口に運び、良く咀嚼するように味わっていく。

全く同じというわけではなかったが、流司にはこの味噌汁と似たような味付けの料理を食べた気がしてたまらなかった。

それもかなりの回数を味わっている気がするのに、一向に思い出すことが流司にはできないでいた。

「流司様がそのように感じるのも当然かと思われます。今朝の味噌汁は咲夜様に仕上げただきました故に……」

「ほう」

「ああ」

感嘆の声を上げる隆斗と吏妖。

流司は喉に引っかかっていた魚の小骨が取れたような声を出していた。

喻え同じ食材を同じ分量使ったとしても料理の味付けは人それぞれである。

特に味噌汁などの汁物に関してはそれが顕著に表れるという。

「どつりで知っていた味というわけだ」

「ん？どういうことだ、流司？」

「咲夜には料理の手解きを受けていたんだよ。尤も最近ではなくなっただけだな」

訊ねてきた隆斗に流司は答える。

以前は多かった咲夜監修の料理教室も最近ではほとんどない。

それは流司がある程度のレパトリーを増やしたことで、あとは流司自身の積み重ね次第であつたためだ。

「流司様の料理の腕が格段に上達している理由はそういうことでしたか……」

流司は『博麗神社』へ行く前にトメ婆からも手解きを受けていた。

しかし、それはあくまでも必要最低限のものであつた。

だが、昨日手持ち無沙汰だつた流司が夕食の仕込みの手伝いをしたときの手際の良さにトメ婆は若干の驚きを感じていたのだ。

尤もそれは咲夜から流司が料理を習っていただけでなく、一人の同居人や夕食時に突撃してくる人の要望を応え続けたからであるのと言つまでもない。

「料理ができるということとは損はありませんよ、流司様。旦那様はからつきしですので、亡き奥様に似たのでしょうか」

「おいおい、それはないだろう、乙女……」

「確かに当主殿の料理は食べたものではありませんでしたからのう……亡き奥方様がいなければ、修業の時点で当主殿は亡くなつていただろうて」

「それは初耳だな……」

トメ婆、吏妖とも懐かしむように呟く。

流司は父が料理ができないことも母との間にそのようなことがあったことも初めて耳にするのだった。

「ならば、この吏妖めが教えてしんぜよう、御子息。あれはまだ当主殿が……」

吏妖は朗々と語りだし、隆斗はどこか焦りを感じさせるような無表情をする。

トメ婆は常日頃の微笑みを崩さず、妹紅は味噌汁を口に運んでは顔をしかめる。

アリスは何かを諦めたかのように黙々と箸を動かし、流司は周囲の様子を伺いながらも吏妖の話に耳を傾ける。

そして、咲夜は無言を貫き、微笑を浮かべ続けるのだった。

526

カチ、カチ、カチ、カチ。

静寂に包まれた室内に秒針が時を刻む音だけが響く。

「ふう……」

この部屋の主である流司が静寂を乱すように大きく伸びを一つする。目を落としていた書を閉じ肩を回し、首を解す。

「もう昼過ぎか……」

時計の針は天頂を過ぎ去り下り始めていた。
流司が部屋に入ったのはまだ針が上つているときであつたのでそれなりに長い時間部屋にこもっていたことになるだろう。

コトツ。

机の上に湯気が漂う湯呑みが置かれる。

「ああ、ありがとう、トメ……咲夜？」

お礼を述べようと振り向いた流司の目に映つたのはトメ婆の姿ではなく、予想外にも咲夜の姿であつた。

「私じゃ都合が悪い？」

疑問に思うように目をぱちくりとさせた流司に咲夜は不適な笑みを浮かべる。

「いや、そういうわけではないけど……何してるの？」

「貴方にお茶を持ってきたのだけど？」

「それはそつだ」

流司はズズズツとお茶を啜る。

「って、そうじゃなくて何で咲夜が！？」

「乙女さんに頼まれたからよ」

「なるほど」

再び落ち着いたように流司はお茶を啜る。

「って何でだよ!？」

「落ち着かないから乙女さんの仕事を手伝わせてもらっているのよ。とても為になるわ」

度々声を荒げる流司に対して咲夜は余裕の態度を崩さない。流司が一人で空回りしてしまっているようであった。

「そうか、折角なんだから少しは休めばいいと思うが……」

「あら、心配してくれるの?」

「そりゃな、色々世話になっているし、体調でも崩されたら心配もする。咲夜は一日中働いている気がするからな」

「そ、そう……」

「?」

流司の迷いのない言葉に咲夜は少しだけ声をこもらせる。

実際、流司の言葉は間違っていない。

“紅魔館”での咲夜にほとんどプライベートはない。

それだけに今回のことは二度とないような機会であったのだ。

「まあ、咲夜が納得しているならいいさ。でも、どうしてそんな格好を?」

咲夜の姿は“外”へやってきた日に買ったときの洋服であった。
トメ婆の手伝いをするには適していない姿である。

「これは今から買い出しに行くのよ。近場ならともかく駅前まで出るのならこの方がいいとのことだったから」

確かに『神代』の家の周囲であれば単衣姿であっても大丈夫かもしれないが、駅前にでるとなればそうも言えないだろう。

「場所は分かっているのか？」

「来的时候に大体の道は覚えたり、地図も貰ったわ」

「そうか……俺も手伝うよ。気分転換には丁度いいだろうからな」

「そう？なら、お願いするわ。一人で持てるか微妙な量だったから」

外で待っているわと言って咲夜は既に空になっていた湯呑みを持って部屋を後にする。

流司は立ち上がりながら身体を解していき着替え始めるのだった。

頁六十一、『味噌汁』（後書き）

こんな朝的一幕。

隆斗の弱点は料理が壊滅的なこと。

かわいい女子ならまだしもおっさんじゃねえ……

受験が終了しました。

長かった、もう経験したくねえ……

春から晴れて某国立大に通えます。

先生は目指してないんげすけどねえ。

前期落ちたんですけど、後期で受かりましたよ。

いやあ〜びつくり、なんとかなるもんですね。

思い起こせばセンター試験から幾日……

あれ？投稿ばっかしてたような……？

頁六十二、『針のない文字盤』（前書き）

後書きが本編？

再投稿。

携帯で修正すると文字超過でこうなります。

マジ不便。

そして、見てくれたかたごめんなさい。

ズレはありますが最後まであります。

頁六十二、『針のない文字盤』

「大体、こんなところか？」

「ええ、これで終わったわ」

流司は買い物袋を両手に下げながら隣を歩く咲夜に尋ねる。
買い物袋は咲夜の手にもあり、明らかに一人で運ぶことができるよ
うな量ではなかった。

「それにしても相変わらず量だな……仕方がないことではあるんだ
が……」

「家にいるのは流司の家族や乙女さんたちだけではないものね」

現在、『神代』の家に住んでいるのは隆斗、乙女、史妖の三人だけ
ではない。

『神代神社』に仕える巫女や神官で自宅からの勤めが難しい人を対
象に下宿としても母家は使われているのだ。

今は巫女が四人、神官が二人の計六人が母家で生活をしている。
基本的に下宿料は給与から天引きされ、実質その料金は食事代だけ
のようなものである上に、ほぼ全ての家事をトメ婆が行っている為
にその値段に反比例して非常に住み易い空間となっていた。

よって、ほとんどの者が『神代』の家で過ごしている。

過ごしていないのは所帯を持っている人ぐらいなものであった。

これは資格のない、所謂ところのアルバイトでも対象になっている。
なので中には大学に通いながら勤め、資格の取得を目指している巫

女もいるくらいであった。

「ああ、仕えてくれるものには最大限の礼を尽くすつてのが建て前だからな」

「建て前？」

「神職つてのは大抵が世襲制だからな。他の人にしてみれば嫌煙しがちな職なんだよ。それは『神代』でも同じだ。だからこそ、今いてくれる人を大切にしなきゃいけない。辛い環境では人は離れていく一方なんだから」

“世襲制”。

このことがこの国の神社などの信仰心が衰退していった一端を担っているだろう。

“世襲制”という現象が“継ぐものがいない”という状況を作り出した結果の頽廃。

尊ぶ者もいなくなれば、仕える者も消えゆく現実。

それが仕方のないことだとはいえ、今できることは砂上の楼閣の砂を固めることぐらいなもので、根本的な解決などそれこそ時を巻き戻すか、別世界に行くことしかないだろう。

潰えぬされど栄えぬ。

緩やかなその衰退は人の一生を思わせるようであった。

「……大変ね。貴方も」

「咲夜ほどではないさ。逆に俺は恵まれているだろう。閉塞された環境下であつても信仰が生き続ける世界にいれるんだからな」

それは流司の揺るぎのない思いであった。

神職に勤める者としてその信仰が失われることがないということとは幸せなことである。

そうだった意味では“幻想郷”に住まう流司は幸運と言えるものであった。

「そう……」

「それよりも、今何時だか分かるか？」

「ちよつと待って」

流司の言葉に咲夜が愛用している懐中時計を取り出す。

流司にとつても見慣れた銀時計であったが、どうしてか咲夜は懐中時計を開いて眉を顰めてしまっている。

「どうした？」

「いえ、故障かしら……？」

流司は咲夜の手を覗き込む。

だが、そこにあった時計の針は時を刻んではいないのだった。

「そうみたいだな」

「どうしようかしら？」

「直すしかないんじゃないか？」

「それくらいはわかっているわ」

咲夜はいそいそと懐中時計をしまい立ち尽くす。

「んじゃ、行きますか？」

「何処によ？」

「懐中時計を直しにだよ」

カチ、コチ、カチ、コチ。

所狭しと並べられた時計が様々な音を立てて時を刻んでいく。振り子時計や水晶時計だけでなく、水時計に砂時計、日時計、火時計。

更には音叉式時計に電波時計、原子時計と時計という時計が存在していた。

「こりゃ、ギアが少しズレとるようじゃ」

時計の針の音に紛れるようにして一人の老人が呟く。

手元には咲夜の懐中時計が内部の構造を露わにした状態で置かれている。

「んで直るのか、慶しい？」

「ふえつふえつ、直るも何もズレたギアを元に戻すだけじゃ。修理とも言えんわい」

『齋都名慶二』。

それがこの時計店を営んでいる老人の名であった。

『齋都名』の性から分かるように“支奉家”の一つであり、慶二は『齋都名家』の当主でもある。

尤も形骸化した今では細々と営んでいる時計店の店主でしかない。だが、かつては時計師として名を馳せていたおり、その腕を頼りに今でも全国から時計の修理などの依頼があるほどであった。

「ちと待つてな。ついでに整備もするでな。だいぶ丁寧に使っているようじゃが、劣化するもんはするからの」

「頼むよ」

慶二は専用の工具を取り出して手慣れたようすで懐中時計をバラしていく。

こうなってしまうと流司には門外漢であったので、懐中時計のことは素直に慶二に任せて部屋の隅にっていた咲夜のもとへと近付く。

「直すついでに整備もしちゃうってさ」

「そう、ありがとう」

「俺は何もしてないぞ」

「それもそうね」

半ば分か

っていたような咲夜のあっさりとした反応に流司は苦笑しながらも咲夜の横に並ぶ。

「何か興味深いものでもあったのか？」

「いいえ、ただ……」

「ただ？」

「時計の形はここも変わらないのね」

咲夜が見ていたのは最新式のデジタルアナログ複合の電波式の腕時計であった。

様々な機能が増えてはいたが根本的な時計の形は今も変わっていない。

「そりやそうだろ。時間が変わらないんだ。それを示す時計も変わらないだろう」

時間が決まった規格で過ぎていく限りはそれを表す時計もその形を変えることはない。

六十という秒刻み、六十という分を示し、二十四という時を表し続けるだろう。

「時間は時間さえも変えてしまうわ。不変なんてものはないのよ」

「時間が時間を変えるか……面白いことを言うの嬢ちゃん。ほれ、直ったぞい」

いつの間にかに整備を終えていた慶二が咲夜に懐中時計を手渡す。淀みなく時を刻む時計はまるで新品のように輝いている。

「ありがとうございます」

「何、流司坊の紹介だしの。大した手間でもなかったわい。それと流司坊、継承祝いじゃ」

そう言うと慶二は流司にも一つの懐中時計を手渡す。

「ありがとう、慶じい……ってこれ……」

流司は受け取った懐中時計を開いて戸惑いの声を上げる。
なぜならば……

「これ文字盤が逆さじゃないか？」

「“鏡時計”と言ってな。蓋の裏に鏡がつけられていてそこに映った文字盤を読むのじゃよ。まあ、嗜好品のようなものじゃな」

慶二が言うように蓋の裏には鏡があり、そこに映る文字盤は正しく見えているようであった。

「いや、それもだけど……この時計……」

慶二の説明でもまだ流司の戸惑いの色が消えることはなかった。

「“針”がないわ」

そう、この懐中時計には時間を示すはずの“針”が存在していなかった。

これでは時計の意味をなしているとは思えないだろう。

「それは元々“針”のない時計なのじゃよ」

「なんでぞ?」

「知らん」

「はっ?」

慶二の答えに流司は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「じゃあこれって……」

「時計としては使えん」

「……………」

無言で流司はきつぱりと言い切った慶二のことを睨む。
流石の咲夜も言葉を失ってしまっている。

「で、どつじると」

「お前にやるぞい、流司坊」

「いらねえよッ!」

「ぶおっ!」何と!」

「何と!」?じゃないから!」何をもっていると思っただよ!」?」

「一気呵成にまくし立てるよつに声を荒げて流司は肩で息をする。」

「流司」

そんな流司の肩を叩き咲夜が声をかける。

「咲夜も何か言っつけてくれよ……」

げっそりとした表情を浮かべた流司は咲夜に援護を懇願するように答えるが……

「無料で貰えるものは貰っておくべきよ」

「あっ、はい、そうですか……」

どこまでも逞しい思考の咲夜であった。

「どっしたのかねえ……」

流司は手に持った針の存在しない鏡時計を弄びながら茜の空に呟いた。

「いいじゃないアクセサリーとしても使えば」

「着流しにこれは合わないだろう?」

ファッションに疎い流司であっても流石に着流しと懐中時計が合わないことは察することができた。

「それでもないと思うわ。流司らしいんじゃないかしら？」

「それは誉めてくれているのか？」

「当然」

隣を歩く咲夜が口元に笑みを浮かべながら言う。

そんな様子に流司は首を傾げながらも納得したように懐中時計をしまつ。

「ねえ」

「ん？なんだ？」

咲夜の小さな呟きに流司が反応する。

「貴方は“幻想郷”に住むので良かったの？」

「いいも何もそうしなければならなかったからな」

「家族を残してでも？」

「……………」

咲夜の珍しい感情の籠もったような声に流司は立ち止まって咲夜のことを見つめる。

「短い間だけど乙女さんや貴方の家族がどれだけ流司のことを想っていることは分かったわ。どれだけ心配しているかもね」

「……………」

「乙女さんなんかは流司が死にかけたと聞いて顔を青くしていたわね。それなのに貴方は形の見えないものを信仰するために“幻想郷”に留まるというのかしら？他にも方法はあつたのじゃない？」

咲夜の実に的を射ている言葉に流司は困つたように頭を掻く。

咲夜だからこそ乙女の気持ち理解でき、咲夜だからこそ分かることがあつたのだろう。

確かに『龍神』が“幻想郷”に姿を見せなくなって久しく、その存在を知るものもほとんどいない。

特に咲夜は形のあるもの実際に仕えているおり、形の見えないものに仕え人生をある意味で決めつけられた流司の考えに疑問を抱かざるを得なかつたのだろう。

「貴方は「形がないわけではないさ」えっ？」

「形あるからこそ信仰するんじゃない。信仰が形作るんだよ」

「……………」

「『神代』はそうやって生きてきたんだ。うん、なんだかんだ言つても俺も『神代』に連なる一人なんだよ。結局、それ以外の生き方が分からないのさ」

空を仰ぐように流司は言う。

『神代家』を継がないという選択肢を与えられていた流司であつたが、『神代家』を継がなかつた時のヴィジョンが想像できた訳ではなかつた。

「私と一緒にね」

「はっ？」

「私もお嬢様に仕えること以外の生き方は考えられないもの」

「そうか……それは何だかな……」

流司と咲夜どちらも器用に思えて、どこまでも生き方の不器用な二人であった。

「人によつては馬鹿みたいな生き方に見えるんだろうな」

「それは私も馬鹿に見えるってことかしら？」

「かもな」

“幻想郷”という地に住まうものは皆自由だ。

閉塞された地に囚われていながらも、その生き方はどこまでも晴れ渡る空のように自由であった。

そんな中、流司や咲夜のようなあり方というのは異質に近いものなのかかもしれない。

「でも、私はこの生き方を後悔するつもりはないわ」

「俺もさ。決められていたかもしれない。それしか道がなかったかもしれない。でも、選んだのは他でもない“俺自身”だ」

決められた道であっても決めるのは己の意志。

流司も咲夜も“今”を悔やむような思いは抱いてはいないのだった。

「そう、ね……同族嫌悪って案外ないのかもしれないわ」

「ん？何か言ったか？」

「いいえ、早く帰らないと乙女さんに叱られてしまうわ」

「それは勘弁」

流司は少し歩調を速めた咲夜の後に続いて歩く。

二人の距離は目には見えない。

されど、時は静かに流れていく。

針のない文字盤は確かに時の流れを刻み変化をもたらしているのだから。

カチ、カチ、カチ、カチ……

風祝は見た！！

「どうしたんだい！？諏訪子!？」

『守矢神社』に祀られている神の一柱 『八坂神奈子』が今の机に伏せ、まるで何かに怯えた子供のようにガタガタと震えている諏訪子に声をかける。

確かにその見かけは子供のようであるが、かつては己と激動を繰り広げた諏訪子の怯えように神奈子は狼狽する。

「さ、早苗が……」

「早苗が!？」

神奈子は諏訪子のその言葉を聞いた途端に居間を飛び出していく。神奈子にとっても早苗は娘のようなもの諏訪子の様子から考えても一大事だと思い駆け出す。

だが、それは正しくも間違いであった。

諏訪子の言葉を最後まで聞いていれば状況には些細な変化が合ったかもしれない。

そう、神奈子の心構えという点で……

「今日も怖い……」

今の時間であれば夕食の準備をしているだろうと考えた神奈子が目

指したのは台所であった。

「早苗ッ……………」

台所へと辿り着いた瞬間、神奈子は凍りついた。

それはまるで昨日の諏訪子の姿を焼き増したようであった。

「ふふっ、昨日に続いて今日もですか……………しかも、別の人……………」

「早苗……………」

神奈子は台所で包丁を握る早苗の姿にかつての諏訪子の姿を幻視した。

心なしか黒いオーラが上がっているようにも思えるほどである。

「神奈子様……………？これだけ切り終わったらすぐにできますので、諏訪子様と一緒に待っていてくださいね？」

「何を……………いや、分かったよ……………」

何を切っているのかという言葉を読み込んで神奈子は頷いた。

明らかにまな板を刻んでいるように見えたが、それは自分が疲れている、信仰が減っている所為だと自分に言い聞かせた。

「ええ、美人でしたよ。確かに。同性の私も羨むくらい……………」

早苗自身も一般的に見た場合かなりの容姿であったが、隣の家の芝は青いのだ。

その上、その芝の傍に蝶が舞っているのだとすれば尚更である。

「でも！！胸なら負けてません！！いえ、私の勝ちです！！」

本人の前で言ったのならナイフが降り注いできそうな物言いである。同時刻、一人の従者の手が滑り死にかけた御仁がいることは語るまでもない。

「小は大を兼ねなくても、大は小を兼ねるんです！！」

神奈子が台所を立ち去る際、早苗の妙な掛け声を無視したこともまた語るまでもないことである。

ミシャグジが一柱、『八坂神奈子』。

ただ一つの懸念は夕食の封入物であった。

本編長つ！！

で余韻をまた台無しに。咲夜との距離はまだ微妙。

早苗？

黒いけど前向きです。

次はアリスですね。

ではまた次回！！

お気に入りユーザー登録が100件に達しました！！

ありがとうございます。

これを気にユーザー登録してくださった方でこのサイトで小説を執筆している方、もしくは数回に渡り感想を書いていただいた方でサイト登録している方をお気に入りユーザー登録させていただきました。

これからも応援の方をお願いします。

「ここをこうしてこうするのよ」

「えっと、こう？」

「違う違う。こうやってこう」

「あつ、こうね。できた！！」

「うん、初めてにしてはなかなか上手くいっていると思うわ。後はそれを繰り返していけばいいわよ」

『神代』の家の一室。

そこには数人の女性が集まって何かを試行錯誤するように声を上げている。

そこに集まっているものは皆二本の棒を持ち、傍らにはそれぞれ色とりどりの毛糸玉が転がっている。

そう、彼女たちは皆編み物に勤しんでいるのだ。

とはいえ、冬の凍てつくような寒さも僅かながら和らぎ始めた頃にセーターやマフラー、手袋といったものを作っても仕方のないことだろう。

よって、彼女たちが作っているのはそのような防寒着ではなかった。

彼女たちが作っているのは編み物で作った人形。

俗にいう“あみぐるみ”であった。

「本当にアリスさん上手ね。どうやったら、そんなに上手くなれる

の？」

「どうしたらと言われてもこれは経験を積むしか方法はないわよ」
非番の巫女たちに囲まれながらも人集りの中心にいるアリスの手は
すらすらと進んでいき、編まれていく毛糸は瞬く間に人形を形作っ
ていく。

アリスとて初めからこれほど手際よく編むことができたわけではな
い。

数々の努力を積み重ねてきた結果の成果であるのだ。

「でも、才能も必要でしょ？」

「これくらいのことなら頑張り次第で誰にでも出来るようになるわ。
確かに才能の違いで習得する早さは変わってくるけど」

「でも、アリスさんほどの才能を持つ人なんてそうそういないと思
うけど……」

一人の巫女が声を上げる。

アリスの裁縫などの才能は類い希なるものがあるので巫女の言葉は
確かに頷けるものであった。

その証拠に他の巫女たちもしきりに頷いている。

「そんなことないわよ。才能なんて案外身近に潜んでいるものよ。
例えば……」

とっ、とっ、とっ、とっ。

「アリス、いるか？」

「彼とかね」

「「「若様？」」「」

「はい？」

妙に声を高くして四組の眼光を一心に受けた流司は首を傾げたまま、開けた障子の前で立ち止まってしまっただった。

畳の上には手のひらほどの大きさのあみぐるみが鎮座していた。

「「「……………」」「」

巫女たちはそれを呆然と食い入るように眺めて言葉を失ってしまった。
ている。

「ほら、才能は身近に潜んでいるでしょ」

アリスはそんな様子の巫女たちのことを後目に自分の編み物の手を休めようとはしなかった。

「若様……生まれてくる性別間違えたんではないですか？」

「「「うんうん」「」

「酷いな、おい!?!」

流司は巫女たちの言葉に声を上げるが、彼女たちの心中も察して欲しいというものであった。

大ききこそ劣るとはいえ、流司は瞬く間に彼女たちが悪戦苦闘していたあみぐるみを一体作り上げてしまったのだ。

これでは女としてのプライドがずたぼろというものである。

「だって、数日前の夕食も若様が手伝ったんでしょ?」

「他の家事も上手ですし、手際もいいし……」

「挙げ句の果てにこれですから……」

「……ねえ……」

男女差別の少なくなってきた現代社会では流司のように男が流司や裁縫ができて当然おかしくはない。

だが、女の子ステータスの一つとしてそれらのことが存在していることは確かなのだ。

それ故、相当なレベルでそれらのことを習得してしまっている流司が生まれくる性別を間違えたのではないかという質問を抱かれてしまふのは仕方がないだろう。

喩えそこにどんな背景が隠されているのだとしてもである。

流司が裁縫を始めたのは霊夢との訓練の度に擦り切れてしまった着流しを繕うためであった。

その為、アリスに教えを請いた流司だが、元々手先が器用であった

こともあり、あっという間に自在に裁縫をすることができるようになったのだ。

編み物に関してもその過程で半ばおまけのような感じで習ったにも関わらず、アリスも驚いてしまうような早さで身に付けてしまったのである。

「そんなこと言われても喜べるかよ……」

「いいじゃない。できて損するようなことではないのだから」

「そうですね、若様。いくら、女装したり、家事が上手でも若様は男には変わりませんよ」

「本気で誉めようと思うのなら口元に浮かべた笑みをどうにかしろ。給料減らしてやるのか？」

口元に笑みを浮かべ流司を励ます巫女たちに流司は冷めた視線で通告する。

「そんなっ！？御無体な！！」

「職権乱用です！！」

「断固反対します！！」

そんな流司の言葉に巫女たちは姦しく騒ぐ。

実際、流司にはそれだけのことをする力があるので巫女たちにとっては死活問題なのだ。

尤も、その言葉が冗談であることはそれなりに付き合いの長い巫女たちには分かっているこ

とであった。

「だったら、もう少し俺を敬えっての」

「「「はい」「」」

溜め息をつくように言う流司に巫女たちは調子よく返事をする。

「ところで若様、何か用事だったんじゃないですか？」

「ああ、そうだった。アリス、買い物に行きたいんだろ？案内するよ」

流司がこの部屋を訪れたのはアリスが買い物へ行きたいということをももって言うっており、それだけの時間を確保することができたからであった。

「あれ？アリスさん買い物ですか？」

「ええ、材料も足りなくなってきたし、折角だからね」

「確かに折角ですものね」

アリスと巫女の一人は向き合い互いに納得したような声を上げているが、“折角”の後に続く言葉が二人の間で食い違っているのは言うまでもないだろう。

アリスは折角“外”に来たのだからという意味だが、巫女は折角“この辺り”に来たという意味で捉えていた。

「んじゃ行きますか」

「ええ」

「あぁっ、アリスさん。ちょっと……」

流司の後に続き部屋を出て行こうとしたアリスは巫女たちが笑みを浮かべて呼び止める。

くいつくいつと手で招かれたアリスの耳元に手をあて口を近付けるとごにごによと何かをアリスに巫女は告げる。

「ッ！！！！！？」

瞬間、顔を真っ赤に染めたアリスに巫女たちは満面の笑みを浮かべてアリスの背を押す。

当のアリスは恨みがましい視線を時折巫女たちに向けながらそんなアリスの様子に首を傾げる流司についていくが、ニヤニヤとした笑みを巫女たちは揃って浮かべ小さく手を振り続けるばかりである。

「いやぁ〜若様も隅に置けないね」

「まあ、皆さんいい人でしょうけど……」

「意外と競争率が高そう。姉としては色々心配ね」

姉というのは当然のように比喻である。

幾数年に渡って『神代神社』に仕えている巫女たちの中には流司のことを実の弟のように見ているものもいる。

「誰とくつつくか賭けてみる？」

「それは失礼だよ。でも、面白そう……」

「じゃあ、私は……」

などという会話が密かに行われ、果てには当主である隆斗までが参加することになっていたことを流司が知るのはまだまだ遠い未来のことであった。

頁六十三、『編み物』（後書き）

アリス デレ？

流司の才能はいずこへ……？

『神代神社』はますますカオスに……
次回にはもう一個もカオスかな？

頁六十四、『色』（前書き）

後書きが本編？

頁六十四、『色』

赤に青、黄、緑。

白、黒、茶、灰に紫。

朱に紺と色という色が辺り一杯に散りばめられている。

「これはどう？ってわかるわけないわね」

「だったら、初めから聞くんじゃないの？」

流司は顔の疲労感を隠そうともしないで、洋服を持ったアリスの問いに答える。

流司とアリスの周囲にある色とりどりの物の正体は全て服であった。店の大きさはそれほど大きなものでは何にも関わらず、既に店に入ってから二時間以上の時間が経っているのだから驚きというものだろう。

それもそうであった。

アリスが見るのは服のデザインだけでなく、装飾から縫い方、材質まで確かめている。

普通の人が服を選ぶより二倍も三倍も時間がかかってしまうのは当然の帰結であった。

「それでも女の子ってのは誰かに尋ねたくなるものよ」

「そついうもんかねえ」

流司は何かを思い出しているようにアリスの言葉に呟く。

脳裏に浮かぶ早苗も事あるごとに尋ねてきており、アリスの言葉に

は説得力があるように流司は感じるのだった。

ゲシッ。

「ッ〜！何するんだよ!？」

突然の脛への痛みで流司は声を上げる。

痛む脛を流司が見てみればそこにはアリスの足が綺麗に突き刺さっている。

アリスが履いているのはブーツであり、底が厚い為靴の中ではかなりの攻撃力を誇っているだろう。

「いえ、何となく蹴らなくちゃいけない気がして……」

「なあっ、霊夢みたいな……」

ゲシッ。

「!?!?!？」

流司の右脛に突き刺さったアリスのつま先が引き戻され、今度は左の弁慶の泣き所に突き刺さる。

骨に響く言葉にできないような激痛に流司は声にならない悲鳴を上げる。

「だから、どう、してッ!？」

「……何となく、よ」

痛みで言葉を切れ切れにしながら言う流司にアリスは再び何となく

と答える。

その表情は心なしに面白くなさそうであった。

「……何となくで蹴られる俺の身になってくれ」

「善処するわ」

流司の悲痛な願いにもアリスは前向きな否定を返すだけである。

善処するなどと言う言葉は魔理沙の“返す”という言葉と同じぐらい信用がないことだと流司は思う。

ゲシッ。

「ッ!?!」

「何となくよ」

再び流司の右脛に突き刺さるアリスのつま先。

流司は歯を食いしばりながらもこのままでは骨が折れてしまうのではないかという妙な現実味を帯びている不安に駆り立てられる。

妹紅のような不老不死ではないのだから勘弁願いたいと流司が考

ゲシッ。

えそうになったところでアリスの一閃が流司を襲い、その思考を強制的に停止させる。

もはや、痛みすぎて痛みを感じ始めなくなっているのではないだろうかかと流司は思う。

アリスの足蹴は流司がとあるタブーを犯さなければ止まるのだろうが、それを犯し続ける流司が凄いのか、それに気付くアリスの勘が

凄いのかは判断しかねると言ったところだろう。

ゲシッ。

「#&%*@!？」

数時間後。

流司は一つの紙袋を抱えながら足をどことなく引きずるように動かしアリスの隣を歩く。

ジーンズの下に隠されている流司の脛はジーンズの色と変わらないほど青く染まっているかもしれない。

「それにしてもこれだけで良かったのか？」

「ええ、いいわ」

流司は紙袋の中身を見ながらアリスに尋ねた。

抱えると言ったが、実際には抱えると呼べるほど紙袋は大きくはない。

中身は布や糸、針に糸と裁縫関連の道具や材料で埋まっていたが、そこまで珍しいというものではない。

「あれだけ、服を見といて買わないんだもの……遠慮することないのに……」

実際、流司はそこその財があった。

流司は基本的に散財するタイプではなく、『神代家』を継ぐことを決めてからは給与が与えられていたからだ。

これは『神代家』を継ぐと決めた時点で“流司”という一個人が『神代神社』に仕えているというように判断され、他の神官たちと立場を同じようにした為であった。

勿論、修業中の身であるので大した額ではなかったのだが、流司の性格の為にそのほとんどが残っていたのである。

故に日頃世話にもなっているアリスなどの為になれば惜しみなく使う程度の気概は流司にあったのだ。

「“外”の物を買ってもあの賢者がそうそう持ち込ませるわけないわ。でも、それくらいなら向こうでも手にはいらないう訳でもないから、見逃してくれるでしょうよ」

「ああ、確かに……」

“幻想郷”の意義を考えれば、“外”の物が無闇に入り込むことは避けるべきであった。

その点、紙袋の中に入っているものは“手に入りにくいもの”はあっても“手に入らないもの”はなかった。

「それに覚えてしまったものはどうこう言えないわ」

「まあな」

紫の能力をもってすれば記憶の改竄も容易ではあるのだが、アリスが覚えている

ことは“幻想郷”を崩壊に導くようなことではないので、そのようなことをする可能性はないだろう。

「さて、帰りましょうか？」

「いいのか？もう少しかかると思ってたんだが……？」

流司はアリスの言葉に意外な表情を浮かべる。

最初の洋服店を除けば、アリスは全ての店においてあっさりと買い物を終えてしまっていたからだ。

「デザインや装飾は色々あるけど、実際の作りは単一だから。もう十分見たわ」

アリスの言葉はそのまま今の“外”の在り方を示しているようである。

ありとあらゆるもので溢れかえっている“外”は一見複雑そうに見えるが、その実は単純明快である。

見せかけだけが華美に装飾されていき、張りぼての実体となる。

その根本は遙か昔から変わってはいない。

“服”はあくまでも“着る”為に存在し、“家”は“住む”だけの為に存在し続けている。

“温故知新”などという言葉があるが、“古き”を知っても“新しき”ものなど何一つとして生み出すことはできてはいないのだ。

複雑怪奇に見える“外”の世界は合理化、効率化の名の下に仕分けを繰り返され理路整然とした全く遊びのない空間でしかなかった。故にアリスは深くを知ろうとすることはできない。

そこには一切学ぶべきことを見いだすことができないのだから。

「そうか……アリスはどう思う？この世界のことを」

そんな真実を知ってか知らぬか流司はアリスに尋ねる。

「どうかしらね？嫌いという訳ではないわね」

「素直じゃねえーな」

「ツッるさい」

「ははっ」

回りくどいアリスの言葉を流司は笑う。

それも仕方がない。

アリスの立ち位置は“幻想”。
素直に“現実”と相容れることができるはずもなかった。

「どうやら、少しは気分転換になったようね」

「？」

「何だか、少し前は深刻そうな顔をしていたから。最近ではマシになったようだけど……」

「マジか？」

「ええ」

頷くアリスに流司は苦笑を浮かべる。

確かに流司自身“外”に戻ってきてからというものの、“幻想郷”にいたためか今まで気付かなかったようなことに気付き、どこか“外”というものを深刻に考えてしまうことが多々あった。

自分一人が考えたところでどうにもならないということは流司も分かっていたが、それでも考えてしまうのが神職の系譜に連なる者としての性であった。

流司はそれを表情に出していないつもり

であったのだが、実際にはほぼ全ての人に何らかの違和感を与えていたのだった。

「そっか、バレてたか……」

「バレバレね」

「んまあ、理解はしているから……ありがとなわざわざ」

「んッ、いいわよッ、ついで何だから!!」

笑顔を向ける流司にアリスは顔を赤らめて背けて答える。

そんな様子を見て流司は心で素直じゃないと微笑んだのだが、口に出すような真似はしない。

そうしたときにどんな悲劇が待っているかはほとんど理解していたからだ。

「ほらッ、早く帰るわよ」

「はいはい、今いきますよ」

未だに顔の赤いアリスを流司は苦笑しながら追いかける。

糸で結ばれているようなつかず離れずの微妙な距離。

その糸が何色なのかはまだ誰も知ることはないのだった。

風祝は見た！！！！

「諏訪子……」

「何？神奈子？」

真剣な面持ちを崩さずに、神としてのあり方を全面に押し出すような声色で『八坂神奈子』は呟いた。

その声に応えたのは『洩矢諏訪子』。

声自体は努めて冷静さを装っていたが、表情はまるでこの世の終末に直面してしまったかのように恐怖で強ばっている。

神奈子と諏訪子の視線の先にいるのはただ一人の人間であった。

正しくは純粹な人間ではないのだが、真正銘の神である神奈子や諏訪子からしてみれば、路傍の石程度の力しか持つてはいない存在であった。

そんな存在に神奈子と諏訪子の神二柱は現在進行形で怯え続けた。

諏訪子は言うまでもなく、神奈子の威厳さえも虚勢のようであった。

「フフツ、フフツ」

かの神二柱を恐怖に陥れている人間こそ、『東風谷早苗』。神奈子と諏訪子に仕えている『守矢神社』の風祝であった。

早苗が笑みを浮かべる度に神二柱が幻視している黒いオーラは濃度を増していく。

もはや、台所は闇に包まれたかのようであった。

それでいて早苗の姿を見失うことはない。

そこに“在る”ということがありありと分かるだけの存在感を発していたからである。

「早苗は間違いなくお前の子孫だよ……あれほどの存在感、下手な神だったら屈してしまうよ……」

「い、一応、感謝しておくよ。どうしてか全く嬉しくないけど……」

神奈子の言葉に諏訪子は顔をひきつらせて応える。

早苗は現人神。

諏訪子の遠い末裔にあたる存在であった。

ダッガンッ!!

「今度は金髪美人ですか……」

一つの頭が落ちる。

何処から仕入れてきたかは定かではないが、早苗の手には生きのいい鰻が握られている。

その鰻の頭を早苗は一刀のもとにその下のまな板ごと両断する。名だたる剣士も感嘆の声をあげるだろう御業であろう。

「ふふっ、あれですか？あらゆるジャンルを網羅しているともいいたいのですか？」

ダツガンツ！！

一匹、また一匹と鰻の頭が落ちていく。

その光景を間近で見ている神奈子と諏訪子を恐怖の底に突き落とすのは勿論のこと、男の本能的にも恐怖を煽る光景だろう。

「だったら、どうして、“巫女”である私がそこにいないのですかッ！！!?」

ダツガンツ！！

神奈子と諏訪子は同時に“そこなのかつ!?”という疑問が浮かんだが口に出すことはなかった。

“アレに関わってはいけない”という思いも同時に浮かんだからである。

その瞬間、何処かでお茶を啜っていた巫女がその驚異的な勘の鋭さを発揮して身構えたのだが、それは全くの蛇足だろう。

「“巫女”に“妹”属性じゃ足りませんかッ！！こうなったら……」

急に思案顔になってぶつぶつと呟き始める早苗。

それでいて鰻を捌く速さは微塵として落ちることがないのは驚異的だろう。

「今の早苗には関わらない方がいい。アレには私でも祟られるよ……」

「胃薬でも用意しようか？」

「せめて、食べ物が出てくることを祈るよ……」

神が何に対して祈るなどという疑問はこの際どうでもよいことであつた。

神奈子と諏訪子の思いはこれから直面する夕食ダークマターにどう対処するかの一点だけあつたのだから。

続く？

アリス ツンデレツン？

一番書き辛かったかもしれない。
ニヤニヤはしないけど、全身が痒くなる!!
もうね、もう……

ようやくもって最後。

『守矢神社』の食卓は主人公にかかっている!!

陽光を沢山取り込むことができるように大きく広がりのある窓。整然かつ無秩序に並べられている机と椅子。

その名とは裏腹に深緑色をしている黒板。

生徒たちの話し声で賑わう教室のとある一角が異様な空気に包まれている。

「メガネ……？いえ、そんなありきたりなのは……なら奇をてらつて……」

鬼気迫るような雰囲気でぶつぶつと呟くのは『東風谷早苗』。

高校一年生もじきに終えようというお年頃の女子高生である。

そんな早苗が狂犬もしくは呪いの人形のような存在感を醸し出しているというのだから、不気味なことこの上ない。

これが朝学校が始まってから昼休みである現在まで続いているというのだから、教室内にいる他の生徒は既に早苗はいないものとしている。

触らぬ神はなんとやらである。

そんな誰もが早苗の存在を無視している、否無視せざるを得ないな
か一人の女子生徒がショウ気を発している早苗のもとへと近づいていき……

スパッーン！！

早苗の頭を気持ちが悪くなるような清々しい一撃で机へと叩きつけ

る。

「はっ、にゃっ……うう、痛い……」

「はっ、にゃって、どんな声上げているのよ……」

「痛いんだけど……紗与……」

「痛いのはこっちよ。一日中、早苗のシヨウウ気に当てられている私たちの見になりなさいよ」

早苗の涙を浮かべた恨みがましい視線を黒く長い髪を揺らしている見かけだけであれば大和撫子を体現しているような女子生徒 『菅依紗与』が一蹴する。

朝からの早苗の様子にいよいよもって痺れを切らした紗与が早苗の黒いオーラを霧散させるべく立ち上がったのだ。

「シヨウウ気って酷いと思うんだけど……」

「いいえ、他のみんなを見てご覧なさい？」

紗与に言われるようにして早苗が教室に残っている他の生徒に視線を向けると一斉にして目を背ける。

言葉にするまでもないということであった。

「……………」

「わかった？」

「はい……………」

クラスの合致した行動に早苗はあんまりだという思いを抱く間もなく首を竦めてしまう。

「で、原因は……って大体は予想できているんだけどね」

早苗の前の座席に座った紗与は弁当箱を開きながら早苗に尋ねる。とは言え、紗与にはその原因となっているようなことは予測ができていたようであった。

「えっ?」

「どうせ、“愛しの流司さん”関連のことでしょう?」

「い、愛しのだなんて……」

紗与の言葉に早苗は顔を赤く火照らせ弁当箱を落としそうになる。小学校、中学校、そして高校と早苗との付き合いの長い紗与には何ももって早苗が暴走することになるかはよく理解していたのだ。

「流司さんねえ……随分と会ってないかも……」

紗与は支奉家の一つ『菅依家』の長女であったので当然のように『神代家』の嫡子である流司とも面識があった。

とはいえ、それは紗与、流司共に幼少の頃のことであったので中学校では顔を見かける程度、高校に入ってから姿を見ることさえなくなっていた。

「そういえば、分社が見つかったとかでその管理をするために“当主”扱いになったとか母さんが言っていたような……」

「それを詳しく!」

早苗はガバツと顔を上げると紗与に詰め寄るようにして尋ねる。

「教えるから、少し離れて」

紗与は詰め寄ってきた早苗を押しつけて話し始める。

「詳しくって言うても知っているのは流司さんが分社の管理を任されて基本的には分社につききりになるってことくらいよ。それ以上が知りたければ直接会いにでもいきなさい」

「そんなつ、直接なんて……」

再び早苗は顔を赤らめる。

そんな様子の早苗を紗与は呆れかえったような視線で見つめる。

「時々私は早苗が積極的なのか、そうじゃないのか判断に悩むわ……」

紗与は頬に手を当てて身体をくねらせる早苗を無視して弁当を口に運ぶ。

結局、この時間の内に早苗が昼食を終えることはなかったのだった。

「気になる……でも、直接会つのは……」

放課後、紗与と分かれてからも早苗の頭は昼休みに聞いた話で一杯であった。

流司がどういふ状況にあるのか早苗は何が何でも知りたかった。最低でも分社云々の話を、欲を言えば流司と共に歩いていた女性についてのことを聞き出したいと考えている。

しかし、聞くためには当然流司と会わなければならず、その口実が早苗には全く思い浮かばなかったのだ。

紗与がそれを知ったのならば呆れた表情を浮かべて、“会う”ということを口実にすればいいと言っだろう。

「こうなったら、わひゃっ!!!？」

「おおっ!!！」

早苗は突如首筋に感じた温かさに驚き飛び上がる。

その温かさを与えた人物もこれほどまでの反応は予想外であったのか、驚きの声を上げるのだった。

「りゅ、流司さん……?」

「悪い悪い。ここまで驚くとは思ってなかった」

早苗が振り向くとそこには缶コーヒーを手に行っている流司の姿があるのだった。

「びゅ、びゅって……?」

「どづしてと言われてもな……買い物とでも言えばいいか……」

「一人でですか？」

早苗は周囲に誰かいないか見渡しながら流司の返答を待つ。

「んっ？そうだけど？」

流司はキョロキョロと辺りを見渡す早苗の行動を若干疑問に思いながらも素直に答える。

流司は個人的な目的の為に街へと出てきていたのでその他に同行者を連れてきてはいなかったのだ。

無論、流司が声をかけたのならば誰かがついてきたかもしれないが、流司自身にその意志がなかったので今となれば詮のないことであった。

「そうですね……」

流司の答えに早苗はホッと息をついて胸をなで下ろす。

「早苗は今、学校帰りか？」

「はい」

「そっか、ならこんなところで無駄な時間を使わせている訳にもいかないな。暗くならないうちに帰れよ？」

それだけ言つと流司は手をひらひらとさせて早苗とは逆の方向へと歩き始める。

『神代神社』と『守矢神社』は駅を中心に見て正反対の方向にあるからである。

「あ、えっ、流司さん!!」

「ん?」

離れていく流司の背中に早苗は慌てて声をかける。

「あと、えと、あのですね……」

「ああ」

「あ、明日ってお暇ですか!?!」

「明日? うーん、一応用事があることはあるなあ……」

早苗の問いに流司は首を傾げて虚空を見つめるようにしばらく考えた後に答える。

「あつ、そう、ですか……」

「何か用事でもあったのか?」

「いえ、そういうわけでは……」

答える早苗は見るからに落ち込んでしまっている。

それは人の感情にそこまで敏感ではないものであってもはっきりと分かるほどであった。

「まあ、俺の用事に付き合ってもいいって言うなら時間がとれ」それだけでいいです!」

「おっ、おお」

流司が言葉を言い切る前に早苗は答えを出す。

流司はそんな早苗に圧されたようであったが、頷くと“明日、昼前にそっちに行く”と言い残して早苗の前から今度こそ姿を消すのだった。

流司と別れた後、上機嫌で『守矢神社』に帰った早苗の姿を見て今までとは異なるベクトルの恐怖を感じた神々がいたことは全くの余談である。

頁六十五、『風祝の憂鬱』（後書き）

ようやくもって、早苗のターン。

まあ、後書きでは登場していましたが。

女子高生な早苗さん。

さりげなく、新キャラ登場。

友達の一人くらいは必要かなと。

主にストツパー的な意味で。

次回は流司の弱点が明らかに!?

欄外、『とある神代の議事録』（前書き）

二本立て

欄外、『とある神代の議事録』

厳粛な空気の流れる部屋に『神代家』、または『神代神社』に仕えるものが当主である流司と隆斗を除き顔を互に見合わせている。その数は実に二桁にも上る。

『神代神社』に仕えている神職の人数は十と数人であるのでそのほとんどもがこの場に集まっているということであった。

性別、年齢、役職を問わずして一同が会することなどよっぽどのことがなければないことであった。

集まっている者の顔も皆真剣でそれぞれが何故ここにいるのかを理解した上で、事の重要性もまた十分に把握していると言えるだろう。

「待たせたな」

荘厳かつ重厚な男性の声が響き、その部屋にいた者は一斉に頭を下げる。

『神代隆斗』、現『神代家』の当主がその姿を現したのだった。

藍染めの羽織りをまといその存在をありありと示すようにして隆斗はその部屋で唯一の空席となつている座席へ歩き腰を下ろすのだった。

座った隆斗は周囲の顔を見渡して面を上げるように手で指示を出した後にその手を袖の中へとしまい込むのだった。

「近くに人はいないな？」

「はい。流司様は外出。十六夜様、藤原様、マーガトロイド様はそ

それぞれの客室にいらつしやいます。現状、この部屋に近付くような人はいないと思われます」

隆斗の問いに隆斗から見て右手側の最も近い座席に座していた乙女が答える。

辺りの気配までを鑑みるといつ『神代』の家の一室であるにも関わらず、それは異様なほどの警戒であった。

「今日集まって貰ったのは他でもない。皆も知つての通り、我が息子にして次期……否、現当主である『神代流司』のことだ」

流司が特例として当主となっていることは既に明らかになっているところなどで場が騒ぎ立つことはない。

だが、『神代家』や『神代神社』に仕える者が揃っていないが、そこに当主である流司の姿がないのはおかしいことであろう。そう、それは流司自身のことであるからであった。

「して、以前にもつて知らされていたことは真に事実でありますのかのう？当主殿？」

「無論だ。巫女の報告には嘘はなく、何より私の当主としての“勘”がそうだと言っている」

「ならば、文句はないのう。失礼した、当主殿」

隆斗に事実の真偽を確認した吏妖であったが、隆斗の淀みなき返答、そして“当主としての勘”という言葉に納得の表情を浮かべて口を閉ざすのだった。

「他に何か述べたいことがあるものはいるか？」

隆斗が尋ねるが誰も口を開こうとはしない。特に質問はないということの表れであった。

「今回の案件は『流司』の、そして、『神代家』、『神代神社』の今後を左右するものである。故に他言を禁じる」

単語の一つ一つにまで重みを含めた声色で隆斗は語る。

その当主たる威厳を感じさせる言葉に隆斗以外のものはただ耳を傾けるだけであった。

「また、これ以降の直接的な介入も禁じる。ただし、相手側からの接触の場合に限り有効とする」

隆斗の言葉は前もって決められていたかのようにすらすとした口調で述べられていく。

「正式な公表があつた時点での終了とし、それ以降は関わりはないものとする」

「正式な公表とは“儀”を執り行ったということでもいいのですか？」

「その通りだ」

一人の巫女の問いに隆斗は肯定をするように返答をする。

「また、対象の増加が見られた場合のみその対象への変更を可能とし、それ以外は如何なる理由があろうとも変更は認めれない。以上が規則である。よいな？」

『はっ』

隆斗の問いに異論はないというように皆一斉に頷くのだった。それに満足した隆斗はどこからともなく四本の巻物と朱肉を取り出す。

巻物の表にはそれぞれ、『十六夜咲夜』、『藤原妹紅』、『アリス・マーガトロイド』、『東風谷早苗』という名が達筆な字で書かれているのだった。

「では、己の賭け口に名前と親指での捺印をするといい。よく考えてな」

途端に厳かであった空気は霧散してわいわいがやがやといった騒がしい雰囲気へと変貌する。

「しかしのう、当主殿。これは些か賭にはならないのではないかのう？」

「どうしてだ？ 更妖？」

口々に相談や自分の意見を述べている巫女や神官の様子を眺めている更妖が長く伸ばした顎髭を触りながら隆斗へと話しかけた。

「これはどう考えても早苗殿が優位だと僕は思っのじゃよ。当主殿は当然そこに賭けたのじゃろう？」

「当然だ。守矢の嬢ちゃんには期待しているからな」

「それは当主殿だけではないと思っのう。故に賭は成立せんと思っのじゃ」

流司が誰と恋仲になる、否、次期『神代家』の奥方は誰になるという賭。

それは吏妖がいうように確かに昔からのアドバンテージのある早苗が優位に考えられた。

少なくとも後は流司の感情だけであるのは確かであった。

「それはどうかな？意外とまともな賭けになるかもしれないぞ？なあ、乙女？」

「ええ、そうですね。旦那様」

乙女はちようと捺印を押し終えたところであり、その巻物の名は『十六夜咲夜』のものであった。

「むっ、トメは咲夜殿か……」

「言うておくがこちらからの介入は禁じているからな。この前のよくな買い出しの量进行操作して流司が手伝いやすくしようとするなどということももってのほかだ」

「……気付かれていましたか」

唸り声を上げる吏妖とは対象的に隆斗は以前から乙女が咲夜を気にかけていたことを見抜いているのだった。

「“当主”なんでな」

「そうですね。あなたもそんな猿芝居は止めてさっさと書いてきたらどうですか？元から東風谷様に賭けるつもりなどないでしょうに……」

「ほっほっ、何のことですかのう」

好好爺のようでありながらその笑みは実にいけ好かない笑顔であった。

確実に腹に一物を抱えている。

「ほれ、吏妖」

「おお、ではありがたく書かせていただきますかのう」

隆斗から巻物を受け取った吏妖はそれを開き己の名を書いていく。その巻物は『藤原妹紅』の名が書かれているものであった。

「ふむ、これはなかなか面白い賭になりそうだ」

隆斗は自室で名前の書かれている四本の巻物を見比べながら呟いた。正確な数でいえば予想ができていたように早苗がトップであったが、実質はほぼ横這いの結果であった。

「ねえ、そっちは思いませんかね？」

隆斗は他には誰も居ないはずの自室にまるで語りかけるように尋ねるのだった。

すると、空間に切れ目が入り、そこから金髪の美女が姿を表すのだった。

「ええ、本当に私が期待していた以上に面白いことになっていますわね」

金髪の美女 『八雲紫』は口元を扇子で覆い隠しながらも分かる微笑みを浮かべて隆斗の問いに答える。

「……まさか、本当に姿を現していただけたとは……」

「あら？いけなかったかしら？それとも独り言でした？」

「いえ、監視があることには気付いていましたよ。でなければ、初めて会ったときに能力を明かすような真似はしないでしよう？聞くところによればその能力は大層稀有かつ強力なものらしいので」

突然、部屋に現れた紫に隆斗は驚いていたが、それは自分の声に紫が反応を示したことに對する驚きであった。

隆斗は紫が自分を、『神代家』を監視しているだろうということに気が付いていた。

妙な気配を感じることも多々あり、流司から能力についての説明を受けたときにそれは確信となったのだった。

能力の正体を明かすことは手の内を明かすことと同義である。そんな真似を紫がなんの考えもなしにすると隆斗は思わなかった。

にも関わらず、隆斗に紫が自分の能力について説明したのは隆斗に對して自分はいつでも監視ができていると警戒心を与えるためであった。

「ふふっ、やはり血ですね」

「まだ息子には負けていらっしゃせんよ。まあ、別に監視があること

なかつと私は構いませんよ。貴女ほどの美女に監視されているというのなら悪い気はしませんので」

「あら？それは浮気になるのではなくて？」

「それくらいは家内も許してくれるでしょうよ」

互いに顔を見合わせて笑みを浮かべる隆斗と紫。

どちらも食わせ物であることは間違いないことであった。

「こんな不毛な会話など今はいらなんでしょう。どうです？貴女も

一枚噛んでみますか？」

「よろしいので？」

「ええ、折角ですので」

隆斗は巻物を一つ紫に見せて提案する。

「では、御言葉に甘えて。私はこれを……」

そう言うと紫は隆斗に巻物を隙間から落とすようにして手渡す。

「ほう……分かりました」

隆斗はその巻物を確認すると了承したようにして頷く。

「報酬は秘蔵のお酒を希望しますわ」

「いいでしょう。どの道結果が明らかになるのは祝いの席でしょうから」

「楽しみにしていますわ」

そう言い残すと紫は姿を消す。

一人残った隆斗は巻物に書かれている名前を見て、近々会議を開かなければならないと思うのだった。

欄外、『とある神代の議事録』（後書き）

二度目の当選、スコープオンさんのリクエストで賭けの蔓延する神代一派。

少し要望とは違う形かもしれませんが。

あくまでも、本人たちの意思を尊重するという形です。

紫の登場は予想外ですかね？

次は300。

何だか回を増すことに早く……？

まあ、喜ばしいことですが。

それでは本編いきましようー！

「見てくださいー！これ可愛いとは思いませんか！？」

「可愛い、のか……？」

休日のショッピングモールの一画で一人の少女の楽しげな声と一人の青年の困惑したような声が聞こえる。

早苗が抱き上げたぬいぐるみを見て、流司は眉を顰めながら首を傾げる。

早苗が抱いているぬいぐるみはうさぎを模したものであった。

純粹にうさぎをぬいぐるみにしたようなものやただデフォルメしたものであれば流司も可愛いと思うことができたかもしれない。

だが、早苗が抱いているうさぎのぬいぐるみはそうではなかった。

平たく言ってしまうえば目つきが悪い。

まるでヤの付く自営業の人々のような目つきであった。これを可愛いと言つてのけてしまつ早苗の感覚にはもはや感嘆するほかないであらう。

「可愛いですよー！ほら、このキラキラとした流し目がとってもチャーミングじゃないですか！？」

「チャーミング……？」

キラキラした目つきをチャーミングと称することができるのは今にも先にも早苗一人であらうと流司は思う。

どう考えても早苗の持っているぬいぐるみは悪人……悪うさぎ顔で

あつたし、恐らく隣のラックに並べてられている猫のぬいぐるみが正義のヒーローなのだろうことは流石の流司にも一目で分かるころであつた。

「ほら、ここが。流司さんには分からないんですか？この愛らしさが？」

「いや、そつちの猫の方が愛らしい気がするんだが……」

「えっ、でもそつちは如何にもって感じで明け透けじゃないですか」

早苗の言葉は尤もなもので確かに猫の方は明らかに狙つたような感じのものである。

しかし、だからこそ万人分かりやすい可愛いらしさになっていた。売り上げを見てもどちらが人気であるかは一目瞭然であろう。

そもそも、どうして早苗が明け透けであることを嫌うのが流司には理解できないところであつた。

昔より早苗には明け透けや万人ウケのよいものを好まない節がある。その理由を以前に流司が尋ねたところ、“明け透けはマンネリに繋がります！いいですか？取りあえず、合体すれば視聴率が取れるだろうとか考えているロボットアニメはもう古いんです！確かに合体やビームにドリルはロボットの必須要素ですが、それだけじゃファンがつくことにはないんです！”と熱く語られたが、流司が理解できたのは早苗に巨大ロボットに対する並々ならぬ思いがあるというところぐらいであつた。

「で、それを買うのか？」

「えっ、いいりませんよ。こんなもの」

流司の問いに早苗はあっさりとぬいぐるみをラックへと戻す。
あまりの変わり身の早さに戻されたぬいぐるみも涙目である。

「さて、次に行きましょう！！次です次！」

「分かったから押すなって！！」

早苗は流司の背中をぐいぐいと押して店から出る。

残されたぬいぐるみは店員が直しにくるまで切なげに傾き続けるの
だった。

なお〜。

流司が指で首元を撫でるようにする度に子猫が気持ち良さをそこに鳴
き声を上げる。

みゃ〜。にゃ〜。にい〜。

その鳴き声につられるようにして数匹の猫が流司に催促をするよう
に流司の足元へと擦り寄る。

流司は寄ってきた猫全ての喉もとを撫でながら苦笑していく。
猫に好かれることは流司の特技の一つであった。

それは野良猫や飼い猫、今流司のいるペットショップの猫と種類状
況を問われることはなく、猫であればどんなものでも流司は好かれ
ていた。

その為、燧希などからは“歩く木天蓼”や“猫々ホイホイ”などと呼ばれていたこともある。

数分もしない内に流司の周囲は猫で溢れかえる。

この光景に店員も含め他にやってきていた客も目を点にしたように驚いてしまっているんだった。

「流司さん、流司さん」

猫に囲まれて安らいでいる流司に早苗が声をかける。

「なんだ、さな、ヒツ、こ、こつちに来るなよ？早苗？」

子猫を抱いたまま流司が早苗の声に反応に振り向いた瞬間、流司は顔を青ざめさせる。

普段の余裕のあるような雰囲気は一切感じられず、懸命に早苗がそれ以上自分に近づいてこないようにと首を振っている。

「まだ、ダメなんですか？こんなに可愛いのに……」

「まだも何も、そいつらには一生慣れるわけない。いいから、それ以上近づくなよ？」

流司は断固として早苗が近付いて来ることを拒む。

そればかりか一歩一歩早苗から離れていく始末である。

もちろんそれは早苗のことを避けているという訳ではない。

早苗が手にしている生き物に問題があったのだ。

くりくりと周囲を見つめるまん丸の目。

ぶよぶよとした腹に大きな口。

そして、吸盤を思わせるような粘着力のある手足。

ゲコッ。

そう、それは蛙であった。

そればかりか、早苗の首にはすらっとした胴を持つ爬虫類、蛇の姿もある。

蛙と蛇。

この二種類の生き物は流司

にとつて気絶するほどに苦手なものであったのだ。

「大丈夫ですよ。私がしっかり捕まえていますから……」

「いいや、この世に絶対なんてものはない!!」

流司の言葉は実にその通りであるのだが、こんな状況で言ってもあまり格好がつかないというものだろう。

子猫を抱えて後退する青年と蛙と蛇を抱えて滲みよる少女。性別が逆のように思えてしまうことだろう。

「はあ……分かりました。すみません」

早苗は蛙と蛇を苦笑いをしながら控えていた店員に返して子猫を抱える流司のもとへと近付いていく。

「それにしても相変わらず流司さんは猫に大人気ですね。好きなんですか？猫？」

「少なくとも奴らとはいえ比べられないほどにはな」

蛙と蛇の姿が見えなくなったことで余裕を取り戻した流司が早苗に答える。

これと言って、流司は猫のことを大好きという訳ではなかったが、蛙や蛇とは比べるまでもないことは確かであった。

にゃ〜。

ゴロゴロと喉を鳴らす子猫のことを流司は丁寧に撫でていく。

それがよっぱど気持ち良いのか、子猫は尻尾を揺らしながらもうとうととし始めるのだった。

そんな様子を見た猫たちが催促するように再び流司の足元に集まってくる。

そして、子猫のことを羨ましそうに見つめるのは猫たちだけではなかった。

「どうかしたか？早苗？」

じつと、己の顔と気持ちよさそうに撫でられている子猫を見比べる早苗。

そんな様子に首を傾げた流司は早苗声をかける。

が、返ってきたのは……

「にゃ〜ん」

瞬間、時が凍りついた。

流司は早苗の予想にもしていなかった声に子猫を撫でる手を止め固まる。早苗は早苗で両の手を招き猫のように上げた状態で固まる。

その姿は大変愛らしいというか可愛らしく、流司にとっても庇護欲を駆り立てられるものだったが、何分衝撃があらゆる意味で強過ぎ

た。

「……………」

「……………」

無言。

そして……

ポフツ。

「ちよ、ちよっと、失礼します!!」

一瞬にして顔をよく熟した林檎よりも赤くした早苗は慌ててその場を離れて姿を消していく。

あまりの勢いに流司には早苗を呼び止める暇もなかった。

周囲の店員や客も何事かと流司が早苗が姿を消した方向を首を傾げて見比べる。

「……………今のは聞かなかったことにしよう」

なおくん

流司の呟きに同意してかしくなくてか子猫は大きく口を開けて、能天気な鳴き声を一つ上げるのだった。

頁六十六、『弱点と庇護欲と』（後書き）

やっちまった……

ふははっ、さあ、悶え死ぬがいい！！

反響マジで怖ええー！！（笑）

主人公の弱点とか新しい設定とかもうどうでもよくなってる気がする。

流司は両生類と爬虫類が苦手です。

特に蛙と蛇は死ぬほど嫌いです。

それでもって、猫には好かれます。わらわら集まってきました。

異名は『リベンゲ・アクトネディア歩く木天蓼』と『キティ・ライム猫々ホイホイ』のどっちがいいですかね？

ああ、ライムは鳥もちって意味です。

次回も早苗のターン。

これでこの幕も終わりかな？

頁六十七、『後ろ姿』

「そういえば、流司さんの用事ってなんですか？」

「ん？ああ、お土産でも買っただろうかと思っただけ」

落ち着きを取り戻した早苗と合流し、食事をとったところで流司たちは再び買い物へと繰り出していた。

とはいえのも流司の目的というのは“幻想郷”に残っている人へのお土産を買うことであつた。

たかが、お土産というが持つて行く場所が“幻想郷”となるとそれはなかなか選ぶのに苦労するものであつた。

“幻想郷”にあつても大丈夫なものでありながら、“幻想郷”では見られないようなものが好ましいと流司は考えていたが、そのようなものはそうそう見つかるようなものではなかつた。

実際、流司は今までも探していたけれども目欲しいは見つからず、食べ物関連が無難なところだろうと考えていた。

食べてしまえばそれで終わらせることもできる上に喜ばれなくとも嫌うものはいないだろうという思いがあつたのである。

「それってやっぱり分社の……」

「知っていたのか。そう、今こっちに来ている以外でも向こうで色々とお世話になつた人がいるからな」

それ以上に手ぶらで帰つたときの反応が怖いと流司は身震いする。少なくとも、同居人に対しては何かを持って帰らなければならぬ

という思いに流司は駆られていた。
まるで朝帰りをするお父さんのような考えである。

「今来ているって、ニット帽のロンクヘアーの人にミニスカートの人、あとは金髪にカチューシャの人のことですか？」

「あれ？それも知っていたのか？」

「はい、歩いているところを少し見かけて……」

本当は少しどころか尾行紛いのことまで早苗はしたのだが、流司は全くそれに気が付いてはいなかった。

「そうそう、皆大切な恩人だよ」

「……………」

流司としては早苗に余計な心配をかけまいと“命の”という言葉で“大切な”という言葉にすり替えたのだが、優しいな笑みを浮かべてそう呟いた流司の“大切な”という言葉に早苗の心はチクリと痛みを覚える。

流司がその人たちのことを大切に思っているだろうことは早苗にも遠目から理解できたのだが、流司の口から直接聞かされるのでは受ける強さが異なっていた。

「好きなんですか？」

意を決したように早苗は流司に尋ねる。

「まあ、好きか嫌いかで言えば好きだけだな。気楽に話せる相手だ

しな」

一呼吸置いたところで流司は早苗の問いに答える。

早苗はそうだった意味で聞いたわけではなかったが、流司がその意図に気付くことはない。

そもそも、それくらいのこととは普通気が付くというものだが、妙なところで親譲りの勘が冴えない流司には酷な話であった。

だからといって、早苗にそれ以上踏み込んで尋ねる気概があるかといえはそうではない。

ただ、流司の答えが即答でなかったことに安堵感と若干の罪悪感を感じるのだった。

「もう、こつちには戻って来ないんですか？」

「そうだな……少なくとも父さんが元気でいる間は分社の方にいることになるな」

その辺りの部分はまだ詳しくは決まっていなくていいところであった。

“外”でも“幻想郷”であったも『神代』の役割は重要なものである。

どちらか一方を蔑ろにはできやしない。

現状から考えた場合では流司以外に隆斗の跡を継ぐ“当主”を選出するといのが、一番妥当な可能性である。

“幻想郷”という地の特殊性からも流司以外が“幻想郷”での『神代』の役割を果たすことは今からでは難しい。

状況によっては流司がどちらの当主も請け負い、“外”の『神代神社』での仕事は代理に任せ、時折様子を見るといふこともできなく

ないかもしれないだろう。
だが、そうであっても流司が“幻想郷”の方にかかりつきりになっ
てしまうことは間違いないかった。

結局は現状でできることは問題を先延ばしにすることだけであつた
のだ。

「そう、ですか……」

早苗は流司の返答に顔を俯かせる。
当初のように修業だけであつたのなら、数年の内に流司はこの街
へ戻ってくることは確定していたことである。

だが、分社の管理をするということはこの街へは戻ってこないとい
うことを示しているからであつた。

「そんな顔するなつて」

くしゃくしゃと流司は早苗の頭を撫で上げる。
無意識下の流司の行動であつたが、その感覚は早苗には酷く懐かし
い温かさであつた。

昔はよく撫でられていたが、年を経る毎にその回数は減り、近年で
は全くなかつた。

それは年齢というものを考えれば当然のことであつたが、素直に納
得することができるほど早苗の心は単純ではなかつた。

それ故に流司に気持ちよさそうに撫でられる子猫の存在が先ほどの
暴走を引き起こしてしまったのだらう。

「別に一生会えない訳じゃないんだ。最低でも年に一回はこうして
帰ってくるぞ」

“年に一回だけじゃないですか!?” という思いが早苗の口から零れ落ちることはなかった。

それは早苗自身が流司と同じ神職に関わるものであったために流司の思いと役割をよく理解しているからであった。

「分かりました。戻ってくるときは連絡をくださいよ?」

だからこそ、早苗は心を思いを殺した。

自分一人の感情でどうこうしていい問題ではないと己に言い聞かせて。

これを紗与が知れば馬鹿なことをと呆れ、隆斗が知れば流司の命はなかったかもしれない。

だが、早苗は自分に我が儘になるには頭がよすぎた。

そして、流司のひたむきさを好きになった早苗にしてみれば引き止めるなどという選択肢は初めから存在していなかったのだ。

「了解だ。連絡するようにする」

早苗の強さに流司はその笑顔に隠されていた葛藤や涙に気が付くことはない。

流司でなくともそれに気が付くことができるものは少なく、気が付けるとすれば『守矢神社』に住まう二柱の神くらいであったらろう。

「あつ、済まないけどあの店に寄ってきてもいいか?」

流司は視界の隅に映った扇子や香、箸などのこの国古来から伝わるものを扱う雑貨店のようなものを指差して早苗に尋ねる。

「いいですよ。私はそのベンチで待っていますね。少し疲れてしまったので」

「分かった。すぐ戻ってくるよ」

流司はそういい残して雑貨店へと入っていく。

そんな流司を早苗は見つめながらベンチに腰掛ける。

その姿は今にも崩れ落ちてしまいそうなほどに儂げであった。

頁六十七、『後ろ姿』（後書き）

前回からの流れでこうなるとは誰も予想できないだろう。

まだ、早苗のターン。

次回第五幕最終話ですね。

それにしても前回の反響がWWW

一回の更新で感想が14件も……

にゃくさんはヤバかった。

頁六十八、『褪せぬ記憶』（前書き）

投稿日予約し間違えた。すみません!!!

店内には和紙によって柔らかくなつた光が充満していた。

商品に合わせるように落ち着いた空気を醸し出すようになっていた店は女ではない流司でも何時間も買い物を楽しむことができるような空間であつた。

とはいえ、流司は外に早苗を待たせてしまつて身であるので手早く店内を物色していく。

雑貨店であることは確かであつたが、そこに置かれている商品の値段にはかなりのばらつきがあつた。

百円以下で売っている物もあれば数百万円とする物まで存在している。

しかも、それが明確な区別があつて並べられているのならまだしも、値段に分け隔てなく並べられているのだから客にしてみれば心臓に悪いというものであつた。

百円の湯飲みの隣に百万円の湯飲みが置かれている状況などなかなか巡り会えないというものだろう。

そういつた雰囲気重視の配置にしているためか、休日の昼間であるにも関わらず店の中は閑散としていてこれでやっていけるのかと密かに流司は心配になつてしまふ。

「何かお探しのものでもございますか？」

流司がこつそり不安を抱きながらも店内を歩いていると一人の店員が話しかけてくる。

やはりここの雰囲気壊さないためか着物を着ているが、店の制服とするには非常に機能性には富んでいないように流司には思えた。

「いえ、そういうわけではないのですが……何かお土産にでもって
と思いまして」

意外なことに“幻想郷”にはこのような雑貨を扱う店は少ない。

そもそも、人の数が人里にしかおらず、その限られた中で職が分かれるので陶器などの芸術系の職人はいることにはいるが数も少なく結果デザインも限られたものとなってしまっていた。

「でしたら、こちらなどどうでしょうか？」

流司の言葉を聞くとその店員は男にも女にも贈っても大丈夫そうな扇子などを薦めてくる。

扇子という言葉に流司は閃く顔があったものの、何かを贈った場合にどんな事態になるのか考えるのが恐ろしくなり、すぐさまその顔をかき消すのだった。

それでも、その扇子をしつかり購入してしまうあたりに流司の弱さというか性格が表れているだろう。

その後も店員の薦めるものを参考にしながら適当に見繕いだいたいのが揃ったところで、選んだ商品を店員に渡して会計へと進むのだった。

「あつ……」

レジへと歩いていく途中に流司はとあるものに目を留める。

ひっそりと隠れるようにあったそれは流司にとっては懐かしさを感じさせるものであった。

「すみません。これもお願いします」

見つけたそれを流司は手に取ると既にレジへと入っていた店員に慌てて渡すのだった。

トッ、トッ、トッ。

それはゆりかごを思わせるような心地の良い揺れであった。

トッ、トッ、トッ。

それは春の日の光を思わせるような優しさを持った暖かさであった。
トッ、トッ、トッ。

その揺れと暖かさを早苗はよく知っていた。
遠い昔によく包まれていたものだ。
今ではその温もりを感じることがなくなって随分と久しくなっ
てしまっていた。

トッ、トッ、トッ。

「（これは……）」

その緩やかな揺れは早苗に臍気ながらも鮮明な記憶を呼び起こして
いく。

大切な、そう大切な記憶だ。

早苗が目を開いた時、目に映ったのは見慣れない光景であった。否、それは“その視点からは”という修飾語が頭に付くだろう。そこは毎日のように上り下りを繰り返している『守矢神社』へと続く階段であった。

「（あれ？私は……）」

早苗は上手く働かない頭を懸命に働かせて事態の把握に努める。

「（そうだ私は流司さんが戻ってくるのをベンチで座って待っていて……）」

それ以降の記憶が早苗には全くなかった。

自分が寝てしまったことは理解できた。

しかし、どうして今こうして『守矢神社』へと続いている階段を上っているのかが理解できなかった。

「（上つて、い、る……？）えっ？」

「おっ、起きたようだな」

その声は早苗の目の前から聞こえた。

そこにあるのは誰かの後頭部。

誰であるかなどわざわざ考えるまでもない。

早苗の目の前にあったのは流司の頭であった。

「えっ、えっ！？り、りゆ、流司さん！？」

「ちよっ、早苗、急に動くな！！危ないから！！」

「あつ、はい、すみません……」

自分の置かれている状況を理解した早苗は驚きのあまり大きく身体を動かすが、流司の本気で焦った声にすぐに大人しくなる。そう、早苗は流司におぶさっていたのだ。

「あんまりにも気持ちよさそうに寝ていたから起こすに及ばなくてな」

流司が雑貨店から出てきたときには早苗はベンチでスヤスヤと寝息を立ててしまっていた。

だいぶ疲れていたのだろうと判断した流司は寝ている早苗を背負って、こうして『守矢神社』へと続く階段まで戻ってきていたのであった。

「悪いな。そんなに疲れていたなら言ってくれば良かったんだが……」

「い、いえ、私が無理をした……」

申し訳なさそうに声を上げる流司に対して早苗はそれこそ恐縮だというように答える。

チリンツ。

「?」

早苗が首を振った揺れに反応して何か金属のぶつかったような音が響く。

よくその音のものを探してみれば自分の頭から発せられていることに早苗は気が付いた。

それと同時に早苗は自分の知らない髪飾りが増えていることにも気付く。

「これは……簪？」

「気付いたか。さっきの店で偶然見かけて懐かしくなっただけ」

「あっ……」

流司の懐かしいという言葉に早苗は幼少の頃の記憶を思い出す。

流司、早苗共にまだ母親が生きていた頃のことだ。

煌びやかな装飾品というものはこれ以上ないというほどに子供の興味を引く。

それは早苗も同じであった。

事あるごとに流司や自分の母親が付けている簪を欲しがった早苗。

しかし、簪はまだ幼いという方が似つかわしい子供に持たせるには危険な代物であった。

その鋭利な先端は容易に怪我の原因となり、下手をすれば命の危険にだってなりうるものである。

それ故、母親たちは“もう少し大きくなったらね”と早苗に声をかけるが、まだ二桁にも年のいかない子供がそこまで聞き分けが良いわけもなく、早苗をあやすのは流司の役目であった。

「あの早苗が簪が似合うほどに成長したんだからな。瑞穂さんが見たらなんて思うか……つか、父さんが見たら泣くな、絶対」

「えっ、またですか？」

自分の高校の入学式で号泣していた隆斗の姿を思い出して早苗は笑う。
卒業式ならまだしも、入学式で泣く人などそうはおらず、隣にいた紗与の母親である風沙の顔がひきつっていたことは早苗の記憶にも新しいことであった。

「ほんと、時間が流れるのは早いな……」

「……はい」

高々十年ほど前のことであるというのに早苗にはこうやって流司におぶってもらった時のことが遙か昔のように思えて仕方がなかった。忘れてしまいそうなほどに臍で、瞳を閉ざせば瞼に映し出されるほどに鮮明で。その二律背反を具現したような記憶は確かに確か過ぎるほどに早苗の中に存在しているのだった。

「流司さん……」

「なんだ？」

「戻ってきますよね？」

流司にしがみつく腕の強さを強めて早苗はか細い声を上げて尋ねる。それは懇願か嘆願か。

ただ、そこにある存在のことを確かめるようにぎゅっと力を強めるのだった。

「ああ、ちゃんと戻ってくるさ」

流司は階段を上る歩みを止めずに優しさ滲ませた声で早苗に答える。正確には二人の間にある思いにはそれぞれ相違があるだろう。

流司が思うそれは家族の情としてのそれだ。天涯孤独とっていい境遇の早苗にとっては自分などは家族のように思えるのだろうと流司は思っていた。

一方、早苗が思うそれは恋愛の情としてのそれであった。確かに早苗にとっての流司には兄のような思いもあったが、男としてのそれが上回っていた。

互いが互いを想うが故のすれ違い。

絶対的なまでに近く、絶対的に遠い距離。

それには早苗は気が付いていただろう。

だが、早苗はそれ以上を求めようとはしない。

それは諦めたという訳ではない。

ただ……

「……もう少しこのままでいいですか？」

「喜んで、お姫様」

重なり合った二つの影はゆっくりと長い長い階段を上っていく。

一筋の先を後ろに描き歩く姿に太陽は柔らかなオレンジを灯すだけであった。

頁六十八、『褪せぬ記憶』（後書き）

ミシャグジ様は見てる！！！！

「今日のご飯はなんだろなッ！」

『守矢神社』の祭神が一柱、『洩矢諏訪子』はご機嫌であった。それもそうだろう、ここ数日は『守矢神社』の風祝である『東風谷早苗』の作る料理がほぼ確実に暗黒物質であったからた。

不思議なことに見た目は頗る良い。

調理中は明らかに骨やまな板を砕きぶつ切りにしているようにしか見えないにも関わらず完成した料理はまともであるのだ。

だが、それは“見た目”だけの話であった。

それを口にした瞬間に訪れたのはお花畑や三途の川などではない“無”であった。

その世界から現世へと戻ることができたのは諏訪子が神であったほかない。

ただの人間が口にすれば苦しむ間もなく閻魔様の裁きを受けることであろう。

“見た目”とのギャップはあまりにも激しい。

もはや、それは“祟り”の新しい形。

もしくは“祟り”というなの“スパイス”がふんだんに降りかかっているとした諏訪子には思えなかった。

これは死活問題であった。
減り続ける信仰をどうにかするという問題を差し置いて対処すべき問題の最上位へと躍り出たのだ。

“ここままでは消える”と諏訪子、そして『守矢神社』のもう一柱の神の『八坂神奈子』は悟った。

信仰の減少による消滅ならまだ納得ができる。

自分たちはこの世界にはもう必要ないのだと諦めもつく。

しかし、料理。

それも自分たちを祭る者にとどめを刺されるのは神として情けなさ過ぎるものであった。

幸いにも、対策はすぐに立てることができた。

早苗の機嫌が悪い原因を悟るのは容易であったからだ。

けれども、神である自分たちには計画を立てることはできても実行に移すことはできない。

自分たちが縁結びの神であるならばまだなんとかなったかもしれないなかつたがそうではないので耐えるしかないと思った矢先のことであった。

早苗が上機嫌で“明日出掛ける”と告げたのは。

“救われる”

ただ純粹にそう諏訪子らは思った。

その日はすぐさま早苗を休ませて、翌日へと備えさせた。

この苦しみから解放されるといつのならば空腹ぐらい耐えられると言うものであった。

そして、今日もまた早苗は上機嫌で帰ってきた。

諏訪子のご機嫌になるのも願ける話だろう。

「あれ？神奈子、どうしたの？」

台所へと繋がる廊下に諏訪子は神奈子の姿を見つける。だが、その様子はおかしい。まるで絶望に打ちひしがれているようであった。

「あれを見ても……」

神奈子は短く呟くと台所で料理をする早苗のことを指差した。早苗は台所でも上機嫌であり、今までのようなことは起こりそうには思えなかった。

「諏訪子様？今日は肉じゃがですのでもう少し待っていてくださいね？」

既に料理は終盤に差し掛かっているのか、早苗は肉じゃがの味を整えようと砂糖を一杯、二杯、三杯、四杯……

「さ、早苗！！それじゃあ、甘過ぎるよッ……」

「やだっ、諏訪子様甘過ぎるだなんて……」

早苗は片手を頬に当てて何かに恥ずかしがるがもう片方の手は動きを止めない。

砂糖の次は塩が大量に降り注がれている。

「それ以上は不味いつて！！」

「それ以上なんて、まだ私と流司さんはそんな……」

絶句。

諏訪子と神奈子が絶望するには十分過ぎるほどのぼんこつ具合であった。

あの様子では鍋の中身が暗黒物質と化してしまっているだろうことは想像に容易いというものだ。

「出前でも頼むとしよう……」

「あつ、なら、来来軒の炒飯がいいな」

「私は麻婆豆腐にでもするか……」

神奈子の提案に同意した諏訪子は静かに台所の側を離れていく。そんな諏訪子と神奈子の思いは一つであった。

「「許すまじ、『神代流司』……！！」」

それからしばらくの間、流司の身に蛙わがわいと蛇たそくが降りかかったのは全くもって“蛇蛙”である。

完！！

第五幕終了……！！

“幻想郷”に戻るシーンは省略で長かった。本当に長かった。

さて、今回はそれぞれのキャラで最後のシーンの統一した上で微妙

に変化させているのですが、気づいたでしょうか？

妹紅では手を繋ぎ。

咲夜では後を追いかけて。

アリスではつかず離れずの距離を保ち。

早苗では背負っています。

この肉体的な距離はそのまま心的な距離を表しています。

色〓心と同じように小説などでよく見る描写ですね。

まあ、ジャンル文学にしているのでこういった小難しいことにもたまには挑戦を。

次回から第六幕。

舞台は幻想郷に戻り、季節も春に戻ります。

そして、いよいよあの方の登場です。

ヒント？

USCですかねえ……

ではでは

頁六十九、『眠れぬ春』（前書き）

春。

それはあらゆるものが目覚める季節である。
とりわけ目覚めるといふのは“花”である。

花は四季折々で様々な顔を見せるが、咲き誇る花々といふのはそれだけで春の訪れというものを人々に感じさせる。

ここに一面に広がる草原もあと数日もすれば沢山の花が咲き誇るはずであった。
そう、“はず”だったのだ。

萌葱色を思わせる髪を肩で程よく切り揃えた女性が日傘を閉じてしやがみこむ。
地面に手を伸ばしすくい上げたのは蕾であった。

時間をおかずして咲くであろうその花の蕾が開くことはもつない。
無惨に潰され千切られ、その花は既に死んでしまっていた。
それはその花だけではない。

ここに広がるはずだった花畑を作り出す全ての花が死んでしまっていた。

彼女の力を使えば何とかなるだろう。
だが、それは“自然”の姿ではない。

彼女は操れるが為にそれを望みはしなかった。
故に……

「許さない」

静かな激情を胸に秘め、その妖怪は動き始めた。

頁六十九、『眠れぬ春』

春告精が“幻想郷”の空を飛び回り始めてから幾日。

厳しい寒さは嘘のように消え去り、熊や蛙、賢者なども冬眠から目覚め始める。

そうは言うものの朝や夜はまだまだ冷え込み布団から抜け出すためには並々ならぬ労力を必要とする。

昼は昼で穏やかな陽気がどうしようもなく眠気を誘いついついたた寝を楽しんでしまふというものであった。

“春眠暁を覚えず”などという大層な言葉が存在するがそんなことはない。

“暁”に限らず、“一日中”布団から抜け出すことに躊躇いを感じることもだろう。

それは相変わらず『博麗神社』での軟禁生活を送る龍神の末裔『神代流司』も例に漏れないことであつたのだが、流司には情眠を貪ることができるような暇は与えられなかった。

トン、トン、トン、トン。

包丁とまな板が軽快なリズムを立てながらぶつかりあつていく。

その脇ではぐつぐつと鍋が煮えたぎり、更にその隣では油が食欲をそそるように衣をキツネ色に染め上げていつている。

これが早朝の一幕というのなら、些か量が多く思えるだろうが心地よい目覚めを誘うものとなるであろう。

だが、その音をよく聞いてみれば分かるはずだが、決してそこは緩やかな空気など流れてはいない。

一つの修羅場が繰り広げられていた。

「流司——！！酒がなくなつたぞ——！！？」

「つまみまだあ——？」

『博麗神社』は“幻想郷”でも屈指の桜の咲く花見のポイントであった。

その立地から人里の人間が花見に訪れることはほとんどないが、“人間”でなければそう訪れにくい場所というわけではない。

そう、現在『博麗神社』では“妖怪”もしくは“人外”が催す花見で盛大に賑わっていた。

「おい、流司。酒が無くなつたぜ」

顔を酔いで赤く染め上げた千鳥足で台所へとやってくる。

その言葉のイントネーションは妙なものになっており、誰がどう見ても完全に酔ってしまったていた。

“幻想郷”に飲酒年齢の制限などはあつてないようなものであつた。そもそもが“幻想郷”の成人年齢が二十歳ではないので、魔理沙が酒に酔いつぶれたとしてもおかしいことではない。

流司も“幻想郷”に来た当初は驚いたものだが、一年もなつた今では慣れたと言つたものであつた。
故に、

「サニー、底にある一升瓶を何本か抱えさせて放り投げとけ」

「アイサー」

流司のへべれけに対する扱い方もぞんざいになるといふものであつ

た。

流司はやはり一升瓶を魔理沙に抱えさせると妖精であるサニーミルクに魔理沙を台所から放り投げさせる。

「ルナ、スター。仕上がった。これを持ってって空の皿を回収してきてくれ」

「わかった」

流司は惣菜の盛りつけられた大皿をサニーミルク同様の妖精であるルナチャイルドとスターサファイアに運ぶように指示を出した。

何故、サニーたちが流司の手伝いをしているのかというと一人では捌ききることができないと判断した流司がたまたま目についたサニーたちとの交渉の結果手伝い、つまるところのアルバイトとして雇っていたのだ。

サニーたちへの報酬は一日、朔を貸し出すこと。

無論、これは朔も了承の上であった。

尤も朔は渋りに渋り、流司との壮絶な交渉の攻防の果てに味噌油揚げを麻袋一つ分というところで双方ともに納得のいく契約と至った。初めは米俵二つ分であったのでこれであっても流司はかなり値切ったといえた。

今頃、朔は文字通り油揚げに埋もれるようにして夢見心地を味わっていることだろう。

「だぁー！ーっ！！！終わらねえー！ー！！！つか、一体何人来てるんだよッ！！？」

既に日は暮れ始めている。

花見自体が始まったのは昼前からであり、その間流司はひたすらに

料理を作り続けている。
相当な人数が来ているらしいことは流司にも分かったが、百人前を優に超えようというのに未だに料理を性急する声は収まらない。
“らしい”というのは花見が始まって以来、流司は一步も台所から出ていないため、一体何処の誰が花見に来ているかも把握していないからである。

食材は無駄になるかもしれないと流司は思っていたほどにまで揃えておいたにも関わらず底を尽きかけている。

これから夜桜見物と洒落込むことだろうから、まだ料理が必要となってくることは流司には容易く考えつくことであった。

少なくとも酒に関しては今ここにある量では足りないことは明らかであった。

“幻想郷”では鬼や天狗が酒豪と言つが流司にしてみれば他のものであつても酒豪としか思えなかつた。

人間である霊夢などであつても一升瓶を軽く飲み干し、妖怪であればその程度は嗜みである。

鬼や天狗が酒豪というのは恐らく樽単位でのことであらうと流司は自ずと悟り恐怖した。

その為、流司は幻想郷で酒を飲むことはあつても酒盛りにはほとんど参加していない。

参加しても酒を口にはしていない。

周りに付き合つてしまえば自分が酒に飲まれることは理解するまでもないことであつたからだ。

「追いついてきたよ」

「そしたら、これを持ってってくれ。それが終わったら少しルナとスターと一緒に休んでくれていい。そこに適当に摘めるものは作っておいたから」

割烹着姿のサニーに皿を手渡し、流司は台所の隅に置かれた三枚の皿を指し示す。

所謂、賄いというやつであった。

本来であればここまで遅くなる予定ではなかったのだが、想定以上の忙しさにここまで時間が押してしまったのだった。

勿論のこと、流司には休みなどはない。

笑顔で駆けていったサニーミルクを見送りながら流司は延々と続く料理へと意識を再び向けていくのだった。

頁六十九、『眠れぬ春』（後書き）

第六幕の始まり。

季節は巡って再び春に。

春と言えば“花見”だね。

まあ、主人公は調理場ですけど……

そして、三月精の本編登場。

割烹着きてちよこちよこ働いてもらっています。

サブキャラなのでこんな感じで時々出てくるかな？

そして、あの方の行動開始。

そこへ主人公がどう関わってくるのか……？

穏便にはいきそうにないですねえ。

それにしても、リアルが寒い。

誰か春度集めてないですかね？

いい加減返してください。

黒幕はいいので“春ですよー！ー！！”って言って欲しいものです。

頁七十、『季節を経ての邂逅』

「終わらねえ。いつまで続くんだ……」

絶望感に打ちひしがれながらも流司が手の動きを止めることはしない。

既に日はすっかり落ちた。
足りなくなつた材料は買い足した。

それでも、一向に流司が休まる時は訪れない。
むしろ、花見をしているのが、“妖怪”であることを考えればこれからが本番という方が正しいのかもしれない。

遠慮なくひたすら料理や酒を頼み続ける外野もそうであるが、律儀に料理を作り続けている流司もお人好しであろう。

一度、食材が尽きているのだからそこで作るのを止めたとしても誰も文句を言うことはない。

それでも、食材を揃えて料理を流司が作り続けるのは鬼のいる家で
の主夫根性によつての成果というか弊害であろう。

「随分と大変そうね」

「そう思うなら少しは手伝ってくれても罰は当たらないと思つけど……？」

突如としてかけられた声にも振り向くことなく流司の視線は手元の鍋へと注ぎ込まれている。

台所の入り口にエプロンドレスを着ているだろう従者という存在を
体現しただろ人間がいることは振り返らずとも声だけで流司には

分かったからだ。

「今日の私は客よ。貴方はお客様に手伝いをさせるといふのかしら？」

「はいはい、俺が悪かったよ、咲夜」

心外というような微笑を浮かべて流司の言葉に答えた咲夜に降参だと示すために流司は一瞬両手を上げる。

喩え、どれだけ時間が流れようと飄々とした態度の咲夜に自分は勝ることができないと流司は思う。

無論、今では相手にならないとは明らかであり、数多の言葉を積み重ねても強烈な皮肉を込められた最もな理屈に流司は言いくるめられてしまつたろう。

故に流司にできるということは素直に武装解除のもと無血開城をすることであつたのだ。

「で、お客様である咲夜様がこんなと……どうしたんだ？その姿……？」

手を布巾で拭き振り返つた流司は咲夜の姿を見て思わず啞然としてしまつた。

それは咲夜がおかしな格好をしていたということではない。

確かに普段と比べたとすればおかしいと表現されるだろうが、妙と意味でおかしい訳ではなかつた。

咲夜がその身にまもっているのはいつものメイド服ではなく、“外”に行つたときに着ていた洋服。

おかしくはないがおかしな姿であつた。

「どうしたもこうしたも着てて悪い？心外ね？」

「いや、そういう訳ではないんだがな……」

流司が戸惑うのも仕方がない。

咲夜、妹紅、アリスの三人はそれぞれ“外”に居たときに着ていた服を“幻想郷”へ持ち帰っていたが、時々着ている妹紅やアリスと違って咲夜がそれに再び袖を通したことは今までなかったからだ。なので、流司は妹紅やアリスが持ち帰るといふ流れを読んで場の空気を崩さない為にも咲夜が服を持ち帰ったのだと思っていたのだ。

「今日は非番扱いなのよ。それなのにメイド服を着ているのはおかしいでしょう？」

「まあ、な……」

流司の疑問に答えるようにして咲夜は理由を説明する。

とはいえ、流司には咲夜「メイド服」といふような観念が生まれてしまっていたので、咲夜がメイド服を着るのがおかしいという言葉に違和感を感じざるを得ないのだった。

「それで、訊きたいのは私にここに来た訳だけ？」

「っああ。どうしたんだ？何か必要なものでも？」

花見の最中に台所に姿を表す理由など限られているというものだろう。

つまりは料理がなくなったか、酒がなくなったかの二つに一つである。

料理は先ほど霊夢が持っていったばかりであったので、恐らくは酒

だと当たりをつけた流司は咲夜に尋ねながらも酒瓶を取り出ししていく。

「私がここへ来たのは……」

「へえ、貴方が『神代流司』」

「？」

咲夜の言葉は思わぬ声、第三者の声によって遮られた。

流司のことを興味深いような視線で見つめるようにして台所へと姿を表したのは小柄な身体ながらも強大な存在を醸し出している少女であった。

「お嬢様……」

「お嬢様？」

その少女の姿を見ての咲夜の呟きに流司は首を傾げる。

確かにその少女は“お嬢様”と称するに値するような少女であったが、咲夜が“お嬢様”と呼ぶ存在に流司は心当たりがあったからであった。

「お初にお目にかかるわ。私は『レミア・スカーレット』。紅魔館、そしてその咲夜の主でもあるわ」

「これはご丁寧に。このような姿で申し訳ありません。『神代流司』と申します。巷では“龍神”様の末裔”という方が有名でしょう。咲夜には御世話になっており、その節は大変ありがとうございました」

流司はすぐさまその雰囲気を『神代家』の当主たるものへと変化させる。

レミリアの挨拶に流司もできる限りで装いを正し、レミリアに礼をとる。

土蜘蛛の一件の時ではレミリアの言葉のおかげで命を救われたことは咲夜から話を聞いていたが、両者の都合があうことがなく今まで顔を合わせることがなかったのだ。

「気にすることはないわ。ただの気紛れなもの。それで命が助かったというのならそれが“運命”なのよ」

「それでも感謝するのが礼儀かと。これまで伺いにも行かずした私と言えたことではありませんが」

気にしなくていいというレミリアに対しても流司は深々と頭を下げる。

これはちよつとした異常でもある。

最高神である『龍神』を祭り上げる家系の当主である流司の立場とというのは決して低いものではない。

こと“幻想郷”においてはそれぞれの勢力の権力者と同じぐらいの立場上の力があるのだ。

そのところはレミリアもまた理解していた。

気にしなくていいといったのはそのような意味合いを込めてのことでもあった。

にも関わらず流司は躊躇いなく頭を下げた。

この行動は“当主”としてはいただけないものが少々あるが、個人的な思いとしてはレミリアの好感を呼ぶものであった。

「そう、なら貴方個人の謝辞として受け取っておくわ」

「ありがとうございます。それでここにはわざわざこの為に？」

「花見のついでよ。もう帰るところだったから、最後に一目見ておこうと思っただけ」

「……それで御眼鏡には適いましたか？」

流司は含みを込めた笑みを浮かべてレミリアを見据える。

そのような視線を正面から受け止めたレミリアもまた笑みを浮かべ、

「ええ、合格。今度、我が屋敷に招待するわ。楽しみにしていなさい。帰るわよ、咲夜」

上機嫌で台所を出て行くのだった。

「それじゃあ、また。もう亡霊は帰ったからそこまで料理は必要ではないはずよ。頑張ってるね」

「ああ、ありがとう」

軽く手を上げ、流司に声をかけると咲夜も台所を後にする。

咲夜の言葉の意味は若干流司には理解できない部分があったが、ようやく終わりが見えたことに安堵の息を漏らし、流司は再び鍋へと向かうのだった。

頁七十、『季節を経ての邂逅』（後書き）

IFな一幕

仮定：4

『もし魔理沙が大変なものを残していったとしたら』

「ええ、合格。今度、我が屋敷に招待するわ。楽しみにしていなさい。帰るわよ、咲夜」

流司の含みをもった笑みにレミリアは上機嫌に答える。

優雅に流司に背を向けて咲夜を引き連れて帰ろうとする姿は“当主”という姿を体現しているかのようで、場を支配してしまうような風格に満ち満ちているのだった。

その堂々とした様には流司も憧憬を覚えざるを得ない。

“当主”としてまだ未熟である流司にとってはレミリアの姿は完成された存在感に思えるのだった。

そんな流司の視線を知ってか知らないでか、レミリアは威厳を醸し出しながらその場を去ろうとして、

バタツ。

一歩目を踏み外した。

「……………」

啞然としたように無言になる流司の足下に転がってきたのは先程魔理沙が置いていった空の一升瓶であった。

レミリアは見事に瓶を踏みつけて顔面から床へとダイブしたのだ。た。

堂々とし過ぎた為に足下が疎かになってしまったのだ。

目にも当てられない状況に台所をしてしまった流司にも責はあるのだが、今更なので蒸し返しても仕方のないことだろう。

「…………、行くわよ。咲夜」

「はい。お嬢様」

レミリアは何事もなかったかのように咲夜と共に台所を去っていく。しかしながら、顔を赤く腫らし、目元に涙を浮かべた姿には先程までのカリスマはなく、肅々と後をついていく咲夜もまた赤い忠誠心が溢れているので、これこそ流司は目も当てられない状況だと思っただった。

的な展開があつたかもしれない……

お嬢様登場。

まあ、そろそろ出てこないと咲夜とからめる限り仕方ないかなと。久しぶりのIFな一幕ではブレイク。

なんだか、拙作ではレミリアはオチ要因になつてる気がします。レミリアファンの皆さんごめんなさい。

いつの日か必ずや……

そして、主人公の地獄を作り出していたのはあの人？です。
まだ、主人公とは面識はありません。
次の幕ですね。本格的な登場は。

サッカーのチャリティーマッチ、カズが決めたよ。
ショートバウンドしたところをすっかり。
かなり難しいところだろうに……
なんだかんだでもカズですねえ……

カチャカチャカチャ。

水に浸けられたら食器の山が次々と切り崩されていく。

火が絶えることのなかった竈は熱を冷まし、滴一滴として残っては
いない酒瓶は一カ所に集め重ねられ塔のように聳えている。

賑やか過ぎるほどに賑やかであった宴会の音はいつやら静まり返り
閑散とした夜の帳が降りてきていた。

嵐の前ならず、後の静けさといえはいいか。

荒れ果てた台所を片付けていく流司はさしずめ火消しの風と言った
ところだろう。

既に手伝いをしていたサニールからの姿はない。

咲夜が口にしたように料理を作る量がほとんどなくなったところで
切り上げさせたのだ。

流石に昼前からほぼ休み無しで働いていたために帰って行く三人の
姿はふらふらと己が空を飛び始めた頃のことを流司に思い出させる
ほどであった。

味噌油揚げを浴びるように食べていた朔もその全てを平らげて、今
は流司の首に巻き付いて健やかな寝息を立てている。

麻袋一杯の数を完食したというのに朔はその重さ、体積共に一切の
変化を見せていない。

これには流司も“この小さな身体のどこへと消えてったのか？”と
首を傾げるしかない。

役者の消え去った花見であったが、終始裏方に徹していた流司の終
わりはまだやってはこない。

台所の片付けが終わったのなら、続いて待っているのは惨々たる様になっているだろう。『博麗神社』の境内の片付けが待っているからだ。

待ち構えているだろう地獄に流司は気分を陰鬱なものへとしながらも無言で手を動かし続ける。

その口からは溜め息すら漏れることはないのだった。

「お疲れ様」

台所をある程度片付けた流司のことを待っていたのは目にも当てられない状況ではなかった。

一カ所の除いて綺麗さっぱりと片付けられていた『博麗神社』の参道は嵐が何もかも吹き飛ばしてしまったのではないかと流司には思えた。

「何よ、その顔は？」

「いや、酷い惨状を心して外に出てきたがら驚きで……」

霊夢の言葉に流司は純粹に思ったことを口にする。

「流石に私もそこまで鬼じゃないわ」

「嘘を言うものではないわよ、霊夢。他の皆が少しずつ片付けていただけで貴女は何もしてないでしょう？」

「なるほど、把握した」

清々しいまでの嘘で現状を自分の手柄にしようとしていた霊夢を紫が窘めるように真実を告げる。

それは流司が十分な納得を得ることのできるだけの説得力のあるものであった。

「……そういつあなたは何をしたというのよ、紫？」

「あら？分からないのかしら？」

「分からないわよ」

「御覧なさい」

霊夢の言葉に紫がある一点を指さすとそこには花見で出たゴミや使った食器がまとめられていた。食器に至っては汚れ一つなく綺麗な状態であったので、わざわざ洗うことなくしまうことができるだろうと流司は一目で理解することができた。

「ありがとう。助かったよ、紫」

「いえ、食事のお礼ですから気にすることはないですわ。それに比べ霊夢ったら……」

紫は流司の礼に答えつつ視線を霊夢の方へと向ける。

それにつられるように流司もまた呆れるような諦めるような視線を霊夢へと向けるのだった。

「私だつてちゃんと考えているわよ!!ほら!!」

そう言つて霊夢が取り出したの是一本の一升瓶であつた。

「それは……」

「霊夢にしては気が利いているわね」

「“にしては”は余計よ」

霊夢が取り出した一升瓶には流司も見覚えがあつた。

大吟醸『夢幻』。

これは“幻想郷”で作られた酒ではない。

“外”で幻の一本とされたものがどういふ経緯か『博麗神社』へとやってきたものであつた。

大吟醸の特徴といえばなんといってもその香りと穏やかな味わいであろつ。

蔵人の粹を結集した日本酒の最高峰である大吟醸の中でも『夢幻』は既に製法が失われてしまったものである。

故にある意味では秘蔵酒とも呼ばれるもので、完品であれば“外”では数百万の値はついてもくだらないものであつた。

それを今開けようとしているのだから流司が驚き、紫が気が利くというものおかしな話ではないところであつた。

「はい。開けなさい」

「いいのか？」

「当然でしょ？酒は飲むためにあるのよ」

霊夢から『夢幻』を受け取った流司は一思いに開ける。
瞬間漂う芳醇な香り。

「これは……」

「あら……」

「へえ……」

注がなくとも香る香りに流司、紫、霊夢の三人は三者三様の感嘆の
声を上げる。

幻という名に恥じることのない代物であるということは飲むまでも
なく理解できるというものであったからだ。

トクトクトク。

と流司は三つのお猪口に注いでいく。

その度に広がる香りは濃厚でありながらもしつこさは全くといって
いいほどなく、それだけで生唾を飲み込みたくなるようであった。

「それじゃあ……」

「乾杯」

お猪口を掲げ傾ける。

瞬間、口に広がる味わいに喉を焼くような熱さ。

しかし、その味も何もかも尾を残すことなく、“夢幻”のごとく消
えていく。

それは飲んだことを忘れてしまうかのようにであった。

「なるほど、『夢幻』か……」

「これは納得ね……」

「本当に飲んだのか忘れてしまっわね」

再び注ぎ口に消えていく。

「月に花、鳥は寝静まり、風はそよぐ。何とも、贅沢なものだな」

空高く月を仰ぎ見て流司は呟く。

夜の帳の下、夢のような一時は肅々と流れていくのだった。

頁七十一、『月見桜』（後書き）

何だか酒の描写ばかりだったような……

大吟醸は日本酒の最高峰です。

香りといい、口当たりといいね。

まるやかでもあるので日本酒が初めての人でも楽に飲めるもの……

……らしいです。

いえ、まだ作者未成年ですから、未成年の飲酒と喫煙。

飲酒運転はいけませんよ、絶対に。

さて、花鳥風月の“花”の話だったわけですが、次は“鳥”です。

まあ、自ずと誰が出てくるかは分かりますね。

頁七十二、 『神主×烏天狗×新聞』 (前書き)

二本立てです。

ある意味では四本立てかな？

ドンドンドンドン。

その日の流司はけたたましく鳴り響く扉を叩く音で目を覚ました。流司がいるのは『博麗神社』ではなく、人里の一画に建てられている流司自身の家である。

何でも最先端の河童技術カッパ・クオリティーによって建築された家のように、古来の趣を保ちながら時代錯誤といえるような代物まで存在していた。

中でも、驚きなのが水道に電灯、コンロがあることだろう。

正確には水道は地下水を組み上げ、電灯は光を備蓄する鉱石を使い、コンロは極小規模の八卦炉のエネルギーは火力へと転化しているらしいと流司は聞いていた。

明らかに“外”でも有り得ないような技術であるのだが、人里の人に流司が話を伺っても“河童”という言葉で片付けられてしまうのだった。

他にも人里にある『龍神』の石像に天気予報の機能がついていたり“外”の世界の道具を真似ただけでは作り出すことのできないような正確な道具まである。

尤も“外”の世界の住人であった流司にしてみれば、河童という存在のあり方にギャップを感じることはあれども、道具自体は防水性の非常に優れているというものとしての判断がほとんどであった。

そのような河童の粋を結集させた家のある流司であったが、大抵を『博麗神社』で過ごさざるを得ない流司がこの家に戻ることは少ない。

多くても週に二日という程度であった。

しかし、そんな流司もここ数日は人里の家で生活をしていた。連日に渡る花見によって精魂ともに力尽きた流司は療養中であつたのだ。

療養中とはいってもものんびりとした生活を送るだけで、泥のように一日中眠っていたのは一日目だけであつた。

それ以降は長年染み付いた規則正しい生活を送っていたので、若さが凄いついとか疲労すら克服してしまう習慣が凄いついとか……

という訳であり、流司が寝ている時間というのはそれなりに早い時間であるのだ。

境内の掃除がない分、多少は起床時間が遅くはなっているとはいえ、それでもこの時期であれば朝日がでて間もない時間であろう。

「はいはい、今開けますよ……」

返事が投げやりなのは寝起きであるからして仕方がない。

それでも嫌な顔一つ浮かべていない流司には驚かざるを得ないだろう。

のそのそと起き上がった流司は蛇口を捻り冷水で顔を洗い意識を覚醒させていく。

その間も扉を叩く音は鳴り止むことはなく、近所迷惑なことこの上ないだろう。

せめてもの救いは流司の家と隣の家とは若干の開きがあることだろう。

ガラガラガラ。

「どちら様で……」

流司は覚醒した意識で扉のもとへと歩いていき、それを開け放つ。目の前に見えたのは雲間から降り注ぐ朝日と、

「おはようございます。新聞の……」

ピシヤッ。

流司は“それ”が言葉を述べきる前に扉を閉めた。

「さて、もう一度寝るとするか……」

「って、どうして閉めるんですかッ!!?開けてくださいよ!!」

「はぁ……」

ドンドンドンドンと再びけたたましく鳴り響く扉を叩く音に流司はいやいやながら扉を開き、扉を叩いていた少女『射命丸文』を家の中へと招き入れるのだった。

「さて、二十字やる。こんな時間にここへきた理由を説明しろ」

流司は目の前で正座をしてその上に漬け物石を乗っけている文に無表情で尋ねる。

「新聞は早朝に届けるものだと言ったからです」

「誰が住人を起こして配れって言ったツア!!!」
スパッアーン!!!

流司は渾身の右を振り抜き文の頭を叩く。
その手に握られているのは

H i g h
A d v a n c e d
R e f l e x
I m p l e m e n t f o r
S e n s i b l e ,
E m o t i o n a l ,
N a t u r a l l y

感覚、感情、自然的高進歩反射運動装置。
通称、ハリセンH A R I S E Nである。

勿論、これにも河童の技術が使われており、紙にも勝る軽量化に成功しているながら形状記憶合金レベルの耐久性を兼ね揃え、使用者の気分によつて与える痛みを調節ができるにも関わらず爽快感を促す音を常に発することに成功した至高の一品だ。

専ら流司がH A R I S E Nを使用するのは目の前で頭を押さえている文ぐらいなものであった。

因みに流司がH A R I S E Nを振り抜くスピードは烏天狗最速を誇る文ですら回避が不可能なほどであり、喩え漬け物石で動きを封じられていなくとも直撃していただろう。

「痛たた……なんだか、いつもより強くないですか？」

「こんなことも為に起こされて何も俺が思っていないとでも？」

流司は文の足の上の漬け物石をどかすと新聞を開きながら正面に座る。

「こんなことって酷いですね。清く正しい内容の載っている新聞など『文々。新聞』をおいてほかないというのに……」

「清く正しい、ねえ……」

確かに『文々。新聞』は天狗が発行している新聞にしてはマシな情報載っている新聞ではあった。

流司もそれなりには信用しているが、あくまでも“それなり”であって気休め程度にしか思っていないものである。

「『巨大流星空中大爆発』ねえ……」

一面を見て呟く流司の表情はいまいち優れたものではない。明らかに記事の内容を胡散臭く感じているようであった。

「凄いでしょー!?それは最近の記事では一番の内容ですよ!」

そんな流司の表情を分かっているながらも文はずいと流司の方へと身体を乗り出して声をあげる。

『文々。新聞』を読んで歴とした感想を述べるのは流司くらいなもので、その点流司は文にとっては貴重過ぎる読者であったのだ。もはや、文にとっての流司の価値は“幻想郷”の中でも“幻想”に近いものがあった。

「記事の内容が凄いいことは分かった。言っていることは少しとか全く分からないが本当なんだろうな」

一個人が流れ星を爆発させたなど普通であれば信じることはできないが、それを成したというのが『運命を操る程度の能力』という破格の力を有している『レミリア・スカーレット』の妹だということならあながち嘘ではないのだろうと流司は思っていた。

「けどな、最後が風邪には気を付けましようって意味が分からねえよ」

流司は記事の文末の部分を指差して口を呈す。

「いえ、字数も余りましたし、季節の挨拶でもと……」

「いやいや、手紙じゃないんだからいらないだろ……」

『文々。新聞』はあやゆる意味で新聞らしくはない。

“外”の新聞のような堅苦しい文章がつつらと書き綴られているものよりは面白みがあるように流司は感じていたが、文が本当の意味での新聞を目指すのであればこの辺りは何とかしなければならぬところであるだろう。

その後も流司はまるで添削をする教師のように記事を読んではおかしな点を文に指摘し続けるのだった。

頁七十二、『神主×烏天狗×新聞』（後書き）

素晴らしきHARRISEN。

はい、河童技術の無駄遣いという……

だいが、当て字近いですが、意外と意味あっていますよね？（笑）

次は欄外じゃ！！

欄外、『とある博麗の越年録』

「まさか、こんなにゆっくりとした年の瀬を送ることができるとは思わなかった……」

「そう？なら、良かったわ」

温い温いと流司と霊夢は炬燵に身体を埋めてのんびりとお茶を啜る。『博麗神社』に猫はいないが、猫の代わりに管狐である朔が炬燵で丸くなり、居間は極楽ムードが漂っている。

師走の晦日、所謂“大晦日”の夜を迎えた流司は昼間の忙しさが嘘のようにゆっくりとしているのであった。

昼間はまず蔵の中のを虫干しにするために外に並べ整理をする。それと平行して境内、拝殿、母屋といった場所の掃除をし過ぎないようにしていく。

し過ぎないというのは蜘蛛の巣などを落とすすぎると害虫を駆除してくれる存在がいなくなってしまうためである。

掃除に一旦区切りがついたのならば人里まで買い出しに繰り出して御節料理の準備に取り掛かりながら、昼食、夕食、そして年越し蕎麦の用意をする。

また、その間に時間を見つけ日が落ちる前に虫干ししていた蔵の中身を再び収める。

そうやって流司がせわしなく働き続けている間、霊夢が一体何をしているのかというと、流石にサボっているというのではなく元旦の夜明け前に行く神事の準備に取りかかっていた。

仮に霊夢がサボっていたとすれば流司もこの時ばかりは霊夢のこと

を怒鳴り散らしていたことだろう。

しかし、それらのことが済んでしまえば流司は恐ろしいほどに暇となってしまったのだ。

これは流司が“外”にいた頃は考えられないことであった。何故なら……

「まさか、二年参りや初詣の対策をしなくていいとはな……」

「そんなことしても参拝客はこないもの」

流司が『神代神社』にいた頃は未明から元日の夕暮れまで二年参りや初詣の参拝客で休まる時間などはありはしなかった。

“外”の『博麗神社』であっても二年参りは兎も角して初詣の参拝客はそれなりに集まり、前もつての準備が必要であった。

だが、“幻想郷”の『博麗神社』には一切のそれが要らない。

このことは流司に驚愕どころが一種の危機感を感じさせるまでに至っているのだった。

「来ないってそれは不味いだろ？」

「いいのよ。来たい奴は勝手に来るわ。それよりも流司、お茶」

「はいはい」

流司は慣れた手つきで急須からお茶を湯飲みに注ぎ、急須の中が空になったことを確認するとやかんからお湯を急須へと入れる。

「ありがと。んっ、はあ……」

霊夢はお礼を一つ言いお茶を飲んで息を漏らす。
そんな様子を流司は苦笑しながら見つめる。

「さて、寝るわ」

「は？」

「だって、他にすることもないし、明日は早起きをしなければなら
ないからね」

「確かに……」

霊夢の予想外の言葉に流司は驚いたが、続く霊夢の説明に納得の言
葉を上げる。

ここは“幻想郷”。

“外”とは違って大晦日だからといって、夜遅くにするなどとは
ないのだ。

テレビがないので某歌合戦はなく、寺院のない“幻想郷”では除夜
の鐘が突かれることもなかった。

結果することといえば“睡眠”と人間におけるごく自然な生理現象
だけであったのだ。

「それじゃあ、お休み」

「ああ、また来年」

草木も眠る丑三つ時。

ふと、流司は妙な寝苦しさで目が覚めるのだった。

重さの残る眼を押し上げて映り込んだ朧気な天井にはもはや慣れ親しんだといっても過言ではない染みが点々と浮かび上がっていた。即ちそれは流司が普段と変わりのない“外”の『博麗神社』と入れ替わった一室にいることを示していた。

外気は戸をしつかりと閉ざすことで部屋の中に入ってくることはなく、布団の内部も湯湯婆で程良く温められているために寝苦しさを感じる要素は全くといってなかった。にもかかわらず、流司はどうしても寝苦しさを感じざるを得なかった。

そう、布団の中が温かすぎるのだ。

流司が布団の中へ入ったのはまだ十一時にも至らない時間であり、それと同時に入れた湯湯婆が丑三つ時まで熱を保っているということとは有り得ない。

故に流司が感じている温かさは不自然であるのだった。

それに加えて流司が感じていたのは若干の圧迫感であった。

言い換えてみれば不思議と布団が狭く感じるということだろう。

朔が潜り込んでいるにしては狭すぎる。

つまりはそれ以外の存在であるのだが、流司には心当たりが一切としないのだった。

「……………?」

未だ完全に覚醒には至っていない意識でありながらも、違和感を敏感に感じ取った流司は布団の中をゆっくりとした動作で覗き込んだ。

「なッ!？」

瞬間、流司の意識は覚醒を飛び越えて驚愕へと至る。

そこには有り得ないものがあつたからである。

咄嗟に声を上げようとした口を塞ぐことに成功したのはもはや奇跡としかいいようがないだろう。

今にも口から飛び出してしまいそうな心臓の鼓動を必死の思いで抑えて、流司は次第に冷静さを取り戻していった。

「（なんで、霊夢がこんな所にいるんだよッ！！？）」

流司が寝ている合間に流司の布団へと潜り込んでいた霊夢。

あまりにも有り得ない状況に流司は表面上は冷静を装っていたが、内心は依然として混乱の極地にあつた。

一つ屋根の下に住んでいたとはいえ、このようなことは今までに一度もなく過ごしてきた。

寝ぼけてしまっていた霊夢と遭遇したことは何度かありはしたが、それだけであつたのだ。

ギシッ。

「はっ？」

霊夢の腕が流司の胴を器用に抱き締める。

流司のことを抱き枕とでも思っているのか、その寝顔は実に健やかなものであつた。

そんな姿に間の抜けた声を上げてしまった流司の心も次第に落ち着いていく。

「仕方がないか……」

流司は諦めたかのようにぼそつと呟いた。
その顔は柔らかな笑みで溢れていたが、流司の諦めは“未来”をと
いう意味でもあった。

霊夢の抱擁を受けながら流司は浅い眠りへと落ちる。

翌朝。

「……………」

「あけましておめでとう、霊夢」

「ツツツツ！！！！！！！！！！」

流司は昨晩から予想の出来ていた痛みに備える。その“未来”は“
現実”のものとなり…………

神霊『夢想封印』

ピチューーン。

流司は晴れてピチユリ初めを果たすのだった。

欄外、『とある博麗の越年録』（後書き）

二度目の当選、サラミさんリクエストの『博麗神社』の年越しでした。

五幕で霊夢全くなのでこんなのもいいかなと？

ただ、感情描写は一切なし。

理由は読者にお任せします。

次は350。

勢い凄いですよねえ……

頁七十三、『似非電化製品』(前書き)

諸事情あってこの話を最後にしばらく更新を止めたいと思います。

「で、今日来たのはいつもの“アレ”か？」

「はい、そうです」

『文々。新聞』の内容について一通りの感想を言い終えた流司が文に尋ねる。

流司には文が人里の家を訪ねてくる理由には大体の予測がついていた。

そもそもが流司自身に会いたいのであれば人里の家を訪れるよりも『博麗神社』を訪れた方が会うことのできる確率は飛躍的に高いものであった。

つまるところ、文は“神代流司”ではなく、“人里の家にいる流司”に用があるという訳である。

そして、烏天狗である文はその主な生活域を“妖怪の山”としており、そこには天狗だけでなく河童などの妖怪も住んでいる。

“妖怪の山”は排他的ではあるものの身内の団結力は非常に高い場所である。

即ち、文は河童の代わりに流司にこの家の使い勝手について尋ねてきたのだ。

基本的に人里の人口が突発的に増えるということはない。

その為、家というものは代々受け継いでいくので、補修などをすることはあっても新しく建てるということはずなかった。

また、妖怪という存在は“家”というものにそこまで執着すること

はない。

洞窟などをその根城にする妖怪はそれこそ多く、中には特定の居住地を持つことのない妖怪もいるくらいであった。

そんな存在である妖怪が“家”を建てようと思うだろうか？

答えは当然のごとく否である。

“家”を建てようと思う妖怪は皆無と呼べるまでに少ない。

河童には優れた技術力があつた。

しかし、河童の周囲にはその技術力を積極的に利用しようと考え存在がいないのだ。

せいぜいが烏天狗の使うカメラくらいのものであつた。

そんなところへ現れた“外”の人間であり、“幻想郷”への永住が決まり、尚且つ“家”を必要としている流司の存在は河童にとつては格好の的、もとい二度とはお目にかからないモデルケースとなりうる存在だったのだ。

流司という存在がいることを烏天狗伝てに耳にした河童たちは流司の家を建てることに名乗りを上げた。

勿論、建設に必要な材料は河童が負担してである。

条件は居住者である流司が河童の技術をもって作られた道具を使用し、その道具についての感想を一定期間毎に報告するというものであつた。

この提案に流司は快く了承し、極めて“外”の現代に似た家が人里に建築されたのである。

しかし、これには一つの問題があつた。

人間である流司は基本的に“妖怪の山”には立ち入ることができない。

仮に立ち入ることを許可したところでは家が建てられた当時の流司

の実力では“妖怪の山”は“即死区域”であって立ち入るわけには
いかない場所でもあった。

そこで名乗りを上げたのが“幻想郷のブン屋”こと、『射命丸文』
である。何もそれは文がとある河童との間に比較的友好関係を築
いていたからではない。

確かにそれも含まれてはいたが、大部分は流司の情報を独占するこ
とができると考えた故のことであった。

当時の接触が困難であった流司に近づくにはまたとないチャンスで
あり、文もまたそれを逃すわけにもいかなかったのだ。

そして、流司も“幻想郷”の新聞というものに興味を抱いたため文
が河童とのメッセンジャーになることを了承したのであった。

このような三者三様の思惑が合致したことによって、一定期間毎に
文が流司が人里の家にいる時を見計らって訪れるという関係が続い
ているのだ。

「で、今回は“温冷庫”からですが……」

文はキッチンの小脇に置かれている大人の身長ほどの直方体の物体
をペンで指し示す。

「機能的にはどこにも不備はないな。ただ、“温め”はある意味あ
まりがない。普通にレンジを使っても問題ないからな」

“温冷庫”。

その字の通り物を温めた状態と冷やした状態で保存することができ
る保存庫である。

外見は“外”の電気冷蔵庫そのものである。

それもそのはずで“温冷库”は“外”から流れ着いた電気冷蔵庫を河童が魔改造したものであった。

“冷蔵”に関しては冷蔵庫と性能には一切変化はない。

問題の“温蔵”であるが、これは温まったものをそのまま保存できるものであり、平たく言ってしまうえば、高性能の保温パックである。しかし、温めた状態で保存をするものが少ない上に中にあるものは全て同じ温度になってしまっているので、流司にはどうにも使い勝手が悪いと思えなかった。

「なるほど、なるほど。あくまでも“冷蔵庫”だけの方がいいということですね」

「そういうことになるな。使えなくないが、わざわざ使うようなものではないということだ」

流司の言葉に頷きながら文はすらすらとペンを走らせていく。速記でありながらもその字はミミズののたくったような字ではなく、そのままに河童に提出してもよいほどに綺麗な字であった。

「では、どのような機能が欲しいのですか？」

「いや、“冷蔵庫”に冷やす以上の機能を求めてないから……」

「そうですか？真空保存とかも面白いと思うのですが……」

確かに保存という意味では真空は正しいものがあると流司は思ったが、“冷蔵庫”にそのような機能を求める人間はいないだろう。

「いやいや、いいから……ただの冷蔵庫にするように伝えてくれ」

「分かりました。そういうば、最近妙な噂があることを知っていますか？」

ペンの動きを止めると文は面白いことを思い出したように流司に尋ねた。

「妙な……？聞いた覚えはないな」

「でしたら、教えてください。事の発端は……」

文は体勢を正すと静かに役者じみた口調で話し出した。

頁七十三、『似非電化製品』（後書き）

はい、四月一日でした！！
しんがついちにち

明日も更新しますよ、多分ね。

本当はエイプリルフール用に一発ネタの小説でも投稿しようと思っ
たんですけどね。

これ、明日になってから見た人には悪いですね。
すみません。

次回から物語が……

その光景が初めて見られたのは一週間ほど前のことであった。発見したのはしががない妖精だ。

その妖精が常日頃の遊び場となっている花畑を訪れたところ、その花畑が跡形もなくなってしまっていたのだ。

正しいところでいえば、花畑になるはずであったであろう花々が全て花を咲かせずして散ってしまっていた。

一見してみればその光景は突風によって蕾が吹き飛ばされてしまったようなものであった。

しかし、それをよく見てみればどれもこれも何か鋭利な刃物で切り落とされてしまっているかのように鋭かったのだ。

そもそも、蕾を軒並み吹き飛ばしてしまうような突風が吹いた様子は“幻想郷”には一切なかった。

そして、その翌日に妖精が再びその場所を訪れたところ、驚くべきことに花畑は元の状態に戻っていたのだ。

それも丁寧なことに蕾の状態であった。

最初はその妖精も不思議に思っていたがそこは妖精、次の瞬間には疑問など忘れて遊び呆けてしまったのであった。

次の目撃者は人里の人間であった。

木こりであるその人間は薪や家具の材料となる木を切り倒しに人里からさほど離れてはいない森の画へ出掛けていった。

しかし、木こりがその場所にたどり着いたときに見たのは既に倒されてしまっている木々であった。

これが力づくで押し倒されていたのなら妖怪の仕業だと納得することもできた。

だが、その木々の断面もまた刃物で切られたように綺麗なものであったのだ。

人里にはその男以外の木こりはいない。

だからといって自然に起こるような状況でもなく、妖怪の仕業であると仮定しても到底理解ができるような光景でもなかった。

妙な気味の悪さを感じたその木こりは結局そのままその場を去ってしまったのであった。

「とまあ、このような話が妖怪、人間、妖精問わず色々と風の噂になっっているのですよ」

「そういえば俺も妹紅から似たような話を聞いたな」

流司はつい最近妹紅と話した時に妹紅が言っていた話も文が話した噂の一部かと虚空を見つめながら思い出すように呟く。

「本当ですか？そこを詳しく教えていただきたいのですが……」

「概要は他の話と一緒にだな。違いは場所が“迷いの竹林”ということとぐらいだ」

流司が妹紅から聞いた話は妹紅の住んでいる小屋の周りの竹がいつの間にかに軒並み切られてしまっていたということであった。

“迷いの竹林”の竹の成長速度を考えたら、次の日には元に戻っているだろうと妹紅自身は特に気にすることもなかった。

実際、竹は翌日には再び堆く聳えていたので、これといって面白みのある話ではない。

「そうですね……正しいところは分かりませんが、確かに一連の噂と同じようにも思えますね。ここまでくるともはや“異変”とも呼べるかもしれませぬ」

流司の話をメモに取りながら文はふむふむと頷きながら意見を言う。確かにこれだけの奇妙なことが連続して起こったというのならば、“異変”と呼んでもいいものであるかもしれない。

「だが、人などに被害はでていないのだろうか？」

「はい、私の知る限りではそのようなことは全くありません」

ただ一つ“異変”と呼ぶには足りないとなれば、全くといっても今回の一連の事件では人などが困るようなことには至っていないのだ。危険性が少ないということでは前回の“異変”も似たようなものであったが、今回に至っては前回のような派手さも全くあることはなかった。

これでは霊夢が動くかどうかも怪しいもので、“異変”の意味を果たしているとは言い難いものである。

「だとすれば、そこまで過敏になることもないだろうさ」

「まあ、そうですね。何か大きな動きでもあれば別ですが」

「そうだな」

「では、私はこの辺で。今回の要望もすっかり伝えておくので近以内に新しい“冷蔵庫”を届けに来るかもしれませぬ」

「ああ、そのときは頼む」

文は流司の言葉に軽く頷くと一瞬にして家の中から姿を消すのだった。

「では、これと同じものを探してくればいいのですか？」

「はい、神代様にはいつも御世話になっています」

「流司で構いませんよ」

「いえ！！そんな恐れが多い……」

畏まるように深々と頭を下げる女性に流司は苦笑する。

流司が人里で暮らし始めてだいぶ経つことからもほとんどの住人は分け隔てのなく接することができるようになっていた。

しかし、ただの一人、亜紀の母親だけはどうしてもその接し方が一種の隔たりができてしまうことが多かった。

「もう、お兄ちゃんはいいつて言っているのに……」

深々と頭を下げる様子に隣の亜紀はぷりぷりと怒るように己の母親のことを見上げる。

「俺も無理を言っているわけじゃないからさ。それが楽だというならいいけれどね」

「でも、お兄ちゃんはこういった態度をとられるのは嫌なんですよ？」

「少しだけ、気構えちゃうかな？」

流司の正体が人里に知れ渡った後も遠慮なく流司に接してきた亜紀は母親とは正反対の性格であった。

これはすぐに流司と打ち解けた亜紀の父親の血を引いているのだから。

好奇心の強さまで受け継いでしまったのは少々欠点と言えるかもしれないが。

「ほらあ〜」

「なら、流司様と……」

「あまり変わっていないよ、お母さん……」

「その辺は追々つてことで。じゃあ、俺は日が高いうちに行つてしまつよ」

「よろしくお願いします」

流司は人里の外へと歩き出す。

目的は山菜の採取であった。

人里の近くに群生しているものであれば人里に住んでいる人であっても採取することができるが、離れた場所となつてしまつとそうもいかない。

そこで流司はそういった場所にあるものの採取を引き受けているのだ。

朔という管狐がいるほかにスペルカードも所有している流司であれば、そうそう遅れをとるようなことは無くなっていたからだ。

「うん。気をつけてね」

亜紀の言葉を背に受けて流司は人里の外へと出て行くのだった。

頁七十四、『風の噂』（後書き）

花鳥風月の“鳥”の終了と“風”の導入という感じですかね。

風は誰彼というのではなく、“風の噂”という形に。

さて、実はスペルカードを所有というか使えるようになっていた主人公。

御披露目することにはなるのかならないのか……

頁七十五、『風との遭遇』

人里から離れた森の中。

位置的には“妖怪の山”の裾野に近いと言え、人が近づくことのできるギリギリの場所である。

そのような場所に流司と朔が訪れてから、優に二刻以上の時間が経とうとしている。

その間、流司と朔はひたすらに数種類の山菜を探し採取を続けていた。

既に流司の背負う籠は一杯に近く、依頼されていた量に自分の分を含めても有り余るだろうほどであった。

「クオンー!!」

流司の足音以外は静まり返った森の中に朔の声が響く。

それに反応した流司が首を音の発せられた方へと向けてみれば、そこにはぐるぐると回って己の場所を誇示している朔の姿が流司には見えるのだった。

朔が浮かんでいる真下の地面には数株の山菜の姿が流司にも確認でき、流司はその場所へと足を運ぶ。

「でかしたぞ、朔」

「クオン、クオン!!」

流司の言葉に上機嫌になった朔はその場をぐるぐると回る速度を速める。

目を回すことになるから落ち着けと朔を窘めながら流司は山菜の採

取をする。

実をいえば、籠に入っている山菜の大半は朔が見つけたものであった。

というのは朔の嗅覚が非常に優れており、一つ山菜を見つけて出してしまうと流司が探すまでもなく後は朔が次々と見つけてしまうのだ。実際の狐がここまで嗅覚に優れているのかは流司の預かり知るところではないものの、管狐だしと半ば強引に納得していた流司は朔の特異性を気にすることはなかった。

「さて、今日はこのくらいでいいだろう」

「クウ〜？」

山菜を採取し終えた流司のことを朔はもういいのか？と問うように覗き込む。

「これ以上は必要ないからな。採り過ぎは禁物だ」

求められている量から考えてみれば既に採り過ぎと呼べるような量を採取してしまっていた流司であったが、これ以上は本当に無駄になっってしまうだろうと朔に諭すようにして説明する。

一人が数刻で採ることのできる量程度では自然にとっては微々たるものであることは流司も知るところではあった。

だが、問題はそういったことではない。

自分一人だからいいだろうという考えを持ってしまふことが問題であるのだ。

それを理解している流司だからこそ朔を制止し、採取を切り上げることを決めたのであった。

「クオン！」

「よし、いい子だ」

流司の言葉を理解して定位置である流司の首に巻き付いた朔を流司は笑顔で撫でる。

「それじゃあ、帰るとしようか」

流司が人里へと飛び立とうとした瞬間であった。

疾。

一陣の風が吹き抜けた。

「ッ?!」

流司はふと右頬に痛みを感じ頬を押さえる。

感じたのは刺すような鈍痛と独特のぬめり。

流司には見るまでもなく血が流れていることが理解できてしまった。

朔は既に流司の首から離れて周囲を警戒するように流司の周りを回るようにして飛んでいる。

そんな朔の姿に流司も自ずと警戒心を高めて周囲の様子を窺い始める。

流司が注視して付近を見てみれば、辺りに生える木々にはいつの間にかに切り傷のような鋭い線のようなものが刻まれている。

地面から生えている草は芝刈りでもしたかのように短くなっており、木々の葉の中には半分に取り取られてしまっているものも流司の目には確認することができた。

「（なるほど、これが“例”の噂か……）」

流司は心の中で納得の声を上げる。

まさか、自分が噂さえている状況を実際に目にするにはなんと
は思いもしてはいなかったが、遭遇してみれば実に奇妙な状況に流
司は思えた。

その時であった。

再び、その場を一陣の風が吹き抜けようとして、

「クオン!!!!!!」

朔の鳴き声はその風を切り裂いた。

それはある意味で比喻ではない。

朔の声に萎縮してしまった“風”^{それ}は姿を表した。

「噂の正体という訳だな。『鎌鼬』、十分に納得のいく正体だ……」

流司は目の前に現れた存在に驚いたのではなく納得の声を上げる。

そこにいたのは腕が鎌のように鋭いものになっている一匹の鼬であ
った。

『鎌鼬』。

それがその妖怪の名前だ。

突風と共に現れて人々に無数の刀で切りつけたような傷を与えると
いう妖怪である。

妖怪の中では比較的によく知られた妖怪であり、特に逸話というも
のが存在していないにも関わらず大きな力を有している妖怪である
う。

それだけに朔、そして流司自身の警戒心もかなり高いものであった。しかし、流司はその『鎌鼬』の姿にどうしても解せないことがあった。

「どうして、こいつはここまで傷ついているんだ……？」

そう、その『鎌鼬』は全身のあちらこちらから血を流してしまっていた。

それが自然な怪我によるものなのか、そうではないものなのかは流司には分からない。

ただ、理解できていたのはここでの戦闘を避けることができないだろうということであった。

普通であればそれは理解のできない話であろう。

全身が傷だらけの状態で戦闘を行うなど、いくら力のある妖怪であっても馬鹿げていることである。

しかし、流司にはそれでも襲うだけの価値があったのだ。

『龍神』の血を引きながらも人間である流司が妖怪にとっては非常に美味しい存在であるからだ。

流司の肉を食らえば大抵の傷は一瞬にして治ってしまうほどの力もある。

故に『鎌鼬』にとっては今の状況は千載一遇であった。

「なるべくなら戦いたくはないのだが、そうも言ってもらえないな…」

「ゲルウウウ」

流司は妖怪だからといってなんでもかんでも退治しようなどとは思っていない。

避けることができるのならば戦いを避ける。

それが流司の考えであった。

だが、戦わなければならぬと分かったときには冷徹にもなれる。
それが流司である。

ここに一つの戦いの火蓋が切って落とされるのだった。

頁七十五、『風との遭遇』（後書き）

さて、戦闘の開始です。

今回は『鎌鼬』との戦い。

こいつが“風”ですね。

いよいよ、次回主人公のスペカが炸裂するか！？

ではでは～

頁七十六、『風去りて』

流司と『鎌鼬』の間の力量差というものは現状においてほとんどありはしなかった。

というのは、今の流司の実力は“幻想郷”における純粋な力量であっても中堅に食い込むようになっていくからである。

“純粋な”というのはスペルカードルールを用いることのない力比べという意味でのことだ。

これは人型をとることのできない妖怪の大半を退治することができただけの実力があることで、例えるならば一般的な陰陽師と同じくらいの実力であるということである。

改めて言うまでもなく、このことは異常であると言えた。

幼少の頃より修行に明け暮れることで手にした陰陽師の力と同じだけの力を流司は一年、実際には半年足らずで会得してしまっているのだから。

勿論、それは地獄のような特訓の日々と“幻想郷”という場所が影響しているのだが、それでも流司には才能があったと言っべきであろう。

そして、今の『鎌鼬』は浅くない怪我を負っている。

仮に『鎌鼬』が万全の状態であれば流司の経験の少なさから、実力が等しいものがあるのだとしても『鎌鼬』の圧倒的な優位性は揺るぐことがなかったであろう。

だが、それはあくまでも“if”の話でしかない。

戦闘において仮定を考えない者は馬鹿者であるが、仮定に縋る者は愚か者でしかない。

故に『鎌鼬』は今という現実を把握し理解し納得しなければならぬいたのであった。

自分が圧倒的な“劣勢”に立たされているという状況を。

“転符『移ろい逝く華の色』”

流司は取り出した一枚のスペルカードを掲示しそこに込められた力を解放する。

それと同時に無作為に桃色に輝く弾幕を形成し出す。

“無作為”であるが故にその霊力弾の狙いなどはついておらず、『鎌鼬』の方に向かっていくという程度であった。

転。

桃色の弾幕がその輝きを黄色へと変える。

変わったのは色だけではない。

無作為に放たれていた霊力弾の数々はその動きを『鎌鼬』がいる側方向に対して直線に軌道を修正する。

それは霊力弾が滝を作り上げているように見え、黄色の弾幕はナイアガラ花火のような美しさがあつた。

転。

再び、弾幕はその色を変化させる。

黄色に続いて変化した色は淡い紫色。

流れる滝のように迫っていた霊力弾は一斉にその照準を『鎌鼬』へとする。

『鎌鼬』へと一直線に飛来する無数淡い紫色の弾。

それは『鎌鼬』が得意の速さをもってしようとしても追尾し追い掛

けていくのであった。

転。

次の瞬間、追尾し続けられず『鎌鼬』をすり抜けていった霊力弾が爆ぜる。

それらは連なっていていき、連鎖的に『鎌鼬』の背後から周囲を囲み込むようにして爆発を起こすのだった。

「（浅いか……）」

『鎌鼬』は完全に爆発に巻き込まれてしまっていただろうことは明白であったが、流司が油断をみせることはなかった。

気を抜いてしまった瞬間が最も危険であるということは重々承知していることであつたからである。

そんな流司の思惑通り『鎌鼬』はさほど傷を増やしていない状態で姿を表した。

爆発に巻き込まれる瞬間に空気層を作り出して盾となすことで威力を落としたのだ。

これがスペルカードルールに基づく決闘であれば美しくはない方法ではあつたが、これは命をかけた戦闘であつたのでベターな方法であつたと言える。

といえ、既に『鎌鼬』は满身創痕といえる。

もはや、流司に立ち向かうだけの力が残っているとは思えない姿であつた。

ここで『鎌鼬』が逃げ出したとしても流司がそれを追い掛けることはないだろう。

人里の人々を襲っていない限りはこの『鎌鼬』は“幻想郷”でのルールに乗っ取っているとと言える。

流司も人里の人間であることは確かであったが、場所が場所であるので襲われたとしても文句を言うことはできない。流司自身もそのような危険性があることを意識していながらもこの場所へやってきていた。

故に流司には『鎌鼬』を滅する理由がないのだ。

あくまでも、“自己防衛”が主におかれての行動であった。

朔を己の傍に待機させ、自分が主となって戦闘を行っているのは、流司自身が実力がついていてただけではなくそういう意味もあったのだ。

しかし、『鎌鼬』が逃げ出すことはなかった。

既に流司に対しての勝算がないことは『鎌鼬』にも分かっていることである。

それでも、逃げ出さないのは自身の妖怪としての矜持がそれを許さないか、はたまた……

「仕方がないか……」

一向に逃げ出すことない『鎌鼬』の様子を見て流司は呟いた。

その手には新たなスペルカードが握られている。

すなわちそれは流司が『鎌鼬』に対して止めを刺すことを示していた。

再び、スペルカードレベルの弾幕に『鎌鼬』が晒されたときに生き残ることができるかと問われれば、十中八九で“難しい”という答えが返ってくるだろう。

無論、流司もそのつもりであった。

“逆符『正直者の天邪鬼』”

流司の宣言で『鎌鼬』を閉じ込めるように四方から弾幕の壁が押し寄せる。

弾幕は碁盤のような升目を作り出し、縦、横、斜めの順に動いている。

一見してみれば単純で避けやすい弾幕ではあった。

しかし、その規則性は突然として崩れ去る。

縦に動いたかと思えば、斜めに動き、また縦、横と小刻みに動きを変えていく。

それはまるで弾幕自身がその動きに躊躇いを覚えているかの動きであった。

そして、遂に『鎌鼬』は弾幕の餌食となり、爆発に飲み込まれていくのだった。

スペルカードの効果が終わったときそこには既に『鎌鼬』の姿は跡形もなくなっていた。

なくなっていたのは『鎌鼬』だけならず、周囲の木々もそうであったが、スペルカードを二枚も用いたのだからそれは当然のことだっただろう。

「さて、今度こ……………」

「ああ、殺してしまったの……………」

流司が山菜を入れた籠を背負おうとした瞬間にその声は響きわたった。

いや、響き渡るなどという甘いことではない。

その短い言葉だけで周囲の空間が凍りついたのだ。

「折角、見つけ出して、痛みつけて、苦しめて、怯えさせて、逃げ

させたというのに……」

そこにいた存在に対して流司は本能的に危険を感じた。

それは朔も同じであったが、互いに全くもって動くことができない。

格が違う。

そこに現れた存在は流司と朔が出会った存在の中でも一線を画する存在であった。

「ねえ、私のこの思いはどうしたらいいの？それとも、貴方が変わりになってくれるというのかしら？」

誰をも魅了してしまいそうな美貌を持った女性は、日傘を閉じると誰をも恐怖させるような笑顔を流司へと向ける。

鎌風が去りし森に新たな風が流司の頬を撫でるように吹き渡るのだった。

頁七十六、『風去りて』（後書き）

というわけで、主人公のスペカと『風』見幽香』の登場でした。

スペカの解説とかはまた後日します、多分。

“転符『移ろい逝く華の色』”の元ネタは勿論、小野小町の短歌ですが、こまつちゃんとの関係は全くないですよ。

そして、“風”は『鎌鼬』ではなくて、ゆうかりんでした。
うん、ヤヴァいね。

頁七十七、『眠れぬ恐怖』

「あんたがさっきの『鎌鼬』に傷を？」

流司は疑問を口にしていたもののそれが正しいと理解していた。

あの『鎌鼬』は逃げなかったのではなく、逃げられなかった。

逃げるよりは流司に立ち向かった方がマシであったから、瀕死の状態になりながらも流司に襲いかかったのだ。

目の前の女性にはそれだけの力があるのだということが、流司にはひしひしと伝わってきていた。

一瞬でも気を抜いてしまえば吞まれてしまう。

いや既に流司と朔は吞まれてしまっていた。

「そう、あの妖怪はしてはいけないことをしてしまったの」

「してはいけないこと……？」

物憂げな表情を浮かべた緑髪の女性の言葉に流司は思わず疑問を口に出してしまった。

それは“幻想郷”に住まう妖怪は人里さえ襲うことがなければ基本的にその行動は自由であり制限されなくてはいけない状況などまず存在はしなかったからである。

「“アレ”は“花”を殺したの。だから、私は“アレ”を殺そうとしたのよ」

「たったそれだけ？」という思いが流司の口から零れ落ちることはなかった。

苛立たしく、本当に忌々しく思うように顔を歪ませている女性にそのような言葉を言うことができるかと問われれば、流司にそれを肯定することなどできる気もしなかった。

それ故の無言。
流司にできることはただ女性の言葉に耳を貸し続けることだけであつたのだ。

「ねえ、“花”から“咲く”ことを奪ってしまったら何が残るというのでしょうか。いえ、何も残らないわ。そう何もね……」

“草”が“化ける”からこそ“花”。
それが“開花”^{ははつる}ことがなければ“草”のままではなくなり、“花”とはなりえない。

咲くことを奪われた“花”は“花”としての存在意義を奪われてしまったのと同じであるのだ。

それはある意味では純粋な“死”よりも思い事実であろう。
下手をすれば“何も残らない”という言葉で言い表すことすら難しいといえるかもしれないだろう。

「だから、私は“アレ”から何もかもを奪うつもりだった。感覚を、感情を、希望を、徐々にすり減らしていつて最後には命を奪うつもりだったわ」

流司はそれを理不尽だと思うことはなかった。

妖怪の世界はよい意味でも悪い意味でも弱肉強食。

あの『鎌鼬』は流司の目の前の女性の琴線に触れてしまい、『鎌鼬』と“日傘を持った女性”では女性の方が圧倒的に強者であつただけに過ぎない。

それに意を唱えるほど流司は“外”での常識を“幻想郷”で引きずるようなことはしていなかった。

「それなのに“アレ”は貴方が殺してしまった……」
じわり。

流司は己の額から汗が噴き出すことに気がついた。
しかしながら、それを拭うことは叶わない。

ぴくりとも動きを見せることなくただ立ち尽くすだけであったのだ。

蛇に睨まれた蛙なんて言葉では言い表すことができない。

流司の足は鳶に雁字搦めに捕らわれてしまったかのように全く動かせることができなかった。

「ねえ、私はこの思いをどうすればいいというの？」

それには威圧感などは一切としてなかった。

かつて出会った、『鬼熊』や『土蜘蛛』にも流司は恐怖した。

確かにそれは命の危険を感じた本能的な恐怖もあったかもしれない。しかし、同時に人には真似ることのできないような巨軀から発せられる威圧感に圧されて恐怖を感じてしまったのだった。

一方、流司が目の前の女性から本能にも近い部分で感じていたのは、どこまでも純粹無垢な“恐怖”であった。
威圧感などではない、流司の本能的な部分はその女性を恐怖として捉えていたのだ。

「ねえ、私はこの行き場のない思いを何処へ向ければいいというの？」

朔も先程から全く身じろぎをしていない。

それは警戒しているからではなく、流司同様動くことができないという理由からでしかなかった。

むしろ、同じ妖怪であるが故に流司よりも強力な恐怖を感じているかもしれない。

それでも流司のもとから離れて逃げ出すことがないのは、それだけ朔が流司のことを思っているからであろう。

大した忠義深、主人愛であった。

精神は肉体に引つ張られるという言葉があるように、“管狐”という“獣”の器をとっている朔はいくら優れた知性があるとしても根本的な部分では本能にしはいされがちであった。

大好物を目の前にした朔の行動を見ても本能の御しきれてはいないように見えるだろう。

けれども、現在の朔は自身の本能を理性で押し止め、流司の傍らに居続けたのだった。

「ねえ、私は一体どうすればいいというの？」

状況が状況であれば惚れてしまいそうなほど妖艶な笑みを女性は浮かべる。

だが、恐怖に捕らわれて理性をギリギリのところまで保っているようであった流司がそれに見惚れてしまうようなことはなかった。

茫然と女性の顔を見つめてはいるもののそれはその行為しかできなかったということだけであった。

「ねえ、答えてくれないかしら？」

流司と朔はひた黙り立ち尽くす。

この空間に取り残されているものは誰一人として動いてはいない。にも関わらず、流司には正面で笑みを浮かべる女性がすぐ傍におり、自分の首に手をかけているような息苦しさを感じるのだった。

「それとも、貴方が私を満足させてくれるというの？」

頁七十七、『眠れぬ恐怖』（後書き）

会話パートなんで短いです。

シユタゲがこっさり楽しみな作者でした。

頁七十八、『クオリア』

人は皆、苺や林檎を見れば赤いと“感じる”だろう。

人は皆、二日酔いするとき頭がズキズキと痛い“感じる”だろう。

人は皆、自分の願いが叶ったことを知ったとき嬉しいと“感じる”だろう。

中にはそうは思わないような偏屈な精神構造をした人間もいるかもしれないが、まず間違はなくそのような反応をするに違いない。

それと同じであった。

「ほらっ！！逃げてばかりいないで少しは逆らってみなさいッ！！」

「クソッ、ガッ！！」

流司は悪態をつきながら、弾幕をかわしていく。

遊ばれていることは流司自身、理解におよんでいることではあった。

だが、流司にはそれ以上のことができない。

むしろ、悪態をついていられることが驚異的であったといえるだろう。

流司が目の中の女性から感じていたのは恐怖、“畏れ”であった。

それはその女性の行動や殺気から感じたものではない。

そう、苺や林檎を見て赤いと感じるように、二日酔いで頭がズキズキと痛いと感じるように、願いが叶ったことを知って嬉しいと感じるように。

目の前の女性を見て恐ろしいと“感じ”たのだった。

これは妖怪としての究極を体現しているといえるだろう。根本的な妖怪の存在意義は人間を“畏れ”させるということにある。その為に妖怪は様々な怪奇をもって人々をあの手この手で“畏れ”させてきたのだ。

であるのならば、見ただけで、その存在そのもので“畏れ”を与えることのできている緑髪の女性の妖怪は妖怪としての究極の一に達していると言えた。

普通であれば対峙した瞬間に決着がついてもおかしくはないことであつた。

けれども、流司は恐怖を“感じ”、畏れていても、悪態をついて生き延びている。

実際、その顔は恐怖で歪んでしまっているのにその言動には恐怖を“感じ”させるものはない。

何もこれは流司の空元気によって生じた矛盾ではなかった。

これもまた流司の能力によって無意識的に作り出されたことであつたのだ。

『クオリア』、もしくは『クワレ』というものがある。

これらは“感じ”のことを指し示す言葉だ。

つまりは莓や林檎を見て赤いと“感じる”感覚のことを『クオリア』というのだ。

“感じ”というものは普遍ではなく人によって変わってしまうものである。

莓や林檎を見て赤いと“感じる”のは当然とも言えることであろう。しかし、その赤いという“感じ”、『クオリア』が全ての人間において同一のものだとは限らない。

逆に人それぞれで皆異なっているといえるだろう。その赤いの明度や濃淡、“赤い”と“感じ”ても決してそれは単一のものではないのだ。

このことを『逆転クオリア』といった。

流司は現在進行形で『クオリア』の“転逆”を行い続けていたのだ。過去において流司は力のない人間であるのなら取り乱してしまってもおかしくはない状況におかれても、『鬼熊』しかり、『土蜘蛛』しかり、冷静過ぎるほどに冷静であった。

これらの時も流司は無意識下で“恐怖”という『クオリア』の“転逆”を起こしていたのだ。

それによって、流司は恐怖を感じながらも怯えることがなかったのである。

これは実に強力な能力の使い方であった。

言ってしまうえば、“本能”と“理性”の“転逆”。

恐れながらも勇猛に。

悲しみながらも歓喜に。究極的には痛みを快感に感じることさえも可能であった。

その上、感情や感覚という移ろい易いものであることから代償もほとんど必要ではなかったのである。

訓練さえ重ねていけば、相手の闘争心を転逆されたり、恐慌に陥れることで戦わずに勝利することも可能であった。

とは言っても、流司は『クオリア』の“転逆”を現状として無意識下で行っており、そのようなことをこの状況でできるとは思えない。つまりは“捕らぬ狸の皮算用”でしかなかった。

「チッ」

正直なところ理不尽だと流司は思っていた。目の前の女性の行動はただの八つ当たりでしかなく、流司はとんだとぼつちりを受けているだけであった。とはいえ、それが“幻想郷”であった。理不尽で不条理で残酷である。それが“全てに対して優しい”ということだ。もし、それが嫌だというのならば力をつけるしかない。理不尽や不条理に屈することのない力を。

流司は懐からスペルカードを取り出す。まだ瞬時に弾幕を形成するだけの実力のない流司ではこの戦いがスペルカードルールに乗っ取っていないものであってもスペルカードを使用して補助とするほかなかったからだ。

トータルリフレクション
“反符『全反射』”

宣言と同時にレーザー状の弾幕が出現する。流司から一直線に女性へと向かうレーザーは一般的には速いと思うことのできる速度ではあったが、弾道は直線でしかなかったので容易く避けることのできるものであった。

しかし、スペルカードとまでしているものがその程度で終わるはずもない。

反。

突如としてレーザーはその斜線を何か壁に当たったかのように反射させる。背後からのレーザーに僅かに驚きを示すと女性はまたしても易々とかわす。

反。

だが、レーザーの反射は止まることを知らない。その上、レーザーの軌跡は残ったままであり、囲み迫るレーザー徐々に女性の動きを制限していく。

そして、遂にかわしきることができなかった。
緑髪の女性はレーザーの直撃を受けるのであった。

頁七十八、『クオリア』（後書き）

まあ、先制？

強力っぽい使い方かな？

「傷一つ無しってか？全く笑えない冗談だったの……」

零れ落ちた言葉とは裏腹に流司の顔には笑みが浮かんでいた。

無論、それは渴いた笑顔であり、楽しみを感じさせるようなものは一切なかった。

スペルカードを使ってまで傷一つつけることができなかつたのだから流司がそのような表情を浮かべてしまったのも仕方がない。

勿論、スペルカードは相手を殺さない程度に威力を調整されている。当たりどころが悪ければただの人間であれば死んでしまうこともあるかもしれないが、妖怪であれば全くの無事であることも可能であろう。

とはいえ、それはスペルカードルールに基づいての決闘である場合だけである。

スペルカードの威力はスペルカードの使用時に霊力や魔力、妖力を余剰に与えることでその分高まっていく。

スペルカードルールに基づいての決闘ではそれを認められてはいないことであつたが、今はそのようなものではなかつた。

それ故に流司は大怪我を与えることができるほどまでにスペルカードの威力を高めて発動させた。低級の妖怪であれば跡形もなく消し飛んでしまうほどの威力まで自身のスペルカードの威力を引き上げたのだ。

だが、

「ふふっ、やるじゃない。あんな雑魚を痛めつけるよりよっぽど楽

しいわ」

流司の視界には傷どころか服に汚れ一つもつけていない緑髪の女性が妖艶な笑みを浮かべ日傘をさしているのだった。

「素直に喜んでいいものか……今のは日傘それで防いだのか？」

流司には先ほどの攻撃が当たったという手応えが確実にあった。

緑髪の女性がその身で受け止めたというのならば、傷はともかくとして汚れが服にないということはありえない。

であるとするのならば、何かをもってして防いだと考えることは当然の思考であった。

前と今とで女性の姿で変化があった部分はたった一つ。

閉ざされていた日傘が広げられていたことであった。

「そうよ。これはちよつと丈夫で私も気に入っているのよ」

己の攻撃を完全に防ぎきつた日傘を“ちよつと丈夫”と称する女性の底知れなさに流司は戦慄を覚える。

つまりは言外に死亡は流司の攻撃大したものではないと言っているようなものであったのだ。

自分の力がまだ未熟な部分が多くあることを流司は理解していたが、このような反応をさせるとは思いもしなかった。

まさに“格”の差。

“人間”と“妖怪”という種族の違いを緑髪の女性はありありと示しているのだった。

「くう…?」

「大丈夫だ。大丈夫……」

流司の傍らで心配するように鳴き声を上げた朔に流司は優しく答える。

しかし、朔に答えているようで流司のそれは自らに言い聞かせているようであった。

「なら、今度は私から行かせてもらおうよ」

瞬間、緑髪の女性の姿が流司の目の前にまで近寄る。

咄嗟に流司が身体を投げ出すようにしてその場を離れて地面を転がっていく。

ドゴンッ。

その音が響いたのと流司が動きを止めたのはほぼ同じであった。

先ほどまで流司が立っていた地面はクレーターのようになり窪み日傘が突き刺さっている。

後一瞬でも流司が身体を投げ出すことを遅らせてしまっていたのなら、日傘が突き刺さっていたのは地面ではなく流司の身体であっただろう。

もはや、反応できたのは奇跡と言っても差し支えなかった。

しばらく前の流司であれば緑髪の女性が近付いたことにすら気付くことがなかったかもしれない。

「へえ……これはどうかしら?」

続いて緑髪の女性は地面から日傘を引き抜くと切っ先を流司のいる

方向へと向ける。

ゾワゾワっと流司は背筋が凍りつくような感じる。

「（何かヤバいものがくる！！）」

感覚のままに流司が飛び出したのは右でも左でもなければ、ましてや前や後ろでもない。

“上”であった。

空に浮かびあがった流司を掠めるように、流司の足下を幅広の極光が流れる。

極光はその射線軸上の何もかもをなぎ払い消し飛ばす。

残ったのは先ほどのクレーター以上に深く抉れた大地だけであった。

「（死ぬところ……）」

「油断などしていてもいいのかしら？」

「ッ!？」

流司が息をつく暇もなく、緑髪の女性は日傘の切っ先を差し向ける。既に二発目の極光が放たれる準備は整っており光の奔流は流司に目掛けて、

「クオンー!！」

「目障りよ」

放たれることはなかった。

緑髪の女性のすぐ傍まで近付いていた朔が攻撃を仕掛けるが、緑髪の女性は虫でも払うかのような素振りで見傘の切っ先を朔へと向ける。

煌ッ！！！！

日傘から放たれた光は何の躊躇いも慈悲もなく朔の身体を飲み込んだ。

「朔ッ！！！！」

流司の叫びはもはや無駄以外の何物でもないだろう。

輝きが治まったときに残っているのは一発目と変わらず変わり果てた地面だけであった。

「碌な力もないというのに出しゃばるから……」

朔が消し飛んだことを肯定するかのように呟く緑髪の女性に流司は沸々と怒りが浮かび上がってくる。

この一年というものの毎日のように共にいた存在を殺させたのだ。怒りを覚えないはずもない。

しかし、流司がその怒りを表に出すことはなかった。

怒りに飲み込まれないようにと理性を奮い立たせる思いは“クオリア”の“転逆”を起こして流司をより冷静へと導いていく。

「目の前で仲間を殺されたというのに冷静ね。それとも、冷酷？いえ、その瞳……いいわあ……ゾクゾクする」

緑髪の女性は流司の瞳を確認するとその端正な顔を愉悦で歪める。怒りは表には姿を表すことはなかったが、流司の瞳にははっきりと

表れているのだった。

「でも、これでお終い」

“ 幻想『花鳥風月、嘯風弄月』 ”

その通りであった。

流司は冷静であったからこそ気がつく。

ただのスペルカードならまだしも、過剰に強化されているこの弾幕をかいくぐることは不可能だと。

いくら冷静に一解（逃げ道）を求めようともしそれは見つからず。為す術のない流司に光は殺到するのだった。

爆！！！！

「月に叢雲、花に風。運がなかったのだと諦めるといいわ」

己のスペルカードに流司が飲み込まれたのを見やると緑髪の女性は
呟く。

まさしく、そうであった。

もし、流司がこの場所にやって来なければ。

もし、流司が山菜を採りすぎていなければ。

もし、流司が『鎌鼬』と戦わなければ。

もし、流司が……

数え切れないほどの偶然の重なりあった結果の故の事実であった。

そう、運がなかったのだ。

月が叢雲に翳り、花が風に散るように。

唐突に事態は悪転する。仕方がない。

そう、仕方がない。

緑髪の女性はその場に背を向けて歩き出す。

強かった。

人にしては強かった。

少なくともあの雑魚以上の力は持っているだろうと緑髪の女性は流司のことを思っていた。

だが、それだけだ。

流司以上に強い人間を緑髪の女性は知っていたし、妖怪と純粹に戦って人間が勝てるはずもない。

それは誰もが知る常識で、覆そうとするのは水面に映る月を掴もうとするくらい愚かなことであった。

故にこの偶然によって引き起こされた結果は必然なのだ。

だ、とするのならば、

「月が翳るのが突然だというのならば、その逆も然り」

“彼女”が姿を現したのも必然であったのだろう。

「……誰？」

緑髪の女性は足を止めて振り返る。

そこには呆然としている流司を背に庇う一人の女性の姿がある。

「名を知りたいというのならまずは自身が名乗るのが礼儀であろう」

「？」

流司を背に庇う女性は腰まで届く蒼銀の髪を風に揺らして緑髪の女性に問いかける。

「『風見幽香』。名乗ったわ。で、貴女は？」

緑髪の女性こと幽香は口早に蒼銀の髪の女性に問う。

その声はどことなく焦りが含まれているようにもみえる。

「全く若いものは落ち着きがなくてかなわん。まあ、応えねば我が礼儀知らずというもの故な、答えよう」

やれやれというように蒼銀の髪を左右に揺らして女性は幽香に応える。

「『望』みすけ。それが我の名じゃよ」

頁七十九、『月に叢雲、花に風』(後書き)

新キャラ登場。

この展開を誰も読めまい。

えっ、バレバレだって？

それはいわないでください。

次回でしつかり謎解きです。

欄外は少し待ってください。

あまり流れを切りたくないのです。

頁八十、『逆さの月』（前書き）

後書きにて連絡というかアンケートがあるので、是非とも一見して
いただければ幸いです。

頁八十、『逆さの月』

流司は己の死を悟った。圧倒的な弾幕の前になすがままに蹂躪さえ、跡形もなく潰えるのだと思っていた。

狂乱に陥ることができたのあれば楽だったのだろう。

しかし、冷静に冴え渡った脳ははつきりとした“死”を自覚させ、どうしようもなく落ち着ききっていた。

自己防衛の為に発動した流司の能力はあろうことか流司自身を苦しめることとなったのだ。

だが、そんな脅威は唐突に刈り取られた。

「『望』。それが我の名じゃよ」

気付けば自分を守っている女性の姿がある。

傾き始めた日の光に映える蒼銀の長髪を柵引かせ堂々と幽香と対峙している。

『望』と名乗ったその女性のことを流司は知らない。

しかし、それでいて流司はその姿をどこか懐かしく感じるほかないのだった。

そう、この感覚に流司は覚えがあった。

「（俺は知っているのか……？）」

『主の靈力は清いのう。まるで……』

『ほれほれ、そう照れるでない』

『何、我とて納得の上。また主の系譜に連なるものに出会うこともあるじゃろっ』

「“朔”、なのか……？」

流司は呆然と呟いた。

“リュウジ”の伝える感覚は目の前の存在を『望』として認識していたが、自身の伝える感覚は『朔』として認識している。

「否であり、然り。我は『望』。そのように定めたのは“リュウジ”じゃろっ？」

「えっ？俺が？」

「むっ、そこまでは思い出しではない？ふむ、よく分かんらんの……」

流司が驚きを示したことに望は眉を顰めて首を傾げてしまう。

『望』という存在を“リュウジ”が識っていることを流司は理解していたが、それが『望』と『朔』だという理解にはなり得ていなかった。

あくまでもそれは漠然とした感覚からのもので一切の確証があるものではなかったからだ。

「まあそのようなことはどうでもよいが」

しばし、首をひねり続けていた望であったが、結論を無理に求めようとするつもりは全くないようであった。

「それよりも……」

ギョツ。

「ふじっ！！」

望は腰を地面に落としてしまっている流司に向き直すと両腕を広げ、流司の身体をその胸に埋めるのだった。

「ああ、癒される……何百？否、千年は疾うに過ぎてしまっているか……」

「むうーむうー！！」

望の胸の中にすっぽりと埋まってしまった流司はごもった声を上げて地面をばんばんと叩く。

「そう、恥ずかしいがでない。御主人は本当にあやつに似ておるのう……」

「んー、んー！！」

顔を真っ赤に染めて地面を叩き続ける流司を見て、望は上機嫌で流司のことを抱き締め続ける。

確かに流司が恥ずかしがるのも理解できる。数年と経たずして成人を迎える青年である流司が、妖艶さと清楚さを兼ね揃えた女性の豊かな胸に抱かれているのだ。

それを恥ずかしがらないほどまでに流司は女性には慣れていない。

「しかし、恥ずかしいPはいえそれは些が大袈裟ではないか？」

「ぶじっ、ぶじっ！……！」

いくら慣れてはいないとはいえ、取り乱してしまっただけで流司は女性に対して初心というわけではない。

にもかかわらず、流司の動きはまるで命の危機に瀕しているかのうとく切羽詰まったようであった。

いや、“よう”ではなく実際に死にかけていた。

原因は言うまでもなく、窒息。

美人の腕の中で死に絶えたいという思いは男であれば誰もが抱くかもしれない思いかもしれない。

しかし、このある意味で悶死にもた窒息により死に至ることはなんと情けない気がするであろう。

確かに望の容姿は一般的に言って実に整っているといえたものであったが、それとこれは流司であっても別問題であった。

「は、放してくれ……！」

何とかして声をあげるだけの隙間を作った流司は切れ切れに望に話し掛ける。

「うむ、我はもう少しこのままがいいのじゃが……！」

だが、望はそんな流司の懇願も顔を洪らせて乗り気ではない。

「せめて、ち、力を弱め、……！」

「おお、それはすまんかった。つい、な。では……！」

望は流司を胸から解放すると今度はその背中から腕を回して抱き締める。

「どうやら、流司から離れるという選択肢は望にはないようであったようであった。」

「で、『朔』、でいいの？」

先程よりかは幾分も話しやすくなったことで荒かった息を整えた流司は望に問いかける。

流司が首筋に感じている柔らかな感覚によって引き起こされた感情は問答無用で“転逆”させていたので流司は極めて冷静であった。

「それは先にも答えたんじゃないが……」

「あんな煮え切らない回答で納得できるかよ……」

流司の言うように望の答えは曖昧なもので納得するには不十分だと言えた。

「それもそうじゃな。正しいところで言えば、我は『朔』ではあるが、『朔』は我ではないと言った感じじゃ」

「？」

「ようは我は『朔』としての記憶を覚えているが、『朔』は我としての記憶を持つとらん」

そこでようやく流司は望の妙な言い回しの意味を悟るに至った。

「とはいえ、根本的には同一の存在である故な。ほれ、耳もしっか

りあるかろっ?」

流司が視線を望の頭に向けるとそこにはピクピクと動く狐の耳があった。

それが管狐のものであるのかは流司には判断できなかったが、少なくとも望が“狐”の一端に属している存在であることは理解にも分かった。

「ねえ」

酷く凍てついた声の響きと同時に一つの光弾が流司らを目掛けて飛んでくる。

だが、望は慌てることなく手を振るって易々と弾き飛ばす。

「人が話をしているというのに失礼じゃのっ」

「あら、私の記憶ではそいつより私の方が先に貴女と話していたと思っただけど?」

望は表示を一気に不機嫌なものへ変えると光弾を放った幽香と同じ冷たい声で応対する。

「どこぞと知らぬ妖怪と御主人、どちらが優先か答える必要もなかるっ?」

「なら、その人間がいなくなれば話してくれるのね」

幽香はその視線を望に抱かれたままの流司へと移す。

望という流司よりも興味をそそる存在が現れた今となっては既に幽香にとって流司はどうでもよい存在と化していた。

「その言葉、見逃せぬ」

望は流司からゆっくりと離れると最初と同じように流司を背に庇うように幽香と相對する。

「ちょっと待て!!」

一触即発の空気になりかけ、鋭い視線で幽香を睨みつけていた望を流司が引き止める。

「何じゃ、御主人？」

「何じゃじゃない!!お前、“尾”はどうした!？」

そこで初めて流司は望に力の象徴である“尾”がないことに気付いた。

「“尾”か?そんなものはあらん」

「そんなものって……」

流司は望のあっけらかんとした返答に絶句する。

妖獣にとつての“尾”の数はそのまま強さを示す。

“尾”が増えれば強くなり、減ってしまえば弱くなる。

それはどんな妖獣でも共通している事実であった。

「何せよ、我は……」

そう、例外があるとするならばただ一つ。

「空狐”じゃからな」

瞬間、望から凄まじい妖力。

否、“神力”の奔流が溢れ出すのだった。

頁八十、『逆さの月』（後書き）

擬人化しちゃった

ただ、このままハーレム的な感じにはなりませんかね。

という訳で、花鳥風月の“月”は朔でした。

月に逆を足すと『朔』ですしね。

そんでもって“管狐”でもなかったという。

朔の初登場時の妖狐の説明は長~~~~い前振りだったという……

で、本題。

アンケートを実施します。

内容はズバリ『個別ルートを作るか？』

以前からぼつぼつとそのような要望が出ることがありました。

そこで作るべきかどうかをアンケートしたいと思います。

あくまでも、これは『個別ルート』を望むかどうかのアンケートであり、“誰”のとかいうものでは御座いませんので御注意ください。

とはいうのは『個別ルート』の有無によって伏線の回収や張り方が変わって来るんですよね。

できれば様々な方からの意見をいただきたいのでご協力お願いします。

“空狐”。

それは妖狐の中で最高位に存在するものであった。

齡は三千年を超え、神格視されたその身は下級神など一息に屍ることが出来るほどの力を有している。

妖狐として力の象徴であった尾はない。

九尾から天狐に至る時点で三本へと減り、天狐から空狐へと至ると尾はなくなるのだ。

その尾の減少は当然力の減衰を示しているのではなく、尾を胴体と同化していくことで存在の格を引き上げているのである。

故にその力はもはや、“妖狐”ではなく“神”。九尾までは妖力であったが、天狐となることで神力へと変わり、空狐へとなると神力は更なる高みへと至る。

「“空狐”……？」

流司は啞然としてしまった表情を浮かべて呟いている。

今まで“管狐”という妖狐ともいえるか怪しい存在が、妖狐の最高位である“空狐”であったのだから驚かない訳があるまい。

確かに知識としてのそれは流司もよく知っているところであった。

けれども、いや、であったこそ、その存在を信じることができない。

“リュウジ”の記憶の中の望はその時点で“空狐”であった。
ならば一体望は何年……

「何か失礼なことを考えてはいまいな？」

「いや、断じて」

ブンブン。

顔だけを流司の方へと向け、じとつとした視線を望は流司へと向ける。

そんな視線を受けて流司は大きく左右に首を振る。

「むう、ならばよい。ところで今御主人は白紙のスペルカードとやらを持っておるか？」

しばらく向けていたじとつとした視線を霧散させると望は流司に尋ねる。

「まあ、あることにはあるけど……」

現状として流司のスペルカードの中で効力を発揮させるものは使用した三枚しかなかった。

流石に大量のスペルカードを所有することができるほどには流司はまだ熟練してはいない。

故に前もって霊夢から受け取っていたスペルカードの大半は白紙の状態で流司は携帯していたのだ。

「ならば我に数枚くれはしないか？」

「今か？」

「然り」

白紙のスペルカードを必要とする理由は考えるまでもないことだ。

けれども、スペルカードを作るということはそれなりに労力を有することであり、即席で作り上げるとはそうそうできることではない。

当然、流司ではそんな真似ができる訳もなく、望の言葉に疑問を抱いてしまう。

しかし、望はゆっくりと頷き流司に答えるのだった。

「……これでいいか？」

流司は白紙のスペルカードを取り出して望に渡す。

「ふむ、助かる。ありがとう、御主人」

望は受け取った白紙のスペルカードを満足げに見つめてお礼を述べる。

「もう、いいかしら？」

「おや、まだおったのか？逃げても良かったのだが……？」

「ッ!!」

声をかけてきた幽香を望は嘲るように笑う。

幽香は齒軋りをして忌々しいような表情を浮かべて殺気を膨らませるが、望は全く気にする様子はない。

「尤も御主人を殺すと仄めかした以上はただじゃおかぬが」

「言ってくれるわね」

「実力差も見抜けぬひよっこに我が負ける訳なかるう？」

「……………」

挑発に罵倒の舌戦が繰り返される。

春の麗らかであった空気は氷点下のように冷え切り凍りつく。

そんな張り詰めた空気の中に一石を投じることができるとは、どの気概が流司にあるはずもなく、寒気に当てられた流司はただただ黙り続ける。

「貴女こそただ歳をとればいいというものじゃないのよ。神と同格だからって調子に乗るんじゃないわ」

「誰がただ歳をとっておると？主こそ男も知らぬ生娘の癖して大層な口をきくわ」

「ハッ、男に媚びるなんてごめんよ。下らない、所詮は狐ね。大人しく愛玩動物にでもなっていればいいのよ」

「……………」

もはや、辺りは氷点下を超え絶対零度といえる程にまで冷める。両者共に一切の遠慮がない。

「ククッ、青い青い。だから、“おぼこ”なのじゃよ」

「甘い声で喘いで御主人を満足させるような“若作り”よりはマシよ」

幽香も望も既に流司のことを忘れてしまっているかのようにも見える。

いつ臨界点を迎えてもおかしくない張り詰めた空気に流司は恐る恐るその場を離れて遠目から様子を窺っている。

「どうも我は主のことを好きになれんようじゃ。これでも社交的な性格をしているつもりなんだが……」

「奇遇ね。私も貴女のことを好きになれそうにないから安心しなさい」

凍てついていた空気に徐々に罅が入り始める。

そこから漏れ出すはどこまでも鋭い殺気。

この均衡が崩れ去るのは時間の問題であった。

「立ち去るのなら今のうちじゃよ？今なら半殺し程度で済ませてやるわ」

「冗談じゃないわ。貴女こそ、御主人様に尻尾でも振っておきなさい。最後になるのだから。ああ、貴女に尻尾はなかったのよね。ごめんなさい？」

「構わん。我にとって尾がないことは誇り、主こそ一人寂しく花と共に朽ち果てるがいい」

「大丈夫。貴女の後にはあの人間も送ってあげるから閻魔のもとで仲良くしてなさい」

空気が止まる。

轟ッ！！！

刹那の静寂は同じく一瞬の轟音によって決壊するのであった。

頁八十一、『相對』（後書き）

今回はちょっと短かったですね。
舌戦です。

ぶっちゃければどっちも若くない……

アンケートのご協力ありがとうございました。
様々な意見があり大変為になっています。

さて、少し補足ですね。

個別ルートを作ることになった場合は伏線などをそれぞれのルートで回収することになります。

そして、一定の時点からの一斉分岐ではなく、徐々に分けていくという形になります。

投稿時は個別ルートの本筋の物語を同時投稿でいくか、個別ルートだけを投稿することになると思います。

まあ、まだまだ未定ですけど。

アンケートは依然募集中です。

思うところのある読者の皆さんの意見をお待ちしています。

スペルカードルールというものが誕生したのは人間と妖怪の間にあるアンフェアな関係を対等なものとして決闘ができるようにという考えができたからである。

人間と妖怪が純粹に戦った場合、その根本的なポテンシャルの違いから間違いなく人間の勝利はない。

どう人間が足掻こうとも絶対的な格差が両者の間には存在しているのだ。

象と蟻を比べることが烏滸がましいこと以外の何ものでもないのと同様に妖怪と人間という存在を比較することが馬鹿馬鹿しいといえるのだ。

妖怪が異変を起こすことはもはや自然の理。

そうでなければ妖怪の存在意義が失われてしまう。

しかし、異変を起こせば人間との対立は避けられず、まともに戦った場合の妖怪側の勝利は揺らぐことがない。

けれども、人間という存在が妖怪の存在を維持するために必要であるのもまた一つの理である。

妖怪と人間が戦えば一方的な展開を迎えるのは分かりきったことであるからこそそのスペルカードルールの制定であった。

だが、スペルカードルールの制定にはもう一つの理由が存在していた。

それは強力な力を有している妖怪同士が際限無しに戦ってしまうことを防ぐ為である。

長い年月を生き、強大な力をその身に備えた妖怪などが戦った場合、

周囲への影響は目を覆いたくなるほどのものとなってしまっただ。

山は崩れて、海は干上がる。

天は裂け、地は割れる。そのような戦いを決して広いとは言い難い
“幻想郷”で行われたら一体どうなるのか。

こうなるのだ。

轟ッ！！！！

鼓膜が破れてしまいそんな轟きを起こしながら弾幕が大地へと着弾
する。

着弾の衝撃で地面は大きく抉れ砂埃が一面に舞い周囲を包み込む。

流司の視界には荒れ果てた荒野が広がっていた。この場所が元より
荒野であれば何も問題はなかっただろう。

だが、この場所は数刻前までは緑豊かな森であった、あつたはずで
ある。

しかしながら流司の瞳にはそのような緑豊かな森の姿など見る影も
ない。

ただ広がるのは、木々は倒れ、草は一掃され、大地は掘り起こされ
た荒廃した光景であった。

豊かであった森を変貌させてしまったのはたった二つの人影であつ
た。

“起源『マスターパーク』”

この場所を荒れ果てさせた人影の一つ、『風見幽香』が振り下ろし

た日傘の切っ先を自然な流れで戦闘を続ける相手へと向け、極光を解き放った。

その極光は既に遮るものなくなった空間を淀みなく駆け抜け殺到する。

その極光は人間どころかある程度の妖怪であつたら消し飛んでしまふほどの威力が込められているだろう。

しかし、極光の目標である女性は焦りどころか不適な笑みを浮かべると極光の着弾の瞬間に右腕を振るい極光をあらぬ方向へと弾き飛ばす。

爆ッ!!!

弾き飛ばされた極光が着弾した場所は一瞬のうちに変わり果て、元の姿を想像できなくなる。

“狐術『狐火の葬列』”

お返しと言うようにもう一つの人影の正体である『望』が即興でスperlカードを作り出して発動する。

現れたのは無数の揺らめく炎。

望を取り巻くように周囲を回る数多もの炎は望の振るう腕ほむらに操られるように列をなして幽香へと襲いかかる。

幽香自身は器用に炎列をかわしていくが、動くことのできない木々は炎に包まれて焼け落ちる。

先ほどから繰り返されるこのような攻防によって森は次々と荒野へと変わっていく。

“外”で騒がれている森林の伐採も吃驚の速度であろう。

流司は茫然自失とした表情でそれを見つめる。

むしろ、幽香と望が戦い始めてからそのような表情しか流司は浮かべることができていなかった。

望、いや、朔が予想外な存在であったことだけでも十分すぎる衝撃であつた上にこの戦いである。

流司だけでなくともこの状況におかれて茫然としない人間ないはずである。

「大層な口をきくだけはある。やるではないか、小娘」

「貴女こそ。時代遅れでスペルカードなんて使えないと思つていたわ」

こんな戦いがスペルカードルールに乗っ取つたものであるか！と流司は叫びを上げたい思いがあつたが、身の危険を感じて口の中に留める。

一連の戦いの様子から望も幽香も共に戦闘狂の気があるのではないかと流司は予測していたからだ。

「何、御主人と共にいたでな。スペルカードとやらがただ力を込めるだけでなく、その“名”にこそ意味があるということくらいは分かつておる」

「なかなか、賢いのね」

スペルカードルールは“命名決闘法”とも呼ばれるだけあり、スペルカードはその名にこそ意味を持っている。

故に名を付けないで力の具現だけではスペルカードとはならないのだ。

また、その名と実際に発動する弾幕がそぐわないとそれも威力、美しさともに数段劣ってしまうことになる。

まさに“名は体を表す”といった言葉がぴたりと当てはまる決闘法こそがスペルカードルールによる決闘法であった。

流司自身は周囲への被害から望と幽香の戦いがスペルカードルールに基づいてのものだとは思っていなかったが、実際にはそんなことはなかった。

既に望、幽香の両者の間には相手を殺そうという意識が最優先ではなくなっている。

どちらかが負けを認めれば後腐れなくこの場は治まることであろう。ただ、“全力”で戦いをしているだけなのだ。

スペルカードルールによって比較的決闘がしやすくはなったとはいえ、力の強い妖怪は全力で戦うことはできなくなってしまった。妖怪によってはその意義を理解していても鬱憤が溜まってしまいうものもある。

幽香はそんな妖怪の一人であった。

そこへ現れた全力を出しても満足のできるような存在である望。その身から発せられる空狐の名に恥じない強大な神力は幽香の心を久々に躍らせるものであった。

であったからこそ、幽香は望を挑発し戦いへと持ち込んだのだ。

そんな幽香の心情を知ってか知らぬか、望は幽香の言葉に乗り戦いを受け入れた。

無論、最優先の思いは流司の守護にあり、流司の身には外界からの接触を防ぐ結界のような防御膜が張られていたのだった。

「伊達に歳をとってはいないと言っただろう？」

「そうだったわ。流石は空狐とでも言っただころね」

「しかし、そろそろ飽きてきたことだしの。終いにしてもらおうか」
そう言うと望を一枚のスペルカードを掲げる。
流司が手渡したそれはいつの間にかに白紙ではなくなっているのだ
った。

「できることなら、もう少し楽しみたかったのだけど……」

少々不満げな表情を浮かべながらも幽香も一枚のスペルカードを掲
げる。

今度こそ、真正正銘のスペルカードルールによる決闘。
この一幕で戦いが終わることの証明であった。

「では、私からいくわ」

そう前おくと幽香は詠つような口調でスペルカードの名を紡ぐので
あった。

頁八十二、『強者の戦い』（後書き）

いつもはあっさり終わる戦闘が今回は長い……

オリジナルスペルカードの登場でした。

幽香はまんま極太ビームです。

望の方は流司同様そのうち解説するかも……

流的には次回もスペルカードが登場してしまいますしね。

つか、大学が忙しい。

更新がいつ途切れてもおかしくない。

もう二つは尚更。

落ち着くまでは突然ぶつつりもありえるのでその時は申し訳ないです。

頁八十三、『狐騙し』

“ 開花『風びく桃紅柳緑』 ”

瞬間、世界には花が咲き乱れた。

勿論それは比喩であり実際の状況ではない。

しかし、遠目から幽香の作り出した弾幕を見た流司にはまるで花が蕾を開いていつているように見えたのだった。

望へと襲いかかるのは大きな弾。

その大きさのわりには実際にダメージを受ける部分は少なく、比較的避けやすい弾である。

望も結構な速度で迫ってくるそれを造作もなく避け続けている。

しかし、弾は避けられたにもかかわらずその場に留まり続けて、次の瞬間に一齐に弾けるのだった。

円を描くように四方に小さな弾を弾き飛ばす大弾の姿は、開花を迎えた花の蕾のようである。

全ての弾が弾けたところで二巡目が始まる。

このスペルカードは俗に言う“耐久型”のスペルカードであった。スペルカードの発動中は相手はひたすらにかわし続けるしかないものである。

再び幽香は大弾を放ち始める。

一巡目とその量、速度ともに同じものであったが、一つだけ一巡目には見られなかったものが望へ襲いかかるものの中に紛れ込んでいる。

それは放射線上に放たれている緑色の線状の弾幕であった。枝垂れ下がる枝のようなそれが柳を模していることは流司にも見て取れた。

一度かわしてしまえば動くことのないそれは脅威ではないが、動きの幅を拘束することになり、弾ける大弾と組み合わさることで凶悪なものへと変化してしまう。

けれども、望は風の中を舞う花弁のようにゆらゆらと襲いかかるそれらを避けてしまう。

流司が同じ真似をしるといわれた場合同じことができる可能性は限りなく低かった。

否、できないであろう。

確かに度重なる訓練により流司は霊夢の扱うスペルカードもかわしきることができるようになっていた。

とは言ってもそれはパターンを読み訓練を重ねた結果であり、初見の弾幕、それも高位のスペルカードにあわせることなどまだできるはずもなかった。

流石の幽香であってもまさか掠り傷すら与えられることができないとは思ってもいなかったのか、一瞬歯を噛みしめるような表情を浮かべるがそれはすぐに愉悦のこもったものへと変貌する。

二巡目の弾幕が幕を閉じ、三巡目を迎える。

その弾幕の構成は二巡目とほとんど同じであった。

しかし、その全てが揺らいでいた。

大弾も放射線上に伸びる弾も全てが風に揺らめいているかのようになり曖昧な動きをし軌道が変化し続けているのであった。

その上に放たれている弾の数は増え、辺り一帯を埋め尽くしてしまうかのように配置されていく。

そして、開花。

それこそ、辺りを埋め尽くしてしまいそうな弾幕の花畑に望も被弾してしまうかに流司には思えた。しかし、望は口角を上げ不適な笑みを浮かべると軽やかな動きで針の穴のような隙間を塗ってかわしていく。

まさしく、神業。

全く焦りを見せない様子で望は空を駆け抜けるのだった。

spell break!!

花畑の消え去った空には傷一つ見当たらない望が悠然として浮かんでいるのだった。

「では、私の番じゃ」

“儀式『千歳流るる狐施行』”

宣言と同時に望の周囲に炎が舞う。

それらは列をなして幽香へと襲いかかる。

一見してみればそれは望が先程使ったスペルカードとの違いはないように見えるだろう。

けれども、実際には大きく異なっていた。

炎が通り過ぎていった後には複数の弾の姿があり、炎の列をかわせばかわすほど逃げ道が失われていく。

そればかりか、炎の列は数を二本、三本と増やしていく。

その全ての軌跡で弾が残されていき、急速に逃げはなくなっていた。

けれども、弾幕をかわすのは言わずと知れた『風見幽香』。

空狐である望には及ばないものの長い年月を生きた大妖怪である。弾幕の特性を見抜くと即座に対応して避け続ける。

分かってしまえば弾幕を誘導することも容易であり、徐々に幽香は余裕を取り戻していく。

だが、余裕を取り戻したことで幽香は妙な違和感を感じていた。自分の弾幕を無傷でかわしきった望がこのような単純なスペルカードを使用するのかと。

最初は即興で作ったために単純なものになってしまったのかとも考えたがそれにしては容易いスペルカードであった。

「（まさかっ!?!）」

ハツとした表情を浮かべて幽香が望の姿を見やると、望は意地の悪そうな笑みを浮かべているのであった。

「おや、ようやく気付いたようじゃの」

眉間に皺を寄せた幽香を見てクツクツと望は笑う。

「この私を騙すなんてね」

「“騙す”ことは狐の専売特許故な」

「手加減されるなんて屈辱だわ」

「我が手加減したのが主の実力ということじゃよ」

そう、幽香の違和感の正体は簡単であった。

望が幽香相手に手加減をしていただけだ。

大妖怪である幽香でさえも手玉に取ってしまう。

それが三千年以上の月日を生き、神と敬われる身となった妖狐、空狐『望』の実力であった。

「年の功は伊達ではないということね」

「褒め言葉として受け取っておこうかの。 終いじゃよ」

その瞬間、放たれていた弾幕の動きが変貌して瞬く間に幽香は追い詰められていく。

そう、誘導されていたのは弾などではなく幽香自身であったのだ。

そして、あらがう術もなく幽香の姿は弾幕の中へと飲み込まれるのだった。

頁八十三、『狐騙し』（後書き）

遅れた……

そんでもって決着。

疲れた……

もしかしたら、書き直すかも。
正直言つて重要なのは次の話。
書き終わるといいな。

頁八十四、『終わりの裏』

「ふう……」

拡散する閃光と爆風に背を向けて望が息をついた。

それは戦いの終焉を示しており、同時に望の勝利の証明でもあった。望がどのような威力でスペルカードを使用したのかは望自身しか知るところではなかったが、“スペルカードル”としての決着を両者が認めていた以上は望の勝ちに揺るぎはない。

結果からして見てしまえばそれは望と幽香の実力差を利用した力押し勝利に思えるだろう。

確かに勝負を決着付けたのは“実力”であった。

しかし、その“実力”を望が発揮するまでには策が労されていた。

妖怪、特に妖狐などの妖獣にとって生きた時間というものはそのままその妖怪の力の強さとなる。

無論、それにはそれぞれ個性があり、短い時間でも強力な力を有する妖怪もいる。

幽香もまたそんな妖怪の一人であった。（尤も幽香自身も千年近い時を生きているので短いと言い難いものがあるが）

けれども、その相手を務めたのはそこへ至るまでに少なくとも三千年の年月を必要とする“空狐”の望。

力、知識、経験とおよそ戦いに必要となる全ての点で幽香を上回っているのは考えてみれば当然のことであったのだ。

であるとすれば、望の勝利に勝ちが揺るがないこともまた自明の理

であった。

「手加減していたのか……？」

戦いを終えた望が近付いてきたのを確認すると流司は恐る恐るといった感じで望に尋ねる。

「手加減というよりも加減の仕方が分からなかったのじゃ。長いことこの姿にはなっておらん故」

「加減……？」

「うむ。全力であれば戦いを終いにすることは容易いが、我が加減をせねば“一幻想郷（ここら一帯）”は焼け野原どころの騒ぎではないことになるので」

「……………」

望の告白に流司は絶句してしまふ。

望が相当の力を潜めているだろうということは薄々でなくとも分かっただけだがこれほどまでのものであるとは考えてもいなかったからである。

「……………もしかして、殺しちゃった？」

スペルカードルールにおける決闘では敗北した相手に追撃を加えてはいけないというルールはあるが、決闘の最中に相手を殺してしまってもやむを得ないということになっている。

先ほどの凄まじい閃光と爆風の様子を思い出して流司は望に伺った。

「無論！！……………といたいところじゃが生きているだろうて。尤も

御主人を狙うことはもうなかるう。少なくとも今日はのう……」

「最後の言葉が非常にきになるのだが……」

「気にするでないわ。それよりも……」

ひしっ！！

「なっ、な、なっ!?!」

ジリジリと流司ににじり寄った望は再び流司の身体をすっぽりと正面から抱き締める。

「癒されるのう……」

そう恍惚の表情を浮かべる望はまるで湯に使った老人のようであった。

流司は抱き締められた瞬間は驚いたものの二度目であることもあり、すぐに落ち着きを取り戻し大人しくなる。

そればかりか、役得などという感情が浮かぶよりも抱きつく癖がある望に朔との共通点を見出すほどであった。

「なあ、そろそろ帰らないか？」

一刻ほど抱き締められ続けていた流司が望に問いかける。

「むう……もうか……?」

至福の時の終了を告げられた望は流司を顔を暗くさせて覗き込む。

一応命を救われている手前、しばらくは我慢していたが時間も時間であったので人里で待つ亜紀たちがこれ以上遅くなると心配する可能性があったからだ。

「夜にならないうちに帰ると言っているからな」

「そうじゃの。まあ、これ以上ここにおっても“めんどくさい”奴が……」

「あややや!?!? 一体これは何なんですか!?!」

「来たみたいだぞ?」

流司の耳には今朝方にも耳にした声が空から届いた。

流司が空を見上げれば薄々やってくるのではないかと想定していた姿があった。

「流司さん!?!? 一体何がここであったのですか!?!? そして、その御人は? いつ、何が、どうして、どのように起こったのか一部始終、逐一話してもらいますよ!?!?! さあ、さあ、さあッ!?!?!?!」

メモとペンを手に流司に詰め寄る文の姿には有無を言わせない迫力があつた。

しかし、幾度も修羅場、先ほどまで大妖怪の殺気に当てられていた流司がその程度の迫力に圧されるはずもなく、

「帰るか」

「心得た、御主人」

文の存在を無視して人里へと飛び去っていくのだった。

「ちょっと、待ってくださいよー!?!?!」

「負けたわ……」

夕闇の茜が深くなり始めた空を『風見幽香』は大地に背を預けた状態で眺めていた。

命に別状はなかったが、身体の節々に残る痛みはしばしの間幽香の動きを縛り付ける。

このような体勢で、このような心情で空を幽香が眺めるのは随分と久しぶりのことであつた。

幽香とて初めから強大な力を持っていたというわけではなかったが、数百年と生きて大妖怪と呼ばれるようになってから完全な負けをすることはほとんどなかった。

「あら、貴女が素直に認めるなんて……明日は異変かしら？」

幽香の顔に当たる斜陽を遮るようにして姿を現したのは金の髪を揺らす乙女。

「五月蠅いわね。冷やかしにでも来たというの？ “最初” から見ていたのだから説明は不要でしょう？」

「貴女の口から屈辱を語ってもらつ必要はありませんわ」

幽香の鼻につくような口調と台詞で姿を現した女性 『八雲紫』は声をあげた。

「丁度いいわ。アイツがなんなのか教えなさい」

「名乗っていたじゃありませんの。“空狐”ですわよ」

「違うわ、“人間”の方よ」

「……………」

幽香の言葉に紫は瞳を鋭いものへと変化させ、幽香を見下ろした。

「あの空狐が強いのは分かったわ。あれが私を遙かに上回る経験があるということもね。悔しいけど、私が未熟だったということ。これは認めるわ」

幽香も望と自分との間に隔絶とした実力の差があることには気付いていた。

それほどまでの力の差を知らされてしまえば比較的プライドの高い幽香であってもすんなりと自分の敗北を認められていた。

「でも、あの人間は何？実力で言えばまだ人間としてはマシな方という程度よ。でも、何なのあの違和感の無さは？」

人里にも時折訪れることのあつた幽香は実を言えば『神代流司』という存在を知っていた。

それが“幻想郷”においてどんな意味を持っているかも知っていた。それ故に幽香は憂さ晴らしに戦いこそ仕掛けてはいたが、流司を死に至らせるつもりは全くといってなかった。

スペルカードも死んでしまうような重傷を与える程の威力を込めてはいなかったのだ。

「生まれたときから力を奮う環境にいたのなら納得できる。けれど、あの人間は“外”から来て一年ほどしか経っていない。なのに何であれだけ力に“慣れていく”のよ？」

霊力などの力を使うことは才能次第では簡単に会得できるものである。

しかし、その力に違和感なく、それこそ呼吸をするのと同じようなレベルで慣れるには時間がどうしても必要であった。

だが、流司の力の慣れ方は既にその域に達していた。

霊力の存在を知ってから一年ほどしか経っていないにも関わらずだ。

「まるでそうあるのが当然であるような自然さ。あれは何？ 『龍神』の遠い末裔という言葉だけでは納得できないわ」

「……………」

幽香の言葉に紫は微笑みを浮かべるだけで何も答えようとはしない。無言に支配された時が刻一刻と過ぎていく。

「そう、言いたくないのならいいわ」

幽香は動かすことのできるようになった身体を起こして立ち上がる。そして、傍に転がっていた日傘を手にして黙る紫に背を向ける。

確かに流司に興味を抱いてはいたがそこまで固執するようなものでもなかったからである。

「“森羅万象”、“天空海闊”。彼はそう言った存在よ」

「……………」

去り際の幽香に紫が告げた言葉には意味があるようには思えない。実際、幽香にもそれが何を意図していたのかは理解できなかった。

幽香は振り向くことなく頷くとその場を立ち去る。

荒れ果てた森には空と同じ紫の服と名をした賢者が取り残されるだけであった。

頁八十四、『終わりの裏』（後書き）

ギリギリ……

次回でこの幕も終了です。

また原点に戻る感じですかね。

そうそうPVが100万を超えました。
ありがとうございます。

頁八十五、『始まりの夜会』

「なるほど、それはまた随分な経験をしましたね」

パタンと開いていたメモを閉じた文がどこか同情するような声で呟いた。

文は当事者でなくとも流司が今までに経験してきた事件の顛末を須く把握していたので、その瞳に憐憫の色が見えるのも仕方のないことであった。

流司が“幻想郷”にやってきた後に起きた事件の全てに流司が関わってしまっていたのだから、その思いもあながち間違ったものではなかったと言えるだろう。

「それにしても“空狐”ですか……」

文は流司から視線を懸命に口を動かして頬に詰まったものを咀嚼し続けていく望へと移す。

油揚げを頬張り続ける望の姿は栗鼠などの小動物を幻視させ、その雅な外見からは想像がつかないほどに可愛らしく愛らしいものであった。

とてもではないが悠久の月日を生き、神に至った存在には見えないであろう。

ただの妖狐の方がまだ威厳を感じさせるというものであった。

文が望へと向けた視線に訝しむような様子が見られたのはその為であった。

「ふが？ほおがががつ！？」

「何を言っているか全く分からないから。まずは口の中のものを飲み込んでくれ……」

油揚げで口の中を一杯にしながらも望は文の怪しむような言葉と視線に反応を示す。

尤もその言葉は油揚げに遮られてしまったことで文にも流司にも理解することはできなかった。

そもそもがしっかりとした言葉にすらなっていない。

「んっ……我のことを疑うというのか、烏天狗？」

「いえいえ、そういうわけではありませんよ？貴女の力はこの目で見させていただけましたから。ただ、あの“朔”ちんちくじんと同じ存在にはとても……」

文はすっかり地形を変えてしまった“妖怪の山”の裾野の様子を思い出して首を左右へと降る。

相手にしていた存在もさることではなかったが、望自身の力が強大でなかったのならばあの様な状態になることはなかったであろう。

だが、そんなことをしてして見せた存在がそれなりの力を持っているとはいえ管狐である“朔”と同じ存在であることは俄かに信じることができなかつたのだ。

「失礼な奴よのう。我と“朔”は正真正銘同じ人物じゃ……！」

文の言葉に望は激しく反抗する。

そうは言うものの朔のことを知っている文にはどうしても思うところがあったのだ。

「まあまあ、落ち着いて。ところで、“望”はいつになったら“朔”に戻るんだ？そもそも戻るのか？」

望のことを宥めながら流司が尋ねる。

朔が望のままであると様々な問題が起こってしまっただろうことは流司も理解するところであったが、それは食費や住処といったような生活に関わることであって実際に危惧されるようなことではなかった。

「この姿でいたいのは山々じゃが一晩もすれば戻る。“そういう風”になっているのじゃ。少なくとも、“今”はのう」

「そうなのか？」

「うむ」

知らずの内に修羅場に遭遇することを免れた流司であったが、流司がそのことを知るのには遙か未来のことである。

「それじゃあ、夕食は望の好きなものにするか……」

「なぬ！？本当かえ！？」

「ああ」

「あつ、私も御馳走になっても……？」

「断っても居座るだろうが……」

やれやれと呟きながらも流司の顔には笑みが浮かんでいる。
最初の驚きが嘘のように望の存在を受け入れた流司は普段よりも少
々騒がしい夜を過ごすのだった。

夜空には大きな円が描かれていた。

金色に輝くそれは昼間に輝くそれよりも幾分も淑やかであった。

金鳥玉兔。

太陽に三本足の鳥が住んでいるかも、月に兔が住んでいるかも定か
ではない。

勿論、知るものは知っているだろう。

そして、静かに夜の空に佇むように浮かび月を眺めている彼女はそ
れを知る一人であった。

彼女がいつからそこにいたのかは分からない。

少し前かもしれないし、しばらく前からかもしれない。

そんなことは今は些細なことであった。

重要なのは彼女がそこで月を眺めている、そこにいるということだ
ある。

「久しぶりじゃのう」

「ええ、久しいわね」

風声鶴唳。

僅かに風がそよいだかと思うとそこには人影が一つ増えていた。彼女の金の髪とは対象的に銀の髪を長く伸ばしたその人影は風に流されてしまいそうな囁かな声でありながらもしっかりと彼女の耳に届く声で呟いた。

「あの小娘がこのような女子に成長するのだからこのう……歳はとりたくはないものじゃな、紫」

「私の何倍も生きていくせによく言っわ、望」
月明かりに照らされた紫と望は互いに笑みを浮かべあう。

その笑顔は両者ともに穏やかで二人が只ならぬ関係であることを示しているようであった。

蓮華世界。

「なに、“幻想”を“現実”に変えられるだけの時間が流れておるのじゃ。我にとってもそれなりに長い時間じゃよ」

「ここが“幻想”であることには変わりないわ」

眼下に広がる世界を見て望がしみじみと呟く。
そんな望に紫は訂正をするように声をかける。

“幻想郷”は“現実”^{たしか}に存在しているが、“幻想”であることには変わりがない。

そう言った意味では望の言葉も紫の言葉も正しいものであった。

「ふむ、それもよかるうて」

「それは“彼”のことも含めてのことかしら？」

「さて、のう……確かに似ておる。御主人は“あやつ”にな。顔や性格というわけではなく“存在”がのう」

紫の問いに望は一瞬懐かしむような表情を浮かべて話す。

「正直に言えば“幻想郷”に連れてきたのが正しいのかは分からない。でも……」

「“反故”しておるか……」

「ええ、それで“彼”が消えるということとは有り得ないでしょう。でも、“彼”が“彼”であるかは分からない。どちらであっても“彼”であることは違いないもの」

「そうじゃの。こればかりは我にも予測がつかぬ。このまま、潰えるのも正しいものであったかもしれない。じゃが……」

森羅万象。

「できないわね。どう転ぶにしろ“彼”という存在が核になることには変わりがないわ。だとするのなら……」

「目の届く場所に置いておきたいか」

「ええ。それがどのような結末をもたらすのだとしてもね」

月が雲に隠れ二人の姿が闇に包まれる。

「我が口を挟むことはできぬ。“幻想郷”は主が作り出した世界、

後悔がないようにの」

「貴女もね」

再び月が顔を除かせたときそこに二人の影はないのであった。

かくして舞台は一先ず幕を閉じる。

しかし、それは新たな物語の幕開けでしかなく、むしろ、今までは前座でしかないのだろう。

それはとある神主が幻想を生きた録出である。

頁八十五、『始まりの夜会』（後書き）

これにて“第一章”の終了です。

えっ？第六幕じゃないのだった？

それもありますが、今までは下準備。

これからが本番です。

次では遂に様々な真相が！！？

なんてことはなく、原点回帰です。

もしかしたら、区切りがいいのでしばらく更新を止めるかもしれない
せん。

プロットを詰め直したいので。

取りあえずは欄外を書いてからですかね。

欄外、『とある巫女の某日録』

卯四つ刻。

「ふああつ、……」

薄手の単衣をまとった少女が大きく伸びをするようにして目を覚ます。

冬の寒さもほとんどなくなり春であることには春あつたが、朝が冷え込むことは変わらないことであり少女は単衣を通して入り込んできた冷気にぶるつと身体を震わせると虚ろな意識を覚醒させていく。

「そついえば、いないのよね……」

普段であれば香ってくる朝食の匂いがないことに気付いた少女がぼつりと呟いた。

「さて、今日も一日頑張りましょうか」

少女の名前は『博麗霊夢』。

これは神主不在の『博麗神社』における霊夢の一日である。

辰二つ刻。

「いただきます」

食卓の上に乗せられているのは白米に味噌汁、焼き魚と簡素な献立の朝食であった。

霊夢自身が全く料理ができないなんてことはない。

流司がやってくるまでは一人で問題なく暮らしていたのであるからして人並みには最低でも作ることはできる。

しかし、流司とは異なりそれほど凝り性でもない霊夢には朝から一汁三菜を満たすような食事を作るつもりなどはなく、“供給源”^{じゅうじゅう}が無くなってしまった現状では贅沢をすれば『博麗神社』の食料がすぐさま枯渇してしまうことは霊夢が一番に理解しているのであった。

巳一つ刻。

朝食をゆっくりと食べ終えた霊夢は箒を手に境内へと出て行く。

箒を手にしたことから境内の掃除でもするのかもしれないとは思えばそうではなく。

拝殿の表の階段に腰を下ろして、脇に箒を立てかけるとぼんやりとした表情で空を眺める。

朝早くに起きて朝食前には境内の掃き掃除を終えてしまう流司とは対称的な姿であった。

あくまでも箒は手にしただけ、だらけきった霊夢の姿には巫女としての威厳など感じることはできない。

その上、時折吹き付ける風を結界で防いでいる。

能力の無駄使いであることこの上ないであろう。

午四つ刻。

「ごちそうさまでした」

昼食を食べ終えた霊夢が手を合わせる。

献立は流司が何処からか仕入れてきた蕎麦を茹でただけと節約とい

うよりも面倒臭がっていることが全面に押し出されているようであった。

「さて、この後は……何もすることがないわね」

宴会は終わり、参拝客はくる気配がない。

境内は掃いても掃いても散っていく桜の花弁によって散らかっていつてしまうので、掃除を始めて半刻もしないうちに諦めたので、再びするつもりなど霊夢にはなかった。

「日向ぼっこでもしようかしら？」

霊夢が出した方針は普段と変わらないものであった。

未二つ刻。

春の麗らかな陽気を揺りかごに霊夢は健やかに寝息を立てている。朝から食っては寝て食っては寝ての繰り返しで、牛も吃驚の自堕落ぶりである。

人は一度楽を覚えるとダメになると言うが、霊夢のこれは拍車をかけて酷い。

確かに参拝客も来ず境内の掃除も意味がないというのならばするところがなくだらけてしまうのも仕方のないことであろう。

けれども、これでは“博麗の巫女”としての体裁が整わないというものであった。

そんなことは露も考えずに霊夢は寝息を立て続ける。

申一つ刻。

「すう、すう……」

酉二つ刻。

「くう、くう……」

戌三つ刻。

日は疾うに沈みきり、辺りはすっかり闇に包まれてしまっていた。霊夢は依然として目覚める様子は見られず、どっぷりと眠ってしまっていた。

実に未の時から眠っているのであるから、現在が戌の時であることを考えれば相当長い間眠りこけていることが分かるだろう。

「おい、霊夢。こんなところで寝ていると風邪をひくぞ？起きろって」

熟睡する霊夢の身体を揺らす存在があった。

「んっ……流司……？」

「何だよ、こんなところで寝こけて……風邪を引くからさっさと部屋に入れて。風呂沸かしてやるから冷えた身体を温めて来い。それとも何か腹に入れるか？」

「…………お腹、すいた…………」

はいはいと頷いた流司は甲斐甲斐しく霊夢の世話をするようにして『博麗神社』の母家の方へと霊夢を引き連れていくのだった。

亥三つ時。

カポーン。

「極楽ね…………」

調度よい湯に肩まで浸かりながら霊夢は風呂場に反響するような響きをもって呟いた。

溺愛するほど霊夢は風呂のことを好きではないが、解れていく身体の疲れと安らいでいく心に霊夢は“風呂は命の洗濯だ”という言葉に納得を覚える。

何しろ自分が何もせずに勝手に風呂が沸くということが一番の楽なことであった。

「はあ…………極楽ね…………」

霊夢は再び湯船の中で伸びをすると呟くのだった。

子二つ刻。

「それじゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

流司とも他愛もない会話を交わした後、霊夢は己の部屋へと戻る。霊夢が知らぬ間に流司はまた一騒動巻き込まれたようで霊夢自身も思っていた以上に長くまで起きてしまっていた。

霊夢がどことなく疲れた表情を浮かべている流司に気がつくことがなければそのまま明るる日まで話していたかもしれない。

「明日は少し早起きしようかしら……?」

その呟きが誰かに聞かれることはないのであった。

丑三つ刻。

草木も寝静まった夜更けに一つの人影が『博麗神社』に降り立った。それと同時にその人影は月に映し出された影を細長いものへと変えると、一瞬周囲を見渡して首を傾げたようになりながらも己の主のもとへと戻っているのだった。

寅四つ刻。

「ん?どうしたんだ?こんな時間に?」

朝日が上る前に境内の掃除を始めた流司のもとに思いもしない姿が現れた。

「ちょっと、目が覚めてしまっただけよ」

今日もまた『博麗神社』での穏やかな一日が始まるのだった。

欄外、『とある巫女の某日録』（後書き）

ちよつと変則的なエピソード的な欄外。

主人公のいない霊夢の一日ということでしたので。

若干でてきてしまいましたが。

号外、『文々。新聞』

『妖怪の山の麓に野面現る！！』

木々の豊かな森は何処へ……

月 日幻想郷の一角、妖怪の山の麓に突如として荒野が出現した。第一発見者は他ならぬ私であったのだが、予想だにしていなかった光景に私は目に映ったものの驚愕と重大な事件に一番に遭遇したことの高揚感がせめぎあいしばしの間呆然としてしまった。

そこには木々の緑で溢れかえり、山菜なども豊富であった森が本来であれば広がっているはずであった。

しかし、そこにあつたのは倒させた木々や焼け焦げた草、抉れた地面と森の姿などは想像でないだろう光景である。

少なくともこの場所は昼前までは平穩無事な森であったために昼から夕方までの短期間でこのようになったとされる。

運が良いことに私はこの光景を作り出した、もしくはこの光景が作り出された瞬間を目にしているだろう人に話を聞くことができた。

『龍神の末裔』、『龍神主』として有名である神代流司氏である。

神代氏はどうやら山菜の採集にこの場所を訪れていたようだが、私の突然の申し出にもかかわらず快く一部始終を語ってくれた。

「これは妖怪とそいつが戦ってできた光景だよ。それでもそいつは手加減をしたんだとよ。良かったな、手加減していなければ妖怪の山は消し飛んでいたはずだ」

つらつらと事の詳細を話していく神代氏の言葉は前者はともかくとして後者は到底信じることができないものであった。

私も居を構えている妖怪の山は天狗をはじめとした数多くの妖怪が

住まう山である。

天狗の頂点におわせられる大天狗様は何千もの年月を生きられてい
る大妖怪であり、幻想郷でも屈指の力を携えていらつしやる。

そのような方がいらつしやる以上は妖怪の山が危機に晒されるはず
もないだろう。

だが、神代氏がそいつと称した存在の姿を確認してその言葉が決し
て間違いでないということが分かった。

そこにいたのは神であった。それもありふれた雑多な神ではなく強
力な力を有している神であった。

この神、望氏は所謂ところの『空狐』、狐神であるらしい。

それなりに長く生きている私も実際に空狐と対面することは初めて
であった。

それは空狐という存在が極めて稀有な存在であることに要因してい
る。

千年も妖怪が生きて力を増していけば大妖怪とされる。

空狐も元々は妖狐であり妖獣の一種である。妖狐は月日を経ること
にその尾の数を増やして力を増していく

。その間隔は五十年から百年に一本。

幻想郷にも九尾の妖狐を素体とした式がいるが、その域の存在に至
るにもかなりの年月が必要となってくる。

空狐という存在は三千年以上生きたことであることのできる存在で
ある。

最低でも大妖怪と呼ばれる存在の三倍の年月を生きねばならない。

神代氏が妖怪の山が消し飛んでしまうと云ったのも理解ができるも
のであった。

更に驚くべきことにこの望氏はあの朔と同一の存在であるらしい。

あの愛らしい管狐の正体が空狐という妖狐の最高位に属するもので
あったのだから私も神代氏同様に開いた口が塞がらないというもの
であった。

何故このようなことをしたのかと望氏に問うと、

「なに、御主人を殺すとかほざいた愚か者がおつたのでな。少々揉んでやったのじゃよ」

という何とも主人思いの言葉が返ってきた。

もはや、望氏と相對してしまった妖怪には憐憫の思いすら抱けてしまふ。命があつたことがせめてもの救いと思つて諦めて欲しいと思ふ。

何でも常日頃から望という存在ではいられないようであるが、神代氏に強力な味方が新たに増えたことに変わりはない。

『博麗の巫女』に『紅魔館のメイド』、『魔法の森の人形使い』、

『竹林の不老不死』と神代氏に特に関わりのある存在のほとんどが雑多な妖怪など凌駕してしまふ存在であつた。

更には神代氏の立場上、『妖怪の賢者』の庇護下にあるというのだからある意味で幻想郷で最も安全な人間といえるだろう。

今回の事件で一番の驚きはそんな人間である神代氏を襲うなどという愚かな妖怪が存在していたことなのかもしれない。

(射命丸 文)

文「それにしても本当に色々巻き込まれますよね。最近起きた事件には大抵関わっているんじゃないですか？」

流「んゝまあ、そうだな……」

望「はむはむ」

文「そうだなって、随分と気楽ですね。幾度となく死にかけているというのに」

流「いや、そういうわけではないんだけどさ。最初が最初だっただけになんか慣れちゃって」

望「ばくばく」

文「ああ、『鬼熊』の時のことですか」

流「そうそう。あの時は死ぬかと思ったな。まあ、毎回のことだけど。はっはっは」

望「もぐもぐ」

文「だから笑いながら言うことではありませんから。結局のところあの時はどうやって生き残ったんですか？」

流「おぼろげにしか覚えていないんだがな。咄嗟に能力が発動してバキバキってな。まあ、反動で俺もボロボロになってしまったんだけどな」

望「むしゃむしゃ」

文「本当によく生きていましたよね……」

流「いや、全くだよ」

望「ばくばく」

文「……って貴女はいつまで貪べているつもりですか!?!」

望「むぐっ！？%£¢&%#!?!?！」

流「ほら、水飲め、水」

望「んんっ、何をするんじやいきなり！？死にかけただろっ？」

文「私が真面目にインタビューをしているのに当事者である貴女は何を呑気に油揚げを頬張っているのですか!？」

望「油揚げでない、“味噌”油揚げじゃ!！」

文「どちらも同じでしょう?。」

望「同じなわけなからう。大違いじゃ」

流「望って空狐なのに味噌好きは変わらないのな………」

号外、『文々。新聞』（後書き）

リクエストの『文々。新聞』でした。

まあ、こんな感じでいいでしょうか？

次回は少しあくかもしれません。

頁八十六、『託された系譜』

そこは厳かな存在感を太古から変わらず醸し出していた。広大な境内の一角に座している拝殿。

また、拝殿の回廊から見受けられる枯山水の庭園も古くより変わることはないものの一つであった。

そこは、そこだけが過去の姿をそのままに残していた。

神さびた本殿は何度も宮大工の手によって修復を繰り返されて当時のありのままの姿を現代まで受け継ぎ知らしめている。

この場を離れ最寄りの駅へと辿り着いたのならば、今や宇宙にさえ届く科学技術の粋を集めた街並みが広がっていることであろう。

「ここが『神代神社』……」

人が疎らに存在している境内に二つの人影が新たに現れた。

その人影はどちらとも女性であろう。

歳は両者ともに若い。

二十歳を迎えたかそうではないかと言ったところであるはずである。

「そう、現存する最古の神社。この国で唯一『龍神』を祭り上げている神社よ」

片割れの呟きにもう一人の女性が説明をするように反応した。

「最古といっても何度も補修を重ねているんでしょ？」

「そんなことを言ったら二十年ごとに建て直している神社だってあるわ。こちらの方が建てられた当時の木材が残っているだけ説得力

があるというものでしょう?」

「確かに……」

千年以上前に建築された木造の神社が一度も修繕を行わずに残っていることなどありえない。

それでも、建てられた当時に使われた木材も少なくない数が残っており、歴史を感じさせるには十分過ぎるほどに十分であった。

「こんなところで立っていても仕方がないし、早く宝物殿の方へ行ってしましましょう」

「あつ、ちよつと!」

二人の女性の片割れがもう一人を残したまま境内をすたすたと歩いていってしまう。

その足取りには全く迷いがなく宝物殿へと向かう。

その女性たちの目的は初めからそこであるようであった。

『神代神社』の宝物殿は常時一般参拝客にも開放されている珍しい宝物殿であった。

いや、まるで博物館や美術館のように国宝級の品々が陳列されている様は宝物殿という言葉は似つかわしくはないかもしれない。

「話には聞いていたけれど実際に見てみると壮観ね」

「壮観というよりもこの不用心さに呆れるのだけだ。こういった文化財は盗まれたら足が付きにくいというのに……」

宝物殿の中にはセキュリティのようなものは一切見られない。

並べられている品々と参拝客を遮るものは薄い硝子が一枚あるだけで、それも盗難防止の為というよりは埃や汚れの付着を防ぐ為のものなのであった。

センサーも備えつけられていないこの程度の硝子のケースでは道具を使えば音もなく硝子に穴を空けることも可能であろう。その上、宝物殿には女性二人以外の人影は見られず、彼女たちが心配してしまつのも領ける話であった。

「そうね。こういったものにはシリアルナンバーが刻まれている訳でもないし、集めたがる人は自分一人で楽しむような人ばかりだから、一度裏に流れてしまつたら取り戻すのは難しいわね」

金などとは異なり、文化財などのような美術品に近い性質をもっている品々は一度盗み出されてブラックマーケットに流れてしまつとほぼ取り戻すのは不可能となつてしまふ。

過去にも世界的な名画が大胆極まりない方法で盗み出されたということにも関わらず、その名画は長い間見つかることがなかったくらいである。

「まあ、心配してもしようがないし。ゆっくりと見学しようか」

そう言って女性たちは思い思いに多種多様の品々が並べられている間の通路を縫うように歩いていく。

ふと、片方の女性の足がとある書物の前で止まる。薄汚れ歴史を感じさせるような書物ではあったが、他に並べられているものと比べると新しく感じられるものであった。

「それが気になりますか？」

「ツ！？ええ……」

突如としてかけられた声に女性は驚きを示したものの声の主の姿を見るとすぐに平静を取り戻して頷く。

「ああ、驚かしてしまっただようで申し訳ありません。あまりにも熱心に見ていたので気になってしまいました……」

「いえ、そんなことはありません」

「どうしたんだ？」

声の主が女性に謝っていると他の場所を眺めていたもう一人の女性がそんな様子を不思議がるようにしながら近付いてくる。

「私が突然声をかけてしまい、貴女のお連れの方を驚かせてしまったのです。申し訳ありません」

「はあ……それで……」

「ああ、申し遅れました。私は『神代神社』の管理をされていただいている当代の神代家の当主になります。以後お見知り置きを」

声をかけた主の人は深々と一礼して答える。

「知っています。『神代流司』さんですよね？」

「流司……?」

完全に平静を取り戻した女性が微笑みを浮かべながら問う。

一方、もう一人の女性は『流司』という名に引っかけかかりを覚えたのか首を傾げてしまっている。

それもそのはずであった。

目の前で相對する人は巫女服を着ており、どこからどう見ても“女性”であつたからだ。

無論、それは女装をしているからという訳ではなく、ふくよかな女性の象徴も不自然さを感じさせることなくあることから疑う余地は全くとしてなかつた。

「ご存知でしたか……ただ私個人としては『流司』ではなく『流司』と名乗っていますので、そちらで覚えていただけると嬉しいですね」「すみません。読み方だけは調べただけでは分からなかつたものでして……」

「構いませんよ。そういう風になっているのですから。それよりもこちらの書物が気になつているようでしたね。よろしければ説明いたしますけれどもいかがしますか?」

流司の申し出に女性たちは顔を一瞬見合わせると、

「お願いします」

声を揃えて頭を下げるのだった。

「分かりました。で、差し支えがないようでしたら貴女方の御名前を伺いたいのですが……」

「そうですね。私は『マエリベリー・ハーン』ともうします」

「私は『宇佐見蓮子』よ」

「ありがとうございます。では、お話ししましょう。この『幻想郷縁起』について……」

頁八十六、『託された系譜』（後書き）

お久しぶりです。

一応名目上は第二章の始まりです。

と言っても今回の話はただの導入。

登場人物を深く考えるかはお任せします。

次回から流司が登場。

まあ、今回ですが（笑）取りあえず原点回帰の今幕になりますね。

あと、残りのキャラが一気に登場かもしれません。

それにしても、神霊廟の二面のボスと主人公の弾幕……

どうしたものか……

むしろイメージがし易くなったと喜ぶべきか……

なるべく、連日更新したいけど、できるかどうか。

如何せん時間が足りない。

今後とも宜しくお願いします。

頁八十七、『編纂される幻想』

「『幻想郷縁起』を……？」

口に運んでいた湯飲みを置いて一人の男性が尋ねるように呟いた。癖のない漆黒の長い髪を首の裏で紐のように細長くした和紙で結っている。

全ての女性が羨むような艶やかな髪をしているが、その容姿が女性らしいという訳ではない。

むしろ、男性然とした容姿であろう。

とは言ったものの筋肉隆々とした肉体をしているわけでもなく、どこことなく華奢なイメージも受けそうな身体をした男性は化粧さえしてしまえば女性の服も着こなしてしまうかもしれない。

「はい。当代の『幻想郷縁起』の編纂を始めようと思ひまして」

そんな男性に相對して答えたのはまだ成人までは幾年もかかるだろう少女であった。

肩に届くか届かないかといったところで髪を短く切り揃えている少女は微笑を浮かべている。

少女が感じさせる雰囲気は年相応の無邪気さを感じさせず、熟練させた精練さを感じさせていた。

「なるほど、いよいよということか……」

「はい。そこでよろしければ流司さんにも編纂を手伝っていただきたいのです」

黒髪を結っている男性 『神代流司』は腕を組むように着流しの袖

の中へと手をしまい込むと呟いた。

その声がどこか感慨深いものであったのは『幻想郷縁起』という存在が流司にとって重要なものであったからに他ならない。

幻想が絶えずして息づく地、“幻想郷”。

そんな“幻想郷”に一応はただの人間である流司が訪れ住まうきっかけを作り上げたのが『幻想郷縁起』であったからである。

“一応”というのは流司もまた幻想の血を引くもの、『龍神』の末裔であるからだ。

それが真実であるかを確かめる術はないものの流司の身に残る僅かな神力が流司が神の眷属、血を継いでいるものであるという証拠になっっていた。

だが、流司は“現人神”とは異なり神として力を奮うことはできない。

あくまでも人間。

長い年月を経て薄まっていった血は『神代』という存在を人間へと変えていった。

『龍神』の代行者として信仰を集め、それが最大限に高まる『神座参』の儀式の前であっても、神として振る舞うには不十分であったのだ。

それは『龍神』とそうでないものを完全に決別しているようにも思えるだろう。

「よるこんで引き受けましょう。既に一度助けてもらっている身なのでここで断ったら罰が当たるでしょうし……」

「そついう意味で言ったのではないのですけれど……」

流司の返答にショートカットの少女 『稗田阿求』は少し困ったように声を漏らす。

流司は以前に『神座参』の儀式を執り行う為に阿求に助力を得ていたのだった。

そういつた事情があるからには流司には恩を仇で返すような選択肢は存在していない。

勿論、阿求がそのことを盾にして流司を脅迫している訳ではないものの、流司が阿求の手伝いをするという結果が変わることはなかったのだった。

「それで俺は何を？尤も文を書く手伝いはできそうにないんだが……校正ぐらいならなんとか……」

文の新聞を読み続け指摘をしてきた経験から流司は人並みには文に對しての心得えがあった。

とはいえ、それは嗜みにも満たないものであり、『幻想郷縁起』などといった書物を編纂するにあたっては役不足であることは否めないだろう。

「ええ、流司さんにはできるとは思っていないので」

「……………」

笑顔で毒を吐く阿求に流司は押し黙る。

全く持つてその通りだとは流司自身感じるところであったが、ここまでばつさりと言われてしまえば立つ瀬もない。

にこやかな笑みを浮かべる阿求は今の言葉が毒であるとさえ思っていないのかもしれない。

良くも悪くも阿求は物事をはっきりと言うタイプの人間であった。

「私が流司さんに御願いたいのには編集に当たったの資料の補填。つまりは“とある”場所に取材に行つて欲しいのです。本当ならば私が直接赴きたいのですが、何分この身ですので……」

阿求は決して身体が丈夫であるとはいえない。

日常生活に支障が及ぶほどというわけではないものの、取材のように長時間外を出歩くことはなかなか難しいことであった。

「なるほど……だが、取材であれば烏天狗にでも頼んでみればいいんじゃないか？」

「客観的な情報を集めるには些か問題があるように思えますので」

「ああ……」

流司は阿求の返答に納得の声を漏らしながら頷いた。

文をはじめとした烏天狗が書く新聞の多くは面白おかしく書かれることがほとんどで事実には脚色がされていることも少なくない。

それが新聞として正しい姿であるのかは甚だ疑問ではあるのだが、事実をつらつらと書き並べているような新聞が幻想郷で求められるわけもないのだった。

「それで行つてもらえるでしょうか？」

「はい。その程度なら」

取材をすることもそれなりに技術が必要になることではあるが、資料を編集するよりは簡単であることは間違いない。

まだまだ未熟ではあるけれども、流司も話術にはどちらかといえば

長けている方であるのでインタビュアーとしての役目を果たすことはそう難しくはないことであつた。

「それで何処に行つたらいいんだ？」

「ええ、大体の資料は集まつているのです。なので後は人里では見られない様子を御願ひしたいので。具体的に言えば、“紅魔館”と“冥界”、後はこれを“閻魔様”に渡しに行つていただけますか？」

「……………俺に死ねと？」

子供におつかいを頼むような軽い口調で阿求は幻想郷でもトップクラスに危険な場所の名をあげる。

「あれだけ死にかけても死んでない流司さんなのですから大丈夫ですよ」

「だからこそ、危険にわざわざ足を踏み入れたくはないのだが……………」

過去に幾度も死にかけて流司であつたが、いずれも“運良く”命を救われている。

そうであるから大丈夫だとどことなく黒さを幻視させる阿求であるからこそ躊躇を覚え顔をひきつらせる流司。

二人の姿はどこまでも対称的であつた。

「では、御願ひしますね」

「はい……………」

何があるうとも流司に“拒否”という選択肢はないのだった。

頁八十七、『編纂される幻想』（後書き）

私の中では阿求は実は腹黒キャラだったり。

というわけで『幻想郷縁起』編纂編の始まりです。

まあ、今まで登場していないキャラの大半がここで登場するのではないのかと……？

ああ、紅魔館 死亡 冥界 閻魔様なんてことにはならないはずですから（笑）

深い伏線というか知ってもらわないと意味のないことなので、補足しますが。

前回の話は少なくとも未来ではあります。

まあ、深く考えずによくありがちなプロローグだと思ってください。

明日も更新できるといいな……

陰鬱な影を拭うことのできない流司の心情とは裏腹に眩い初夏の日差しは流司に容赦などなく降り注ぐ。

雲一つない青空というわけではないものの梅雨のようなどんよりとした重々しさは空に感じることはできず清々しく晴れ渡っている。

いつもと変わらない平凡な午後の幕開け。

異変の気配も見られない幻想郷は静かなもので人里で暮らす人々の活気が際立っているようであった。

起きて、働いて、食べて、休んで、寝る。

そんな当たり前のことを当たり前にこなすことがどれだけ大変なことであるのか、幻想郷に来てから流司はその身に染みて理解していた。

だからこそ、その平穩を自らの手で壊しに行くのだから流司の気分が暗くなるのも仕方のないことであった。

「“紅魔館”はともかく、残りの二つはどうしたものか……」

“紅魔館”と“冥界”に関しては流司も概要程度であれば知っていた。

“紅魔館”は霧の湖の畔にある紅い洋館である。その大きさに対して窓の数が少ない洋館の主の名は『レミリア・スカーレット』。

彼女は吸血鬼であり幻想郷のパワーバランスの一角を担う存在でもあった。

流司はレミリアとは以前に面識がある。

それは流司が紅魔館でメイドを勤めている『十六夜咲夜』とそれな

りに親しい間柄であり、間接的にだがレミリアが流司にとって命の恩人であるからであった。

その時に流司は紅魔館へ招待されており、“紅魔館”に関しては少なくとも全くの術がないというわけではないのだ。

一方、“冥界”に関しては流司は一度も関わりをもったことはない。春に博麗神社で行われていた花見には冥界に住む者たちが訪れていたようだが台所に拘束されていた流司がその姿を見つけることはなかった。

そもそも、冥“界”というだけあって正確には冥界は幻想郷ではない。

以前に起こった異変が原因で幻想郷と冥界の行き来がしやすくなってしまいそれが異変が解決してしばらくたった今でも続いているために幻想郷の一部のように認識されているのである。

生者ある存在が死者の住まう冥界に行ったり、その逆も本来であればよろしくはないことであるのだが、比較的に緩い感じになって落ち着いてしまったのは幻想郷という土地柄と言うほかないであろう。

何はともあれ“冥界”との関わりがない流司ではどうやって冥界を訪れていいのかすら分からない。

流司は好き好んで冥界を訪れようと思う性格ではないので当然であった。

そして、“閻魔”に至って死ぬ以外に遭遇方法に思い当たる節を流司は持ち合わせていないほどである。

「こういつときはできることからするのが得策だよな」

できないことは一先ず置いておいて、できること。

すなわち、“紅魔館”への取材から済ませてしまおうと流司は行動を始める。

「そうは言ってもいきなりってのは礼儀知らずだよな……」

だが、一歩足を踏み出したところで流司は歩みを止め考え出す。

幻想郷でありながらも、酷く“常識”的な考えを未だに持っている流司ならではのことであった。

招待を受けたからといっていきなりその場所を訪れてはいけないうことは幻想郷においても当たり前のことである。

けれども、それが“幻想郷の住人”全ての常識であるかといえはそうでもない。

アポなしで訪れるならまだしも、門番を倒して侵入したり、突然部屋の中に現れていたりと礼儀とは程遠い行動をしている存在もあるくらいだ。

故に行きやいるだろうという考えが蔓延している幻想郷で流司の考え方は常識的でありながらも異端であった。

「けど、連絡をとろうにもどうしようもないし……」

「さつきから、何を一人でぶつぶつ言っているのかしら？」

「噂をすればなんとやらだな……」

流司が振り向けばそこには普段と変わらず瀟洒なメイド、『十六夜咲夜』の姿がある。

噂は人を呼ぶと言うが、まさにぴったりのタイミングであった。

「……どういふこと？」

「丁度いいタイミングだったということさ」

流司の言葉に咲夜が訝しむように首を傾げると流司は気にするなと示すように声を落とした。

「ところで“紅魔館”に行きたいんだが、大丈夫か？」

まるで友達の家を訪ねに行くような口振りで咲夜に尋ねる流司。実際、ある種では似たようなものであるのだが、それにしても気安すぎるようにも思える。

それは流司自身、これが形式上のものであるということを理解しているからであった。

「構わないと思うわ。お嬢様も楽しみにしているし」

「……………すつごく不安に駆られるのは気のせいかな？」

レミリアが楽しみにしている咲夜の言葉に流司は表情をひきつらせらる。

吸血鬼を楽しませるような要因を流司が有しているのかと問われれば、限りなく有してはいないと言えるだろう。

確かに『龍神』の血を引いている流司をただの人間と称するには少々語弊があるかもしれないが、基本的には只人であり能力が特殊であるということ以外に興味をそそるようなことはないはずである。

自身も強力な能力を有しているレミリアがそれほどまでに流司の能力に興味を持っているとは流司自身考えることはできず、どうして

も“楽しみ”という言葉に怪しさを感じざるを得ないのだった。

「ただ、一応お嬢様に尋ねてみないと分からないわ」

「……そうしてくれ。俺も心の準備が」

「なら、こちらから済ませてしまいましょっ？」

流司の耳に届いたのは凜とした涼やかな声であった。

しかし、その声色の中に若干の愉悦の色が混ざっていることに流司は気がついた。

「はっ？」

そして、突如として地面にぽっかりと空いた穴に流司は飲み込まれるのであった。

頁八十八、『穴』（後書き）

オチに便利なあの人でした。

今回はわりかし出番が多いかな？

紅魔館のターンは後ほどです。

まあ、この後の展開はだいたい分かっていると思いますが。

頁八十九、『純白の海』

「ああ……」

感嘆の声を漏らす流司の目の前には一面の白が広がっている。

それは“海”であった。

勿論のこと幻想郷には海はなく、本当に海であるのなら流司の目の前に広がるのは青であるはずであるので本物の海ではない。

“雲海”。

遙か遠くまで広がる雲の絨毯はまさしく海のように風で波打ち揺らめいている。

平家物語の一節に“雲海沈々として、晴天既に暮れり”というものがあるが、白が紅に染まるにはまだ時間がかかるようであった。

「って雲ツ!？」

幻想的な風景に現を抜かしていた流司は我に返り叫びを上げる。

眼下に雲海が見えるということはそこが雲の上であるということである。

その上、雲海が広がる場所というのは多少の山であれば優に超えてしまつほどの高さであることが多い。

人という存在は面白いもので流司は自分のいる場所を知覚した瞬間に全身に鳥肌を浮かび上がらせて強烈な寒気を感じる。それは高さによる恐怖などではなく、純粹な寒さを感じたためであった。

雲海の名所と知られる“大江山”でもその標高は800m強である。それでも気温の低減率を考えた場合、100mで0.65ほど気温が下がることから海拔から5程度山頂では低くなる。

そして、流司が現在いる場所は高度800mなどはくだらないと思えるほどの高さであった。

雲の切れ間から見ることで地表の様子を見るに少なくとも3000mはあるのではないかと流司は漠然と感じた。

となれば、単純に計算したとしても地表との気温差は20 弱もあることになる。

初夏とはいえ、本格的な暑さはまだ始まっていない幻想郷の気温はいくら多く見積もったところで25 には上っていないかった。

そのような気温に合わせて着ていた薄地の着流しでは、真冬とまでは言えないものの肌寒いと言いつつ寒い気温の場所にいきなり放り出されたのではたまったものではないだろう。

流司は震える肩を抱きしめると同時に能力を発動させ、体温の“低下”と“上昇”を拮抗させる。

更には流司は空気中の酸素濃度も転逆させて地表とほとんど変わりのない環境に周囲を調整するのだった。

「ここは何処だ？」

「“空”ですわ」

雲海の上に立つようにして落下する身体を浮かび上がらせた流司の疑問にすぐ傍で答える声がある。

「そんなことは分かっているぞ」

高度3000mからの自由落下を一瞬とはいえ経験し、現在進行形として宙に浮いて雲を見下ろしているのだから自分が今どこにいるのか分からないほど流司も馬鹿ではない。

「……もう少し慌ててくれればいいものを。可愛くないわね」

「ここ一年余りで俺がどれだけのことを経験したと思っているんだ。いい加減、反応にも乏しくなるっての」

ダメダメだと文句を言うように姿を現した大妖怪 『八雲紫』に答える流司の反応は極めて淡々としたものであった。

とてもではないが気楽に会話をしている場所が地上から遥か高みにある所には思えないであろう。

「やっぱり、“大気圏外”まで運んだ方が良かったかしら？」

「“幻想入り”の次は“大気圏突入”でもさせるつもりか……勘弁してくれ」

勘弁も何もそのような場所に運ばれてしまったら流石の流司もただでは済まないかもしれない。

あくまでも、流司は“人間”なのだ。

「あら、残念。また死にかければ新しい能力が目覚めるかもしれないのに……」

「能力なんて一つあれば充分だよ」

クスクスと笑うように言ってくる紫に流司は疲れたようにがっくりと肩を落とす。

結局のところ妖怪という存在は気分屋であるのだ。

いや、幻想郷に住まうものの大半が気分屋であるといえるだろう。

流司が紐無しバンジーをする羽目になったのも単に紫の戯れでしかないということは流司も重々に承知していることであった。

黙っていれば誰もが見惚れてしまいそうな容姿をしている紫であるが、口を開いてしまえば残念というしかなく、神秘的といえは聞こえはいいが単にそれは胡散臭いだけである。

流司の記憶に残る一年ほど前の紫との出会いは遙か昔のことに思え、一回りも二回りも美化された上でセピア色の思い出と化しているのだった。

美しい薔薇には棘があるとは流司も思っていたことだが、まさか毒まであるとは考えてもいない。

「はあ〜…」

横目に紫の顔を見て流司は溜め息をついた。

「あらあら、人の顔を見て溜め息をつくだなんて失礼しちゃうわね。

ああ、溜め息をつくほど見惚れてしまったのかしら？」

妙な鋭さをみせる紫の言葉に流司は内心驚いてしまっていたが、表情には全くといって表れることはない。

それこそ、出会ったばかりの頃を思い出したなどと紫に口を滑らせ、てしまえば、それを揚げ足にとられていいように遊ばれてしまうだろうことを明白に流司は知っていたからだ。

それ故に流司は、

「はあ〜…」

再び深い深い溜め息をつくのであった。

「ほら、見えてきたわ」

ある意味ではムードが満点の空中散歩をしばらくの間、流司と紫が続けているとふと紫が声を上げる。

「そうは言われてもな……」

“見えてきた”という紫の言葉に対して流司は渋い表情を浮かべる。流司の視界に移るのは雲と青空のみであり、他のものは何一つとして見えてはいなかった。

「まあ、当然かしら。今は結界もないことだし……」

「その結界を張らないでいるのはどこのどいつだよ」

「全く何を考えているのでしょね」

「本当だよ……はあ……」

本来であればそこには一つの結界があるはずであった。

その結界の名を“幽明結界”。

“冥界”と“幻想郷”とを区分する結界である。

しかし、どういうわけかこの結界は以前起きた異変によって消え去って以来張り直されることがなかった。

その為、生者が冥界に行くことも、幽霊が幻想郷に行くことも比較的に容易に行うことができるようになっていた。

故に以前は結界の上を飛び越えなくてはいけなかったが、今はそのような手間を必要とせずに“冥界”へ訪れることができるようになった。

っているのである。

ならば、どうして幻想郷の遙か上空まで連れてこられなくてはいけなかったとだと流司が紫に訪ねたところ返ってきた答えは、

「形式美よ」

というものであり、流司が溜め息をついたのは言つまでもないことであつた。

「ほら、そんなところで幸せを逃がしていないで早くついてきなさい」

流司は精神的疲労からまるで死者のような表情で冥界へと一歩踏み入れるのであつた。

頁八十九、『純白の海』（後書き）

能力を駆使すれば大気圏突入も不可能ではないかもしれない主人公。いい加減、人間の括りにしておくのは無理かもしれない……

まずは冥界です。

伏線も回収します。

あと、個別ルートも作ります。

さりと流せませんか？

無理か……

というわけで個別ルートを作ります。

具体的に六つほど。

更にいえば三つに別れて一つに進むという感じです。

更に更にいえは同一時点からの分岐ではありません。

今言えるのはこれくらいですかね。

まあ、まだ先のことなのでスルーしてくださいな。

最後に一つ付け加えるとすればルートによっては回収されない伏線
もあります。

これが何を意味するかは御想像にお任せします。

長い階段が延々と続く。

幻想郷と冥界との境界を通り抜けた流司を待つていたのは幽霊の大量や文字通りこの世のものとは思えないような光景などではなく、どこことなくデジャヴを感じてしまうような長い長い階段であった。

“白玉楼階段”と呼ばれるこの階段の先には“白玉楼”という屋敷がある。

この屋敷にこそ今回流司が目的としている者が住んでいるのである。

「それにしてもこの階段もまた長いな……」

終わりの見えない階段を上りながら流司は呟いた。

『博麗神社』に『守矢神社』と長い階段を上った経験であれば誰にも負けることはなく、“階段マイスター”の称号を与えられてもおかしくはない流司であったが、そんな流司をもつてしても白玉楼階段は上りがいのあるものであった。

「ほんと、上るのがいやになってしまますわ」

“飛んで”いる癖してよく言うよ」

己の足で一段一段階段を踏みしめている流司とは異なり、紫は地上から少し浮かび上がるようにして階段が上がっている。

階段を自らの足で上っているのは流司の好きであるから、空を飛んでいる紫のことを非難するつもりは流司にはない。

しかし、“上っている”流司を差し置いて“上がっている”紫がいやになると発言するのは眉を顰めざるを得ないというものであった。

「だったら貴方も飛べばいいと思いますわ」

「それもそうなんだがな……」

紫の言葉は至極真つ当なものであった。

もはや、流司も空を飛ぶことぐらいならば全くの支障がなくなっており、わざわざ足を使って階段を上ることなど必要のないことである。

だが、長年の癖というか“階段マイスター”としてのささやかな見栄の為かよっほどのことがない限りは飛んで階段を上がることはなかったのだ。

「まあ、こうしていても時間の無駄というものでしょう。送って差し上げますわ」

「ちよつ、まつ!!!?!?」

流司の足が次の段を踏むことはなく、再びの自由落下を始める。

どうせなら、初めから目的地へと送ってくれればいいものをと脳裏に思い浮かべながらも流司は真つ逆さまに落ちていくのであった。

少女はいつものように庭の手入れをしていた。

充分過ぎる朝食を作り、庭の掃除をしながら、過剰なほどの昼食の献立を考える。

それが毎日の日課であり、主の気紛れがない分、普段よりも幾程か平凡な日であった。

日であるはずであった。

「……」

俄かに感じた気配にその少女は帯刀していた二本の刀を抜き放つ。抜き放たれた刀と同じように鋭く光る瞳の先に現れたのは、

「ったく、もう少し丁寧に送れっつての」

スキマから逆さまに落とされ、一回転するようにして着地した流司であった。

「侵入者!!!?」

見慣れたスキマに主の友人の姿が現れるのだろうと考えていた少女であったが、現れたのは見知らぬ男。

人間であることだろうは瞬時に理解できていたが、侵入者であることは変わらない。

「へえ………ここが冥界。強いては“白玉楼”か………」

流司は少女の存在にはまだ気がついていないようで、屋敷の方をしみじみと眺めている。

故に少女は油断しているだろう流司へと二振りの刀を振りかぶり襲いかかる。

「さてえっ?!」

斬ッ!!!

「ッ!!!」

奇襲としては少女の一撃は最適のものであった。しかし、流司は紙一重のところその剣閃を仰げ反るようにして回避する。

「いきなり斬りかかってくるとは……随分な御挨拶なこと」

「不法侵入者に丁寧な挨拶など必要ありません!」

命に関わるような奇襲を受けたにも関わらず、流司はさほど驚いた様子もなく、飄々とした態度で少女と相對する。

それには二つほど理由があった。

一つは実際には流司は少女の存在に気付いていたからである。回避することを突き詰めていった流司があらゆるさまに殺気を発し、己のことを警戒している存在の気配に気付かないはずがない。

そして、もう一つは紫が“わざわざ”スキマを使ったということ。 “ただ”で済むはずがないと感覚的に流司が理解していたことにある。

「いや、まあ、不法侵入って言えばそうなってしまっただが、一応来客として来たんだが……」

「来客なら然るべき手順があるというものです!」

「それはそうなんだがな……」

少女の言っていることは正論で、流司がどう言おうとも苦しい言い訳にしかならないであろう。

紫がやってくれば話は別であるが、全く音沙汰もないことから考えれば、どこからかこの状況を楽しんでいるのだからということとは流司には易々と分かることであった。

「ほら、スキマで来たんだから不審者ではないと思うが……」

「紫様が不審な人物を送ってきたのかもしれない」

「ここに送る意味がないだろうが」

本当に流司が不審な人物であったのならば、もっととんでもない場所に送られていたことだろう。
白玉楼に送る理由など全くない。

だが、少女は流司に対しての警戒心からかすっぽりと抜け落ちてしまっているようだった。

「問答無用。細かいことは斬ってから考えます!」

「んな、殺生な」

これではどごその巫女と変わらないじゃないかと流司は思いながら、向かってくる少女にどのように対応しようかと考えるのであった。

頁九十、『不法侵入』（後書き）

短いのは仕方がない。

本当は前回の話にくつつける予定だったから。

つうことで次回はVSみよん。

少しだけ重要かも。

閃。

二筋の光が絶え間なく流司に襲いかかる。

流司はそれらを軽やかな歩調でかわし、目の前で二振りの刀を振るう少女のことを観察する。

このままならば負けることはないであろう。

それが流司が感じた純粹な思いであった。

何もそれは流司が少女を凌駕するほどの実力を持っているわけでも、少女が流司に至らないほど実力がないというわけではない。むしろ、実力でいえば少女は流司よりも勝っているだろう。

にも関わらず、流司が余裕を見せていられるのは一つに流司がかかわすことに専念していること。

そして、もう一つに少女が剣技のみで流司に戦いを仕掛けているからである。

剣をはじめとする武器を持ったものと無手のものでは基本的に優劣ははっきりとしている。

だが、武器を用いるということはその武器に適した間合いで戦わなければならぬという束縛を受けることでもあるのだ。

剣なら剣、槍なら槍の適した間合いというものが存在する。

勿論、間合い外であっても使うことはできるだろうが、その武器としての真価を発揮することはできないだろう。

少女が扱うのは二本の刀。

内一本は太刀であるのか通常のものよりも刀身が長く並のものでは扱うことも難しいはずであった。

二刀流の厄介であるところはその手数が多くなることだが、長さの異なる剣や刀を使う場合は間合いが掴みにくいというものが増えることになる。

そんな二刀流を扱う少女の攻撃を流司は涼しい顔で避けていく。

確かに少女は剣を“扱う”ことはできていたが、ただそれだけであつたのだ。

流司には少女よりも遥かに剣を“使いこなす”ことのできる相手と相対したことが何度もあつた。

そう、『白雲吏妖』のことだ。

吏妖が流司に対しての本来の戦い方を見せたのは数えるほどしかなかったが、普段の稽古のときでさえその剣術は洗練された美しさをもっているものであつた。

少女の剣術もそれほどまで未熟というものではない。

達人ということではできなくとも一流の実力はあるといえた。

しかし、達人と呼ばれる者との間には確かな隔たりが存在しているのだ。

流司は知るところではなかったが、少女の有している能力は『剣術を扱う程度の能力』であつて使いこなすことではないのだから当然ともいえることであつた。

「（とはいえ、決め手がないのは俺も同じことか）」

いくら流司が少女の攻撃をかわし続けることが可能だからといって、流司が勝つことができるというわけではない。

達人とは呼ぶことができなくとも一流の剣士ではあるだろう少女の間合いに流司から踏み込むような真似をしてしまえば、それこそ一

太刀のもとに断ち切られてしまうであろう。この拮抗状態は流司が避けているからこそ保たれているものであるのだから。

「（にしても……）」

流司と少女が眉を顰めたのは同時のことであった。

少女は予想外に当たることのない自分の剣に苛立ちを覚えて眉間に皺を寄せ、流司は予想外に易々とかわすことができていることを不審に思い皺を寄せるのであった。

何度目かの剣閃をかわしたときであった。

流司がその考えに至ったのは。

その唐突な考えは余りにも馬鹿げているものであったが、考えを確かめるようにして攻撃を避け続けるほどにその考えは確信を増していく。

「（ならッ！）」

ここで初めて流司は攻勢に移る。

流司の有している切り札はたった一つ、『能力』だけである。

その上、一度使ってしまったら、代償を考えても、手の内を明かしてしまふという点から考えても二度とは使うことができないものである。故に決定的と呼べる状況まで使いかねていたのであった。

身体を傾け一足飛びに距離を詰めていく。

余りにも無防備に攻め込んできた流司に少女は一瞬意表をつかれたように驚きを示すが、すぐに顔を引き締め右手の刀を袈裟斬りに振り抜く。

それは完璧なタイミングで流司のことを捉えんと差しのばされてい

く。

だが……

その刃が流司のことを捉えることはなかった。

「!?!」

流司は特別少女の剣を避けようとした素振りを見せてはいなかった。その光景は流司がかわしたのではなく、少女が外した為のものであった。

生じた一瞬の隙を流司は見逃すことはなく、更に踏み込んで少女の懐に潜り込む。

既にそこは無手が得意とする間合いであったが、少女もただで終わらせるつもりはないのか、まだ振り抜かれてはいない左手を振り下ろそうとして………手にしていた刀が高々と空を舞った。

流司の能力の発動。

少女の手から刀が受けた力を転逆させたことで、“下”へと進むはずであった刀は“上”へと吹き飛ばされたのであった。

代償の痛みで流司はうっすらと顔を歪ませるが、その動きが止まることはない。

体勢を崩してしまっている少女の右手に掴まれている刀を叩き落とすと、すぐさま組み伏せ動きを止める。

流司に身体を押さえつけられた少女は一連の流司の動きに対しての驚愕で呆然としてしまいなすがままになってしまっているのだった。

頁九十一、『戦刀』（後書き）

今回も短め。

戦闘はあっさり終了。

弾幕使えば“少女”の方が強いです。

主人公が勝てたのは初見であったのと……

もしかしたら、明日は更新できないかもしれません。

「は〜い、そこまでえ〜」

流司が少女を地に組み伏せたところで気の抜けてしまうような声が庭園に響いた。

元よりこれ以上追撃を加えるつもりは流司にはなかったようで、やれやれといった表情を浮かび上がらせると着流しの汚れを払い落としながら少女を押さえつけていた手を放して立ち上がった。

一方の少女はまだ頭が混乱してしまっているようで何も言葉を告げることができないように啞然としたまま地面に背中を預け続けている。

「ほら、立てるか？」

「えっ？あ、はい……」

流司はそんな少女に手を差し伸べて身体を起こす。

少女の体軀はその小柄な見た目通り羽のように軽く細身の流司でも簡単に引き上げることのできるものであった。

「怪我はないか？最後の一撃は結構手加減なしで放ったからな」

流司は少女の右手の具合を心配するように見つめる。

今の今まで殺伐とした戦いを繰り広げていた相手を見るような視線ではないであろう。

「そうですわよ、流司。女の子に手加減なしで手を上げるなんて鬼

畜ね、鬼畜。私はそんな子に育てた覚えはありませんわ」

よよよと泣き崩れるように目を押さえて言う紫に流司は本日何度目かの頭痛を覚えて額に指を添える。

「いや、な、手加減なんてしたら殺られるのは俺の方だから。それに俺も紫に育てられた覚えは全くないからな」

流司の諦めの度合いは既にうんざりと呼べるもので言葉の節々から疲れが滲み出てきているようでもあった。

実際、流司が手加減などをしてしまえば今頃流司の四肢には欠落があり、紫に育てられたかどうかなど改めて否定するまでもないことである。

そんな素っ気のない流司の態度に紫は、

「幽々子、息子がグレた」

「それは大変ね」

紫は身を翻すと隣で笑みを浮かべている女性に抱き付く。

抱き付かれた女性は紫のことをよしよしと慰めるようにしてあやす。

「なんだ、この小芝居……」

目の前で繰り広げられる芝居があったやりとりに流司はますます疲れを表情に浮かべて呟く。

そして、同時に紫のノリに悠然とついていくことのできる女性を脅威に感じる。

あの霊夢でさえ溜め息を漏らすというのに女性は表情一つ変えず、
にこにことした笑みを崩さない。

『八雲紫』という存在のことを十分に理解していなければ到底できることではないだろう。

「……………ほんと、つまらなくなっちゃったのだから。もう少し
リアクションをとってくれたとしても罰は当たらないというのに…
…」

「はいはい。びっくりしましたよ。で、そちらの方は？」

紫の言葉に投げやりに答えて流司は紫の傍らの女性へと向ける。

「答える必要はあるのかしら？予想はついているのでしょっ？」

「それでも初めて会ったのだとすれば名乗り合っのが礼儀というも
のだろうが……………」

ころころと歌うような声で答えた女性に流司は至極まともな言葉で
答える。

「んゝまあ、そうねえ。それじゃあ、私は『西行寺幽々子』。よう
こそ、白玉楼へ」

「『神代流司』です。手厚い歓迎を有り難く頂戴しました」

「私なりに趣向を凝らしたのだけど気に入っていただけたかしら？」

「ええ、今日の出会いを忘れることはないでしょう」

「それは良かったわ」

流司と幽々子は初対面であるにも関わらず既に皮肉の応酬を繰り返している。

流司は瞬時に幽々子が紫と同じ類の人であるということを見抜いた。満面の笑顔の裏で一体何を考えているのか分かったものではないと流司は思う。

関わったところで碌なことにはならないはずという思いは流司の中では既に確信めいていた。

「ほら、妖夢もいつまでも呆けていないで挨拶をしてしまいなさい。最低限の礼儀よ」

どの口が言つと流司は思ったが口に出すような真似をすることはなかった。

口は災いのなんとやらである。

「えっ、はい。『魂魄妖夢』です……」

幽々子に言われるがままに小柄な少女 『魂魄妖夢』 はぺこりと流司に頭を下げた。

先程までのような殺気は放っていないが、未だに疑問に残る点はいくつもあるのか、首を傾げるようにしてしまっている。

「はい、よくできました〜」

妖夢が流司に挨拶をしたことを確認すると幽々子は手を合わせて声を上げる。

「あの〜、幽々子様、これは一体……?」

「なあに？何か疑問でもあるの？」

「正直に言っただけの疑問ばかりなのですが……」

「はあ……俺たちはこの二人に遊ばれていたんだよ」

「？」

訳が分からないと言った様子の妖夢に流司がことのあらましを説明していく。

説明が進むにつれ妖夢の顔はだんだんと青ざめていく。

「で、では、貴方は……」

「だから、言ったじゃないか、客だつて」

「す、すみませんでした……！！」

ようやくもって全てを理解した妖夢が慌てて深々と頭を下げる。

それはもう必死の形相であった。

従者のような立場でありながら主の客に剣を向けてしまったのだからそれも当然であった。

その上、幻想郷でも重要な存在である流司をその手にかけてしようとしてしまったのだから、必死になるのも致し方がないと言えるであろう。

「あらあら、妖夢はせっかちなねえ……」

この状況を作り出した片割れである幽々子は必死に頭を下げている妖夢とは裏腹に、どこまでものんびりとしている眩きを上げるのであった。

頁九十二、「誤解」(後書き)

何とか投稿……

バタっ……

“白玉楼”は所謂寢殿造りの屋敷であった。

回廊にも間違えてしまいそうな長く廻る廊下を流司は足を進めていく。

その趣はどことなく神代の館に似たものを流司に感じさせていた。

無論、元々の造りは神代の館も同じ寢殿造りであるので似ているのは当然のことであった。

庭の手入れが似ているのも同じ枯山水としての風景を作り出しているのも同じことであった。

「こちらでお待ちください」

「ああ、ありがとう」

「失礼します」

流司を部屋へと案内した妖夢が頭を下げてその場を後にする。

幽々子はお客様の相手をするにはそれなりの準備が必要になると言っつて、妖夢の誤解が解けて早々にふらつと紫と共に姿を消してしまっていた。

そこで妖夢が客間へと流司を案内してきたのであった。

流司が通された部屋は屋敷の広さから考えれば、だいぶこじんまりとしてしまっている部屋であった。

だからといって、その部屋が悪いというわけではなく、むしろ決して広くはない部屋に古来からの良さが存分に詰め込まれているのだらう。

流司は部屋の外に覗かせる枯山水に視線を傾ける。久しぶりに眺めることとなった枯山水の庭園は庭師の技量が未熟であるのか、些か庭の景観を完全には生かしかれていないように流司には感じられた。

そんな庭に一際目立っている巨木がある。

冥界に季節というものが存在しているかは流司の知っているところではなかったが、幻想郷は初夏であるというのに葉を茂らせることなく佇んでいた。

「桜か……」

一目見ただけでそれがなんであるのか流司には理解することができた。

神代神社の境内の中にも一本の桜が植えられている。

樹齡は実に二千年を超える巨木で、いつ朽ちて倒れてしまってもおかしくないだけの年月を経ているというにも関わらず、毎年見事に咲き誇る桜であった。

枯れてしまっているように見えるその桜も実際には朽ちてはいない。流司は誘われるようにしてその桜の木の下へと歩いていく。

桜の下へと辿り着いた流司は一度全景を収めるように頂を眺めると目を閉じて掌を幹へと当てる。

ドクン。

流司が幹へと触れた瞬間に桜が呼応するかのように脈打った。風が吹いたというわけでもないのに枝がざわめく。

それはまるで桜木が歓喜の声を上げているようでもあった。

「『花見ればそのいはれとはなけれども心のうちぞ苦しかりける』」
それを呟いたのは誰でもなく流司自身であった。
だが、その声は酷く冷めたもので流司の元来の声とは思えないよう
なものだ。

感情がこもっていないというわけではない。
むしろ、それは溢れんばかり、万感の思いが込められているもので
あっただろう。

どちらにせよ、流司のことをよく知るものがその様子を見たとすれ
ば、その違和感に気が付いたかもしれない。

尤も不幸であるのか幸いであるのかは分からないが、周囲には流司
以外の人影は見られなかった。

「愚か……貴殿の望みは果たされど、貴殿の願いは果たされぬか…
…」

流司は桜の木を撫で上げるようにして呟く。

否、それは語りかけている方が正しいと言えるかもしれないだろう。
声は間違いなく流司本人であるはずであるのにその言葉は流司のも
のには思えない。

「貴殿が愛した花は……」

流司がその幹を撫でる度に桜はまるで呼応するかのごとく枝を揺ら
めかせる。

それは互いに互いを懐かしんでいるかのようであった。

そう流司は確かに“桜”と言葉を交わしていたのだ。

「その身を墮としてなお……」

そこまで言葉を告げ流司は哀しげな瞳を桜へと向ける。

「“花”を愛するか、義清よ……」

そして、“リュウジ”は再びその桜を視界一杯に写し込むようにして空を仰ぐ。

「美しいものでしょう?」

空を仰ぎ見た流司の背中に声がかかる。

声の主、『西行寺幽々子』はゆっくりと歩み寄るようにして桜へと近付いていく。

「……そうだな」

一瞬の間をもって流司は幽々子の言葉に答えを返した。

「あら、貴方はこの桜の美しさが分かるのね。こんな枯れ木のどろろがいいのだという人もいるというのに……」

「確かに枯れてはいるのだろう。だが、“死んで”はいない。冥界に相應しい桜かもしれないな」

この桜が花を咲かせることはないのだろうということとは流司は既に悟っていた。

花を咲かすことのできない桜などは死んだようなものである。けれども、この桜は死んでいるわけではないということも流司は悟っているのだった。

「そう、これはまだ“生きている”わ。花も葉もない今であってもこれだけ美しいもの。満開になればどれだけ美しいことが……」

「正しく“この世”のものとは思えない美しさだろう。いつか見てみたいものだ」

「ならば、貴方の能「ダメだ」……なぜかしら？」

「だってこれは“妖怪”だろう？しかも、封印を施されているくらいだ。花を咲かせるわけにはいかないさ。喻え心惹かれる美しさを醸し出すのだとしてもな」

流司の能力を使えばこの枯れている桜を満開へと変貌させることも不可能なことではない。

しかし、流司にはそれをしてしまったら良くないことが起こるであろうことが分かっていた。

流司はこの桜に並々ならぬ精気を感じ、禍々しいととれる歪みも感じていた。

それはこの桜がただの桜などではなく“妖怪”であるということをしつかりと流司に伝えていたのであった。

「……知っていたの。紫などから聞いていたのかしら？」

「いや、この桜に関しては今日ここで初めて知った。分かったのは偶々だろう」

かつて、幻想郷で起こった異変については流司も知ってはいたが、それは概要ぐらいのもので詳しいことはほとんど説明されてはいなかったのだ。

それだけに流司はこの桜が以前に起こった異変の中心を担っていた

ものであることは知らなかった。

「そう、やっぱり咲かせてはくれないのかしら？」

「これでも“神主”だからな。一応は妖怪の手助けをするのは拙いというものだ」

「そこまで言うのなら仕方ないわ。諦めましょう。準備が整ったの、ついて来てくれるかしら？」

意外にも幽々子はあっさりとその話を打ち切った。

元々がついでであったのか、流司を呼ぶという本来の目的に思考が切り替わった幽々子は桜に背を向けて歩きだす。

「ああ、最後に一ついいか？」

「ええ、どうぞ」

「この桜の名は？」

流司は幽々子の背中に質問を投げかける。

幽々子は優雅に振り返ると微笑みを浮かべて答える。

「“西行妖”よ」

と……

頁九十三、『西行妖』（後書き）

久しぶりの“リュウジ”の登場でした。

ここで簡単に記憶に関して説明しておこうと思います。と言ってもこれは分かっているとは思いますが、物語の確信に触れることなので今までのことから分かることをまとめたようなものなのですが。

“リュウジ”の記憶に関しては由縁のあるものや状況に至ったときにフラッシュバックすることで思い出します。

ただ思い出したものを明確に覚えているかといえはそうでもなく、思い出した事実^{こと}を覚えていても、思い出した内容^{こと}まで覚えていることは少ないです。

今回の例でいえば流司が理解しているのは“リュウジ”の中に桜と縁があった存在がいるのだらうという程度の認識だったりします。

“義清”ってのは誰だか説明する必要はないですね。

まあ、この作品では幽々子の立ち位置はそんな感じというところですね。

というわけでいつかは回収するだらう伏線でした。

頁九十四、『従者たち』

「あら、呼んだのね」

「ええ、丁度いい機会だったから」

幽々子に連れられて流司が案内された部屋にいたのは妖夢と紫だけではなく、更に二つの人影が増えていた。

幽々子と紫の口振りからこの二人は紫の関係者であるということを知り、流司は判断した。

一人は大陸の導師のような服装をしていおり、巾着を逆さまにしたような帽子を被っている。

何より、目立っているのは背後に隠れきれではない尻尾であろう。実に九本にもなる紡錘状の尾。

流司がそれを目にするのは初めてのことであったが、その存在についてはよく知るところであった。

『九尾』。

流司は紫の隣で控えている女性の正体にそのように見当をつけた。

『九尾』はある意味では妖狐の最高位である。

九尾の上位存在である“天狐”や朔のような“空狐”はそこへ至るには生まれながらの資質が必要ともいえるものであり、至ってしまえば“神”となってしまうからして“妖”狐ではないといえる。

故に『九尾』は妖狐としての最高位ともいえる存在であった。

流司の探るような視線に九尾の女性は一瞬目配せをするように視線を合わせた。何も口を開くことなく従順さを示すように静かに座っている。

流司はもう一つの人影に視線を移した。
もう一つの人影の少女は流司の視線が己に向けられているというこ
とに気が付くとビクツと二本の尻尾を垂直に立たせ固まる。

その尻尾の形状と耳から恐らくは『化け猫』であろうと流司は気付
く。

外見は亜紀よりも少し上くらいであり、素振りも外見に似合った少
女らしいものであった。

好奇心は猫をも殺すというが、どうやら化け猫の少女もその例に漏
れないようでおっかなびっくり流司のことをチラチラと見つめてい
るのだった。

「紹介するわ。藍」

「はい、紫様。『八雲藍』です。紫様の式をしています。それでこ
つちが『橙』。私の式になります」

「ちえ、橙です」

然とした態度で名乗る藍に対して橙はおずおずと口を開いた。

「神代流司です。紫には“御世話”になっているよ。それにしても
“式”……？」

“式”、“式神”というものを流司が知らなかったというわけでは
ない。むしろ、“神代”である流司にとっては馴染みの深いもので
あった。

式神とは陰陽道において使役される鬼神のことである。

鬼神とは文字通りの意味を示しているわけではなく、荒ぶる神や妖

怪、神霊のことを示す。

この場合は間違いなく妖怪ということであろうと流司は思っていた。

「ええ、“式”。尤も流司が考えているような“式神”ではないと思いますわ」

「ああ、やっぱり……」

流司の疑問に答えるようにして紫は口を開いた。流司の考えている式神というのは人型に名を書くことで具現をさせるものであった。多くの人が思う式神ものはそれであり、基本的には命に従順な道具に近い印象を流司は持っていた。

だが、藍と橙の様子はそのようには思えず、流司は自分が考えているそれとは認識が異なっているのだらうと思っていたのだ。

「現代風に言ってみれば、“式”というのは母体となる妖怪パソコンに強化する力を授与するようなものなのよ」
プログラミンツール

「なら、主はどう説明すればいいんだ？」

「そうね、さしずめ“ホストコンピュータ”と言ったところかしら。だから、主の命がなくとも自由に動くことはできる。けれど、当然主の命は絶対であるし、従順であれば本来の力を上回ることも可能なのですわ」

「なるほど、まさに“式”ということか……」

ある動作をなそうとした場合に個々でもそれをなすことは可能ではあるが、主の命令通りにそれをするので通常を上回っている力を発揮する。

それは計算を指示して正しく“式”とするようなものであった。

「その通り。よく理解できたわね」

「まあ、なんとかな……」

紫の説明したことは単純であることは違いなかったが、理解がし易いかといえばそうでもないことであった。実際、流司が理解できたのは元来の“式神”という存在に関する理解があつたからこそそのものであつた。

「さて、置き去りになってしまっている人もいることですし、そろそろ本題に移った方がいいでしょう？」

「あつ……」

「これくらいでいいかしら？」

「はい。助かりました」

紫に促された流司が本来の目的を思い出し、幽々子と妖夢に関する質問を終える。

そればかりか、ついだというように藍や橙に関する情報も手に入ることができていたので苦労をしただけのことはあつたと言えるだろう。

「あの……一つ私からも質問させていただいてもいいでしょうか？」

そう言つて手を挙げたのは妖夢であつた。

既に流司への警戒心は全く見られることはない。流司からの質問に答える時間を通して、妖夢なりに流司の人と成りを判断したからであり、なりより己の主が全く警戒していないのであるだから無駄というものであつた。

そればかりか、幽々子は流司の為に妖夢が用意しておいた茶菓子にまで手を出すという傍若無人ぶりである。

流司が笑つて許したからいいものを、とてもではないか客人に対する態度ではないであらう。

そうともなれば、警戒どころか先の件にも勝つて申し訳なさが際立つてしまふというものであつた。

「ああ、俺に答えられることならばな」

流司の口調が崩れたのは形式ばつた話の終わりを告げていた。

「先程、私が襲いかかつてしまったとき最後に一体何をしたのです？結果的には避けられて良かったのですが、確かに私は斬つたと思つたのですが……」

「ああ、それが。そうだな、答えは簡単なことこの上ないんだ。ただその攻撃がくることが分かっていたから踏み込む振りをしただけなんだよ」

そう、流司は少しだけ得意そうに妖夢へと説明を始めるのだった。

頁九十四、『従者たち』（後書き）

明日の投稿はほぼ間違いなくありません。
投稿できる確率は一厘くらいです。
申し訳ありません。

剣術。

それを極めるには幾程の月日が必要であるか。

あるものは世捨て人となり山に籠もり極地を目指した。

あるものは生まれし時から剣を持ち、剣を携えたままに死んだ。

それであっても、その真髄にどれだけ近付くことができただろうか。

剣を持つ殆どのものが真髄に至るといふ夢の半ばにしてこの世を去っていった。

幾ら類い希なる才覚に恵まれていたのだとしても、極地に至るためには人間の生というものはあまりにも短か過ぎるものであったのだ。

それ故に人は流派を作り出した。

己の目指す剣を形として残し、自らの至ることのできなかつた極を目指すために、次世代へと自分の持てるものを継承していったのである。

「説明する前に聞いておきたいんだが、その剣は我流か？」

流司は尋ねてきた妖夢に質問を返す。

質問に質問で返すということが失礼であるといふことは流司もよく分かっているところであったものの、流司が尋ねたことはこれからの説明に関して重要な意味合いを持っていたのだ。

「いえ、師匠がいます。と言つても、祖父なのですが」

「ふむ。なら、『魂魄家』が『西行寺家』の剣術指南役を勤める前は何をしていたのかは分かるか？」

流司は頷きを一つ落とすと質問を重ねる。

妖夢には流司が一体何を言いたいのか理解することはできなかったが、流司の表情が真剣そのものであったことから、しっかりと答えを返した。

「すみません。そこまでは……『魂魄家』は代々二刀の流派を扱う家系だとは聞いたことがあるのですが、それ以上となると……」

「いや、それで十分だ。大体の推測は立てることができたからな」

「はあ……」

妖夢の答えを聞いて満足そうな表情を浮かべた流司とは裏腹に妖夢は訳が分からないといった疑問の顔を深めてしまう。

「先程言ったように俺は分かっていたのさ。どの太刀筋で斬りかかってくるかな」

「分かっていたって“予知”でもできるようになったのかしら？」

「そんな力があつたら、始めから戦いを避けているよ」

紫の言葉に流司は首を振って否定する。

確かに流司の言う通りであり、予知能力などという高尚な力があつたのだとすれば、そもそも戦いなど起こりえなかつたであろう。

「では、どうして……？」

「簡単なことだ。俺は何度となくその太刀筋と同じ太刀筋で剣を振

るう相手と対峙したことがあるからだよ」

「!?!?」

さらりと述べた流司の言葉に妖夢は息を呑んで驚きを示した。

「『白楼剣』は『魂魄家』に伝わる宝刀だと説明してくれたよな？」

「はい。私も祖父から引き継いだものです」

そう言つて妖夢は脇に置いてあつた“白楼剣”を掲げてみせた。

鞘の中にその鋭利な刀身を隠したそれは解き放てば直ぐに命を刈る刃となるう。

斬られたものの迷いを断つというくらいであるからして、未練など残すことなくあの世へと旅立つはずだ。

「妙だとは思わないか？」

「妙？」

流司の言葉の意図を読むことができず、妖夢は首を傾げて復唱する。

「そうだ。“何故、魂魄家は二刀流を使う家系であるのに宝刀は一本なのか？”とは疑問に思わなかつたのか？」

「!?!」

そつ、『魂魄家』は二刀を用いる家系であつた。であるのに、『魂魄家』に伝わる宝刀は一振りのみ。

それは些か不自然とも思えることであつた。

勿論、宝刀に見合うだけの刀がなかつたという可能性も捨て切れは

しない。

けれども、“楼観剣”という名刀がありながらも“白楼剣”のみが『魂魄家』の家宝となっている。

おかしいというほどのことではないが、流司が考えたように“妙”と感じない訳でもないであろう。

「何故、家宝の刀は一振りしかないのか？答えは単純だ。もう一本が“失われて”しまったからに過ぎない。いや、正しくは“魂魄家には”と付け加えるべきか」

「そ、そんなこと、私は一度も聞いたことがありません!!」

妖夢は若干むきになったかのように声を張り上げる。

そんな様子に流司は目を少し見開いたが、己の家系に関する突拍子もないことを今日会ったばかりの赤の他人から聞かされもすれば仕方がないかと納得する。

「まあ、そうだな。これはあくまでも俺の推測にしかすぎない」

「ならばどうしてもう一振りがあるかのよ」「あるぞ」「……えっ？」

「だから存在しているというんだ。“白楼剣”と対になる刀がな」

流司は妖夢の言葉を遮るようにして告げた。

流司は“白楼剣”と対になる刀が存在していることに確信をもっていた。

そればかりか実際にその刀を目にしたことさえあったのだ。

予想にもしていなかった流司の言葉に妖夢は衝撃のあまりに再び押

し黙ってしまおう。

「銘を“ 塹黒剣 ”。そうだな、長さ的には“ 楼観剣 ”と同じくらいか。“ 白い楼 ”に“ 黒い塹 ”。まさしく、対となっている刀だと言えるだろうな。」

「どうして、そんなことを……。」

「俺にとってみれば、馴染みの深いものだからさ。それこそ耳に夕コができるほど“ 塹黒剣 ”の逸話は聞いている。」

流司は苦笑するようにして妖夢に答える。

それほど興味のなかったことが、このような形で役に立つことになるとは考えてもいなかったからである。

「そうそう、俺が避けることのできた理由だったな。それは“ 塹黒剣 ”の持ち主、『白雲更妖』の太刀筋と全く一緒だったからだよ。」

頁九十五、『白と黒』（後書き）

サブタイから閻魔様を期待した方は申し訳ない。

伏線の回収です。

本格的なのはまた次回です。

次回も1日開けて明後日になってしまいそうです。

その次は向明後日。

ゴールデンウィークが明ければ毎日更新できると思っているのですが……

頁九十六、『鬼と雨』

流司は過去に一度だけ『白雲家』の成り立ちについて更妖から話を聞いたことがあった。

歳にして流司が十四、五の頃であり、まだ『神代家』を継ぐことを決めてはいない頃であった。

…

…

…

「はあ、はあ、はあ……」

道場のひんやりとした木製の床に背を預け流司は荒い息を上げ続ける。

額には大粒の雫が幾つも浮かび上がっており、その表情からも流司の疲労の度合いが分かるというものだろう。

「情けないですぞ、御子息。それでも『神代家』の次期当主ですかのう？」

「はあ、はっ、まだ家を継ぐとは決めてないっての！！」

今までとは異なった意味で声を荒げて流司は身体を起こした。

とはいえ、未だに立ち上がることは叶わず、床に座り込んでいる形

であつた。

『神代家』のたった一人の嫡子であつた流司はどうしても“次期”当主として見なされてしまつていた。

実際には現当主である流司の父親の隆斗からは“自由にしている”という言葉で流司は受け取つてはいたが、体外的には流司が『神代家』を継ぐということは決まりきつたようなものであつた。

尤もそれは『神代神社』に仕えるものの末端や一般的な参拝客が思つていただけであり、流司個人と親しいものや『神代家』に仕えるものは流司の自由が奪われてはいないということは知つていたのだ。

つまるところ、『神代家』に使えている白く長い髭をさすり息を荒げている流司をニヤニヤとした視線で見る老人 『白雲吏妖』は実際のところを知つていている人間の一人であり、流司のことを“次期当主”と呼ぶのはからかり半分、願望半分のところであつたのだ。

「ほほっ、どちらにせよ。この程度でへばるようじゃ男として情けないと思つがの」

「何がこの程度だよ……三時間もぶつ続けで剣を振るわせておいて……」
時計の長針が実に三周もする間、竹刀と木刀を交互に振るい続ければ大抵の人間は体力の限界が訪れるというものである。

しかし、流司の非難するような言葉を吏妖は全くといって意に返してはいない。
そればかりか、

「何を言つておる。僕は一日中振つてもバテることなどないぞ」

などと言う始末である。
確実に人間を辞めてしまっている吏妖が言ったところで説得力など皆無であった。

「それにしても、今時になってもまだ剣術指南役だなんて……自分の生まれの特殊性を改めて感じるよ」

「……後悔しておるのかのう？」

「分からないさ。それでも選択ができる分恵まれているということ
は理解している」

吏妖の探るような視線に流司は真っ直ぐに答える。

「ふむ。ならば、御子息に『白雲家』の成り立ちについてお教えし
ようかの。御子息の選択の役に立つかもしれない故にの」

「いや、別に……」語り始めようとする吏妖に流司は苦虫を潰した
ような表情を浮かべる。

過去の経験から流司は吏妖が一度語り始めるとそうそう話が止まる
ことがないことを知っていたからであった。

「『白雲家』の始まりは実に千年以上も前に遡る……」

「……人の話を聞けよ」

流司の許可を得ずに吏妖は語り出すのであった。

『白雲家』の起源は千年以上の前に遡ることになる。

しかし、当時は“白雲”ではなく、“鬼雨おにぐり”と呼ばれている家系で

あつた。

“鬼雨”とは家名ではなく役職の名である。

元々は戦での先陣を勤め“血の雨を降らす鬼”という意味からのものであり、一個人を示すのではなく先陣を勤めていた人全てのことを示していた。

吏妖の遠い先祖は非常に優れた鬼雨であり、それがもとで紆余曲折があり『神代家』に仕えることになったのだ。

「じゃあ、何故今は“鬼雨”じゃないんだ？」

「御子息、焦りは禁物ですよ」

そう吏妖は言いながらも流司に促されて話を続ける。

鬼雨が『神代家』に仕え『鬼雨家』となってからしばらくのことであつた。

当時の『鬼雨家』には二人の嫡子がいた。

どちらともに優れた才覚を持つもので“鬼雨”の文字から一人は“鬼の者”、一人は“雨の者”と呼ばれるほどであつた。

だが、共に優秀であつたがために跡目を決めることは非常に困難である。

家系が家系であるがために一度争いが起きてしまえば血で血を濯ぐことになるのは明白であつた。

そこで当時の『鬼雨家』の当主は『鬼雨家』自体を解体するという、前代未聞の決断を下す。

“鬼の者”と“雨の者”に家宝である二振りの刀を一本ずつ継承し、それぞれに『鬼雨家』を起源とする分家を開かせることとなつたのだ。

「という事は……」

「うむ。僕は、『白雲家』は“雨の者”の末裔にあたる」

「なら、“鬼の者”はどうなったんだ？」

「知らぬ」

「へっ？」

流司は一瞬己の聞き間違えかと思ひ素つ頓狂な声を上げるが、吏妖の表情は本当に何も知らないということを示しているように真面目なものであった。

「『白雲家』が御庭番として『神代家』に仕えておるのは知っておるじやろう？つまるところ、『鬼雨家』の役割を“雨の者”が受け継いだのじゃ。しかし、“鬼の者”のその後については全く知らぬ。そもそも、今御子息に話したのは口伝であって明確な資料があるわけではないからのう」

「だったらどうしてそこまで自信があるんだよ？」

「『白雲家』は二刀流を使う。家宝が一振りなどおかしじやろう？」

……

……

…

「ということだ。まさか、こんなところで出会うことになると思
いもしなかったがな」

「“合縁奇縁”。巡り合わせとは常に不思議なものなのですわ」

「全くだが、紫がいうことでもないだろう……」

長々と話し終えた流司は紫の言葉に同意しながらも、すっかりと冷
めてしまっていたお茶を一口で飲み干すのだった。

頁九十六、『鬼と雨』（後書き）

というわけでネタばらし。

明日も更新はできません。

でも、ようやく地獄のGWが終わる。

日曜からは連日でできるといいな。

頁九十七、『静寂にて』

見知らぬ天井が流司の視界にはあった。

背中に感じる布団の感覚も頭を乗せている枕の感触も流司には慣れていないものであった。

広い白玉楼の一室を寢所として貸し与えられた流司はなかなか寝付けぬ夜を過ごしていた。

どういつ訳で流司が白玉楼で一泊するに至ったかといえ、単純に長い時間を白玉楼で過ごしてしまったからに過ぎない。

一度は遠慮し帰ろうとした流司であったが、どういふことか幽々子だけならず、紫にまで引き止められ結局白玉楼で一夜を送ることになったのだ。

“冥界”で一泊することに流司が思うところがなかったわけではないが、折角の申し出を無碍にすることも流司にはできず首を縦に振ったのだ。

尤も流司を引き止めた一端でもある紫は己の式と共に住処へと帰ってしまったのだから、なんとも紫らしい無責任さだと流司は思い諦めていた。

「寝られん」

天井を見つめたまま流司が吐露した思いはある意味必然とも言えることであった。

冥界とは裁きを受ける前の霊が一時的に留まるために存在しているものである。

つまりは靈魂が漂っていることが当然であり、それは墓地などとは

比べものにならないほどにうようよとしている。

言わば、冥界で一夜を過ごすということはお化け屋敷の中で寝るようなものであり、一般的な感覚をもってすれば耐えられるようなものではないはずだろう。

果たして流司が一般的な感覚をもった人間であるかは難しいところであったが、少なくとも安眠をすることができないという意味では普通の感覚を流司は有していた。

とはいえ、日中の疲労からも耐え難い睡魔が流司のことを襲っているのもまた事実であり、流司の意識が沈み込むのはそう時間のかかることではないのだった。

「ん……」

流司の意識が静寂しじまの海へと漕ぎ出してからどれだけの時が過ぎ去っただろうか。

流司はふと感じた腹部への重みで目を覚ました。

普段であれば時折、朔が首に強く巻き付くことで目を覚ましてしまうこともあった流司であるが、現在この場所には朔の姿は見られず、そもそも“朔”である以上は流司に重みを感じさせるほどの重量はない。

例の一件以来、“朔”が“望”となることは一度もなかった。

望自身が言っていたように翌日に流司が目覚めたときには枕元で丸

まっている管狐が一匹いるだけであつたのだ。
それ以降は変化をするような兆しは一切なく、あくまでも“朔”として存在し続けている。

ともかく、朔がない以上は本来流司の眠る傍には何者もないという事である。

流司が恐る恐る瞼を開けるとそこには流司の腹の上に馬乗りになつた人間……否、亡霊の姿があつた。

「何をしているんだ、幽々子……？」

寝起きである所為もあるのか、流司は極めて冷めた声色で己の身体に跨っている女性に声をかける。

「何つて、夜這い？」

「……………」

何の躊躇いもなくその言葉を発した幽々子に流司は黙り込む。

確かに状況だけを見ればそのようなものであつた。

誰もが寝静まつた深夜に男女が一つの布団の上で薄手の寝間着を隔てて重なり合っているのだから、夜這いでなくともそうであるように思えなくもない、そうであるようにしか見えないだろう。

不思議と部屋に漂う仄かな芳香は否が応でも流司の思考を麻痺させていくが、流司は強靱な精神力をもって意識を保つ。

具体的には底知れぬ恐怖を漠然と感じただけで、流司自身の力であつたかは定かではないが。

「冗談はそれくらいにしてくれ」

「あら、半分は本気よ」

何を考えているのか分からない表情を浮かべて幽々子は流司に答えた。

暗闇の中ではその表情を正しく判断することの叶わない流司でも、決して自分にとってよくはないことを考えているだろうことは十分に理解できていた。

「半分は何かの打算があるんだろ？俺も男なのでな、幽々子のような美人にこう跨がれると歯止めが利かなくなる。退いてくれ」

「あらあら、それでも私は一向に構わないのだけど……」

そう言いながらも幽々子は流司の上から身体を動かさず、起き上がった流司の傍に座り込む。

「さて、こんな時間にこんな状況までも作り出しておきながら話というのは何なんだ？」

「どうして私が話がしたいと？」

幽々子の身体が離れたことで幾分か冷静さを取り戻した流司が幽々子に尋ねる。

「わざわざ、人払い。この場合は幽霊払いか、をしているんだ。何か内密にしておきたいことでもあるのだろうか？深夜とはいえ、不自然過ぎるほど静かだ」

流司には周囲に全くの気配を感じることができなかった。

眠りに入る瞬間まで感じていた幽霊の気配も全くなかったのだ。

それは幽々子が幽霊を近寄らせていない証拠であった。

「なるほどねえ。やっぱり紫が直接紹介するだけのことはあるわ。妖夢にも見習って貰いたいわ」

先程まで動揺を隠し通すので一杯一杯であったはずの流司の冷静な見解に幽々子は感心したような声を上げる。

「そこまで感心されるようなことではないと思うけれどな」

「そうかしら。その歳でその冷静さは誇るべきだと考えるわ。私は」

「なに、能力の恩恵だろうさ」

あくまでも謙遜の態度を貫き通す流司に幽々子は少し不満そうな顔をするが、その顔もすぐに通常の微笑みへと戻る。

「なら、本題。“義晴”とは誰？」

そう呟いた幽々子の瞳は僅かな嘘も許さないというように鋭く光っているのだった。

頁九十七、『静寂にて』（後書き）

魔のGWが過ぎ去った……
これで明日からは……
連日で投稿を……

「知らないな」

「嘘ね」

すぐさま返答をした流司の言葉を幽々子は両断のもとに切り捨てる。嘘を許さないというのは間違いではなく、更に真剣さの度合いを増した瞳に流司は射抜かれる。

その無言の威圧感は大抵のものであれば萎縮し口を開くことすらままならないものであった。

そのような威圧感にも負けずに流司が苦笑をするように笑みを浮かべることができていたのは今までの経験があったからこそであろう。

「“嘘”ではないんだがな……」

流司が述べるように“知らない”と言う言葉は嘘ではない。少なくとも、“流司”は知らないのであるから正しいと言える。

実際、流司は“義清”という言葉に覚えはあったもののそれ以上のことは全くといって思い出してはいなかった。

本来、覚えてもないことを思い出すというのは妙な話だと流司自身思うところではあったが、他に表現のしようかないことも事実であった。

流司は“義清”という存在が一体どんな人間であるか。そもそもとして人間であるかすら分かってはいない。

ありふれた名前ではないだろうが、個人を特定できるような名前で

もない。

であるのならば、流司にできる回答といえば“知らない”というものしかなかったのだ。

「“嘘”では、ね……」

幽々子は流司の意図する言葉の裏を見抜いているようで意味深な笑みを流司へと向ける。

「“真実”とも言い難いかもしれないけれどな」

そんな笑みを飄々とした受け流して流司は応える。

事実、“流司”は“義清”という名を持った人間に一人だけ心当たりがあった。

それが“リュウジ”にとつての“義清”かどうかは定かではないので、同一の存在ではないという前提でのことだ。

「ふうん、なら貴方が知る限りで“義清”という存在について教えてくださいなさい」

「(ッ!?)」

流司は内心で冷や汗を一気に噴き出した。

それは有無も言わせぬような口調と視線で言ったからではない。

幽々子が流司の記憶のことを察しての言い回しであったか、流司に判断することはできなかったが、あまりの核心に迫った言葉故のことであったからである。

勿論、流司に騙そうというつもりはない。

ならば“記憶”を話してもいいように思える。

しかし、流司は誰にも話そうとはしていなかった。

不思議と話すことがはばかれるような気分に陥ってしまったのだ。

「……分かった。“俺”が知っている限りで話そう」

「ありがとう」

満面の笑みを再び浮かべる幽々子に流司は胸を撫で下ろす。

ここまでできて口を閉ざすという選択肢が流司にあるはずもなく、己の知る知識としての“義清”について流司は静かに話し始めるのだ。

“義清”。正しい俗名は『佐藤義清』といい、その出自は“秀郷流武家藤原氏”であり、“藤原秀郷”から見て九代目の子孫であり、その起因は当然ながら藤原家の開祖“藤原鎌足”まで遡る。

武家の生まれであることから武士でもあった義清であるが、出家をしたことで“円位”を名乗り、後には『西行』を称するようになる。現代、多くの人々に知られている名はこちらの方であろう。

西行は極めて和歌を詠むことに長けており、自然、花に関して詠むことが多かった。

特に花、“桜”に関してはこよなく愛しており、西行が桜について詠んだ和歌は数知れない。

果てには桜の下で往生することを願い、実際にそれを果たしたとい

うのだからその思いはもはや執念とすら評するに値するはずである。

「とまあ、俺が知っているのはこれくらいのことだな」

場所を庭園を臨む縁側へと移した流司が語り終える。

冥界の空にも現世と変わらず月は輝いており、その月が真のものであるかは流司の知る由ではなかった。

それでも、流司は惹かれるようにして一瞬だけ月を仰ぐ。

「そう…」

流司の話聞き終えた幽々子は落胆とまではいかないものの期待していたような内容ではなかったのか表情を暗くしていた。

「さて、一応知っていることは全て話したんだ。“義清”について知りたかった理由を話してもらえると俺としてはありがたいんだがな」

流司は人一人分ほどの間隔を空けて縁側に座っている幽々子に尋ねる。

「そうね。それが平等というものね」

幽々子はそう言うのと立ち上がり、歩いているとは思えないような足取りで一本の巨木、『西行妖』の前まで歩いていった。

「私が少し前に“異変”を起こしたのを知っているかしら？」

「話だけはな」

“春雪異変”。

曆上は春で間違いないはずであるのに幻想郷が雪に包まれたままで春の訪れがやってこなかったという異変である。それは幽々子が春度を集めさせていたことによる弊害であった。

「それならば話は早いわ。この桜の下には“何者”かが封印されているの」

「何者か、が……？」

「そう。その封印によつて『西行妖』は決して満開になることはない。私はその“何者”かが知りたいの。だから、貴方がこの桜に向かつて“義清”と語りかけているのを見て思ったのよ。封印されているのは“義清”なんじゃないかと。でも違う、貴方の話を聞いて分かったわ」

「……………」

流司には一つだけ語ってはいないことがあった。

西行には一人の娘がいたということである。

可能性の一つとしては幽々子がその娘であるのではないかという考えが流司にはあった。

しかしながら、そうであるのなら幽々子が義清について知らないということはない。幽々子が演技をしているようにも思えなかった流司はその可能性を早々に考えないようにしていたのだ。

「やっぱり、この桜を咲き誇らせることには協力してくれないのね？」

「大きな葛を開ける程度の災難では済まされないだろうからな。興味本意だけで動くんじゃないよ」

「興味で行動を決めるのは妖怪の特権よ」

「妖怪じゃなくて亡霊だろうに……」

「だったら尚更」

流司の呟きに幽々子は流司の方を向きかえり口を開く。

「私は亡霊。何か未練があったからこそここにこうして在るの。もはや、その未練が何であるかも忘れてしまったけれど……だからこそ、興味で動くことが亡霊らしいわ」

「……偶には巻き込まれる奴のことを考えてやれよな」

「ふふっ、どうしようさしらね。流司が代わりになってくれるというのなら考えてみてあげようかしら」

「それは勘弁してくれ。切に、な……」

幽々子の提案に降参するように流司は再び月を仰ぐのだった。

頁九十八、『西行』（後書き）

妹紅が不比等の落胤で、幽々子が西行の娘だとすると実は遠い親族
という……

寧ろ、幽々子にとって妹紅は御先祖様レベルです。

まあ、そんなことを言ったら、全国の“佐藤”さん、“加藤”さん、
“斎藤”さん、“藤本”さん“藤村”さんと“藤”の文字がついて
いる苗字の方は大体が“藤原氏”の起源の家系ですけどね（笑）

やったね!!

“藤”がついている人は妹紅や幽々子と血縁関係だよ。

ちなみに作者は違います……

頁九十九、『朝の食卓』

白玉楼の居間、そこには人が一人余裕をもって寝そべることできるほどの大きさをもった食卓がある。

そして、そこには無数の皿が並べられていた。

「ねえ、本当にここで住まない？」

「だから、俺には俺の役割があると言っているだろうが……」

何度目かも数えることが億劫になるくらいに繰り返している幽々子との問答に流司は呆れたように答え、箸を動かし魚の身を解していく。

「だって、流司がいてくれれば毎日こんな美味しいご飯が食べられるのよ〜諦めきれないわ」

「駄目よ。そんなことなら、とつくに私が家に縛りつけているですもの」

「俺の存在意義って……」

身を解された魚を口に運ぼうと流司は箸をのばすが、掴んだのは見事に骨だけが残された残骸であった。

いつの間にかにやら、魚の身は全て紫の皿へと移動してしまっている。

「で、なんで紫がここにいるんだよ」

「あら、幽々子は私の親友なのだから食事にお邪魔するのは当然と

「いつものでしょうか？」

当然なわけあるものかと心の中で愚痴りながら流司は新たな魚に箸をのばしてその身を解していく。

解した先から次々と身が強奪されていく。

まるで雛に餌付けをしているような親鳥の感覚に一瞬陥った流司だが、もはや諦めの極地に至り気にすることなく僅かに残った身を口に運んでいく。

「すみません。お客様であるのにこんな料理の用意までしていただいて……」

「気にしないでいい。幸か不幸かこういったことには慣れてるんでな。量が“少し”多いだけだ」

「あははは……」

“少し”という部分を強調した流司に妖夢は渴いた笑い声を上げる。食卓の上は文字通りの意味で“皿”が並べられていた。

既に盛られた料理を失っている皿の数は無数に上り、まるで晩餐会でも開いたかのようにであった。

正直言ってしまうば、“朝食”の量ではない。

これであるのならばまだこっそりとしたものを食べた方が胸焼けをしないというものであろう。

「よくもまあ……」

無数の皿の大半を空にした雛の片割れを見つめて流司は感嘆するよ
うに呟く。

よくぞ、あの細身の身体に入るといふものである。まず、体積的に完全に入るようなものではなく、腹の中にブラックホールでもない限りは無理というものであった。

同時に春先の“あの”地獄は幽々子に原因があったのだと悟り、咲夜の言葉の意味もようやく流司は理解するのだった。

「「「御馳走様でした」」」

「お粗末様でした、と」

流司は四つの湯呑みに緑茶を注ぐと片付けをしていた動きを止めて腰を落ち着かせる。たった四人の朝食であるはずなのに洗わなくてはならない食器の量が半端ではなく、能力を併用しての作業でなければ今頃も食器洗いの手は休まることになかったであろう。

「ふう……」

「流司さんはこの後はどうするのですか？」

緑茶をすすり息を漏らす流司に妖夢が尋ねる。

「ここでの目的は済んだことだし、そろそろお暇しようとは思っているけど？」

「そうですね……」

流司の答えに妖夢が表情を曇らせる。

「何かあるのか？」

「いえ、もしよろしければ一手合いお願いしたいと思ひまして」

「俺とか？」

「はい」

妖夢の言葉に流司は訝しみ眉を顰める。

妖夢と流司の剣の腕が拮抗しているならまだしも、天と地ほどとまでは言わないものの流司と妖夢の剣の技術、才能には明らかな差がある。

それ故にわざわざ妖夢から流司に打ち合いを願ひ出る理由が流司には皆目検討付かないのであった。

「何でまた？俺なんかじゃ、“剣同士”で打ち合ったら、それこそ太刀打ちできないと思うが……」

「状況によつてはそんなことはないと思います。後は他人と打ち合うという経験はここですと滅多にできないんです」

「ああ、確かに……」

幻想郷の住人で剣を使うものは全くといっていない。それは剣などで太刀打ちできるような存在がおらず、決闘は弾幕のように霊力などを使用してしまふからである。

「そういつことなら構わないよ。俺も偶には剣を握っておかないと雲じいにごちされることになるからな」

「面白そうなことを話しているわねえ」

「お酒のいい肴になりそうね」

流司と妖夢の会話に聞き耳を立てていた幽々子と紫が満面の笑みを浮かべて言う。

「面白いつて……それで俺は一度いらぬ戦いを強いられたんだが。それとこんな早い時間から飲もうとするな」

「いいじゃないの。お酒は飲みたいときに飲むにつきますわ。是非ともいつまみになってくださいな」

流司の言葉にも紫はどこ吹く風で、幽々子もそんな様子をにこにこ眺めているだけで何もしようとはしていない。

「……まあいいさ、それじゃあ妖夢、早速一戦願おうか。時間があまりないことは変わらないんでな」

「はい、お願いします」

枯山水の庭園の一角には糸をピンと張ったような凜とした空気が流れていた。

「（この空気も久し振りだな……）」

木刀を構えた流司は目の前で長短二振りの木刀を構えている妖夢を見て思う。

動いたら負けると思わせるようなほどに張り詰めた空気。互いの呼吸音だけが静寂を乱すような緊迫感。

「（これだけのものは前に燦希と一戦したとき以来か……）」

これだけの空間を作り出すことは容易なことではない。

互いに真剣であり、全身全霊をもって打ち合おうという思いがなければ作り出すことはできないものである。

剣を握る回数はいずれにあつた流司だが、互いに全身全霊をもって打ち合いをしたのは数年前に燦希と試合をした時以来であつた。流司は音を出さないように吐息を漏らす。

「悪いけど胸を貸してもらおうか」

「いつでも、いらしてください」

流司は漏らした吐息をそのまま戻すように肺へと空気を送る。

そして、隙なく木刀を構える妖夢へと駆け出すのだつた。

頁九十九、『朝の食卓』（後書き）

どうしてこんなことに。

というわけで次回はVS妖夢（再）

でも、やっぱりあっさりいきません。

頁百、『才在る攻と才無き守』

流司には剣を扱うものとしての才能がない。

それは自他共に認める変わりようのない事実であった。

振るう木刀の太刀筋は洗練された美しさもなく、才気溢れる真つ直ぐさもない。

だからといって、幼少から剣を握ることのあつた流司の動きは愚鈍というわけでもなかった。

試合という観点から見れば流司の動き、腕前は及第点はおろか、一端の剣を扱うものとしては一人前といえる。

しかし、“戦い”という観点に変わってしまえば平々凡々極まりないものであつた。

大した速度も業もない流司の上段からの袈裟切りを妖夢は右手に握つた木刀で易々と受け止める。

それは避けることができなかったというわけではなく、避けるまでもないと油断をしていたわけでもない。

ただ純粹に流司の力量を量ろうとしてのことであつた。

妖夢が流司と初の邂逅を果たした際には己の未熟さ故に流司の実力を推し量ることができなかった。

なので一閃、二閃と流司の放つ剣戟を受け止め、妖夢は剣士としての流司の力を見定めていく。

平凡。

やはり、妖夢が感じたことも流司自身が理解していることと同じであつた。

決して流司が弱いということではない。

流司の腕は当然のように素人や剣を握ったばかりの人とは一線を画するものであったし、しかとまとまりをもっている太刀筋であった。けれども、それだけである。

三流とまではいわないが、一流には到底届くこともない。

二流の中でその剣を極めることは可能であろうが、一流の才能をもち鍛錬を重ねてきた者には適うことのないだろうと妖夢は思った。

負けはない。

それは驕りなどではなく一つの事実としての妖夢の思いであった。能力や弾幕を用いての決闘であればどうなるかは分からないが、“剣”だけでなれば負けることがないと妖夢は確信を持っていた。

奇しくもそれは初邂逅の時に流司が考えていたことと同じであった。違いといえば、流司は“敗北はない”という考えであったのに対して、妖夢は“勝利できる”という考えがあったことである。

確信を得たことで妖夢は守りに専念していた動きから攻撃へと転じる。

流司の横薙ぎを左手の木刀をで受け流すと同時に妖夢は右手の木刀を振るう。

その一閃はギリギリのところまで流司に届くことはなかったが、この一撃で流れは完全に逆転した。

今まで守りに専念していた妖夢の動きは攻撃へ、攻めに専念していた流司の動きは防御へと移り変わる。

長さの違う二本の木刀を巧みに操り絶え間ない剣戟の雨を降らせていく。圧倒的な劣勢に立たされる流司。

しかし……

「（切り崩せない……？）」

妖夢は流司に決定打を与えるまでには至っていなかった。

流司が鉄壁を誇っているわけではない。

何度なく危ない場面は繰り返されていた。にも関わらず、壁一枚、紙一枚、妖夢の剣は流司に届かない。

寸前のところで流司は受け止め、かわし、掠らせているのだった。

流司が回避すること、防御することに長けていることは以前の戦いから妖夢にも分かっていたことであつた。

だが、これほどまで巧みであるのは妖夢にとっては予想外のことであつたのだ。

前回と異なり今回は木刀というかさばるだろうものも手にしているにも関わらず、妖夢には無手の時よりも流司が器用に回避をしているように思えた。

妖夢のその思いは間違つたものではない。

事実として、流司は“無手よりも刀を手にした時の方が防ぐこと”に関して長けているのだ。

「（刀があれば守りに関しては食らいつけるか……）」

剣術に関しての才気のない流司であつたが、こと“守”に関しては剣術指南役であつた吏妖も目を見張るものがあつた。

勿論それは才能がないという前提あつてのことであるが、少なくとも並以上の力が流司には備わっていた。

剣術の才覚が流司にはないということを知つた吏妖は流司に護身術という側面を強めて指南をした。

才能がないことにより、剣術というよりは身体の動かし方という体術が大きな割合を占めていたが、あくまでも吏妖は剣術指南役であ

ることから剣を使つての守りの動きが含まれてしまふのは仕方のないことであつた。

結果として発覚した“守”に關しての流司の才。吏妖はそれを引き伸ばすように流司のことを長年に渡り指南したのであつた。

故に流司は無手よりも刀を持ったときの方が守りが上手である。

単純に“防ぐ”という選択肢が増えるだけでなく、間合いの取り方など幅広い恩恵を得ることができるのだ。

これまでは“スペルカード”、“弹幕”というものの存在からその技量は全くと役立つことはなかつた。

だが、剣同士の戦いとなればその才を最大限に發揮することができるとのだった。

尤もそれは……

閃ッ！！

前回の戦いを彷彿させるように高々と木刀が宙を舞う。

そして、首元に添えられる木刀。

「参つた」

流司は両手を上げて降参を表明する。

幾ら、“守”に長けているとしても限界はやってくる。

攻勢に移ることができない以上はいずれ妖夢に軍配が揚がるのは当然であつた。

「ありがとうございました」

「「こちらこそ。尤もいいところは全くなかったけれどな」

ぺこりと頭を下げる妖夢に流司は吹き飛ばさせた木刀を拾い上げて苦笑する。

結果だけを見てしまえば、流司は妖夢に圧倒されていたことになるからだ。

「いえ、ここまで守りが上手だとは……なかなか攻めきることができませんでしたので」

「まあ、これだけが取り柄だからな。上には上がいるし、大したことではないと思うよ」

「そんなことは……」

「そうそう、その剣士の言う通りさ。あなたの距離の取り方は大したものだったよ。あたいが感心したんだから間違いない」

謙遜する流司に第三者から声がかかる。

その声は幽々子でも紫でもなく、新たな声であった。

流司が辺りを見回せば庭園には一人の見慣れぬ影があった。

「いや、いい見せ物だったよ。偶には遠出サボリもいいものだね」

うんうんと頷く女性の姿を流司は凝視してしまっていた。

正確にはその肩に担がれているものである。

長い柄に三日月のような刃。

女性が携もちえていたのは首を刈り取るための大鎌であった。

「……………死、神……………」

まさしくといった姿に流司は大きく息を飲んで呟く。

「そうさ。一応名乗っておこうかね。『小野塚小町』、
“死神”な
んてものをやっているしがない“舟頭”さね」

頁百、『才在る攻と才無き守』（後書き）

記念すべきかどうかはわからないけれど、百話目。だからといって主人公には花をもたせませんけど。

満を持してこまっちゃんの登場。

名前は出てこなくとも、ちよくちよくでてきていましたね。

そんでもって口調分らない。

まあこんな感じでいきます。

「よっと」

「ッ!？」

己のことを“死神”だと述べた小町は軽く声を上げると同時に流司の目の前に立っていた。

その光景に流司は目を見開いて驚きを示す。

小町は何気ない動きで身体を動かしていたはずであるのに流司にはいつ自分の前にやってきたのか捉えることができていなかったからである。

流司の瞳には小町が一歩足を踏み出した次の瞬間には目の前にいたようにしか移ってはいなかった。

幻想郷には流司の瞳で捉えられないような速度で移動できる存在などはさして珍しいものでもない。

だが、そうであっても“動いた”ということは流司にも知覚できるけれども、小町はゆっくりとした歩調で一歩踏み出しただけであった。

その姿がブレることもなければ、空気が揺らめくこともなく、唐突に流司の眼前に現れたのだ。

「ん、お前さんの顔、どこかで目にした記憶があるねえ……」

驚きの表情を崩していない流司の顔を小町は覗き込むようにしてジロジロと見つめる。

「そんなことがあるわけ……ん？」

流司はそんな視線に居心地の悪さを感じながらもまだ死神には知り合いはないと小町の言葉を否定しようとするも、小町の顔を傍で見つめた流司もまた妙な既視感を感じて首を傾げる。会うのは初めてであるはずなのに何故だか小町の顔に流司は見覚えがあったのだ。

「「ん」……」

一間もない近い位置で相対し互いに首を傾げあう流司と小町。二人とも後少しで思い出せるというところまでできているのにその後少しを思い出すことができずにいた。

「あの、お二人が出会うとすれば“三途の川”以外に有り得ないのでは……？」

「「それだ!!」」

それまで黙って二人の様子を伺っていた妖夢がおずおずと口を開く。その言葉に流司と小町の二人は声を大きく上げるのだった。

「あのときの“臨死者”かい!？」

「“三途のエドワード”か!！」

流司は以前にちょっとした不可抗力で三途の川へと意識を飛ばしたことがあった。

その時、三途の川の畔で出会った死神が小町であったのだ。

「あの後は大変……ん、“冥界”にいるということは今度こそ死ん

でしまったのかい？」

「いやいや、足はしっかりあるからな」

小町がそう尋ねたのも仕方がないことであつた。冥界に生者がいることがまずありえないことである上に、流司は“冥界”という空間に違和感がなく馴染みきつているのだ。

恐らくではなく、確実に快適な冥界ライフを楽しむことができるであらう。

「足の有無など関係はないね。それこそ、死神にとっての鎌こが飾りなのと同じさ。重要なのは“距離”なのだから」

「距離？」

神妙な顔をして述べる小町の言葉を流司は首を傾げて繰り返す。

「こんな“死”に近い場所にいたら、お前さんも“死”に近付いてしまう。勿論、自殺願望があるなら引き止めはしないけれどね」

「あら、今日は貴女が説教？珍しいこともあるものね」

若干の説教臭さを感じさせる口調で流司に語りかける小町に紫が扇子で口元を隠して言う。

「私が教えを説いてはいけないとでもいうのかい？」

「そんなことはないわ。貴女も一応“神”ですもの。多少の御利益はあるかもしれないわ」

「名ばかりの実は“妖怪”だけどねえ……」

「そつなのか!?!」

小町が自分のことを妖怪と称したことに流司は声を上げる。

“死神”と言えば子供でも知っているような有名な“神”である。

そんな、“死神”である小町自身が己を妖怪だと言ったのだ。

“神”を信仰するものの一人である流司に大きな驚愕を与えるのも無理のないことであった。

「“死神”の起源は“死そのものの神格化”。“死”を操ることではない。自然現象を神格視したのと同じさ。命を司る神は他にもいるからねえ……」

「確かに……」

数多の神が存在するこの国では命を司る神も少なくはない。

その上、磐長姫のような不死を司る神まで存在するほどだ。

もはや、飽和状態と言っても可笑しくはない。

「考えによっては“死神”という概念を“悪魔”に取られてしまっているのしねえ。そうなれば、“神”なんかよりも“妖怪”といった方が正しいというものさ」

「なるほどなあ」

言われてみればそうだと流司は納得して呟く。

“死神”はこれ以上ないほど有名であったが、「代表的な死神は？」と問われた場合すぐに答えられるような“死神”はいないだろう。

有名であるのに曖昧。

そんな矛盾を抱えている存在である“死神”は確かに建前上の“神”と言えるのだろうか。

「まあ、“仏”に仕える“神”というのも可笑しなことさ」

「どちらにせよ、貴女はしっかりと仕えているとは思えないけれどね」

「暇さえあれば寝ているような、賢者様には言わせたくないがねえ」
サボリと惰眠。

どちらもどっこいどっこいだと流司は感じるが無言を貫く。

「それに今日はこうして教えも説いているんだ。十分な言い訳も用意できているさ。散策サボリがメインであることには変わらないがね」

「……………なるほど、それはとても良いことを聞きました」

その時、小町の傍から凜として、冷め切ってしまったっている声が聞こえた。

その声に一瞬にして身体を強ばらせる小町。

いつの間にかやら額には大量の汗が浮かんでいた。

「折角、善行を積んでいると思ったら、結局はいつもと同じ遠出サボリですか……………覚悟はできていますね、小町？」

そう言っつて、小町の背後から姿を現したのはその小柄な身体からは考えられないような存在感を醸し出している少女であった。

頁百一、『死神』（後書き）

エドワードはタイタニック号の船長です。

ちよっと真面目なこまっちゃん。

死神〓妖怪は公式です。次回はあの方ですなえ……

小町の背後から現れたのは少女と呼ぶ以外に呼び方を考えることができないだろう可愛らしい小柄な少女であった。

しかし、その身から発せられる威圧感にも似た存在感は歴戦を経て経験を得ないと身に付かないような濃厚なものである。

流司はその少女が見た目通りの年齢ではないことを悟る。

幻想郷では容姿のままの年齢ではない存在は珍しいものでもない。人型をとる妖怪などのほとんどが人間にとっての最盛期の姿を模すのに加え、長命である妖怪らは身体的成長が緩やかであったり、そもそもが容姿的な老化を起こすことがなかったりするからだ。

この少女がどのような存在であるかは流司には分からぬところであったが、己よりも遙かに長い年月を生きているだろうこと。

そして、ある意味で少々という言葉では足りないほどに厄介な存在であることを流司は経験として知っているのだった。

この少女のと会うのは流司は初めてのことではなかった。

それは少女のことをしっかりと知っているという訳ではない。

小町の時と同様に会ったことがあるという程度のものでしかない。

けれども、その時のことは小町のこと以上に強く印象に残っているのであった。

死してもいないのに三途の川で数刻にも及ぶ時間を正座の状態で説教をされては印象に残らないというのが無理な話であった。

その上、その全てが正論であるがためにぐうの音もでない。もはや、その経験は流司にとってのトラウマに匹敵するものであり、しばらくの間正座することに恐怖を覚えたくらいであった。

「え、四季様……どうしてこちらに……？」

「わざわざ説明する必要があるですか、小町？貴女を捜しに着たに決まっているでしょう？」

少女の威圧感に正面から立ち向かっている小町は流石であった。尤も、生まれたての子馬のようにガクガクと震えている上が。

「し、しかし、四季様は今日はお休みでは……？」

「はい、そうですよ。けれども、貴女は休みではないでしょう？」

小町の必死の抵抗も少女の正論によってばっさりと断ち切られる。自業自得だとはいえ、そんな小町の姿に流司は同情の思いさえ浮かんでくる。

とはいえ、巻き込まれたくはないという思いの方が強いため視線だけを小町の背に送るのであって、声をかけたりなどはすることはおろか心配すらなかった。

「今日は船頭の仕事も暇でしたので、冥界の様子でも伺おうかと……」

「なるほど、それはなかなかいい心がけかもしれません」

小町の思いが通じたのか少女は感心したように頷く。

「で、ですよね……！」

「勿論、それとこれは別ですが」

一瞬輝いた小町の顔がすぐに引きつったものに変化する。

少女がことを曖昧にするつもりは全くもってないようであった。

「……………（助けて!!）」

「……………（俺を巻き込むな）」

小町が無言の視線を流司に送り助けを求めるが、流司はにべもなく拒否を視線を逸らせることで表す。

「ん、貴方は？」

「（よしっ!!）」

「（なっ!?!）」

しかし、小町が視線を流司へと一瞬向けたことは少女が流司のことに気が付くには充分であったようで、少女は小町の背後に見える流司へと視線を移した。

小町は内心で歓喜の声を上げ、流司は驚愕の思いで一杯なる。

余計なことをと小町へと流司は恨めしさを感じさせるような視線を送るが、先ほどとは対称的に今度は小町が流司の視線から顔を背けるのであった。

「貴方はこの前の……………どうして冥界「いのちの境界」にいるのです?」

「少し用事がありました……………」

「そうですね。しかし、生きている人間があまり長いものではないありません。小町が言っていたように“死”が近くなってしまいま

す

「そ、そうですね!! なら、私はこの辺で……」

しどろもどろになりながらも流司はこの場から逃げ出すために話を打ち切って身を翻そうとする。

「いえ、待ってください。貴方には一度このような場所にいることの危険性を話して置くべきでしょう」

「……………」

瞬間、流司もまた小町と同じような引きつった笑みを浮かべる。

助けを求めようと小町が助けるはずもなく、いつの間にかやら、傍にいたはずの妖夢に紫、幽々子の姿も見えなくなっていた。

「(逃げた!?)」

流司が知るところではなかったけれども、少女の姿が見えた瞬間に紫と幽々子は白玉楼の中へと姿を消し、妖夢もまた流司のことを心配するような視線を送りながらも屋敷へと戻っていったのであった。見事としか言いようのないその引き際は流司はおろか、小町や少女にも悟らせることなく姿を消すほどである。

「いえ、そんな御手数を取らせるわけにはいきませんよ」

「構いません。ものついでという言葉は好ましくはありませんが、いつか話さなくてはいけないことなのです。ならば、この機にしっかりと理解するようにしてください」

「はい……（覚えておけよ？）」

「……………（何のことかい？）」

流司は小町を睨みつけるが、小町は笑顔を隠した表情で流司のことを見つめ返す。

そればかりかこっそりとその場を立ち去ろうとさえしていた。とはいえ、そんな問屋が卸すはずもなく、

「何処へ行こうというのですか、小町？ 貴女もここに座りなさい」

少女は鋭い眼光で小町の動きを止めるのだった。

「あの……………」

「何ですか？」

既に流司は逃げ出すことを諦め、素直にその場に座る。

「話の前に名前を伺っても宜しいですか？」

「ああ、申し訳ありません。私としたことが名乗り忘れていましたね。『四季映姫・ヤマザナドゥ』、幻想郷を担当する“閻魔”です」

頁百二、 『逃れられぬ』 (後書き)

逃れられぬ。

結局、主人公も道連れに。

会つのは二度目なのにどちらとも説教されることになるといふ……

「今回はこの程度にしておきましょう」

「「あ、ありがとうございます……」」

すっかり憔悴仕切ってしまった流司と小町が映姫へと御礼を述べる。

その言葉に実際に気持ちがかもっているかどうかと問われてしまえば微妙なところであった。

少なくとも小町に関してみれば既に開放感に浸りきっているようにも思える。

そんな小町に再び冷たい視線を送ろうとしている映姫のことを流司は見つめ考える。

“閻魔”。

“死”というものから連想できる言葉の中では上位に位置しているものである。

その役目は極めて単純であり、死んだ存在の罪を裁くことである。

映姫は自身を『四季映姫・ヤマザナドゥ』と称したが、“ヤマザナドゥ”は正しくは名前ではなく役職名のようなものであった。

“Yama”は『閻魔』を意味し、“xanadu”は『楽園』、即ち『幻想郷』を意味している。

つまりは“幻想郷の閻魔”というわけであった。

この国において“閻魔”という存在は“地藏菩薩”と同一視されることが多い。

“地蔵菩薩”は地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道の“六道”を輪廻する衆生を救う菩薩であるとされている。そのことから“六地蔵”と呼ばれる六体一組で飾られることがしばしばであり、道に関わっていることから“道祖神”とも同一視されている。

「何か私の顔にでもついていてるのですか？」

流司の視線が自分の顔に向けられていることに気が付いた映姫が流司に尋ねる。

「いや、何でも……」

「嘘ですね」

慌てて首を振る流司にばつさりと映姫は告げる。

「本当に何でも……」

「だから嘘だと言っているでしょう。それとも“閻魔”である私に嘘を突き通せるとでも思っているのですか？私にとって白黒をつけることなど造作もないことなのですよ？」

「あっ」

その言葉に間の抜けた声を上げる流司。

映姫は遺憾だというように顔をしかめ、小町は何を馬鹿なことを言っているのだという呆れた表情をしていた。

そこで流司はようやく映姫の閻魔の能力について思い出す。

“白黒はつきりつける程度の能力”。

以前に流司が耳にしていた己の能力の天敵といえる能力のひとつであった。

尤も流司の場合、実力云々で映姫に勝ることはないだろうことは明白であった。

「で、どうしたのですか？」

「ただ、まさかこんなところで会うなんて思っていまませんでしたので。都合が良すぎると……」

「都合？ああ、無理をしてそのような口調にする必要はありませんよ」

映姫は流司に楽にするように言う。

流司の言葉が嘘ではないと分かってはいたようだが、何が都合がいいのかは分からないようで映姫は首を横に傾けてしまっていた。

「分かりました。都合というのは渡さなくてはいけないものがあった」

流司は懐から阿求より預かっていた手紙を取り出す。

上等な真白の紙の表面には何も書かれておらず、一見ただけでは誰が誰に宛てたものであるのかも分からないだろう。

「九代目、『阿礼乙女』、『稗田阿求』様より預かって参りました書状です。お納めください」

流司は恭しく頭を下げて取り出した手紙を映姫へと差し伸べる。

「ありがとうございます」

楽しんでいいと言って間もない堅い流司の態度であったが、映姫はそれが意味するところを正確に読み取り、流司から書状を受け取る。

「なるほど、もうそのような時期ですか……」

手紙に目を通した映姫が何かに納得したように呟いた。

「神代さん。稗田様には了解の旨を伝えておいてください」

「分かりました」

映姫は読み終えた手紙を折り畳むと傍らの小町へと手渡す。

小町は一瞬嫌そうな顔をするも、映姫が一睨みすると大人しくそれを受け取るのであった。

「ところで、神代さんはこの手紙の内容を知っているのですか？」

「いや、ただ預かったただけだから全く知らない。そもそも、他人宛の手紙を盗み見るなど失礼だからな」

「それもそうですね」

映姫は流司に感心したように頷く。

流司が手紙を手渡すことも阿求からの依頼の一つに違いはないわけであり、その依頼を誠実に果たすのは流司の性格から考えてみれば当然のことであった。

「何か書かれて……？」

「はい。神代さんのことを直しくするように……」

「宜しく……?」

もう充分過ぎるほど宜しくされているとは流司は思ったが、そのよ
うなことは口が裂けても言えるはずもなく、小首を傾げて言葉を繰
り返すにとどまっていた。

「神代さん。貴方は『幻想郷縁起』の編纂の手伝いを行っているよ
うですね」

「まあ、阿求には以前助けてもらったことがあったから、そのお礼
の代わりに」

映姫の問いに流司は頷きをもって肯定を示す。

このようなことになるとは当初考えてもいなかった流司ではあった
が、蓋を開けてみればなかなか貴重な経験をしていることになっ
ていたので阿求の依頼に関して不満を持つことはなかった。

「私が宜しくお願いされたのは『幻想郷縁起』の編纂に隠されたも
う一つの意味を教えるようにということですよ」

「もう一つ……?」

「そうです。“阿礼乙女”が『幻想郷縁起』を編纂する、それは同
時に次の転生の為の準備の始まり、即ち“余命”がそこまで残され
てはいないということを示すのです」

頁百三、『閻魔』（後書き）

説教は略。

少し遅れました。申し訳ありません。

「余命が……？」

流司が意外そうな言葉を上げたのも無理のない。

前日、出会った阿求は健康そのものであり、余命の短さなど感じさせるような気配は全くなかった。

それにもかかわらず、映姫は阿求の余命が残り少ないと告げた。

それを流司が疑問に思わないはずがなかった。

「勿論、今すぐという訳ではありません。それでも後十年。三十まで生きていることはないでしょう」

「三十……」

流司からしてみれば三十歳まで生きることのできないということは異常なことであった。

流司だけでなく、“外”に住むものが知れば誰であっても驚くことであろう。

事故や栄養失調などの要因があるのならまだしも、そのような要因が阿求にあるとは流司には思えなかったのだ。

「『稗田家』の人間が代々薄命であることは知っていますか？」

「薄命？」

「何も阿求さんだけが短命というのではないのです」

『稗田家』の血脈に連なるものは代々薄命であった。

それが元来の体質からくるものなのかは定かではない。しかし、“外”の『稗田家』に関してはそのような様子はなかったことから“幻想郷”の『稗田家』に限ることなのかも知れないと流司は考えた。

「それじゃあ、身体が弱いというのも……」

「恐らく薄命であることが原因でしょう。まあ、今話すべきことはそれではありません」

「えっ?」

流司の呟きを肯定するように映姫は頷くが、それと同時に首も振るのだった。

「私が頼まれたのは“転生”に関してのことですので」

「“転生”……」

「“阿礼乙女”というものが所謂“前世”の記憶を持って転生した存在であるということはご存知ですよね?」

流司は映姫の言葉に黙って頷く。

そのことに関しては流司は初めて阿求と顔を会わせたときに聞いていたので既に知っていることであった。

「“転生”というものは元来どのような命にもあるものですが、“前世”の記憶を持つての“転生”となれば話は別となります」

「別、というっ?」

「 救されない」という意味です」

「 ツー!？」

声を低くして言う映姫に流司は背筋を氷でなでられるような感覚を覚える。

比較的長身である流司からして見れば、映姫は見上げる形になってしまつにも関わらず流司を飲み込んでしまいそんな存在感である。

それだけであるならば、流司はただ驚いただけで済んでいただろう。しかし、流司には“前世”、“記憶”という言葉に覚えがあり過ぎていた。

「 転生」とは“前世”からの縁を断ち切ることです。確かに中には偶然にも“記憶”を残したまま生まれ変わってしまう存在もありますが、それは稀と言うほかないでしょう。けれども、それを意図して、しかも同じ一族として繰り返すことはあってはいけないことなのです」

「 なら、どうして……」

「 秘術」とでもいうのでしょうか。裏技のようなものがあるので。尤もそれをするには何年も掛かりますし、効率的ではないですよ」

では、自分の“これ”は一体何なのだという疑問を流司は静かに思い浮かべていた。

恐らく今、映姫に尋ねれば答えてくれるだろうという思いは流司の中にあつた。

しかしながら、流司がそれを尋ねることはなかった。

一点の恐怖。

自分自身という存在に対する恐怖が流司の中に生まれた瞬間であった。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

「……そうですか」

先ほど知った閻魔に対して嘘が意味をなさないということをおぼろげに忘れてしまっただけに流司は混乱していたのだろう。

映姫はそれを悟ってか先ほどのように深くつつこむような真似をするのではなく話を続ける。

「その上に“転生”をするまでの数百年間は私の下で手伝いをしてもらうことになりますから」

「手伝いというと？」

「まあ、雑務と言ったところです。地獄は財政難ですし、タダで使うことのできる人手というものは有り難いですから。『幻想郷縁起』の編纂をしているだけあって、書類などの事務作業はお手のものですので。どこかの誰かとは異なり仕事ぶりも大変真面目ですし」

映姫はすぐ傍にいる“何処かの誰か”に冷ややかな視線を送り、言葉以外にもっと仕事をしろと訴える。

それが伝わっているのかどうかは神である映姫にもわからないであろう。

「そういうわけで、今回の手紙は近いうちに何うことになるということを知らせるものだったのです。私と人間では時間に対する感覚にズレがありますから」

「なるほど……」

人間である流司や阿求にしてみれば、十年というのは長い時間であるが、閻魔である映姫にしてみれば、短い時間であるのだ。近いうちという言い回しも間違っているものではなかった。

「ふう、このようなところですね」

「話は終わったかしらあ」

「『西行寺幽々子』……」

丁度良いというのはまさにこのことであるのだろう。

映姫が息をついた瞬間に今まで姿を眩ましていた幽々子が現れる。

「冥界の管理は大丈夫なのですか？」

「ええ、この通り、平穩そのもの。変わりはないわ」

「その割には“生者”あるべきではないもの”がいるようですが」

「それは私に言ってもしょうがないわ。それに数日くらいなら問題はないでしょう？」

映姫の言葉を幽々子はのりくらりとかわして笑みを崩さない。

感じからしてみても幽々子は映姫に対する対応に慣れているように流

司は思えた。

「貴女という人……いえ、亡霊は……」

「そ・れ・よ・り・も。もうお昼よ、お腹がすいてしまったの。流司、お昼ご飯の準備をお願い。もう、何体かの霊が準備を始めていると思うから。“閻魔様”もいらっしやる？」

「ちょっと!!」

幽々子は映姫に口を開かせないように話を区切り白玉楼へと流司の背を押していく。

慌てたような声を流司は上げるが全く気にしてはいないようであった。

「いえ、私は……」

「こんにやくもあるわよ」

「……………いただきます」

「二名様御案内……!!」

閻魔すらも手玉に取る幽々子に流司が底知れぬ恐怖を覚えたのは仕方のないことである。

頁百四、『転生と記憶』（後書き）

転生に関しては独自ですね。

主人公の設定上、このタイミングでした。

結構重要？

あと、閻魔様はこんやくが好きなのようです。

“倍”という字の成り立ちは単純に偏と旁に分けたものである。偏はそのままだに“人”を意味し、旁はその音から“背”^{ハイ}に繋がる。そのことから“倍反”という言葉もあるように“人に背く”という意味を“倍”は持つようになったのである。

それはともかくとして、現在流司の目の前には“倍”の光景が広がっていた。

この際、“倍”であることは然したる問題ではないのかもしれない。重要であるのは“何”の倍であるかである。

“一”の倍が“二”でしかないように倍にされるものが少なければ、それほど問題ではない。

けれども、倍にされるものが多ければ多いほど“倍”というものは効力を増すことになる。

では流司に広がっているものが“何”の倍であるかといえば、“朝”の倍であった。

朝食の時の倍の量の料理が流司の目の前にはあったのだ。

料理を作り終えた時は流石の流司も作り過ぎたと思っていた。

朝からの人数の変動は“二”。

人数が加算であるのに料理が乗算であるのは明らかに間違えてしまったと流司は考えていた。

「……………」

だが、蓋を開けてみればどうであろうか。

文字通り瞬く間に皿の上の料理は姿を消していく。

これには流司も押し黙ることしかできなかった。

朝食の倍と化した料理の量はもはや宴会を通り越して晩餐会といえるほどである。

それだけの食事の大半、八割近いものがたった一人の腹の中へと消えていつているのだ。

ブラックホールだとか、栄養が一カ所に偏っているとかいう問題では片付けることが難しいだろうことは明白であった。

それを成しているのは語るまでもなく幽々子である。

バキュームのように料理を吸い込んでいく幽々子を見て流司は考える。

亡霊である幽々子は所謂肉体という器を失ってしまっている。

それは他の靈魂も同じであるが、亡霊は人間と同様に触れることもできるのである。

だからといって、確かな実体があるかといえなさそうでもない。

宙に浮かんだり、壁をすり抜けたりすることも比較的容易に行うことができる。

器が無くとも実体がある。

そんな矛盾を孕んだ存在が亡霊であった。

器を持たないものが実体を持つためにはどうすればいいか。

酷く夢想的な考えではあるものの一つに“エネルギー体”というものがある。

エネルギーそのものが物質化するというオカルト的な考えだ。

尤も“亡霊”という時点でオカルトなどというだけ無駄というものではあるだろう。

ともかくとして、“エネルギー体”としてその存在を維持するためには莫大なエネルギーを必要とするので、これに当てはめて考えてみれば幽々子の過剰ともいえるエネルギーの摂取は理にかなっているものであった。

「（まあ、ただの大食らいという可能性もあるだろうが。むしろ、そうであることの方が可能性としては上か）」

考えるだけ徒勞に終わると流司は結局、幽々子の食が太いということとで思考に区切りをつける。

そんな思考の終了と同時に食卓の上の料理も欠片一つ残さずして消える。

「いや、ここまで上手だとは思っていなかったよ。料理は得意なのかい？」

「必要に駆られた結果故さ」

顔を綻ばせて尋ねてくる小町に流司は首を振って答える。

確かに流司の料理の腕は相当なものであったが、得意であるかと尋ねられても流司は素直に頷くことはできなかった。

あくまでも流司の料理の腕は必要に駆られた結果の上達であり、“得意”なのではなく“できる”だけであった。

人によっては腹立たしく感じてしまうようなことであるだろうが、流司の意識が変わることはないであろう。

そこまでの経緯を考えればしょうがないといえるのかもしれない。

「さて、神代さん。貴方はそろそろ帰った方がいいでしょう」

湯のみを置いた映姫が呟く。

不躰な言葉のようにも思えるが、それは流司の身を案じてのことである。

数日やそこらでどうとなるわけではないことは確かであったが、生者である流司が長い間、冥界にいるべきでないことも事実であった。それを映姫は閻魔であったからこそ見逃すわけにはいかなかったのだ。

「そうさせてもらおうよ。思っていたよりも長居してしまったしな」

少し話を聞くだけであったのに流司は一日半もの間、冥界にいたことになる。

まだ訪ねなければならぬ場所が残っている以上は冥界で時間を食われるわけにはいかないだろうことは必然とも言えた。

「それなら、見送りましたでしょうか？」

「いいさ。そこまでしなくても」

立ち上がった流司に追隨するように紫も立ち上がり言う。

「構わないわ。見送るだけだもの。確か次は吸血鬼のところだったかしら？血を吸われないように気をつけることね」

「心に留めておくよ」

苦笑しながら流司は紫に応える。

いくらなんでも一応は客人であるのだから、そんなことにはならな
いだろうという考えてのものと苦笑いであった。

「そう、なら逝ってらっしゃい」

「何だか字が違つよう……はっ？」

ニュアンスの違うだろう紫の言葉に呆れたように流司が答えようとした瞬間、流司の足下の感覚が失われる。

流司が顔を下へと向けて見ればぽっかりと空いたスキマからぎよろつとした瞳が見つめてきていることに流司は気付く。

「だから言つたでしょう。“見送る”だけだつて」

「んなこと分かるかああー！！！」

自由落下を始めた流司には上機嫌に笑う紫の顔が最後の最後まで見えているのであった。

「さて、私はこれで帰ることにしますわ」

流司の落ちていったスキマを閉ざすと紫は優雅に振り返り微笑んだ。

「では、私も……」

それに同調するように映姫もまた立ち上がる。

「なら、あたいはもう少し……」

「貴女はさっさと仕事をしに行きなさいッ！！」

「い、行ってきますッ!!」

映姫の気迫に圧された小町は慌てて立ち上がり駆けだしていく。

「はぁ……サボり癖さえなければ優秀な死神なのですが……」

「偶には息抜きも必要だわ」

「貴女が言つと説得力があるのかないのか私でも分かりませんよ」

「誉め言葉として受け取っておくわ」

仲良く、ではないが紫と映姫は二人並ぶようにして白玉楼をあとにしていく。

「『八雲紫』。一体どういふつもりですか？」

白玉楼から十分に離れたところで映姫が明らかに声色を変えて紫へと声をかける。

「どういふつもりとは？」

「惚けないでもらいましょうか。何故、“彼”を“幻想郷”へ連れてきたというのです？」

鋭い眼光を紫に向けた映姫が強い口調で問う。

「必要だったからよ」

「……嘘ではないようですね」

「嘘など言っていないもの」

「では、言い方を変えましょう。何故、いなくともなんとなくあった
だるうにも関わらず連れてきたのです」

目を細めた映姫は続けざまに問いかける。

「それが“彼”の辿るべき道であるからよ」

「馬鹿げていますね。“彼”は“彼”であって“彼”ではない。そ
れを知らぬ貴女ではないでしょうに」

「だとしても、よ……」

「……いいでしょう。とりあえずのところは。けれども、固執
し過ぎるといつか痛い目を見ることになりませんから、気をつけるこ
とです」

映姫は紫を一瞥すると一人冥界から消え去る。

「固執しているのは私と貴女、一体どちらなのでしょうね。それと
も……」

残された紫は一人碧空に浮かぶ残月を見上げ呟くのだった。

頁百五、『在るべき場所』（後書き）

これにて冥界編終了。

落ちて始まり落ちで終わりました。

そして、意外と意味深な最後でした。

今後に期待でもしていたたければと。

次回からいよいよ紅魔館編です。

スキマから吐き出された流司の視界に移るのはまたしても一面の白であつた。

何もそれは再び遙か上空へと投げ出されたというわけではない。

それは一つに白の濃度が異なる。

そして、もう一つに白が流司の周りに蔓延り包まれてしまつていたので。

「“霧の湖”か……」

そう、流司を包み込んでいたのは“霧”である。真白とまでは言わないものの視界を遮るだけには充分すぎる霧が流司の周囲にはまるで埋め尽くしているかのごとくたちこめていたのであつた。

「まあ、“紅魔館”に直接でないだけマシというものか……」

もはや慣れ。

流司は紫のことを怒るつもりはなかつた。

実際、冥界からここまで距離を一瞬にして移動したことになり、そもそもが怒つただけで紫が態度を改めるなどという甘い幻想を流司は抱いてはいなかつた。

「とはいえ、こつも霧が多いとどちらへ向かえばいいのか分からないな」

眩き周囲を見渡す流司の瞳には相変わらずの白ばかりで、闇雲に進んでも迷つてしまつたろうことは考えるまでもないことであつた。

流司は霧を脱するために上昇を始める。

通常の霧とは異なり日中に発生しやすいという不可思議な“霧の湖

”の霧とはいえども、ある程度の高度まで上昇してしまえば抜け出せることは間違いない。

流司の身体が空へと上がっていくほどに天頂から射し込んでくる日差しが強くなってきたように流司は感じる。

霧の濃度は見るからに薄くなってきたおり、勢い良く霧の中から飛び出した流司の瞳に写り込んだのは、

「あんだ誰よ？」

青いワンピースを着た少女の姿であった。

「あたしはチルノ、げんそうきょーでさいきょーの妖精よ!!!!」

「そうですか……それは凄いですね……」

そう胸を張るチルノの姿をげんなりとした表情で流司は見つめる。

どちらかといえば投げやり、もしくは飽き飽きとした表情の方が正しいかもしれない。

「それで、りゅーじはこのあたしに何の用よ!??」

「だから、何も用はないっての。偶々出会っただけだ」

覚えの悪いチルノに何度となく説明してもこれである。

一教えたそばから一忘れいつてしまうのだから、永遠に二を覚える

ことなどできるはずもなかった。

“馬の耳に念仏”、“チルノに説明”である。

いくら何でもある程度個としての意識を持っている妖精にしてはチルノの物覚えの悪さは酷い。

とはいえそれはチルノに限ったことではなく、妖精の全般にいえることであつた。

妖精のほとんどは人間の幼子のように目先のことしか考えることができない。

それは“死”という概念が基本的に存在していないことが影響しているのだろう。故に妖精に共通する興味に支配された無鉄砲さは仕方のないことであつたのだ。

流司の知る妖精のサニ―らは比較的には理性的であるが、手伝いを流司が上手くさせることができたのは“朔”という目先の目的があつたことが大きい。

しかしながら、数分どころか数秒前の話の内容を忘れてしまうのは物覚えが悪いとかいう以前の問題である。

話を聞いていない、もしくは覚える気がないと言う方が正しいはずであつた。

「分かつた！―さいきよーのあたいを恐れて戦いにきたのね！―」

「違うから……それに恐れていたら一対一で戦いを挑むわけないだろうが」

「いいわ！―返り討ちにしてあげるわ！―」

「聞いてないし……」

その考えを肯定するかのようには流司の言葉に全くの返答を返そうとはしていない。

いつそのこと清々しいまでに我が道を進んでいた。

これが他者を巻き込まないというのであれば、微笑ましくとも流司は思うことができたであろう。

けれども現実はそのようなことはなく、これ以上ないほどに流司のことを巻き込むのであった。

「さあ、いつでもかかってきなさい!!」

「……………」

流司は沈黙を保ちながら、どうしたものかと頭を捻らせる。

ここで戦うことも勝つことも流司にしてみれば容易なことである。

流石に妖精相手に手こずるようなことは既に流司はない。

しかし、戦うことに意味があるかと問われれば一切の意味があるわけもなかった。

時間の浪費を防ぐという意味においても無視をして先を急ぐことが得策であろう。

だが、それをチルノが許すかと言えばそんなことはなく、

「そっちからこないのなら、あたいからいくわよッ!!」

「仕方がないか……………」

流司は溜め息を一つ首を左右に揺らすと飛来してきた弾を簡単に避けていく。

隙間ばかりで逃げ場の無数に存在している弾幕など今の流司にとつては目を瞑つても避けることができる。

弾幕をかい潜っていく流司は隙間を埋めるようにして己の弾幕を作り出す。

それほど技量の高さを感じさせるようなものではなかったが、妖精であるチルノを相手にするには丁度いいといえるであろう。

流司の弾幕はチルノの弾幕の隙間を補いように展開されているが故に退くほかかわす術はなく、既に避けることはできないタイミングであった。

妖精の中では各段に強い力を有しているチルノであってもどうしようもない弾幕。

ところが、

ピシッ。

「なっ!?!」

流司は己の目を疑った。
パリン。

一瞬にしてチルノに命中するだろう弾幕が凍てつき砕け散ったからである。

「あたいの能力は『冷気を操る程度の能力』よ!そんな弾幕効かないわ!」

「っなん、ありがよ!?!」

「待ちなさい!」

流司はたまらず身を翻し霧の中へと隠れる。

弾幕による決闘はその弾幕の美しさと避ける軽やかさを競うものである。

弾幕を凍らせるなど本来であれば反則もいいところであり、流司が思わず逃げ出してしまったのも当然であった。

「(っつて、ここは拙い!!)」

霧の中へと飛び込んだ流司であったが、今度は慌てて霧の中から飛び出す。

霧の中の危険性に気付いたからである。

霧というものは無数の細かい水滴の集まりである。

もし、チルノの能力が本当に『冷気を操る程度の能力』であるのなら、霧の中ほど危険な場所は現状有り得ないだろう。

「どこ行つたの出てきなさい!」

幸運にもチルノがそのことに気が付くことはなく、流司が霧の中から出た後も流司の姿を捜し霧の中を彷徨っているようであった。

「やて、どじしよ ……」

煌ッ! ! !

ぴちゅーん。

「……………はい?」

突如として、極光が霧を薙ぎ払った。

それも霧の中を惑っていたであろうチルノごとである。

「ふう、これで見晴らしが良くなったぜ」

「魔理沙？」

「おお、流司。奇遇だぜ」

そこにはミニ八卦炉を構え幕に乗った“普通の魔法使い”の姿があるのだった。

頁百六、『霧』（後書き）

IFな一幕

仮定：5

『もし、チルノが？でなく？であったら………』

「フツ、愚かね」

己の弾幕を凍らされたことに動揺した流司が慌てて霧の中へと飛び込んで行くのを見たチルノが笑う。

チルノの能力は『冷気を操る程度の能力』。

水を凍てつかせることは十八番の中の十八番であった。

であるのならば、流司のとった霧の中へ身を隠すという行動は愚行としか言いようのないものであった。

チルノの力は妖精の中では抜けて高い。

その力は下級の妖怪に匹敵するのだから、もはや妖精という枠組みからは外れているであろう。

一部とはいえ、湖を昼寝ができるほどにまでチルノは凍らせるだけの冷気を操作することができる。
その力を持つてすれば霧を氷に変えることなど雑作もないことである。

「今頃、気付いても遅い……」

追撃を一切仕掛けてこないチルノのことを不審に思った流司が自らのいる場所の危険性に気がつく。だが、もう既に全ては遅かった。

チルノは一枚のスペルカードを取り出して掲げる。

牢獄 『アイス・クレイドル
凍霧氷官』

その宣言と同時に空気が凍り付く。日の光を遮っていた霧は光を乱反射する氷と化している。

その中にある一際大きな氷像。

それをチルノは一瞥し、

「凍としさに抱かれ眠るがいいよ」

蒼穹の空へと飛び立つのだった。

的な展開があつたかもしれない……

久しぶりのIFな一幕でした。

? (馬鹿)ではなく、? (厨二)なチルノ。

勝てる気がしねえ (笑)

本編ではマスパでびちゅん。

サブタイ“霧”はこっちの方でしたね。
まあ、湖もですけど……

頁百七、『魔理沙流、紅魔館への訪問法』

「魔理沙、どうしてこんなところに？」

霧がすっかりと晴れた湖の上で流司は三二八卦炉をしまい近付いてきた魔理沙に尋ねる。

後少しでも霧から抜け出すタイミング遅い、または魔理沙が魔法を放つタイミングが早ければ跡形もなく消え去るものの中に自分が含まれていただけあって流司の背筋には冷や汗が浮かんでいた。

「それはこっちのセリフだけ。流司ことこんな何も無いところで何をしていたんだ？」

「何も無くしたのはお前なんだがな」

「？」

痕跡を一切残さずして消え去った氷精に流司は若干の同情を覚えるが、結局は“どうせ妖精なのだから全て忘れて復活するだろう”という考えに至りすぐに同情心など消え失せる。

そもそも、いきなり襲いかかってきた相手に同情をするかといわれれば微妙なところであったというしかない。

「気にするな。俺は“紅魔館”へと向かうところだったんだよ」

湖の畔に見ることのできる禍々しいほどに紅く染まっている大きな洋館を指差して流司は魔理沙に説明する。

「ん？流司もか？」

「“も”ってことは魔理沙も……？」

「本を借りに行くんだぜ」

魔理沙は胸を張るように流司に言う。

だが、流司は魔理沙の“借りる”という言葉に眉を潜めてしまう。

「それは“奪う”の間違いではないのか？」

「私が死ぬまで借りるだけだぜ」

それを“奪う”や“盗む”というのだというと流司は心の中で呟く。声に出さなかったのは言ったところで無駄であると流司が理解していたからに他ならない。

何を隠そう流司もまた魔理沙に“貸した”被害者の一人であったからだ。

元来、魔法使いというものは蒐集癖が強いものが多い。

それが魔法使いというものであるのかその気があるものが魔法使いとしての才能を有しているのかは流司は分からない。

けれども、アリスの魔法具や人形、紅魔館の魔法使いの本と魔法を使う者は何か特定のを蒐集したがる傾向があるのは事実であった。

魔理沙はその中でも特に蒐集癖が強く、集めるものもまた“自分が興味を持ったもの”という幅広いものだったのだ。

更には“借りる”という建て前で無理矢理に強奪していくのだから始末に置けない。

しかし、魔理沙の言い分が分からない訳でもない。

魔理沙は“種族”としての魔法使いではなく、“魔法を使役する者”としての魔法使いであった。その為、現時点での寿命はただの人間と変わらない。

一方、“種族”としての魔法使いであれば人間よりも充分過ぎるほど長く生きることが出来る。

そればかりか、食事や睡眠すらも必要とはしない。

よって、魔理沙がこのまま“魔法を使役する者”としての魔法使いとして生涯を終えたのであれば、“死ぬまで借りる”というのも幻想郷に住まう大半の存在にとっては大した期間にはならないのである。

無論、それが無理矢理奪い去っていてもよいということにはならないが。

「まあいい。目的地が同じなら一緒に行くか？」

「分かった。案内してあげるぜ」

「案内も何も一直線じゃないか……」

晴れ渡る視界良好の空、流司と魔理沙は並んで一路紅の屋敷を目指すのだった。

「紅いな……」

「紅いぜ」

間近で眺める紅魔館は遠目で見るよりも随分と紅いように流司には思えた。

“紅魔館”と言うだけあり屋敷全体が赤く染まっていることは当然として、屋敷の前まで赤くなっている。

目が狂ってしまいそうな“紅”に流司はしばしば瞬きを繰り返す。その心はよくこのような屋敷で暮らしていけるといふ感心で一杯であった。

窓が少ないのはそこに住む主の為なのか、紅魔館の大きさにはそぐわないほどに窓は見られない。

夜の十二時のみ鳴るといふ時計台の鐘の音を流司は耳にしたことはなかったが、不気味に鳴り響くだろうことは容易に想像に至ることであろう。

「ところで」

「何だ？」

「あそこで鼻提灯を浮かべているのは門番、なのか？」

「……zzz」

流司が指差す方向には程良い木陰となり、暑すぎない麗らかな陽気を一身に楽しみスヤスヤと寝息を立てている人影があった。

「そうだぜ」

「いいのか？門番、なのだろう？」

即答する魔理沙に流司は続けて尋ねるが、どうしても“門番”という言葉が言い澱んでしまっている。

「気にするだけ無駄だぜ。大抵は昼寝しているからな」

「それは門番としていかなものかと……」

確かに流司が言わずとも門番が寝ている状況というのは実によろしくはない。

けれども、わざわざ“紅魔館”を襲撃するようなもの好きは現在の幻想郷にはおらず、門番を意味があるのかは微妙なところであった。

言ってしまうえば、門番の仕事はこれ以上ないほどに暇であったのだ。そんな環境下で心地の良い日差しを受けてしまえば昼寝シエスタと洒落込んでしまうのも仕方がないことなのかもしれないであろう。

「そ、そうか。だが、気持ち良さそうに眠っているところ悪いけれど起きてもらわないとな」

流司は門を開けてもらう為にも門番に起きてもらわないといけないと気持ち良さそうに寝息を立てる門番に近付こうとする。

「ん、その必要はないぜ」

しかし、そんな流司のことを制止するように魔理沙が呟く。

「どづいづことだ？」

「まあ、着いてくればいい」

首を傾げ尋ねる流司を置いて魔理沙は紅魔館の正門を後にして、柵沿いに紅魔館の外壁を歩いていく。迷いのない魔理沙の足取りに裏口でもあるのかと思った流司は黙ってその後を歩いて行く。

「よし、ここだぜ」

「？」

ところが魔理沙が足を止めたのは裏口などではなく、柵越しに紅魔館の側面が見える場所であった。

「ちょっと待ってな」

魔理沙は担いでいた箒に跨り飛び上がる。

そのまま柵を飛び越えるのかと思えば、柵よりも少し高い場所で止まる。

そして、

「マスタースパーク!!!」

燦ッ!!!

轟ッ!!!

眩い光が流司の目を眩ませたかと思えば、次の瞬間には轟音が鳴り響き、光が収まったときには紅魔館には見事なまでの風穴が空いているのだった。

「できたできた。先に行ってるぜ、流司」

魔理沙はいい仕事をしたとでもいうように汗を拭う振りをして、ぽつかりと空いた穴から紅魔館の内部へと侵入する。

「いや、もうこれは“強盗”だろ……」

そう呟いた流司の言葉が魔理沙の耳に届くことはないのだった。

頁百七、『魔理沙流、紅魔館への訪問法』（後書き）

よい子は紅魔館を訪ねるときは正門を使いましょう。

開通先は勿論あの場所です。

まともな訪ね方をしていない主人公でした。

頁百八、『そして来訪者はいなくなつた』

「おお……」

魔理沙の空けた風穴から紅魔館への侵入もとい来訪を果たした流司は感嘆の声を漏らす。

視界を埋め尽くすかのごとく聳え積み重なる本の山。

これだけの数の本など“外”の図書館でさえそうそうと集めることはできないであろうと流司は思った。

その数は個人で保有するにはあまりにも多く、普通であれば一生をかけたとしても読み切ることはできないほどだ。

これらの本を集めたのが“魔法使い”でなければ、宝の持ち腐れと言えたはずである。

余すところなく並べられている本の数々のほとんどは流司にはその価値を正確に把握するには至らないものであった。

しかし、大変貴重であろうものが幾つも含まれていることは流司にも伺い知ることができ、消失するようないふことがあれば言葉では言い表すことができない損害を被ることになるだろうことは容易く理解できることであった。

で、あると言つのに、

「よう、パチュリー。今日は本を借りに来たぜ」

一切の躊躇いを持たず、この部屋へと風穴を空けた魔法使いは何食わぬ顔で借り受ける本を物色しようとする。

先の極光でどれだけの被害が生じているかなど頭の片隅にもない図々しさである。

こちらにもまたある意味で感嘆に値するだろうと流司は思う。

「“は”ではなく“も”でしょうか？それに貴女のは“借りる”ではなく“奪う”。私が許可を出したことはただの一度さえもないもの」

魔理沙の言葉に答えるようにして浮かび上がったのはネグリジエのようにも見える服を羽織っている少女であった。

少女自身が小柄なのか、小脇に抱えている本が大きいのか少女と本の大きさの対比が酷くアンバランスのように流司は感じた。

彼女がこの本の山を築き上げた張本人であることはわざわざ確認するまでもないことで、流司は遠目であったがまじまじと少女のことを観察するように見つめる。

何分遠目であることから、流司に分かったのはその輪郭とどこことなく疲れと苛立たしさを滲ませている声だけであった。

発している雰囲気は魔理沙のような行動派というよりもアリスのような研究肌といった感じである。

そもそも、それこそが“魔法使い”としてはメジャーな在り方であり、魔理沙のようなタイプの方が珍しいといえる。

「私が死んだときには返すって。魔法使いなのだからケチケチするなよ」

「確かに“人間”が死ぬまで待つくらい大したことではないわ。でもね、折角集めたものを持って行かれるのは癪なの」

それはそうだと流司は頷く。

自分が集めたものを勝ってに持って行かれるのだから腹立たしく思うのは当然である。それも蒐集癖があることの多い魔法使いから奪って行くのであるから、魔理沙のたちの悪さが浮き彫りになるであらう。

「それならいつものように無理矢理借りて行くだけだぜ」

「残念ね、今日は調子がいいの。そんなことはさせないわ。早急にお引き取り願うわね。咲夜が言うには客が来るみたいだし、大穴が空いた屋敷を見せるなんて一応レミイの沽券に関わるから早く修復しなければならぬの」

「……………」

流石の魔法使いの少女もその客人が既に紅魔館を訪れているばかりか、修復しなければならぬといった大穴からの来訪を遂げていることには気付かなかったようである。

どうしたものかと流司は言葉を失うも、臨戦態勢が整い一触即発といった二人の間に割り込むことができるはずもなく、こそこそその場を逃れるように本棚の陰へとその身を隠すのであった。

流司が近くにあった本棚の陰へと逃げ延びた瞬間、

鳴ッ！！

本棚越しに流司の耳に届いたのは戦闘の始まりを告げる音であった。

「“図書館”はただで本を貸してくれる場所なんだろ？」

「返却期限を守らない相手に貸す必要があると思う？」

会話の合間合間に流司に届く爆発音。

迅速に直さなくてはいけないはずの被害は拡大する一方であり、守るべきはずの本は戦火に晒されている。

これでは本末転倒ではないかと流司は思うが、それは思い過ごしではないようであった。

流司の前に吹き飛ばされてくる本は壁すらも塵と化してしまう威力を誇る弾幕の直撃を受けているにも関わらず、まったくの傷が見られなかった。

それは本一つ一つに状態保持の術式がかけられているからである。更には魔導書のような本自体が力を有しているようなものも含まれているのか、自動的に弾幕を避け反撃している本まである。

見るだけであれば、そのファンタジックな光景に心が躍ってしまうだろう。

けれども、現状として部屋の中を飛び交う光の弾の下にいる流司にとってはたまったものではなかった。

「どこか逃げることのできる場所は……？」

流司の口から漏れだしたのは正真正銘の懇願の思いであった。

流司が避けきれないほどに激しい戦いが繰り広げられているという訳ではなかったが、好き好んで関わりたいと流司が思っているはずもない。

戦場を匍匐前進する兵士のような緩やかな動きで流司はこの場から逃げ出すために足を動かす。

やっこの思いで辿り着いた重厚な扉を開いて恐る恐る図書館を流司は後にする。

「さて、一先ずは階段を探るか……」

魔理沙が空けた風穴はやや下方向に空けられていたことから流司は

この場所が恐らく地下であるだろうと考えていた。それ故に一度地上を指さそうと階段を探し歩き始める。

「ないな……」

その外観とは裏腹にやけに広々とした紅魔館の内部を流司は練り歩く。

「ここか？」

一向に見つからないことに流司は階段が扉などで隠されているのかと、偶々目に入った扉を開ける。

扉の先は暗く内部を把握するには些か無理があるようであった。

「違う、か……」

目を凝らしても流司の視界に映るのは闇のみであったが、声の反響の仕方からそこがただの部屋であることを流司は悟った。流司はそのまま部屋に背を向けて歩き出す。

その時、

「誰？」

「ん？」

か細い声に振り返った流司が目にしたのは闇に映える二つの紅であった。

頁百八、『そして来訪者はいなくなった』（後書き）

図書館は華麗にスルー。そして、華麗に遭遇。

魔理沙が人間として一生を終えれば、死ぬまで借りても幻想郷の住人の大半は大丈夫な気がする。

一難去ってまた一難？

小火から逃げて大火事に突っ込んだ主人公でした。

頁百九、『白昼の吸血鬼』

「誰？」

流司にはこちらを見据えてくる二つの紅が眼光であるだろうことはすぐに理解することができた。闇に浮かぶ紅色の瞳は漆黒のドレスに施された紅玉ルビーのようでもある。

「貴方は誰？」

再び繰り返される正体を問う声。

それは一度目と異なり、“誰が入ってきた”ということに対してではなく、“誰であるのか”ということに対してのものであった。

流司のもとに届くのは音ばかりで声の主の姿などは暗闇の為に全く見えることはなかった。

「（幼子、か……？）」

それでも流司は届く声の高さからこの闇の先にいるのは幼子であると当たりをつける。

金糸雀とはまでは言えないも、その透き通った声には幼子特有の純真さを流司は感じていた。

「貴方は誰なの？」

「っああ、俺は『神代流司』。一応、“客”なんだけれど話は聞いていないか？」

三度目の問いでようやく流司は己の名を語る。

不本意とはいえあのような来訪の仕方をしておいて、“客”と自分のことを称するのにははばかれざるを得なかったがそれ以外の名乗り方を即座に思い付くことがなかったためのことである。

「お客様……？」

「取り敢えずは、な」

流司の言葉に疑問をまとった声に流司は苦笑しつつ答える。

“取り敢えず”としかいえない自分の立場に一瞬悲しさを流司は感じてしまうけれども、今更仕方のないことであった。

「私は聞いてない……」

「そうか？図書館の魔法使いは知っていたみたいなんだが」

知らないという声に流司は疑問を感じる。

流司の存在に気が付くことはなかったとはいえ、図書館にいた魔法使いは流司が訪れることを知っていた。

それだけに声の主が知らないということは不自然に流司には感じられたのだ。

「今日はまだ“この部屋”から出てないから」

「ここ、から……？」

その言葉に流司の疑問は更に深まる。

ようやく流司の目が慣れ始めてくるほどまでにこの部屋は昏い。

とてもではないが、快適な生活を送ることができる空間だとは流司

には思えなかった。

尤もそれは“人間”としての感覚故のことであり、流司はすっかり相手が妖怪である可能性を失念してしまっていた。

相手の姿が見えず、幼子の声であるということは無意識下に流司の警戒心を引き下げてしまっていたのだ。

相手の姿が見えないだけであれば警戒心は逆に引き上がっていたことだろう。

しかし、そこに“幼子の声”というファクターが加わることで流司の意識に相手が“子供”であるという先入観が生じてしまっていたのだ。

流司が“人間”である以上はそれはどうしようもないことであった。人間の脳には“不明”や“未知”に対して自信の理解できうる範囲でそれを補完しようという働きが備わっている。故に分からないことに関して分かる範囲での特定、姿が見えないということに対して幼子のような声であるという条件から相手が子供であるという結果を導き出してしまっていた。

「そう、今日はまだ……」

ある意味、流司の無意識下の仮定は間違っではいなかった。

闇から漏れ出すようにして流司の視界に移ったのは幼さの影を消し切れていない少女の姿であったからだ。

金系の髪に緋色の瞳。

そして、背に生える不可思議な羽。

羽根と表現したが、流司にはそれが本当に羽であるのかは判断が付かなかった。

その羽には毛や皮といったものが全く見られない。代わりにあるのは一見すれば木の枝のようにしか見えなほど細い翼に七色の菱形の宝石のようなものであった。まるでそれは宝石が生っている木のようにでもあり、到底“空を飛ぶ”ための羽には考えられないであろう。

「そうか……」

“何故”などという疑問を流司が口にすることはない。少女が人間ではないということは、その容姿を見ただけで簡単に理解できる。

人間でなければ、このような場所も逆に快適ともいえる可能性はあった。

その上、ここは“吸血鬼”が主である“紅魔館”である。日光が差し込まないように暗闇の保たれている部屋の一つや二つあってもおかしくはないと言えた。

「（吸血鬼、……？）」

脳裏浮かんだその言葉に流司は薄つらと冷や汗が背筋に浮かんでくる。

同時にあつては欲しくない推測も浮かび上がる。

「な、名前を訊いてもいいか……？」

生唾を飲み込み怖々といった声色で流司は口を開いた。

「フラン、『フランドール・スカーレット』」

「ッー!!」

声を上げることはなかったものの流司の表情が歪む。
嫌な予感というものは総じて当たる。

流司の脳裏にはしばらく前の霊夢との会話が思い浮かんでいた。

…

…

…

「そう、「紅魔館」に……」

「いつになるかは分からないが招待を受けたよ。やっぱり拙いか?」

どことなく眉間に力がこもっている霊夢に流司は尋ねる。

いくら招待を受けたからといって“紅魔館”に単身で訪れることが危険であるように霊夢の表情から考えていたからである。

「そうでもないわ。“招待”を受けたからには流司は“客”よ。性格からいって襲いかかる理由なんてないわ。そもそもが、流司を襲うというリスクが高いことを理解しているはずよ。今の幻想郷で流司を襲うのは何も知らない馬鹿くらいね」

力が強く賢い者ほど流司という存在が何を意味しているのかよく理解していたので、流司を襲うような真似をすることはなくなってい

た。逆に力の弱い者からであれば、勝てなくとも逃げ切ることを流司はできるようになっていたので、よっぽどのがない限りは流司が命を危険に晒さねばならない状況というものは生じることはない。

「なら、なんでそんなに渋い顔をしているんだ？何も問題はないの
だろう？」

「一人いるのよ。“紅魔館”には。馬鹿というか気が触れている、
いえ、情緒が不安定というべきかしらね」

「つまり、行くべきではないと？」

「……まあ、大丈夫よ、きっと。宝くじに当たるようなものだしね」

……

……

…

「宝くじに当たったよ、霊夢……」

「ねえ、貴女は私と遊んでくれる？」

見事当選した流司の前には徐々に狂気を孕み始めているフランドールが笑みを浮かべているのであった。

頁百九、『白昼の吸血鬼』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著

『白昼の悪魔』より

前回は勿論、『そして誰もいなくなった』からの引用です。

次回はいよいよ……

サブタイトルのシリーズはフラン戦の終了まで続きます。

頁百十、『死が最後にやってくるのか？』

流司が“遊ぶ”という言葉にこれほどにまで恐怖するしたのは初めてのことであった。

そこには欠片も無邪気さを感じさせてはいないようであった。

「（逆か、“無邪気”でしかないのか）」

無邪気であることは至上の残酷さを有していることでもあった。

幼少時に蟻を子供が見つけると多くが踏みつけようと躍起になり、蟻の巣を見つけようものなら木の枝でほじくり返したり、果てには水を流し込む光景すら見受けられることがある。

そんな行為を楽しむ子供の姿というものは純粹無垢な可愛らしいものである。

しかし、実際に行っていることは笑顔で命を奪り取るという残酷極まりない行動である。

それを子供は理解してはいる。理解してはいないからこそ、笑顔のままにそのような行動を起こすことができるのだ。

流司は底冷えしてしまいそうなフランドールの“遊ぶ”という言葉に不気味な子供らしさを感じたのだった。

「ねえ、貴方は壊れないの？」

奇しくも流司が感じ取ったようにフランドールの行動というものは子供と似たようなものであった。

ただ、人間の子供にとっての“蟻”が“人間”。

否、全ての“命”にすり替わるだけのことである。

ここでの“命”は生命の源という意味ではなく“存在”という意味である。

フランドールにとっては全ての“命”が平等であるのだ。

虫も鳥も人間も妖怪もその命は等価であった。

字面だけを見れば高尚な考えのようにも思えるだろうがその実は全くの逆である。

フランドールにとってはどの“命”も取るに足りないものであるのだ。

それはフランドールの有している能力が大きく影響している。

『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。姉であるレミリア同様に妖怪の中でも種として最上位に属する吸血鬼に相応しいといえる破格の能力であろう。

この世の存在は全て“目”と呼ばれるものを持っている。

これは所謂“急所”、言い換えれば“死”そのものであり、この場所を攻撃されると必ず死んでしまう。

フランドールの能力ではこの“目”を目視できるだけでなく、自分の手の内まで持つてくることができ、“目”を握りしめることのできるようなものであっても破壊することができるのである。

それ故にフランドールにとっては“目”が見える時点でそれは破壊することができるものであり、この世の全てのものに“目”がある以上は等しく壊すことが可能なものでしかないのだった。

「ああ、壊れないぞ」

勿論、嘘である。

人間である流司が“目”を持っていないはずがなく、自信では確認することはできないもののそれは确实であった。

であるのに流司がそのようなことを述べたのには一つの思惑があったことであつた。

「本当！？なら、私と遊んでくれるよね！！？」

それはフランドールの興味を失わせないことであつた。

例え、フランドールには流司の“目”が見えているのだとしても、

“壊れない”と宣言をしておけばフランドールは流司に対して興味を抱かざるを得ない。

一見してみれば興味を失つてもらつた方が良いように思えるだろう。確かに興味を失つた結果、流司が放つて置かれるなら、それが一番である。

けれども、興味を失つた結果として“目”を潰される可能性も少なくなはない。

その点、興味を抱いている限りは流司が殺されるようなことはないのだ。

流司の性格上、他の選択肢がある限りはハイリスクハイリターンである前者の選択をすることはない。

よつて、流司はあえてのはつたりを口にしたのであつた。

その目論見が幸をそつしたのかフランドールの目は見るからに輝く。無事にフランドールは“流司”という存在に興味を抱いていた。

「いいぞ。ただし、“遊び方”は俺が決めてもいいか？」

「何をするの？」

「これだよ」

流司は呟き、懐から五枚のスペルカードを取り出して提示する。すなわち、スペルカードルールによる決闘を提案しているのであった。

「ルールは分かるよな？」

「うん。でも、いいの？私と弾幕ごっこしてくれる人は滅多にいないのに……」

「構わないさ」

正確なところをいえば、“スペルカードルール”での決闘以外では流司の命はないようなものであった。

“スペルカードルール”での決闘であれば、少なくとも勝敗が決してしまえばその時点で流司の命は保証されるので、決闘から生き残ってしまえば流司の目的は達成されるのである。

しかしながら、スペルカードの枚数が少なければ、フランドールが満足することがなく再戦を申し込む可能性がある。

その為、流司は一度の決闘でフランドールを満足させつつ、生き残らなければならぬのだ。

厳しい条件のように思え、実際厳しいものがある。

だが、人間と吸血鬼ともポテンシャルの差を考えた場合、“スペルカードルール”での決闘以外では喩え“遊び”であっても命に保証は全くない。

流司が取り得ることのできる選択肢の中で最も生存率が高いものこ

そ“スperlカードルール”での決闘であった。

「（後はこの騒ぎに気付いてくれることを祈るしかないか）」

流司が弾幕による対決を選んだ理由はもう一つある。

それはどうしても騒ぎの大きくなる弾幕同士の対決にすることで、他の人に気付いてもらう可能性を高める為でもあった。

気付いてさえもらえばその時点でもまた流司は助かることができるであろうからだ。

「それじゃあ、始めようか」

流司の呟きを合図に生存を目指す命綱のない流司の綱渡りが始まったのだった。

頁百十、『死が最後にやってくるのか?』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著

『死が最後やってくる』
より

フランドールの云々のところは微妙に独自が混ざっています。
説明回っぽいです。

本当は決闘まで入る予定だったんだけどなあ……

頁百十一、『七つの光』

「なら、私からいくね」

禁弾『スターボウブレイク』

空気が弾けると同時に七色の弾幕が宙を占めるように展開される。

流司は瞬時に状況を判断。

七色の光に臍気に照らし出された部屋から飛び出し、戦場を廊下へと変える。

紅魔館の廊下は必要以上に広い。

全ての通路がそうであるかは流司も知らぬところであったが、少なくとも流司の飛び出した廊下は侵入者などの迎撃のためであるのか、通りと呼んでもおかしくはないほどに広々としていた。

弾幕を避けなければならないというのであれば、狭い空間よりも広い空間である方が避けやすいのは自明の理である。

勿論、あまりに広すぎる空間には制限がかかってしまうも、広すぎるとは言えども廊下程度の広さであれば支障はなかった。

故に部屋の中よりも遥かに広い廊下であっても、宙は色とりどりの弾で支配されていた。

“starbow”とは星が作り出す虹のことである。理論は極めて単純であり、亜光速で移動する物体から星を眺めた場合、光のドップラー効果が生じ波長のズレで虹のように見えるというものだ。

移動している物体から見えるということから星虹は移動する物体の同心円上に広がっていくのである。

“break”、即ち“崩壊”であるが、降り注ぐ無数のこと七色の弾は虹が砕け散ったようにも思えるだろう。

フランドールがそれを意図しているのかは流司には知る術はない。だが、フランドールが意識していることは確かであった。こと、“スペルカード”とはそういうものであるのだから。

虹の欠片の間を駆け抜ける。

時折、破片は流司の身を掠め傷つけるが差したるダメージを与えるには至っていない。

それは流司が無作為に飛来しているように思える弾の軌道を読み解き最低限の動きをもってかわしているからであった。

流司にはこのような弾幕を避けようと大きな動きをすることが悪手であることを今までの経験から理解していた。

大きく動くということはそれだけ動きの幅が生じてしまうことであり、結果として多くの弾に身を晒していることになるのである。

故に流司が行うのは最小限の動きのみ。

その身を弾が掠めようとも動じることはなく、直撃をする弾だけを避けていく。

右へ左へ、前へ後ろへ。時には上へ下へと様々な動きを駆使して流司は宙を翔る。

砂時計が時を刻んでいくような緊張感の中、ようやくにしてその瞬間は訪れる

break!!

夕立が突如としてなりを納めるのと同じく光雨は晴れる。ただし、晴れ渡ったのはフランドールの顔もであった。

「凄い！！そんなに簡単に避けられるだ！！」

「簡単つて、これでも必死だったのに……」

流司は呟きながらもスペルカードを取り出して宣言。

反符『プリズンアーク』

宣言と同時に流司から伸びる一筋の光。

けれども、フランドールのことを貫かんと突き進むそれは流司とフランドールのほぼ中間の地点に達したところで屈折を繰り返す。

注視して見れば、円上の膜のようなものが流司の放った光を捕らえていることが分かる。

屈折を繰り返しながら光はその数を一から七、その色を白から七色へと変化させていく。

膜に閉じこめられたように屈折を繰り返すようはまるで虹が閉じこめられた牢獄から逃れようと乱れもがいているようである。

パンツ！！

風船が破裂したような炸裂音が響き渡ると共に牢獄から解き放たれた光は虹の槍となってフランドールへと殺到する。

七本にも増えた光線はかわすには少々手間となる数ではある。

だが、その軌道が直線的であることには変わりがなく、避けること

自体は容易いものであった。

フランドールはその言動には似つかわしくない冷静さで光の軌道を読むと光を掠めることすらない悠然とした動きで避けていく。易々と避けられていく己のスペルカードに流司は焦りを表しているかと思えばそうではなかった。

光線というものは流司にとっては確かに“転逆”することが簡単であるものではあり、その為に流司は光線状の弾幕を多用していた。それだけに流司は誰よりも光線状の弾の弱点に精通しているのである。

光線状の弾幕で相手を追い込む方法は主に二種類であった。

一つはその数自体を増やし動くことができなくするというものである。

もう一つは光線の太さを変えることで避け辛くするというものだ。

前者であれば永琳に、後者であれば魔理沙に流司はその例とも呼べる弾幕を見せてもらっていた。だけれども流司には永琳のような正確無比に計算しつくされた弾幕を作り出すだけの技量はなく、魔理沙のような火力にものをい寄せたような弾幕を作り上げるだけの力もなかった。

故に流司が選んだのは第三の選択。

計算して数を増やすこともできず、火力を引き上げることもできない。

そこで流司がとったのは“繰り返す”ことであった。

「ッ!？」

フランドールが一瞬息を飲んだのを流司は見逃さずほくそ笑む。

牢獄から虹は逃げ出すことはできない。

フランドールの背後で反射した光線は再びフランドールに襲いかかる。

フランドールが前方へと回避をしようと思えばそこには流司の放った第二波が迫って来ている。

屈折を繰り返すことで軌道が乱雑に変える光線は放った本人である流司さえも巻き込むように飛び交う。

けれども、流司はその場から一步も動くことはない。

それは己の身へと跳ね返ってきた弾をも反射しているからであった。この弾幕の真骨頂は宣言と同時に三つの流司の弾を反射させる結界を作り出していることであつた。

一つは流司の放った弾を屈折させるもの。

一つは相手が避けた弾を反射させるもの。

一つは自分に跳ね返ったものを更に反射させるもの。

巨大な円の中に二つの小型の円を描くように結界を作り出すことで流司は一步も動くことはなくあらゆる角度から相手を襲う弾幕を作り上げているのであつた。

「……まずは一回」

乱雑な軌道で襲いかかる光線に遂にフランドールは被弾する。

不敵な笑みを浮かべる流司には“負ける”などという考えは全く感じられないのだった。

神代流司。

スペルカード

残り四枚。

ライフ 残り三。

フランドール・スカーレット。
スペルカード 残り四枚。
ライフ 残り二。

頁百十一、『七つの光』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『七つの時計』

より。

本気を出した主人公。

百話以上かかってようやく逃げ腰ではない気がします。

そういうわけで“スペルカードルール”での決闘です。

感覚的には花映塚みたいな感じで互いにライフ、被弾回数があつて、スペルカードの枚数が決められているってな感じで。

スペルカードを使つての戦闘を書く作品は多く見るけど、スペルカード“ルール”での決闘を書いている作品はあまり見ない気がする。

ってなわけで初の弾幕勝負の始まりでした。

つか、紅魔館編も長くなりそうだ……

さっさと書いた方がいいのだろうか？

光線の一本を受けたフランドールはじつとしたまま動くことはなかった。

それは痛みやダメージがどうこうというものではなく、単純に当たってしまったことに驚いていたからであった。

実際に目立って傷のようなものは見られていない。

元々の弾幕の威力がそこまで高いものではないことに加えて、吸血鬼の身体能力を鑑みれば、流司の弾幕の直撃によるダメージなどはゴムボールがぶつかつた程度でしかないからだ。

勿論、それで一切の問題はなかった。

あくまでもこれは殺し合いではなく、ルールのある決闘、遊びなのである。

だからこそ、天と地ほどのポテンシャルの差が流司とフランドールの間にはありながらも流司はフランドールに先手を与えることができていたのだ。

「続けていかせてもらおう」

戦いにおいて流れというものは非常に重要な意味を持っている。

故に流司はフランドールに先手を与えることができた流れを断ち切らずに攻めの姿勢を崩さなかった。

確かにこのまま行けば後二度フランドールを被弾させるだけで勝敗を決することができるので、流司がこの機を見逃すはずもないのであった。

宣言の終了したスペルカードをしまい流司は新たなスペルカードを取り出した。

逆符『逆巻く水の大騒音』

流司のことを見据えるフランドールには流司の宣言したスペルカードの効果が表れているのか分からない。

それもそのはずで、スペルカードの効果は既に生じているもそれはフランドールにとっては背後からのことであつたのだ。

流石に先のスペルカードのこともあり、背後からの弾にすぐさまフランドールは気付く。

しかし、正面にいる流司から目を放すこともできない以上は後ろ向きで避け続けるという困難な避け方をフランドールは強いられることとなつた。

それでも背後から押し寄せる球状の光の群れに屈することはなくかわしていく。

されども、スペルカードというものがこの程度であるはずもない。フランドールが避けていった光の群れは流司の眼前まで迫つたところでその軌道を変え再びフランドールへと迫っていく。足並みを揃えるように一列に並んだ弾は打ち寄せる波のようでもあつた。

“海嘯”と呼ばれる現象がある。

満月と新月時の干満の差の大きさから打ち寄せる波がそのまま河川を逆流するという現象である。

その規模は五メートルを超える波の垂直壁を作り出し、凄まじい騒音を周囲に撒き散らしながら川を遡る。

そのため、ある地域ではこの現象のことを“大騒音”とさえ称するほどであつた。

フランドールに再び迫っている弾の隊列はまさに海嘯そのものであり、フランドールへと襲いかかる速度も背後から無秩序に押し寄せられている時よりも格段の差があるのであった。それでも、スペルカードである以上はギリギリ避けることができる程度の密度を保っている。

壁のように迫る光の波の一部にはかい潜ることができるよう小さな穴があるのだ。故に、

break!!

フランドールが無事にスペルカードを攻略するもの仕方のないことであった。

流司は一瞬悔しげな表情を浮かべるもすぐに表情を引き締める。スペルカードを攻略してしまった以上、次は己が攻略しなければならぬ番であるからだ。

944

禁忌『恋の迷路』

流司に対しての意図返しとでもいうのか、フランドールの作り出した弾幕は避け方を強制させるタイプのものではなかった。フランドールから四方に放たれる弾を避けるために流司はひたすらにフランドールの周囲を回転するように移動し続ける。

弾速自体はそれほど速いものではなく、流司にも十分に対処が可能なほどである。

しかしながら、回避するための動きには全くの余裕はない。

この弾幕もまた“避けることのできる”ものではあったが、回避運動に少しでも精細さを欠けることがあれば、その瞬間に弾幕へと飲み込まれてしまうだろうことは明白な事実であった。

下広がりになっていくこのスペルカードの構成から流司にはフランドールの周囲を回ることなく、若干密度の薄くなっている下方で避けることができる可能性も示唆していた。

だが、それは回転する以上に繊細さを必要としており、流司自身避けることができるという明確な自信はなくリスクが高いものであったが故にその選択をすることはないのであった。

無論、互いに許されている被弾回数は三回までであったので、リスクを覚悟に早期の決着を目指すという方法も決して悪手というわけではないだろう。

それでも、流司が被弾するリスクを避けたのには一つの理由があった。

それは被弾回数が必ずしも自信の限界であるとは限らないという考えが頭の片隅にあったからである。

本来、スペルカードルールによる決闘で使用する弾幕の威力というものには必要最低限に抑えられている。

そうであるがために喩え被弾することになっても、そのままに決闘を続けることができるのだ。

仮にこれが手加減なく全力であったのならば、“スペルカードルール”など張りぼてでしかない。

break!!

一切の被弾なくスペルカードを攻略した流司であったが、そこに浮

かぶ表情には安堵の色ではなく、逆に危機感で強張った顔をしているのだった。

「（当たったら死ぬかもしれない……）」
弾幕に晒されたことですからっかり荒れ果ててしまっていた廊下を眺め、流司は額の汗を拭うのであった。

神代流司。

スペルカード 残り三枚。

ライフ 三。

フランドール・スカーレット。

スペルカード 残り三枚。

ライフ 二。

頁百十二、『愛の迷宮』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著

『愛の旋律』

より。

因みに私は回ります。

下避けができないわけではないですけど、回った方が楽です。

フランに手加減の文字はあるのだろうか？

無邪気って怖い……

流司の感じた悪寒は決して間違いではなかった。

フランドールも妖怪の一人であり、食料として人間を襲うという潜在的な欲を有している存在である。

妖怪の多くは固有の矜持を持って人を襲う。

鬼であれば正々堂々と正面からぶつかるといふように心掛けているようにある。

そして、妖怪の中でも取り分けて“吸血鬼”はその矜持が強いといえた。

それは“吸血鬼”という存在にとっては人間の肉よりも血の方が美味であることが強く影響しているかもしれない。

“吸血鬼”といだけあって、吸血鬼の多くは人の生き血を好む。それが故に人間の血を吸い尽くし殺してしまうことに美学を感じない吸血鬼もいるのである。

当然、人間の血肉を食らいつくすことを美学として感じている吸血鬼もいる。

幻想郷の妖怪は“異変”を起こすことはあっても、基本的に直接人を殺すような真似をすることはない。

それが幻想郷の人と妖怪の共存を計る上で重要なことであり、“幻想郷”が“幻想郷”たる所以であった。

しかし、幻想郷に住まう妖怪が全て理解しているとは言えず、理解しているからと言って正直に従わぬ妖怪もいる。

フランドールはどちらかと言えば前者に近い存在であった。

フランドールは手加減ができない。

それは様々な要因が重なったが故のことであり、今となっては致し方がないとしか言いようがないものだ。
端的に言えば経験の少なさがフランドールから“手加減”という選択肢を奪っていたに他ならない。

人間であれ、妖怪であれ、“手加減”というものを始めから行うことのできる存在はない。

“これだけの力を込めれば壊れる”、“この程度であれば傷すらつかない”といった思考と実践を繰り返すことで初めて“手加減”を行うことができるようになるのである。

だが、あらゆるものを能力で破壊することができ、狂気を孕んでいたという理由で五百年に近い年月を地下で幽閉されていたフランドールにはそれが無い。

よって、“手加減”をすることなど端からできるはずもないのだ。

そのようなフランドールが吸血鬼特有ともいえる矜持を身につけているはずもないだろう。

人間を紅茶とケーキに加工された形でしか目にしたことのないフランドールに逝かず殺さずの絶妙な力の使い方を求めるのが間違いであったのだ。

禁忌『フォーオブアカインド』

「ッ！！！！？」

本能的に感じた悪寒からか流司はフランドールがスペルカードを発動させると同時にスペルカードを取り出して発動する。

鏡符『ドツペルゲンガーの心象風景』

スペルカードの発動によつてその姿を四人へと増やしたフランドールから大小の多種多様な弾が放たれる。一カ所から放たれる弾幕とは異なり一度に四カ所から放たれるために弾数が少なくとも避けることに手間取ってしまうようなものであつた。

対する流司の姿も四人へと数を増やしていた。

そして、フランドールと同様の弾幕をそれぞれで形成している。

何もこれは流司の発動させたスペルカードがフランドールと同様の効果をみせるスペルカードであつたからではない。

フランドールが“発動させた”スペルカードを模倣していたからである。

流司の発動したスペルカードは流司が所有しているスペルカードの中で唯一効力のはつきりしていないスペルカードであつた。

スペルカードとは自分の美しいと思う弾幕を即座に発動することができるように、あらかじめ命名しておき符としておいておくものである。

その為、命名するときには弾幕のイメージを固めておかなければ、思うような弾幕を作り出すことはできない。

だけれども、流司が発動したこのスペルカードには具体的なイメージは一切存在していない。

流司が想像したのは相手のことを鏡写しに模倣するということだけであつた。

それが現在ののような光景を作り出すこととなっていた。

四対四。

計八人が縦横無尽に宙を舞い弾幕を作り上げる。

流司とフランドールの作り上げる弾幕に違いがあるのだとすれば、弾幕に込められた力ぐらいなものであろう。

両者ともに全く同じ弾幕を作り出しているのだから戦闘は拮抗する………とも思えるだろうが、状況は流司が劣勢であった。あくまでも、コピーであり、オリジナルに迫るには後一步及ばないのだ。

本来であれば、全く同じ弾幕で撃ち返すことで相手に精神的な負荷を与えることを目的としているこのスペルカードであったが、既に狂気の片鱗を感じさせるような様子で弾幕を作るフランドールにはそのような効果が見られるはずもなかった。

なので、

散。

流司の一人がフランドールの放った弾に被弾して霧散する。

それによって、完全に形成はフランドールへと傾いた。

弾幕を作りながらも驚異的な回避をみせる流司であったが、数の差を覆すことはできずに一人、また一人とその姿を減らしていく。

瞬く間に一人までに追い込まれてしまった流司は遂に、

「グッ……！！」

腹部に衝撃を受け、意識を揺らがせるのであった。

神代流司。

スペルカード 残り二枚。

ライフ 二。

フランドール・スカーレット。

スペルカード 残り二枚。

ライフ 二。

頁百十三、『鏡は無残にひび割れて』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『鏡は横にひび割れて』

より。

遅れた上に短い。

すみません。

スペルカード考えるのが大変で……

今回のスペル。

本来ならば四対一になります。

ドッペルゲンガーだけに。

フォーオブアカインドに対して発動したのが選択ミスだったという
感じですよ。

頁百十四、『申し分のないメイド』

時間は少々遡る。

流司がフランドールとの邂逅を丁度果たした頃のことであった。

紅魔館正門。

そこは内部で繰り広げられている魔法使い同士の激しい戦いを全く感じさせることがないほどに静かであった。

雲間から差し込む陽光は紅魔館を照らし出し、その“紅”を際立たせる。魔理沙の一撃にて霧の掻き消えた霧の湖には再び白が立ち込め始め視界が奪われていく。

「すう……すう……」

そんな紅と白のコントラストの夢幻に思える風景の中、安らかな寝息が流れる。

頭に乗せた帽子は半分がずり落ちており、木漏れ日を浴びて鼻提灯を作ってしまったいそうなほどに熟睡、爆睡している様子を見れば思わず顔が綻んでしまいそうな健やかさであった。

シエスタ 昼寝と洒落込んでいるこの女性の名は『紅美鈴』といった。

一応、紅魔館の門番を勤めている妖怪であった。

尤も職務怠慢という言葉を体現するかのように寝息を立てる者に“門番”の称号が相応しいかと問われれば首を捻ざるを得ないであろう。

そんな美鈴に近づく人影がある。

寸分の狂いもなく美鈴の額の中央へと突き刺さったナイフの痛みに言葉にならない悲鳴を上げて目を覚ます。

「目が覚めた？」

「……はい、咲夜さん」

ナイフを額に突き刺したままずれ落ちそうであった帽子を正すと美鈴はナイフを投げた人影である咲夜に返事をする。

「それで今、紅魔館（こま）がどんな状態になっているか理解しているの？」

「全くの問題はありません！！」

まるで訓練させた軍隊の兵士のような直立不動の姿勢で美鈴は咲夜の問いに答える。

「そう、なら貴女の目にはあれがどのように見えるのか教えてもらいたいものね」

冷めた口調で呟く咲夜につられるようにして美鈴も咲夜が視線を向けた方向へと顔を向けた。

「へっ？」

美鈴が間抜けな声を上げてしまったのも仕方がない。

そこにはあるべきものかなかったのだから。

紅魔館を一周取り囲むようにして作られているはずの柵が途中で途切れてしまっている。

途“切れて”しまっているというよりもその柵の状態は“なくなつて”、もしくは“溶解”してしまっているという言葉の方が似合う

だろう。

また、紅魔館の四隅の一角が抉れて消え去ってしまったもいるのだ
った。

「な、な、なっ、なんなんですかッ!? あれはっ!?!」

紅魔館の思わぬ惨状に美鈴は目玉が飛び出してしまうかのごとく驚
きようで声を上げる。

「何って……確かにあれだけの爆音がしたにも関わらず目覚めなか
った貴女には分からないかもしれないわ」

「す、すみません……」

美鈴の反応に一瞬呆れの色を見せた咲夜であったが、すぐに納得し
たように呟き頷く。

それは暗に門番の仕事を怠慢していたことを責めており、美鈴は首
を竦めて謝るしかなかった。

「“いつも”の白黒よ。今回は門からではなく、図書館へ直接侵入
したようね」

「ううっ……」

“いつも”という部分を強調して言う咲夜に美鈴は更に首を竦め縮
こまってしまふ。

白黒、魔理沙が紅魔館を強襲することは今に始まったことではなく、
魔理沙の侵入を美鈴が許してしまうこともまた今に始まったこと
はなかったのだ。

「この音からしてパチュリー様が相手をしているようだけど……」

「ほんとだ。今日は調子がいいみたいですね」

鳴り響く轟音と、時折、紅魔館に空いた風穴から飛び出してくる光から現在図書館では激しい戦闘が行われていることを咲夜も美鈴も伺い知ることができたのだった。

「いつもならばこのままお任せしておいてもいいのだけど、今日はそういうわけにはいかないのよ」

「どうしてです？」

「お嬢様にお客様がいらっしやることは話したでしょ？」

「はい。でも、それはまだいつだか決まっていないうんじゃ……」

咲夜は主であるレミリアに流司が紅魔館を訪ねたい旨を伝えて、許可をもらっていたもののいつやってくるのかは未定であった。

「今日みたいなのよ。お嬢様がいうのだから間違いないわ」

「なるほど……」

“お嬢様が”という言葉で疑問の氷解した美鈴が頷く。

「とこういうことだから行くわよ」

「へっ？何処にですか？」

「決まっているじゃない、図書館へよ。本当のお客様を向かい入れるためにも招かれざるお客様には早々にお帰り願ひましょう」

頁百十四、『申し分のないメイド』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著。

『申し分のないメイド』

より。

サブタイトルはまんま。

まさしく、咲夜さん。

少し場面は変わります。

もしかしたら、明日は投稿できない可能性ができるだけ頑張りはしますが。

週末もサークルの合宿で危ういんですよねえ……

頁百十五、『魔術の舞踏』

閃ッ！！

轟きと共に閃光が宙を切り裂くように走る。

煌ッ！！

目が開けてられないほどの輝きが紅い空間を白に染める。

燦ッ！！

色とりどりの光はまるで夜空に瞬く星々のように散らばり光を放つては掻き消える。

そこは本棚が聳え、本の重なり合った図書館であった。

そこは閃光轟く、壮絶な戦場であった。

光が瞬く度に本棚の一角は吹き飛ばされ、轟音が鳴り響く度に床の一部は陥没する。

それでいて保管させている蔵書の数々には一切の傷すらついてはいない。

それだけ、確固な魔法で守られているからこそ、貴重な本も少なくはないこの図書館が戦場となり得たのだろう。

とはいえ、既にこの場所が“図書館”であったという確証を得ることとは難しいと言えた。

すっかり、荒れ果てて廃墟の容貌を見せ始めたこの場所を図書館であると特定づけるのは周囲に散らばっている本くらいなものであった。

「いい加減に諦めるべきだぜ!!」

「それはこっちのセリフよッ!」

図書館を廃墟と呼べるような壊滅的状态へと変貌させたのは二人の少女、“魔女”であった。

一人が手を掲げ光線を放てば、一人は魔法陣を展開し光線を弾き飛ばす。

一人が魔導書を開き呪文を唱えれば、一人は放たれた魔法の中を踊るように避ける。

結果として目標を失った光線や魔法はあらぬ方向へと吹き飛ばされ、図書館の壁や本棚、調度品を逆に吹き飛ばしていく。

舞踏会というには少々ならず、非常におっかないことこの上ない。けれども、光を弄ぶかのように宙を舞い踊る魔女らの様子にはどことなく優雅さを感じてしまっただろう。

「私がこの程度のこと諦めるわけない!!今日もいくつか“借りて”行くぜ、パチュリー!!」

「させないと言ったでしょう?魔理沙ッ!!」

白と黒の服をまとっている魔理沙の言葉にもう一人の魔法使い『パチュリー・ノーレッジ』は普段の様子からは考えられないような大声をあげる。

基本的に図書館から動くことはなく、一日中本を読んでいるパチュリーがその感情を露わにすることは滅多という言葉すら多く思えるほどに少ない。

そもそもが口数がほとんどなく、とにかく暗い性格であるパチュリーでは自分を表現することなどある方がよっぽどと言えることである。

それはパチュリーの元々の性格に加えて、喘息という持病のための身体の弱さも少なからずは影響していることであろう。

魔力に関しては一級品であるパチュリーであるが、喘息の為に体力に関しては人並みにあるかも疑わしく、図書館にこもることはもはや必要と言えることであつた。

そのようなパチュリーが身体の調子がいくらよいといつてもここまでの抵抗をみせることは非常に珍しいと言えた。

「（今日はやけに粘るぜ……どうしたんだ？）」

そんなパチュリーの稀という言葉だけでは説明のできない様子に魔理沙は内心で訝しむ。

今までの魔理沙の経験から考えて、多少の抵抗はあつても最終的に敗塵をきすことになるのはパチュリーであり、ここまでの抵抗をパチュリーがみせるのは数えるほどありはしなかつたからである。

「（そんなに“客”つてのが重要なのか？）」

“客”を招くことになる以上はある程度の体裁を整えて置くことは必要であるだろうが、それであるのならパチュリーは適当に魔理沙のことを相手にして後は図書館にこもっておけばよいのである。それだけにパチュリーのこの抵抗は不可解に魔理沙には感じられたのだ。

尤も魔理沙の考えは半分しか当たつてはいない。残りの半分は極めて単純なものである。

そう、ただ単にパチュリーの我慢が限界にきていたのだ。

大人しい人物が怒ると手に負えないというが、パチュリーのはまさにそれであつたのだ。

「（まあ、こついつときは逃げるが勝ちだぜ）」

流石に歴戦を経てはいないのか、魔理沙はこのままだとギリ貧になるだろうことを悟ると目星をつけていた本を掴み取り、外への光に突き進んでいく。

「それじゃあ、“借りて”いくぜ、パチュリー」

「ま、待ちなさい！！」

当然ながら魔理沙がパチュリーの制止の声を素直に危機届けるわけもなく、箒に跨った魔理沙は既に外へと飛び出そうとしている。だが、次の瞬間、

「ッ!？」

魔理沙は外へと繋がる穴の目の前で急停止する。それは魔理沙の行く手を無数のナイフが塞いだからであった。

「パチュリー様、お手伝いしますわ」

「……咲夜」

音もなく己の傍らに現れた咲夜にパチュリーはどことなく不服そうな表情を浮かべる。

「申し訳ありませんが、“お嬢様”の言葉から推察するに時間はもうそれほど残っておりませんので」

「……はあ、仕方がないわね。なら、本を取り戻してからなら適当に
していいわ」

パチュリーは小さく溜め息をつくとそう咲夜に告げる。

「ということなので魔理沙、その手に持っているものを返してもらおうわ……って、既に取り返してわいるのだけど」

いつの間にか咲夜の手には魔理沙が奪っていったはずの本が握られている。

「なっ、狡いぞー!!」

「悪いけど相手をしている暇はないの。さっさと帰ってきてくれる?」

「それを“借りた”ら帰るぜ」

魔理沙は再び本を借りるためにパチュリーや咲夜の方へと身体の向きを変えらる。

一触即発。

片や笑み、片や呆れの表情を浮かべている両者の間に流れる空気がどこまでも張り詰めていく。

ドゴンッー!!

しかし、その空気は第三者の乱入によって唐突に霧散する。

「妹様!?!」

「「流司!?!」」

段幕にもまれるようにして図書館へと流れ込んでくる第三者ならず、
二つの影。

その姿を確認した魔理沙らは予想外の光景に驚愕の声を漏らすのだ
った。

頁百十五、『魔術の舞踏』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著

『魔術の殺人』

より。

遅れたけどなんとか投稿。

はつきりしなくて申し訳ない。

遅れる場合は少なくとも半までには投稿するので、半を過ぎて投稿
されない場合はその日の投稿はないと思ってください。

頁百十六、『刻み回る時計』(前書き)

昨日はすみませんでした。
山の中より謝罪いたします。

頁百十六、『刻み回る時計』

「(ツゝ)……下手をすれば腹に穴が空いていたぞ、これは」

鈍痛のような痛みを腹部に感じている流司は内心で愚痴る。

一瞬、途切れそうになる意識を繋ぎ止め、痛みを流司は堪える。

実際問題として、流司が咄嗟に腹部に靈力を集中させて、フランドールの放った弾幕の威力を軽減していなければ間違いなく腹に風穴が空くことだっただろう。

確実にスペルカードルールでの対決で用いるべき威力を越えてしまっており、直撃を受けた場合のことを脳裏に思い浮かべ流司は冷や汗を流す。

いくらスペルカードルールあるうとも当たりどころが悪ければ死ぬことはある。

しかし、フランドールのそれは当たりどころが悪いなどという話ではない。

流司にはある程度の予測ができていたこととはいえ、実際に受けてしまえば冷や汗の一つが浮かんでしまうのも当然だといえる。

その上に、

「まだまだいくよ？」

禁弾「過去を刻む時計」

自分の弾幕が流司に当たったことで、笑顔を浮かべたフランドールは新たなスペルカードを発動させる。

それは先程の流司のように流れを己の方へと引き寄せるためという、意図の考えられていたものではなかった。

単純に自分の弾幕が流司に命中したことをフランドールが喜び無邪気に宣言しただけに過ぎないのだ。

けれども、流司にはフランドールのある種、本能にも任せたようなスペルカードの発動がこれ以上ないほど厄介なものであった。

弾幕をかわしていく流司の動きはいまいち精細さを欠けてしまっている。腹部への鈍い痛みは目立った外傷こそ流司に与えることはなかったが、否が応でも流司の動きを鈍らせてしまっていた。

流司の靈力での強化が幸を制していたため、決して痛みが長引くようなものではないものの即座に回復することがないのもまた事実である。

その為に流司は今までのような弾幕をその身に掠らせるほどのギリギリの回避をすることはできず、どうしても大きく避けるような動きになってしまっていた。

確かに弾幕が当たる可能性は少なくなったように思える。

だが、それはその場限りのことであって、長期的に考えた場合は、むしろ当たりやすくなってしまったともいえることであった。

それを流司が理解していないわけもない。

それでも、今は弾から大きく距離を取るようにして流司は避けるしかなかったのである。

「（拙いな……）」

回転する時計の針のような弾幕と扇状に放たれている色彩の鮮やか

な弾幕の二つを相手にしながら流司は思う。

現状ではまだ避けることはできていたが、確実に追い込まれてしまっていることを流司は自覚していたからであった。余計な動作の多くなってしまうていた流司では瞬く間に動くことのできる場所を失ってしまっていた。そして、

「ガあっ」

二度目の被弾。

だけれども流司は、

反符『波紋の共鳴』

被弾と同時にスペルカードを発動し、フランドールの弾幕を上書きするようにして己の弾幕を作り出していく。

流司を中心として円上に弾幕が広がっていく。

無制限に広がっていくかに思えたその弾幕は、ある地点で壁にぶつかったかのように止まり反射しフランドールへと襲いかかる。

尤もこれだけであればフランドールにとっては容易くかわすことのできる弾幕であり、流司が今まで使用してきたスペルカードと比べると数段見劣りのしてしまうものであった。

故にそれだけで終わるはずもない。

反射された弾幕が流司が新たに放った弾幕と重なり合った瞬間、それぞれの弾はまるで弾を吸収したかのように大きなものへと変化す

る。

二回、三回、四回と波紋が交差する度に弾は巨大化していき、宙を全て埋め尽くしてしまうかのよう一杯に広がっていく。

流司がもつスペルカードの中で圧倒的な物量を発揮する唯一のスペルカードであった。

重なり合った波紋同士が共鳴し力を増していく。

波長を操ることのできる能力を持っていれば、際限なしに大きくなっていく弾幕に歯止めをかけることができたかもしれない。

しかしながら、フランドールがその様な能力があるはずもなく、やがて動きのとりことができなくなったフランドールもまた被弾する。

両者共に痛み分け。

四枚のスペルカードを使い切った段階で流司、フランドールともに二度の被弾。

残されたスペルカードもライフも一つであった。

「ふふっ、ふふふっ」

突如としてフランドールが笑い出す。

その様子は何かによつて流司には感じられた。

そして、同時に感じる形容しがたい寒気。

それが“狂気”に自身が当てられているのだということに流司が気付くまでにはさしたる時間はかからない。

「凄いい！こんなに“壊れない”のは久しぶり！！だから……」

秘弾「そして誰もいなくなるか？」

フランドールの姿が流司前から掻き消える。
残されたのは廊下に佇む流司とそれを怪しく狙うように形成し始めた弾幕だけであった。

神代流司。

スペルカード 残り一枚。

ライフ 一。

フランドール・スカーレット。
スペルカード l a s t s p e l l

ライフ 一。

頁百十六、『刻み回る時計』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著

『複数の時計』

より。

ラストスペルは単純にその決闘での最後ということとで。

頁百十七、『姿なき静寂に生まれつく』

目覚めているものの気配を感じることでできないような静寂。

クスクス。

夜雀が歌うかのような囁きが流司の耳に届く。

その囁きの主、フランドールの姿は見えない。

見渡す限りに隠れることのできるような場所もない。

流司の忽然と姿を消してしまったフランドールの存在を示すものは耳に届く僅かな囁きと忍び寄る弾幕のみであった。

「くつ、耐久型か……」

流司は追尾してくる青い弾をかわしながら呟く。

スペルカードの二種類に区分するとした場合、非耐久型と耐久型に分けることができる。

非耐久型のスペルカードであれば、スペルカードの発動中に発動させている相手を被弾させることができれば、そのスペルカードを中断させることができる。

一方の耐久型のスペルカードは一定のパターンを繰り返す非耐久型のスペルカードとは異なり、スペルカードが発動している間の攻撃が不可能となり、強制的にスペルカードの終了まで避け続けなければならない。

その為に耐久型と呼ばれるスペルカードは一定のパターンを繰り返すのではなく、時間の経過とともに様々な形を取ることが多い。

強制的に避けるしか方法がなくなることからこの耐久型のスペルカードはスペルカードを所有しているものにとっては切り札といえるものであることがほとんどであった。

放たれた矢の鏃のような弾幕は拡散しながらも流司のことを追尾していき、追い詰めていく。

ただ避けるだけでは瞬く間に周囲を弾幕で取り囲まれ逃げ場がなくなってしまうだろうことを見抜いた流司は回避する動きを慎重に組み立てながら避けていく。

後ろ、右、下、左、前、上、と追尾してくる青い弾を巧妙に誘導し、隙間を作り出し回避を進める。

動じることなく避け続けている流司のことを見れば、一件容易くかわすことのできる弾幕に思えるだろう。

だが、それは大きな間違いである。

流司が避けることができていたのはそれだけの経験を積んでいたからこそのものであり、実際に流司は今までにフランドールが発動したスペルカードの中で一番避けることが難しいと感じていた。

それには一つの明確な理由がある。

このスペルカードがフランドールの使用した他のスペルカードと一線を画してしまっている理由、それはフランドールの姿が“見えないう”ということである。

人間というものは周囲の環境を認識する場合、そのほとんどを目から得ることのできる視覚情報に頼ってしまっている。

確かに“心眼”などという言葉もあり、視覚に頼らなくとも周囲の環境を把握することのできる者もいるだろう。

しかし、それでも目を使い視覚情報として環境を認識することができるならば、それに頼ってしまうのである。目の錯覚だと理解していても、錯覚をそのままに認識してしまうのはそうであるからだ。

それだけに視覚情報というものは重要な意味を持っている。

弾幕勝負においてもそれは変わらない。

弾幕を回避するとき、弾それぞれの軌道を読むのは当然であるが、弾幕を放つ者の身振り手振りも回避するにあたっての大きな参考となっている。

相手の姿が見えないということは回避をするために利用している情報の一つが欠落してしまっているということであるのだ。どこからともなくとして現れる弾幕を避けるには技術以上に精神的にかなりのものを必要としているのである。

流司のことを追尾してくる青い弾が掻き消えたかと思うと、続いての記号がクロスしたような弾幕が現れ広がる。

それらの合間を流司は掠めるようにして避けるが、それも束の間に今度は井の字のように弾幕は流司のことを取り囲んだ。

縦と横から理路整然とした弾幕が流司を襲う。

整然としているが為に避け方も確立している。

だが、逆を言ってしまうえば確立された回避の仕方以外では避けることは難しいのである。

それは一歩動き方を間違えただけで窮地に立たされてしまうことでもあった。

ミスの許されない重圧の中、淡々と流司は弾幕を避け続ける。

それは二度の手加減のない被弾や重圧を全く感じさせないほど軽やかな動きであった。

“無我”。

今の流司の状態を説明するのであればその言葉が一番であろう。

“避ける”ことだけにその全てを注ぎ、その他を一切考えず無心に至る。

“集中”という言葉すら生温く感じてしまつくりの無音の世界。流司と弾幕だけが現より切り取られてしまっているかのようであった。

否、そうではない。

流司は弾幕とすらも同じ空間にはいないのだ。

正しく弾幕の“ない”空間へと移動し続けているのである。

break!!

だとすれば、その結果は当然であった。

世界に音が戻り、フランドールの姿が現れる。

その顔に浮かんでいるのは流司が全く傷つくことなくスペルカードを攻略してしまったことに対しての驚きでもなければ、スペルカードを悠然とした様子で避けてしまったことに対する腹立たしさでもなかった。

そう、そこにあつたのは“愉悦”。

笑顔を浮かべたフランドールの顔がそこにはあつたのだ。

それに気付いてかそうではないか。

流司もまた己の最後のスペルカードを取り出した。

それは流司の所有するスペルカードの中で最大の難易度を誇るものであった。

それは霊夢でさえも攻略をするのに時間がかかったほどである。

鏡面界『有限長の無限』

神代流司。 スペルカード l a s t s p e l l
ライフ 残りー。

フランドール・スカーレット。
スペルカード a l l f i n i s h
ライフ 残りー。

頁百十七、『姿なき静寂に生まれつく』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『終わらない夜に生まれつく』

より

合宿から帰還。

身体が重い……

明日も学校だというのに……

V S フランドールも最終局面。

長かったなあ……

頁百十八、『仄暗い鏡の果てに』

世界は“有限”か“無限”か？

答えは簡単だ。

“有限”である。

虫も鳥も人も妖怪も神でさえもが観測し“うる”範囲でしか世界というものの理解できない。

つまりは“認識”という枠組みの中に捕らわれ、世界を“有限”のものとして決め付ける。

もしくは“無限”という“有限”の言葉を当てはめ、“有限”の中にある“無限”という不可解極まりない状況を作り出す。

どちらにせよ、結局は同じことである。

世界が“有限”であるか、それとも“無限”であるかという問いに対して明確な解答を出すことができるのは、“世界自身”。

または“それに類する存在”ぐらいなものであろう。

考えることが無駄だとは断言できないが、答えが出ることはまず有り得ない。

それこそ、“無限”に続く問答を繰り返すことになるだろう。

“有限”の中に存在する“無限”。

一見してみれば酷く違和感の残る矛盾に満ちたこの文字の羅列も少なくとも一般的なものとして無意識下に理解しているものだ。

閑話休題。

“鏡”とは何であるか？硝酸銀溶液をガラス板に塗り付け銀膜を作り出し、それを光明丹で保護したもの？

宝器や権力の象徴とされた祭具？

大切なもの、清く澄むこと、貴く美しいもの、静かな水面などのたとえ？

いずれも“鏡”というものを指し示していることには違いない。

けれども、ここで重要であるのは光を反射する、風景を写し出すということである。

鏡の前に立てばそこには己の姿が写し出させる。右手を上げれば左手を、左足を揺らせば右足を鏡に写る自分自身は上げ、揺らす。左右の反転した像が鏡には写し出されているのである。

ここで鏡をもう一枚、鏡同士が向き合うようにして置く。するとどうなるか。

鏡に反射された光はもう一枚の鏡にぶつかり反射、再びもとの鏡へと戻るも反射してしまふ。

その永遠の繰り返しである。

“無限”の反射。

二枚向き合わせた鏡同士ではそのような事象が生じるのだ。

現実には光の拡散などの要因が故にそうはいかないが、極論では合わせ鏡の間では光は“無限”に反射し続けることになる。

当然、写し出されている像も鏡の中の鏡の中の鏡の中……とその大きさを小さいものへとしながらも延々と写し出されるのである。

しかし、これには一つの矛盾が含まれている。

それは鏡の大きさが“有限”であるということだ。

鏡の大きさが“無限”であれば全くの問題はない。

“無限”の中に“無限”が含まれようとそれに対して違和感を抱くものはいないだろう。

けれども、鏡の大きさが“有限”であっても、反射は“無限”に続き、像も“無限”に形成される。まさにそれは“有限”の中に存在する“無限”であった。

フランドールは内面を鏡にしたサイコロ状の結界に閉じ込められていた。動き回るには十分な広さである。

それでも、流司が放った弾幕はたった一つであった。軌道を見極め、ギリギリを避けずとも容易に回避することが可能なほどのものでしかない。

悠々と迫る弾を避けたフランドールは欠かさず背後に注視する。今までに流司が作り出した弾幕から考えると弾が反射するだろうことはほぼ間違いのないことでだと判断できたからである。

フランドールのその推測は正しいものであり、反射した弾はフランドールに襲いかかる。

とはいえども、初めから反射するということが分かっているのであれば、それは通常の弾と何ら変わりもないものでしかなかった。

その変化は弾が二度目の反射を迎えた時に起こった。

反射をした弾の数が増えたのである。

増えたとはいえ、それは別々の軌道を描いているという訳ではない。一つの弾の後を辿るように連なっているのであった。

反射を繰り返す度に連なる弾の数を増やす弾幕はまるで“無限”に続く合わせ鏡の像でもあり、宙を飛ぶ龍のように見えなくもないであろう。

いくら弾の軌道が読めようと尾のように長く続く弾幕が後を引き、動くことのできる範囲は徐々に狭められていく。フランドールもその吸血鬼としての身体能力を活かした動きで驚異的な回避を見せつけるも流石に限界があった。

反射の度に“無限”に長くなるということとはそれだけ後のことを考えて弾幕を誘導していかなければならなかった。

だが、フランドールがそれに気付くことができたときには万事が全て遅かったのだ。

もがけばもがくほどにフランドールは打つ手を失ってしまう。

蜘蛛の巣に絡め捕られてしまった蝶のようにフランドールは動きを鈍らせるしかない。

故にこのスペルカードは流司の所有するスペルカードの中で最も優れたものであったのだ。

始めから誘導することを前提としてかわしていかなければならないにも関わらず、最初の段階ではそれに気が付くことはほぼ不可能であった。

霊夢でさえ攻略に手間取ることになった絡繰りはこのようなことであつた。

“有限”の中で“無限”に避け続けることなどできるはずもなく、遂にフランドールは龍の顎アキトに飲み込まれるのであつた。

神代流司。

スペルカード a l l f i n i s h

ライフ 残り一。

フランドール・スカーレット。
スペルカード a l l f i n i s h
ライフ 無し。

勝者。

神代流司。

頁百十八、『仄暗い鏡の果てに』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『仄暗い鏡の中に』

より。

難産でした。

明日はうん、頑張る……

合わせ鏡に写る像って不思議ですよね？

フランドールに弾幕が命中したことで役目を終えた結界はガラスが砕け散るかのごとく粉々に掻き消える。

紅魔館の証明をキラキラと反射させながら霧散していく結界の欠片はさしずめ、光の雨とも言えるだろうか。

決闘が終了したことで流司は力を抜き、全身の筋肉を弛緩させる。

安堵と同時にぶり返してきた身体の痛み流司は堪らず傷だらけの廊下にその身体を投げ出す。

誰がどう見ても完全な勝利というには流司の状態は程遠いものであった。

それでも勝ち手は流司である。

流司もフランドールも予め宣言しておいた五枚のスペルカードを使い切り、流司は二度、フランドールは三度被弾した。

この決闘が流司の勝利であることは揺るぎがないであろう。

「……そう言えば、自分一人の力だけで勝つのは初めてか」

倦怠感を隠そうともせず流司は紅魔館の高い天井に呟いた。

流司が“幻想郷”へやってきてから一年と余り、フランドールとのスペルカードルールでの決闘の勝利は流司にとっては己の力のみでもぎ取った初めての勝利であった。

これまでに様々な戦いを経ていた流司であったが、突拍子な状況を除けばこうして勝利を手にしたのは初めてのことであったのだ。

特にスペルカードルールでの決闘では勝つことのできる気配すらなかった。

それは流司が今までに練習の相手としてきたのが、霊夢であったり、魔理沙であったり、時に紫であったりとスペルカードを用いた決闘では幻想郷で最上位に位置している者ばかりであったからである。置かれていた境遇故か、流司は知らずのうちに弾幕での対決では相当の実力を有していたのだ。

だが、同様の理由で流司自身は自分がそのような力を持っているとは露とも感じてはいなかった。

幻想郷でやっていくことのできる力くらいはあるというくらいのこととは自覚しているも、まさかそれが最上位に食い込むような力だとは流司は考えてもいなかった。

それも無理のないことだ。

紛いなりにも剣術という“武”を修めていた流司は一朝一夕で実力が伴うことはないということをも十分に理解していたからである。ましてや、何百年と生きてきた妖怪に僅か一年という時間で自身の力が追いつくなどということは夢にも見ていなかった。

「それにしても、これだけの戦いをしたというのに誰も気付かないなんてな……」

流司とフランドールの戦いは熾烈と十分に言えるものであった。

それだけに小さくはない戦闘音が響いているはずであった。

その音に気が付かないなどということは流司にとってはかなり驚きのことであったのだ。

「見かけによらずそれだけここが広いということか……」

流司の予測は当たらずも遠からずといったところであった。

確かに紅魔館はその見かけとは裏腹に内部はとて広大である。

けれども、流司とフランドールの対決が誰にも気付かれることがなかったのは別の要因があったからだ。

「さて、戻るか否か。どうするべきか」

流司は視界の片隅に映る図書館への扉を見つめ頭を悩ませる。

扉の向こう側からは戦闘音が聞こえてきていることから、未だに戦いが繰り広げられていることを流司が予測することは容易なことであつた。

戦闘に巻き込まれまいと図書館から脱した結果、それ以上の危険に首を突っ込んでしまった以上は今更巻き込まれるれないの問題ではないと半ば流司は開き直ってしまったので、どうせなら魔理沙がいた方が事情を説明するのに厄介なことが少なくなるかもしれないという思いがあつての考えであつた。

「取り敢えず、もど」

「……何処へ行くの？」

背後からかかった言葉に流司は言葉と足を同時に止める。

振り返ればそこには形容しがたい笑みを浮かべたフランドールの姿がある。

「決闘はもう終わったからな。俺は俺の用事を済ませなくてはならないんだよ」

フランドールの意識があることには流司は特段の驚きを感じてはいない。

流司の弾幕は“決闘”^{あてび}の範疇を超えるようなものではなく、最後のスペルカードも避けることは難しくとも、威力自体は吸血鬼であれば蚊に刺された程度にしか痛みを感じることはないであろうものであったからである。

「フフツ、フフ、うん、 “今” のは私の負け。強いんだね？」

「そうでもないさ。こっちも身体の節々が痛いんだ。こんなのはもう御免だよ」

流司は暗に再戦は無しだという思いを込めてフランドールに答える。実際、流司がダメージを受けていなくとも連戦をした場合、流司には勝ち目がない。

一つは体力的な問題。

これだけ神経をすり減らしてしまうような濃密な決闘を続けて行えるほど流司は化け物染みてはいない。

喩え、全く同じ展開になろうとも流司に先程のような動きはできないであろう。

もう一つは流司が現在所有しているスペルカードでフランドールに通用するだろうスペルカードは既に使い切ってしまったているからだ。スペルカードというものは一度見たものは初めて見るものよりも各段に避けやすくなってしまふ。

特に流司のような物量や計算で攻めているようなタイプではないスペルカードはフランドールほどの実力があれば、二度目は簡単に避けきってしまうだろう。せいぜいが通用しても流司が最後に使ったスペルカードくらいなものであった。

だからこそ、スペルカードルールでの決闘を多用する霊夢などは多

くのスペルカードを所有しているのだ。

「残念。折角、貴方は久しぶりに壊れない相手なのに……」

そういうフランドールは本当に残念に思っている声色であった。

「まあ、勘弁してくれ」

そうはいつでも、流司にその言葉に応えるつもりはない。

流司は片手を軽く上げること、フランドールに別れを告げると図書館へと繋がる扉のノブへと手をかける。

「……じゃあ、お土産にこれをあげる」

禁忌『フォービドゥンフルーツ』

「……こんな果物はお土産にならないっての」

狂気に口角を引き上げ歪めているフランドールから放たれる“紅”を目にした流司は呆然した様子で呟くのだった。

頁百十九、『ラッシング・マード』(後書き)

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『スリーピング・マード』

より

戦利品は“禁じられた果实”という……

いつの間にかに感想が500件にお気に入りが1200件超え。
まさか、ここまでいくとはねえ……
ありがとうございます。

久しぶりにリクエストでも募集しようかと思えます。
時間がかかるかもしれないかもしれませんができるだけ全てに応えようと思うの
で、希望がある方は感想欄にでも。
さっさと書けっというのであればそうしますが(笑)

ああ、今回はありえないような展開でもかまいません。
今までのような、伏線を仕組んだ番外編に無理にしないので。
できるものはしますけど……

では、酔狂な方の意見を募集しています。(これはリクをしてくれ
る人に失礼か……)

“禁忌”。

その意味はしてはならないことと忌み嫌うということである。フランドールの行動も、使用したスペルカードも確かに“禁忌”と言わざるを得ないであろう。

スペルカードを用いた決闘に決着がついた場合、一方的な追い討ちをかけてはならない。

これがフランドールの破った前者の禁忌である。

そして、スペルカードである以上は避けることのできる状況を考えなくてはならない。

これがフランドールの破った後者の禁忌であった。

フランドールの表情を見た流司は能面を貼り付けたかのように顔を無表情に強ばらせる。

会話が成立していたことに流司は油断してしまっていたのだ。

いつからフランドールが狂気に飲み込まれてしまっていたかといえ、少なくとも決闘が始まりスペルカードを使用した時点でその兆候はあったのであろう。

それが今まではルールという隠れ蓑の中に隠されており、決闘が終了を迎えたことで一気に露呈してしまっただけなのだ。

一方、スペルカードの方は違う。

即興でスペルカードを作り出すことのできる存在もいることにはいる。

けれども、フランドールが使用したスペルカードは即興で作り出したように流司には感じられなかったのだ。

流司の周囲を隙間なく取り囲み迫る超高密度の弾幕には逃げ場など存在してはいなかった。

故にこれはスペルカードでありながらもスペルカードとは呼んでいいものではなかったのだ。

まさに“禁忌”。

“禁じられた果実”とはよくぞ言ったものだと言った流司は呆れや不条理の感情以上に感心してしまっていた。

「よくもまあ、これだけのものを……」

押し寄せてくる“紅”に流司はどこか他人ごとのように咳く。

物量にものをいわせた弾幕を基本的に苦手としている流司にとってみれば、四方全てを一切の逃げ道を残さずに塞ぎきってしまったというフランドールのスペルカードには若干の憧れを抱いてしまうようなものであったのだ。

「って、感心している場合じゃないんだがな……」

この期に及んでも全く取り乱してしまうような様子を見せない流司は、いくら能力があるからといえ流石に数多もの死地を経験してはいないと言える。

強ばらせていた表情からつうと汗を垂らし焦りの色を感じさせるも、極めて流司は冷静であった。

上下、前後、左右。

全てにおいて“紅”い壁に支配されている。

それは弾幕であつたり、実際の壁であつたりする。

「まあ、これが“ルール”に乗っ取っていないのなら」

流司は背後にある壁に向かって力を込めた弾を放つ。

「これも許されるよな？」

爆ッ！！

疑問を口にしながらも流司は躊躇いなく壁を吹き飛ばした。

逃げ道がないのであれば作ってしまえばいい。極めて単純な、実に分かりやすい方法ではあったが、もしこれがスペルカードルールでの決闘の延長線上にあったのだとすれば許されたことではなかった。

スペルカードルールでの決闘は弾幕の美しさといかにそれを華麗に避けることができるかということを競うものであるがために、逃げることでできる範囲もまた前もって決められているのだ。

流司とフランドールの先の決闘であれば、フランドールいた部屋と図書館との間の廊下がそれに当てはまる。

故にその範囲から飛び出して弾幕を避けることは反則であるのだ。

そうは言えども、それはあくまでも“スペルカードルール”を遵守している戦いでのことである。

フランドールの攻撃が既にスペルカードルールに乗っ取っていないものである以上は流司が壁を壊して逃げることも問題ではないのだ。尤も、壁を壊してしまうことが問題ないとは甚だ疑問であったが。

それは流司自身も理解しているところだ。

先程の流司の勝利はルールのある決闘であるからこそ、種としては格上のフランドールに流司は勝利することができたのだ。

現在はそうではない。

ルールや些細な倫理観などというものに捕らわれてしまっていたら、死んでしまうのだ。

これでは流司がなりふり構わず壁を吹き飛ばしたのも当然のことであつた。

壁に空いた穴へと流司は弾幕に追われもまれるようになりながら飛び込む。

フランドールもそれに続くようにして図書館の中へと雪崩れ込んでいく。

「「妹様!?!」」

「「流司!?!」」

流司もフランドールも己の名前を呼ぶ声に気が付いてはいたものの動きを止めることはない。

流司は気にしている余裕がなく、フランドールは気にするつもりが端からないからである。

流司は並べられている本棚を盾にして弾幕を防ぐ。

されど、本棚へと命中した弾は収められている本を巻き込むようにして爆算する。

十分な保護魔法がかけられているはずの本の数々があっさりと吹き飛び焼け散っていく。

弾幕に込められている力が馬鹿にはならないことは一目瞭然であつた。

本が吹き飛んでいく度にこの世の終わりに直面したかのような悲鳴が流司の耳にも届いてくるが、流司の動きが鈍ることはない。

躊躇ってしまえば終わるのは己の身であるのだから当然である。

「駄目だよ、逃げてばかりじゃ」

「!?!」

拙い。

流司の脳裏に身の危険を知らせる言葉が浮かび上がる。

いつの間にかに流司は周囲に何も盾になるようなものがない場所へと移動してしまっていた。

それがフランドールが意図して行った誘導であったのか、それとも偶然の産物であったのかは流司には知る術はない。

けれども、眼前まで迫る弾幕を受ければただでは済まされないとことは理解できていた。

流司は来るべき衝撃と痛みに耐えるために霊力を纏うようにして身体を保護する。

しかし、

「全く、厄介事に巻き込まれるのも貴方の能力なのかしら、流司？」

「少なくとも自覚はないな、そのような能力には」

呆れたように声をかけてくる咲夜に流司は首を竦めて答える。

確かに“故意”としか思えないようなほど流司は厄介事に巻き込まれているので、咲夜の言葉も説得力のあるものであるとも言えるかもしれない。

「何はともあれ助かったよ。ありがとう」

「折角の客人に死なれても困るもの」

「そうか。欲を言えばもう少しまともな助け方が良かったのだが…

…」

咲夜は流司の襟を掴んで宙に浮いている。

よって流司は親猫に首を噛まれて運ばれる子猫のごとく宙ぶらりんの状態であったのだ。

「これが一番手っ取り早かったのよ。助かっただけでも良かったと思いなさい」

「そうですか……」

助けてもらったことには心から感謝していた流司だが、同時に言葉にし難い情けなさも感じるのであった。

頁百二十、『手の中の子猫』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『鳩のなかの猫』

より

リクエストはまだまだ募集中。

いよいよ、佳境かな？

情けないオチですけど……

「で、どういう状況なのかしら？」

「遊びが過ぎたってところかな？」

咲夜から解放され、自力で宙に浮かんだ流司は掴まれていた襟を正しながら答える。

「なるほどね。運が良いのか、悪いのか。どちらにしる、面倒な状況には変わらないのだけど」

「面目ない」

流司の告げた言葉にはこれといって具体性があるものではなかったが、咲夜にはそれだけで十分であったのか、浮かべている呆れの表情を深めるのだった。

過程がどうであれ結果だけを見れば、流司が余計な真似をしてしまっていたからこそ、流司はフランドールと出会い、今のような状況を引き起こすに至った。

それは言い逃れができようもなく流司自身の責任であり、流司にできることといえば頭を下げるくらいなものであった。

「本当に厄介ね。ああ、なった妹様を止めるのは骨が折れるのよ」

咲夜の言葉にフランドールへと流司は視線を向ける。

どうやら魔理沙と流司が名前の知らぬ魔法使い パチュリーが二人掛かりでフランドールを相手にしているようだということが流司に

は理解できた。

フランドールの放つ弾幕を避け、反撃を加え、本を守り、どさくさに紛れ本を借りようとする魔理沙にパチュリーは攻撃を与え、魔理沙は懲りることなく本を掴む。

「……………」

一歩間違えれば死んでしまいそんなほどの高度な攻防が繰り広げられているはずであるにも関わらず、いまいち緊張感の欠けてしまっている光景に流司は口を開こうにも開けずにいる。

「……………骨が折れるのよ」

「……………そうだな」

流司が言わんとしたいことは咲夜も分かっていることであるのか、一瞬の沈黙を置いて咲夜は言葉を繰り返す。
流司もこれ以上は言うまいと静かに頷くのであった。

「普段はどうやって止めているんだ？」

「力づく、もしくは妹様が落ち着くまでかしら？」

「随分と希望的観測の強い方法だな」

現状を見ても、魔理沙とパチュリーに流司らが加勢してもフランドールを押し止められるかと問われれば難しいであろう。

だからといえ、フランドールが落ち着くかとどうかも怪しいと言わざるを得ない。

仕方がないことだといつても、博打の要素がどちらとも高いものであった。

「ここには“希望的観測”を“確実”にできる方がいるもの。今、美鈴に呼びに行ってもらっているから、私たちはそれまで耐えればいいのよ」

「耐えるといわれてもな……」

力関係が拮抗するかどうかですら難しいという状況で時間を稼げばいいと気楽そうに告げる咲夜に流司は曖昧な笑みを浮かべ呟く。

「なら、他に方法でも思いつくというの？」

「ない……って訳でもないな」

「はつきりして欲しいのだけど……」

「ちょっと確認しておきたいことがあってな。その答え次第では何とかなるかもしれないってところだな」

顎に手を当てて流司は何かを考えるように眉を顰める。

「……………」

一方の咲夜はそんな流司の様子を啞然とした表情で見つめてしまっている。

「何だ？」

「いえ、まさかそんな答えが返ってくるとは思わなかったから……」

「流石にこれだけの状況を引き起こして起きながら後は他人任せと
いうのも気が引けるからな」

「それもそうね」

流司の言葉にあっさりとな納得した咲夜が頷く。

「……もう少し感心してくれてもいいんじゃないか？」

「当然のことを言っておいて感心すると思つもの？」

「うぐっ」

咲夜の痛烈な言葉に流司は言葉を詰まらせる。

自分で言ったことだとはいえ、ここまでではっきりと言われると思っ
ていなかったただけあって、流司は暗い影を表情に落としてしまつた。
だった。

「で、確認しておきたいことって何？」

「あ、ああ、彼女の元々の性格つてのは大人しい方なのか？」

「妹様の？大人しいという訳ではないけれど……そうね、年相応、
いえ見た目相応の性格といえるかしら」

流司の問いに咲夜はほとんど言葉を詰まらせることなく答える。

「……………だとすれば何とかならなくはないかもしれない」

流司は思案顔でひとしきり考えを巡らせた後に呟く。
その表情は自信に満ちてはいないものの、一切の根拠がないという
ものでもなかった。

「そう。なら、私たちはどうすればいいの？」

「俺が何をしようとしているか聞かなくてもいいのか？」

流司の考えついた方法の説明を聞かずして、行動に移ろうとしている
咲夜に流司は眉を少し動かし驚きを示す。

「流司が言うのだからそれなりに確証の持てるものなのでしょう？
わざわざ説明を受ける必要などないわ。どの道、そろそろあの二人
だけでは保ちそうにないもの」

咲夜の視線の先には徐々に押され始めている魔理沙とパチュリーの
姿がある。

どのような手段を取るにしろ、一刻も早く加勢に行かなければいけ
ないことは明らかであった。

「確かにな。だったら、俺が望むのは俺が彼女に近付くことができ
るだけの隙、もしくは動きを止めることのできる時間を作ってくれ
ることだ」

「なかなか無理な注文ね」

「厳しいか？」

「いえ、このくらいの困難をどうとできなければ紅魔館のメイド長
は務まらないわ。ただ、できたとしても一度が限界。それでもいい

「？」

「十分だ」

横目に見つめる咲夜に流司は力強く応える。

「では、お手並みを拝見させてもらつとしましょつか」

頁百二十一、『雲をつかむ話』（後書き）

サブタイトル

アガサ・クリステイ著

『雲をつかむ死』

より

明日で終わる。
終わらせたい。

「さて、尻拭いをしなければな」

流司は一人、フランドールと咲夜らの戦いを眺めて意識を切り替える。

それは文字通りの“変換”であった。事をなすために必要でない思考を排除し、意識をより冷静に、状況をより客観的に感じられるようし脳内を洗練させていく。

それは異常なことであった。

いくら、集中力の富んだ者であっても全ての思考を一点に集中させることなどできるはずもない。

人間、妖怪、神だ何だという問題ではなく、理性を有した存在がそうできることが有り得ないのだ。

フランドールのように狂気に飲み込まれ暴走の結果、思考と行動が一点に集約されるといふのならまだ理解もできる話であろう。

しかし、流司は理性的。

どこまでも理詰め論理的な思考に意識はシフトしていつている。与えられた情報から最適解を求めるだけのために働く流司の頭はまるで電子計算機のようなものであった。

常に感情に左右される思考をそのように操ることがどれだけ“異端”であるのかを流司は知らない。

感情を律することはできども、感情を支配することはできないのだ。

“異端”は何故“異端”であるのか？

それは“普通”という比較対象があるからである。

逆に言えば、比較する対象がなければ“異端”は“異端”ではなく、“普通”でしかないのだ

流司の場合にも同じことが言えた。

流司はこの思考の制御を当たり前のものとして行っており、それを誰とも比較するようなことはしていない。

よって、流司にとっては“異端”ではなく“普通”であるのだ。

“異端”であることを疑問に思っても“普通”であることを疑問に感じることはないだろう。

であれば、流司が己の思考の制御が異常であると思つこともないのであつた。

思考しろ。

流司は自己を暗示するように言い聞かせるとクリアになっていく頭でフランドールと咲夜らの戦いを観察し始める。

考察しろ。

咲夜らの動きからフランドールに生まれるはずの隙を見出すために流司は深い深い思考の海に潜って行くのであつた。

流司が思考の深淵に辿り着いた頃、咲夜たちとフランドールの戦いにも動きが見られた。

「それでその案というのはあてになるの？」

「彼、流司は考え無しに動くことができるような人間ではないわ。確実ではなくとも、勝率が半分をきるような賭けはしないはずよ」

「確かにな」

パチュリーの疑問の声に咲夜が答えると魔理沙は納得の声を上げる。パチュリーは咲夜の答えに未だ納得のいつていないような表情を浮かべてしまっているがそれは単純に、『神代流司』という存在についてよく知っているか否かの違いであった。

流司と浅からぬ親交がある咲夜と魔理沙の二人は流司が決して無謀といえる行動を、少なくとも自分から進んで行う類の人間ではないということを知っていた。

つまり、流司が何か行動を起こすときは大抵が高すぎるリスクがなく、見返りを望むことができるのである。

「そうまでいうのなら信じてみましょう。例え失敗したのだとしてもレミイが来るのを待てばいいもの。もしこれで妹様が止まるといふのなら儲けものでしょうし」

フランドールの相手をせねばならないという事実が変わらないからには、どの道フランドールの行動を止めることのできるレミアアの到着を待たなければならぬ。

であれば、流司の提案を了承したところで増える手間というのはたいたものではなかった。

咲夜が流司に述べたように一度だけ流司がフランドールに近付くことができる隙を作り出すことくらいは不可能ということはないのだ。「だったら早く隙を作ってしまったらうぜ。もし流司が本当に何とかできるというのならさっさとしてしまっほうが楽だぜ」

「そうね。なら、貴女は牽制。パチュリー様は守りをお願いしますわ。私が隙を作り出しますので」

魔理沙の言葉に頷いた咲夜はパチュリーと魔理沙に指示を出すと返答を待たずに即座に動き出した。

どこからともなくナイフを取り出して投擲。

そのナイフは魔理沙の攻撃によって誘導されていたフランドールへと一直線に飛んでいく。

いくら仕えている主の妹であるかといって、手加減は一切ない。

中途半端に手を抜いてしまえばやられるのは己であると理解しているからだ。

「あれ？今度は咲夜も相手をしてくれるの？」

フランドールへと飛来したナイフは命中することなく撃ち落とされる。

「はい。尤もあまり長い時間はお相手できませんが」

「それでもいいよ。ただ」

恭しく言う咲夜の言葉を特に気にした様子もなくフランドールは言う。

既にフランドールにとっては誰がどれだけの間相手をしてくれるのかということとは関係がないのだ。
ただ一つ重要であるのは、

「壊れないでね？」

瞬間に咲夜のことを襲いかかる無数の光球の群。
だが、それは咲夜に届く前にパチュリーの張った障壁によって食い止められる。

「後ろがから空きだぜ！！」

フランドールが咲夜にきを取られている間に背後へと回り込んでいた魔理沙が極光を放つ。

牽制の域を超えているようにも思えるが、フランドールが相手では易々と命中することはない。

軽やかな動きで光線をかわしたフランドールはそのままの流れで魔理沙へと反撃をする。

それもまたパチュリーの防御によって阻まれるも、フランドールが同時にパチュリーへも攻撃を放っていたが為に魔理沙、パチュリーの二人の動きは止められてしまっていた。

咲夜は周囲の時間を止めると、四方からフランドールのことを襲いかかるように無数のナイフを設置していく。

時間が再び動き始めると同じくしてフランドールへと突き進むナイフ。

時間差で魔理沙の放った攻撃もがフランドールへ襲いかかる。

通常の妖怪であればオーバーキル。

だが、そこは吸血鬼。

迷わずナイフの群れの中へと飛び込むと突き刺さるナイフに構うこ

となどしない。

できた傷など一瞬にして治ってしまうからだ。

「っ！？」

だからこそ、フランドールの動きは止まってしまった。

フランドールの足に突き刺さっていたのは“銀製”のナイフ。

あえて紛れるようにして咲夜は銀製のナイフを投擲していたのだ。

一本の銀ナイフくらいでは弱点であろうともフランドールが死ぬことなどはない。

それでも、動きを鈍らせ、一瞬止めるくらいはできていた。

「流司ッ！！」

その隙を流司が見逃すはずもなく、

転逆せよ。

フランドールだけでなく、咲夜らも気づかぬ間にフランドールの真後ろに立った流司はその手をフランドールの背に当てると能力を発動させるのであった。

頁百二十三、『吸血鬼を出し抜く』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『キングを出し抜く』

より。

次回、決着。

長すぎましたね……

“ノイズキャンセラー”と呼ばれる技術がある。環境音を収集しそれと逆位相の信号をオーディオの信号と混合して出力することで環境音を軽減するものである。

これは波長の性質を利用した技術であった。

“干渉”という物理学的な現象がある。

波における干渉とは、複数の波の重ね合わせによって新しい波形ができることだ。

この性質は互いにコヒーレントな、つまるところ相関性の高い波同士であるほど顕著に現れる。

全く同じ波形を作り出す波を重ね合わせればその強さは増し、正反對の波形を重ね合わせればそれは相殺されるのである。

“感情”とは揺らぎだ。これは“意識”と言い換えても良いであろう。

“感情”と“意識”は共に脳の活動の結果生じるものである。

脳の活動とは電気信号の交信にあり、それは“脳波”という形で目視することができる。

即ち、“感情”という事象も“脳波”によって引き起こされているものなのだ。

では、その“感情”と相対的な波形を持った波をぶつけた場合、一体何が起こるのか？

答えは極めて単純である。

「おっと」

流司は意識を失い崩れ落ちてきたフランドールのことを抱き止める。急激な“感情”の変化、“感情”の相殺とは“意識”の停止、気絶をもたらすことになるのである。

「……何をしたの？」

「ちょっとした電気信号を叩きこんだだけだよ。まさか、気絶までするとは考えていなかったけれどな」

余りにも呆気ない結末に咲夜は言葉を詰まらせたように流司に尋ねた。

流司は赤子のような健やかな寝息を立てているフランドールを抱いたまま咲夜に近付くと、まるでちょっとした買い物を済ませたかのような口振りで答える。

咲夜は流司が一体何を引き起こそうとしているのかは知らなかったが、恐らくフランドールの意識を刈り取るうとしているのだということとは推測していた。

人間である流司に吸血鬼であるフランドールのことを力づくで押さえることができる力はなく、フランドールに接近させてほしいと流司が頼んだことで何らかの衝撃を与えるのだからと考えていた。

だが、流司が行ったのはフランドールの頭に手を翳し一言呟く。たったそれだけであった。

これでは流石の咲夜も一体流司が何をしたのか考えることすらできなかった。

一方の流司もフランドールの気絶は少々予想外のことであった。

気絶という可能性を加味していたとはいえ、実際に起こり得る可能

性は少ないと考えていたからである。

“感情”の相殺とは、精神を起伏の少ない平時の状態へと至らせることなのだ。

そのため、仮に成功しても本来であれば平時と変わらない状態に意識が戻るだけである。故に流司は咲夜にフランドールの普段の様子を尋ねたのだ。

フランドールが平時の状態でも“狂気”を孕んでしまっていたのであれば、流司の行動は無為に期すことになりかねないからである。

その上、一瞬の“意識”の停止をもたらしてもそれが気絶に至るということは稀であった。

フランドールが意識を失うことになったのはそれだけフランドールの“狂気”という感情が根強いものであったからだ。

その感情が強固であればあるほど相殺によって生じる落差は大きなものとなる。

結果、急激な感情の変化に処理の追い付かなくなった脳が“意識”を停止させてしまうのだ。

「そうなの。と言っても上手く理解できてはいないのだけど。思ったのだけど、流司の能力で妹様の意識、もしくは感情を“転逆”させれば良かったのではないの？」

「折角生き延びようと画策しているのに俺を殺す気か？」

「？」

流司の避難するような言葉に咲夜は首を傾げる。

「忘れたのか？俺の能力には代償が必要なんだよ。そうできれば越したことはないのだけど」

「あつ、そういえばそうだったわね」

咲夜が口にしたように流司がフランドールの意識に介入してしまう方が回りくどくはないことは明白であった。

しかし、“代償”を必要とする流司の能力上、吸血鬼であるフランドールの、しかも非常に強固な感情であった“狂気”を転逆するとすると、その代償もまた計り知れないものとなってしまふのだ。

流司はそれを避けるためにフランドールの“狂気”の波長とは真逆の波長を流し込むという回りくどい方法を取るしかなかったのだ。

「相変わらず、使えるのか使えないのかよく分からない能力ね」

「……どうせ、俺の能力は中途半端だよ。そもそも、同じ人間であるはずの咲夜や霊夢の能力がおかしいんだよ」

そう流司が愚痴ってしまうのも仕方がない。

種族としては流司と同じ、咲夜や霊夢がそれぞれ有している能力は共に“人間”という種族を考えてみれば破格の能力であり、流司とは異なり“代償”もないのだ。

これには流司も卑屈になつてしまふだろう。

「あら、流司の能力も生活していくには便利じゃないの」

「素直には喜べないんだけどな……」

流司は戦いを好んでいるわけではないが、場合によってはそこらの妖精よりも弱い己の能力を誇っていいのか頭を悩ませる。

生活を送る上で便利であることは紛れもない事実であったので、少

なくとも疎ましく感じることはないも、微妙と言わざるを得ない。

「それじゃあ、お嬢様へ報告に行きましょう。妹様は……ふふっ、そのまま抱いていてくれるかしら？」

「こうしているとただの子供何だけどな」

咲夜は流司の袖を掴むようにして寝ているフレンドールを見て微笑んで言う。

流司もわざわざフレンドールを起こすような真似をするつもりはなく、優しく抱き締めながら、荒れ果てた図書館を見渡すと、

「何はともあれ、一件落着かな？」

安堵の息を漏らすように呟くのだった。

頁百二十四、『戦いを終えて』（後書き）

サブタイトル。

アガサ・クリステイ著。

『葬儀を終えて』

より。

ようやく終了？

いや、始まりか……

まあ、後は本来の目的を果たして終了かな？

この章も来週には終わらせるといいのだけど……

強力に思えて、やはり悩まざるを得ない主人公の能力。
いつかはチート性能を見せてくれるのか？

「改めまして、私は『レミリア・スカーレット』。紅魔館の当主をしているわ。今回は世話になったようね」

「いや、元々は自分で引き起こしたことなので」

流司はレミリアに畏まったように頭を下げる。

実際、招待された身でありながらこれだけの騒ぎと被害をもたらしてしまった流司では紅魔館の当主であるレミリアに頭が上がらないのも無理がない。

かの吸血鬼の居城に損害を与えたのだ、殺されてしまってもおかしくはないといえた。

その為か流司の顔色も若干悪いように見える。

尤もレミリアにとっては“些細な”ことでしかなく、自分の手を煩わせることもなかったこともあり、ちょっとした余興程度にしか考えてはいなかった。

「そう、でも本当に良かったわ。折角、招待したというのに私に会うまでに死なれても困るもの」

「それじゃあ、俺がもう死んでもいいみたいですね？」

レミリアの言い回しに流司は皮肉をいうように口を尖らせる。

「ごめんなさいね。そういった意味で言ったわけではないわ。貴方が私に会う前に“死ぬ”ことがないことは識っていたから。それと、そんなに畏まる必要はないわ。むしろ、己を“偽って”いる方が不

愉快ね。楽しんでなさい」

「なんだが調子が狂うな」

見た目が自分よりも明らかに若いレミリアに会話の主導権を握られ、いよいよにあしらわれているような感覚を受けた流司が頭を掻くようにして呟く。

これは種族の差というよりも純粹に“経験”の差であった。

いくら、容姿が幼くともレミリアは何百年もの齢を重ねている熟練者である。

未だに二十歳にも至っていない流司と比べる方がおこがましく、経てきた経験も格段にレミリアの方が数が多く、濃密なものであった。

流司もレミリアも共にその“背”に家名を背負っている立場であったが、二人の違いは語るまでもなく明らかかなものであったのだ。

「素直であることは美德よ。恥じることはどこにもないわ。それに人間である貴方がほとんど無傷、そして狂気に飲まれてしまったいたフランを止めたのだもの。“ただ”の人間にはできることではないわ。誇りなさい」

「それこそ気恥ずかしく感じてしまっただがな……」

レミリアの真っ直ぐな嘘のない賛辞に流司は慇懃な礼をもって答える。

咲夜らの協力や偶然が重なったとはいえ、流司という個の力がフランドールを食い止めたという事実に変わりはない。

そのことにレミリアは純粹に感心していたのだ。

正直な話、あの状態のフランドールを止めることはレミリア以外でもできなくはないことであった。

ただし、それは双方に大きな被害をもたらした場合である。それを流司は互いに無傷で成し遂げたのだ、レミリアが“ただの”という接頭詞をつけたのも当然のことであろう。

「それで一つ分からないことがあるの」

レミリアは表情を引き締めて口を開いた。

全て知っているような素振りを見せていたレミリアもただ一つだけ、理解のし難いことがあったのだ。

それは聡明なレミリアであっても答えを出すことができないほど理解不能なことであった。

それは……

「どうして、貴方の首筋にフランが噛みついているのかしら？」

レミリアの視線の先には小判鮫よろしく、流司の背中にしがみつき首筋に牙を立てているフランドールの姿がある。

流司の血の気が失せてしまっているのは決して気のせいなどではないだろう。

「いや、まあ、色々あって……」

流司は首筋のフランドールのことを全く気にしてはいないような素振りで苦笑する。

“色々あって……”ではないだろうとレミリアは口には出さずに内心で呟く。

今まで吸血をされていながら、そんなことを感じさせない態度で流司が相対するものだから、レミリアもあえて触れないように心掛けていたもののそれも限界であった。

「ふふお、へへえふおひお？」

「フラン、食事中に口を開くものではないわ」

「まあ、確かに行儀は悪いな」

この場にまともな感性を兼ね揃えたものがいれば、“突っ込むところはそのなか！”と声を上げていたことだろう。

レミリアも先程まで敵対していた流司とフランドールがどうしてこのような状況に至ることになったのか疑問に思っていた。

けれども、如何せんレミリアもフランドールと同じく吸血鬼であったがために、“吸血”をしているという現実よりも“吸血をしながら口を開く”という行儀の悪さに苦言を呈してしまっていた。

「ごめんなさい。でも、流司が吸ってもいいと言ったから吸っているんだよ？」

「……………正気なの？」

「生憎と意識が朦朧としてしまうほどの血は吸われていない」

流司の答えはレミリアが望んでいたような答えではなかったものの、流司が自己の意志のもとにフランドールに血を吸わせているのだからということとはレミリアにも察することができていた。

「まあ、死んでしまうほどの血を吸わせるつもりはないからな。んと、フラン、ここまでだ。」

そろそろ危ないんでな」

「もっ？」

「これ以上だと二度と吸えなくなるけど、それでもいいのか？」

「分かった」

まるで飼い主の命令に従っている忠犬のような素直さでフランドールは流司の言葉を聞き、首筋に突き立てていた牙を離して流司の背中からも降りる。

「……………」

そんな己の妹の見たこともない様子にレミリアは絶句として二人を見つめるのであった。

頁百二十五、『謁見』（後書き）

バイトが予定外に延びてこの時間。

随分前の伏線回収？

自分の血でフランドールを餌付けする主人公でした。

「とまあ、こんなところね」

「これで取り敢えずは目的を達することはできたか」

レミリアが口を閉ざしたと同時に流司は開いていたメモ帳を閉じる。紅魔館へ来た本来の目的を果たしたことで、流司は安堵の息を漏らしていた。

フランドールが流司の背から離れた後、流司はレミリアと部屋に二人残されるようにして話を伺っていた。

話も滞りなく進み、これによって流司は阿求より依頼されていた目的の全てを果たしたことになる、後残すところは集めた資料を阿求と渡すだけである。

行く先々で命の危ぶまれかねない状況に遭遇してきただけあり、流司の漏らした息には並々ならぬ思いが込められているようであった。

「随分と感慨深そうね」

「そりゃ、それだけのことをしたつもりだからな。“何でも”だなんて滅多に口にするもんじゃなかったよ」

自分の不用意な言葉を後悔するように流司は呟く。

阿求からの頼みを流司が断るか否かは別問題であるとして、“口が災いの元”であることを身をもって流司は経験したことになる。

それは流司が己の不用意さを感じてしまう程度には後悔をもたらすものであった。

「言葉には力がある。口にしてしまった言葉が悪戯に“運命”を変
えることだってあるわ」

「ファム・ファタル吸血鬼”に言われるとこれ以上ない説得力だな」

「バンブ毒婦”だなんて酷い言いぐさね」

「これは失礼」

流司はレミリアに芝居がかった一礼をする。

「バンバイアvampire”の略の“バンブvamp”は妖婦、毒婦の意味を持つ
た言葉である。毒婦といえば、一般的に男を惑わせる悪女という認
識のあるものだ。」

これは“ファム・ファタルfemme fatale”、“運命の女”という言葉
にも繋がるものである。」

“運命の女”。

ここでの意味は赤い糸で結ばれた相手というのが近い意味であるが、
流司がレミリアのことをそう称したのには意味がある。

無論、それはレミリアの有している能力の『運命を操る程度の能力』
にかけてのことであった。」

「それでこの後はどうするのかしら？まだ日も完全には暮れてはい
ないようだから早速戻ることにもするのかしら？」

「そうだな、まだ帰れないこともないか」

日が延びてきたこともあり、レミリアが言うように太陽が地平線へ
と姿を消してからまだ間もない時間であった。

極力、日が暮れてから外へと出歩くような真似をするこ
とは避けていた流司も、まだ大丈夫だろうと考えていた。
紅魔館から人里ではそれなりの距離があつたが、空を飛んでいけば
障害物と呼べるものもない。

闇に包まれてしまつても、“外”とは異なり、“幻想郷”では明か
りが点いているのは人里ぐらいなものであつたので迷うという心配
もなかつた。

「……決めたわ。今日は泊まっていきなさい」

「はっ?」

完全に帰るつもり的心構えだつた流司はレミリアの言葉に驚く。

「別に急ぎという訳ではないのでしょうか?折角、招待したというの
に全くのもてなしも内容であれば私の名が廃るわ。今すぐ、届けな
くてはいけないということもないのだから」

「それはそうだが……」

「なら、構わないでしょう」

「咲夜」

チリン。

流司の返答を聞き届けたレミリアは手元にあつたベルを軽く振る。

「はい、お呼びでしょうか?」

金属同士がぶつかりあつたことで響いた音が余韻を残す前に咲夜が

レミリアの背後に姿を現した。

「流司を客室に案内して上げてちょうだい」

「畏まりました」

「……というわけだから今日はゆっくり休んでいきなさい」

「じゃあ、今晚だけ世話になるよ」

強引に一泊することになった

それだけ、流司は口に出すと先導する咲夜の後に続きその場を後にするのだった。

流司が案内されたのは過度な装飾が施されているというわけではない一室であった。

客室としての最低限の機能を果たしているだけであり、どこか真新しさを感じさせるその部屋は普段は全く使われていないということを流司に知らせていた。

「暇だな……」

備え付けられているベッドに身を投げ出し天井を見上げる流司が呟く。

既に咲夜の姿は部屋にはなく、今頃は夕食の準備をしているはずである。

流司も手伝つと申し出てはいたが、“客”であるということを利用してやんわりと咲夜に断られてしまっていた。

確かに“客”である流司が夕食の準備を手伝ってしまったのは、ホストであるレミリアの顔が立たないということは流司も理解のできる場所だったので、強くすることはできず咲夜の言葉に従っていたのだ。

結果、流司にもたらされたのは何もすることのない怠惰な時間であった。

一応、紅魔館内を自由に歩いても良いことになっている流司であったが、暇であっても出歩くだけの力が余っているわけでもなくただただ部屋の中で暇を持て余しているだけであった。

コンコン。

「はい？」

そんなときドアがノックをされる音が部屋に響く。夕食の準備ができたのかと流司はベッドから上半身を起こして返事をするが、一向に反応が返ってくることはなかった。

仕方ないと流司は完全に起き上がり、ドアのもとへと些か気だるさを感じる身体を引きずっていく。

「どちら様？」

ガチャ。

ドアを開いた流司の視界には一瞬何者の姿も映らなかった。

しかし、

「下よ」

「ああ、すまな……い？」

声に反応した流司が視線を下に向けるとそこにいたのは、動かない
大図書館ごと、『パチユリー・ノーレッジ』の姿であった。

頁百二十六、『吸血鬼』（後書き）

ZUN氏がどこまで考えてキャラづくりをしているのかは分からないけれど、レミリアの能力と吸血鬼を関連付けたのは実に感嘆します。

まあ、深読みかもしれませんが。

サクサクいつて終わらせたいと思います。

じー……

「な、なんだ？」

無言で至近距離から流司のことを観察するパチュリーに居心地の悪さを感じた流司がどもりながらも呟いた。

パチュリーが流司に対して興味を持っているということは間違いはない。

ただし、その興味は研究者のそれに近い、もしくは同じものであるう。

頭の頂点から足の指の先までパチュリーは些細なことも見逃すまいと視線を動かし続ける。

まるで視姦されているような感覚を流司が感じてしまうのも仕方がないと思わせるほどの熱の入れようであった。

「少なくとも、姿形は人間と変わったところは見られないようね」

たつぷりと流司のことを観察し終えたところで、ようやくパチュリーが口を開く。

「一応、“人間”であるという自負はあるつもりだ」

そんなパチュリーの言葉に流司は無然とした口調で返答する。

「そう、それが問題。確かに人並み以上の霊力も、幽かに神力も感じる。でも、ただそれだけ」

「はあ………?」

淡々と考えを説明するかのようにパチュリーは語る。

否、それは決して流司に語りかけているのではなく、流司を観察したことで分かった事実を自身で確認するために呟いているだけなのだろう。

「そう、『龍神』の末裔という点以外は全くもって普通。特筆することなど極めて少ない」

齒にももの着せぬ失礼な言いようであったが、流司がそれに怒るようなことはなかった。

第一にそれが事実であるという認識を流司が持つており、第二にパチュリーが一体何をしたいのか流司には理解ができなかったことが理由であった。

「強いていうのならば、その能力の特異性。人間という種族で考えた場合、ある意味で咲夜よりも規格外」

共に人間である流司と咲夜、二人の能力を比べたとすれば、代償がないぶん咲夜の方が規格外といえる。

だが、代償などのことを抜きにして能力という点だけで考えたのであれば、流司の能力も人の枠組みから外れた能力であるといえた。

「けれども、それだけでレミイが興味を持つとは思えない。それこそ、レミイは貴方の能力を、貴方を知るよりも先に興味を持った」

「レミリアが俺に………?」

パチュリーは無言で流司の言葉に頷きを示した。

『神代流司』という存在が興味を持たれることは珍しいことではない。

流司の境遇、取り巻く環境はあらゆる存在がある程度の興味を抱く程度には刺激的であった。

しかし、レミリアはそれが原因で流司に興味を持ったわけではなかった。

少なくとも、パチュリーが言うことにはそう判断できるものであった。

「無論、咲夜のことがあるとはいえ、それは既に終わったこと。レミィが貴方に興味を抱きつつける要因とはなりえない」

「？」

つらつらと話すパチュリーの言葉の意味を流司は把握しきることはできず、その頭上には疑問符が浮かび続けてしまっている。

「だからこそ、こうやって直に顔を合わせに来ただけで、変わらず理解はできなかった……貴方は何？」

「何と言われてもな……」

淡々とした口振りから、感情を感じさせるような口調へと変化したパチュリーが流司の顔を見つめる。

真っ直ぐと見つめてくるパチュリーの瞳に流司は気を圧され、言葉を詰まらせてしまっていた。

「馬鹿なことを聞いたわ。時間を取らせてごめんなさい」

流司が声を詰まらせたままであったことでパチュリーは諦めたのか、流司に踵を返して背を向ける。

「あつ、ちよつと!!」

流司は慌ててその背に声をかけるもののパチュリーは一度も無理向くことはなく、流司の視界から姿を消すのであった。

「レミリア」

ワインの注がれたグラスを一人傾けていたレミリアの名を呼ぶ声が響く。

「あら、パチエ。珍しいわね、こんな時間に顔を見せるだなんて。いつもは図書館にこもっているというのに」

レミリアへと声をかけた主、パチュリーの姿を見たレミリアは口元に笑みを浮かべて言う。

「今は図書館にこもれる状態ではないから」

「そういえば、そうだったわね」

昼間の戦闘の為に地下の図書館は並々ならぬ損害を被っていた。流石のパチュリーもそのような状態の図書館にこもることもできず、レミリアがワインを嗜むホールへと姿を現していたのだ。

「彼に会って来たわ」

「ふふっ、そう、興味深かったでしょう？」

「全然」

微笑むレミリアに対してパチュリーは首を無表情に振る。

「少々特殊な力があってもただの人間、レミイが興味持った訳は分からなかったわね」

「そう、パチエには分からなかったの」

残念そうな表情を浮かべてレミリアは呟く。

「レミイは時々、理解のできないことをする。咲夜の時もそう」

「また昔のことを。でも、そうよ。“理解できない”ということは何よりも興味を惹くのよ。貴女だってそうでしょう、パチエ？」

「まさか!？」

レミリアの言葉に感じるところがあったのか、パチュリーは表情を一変させて声を出す。

「ええ、“運命”が見えないのよ。こんなこと、“サクヤ”の時以来ね」

「でも、レミイは今日のことであってちゃんと識っていたじゃ

ない？」

「それは間接的に捉えていただけ、実際に見た訳ではないわ」

「そついつこと……」

そう呟くとパチュリーはもう用はないとでも言うつようにそそくさとその場を立ち去ろうとする。

「付き合つてはくれないの？」

レミリアはテーブルの上に置かれた使われていないグラスとワインのボトルへと視線を向ける。

「遠慮しておくわね」

パチュリーは首を左右に振るとその場を立ち去る。

「やっぱり、無駄になってしまったわ」

レミリアはグラスを傾けてグラスに残っていたワインを煽る。

「是非とも私を楽しませてくれるといいのだけど……ねえ、『神代流司』？」

月を仰ぐようにして口にしたレミリアの呟きに気づいたものは誰一人もおらず、煌々と輝く月だけがその言葉を知っているのであった。

頁百二十七、『魔女の考察』(後書き)

さりげなく重要な回

感想は明日返します

頁百二十八、『日常への回帰と忘れ物』

「それじゃあ、世話になったよ」

「またいつでも来なさい。次はもう少しまともな歓迎をすることができるはずだから」

「それは是非とも願いたい」

紅魔館の扉の前に立った流司がレミリアの言葉に振り返って苦笑する。

ある意味で熱烈な歓迎を受けた流司であったが、もうこのような歓迎はごめんであった。

流司が見上げた空は快晴。

為すべくことを為し終えた流司の心は晴れやかで、余裕に満ちている。

人里に戻り阿求への報告を済ませれば、騒がしく様々な出会いがあった流司の数日も正真正銘終わりを告げるだろう。

「また遊んでくれる？あと、血も……」

「……………機会があれば程ほどにな」

纯真そうな瞳で酷なことをいうフランドールに流司はひきつらせた笑みを浮かべるしかない。

紅魔館を訪れる度にフランドールの相手をしていただけでは、流司でもいくら命があっても足りないはずである。

「（なるべく、来るのは止めておこう。少なくともフランに顔を見せることは）」

流司は内心決意を固める。

フランドールが大人しくしている分には大丈夫であるが、今回の一件のように狂気に飲み込まれた状態のフランドールと顔を会わせるのは何としても避けたかった流司の表情は強張る一方であった。

「来るのならば次はしっぴかり玄関から来なさいね。それと一人で

「心得ておく」

依然としてぽっぴかりと空いた紅魔館の壁に一瞬視線を向けたパチュリーが素っ気なく言う。

原因を作り出した魔理沙といえば、片付けのどさくさに紛れていつの間にかに姿を消していた。

「ちゃっかりと目的にしていた本は“借りて”いったようであり、その“ちゃっかり”としている行動に流司は感心してしまっていた。

「落ち着いた頃にもう一度招待するわ。お嬢様もそれを望んでいるようだから。それまで、しっぴかり生きていなさいね」

「そう、何度も命の危険と遭遇してたまるか」

「どうかしら？流司はそういった巡り逢いには困らないようだから」

「それは……」

咲夜の尤もな言葉に流司は言葉を返すことができない。

季節毎に何かしらの事件に巻き込まれている流司であったので、そ

れも仕方がない。

逆にこの場合は少なくともこの夏は安全に過ごしていけるといっ前向きな考えを持った方が良いのかもしれないだろう。

「まあ、人里には時折買物に行くことになるだろうから、その時には顔を見せるわ」

「その時は俺が腕を奮わせてもらうさ」

「楽しみにしておくわ」

「では、今度こそ」

頭を下げてから流司は大地を蹴って空へと飛び立つ。

空に聳える白き入道の山は夏の訪れを告げるように空高く高く立ち上る。流司もまた入道雲に届かんと高く舞い上がり人里へと帰って行くのであった。

「行ったわね」

「はい、お嬢様」

もはや、豆粒もないほど小さくなった流司の背を見たレミリアが言う。

吸血鬼の身体能力がなければ流司の姿を見つけ出すことすら難しいだろう。

けれども、咲夜は流司が何処にいるのかしっかりと認識しているか

のようにレミリアに答えた。

「全く、今回は散々だったわ。これでは、紅魔館の当主として申し訳が立たないというものよ」

「申し訳ありません」

いくら流司の目的が『幻想郷縁起』、編纂のための資料集めであったからとはいえ、客人を招くホストという立場としては今回の招待は失敗であるほかなかった。

「別に咲夜の所為という訳でもないわ。強いて言うのだとすればあの白黒が原因。頭を上げなさい」

深々と頭を下げていた咲夜にレミリアは声をかけて頭を上げさせる。

今回の一件は偶然が招いた最悪の中の最善の結果であった。

流司が魔理沙と出会ったのは偶然で、フランドール戦うことになったのは最悪、被害が図書館だけであるのは一部の者を除けば最善であるといえる。

仕方がないという言葉で片づけることのできるようなことではなかったが、これ以上はどうしようもないことも事実であり、この結末をレミリアはそれなりに満足していたのだ。

「さて、室内に戻るわ。日陰とはいえ、日光は吸血鬼には毒だから

レミリアは日の光を疎むように目を細めると扉の方向へと足を向ける。

「ねえ、レミィ」

「何よ、パチエ？」

悠々と扉へと向かう足を止めるように声をかけてきたパチユリーにレミリアは若干の不機嫌さを滲ませて反応を示す。

「何か忘れていているような気がするのよ。レミィは何か覚えがない？」

「忘れてること？……心当たりはないわ。咲夜はある？」

「いえ、存じ上げません。お嬢様から預かっている言葉もありませんし……」

人差し指を顎に当てるようにして、小首を傾げる咲夜。

そんな咲夜もまた思い浮かぶ点は何一つなかったのだった。

「誰も思い出さないのだからそれほど重要なことではないのじゃない？」

「重要じゃないといえばそのような気がするのだけど、忘れてはいけないという気もするのよね」

喉の奥に魚の小骨が刺さったような表情を浮かべるパチユリー。

「ねえねえ」

そんな中、声を上げたのは今まで黙ってレミリアたちの会話に耳を傾けていたフランドールであった。

「フラン、今は少し」

「ねえ、流司に“美鈴”のこと紹介しなくて良かったのかな？」

「「「あっ……」「」」

フランが指を指す方角にいるのは門番である『紅美鈴』の姿。
昨晚の夕食では全員が顔を合わせて食事をした訳ではなかったのだ。
流司と美鈴は顔を合わせてはいなかったのだ。

「だから、もう食べられませんかえ〜」

「とりあえずは……」

咲夜が腕を振るうと空気を切り裂くような音が聞こえ、

サクッ。

「ツウウツツ！！？！？」

ただでさえ、紅い紅魔館前は更に紅くなるのであった。

頁百二十八、『日常への回帰と忘れ物』（後書き）

次回、今幕最終話。

美鈴は素で忘れてしまったという……

静かな、厳かな空気が流れているのは流司が以前にこの場所を訪れた時と同じであった。

流司は緩やかに湯気を立てるお茶の入った湯飲みに手を伸ばすと、香りを楽しむように湯気を吸い込む。

「……………」

流司の目の前で資料を眺めているのは、九代目、“阿礼乙女”の『稗田阿求』。

その可愛いらしいともいえる容姿とは反対の表情で流司が届けた資料に目を通し続けている。

時間に換算してみれば、既に一刻を優に超え、数刻にも及んでしまっている。

流司の集めた資料がそれだけの量を誇っているかといえば、そうでもない。

阿求の本を読む速度を想定しても精々が一刻に届くという程度であった。

それでも、阿求は何度も資料に目を通し、篩にかけているかのよう
に真剣な表情で内容を吟味していた。

その余りの剣幕に流司はそそくさとその場を離れることにはいかなかった。

流司の依頼された役目はできるかぎりの情報を集めることであって、阿求が求める完全な資料の提出ではない。

阿求が現在目を通してしている資料は流司の持てる全ての力を出し切っ

てといつても差し支えのない力を奮って集めた資料であり、流司はあくまでも手渡すだけで良かったのだ。現在、阿求と対峙することになっているのはただ単にタイミングを誤ってしまったに過ぎなかった。

「お待たせしました」

無限のようにも感じていた無言が支配を続ける時間は阿求の声によって打ち破られた。

「いや、そんなことは……」

流司は内心の安らぎと疲れを感じさせないように笑顔を浮かべると、被りを被って阿求に答える。

疲労困憊とまではいかないものの、それなりの精神的疲労を先ほどまでの空間は流司に与えていた。

そんなことを匂わせないように微笑みを浮かべる流司はしばらく前よりも芸が達者になっていたと言えるだろう。

「そうですか？なら、良かった……」

流司が少々無理をしているということを知ってか知らぬか、阿求は意味深な笑みを一瞬見せるもすぐさま安堵した表情になる。

「それで、資料の方は……？」

「十分です。まさか、ここまで集めてもらえるとは思っていませんでした。なので、ついつい読みふけてしまっ……本当に申し訳ありません」

流司の問いに阿求は少し照れるように頬を赤くして答える。

「それだけ言ってもらえれば苦勞して集めた甲斐があったというもんだ」

命を張って調べ上げたことであつたので、阿求の絶賛ともとれる言葉は心底から流司の身に染みていく。

もし、無駄などと言われてしまった暁には流司は真っ白に燃え尽きてしまっていたかもしれない。

「ありがとうございます。自分で言つたとはいつても、無理があるとも思つていたので、これだけのものを渡されたのは本当に驚きだつたんです。私が同じことをしてもこれほどのものにはならないでしょうし」

阿求のいう通りであつた。

これは流司であつたからこそ、調べることでできた内容ばかりである。

基本的に気紛れであるような癖のある者を対象にしたものばかりであつたので、阿求が同じように尋ねたとしても、流司と同じような回答を得ることができるとは限らなかつたのだ。

今回、流司が話をしに行つた者は幽々子であり、レミリアであり、流司に多少なりとも興味を持っていた者であつた。

それ故に流司が滞りなく話を伺うことができたということも大きいであらう。

「そうか、少しでも義理を果たせたようで良かったよ。じゃあ、これで俺はお暇しようかな？しばらく、放っておいてしまった奴がいるんでな」

流司はゆっくりと立ち上がろうとして、家で不貞腐れてしまっているかもしれない首巻きの姿を思い出して苦笑する。

実に三日もの間、放っておいてしまっていたので機嫌を良くするためには骨が折れてしまっただろうとも同時に流司は思っていた。

「あっ、もう少し待っていただいてもいいですか？まだ、足りていない資料があるんです。ついでにそれもお願いしたいのです」

「足りてない……？」

流司は呼び止めてきた阿求の言葉に怪訝そうな顔をする。

「つい先ほどまで十分だと言っていたような人間の台詞には思えなかったからだ。」

「はい。でも、そう畏まる必要はありません。何処かに行つて欲しいとお願ひするわけではないので。ただ、重要、今回のお願いでも重要なことだと言えるかもしれないので真剣にお願いしたいのです」

「……わかった」

阿求の真つ直ぐな瞳に流司は姿勢を正して向き合つ。

真摯な態度には相応の態度を持って相対すると決めていた流司もまた真剣な表情を浮かべるのだった。

「……では、『神代流司』さん。貴方についてお聞かせ下さい」

「俺に、つい、て……？」

肩透かしという訳ではなかったが、どんなことを言われるのかと心構えていた流司は予想外の言葉に啞然としてしまい、阿求へと返す言葉も切れ切れになってしまう。

「何を驚いているんです？」

「いや、だつて『幻想郷縁起』は“幻想郷”の住人について纏めたものだろう？」

「そうですよ。貴方ももう“幻想郷”の住人なのですから当然じゃないですか」

何馬鹿なことを言っているのだと言うような顔で阿求は口を開く。一方の流司はきょとんとしてしまった顔で口を半開きにしてしまっていた。

己が“幻想郷”の住人であるという認識は流司の中ではどこか希薄であった。

それは度々という訳ではなかったが、“外”に戻ることもできるということも影響しているだろう。

そして、何よりも流司は“幻想”の中で暮らしてはいても生きてはいなかった。

“幻想”に認められてはいなかったのだ。

流司の“幻想入り”は偶然が重なったもので、本来の“幻想入り”ではなかった。

“幻想郷”で暮らすということも本人の意思はどうであれ強制されたことであつた。

流司は“幻想”ではなく、“現実”に生きる人間である。

“外”に忘れられた訳でもなく、“幻想”の中でしか生きることが

できないという訳でもない。

そんな流司が“幻想郷”で暮らす。

それは“矛盾”に満ちたことであり、非常に不安定なことであった。故に“幻想郷”は流司という存在を“幻想”のものへと仕立て上げようとしていた。

命を奪うという現象を為すことによって。

それが流司が不幸とも思えるほどに度々命の危機に晒される原因だったのだ。

「ははっ、そうか……」

流司は自身の中で何かが変わるような気がした。

否、何かが変わり、同時に流司を取り巻く環境も変化していた。

“幻想”に生きるものによる認識。

それによって流司はようやくに“幻想郷”の住人へと至ったのだ。

「何がおかしいのです?」

「いや、俺ももう“幻想郷”の住人だと思うとな……そうか……」

「?」

今度は阿求がきょとんとしてしまう番であった。流司の笑いの意味がわからず疑問符を浮かべてしまっている。

そんな、阿求に流司はどこか晴れやかな笑顔を向けて、

「まあ、俺は『神代流司』。“幻想郷”の、“楽園の神主”ってことだよ」

と言ったのであった。

頁百二十九、『樂園の神主』（後書き）

第七幕完。

主人公、“幻想郷”の住人となるでした。

まあ、“幻想入り”の定義を考えると矛盾でしたから。

次回はリクエストの書き上げます。もしかしたら、明日の投稿は
ちよつと難しいかも……

でも成し遂げてみせる。では

欄外、『とあるメイドの批評録』（前書き）

無理だった代わりに二本立て。

といっても、後半は話ではないような……

欄外、『とあるメイドの批評録』

ごくりっ。

生唾を飲み込む音が部屋の中に妙な響きをもつて広がる。

それは机の上に広げられた料理に原因があった。とはいえ、空腹を堪えているというわけではない。

むしろ、その料理を作り上げた者、流司には料理を口にするつもりは全くない。

これらの料理はただ一人の為に作られたものであったからだ。

「……………」

流司が無言で見つめる先には手に持たれている一膳の箸。

その箸は迷うことなく、幾つもある皿の一つを目指していく。

そこにあるのは黄色の帯。

一口大の大きさに切り分けられた“出汁巻き卵”であった。

洗練された美しさを感じさせる動きで出汁巻き卵を掴んだ箸はゆっくりと口元まで運ばれ、黄色の帯はその一部を欠損させる。

吟味。

まさにその言葉を体現するかのよう咀嚼されていく出汁巻き卵。

箸を置き、瞼を閉じて全ての感覚を味覚に集中させるようにして口を舌を動かすは一人のメイド　十六夜咲夜であった。

ふと、咲夜の口の動きが止まり、噛みしめられていた出汁巻き卵が喉を流れる。

傍らにあった湯飲みを手に取り咲夜は中身である水を若干口に含ませる。
僅かな水を馴染ませるかのように口の中でしばらく動かした咲夜は
出汁巻き卵と同様に静かに飲み込んだ。

そこでようやく咲夜は閉ざしていた瞳を開ける。

射抜くような鋭い視線に捉えられた流司の緊張は最大まで至り、

「ごくりっ。」

再び生唾を飲み込む。

「まあまあね」

「……正直、安心していいのか悩むんだが」

「“良”ではあるけれど“優”ではないってところかしら？」

「“不可”や“可”でないだけマシということか」

一応は認められたということを理解した流司が安心したように呟いた。

実際、咲夜の口から“良”という言葉が出たということは相当なものであったのだ。

和・洋・中、料理の種類は数多あれども“卵”という食材はいずれにおいても基本中の基本で、最も重要な役割を持っている食材の一つであった。

それ故に“卵”を上手く使うことができるか否かで料理人の腕が分かると言っても過言ではない。

洋食であれば、プレーンオムレツ。中華であれば、黄金炒飯。そして和食であれば、卵焼き、出汁巻き卵の味をみればそれだけで料理の是非を決めることができるほどである。

卵本来の味を殺してはいけないうために、必要最低限の調味料を使う以外は卵の解き方、火の入れ方だけで味を整えるこれらの料理は生半可な腕では美味しいと呼べるものを作ることはできない。

火を入れすぎてしまえば、固くなり焦げができてしまい、入れなすぎれば、形を上手く整えることができずにボロボロとなってしまう。

調味料を加えすぎれば、卵特有の甘さを打ち消してしまい、少なすぎれば、無味に近いような味わいになってしまう。

調理自体は単純であるので慣れればそこそこできるようになる。だが、それでは“可”と呼べるできになっただけにすぎないのだ。そこから“良”、“優”と呼ばれるようなものに仕上げるには相当の努力を積み重ねあげなくてはならない。

「腕自体は上がっているわ。最初の頃とは比べ物にならないほどにね」

そついう咲夜の瞳には偽りがなく、本心からの言葉であるということとを流司にも知ることができた。

「そりゃ、咲夜に習い始めた頃と同じわけにはいかないさ」

「あら？どつして？」

流司が咲夜に料理を習い始めた頃、つまりは流司が幻想郷にやってきてから間もない頃のことであるが、その時の流司の料理の腕が酷

いものであるということにはなかった。

なまじにも外の博麗神社に一人で暮らしていたのだから基本的な家事をこなすことはできていた。

とは言っても、それが上手であるかといえれば判断は難しいといえるだろう。

最低限暮らしていけるだけの技術というものが正しい認識であったといえる。

プロフェッショナルである咲夜にしてみれば、“可”にも届かないみれたものではないほどである。

よって、ちよつとした縁から咲夜に料理を習い、“可”と呼ぶことのできるレベルまで鍛えられ、咲夜の指導も終わった流司であった。その後も流司は料理を作っていたわけであり、“可”ならともかくとして“不可”と評されるようなことがあるわけにはいかなかった。

そして、何よりも、

「あれだけ美味しい料理の作ることのできる咲夜に一对一でならつておきながら、全くの上達がないなんていかないだろう?」

「そ、そう……」

咲夜はうつすらと頬を染め上げるようにして顔を俯かせる。

咲夜にとっては美味しい料理を作ることにはメイドとしての責務であり、改めて誉められるようなことではなかった。

主であるレミリアから贅辞の言葉を受け取ることにはあっても、流司が言ったようにただ単に褒められるといったことは全くなく慣れているからのことであった。

「さて、咲夜のお褒めもいただいたことだし、俺も食べるとするか

な

咲夜の評価が下るまでは全く料理を口にするつもりはなかった流司であったが、昼時にこれ以上空腹を耐えることができるというわけもなく、己の前に置かれた箸を取る。

「流司」

流司が並べられていた料理を取り皿へと移しているときであった。

「なん……っん!？」

咲夜の呼び掛けに返事をしようと口を開いた瞬間に口の中に侵入した物体によって、声は最後まで発せられることなく途切れる。

同時に広がる卵の程よい甘み。

流司の口の中に放り込まれた物体は出汁巻き卵であった。

「どっ? 食べてみた感想は？」

呆気に取られ咀嚼することも忘れていた流司に咲夜が声をかける。その声に我を取り戻した流司は慌てたように出汁巻き卵を噛み飲み込むと、

「……まあまあだな」

と呟きを漏らす。

「でしょ?」

流司の感想に満足げに咲夜は言葉を返すと何事もなかったかのよう

に料理をとりわけ始めるのであった。

そう、これは何気ない日常の一片。

神主とメイドの穏やかな昼下がりである。

また、どこことなく気まぜい空気を醸し出し、仄かに顔を赤くした二人が食事を終えるのにかかった時間が普段よりも長かったことは余談であるのかもしれない。

欄外、『とあるメイドの批評録』（後書き）

風月さんリクエストでした。

卵は重要です。

マジで大切です。

卵料理が料理の全てを征します。

とまあ、料理屋でバイトしている作者の独断と偏見+バイト先での
教えでした。

さて、次だ。

欄外、『幻想郷縁起』とある項（前書き）

パソコン閲覧の方は縦書き表示の方がそれっぽいかもかもしれません。
まあ、PDFなので推奨はしません。

欄外、『幻想郷縁起』とある項

楽園の神主（*1）

神代流司 ryuji kamishiro

職業 神主？（*2）

能力 転逆する程度の能力

住んでいる場所 博麗神社、人里

？ ？ ？

幻想郷に偶然やってきた外側の博麗神社の神主さん。

正確には博麗神社の神主という訳ではなく、神代家という外で代々続く神職の家系の嫡子である。（*3）

ペット？のような管狐の幻想入りに巻き込まれて幻想郷へやってきた外来人であったが、幻想郷での龍神への信仰の象徴となるために幻想郷へ移住した。（*4）

人里に自身の家を持っているが、専ら博麗神社に居候している。（*5）

神主というよりも人里では龍神の使者のような人間として知られている。当初は大変な騒ぎであったが、現在では落ち着いており、人里の人間にとってはいい相談役のような存在となっている。

外から来たことから能力を有しているとはいえ、実力は発展途上であって、幻想郷で起こる異変を解決するような行動はあまりとらな

い。
その割には様々な事件や騒動に巻き込まれるという強運の持ち主である。

§ 性格 §

基本的に温厚な性格で怒ることが滅多にない。
どんなお願いでも大抵は叶えようとしてくれるお人好しで、その為か博麗の巫女にはいいように使われてしまっている。
感情の波が小さいということではないが、冷静沈着であり元来の性格もあつて激情に支配されるということがない。

あと、敏感そうに見えて鈍く、何を考えているか分からない腹黒さも持っている。

§ 能力 §

概念を反対にするという規格外の能力。

概念であることから、力、向き、思考とありとあらゆるものを反対にすることができる。理論上では森羅万象を操ることができるといつてもいいだろう。

しかし、ただの人間がそのような力を自由に使うことができるはずもなく、反対にするものに相応の代償が必要になるといふ。自身自身を対象にした場合ではある程度までは軽減できるらしいが、自分以外、特に自分よりも強者に使用する場合は割に合わない代償が必要となってしまう。(* 6)

その為に一見戦いでも強力な能力に見えるが、実際の使用法は食材の鮮度を保つことであつたり、ゴミを一か所に集めたり、洗濯物を乾燥させたりと、実に生活に密着したものである。（*7）

本人曰く、器用貧乏な能力。

§ 神代家 §

外の世界で代々龍神を祀り上げている神職の家系。起源は神代よりも前だとか、龍神の血を引いている（*8）だとか、色々逸話もあるが詳しいことはよく分かっていないそうだ。

同じく、外であるが稗田家とも縁の深い家系であるようで、外の神社の頂点に立っているともいえる神代神社を管理している。外では年々信仰が薄れていつているようで、神代神社も他人ごとではないらしい。

遠い分家として、東西南北に篠之女家^{しのめ}、管依家^{すがい}、伊那縁家^{いながち}、斎都名家^{ときとな}の四つが神代神社を囲むようにあるのだそうだ。

また、彼は現時点で神代家唯一の跡取りである。（*9）

§ 朔 §

彼は行動のほとんどを朔という名の管狐と共にしている。冬であるならまだしも、夏であるうとお構いなしに首に巻きついているふさふさの管狐は見ていて非常に暑苦しい。

彼にとって朔は使い魔や式のような存在であるが、明確な契約は交わされておらず、ペットという表現が一番近いという。

実を言えば朔は管狐ではなく、妖狐の最高位の存在である天狐である。

天狐の状態の時の名を望という。

天狐とは九尾に至った妖狐の中でも善良な妖狐が更に長い月日を重ねることで、最終的に尾の数の0にした妖狐である。

その存在は神格視され、並大抵のものでは相手にならないほどの力を持つているだろう。

尤も、どういう訳か普段は天狐の状態をとることはなく、どういった条件で朔が望へと至るのかも分かってはいない。

なお、望の時は腰元まで届く銀の髪を生やした妙齡の女性の姿であるようだ。

§ 日常 §

彼の日常は人里に住む人間とほとんど変わることはない。

それは彼が龍神という存在を意識するにあたっての象徴としてあるだけでよく、神代流司という存在がいることを幻想郷に住まうものが認識しているだけでよいからである。

その為に特別な役割というものは全くなく。悠々自適な生活をしている。

けれども、博麗神社にいるときは巫女である博麗霊夢のつかいっぱしりであり、掃除、炊事、洗濯と専業主婦にも負けないほどの働きぶりを見せる。

料理の腕は紅魔館のメイド仕込みであり、寺子屋で定期的に教師も務めており、竹林の中の永遠亭にも足を運び、自警団の不老不死や魔法の森の人形遣いとも交流があるようで、非常に顔が広い。

基本的には人里か博麗神社にいたので、話しかければ外の面白い話をしてくれたり、相談にも快く乗ってくれることだろう。

- (*1) 他にも通称はあるようだ。
- (*2) そうだともいえるが、違うようにも思える。いわば、不定。
- (*3) 外では神主になるには資格がいるようで、本人がいうところ資格のない似非神主。
- (*4) 妖怪の賢者から定期的に外に帰ることが許されている。
- (*5) 居候というよりも軟禁に近い。
- (*6) 自分以外の力の向きを変えるだけでも激痛が走る。
- (*7) 非常に便利だ。
- (*8) 微かに神力を有しているので恐らく事実。
- (*9) 唯一の跡取りが幻想郷に永住してもよいのだろうか。

欄外、『幻想郷縁起 - とある項 -』（後書き）

今さらの主人公設定というか、とあるページでした。ちよつとしたまとめですね。

本当は絵とかがあればいいんでしょうが、絵はねえ……

一応、理系ですので図示とか観察画などはまあできないことないんですが、こういった絵の才能は皆無です。絵が上手な人は本当に尊敬に思います。

そういえばお気に入りが1300件超。PV200万超。

どうしたんでしょうか？

あと、お気に入りユーザーも150人到達。

えっ、マジでどうしたんでしょうか？

いや〜ありがとうございます。

中には毎回のよう感想をいただける方もいらして大変励みになります。

この点が違和感に感じるなどという、詳しい感想を下さる読者の方も大変ありがたいです。

やっぱり自分で読んでいるだけじゃ、なかなか上手くはいかないんですよね。

こういった、改善策を提示してくださる批評などは実にためになります。

勿論、面白いとってくださる感想もモチベーションが急上昇します。

何はともあれ、次回からは新幕。

今後ともよろしくお願いいたします。

頁百三十、『秋風の知らせ』

魚の鱗を散りばめたような雲の漂う空は高く、吹き巡る涼やかな風は狗児草の花穂を揺らしていく。

神の旅は終わりを迎え各々の安息の地へと帰り着き、淋しく咲き誇る山茶花は孤独にも負けずに冬を待ちかまえるようであった。

晩秋。

色付いた葉も次々と散り始め、山々は色を失っていく。

埃の被った炉を開き、灰を掻きだし人々は来る冬に備え始める。長き眠りにつく生き物はいよいよもって埒に籠もり丸くなる。

朝の冷え込みは日に日に増していき、しばらく前に降りた初霜も、既に霜柱へと移り変わり、徐々にその高さを上げていく。

「それじゃあ、しばらく空けるな。といっても二、三日の話だろうけど」

「分かったわ。まあ、気を付けて行ってきなさい。幻想郷こゝろよりも外そとが危険なのかは分からないけれどね」

「それもそうだ」

未だに朝靄の残る『博麗神社』の境内に男女二つの声が響く。

一つは『博麗神社』の巫女である『博麗霊夢』のもの。

もう一つは『博麗神社』の俄か神主、『神代流司』のものであった。

日中は結い上げている髪を下ろして襦袢をまとっている霊夢に対して、流司は普段着ている着流しではなく現代風の服装、つまるところ

るの外での姿となっている。

当然、流司がそのような姿をしているのは朝の冷え込みが激しいからではない。

それは唐突に届いた知らせであった。

『至急、戻られたし』

とある者の手を経由して流司の下に届いた父親である『神代隆斗』からの手紙には短く一文が書かれていた。

詳しい内容が書かれてはいないとはいえ、『神代家』として正式な形式をもって綴られている手紙であったので、「冗談というわけではない。」

そもそもがわざわざ知らせなくてはいけない事態という時点でただ事ではないのだろうと流司は感じていた。

「準備はできたかしら？」

「ああ、頼む」

音もなく姿を現した一人の妖怪 『八雲紫』に驚くこともなく、流司は返事をする。

紫の神出鬼没さは今に始まったことではなかったもので、すっかり流司は慣れてしまっていたのだ。

また、流司が“外”へと出るためには紫の力が必要であったので、現れることを初めから知っているという心構えを流司ができていたからでもあった。

「そう、今回は直接流司の実家の方へ送るとするわ」

「助かるよ」

そういつと紫は閉じた扇子を振るう。

すると、その軌跡が空間に切れ目を入れるようにして一筋の跡を残す。

その筋はぱっくりと開き内部に見える不気味な瞳が流司のことを見据えてくる。

スキマ。

紫の有する唯一無二の力にして、彼女が彼女たるための力といっても過言ではないものである。

できることはまさに万能。

境界を弄るといふその能力の本質はありとあらゆるものの操作を可能とするものであった。

「そういえば、こうして自分から進んで入るのは初めてか」

「落とされることを希望かしら？」

「いや、結構」

今までに何度となくスキマの中を通過したことのある流司であったが、自分の意志でスキマへと入っていくのは初めてのことであった。流司は紫の浮かべた不敵な笑みに首を振ると臆することなくスキマの中へと足を踏み入れる。

瞬間、ザラリとした冷気が流司のことを包み込む。

単純な寒さとしてはスキマの外の方が冷え込みは激しい。

けれども、流司がスキマの内部に感じた寒さというものは単純な気温の低下とは別次元のものである。

身の毛も弥立つ。

という表現が最も近いであろう。

己という存在がそこに合ってはいけないと感じさせるような本能的な恐怖にも似た感情を流司は一身に浴びていた。

「（何度経験しても慣れないな……）」

流司はスキマ独特の空気に一瞬であったが顔をしかめる。

幾度もスキマの内部に立ち入ったことのある流司でもこの空気に慣れることはなく、またこれからも慣れるようなことはないだろうと悟っていた。

「戻るときは適当に声をかけて頂戴。そうすれば、スキマを開いてあげるから」

紫の声に流司は無言で顎を引き頷くとスキマの奥へと進んでいくのであった。

「良かったの？行かせても？」

スキマが閉ざされ流司の姿が見えなくなった所で霊夢が紫に問いかけるように口を開いた。

「良かったとは？」

紫は霊夢の言葉の意図が分かりかねるとでもいうように霊夢に問い返す。

「何をとぼけているのよ。折角、幻想郷に“馴染んできた”というのに外に行かせて良かったのかということよ」

霊夢は鋭い視線を紫に向ける。

「あら、気付いていたの」

「馬鹿にしているの。私は“博麗”よ、他のことならまだしもこの手のことに気がつかない訳ないでしょう。だからこそ、流司を傍に置いておいたのだから」

幻想郷においての『神代流司』という存在の不安定さに霊夢は一目で気付いていた。

であったからこそ、霊夢はいかなる不測の事態にも即座に対応することができるよう流司を“博麗神社”に住まわせていたのだ。

「ええ、大丈夫」

「どうしてよ？」

「言ってしまうえばしばらく前までの流司は熱せられ、溶解してしまった金属のようなもの。それを“幻想”という型に流し込み冷ましていた。故に完全に冷め切る前だと“現実”という型に戻ってしまった場合はそれに適した形になってしまっわ。けれども、流司は既に冷え切った。だとすれば、“外”に出たところで支障はほとんどないと言えるわ」

「相変わらず回りくどいわね。まあ、問題がないというのならそれでいいわ」

紫の説明を理解したのかそうではないのか、霊夢はちゃんとした理由に基づいて問題がないと紫が言っていた把握するとそれ以降は素っ気ないものであった。

「そういえば、流司はどうして外に呼び出されたのよ？いくら問題がないといっても何でもない理由で紫が外に送り出すことはないでしょう？」

問題がないとはいえ、“幻想郷”と“外”との行き来は例え流司であるうとも、余り芳しいことではない。

それだけに紫がそれを許可したということは正当な理由があり、紫がそれを知っているということにほかならなかった。

「……知りたいの？」

「気にならないといったら嘘になるわね」

「ふう、素直じゃないこと」

霊夢の態度に紫はやれやれと首を振って溜め息をつく。

「で、教える気があるの？」

「はいはい、教えるわよ。流司が呼び出された理由は　よ」

「はっ？」

「驚きだったかしら？そうね、別に隠しておくようなことでもないから他の人に話しても構わないわ。それじゃあ」

あんぐりと口を開け、呆然としてしまっていた霊夢に紫は微笑みかけるとそのまま姿を消す。

余談であるが、朝靄が薄まるまで霊夢はその場に立ち続けるのだった。

頁百三十、『秋風の知らせ』（後書き）

第八幕の始まり始まり。

予想を裏切ってまさかの“外”編。

ちょっとした息抜きというか、シリアスな感じはならないと思います。

まあ、気楽な感じで読んでくださいというか、気楽に読まないことがあるのかと言われればおしまいなのですが。

さて、主人公が外へと呼ばれた原因は？

楽しみに待っていただければ幸いです。

冷え込みが激しいのは何も“幻想郷”だけのことではない。流司がスキマから抜け出し、“外”へと辿り着いて初めて目にしたものは薄く白化粧を施した遠くの山々であった。

『神代神社』のある地域は所謂、盆地に近い立地をしている。

それもただの盆地ではなく、三方を山に囲まれ残る一方の辿り着く先には海があるといった立地であった。

大陸とも接している海から鱗龍文化保護地域のある土地、“端虹”までには海か吹き込む風を遮るようなものはないもなく、“端虹”まで辿り着いた湿った風は“端虹”を囲む山々にせき止められる形になるのだ。

これがどういった意味を持っているのかは語るまでもなく理解が及ぶことであろう。

季節風の関係から夏に“端虹”に吹き込む風は山々を越えてきた乾燥した風であり、夏は盆地らしい猛暑を作り出す。

逆に冬には唯一開けた海側から湿った風が遮られることなく“端虹”まで至り、山々にぶつかつたその風が豪雪生み出すのである。

盆地の夏は暑く、冬は寒いと言うことは通説であるが、“端虹”はそれ以上に厳しい環境にあるといえた。

遠くの山々に見た白であったが、それはすぐさま立ちこめていた霧によって遮られる。

盆地霧という霧がある。秋に緩やかな風のある朝に発生しやすい現象のことだ。

“端虹”は発生のための条件を満たしやすく、秋になると度々盆地霧が発生する。

酷いときであれば、一寸先も見えないと言っても過言ではないほどの濃霧となるくらいであった。

「お帰りなさいませ」

「ああ」

いつからそこにいたのか、流司には分かりかねることであった。恭しく頭を下げる“乙女”に対して流司は短く頷きを返した。頭を下げる人影は“乙女”というには些か歳を老いすぎているだろう。

だが、“乙女”であるということは間違いのないことであった。

『久鷲乙女』、それが流司の背後に立ち頭を下げ続けている老婆の名であった。

『神代家』の家事のほとんどを一手に引き受けているお手伝いである。

「よく今日来ると分かったな」

「流司様がお帰りになることは旦那様より伺っておりましたので、日数から考えて今日だと思っております」

「相変わらずか」

もはや未来予知といっても差し支えがないほど正確な乙女の考えに、流司は驚くのではなく相変わらずの瀟洒ぶりに安堵さえ覚えていた。かつて、これくらいのができなければ『神代家』を支えることはできないと乙女は呈したことがあるが、このようなことができる存在などは喻え幻想郷であってもそうはいない。

であるからこそ、乙女はある意味で『神代家』におけるヒエラルキ
ーの頂点に立つことができているのであった。

「変わりはないか？」

「はい、変わらず。今年も無事にこの季節を迎えることができます
ます」

乙女は一瞬だけ周囲に立ちこめている霧に視線を動かすと口元に微
笑みを浮かべる。

『神代家』において、盆地霧の発生する季節を迎えるということは
重要な意味合いを持っている。

『神座参』の他にも『神代家』、“神代神社”には多様の年中行事
がある。

無事に盆地霧を迎えるということはそれらの全てを滞りなく終える
ことができたということでもあるのだ。

「そうか……」

乙女が言葉を詰まらせることなく話したということは本当に問題が
ないのであると流司は悟る。

歯にものをきせぬという言い方は好ましくないけれども、乙女は見
え透いた明け透けなごまかしをするようなことはしない。

何か問題があったのであれば正直に流司に説明するだろう。

それがないということは一切の問題はなかったということ、流司
は乙女の言葉を聞き、安心すると同時にどことなく寂しさも感じて
いた。

今までは自分という存在が必要とされてきた場所が、自分がいなく
とも立ち入って行ける。

そのような事実は流司に外^ニでの存在の欠落のようなものを考えさせる。

「さて、話の方はまた後ほどにでも。皆さん、“お待ち”してまいりますから」

沈みかけていた流司の心中を察したのか、乙女は朗らかな笑顔で流司に話し掛ける。

「そうだな」

乙女の囁かな心配りに流司は胸の中で礼を述べると乙女の後に続いて屋敷の中へと入っていくのであった。

「おお、戻ってきたか」

部屋へと通された流司を迎え入れたのはなんとも気の抜けるような隆斗の声であった。

「おおって……呼んだのはそっちだろうが」

「細かいことは気にするな。ともかく、座れ」

隆斗は流司を自分の前に腰を下ろすように促す。

「飲むか？」

トクトクトク。

つと隆斗が杯に透明の液体を注いでいるのを流司が見つめていると、隆斗は杯を徐に差し出した。

波打つ杯は仄かに芳香を漂わせる酔わせる。

その諄くはない香りは、それが上等であることを暗に知らせている。

「いや、未成年だからな」

「別に構わんだろう」

隆斗は杯を流司に握らせると新たな杯に己の分を注ぐ。

「“桜花吟醸”だ。吟醸酒の先駆けだな」

仕方がないかと受け取った杯を流司は隆斗の説明を耳にしながら傾ける。

喉を通る温かさは身体の芯まで行き渡り、流司の胸に居を構えるかのように長く留まる。

僅かな時間であったが、朝の外気に晒され冷えてしまっていた流司の身体は元以上の温かさを取り戻していた。

「どうだ？」

「……美味しい。けど、朝からはどうかと思う」

「何、一杯だけだ。朝酒にはちょうどいい」

隆斗は流司の返した杯と己の使った杯、一升瓶を一まとめに片づけると改めて流司に向き返る。

「まあ、積もる話はあるだろうが、まずこれを渡しておく」

そう前置いて隆斗が取り出し流司に差し出したのは半尺大の木箱であった。
表面に浮かぶ美しい木目の光沢からそれが桐でできた木箱であるとすぐに流司は見抜く。

結われている紐に手をかけ流司は確認するように隆斗へと視線を向ける。

隆斗が無言で頷いたことを見ると流司は紐を解き中に入っていたものを手に取る。

「……鉄扇、か？」

中に入っていたものが扇であることは一目で流司にも分かった。

だが、それだけではなくそのずっしりと手に残る重さからや手触りからそれが鉄でできているのだと流司は知る。

「そうだ。この前見つけてな。祭儀用ではないから、恐らくは護身用だったのだろう。見た目とは裏腹に多くの血を吸っているやもしれん」

「怖いことをいうなよ」

ぎよつとして流司は手に持った鉄扇を見るが、鉄扇は相変わらずの鈍い光を発するだけであった。

むしろ、品の良い装飾が見られるだけ、禍々しさよりも美しさの方が先行している。

「可能性はなきにしもあらずだ。それで蔵に入れておいても良かったのだが、どうせならお前に渡しておこうと思ってな」

「確かに何も無いよりはいいか」

頑丈な作りである鉄扇はちょっとやそつとでは壊れることがないだろう。

これが本当に護身で役に立つかは流司に判断できなかったが、いざというときに手ぶらであるよりはいいだろうと流司は思う。

「どうする？」

「そういうことならありがたく貰っておくけど、いいのか父さん？」

「飾るほどのものでもない。だったら、役立つ可能性があるお前に渡しておいた方がいいだろう」

「分かった」

流司は鉄扇を再び桐の箱にしまい紐で結ぶ。

「それでまさかこれを渡すためだけに呼び出したなんてことはないだろうな？」

「当然だ」

ここからが本題であるというように隆斗の顔は一際真剣なものに変わる。

そんな隆斗の表情に流司は思わず息を飲んでしまう。

「単刀直入に言おう」

「……………」

無言で頷きだけを返した流司は背筋に冷や汗を浮かべて隆斗の次の言葉を待つ。

「お前に見合いの話がきている」

頁百三十一、『発端と発覚の序曲・主旋律・』(後書き)

お分かりになられた方が多いようですが、『お見合い』です。
言っておきますが、相手は『早苗』ではありませんよ？

あくまでも、“話がきている”というところがみそです。

あと、今幕は構成の仕方もし少し違うことを挑戦しています。

鈍色の空からはやがて淡い風花が舞い降り始める。
それに伴い唯でさえ、冷え込んできていた世界は更に凍てつき始める。

時刻は既に昼時であるというにも関わらず、日の影は何処にも見られずに薄暗さだけが際立っている。

空を覆い尽くす鈍よりとした雲も厚く厚く重なっていく一方で、本来の姿を見せることはないようであった。

初雪の散る人里を一つの人影が横切る。

急激な気温の低下から人里には余り多くの人影は見られない。

雪が降り始めたこともあり、ほとんどの住人が冬支度の仕上げを慌てるように始めたことも少なからず影響しているのだろう。

外を出歩いている人影もその全てと違っていい確率で寒さに腕を抱え縮こまるようにして歩いている。

それは人里を横切るようにして動く人影も同じことであった。

その人影は雪のように白い、否、雪以上に白い髪を棚引かせ駆け足で一軒の家を目指していく。

齡はいかほどか。

少なくとも“女性”と称するには少しばかり幼さの影が見え隠れしているだろう。

だからといって、“少女”と言い切れることもまた難しい。

そのような絶妙なアンバランスさが彼女の美しさを醸し出しているのかもしれない。

白が舞い降りる中を駆ける白い影。

一枚の絵画のような幻想的にも見えるその光景であったが、それは白い人影が目的とした場所に辿り着いたことで終わりを告げる。

トントン。

「どござ」

家の戸を叩き返事が聞こえてきたことをその人影は確かめると肩や頭にうつすらと積もった雪を払って家の中へ入っていく。

「失礼するよ」

家へと入った人影は勝手知ったるでもいうのか、家主の同意も得ずに履き物を脱いで上がり込む。

「外は随分と寒いみたいだな、妹紅」

家主もまた上がり込んできた人影 『藤原妹紅』の様子を特別不快に思うようなこともなく、むしろ身体を震わせる妹紅を心配するように声をかける。

「昨晚からだいぶ冷えてきたけど、流石に雪まで降るとは思っていなかったわね。いつもより早い？」

「そうだな。といっても数日といったところだろう。どの道そろそろだと思っていたよ」

囲炉裏に火をくべながら妹紅の問いに答える女性 『上白沢慧音』の近いうちに雪が降り出すことは分かっていたことだと言っような

口振りであった。

「そついえばそうね。まだ火はくべたばかり？」

「今さっきのことだ。直に部屋の中も暖まってくるはずだろう」

囲炉裏の灰をならし終えた慧音は赤く輝く炭を火箸で整え、横木にやかんを吊し、自在鉤の長さを調整して程よくやかんが温められるようにしたところで囲炉裏から離れる。

「お湯が沸くまでしばらく待つてくれるか？」

「いいよ。代わりにここで暖めさせてもらうから」

妹紅は囲炉裏の前に腰を下ろすと悴んだ両の掌を翳してさするようにながら暖める。

霜焼けを起こしてしまうほど冷えてしまったという訳ではなかったが、細かな作業ができない程度には妹紅の手は赤くなってしまっており、じんわりとした囲炉裏の暖かさは徐々に妹紅の手の感覚を取り戻していく。

慧音もまた囲炉裏の傍に座り本を開き、ぼんやりとした光に浮かび上がった文字を撫でるようにして視線を落とす。

「……………」

パチパチ。

ペラッ。

時折響く炭の弾ける音と慧音の本を捲る音だけが静寂を乱す。家の外では強さを増した雪が深々と降り注いでいる。この分であると宵を迎える頃には“幻想郷”中に六華が咲き誇ることもなくはない話であった。

「そついえば、今日、寺子屋は？」

「急遽休みにした。何処の家も冬支度の追い込みで忙しいだろうからな。どうやら正解だったようだ」

思い出した妹紅の呟きに慧音は外を降る雪を見つめて答える。早急に冬支度を終えるには人手はある方がいい。猫の手を借りたいほどであるのだから、寺子屋に通う子供は真つ先に家の手伝いに駆り出されることは明白であった。

「流司もいないんだっけ？」

「っ、外に用事があるみたいらしいからな」

妹紅の言葉に慧音は一瞬胸を大きく跳ねらせる。

先程寺子屋の休講を知らせるために人里を出歩いた際に耳にした“用事”の内容が脳裏に浮かんだからであった。

それが真実であるかは眉唾もので信じていいものであるかは怪しいものであるが、“火の無いところに煙は立たぬ”という言葉があるように“噂”として流れている以上は何らかの元となった事実があるのだ。

「(さて、どう話したらいいか)」

囲炉裏の熱にゆつたりとした様子の妹紅のことを慧音は密かに見つめ心うちで呟いた。

妹紅の一番の理解者であることを自負している慧音であるからこそ、妹紅の気持ちの機微には聡かった。

流石に妹紅が抱いている思いがどの程度のものであるのか推し量ることは慧音であつても難しいところではある。

けれども、喻え明確な根拠がない噂であつても、妹紅が知ったときにあまり良い思いをしないことは慧音には理解できた。

勿論、目に見えて不機嫌になるということはないだろうとは慧音は思っていた。

だが、何も変化がないのかといえはそうでもないだろうとも思っていた。

「（全く、度し難いな……）」

妹紅がああ蓬菜人との殺し合い以外にも様々なことで生きる喜びを感じ、人間らしい感覚を持つことは喜ばしいことではある。

しかし、自分がこのようなことを考える日が来るとは慧音は夢にも思いはしなかった。

「用事って何だろう？ だいぶ、急のことみたいだったけど？」

「ああ、あくまでも噂なんだがな」

ドンドン、ガラッ。

「慧音先生ッ！！お兄ちゃんが“結婚”するって本当！！？」

慧音の言葉を遮るように飛び込んできたのは亜紀であった。

それも手ぶらではなく、“とっておき”の手土産を持ってである。

ガッシャアアアンツッ！！！！

「あっ、っづづっ！！！」

「だ、大丈夫？妹紅お姉ちゃん？」

「んだが……はぁ……」

やかんのお湯は急須に注がれることなく、一つの悲鳴が響き、一つの心配する声が咳かれ、どうしようもない疲れを滲ませた溜め息が漂うのであった。

“幻想入り”。

それは“外”で忘れられてしまったものが“幻想郷”に行き着くことである。

忘れられるものは道具であり、言葉であり、人であり様々である。

そう、“流行”もまた同じであり、“幻想入り”を果たす最たるものであるだろう。

「うーん、これは何かしらね？」

巫女服を来た少女が籠を手を森の中を右往左往する。

何もそれは迷っているというわけではない。

“外”の世界から流れ着いたものを拾い集めているのである。

少女の住まう神社、“博麗神社”は“外”と“幻想郷”の境界に立地しているが為に“外”から“幻想入り”を果たしたものが流れ着きやすいのだ。

その少女、『博麗霊夢』にとって流れ着いたものの中から使えそうなものを探し出すことは一つの日課のようなものであるのだ。

「ん、これは本ね」

その出会いは果たして偶然であったのか。

その日、少女は一冊の本を拾う。

“外”で虚しくも忘れ去られた“流行”の一片は彼女に、“幻想

郷”に何をもたらすのか？

「何々、『マネジメント』……？」

『もし博麗の巫女がドラッカーのマネジメントを読んだら』

続く？

突発的に閃いたので書いてみた。

博麗神社のマネジメントができるのだろうか？

反響が大きければ後書きで書くかも……

とち狂っても期待はしないように（笑）

主人公が“外”に戻った頃の幻想郷。

で、幻想郷ではとんでもないことに。

一体何処に帰結し、主人公は無事の帰還を果たすのか？

いや、帰ってきたときのほうが……

頁百三十四、『飛び火する混乱の詠唱・主旋律』

暮れる夕焼けの中、二つ並んだ人影の一つが唐突に呟いた。

「女の幸せって何だと思う？」

「えっと、“玉の輿”？」

「……………早苗に訊いた私が馬鹿だった。忘れていいわ」

小首を傾げるようにして『東風谷早苗』が長い黒髪を揺らして尋ねてきた『管依紗与』に答える。

返ってきた予想の斜め上に行く早苗の回答に紗与は沈黙をおいた後、『東風谷早苗』とはこういう人間であったと思し溜め息をつくように己の愚かさを呪う。

「何か間違っていた…………？」

「間違つてはいないわよ。ええ、確かに。でも、その回答を素で返すことのできる早苗に私は恐れを抱かざるを得ないわ」

「？」

紗与の思いも決して理解のできないようなことではないだろう。

早苗の答えは何も狙ってされたものではなく、純粹に早苗が思った答えであった。

早苗が素でその返答をしたことに気付くことができる程度には長い付き合いである紗与はいつもながらの早苗の様子に恐れを抱いてしまふ。

「気にすることはないわ。早苗はそのまま置いてね」

「何だかとても馬鹿にされた気がします」

生温かい視線を向ける紗与に対して早苗はじとつとした視線を返すことで返事をする。

実際、紗与は早苗のことを褒めたというわけではないので早苗の感覚は間違っではないといえる。

とは言っても、貶しているわけでもなかったもので、紗与が早苗の純粹さを美点であると思っっていることは確かであった。

「気のせいよ」

紗与は気にするほどのことでもないと言いつつ早苗に言い聞かせるような口調で短くいう。

早苗の恨みがましそうな視線もどこ吹く風で全く気にした様子はない。

「それに早苗は“流司”さんがいれば、それで十分に幸せなんですよ。うん、やっぱり尋ねた私が愚かだった」

「そ、そんなことは……」

「違うといっの？」

「ううん……」

早苗の抵抗も全くの無意味で、容赦のない紗与の言葉に早苗は目元をうつすらと潤わせ更に恨みがましい視線を向ける。

異性なら勿論、同性であっても大抵の人間であればたじろいでしま

いそんな早苗の表情であるが、紗与には一切効き目がない。偏に長年の経験による耐性のおかげであった。

「はいはい。分かったから。で、連絡はとっているの？」

「……………全く。そもそも、連絡のしようがないから」

「はっ？連絡のしようがないって、この御時世、幾らでもあるでしょう。電話なり、メールなり」

「……………この前、戻って来たときに向こうじゃ電波が入らないからと解約しちゃって」

「……………」

早苗の言葉に紗与も言葉を失い啞然としてしまう。

「流石、本家ね。いや、流司さんというべき？私たちくらいの年齢で携帯を手放すとか有り得ないわ」

「そう？私も……………」

「早苗は別」

再三に渡って早苗の言葉を両断した紗与は考える。

確かに『神代家』は古くからの伝統の残る名家である。

だからといって、時代錯誤の行動をとる必要性は一つとして存在していない。

実際、“支奉家”は名家としての歴史を重んじていながらも、現在に適したものとそのあり方を変えている。

紗与も“菅依”としての礼儀を一通り学んではいたが、それは既に形骸化しており生き方を決めつけられるようなものではなかった。

『神代家』は些か“支奉家”よりも伝統を重んじる気が強いが、文明の利器を嫌悪するような家でもない。

むしろ、当主である隆斗などはやり手の商社マンのように携帯電話を複数台所有しているくらいである。

そう、結局は『神代家』ではなく『神代流司』が現代との感覚にズレを持っているのだ。

流司はその行動がどこか古めかしい。全く現在の生活に馴染めてはいないというわけではないが、どこもなく現在の若者らしくもないのだ。

今回のこともそうである。

流司の住まう神社では携帯が使えなくとも、付近の町にでも行けば問題なく電波を通じるであろうと紗与は思う。

ならば、解約するまでのことでもない。

決して使えないというわけではないのだから。

「うかうかしていると誰かに取られちゃうわよ？」

「とらっ！？」

紗与の言葉に早苗は素っ頓狂な声を上げてしまうが、その言葉も事実である。

『神代家』という名家の嫡子である流司には血を途絶えさせないという役割が暗に存在している。

流司に結婚まで至るような恋人ができればそれでも良いが、できないようであれば挺入れも起こる。

紗与は流司に恋人がいるなどという噂を聞いたこともなく、流司の年齢を鑑みればこのままであれば最長でも五、六年の間にはそういうことになるであろうと考えていた。この辺りは所謂、一般の家庭では理解できない感覚であろう。

つまりは早苗の思いが成就するためには数年の内に流司との間にそれなりの関係を作らなければならないのだ。
望みが薄いというわけではない。

早苗は『神代家』の家長である隆斗からも十分過ぎるほどに気に入られているからだ。

問題は流司にあった。

「ただでさえ、早苗は流司さんにとっては“妹”としか映っていないんだから」

「うう……」

早苗と流司の仲も悪いということはない。
良好であるほかない。

しかしながら、余りにも昔から親しくし過ぎていた為の弊害か、流司には早苗の姿が“恋愛対象になりうる女性”としてそもそも見えていないのだった。

「それこそ、お見合いでもしなきゃ駄目じゃないの？」

「お、お見合いッ！？私とり、流司さんが……いや、……も……そ……気が、い……」

早苗は茹で蛸のように顔を真っ赤に染め上げる。そして、壊れたラジオのようにぶつぶつと呟き出す。

完全に思考回路がショートしてしまっていることが紗与には目にとれた。

「はいはい、戻ってきなさい。冗談だから、さ〜な〜え〜」

紗与は早苗の顔の前で手を振るも、早苗が反応を示すことは一度としない。

「駄目か。（お見合いするのは早苗じゃなくて、私なんだけどそんなこと言えるわけないか……）全く面倒なことになっちゃったなあ……」

そんな紗与の心の中の呟きにも、虚空に浮かんだ溜め息にも反応を示すものは誰もいないのだった。

頁百三十四、 『飛び火する混乱の詠唱・主旋律・』 (後書き)

ということでお相手はこの人でした。
皆さん覚えていたでしょうか？

“外”でも状況は混迷の一途。
収集はつくのだろうか……？

前回の反響は微妙なのか？
あくまでも、博麗神社は貧乏であれと？
マネジメントしても参拝客もお賽銭も増えないというのか……

雪は深々と降り注ぐ。

雲間から差し込む光に照らされた舞い降りる白き欠片は天使が空から降りてくるようにも見えるかもしれない。

初雪のことを“エンジェル・スノウ”と表現をする地域があるという。

エンジェル・ラダーの中を輝く雪はまさしく“天使”であると言いつけることができるであろう。

とはいえ、そんな幻想的な光景も多くの木々が鬱蒼と並び立つ『魔法の森』にまでは及ぶことはない。

雪は木々の葉に遮られ、代わりに舞うは万年変わることのないキノコの胞子であった。

僅かに届く雪に黒い帽子と服を白くさせながら箒を担いだ少女が森の中を歩く。

『霧雨魔理沙』。

『魔法の森』の二画に住まう“普通の魔法使い”である。

何をもって“普通”と称するのは甚だ疑問であろう。

だが、幻想郷にいる他の魔法使いと比べてみた場合では“魔法使いとして”は魔理沙は確かに見劣りしてしまうかもしれない。

普段は箒を使い空を飛んで移動をする魔理沙も流石の雪に空を移動することを早々に諦めていた。

その為、雪の届きにくい森の中を歩いているのである。

いくら雪が葉や枝で遮られるとはいっても、葉の隙間から注ぐ雪と凍てつく寒さは魔理沙の体温を奪っていく。

先日までは寒さが増していたとはいえ、“秋”の気候をしていたが、今は完全に“冬”の気候となっていた。

魔理沙の吐く息は白く、震えるては霜焼けを起こしてしまいそうなほどに赤くなっている。

魔理沙が己の周囲の気温だけを操作するような魔法を覚えているのであれば、このような思いを魔理沙がすることはなかっただろう。けれども、生憎と魔理沙はそのような魔法を覚えてはいなかった。

それは魔理沙が魔法使いとして未熟であるからというよりも魔理沙の元来の性格に由来するものであろう。

魔理沙は基本的に行動的であり、研究肌の魔法使いというわけではない。

勿論、興味をもったことには熱意を捧げるも、常に人との交流を絶ち自分の世界にのめり込んでしまうということもなかった。

それはそのまま魔理沙の使う魔法にも影響を及ぼしており、スペルカードでの例をあげるとするのであれば魔理沙の魔法は火力重視で派手であることが重要であった。

攻撃魔法に拘らず他の魔法でも同じことである。

温度の調整をする魔法は様々な応用の利く重要な魔法だ。

しかし、見た目の派手さは皆無であったので魔理沙は覚えようとはしなかったのだ。

暑いのであれば幽霊などを捕まえればよく、寒いのであれば火を灯せばよい。

確かにその通りであるのだが、これを言い切ってしまうあたり、魔理沙が“普通”の魔法使いであると称すことは難しいと言えるかもしれない。

「ふう、寒いぜ」

凍える身体を抱き締めるようにして魔理沙は呟く。

一刻も早く暖を取るために魔理沙の足は自然と早くなる。

目指すは己の家　ではなく、隣の家。

隣といえども、『魔法の森』に住んでいる者など、入り口の“香霖堂”を含めたとしても三人しかいない。

その内の一人は魔理沙自身であり、だとしたのならば自ずと選択肢は一つに絞られてくる。

「邪魔するぜ」

ようやく辿り着いた家に魔理沙はノックをすることもなく立ち入る。魔理沙らしいといえば聞こえはいいが、実に無作法であろう。

「……お呼びでないわ」

家主である『アリス・マーガトロイド』はじとつとした視線を送り明らかに迷惑そうな表情を見せる。

心なしかアリスの周囲を取り囲むようにしている人形たちの表情も迷惑そうに見えるのだから不思議であろう。

「私には用があるぜ」

「……何よ？」

アリスは進んでいた針の動きを休めて魔理沙の言葉を待つ。

「何か貸してくれ」

「出口はそっちよ」

魔理沙の満面の笑みの言葉をアリスは一瞬にして断る。

ご丁寧にアリスの操る人形の一つがドアを開けたことで、外の冷えた空気が流れ込んできていた。

「それじゃあ、これを借りてくぜ」

魔理沙は家に入った瞬間から目をつけていた魔導書を手にとって、開けられたドアから出て行こうとするが、

「誰が出て行っつていいと？」

開け放たれたドアは閉ざされ、多種多様の武器を構えた人形が魔理沙のことを取り囲み逃げ場をなくす。

「出口を教えたのはアリスだぜ」

「生憎とここにある本は持ち出し禁止なの。それは置いて帰って頂戴」

「なら、今日から持ち出せるようにすればいいぜ。期限は私が死ぬまでだ」

魔理沙とアリスの話は噛み合わず、平行線を辿る一方であった。

明確な敵意を醸し出すアリスとそんなアリスを小馬鹿にするような飄々とした態度の魔理沙。

どンドンと気温の下がっていく外とは裏腹にこじんまりとした洋館の中は異様な熱気に包まれていくようであった。

「ふう、仕方ないぜ」

魔理沙は唐突に息をつくと手にしていた本を元あつた場所へと戻す。そんな魔理沙の予想外の行動にアリスは僅かな疑問を抱くも、諦めたのなら必要以上に気にすることもないと再び手元の針と糸を手にして手芸を始める。

「アリスがただで貸したくないのなら、私にも考えがある」

「そう？もし私の興味を引くようなことなら、それを貸してあげてもいいわ。ただし、魔法使いの約束は等価交換。魔理沙はその本と同じ価値を持った私の興味を引くような物も持っていないと思うけど」

「その言葉に嘘はないな？」

魔理沙は手芸の片手間に横目で自分のことを見るアリスに不適な笑みを返す。

虚勢でも張っているかと思えるほどに得意げな表情をする魔理沙。けれども、アリスは特に気にした様子はみられない。

「今日は取って置きの情報があるんだぜ！！」

「新種の茸でも見つけたのかしら？」

チクチクと針を動かすアリスには既に魔理沙の言葉に対する関心は全くみられない。

右耳から入り、左耳から出ていっているといっても過言ではない無関心さだ。

「チツチツ。そんなんじゃないぜ」

「はいはい。勿体ぶつてないで早く話さないよ。私もいつまでも暇というわけじゃないわ」

魔理沙と話をしていたが故にに遅れぎみであった手芸の進行度を取り戻すためにもアリスの針を動かす動きはかなりの速度であった。それでも、片手間に魔理沙の相手をしているので何割かスピードは落ちてしまっているのだ。

「そう言っていてられるのも今のうちだぜ。実は……」

チクチク。

魔理沙の溜めの静寂を埋めるようにか細い針の動く音が響き渡る。

「流司が自分の“妻”を迎えに行ったぜ」

ズサ。

「ウツ!!!!!!」

アリスの声にならない悲鳴は指に刺さった針の痛みの所為か、魔理沙の言葉への驚きか。

それを知るのはアリス自身のみであった。

頁百三十五、 『飛び火する混乱の詠唱 - 副旋律 - 』（後書き）

噂って一人歩きしてしまうものですよね？

徐々に事態が大事になっている幻想郷。
外での比ではありません。

「全く何を考えているんだか……」

よく澄んだ月のない夜空には数多もの星々が散りばめ敷き詰められている。

縁側に腰を下ろし見上げる流司の表情には困惑と呆れが入り混じったような疲れが浮かんでいた。

それも致し方がない。

隆斗が流司に告げた話の内容は流司の精神を削り、憔悴させる程度には衝撃的であったのだから。

「見合いね……」

流司はその言葉に全くの心当たりがなかったという訳ではなかった。流司は良くも悪くも『神代家』に生まれるべくして生まれたような考え方の持ち主であった。

『神代家』の嫡子である以上はその血を途絶えさせてはいけなという考えは常に頭の片隅にあり、いつかは自身も所帯を持つという未来を想像してもいた。

尤も現在、流司が誰かに対して“恋愛感情”を抱いているかといえはそうではないだろう。

ともかくとして、その過程に“お見合い”というものが存在していることを流司十分に理解していた。

その上、一度は見合いをせねばならないということは年も前に分かっていたことであった。

『神代家』にとつての“支奉家”の役割とは“ありとあらゆる意味で支える”ということである。当然ながらそれには跡継ぎの件も含まれている。故に、『神代家』と“支奉家”のいずれかに歳の近い男女がいた場合、お見合いを行うことは暗黙の了解のようなものであつたのだ。

今となつては本人等の意思を第一に尊重するのであつて、半ば形だけの“お見合い”ではあつたのでお見合いをしたからといってそれがそのまま結婚まで繋がることはないのでお見合い自体を行うことは別に流司とつて困るようなことではなかつた。

けれども、今回ばかりは事情が少々異なってくる。

流司が現在、そして今後も“幻想郷”に住まうということは、見合いを申し出た“支奉家”が一つ、『菅依家』の当主も理解していることであつた。

そつでありながら、見合いを申し出る理由が分からないのだ。

隆斗も当初は申し出を受けるつもりはなかつた。

しかし、『菅依家』の当主は断固として見合いを望んでいたのだ。

これが実際に結婚を望んでいるといふのであれば、そこまでして強行しようとする意図も多少は分かるといふものであつたが、『菅依家』の当主が望んでいるのはあくまでも“見合い”であつてその後は本人達に任せるのだといふのだから事態は混迷を極めるとしかいひようがない。

「本当にどうしたものか……」

空を仰げども星は静かに瞬くだけで、流司の悩みを解決することはない。夜空を灼け焦がさんと吼える天狼の輝きも流司の心に響くこととはなく、寒々と煌めくだけであつた。

「どついたらいいと思う?」

「……クウくん?」

膝の上で丸くなる朔に流司は尋ねるが、朔もまた流司の求める答えを持っていくわけもなく、首を一瞬上げて左右に振ると再び丸くなり流司に大人しく撫で上げられているのだった。

そんな朔の反応に“だよな”と流司は微笑み朔の背をゆつくりと撫でる。

何故、朔がいるのかと言えばそれはいつだかのように荷物に紛れ込んでいたからであった。

朔のような存在が幻想郷の外に出てしまうのは今となっては少々危ういのだが、流司のように“朔”を“朔”として認識する者がいる以上は数日であれば何とかなるだろうということをやめ流司は知っていたので素直に諦めて朔のことを受け入れていた。

悩めども答えは出ず。

考えどもどつばに嵌っていく流司の思考。

実際のところ、ぐだぐだと考えるようなことはせず大人しくお見合いをしまえばよく、今更どうにもならないことではあるのだが流司の性格がどうしても思考を遮るようなことはしなかった。

「お困りのようだな?」

「ッ、燧希!」

「久しぶりだな、流司」

思わぬ声に驚き流司が振り向いた先にいたのは『篠之女燧希』。

“篠之女”の姓が示すように『篠之女家』の嫡子であり、流司が中学を卒業するまでのクラスメートである。言わば、腐れ縁の仲という奴であった。

「どうしてこんな時間にここに？」

『篠之女家』も“支奉家”が一つであるので、燧希が『神代家』を訪れることは珍しいことでもない。

燧希は流司と腐れ縁であるのだから尚更だ。

しかし、このような夜にいるということは不可解である他なかった。

「なに、困っている親友を助けるのは当然のことだろう？」

「で、真実は？」

調子のよい笑顔を浮かべる燧希の言葉を流司は一切信用していないように言葉を返す。

「相変わらずなこと。まあ、単純に今はここに住んでいるからだ」

「はっ？どうして？」

「“白雲”を継ぐ」

そう言う燧希の顔は真剣であり、嘘ではないと流司に知らしめる。

「本気か？」

それが分かっていたからこそ、流司の声のトーンも自ずと低くなり燧希の言葉を真剣に確かめるようなものになる。

“白雲”を継ぐということは今もなお決して流司とは無関係ではないからである。

「ああ」

流司の確認の言葉にも燦希は真剣な表情を崩すことなく答える。

「家はどうするんだ？大学だつて行っているんだらう？」

「“篠之女”を継ぐ奴は俺以外にもいる。大学だつて変わらず通うさ。あくまでも、“白雲”を継ぐことは技術を継ぐことだし、少なくとも若いうちは“白雲”の役目が主になるわけでもない。なにしろ、吏妖の爺さんがいる間は俺にお鉢が回ってくることもない」

つらつらと燦希は流司の問いを答えていく。

確かに燦希には兄弟もいるので、家を継ぐことはどうにでもなる。流司とは異なり、高校、大学と進学を重ねていつていたが、吏妖が存命である間は“白雲”に縛られることもほとんどないこともまた事実であった。

唐突に“幻想郷”に住むことになった流司よりもよっぼどしっかりと問題の解決がされているというものであった。

「なら、特に俺から言うことはないよ」

「……思っていた以上に淡泊な反応だな」

初めに驚きの声を漏らした以外は淡々とした口調で話している流司に燦希は意表をつかれたような顔をする。

「雲爺も乗り気だったし、何となくだがこうなる気はしていた。お前も剣を捨てる気はないようだったからな」

「流石、流司。よく分かっているじゃないか。“当主様々だな”」

「どうしてそれを？」

「“白雲”を継ぐということは『神代家』の身内になるようなものだ。お前の事情は知っている。とんでもないことになっているようだな？」

燧希は確認をとらずに流司の隣に腰を下ろすと、流司に習うようにして空を見上げる。

「つか、何を悩んでいるんだっての。今更、お見合いしたって、紗与ちゃんが流司に惚れるようなたまじゃないし。お前もそこまで自己意識過剰ではないだろうが」

「そういう問題じゃないさ」

「なにか？なら、向こうで好きな奴でもできたか？」

「違う」

茶化すような燧希の言葉を流司は真顔で否定する。

少なくとも、現在で流司の心の中に決めた人物がいないことはたしかであった。

「そっちの方も変わらずか。だから、俺とできているなんて噂が立つんだけどな」

「止めてくれ。反吐がでる」

中学時代の悪夢を思い出しかねない燧希の言葉に流司は心底嫌そうな表情をする。

「俺だつて思い出したくないっての。んで、どこに悩む必要があるつてんだよ。見合いなんて、紗与ちゃんと久しぶりに顔を合わせて話をするんで終わりだろう？」

「“あの人”がそんな意味のないことをすると思うか？」

「ああ……確かに。そこで寝ている奴よりも女狐らしいからな」
流司の返答に納得がいったと呟く燧希。

流司と燧希の脳裏には『菅依家』現当主である女性の胡散臭く得体の知れない笑顔が共に浮かんでいるのであった。

頁百三十六、『過ぎる不安と動揺の朗唱・主旋律・』（後書き）

所謂、才チのない話。

そして、実はついてきていた朔。

特に意味はなかったり……

幻想郷に闇が訪れようやく雪は天から降り注ぐことがなくなる。そうはいえども、既に世界は白い絵の具を零したかのように真白に染まってしまっていた。

それはここ“紅魔館”の周囲でも変わることはない。降り積もった雪は星々の幽かな光に照らされて銀色に輝く。

「思っていたよりも積もったわね」

そんな薄明かりの銀世界を見つめて一人の少女が呟いた。否、正しくは少女ではない。

少女と呼ぶには難しいだけ、“彼女”は長い年月を生きていたのだから。

言葉を漏らしたのは『レミア・スカーレット』。

容姿は齡が十に届くかすら分らないほどの幼いものであるが、何百年も歳を重ねている歴とした“吸血鬼”である。

背に生える漆黒の翼はそれをありありと示しているであろう。

「思っていた」だなんてレミイらしくないわね」

「私だつていつでも“運命”を見ているわけじゃないわ」

読書に勤しみながら横目でレミアに声をかけるのは『パチュリー・ノーレッジ』、紅魔館の大図書館に住まう魔女であった。

パチュリーが言うように“運命”を見ることのできるレミアが“思っていた”などというどこか不確定さを感じさせる物言いをするのは妙であるともいえた。

対するレミリアの答えも当然のものといえた。

いくら“運命”が分かるとはいえ、常日頃から見続けているわけではないのだから。

「そうね。でも、レミィがそんなものを読んでいるのは珍しいじゃないの？」

パチュリーはレミリア開いている薄い二色刷りの紙に目を向けていう。

「私だって偶にはこういったものにも興味を持つわ。それに珍しく面白いことが載っているのよ。暇潰しにはもってこいね」

面白いな表情を浮かべその紙を折りたたみレミリアはパチュリーへと手渡す。

パチュリーは訝しみながらもそれを受け取ると手元にあつた本を閉じるとそれを広げ目を通し始める。

…

…

…

『幻想郷の神主、第一子誕生か！？』

月×日早朝、龍神の遠い末裔としても知られる『神代流司』氏が

一時的に“外”へと戻った。

特例的に“外”へと戻れることを事情に応じて認められている同氏であるが、今回の帰郷は非常に突然のことであった。

これにはただならぬ事情があるだろうと調査を進めたところ驚くべき事実が発覚した。

なんと同氏には既に伴侶がおり、その上懐妊中であるというのだ。

これを鑑みて今回の一

件を考察すると、子が誕生するではないかと思われ……………

……………

……………

…

「何よこれ……………？」

パチュリーは呆れたように新聞を畳むとテーブルの上に放り投げる。

「面白いじゃないの？」

「天狗の新聞よ？どこまで信用できるか……………寧ろ、全てがデタラメという可能性の方が高いと思うわ」

既にパチュリーは閉じていた本を開き、新聞に対する興味は完全に失ってしまったようであった。

「でも、外へ行ったことは確かみたいですよ？」

「あら、美鈴。お疲れ様」

湯上がりであるのか、蒸気した頬に湿らせた髪を揺らした美鈴が姿を現す。

「いやあく今日は本当に疲れました。この寒さと雪だと寝ようものならそのまま永遠の眠りについてしまいますから。おかげで今日は一日中鍛錬をしていましたよ」

「門番なのだから寝ないのは当然のだけど……まあ、いいわ。で、外へ行ったのが確かだというのはどうということなのかしら？」

呆れた表情をレミリアが浮かべたのは一瞬のことで、すぐさまいつものことだと諦めたかのように頭を切り替えると美鈴に言葉の真相を尋ねる。

「えっとですね……それを受け取ったときに直接聞いたのですが、そこに書いてある内容は人里での噂が元になっているみたいなんです。それで少なくとも現在“幻想郷”にいないということは巫女にも確認が取れていることのようにですから」

「なるほどね」

「詳しいことを知りたいのでしたら咲夜さんに伺ってみてはどうでしょうか？今日は人里に買い出しに行かれていたので詳しいことを知っているかもしれません」

「そう、咲夜が……ありがとうございます、美鈴。今日はもうゆっくり休みなさい」

「分かりました。失礼します」

美鈴はレミリアに一礼すると部屋を出て行く。

「さて、咲夜を呼ぶとしましょうか？」

「私ならここにいますわ、お嬢様」

美鈴と入れ違いになるように珍しくも咲夜が“歩いて”レミリアの前に姿を現す。

「お茶のおかわりをお持ちしました。パチュリー様もどうぞ」

「ええ」

「ありがとう、咲夜」

慣れた手つきでティーポットからカップへと紅茶を注ぐ咲夜の動きはいつもと変わらず洗練されたものであった。

「それで噂の方はどうだったのかしら？」

「さて、所詮は噂。色々と憶測は飛び交っているようですが、正しいところは分かりません。詳しくは流司が戻ってくれば分かるでしょう」

「……気にはならないの？」

「人並みには。砂糖はいかほどに？」

レミリアの若干の間を置いた問いにも咲夜は動きを淀ませることなく答える。

「そう。砂糖は多めで頂戴」

「私もレミイと同じで」

「分かりました」

言葉を受けて咲夜はスプーンをカップと小瓶の間を往復させる。
やはりその姿はいつもと変わらずの完全で瀟洒なメイドたる『十六夜咲夜』であつた。

「どうぞ」

用意のできたカップをレミリアとパチュリーの前に置くと、変わりに空になったカップをトレーへと移す。

「では、私はこれで」

「ええ、咲夜も休んでいいわ」

「かしこまりました」

恭しく頭を下げると咲夜もまた姿を消す。

「不満そうね。咲夜の様子が気に入らないの？」

「そういうわけじゃないわ。ただ、面白い反応を示してくれるにはもう少し時間がかかりそうということよ」

カップから立ち上る蒸気に息を吹きかけながらレミリアはパチュリ

ーに応える。

「何だか、お節介なおばさんみたいよ、レミィ」

「何言っているの？パチエだつて実は気になっている癖に」

「そつかしらね。んッ!？」

パチュリーはカップを傾けて口をつけたところで目を大きく見開いて驚きを示した後に渋い顔を浮かべてカップをテーブルの上に置いた。

「どうしたの？」

「飲んでみれば分かるわ。レミィの言う“面白い”反応がね」

パチュリーが言うがままにレミリアのまた程よく冷めた紅茶を口へと運んでいく。

「ッ!？……………しょっぱい」

「どうやら、“砂糖”じゃなくて“塩”を入れたみたいね。正直にいつてお茶の入れ方が良くても飲めたもんじゃないわ」

溜め息をつくような口調でパチュリーは言うど本に視線を戻す。

「これはまた……………」

一方のレミリアは愉しげな表情と苦しげな表情を交互に繰り返しながらカップを傾け続けるのであった。

頁百三十七、『過ぎる不安と動揺の朗唱・副旋律・』（後書き）

やってくれました烏天狗。

今回の記事は発行以来の関心を集めたとき。

んで、ちょっとした被害を被った魔女と吸血鬼。門番もちやっかり登場。

メイドは表面上は普通です。

今日で初投稿から5ヶ月らしいです。

連日は無理だけどほとんど更新できているのか？

だいたい、今何部だっけ？

まあ、これからも頑張っていきます。

そうそう、実は今日は作者の誕生日。

誰か祝ってくれー！！（笑）

「今日は当家の申し出を受けて頂き誠にありがとうございます。そして、ようこそいらっしやいました、『神代流司』様」

そう言い深々と頭を下げたのは現『菅依家』が当主であり、“支奉家”で唯一の女性の当主である『菅依季弓』であった。

その顔に浮かぶ表情はにこにことしたものであり、一件は人当たりの良さそうな婦人のように見えよう。

しかし、流司にはその笑顔の本質はにこにこというよりもニヤニヤ、もしくはニヤリとした笑みであるということは嫌と言っほど理解していた。

世に男女平等が謳われてから人の身からしてみればそれなりに長い時間が経過しており、社会への女性の進出も多く見られるようになってきている。

けれども、古くから伝わる習慣というものは易々と変わるものではなく、『神代家』や“支奉家”の跡取りというものはよっぽどこのとがない限りは男性が務めている。

ここでいう、“よっぽど”というのは男性の嫡子がいない場合ということであり、男児が生まれた場合は先に女児が生まれていようと基本的に男児が次期当主の座につくのである。

ところが季弓はその括りには含まれていない。季弓には弟がいる。

養子であったり、病弱であったりだという特殊な背景や事情はないにもかかわらず、季弓が『菅依家』の当主についている。

それは即ち伝統を覆すだけの実力を季弓が兼ね揃えているということに他ならないのである。

勿論、季弓が長女であったことや、『菅依家』にとつての長男である『菅依久道』が当主というものに固執しなかったことも季弓が当主の座につくことになった要因を形成する一端でもある。

それでも、季弓は非凡な能力を有していたという事実が変わることはない。

端的にいつてしまえば、当主としての才覚では流司はおるか、隆斗すらも上回っている。

燧希が“女狐”と称したのも冗談ではなく、腹芸では現在の『神代家』も含む、“支奉家”で勝るものは誰一人としていないほどである。

基本的には自分の考えを他人に悟らせるような真似をすることは一切なく、仮に知られるようなことがあってもそれは知られるということを含めた上での行動であるのだ。時代が時代であれば国を傾けることすら用意であろう美貌と知略を兼ね揃えている女傑であった。そう、その容姿も季弓は優れていた。

若き日（今もなお年齢不詳の若さを保っているが）はそれはもう数多くの告白や求婚を受けるほどであったと流司は当時を知る隆斗から噂程度に耳にしていた。

尤も、季弓自身は心に決めた人物がいるとかで全くと相手にしていなかったが。そんな季弓が伴侶にした男性が心に決めた人物であったかは定かではなかったが、その男性は季弓が紗与を産んで間もない内に他界してしまっていたので、季弓は女で一つで『菅依家』と子育てを両立していたのである。

『菅依家』というのは“支奉家”の一つであると同時に代々旅館を営んでいる家系でもあった。

『菅依家』を継ぐということは旅館を切り盛りするということでもあるのだ。

そんな超人という以外にどのような言葉を贈っていいか分からないほどの女性である季弓と流司が向かい合っているのは『菅依家』の一室。

正しくは『菅依家』が経営する旅館の最高級室、つまるところホテルでいうロイヤルスイートに匹敵する部屋である。

いくら、時期的に観光客の少ない季節だとはいえ、普段であれば旅館に勤めている人でさえそう簡単には近づくことができない部屋を簡単に“お見合い”を行うために使用してしまうあたりに季弓の豪胆さが見え隠れしているように流司には思えた。ただの職権乱用とも言えなくもないが。

「どうかしましたか？流司様？」

「いえ、どうも慣れなくて……あと、その“様”というのも止めていただけると……」

「あらあら、流司“様”は歴とした『神代家』の当主じゃありませんの。ならば、“支奉家”の一つ、『菅依家』の当主である私が敬意を払うのは当然でしょう？」

季弓の口調は非常に丁寧なものであったが、その言葉の裏にはほくそ笑んでいることが流司には分かった。

否、理解させられていた。

「それ、本気でおっしゃってます？」

「勿論。それとも昔みたいに“流ちゃん”と呼んだ方が？」

「……もう、“様”がついていてもいいです」

元より隆斗でも太刀打ちのできない相手に流司がかなうはずもない。流司は季弓のことを嫌ってはいなかったが、昔から苦手になっていた。それは父親である隆斗も同じで、ある意味遺伝のようなものであるといえたであろう。

「なら、流司“さん”と呼ぶことにしましょう」

「……………はい」

くすくすと季弓は流司の反応を楽しむようにして小さく笑う。実際、流司は季弓と対面した瞬間から季弓の掌の上で遊ばれているのであって、流司の行動一つ一つを季弓は楽しんでいたのだ。

「それでは本題に移るとしましょうか。紗与ですけど、もうしばらく準備にかかると思うのでしばらくは私が流司さんのお相手をさせていただきますね」

「……………本気なんですか？」

準備がしばらくかかると言う季弓に流司は抑揚のない声で静かに尋ねる。

これが現状で流司のできる最大限の虚勢ともいえた。

「……………少しは成長したみたいですね。尤も私が流司さんと同じ歳の時とは比べ物になりませんが」

「規格外な貴女と比べないでください」

季弓の言葉に流司はピシヤリと返答をする。

そんな流司に季弓は一瞬だけ、実に瞬く間があったかどうか分から

ないほどの時間だけ驚きを示すと微笑みを浮かべて口を開く。

「本当に成長しましたね。まあ、実際のところをいえば、流司さんと紗与に恋愛感情が生まれるとは思っていません」

「ならどうして?」

「お見合いをすること事態には意味があるからですよ。もしこれが切欠で流司さんと紗与の間に恋愛感情が芽生えた場合はそれはそれでいいことです。その時はその時でどうとでも方法はあるので」

「?」

季弓の言葉の意味を何一つとして流司は理解できなかったのか、疑問を顔に浮かべて首を傾げるばかりであった。

「まだまだ精進が足りませんね。結局は流司さんは紗与と久し振りに話でもしてくれればいいのです。別に気負う必要などないですし、そのようなことも有り得ないでしょう?」

「そうですね……」

互いに事情も相手もよく知った同士のお見合いである。

気負い、緊張してしまう要因などは何処にもないといえた。

「さて、紗与の準備も終わったようです。頑張ってくださいな」

「疑問は残りますけどね。純粹に楽しませてもらいますよ」

立ち上がり終始一貫した微笑みを見せる季弓に流司は既にどことな

く疲れを感じさせるような笑みを返すしかないのであった。

「霊夢。いい加減出てこいよ」

その日、流司は途方に暮れてしまっていた。

“外”から流れ着いてきたものを回収しに行つた霊夢が血相を変えた表情で『博麗神社』に戻ってきてからはや一日。

その間、霊夢は自分の部屋にこもったきり一歩も出てくることはなかった。

流司が声をかけても生返事が返答がなく、夕食の時間になっても姿を現さないほどであった。

「おい、れ」

バンツ！！

その瞬間は唐突に訪れた。

勢いよく障子を開け放ち一日ぶりに流司の前に姿を現した霊夢。

表情はいつになく真剣で下手をすれば異変を解決するとき以上に引き締まっていた。

「流司」

「あ、ああ、どうした」

そんな霊夢に流司は気圧されたように頷く。

「私は『博麗神社』をマネジメントするわ！！」

「はい………？」

人々の意識から薄れ、“外”から“幻想郷”へと流れ着いた一冊の本は一人の巫女の手にとられる。

巫女はその本に己の神社の未来を見出し、行動を始める。

されどもそれは度重なる困難と挫折、そして復活の繰り返し幕開けに過ぎなかった。

そう、これはかつての栄冠を神社に取り戻そうとする楽園の巫女とそれに巻き込まれた一人の神主の激闘の日々の物語である。

『プロジェクトH ～挑戦者たち～』

(推奨BGM：地上 星、歌：中島みき)

(推奨ナレーション：田口トモヲ)

「もし楽園の巫女がドラッカーの『マネジメント』を読んだら」

始めちゃいました。

続く!!

うん、悪気はなかったんだ。
故に後悔も反省もしていない。

同じN Kだしいいよね？

なんだかんだで『プロジェクト』と『その、歴史が動いた』と
『英雄 采配』はいい番組です。

この作品、最強の御方が登場。

下手をすれば紫ですら遊ばれます。

以後出てくるかは微妙。

季弓が好きだったのは隆斗だといつどつでもいい裏設定があったり
します。

あつ、数多くの誕生日のメッセージありがとうございます。

これからも頑張りますよー！！

シヤリシヤリ。

処女雪の感触を楽しむかのような弾みをつけた足音が陽光によって照らされる銀世界に響き渡る。

日の光を一身に反射してきらきらと輝く雪を直視しようものなら目を痛めてしまっただろう。

処女雪とはいえ雪は雪、裸足で歩こうというものならばひんやりとした雪の冷たさを感じることが出来る前に足の裏が霜焼けてしまっただろう。

日が強く照りつけているも、もはら冬と季節が移り変わった日差しで降り積もった雪で外気が冷め切った世界では薄手の着物一枚では耐えることなどできるはずもないだろう。

だが、しかし、けれども、その白銀に漆黒の影を落とす女性は全くそれらに対して気にする素振りを見せてはいなかった。

目を細めることなく足を動かし、足を凍えさせることなく足跡を残し、身体を震えさせることなく舞うように雪の上を進む。

それは到底、人間には真似をすることが出来るような行動ではなかった。

それもそのはずであった。

何しろ“彼女”は人間ではないのだから。

“亡霊”。

彼女、『西行寺幽々子』は人間と同じ容姿を持ちながらも確かに人の理より外れてしまっている存在であった。

いくら、人と変わらぬ姿形をしているとはいえども、人ではない幽々子を人と同じ尺度で計れるはずもない。

それこそ、その気になった幽々子にとっては乱反射する光などは少

し強い光でしかなく、足に感じる冷たさも、身体に感じる寒さも“涼しい”と思う程度のことではしかないのだ。

雪という真白の舞台上で踊るかのような幽々子の足取りは休まることはない。

幽々子が目指すは今日も変わらず一本の桜。

幽々子にとってこの桜、『西行妖』の根本へと通い詰めることは日々の日課となっていた。

決して満開に咲き誇ることのない『西行妖』も降り積もった雪で枝に白化粧を施させ、白く咲き誇っているような容貌を見せている。いずれは溶けてしまつたろう雪の化粧だが、少なくともあと数ヶ月、春が訪れ本当の花が咲き始めるまでは厚化粧を重ねることだろう。

「今日も綺麗でしょう?」

『西行妖』の全貌を見据えることができるところで幽々子はその足取りを止めると唐突に誰かに対して呟いた。

幽々子の住む“白玉楼”には現在幽々子を含めても明確な存在は二つしかない。

“明確な”というのは“白玉楼”があるのが“冥界”であるからして、幽霊であれば数多く存在しているからである。

しかしながら、幽々子

の問いに答えられることのできる者は“白玉楼”の庭師である『魂魄妖夢』以外には考えにくいのであった。

かくいう妖夢は日々の鍛錬を行うためにこの場にはいない。

では、幽々子は誰に対して問いかけたのか。

その答えは突如として現れる。

「そうね。雪桜とでも言えばいいかしら?綺麗なものね、本当に」

何も無い空間から姿を現したのは金紗の髪を柵引かせる女性、『八雲紫』であった。

紫は微笑みを浮かべながらも幽々子の隣に立つようにして雪に染められた“西行妖”を見つめる。

“雪桜”とはよく言ったもので、雪で枝を白くしている姿は花を咲き誇られているようにも見えらるだろう。

その上、決して満開になることのない“西行妖”が全ての枝を白く化粧をしている様子は満開の“西行妖”を幻視させるようであった。

「でしょう？もし、封印を解くことができたら毎年このような姿を見ることが出来るわよ？」

「それは駄目」

「いいじゃない？いい加減……」

「それはごつちの台詞よ。いつまで固執しているのかしら？」

さらりと述べられた幽々子の要望は紫に聞き入れられることはなかった。

すぐさま幽々子はどことなく紫に抗議をするように言葉を発するが、紫は逆に幽々子に問い返してくる始末だ。

“どことなく”といった表情であったのは己の願いが聞き届けられることはないと思幽々子自身が理解していたからでもある。

数年前のか“春雪異変”以来、幽々子はこのように時折、“西行妖”の封印を解くことを匂わせ促すような言葉を発していたものの、それが叶えられることは一度としてなかった。

「興味のままに動く。それは妖怪の一つの存在意義だもの。今でこれだけ美しいのだから、満開になればどれくらい美しいか気にならないの？」

「知らないからこそその美しさというものもあるわ」

幽々子の言葉も紫の言葉も的を外してはいない。

全てを知ることこそその美しさの本質が分かるものと不明なことこそが美しさの本質といえるもの。

そのどちらもがこの世には存在している。

前者であれば使徒との晚餐を描いた絵画。

後者では腕を失ってしまっている女神の像などが当てはまることである。

“西行妖”がそのどちらに当てはまるのかと問われればそれは分からない。

少なくとも幽々子には知ることができぬことであった。

満開に至らぬ“西行妖”が満開に至ったときに魅せる美しさはかつてないほどのものであるのか、それとも陳腐なものと成り下がってしまうのかは今となっては謎でしかなかった。

「でも、興味本位で動くことが妖怪の本質であるということは否定しないわ。けれども、良くも悪くも“幻想郷”は閉ざされた世界。どうしても娯楽には餓えてしまう。だから、時にはガス抜きをしなければならぬ」

「だからこそ“コレ”と言つもの？」

幽々子の前半の言葉を肯定するように紫は声を紡ぐ。

それに反応を示した幽々子はどこからともなく一枚の紙を取り出した。

「そう。興味はないのかしら？」

「楽しむもの」と割り切ってしまうえば嘘だと分かっていることでも人並みには楽しめるわね」

幽々子は取り出した紙、『文々。新聞』を流し読みするようにしながら紫に答える。

「あら、嘘だとは限らないわよ」

「確かに全てが嘘だとは思わないわ。その所は紫の方が詳しいですよっ？」

「私はただ“幻想郷に新たな住人が増えるかもしれない”と言っただけ。後は勝手に烏天狗が噂を大きくしてしまったのよ」

「それも計算の内なのでしょう？」

「ふふっ、どうかしら。一つ言えるのはこれで終わりにはならないでしょうってことくらいだわ」

そうやって紫はほくそ笑む口元を扇子で隠し、クスクスと声を漏らすのであった。

其の一、『巫女、“組織”を考える』

「流司、マネジメントには三つの役割があるわ」

「はあ……」

どこからか持ってきた眼鏡（伊達）をかけた霊夢がこれまたどこからか持ってきた持ち運びのできるキャスターのついた黒板の前に立ち言う。

一方の流司は全く展開についていくことができず気の抜けた声を上げてしまう。

「でも、その前に考えなくてはいけないことがあるわ。それは“組織”よ」

霊夢は『組織』と黒板に大きく書く。

「『マネジメント』にはこう書いてあるわ。“組織が存在するのは組織自体のためではない”と」

「まあ、そうだな……」

「ここからして間違いだったのよ！！“博麗”は“博麗”のためにあるわけじゃないの。“博麗”が為すべき“機能”を明確にしないといけないわ」

流司は経済学や経営学に詳しいというわけではなかったが、その程

度のことであれば十分に理解できた。

今までの“博麗神社”は“博麗神社”の存続のためにあった。それが間違いだと言夢は言いたかったのだ。

「だが、“博麗神社”の“機能”は“結界の維持と管理”だろうか？ それには“在る”ことが第一じゃないのか？」

「そうね。確かにそう。そういった意味では“博麗神社”という組織は既に社会に貢献していると言えるわ」

言夢は流司の言葉に頷くと“組織”とかかれた文字の横に“博麗神社”と“結界の維持と管理”という言葉をつけ加える。

「でも、それだけではダメ。何故なら、“マネジメント”の三つの役割の内の一つを満たせていないからよー!!」

つづく。

『マネジメント』、P.9より。

もしお手元に『マネジメント』がある人は開いてみるといいかもしれません。

ネタのようにみえてかなり真面目w

尤も今回、最大の命題は『言夢』 + 『眼鏡』の可能性。

幻想郷は幻想郷で賢女がほくそ笑む。

まあ、主人公に勝ち目はないということ。

流司との会話を程よく弾ませていた季弓は頃合いを見定めると一度頭を深く下げ部屋を退出する。

それと入れ替わるようにして部屋へと入ってきたのは漆のような艶やかな黒の髪を揺らした少女であった。

否、少女というのは些か語弊があると言わざるを得ないだろう。

薄く化粧を施している所為もあるが、その容姿は少女にはない女性らしい艶やかさがあつた。

袂の長い着物をまとう姿はそれだけで女性が未婚であるということを表している。

“振袖”とは基本的に未婚である女性の晴れ着である。

元々は男女ともに十五、六歳まで着る着物が起源となっており、それが転じて未婚の女性が着る着物となった。

かつては未婚の女性は振袖を着て関所を通過せねばならないという規則があつたほどで、身分を象徴するものの一つとして広く伝わっている。

現在、一般的な振袖の袂は四尺弱、114?ほどである。

しかし、その女性、紗与が身に着けているのは三尺強、100?ほどしか袂がない。

一般的な振袖が“大振袖”と呼ばれるものに対して、“中振袖”と称されるものである。

更に袂の短い“小振袖”と呼ばれるものもあるが、これは現在では晴れ着としては認められてはいない。

であるからといって、袂が長ければそれだけ格式が高いかといえはそういうわけでもない。

むしろ、“大振袖”よりも“中振袖”の方が古風で格式高いとされ

ている。

これは振袖が徐々に袂を長くしていったという成因に加えて、より華やかさを醸し出すために袂が長くなっていたということも影響している。

よって、“中振袖”の方が“大振袖”よりも古風であるとされるのであった。

“大振袖”が一般的に広がっているだけあり、“振袖”と言われればほぼ“大振袖”のことを示す。

他二つは廃れてしまっているといっても過言とは言えなかった。

そうであるというのに紗与が“中振袖”を着て姿を現したところに流司は品の良さを感じていた。

振袖の造りもまた品が良い。

柄となっている竜胆の花には金糸が縫い込まれており、それだけでその振袖が決して安いものではないということが、流司の素人目でも知るに至ることができた。

「どうかしましたか？」

流司の視線に耐えかねたのか紗与は微かに頬を染めて問いかける。

そこは季弓の娘であるのか、声色には全くの動揺は見られず平常そのものであった。

「いえ、久し振りですね。二年、三年ぶりですか？」

「大体、その程度かと。なんですか？その他人行儀な敬語は？知らない仲でもないというのに……」

「一応はこういった場であるので」

紗与は流司の問いに答えた後に、半目になって流司のことを見る。その声には呆れの色が含まれているように思える。流司はそれにどういう理由があるうとも“正式”な場である以上はとのことで丁寧な態度をとっていたのであった。

「変わらずですか。別に楽にしてもいいですよ、こんな茶番に真剣になるのも馬鹿らしいです」

「茶番つて……」

今度こそ呆れの色を明確に醸し出した紗与がやれやれとでもいいだけに述べる。

紗与は正しい理由のほどは知らなくとも一度見合いが流れたことは知っていた。

早苗の想いを理解していた紗与にしてみれば、例え成立することがなくとも流司と見合いをすることに負い目を感じていた。

それがなくなっただから万々歳であった。

しかしながら、ここにきての復活。

しかも、これが中身の伴っていないことは理解しており、茶番と称するのもしようがないこともある。

それでも、代々続いてきたことを“茶番”と言い切ってしまう紗与の言葉に流司は何とも言えないような表情を浮かべるのであった。

「で、どうしますか？無難に話でも？それとも、何か食べますか？最悪寝てしまっても構いませんよ」

「ははは、それじゃあ、適当に話でもするかな？それなりに積もる話もあるだろうし」

「そう、ですね」

流司は湯いた笑いをすると話をすることを提案する。

実際、数年の間顔を合わせていなかったこともあったために話の話題に困ることはなく、流司と紗与はすぐに会話を弾ませていくのであった。

「いらっしゃい。ごめんなさいね、急にお問い合わせをしまして」

紗与と入れ替わるようにして部屋の外へと出た季弓は間もなくして玄関に一人の客を迎え入れていた。

「いえ、何かと御世話にもなっているのでこれくらいは……」

「そう言ってくれると助かるわ。ささっ、あがって頂戴」

「お邪魔します」

季弓はその客を招き入れると先導するように歩いていく。

「で、今日は何をすればいいのですか？」

「今日はちょっと人手が足りないのよ。元々、この時期はお客様も少ないし、それほど人手が必要な訳じゃないから年末年始に備えて長期の休みをとらせているために少ないのだけれどね。その上に今

日は少し事情があつて、更に人手が少なくなつてしまつたのよ」

季弓はあからさまに困つたという表情を浮かべて言う。
あからさまだというにも関わらずに季弓の言葉は本当に困っている
ような声色であつた。

「そこで前にも手伝ってもらつた貴女に来てもらったの。幸い今日
は“奥の間”を使つていること以外は平穩そのものだから大丈夫な
はずよ」

「“奥”を使つているのですか？」

「そうよ。今日は大切なことが行われていてね。折角だから、“奥
”を使うことにしたの」

“奥”というのは現在、流司と紗与のいる部屋に他ならない。
確かに“大切なこと”であるに違ひなかつた。

「安心しておつかないお客様がいらつしやるといふわけではないか
ら。貴女は前に手伝つてくれた時のように動いてくれればいいの。
さあて、期待しているわよ、“早苗”ちゃん!!」

「はい、頑張ります!!」

其の二、『巫女、役割を考える』

「マネジメントには三つの役割があるわ」

そう言つて霊夢は一から三までの数を黒板に書き並べる。

- 一、自らの組織に特有の使命を果たす。
- 二、仕事を通じて働く人たちを生かす。
- 三、自らが社会に与える影響を処理するとともに、社会の問題について貢献する。

「一と三。この二つに関しては現時点で達成できていると私は思うわ」

「一が結界の維持と管理で、三が異変の解決つてことか？」

「その通りよ」

霊夢は流司述べた言葉をそのまま書き並べた役割の横に書き加える。

「一の使命というのは当然、結界の監視。紫やその式が管理をしているけれども、“博麗神社”は外と幻想郷の狭間にあるからこそ境界の状態に敏感じゃないといけないわ。これは“博麗神社”特有の使命よ」

霊夢がいうように結界の管理に関して言えばそれは何も“博麗神社”のみが請け負うことではなく、『八雲紫』もまた同時に請け負うことであつた。

とはいえ、“博麗神社”が重要な意味を持っていることは確かな事実であつた。

「そして、三。これは“博麗神社”というよりも“博麗の巫女”の責務に近いのだけど構わないはず。妖怪の引き起こす異変の解決や妖怪自体の退治、これは幻想郷に貢献していることになるわ。けど……」

そこで霊夢は顔を俯けて肩を震わせる。

それは耐え難い思いに懸命に堪えているような必死さが伺えた。

「二は……一番重要な二が全く達成できていないのよ！！賽銭なしで巫女が生きていけるかあッ！！！」

バンツ！！！！！！

その魂の雄叫びは黒板を大きく歪ませるのだった。

賽銭なしじゃ神社は立ちゆかない。

“博麗神社”の財源ってどこなのだろうか？

御守りもなさそうだしねえ……

風祝来る！！！！

妥協の紗与。

打算の季弓。

情性で過ごさずを得ない主人公は!?

「暇よ」

呟いたのは一人の女性。暇つぶしのためか、己の黒い髪をつまらなそうに弄ぶのは絶世の美女とも言うっても過言ではないような女性だ。その言葉から分かるようにただ気怠げにしているだけというのに、その姿は物憂げな表情をしているように見えるといふのだから恐ろしい。

とはいえども、あまりにもだらけきってしまったている姿は日曜日のお父さんも驚きの怠けっぷりだ。

「そうですね」

そんな少しでも退屈を紛れさせようと遂には天井の染みの数を数え始めた女性の訴えに返ってきたのは素っ気のない相槌のような短い言葉であった。

銀紗の髪を束ね赤と青のツートンカラーの独創的なセンスを感じざるを得ない服に身を包んでいる女性は返事をしたもののその手元から視線を外すことはない。

そもそもがだらけている女性に意識を向けているかさえも疑わしいであろう。

「何か面白いことはないの、永琳？」

「ありません、姫様」

永琳、『八意永琳』は彼女が主、『蓬萊山輝夜』の言葉に即答をもつて答えを返す。

その無駄のない動きとも言葉ともとれる行動は実に手慣れたものであり、日頃から永琳がこの手の問いに答えているということが容易に分かるものであった。

「素っ気ないわね、永琳。もう少し主に対する敬意というか、主を満足させようという気持ちはないの？」

「流石の私でも何万回と尋ねられればタネも尽きます」

輝夜と永琳が月の追っ手から逃げ始めて世紀が優に二桁は過ぎ去っている。

逃げ始めた当初こそは余裕もなく四六時中張り詰めていた生活をしてきたが、この地に“永遠亭”を構え輝夜の能力で存在を隠してからは単調で惰性的に毎日が過ぎ去っていた。

逃亡中の身であるから暇つぶしにと外を出歩くことも容易にはできず、永遠亭を構えてから一年もしない内に暇を潰す方法はなくなっていたのだ。

そこから一日一回、“暇”と言い続けたとしても今までにその数が一万回を超えることは容易く、当然一日一回で済むはずはないのでその回数は数万回、下手をすれば数十万回といった数にまで至る。考えることすらいやになってしまいう数であろう。

「月の頭脳も墮ちたものね。暇の潰し方一つ考えられないのだからやれやれと首を振って輝夜は頭を振る。

“天才”という言葉が欲しいがままにしていたほどに頭の良い永琳であるが、よもや暇つぶしを考えることができないことで貶される日がやってくるなど考えることもしなかったであろう。

「何億」

ヒュンッ。

輝夜が完全に口を開ききる前に風を切るような音が駆け抜けた。

いつの間にかに永琳は弓を構えており、輝夜の顔のすぐそばには矢が突き刺さっている。「歳の……」

「ええ、分かった。分かったから弓を下げなさい」

更なる矢をつがえる永琳に輝夜は慌てるように手を揺らし弁明する。ほとんど寿命という概念の存在していない。

そうであっても年齢というものは常につきまとうものであるのだ。それが決して口にするにははばかれてしまうような年齢であってもある。

「……暇だ暇だといいますが、さっきまで新聞を見て楽しそうな顔をしたじゃないですか？」

「ああ、アレね。見る？」

輝夜はごそごそと周囲を漁ると読めないほどというわけではないが、だいぶしわだらけになってしまっている新聞を取り出して永琳に手渡す。

「……………」

永琳は何か言いたげな表情をするも無言でそれを受け取るとゆっくりと視線を動かし文字を追う。

「どう？ デタラメばかりでしょっ？」

「そうですね。これでは興味を長く惹きつけることは難しいでしょうね」

「けれども、嘘“だけ”でもない。さつき鈴仙に確認したのだけど、流司が今幻想郷にいないことは確かみたいよ」

「もし何かの打算のもとに書いているのだとすれば大したものなのですが。まあ、間違いなく妥協を許さなかった方向性が別の所へ行ってしまったのでしよう」

そう永琳は結論付けると新聞を排紙の山の上に積み上げる。

正真正銘にその新聞に興味を失ったことの表れであった。

「だからもう興味はないの。少なくともコレは多少盲目な人にはそれなりに有効だから。今日は一日暇を持て余すことが決まってしまったのよ。そう言うわけだから永琳、何か隙を潰すことのできることを考えて頂戴」

「でしたら、コレの臨床例になるといっははどうでしょう?」

そう言つて、永琳が取り出したのは毒々しい色をした錠剤であった。毒々しいといつてもそれは深い緑をしたものだ。

一見してみれば青汁を濃縮させたようにも見え、健康に良さそうにも見えるかもしれない。

しかし輝夜はそれを目にした瞬間、本能的にそれが自分に害をなす存在であると悟り、長年の実体験を伴う経験からでもこのような状況下で永琳が取り出したものが碌でもないものであるということを感じていた。

「一応、聞いておくわ。それはなんなの？」

「それが分からないんですよ」

「へっ？」

「ほら、作ったはいいもののそれがなんであつたか覚えていないってことがあるじゃないですか」

輝夜の間抜けな声にも永琳はしれつとした口調で答える。

「そんなものを飲ませようとしてるの……？」

「大丈夫です。死ぬことはないですから」

「それは不老不死だから。でも、苦しいものは苦しいし、痛いものは痛いよ」

「……………大丈夫ですよ。姫様、口を開けてください」

長い沈黙の後、永琳は何食わぬ顔を浮かべて輝夜を促す。

既にその手には水の入ったコップまでもが握られており、輝夜の逃げ道は全くとしてないといえた。

「ちょっと！！その間は何なの！？」

「姫様、あーん」

「あーん、じゃないから！！あ、やめっ、誰か！！…うぐっ」

バタン。

深緑の丸薬を押し込まれた輝夜はそのまま倒れるようにして動きを止める。

「姫様でも一瞬にして気絶させるほどの効力……一体私は何を作ろうとしていたのかしら」

輝夜の瞳孔と脈を確認した永琳は倒れる輝夜の膝元でそう困ったように呟くのであった。

其三、『巫女、企業を考える』

“博麗神社”の財政難は今に始まったことではなく慢性的なものである。

それこそ、流司が訪れる前は“一汁一菜”の生活すら危ういことがあつたほどだ。

今でこそ“一汁三菜”の生活を営むことができているが、それらはほぼ全て『神代流司』という存在に依存していることで成り立っているといえた。

『神代流司』という存在を一つの組織と考えた場合、それはマネジメントの三つの役割を達成している上で経営されている。

『龍神』の信仰の象徴という独自の使命を持ち、人里の住人の相談にのるといふ社会貢献もしている。

そして、“博麗神社”の満たすことができなかつた、そこで働く者を生かすということも相談にのつた見返りという形で財を得ることで達成されているのである。

「流司、企業とは何だと思う？」

「そりゃ、利益を出す組織じゃないのか？」

企業とは利益を追求するものである。

より大きな利益、より効率よい利益率を求めて紛糾する。

それが一般的な企業のイメージであろう。

「いいえ、違うわ。企業は“顧客の望みを満たすもの”なのよ。故に“顧客”がその“企業”の在り方を決めるのよ。利益はあくまでもその過程にしか過ぎないわ」

企業と利益は切っても切り離すことはできない関係である。

だが、それは“目的”ではなく“条件”であるのだ。利益を出すという“目的”のもとに経営が行われるのではなく、利益を出しているという“条件”のもとに企業は存在してなければならぬのである。

「よって、企業にとって最も大切なことは“顧客を創り出すこと”なのよ」

『マネジメント』、P・14～16より。

怒り一転、冷静に解説の霊夢さん。

どうしても東方らしさが皆無になるといふ。

まあ、後書きだしいつか。

本編は久々登場のお二方。

女性の歳の話題に上限はありませんよ。

因みに一日一回、『暇』と輝夜らが逃亡してから今まで、つまりは大体1200年ほど言い続けると、閏年とか考えなくても、438000回になります。

流石に暇潰しのネタもなくなりますよね……

「それじゃあ、紗与も家を継ぐのか」

「まあ、ずっと手伝ってきたことなので」

積もっていた話は次々へと切り崩され、互いの将来の展望へと変化していった。

流司は既に『神代家』の当主の座についており、紗与もまた将来的には季弓の後を継ぐことを考えていた。

「よくその道を選べるもんだ。一生、季弓さんの名前が付きまとうことになるだろうに……」

紗与が家を継ぐということは当然それは季弓の継ぐということでもある。

類い希なる才を持つ季弓の跡を継ぐことは並大抵のことではない。季弓の名前は常に紗与に付きまとい、季弓と比較され続けることになることは考えずとも容易に理解の及ぶことであった。

隆斗もまた季弓ほどではなくとも優秀であることは『神代家』の当主として何も大きな問題を起こしてはいないということから分かることである。

それ故に流司が『神代家』を継ぐと決めたときより、隆斗と比較され続けてきたのだ。

よって、流司には痛いほど紗与が家を継ぐと表明したときの展望が理解できていたのであった。

「比べられることには慣れていたので。尤も実際に継ぐことを公にした場合は今までの比ではないでしょうが」

紗与が継ぐと考えたこともまた流司と同様に揺るがぬ覚悟があつてのことであつた。

困難であるということは知ってはいたが、紗与の瞳の中に確固たる意志の光を流司は垣間見た。

「気が利かなくて悪いが、頑張れとしかいいようがない。悪いな」

「そんなものですよ。言葉だけで十分ですから、ありがとうございます」

いくら『菅依家』が『神代家』を支える“支奉家”の一つであつても、他家であるということは変わらず、流司にできることといえば紗与の応援ぐらいであつた。

「そついつ流司さんはどうなんですか？」

「どじ、どじと？」

「『神代家』の当主になつたことですよ」

「ああ」

紗与の言葉に思い出したように声を流司は漏らす。

己が『神代家』の当主であるということを流司が忘れていた訳ではない。

しかし、幻想郷での普段の生活が『神代家』の当主らしいものであるかといえはそんなことはなかつたので、特に意識をするようない

ともなかったのである。

「そうだな。炊事、洗濯、掃除には慣れたし、子供の授業に遊び相手もそれなりに上手くできるようにはなった。ただ、人生相談は止めて欲しいな。こんな若造に何を聞きたいんだか……」

改めて流司は幻想郷での生活を思い出し呟くが、その行動は『神代家』の当主どころか神主という立場さえ感じさせないようなものであった。

「あの〜」

「ん？」

「流司さんは一体何をしているというのです？」

故に紗与がそのような問いをしてしまうのも仕方がなかった。

どんな当主としての責を流司が請け負っているかと思えば、そんなことは全くとなかった。

拍子抜けどころか啞然と言葉が出せるかも怪しいところであるほどだ。

「向こうでの生活が知りたいようだから答えたのだが？」

「いえ、全く分かりませんから」

確かに流司が日々どんな、主夫としての生活は分かるというものだが、それは決して紗与の欲していた答えではないことは改めて言うまでもない。

「まあ、それとなく上手くやってはいる。こればかりはどうも説明

し辛いんでな」

「充実なのはいいですけど、もう少し頻繁にこちらに戻ってきたらどうなんです？」

「ん〜、向こうはインフラが整備されているという訳でもないからな。慣れてしまえば、快適ではあるんだが、そうそう戻って来れないんだよ」

幻想郷のことを匂わせないように言葉を選びながら流司は紗与に応える。

嘘は言っていない。

ただし、真実からも幾分か遠い位置にある言葉でもあった。

「携帯を解約するくらいですから、何となく察してはいましたけど……連絡の一つも碌に取れないみたいですし」

「まあ、陸の孤島のような場所だからな」

「……今回のことを早苗は？」

紗与は意を決したように声を細めて流司に尋ねる。

だが、それに対しての流司は

「何でここで早苗が？知ってないだろうな。そもそも、今俺がここに帰って来ていることも知らないはずだ。これが済んだら蜻蛉返りの予定だからな」

と紗与の心の内など一切気にはしていないような口振りで答えるのだった。

「はあ……」

そんな流司に紗与は深く溜め息をつく。

半ば分かっていたことであつたが、再認識してしまうと溜め息をつかざるを得なかつたのだ。

己の親友の道はまだ長く険しいと。

けれども、今回に限っては助かつたとも感じていた。

早苗から今回のことに関して尋ねられることはなかつたので、早苗が知らないということは予想できていたことであつた。

それでも流司から確定した情報として予想を裏付ける言葉を受けるとでは別である。

「（何で私がこんな苦勞をしなきゃならないのか……）」

この界限に住まうものであるならばほぼ全てのものが知っていると云つてもいい早苗の想いであつたが、唯一気付いていないのが当の本人である流司である。

否、本当に流司は早苗の想いに気付いていないのか？

そんな疑問が唐突に紗与の脳裏を掠めた。

確かに流司は鈍感であるような気もないわけではない。

しかし、人の心を全くとして悟ることができないのかと言えばそんなことはない。

まだ力足らずの所があるも、腹芸の一つは身につけているといえた。

そんな流司が早苗の想いに気が付かないなどということが有り得るのか？

女心が男である流司に理解できないのはいい。けれども、“親愛”

と“恋愛”の感情をこつも長い間勘違いしてしまうほど流司は心の機微に疎いのか？

紗与にはそうは感じられなかった。

「あの、流司さん」

思い切つて紗与は流司に自身の考えを確認しようとして口を開くが、

「失礼します。お茶をお持ちしました」

第三者の横槍によつて口を閉ざさずにはいられなかった。

まだ、それだけならば良かったであろう。

けれども、

「えっ？」

響いたその声は紗与のよく知るものであった。

無論、ここは紗与の家が営む旅館の一室であり、手伝いをしている紗与が従業員の声をよく知っているのは当然である。

そう、そうであるのだが、紗与が耳にしたのはよく知っている声であったが、ここにはいない、いるはずのない、いてはいけないものの声であったのだ。

「お茶を……えっ？紗与にり、流司さん？」

伏せていた顔を上げたことで状況を目にした早苗もまた驚きで表情を一変させる。

そんな中、唯一流司だけが驚いた様子なども見せずに、

「ん？早苗？どうしたんだこんなところに？」

なぞと聞いたのであった。

頁百四十二、『驚愕による想い人の為の変奏曲・主旋律・』（後書き）

其の四、『巫女、顧客を考える』

「というわけで“博麗神社”には“参拝客”^{（じやま）}が必要なのよ!!」

結局はそこに辿り着くことになるのかと流司は思う。

別に今までの話が悪いことだとは流司は思っていない。

知識を深めるという意味では十分に有意義な時間であったと言えた。

けれども、いくら高尚な論説をしたとはいえ、その本質は、最終的な結論は、参拝客がないという一点に収束してしまうのであった。故に、

「それって前から分かっていたことじゃないのか？」

「うっ」

ズサッ。

流司の言葉が霊夢に突き刺さる。

「それに参拝客を増やそうとする努力をしなかったのは霊夢だろうか」

「うぐっ」

ズサッズサッ。

立て続けに放たれる流司の言葉の矢は霊夢に突き刺さり、胸を痛めたかのように霊夢はうずくまってしまふ。

「それを今更言うなんてな。馬鹿なんじゃないのか？」

「ガハツァ」

ズサツ、ズサツズサツ！！
バタン。

容赦のない流司の言葉は遂に霊夢のことを討ち取る。
被害の全くない完璧な勝利であった。

「まあ、それでも気付いたことはいいことだし、その心構えは……
どうしたんだ？」

「ええ、どうせ私は馬鹿よ。守銭奴で貧乏で計画性のない勘だけが
取り柄の鬼巫女よ……」

「いや、そこまでは言っていないが……（自覚はあつたんだな……）」
ぶつぶつと呟く霊夢を見て流司はそういうが、内心では僅かな驚き
を示していた。

「けどッ！！」

ガツと顔を上げ立ち上がった霊夢はその使命感に燃え盛った瞳で流
司を見上げる。

「私は絶対にここを、“博麗神社”をお賽銭沢山の金持ち神社にし
てみせるわッ！！」

「……お、おう、頑張れよ」

あまりにも不純すぎる目的であった。

そもそもが信仰よりも寶錢を集めることを第一にしている時点で駄目であり、利潤が目的となってしまうので先の自分で説明した言葉も既に靈夢の目には入っていなかった。

だからといって、流司が靈夢を止めることはなかった。

動機が不純であれども靈夢がやる気になってくれたことは流司にとつて好ましいことであつたからだ。

「というわけだから、流司」

ニヤリと靈夢は流司に笑みを向ける。

その瞬間の流司の思いは後悔一色。

やはり、止めるべきであつた。

碌なことにならないと流司は悟つた、悟ってしまった。

「あなたはマーケティングに行つてきなさい！！」

結局はこうなるのだ。

信仰よりも寶錢。

花より団子？

ちよつと違うか。

本編は難産だつたなあ。

まあ、ちよつとね。

数日もすればなんとかなります。
主人公に猶予は数分すらないけどね。

頁百四十三、『驚愕による想い人の為の変奏曲・副旋律』(前書き)

御指摘に基づき、今回は文章作成の原則に乗っ取って執筆してあります。

といつても、会話文以外の文頭を一字空けているだけなのですが、宜しければ、見やすさなどの意見を頂ければ幸いです。

その噂は既に幻想郷の全土に広まっていた。

それは記憶力の乏しい妖精でさえもが正確に覚えているというのだから、凄まじいということは簡単に知り得るだろう。

尤も幾ら“正確”にとはいえ、情報自体が“正確”であるかは定かではないので意味のないことだともいえただが。

曰わく、『神代流司』には複数の妻がいる。

曰わく、『神代流司』には多くの子供がいる。

曰わく、『神代流司』の今回の“外”への帰郷は新たな妻を娶るためである。

曰わく

何の根拠も存在していない流司に関しての噂は妙に真実を絡ませながらも尾ひれを増やして根も葉もない噂と変貌していった。

元々が娯楽の少ない幻想郷だ。この手の噂は人も妖怪も妖精も飢えを紛らわせるにはもってこいのものであった。

その上に噂の対象となつていのは幻想郷であっても特殊な存在である流司であつてただの人間ではない。

その注目の集めようは流司が幻想郷にやってきた当初のことを彷彿とさせていた。

よく考えてみれば嘘だと分かりきつた噂……という訳でもない。

それは幻想郷の在り方に起因している。

“外”から流れ着いたものや河童の技術によって微弱な発展を迎えてはいる幻想郷であつたが、その生活形態の基盤を成しているのは江戸時代の末期から明治時代の初期のものである。

それが一体何を意味しているかといえ、 “一夫多妻” の概念が

一般的であるということだ。

古来より主に男系の嫡子を途絶えさせないために上流階級の家系では“一夫多妻”の考えは当たり前のものであった。

近代的な民法が広まるまではそれが普通であり、疑う余地のない考えであったのだ。

“外”と“幻想郷”ではその近代的な民法が浸透しきる前に隔絶されてしまっている。

故に幻想郷では“一夫多妻”の考えなど忌避されるものですらないのだ。

そもそも、幻想郷に住まう人間の数に大幅な増減がない幻想郷では男女比によつては“一妻多夫”すらも当たり前の概念であるのだ。

『龍神』を代々祭る家系としての歴史を持つ『神代家』の当主である流司が多く of 女性を娶っていたとしてもそれは疑う余地のない話であったのだ。

むしろ、流司のような家系の人間が流司ほどの年齢にまで妻の一人がいないことの方が疑わしいといえたのである。

よつて、“外”であつたのならば馬鹿らしいの一言で片づけられてしまうような噂もある程度の人には信じられてしまっていた。

勿論、嘘だろうと見抜いている人もいたが、大抵はどこまでが真実なのか分からずにいたのであつた。

「……………」周囲の人々の会話に耳を立て、ふらふらと人里を歩く少女も後者の一人であつた。

白く長い髪が所帯なさげに揺れる様子はそのまま少女の心を投影しているようにも見える。

「そんなに気になるなら話を訊いてみればいいじゃないか、妹紅」

少女、妹紅の様子を伺いながらも隣を歩く慧音は苦笑するように声をかける。

「いや、どうせ嘘だろうし……絶対、たぶん……きっと……」

妙にそわそわとしながら妹紅は慧音に答える。

人付き合いが基本的に苦手である妹紅が二日連続で人里を理由なしで訪れることは珍しいという他ならない。

妹紅の行動は目に見えて明らかかなものである。この手のことに百戦錬磨の心得がある彼女の天敵が断言に近い思いを抱き、彼女に最も近い半妖が微笑むのだから間違いはないであろう。

とは言えども、それを妹紅自身が明確な自覚を持っているかといえはそうでもないのである。

妹紅の心は一度死んでいる。

幾年、幾十年、幾百年という月日を生きている間に精神が磨耗し、感情という感情が潰されていったためだ。

妹紅が不老不死になったのはただの当て付けのようなものであった。

それまで特殊な境遇があるとはいえ、ただの少女が確かな目的もなく悠久を無事に生きることができるわけもない。

人を不老不死にする蓬莱の薬が心を殺すというのだから大した皮肉であろう。

慧音のフォローする言葉に妹紅は大きく返事をする、「流司だもんね……」、「どうせあの天狗だし……」などと呟きを重ねる。

そんな妹紅の姿を慧音は内心おかしげに、そして微笑ましげに我が子を見つめる母のような母性に満ちた視線で見つめるのだった。

「あややや、失礼ですね。清く正しくがモットーの『文々。新聞』だというのに……」

一陣の風が吹き妹紅と慧音の前に降りたつたのは噂が爆発的に広まる原因を担っている新聞、『文々。新聞』の執筆者である『射命丸文』であった。

「出た」

「“出た”って何ですか……それにその“諸悪の根源が”とでもいいたい視線は？」

妹紅は文に忌々しいという感情を隠そうともしない視線を送りつける。

「あながち間違ってもいないな……」

流石は記者とでも言うべきか、見事に妹紅の心情を言い当てたような文の洞察力に慧音が頷くように呟いた。

「間違いどころか大正解よ。根も葉もないことを書いて!!」

「火の無いところに煙は立ちません。私はそれをすこし誇張して書いているだけです」

「それがいけないと言っただ」

文に詰め寄る妹紅に自信あり気に胸を張る文。

やはり、“諸悪の根源”であったかと額に手を当て慧音は呆れる。

「それに今回のことはあの『八雲紫』からも言質を取っているです。誇張とはいえ本質は間違っていないはずです」

「「えっ?」「」

流石にそれは妹紅と慧音も寝耳に水のことであった。

「その話、少し詳しく聞かせてもらいたいものね」

「あら、奇遇。私ももう少し伺いたいと思っていたところよ」

「はい?」

今まで聞こえていなかった声の登場に文は振り返るとそこには満面の笑みを浮かべた魔法使いとメイドの姿があった。

其の五、『神主、マーケティングを考える』

『マーケティング』とは企業の行う市場活動のすべてを示す言葉である。

一般的にマーケティングというと市場調査のことを示すように感じるがそれはマーケティングの一端に過ぎない。

現在各企業によって行われるマーケティングは、大きくわけると五つの分野からなっている。

- 一、市場調査
- 二、製品計画
- 三、販路対策
- 四、販売促進
- 五、販売管理

の五つだ。

そして、流司が今から行おうとしているのは、マーケティングという言葉において最も一般的である『市場調査』であった。

「えっと、何々、“真のマーケティングは顧客からスタートする。すなわち現実、欲求、価値からスタートする”ね。つまりは何だ、お客様第一で考えるってことか？何だか、ありふれたキャッチコピーみたいだな」

霊夢から渡された本を開きながら流司はフラフラと遊覧飛行をす

バイブル

る。

「まあ、それができていないからこそ“博麗神社”は貧乏なんだがな」

そう“博麗神社”は「一里の状況（現実）」を知らず、「一里人の願望（欲求）」を知らず、「一求める限度（価値）」を知らなかった。

改めて考えればよくぞ今まで存続していたであろう。

それはあくまでも“博麗神社”が“神社”であり、“企業”でないからという点が大きな理由であった。

理由は他にもある。

それは今まで“博麗神社”が幻想郷で唯一の人々の信仰を明確に集めることのできる場であったからである。

それ故に“博麗神社”は極稀に人が訪れることであったのである。

しかし、それも現在では通用しない。

幻想郷には既に“守矢神社”という実際に神様のいる神社があるからだ。

それだけならまだ良かった。

“守矢神社”も“博麗神社”に負けず劣らず里の人間が訪れるには困難な立地にあつたからだ。

けれども、人里の側にある“命蓮寺”はそうはいつでもいられない。

人里の人間に受けいられている“命蓮寺”は瞬く間に“一参拝客（顧客）”を集めていった。

これは“博麗神社”の衰退を加速させるものであり、うかうかしてもいられないことであつたのだ。

「まあ、できるだけのこととはするか……」

思うところは多々あれど、一路流司は人里を目指すのであった。

“博麗神社”は今までは独占企業だったけど、もうそうはいかないという話。

一体俺は何を書いているんだ。

集結。

射命丸は終焉？

さて、どうなるか？

前書きの見え方についてお答え頂ければ幸いです。

「お見合いですか……?」

早苗は中居の初老の女性の言葉に小首を傾げるようにして反応を示した。

お見合いという言葉は珍しいものではなく、お見合い結婚などというものも珍しいものではない。

だが、実際にお見合いの当事者になることはおろか、お見合いに遭遇することは比較的珍しいことであるといえた。

「そう、お見合い」

『菅依家』の営んでいる旅館、『依羅』^{イナ}の最奥の部屋にして最も宿泊費の高い部屋はほとんど使われることがない。

『龍胆』^{リンドウ}と名付けられているその部屋は一見してみれば他の部屋と変わった作りをしているわけではなく、ホテルのスイートルームのような豪華さを見せているわけではない。

しかし、目の利くものであればその違いには易々と気が付くことができるであろう。

畳に使われている蘭草が上等なものであることは香りから伺え知れ、畳床は今時の建築畳床や化学床ではなく稲藁を固めた藁床であるということが踏み入れた感触から容易に分かることである。

部屋にある掛け軸や花を生けてある陶器もまた一級品のものであり、その自然なまでの優雅な気品は中にいるものを疲れさせずに威厳ある空間を作り出していた。

というのは元々、『龍胆』という部屋は『神代家』の当主を招く

ときに使う部屋であったからである。

更にいえば、『龍胆』は『菅依家』の花押であり、『篠之女家』は『龍髭』、『斎都名家』は『龍舌蘭』、『伊那縁家』は『龍眼』がそれぞれの家を証明する紋となっており、『菅依家』の『龍胆』の間のように『神代家』の当主を招くための部屋があるのである。

故に『神代家』の当主である流司と『菅依家』の紗与の見合いを行うのにこの部屋以上に相応しい部屋はないであろう。尤も早苗には“誰”が見合いを行っているかなど見当もついていなかったのだが。

「お見合い、お見合いですか……」

早苗も年頃の娘。

“お見合い”という言葉にはそこはかたなく惹かれるものがあった。

女性としての将来のビジョンの一つを感じさせるその言葉は早苗にも願望に近い未来像を幻視するのだった。

「早苗ちゃん、早苗ちゃん」

「は、はい!!」

ハッとだらしなく緩みそうな顔を引き締めて早苗は初老の女性に返事をする。

「それでそのお見合い」

「律さん」

「あつ、ごめんなさいね。また」

「はい」

初老の女性は遠くからの呼び声に応えて早苗の側から離れていく。そして、一人残された早苗のもとには、

「ねえ、早苗ちゃん。ちょっとこれを奥の部屋まで届けに行ってくるかしら？」

とお茶とお茶請けを乗せたお盆を持った季弓が姿を現すのだった。

「」「」……「」「」

『龍胆』の間には独特の存在感を持った沈黙が蔓延^{はび}っていた。

極度の緊張というわけでも、何かの威圧感に支配されているというわけでもない。

そればかりか三者三様、それぞれが違う表情を浮かべている。

『東風谷早苗』は二人がお見合いをしている状況に驚愕。

『神代流司』は丸くなって二つの瞳を笑みを驚きもなく見つめ。

『菅依紗与』は驚愕とようやくの得心に額を押さえるように手を翳す。

これを混沌^{カオス}と言わずして何を混沌と呼べばいいだろうか。

沈黙^{コスモス}という秩序を伴った混沌という矛盾した静寂はキリキリと空間を締め続けるようであった。

「えっ、と、お二人はここで何を……?」

いち早く我を取り戻した早苗がおずおずと口を開いた。

“一応”はこの部屋で何が行われているかは知っていた早苗であったが、露にも思っていない顔ぶれに一部分を中途半端に変えて尋ねてしまうのだった。

「いや、まあ、“お見合い”ってことになるのかな……?」

「っ!!」

慎重に言葉を選ぶ素振りがあるうとも最終的結論の言葉が変わらなければ意味はない。

「さ、早苗。これはね」

「失礼します!!」

早苗はお盆を部屋に置くとすぐさまその場を立ち去る。

紗与の取り繕おうとする言葉など当然届いていないだろう。

「はあ〜」

その瞬間、部屋の中には大きな溜め息が響く。

紗与は顔をしかめながらもこの後自分が取らなくてはいけない行動を思い鬱になる。

だが、それ以上に……

「流司さん」

「ん？」

流司を呼ぶ紗与の声は低く重い。

「追いかけてください」

「はっ？」

「建て前だけのお見合いでしたらもう十分ですから」

「だがな……」

紗与の言葉に流司は渋るような顔を浮かべるが、

「いいから、さっさと追いかけてくださいッ！……」

「は、はいッ！……」

喝ッ！……！

怒号一閃、紗与の叫びに流司は逃げるように部屋を飛び出していく。それでも紗与にしっかりと頭を下げていくところに流司の性格が伺えるだろう。

「全く、少し荒療治じゃないの？母さん？」

「だって、瑞穂ちゃんの子よ？幸せになってほしいじゃない？」

紗与の呟きに反応するように季弓が姿を現した。

「だからって実の娘を利用する？」

「いいじゃないの、どの道本来はすることだったんだし。これで面倒なことはなくなって親友の役にも立てる。一石二鳥よ」

そう、この“お見合い”はただこれだけのためにあったのだ。

『神代家』とお見合いが当たり前のもので、形骸化してしまっていると感じているのはその一族に連なるものだけである。

知らぬものからしてみれば“普通”のお見合いと変わるところなどどこにもない。それは流司や紗与と親しい早苗であっても同じことであった。

季弓にとっても早苗は娘のようなものであった。

早苗の母、瑞穂とは流司の母を介しての出会いであったとはいえ、親友ともいえる仲であった。そんな亡き親友の子を愛しく思うのは季弓にとっては当然のことであったのだ。

早苗が流司のことを想っていることはよっぽどのことでなければ、気付くのは自然のことで、かくいう季弓もそれを応援する一人であった。

とはいえ、まさか実の娘のお見合いを利用してまで行動を起こすとは紗与もつい先ほどまで気付くことはなかった。

「でもこれは流石にどうかと思うのだけど……」

季弓のとった方法はショックを与えるという意味ではこれ以上ないものであったが、下手をすればいらぬ誤解をもたらすものでもあった。

確実性を求める季弓にしては不確定要素に頼るものが多く、無理をしてまで行う必要はなかったはずである。

「「」つでもしないと機会がないもの」

「そりゃ流司さんはこっちにいないけど、じきに帰ってくるでしょうっ」

紗与には季弓の言葉が理解できなかった。

それも当然であった。紗与と季弓では今の流司がどのような場所に住んでおり、どのような立場にあるのかという情報に決定的な差があるのだから。

「まあ、ちょっとしたお節介よ。さて、早苗ちゃんもいなくなってしまうたし、ビシバシ働いてもらっわ」

「大役を果たし、これからのことを思うと鬱になりそうな娘に随分な仕打ちだと思う……」

「それはそれ、これはこれ（これで、一歩でも、半歩でも進んでくれるといいのだけれどね……）」

季弓は一瞬、慈しむような瞳を外に向けると紗与を伴いその場を後にするのだった。

頁百四十四、『明かされる種との遁走曲・主旋律・』（後書き）

其の六、『神主、マーケティングをする』

「博麗神社”に必要なものねえ……」

人里についた流司は原始的な方法であるが、聞き込みという確実な方法で情報を集めていた。しかし、

「やる気とか？」

「……………」

その発言に流司は押し黙った。

あまりの、それでいて実を射ていたことに言葉が見つからなかったからであった。

「はっはっ、まあ、異変の時は頑張ってくれているようだけどなあ」

笑う顔見知りの姿は現状の幻想郷においての“博麗神社”のあり方を如実に示していた。

「こうあってほしいとか、そういうことが聞きたかったんだけど……」

「でも、参拝するなら時々、山の神社の巫女さんも来てくれるし、

“命蓮寺”もあるからねえ。これといって求めることは……”

「……………」(もう、手遅れかも知れない)「

流司は漠然とした現実感を感じるのだった。

あれ？

もう、手遅れじゃね？

つて、思ったらこうなった。

ちよっと短め？

まあ、後書きなんで気分です。

本編はさてどうなる！？でも、次回に続かないという。
これ一遍に書いた方がいいのか？

“雅”^{みやび}

その姿はある種の芸術作品のようなものがあつたであろう。

尤もそれには神秘性などというものは皆無であり、美しいという言葉よりも前衛的な存在感というべきのものであつた。

“芸術は爆発だ”と述べた人がいるように芸術の捉え方は多種多様に及ぶ。であるならば、この造形物が芸術と呼ぶことができたとしてもそれは専らおかしなことではないのである。

“雅”^{せうじやう}

人里の象徴の一つでもある『龍神像』の隣に佇む黒い物体に神聖さなどを感じるものなどないだろう。

彼女がそうなつたのは半ば自業自得のものがあるとはいえ、一時を風靡している新聞の執筆者のなれの果てが、木の枝で人里の子供たちにつつかれる姿であると思うと不思議と目から水滴が垂れ否、流れ落ちることはなかつた。

“雅”^{かいつ}

そう、それは烏であつた。

なにも全身が黒いから烏だと言っているわけでも、羽根を何本か失つてしまつている鳥であるから烏といつているわけでもない。

無論として、その前衛的な芸術性からでもない。

今は物言わぬ骸と至つたその烏天狗がまさしく烏天狗然とした黒い翼を背負つた存在であつたからであつた。

まあ、今のような状態に至つたのもまた烏天狗としての生き様を貫いたからであるのだけれども。

「結局、碌なことが分からなかったわね」

そう呟いたのは銀の髪を短く揺らすメイド。

「まあ、ほとんどがデマカセと分かっただけでいいと思うわ」

それに応えるように反応したのは金髪の魔法使い。

「よく考えてみれば、噂の元がああ賢者というのも怪しすぎると思う」

白い髪を風に揺りかかせながら言うは不老不死の少女。

新聞記者であった烏天狗、文のことを縛り付け串刺しにしこんがりと焦がした咲夜、アリス、妹紅の三人であったが、まさかその行動原理の根本にあったものが多かれ少なかれはあれども同じ思いであるとは思っていないだろう。

そもそも、明確な自覚を持っているものなど一人としていなかった。

彼女たちは彼女たちの思うがままの行動によって一つの等身大の焼き鳥を作り上げたが、その実、その原因となったものが彼女たちらしさとはかけ離れたものでありながら、女性らしい感情であったということには現時点で誰一人として気付いてはいなかったのだ。

閑話休題。

ともかくとして、悪の伝道師を滅ぼした彼女らであったけれども、その戦利品は、

『幻想郷に新たな住人が増えるかも知れない』

という不確定要素に満ちた言葉だけであった。

「確かに信用性にはいまいち欠けてしまうな」

まるで総括するように慧音の呟きに咲夜らは頷く。

幻想郷の管理者、『八雲紫』の言葉を信用できるか、否かは非常に難しいところにある。

紫は幻想郷に対しては真摯な態度をとる一方、何事においてもその真意を隠している気があり、胡散臭さの権化とも呼べる存在であった。

計算高く幻想郷を愛している紫であれば無駄に幻想郷に混乱のようなものを招くことはないだろうが、紫も妖怪が一人であるので快樂主義に近い性格もある。

故に今回の紫の発言がどういったものであるのかが、咲夜たちには判断ができなかったのである。

「本人に聞くのが一番だけど……」

「どこにいるのかなんて分かるわけないわ」

有している能力故のことか神出鬼没を体現している紫に出会うことは困難であった。それでいて、

「あら、私ならここにいますわ」

「ほんと、神出鬼没……」

「今に始まったことではないだろう」

唐突に姿を現すのだからたまったものではないといえた。

「出てきてほしそうだから参ったというのに随分ですわね」

溜め息をつくように紫は首を竦める。

当然、誰一人としてその態度をそのままに受け取ったことはない。明らかに芝居がかかっており、紫もまた一種のアイデンティティを示すために行った仕草のようであったので反応が返ってくるとは思っていないかった。

「確かに飛んで火に入る夏の虫といいわけでもないけど、出てきてくれてちょうどよかったわ」

早々に開き直ったアリスが言う。

出てきてほしいと思っていたことは事実であり、わざわざ出てきてくれたというのだから無碍に扱う必要性は全くなかった。

「で、本当なの？」

「本当、とは？」

「とぼけないで、あんたがその烏天狗に話したことは間違いないってことよ」

妹紅が陰険な視線を向けて紫に問うも、柳に風、暖簾に袖押し、紫は全く意に返してもいない。

「ああ、それ。本当よ、いえ、少し違うかしら？」

「とーじつとー？」

「その焼き鳥には“幻想郷に新たな住人が増えるかもしれない”
と言ったのだけど、それは間違いだったの」

失敗したわとでもいいたげに紫は眉を下げた言う。

「それっていい迷惑じゃない……」

今回の噂の根本を揺るがすような紫の告白に咲夜が呆れたように呟いた。

アリスや妹紅、慧音もまた同じような表情を浮かべてしまっている。

「ええ、本当に迷惑をかけてしまったわ。だって、“幻想郷に新たな住人が増えるかもしれない”ではなくて、“幻想郷に新たな住人が増える”の間違いだったのだから。これは重大なミスだったわ」

「……はっ？」「……」

紫は申し訳無さそうな表情を浮かべながらもその瞳はクスクスとした笑いをまとうているのであった。

其の七、『巫女、現実を知る』

Q 博麗神社に求めることは？

A、

- ・やる気
- ・根気
- ・正気
- ・参拝しやすい場所へと移転
- ・優しい巫女
- ・がめつくない巫女
- ・あまりない
- ・どうでもいい
- ・むしろ、神社の意味がある？
- ・必要ない
- ・博麗神社、何それ美味しいの？

e t c .

「などなどが今回の調査で分かったことだ。因みに……」

Q、あなたが信仰するものは？

A、

命蓮寺	42%
守矢神社	43%
博麗神社	3%
その他	12%

「だった。これは『龍神』様や俺の名を挙げたものを除外しての割合だからそれを含めた場合、“博麗神社”の占める割合は1%未満に落ち込むことになる」

一日かけての調査報告を流司は粛々と行う。

先ほどから霊夢は顔を俯けたまま微動だにせず、痛いほどの沈黙が広がっていた。

「まあ、人里の住人の全てに聞いたわけでもないし、変動はあると思うが……」

と言いつつも流司には劇的な変化がないことなど分かりきっていた。

確かに里人の全てに尋ねたわけではなかったが、統計学上では十分な回答を得ていたからである。狂信的な信者の集団でもない限りはこの割合が大きく変動することは有り得なかった。

「ふふっ、フッフッフ……」

「れ、霊夢？」

プルプルと肩を振るわせる霊夢の様子に流司はデジャヴを感じる。そして、それは間違いなどではなかった。

「だぁーっ！！何よ！！この回答はッ！！」

「何ってありのままの現実……」

「黙りなさい。いいわ、一つずつ見ていきましょう。まずはこれ、やる気と根気はいいわ。確かに指摘されると言葉が詰まることは認める。でも、その次の“正気”ってなに、“正気”って！！私は至ってまともよ！！どこかの吸血鬼と一緒にしないでもらいたいわ！」

「（問答無用で妖怪を退治する姿が正気なのか……？いや、賽銭への執着のことか……？）」

あの修羅であり幽鬼のような姿を一度でも目にすれば“正気”を求めるのも納得できると、憤る霊夢とは裏腹に流司は内心頷く。

「そして、次、“移転”って“移転”したら“博麗神社”の意味がないじゃないの！！」

「そこは確かにな」

博麗神社は外と幻想郷の狭間にあるからこそ意味がある。

いくら参拝がし難いからといってもおいそれと移転できるようなものでもなかった。

「それに“優しい”に“がめつくない”？私は“楽園の素敵な巫女

”よ！どこに不満があるというの？”

「いやそれはどうかと」

「あ、あつ？」

「……何でもない」

霊夢の形相に流司はすぐさま口を閉ざして、身体を小さくする。今の霊夢は鬼すらも一目で逃げ出すような顔をしていた。勿論、優しさの欠片すら感じることはできないだろう。

「最後の方だなんてただの雑言じゃない！！舐めてるの？いいわ、そっちがそのつもりなら私にも考えがあるわ。瞬く間に幻想郷での博麗神社のシェアを拡大してあげようじゃないの！！」

「シェアって……」

「そのためにはまずは、“イノベーション”よ！！」

流司の戸惑うような声もなんのその霊夢は高々と宣言するのだった。

霊夢再憤。

圧倒的シェアを誇る神代ブランド。

その後を追うのは守矢と命蓮。

博麗はその後ですらないという……

仕方ないね。

文はこのあとスタッフが美味しくいただきました。（食肉的な意味で）

鳥の肉は鯨の肉と似ているらしいです。

どちらも食べたことがないのでイメージはわかりませんが。

更なる波乱を呼び込む紫さん。

本当に収集つくのか？

もう、この幕も大詰めなんだけどなあ……

頁百四十六、『一つの結末と帰郷の終曲』

走る。

何処へ行くのか、何故行くのか、何時まで行くのかも分からずに少女は駆け出した。

それは逃避だった。

現実から願望から理想から逃げ出した。ただ、考えること止めたかったのかといえ、そうでありそうではない。

それが衝撃でなかったといえば嘘になる。

だが、頭のどこでも考えていなかったことではないことも確かであった。

“いつかは”と脳裏に浮かべながらも“そんなことはない”と切望し予測に蓋をしていた。

そう、ただその蓋が外されて中身を確認してしまったに過ぎないことであった。

今がいつ時で、ここがどこで、自分が何をしたいのかも分からない。

何を考えたくないのかも、何を考えたいのかも分からず、考えは一向に収束を迎えずに拡散し霧散し消えていく。

だが、消えぬ思いが少女の中にはあった。

消してしまえば忘れてしまえば楽であるということは少女もまた自覚していた。

けれども、簡単に消し去り忘失の彼方に置いて置くことができるほど少女の思いは軽いものではなかったのだ。

故に少女は思いを捨てることなどできずにただ苦しんだ。

もとより少女にその“想い”を捨てることなどできるはずもないのだから。

いつからであったか、彼を“兄”として見なくなつたのは。

この日、この時、この瞬間からという明確な線引きがなかったことは確かであったと少女は覚えていた。

極自然に、自然が徐々に移り変わっていくように少女の想いもまたいつの間にかに移り変わっていたのだ。

初めは“親愛”でしかなかった。それが“恋愛”に変わった。

漢字にしるひらがなにしろ文字に書き出してみればたった一文字の変化だ。

しかし、それが文字通りの変化だけで済むはずもない。たとえば一文字の変化だとはいえそこには大きな変化があったのだから。

であったからか、変わってしまった少女には変わらない青年の姿がよく分かつてしまった。

少女にとって彼は誰よりも近い異性であり、彼にとっても少女は誰よりも近い異性である。

けれどもそこには決定的な違いがあり、その違いがある限りは少女の手が彼に届くことは決してない。

届いたとしてもそれは手袋を挟んだ温かさを感じても人肌を感じないものでしかないのであった。

少女は前向きでひたむきであった。

それだけにいつか、またいつかと想いが伝わる日を願い時を過ぎしてきた。

されどそれは……

空は既に茜色に染まり、焼けるような朱は地平線の彼方へとその身を沈ませていく。

「私、何しているんだろ……」

誰に聞かせるわけでもなく早苗は一人呟いた。それは己自身に向けた言葉であったのかも知れない。その顔に浮かぶ自嘲にも似た笑みはどこまでも痛々しい。

目元に涙はなかった。泣くことすら忘れてしまったかのように乾いた声だけが早苗の口からは漏れだしていた。

「考えていなかったわけでもないのに……」

早苗とて早苗だからこそ流司の立場は重々に理解していた。

『神代家』、ただ一人の嫡子である流司に『神代家』の跡継ぎを求めることは当然なことであり、それを流司が断ることのできる状況ではないということに。

否、それもまた早苗の願望でしかなかった。流司がこの縁談を断る理由は全くない。

既に分社にて当主代行としての務めを果たしている流司である、己の置かれている状況が理解できないはずもないのだから。

「お似合いだよね……」

早苗の心情には裏切られたなどという感情は一つとしてなかった。紗与もまた『神代家』の遠い分家である『菅依家』の長女、流司と縁談を結ぶにおいてこれ以上の存在はなく、断る理由も流司同様にないだろつということを早苗は理解していた。

時代錯誤といえそうであろう。

けれども、時の流れに逆行してでも守らなくてはいけない伝統と

いうものが存在していることも確かなのだ。

神職に携わるものとして早苗もまたよく分かっていることであつた。

だが、納得ができるかといえは話は別である。それほど早苗は、人は利己的ではなかつた。

「っ、はあはあ、やっと見つけた。ってか、いつの間にこんな体力つけたんだよ……」

「えっ？どうして？」

早苗が顔を上げればそこには額から汗を流す流司の姿があつた。冬であるというのに額に大量の雫をつけているということはそれだけ流司が必死になつていたということの表れであつた。

「どうしてって追いかけてきたからに決まってるだろ。まあ、紗与にそう言われたからなんだが」

「そうですか」

ここで自発的に追いかけたと言わないところが、流司の不器用さか女心に疎いためか。

普段であれば憤慨ものの言葉であつたけれども、今の早苗にはその方が幾分も楽であつた。

「（紗与が気を利かせてくれたのかな……？）」

下手をすればただの嫌みにしか見えない紗与の心遣いに早苗は一人感謝する。

「(なら、いつまでもくよくよなんてしてられない)」

早苗は持ち前の前向きさで笑顔を浮かべると未だ尾を引く思いに堪え、新たな一步を踏み出すために口を開き、

「流司さん、婚約おめでとございます」

「はっ？なんの話だ？」

早々に出鼻を挫かれるのだった。

「クツクツクツ……」

「わ、笑わないでください!!」

流司が耐えきれないといった表情で腹を押さえて笑いを漏らす。その顔は赤く呼吸が困難であることが伺えるほどであった。

早苗の顔もまた赤く染まっていた。

尤もそれは流司とは異なり勘違いによる羞恥からのものである。

「俺が紗与と結婚すると勘違いして逃げ出したとか……クツツ」

「そりゃ、勘違いもしますよ!!だって、流司さんと紗与だったら家柄も考えれば婚約してもおかしくないじゃないですか!!?」

「いつの話だよ。そこまで、『神代』も『菅依』も時代錯誤なわけではないだろう?もしそうなら、俺は猶予もなく『神代家』の跡継ぎに

なっていたさ」

「それは……」

笑う流司に早苗は言葉を詰まらせる。

流司が言うように『神代家』も『菅依家』もそこまで格式に縛られている家ではなかった。少し考えてみれば己の考えが間違いであったと早苗も気付くことができたはずであった。

「父さんも季弓さんも我が子の意思を無視して縁談を決めるような人じゃない」

「でも、可能性がないわけじゃ……」

「ないない、紗与が俺に惚れるようなたまか。元々、流れていた話だし、結局は儀礼のようなものだからな」

流司は手を左右に揺らして早苗の言葉を否定する。

「そうなんですか？」

「ああ、『神代家』を継いだからにはいつかは伴侶を持つことも考えてはいるけど、それは今の話ではないさ。そもそも見つかるかどうかも分からない。そういった時は本当に縁談話を持ち込まれることになるだろうけどな」

流司は自分の考えをすらすらと述べているが、それは実感のこもっていない淡々さを帯びていた。

「好きな人なんかは……」

「いるわけない。少なくとも、今はな」

流司の言葉に偽りはない。

事実として流司は親愛の情を抱くことはあれども、恋愛の情を抱くことは生まれてこの方一度としてなかった。

「さて、帰るとするか。季弓さんたちにも迷惑をかけてしまったしな」

「すみません」

「気にするな。今に始まったことじゃない」

「それって私が何度も迷惑をかけているみたいじゃないですか」

ジトツと早苗は流司に視線を向ける。

けれども流司は涼しい顔をしており、そればかりか、

「そうだと言っているんだ。昔は」

「あぁーっ、言わなくていいですから!..!」

流司が紡ごうとしていた言葉を早苗は慌てて遮る。

他に聞いているものが周囲にはいないというのに、その慌てようはそれだけ早苗にとって流司が口にしようとしている言葉が恥ずかしいものであったからに他ならない。

「冗談だよ」

そう言って流司はぽんぽんと早苗の頭を撫でる。

「もう……子供じゃないんですよ」

早苗はそう口を尖らせて文句を言つてもその表情は嬉しげに目を細めているのだった。

「分かっているさ」

「本当ですか？」

「本当だよ」

早苗の頭の上から手を退かすと流司は『菅依家』の家を目指して歩き始める。

早苗もまたその後を追うようにして、横に並び、追い抜かす。

「ほら、先に行っちゃいますよ？」

「誰を探したと思っっているんだ。本当に分かっているさ、それくらいはな」

頁百四十六、『一つの結末と帰郷の終曲』（後書き）

すみません。遅れました。

そして、今日はマネジメントはないです。

いや、余韻的には結果オーライかな？

頁百四十七、『それも一つの結末と結論の終曲』

「それは確定した事実なのかしら？」

「ええ、幻想郷に新たな住人が増えることは間違いないです。それも流司が深く関わる住人よ」

わざわざ言葉を訂正したことにアリスが改めて紫に問いかける。

しかし、紫はその笑みを崩すことなく肯定し、更には流司との関係性が明確にあることまでをも提示した。

これは流司が今回“外”へと出て行ったことと噂が全くの無関係でないことを示していた。

「どういうこと？」

「文字通りの意味ですわ。新しく増えることになる住人と流司は深い関わりができる、できているということ。それ以上でも以下でもありませんわ」

妹紅の問いにも紫は文字通りの意味であると答える。常日頃から胡散臭く、後一步のところで信用に欠ける紫であったが、妹紅たちにはその言葉が混じりけのない真実であると見抜くことができた。

尤もそれが妹紅たちにとって良いことであったと言えるかは難しいところであったが。

「深い関係というのは？」

咲夜が紫に問う。

“深い”といえどもその形は様々である。気の知れた友人であれば深い関係だと言えるだろうし、血の繋がった家族であってもまた深い関係であるということが出来る。

「勿論、親密という意味になりますわ。肉親ではなく、幼少からの関係ということで。友人というのは少々異なるでしょうけど」

紫は暗に咲夜の言葉を否定するようにして答えた。既に公にされた情報からある程度の人物像は咲夜らには予測ができてしまっていた。

三人の胸の内には沸々とした思いが沸き上がっていた。ただそれは沸騰する水のような荒々しい感情ではなく、沸騰にはまだ至らず小さな気泡がぽつぽつと浮かんでいくような感情であった。

言つなれば、御神籤で“末吉”を引いたときのような喜ぶこともできず、憤ることもできなく、それでいて良いと思うことも素直にできないといった非常に曖昧な感情であった。

その感情の正体に気が付くのは外野ばかりで紫は眉を細めている様子を面白げに口元を隠しながら笑い、慧音はやれやれと言つように首を振る。

「それでその人は」

「ん、そうですね。後は本人に窺うのがいいですわ」

冬に至り日が落ちる時間も随分と早くなっていた。

人里の提灯にも光が灯され始め、夕暮れとはまた異なった朱色の世界を照らし出している。

紫は言つやいなや扇子を動かして宙に切り込みをいれる。

作り出されるは紫の能力の象徴ともいえる“スキマ”。

その両端に結ばれているリボンとは対照的にスキマの奥に見るこ

とのできる無数の目は相変わらずの不気味さであった。

「……やっぱり、何度通つても慣れないな」

どことなく、疲れを感じさせるような声と共にスキマから流司が姿を現した。凝った肩を解すようにして伸ばす手にはやや大きめの紙袋が握られていた。

「お帰りなさいな」

「ああ、ただいま。けど、なんでまたこんなところに？」

紫の声に流司が疑問と共に言葉を返す。

その疑問も尤もである。流司が姿を現したのは博麗神社でもなければ、人里の自分の家でもない。屋外にスキマが繋がっていることは当然であったとしても、まさか人里の道の真ん中に繋がっているとは考えていなかった。

その上、

「慧音はいいとして、妹紅に咲夜？アリスまで……これはまた大層なお迎えだな」

流司は周囲に確認できた顔を見渡して少し驚いたように呟く。

人里に住んでいる慧音の姿があることには流司もそれほど疑問に思ったわけではなかった。けれども、妹紅や咲夜はこのような時間に人里に姿を現すことは珍しく、アリスにおいては人里に姿を現すことですら珍しいことであった。

「流司、一人だけ？」

「いや、朔もいるけど？」

「クオンー!!」

妹紅の問いに答えるように流司の首もとにいた朔が返事をする。

「そういつことじゃないくて……?」

「?」「?」

理解の及ばない妹紅の歯切れの悪さに流司と朔は顔を見合わせるようにして首を傾げる。

「ところでその袋は何かしら?」

咲夜が流司の手にある紙袋に視線を向ける。

流司は外の物を幻想郷に影響がない程度に持ち込むことはあったけれども、それは皆“ちよっとした”という言葉の範囲を脱することではなく、ここまで大きな袋を持つてくることなどなかったのだ。

「ああ、これか?これはな……」

「ごそごそと中のものを流司は漁るようにして袋の中に手を入れる。そして、取り出したのは一冊の本であった。」

「『名前の付け方』」

瞬間、一部を除いたその場の空気が凍りついた。

一人平然としているのはクスクスと笑いを漏らす紫だけで、先ほどまで呆れた顔を浮かべていた慧音も表情を凍り付かせてしまっている。

「後はこれやこんなだな」

続けて取り出したのはほ乳瓶やおしゃぶりといったもの。流司の手に持つ紙袋にはいわゆるベビー用品と呼ばれるものが所狭しと入っているのであった。

「まだ、早いと思ったただけだな。ついつい買ってしまったさ」

朗らかな笑顔を流司が浮かべる一方で周囲の気温は氷点下を遙かに下回り絶対零度に迫る勢いで下降を続ける。それは勿論、日が沈んだことが要因ではない。

「流司……これは？」

「これはって、見たまんまのものだけど？」

妹紅の温かさのない声に気付かずに流司は答える。

「どうして、こんなものを？」

「どうしてって、もうすぐ産まれるからな」

咲夜の冷たく光るナイフのような声に気付かずに流司は答える。

「何が……？」

「何がって、子供に決まっているだろう？」

アリスの抑揚の感じることでできない声に気付かずに流司は答える。

既にその場に紫と慧音の姿はない。

何歩も離れた場所で片や愉快げに、片や深刻そうな表情でただただ状況を見守っていた。

「「「そう……」「」」

奇しくも三人の声が重なる。それは底冷えするような低く重い声であった。

「どうかしたか……？」

流石に流司も周囲の様子の変更に気が付く。されども、それは手遅れであるというほかない。

「いえ、何も」

「ただ、少しだけ」

「“話”を聞かせてもらいたいのよ」

その時、流司の視界に黒い彫像が映ったのは何の因果か。

本能的な恐怖に流司は一步後退り、紫や慧音に視線を向けるが、前者は相変わらずの笑みをもって返し、後者は黙って合掌を返す。

何の言われもない（原因は明らかに流司自身にあるのだが）にも関わらず、追い詰められる己に流司は天を恨む。

「あつ、流司さん！！」

それがこうを奏したのか、思いも寄らぬところから助けの手が入

った。

流司の姿を確認した途端、血相を変えて走ってきたのは流司と顔見知りの少年であった。

「何か!？」

額から汗を流しながら走ってくるに少年に流司は内心、「助かった」と感謝をしながらも駆け寄って理由を尋ねる。

「はあつ、ハツ、“亜紀”が、“もう産まれる”って」

“神は死んだ”

瞬時に流司がそう思ったのは仕方がないことであっただろう。

「寒いわねえ……」

幻想郷の東にある神社、博麗神社で一人の巫女が出したばかりの炬燵に身体を埋めるようにしながら呟いた。

博麗神社の巫女、『博麗霊夢』の仕事は雪が積もろうとも変わることはない。

来るかも知れない参拝客の為に参道の掃除をし、あるかも知れない賽銭箱の中身を確認する。それらが終了すれば一日をほのぼのと過ごし、宵が深まれば部屋に戻る。それだけである。

既に時刻は日が短くなくとも夜といって差し支えない時間であった。

巫女としての霊夢の役割は終了し、猫のごとく炬燵で丸くなる。

「そろそろ、帰ってくる頃かしらね」

霊夢はなし崩し的に生活を未だに共にしている神主のことを思い浮かべる。

「全く、これも“異変”と言ってもいいのかしらね」

霊夢は既にその大半を火種として失ってしまったっている新聞を眺めて呟いた。

「暇つぶし程度には楽しめるだろうけど、これはねえ……」

霊夢は裏で糸を引いているだろう存在の言葉を思い浮かべてぼやく。

『お見合いよ。それと幻想郷に新たな住人が増えるかもしれないわ』

「最初は啞然としてしまったけど。考えてみれば、紫は“それと”と言っているのよね。ということはお見合いとその後のことは全くの別問題ってこと。まあ勘なんだけど」

誰に聞かせるわけでもなく霊夢は呟いた。

「前者にしても、紫がそうそう外の人間をここに連れてくることを許可するわけないだろうし、後者はそう言えば流司が話していたわね」

…

……

……

『そろそろか……』

『そろそろって何よ？』

『亜紀に弟か妹ができるんだよ』

『亜紀って、ああ人里の……』

『そう、それに名付け親になってほしいと頼まれてないんだよ。どうしたものか……』

『まあ、頑張りなさい』

……

……

…

「間違いなくこのことでしょうね。結局は紫の暇つぶしってところかしら？まあ、こんな程度の異変ならいつでも歓迎なんだけどね」

霊夢は残りの新聞も炬燵の火の肥やしへとしてしまふ。

身体を傾けて天井を眺める霊夢の様子はひどくゆったりとしており、人里での噂の広まりなど全く気にしていない。

「お腹がすいたわ。今日中に帰ってきてくれるといいのだけどね…」

同時刻、流司が命の危機に陥っていることを霊夢が知ることはその驚異的な勘をもってしても分からないのであった。

頁百四十七、『それも一つの結末と結論の終曲』（後書き）

其の八、『巫女、イノベーションを語る』

『イノベーション』。文字のままに訳したとすれば『革新』という意味となる。

しかし、経営という観点でこの言葉を考えた場合は些かその意味合いは異なったものになる。

「イノベーションとは新しい満足を作り出すことよ」

「新しい満足？」

「そう、“博麗神社”に現状求めているものが少ないことは遺憾ながら、ほんところ〜に遺憾ながらも理解できたわ。だったら、新しい満足を作り出せばいいのよ！」

イノベーションの結果によってもたらされるものは色々ある。分かりやすいところでいえば、“値下げ”もまたイノベーションの結果によってもたらされたものであるといえる。

その価格で満足していない顧客に対して新たな価格を提示すること満足してもらおう。

これも立派にイノベーションが成功したということである。

「つまりは“博麗神社”が必要だと思われるような新しい役割を考えればいいと？」

「その通りよ。正直、山の神社ほどではないとはいえ、“博麗神社”も一般の参拝客が来るには難しい場所にあるわ。これはどうしようもないことよ」

「いや、それは霊夢が布教をすればいいだけの話では……？」

実際、“博麗神社”よりも厳しいと言わざるを得ない“守矢神社”は“博麗神社”を遥かに上回る信仰を集めるに至っている。

これは地道な布教活動が実を結んだということであった。

新興勢力である“守矢神社”がそうであるのだから、幻想郷において歴史のある“博麗神社”も同じように、むしろそれを上回る可能性は十分にあるといえた。

「……仕方ない、仕方がないわ」

「だから」

「ごほん。流司、神社はただ信仰を集めるだけじゃだめなの。幻想郷という限られた空間にあるたった二つの神社の内の一つなのだから、他方にはできないようなニーズに答えるべきなの」

霊夢は流司のことを優しく諭すように言う。

その言葉は美辞麗句に溢れた素晴らしいものであったが、あまりにも魂胆の見え透いたものであった。

「現状、ニーズに答えるどころか完全にお荷物のような気もするけどな」

「と・に・か・く・！！流司、あんたは“博麗神社”に必要なインベーションを考えなさい！！」

「分かったって俺なのかよ!?!」

「当然!?!私は監督、流司が実践よ!?!」

そう言っつて霊夢は優雅と思えてしまっつほど華麗な動きで流司に指をつきつけるのだった。

結局は他人任せな霊夢さん。

そこに痺れる、惹かれる、憧れる!?!

苦労を抱えるのは主人公の特権です。

まあ、本編もご苦労様という。

確かに幻想郷に新たな住人が増えたでしょう?

霊夢は持ち前の勘をもって終始冷静でした。

次回、アンコールで今幕も終了です。

頁百四十八、『祝福の再演奏』

「清々しい朝だわ」

空は雲一つ見受けられない透き通った青であった。それを邪魔するものといえば空を飛ぶ鳥くらいなもので、鳥の大きさなど空と比較してしまつたら微々たるものでしかない。

「紗与……」

「本当に“青い”わ。“青い”……」

耳に届く己の名前をあえて無視を決め込み、紗与はただただ空の青さを眺め続けていた。

“井の中の蛙、大海を知らず、されど空の青さを知る”。
などという言葉があるが、今の紗与は井の中の蛙以上に空の青さを理解していることだろう。

尤も、紗与はまさしくの意味でも井の中の蛙であったのだが。

そう、『菅依紗与』は『東風谷早苗』という存在に対して、樂觀をし過ぎていた。

今朝方、紗与に栄養ドリンクを手渡してきた季弓はやはり紗与の上をいく存在で、こうなることを十分に理解していたのだろう。

否、間違いなく理解していたのである。

「（こうなることを教えてくれたって……いや、そんなことあるわけないか……）」

紗与は己の母の顔を思い出して、内心でぼやくもすぐにそのぼや

きが無駄なものであるということを悟る。

流司にして、「絶対に“あいつ”とは会わせたくない」と断言させるような存在である。

“あいつ”というのがどんな人であるのかは紗与は分からなかったが、その苦虫を潰したような表情を浮かべる流司の姿に碌でもない、最低でも素直にいい人と呼ぶことはできないだろう人だということを経験して予測していた。

そんな存在と同列に考えられる季弓である、この程度のことであれば嬉々として行くだらうということを経験して紗与は分かっていた。

「……紗与」

地獄の底から届いたような声に紗与は口にも心にも漏らさないようにそつと溜め息をついた。

既に逃げ場はない。

紗与と早苗が同じクラスである以上はどのような手段を用いても紗与にこの状況から脱する術もないのだ。

他のクラスメートは紗与と早苗のことを遠巻きに見守るだけで、一定の距離から近づく様子はみられない。

慣れとは恐ろしいもので、こういった状態の早苗に近付いてはいけないということを経験してクラスメートの全員が重々理解していたのである。

流石は入学して僅か数ヶ月の間に“残念美人”の名を密かに囁かれるようになった早苗であった。

比較的優れた容姿を有している早苗に男の影がほとんど見られないのは、流司という存在よりもこのような性格の緩急、高低差が大きな影響力を持っているのかもしれない。

「紗与、一晩おいて私思ったんです。紗与が初めから私にしっかりと説明していたらこんなことにはならなかったんじゃないかと……」

ゆっくりと話し出した早苗を前に紗与は既に諦めの極致である。

「（怨むわ。流司さん……）」

季弓から渡された栄養ドリンクを一気にあおる男らしい紗与の姿もまた残念な美人であり、空の色と同様に紗与の心も深く青に染まっ
ていくのであった。

そこにはボロ雑巾があった。

いや、それは“人”だ。服なのか布なのか分からぬ状態の着流し
をまとっているそれは人の形をした“何か”であった。

苦しむ間もなかったのだろうか、それとも苦しみなど感じなかつ
たのか。

その人の形をした“何か”の顔らしきところには悟りを開いた釈
迦のような穏やかさが浮かんでいた。

何のいわれもない理不尽や不条理をそのような顔で受け入れられ
ることは間違いなく美点であるはずであり、そのずたぼるな姿とは
裏腹にそれを神々しいと思う人もいるかもしれない。

「あら、情けない！こんなところで死んでしまうなんて……」

「いや、生きているからな」

むくりとボロ雑巾、改め流司が身体を起き上がらせる。

着流しはこれでもかというほどに刻まれ、焦げているのに流司自

身の身体には致命傷が見られない。

妙な話ではあるがよほど上手にダメージを受けたということが分かる。

「残念」

「おい……」

本当に残念そうな表情を浮かべる紫に流司は声を低くして言う。

「冗談、だろうことは流司にも分かっていたが、紫の顔はとんでもないが冗談を言っているようには見えず、つい声を低くしてしまっていたのだった。」

「戦場の真ん中で盆踊りをしていたようだから、自殺願望があるのかと？」

「んなもんないっての……そもそも、こんな目に遭う言われもない」

「それは流司がペ」

「……紫、分かって言っているだろ？」

「何のことかしら？」

流司の言葉をのらりくらりと紫はかわして笑う。

「いいから誤解を解く手伝いをしてくれ。見てみる、あの目を嫌悪を通り越して汚物を見る目だぞあれは……」

流司のことをボロ雑巾へと至らせた当事者たる三人の目は冷ややかななどという言葉では言い表せないほどまで冷めたものであった。

「……誤解なのかしら？ 本当に……？」

「慧音、頼む……」

あくまでもはぐらかそうとする紫に見切りをつけた流司は慧音へと視線を向けて懇願する。

「えっ、私か！？ いや、人の趣味はそれぞれだが、流石に」

「そうじゃなくて、亜紀の家のことだ……！」

挙動不審に自分の意見を述べようとしている慧音の言葉を遮るように流司は声を上げる。

先ほどから背に感じる冷たさは増していくばかりで、本当に命の危険を流司は感じ取っていた。

少なくともこのままでは社会的に殺されてしまうであろう。

「っ！？ ああ……！ そういうことか……！」

ようやく慧音も事の真相に辿り着いたのか手を叩いて顔を明るくする。

「……どういうこと？」

抑揚の全くない声のまま妹紅が慧音に尋ねる。

「実は「お兄ちゃん……」……まあ、百聞は一見に如かずだ」

亜紀の登場に慧音は説明しようとしていた口を閉ざして、亜紀の方へと視線を向ける。

「産まれた……！ 妹だった……！ 私、お姉ちゃんになった……！」

「そうか、おめでとう」

「まあ、ごとういうことだ」

予測はつかなくもないが、考えもしていなかった結末に妹紅、咲夜、アリスの三人は呆然とする。

その後をやってくるのは勘違いによる猛烈な羞恥であり、その行き場のない憤りにも似た感情はとある者のもとへと向かう。

「私は“嘘”はついていませんわ」

「くくくく」

だが、飄々と応える紫の前にぐうの音もでないのだった。

「お兄ちゃん、可愛い名前を考えてあげてね!!」

「ああ、頑張ってつけさせてもらおうよ」

はしゃぐ亜紀を抱き留めて流司は優しく微笑む。

「では、新たな住人の誕生を祝うとしましょうか？」

紫の言葉に反応を示したかのように星が瞬きを返す。夜空には再び白い華が咲き誇り始めているのだった。

頁百四十八、『祝福の再演奏』（後書き）

これにて第八幕の終了。

第九幕は小話集となる予定です。

一話または二話完結のものをちよぼちよぼとやっていよいよということですが。

今日も後書きはお休み。

そして、今日から二週間ばかり更新が不定期になります。

ちよつと、テスト期間なのでね。勉強しないと単位が……

まあ、二週間全く更新ないということはありません、たぶん。下手すりゃ、連日いくんで（笑）

では、また。

ちよつと次幕は小話集なので欄外の希望を募ります。

ある人はどうぞ。

このキャラを出してくれとかそういう程度でも構いません。

欄外、『とある神主の苦惱録』

「麻紀子」

「駄目、古臭い」

「亜美」

「微妙」

「向日葵」

「可愛いけど、恐怖の方が大きい」

ぶつぶつと呟くように提案する流司の言葉を亜紀は有り得ないともいうように却下の雨を降らせていく。

この光景、実はしばらく前から繰り返されているものである。

何故ならば、流司に壊滅的にネーミングセンスがなかったためだ。

流司が懸命であることは皆、分かるころであった。眉間に皺を寄せて首を捻り、額からは汗を流しているのだ。

これで懸命でないというのなら大抵の人間が怠惰であるというものであろう。

それでも幾分かはマシになっているのだ。

それこそ、最初はともではないが、“素敵”ということとはできないものであった。“朔”という名前を流司が考えついたことが嘘であるかのようなほどに。

とはいえども頼んでしまった手前、亜紀の両親も断ることもでき

ず引きつった笑みを浮かべながらも受け入れようとしていたのだが、亜紀が断固として反対し今に至るのである。

「奈月」

「もう一声」

「もう一声って、この状況で使う言葉か……？」

全く譲歩をするような姿勢を見せない厳しい態度の亜紀に流司は疲れたように呟いた。

確かに亜紀の言葉が妙な方向に移ろい始めているような印象を受けてしまうのも否めない。

「でも、なかなかいい名前になってきてるよ？ “名前” は一生を共にするものなんだから、しっかりとした可愛い名前をこの妹にはつけてあげたいの」

「まあ、そうだな」

流司には流司であったからこそ、“名前” の重要性をよく理解していた。

それだけに再三に渡る亜紀の駄目だしも甘んじて流司は受け入れていたのである。

「そういえば、あんなに簡単に許しちゃって良かったの？」

「許す？」

「妹紅お姉ちゃんたちのこと。何だか色々な事情があるみたいだけ

ど、罪は罪でしょ？」

「閻魔様みたいなことを言うんだな」

その歳に似合わず辛辣な言葉を紡ぐ亜紀に流司は苦笑する。

その声色がまるで閻魔が罪を裁いているかのようにあっさりしたものであったからである。

「悪いことをしたらしっかり謝らなければならないと思う」

「ああ、その通りだな」

流司は亜紀のことを褒めるようにくしゃくしゃと頭を撫でる。

「だったら……」

「そう、だからな。“恩”には“礼”を、“罪”には“罰”をということだ。妹紅たちにはそれなりの償いをしてもらっているさ」

「罰……？」

「そう、勘違いが原因だというなら、その原因を取り除いてもらう。ようは“噂”の治めてもらっているんだよ」

首を傾げる亜紀に流司はゆっくりとした口調で説明する。

「それ、だけ？」

けれども、亜紀は啞然としたように流司に呟いた。

下手すれば大怪我では済まない事態に陥っていたかもしれないというのにあまりにも軽い罰のように亜紀は感じてしまったからであ

る。

「それだけ”じゃなくて”こんなにも”だ」

流司は小さく首を振って亜紀の言葉を否定する。

「でも、噂なんて勝手になくなるものだよ？」

「まあな、だけど俺は勝手に“治まる”のではなくて“治めて”もらっているんだよ。“人の口には戸は立てられぬ”、ましてや幻想郷中に広がってしまった噂だ。そう簡単には静まらないだろうな」

噂を意図的に終息させることはなにも決して楽なことではない。

確かに“人の噂も七十五日”という言葉もあるが、逆を言ってみれば噂がなくなるまではそれだけの時間が必要となってくるのだ。いくら、噂はなくなりやすいといっても数日やそこらでは治まるはずもないのである。

それをなすためには想像できないほどの労力を必要とすることは思うに容易いというものである。

「人里だけならまだなんとかなっただろうけど、妖怪や妖精も含めて今回のことを口外しないようにするってのが、俺の提示した罰だ」

「それって……」

「十中八九無理だろうな。でも、断るなんてことはできやしない。なんてったって“罰”なんだからな」

そう言って流司は意地の悪い笑みを浮かべる。

流司自身、噂が治まるとは考えていない。精々が大っぴらに流司

に尋ねてくるような人がいなくなるのがやっつとであろうと考えており、噂の終息には期待は全くしていなかった。

それは妹紅や咲夜、アリスも理解しているだろうことだとも流司は分かっていた。

その上で妹紅たちが断ることができないということもしっかりと把握しての提案であったのだ。

「お兄ちゃん、鬼畜だね……」

「どこでそんな言葉を……」

亜紀の言葉に思わず流司は口角を引きつらせる。

そうとはいえ、亜紀の言い分も尤もであると言えた。にこやかに笑いながらも罰として命じていることはえげつない。

流司の狡猾さの片鱗がどことなくうかがえるというものであった。

「まあ、ともかく誠意さえ見せてくれればそれでいい。匙加減は難しいところだろうけどな」

流司は今頃、関係各所に走り回っているだろう妹紅らの姿を思い浮かべていう。

「じゃあ、お兄ちゃんにも頑張ってもらわないとね」

「？」

「名前決め」

満面の笑みを浮かべて亜紀は言う。俺よりよっぽど鬼じゃないか

と内心で呟くが流司は表情には露も表さない。

されども、博麗の巫女顔負けの勘で目ざとく亜紀は察したのか、

「お姉ちゃんは可愛い妹の為なら“鬼”にもなるの」

と胸を張って言う。

結局、名前が決まったのはそれから数時間の時を経てからのことであつた。

欄外、『とある神主の苦惱録』（後書き）

其の九、『神主、イノベーションを考える』

『神代神社』はイノベーションに成功した神社であると言っても過言でない神社である。

『神代神社』を中心とした周辺地域が国の文化遺産に登録されたために単なる神社としての参拝客だけではなく、観光の一環としての参拝客も訪れるようになったのだ。

当然、それはあくまでも伝統を守り続けた結果に過ぎない。

しかし、それが今日の『神代神社』の存続に大きな影響力を持っているということは紛れもない事実であるのだ。

そういった意味であれば、『イノベーション』を求めるといふ霊夢の姿勢は間違っていないのだ。

「（だが、しかしな……）」

突然の指令に流司は頭を悩ます。

というのは、『神代神社』で成功をしたイノベーションが『博麗神社』で成功することはありえないからである。

『神代神社』のイノベーションは人々の心から信仰心が薄れ、頹廃しつつある“外”の世界であるからこそ当てはまったものに過ぎない。これが時代が時代であれば神社を観光地などに見做すことはできなかつただろう。

そう、未だに神への信仰が薄れてはいない“幻想郷”では逆に反感を買いかねないのだ。祭りを開催するという意味で一時的に関心を集めるといふことであるのならば、それも一つの戦略ではあり許

されることでどのような神社でも日常的に行われていることである。けれども、『博麗神社』が求めているのは長期的な信仰の回復、参拝客の増加であって一時的なものではないのだ。よって、この手の方法を使うことはできない。いくら参拝客の増加の目的の先にあるものが信仰とはかけ離れたものであっても、『博麗神社』は“神社”として参拝客を集めなくてはいけないのであった。

「（やっぱり、無理じゃないか……？）」

すっかり、リラックスした態度で寝転ぶ霊夢を前に流司は打ち滅ぼすべき壁は目の前の巫女ではないのかと漠然と感じるのだった。

後書きでも苦悩は続く主人公。

やっぱり、無理ゲー。

ほら、茨歌仙でも寝たら熱意は覚めると言っていたし……

本編はアフターケア。

しっかりと罰を受けてもらっています。

主人公は強かです。

気づいたらお気に入りか1400件超えて、評価ポイント4000pt超えていました。

恐縮過ぎます。

もうね、言葉にしようが……

というわけでお久しぶりです。

まだ、レポートは半分しか、テストは来週、補講は再来週なのでし

ばらく更新は不定期かつ短いです。

茨歌仙買いました。

龍の子供使役されてるんですけど、これは妖怪としての龍ってことなのでしょうかね？

あと、グリフォンはいい仕事するな

早苗さんの出来が良くて、思わず買ってしまいそうに……
いや、買ってはいませんか？

また、しばらく。

頁百四十九、『自惚れぬ水仙』（前書き）

ふりかくす 雪うちはらひ 仙人の
名もかぐはしき 花を見るかな

千種有功

頁百四十九、『自惚れぬ水仙』

「寒い!！」

「いや、冬なんだから仕方がないだろ」

何を言っているのだと、流司はじとつと目を半目にして呟く。

寒さを訴えた霊夢といえば襦袢を着て炬燵に足を入れているのだから、お茶の準備をするために炬燵より出ている流司よりも幾分も暖かいはずなので呆れるというものだ。

冬は深まり幻想郷には連日のように雪が降り積もる。博麗神社でもそれは変わらず、毎朝の境内の掃除には新たに“雪かき”の項目が加えられてからも短くない時間が過ぎ去っている。

寒さもそろそろピークを迎えるというもので、朝の目覚めと同時に布団に潜り込もうとしたくなるのが、流司でさえも何度もあったくらいである。

「幻想郷に常識は通用しないわ。いつまでも終わらない冬があったのだから、猛暑の冬があってもいいじゃないの?」

「それはそれで辛いと思うけれどな。それにそんなことになれば確実に異変だ。解決する手間が増えることになるぞ?」

温暖化の進む外ではないのだから、冬が暑くなるなどということとは幻想郷ではないだろう。

幻想郷に常識が通じないという霊夢の言葉はもつともであるが、そのようなことが起きてしまえば“異変”として霊夢は解決へと繰り出さねばならない。

面倒が増えてしまうという点を考えてみればこのまま何も起こらない方が平和的で良いことではあった。

「そう言われてみればそうね。面倒なことはないに越したことはないわ。流司、お茶」

「はいはい」

霊夢はうんうんと首を縦に振ると遠慮の欠片もない口調で流司に要求する。

そんな霊夢の態度にも流司は文句一つ言つことなく急須からお茶を注ぐ。その姿は洗練されているというよりは下使いに慣れてしまっているという方が近いであろう。

「はいよ」

「ありがとう」

流司から湯飲みを受け取った霊夢は手で包み込むようにして持ち、お茶をゆつくりと口に運んでいく。

その多少の婆臭さを感じさせるも幸せそうな様子に流司の表情も自然と綻ぶ。

「じゃあ、俺は人里の方に行ってるからな」

「日が暮れるまでには戻ってくるのよ」

「……了解」

まるで我が子を送る母親のような霊夢の言葉に流司は思つところがあったが、結局がいつものことだと開き直り素直に頷く。

静かに開け放った戸の外には今日もまた粉雪が降っているのだ
た。

凍てつく白い世界を流司はゆるやかな足取りで歩みを進めていく。
シヤリシヤリと音を立てて潰れていく雪は流司の歩みを妨げるが、
流司は飛ぶようなことはせずにいる。

理由は単純に空を飛ぶ方が寒く感じるからである。尤も歩くは歩
くで足元から冷えていくので実際には大して変わるものでなく、流
司の感じ方の違い程度のことである。

「ゆーきーやこんご。霰やこんご」

身体を震えさせる流司の耳に一つの旋律が届く。流司にとっては
もはや懐かしく思える旋律であった。

「降つては降つてはずんずん積もる」

キョロキョロと流司は周囲を見渡すもその旋律の歌い手を捉える
ことはできない。声が届いていることからもさほど遠い場所にいる
わけではないということは何い知れることであつたが、流司には木
々と降り積もる雪の姿しか見えないのだった。

「やーまも野原も綿帽子かぶり、枯れ木も残らず花が咲くー」

流司は軽い音を立てて雪を蹴る。ふわりと宙に上がった流司の身
体は空を駆けるような足取りで高く高く飛翔する。

「ゆーきやこんこ。霰やこんこ」

流司が木々の背丈を超えたとき、その姿はようやく流司の瞳に捉えられた。流司も上空から見下ろしたことで初めて気付いたことであつたが、雪化粧を施された木々の向こう側は平原になつていたので。

「降つても降つてもまだ降り止まぬ」

そこにその姿はあつた。

真白の舞台でそれこそ円舞をするかのように回り歌う女性が一人そこにはいた。観客もいなければ、その他の役者もない、まさに独壇場と呼べる舞台上その女性は舞う。

「いーぬは喜び庭駆け回り、ねーこは火燵で丸くなるー」

上機嫌で歌い終えた女性と上空から眺めていた流司の視線がぶつかる。瞬間、誰かが見ているとは思っていなかったのか、わなわなと驚愕で振るえ始める女性。

流司もどう声をかけていいのか皆目見当もつかない。女性は誰も見ていないだろうから、あれだけ大胆に旋律を紡いでいたのだろうから、それを見られていたとなれば相当の羞恥がその身を襲うことになるだろうということは流司にも十分察することができた。

「あ、ああ、あっ……」

しかし、どうも女性の様子がおかしいものであつた。

今や全身にまで及んでいる震えは羞恥によるものではないように見え、その顔も赤く火照らすどころか反対に蒼白にしまつていく。

その様子は、

「お、襲わないで

—!—!」

「はっ?」

恐怖に怯える姿そのものであった。

「まあ、知り合いが迷惑をかけたようですまない」

「いいの、結局のところ私は妖怪なんだから……しくしく」

『レティ・ホワイトロック』。

それが現在進行形で流司の隣で涙を流す女性の名であった。

「それはそうなんだが……」

レティが流司の姿を見た途端に震え怯え始めてしまった理由を聞いた流司は欠々に心からの同情心を抱いていた。

レティが怯えていた理由は単純に流司が“神主”であったからだ。話は数年前まで遡る。その日もレティは今日のように降り積もる雪に喜んでいた。けれども、その幸せは突如やってきた人間によって跡形もなく打ち壊される。

いつまでもやって来ぬ春の原因をレティであると勘違い、もとい断定した巫女によって何のいわれもなく退治されることになってしまったのだ。　いくら冬が好きだとはいえ、いい加減に春眠と洒

落込みたかったレティとしては飛んだ災難である。それ以来、どうも巫女に対して必要以上の苦手意識を感じてしまい、神主であった流司にも同様の思いを抱き怯えてしまったというわけである。

つい最近、似たような経験をした流司にはレティのことが他人ごとのようには思えなかった。

その上、流司とは異なり妖怪であるレティでは“妖怪は退治されて当然”と考えている巫女から謝罪などあるはずもない。

不憫、あまりにも不憫であった。

「いつそのこと“くろまく”とでも名乗れば良かったかしら？」

「それは火に油を注ぐようなものだと思うぞ」

巫女の前でそのようなことを言ってしまった暁には完膚なきまでに叩きのめされるだろうことは確定した未来である。

尚更、悲惨な事態になってしまっただろう。

「しくしく」

「“うぬぼれ”がなかった分マシだったと思うしかないな」

「「はあ……」」

流司とレティは顔を見合わせて溜め息をつく。その溜め息はどうしようもなく白く深いのだった。

頁百四十九、『自惚れぬ水仙』（後書き）

其の十、『神主、妥協案を閃く』

ふと、流司の頭に過ぎるものがあつた。達成できるかどうかは非常に曖昧なものがあり、『博麗神社』という括りで考えた場合は正しいものであるかも分からない。

しかし、霊夢の要望をある程度満たした上で最大の効果をあげる方法として流司が思いつくのはそれ以外にはなかった。

「一つ、いや、二つほど考えはでた」

「話してみなさい」

組んでいた腕を解き、目を開いて呟いた流司に霊夢は先を促すように声をかける。

「一つはやはり、“人里で布教をすること”だ。尋ねた結果としては悲惨なものがあつたけど、“博麗神社”には他にはない幻想郷での歴史がある。ある程度までその存在を醸し出しさえすれば、後は勝手に信仰は集まっていくな。そもそもが多神教であるこの国の人民性だ。信仰を奪い合うということにはならないだろう。“博麗神社”の性質を鑑みてみな」

『博麗神社』には『守矢神社』や『命蓮寺』にはない古くからの歴史がある。そんな『博麗神社』が現在日陰を見ているのは布教活動の少なさから人里の人間の心から薄れてしまっているからに過ぎ

ない。

そうでなければ、『守矢神社』や『命蓮寺』、ましてや『流司』などに信仰を奪われることはなかったはずである。

ならば、『博麗神社』に求められていることは人里の人間にとって身近なものになることであり、そのために最も分かりやすいことは“布教”をすることである。

『博麗神社』には特定の祭神がないことから、御利益を全面に押し出して信仰を集めることは困難でもある。

だが、逆に考えてみれば“祭神”がないことで他の神社や寺院の信仰を大幅に奪うということもなく、他とは異なる形での信仰を集めることが可能なのである。

これを見逃す手はないであろう。

「……なるほど、いいわ。で、もう一つは？」

霊夢は流司の言葉をよく反芻した後、口を開き続きを促す。

「これも“博麗神社”の存在感を高めるといって根本は変わらない。けれども、大きな違いがあると思う。それはな、“異変”の解決を止めることだ」

テストが近くヤバいというのに新幕の更新です。

まさかの登場でしょう？

結構好きだったりします。

第九幕はこんな感じで一話完結っぽく進みます。季節もゆっくりとね。

後書きも結構衝撃的かな？

では、またしばらく。

頁百五十、『仄かなる梅』（前書き）

梅の花　それとも見れば　久方の　天霧る雪の　なべて降れれば

詠み人知らず

空を飛べば乱反射をし輝く銀世界が瞳に差し込む。雲一つない蒼穹は未だに震えの抜けない気温のことを考えても十分に麗らかな陽気であるといえた。

春はまだ来ずともそれは春の訪れを匂わせるかのような暖かさであり、自然と流司が空を飛ぶ動きも伸び伸びとしたものにならなっていく。

日光により近いからか、風のない空であるならば積雪で冷やされている地上よりも暖かい。伸び伸びとした流司の動きは次第にうとうとしたものへと移り変わっていく。

“居眠り運転”ならず“居眠り飛行”。

今にも落ちてしまいそうな軌道で空を飛ぶ流司は本人が危険であるに留まらず、見ているものがいれば不安で胸を撫で下ろすことができないであろう。

「ふああっ……眠い……」

口に手を当てて流司は大きく欠伸を一つする。臃気な眼と意識では流司は己が今何処を飛んでいるのか正確に理解していなかった。

現に人里から博麗神社へと向かっていたはずの流司の前に広がるのは薄く霧の張った湖と紅く染まる館であった。

普段であれば有り得ない。けれども、現状の流司にそれを求めるというのは酷なもので、自分が危うい状況にあるということは十分に分かっていた。

その時、流司がそれを目にしたのは偶然であったが、ある意味では運命づけられていたのかもしれない。

穏やかな日差しに照らされるように佇む人影。それがそこにいる

ことは当然であつた。だが、それがそうしていることは当然ではない。尤もある種、必然と呼んでもよいことは確かであるが。

普段の流司であれば一声かけていたかもしれないが、睡魔で限界を迎えていた流司は誘われるようにその人影のいる日向へと降り立つと、人影と同様に手頃な木に背を預けて深い闇へと潜っていくのであつた。

彼女の毎日は忙しない。だが、それは余裕がないというのではないだろう。“時間”という意味であれば彼女以上に有用で効率のよい使い方をすることができるものはそうそうは見つかることはない。肩まで届くかは微妙な銀の髪を揺らしてそのメイドは洗練された動きで館の中を歩く。

否、“歩く”という表現は言えて妙な話かもしれない。彼女、『十六夜咲夜』の通り過ぎた後は埃一つなく清掃されている。ただ通り過ぎていくだけであるにも関わらずだ。

タネを明かしてしまえばそれはそこまで複雑であるという話ではない。単純に咲夜が己の能力、『時間を操る程度の能力』を使用して一瞬にして掃除を済ませているように見せかけているにすぎないのである。

いくら咲夜が優秀なメイドであろうとも紅魔館という見かけも大きく、内部はそれ以上に大きい屋敷を一人で切り盛りするには時間も身体も足りないのであつた。

紅魔館には咲夜以外のメイドがないのかといえはそのようなことはない。数多の妖精メイドが紅魔館には数を連ねている。それぞれ、幻想郷で紅魔館以上に住まうものが多い場所はないほどにある。

これは当主である幼き吸血鬼の意向というか沽券、見栄がその理由の大半を占めるものであるのだが、メイドの大半を占めるもの“妖精”という実を求めるのであれば水増しにも劣らないというものであった。

雑談にサボリはデフォルトで失敗などの数など数えてはいられない。それでも、簡単な指示であれば果たすこともあるので多少は、雀の涙の欠片ほどは役には立っているのであるが。

かくして、紅魔館のメイド長である咲夜にはほとんどプライベートは存在していない。昼夜、そして本来あるべき時間以上に仕事に追われているのである。それを苦に感じず、むしろ生きがいのように感じている咲夜には元来メイドとしての素質が備わっていたのかもしれない。

「さて、あらかた済んだわね」

玄関ホールまでの掃除を終えた咲夜は呟く。

仕事の量が尋常でないとはいえ、端から見てもえれば咲夜の仕事を片付ける速さも尋常ではないために実はともかくとして午後も遅い時間となれば咲夜は大抵の仕事を終えてしまっている。これから夕方に夕食の準備をし始めるまでは咲夜にしてみれば貴重な自由時間といえた。

普段であればこの時間を人里へと買い出しなどに用いるのであるが、買い出し自体は先日済ませてあったので心許ないということは全くなかった。故に今日のこの時間は正真正銘のフリーな時間であったのだ。

「美鈴の様子でも見に行こうかしら？」

頬に手を当てるようにして口を開いた咲夜の言葉は自由な時間を

有意義に使おうというようには到底思えないだろう。

それも仕方がないことなのかもしれない。確かに咲夜は“多芸”ではあったが、決して“多趣味”ではない。

自由にしてもいい時間ができたからといってすることなどに見当はなかったのだ。仕えている紅魔館当主、『レミリア・スカーレット』も昨晩の夜更かしが祟っていたのか目を覚ましてはいない。夜更かしで寝坊をする吸血鬼の姿が正しいものであるのかそうではないのかはひとまず置いておくとして、咲夜にすべきことがないということは揺るぎがない。

そこで咲夜が思い出したのが門番である『紅美鈴』の存在であった。

やるときはやる美鈴であるが、逆を言ってしまうえばやらないときはやらないわけであり、それを体現するかのように昼寝は彼女のアイデンティティの一つとなってしまうっている。精神的にも肉体的にも注意を促すことは多々あれど、美鈴のそれがなくなることはなかった。

ここ最近では寒さのあまりか昼寝をするようなことはなかったのだが、今日は寒さも幾分か和らいであり、日陰はともかくとして日向は心地のよい空間であるだろうことは館の中にいた咲夜にも伺い知ることのできることであった。

咲夜がもしやと気付いたのは当然の帰結といえるものであろう。

「さて、寝てないといいのだけど……」

そう言いながらも手元にナイフを取り出している咲夜には既に結果が見えているように思える。実際、咲夜には美鈴が寝ていないなどという選択肢を選んでいるとは信じる事ができなかった。

「やっぱり……」

門の外には傾き始めている日差しを一身に浴びて寝息を立てている美鈴の姿がある。期待はしていなかったとはいえ、ある意味こころも期待を裏切っていない門番の姿に咲夜が溜め息をついてしまうのは当たり前であった。

「懲りな……あら？」

構えたナイフを投げようとしたところで咲夜はそのいつも光景にいつもとは異なるものが存在していることに気が付く。それと同時に冷やかな風が吹き抜ける。日差しは春を感じさせるものであったが、冷たい風はまだまだ冬のものであった。

咲夜は声に表れたかも分からないほどに溜め息をもらすと構えていたナイフを下ろし、身を翻して紅魔館へと戻っていくのだった。

夕暮れとなれば気温は下がる。

気温が下がれば雪の多く残る幻想郷が冬の装いを取り戻すのは確定している未来というものである。

「んっ……」

しょぼしょぼと瞼を開け閉めして流司が目を醒ましたのは頬に氷を当てられたような冷たい風を感じたからだ。

蒼穹であった空は黄昏色に染まり、天高くから注いでいた日差しは地面と平行に伸びるようにして流司の顔を照らしている。

瞳を灼くような朱い斜陽から目を背けるようにして流司が臆気な

視線を自身の身体へと向ける。

「ん……？」

そこで流司は己の首に覚えのないものがあることに気が付く。それはマフラーであった。普段のように朔が巻き付いているというわけではない。夕陽にも劣らないほどに紅く飾り気の見られないマフラーは凍てつくような風から流司の身を守るようにして流司の首を包んでいる。

「このマフラーどこかで……」

焦点が曖昧な目で流司はマフラーを見つめるが、寝起きで動きの鈍い思考では特定するまでには至らなかった。

「起きたかしら？」

「えっ？」

ふと耳に届いたのは透き通った声であった。雪解け水を思わせるような清らかな声に流司の意識は急速に覚醒していく。それこそ、雪解け水を浴びた雪がまた解け始めるかのように連鎖的に流司の意識ははつきりとしたものになっていった。

「さ、咲夜ッ？どうしてッ？」

「どうしてって、ここがどこだか分かっていないの？」

「あっ、そういえば……」

咲夜の言葉を受けて流司は己があまりの眠気に外で寝てしまったということ思い出す。今になって思い返してみれば、随分と見当違いな場所に辿り着いてしまったものだ。と自身の行動に呆れを通り越して流司は感心してしまう。

「思い出したようね。いくら今日は暖かったとはいっても、こんな時間まで起きないなんて風邪を引いてしまっわ」

「面目ない。ちょっと疲れがたまっていたかもしれないな」

流司がこのような場所で眠ってしまったのは単なる寝不足というだけではない。ここしばらくのところ里人の手伝いをする事が多く、普段通りに博麗神社にも連日のように通うという二面生活を送っており、幻想郷に来てからほぼ二年経ち体力的にも十分なものが備わってきている流司でも疲れがたまってきてしまうことは避けられない事実であったのだ。

どちらかといえば生真面目な部類に含まれる流司の幻想郷に住まうものにはあまり見られることのない国民性の体現の結果といえるものである。

尤も流司自身は頼られることを苦に思うことは全くとしてない。それは見返りとして様々な形での報酬を流司が得ているということも大きな理由の一つでもある。

しかし、やはり基本的に流司はお人好しなのである。神主という立場は他の職とは異なり、明確な利益というものが見えるものではない。神に仕えるという無上の奉仕の心がなければ務めることができるようなものではない。それをこの若さにして他の選択肢があったにも関わらず進むことを決意した流司にはその血故か神職としての素質があったのである。

「こんなところで寝てしまうような疲れは少しとは言えないわ。ちよっとは休んでほどほどにしなさい」

「まさか、よりもよって咲夜にそんなことを言われるとは思っていなかったよ……」

思わぬ咲夜の言葉に流司は目を見開いて驚きを示した。

神に仕える流司とメイドである咲夜。

仕える存在は異なれど本質的には非常に二人は似通っている存在である。それはお互いを感じていることであるし、だからことごとくして軽口を言い合うことができるような関係を築くことができた。

だからこそ、咲夜の口にした言葉は流司に驚きを与えると共に妙なおかしさを感じさせてしまうものだったのである。

「どうぞ襲ってくださいというような無防備さで寝てしまっていた癖によく言っわ。いくらこの当たりがお嬢様の影響下にあるとはいっても有り得ないわね。死にたいの？」

「うっ、い、いや、その通りではあるんだが、どうも誘われてしまっつてな……」

言葉を詰まらせながらも流司は弁明をするも、それが弁明になっているとは到底思えるようなものではない。

咲夜の言葉は尤もであり、妖怪の跋扈する幻想郷で無防備にも外で昼寝をするなど正気の沙汰ではない。そのようなこと、流司が今更学ぶようなことではない。つまりはそれはそんな判断ができないほどに流司が疲弊していたということの証明でしかないのである。

「誘われたって……そこにいる門番が貴方まで守ってくれるなどと

「いうことはないのよ？碌に門だつて守らないのだから」

「流石にそんなことは分かりきっていたことだろうし、望んでいなかったと思う。まあ、配慮が欠けていたな、すまない」

「私に謝っても仕方がないでしょう。私が気付くまで無事だったその運に感謝することね」

「違うない」

咲夜の的を射た言葉に流司は笑う。

「ところで……」

「何かしら？」

「どうしてそんなに覗き込むようにしているんだ？」

咲夜の顔が流司のことを眺めるといふよりも覗き込むように見下ろしていることに流司は違和感を感じる。

「……今更なの。てっきり知っていて態とだと思っていたわ」

「？」

呆れたような表情になる咲夜に思わず流司は疑問符を浮かべてしまふ。

「貴方が寝たときのことと起きたときのことを思い出してみなさい」

「寝たときと起きたとき……？」

疑問符を浮かべ続ける流司に咲夜はしょうがないとでも言外に言うようにしてヒントを与える。

「（確か、眠気に耐えられなくて手頃な木に寄りかかったんだよね……）」

消えかかってしまったっている記憶を辿るようにして流司は顔をしかめて思考を巡らせる。

「（んで、目を覚ましたらもう夕方で……）」

一つ一つ思い出していくが思い当たる節は一向にない。

「（いや、どうして空が見える……？）」

顔に斜陽が差し込んだということはともかくとして、目を開いたときに始めて目にしたものが茜に染まった空であるのは不自然なことであった。その上に咲夜の顔は流司から見下ろすような形であり、とてもではないが流司が木に寄りかかっているとは考えられない。

つまりは流司は木に寄りかかっているわけではないわけであり、母なる大地と背を平行にしているのである。

しかし、それにしては妙に身体に痛みがない。身体が横になっっているからとはいえども、布団もない地面で寝てしまっていたのだから、身体が凝り固まってしまってもおかしくはないはずである。それにもかかわらず、流司は身体にほとんどいってもいいほどに痛みを感じてはいなかった。

そればかりかむしろ、肩から頭にかけては固いどころか柔らかい

と感じるほどであり、それが示すところはすなわち、

「なっ、何してっ、ツウ!?!」

そこでようやく流司は自分がどういいう体勢をしているかに気付く。気が付いた流司は慌てて起きあがるうとするが、突如感じた額の鈍い痛みにより顔を歪ませた際に、

「ほら、急に動かない」

咲夜は流司の肩を押さえるようにして流司が起き上がるうとするのを防ぐ。

「いや、意味が分からないのだが。なんでこんなことに……?」

無然とした表情で流司は呟く。額にいわれも知らない痛みを感じた上に、極めつけに流司が頭を乗せられ、乗せているのは咲夜の膝の上だ。わざわざ言い直すまでもなく“膝枕”であった。

今や完全に覚醒を迎えた流司の意識であったが、現状を理由付けるだけの思考力があるかと問われればそのようなことはない。まだ夢を見ている方が納得ができるというものである。

「そっか、夢か」

「現実よ」

「ツ!?!?!」

流司が現実から逃れることを阻むかのように伸ばされた咲夜の手が流司の額に触れると同時に鈍器で殴られたような痛みが走る。起

き上がるうとした際に氷嚢が滑り落ちてきたことから、流司の額にごぶができてしまっていることは明らかであった。

「……現実だということは“痛い”ほど分かった。で、何故……？」

「えっ、と、それはその……ごめんなさい」

咲夜はしばし視線を泳がせるようにさまよわせた後に流司のへと重ね合わせて声か細く謝罪する。

「だから、意味が分からないから」

「ええ、順に説明するわ」

紐解いてしまえば流司の額にごぶがある訳はなんてないことであった。

流司が寝ていることに気が付いた咲夜は一度紅魔館の中へと戻り、毛布とマフラーを取ってきたのだ。妖怪とは異なり人間である流司の免疫力は人並みでしかない。日が照っている間であれば問題はないが、陰ったり沈んでしまえばたちまち風邪を引きかねない。

気づいてしまった以上はそのままにしておくことは及びないと思つた咲夜がそのような行動をとつたのはそれなりに親しい知り合いとしては当然であるといえた。

話がここまでで終わればイイ話というだけだが、それが済んだ。だが、そうもいかなかったからこそ、流司は咲夜に膝枕をされているという状況に至っていた。

マフラーを流司の首に巻こうとしたまでは良かった。けれども、マフラーを巻くために木へと寄りかかっていた流司の頭を浮かせた瞬間、スルリと咲夜の腕を逃れるようにして流司の身体は頭は傾き

美しいと思えてしまうような軌道を描いて大地へとぶつかる。

すぐさま咲夜は流司の身体を引き上げたものの、生じた激しい音
相応のこぶが流司の額にはできてしまっていたのだった。

「事情は理解した。ことはどうあれ感謝すべきところだろうしな」

結果としては些か問題の残るものであったが、咲夜の行動はあく
までも善意によるものだ。流司が咲夜のことを責めるような言い分
はないであろう。

「そう、ただまさか目を覚まさないとはまでは思っていなかったわ。
全く反応がないのだから……」

「それは俺自身が知りたいさ」

額に大きなこぶをつくっても目を覚ますことがなかったというこ
とは流司自身も驚きであった。流石の咲夜も心配になることも当た
り前である。

「けど、なんで膝枕^{クレ}なんだ？他にも方法はいくらでもあっただろう
に……」

心配してくれたということとは純粹に流司も嬉しく思っている。

しかし、それが膝枕に繋がるとは想像もできなかった。

「不服？この形を取るのが一番楽だったのよ。偶々時間もあったこ
とだし、お嬢様にも時折することがなのもの。どうということでは
ないわ」

「いや、レミリアにするのとは訳が違うだろうが……」

淀むことのない口調で言う咲夜に対して流司は呆れたふうに言葉返す。

時折、その容姿さながらの子供っぽさをみせるレミリアを膝枕しているのであれば、咲夜の姿も様になっていたことであろう。

対して現状はといえば、実のところあまりに酷い構図というわけではない。むしろ、ある意味ではこれ以上ないほどに絵になっているといえる。

そうは言えども、咲夜が落ち着き払っているのとは対称的に表面上こそは落ち着いているように見えるものの流司はそわそわと気恥ずかしさで内心は落ち着きがなかった。

そうであつたが為か、

「……変わらないわ」

「ん？何か言つたか？」

蚊の羽音よりも微かに呟かれた言葉が流司の耳に届くことはなかった。

「なんでもないわよ。ほら、もう大丈夫だろうからゆっくりと起き上がってみなさい」

「ああ」

促されるがままに流司は上半身を起こしていく。額に残るこぶはまだ痛むも耐えられないというほどのものでもないようで、先ほどとは異なり流司は痛みに動きを鈍らせることなく立ち上がった。

「大丈夫そうね」

「おかげさまでな」

立ち上がった流司は大きく伸びを一つ。その間に咲夜も立ち上がり、スカートについた皺を伸ばすようにして身なりを整える。

「……時間は大丈夫なのか？」

「まだ寝ぼけているというの？そんなこと私に訊くことではないでしょう？なんなら、手伝ってくれと助かるわ」

「そうだったな。んまあ、そうだな、このまま何もしないとこのは悪いし手伝わせてもらうよ」

「そう」

流司の返答に咲夜は素っ気なく答えるとそのまま流司に背を向けるようにして紅魔館へと足を向ける。流司もまたそんな咲夜の後を追っていく。そのような流司の位置からは冬を越えた花が綻びを見せるような咲夜の表情の変化に気付くことはないのだった。

頁百五十、『仄かなる梅』（後書き）

其の十一、『神主、解決策を示唆する』

新しいものを作り出すためには、古きものを捨てなくてはならない。平たく言ってしまうえば流司の述べた妥協案とはそういった内容のものであった。

抜本的な事態の進展を目指すにあたって伝統というものは時として足枷にしかならない。『温故知新』となればいいが、それがなれなかった場合の古き知識はただの遺物でしかないことになってしまふのである。

そういつた意味では流司の根本を揺るがしてしまうような発言は影響力の善悪を問わないとして大きな変化を与えることは間違いないことではあった。

「何言っているのよ。それじゃあ、元も子もないじゃない、流司」

確かに流司に解決策を提示するように言った霊夢であったが、流石に馬鹿げているというように言葉を漏らす。“異変の解決”というところで顧客の満足を満たしていた『博麗神社』からそれを奪ってしまえば残るものは何もないと言っても過言ではない。そのようなことをしようものなら、間違いなく博麗神社が無用の長物として人々の心に定着してしまうだろうことは霊夢にも理解できることだった。

「だがな、“異変の解決”は既に『博麗神社』だけの専売特許ではない。魔理沙は毎度のこと、かつては咲夜や妖夢、今では早苗も異

変の解決に出向いている。だとすればだ、“異変の解決”だけに固執してしまっている『博麗神社』に太刀打ちするだけの力はない。今回の調査でそれはよく分かったことだろうか？」

異変の解決は必ずしも『博麗神社』、霊夢が行うだけというわけではない。自称何でも屋の魔理沙や最近では守矢の風祝の早苗も異変の解決に乗り出している。経験という意味では霊夢に一日の長があるも、紛いなりにも結果を残している以上は油断できるといってものではない。

そこで逆転の発想であった。

“異変の解決”を既に貢献しなくなったものであると考え体系的な廃棄をしてしまう。そして新たに欲求を満たす役割を定義して、それを『博麗神社』の価値とする。流司が言いたいのはそういうことであった。

「何も“異変の解決”を全くするなと言いたい訳じゃない。あくまでも役割の順位を入れ替えるということだ。尤も肝心の新しい役割はさっぱりなんだがな」

「……………」

参ったというように頬をかく流司の言葉にも霊夢は反応を見せない。まるで凧の中の水面のように緩やかかつ凜とした静けさを霊夢は醸し出し続けるのであった。

お久しぶりです。

二週間ぐらいぶりですね。うん、テストヤバかった。まあ、なんとか乗り切りましたが、たぶん単位は落としていないはず、きつと、恐らく、メイビー。

まだ、レポートは終わってないんですけどね。レポートというかプログラム課題です。それさえ片付ければ憂いはもうない！！

とまあ、お詫びという訳ではないですけど今回は長かった。具体的には通常の三倍くらい。尤も投稿速度は五倍くらい遅いのですけど、赤くはないんだし仕方がないね。

つつ、訳で咲夜さんのターン。優遇？んなことはないはず、他もしつかり書くと思う。量は未定だけど……ちなみにこれで冬は終わりです。次は春ですよー！！

後書きも今幕の間には決着をつけたい。オチはまあ定番のが決まっています。ちゃんと意味はありますが。

あと、活動報告がちょっと重要だったりします。どうでもいい方以外は目を通していただければ幸いです。

頁百五十一、『春蘭の桜』（前書き）

踏めば惜し 踏までは行かん かたもなし 心尽くしの 山桜かな

赤染衛門

頁百五十一、『春蘭の桜』

「春ですよー」

「春だな……」

「そーなのかー」

ひらひらと舞う紋白蝶と妖精を眺めて流司は呟いた。雪はすつかりと溶けきり、萌葱色の草原があらゆる場所に顔をのぞかせている。鳥は囀り、蜂は忙しなく花々を行き来し、人は大きく欠伸をする。まさにまさしく春真っ盛り、穏やかな空気が幻想郷いっぱいに広がっていた。

「そうなのかって……感心するようなことでもなければ、わざわざ確認するようなことでもないだろうに……」

流司は相槌を打つかのように返ってきた反応に呆れて声を漏らした。とはいえ、その呆れの色は幾分か薄い。それは流司がこの妖怪に対しての対処法をある程度確立し始めていたからであろう。

流司の隣にいるのは一人の妖怪だ。名を『ルーミア』というその妖怪はある意味では流司が出会った妖怪の中で最も妖怪らしい部類に入っていた妖怪で、ある意味では最も妖怪らしくない妖怪であった。

何せよ初めて出会ったときの第一声が、

『貴方は食べてもいい人間？』

である。

出会った瞬間に襲われる経験は何度かあった流司であるが、流石に食べてもいいかと尋ねられた経験は初めてであった。

わざわざ確認するところがいまいち流司にはできないことである。丁寧の確認をとっている点は美点のように感じることはできるが、訊いている内容は物騒であることこの上ない。

当然のことすぐさま否定した流司であったが、そんなこんなで紆余曲折あり、今では時々顔を合わせたら話をする程度の関係を保っていた。

人間と妖怪とで感覚のズレはあるものの妖精のように話にならな
いこともないので、流司としてはルーミアと会話することは里の
子供と話をしているのと同じような印象を感じていた。

「でも、少し前は春と言われても分からないこともあったよ」

「そっらしいな」

流司はその時にはまだ幻想郷にやってきてはいなかったので、あ
くまでも言伝に耳にしているだけである。それだけに春の来ない春
という想像をするのは難しいことだった。

「まあ、リリー・ホワイト春告精が通り過ぎた瞬間に春になるってのも驚きだけだな

……」

視界の遙か彼方へと小さくなってしまっているリリー・ホワイト
の姿を見て流司は呟く。

「この季節だけは妖怪もアレに関わるような妖怪もないよ。下手
したら返り討ちになっちゃうし」

「見た目と違って随分とおっかないことだ」

過去にそれに準ずる経験でもあるのか、うつすらと苦悶の表情を浮かべていうルーミアの言葉に流司はしみじみと頷き呟いた。

妖精という存在は幻想郷の中でも最弱の存在であると言い切ることができる。その弱さは子供では難しくとも、人間の大人であれば簡単に倒すことができるほどである。尤も、妖精という存在は自然そのものであるので、まず妖精が死ぬということはない。それをこれ幸いと憂さ晴らしに使われてしまうこともあるので、普段から悪戯を仕掛けている妖精に関しては自業自得であるとして、そうではないただの八つ当たりを受けることとなった妖精はたまったものではないだろう。

そんな人間にすら負けてしまうほどに弱い妖精であるが、中には強力な力を持っている妖精も少なからず存在している。

博麗神社に度々顔を出し、流司とも知らぬ間柄ではない『サニー・ミルク』、『ルナ・チャイルド』、『スター・サファイア』や霧の湖によく出没している氷精の『チルノ』なども妖精の中ではかなり強力な力を持った存在だ。

彼女らは個としての力が強力であり、ほぼ一年中それだけの力を保つことができる。

だが、妖精の中にはとある一定の時期だけ強力な力を持つ妖精もいるのである。その代表的な例が春をもたらす『リリー・ホワイト』である。

妖精は自然を体現するような存在であるため、その妖精の拠り所となっている自然が力を増した場合はそれに付随して妖精自身の力も増すのである。

『リリー・ホワイト』は春告精という名が表しているように春の化身とも呼べる妖精である。したがって、一年の内の四分の一、春の期間だけは妖精は勿論のこと下級の妖怪ですら返り討ちにできるだけの力を有しているのである。

ただ、いくら強さを増そうとも妖精であるという根本は変わることはないので、自ら進んで他を襲いかかるようなことはない。

そもそも『リリー・ホワイト』は春を知らせることを目的としている妖精であるので、その邪魔をしないことには人畜、妖怪を含めて全くの無害である。

しかし、少しでも邪魔になるようなことがあれば手痛い反撃を受けてしまうことは間違いないであろう。

「見てるぶんにはのどかなんだけどな……」

「見かけに騙されちゃいけないと思う」

「それはごもつとも」

幻想郷には第一印象で決めてかかると痛い眼をみることになる相手が多くいる。

それは流司も身にしみて理解していることでもあった。

「ともかく、今はゆっくりとしているさ。団子、食べるか？」

「いただきます」

甘いみたらしのふんだんにかかった団子を流司はルーミアに差し出し、自分でも一本手に取る。みたらしを口元に付けながらも団子を頬張るルーミアを見ながら流司は大きく口を開けるのであった。

頁百五十一、『春蘭の桜』（後書き）

おくれたー

その上に後書きもなし。

だけど、今日で課題も全部終わった。

さあ、書き溜めます。

頁百五十二、『赤く染まりし沈丁花』（前書き）

沈丁花 みだれて咲ける 森にゆき わが恋人は 死になむといふ

若山牧水

「何なんだこの香りは……？」

流司は扉を開けた瞬間に鼻に入り込んだ匂いに思わず顔を顰めた。“臭い”でもなければ“匂い”でもなく、“香り”と形容したことから決して鼻に感じたものは気分を害する類のものではなかった。しかし、その密度というか濃度に対して眉を顰めてしまったのである。流司の視界いっぱいに広がっている霧のような煙は香りの原因であることは確かであった。霧とはよく言ったもので、濃霧さながらに視界は悪い。一寸先は闇というわけではなかったが、数十センチ先の様子すら伺いしることはできない。

到底、人間がいるとは思えるような環境ではない。だが、そこに目的の人物がいること間違いないのである。そうでもなければ、流司がこのような場所まで足を踏み入れることはなかったであろう。

魔法の森。

一年中、きのこの胞子に包まれたこの森は四季の移ろいを感じさせることがないように変化を見せることがない。

尤もそれは幻想郷という土地においてあらゆる場所で目にするこ
とができる光景であった。

一年中、鬱蒼とした竹に包まれた迷いの竹林。

一年中、陰鬱な濃霧に包まれている霧の湖。

この二つの場所などはその最もな例であるといえるだろう。勿論、全くの変化がないものなどは存在しない。迷いの竹林も霧の湖も体的的には変化がないように見えながらも、細部まで注視してみれば様々な変化を目にすることができる。

魔法の森に関しても四季の変化によって生じる胞子の種類や生えるきのこの数も変わり、やはり秋が一番きのこが群生する季節であ

るということを流司はこの森に住まう普通の魔法使いから耳にしていた。きのこ好きの彼女がいうのだからと一応の信用は見せていたが、魔法使いでもなければ、大のきのこ好きというわけでもない流司には四季の変化による魔法の森に生えるきのこの違いなど見分けることができるはずもない。

そもそもが、この森には人間が近寄ることなど滅多にないのである。

魔法の森に立ち込める胞子は強力な毒性を持っており、妖怪でさえも好んで近寄るようなことはしないのだ。魔法の森には人間が好んで集めにくるような木の実などの食材などもない。唯一あまりあまるほど際限なく生えるきのこの中には食用となるものも存在してはいたが見た目が良いとは言えず、香りは松茸以下、味もしめじ以下である。そのようなきのこに対して命を懸けてまで採集する人間などはいない。

それ故に魔法の森周辺は幻想郷でも屈指の人気のない場所であった。

そのような魔法の森であっても好んで住む物好きはいるのである。勿論、先のきのこ好きの普通の魔法使いもそうであるが、魔法の森の入り口にはこれまた物好きといえる半妖が外から流れ着いた品々を販売という名のもとに展示している店を構えていたりする。

この二人ともそれなりの、かなりの付き合いのある流司だけれども、今日の目的は彼女や彼ではない。

流司が知る魔法の森に住むもう一人の人間。

いや、彼女もまた“魔法使い”であった。

「　　おい、アリス。いるか……？」

魔法の森の一画にあるこぢんまりとした洋風の家。

そこに住んでいるのが、『アリス・マーガトロイド』。

同じく魔法の森に住んでいる魔法使いとは異なり、種族としての魔法使いである。

魔法の森のきのこの胞子はその毒性もさることながら、近くに寄っただけで幻覚を見せてしまうような作用もある。ただの妖怪や人間では魔法の森に寄り付かなくなる原因が増すだけであるが、これが魔法使いとなると話は変わる。

このきのこの幻覚には魔法使いの魔力を高める効果があるのだ。それ故に胞子の毒性に耐えることができさえすれば、魔法の森は魔法使いにとっては最高の環境となるのである。

更には多かれ少なかれ研究肌の魔法使いにとっては邪魔するものが全くない環境でもあるということが、魔法使いにとって魔法の森を好ましい環境と感じさせる理由の一つでもあるだろう。

アリスもまたそれを目的に魔法の森に住んでいる魔法使いの一人である。

アリスは人間から魔法使いへと至った経緯から、それほど人間に対して排他的というわけではないも、必要最低限以上には人前に姿を現すことはない。

故に今日も何事もなければ洋館にいるはずであるのだが

「……………」

流司の発した声は鈍い反響を起こしながら部屋の内部に響き渡る。しかし、反応が返ってくることはない。

流司が扉を開けた時の状況から考えても、家の中にいることは間違いないだろう。

されども、同時に状況が状況だ。無事であるという保証はどこにもない。現に煙だけでなく無言にも包まれている家の状況は否が応でも流司の不安を駆りたてる。

ユラ。

立ち込めていた煙が外へと流れ出したことではいささか見通しのよくなった部屋の中に動く影がある。

「あ、アリス？」

その影が誰であるかということは明白な事実といえるところであったが、その本能的な恐怖を呼び起こすようなゆらゆらとした動きを繰り返しながら近づいてくる影に流司は凶らずも一歩足を後ろへと下げてしまう。

「ちよ……」

「ちよ？」

ゆっくりと煙の中から姿を現したアリスの姿は至るところが煤汚れており、見るからに悲惨としか言いようがない。徹夜明けであるかのように血の色が抜けてしまっている顔は果たして人前に出しても良かったのかと首を傾げてしまうほどにやつれきっている。

「調合の量を間違えた、わ……」

煙が完全に流れ通常の様子を取り戻した流司の視界にはテーブルの上に散乱している瓶やすり鉢が映る。何をしていたかということは素人目でもわかることであった。

魔法薬、またはそれに準ずるものを調合しようとして失敗したのだろう。直接的な被害が見られないということは幸いであったが、あれだけの濃度の香りにしばらくの間包まれてしまえば憔悴してしまうのも仕方のないことであり

バタンツ。

「って、アリスッ!?!」

流司の目の前でアリスは力尽き床に倒れる。

その距離はアリスにとって幸いであったのか、そうではなかったのか、流司が抱き止めるにはあと一歩足りないという絶妙な距離であった。

テーブルの上には無数の木塊が並べられていた。

「これかな……」

その木塊をしげしげ眺めながら流司は呟いた。

一見した見た目はただの材木と変哲もなく、知らぬものでは焚き木の足しにすることくらいしか利用方法が思いつかないだろう。

しかし、この木塊らが先程まで部屋中を支配していた香りの原因であるのだった。

「アクイライア・アガローチャ、流司なら沈水香木といえは分かる?」

「それって沈香のことか?」

「ええ」

アリスの説明にこれがと流司は感心するように木塊を手を取った。
沈香。

正式名称、沈水香木。

学名、アクイライア・アガローチャ。

白檀と並ぶ代表的な香木で、香木の王と言われることさえある。

沈香の中でも質の良いものは「伽羅きやら」と呼ばれ、その塊ともなれば目が飛び出してしまうほどの値を張るものであった。

香と言えば仏教を思い出すことが多い。

確かに香木の多くは仏教が多く広まる地域を原産としているものがほとんどで、この国で天下の一品の名香と謳うたわれる蘭奢待らんしゃたいも元々は寺院に保管されていたものである。

けれども、古くから邪気を払うものとして用いられ、中古からはその芳香をくゆらせたり衣類に焚き染めたりすることで珍重された。

それは“香を闘わす”という言葉があるほどで、かつて時の権力者にとつてはどれだけ優れた香りの香を所有しているかが一種のステータスになったほどである。

流司にとつても香は馴染みのないものというわけではなかった。

それは神代神社に寄贈されているものには香木も多くあり、保管されている蓋を一度開け放てば蔵中に香りが広がるくらいだった。それでも、ここまで立派な香木を直に目にしたことは流司も初めての経験であったのだ。

「どついう経緯でここまで流れついてきたのかはわからないわ。でも、これだけのものはそうそうお目に掛かれないもの。利用しないわけにはいかないでしょう?」

「利用つて焚く以外に利用法なんてあるのか?」

流司の疑問も尤もなものであった。

香木の利用法などは高がしれたもので、焚く以外にその使い道は

数えるほどもないといえた。

「香木自体というよりはそこから抽出したエキスをというのが正しいわね。植物の一部には魔術的効力があることは有名な話よ。『アルベール』などの魔導書にもあるようにね。特に沈香はこれとの相性がいいのよ」

アリスが流司の前に差し出したのは一株の白い花であった。

「ダフネ・オドラ。沈丁花の方が分かりやすいかしらね。丁度、季節だったことだしいいエキスが抽出できたのだけど」

そこで言葉を区切ってアリスは数分前の惨状を思い出し深く溜め息をつく。

先の事態の理由は極めて単純なものである。アリス自身が理解していたように調合する際の量が若干多かったのだ。多いといえどもそれは本来であれば規定の量であったのだが、アリスが考えていたよりも魔術的効力が大きかったという誤算のために結果として調合を失敗してしまっていた。

「これは嬉しい誤算とでも思っておくべきなのでしょうね」

良質な素材が取れたということは純粹に喜ばしいことである。失敗によって多少は無駄になってしまっていたものの、未だに十分過ぎる量のエキスがアリスの手元には残っていた。

「まあ、無事で何よりだな。その辺のことは俺にはさっぱりだから説明されても分からないだろうな」

「元から理解してもらおうとだなんて思っていないわ。流司に才能

がないことはとづくに知っているもの」

魔法を使うという技術は元来の素質による部分が非常に大きい。それだけに血統というものが非常に重視されるのである。知識として魔法を修めることができても、技術として習得することが難しい。そして、その才能は分かるものであれば一目で判断することができる。

流司も魔法という存在を知った時にかつての憧憬からその素質をアリスに確かめてもらっていたが、その結果は全くないというもので魔法の“魔”の字でさえ身に着けることはできないだろうというものであった。

「で、今日は一体どんな理由で来たの？わざわざ来たのだからそれなりの理由があるんでしょ？」

「特に理由がなくても来ることは何度かあった気も……理由なしで来ちゃ行けなかったか？」

「なっ、い、え、そ、そんなことはなかったり、あったり……吝かでもないというか、むしろ歓迎というか」

流司の思いも寄らぬ切り返しにアリスは顔を赤くしてしどろもどろになる。その支離滅裂で逆接だらけの言葉はぼそぼそと口から零れ落ちるように紡がれる。そうであったがためか、

「まあ、今日は理由があるんだがな。って、どうしたそんなに顔を赤くして？」

「いいから早く話しなさい！！（妙な期待した私は道化みたいじゃない……）」

「は、はいっ！！」

と流司の耳に一つとして届いていなかったことを幸とみるか不幸と考えるかはアリス次第であつたのだらう。

頁百五十二、『赤く染まりし沈丁花』（後書き）

其の十二、『巫女、決断を下す』

どれだけの時間そうしていたのか。

身動き一つしないで沈黙を保ち続けていた間の時間はもはや流司には悠久のように感じられるものであった。

身動きをしないのではなく、身動きが取れない。

流司のおかれていた状況はまさにそれであった。

霊夢は静かに威圧感を放つ。それは由緒ある『博麗神社』の巫女としての風格に溢れ、今まで異変の解決を幾度となく果たしてきたという矜持からくる圧倒的な存在感であった。

「（やっぱり駄目か）」

無言であり続ける霊夢の姿を見て流司は内心そのように感じていた。

流司の考えはこの上なく画期的なものである。

しかし、それは同時に霊夢の今までの行動を無に帰すようなものでもあるのであった。

改革に痛みは必要不可欠なもの。

確かにその通りではあるのだろう。有史以来様々な革命により人々の生活は変貌し好転もした。だが、そこには数えきれないほどの血が流れている。

革命は万人を救うものではない。多くの血を生贄に、礎にして生き残ったものが恩恵を得る儀式のようなものだ。

更に言ってしまうえば革命は必ずしも成功するわけではない。失敗し

た革命の後に残るものは痛みだけである。

規模は違つとはいえ、流司の提示した方針も同じことが言えた。もし、それが上手くゆき機能すれば博麗神社はかつての賑わいと信仰を取り戻すことになるだろう。

逆に機能しなければそれは『博麗神社』の消滅を意味しているのだ。役割を全てを失つた博麗神社には価値は存在しなくなってしまう。

ハイリスクハイリターン。

否、下手をすればハイリスクローリターンの博打だ。

霊夢が賛同する可能性は限りなくゼロに近いものであった。だけれども

「いいわ。流司の方針で考えましょう」

長らく口を閉ざしていた霊夢の口から告げられたのは流司の予測に反して賛成の意見であった。

アリスのターン。

微妙に完全にデレるアリスさん。

当然、主人公の耳には届きません。

後書きは霊夢がついに決断を。

ではまた明日。

頁百五十三、『闇夜に灯る蓮華』 前篇（前書き）

さ夜ふけて 蓮の浮葉の 露の上に 玉とみるまで やどる月影

源実朝

「華符『彩光蓮華掌』」

闇夜に彩色豊かな光の群れが発生する。蓮の花を形作ったその光の群はそのままばらけてゆき降り注ぐ。

それはさながら光の雨とも呼べるものであり、咲いては散って逝く蓮華の一生を体現しているとも言えよう。

その儚き光の造形は見るものをどうしようもなく惹き付け魅了する。

決闘においてはそれは決定的なまでの隙となってしまう。

であるから決闘の間は相手のスペルカードに集中することはあってもそれは弾幕の動きにのみ注視するのであって、スペルカード自体には気を払わないことが多い。

だが

「たまやー」

決闘の最中とはとても思えないようなのんびりとした声があがる。それも当然だろう。何せよ、今行われているのはスペルカードの決闘であり、スペルカード“ルール”での決闘ではないのだから。

「さて、まさしく“花火”というのに相応しいスペルカードを披露してくださいさった、『紅美鈴』さんの得点は!!!？」

拡声器を通していないにも関わらず、聞こえぬものはいないだろうほどのよく通る声で妖怪の山の烏天狗にして幻想郷のブン屋こと『射命丸文』の声が響きわたった。

その声にならうようにして数字の書かれた五枚の札が五人の手によって掲げられる。

『七』

『八』

『七』

『十』

『八』

「おおーっと、合計点四十点です！！なかなかの高得点です！では最高点を出した上白沢さん一言お願いします」

「彩り、造形、一過性、どれをとって見ても今回の企画に適したスperlカードであったと思う。これならば、最高の十点を上げられると思った故に上げさせてもらった。素晴らしい弾幕だった、ありがとう」

「はい、それでは『紅美鈴』さんにもう一度拍手をお願いします」

割れんばかりの歓声に恥ずかしげに美鈴は頭を下げ、空を後にする。

そう、今繰り広げられている決闘は単なる決闘ではない。

夏の光の祭典ならず、光の採点。『弾幕花火大会』であった。

一日前。

「花火大会を開催することにしたわ」

茹だるような夏の昼下がりに、水を張った桶に素足をつけ涼んでいた流司と霊夢の前に姿を表したのは神出鬼没『八雲紫』であった。

「流司、遂に私は暑さで頭もやられてしまったみたい。幻覚が見えるのだけど」

「奇遇だな。俺もだ霊夢。そればかりか幻聴まで聞こえてきたよ」

自分の置かれた状況が信じられないのか、信じたくないのか流司と霊夢の両者は共に現実からの逃避を図る。

されども、紫がそのようなことを許すはずもなく、

「花火大会を開催しますわ」

満面の笑みを浮かべて再度口を開くことで逃げかけていた流司と霊夢を現実の場に引きずり出す。

みーんみんな。みーんみんな。

「……………」

「……………」

「……………」

実に形容のし難い沈黙が三者の間を流れ、流司と霊夢の額からは

汗が滴り落ち、紫は暑さを感じさせないような涼しい顔をし続ける。

「花火大会というところの花火大会か？」

第一に根を上げたのは流司であった。

そんな流司に霊夢は非難するような視線を向けるが、流司は諦めると説得するような視線をもって霊夢に無言で答える。

「ええ、あの花火大会ですわ」

「また、面倒そうなことを……」

相変わらずの笑顔で答える紫に霊夢は心底嫌そうに呟いた。

容赦ない日差しだけでも鬱陶しいことこの上ないのに加えて、紫の持ち込んだ面倒事で霊夢のテンションはもはや最低辺であった。

「だが、花火職人なんて幻想郷にいるのか？」

流司は腕を組ながら紫に尋ねる。

幻想郷での夏を既に二度経験していた流司であったが、そのどちらでも花火を見た記憶はなかった。

“外”から花火をお土産として持ち込んだときの寺子屋の子供たちの驚き方を見ても、幻想郷には花火職人の存在がないのだろうと流司は考えていたのであった。

「そんなもの河童にでも頼めばどうとでもなるのでしょうか」

流司の言葉に霊夢が答える。

「河童か。正直、嫌な予感しかしないのだが……」

流司に妖怪の山の河童との直接的な面識はなかったが、河童の制作したものを使っている経験からどこことなく嫌な予感を感じていた。

「（河童が普通の花火を作るとは思えないんだよな……）」

常に独特の感性をもとにしたオリジナリティを作品に求めている河童が普通の花火を作るように思えるほど流司は幻想郷の河童という存在に対して無知ではなかった。

「（花火……つまりは火薬か。洒落にならないやもしれん）」

冗談では済まされない最悪の予想に流司は背筋をぞつと凍らせる。オリジナリティを求めている河童である。花火のことを火薬を使ったものと考えて、あらぬ方向に開発の矛先が向かってしまうかもしれないなかった。

「（そう、例えばミサイルとか……）」

「河童に花火の製作は頼んでいませんわ」

「そう、なのか？」

「ええ」

紫の嘘は言っていないように見える言葉に流司はひとまず安堵の息を漏らし、胸をなで下ろした。

尤もこの話を耳にした一人の河童により、流司の最悪の予想は現実のものとなってしまっただが、それはまだ未来のことである。

「なら、肝心の花火はどうするのよ」

「あら、私たちには火薬などなくても花火を再現できるだけの力があるじゃない」

「まさか……」

紫の浮かべる得意げな笑みに流司は冷や汗を垂らす。

紫の言わんとしていることが流司には理解できてしまったからこそそのことである。

「ん、どういふことよ？」

一方の霊夢にはまだ紫が何をいいたいのかということが理解できないでいた。そんな霊夢に、おそらく花火になるだろう霊夢に流司は生暖かい視線を向けることしかできない。

「これを花火に見立てるのよ。さしずめ、“弾幕花火”とでも言ったところかしら？」

そういい紫の放った光弾は乾いた音を立ててじりじりと照りつける太陽のもとで弾けるのであった。

頁百五十三、『闇夜に灯る蓮華』 前篇（後書き）

其の十三、「神主、巫女を休ませる」

それから数日にして博麗神社はかつての活気を取り戻した。

『博麗神社』には参拝客が溢れ、賽銭箱も一杯になる。

それはまさしく霊夢の望んだ光景であった。

「という夢を見たのよ」

「霊夢どうしたら一睡もしないで夢を見れるんだ？」

目の下にはつきりとした隈を浮かべながら笑う霊夢に流司は呆れるように呟いた。

霊夢が己の部屋に籠ってから一日。

げっそりとした表情の霊夢は唐突に壮大な構想を口にした。

それは幻想と切つて捨てるにはあまりにもリアリティに溢れているものであったが、あまりに霊夢が鬼気迫る様子であることを心配した流司も一晩中寝ずにいたので、霊夢が徹夜明けであるということは分かっていた。

「ほら、寝ろって。きつと疲れすぎて幻覚を見ているんだから」

「そうよ、ふふっ、ふふふふ……」

流司は幽鬼のような状態の霊夢を強制的に布団に寝かせ、その場を立ち去ろうと霊夢の手元に目を向ける。

しかし……

「あれ？あの本はどこ行ったんだ？」

周囲を流司は見渡すも霊夢が見つめてきたという本を見つけないとまではできなかった。

「まあ、後でいつか」

寝息を立て始めた霊夢をわざわざ起こすまでもないと見つけ出すことを諦めた隆司は静かに部屋を後にするのだった。

終わり……？

はい、夢才子。

んなわけ、ありませんよ。

まだ本当のオチは残ってますから。
石を投げないで〜

「さて、第一回弾幕花火大会もいよいよ大詰めなのですが、審査委員長の『八雲紫』さん、これまでを振り返っていかががお考えですか？」

夜も更け長くも儂き光の祭典もいよいよ持って終焉を迎えようとしていた。

「この企画は私の暇つ ごほん、幻想郷にスペルカードルールが広まってから数年の時間が経ちました。妖怪にとっては数年というのは大したものではありません。しかし、人間の皆さんにとってはそのようなことはないと存じています」

紫はこの場にいる全ての存在に語りかけるように朗々と語り始める。

「スペルカードルールはより妖怪が異変を起こしやすくより人間が異変を解決しやすくするために制定されたもの。そのため、そこで競われるのは力の優劣ではなく技量の優劣。そして、何よりも美しさですわ」

スペルカードルールに基づいての決闘では種族の差においての不平等が起こりにくい。

無論、根本的には弾幕を避けるという一点に集約されるので中には有利である種族もいる。

それでもそれは些細と無視できる程度に留まり、勝負を決定づけてしまうようなことは決してないものであった。

そして、最も重視される美しさは力一辺倒では示すことは叶わな

い。己というものをよく知って、その力を顕現させるような命名をしなければ真の美しさを表すことはできないのである。

「スペルカードを用いての決闘は華麗の一言。中には大きな力を持った妖怪同士の決闘を見たことのあるものもいるでしょう」

例えスタート地点が同じであっても、経験というアドバンテージは存在している。

技量が求められるということから、経験というものは何よりも糧となるのである。

結果、長い時間を生きてきた大妖同士の対決は非常に美しいものとなっていたのである。

「しかし、その美しき光の芸術を近くで見るとは難しいでしょう。残念なことです」

紫は目を俯かせて言う。

いくら闘いが美しいものであったとしても、決闘である以上は危険であることには変わりがない。

それも上位の妖怪同士の決闘であればゆつくりと観戦どころか近付くことすら難しい。

「それ故のこの企画ですわ」

紫は雑作もないように手を振るうと夜空に無数の光球をそれこそ花火のように打ち上げる。

「ゆつくりと見る事ができないのであれば、見せてあげればいい。危険だというのなら、安全に見ることのできる場所を作ってしまう方がいい。こんなにも美しいものを知ることができないだなんて勿体無いでしょう?」

それに花火に勝る風情があるとは言い難い。
だが、幻想郷を表すものとしてこれ以上に勝るものもない。
幻想郷の夏の夜空を飾るのに相応しい光の芸術であった。

「今日は突然の企画にも関わらず多くの妖怪が参加し、多くの人間が観覧にいらしてくださいましたわ」

安全が保証されているということもあってか、この場には人里のほとんどといってもよい人間が集まっている。

「更には審査員の役目を快く引き受けてくださった方々も」

紫は自分の横に並ぶ審査員の顔ぶれを順に見つめる。

『稗田阿求』。

『上白沢慧音』。

『森近霖之助』。

『神代流司』。

そして、発起人である『八雲紫』を含めた五人が審査員として判定を下す役目を負っていた。

審査員の選出が人間よりであるのは、あくまでも今回のことが娯楽であることを示していた。

故に幻想郷のパワーバランスを構成している派閥の介入を認めてはいない。

今回の遊びで重要であることは、人にとっての美しさを示すことができるかということにあるのである。

「そして、何よりも様々な美しきスペルカードを披露してくださいました妖怪の皆様にも感謝を申し上げますわ」

口元に笑みを浮かべて紫はそのまま周囲に集まっている妖怪を見渡すようにしながら一礼をする。

だが、その洗練され心からの感謝を示しているような動きに裏の意図が隠れていることは大半の妖怪には理解ができていたことであつた。

ただの遊びであるのなら審査員は必要ない。そこに優劣をつける必要はないのである。

しかし、そこをあえて審査をするということには重要な意味がある。

優劣をつけることにより、妖怪の間に競争意識を芽生えさせたのだ。

つまりはこの大会での優勝者は人間よりの判定であるとはいえ、最も美しいスペルカードを有していることになるのである。

それはスペルカードが闘いの主流となつている幻想郷の妖怪にとつて無視はできないことであつた。

また同時に己のスペルカードを披露することで自身の力の誇示にもなり、互いに牽制をし合うということにもなる。

よつて、この場に姿を現さないということは臆したということになり、妖怪にとってはこの大会はひくにもひけないものとなつていた。

そして、もう一つこれには重要な意味があつた。それは

「では、最後の発表と参りましょう。　　霊夢」

紫が口を開いてから現れたのか。それとも開く前からそこにいたのか。

夜空には紅白の巫女服をまとつた少女が浮かび上がつていた。

『博麗霊夢』はゆるりとスペルカードを取り出すと呟く。

「
瞬間、闇夜には光の大輪が咲き誇るのであった。

祭りの後は妙な侘びしさが尾を引く。
それは突発的に開かれた宴の後でも変わることはない。

「……………」
既に星の光以外の輝きを失ってから久しい空を流司は無言で見上げ続けていた。

その脳裏に浮かぶは光の余韻か、花開く度に上がる歓声の残響か。

「まだ、起きていたの？」

「ちょっと、興奮が冷め切らなくてな。どうにも寝付けないんだ」

背後からかけられた声に流司は振り返ることなく答えた。

流司にはそこにいるのが誰であるのか知っていたし、振り返らなかつたからといってどうこういうような性格の持ち主でもないということをわかっていただけからだ。

「全く、子供でもあるまいし……………」

呆れたように呟きながらも霊夢は流司の隣へと腰を下ろした。

「今日はお疲れだったな」

「ええ、もうこんなことは懲り懲りだわ」

様々な形で夜空を飾った大会のとりを務めるということは流石の
霊夢であっても疲労を隠しておけるだけのものではなかった。

霊夢の顔には彼女らしくない疲れを表しているやつれが見えた。

「まあ、でもこれで目的は十分に果たせただろう？」

「そつでないと困るわよ」

「ははっ、違うない」

今回の企画の最後の目的。

それは“博麗の巫女”の力を示すためでもあった。

スペルカードルールが誕生して以来、幻想郷での“異変”は『人間に解決しやすくなってはならない』という規則がある。

それ故、人間の代表格、異変を主に解決している“博麗の巫女”の力を知らしめるということは“異変”の規模を定めるにも一役買っており、同時に無駄な行動を起こさせないための牽制でもあったのである。

「全力なんて、そう出すようなものではないのだから」

霊夢に求められていたのは全力のスペルカードの発動。

それだけにその疲労感も並大抵のものでは済まされなかったのである。

「でも、まあ、これでしばらくはゆっくりできるんじゃないか？」

「私の全力に合わせて計画を立てられても困るのだけどね……」

今回、霊夢の力を示したことで、“異変”の規模に対して大まかな目算を立てられることとなった。

計画が立てられる、もしくは練り直されている間は幻想郷の平穩が崩されることは限りなく少なくなるといえる。

「その時はその時だな。頑張ってもらうしかない」

“もらうしか”。

それは流司の偽りのない言葉である。

今回、流司が知ったのは己と他にある圧倒的な差。

条件さえ整えれば、流司も決して弱くはない力を持っている。

けれども、それが洗練されるまでにはまだ時間を必要としていた。

“もらうしか”という言葉には自分の無力さを改めて理解したという意味が込められていた。

「一步一步頑張るとしますかね」

流司に強くなることへの欲求があるかと問われれば難しいところである。

しかしながら、今日の一件で憧れに似た感情を胸に抱いたということは間違いのない事実であった。

「なあ、霊　　って、寝てるのか……」

流司が隣を見やれば、そこには静かに寝息を立てる霊夢の姿がある。

「まあ、いいか」

流司は開きかけた口を閉じると傾いてきた霊夢の頭に肩を貸し、
瞼を浅く閉ざすのであった。

「半分は予想通り。もう半分は予想以上といったところかしら？」

流司が部屋から去った後、姿を現したのは金の髪を棚引かせた女性、『八雲紫』であった。

その手には流司が探していた本が握られており、それを紫は少し困った表情で見つめる。

「まさか、ここまで霊夢が執着するとは思ってもしなかったわ。あの程度は、いえ、この程度は当然だったのかもしれないわね」

紫は寝言のように『博麗神社』の復興計画を呟く霊夢を見て、どこか納得するように呟いた。

「“夢”とは一つの可能性。記憶の整理による高度なシミュレーション。夢と現実の境界を操作してこの先の可能性を垣間見たけど……」

未だに呟いている霊夢の計画はあまりにも的を射ているものであった。そう、それは必要以上に。

「霊夢の考えはある意味で正解。それをなせば『博麗神社』は賑わいを取り戻すことになる。でも、それは“かつて”のものではなく、“幻想郷”に必要なものでもない」

霊夢の夢の中で考えに至ったことは間違いなく、『博麗神社』の賑わいを取り戻すことに一役買うだろうことであった。

しかし、その方法では『博麗神社』が『博麗神社』ではなくなる。

そこにあるのは『博麗神社』の“死”であった。

「外では有効。それで賑わいを取り戻す神社も多い。しかし、それは幻想郷では意味がなく、あつてはいけないこと」

紫は霊夢の額に手を当てると境界の操作をする。

「霊夢、貴女は“無邪気”でいなさいな」

寝言の無くなった霊夢に紫は微笑みを浮かべると姿を消す。

後に残されたのは健やかな寝息を立てる霊夢と何かの燃えた微かな臭いだけであった。

完

あの手この手で参拝客を集める神社。

信仰が失われている現代では仕方がないのでしょうが、それが本当に意味のある信仰なのかは難しいのかもしれない。

少なくとも、システム化された信仰を、利益を求めた信仰が幻想郷にあつていいのかと問われればそんなことはないでしょう。

結局は幻想郷にはドラッカーの語る未来学は必要ないのでしょう。

夢オチではあるけど、普通の夢オチではないかな？

というか、夢じゃなかった場合、本当に『博麗神社』が終わります。やっぱり、霊夢には無邪気でいてほしいです。

本編も若干霊夢のターン。

距離感はこんなもん。

これで夏は終わり。

次は秋。

いよいよです。

頁百五十五、『月下、杯に浮かぶ紫苑』（前書き）

振り延へて いざ故郷の 花見むと 来ひし匂ひぞ 移ろひにける

詠み人知らず

頁百五十五、『月下、杯に浮かぶ紫苑』

空には巨大な黄金が佇んでいた。

それは何もかもを見下しながらも惹き寄せるかのような不思議な力をまとい輝く。

その力を得たものがこの世の覇者となる。

そうとまで考えた愚者が多くいた。

愚か実に愚か。

それに手を伸ばすことは水盆から零れた水を元に戻すよりも困難で、代わりに水面に映るそれを掬おうとするものまた徒労に終わる。愚者の足掻きに叡智を手にした穢れなき存在は嘲笑いを繰り返す。悠幻の時を重ねようと月は大地の上に厳かに君臨し続けていた。

「今日もまたいい月だねえ」

呟き杯を傾けたのは一人の少女。

その容姿とは裏腹に飲みっぷりは豪快で決して小さくはない杯を簡単に空にする。

勿論、そこに注がれていた無色透明の液体がただの水であるというのではない。少女の頬が薄ら赤く染まっていることから中身が何であったか判断することは容易であった。

場所が場所であれば捕まりかねない少女であるが、この少女は幻想郷で一番に酒に強いといっても過言ではない。

その理由は少女の頭に携わった二本の角が証明している。

そう、少女は“鬼”であったのだ。

『伊吹萃香』。

幻想郷に唯一残る鬼であった。

「月を見ながらの杯は格別だ。流司もそう思うでしょう？」

「さてな、状況によって酒の味の違いが分かるほど飲み比べていないのでな」

萃香の問いかけに流司は首を竦めながら萃香のものよりも一回りも二回りも小さな杯を傾ける。

酒豪である幻想郷の猛者に比べると流司の酒への耐性力は少々心許ない。それでも人並み以上には備わっているのであるが、鬼と飲み比べができるはずもない。

必然的に流司の杯が萃香のものに対して見劣りするというものであった。

「それに萃香だってどんな時でも格別と言っているじゃないか？」

「当然さ。酒を飲む状況が酒を格別にするのではなく、酒を呑むという状況が酒を格別にするんだよ」

「結局は単なる酒好きじゃないか……」

「鬼ってのは総じて酒好きだからねえ」

溜め息をつくように呟いた流司に萃香はからからと笑う。

流司が鬼という存在の中で会話の成立する相手として出会ったことがあるのは萃香だけであったので、流司に萃香の言葉を確かめる術はない。

故に流司は萃香の言葉を信じる他はなかったのである。

「月はいつの時代も変わらないねえ」

感慨深そうに満ちきった月を見上げる萃香につられて流司もまた

空へと顔を上げる。

夜が更け天頂へと近付いた月はどこか冷たくどこか温かく輝き続ける。

「鬼が消えてからしばらく、様々なことが変わった」

「そうなのか？」

流司は少し驚きを含んだ声色で萃香に尋ねる。流司にしてみれば幻想郷は時間の止まってしまったような空間だった。それを変わったと言った萃香の言葉を意外に思えたのだ。

「勿論、外の変化に比べたら微々たるものかもしれないさ。それでも変わらずにはいられない。それが自然というものさ。紫の奴があの手この手で幻想郷を守ってはいるけど、それは保全であって保持ではない。幻想郷の変化にも合わせる事ができない存在もいる。かつての鬼がそうさ」

「幻想から追放されたらどうなるんだ？」

幻想郷とは外で幻想となったものが集う地。

即ち外で存在の死を

迎えたものが辿り着く場所であった。

そこから立ち去るということは

「ある意味では死んだと言えるだろうね。まあ、実際は地下に潜っただけさ。向こうは向こうで楽しくやっっているだろうねえ」

萃香は再び杯を思い切りよく煽る。

「月を眺めながら杯を向き合わせられないのは多少侘びしいかもし

れないけれどねえ……」

「……………」

月を見上げる萃香の瞳に流司は微かな淋しさを感じとる。
そうだからか、

トクトクトク。

「悪いねえ」

流司は空になった萃香の杯に酒を注ぐ。

「折角の酒に中秋の名月だ。しんみりと飲むのも悪くはないが、楽しんだ方がいいだろう？」

「流司も分かってきたじゃないか」

萃香は朗らかに笑いながら流司より注がれた酒を煽る。
今までとは異なり一口一口味を確かめるように喉に萃香は酒を流し込む。

「だが、郷愁を感じる気持ちも分からなくないな」

舌で芳醇な香りと味を遊ばせながら流司は唐突に呟く。

「ならば、帰ればいいさ。流司は故郷を失ったわけでも、もう戻ることができないというわけではないだろう」

「まあ、な」

流司と萃香。

互いにその境遇は似ているところが見られるが、決定的に違つたということもあつた。

それは比較的用意に“外”に古くからの知り合いのもとに帰ることができると対して、萃香は二度と会うことができないということであつた。

それ故に流司は萃香の言葉に頷くことしかできなかった。そこに込められていた思いを敏感に察していたからである。

「さて、湿っぽい話は本当にここまでだ。今夜は飲み明かすことにしよう」

「勘弁してくれ。鬼と飲み明かすには役者が足りないよ」

両手を上げて降参の意を示す流司の気持ちなど構うことなく萃香は流司の杯になみなみと酒を注ぐ。

その水面には何処からか運ばれてきたか、紫色の花弁かふと浮かぶのであつた。

頁百五十五、『月下、杯に浮かぶ紫苑』（後書き）

短めでしんみりと。

ようやくの登場だった萃香さん。

これで登場してないのは雀と蛭だけかな？

いつか出るだろうけどいつかなあ。

少なくとも今幕じゃ登場しません。

だって、日曜には今幕終了ですから。

次は吾亦紅。

明日も少し更新時間は遅れ気味になると思います。

頁百五十六、『秋風に誘う吾亦紅』前編（前書き）

袖の色も 人はことなる 吾亦紅 かれゆく野べに 猶やしを
れむ

姉小路基綱

読書の秋。

魔女たちは穏やかな昼も涼やかな夜も魔導書を開き新たな知識の習得にいそしむ。それは魔法使いの存在を希薄に変える。

スポーツの秋。

妖精たちはあらゆる手段と方法を駆使し、人々に悪戯をしかけ楽しむ。互いに競い合う姿はまるで何かの競技に懸命になっているようでもある。

食欲の秋。

様々な恵みが撓わに実り、香る豊かな匂いは食欲をどうしようもなく誘う。この時ばかりは人里も多種多様の料理の匂いに満ち溢れ、天に豊作への感謝を捧げる。

秋の実りは冬を越えるに大きな意味を持つ。

この秋でどれだけの食糧を確保できるかで、来る冬の生活が変わってくる。

故に虫も動物も人間も、そして妖怪もまたただただ秋の実りを甘受しているだけではなかった。

人里のとある一画。

そこにある家の前に一つの人影があった。

家の大きさはそれほど大きいものというわけではない。一人で暮らすにはやや大きめで、家族で暮らすとなるとやや小さめといったところであろう。

人影はそんな家の前を右往左往し続ける。その姿は家の家主というふうには見えない。この家には鍵などというものが存在していない。よって外に閉め出されるということとは有り得ないのである。

もし、家の中へと入りたいのであれば、扉に手をかけて軽く力を込めるだけで簡単に開けることができる。

家主に用事があるのだとすれば扉を一、二度叩くだけでその家主

は姿を現すだろう。
だが

「いつまでそうしているつもりだ？」

銀の艶やかな長い髪をかき分けるようにしながらその女性は呟いた。声色には呆れにも似た感情を読みとることができる。

『上白沢慧音』。

女性の名はそうだった。

「も、もう少しだけ……」

慧音の言葉に小さな声で答えたのは慧音と同じく長い髪をリボンでまとめている少女。ただし少女の髪は銀ではなく雪のように白い。

『藤原妹紅』。

それが少女の名である。

「もう少しと言ってから相当な時間が経っているぞ？まだ日が昇りきる前に来たか私は記憶していたのだが……」

既に日は高く昇り、秋晴れの清々しい容貌を見せている。妹紅の目的にはそれなりに時間が必要としていたので、余裕をもって時間を確保していたはずであつたにも関わらずである。

「それは、そうなんだけど……」

妹紅の返答はどうにも歯切れが悪い。その理由を知っている慧音にとっては微笑ましいという言葉で片付けてもよいのだが、流石に限度というものは存在していた。

「これ以上時間がかかるようなら私は帰らせてもらっぞ?」

「ち、ちよつと待って!!!よし!」

ようやくに意を決し、今日何度目かになる身だしなみの整えを終えると妹紅は戦場にも出向くかのような顔つきで扉の前で静止する。戦場に赴くという表現もあながち間違っているものではない。確かに妹紅にとってはその先に待つのは戦場に近いものであった。

トントン。

緩やかな動きだしで動かされた妹紅の手はリズムカルに乾いた木の音を二度たてる。

「……………」

「……………」

だが、その奥より反応が返ってくることはない。無言だけが辺りを包み込んでいた。

「まだ、寝てる…………?」

「そのようなはずはないだろう。あいつは比較的目を覚ますのが早い私たちと比べても遜色はないぐらい起きるのは早いはずだ。前日に何かなかった限りこの時間まで寝ていることはないだろうさ」

妹紅の呟きを慧音は即座に否定する。

それは単なる予想ではなく、今までの実際の経験からの推測であった。

「特別なこと。アレはこの前終わってるし、何かあった?」

「いや、そんなことはない。この前、自身でもしばらくはゆっくりできると言ってたしな」

慧音の返答は妹紅も理解しているところだった。それだけにどうしても首を傾げてしまった。

「じゃあ、留守ってこと？」

「少なくとも昨日は人里で見かけたが。向こうに戻る話は聞いてはいるが、それもまだだったはずだ」

慧音もまた首を傾げて悩み込む。家主が留守である可能性というものには確かにあつたが、前日のうちに人里で見かけていただけに極めて低いものであつたからである。

「なら」

「何してるんだ？人の家の前で？」

妹紅らが待ち望んでいたはずの声は予想外な方向から唐突に降りかかる。

「ひゃい！？お、驚かせないでよ、流司！！」

その思いよらぬ方向からの声に妹紅は文字通り飛び上がるようにして驚きを示す。

「驚かせないと言われてもな。むしろ、驚いたのはこっちだったの。帰ってきてみれば、家の前に挙動不審な人影があるんだからな」

遠目から見れば妹紅の様子は不審者そのものであって、流司も人影を特定するまでは警戒をとかなかったほどであった。

「何をあそこまでうるうるとしていたんだ？」

「え、えっと、それは……」

「そりやいるはずの人間がいなければ不思議にも思うだろう。流司は何処へ行っていたんだ？それなりに早くから出かけていたのだから？」

今まで沈黙を保っていた慧音が妹紅に助け舟を出すように口を開く。

「それもそうか。ああ、山菜がよく採れる場所を教えてもらったんでな。ちよっと採りに行っていたんだよ」

流司に背負われている籠には秋の七草ばかりではなく、様々な種類の山菜が大量に入っていた。

量が量であるだけに流司が朝も早い時間から出かけていた理由も十分に頷くことのできる話だと、妹紅も慧音も籠へと視線を向けた後に納得したように息を漏らした。

「まあ、立ち話も何だしな。上がってくれ」

そう言い流司は籠を下ろしながら二人を家へと招き入れるのであった。

頁百五十六、 『秋風に誘う吾亦紅』 前編（後書き）

明日でこの幕も終わりです。

ザクツ。

日の光が微かにしか差し込まない鬱蒼とした間に湿っぽく重い音が響く。

ザクツ。

それは土を掘り返す音。

高々と上がった先端が鉄製の棒は勢いよく振り下ろされ、大地へと突き刺さり土を抉る。

ザクツ。

振り下ろされ、振り上げられるという一貫した動作には一切の迷いが無い。ただ一心不乱に目的へと突き進むかのような愚直さがあった。

ザクツ。

そう、その動きには目的がある。

だが、鬱蒼とした竹林でひたすらに土を抉ることによって達成される目的が真つ当なものであるかは甚だ疑わしい。

ザクツ、ザツ。

そこに現れたのは円錐であった。

掘り起こされて全貌を現したそれ、筍を近くにある籠へと投げ入れると再び上下運動が再開される。

ザクツ。

その動きはその目的が果たされるまで延々と繰り返されるのであった。ザクツ、ザクツ。

「いやあ、大漁だな」

ホクホクとした笑顔を流司は浮かべて呟いた。背負っている籠はずっしりとした重みを流司に与えている。

「それにしても、なんでこんな時期に筍とは思ったがあるもんだな……」

首を籠へと向けて中にあるまだ土も落ちきってはいない筍の山を見て流司は呟く。

「この筍は成長が極端に早いから。食べ頃のものをを見つけることができれば、旬に関係なく美味しいはずよ」

流司の隣を歩く妹紅が言う。その背には流司と同様に筍がたんまりと詰まった籠が背負われている。

迷いの竹林の竹の成長は極めて早い。

それだけに食べ頃の間には筍を採集することは困難なことであった。

「もう少し、早くこれればまだ採れたのだけど……」

妹紅がそれを見つけたのは偶然のことであった。

今朝方、竹林を歩いていると丁度伸び始めようとしている筍が多くある場所と遭遇した。

そこで流司を呼び採集しようと考えたのである。

只人であれば迷いの竹林の中で狙った場所に、それも家などの建造物ではなく竹林の一部を指すことなど不可能である。

しかし、そこは迷いの竹林を熟知している妹紅。一切の心配はなかった。

尤も流司を誘うということに関しては非常に大きな困難であった

が。

何はともあれ、無事に流司を誘い出すことに成功した妹紅の姿はこうして迷いの竹林の中にあつた。

「十分だろうさ。慧音に分けるぶんを差し引いてもまだあまりある」

ここには慧音の姿がない。時間に余裕のなかつた慧音は後のことを任せて授業を行うために寺子屋へと戻っていたのであつた。

「まあ、そうね」

流司の言葉に妹紅も頷く。二人の背にある筭の量は到底消費しきれぬ数ではなかつた。

「どうするか……いつそのこと永遠亭にでも分けに行くか」

「えっ？」

途端に妹紅は表情を歪ませる。その歪みに歪みきつた表情は心底嫌がつているということがありありと示されていた。

「そんなに嫌なのか？もうわだかまりは無くなつたのだろうか？」

妹紅と永遠亭の主、『蓬萊山輝夜』の間には言葉で簡単に言い表すことができないほどのいざこざがあり、それが妹紅が不老不死となつた根本にもあつた。

だが、その千と幾百年にも及ぶいざこざも流司のとある一言によつて氷解する、氷解したはずであつた。

「それとこれは別。輝夜と馴れ合うだなんてごめんよ」

きつぱりとした口調で妹紅は流司に告げる。

そう、わだかまりがなくなった今でも妹紅と輝夜の殺し合いという名のじゃれあいはなくなっていなかった。

既に妹紅と輝夜にとってはコミュニケーションの一つとして定着してしまっただが故にいくらその原因がなくなったとはいえどもすぐに無くなるようなものではなかったのである。

「そういうなって。無駄にしまっよりかよっぽどいいだろ？」

「それはそうだけど、なにもわざわざ輝夜の……」

顔をしかめている妹紅を宥めるように流司は言うも妹紅の不満は治まることはなくぶつくさと妹紅は言葉を漏らし続ける。

「そつまでして嫌なのか……」

そのような妹紅の姿に流司は呆れかえった笑みを浮かべる。思い切りの良い方の性格の妹紅にしてはあまりにも渋っていたからであった。

「そんなことはないけど……」

「なら、いいじゃないか？」

「もういい」

妹紅は流司の言葉に痺れを切らしたかのように不機嫌そうにすたすたと先へと歩いていってしまっ。

「おい、待ってっ！！」

その後を流司は慌てるようにして追いかける。もし、この様子を慧音が目にしていたのなら、どこか困ったようにそれでいて嬉しそうな笑顔を浮かべたことであろう。

妹紅の感情をある意味、妹紅以上に理解している慧音であれば妹紅が永遠亭に行くことに対して不機嫌になっているのではないという事に気付くことができただろうからだ。

「「「あっ」「」」

唐突に三つの声が重なった。

内二つは無論として流司と妹紅のものである。

そして残る一つは

「流司さんに妹紅さん。このようなところで、何か永遠亭でも御用でしたか？」

兎の耳を揺らして『鈴仙・優曇華院・イナバ』が頭を軽く下げる。

「ああ、ちょっと筈を採りすぎてしまっただけ。お裾分けにでも思っただけ」

流司は鈴仙に背の籠を見せるようにして身体を動かす。

「本当に沢山ありますね。ありがとうございます。すぐにでも案内を」と言いたいところなのですが……」

鈴仙は齒切れを悪くしてキョロキョロと辺りを見渡すように顔を動かす。

すぐさま鈴仙が何をしているのかという意図に気が付いた流司は

苦笑を浮かべた顔を鈴仙に向ける。

「毎度毎度御苦労だな」

「はい……それで、見かけてはいませんよね」

「ああ」

何をなどという返答をするような真似を流司はしない。妹紅と輝夜の対決と同じように永遠亭にとってはアイデンティティのような『因幡てゐ』の脱走について今更流司が確認をとることは全くしてないのだった。

「妹紅さんも……」

「少なくとも今日は見かけてないね」

「そうですね」

妹紅の返答にもそこまでの期待は置いていなかったのが、鈴仙は落胆の色を見せることなく頷いた。

「ということですので、ご案内することは難しいです。申し訳ありません」

「気にしないでいい。そつちもなるべく早くに見つかることを祈ってるよ」

深く頭を下げる鈴仙に流司は気にするなと声をかける。

「はい、それでは失礼します」

「気をつけてな」

頭を上げた鈴仙と入れ違いになるような形で流司と妹紅は再び永遠亭へと足を進める。
が

ズボツ。

「はっ？」

明らかに地面を踏んだのとは異なる感触と音が流司と妹紅に伝わる。その感触はまるで地面を踏み抜いてしまったかのような支えの感じられない感触であった。

「流司さん！？妹紅さん！？」

鈴仙の慌てた声が流司と妹紅の耳には届いたが、張りぼての地面を踏んだ二人は籠から零れた筈に揉まれるように地面に飲み込まれる。

そう、そこにあつたのは落とし穴であった。

「まさか、一兔を得ようとしたら二人を得ると思つてもいなかつたよ」

「てゐ！？」

落とし穴の縁から中をのぞき込むようにして見ているてゐの表情にも驚きがあつた。元々は鈴仙を陥れようとするために作った落とし穴に落ちたのが予想もしていなかつた顔であつたからである。

「てゐ！！早く助け出しなさい！！」

「無理」

鈴仙の言葉にてゐは即座に答える。

不可能を示す返答を。

「今日は趣向を凝らしてちょっと頑張ってみただよね」

「頑張ったって、何を……」

「とりもちを落とし穴の中に仕掛けてみました」

笑顔でてゐは言うがその内容は少々えげつない。

「動けば動くほど絡まるからね、下手に助けようとするると巻き込まれちゃうよ。あんな風に」

己の考えていた通りの結果が表れている様子にどこか満足そうにてゐは落とし穴の中を鈴仙に示した。

かくいう落とし穴の中の状況はというと

「ちよつ、りゆ、流司、そこ、んっ、ひゃう。う、うっ、動かないでっ！！」

「……！！」

もはや、見事と感心すら浮かんでしまう状態で絡まり合いとりもちによって動けなくなってしまうている流司と妹紅の姿がある。

気道を確保しようともがく流司の動きで状況は悪化の一途を辿り、

流司が動く度に伝わる振動で妹紅の顔は限界を超えて赤く染まってしまうている。

「やつぁ、そこ、ダメツ、ほんつと、しゃれになら、あぁんっ」

妙な色気を感じさせる嬌声に様子を伺う鈴仙の顔までが赤くなる。それと同時に鈴仙に芽生えるのは巻き込まれなくて良かったという安堵の思いであった。

「うーん、どっちも役得？流石、私の能力」

「確かにどっちも人だけどって、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！！？」

ある意味で遺憾なく発揮されている能力に自ら感心しているてゐに鈴仙が声を上げる。

「そうだね。まずは 逃げる！！」

「へっ？」

まさしく脱兎の如く逃げ出したてゐの姿に鈴仙は呆気にとられる。

「だって、所詮はとりもちだし。抜け出せなくもないから。そしてら、私、多分焼き肉になっちゃうし今の内に逃げておかないとね」

「やつ、やつ、そこんつ、あつ……ふあつ！！」

この後、ようやくに落とし穴から抜け出した妹紅が相手にする対象を輝夜からてゐに変えたことは語るまでもないことであろう。

頁百五十七、『秋風の誘う吾亦紅』 後編（後書き）

昨日は申し訳ありません。

これにて、今幕終了。

次から風神録編のスタートです。

頁百五十八、『始まりの為の別れ』

「　　そうか」

それは重い重い沈黙の後に発せられた重い重い呟きであった。

認めることのできない事実を何とかして受け止めようと、錆び付いて動かなくなってしまうたかのような首を動かして隆斗は小さく首肯した。

『神代家』の当主として様々な経験を経てきた隆斗であったが、これほどまでの衝撃を受けるのは久しいことであった。

人間、あまりにも驚きすぎると思考が停止してしまうというが、隆斗の重い沈黙はまさしくそれであった。

隆斗をしても絶句させてしまうほどの衝撃的な内容。

少女の口から告げられた言葉はそれだけの威力と意味を誇っていたのである。

「　　はい」

少女のか細い声が隆斗が受け止めた事実が揺るぎのないものであるというを肯定する。

隆斗ほどではなかったもの絞り出すような言葉の前には重い沈黙があった。

目をふせ沈痛な面持ちで小刻みに震えてしまっている手を抑えるために強く握り締めている少女の手のひらは血の気が見られないくらいにまで白く染まってしまっていた。

少女の元来の雪のような肌のきめ細かさと合い増さってか、それは酷く美しくも痛々しい。

痛々しい。

今の少女の状態を表すのにこれ以上の言葉は隆斗には見つからな

かった。

「本当にいいんだな？」

再度、少女の決意を確認するために隆斗は尋ねる。

それは恐らくは自身の懇願であり、少女に対しての一種の救いでもあったのかもしれない。

しかし

「はい。もう決めたことですから」

少女は差し伸ばされた手を握り返すことはなかった。

間もなく答えられた少女の言葉はそのまま少女の決意を知らしめるものでもあり、隆斗はそれ以上少女を引き止める言葉を見つげ出すことができない。

そしてそれは己に限った話ではないということも隆斗は察していた。

「分かった」

二度目の隆斗の言葉には沈黙はない。つまりは隆斗が事実を完全に受け止めたということであった。

「それで……」

「ああ、引き受けよう。もとより言われずとも請け負うつもりではあった。『守矢神社』の管理、喜んで引き受けさせてもらおう、早苗ちゃん。いや、『東風谷早苗』殿」

「ありがとうございます」

『守矢神社』の風祝、『東風谷早苗』は深く深く『神代家』の当主、『神代隆斗』に頭を下げた。

否、既にここでその身は、早苗は『守矢神社』の風祝ではない。

ただの成人にも満たない少女であった。

隆斗に、神代に管理を任ずということは古くから神職に携わってきた『東風谷家』の血脈の断絶を意味している。

無論、早苗が子をなせば血縁としての『東風谷家』は存続するが、『守矢』の風祝としての『東風谷家』が存続するということにはならない。

「親戚のもとに身を寄せる、か……」

「はい」

ゆっくりと息を吐き出すように隆斗は呟いた。早苗の判断が間

違いだとは隆斗は思っていないし、間違いだと言える資格もない。

それどころか、隆斗は正しい判断だと考えていた。

早苗の両親が他界して以降、早苗はたった一人で『守矢神社』を守ってきた。そこには早苗のプライベートなどほとんどなく、その全てを『守矢神社』に捧げてきていたのだ。

それが本来庇護されるべき未成年者である早苗にとって正しい姿であるとは一人の親として隆斗は思うことができなかつた。

それだけに隆斗の思いには安堵というものも少なからず存在しており、だからこそ正しい判断であるとも考えることができていたのだ。

「こつちには戻ってくるのか？」

「わかりません。でも、恐らくは……」

「そうか」

早苗の返答は暗に戻らないということを示していた。

隆斗の顔きも確認という意味合いが強かった。もし、戻ってくるのであれば早苗は『守矢神社』の全てを託すようなことを隆斗に依頼するようなことはなかったであろう。

そうではないということはすなわち早苗が戻ることがないということの証明のようなものであった。

「あいつには、流司に会って行かなくていいのか？今日明日にも戻ってくるはずなのだが……」

「いいんです。挨拶ができないのは残念ですけど、これも巡り合わせですから」

「早苗ちゃんが納得しているのならいいが……」

こればかりは納得することができないのか、隆斗は流司を貶すような言葉を小さく呟き続ける。

「それでは準備があるので私はこの辺で。流司さんによろしくお伝えください」

「ああ、元気だな」

……

……

…

「ト。」

すっかり冷めて渋味ばかりが後を引くお茶を喉に流し込み天井を隆斗は見上げる。

「これは予想外だったな……」

早苗がこの部屋から姿を消してからまだそれほど時間が経ったわけではない。

だが、隆斗には冷めきったお茶を飲みきるまでの時間が、酷く長く感じられるように思えてしかたがなかった。

流石の隆斗であつても今回の早苗の告白は予想にもしていないことであつた。

早苗が『守矢神社』の風祝を好んで勤めていたことはわざわざ確認するまでもなく隆斗にも分かつていたことだ。

なにより、『守矢神社』は早苗にとっては両親の形見のようなものでもあつた。そこから立ち去るということは親の形見にも勝るような何か深い事情があるのだろうと隆斗は考えていたのだった。

「（親戚というのは方便かもしれないな。恐らく、戻ってこれないというのは本当だ。しかし、それを確認する術はない。踏み込むよくなこともできない。結局のところ、私は“親”じゃなく“他人”だ）」

確実な嘘だという確証は隆斗にはなかったが、早苗が引き合いに出した“親戚”という言葉は早苗が心配をかけまいと口にした方便であろうと隆斗は思っていた。

所詮、早苗はまだまだ子供と言える年齢。

隆斗を騙すことができるほど芸が達者なはずもなかった。

それでも、隆斗が追及するような真似をしなかったのは、どんなに隆斗が早苗のことを我が子のように可愛がるうとも“他人”でしかないということを隆斗は理解していたからである。

それだけに

「あの息子^{バカ}は何をしているんだ」

自分では触れられぬ部分に足を踏み入れる可能性のある流司に対して隆斗は悪態をつく。

ある種、それは嫉妬にも似た感情であったと言えるであろう。

「ただい」

ゴンッ!!

隆斗は手元にあつた文庫本を鋭く部屋に入室してきた存在に投げつける。

驚異的な速度で突き進んだ本は驚異的な命中精度で障子を開けた青年、流司の額に突き刺さった。

「ッ、何す」

「この、ドラ息子がああー!!まだ追いつく、さっさと追いかけんかあ!!」

「いや、意味」

「いいから、これ持って全速力だ!!理由は中に書いてある」

隆斗は流司の手に早苗から預かっていた手紙を握らせると部屋から追い出す。

「だから」

「急げってんだよ、バカ息子!!」

「くそっ、何だってんだよ」

訳が分からずに流司はとりあえずに走り出す。

「ようやく行ったか。まあ、何とか間に合うだろう」

流司の気配が感じられなくなったところで隆斗は安堵するように呟いた。

「協力するのは禁止ではなかったのではないのですか？」

荒い息をなだめている隆斗の前に水を差し出しながら口を開いたのは『久鷲乙女』であった。

「んっ、なもん関係ない。どうせ、私がけしかけなくともお前がけしかけていただろう、乙女？」

「当然です」

何、馬鹿なことを言っているのだというような視線で乙女は隆斗を見る。

「私はな、できるだけ早苗ちゃんには幸せになってもらいたいだ

よ。たとえば、それが不必要なことかもしねなくてもな」

「早苗っ！！」

夕日に長く伸びる影を捉えた流司が声を上げる。

「流司さん？どうしたんですか？」

長い髪を揺らして振り返った早苗はなんともない様子で息を荒げている流司に声をかける。

「どうしたもこうしたも帰った瞬間に父さんに“追いかける”って家を追い出されたんだよ。全く、手紙を開くまで何処を目指せばいいかも分からなかったの」

「それは……お疲れ様です」

早苗は困ったような表情をして流司に労いの言葉をかける。

「それよりも、ここに書いてあることは本当なのか……？」

「はい。本当です」

早苗は少し息を置いて、澄んだ声で流司の言葉に答える。

「もう、決まったこと何だよな？」

「もう、決まったことです」

流司の問いに早苗は淡々とした声で答える。まるでそれは事務作業のように感情の感じられないような声であった。

「どうしてもなんだよな？」

「どうしてもです」

禅問答のように早苗は流司の問いに一つ一つ答える。そうするとで自分自信にも言い聞かせているような声であった。

「泣いてるのか？」

「泣いてなん、てッ」

流司が質問をして初めての早苗の否定の言葉はかなりの無理があるものであった。現に語尾を強めながらも早苗の声は震えてしまっていた。

逆光に暮れる太陽の所為で流司には早苗の表情はよく見えてはいなかった。

けれども、その目からは大粒の涙が溢れ出していることは容易に流司には察することができることであった。

「早苗……」

「来ないでくださいッ!!」

近付こうと足を一步踏み出した流司に早苗が声を荒げる。

「こんな顔、最後に見られたくないですから……」

懸命に涙を拭う早苗。しかし、それでも涙は止まらないのか、手の動きは一向に休まることはない。

「早苗……」

「隆斗さんには感謝しないといけませんね。こうして、流司さんに追いかけるように言ってくれたのですから」

「できることなら、追いかける方向も教えて欲しかったんだがな。一回反対側に走ったせいで追いつくのが遅れたよ」

やれやれだと流司は首を左右に振る。

「ふふっ、そこは後でよく言っといってください」

「ああ」

ようやくに手の動きを止めた早苗が赤く染まった目で笑う。

「じゃあ、私は……」

「ああ」

そんな笑みもつかの間に早苗は言う。

「さよなら」

「馬鹿」

「えっ？」

「また」だ。一生会えないなんてことはないんだからな」

きよとんとしている早苗に流司は笑いかける。

「そう、ですね。じゃあ、また」

「ああ、また」

早苗は一度も振り返ることもなく流司の前から姿を消す。

流司はその後ろ姿を一度も目を逸らすことなく見送り続けるのだ。
った。

「只今、戻りました」

「おかえり」

「おかえりなさい、早苗」

早苗以外の人間が住んでいないはずの『守矢神社』の中から早苗を迎える声が響いた。

早苗以外の人間という意味では確かに『守矢神社』は無神である。しかしながら『守矢神社』は無神ではない。

帰宅した早苗に声をかけたのは『守矢神社』に祭られる二柱の神であった。

一柱は『八坂神奈子』。
一柱は『洩矢諏訪子』
という名である。

「あつ、すぐに夕食の準備をさせていただきますね」

「いいよ、早苗。明日のことがあるし早苗も今日は早く身体を休めるようにして」

特徴的な帽子をかぶっている諏訪子が台所へと向かおうとしている早苗を引き止める。

「それをいうならお二方こそ」

「力が弱まっているとはいえ、私たちは神だ。一食抜いたからといってどうということはない。それにその様子だと外で食べて来ているのだろう？」

もう一柱の神である神奈子が早苗を諭すように言う。

「そうですね？なら、御言葉に甘えさせて頂きます」

「お休み、早苗」

「今日はゆっくり身体を休ませるんだよ？」

「はい。失礼します」

早苗は神奈子と諏訪子に頭を下げて自分の部屋へと姿を消していった。

「早苗、笑っていたね」

「そつだな」

早苗が姿を消したところで諏訪子が呟いた。

その表情は我が子を心配する母の様であり、頷きを返した神奈子も同じ表情を浮かべている。

「自分たちに仕えてくれている風祝一人幸せにできなくて何が神だつていうんだ!!!」

神奈子が搾り出したような声で言う。

「早苗を残していくこともできた。でも、早苗はついていく、か…」

「ああ、見えて早苗は頑固だからね。決めた以上は揺るがないよ」

「そつだよな。せめて、向こうでは早苗が幸せであるように祈るしかないな」

「神が何に祈るって言うの、神奈子?」

神奈子の言葉が面白かったのか、諏訪子がおかしげに尋ねる。

「そりゃ、私たちより上位の神にさ」

「なら、私は勘にでも期待しておこうかな?何となく、万事うまくいくような気がするんだよ」

「それは神としての予測か？」

「いいや、女としての勘だよ」

「それは期待できそうだ」

神奈子と諏訪子は互いに顔を見合わせて笑い合う。

「さて、なら失敗はできないな」

「当然。早苗の子供が産まれるまで私は消えるつもりはないよ」

「私もさ」

朗らかに笑いながらもその表情はどこまでも真剣であった。

その真剣さは『守矢神社』に漂う神力と共に時間の経過によって増していく。

そして、朝靄の残る早朝。

『守矢神社』に満ちていた神力は忽然として消え去るのであった。

かくして、現に住まう神は幻へと至る。

そこに広がるは幻想の息づく楽園。

別れの誓いは予期せぬ再会を誘う。

奇跡の風は神と共に幻想へと吹き荒ぶのだった。

頁百五十八、『始まりの為の別れ』（後書き）

風神録ストーリート!!!!!!

な、長かった……

166話とかおかしい。

こんな予定じゃなかった。

まあ、これ wait していた人がどれだけいるかはわかりませんが。

さあ、頑張りますか!!

山は彩り鮮やかに着飾られる。

紅、黄、橙、そして緑と変化をした色もあればそうではない色もあつた。

幻想郷で山と呼ばれる場所はただ一つしかない。

妖怪の山。

その名の通り、数多くの妖怪が住んでいる山である。

だからといって、魑魅魍魎が跋扈する無法地帯というわけではない。

むしろどちらかといえば細部まで役割がきめ細かく定められている組織化された社会といえる場所であつた。

妖怪の山のヒエラルキーの頂点に君臨するのが“天魔”と呼ばれる天狗たちの長である。

その天魔のもと妖怪の山は秩序ある階級構造であつた。

そう、“あつた”だ。その唐突の来訪は山に混乱をもたらした。来訪者がただの妖怪で十分に無視できる程度の存在であれば問題はなかつた。基本的に排他的である妖怪の山の妖怪たちはそれを排除することで日常を保つたことだろう。

だが、その来訪者は到底無視の叶うものではなかつた。

“神”。

ある意味で妖怪と同様の存在であり、ある意味では妖怪と対極に位置している存在である。

それが山の頂上に居を構えたとなれば無視ができるはずもなかつた。

その上に神は自らを信仰すれば山での暮らしは豊かになるとまで言つたのである。

妖怪の山には神も住んでいたが、これほどまでの力を持った神が現れることは初めてであり、妖怪の山は予想外の混乱に包まれるこ

ととなった。

信仰とは敬うこと、それはつまり妖怪の山での階級構造に一石を投じることでもあったのだ。

この神の出現に天狗たちの総じての判断はしばらくの傍観。

本当に妖怪の山にとって利益をもたらすものであるのであれば友好を結び信仰することもやぶさかではない。

だが、山に仇なす存在であるというのであれば総力をあげて排除にかかるということであった。

それ故の傍観というわけであった。

しかし、妖怪の山に現れた神が影響を与えたのはなにも妖怪の山にだけではない。

神の居、それはすなわち“神社”のことである。

幻想郷には既に神社があった。

『博麗神社』。

寂れて人間の参拝者よりも妖怪のたまり場といった方が実を表しているといえる場所であったが、幻想で唯一の神社であることは変わりがない。

その信仰の少なさか八百万の神の会議で話からその名を外されてしまうような神社であっても神社であるコトに変わりはないのである。

博麗神社は幻想郷でただ一つの神に対しての信仰を如実に集めている場所であったのである。

それ故に、故にだ。

「すぐにこの神社の営業を停止して明け渡してください!!」

「はっ?」

博麗神社の巫女、『博麗霊夢』は神社に現れた青と白を基調とし

た巫女服の少女の宣言に気の抜けた声で反応を示した。

「勿論、私も鬼ではないので今すぐとまではいいません。ですけど、なるべく早いうちに明け渡してください。その方がこの神社の為にもなります。では、何かありましたら山の方にごうぞう」

少女は言いたいことを一方的に霊夢告げると博麗神社から立ち去っていく。

あっという間のできごとであった。時間に換算してみれば五分にも満たない時間であろう。

「変な奴」

もう姿の見えなくなった少女を思い浮かべて霊夢はぼつりと呟いた。

「でも、信仰ねえ」

団子を取り出してきた霊夢は呟く。

確かに少女の言葉には霊夢も思うところがあった。

「流司が来てから若干参拝客は見られるようになったけど、それが博麗神社の参拝客かどうかは怪しいわね。相変わらず妖怪は良くいるけど。まあ、悪霊の姿を見ないだけマシかしら？」

いざ、思い返してみれば神社とは思えないような光景が霊夢の脳裏には浮かび上がった。

「どうしたら妖怪達をおいだせるのかなあ。どうしたら人間の信仰をあつめられるのかなあ」

いつになく真剣に悩む霊夢。

その姿を今はいない博麗神社の居候が目にしたら慌てて洗濯物を取り込み始めただろう。

「おう。美味しそうな団子だな」

「あ、魔理沙。うーん」

「悩み事か？」

普通の魔法使い、『霧雨魔理沙』の問いに頷くと事の次第を説明する。

「そりゃ、山に行ってみるしかないんじゃないか？百聞は一見にしかずと言っぜ」

「そうね。百見は一験にしかずとも言っしね」

善は急げと霊夢は立ち上がる。

「早速行くのか？」

「勿論よ。一言文句を言ってやらないと気が済まないわ。あんたはどうするのよ、魔理沙？」

「私は気が向いたら向かうとするぜ」

さりげない様子で団子に手をかけながら魔理沙は言う。

いつもであればそんな魔理沙を見逃すことのない霊夢であるが、今ばかりはそのようなことをしている場合ではなく、魔理沙に一瞥をくれると秋晴れの空へと飛び出すのであった。

「ただいま、と」

「おっ、久しぶりだな流司」

博麗神社の縁側に唐突に一つの人影が現れる。

『神代流司』。

博麗神社の居候にして家政夫、半神主である。平たく言ってしまえば博麗神社における雑務一般はほぼ全てにおいて流司が請け負っている。

「ああ、久しぶり、ってなんでここにいるだよ？」

「私がいちゃ悪いのか？それはあんまりだぜ」

流司の言葉にわざとらしく魔理沙は首を竦めてみせる。

「はいはい、で実際のところはどうかんだ？」

「霊夢が出掛けていったから留守番だぜ」

「それで団子を食っていたということか。後でどうなっても知らんぞ？それに博麗神社（こゝろ）に留守番などいらんだろ」

呆れた顔で流司は言う。

霊夢がいない以上、魔理沙が本当に真実を語っているのか、でまかせを言っているかは流司には判断ができない。

少なくとも流司に分かることは霊夢のお気に入り（こゝろ）の団子（こゝろ）を乗せて

いた皿が綺麗になっていくことから、このことが霊夢にバレた場合
ただでは済まされないだろうということだけであった。

「それで霊夢は何処にいったんだ？人里か？」

「いや、「山」だ」

流司の問いかけに魔理沙は簡潔に答える。

「山？山ってあの山か？」

「幻想郷で山といったら一つしかないぜ」

「だよな。何でまた……」

魔理沙の言葉が示している場所が妖怪の山であるということを知
解した流司が呟く。

流司が教わっていた知識の中でも妖怪の山はそう簡単に立ち入る
ような場所ではなく、霊夢も自ら進んで向かおうとする場所ではな
かった。

それだけに魔理沙の言葉に流司は疑問を浮かべる。

「なんでも山にいる神様の遣いから博麗神社の営業停止を言われた
そうだけ」

「博麗神社は営業していたんだ……」

「それは私がもう言ったぜ」

年がら年中、開店休業状態の博麗神社に営業停止勧告をしたとこ
ろで意味があるのかという思いが流司と魔理沙の共通した認識であ

った。

「どうするかなあ……」

「なんだ？流司も向かうのか？」

首を傾げるようにして呟いた流司に魔理沙が尋ねる。

「そりゃ、一応とはいえ営業停止を言われた神社の神主でもあるからな。正しくは“半分”か」

「そう言えば、流司は“外”の博麗神社の神主もどきだったな」

ああ〜と感心した声を魔理沙はあげて手を叩いた。

「まあ、気にならないといえば嘘になる。主に山の被害的に」

人間にしながら“鬼”の称号を有している巫女の霊夢である。今までは意図的に避けていた妖怪の山だったが、妖怪は退治されるべきものだというような思考の霊夢にとってはまさしく悪の総本山である。一体どのようなことになるかは考えるまでもないことであった。

「その上、神様に喧嘩を売りに行ったぜ。本当にあいつは巫女なのか？」

「とりあえず、向かうことにする。なんだか取り返しのかないことになりそうだ」

勇んで飛び出していった霊夢とは対称的に肩を落として流司は飛

び上がる。

「気をつけてな」

「それは妖怪にか？」

「勿論、霊夢にだけ」

魔理沙の言葉を背に流司もまた妖怪の山を目指す。

尤もその心は秋晴れのように清々しいものではなかったが。

「今日は千客万来だな。いや、二人は住人だから違うか。ということは私を含めても二人目か？それでも博麗神社には多いな。問題ない」

「何を一人で納得しているのかしら？」

新たな人影が博麗神社に現れたことに自称留守番の魔理沙は驚きを含んだ声で呟いた。

「いや、それよりも一人でお前がここに来るなんて珍しいじゃないか、咲夜」

「そういう貴女も一人でここにいるなんて珍しいわね」

霊夢秘蔵の煎餅をお茶を傍らに魔理沙が紅魔館のメイド、『十六

夜咲夜』に声をかける。

「私は留守番だぜ」

「留守番？ということはここには貴女以外の人はいないのかしら？」

魔理沙の返事に咲夜は少しだけ困った表情を浮かべる。

「お前が用事があるのは霊夢か？それとも流司か？ま、どの道二人とも外出中だぜ」

「少なくとも私一人で巫女に用事があることはないわ。パチュリー様にこれを流司に渡すように頼まれたのよ」

咲夜は一冊の本を掲げてみせる。

「なら、私が渡しておくぜ」

「そう、お願い……というだけでも？貴女に渡すぐらいなら直接渡すために探した方がマシよ」

「流司に渡す前にちょっと私が借りるだけだぜ」

咲夜の皮肉のうつつすらともった言葉にも魔理沙は懲りた様子を見せずに言う。

「で、一緒に二人は何処に行ったのかしら？」

「ん、ちょっと違うぜ。目的地は一緒でも向かったのは別々だ」

「そうなの」

「そうだぜ。じゃ、私もそろそろ向かうとするかな」

魔理沙は残った煎餅の欠片を口の中に放り込みお茶をすすると篇を担いで立ち上がった。

「何処によ」

「咲夜もついてくるか？たぶん、二人にも会えるはずだぜ」

「そう、ならついて行こうかしら」

「それじゃあ、山の神様にお目通りにいくぜ」

魔理沙と咲夜もまた飛び上がり秋晴れの空に身を躍らせる。

四人の人間は別々の意図のもと空へと舞い上がった。

目指すは『妖怪の山』。

神と妖怪の座す山也。

頁百五十九、『封印されぬ人々（の思惑）』（後書き）

IFな一幕。

『もし、早苗が流司が博麗神社に知っていることを知っていたら』

「流司さんは私のものです！！（異性的な意味で）返して貰います
！！」

「流司は私のものよ！！（資金源兼雑用的な意味で）渡してなるも
のですか！！」

境内に足を踏み入れて霊夢の姿を確認して早々に早苗は霊夢に指
を突きつけて高々に宣言した。

対する霊夢も対抗すべく大きく声を上げる。

流司の価値に決定的なまで齟齬があるもの渡してはならないとい
う思いだけは合致していた巫女二人であった。

「そうですね。なら、決闘です。この際、信仰なんて後回しです！
！まずは流司さんを奪わせて（略奪愛的な意味で）貰います！！」

「いいわよ。私だって流司を奪われたら終わりなのよ（生活的な意
味で）。受けて立つわ！！」

龍と虎、犬と猿、1Pカラーと2Pカラー。

今ここに己が全てをかけた闘いが始まるうとしていた。

的な展開になっていたかもしれない……

原作からの変更点（前回忘れた分も含む）

- ・ 守矢神社の幻想入りを諏訪子も了承の上で実行している。
- ・ 早苗が博麗神社を訪れてから霊夢がすぐに行動を起こす。

細かなところは多くあるかもしれませんが、大きな点はこの二つです。

IFな一幕はこれを書きたかったが為に発案したものだったりします。やっと書けた〜。

バックストーリー的なタイトル？

げに恐ろしきは妖怪ではなく巫女という……

次回からstage1、神様出てくると思います。

頁百六十、 『人誘いし神様』 Fall follow me 『(前書き)』

『八百万の秋の神』

く 霊夢を追って流司は妖怪の山へと立ち入った。

麓より先は未だ知らぬ人外魔境。

待ち構えるは色づく秋と実る秋。

秋めく山は静かに人を招き入れる

「ここが妖怪の山か」

辺り一面の紅を眺めながら流司は妖怪の山へと立ち入った。

紅魔館とはまた違う紅。紅魔館のそれがどことなく不気味な人工的な芸術性を表しているのに対し、妖怪の山のそれはあくまでも自然たる様、それでいて調和のとられた美しさを醸し出していた。

流司が妖怪の山の紅葉を見ることは初めてのことではない。

毎年のように鮮やかに染まる山を遠目から眺め、紅葉狩りを楽しむことでさえもあった。

だがそれは遠目であり今回のように実際に妖怪の山の中から眺めることは始めてであった。

「いや、綺麗なものだ」

故に流司が色鮮やかに染まった木々に目を奪われてしまったのも致し方がないことであった。

自然の美しさに心惹かれるということは人間として当然の感情であり、特に“外”を知っている流司であればその感情が強く表れるというものであった。

しかしながら

「所々で妖精が目を回しているのはそういうことなんだろうな……」

流司の視界には紅葉した葉の他にも地面で目を回している妖精の姿を多数捉えることができていた。

それは紛れもなく霊夢が通り過ぎていった跡を示している。

「迷わないって意味では楽なんだがなあ」

この惨状の跡を辿って行けばやがては霊夢のもとへと至ることは
確実であり、追いかけている流司の身としては非常に楽なことであ
った。

しかし、この風流な風景の中で目を回してしまっている妖精や流
れ弾で抉れてしまっている地面を探しながら飛ぶという行為は流司
を物悲しくさせるものでもあった。

「まあ、これだけの景色を見せられても行動にブレが全くないとい
うあたりが霊夢らしいとも言えなくはないか」

多くの妖精が容赦なく撃墜されているということはそれだけ霊夢
が妖怪の山の頂上、山の神様に会うという目的から逸れてはいない
ということである。

これがもし流司であったのであれば、先ように紅葉に見とれてし
まい妖精相手に不甲斐ない結果をもたらすことになっていたかもし
れない。

「でも、この紅葉に目を向けないのはもったいない気がするけどな」

「ふーん、今度の人間はよく分かっているのね」

流司の呟きに唐突に声がかげられた。

流司が周囲を見渡してしければ前方に一つの人影が確認できる。

「それをさっきの人間だったら見向きもしないで、あまつさえ私にも
攻撃してくるんだから。あれは本当に巫女なの？」

愚痴をいう少女に対して間違いなく巫女であると流司は内心で呟
く。

少女の言葉から察するに少女は妖怪の山に入った霊夢に容赦のない攻撃をされた一人であろうことが流司にも理解できた。

よく見れば少女の姿は土で汚れていたりボロボロというまでではないものの、決して綺麗と呼ぶことができる状態ではない。考えるまでもなく一戦後の姿であった。

「貴女様は？」

流司はそんな少女に遜る形で頭を下げるように尋ねる。

それはその少女が己が下でなくてはならない存在であるだろうということ流司がそれとなく気付いていたからである。

そもそも、妖怪の山に見た目通りの少女がいるなどということは有り得ない。

即ち少女は二つ、ないしは三つの可能性の内の一つであるのだ。

少なくとも妖精ではない。それは妖精の特徴でもある半透明の羽根が見られないということの他に少女から感じることでできる力が妖精のそれとは比べものにならないからである。

だとすれば残る可能性は二つ、少女は妖怪であるか、それとも

「貴方は私の正体にもすっかり気付いているのね。感心、感心」

「流石にお名前までは存じ上げてはいませんが」

流司の態度に少女は満足そうに笑みを浮かべて呟く。

「それじゃあ、教えてあげる。私は『秋静葉』、『紅葉を司る程度』の能力を持った八百万が一柱よ」

八百万が一柱。

それは“神”であることの宣言であった。

この国では八百万、ありとあらゆるものに神は存在する。それは実際に触ることのできる物体であったり、触れることはできない概念であったり、まさしく多種多様に及ぶ。

静葉は紅葉を司る。
つまりは秋の権化の一端たる神であった。

「そうですか。私は『神代流司』。代々『龍神』様に仕えさせていただいています」

静葉の名乗り流司はやはりと納得した声を漏らして丁寧な口調で自らも名乗りをあげた。

流司の仕えている神はあくまでも『龍神』であるが、神職に携わるものとして神に対して敬意を払わないなどという真似ができるはずもなかった。

実を言えば、幻想郷に来てから二年以上が経っている流司であったが、神と出会うのはこれが初めてのことである。

数知れずの妖怪には出会っていたものの神に出会うことはなかった。

神を祭る神社があんな状態であったので当然といえば当然のことであるともいえたのだが。

「貴方がそうなの。噂はこの山にも届いているわよ。といっても烏天狗が好き勝手に風潮して回っているだけなのだけどね」

「それは光栄というか、なんというか……」

神に自分のことを知ってもらえたらことは流司にとって喜ばしいことであったが、その噂の出所が出所だけに素直には喜ぶことができなかった。

流司と比較的関わりが多い烏天狗といえは一人しかおらず、あることないこと無闇やたらに書くような性格ではない だろつと流

司は信じてはいたが、

「（次会った時に一度問いただして見ることにしよう）」

と流司は胸中で固く決意するのであった。

「そつだ。少し貴方をお願いがあるのだけど、いいかしら？」

「私にできることなら構いませんが……」

口ではそう言ったものの流司はそれほど乗り気ではない。一刻も早く靈夢に追いつかなければならない以上は余計な時間を割くわけにはいかなかったからである。

だが、神に面と向かって頼まれたとなれば、神職である流司が断れるはずもなく、こういう時はかりは巫女にして神をも恐れぬ靈夢の性格が流司は少し羨ましくなる。

「そつ渋る必要はないわよ。たぶん貴方の目的を達成するための足しにもなるはずだから」

「分かりました。お手伝いさせていただきます」

「ありがとう。なら、私の後についてきてくれる？」

恭しく頭を下げる流司に静葉は礼を述べると流司の先導するようにして紅葉した木々の間を縫うようにして飛んでいくのだった。

頁百六十、『人誘いし神様』 Fall follow me 』（後書き）

一面道中。

オリキヤラじゃないよ神様だよ。

一応、神様なので敬意を払わない訳にはいきません。
後始末は常に主人公に降りかかります。

頁百六十一、『八稚女様に叱られるから』

色付いた木々の間を縫うように動く二つの影。 片や人間、片や神。

その二つの影に明確な関わり合いがあるかといえはそうでもないが、全くの関わり合いが無いともいうことはできない。 それは人間が神職の家系のものであったからだ。

「つまりは妹神様を探すのを手伝って欲しいと言つことですね？」

「そう、巫女と遭遇してから行方が分からなくなってしまつていて……十中八九襲われているのだと思うけど。 因みに妹の名前は『秋穰子』、豊穰を司る神よ」

「なんと罰当たりな……」

まだ確証のある話ではなかったが、仮に霊夢が穰子を襲うないしは撃退していたのであれば罰当たりであることこの上ない。

豊穰を司る神を襲うなど巫女云々の前に秋の実りを冬を越す糧としている生き物の一つとしてあつてはならないことであろう。

「本当にあれは巫女なのかしらね？」

静葉の疑問も尤もなもので流司も普段の霊夢の姿を思い出しても『博麗神社』の巫女らしいことをしている様子を思い浮かべることができた回数は片手で足りるほどしかなかった。

「……………」

そうであつたが故に流司の返答は無言。

尤も無言が肯定を示すということは決して少なくともなく、この場合の流司の無言は間違いなく肯定の意味でのそれであつた。

「そんなこと今はどうでもいいわね。早く穰子を見つけてあげないと……」

「そうですね。何か宛のある場所はあるのですか？」

「そのようなものあつたら初めから貴方に協力を求めることはなかつたわ」

流司の問いに静葉はとりつく島もない正論をもつて答える。

「なら、二手に分かれた方が効率的では？」

「貴方が穰子の姿が分かるのならそれもありだつたわ。でも、貴方は知らない。それに貴方が見つけたからといって素直に穰子が話を聞くとは思えない。巫女に襲われていたとすればなおさら」

いっそのこと流司を嫌っているのではないかと思えるほどの淡々とした口調で静葉は正論を繰り返す。

神は気まぐれだ。

積極的に人に関わっていくこともあれば、その逆もある。

むしろ、害がない限りは後者であることの方がほとんどだつた。

静葉が述べるように神である穰子が流司の言葉を易々と聞き入れるかどうかは実際、全く予想のできないことで、無視する可能性も少なくはなかつた。

「なら、どうして私を……？」

流司がそう思うのも無理はない。

静葉と流司が同じ場所を探すのであれば、人数が二人である必要性は全くなかった。

「貴方は神官なんでしょう？ だったら、神を感じる力があると思ったの。実際、私を見たときは一目で気付いたようだし」

それを言ってしまうえば、姉妹である静葉の方がよっぽど感じるところがあるだろうと流司は内心思うが、その神に対する殊勝な心掛けを最大限に発揮し決して口にするような真似はしない。

「それに私と共に行動していることはそれだけで貴方の利になっているわ」

「どういうことでしょうか？」

「いくらまだ麓といってもここは『妖怪の山』。人間が一人でのこのこと立ち入れば忽ち妖怪に襲われるわ。最低でも妖精にちよっかいをださせれても仕方がない。でも、神である私と行動すればこの通り、よっぽどのことがなければ邪魔されることはないわね」

霊夢が通っただろうとされる場所に妖精が目印のように目を回しているということは妖精が霊夢にちよっかいをかけたということである。

だが、流司は妖怪の山に入った当初こそ様子を窺うような視線を感じていたが、静葉と出会ってからはそれすらもなくなっていた。

八百万の神であるということはそれだけの力があるのである。

その上、今の時期は秋。

静葉の力が最も強大なものになる季節であった。

「穰子を見つければ巫女の進んだ方向も分かるはず。どうせ、秋を乱すものは成敗とか言って積極的に突っかかっていくだろうから」

適当なところで切り上げてれば比較的無事でしょうと静葉はそこまで心配した様子を見せてはいない。

「意外？」

「ええ、それなりには……」

神とはいえ実の妹が襲われているかもしれないというのだ。

普通であれば心配しないという考えの方がおかしい話である。

そうであるがために流司は静葉の淡泊な反応を意外に感じていた。

「それが人間としては当たり前の考え。でも、神は違う。これくらいのことはお祭り、遊びでしかないの。今回のこともそう。そのことをあの巫女はよく理解している。だからこそ、神に対してもある意味不敬ともとれる態度をとる。幻想郷ではそれが正しいこともあるの。尤もそれが巫女として正しいかはなんととも言えないのだけど……」

語る静葉はまさに神としての言葉を流司に与えていた。

「勿論、務めは大切。でもそれだけでは駄目。貴方も少しは気を楽しにするといいわ。そうね、まずはその固い言葉遣いを何とかしてみるといいわね」

「それで、そうか」

「それでいいわ。穰子なんて常に畏まられていたら倒れてしまっわ。収穫祭の口上を聞くだけで一杯一杯なんだから。と噂をすれば……」

「あつ、お姉ちゃん。それにそっちは里の神官？」

所々汚れて髪や身体に落ち葉を付けていることも気にせずになつた人影が流司と静葉のもとに近付き口を開いた。

「知っているの？」

「収穫祭の時は里に呼ばれているんだよ？会ったことはないけど、見かけたことはあるよ」

「失念していたわ」

穰子の言葉に静葉ははっと気付いたように呟いた。

「で、神官さんはどうしてここに？あつ、もしかして巫女を追いかけに来たの？」

「あ、はい」

穰子が乗り出すように話しかけて来たために流司は少し気圧されるように頷いた。

「やっぱり、会っていたのね」

「うん。そっか、そっかあ。私のことを見た途端、美味しそうないがするとか言った不届き千万な巫女だったよ」

「霊夢……」

いくら穰子が豊穰を司る神であったからとはいえ、仮にも巫女なのだからそれはないだろうと流司は額に手を当てて悩ましく呟く。

「だから、少し懲らしめてやろうと思ったんだけど……」

「無理だったのでしょ？」

「うん。流石、博麗の巫女。よく遊びを理解していた」

えへへと声を漏らすようにして穰子は笑う。

「まあ、どっちに進んでいるかは覚えているから大丈夫。向かった方向が方向なだけに途中までしか案内できないけどね。それでも良ければ案内してあげるけどどうする？」

「頼む」

身体についた落ち葉を落としながら言う穰子に流司は頭を下げる。

「分かった。それじゃあ、ついてきてね」

先導者は静葉から穰子へと切り替わる。

その先に広がるのは紅葉の華やかさを感じさせない鬱蒼とした森であった。

頁百六十一、『八稚女様に叱られるから』（後書き）

口調が分からない!!オリキャラ

静葉は物静か性格らしいのでクールな感じに秋だし、紅葉は寒くないと色付かないしいいよね？

穰子は結構明るいというかアグレッシブに。

正直、ここまで神様らしい静葉は見ないと思う。これで存在感もアップ!!

冬には落ちきるけど……

また出番はあるの……かなあ……？

頁百六十二、『神主様の通り道』 Chase road (前書き)

『神々の疵痕』

く秋を司る二柱の神に導かれ流司は樹海へと足を踏み入れる。

そこは光差し込まぬ妖怪の楽園。

災厄招くは己が業か

「それじゃあ、私が案内できるのはここまでだから」

「ここから先は妖怪に襲われるという前提で行動することね。といつても、まだ麓に近いから貴方でも十分に対処できるはずだから」

秋の山とは思えないほど薄暗くじめじめとした森に少し足を踏み入れたところで穰子と静葉が口々に言う。

「巫女は多分この樹海を山の頂上を目指して進んでいるはずよ」

「上手い具合に抜けることができれば川に辿り着くはず。それを辿つていけば頂上には行けるわ」

「ありがとう。助かった」

流司は静葉と穰子に頭を下げる。

静葉と穰子の二柱の神と行動を共にしていたことで煩わしいものに遭遇することもなく樹海まで流司は辿り着くことができていた。

「いいよ、別にただこの先は本当に気をつけてね。特に神様に」

「神様に？荒神様でもいらっしやるのか？」

穰子の忠告に流司は首を捻る。

妖怪に気をつけるということであるならば何も疑問は抱かないが、神に気をつけなければならぬという言葉は流司には理解ができないものであった。

荒神という存在もあることにはあるが、それほどの存在がいるようには流司は感じるができない。

「そうじゃない。いるのは歴とした善神。合えば分かるわ。でも、なるべく会わない方が身のため」

「でも、神官さんは色々と苦労してそうだし一度会ってみるのもいいかもしれないかも……」

流司の言葉を否定してなお会うべきではないと言う静葉に対して会ってみるのも一つの手だというように口を開く穰子。

二人の語る神は同一の存在であるのだろうということは流司も分かっていたが、いまいちイメージを掴めずにいた。

「会うようなことがあればそれも一つの縁。塞翁が馬、今は当初の貴方の目的を果たすようにすればいいわ」

「もしかしたら、向こうから誘われてくるかもしれないし」

「つまりは進めばいいと？」

「「そういつこと」「

静葉と穰子の秋姉妹は口を揃えて言う。

「縁があればまた」

「じゃあねっ」

二柱の神に見送られながら流司は見るからに深い樹海の中へと足

を踏み入れていくのだった。

そこは本当に秋晴れの昼であるのかと疑ってしまうほどに光が差し込んではいなかった。

「……………」

流司は無言で額から滴り落ちる汗を拭う。

時折飛び出してくる妖精や小型の妖怪の相手をしていることで、運動量としてはそれなりのものがあるので汗が流れることはおかしなことではない。

だが、その汗の量は些か多めであるということは否めない。

というのは流司の進む樹海に原因があった。

この樹海は光がほとんど差し込んでいないことから湿度が非常に高い。地面に落ちている葉は皆湿っていて腐葉土と化し、豊かな土壌のもととなっている。

そういった意味ではこの樹海は妖怪の山にとって必要不可欠な場所であった。

しかし、樹海を進む流司の身になってみればたまったものではない。

肌に張り付くような湿気は流司の汗を助長する。

まだ夏ではないだけマシであったが、外はからりと晴れた秋空にもかかわらず、流司の体感気温は真夏にも匹敵するようなものだった。

「それにしても、少し場所が変わっただけでこうも変わるとはな…

…」

流司の思いは尤もなものであった。

紅葉し秋めいていた森から流司が歩みを進める樹海との距離は大層離れているというわけではない。

実際に枯れ落ちた葉が風に誘われて運ばれてこられる程度の距離である。時間に換算してみても数分と離れてはいない。

で、ありながらもこれほどまでに容貌を変えてしまった森に流司は驚きを隠すことができなかった。

「それに何というか、空気が重い……？」

流司の感覚はあながち間違ったものではないだろう。

湿度が高いという意味においては空気中の密度は高くなり、物理的な意味であっても空気は重かった。

しかし、流司が感じとっている重さはこのようなものではないことは明白であろう。

雰囲気が高い。

言ってしまうえばその一言に尽きる。

感じ方としては漠然としたものでしかなく、人によっては違和感を少し感じる程度のものだ。

流司はその雰囲気を大まかなものでありながらも、己に決定的な影響を与えるものではないと感じていた。

それ故の重いという印象。

「確かに早く抜けてしまふにこしたことはなさそうだ」

結果、雰囲気に嫌なものを感じとった流司の歩みは早いものになる。

それでも、この場所は妖怪の住まう樹海。

警戒を怠ることはできるはずもなく、歩みを早めるにも限度というものが存在していた。

重くのしかかる空気に耐えるようにして流司は樹海を抜けるために進む。

その足取りはどちらかといえばやはり重い。肉体的というよりも精神的な負荷によつてのものであるが、それが結果体力を奪っていくことには変わりはない。

「あら、また人間？」

重い空気の森には相応しくないような透き通ったことが流司の耳に届く。

「ッ!？」

唐突な声に流司は慌てて周囲を見渡して警戒心を高める。

「そんなに警戒しなくても大丈夫。私は人間の味方だから」

「生憎、姿が見えないような奴の言葉を信じるほど楽観的な性格はしてないんでな」

流司の反応は当然のものだろう。

妖怪に襲われるという前提で行動しているというのに姿も見えない相手の言葉を信じるなど愚の骨頂である。

一瞬たりとも警戒を緩めることはなく、流司は感覚を研ぎ澄まし相手の潜む場所を探っていく。

「用心深いね。でも、そこまで用心深いのなら初めからこんな場所に来なければいいものを……」

感心するようなそれでいてどこか呆れるような声を帯びてその人影は暗い森の中から浮かび上がるようにして姿を現した。

赤くフリルのあしらっている服をまとい現れた少女の姿はこの場に酷く似合っていないもの、どこかこの場所が少女のいるべき場所であると信じ込ませるような一律背反の印象を流司に与えていた。

ツウー、ポタ。

流司の額を離れた汗が頬を辿り顎から地面へと自由落下する。

汗を拭うことすらできなかった。

流司が姿を現した少女から目を離すことができず、一步も動くことができなかったからだ。

見惚れていたわけでもない。

恐怖におののいていたわけでもない。

ただ、その漠然とした雰囲気から目を離してはいけないと本能的に悟っていたのだ。

「怯えているの？。いえ、気付いているのね。少し驚きだわ。それにしても」

少女は刹那、目を見開いたかと思うと驚きから真剣な表情へと目を細める。

そして、探るような視線で流司の全身を眺めると、

「貴方、厄いわ」

のっぺりとした顔でそう告げるのだった。

頁百六十二、『神様の通り道』Chase road』（後書き）

厄神様に『厄い』認定された主人公。

因みに厄神様が『厄い』と言ったことはありません。

更にいえば、『厄い』は確か北海道の方の方言で『ヤバイ』の意味
だったはず。

兎にも角にも『厄い』主人公。

うん、『厄い』。

『厄』。

災いと同義のものとしてみなす場合が多いが、厳密にいうと少々異なる。

“災い”がその人物に降りかかった災難そのものを示すことがほとんどであるのに対し、“厄”というものは災難を引き起こす根源として捉える場合が圧倒的である。

故に厄祓いをすることで災難を遠ざけるといった儀式があるのだ。

「ここまで厄を溜め込んでいる人間は久しぶりに見るわ。貴方、色々と苦勞しているでしょう？」

顔の造形がわかる程度まで流司に近付いた少女が呟く。

初対面である流司のことをどのような理由のもと少女がそう述べたのか流司には全くといって分からなかった。

されども、その言葉には是非を言わせぬような力があり、己を射抜くような少女の瞳に流司は惹き込まれてしまう。

実際、流司が苦勞していないかという嘘になる。

それは流司自身の性格によるものということでもあったが、純粋に星の巡りが悪いということも要因を占めていた。

幻想郷には多くの妖怪が住んでいる。

人を襲い、恐れさせることが基本的性質の根本にある妖怪が人を襲ったことで食したのだとしても、それは特段に異なることであるということはない。

むしろ、自然ともいえることであろう。

しかし、幻想郷に生きる妖怪の多くは人間がいなくては自分たちの存在が危ぶまれるということを理解した上で幻想郷で生きているのだ。

故に幻想郷の妖怪が人間を襲い喰らうのはそれがお膳立てされている状況に限る。

だが、流司に限ってはそうでもない。

流司が幻想郷にやってきてから丸々二年。

三年目の現在に至るまでに妖怪に襲われた回数は数知れない。

それも“遊び”ではなく、本気で流司が死にかけるとような遭遇も多々あった。

これはあまりにも異様なことであつたと言わざるを得ない。

当初であれば流司が“外来人”と見なされていたためという原因もあつた。

しかし、流司が幻想郷を維持するために必要な要因の一つとなつてからはその言葉は有名無実である。

にもかかわらず、流司は近年、幻想郷で起きた騒動のほとんどに関わっていた。

作為的にしる偶発的にしる。

能動的にしる受動的にしる。

いわばそのような“星の巡り合わせ”の下に『神代流司』という存在はあつたのだ。

初対面であつたのに全てを見てきたかのように言う少女に流司は骨を直接撫でられたかのような怖気を感じる。

「貴方は……」

流司は己の口調が敬語に変わっていることにも気付かずに呟いた。

「『鍵山雛』。さあ、貴方の“厄”を貰い受けましょうっ?」

「これで少しはマシになるはず」

「ありがとうございます」

先程までの警戒心を霧散させた流司が雛に頭を下げる。

「これが私の役目なのだから当然のことをしただけだわ」

厄神としての役目を果たしたただけだと雛は打って返したような流司の態度の変化を気にしてはいない。

というのは厄神という存在がその人間への影響力と反比例して、好まれることがほとんどなかったからだ。

感謝をされるも当然全くなく、面と向かって流司に感謝されたことに心なしか雛の表情も綻んでいた。

面と向かって、とは言ったもの流司と雛の距離は決して近いものではなかった。

精々が辛うじて顔を造形を確認できるという程度のもので、流司と雛が出会った場合の倍近い距離が開かれてしまっていた。

「あのもう少し近付いた方が……」

流司は呟くような声で言うが、実際のところは張り上げているのとさして変わらぬ声の大きさである。

「いけないわ。また貴方に“厄”が乗り移ってしまうから」

厄神という存在は厄を浄化する存在ではない。

人間の厄を集めて厄を浄化することのできる神に届けるといっ、いわば厄の宅配人のような存在である。

なので、厄神の周囲には常日頃から高濃度の厄がまとわりついて、いることが多いのである。

厄神自身には影響はないが、無論周囲の厄は他の存在には影響を与えてしまう。

それが厄神が人間から嫌われがちな原因であった。

「それに貴方は“厄”に好かれているみたいだから。下手をすれば私が集めたものまで持っていかれてしまうわ」

「それは素直に……いや、全く喜ぶことができないですね」

“厄”に好かれるから“不運”なのか、“不運”だから“厄”に好かれるのかは定かではない。

だが、それが流司にとって好ましいことではないことは確かである。

厄神から厄を奪うほどの力。

利用することができれば凄まじい力を得ることになるが、流司のもとに厄が集まった時点でその厄は流司自身のものであり、雛のように他者へと分けるということはできるはずもない。

また、人間ではない流司が“厄”の影響から逃れることができるはずもないので、集めれば集めるだけ流司に災難が降りかかることになるので流司にとっての利点はない。

「さあ、人間が長いことこのような場所にいるものではないわ。用が済んだのなら早く山から去りなさい」

「いえ、まだ用は済んではないのですが……」

「貴方は私に厄を渡しに来たのではないの？」

常人以上の厄を流司が溜め込んでいたこともあり、雛は余程驚いたのか目を点にしてしまっている。

「つかぬことをお聞きしますが、ここを霊夢　　巫女が通っては行きませんでしたか？」

「通ったわ。私が親切にも追い返そうとしたのに無理矢理通ったの」

「なるほど」

霊夢であれば追い返すこと自体が親切ではないなどといいながら強行して通っていきそうだと、流司は雛の言葉にしみじみと頷いた。

「もしかして、貴方も頂上を目指しているの？」

「巫女の目的地がそこならそうなるでしょう。一応の目的は巫女を連れ戻すことなので」

「なら、そこを真っ直ぐ進むといいわ。じきに川にぶつかるから。きつと、巫女も同じ道を通っているはずだわ」

「ありがとうございます」

流司は雛に再び頭を下げると指さされた方向へと飛んでいくが、

「あっ、まだ“厄”が残っているから気をつけるように」

雛の忠告がその耳に届くことはないのだった。

頁百六十三、『運命のダーククラウド』（後書き）

直訳して『暗雲』。

ピコーン。

主人公は

『厄神様から厄を奪う程度の能力』

を修得しました。

以降、常時幸運値が -10 となります。

やったね。

輝かしくない未来はすぐそこだ！！

頁百六十四、『河童も流れた幻想郷』（前書き）

『瑕疵無き要塞』

く 厄神に完全に厄を引き渡すことなく流司は先を進む。
辿り着くは山を切り開く細き蛇の道。
流れる紅葉に混じり流司は一つの出会いをするく

頁百六十四、『河童も流れた幻想郷』

世界は再び色を取り戻す。

何もそれは比喩などではなく、流司には実にそのように感じるようになったのだ。

陰鬱な樹海を抜け出した流司の瞳には神々が告げたように渓谷を流れる一筋の水でできた道が映り込んだ。

「仕方がない。ここからは飛ぶしかないか」

呟いた流司は崖から身を投げるような形で水面ギリギリまで落下してから宙に浮かぶ。

山間を縫うように蛇行する川であったがために土手や岸边というものは全く存在していない。

崖沿いを歩いていくという方法もとることは可能であったが、いつ歩けなくなるかも分からないくらいであるのならば初めから飛んでしまえばいいという流司の判断のもとだ。

実を言えば、流司には水面を“歩く”などという離れ業ができないということもない。

故に流司が“歩く”という行動に対して執着を見せるのであれば川を歩いていくという方法をとることでさえも可能であった。

尤も流司がそれをしないのは単純に労力からの問題であった。

自由に飛行が可能でも自在には飛行が難しい流司であるが、それでも絶えず流動する川の水面を歩くよりは楽であったのだ。

崖上から降り注ぐ紅葉の雨は穏やかに流れる川へと至り赤や紅、朱であり黄橙の絨毯を作り上げる。

切り立った崖は巨大な双壁となり、来るものの逃げ道を奪う。

それは神々でさえも虜とする自然の作り出した美しき要塞であった。

「これなら迷うことはないな」

先程まで流司が進んできた森とは異なり一本道のように伸びる川はこれ以上ないほどの頂上までの道案内である。

その上に目回している妖精が葉の中に混ざるようにして上流から流れてきている。

これはこの川を遡っていった先でかの巫女がその力を遺憾なく発揮していることの証明でもあった。

「とはいってもこれ以上に先に進まれると追いかけることも難しくなってしまうのだがな」

流司は襲いかかってくる妖精の弾幕をかいくぐりながらぽつりと呟いた。

山の頂上に近付くにつれ襲いかかってくる妖精や妖怪の強さは徐々に増している。

一対一であれば流司も並の相手には遅れをとらないという自身もあり、実際その程度の力は有していた。

だが、集団戦となると勝手は違ってくる。

一対一であれば目の前の敵の動向さえ探っておりば対処は容易とまでは言えなくとも対処が難しいということはない。

一対多の場合はそうもいかない。

前方に注意を払えば後方から、後方に注意を払えば前方から。

右に意識を傾ければ左から、左に意識を傾ければ右から。

更には飛ぶことで三次元的な行動をとることができることで上方だけならず下方からの攻撃にも対処しなければならぬ。

一定数までならば対応も可能だろう。だが、それを超えてくればどうなるのか。当然のごとく対処することは不可能となる。

『一騎当千』という言葉が存在するように質が量を勝ることは珍しいことではない。

しかし、同時に『数の暴力』という言葉も存在する。

千で足りないのであれば万の数を。

万で足りないのであれば億の数を。

億で足りないのであればそれを超える数を。

さすれば、質では対処がきれない状況にいつかは至ることになる。

現在、流司が一度に対応することのできる相手の数は二桁を超えたところであり、到底千などという数は夢のまた夢であった。

勿論のこと敵の質によってこの数は変動することになるが、劇的な変動があるわけでもなく、頂上を目指すにあたって敵の質が低くなるということは有り得ない。

平たく言ってしまうえば、流司が単独で妖怪の山に登頂していくのはそろそろ限界に近付いているのだ。

無論としてまだ流司にも余裕がある。

ただ、この妖怪の総本山たる妖怪の山での楽観視は死に直結することを流司はその異様なまでの厄の影響からか嫌というほどに理解していた。

仮に死ぬようなことがなくとも今回は理由は受動的であっても流司の自発的な行動からの妖怪の山への侵入である。無傷での帰還を望むのは無理がある可能性は十分に高いものであった。

よって、流司は一刻も早い霊夢との合流をしなくてはならないのだが、霊夢が通り過ぎた影響を垣間見ることはできても肝心の霊夢の姿は流司には一向に見えてはこなかった。

「これはそろそろ引き返すことも考えないといけないか。こんなことなら魔理沙にでもついてきてもらおうだったか」

後悔先に立たず。

溜め息をつくように呟いたとしてもそれは詮無きことであった。

「まあ、無理だと感じた時点で素直に引き返すことにしよう」

この引き際の良さが流司がこの幻想郷において強者とも肩を並べることのできる最大の要因だった。

勝てる相手、勝てる状況で戦えば負けることはなく、それはまさしく強者の姿である。

卑怯などと言われることがあっても流司がそれを気にすることはないだろう。

そもそもが妖怪と人間では卑怯なほどに性能スペックの差があるのであって、これは巧い戦い方と呼べるものであった。

己を知り相手を知れば、百戦危うからずとはそういうことであるのだ。

流司が視界に映っていた敵の迎撃を終え、一息ついたところであった。

ぶかぶか。

上流から新たな人影が流れてきたのは。

どんぶらこ。

と流れてくるその姿は流司にとある童話を思い出させるが、それが美味しそうな外見をしているわけでもない。背を空に向けて浮かんでいることから流司は気付くことができたことであるが、半透明の羽根がないことからそれが妖精ではないことは確かであった。羽根の代わりに背にあるのは幻想郷ではまず目にかかることのないリュックサックである。

「あれは助けた方がいいのだろうか……」

土左衛門のように流れる人影を捉えて流司は呟く。

人影があのような状態になってしまっている原因に流司が心当たりがないわけはなかった。

「だが、先を急いでるしな……」

水面に浮かぶ人影から話を聞くことができれば流司が霊夢に追いつくための助けになるだろう。けれども、気絶してしまっているだろう人影がいつ目を覚ますか分からない以上は全くの無駄足ともなりかねない。

流司は胸中で二つの思いを天秤にかける。

「まあ、助けておくか。見かけたからには無視するのも胸がいたいしな」

最終的に良心の勝った流司は足元まで流れてきた人影をゆっくりと引き上げ、僅かにある岸へと運ぶ。

助けた人影の正体が『河童』であることを流司が知るのはしばらく後のことであった。

頁百六十四、『河童も流れた幻想郷』（後書き）

まあ、何が言いたいかというとボスよりも道中の方が難しいこともあるよねということ。

一対一での実力がそのまま他の部分に影響するかは分からない。

河童の川流れ。

原因は気絶ですけどね。

次回、河童の本性が牙をむく！？

河童って牙あつたっけ？

頁百六十五、『河城様の云つ通り』

「河童の川流れ……現実に遭遇するとはな……」

「本当に助かったよ。やっぱり人間は河童の盟友だよ」

川から助け上げた少女の正体が河童であるということを知った流司は驚きを隠せない様子で眩きを漏らした。

『河童の川流れ』。

『弘法も筆の誤り』、『猿も木から落ちる』と並び伝わる“その道の達人も時には失敗を招く”という意味の慣用句であるが、実際にその状況に出会ったことのある人はほとんどいないだろう。

第一に『弘法も筆の誤り』と『猿も木から落ちる』の二つであればまだ何とかなるも、『河童の川流れ』ではその大前提たる“河童”の存在に危ういものがあつた。

少なくとも、流司が“外”で暮らしていたのであれば一生遭遇することはなかつただろう。

「で、にとり？だったか、お前をそうしたやつは上流に向かってい
るんでいいんだよな？」

『河城にとり』。

それが河童の少女の名前であつた。

流司は“誰が”などといった野暮なことを聞くことはなく、純粹
ににとりを襲つたもの 霊夢の行方を尋ねる。

「ん、巫女のこと？そつだよ、このまま川を遡っているはずだ」

にとりは屈託のない笑顔を浮かべて言う。

「そうか」

にとりの言葉を受けた流司はそのままに上流へ向かわんとにとりに背を向ける。

確認がとれ霊夢の進行方向に間違いがないとわかったからには早く追いかけないと追いつけなくなってしまっからだ。

「ちよつと待った。あんたもこの先に進もうと言っのかい？」

「ああ、早いこと霊夢に、巫女に追いつかないといけないからな」

今にも飛び出して行きそうな流司をとりが慌てて呼び止める。

「駄目だよ！ここから先は本気で洒落にならないんだ。命の恩人たる盟友が行くのをむざむざ見過ごせないよ！」

「だが、霊夢をこのまま放っておくのも洒落になりそうにないんだがな……」

にとりが本気で流司の身を案じていることは流司自身よく分かっていた。

しかし、霊夢をこのままにしておくことも、主に霊夢が一言文句を言いに行こうとしている山の神との今後の関係を考えるに少なくともストッパーの存在が流司には必要に思えて仕方がなかった。

そしてその役目が己の領分であることも流司は理解していたのだ。

「勿論、私だってあんたに巫女ほどの実力があれば止めることはないよ。でも、あんたはそこまで強くないだろう」

「そう面と言われてしまつと少々傷つくんだが……まあ、確かにそうだ」

にとりの言葉に流司は若干落ち込むように肩を落とすが、事実として流司には霊夢と肩を並べるほどの実力はまだない。

にとりの言葉が真実であるとすれば、流司一人でのこれ以上の進歩は厳しいものがあるだろう。

だからといって流司がおずおずと引き下がることができると言えはするようなことはない。

故に流司の提示した妥協案は

「俺の実力が少なくともとりより上ならば先に進んでもいいのだから？」

口角を上げた流司は珍しく挑発的な態度を見せるのだった。

「本当にいいんだね？私だって妖怪の山に住む妖怪の端くれ、簡単にやられるなんてことはないよ？」

「当然だ。そうでなければ俺が先に進むことを認めてはくれそうにないからな」

流司の行く手を遮るようにして上流に背を向けるにとりとりを越えて上流を目指そうとする流司。

静かに流れる水面の上では、闘志もまた静かに高まっていく。

「使用できるスペルカードはお互い二枚まで。どちらかが一度でも被弾したらその時点で被弾した方の負け。ただし、私がスペルカードを使い切った場合は私の負けにしてあげるよ。一応、それだけの実力があれば先に進んでもなんとかなるだろうから」

「いいのか？俺にとっては願ってもない条件だが」

にとりの言うルールに流司は驚くように確認をする。

流司が言うようにこのルールではにとりのスペルカードを二枚耐え抜くだけで実質的に流司の勝ちとなり、流司にとって圧倒的に有利な条件であった。

「分からないよ。私がスペルカードを使わないという方法だってあるんだから」

にとりが言うこともまた事実であった。

スペルカードの使用はあくまでも任意であるのでにとりがスペルカードを使わずに流司の相手をするということもできるのである。

しかし、流司にはにとりがそのような手段をとることはないという確信があった。

「そんなことはないだろう？俺の実力を計ることができればいいんだ。スペルカードを使わないなどという行為に意味があるわけない」

スペルカードを攻略するということは単純に力量を比べるということでもある。

となればスペルカードを出し惜しみすると言うことは全くの無駄な行為でしかなく、その結果負けるようなことがあるれば本気を出さなかったがために負けたようなものであり、実力を正しく計っているとはいえないのである。

「そこまで理解していて言っているということは余程自信があるんだね」

「まあ、避けることに関してはな。当てなくていいのであればいくらでも方法はある」

胸を張るようにして言う流司は自信に溢れている。

だがそれは驕り高ぶっての慢心ではなく、自身の力を理解した上での自信であった。

「なら、そこまで言うのなら盟友の力を見せてもらおうかッ!？」

空に無数の光が輝く。見るものもない戦いの火蓋は静かに切られて落とされるのだった。

頁百六十五、『河城様の云つ通り』（後書き）

次回

VSにとり

本当は一話にする予定だったんだけどなあ……

無数の光撃を流司は軽やかな足取りでかわす。回避に自信があると胸を張っただけあり、その動きには淀みの欠片もなく舞うかのようなものであった。

にとりが弱いというわけではない。

にとりとて妖怪の山に住まう一妖怪。最低でも幻想郷で中堅クラスの実力を兼ね揃えている。

だが、流司にとってスペルカードでもないこの程度の弾幕を避けることなどわけもない話であった。

それは偏に流司の今までの経験がものをいっていたことによるものである。

「（これ程度、霊夢やフランのとは比べものにならないな）」

口には出ない流司の思いはまさに流司の経験を端的に示している。にとりが決して弱い相手だと流司は思っではいなかったが、今までに流司が相手にしてきたものは並みという言葉では数えることのできない存在も多い。

それと比べてしまおうとどうしてもにとりの弾幕は見劣りしてしまうものであった。

「（早いこと勝負を決めてしまおう）」

決意を固めた流司はスペルカードを取り出して宣言する。

「逆上『理不尽な怒り』」

瞬間、一面を流司の弾幕が埋め尽くす。

その弾幕のほとんどは小型で威力もさほどあるものではないが、それを補ってなお、流司の使用したスペルカードは数の暴力という言葉を体現していた。

また、にとりへと迫る弾幕の速度もさほど速いものとはいえない。

「それくらいの弾幕なんて大したことはないよッ！」

いくら弾幕の密度が濃いものであっても、迫る速度が遅いものである以上は避けることができないということはない。

軌道を読んでから行動するまでに十分な余裕を持って行動できるからだ。

にとりはそれをよく理解しており、その数に惑わされ慌てることなく巧みにかわっていく。

その姿からは数分前まで川を流されてしまっていた河童などとは一切思うことができないだろう。

だがしかし、ただの力押しで流司の弾幕が終わるはずもなく、

転。

当然のように流司の能力が発動する。

「ッ!？」

にとりが軌道と呼んでいたことをあざ笑うかのように軌道を塗り替える光弾の数々。

速度が遅くとも瞬時にその変化に対応することなどできるはずもなくにとりは光の群れに飲み込まれていくのだった。

「やったか？」

流司は呟く。

基本的に流司が戦いを提案することはない。

それは流司の性格故の部分が多いが、単純に流司が堅実な結果を求めることが多いからでもある。

よって、流司が勝負を挑んだということは流司に勝つことができるといふ確信があったからこそなのであった。

流司の能力を使用した弾幕は相手の意を突くことに長けている。

それは初見ではほぼ確実に避けることができないほどだ。

例えば、直撃することができなくとも掠めることは容易にできるといふものであった。

今回にとりとの対決は“倒す”ことが目的ではなく、“当てる”ことが目的である。仮にとりが提案することがなくとも流司が自ら提案し、“倒す”ではなく“当てる”ことを重きに置いた決闘を行うように仕向ける算段であったのだ。

で、あつたからこそだ。

自分の理想の展開を辿った結末に流司は勝利の確信を得ていた。

そう、だからこそ

「これが盟友の能力かあ。確かに厄介だ。知らなかったら、一撃貰っていたよ」

無傷で姿を表したにとりに流司は驚きを隠せず言葉を失ってしまった。
っていた。

「驚いているようだね。何故避けられたかって？盟友の推測通り、私には今のスペルカードを初見で避けることができるほどの技量はないよ」

流司の能力を使用している弾幕が厄介なものであったとしても技量が低いものであればかわすことができないうことはない。だが、にとりの技量はそこまでのものではないと流司は考えており、にとりの告白もまたそれを裏付けるものであった。にもかかわらず、にとりは無傷であった。

「でも、だ。盟友の能力がどのようなものであるか知っていればそれは奇襲にはなりえない。奇をてらうという性質上、警戒を持たれていてはその効果は半減どころでは済まないといえるんだよ、『神代流司』？」

「まさか!？」

名乗ってもいないフルネームをとりが口にしたことで流司はにとりの言いたいことがよく理解できてしまった。

「そのまさかさ。『神代流司』、盟友のことはよく文から聞いているよ。なんてつたつてあんたの家の家具を作っているのは私だからね」

「それは一本とられたな。初めから俺を騙していたのか？」

そう答えは至極単純なもの。

にとりが流司のことを能力を含めて知っていたことであった。

「いや、気付いたのは勝負が始まってから、詳しくいえばスペルカードを宣言したところ。“逆”と言ったことにピンときたのさ」

スペルカードは自身の力の具現とも呼べるものである。

そのため、名から能力や種族を判断することができないということはない。

にとりは流司のスペルカードの“逆上”という部分で流司の正体を見抜いたのである。

「やられたな……」

流司は歯を食いしばるようにして口にする。

実際にスペルカードの宣言によってその性質を見抜かれてしまうことを流司が考えいかなかったわけではないが、ここまで完璧にかわされることになるとは思ってもいかなかったのだ。

ここに流司の計算は完全に瓦解してしまった。

「さて、今度はこちらの番だよ。河童『お化けキューカンバー』」
顔をしかめている流司に無数の光線とそして

「ミサイルッ!？」

思いもしなかった近代兵器が襲いかかる。

「この前、花火大会があっただろう？私も河童の技術の粋を集めて花火作ろうとしたんだけど、実際に披露するのは弾幕だというじゃないか。だから、こうしてスペルカードとして応用したってわけさ」

確かに流司自身もその時は河童がミサイルのようなものを作ってしまうかもしれないと一瞬考えたが、その成果を身を持って経験することになるとは思ってもいない。

光線の間を抜けながら無骨な近代兵器も流司は紙一重で避けていく。

スペルカードであり、弾幕として利用しているからにはある程度

の安全は保証されているということとは流司も理解していた。

それでもミサイルに対して生身で対峙しているということは漠然な恐怖を流司に与える。

流司が今もなお避け続けることができているのは経験がその身体を反射的に動かしているからに過ぎなかった。

「流石に回避には自信があると言っただけあるね。この程度じゃ意味はないか。なら」

にとりは流司の動きをしばらく観察するとこれ以上は無駄なことだと理解したのか、スペルカードを自ら中断する。

そして

「本気でいかないとね。河童『スピン・ザ・セファリックプレート』」

一瞬にして周囲を包み込んでいた空気が変わったことを流司は肌で感じた。

これかれにとりが放つスペルカードは正真正銘にとりが現在有している最強のスペルカードあるということ流司は理解する。

生じたのは三つの巨大な円。

それらは細かな動きをしながら広がり流司へと襲いかかる。

その上に川の流れのような光弾の集まりがにとりから発せられる。

光の輪だけならば良かった。

光の群れだけならば良かった。

しかし、この二つが組み合わせることで各段に難易度が引き上げられる。

にとりが動く為に流司広がっていく光の輪をかわしながら、密集した光弾の中をかくくぐることも強いられる。流石の流司であってもこのスペルカードを掠ることすらなく避けていくということは

不可能なことであった。

「悪いけど。やっぱりここから先に行かせるわけにはいかないんだ。巫女のことなら天狗たちが上手いことやってくれるはずさ。ここで引き下がってくれよ」

にとりは流司がかわしきることはできないという絶対の自信から流司を諭すように口を開いた。

「確かにな。なんだかんだ上手い具合に解決するだろうということ
は俺もわかっているさ」

流司自身、霊夢に追いつくことができるに越したことはないと考えていたが、仮に追いつくことができなくとも結局話がまとまらず更なる混乱を呼ぶことになるとは思ってもいなかった。

そのようなことになれば幻想郷の賢者が黙っていないということを知っていたからだ。

「なら」

「でもな。だからといって、はいそうですかと帰るのも癪なんだよ」

流司が霊夢のことを追いかけているのには自身の実力を確かめるという意味もあった。

自衛という意味では及第点を得ている流司であったが、それが異変解決というものに関わっていく際に自分がどれだけのことをすることができなのか確認するということに関して今回の一件は絶好のチャンスであったのである。

「後は俺にも少しは維持というものがあるのさ。ここで素直に帰っ

てしまうなんてかつこ悪いじゃないか？」

「盟友は自分の力を分かった上で無謀な真似はしないと思っていただけだな。そういうことなら仕方がない、被弾して歴とした“敗北”を認めて貰うしかないね」

にとりがそう口にした瞬間、弾幕の密度と速度が上がる。確保していた余力を注ぎ込み全力での本気となった証拠であった。

「目には目を、歯には歯を。はあ、全く、こんなところでは使ってもりじゃなかったんだが、しょうがない。これも俺がまだ未熟だったことだな」

流司はまるで弾幕を迎え撃つかのような形で動きを止める。取り出したのは使用していない残りのスペルカード。

「全力には全力で答えなくてはな。！！」

呟くように流司はスペルカードを宣言するのだった。

「いやあ、まさか盟友にそんな隠し玉があるなんて。参ったよ」

そう笑うにとりの姿はボロボロで激戦を経たような姿であった。

無論、流司との対決は激戦と呼ぶことのできるものであったが、被弾した時点で勝敗が決するのであり、そのような状態になることはないはずである。

「これで俺が先に進むことを認めてくれるな」

「まあ、約束だしね。それにこれだけのものを見せつけられれば大丈夫と言っしかないよ。でも、どうして初めから使わなかったんだい？」

そう、今のにとりの状態はたった一枚のスペルカードによって引き起こされたものだった。

つまりは流司のスペルカードはにとりの誇る最強のスペルカードを打ち倒した上でにとりにそれだけの損害を与えたのだ。

「これは霊力、体力共に結構消費してしまうんでな。なるべく、使いたくはないんだ。まあ、あと一度ぐらいは使えるが」

「だったらいいか。もしも使えないようならやっぱり先に行くことは認められなかったけど」

「それは約束が違うんじゃないか？」

「約束を反故しても盟友を死なせるわけにはいかないからね」

流司が文句を言うように口を開いた言葉にもにとりは素知らぬ顔で答える。

「大丈夫だって分かったからには約束は守るさ。着いてきて、本当の”妖怪の山に案内するよ」

「ああ、頼む」

流司はにとりの後に続くようにして川を遡る。行く手には大き

な水の壁が轟音を立てて待ち構えているのであった。

頁百六十六、『ああ、草臥龍の素気と河童』（後書き）

タイトルに無理がある（笑）

まあ、勝利。

じゃないと先進めないしねえ。

次はいよいよ四面です。

頁百六十七、『foul of fowl』黒汚れた鳥（前書き）

『要塞の山』

く川を遡る流司の前に立ち塞がったのは水壁。

天をも隠す水雲はその行く手を惑わせる。

されども、登る流司に洗礼の魔の手が伸びるく

「……………」

流司が驚きで言葉を失った回数は数知れず。

だが、それらは正しく驚きという意味でのものではなかった。

詳しく言い表すのだとすれば、“自分の考えとは大きく異なる”
という落差の激しさから言葉を失ってしまったのだ。

けれども、今回の驚きは今までのものとは多少毛色の違うものであった。落差が激しいという意味ではある意味正しいものではある。何故ならば流司の目の前に広がる光景は正しく落差の激しいものであったからだ。

ドゴオオオオー……！！！！

もはや、その音はそう水の落ちる音ではない。爆発音にも似た

轟音が流司の骨の髄まで響き渡る。

そこにあるのは滝であった。

しかし、それを本当に滝と称していいものなのかは分からない。

むしろ、水でできた壁。もしくは水で造られた高層ビルと言った方が相応しいだろう。

圧巻。

その一言に尽きる。

流司の目の前にあるはそのような滝であった。

「ここから先が本当の意味で妖怪の山と言える場所だよ」

滝行や滝登りなどという言葉が通じそうもない滝を指し示しにと
りが言う。

「本当のとうと？」

「そのままの意味さ。確かに今までも妖怪の山であることには変わりはないよ。でも、本当の意味で妖怪の山という場所を知るのはここから先ということだよ」

「これを登るのか？先が霞んでいるのだが……？」

滝壺から弾き返し跳ばされている雨のような水飛沫に全身を濡らしながら流司は滝の頂上を捉えようと空を見上げるが、舞う飛沫の所為か頂上は霞み流司の目では捉えることが全くできなかった。

「これが最も分かりやすく妖怪の山の頂上を目指す方法だからね。この滝を越えれば、七、八合目ほどになるはずさ」

にとりが流司に告げたようにこの滝を越えていく方法が最も簡単に妖怪の山の登頂をする方法であった。

「“外”にはこれほどの滝はないだろう？驚いたかい？」

「いや、俺は見たことがないが、“外”にはこれ以上の滝があるよ」

「それは驚きだね。この滝よりも大きなものがあるなんて」

「とにもかくにもここを登らないことにはどうしようもないんだろ？」

感心し溜め息を漏らすにとりに流司は話を仕切り直すかのように尋ねる。

「そつさ。ここを登り切つてしまえば目的の神社はすぐそこだよ」

「神社？」

流司は初めて耳にした単語に首を傾げる。

「おや、知らなかったのかい？」

「ああ、俺は霊夢が山の神のもとを目指しているとしか聞いてないからな」

「それならあつているよ。巫女が目指しているのは幻想郷に妖怪の山に新たに神社ごとやってきた神のことだろうからね」

「神社ごとつて、また豪快な神様もいたものだな」

流司は目を丸くしてにとりの言葉に驚いてみせる。

幻想入り自体は“外”の世界で忘れ去られてしまえば、どのような存在にでも起こり得ることである。

だが、神社のような建物が忘れ去られるなどということはそうあることではなく、おそらくは神為的に行われたことであると推測することは容易なことであった。

「あと、おまけで湖も幻想入りしているよ」

「本当に豪快だな……」

「まあ、会ってみれば分かると思うよ。少し強引なところはあるみたいだけど悪い神ではなさそうだからね。天狗たちは警戒しているのだけだ」

流司の呟きを肯定するかののような口調でにとりは補足をするように口を開いた。

「じゃあ、早いこと登ってしまふことにするか」

「そうだね。流石の巫女もここから先はそれなりに進むのに時間がかかるだろうから運が良ければこの滝で追いつけるかもしれないよ。だが、何度も言っているようにここから先は本当に気をつけて進んでくれよ？」

「よく心得ておく」

そう言い流司は水面を蹴って滝を遡り始める。まだ見えるその頂上を目指して。

「クッ、にとりの言っていた言葉の意味がよく分かるッ!!」

悪態をつきながら流司は身を翻し続け密度の濃い弾幕の中を翔け抜ける。

襲いかかってくる妖精の数はこれまでの比ではなく、“真の”妖怪の山という言葉の意味を

流司はその身体をもってよく理解していた。

「これでようやく中腹といったところか。全くやっつけられないな」

細かな星のような弾幕を放っていた妖精を撃ち落とすと流司は呟

く。

その視線の先にはようやく捉えることができる滝の始まりがある。されども、そこへ至るまでには今まで流司が登ってきた距離と同じ程度の距離を登らなくてはならない。

登っていくほどに妖精などの攻勢が増していくのであるから、流司の眩きも仕方がないだろう。　　霊夢の姿は未だに流司の視界に捉えることはできていなかった。

つまりは霊夢は既にこの滝を越えてしまっているということにはかならない。

「ただ、追いかけるだけなのにここまで大変だとはな」

流司の顔にも疲労の色が見え始めている。

困憊と呼べるほどではないが、確実に妖精の猛攻は流司の体力を削ぎ落としていく。

徐々に流司の動きは精細を欠いていき、上昇をする速度も緩やかな下降線を描く。

それを仕方がないという言葉で片付けてもいいかは難しいだろう。確かに生半端な抵抗で済まされるはずもないものであることは間違いないが、それにも増して抵抗は激しいものであった。

それは新たな神の来訪により妖怪の山全体が警戒に包まれ、妖精もまたその雰囲気に触発されてしまっていたからである。

あらゆるものの立ち入りを拒む水の絶壁は自然の要塞となりて流司の前に立ち憚り続ける。

瞬間、流司の双眼は滝の中から飛び出す影を捉える。

キンツ！！！！

次の刹那に鳴り響いていたのは硬い金属同士がぶつかり合う音であった。

流司に向かい振り下ろされていたのは白銀の刃。

その一閃は容易いまでに流司の命を刈り取っていたであろう。対して、ギシギシと歪みを立てる刃を受け止め、文字通り流司の首を守っていたのは一本の鉄の棒。

よく見てみればその鉄の棒は鉄板が幾重にも重なり合って作り出されているものであるということが分かる。

そうそれは一柄の鉄扇であった。

流司は振り下ろさせる凶刃をかわすことができないと瞬時に判断し、腰に佩いていた鉄扇を引き抜いて刃を受け止めたのだ。

「チツ」

舌を鳴らして刃の主は滝を背にするようにして大きく飛び退いた。

「今のは警告だ、人間。即刻、ここから立ち去りなさい」

「警告というわりには必殺の一撃のように思えたがな」

空中では踏ん張りがきかないがために一時バランスを崩してしまっていた流司であったが、体勢を立て直すと皮肉を言うように答える。

「異なこと。妖怪の山に無断で立ち入った時点で命になど保証があるわけもなし。本気で狙わなかったのです。十分に警告であると言えます」

流司の言葉にも一切動じる様子を見せず刃の主である少女は答える。

「確かにな。一つ聞きたい。ここを博麗の巫女が通って行ったことに間違いはないか？」

「 私がそれに答える義務はないッ！」

閃。

白刃が再び煌めく。

二度、三度と振るわれるそれを流司は受け止めながら考える。

「（靈夢はここを通った、それは間違いない。一瞬、間があったことが何よりの裏付けだ）」

少女が即答ではなく、間を空けたということは流司の言葉に覚えが合ったからである。

仮に通っていないのだとすれば、正直に答えてしまえば流司の行動は頓挫してしまうのだから。

少女の回答は逆に流司が是が非でもこの滝を越えて行かねばならないという思いを植え付けるものであった。

「（流石に実力は高い。けど、剣技では妖夢の方が上だ）」

極めて冷静に流司は剣を振るう少女の実力を図っていく。

少女が実力を有していることは流司もその気迫から分かっていた。けれども、冷静に実力を見定めた場合、それが妖夢よりも劣っているだろうという思いも流司の中にはあった。

「（惜しむらくは俺の得物がこれだということか）」

剣閃を受け止め、弾幕を弾いているのは鉄扇であった。

鉄扇というものは防ぐことに關しては優れている武器であり、無手であるよりはあった方が当然良い。

至近距離に近付けば攻撃手段としても非常に有効だともいえる。

しかし、武器というものは基本的にリーチでその全てが決まる。極論であるが相手の攻撃が届かぬ距離から一方的に攻撃をするこ
とができれば負けることはない。

無手よりも短剣。

短剣よりも長剣。

長剣よりも槍。

槍よりも弓。

弓よりも銃。

という具合にリーチの差は極論ではあるが、武器の優劣を決めるに当たつての真理であつた。
故に鉄扇と剣、そこには技巧では度し難い元来からの差があるのだ。

流司と少女は巧みな攻防を繰り返しながらも滝を登っていく。

それは滝の登頂を目指す流司にとつては好都合なことである。

けれども、それが必ずしも流司にのみ好

都合なことであるとは限らない。

そう

「あやややや。霊夢さんの次は貴方ですか、流司さん。全く私の役目は報道だというのに……」

「文か？」

「はい、清く正しくがモットーの射命丸文です」

目前まで迫つた滝の終わりから舞い降りるように姿を現したのは
烏天狗、『射命丸文』であつた。

「今日は取材に来たという訳じゃないだろう？」

剣を携えた少女に並び立つように動きを止めた文に流司は訊く。

「そうですね。『龍神の末裔たる神官、妖怪の山を襲撃か!?』などというタイトルでの一面にも誘われるのですが……」

「文様」

「はいはい。分かっていますよ。と言うわけでした。残念ながらここをお通しするわけにはいかないのです」

少女の冷たい視線に負けるようにして文は慇懃そんな態度を見せながらも断固として拒否の姿勢を見せる。

「霊夢は通したのか?」

「それを言われてしまうと耳が痛い。しかし、だからこそとも怪の山の一天狗としてこれ以上余所者に好き勝手させるわけにはいかないのですよ」

文は扇を、少女は取材剣を構えて流司に対峙する。

二対一。

逆の立場であるのであればまだしも、これでは流司に勝ち目などあるはずもなかった。

「納得がいかないというのであれば、私が少し本気で相手をしてあげましょう」

「それなら私も混ぜてもらいたいぜ!」

「邪魔をしないのであれば、私はどちらでも構わないわ」

文らと流司の間を極光が貫く。

「あややや、魔理沙さんに咲夜さんですか。全くお呼びではないと
いうのに次々と……」

「魔理沙に咲夜……？」

流司が視線を落とせばそこには滝の下方から迫り来る二つの人影
があるのだった。

頁百六十七、『foul of fowl』黒汚れた鳥（後書き）

実は仲が悪いかもしれない。文と椋。

そして、魔理沙と咲夜の合流。

やはり、主人公組の速度は異常です。

「魔理沙追いかけてきたのか？それに咲夜も？」

「当然だぜ。こんなに面白そうなこと見逃すわけないぜ」

「私は流司に届け物があっただけよ。置いていっても良かったんだけど、魔理沙がいるからにはどうしても不安が残ってしまったから」

流司に並び止まる魔理沙と咲夜が口々に言う。

魔理沙の手には毎度のミニ八卦炉が、咲夜の手には一冊の本が握られている。

「追いかけているはずなのに追いつかれるとか……」

「流司が遅いだけだぜ」

「あんな雑魚たちに手こずるだなんてね」

「待て。今、“たち”って言ったか？」

追いかけてきた魔理沙たちの余りの速度に俯いていた流司は咲夜の聞き捨てならない言葉に勢いよく顔を上げる。

「ええ、自称神の美味しそうな匂いの奴とか」

「自称神の葉っぱとか」

「神とは思えない不気味な奴もいたわね」

「ああ、河童も倒したな。ことわざ通り流れて行ったぜ」

「……………」

魔理沙と咲夜のあげた特徴の全てに心当たりがあった流司は表情をひきつらせ、頬をピクピクと震えさせる。

「どうしたんだ、流司？」

「そうね、信じられない言葉を聞いたみたいな顔をして」

「信じられないも何も神様撃ち落としておいて何言っているんだよ……………」

流司は声を張り上げるように言う。

「私は無教徒だぜ」

「信じるのはお嬢様だけでいいわ」

「ああ、魔理沙たちに訴えた俺が馬鹿だったよ……！」

さらりと言ってしまう魔理沙と咲夜に流司は首を振りながら声を荒げる。

「何を怒っているんだぜ？」

「本当ね」

そんな様子を魔理沙と咲夜は訳が分からないとでもいうようにして首を傾げてしまっている。

「ええ〜ごほん。私としてはそうやって時間を潰し合ってくれるのならそれに越したことはないのですが、いかがしますかね？」

「しまった！！」

「流司は先に行っていていいぜ。私は別に霊夢に追いつく追いつかないなんてどうでもいいからな」

「そうね。流司が引き返すというならここで私も引き返すところなのだけど、そうではないというなら後から追いかけるから早く進んでしまおうといいわ」

文の言葉に表情を一転させた流司だが、魔理沙と咲夜が流司の前に出るようにして文らと対峙する。

「あやや、これは少々マズいですね」

「文様が余計なことを言うからいけないのですよ」

文は乗り出してきた魔理沙たちのことを見て困ったように声を漏らす。

剣を持った少女はそんな文を非難するように冷たい視線を向ける。

「なら、頼む！！」

流司は魔理沙と咲夜に声をかけると即座に行動に移り、文と少女の間を飛び抜け滝の頂上へと至り姿を消す。

「で、どちらを相手にするのかしら」

「私は文の方を相手にするぜ。烏天狗の本気がどんなものか気になるからな」

「なら、私はあの犬を相手にすればいいのね」

咲夜が魔理沙に声をかけると魔理沙は不適な笑みを浮かべて文へと飛び向かっていく。

咲夜は瀟洒な態度を保ちながら少女と文を引き離すようにしながら少女に向かっていくのだった。

「犬とは聞き捨てなりませんね」

「あら、違った？どう見ても猫には見えないのだけど？」

「私は狼ですッ！！」

「きゃんきゃん吠えるのだから同じじゃない」

少女の抗議に咲夜は更なる挑発をもって答える。

「貴女だって吸血鬼に尻尾を振っているじゃないですか？」

「私のは忠誠を誓っているというのよ。無差別に尾を振る貴女とは同じにしないでもらえる？」

少女の皮肉も柳に風で全く咲夜は気にした様子を見せない。

「私の白狼天狗としての誇りを汚すつもりですか？」

「貴女の誇りなどお嬢様の前では塵にすらならないわ。私はさつさと流司を追いかけなくてはならないの。お喋りをしたいのなら滝にでも向かって話しかければいいわ。大層な反応を示してくれるはずだわ。尤も、意味をなしている音とは限らないけれどね」

「あくまでも通るといいますか？ならば、白狼の誇りにかけて本気でお相手しましょうー！」

「本気でも何でもいいわ。早くかかってきなさい」

それぞれの周囲に無数の光が作り出される。

一斉に掃射される光の群れは互いにぶつかり合うことで爆音を鳴らしながら相殺されていく。

消える度に光は生まれ、生まれる度に光は消えていく。

永遠の刹那を繰り返すかのように瞬く輝き。

その永久を食い止めるものは存在していなかった。

「幻象『ルナクロック』」

咲夜の眩きと共に空に埋め尽くさんばかりのナイフが無作為に出現する。

一斉に放たれたそれらを白狼天狗の少女『犬走椀』は剣を振るい弾き飛ばしながら咲夜の懐へ潜り込むための最適路を文字通り切り開いていく。

「狗符『獵師への返弾』」

椛がスペルカードを発動されると咲夜の背後に弾丸を模した弾幕が無数に形成される。

そしてそれらは椛を狙うように間の咲夜を巻き込むような形で放たれる。

だが、それだけでは終わることはない。
ダンツ。

火縄銃から銃弾を放ったかのような轟きが空気を切り裂けば、椛から矢のひじりのような三角形に配置された弾幕が咲夜へと向かう。あたかもそれは椛自身を狙っていた銃弾を返還しているようであった。背後からの弾幕を次に放たれる前方からの弾幕に備えながら回避していかなくてはならないため、椛のスペルカードは比較的難易度が高いものであるといえた。

しかし、それを避ける咲夜もただものではない。

幾度となく対決を重ねたことのある咲夜はその経験を活かし弾幕を容易に避けてみせる。

互いにスペルカードを使って見せながらも有効打を与えるまでには至らない一進一退の攻防が繰り返られる。

咲夜と椛の力量はその拮抗した状況から全く同じものであるかもしれない。

むしろ、果敢に攻めに入っている椛の方が戦いを徐々に優位に運んでいっていた。

端から見れば、それは椛の猛攻に咲夜が押し負けているようにしか見えず、咲夜の力量が椛に劣っているようにしか見えないであろう。

だが。

本当にそうであるのか？

否、そうではない。

一歩後退するように退いた咲夜に追撃を加えようとした椛の目に咲夜が口元を吊り上げた様子が映り込む。

ゾクッ。

椛はその咲夜の笑みに本能的な恐怖を感じ、咄嗟に距離を取ろうとする。

けれども、時既に遅し

「銀符『パーフェクトメイド』」

白銀の凍てつくような鋭さを持った花が開花する。

至近距離から浴びせられた数多のナイフに椛には為す術もなく打たれる。

剣で弾こうにも弾いた隙に他のナイフに晒されることになるので、ただ防ぐことしかできない。

形勢は一瞬一手で完全に逆転した。

いや、決まったのだ。

「時符『トンネルエフェクト』」

銀の雨を耐え抜いた椛の周囲を包み込むようにナイフが出現する。

チエックメイト。

今の椛にはそれを捌ききるだけの余裕がないことは明白であった。

「私相手に時間を稼ごうなどということが無駄なのよ。喻えそれが妖怪や神であろうともね」

手にしたナイフを椛の眉間に突きつけるようにして咲夜は言う。

その姿は誇りある紅魔館の完全で瀟洒なメイドそのものであった。

どうしてこうなった!!? ?

本当は椀大活躍の予定だったのに……

これじゃあ、まさしく嘸ませ狗。

つか、狗符って時点で狗と自称しているという。犬じゃないからいいのか。

椀のスペルは木の葉天狗の逸話から。

名前の通りの弾幕です。

いや、明日のコミケは。

どうせ、委託があるし。明後日から少し忙しいから書きためたいしね。

東方ファンとしては何ともいえないけど……

「あやや、やはり椛では咲夜さんの相手は少し荷が重かったようですね」

決着のついた咲夜と椛の様子を視界に挟んだ文が呟いた。

基本的に妖怪に人間が勝つことはポテンシャルから難しい。

しかし、咲夜ほどの能力がそれを覆すことなど容易であり、椛には分が悪いだろうということも考えていたことではあった。

「よかつたのか？」

「ええ、そもそも椛の役目は哨戒です。特段、咎められるということはないでしょう」

「そうじゃないぜ」

魔理沙の言葉を椛が咲夜に敗北したこととして捉えた文であったが、魔理沙の意図は別のものであった。

「流司を行かせても良かったということだぜ。幻想郷最速を謳うお前がいくら私を相手にしていたからといって流司を捕まえられるなんて有り得ないぜ」

癪 فقطと付け足しながらも魔理沙は真剣な表情で言う。

こと速度に関して自分が文に勝るということはなく、文がその気であれば魔理沙を振り切つて流司を捕らえることなど造作もないことであつたと魔理沙はよく理解していたのだ。

「気付いていましたか」

「バレバレだぜ」

つまりは文には初めから流司を食い止めておくつもりなどなかった。

「実を言えば、最初は本当に通すつもりはなかったんですよ。しかし、よく考えてみたら今回の件に関しては霊夢さん以上に流司さんは適役である可能性が高かったということに気付きました」

「ん、どういうことだ？」

「魔理沙さんが今回のことをどこまで御存知なのかは分かりませんが、今回のことは妖怪の山に神社が幻想入りしたことがそもそもの原因。だとすれば、“外”の世界での神社に馴染みの深い流司さんなら何か分かるかもしれません。幸いにも神だけではなく、その巫女も共に幻想入りしていることですし」

「まあ、霊夢じゃ、とりあえず殴ってから考えるとか言いそうだな」

魔理沙は文の説明に得心がいったと頷きを零す。

霊夢がどのような様子で妖怪の山に向かっていたか魔理沙は実際に目にしていたので、文の言わんとしていることにも察することができるのである。

「霊夢さんに任せれば恐らくこのことが解決するだろうことは分かっています。ですが、地面が固まるのならできるだけ雨は少ない方が良いでしょうから」

「流司なら進んで争いごとに発展することはないだろうからな」

例えるならば霊夢は土砂降りで、流司は霧雨であると言えるだろう。

最終的に問題の解決に至るといのであれば、波風のあまり立つことのない流司に一任した方が妖怪の山の天狗にとっては良いことであるといえたのだった。

「ですが、一応は拒むような体裁を見せておかないといけませんので。魔理沙さんたちがいらしてくれたのは都合が良かったのですよ」

いくら、流司を向かわせた方が都合が良いことであっても、ただの人間をむざむざ通してしまうことは妖怪の山の沽券に関わり、侵入を食い止めるように言われていた文の名にも関わっていた。

わざと負けるにしても一度霊夢を同じ方法をもって通してしまっており、霊夢ならともかく流司に負けるということは文が冷静である限り有り得ない。

文にしてみれば、二対二を演出できる魔理沙と咲夜の登場は実に都合の良いことであったのだ。

「色々大変そうだぜ」

「分かってくれますか。全く、私はただの報道天狗だというのにとどめてこんな苦勞をしなければならないのでしょうか」

「何も考えずに通してしまえば楽だぜ」

「いえ、それとこれは別です。そう、魔理沙さんであっても」

文は目を細めて表情を引き締める。

扇を胸元に構える姿には隙がなく、威風堂々たる様にすら見える。

「手加減大半、本気少々で相手をしてあげますので通りたければ私を倒していつてください。連戦なので疲れもあるはずですから」

「風神『風神木の葉隠れ』」

口になっている言葉とは真逆に一切疲れを感じさせない素振りではスペルカードを発動させる。

どこからともなく風に運ばれてきた木の葉によって姿を眩ませる文。

だが、その木の葉はすぐさま魔理沙を襲う凶器へと姿を変える。

「どこが疲れているんだ!!」

悪態をつきながら魔理沙は箒を駆るもその顔は愉悦に歪んでいる。魔理沙自身が口にしていたように魔理沙本人は博麗神社が喧嘩を売られるような形になったことも、霊夢が妖怪の山に乗り込んだことも、流司がそれを追いかけていったこともどうでも良いことであった。

事実、ただ面白そうであるという一点から妖怪の山にやってきていた。

それ故に文が行く手を遮っても思うところはなく、流司を先に進ませたことも戦いの邪魔になることを嫌ったがためである。

魔理沙に戦闘狂の気があるかと問われればそのようなことはない。だが、己の魔法を天狗という妖怪でも古参の相手に使うことができるとなると自然と笑みが零れる。

その上、文は少し本気を出すと口にしていた。幻想郷最速を謳う、『射命丸文』の本気だ。嫌でも興味を引くというものだろう。

「光符『アースライトレイ』」

文の背後に回り込んだ陣と魔理沙自身の手元からレーザーと星形の弾幕が断続的に放たれる。

レーザーによって動きが制限される中、流星群を避けていかなければならない。並みの力量であれば苦勞すること間違いないだろう。

しかし、文にしてみれば片手間でも避けることができる程度であった。

隙間があればそこに至ることなど文には容易であり、一応がスペルカードであるからには避けきれないということはない。

驚異的な速度でありながらもその動きは慣性に引きずられてはならず、まさしく空を飛ぶものとしての本分を知らしめていた。

「ほらほら、そのような動きでは当たってしまいますよ?」

対して魔理沙の動きはそれほど制動のとれているものとは言いがたい。

速度でいえば無論、文には劣るものの遅いと呼べるようなものではない。

だが反面、細かな動きができるようなものではなかった。

それは魔理沙が箒を媒介として空を飛んでいることによるもの大きい。

魔理沙の箒は単純に空を飛ぶだけの出力を生み出すものであって、その動きに関しては魔理沙自身の重心移動で賄っている。

それ故、魔理沙の箒を駆るための卓越した技術をもってしても文のように慣性から抜け出した飛行をするのは難しいものであった。

速度をだせばだすほど、慣性に引きずられてしまう動きでは文のように自在に動くということはなかなか難しいことなのである。

そして、文がその隙を見逃すはずもまたなかった。

「岐符『天の八衢』」

更に魔理沙の動きを制限していくように四方を囲む形で弾幕が作り出される。

それらの弾幕はまるで支えを奪われ自由落下をするように魔理沙へと迫る。

その動きは全くのランダムで文の意図はかけらも含まれてはいない。
故に避けづらい。

意図がないということは確かな避け方がないということであり、無作為に迫ってくるものを瞬時に抜け道を見定めて行動しなければならぬのだ。

細かな動きを苦手としている魔理沙にどこまで避けることができるといえるだろうか。

困難であるということは間違いない。

それでもできないということはないだろう。

けれども、ただ避けるだけでよいのか。そのような思いが魔理沙の心うちに芽生える。

その時であった。

魔理沙の脳裏に天啓が舞い降りたのは。

再び魔理沙を取り囲むように形成し始めた弾幕に対して、魔理沙は文と向かい合うような形で向きを変える。

魔理沙は一度目の弾幕の展開で文の正面に道があることには気付いていた。

しかし、そこを進むことは袋小路に自分からわざわざ突っ込んでいくようなことであり、魔理沙はその手段を選んではいなかったのだ。

それでありながらも魔理沙は唯一残された道を辿るように突き進む。

文は自暴自棄にでも魔理沙がなつたかと訝しみながらも迎撃体勢をとる。

飛んで火に入る虫のごとく魔理沙は文へと向かっているのだ。迎撃をしないなどという選択肢はなかっただろう。けれども

「恋符『マスタースパーク』」

それが間違いであった。

「なっ!？」

慌ててかわそうとも既に手遅れであった。

魔理沙を八方塞がりのように包み込む形で作り出されていた弾幕であるが、逆を言えば文にもほとんど逃げ道がないのであった。

弾幕が無作為に動き出す前であれば、その逃げ道は魔理沙同様に文自身の前方にしか存在してはいない。

そこを一切の衰えを見せることなく突き進む大火力の光線。最速を誇れども逃げ道がなければ避けようもない。

抵抗などという言葉ごと飲み込むようにして文は極光にその身を晒すしかない。

文を飲み込んだ輝きはそれだけで止まることはなく、天高く伸び立ち込んでいた雲を吹き飛ばし秋晴れた空を覗かせるのだった。

ちやっちやっ済ませます。

別に重要でもないでしょうし。

しっかり考えている文ねえさん。ステキです。

いよいよ、舞台は五面へ。

ただ、明日、明後日がすこーし忙しい。

更新できるといいな。

頁百七十、『少女が見た夢現の幻風景』（前書き）

『靈山に風が吹く』

く 魔理沙と咲夜に助けられ流司は滝を越える。

眼下の雲海から顔を覗かせるは石造りの階段。

戦闘音を追いかけて追いついた先で流司は予想外光景を目にする。

頁百七十、『少女が見た夢現の幻風景』

「うおっ、派手に戦っているなあ……」

背後に立ち上った極光に流司は驚きながら呟いた。

その光を放ったものが誰であったかは流司には考えるまでもなく理解できていたことであつたのでそれ以上の感想を抱くことはなかつた。

「あれは階段、か……」

極光によつて雲が吹き飛ばされたことが影響してか、流司の足元に広がっていた雲が晴れその間から石造りの階段が姿を現した。

流司は高度を落としてとんと軽い音を立てて階段のに降り立った。

石造りの階段は年期を感じさせるように角が丸く削られており、長年風雨に晒され、多くの参拝客がこの先にある神社に参拝をしに向かつていたのだということが一目で分かるものであつた。

「こんな神社も幻想入りしてしまったのか……」

流司は寂しさを含ませた声色で呟いた。

参道の一つに過ぎない階段からも歴史の深さを感じさせる神社もが、幻想入りしてしまったという事実は流司に大きなショックを与えることであつた。

幻想入りをしたということはかつては参拝客で溢れかえっていたであろうこの先の神社の神も今では人々の記憶から忘れ去られてしまつているということであるからだ。

“外”の神職の家系の末裔である流司が寂しさを感じてしまうのも仕方がないことであつた。

いくら今は幻想郷の住人であるとはいっても、その心全てが幻想郷に染まるということはない。

幻想郷に新たな住人、住神が増えることは純粹に考えれば、流司にとつて嬉しさを感じることであった。

しかし流司にしてみれば、ことはそこまで単純に考えることのできることはなかった。

幻想郷に神が訪れるということとは着々と“外”の世界での信仰が薄れてしまっている証明でもあるのだから。

「今は落ち込んでいる場合ではないよな」

流司は自身を奮い立たせるように声をあげた。

ここまで様々な人の助けを受けて進んできた流司である。

これで結果が“霊夢を止めることはできませんでした”では申し訳がなさすぎて下山などできるはずもない。

今、流司に求められていることは感傷に浸っていることではなく、先行している霊夢を止めることの一点に尽きるのである。

「早くしないと……微かに戦闘音が上から聞こえてきてるし、手遅れでないといけど……」

霊夢の姿を捉えることはまだ流司にはできていなかったが、階段の上方からは風に乗るようにして囁かな戦闘音が聞こえてきていた。これが聞こえた通りの激しさの戦闘であればいいが、そのようなことはないことは流司も重々承知であった。

故に流司が階段を駆け上がって行く足にも力がこもる。能力すらも利用した速度で走る流司は文字通り風になったかのように階段をあがっていくのであった。

うつすらと視界を遮るような土煙が風に乗って流司へと至る。

流司が足を進めるほどに耳に届く音は激しさを増す。正しくは本来の音を流司に伝えていると言えるだろう。

「あそこか!!」

遂にして流司の視界に様々な光弾に包まれるようにして空を舞う紅白の人影が映る。

それは間違いなく霊夢の姿であった。

参道である階段の途中で戦闘を繰り返していることから、少なくとも最悪の状況にまでは至ってはいないのだろう。

流司は進む速度を落としてゆっくりと様子を見定めるようにして階段を上がる。

何故、即座に流司が戦闘に介入しないのか。

一つは単純に繰り返り広げられている戦いが流司が介入するには難しいほどの苛烈なものであったからである。

もう一つは戦いが始まってしまった以上、第三者の介入によって戦いが中断されることとなっても、それは互いにしこりを残してしまふ結果となりかねないからであった。

「にしても、全く加減してないな」

弾幕の届かない安全圏から戦闘の推移を見守る流司が呟く。

幾つもの流れ弾によって階段は所々という言葉では済まされないほどに吹き飛ばされ、必要以上に年季の入った容貌を見せていた。

「相手も凄いな。霊夢に負けてない。まあ、霊夢がどこまで本気で

あるかは分からないけど……」

霊夢と激しい戦闘を続けている相手の姿を現在の流司のいる位置からは良くは見えない。

しかし、最低でも流司が階段に降り立った時点から戦闘を続けているのであって、霊夢がどれほど本気で相手をしているかは流司の知らぬところではあったものの幻想入りをしたばかりでこれほどまでにスペルカードルールでの決闘に対応できている霊夢の相手の適応力には目の見張るものがあつた。

「俺はまともに霊夢の相手ができるようになるまで一年以上かかったというのになあ……」

同じように外から来た身である流司にしてみれば、己とは異なり即座に霊夢の相手をする事ができるようになっている相手に複雑な思いを抱かざるを得ない。

己が非才であるのか、それとも相手が鬼才であるのか。無論としてこれは後者である。

二年やそこらで全く霊力を使うということを知らなかった流司が空を飛び、スペルカードでの決闘を行うことができるようになっていたのも十分に異常なことだ。

ただ、霊夢の相手を現在進行形でしている相手はそれ以上に異常であつただけなのである。

「女、か？」

目を凝らし流司は霊夢の相手がどんな人物であるのかを確認する。幻想入りして間もないのにこれだけの死闘を繰り返している存在のことが純粹に気になったからである。

「髪は長いな。服からしてこの先の神社の巫女ということか？」

あくまでも遠目で見ていることから細かな部分までは流司には確認できない。

それでも臆気な輪郭からその女性が恐らくは巫女であろうとあたりをつける。

「青い巫女装束か、珍しいな……」

巫女装束は基本的に赤を基調としているものがほとんどである。

これは赤ないしは紅色が吉祥を表すことに由来している。

一時期、赤が火を連想することから避けられたり、凶事の際は別の色を使うこともあったが、原則として差違があるのは赤の濃淡程度に留まっており、全く異なる色を使うことはまず有り得ないことであった。

「まるで……ッ！？いやいや、有り得ないだろ！！」

戦いを観察しているうちに流司は一つの可能性に思いあたる。

だが、激しく首を左右に振ってその考えを霧散させようとしてしまっ

余りにも荒唐無稽で馬鹿げている考えであったからだ。

けれども、一度浮かんでしまった閃きがそう簡単に消えるはずもなく、むしろ周囲の状況がその考えを裏付けてしまっ

「取り敢えずは……」

流司はその場から一步足を踏み出した。

予測や推定はあくまでも仮定でしかなく確定ではない。

であれば、実際に己の眼で捉え確定した事実にしてしまえば、悩む必要は一切なくなる。

と、ぐだぐだ流司は脳裏で考えを巡らせるも、結局のところ正体が知りたかったというだけのことであった。

一步、また一步と足を進める。

視認できる距離まで近付けばいいとはいえ、戦闘が行われている場所に歩み寄っていくのであるからして流司が慎重になるのは当然のことといえた。

「冗談だろ……?」

「「えっ!?!」」

流司という第三者の眩きは不思議なことに戦闘中であった二人の少女に同じくして届く。されども、その後の行動は対照的であったといえよう。

「えっ、……どうして……?」

驚きの余りに呆気にとられ固まる少女と、

「霊符『夢想封印』」

生じた隙を見逃すことなくスペルカードを発動する霊夢。

煌ッ!!

少女が霊夢のスペルカードの発動に気付いていたかは分からない。だが、その決定的な隙を突かれた少女は回避どころか防ぐ素振りすらできずに弾幕の直撃を受ける。

「嘘っ!?!」

流石の霊夢もまさかなすがままに直撃するとは思ってもいなかったのか思わず驚きの声をあげてしまっていた。

光が治まったときそこにあったのは気を失い自由落下をする少女の姿。

いくら、スペルカードルールでの決闘が原則として殺傷がないようになっているとはいえ、二時被害までは考えてはられない。

自由落下を続ける先に広がるは石畳でできている階段。

打ち所云々の前に霊夢らが戦いを繰り広げている場所から落ちれば即死は免れない。

「馬鹿ッ!!!」

流司は咄嗟に地を駆る。

文字通りの一足飛びで少女の真下まで辿り着いた流司は落ちてくる少女をその腕かいなでしかと受け止めるのであった。

頁百七十、『少女が見た夢現の幻風景』（後書き）

ようやくとここまで。

まあ、霊夢の前で隙を見せようものなら打ち落とされます。
容赦などありません。

果たしてこれは再会したといえるのだろうか……？

頁百七十一、『優攻は儚き抵抗の末に』

「危なかった……」

しっかりと少女の暖かさが腕の中にあることを認識した流司は宗を撫で下ろすように息を吐いた。

間一髪であった。

飛び出すタイミングが刹那でも遅れていたとすれば、最悪の結末を迎えていただろう。

それほどまでにギリギリのことであったのだ。

「少しやりすぎじゃないのか？」

それ故に流司は少し不機嫌そうな声色で霊夢に声をかけた。眉間にも力が籠もっており、激怒とまではいかないものの怒りの色が見てとれる。

「ごめんなさい。まさか、無防備なままで直撃するとは思っていなかったし、それこそ気絶してしまうだなんて露にも思わなかったのよ」

流司の傍らに降りてきた霊夢が素直に頭を下げる。

霊夢も事の重大さをよく分かっていたからである。

「それでも、スペルカードはないだろう？」

「決闘の最中に隙を見せたらそれを突くのは当然のことよ。それにスペルカードといっても余程のことがない限りは気絶なんてしないことは身を持って知っているでしょ？」

「まあ、な」

霊夢の言っていることは正論であり事実であった。

霊夢と少女は決闘をしていたのだから、隙を見せてしまえばそこを突かれるのは当然のことである。

また、霊夢の使用したスペルカードは散々流司がその身に受けたスペルカードであり、気絶してしまうほどの威力はないだろうということも流司は理解していた。

「余程気が抜けてしまわない限り気絶なんのできるはずもないわ。つまりは流司の存在が“余程の”ことだったということよ」

「……………」

そのように霊夢に言われてしまえば流司にはもはや言葉はなかった。

実際、流司の存在がなければ少女が隙をみせることはなかったのだから。

落下する少女を助けたのが流司であれば、少女が落下する原因を作り出したのもまた流司であったのだ。

「何？知り合い？」

「そうだな。幼なじみといったところだ」

流司は抱き抱えている少女 『東風谷早苗』の顔を見ながら霊夢の問いに対して答える。

「それじゃあ、なに、流司はこの娘が“幻想郷”に来るといこと

を知っていたわけ？」

「まさか！？俺も正直驚いて言葉もないんだ。その逆もそう。早苗も俺が“幻想郷”にいることは知らなかっただろうさ。でなければ、あんなにおどろくことなんてなかったはずだ」

「それもそうね。それじゃあ、どういう理由なのよ？」

「俺が分かるかって。正直に言っつて、この先の神社、『守矢神社』は幻想入りしてしまうほどに忘れられてはいないはずだからな」

『守矢神社』が信仰の減少に悩んでいたことは流司が早苗の口から直接耳にしていた事実であった。

しかしながらそれが“幻想入り”を引き起こしてしまうほどに少なくとも現状では深刻化してはいないはずであった。

「それに人が忘れられるだなんてよっぽどのことだろう？俗世から離れて生きてきたならともかくとして」

「そうね。流司とは違いここは“外”との境界に面しているというわけではないし……」

部屋ごと幻想入りした流司と神社ごと幻想入りした早苗。

どちらとも通常ではまず有り得ないことではあるが、流司の件に關してはまだ説明がつく。

“外”と“幻想郷”、そのどちらにも面している『博麗神社』は移ろいやすい。

言っつてしまえば、中と外とで入れ替わりやすいのである。

現に供えてもいないのに神棚にお供え物が供えられたり、家の中の物が突然無くなったりしてしまうことは数こそ少ないとはいえど

もない話ではなかった。

それだけに流司が部屋ごと幻想入りをしてしまうということは確率で考えれば比較的起こってもおかしくはないことだった。

勿論、流司の幻想入りの理由は他にも様々な要因があったのであるが。

一方、早苗の場合はどうであるかといえば、偶然という可能性はない。

『守矢神社』が『博麗神社』と同じようなものではないことに加えて、幻想入りした先が妖怪の山という幻想入りしたものが流れ着くにはかけ離れた場所であったからである。

よって、これは

「まあ、新しくいらっしやった神様とやらに一言お伺いを立てるのは変わらないわね」

「さし当たったの問題はないようだけどな」

「これだけのことが起きながら紫が動いていないものね。“幻想郷”としては問題ないのでしょ。でも、“私”個人には大問題なのよ！」

そう、これだけのこと、“意図的に幻想入り”をするということをしているにも関わらず紫が行動を起こしていないということは今回の一件が幻想郷に深刻な問題をもたらすものではないということの裏付けであった。

しかし、幻想郷に影響がないことが霊夢個人にも影響がないかといえはそのようなことは全くとしてない。

「売られた喧嘩は買ってやるわ。仮にこの先の神社の神様が意図してぶっかけたのではないのだとしても、巫女の不始末は神の不始末、

「連帯責任よ」

「連帯責任という部分には甚だ同意できるな」

実感の籠もった呟きで流司は頷く。

連帯した責任を果たし続けている流司以上にその言葉を身近に感じている人はいないであろう。

「ともかく、この私に喧嘩を売ったことを後悔させてあげるわ！
行くわよ！！」

「いや、俺はそれを止めに……聞いてやいないし……」

霊夢は勇み足で参道を登っていく。

流司は気付くべきだった。

喩え、霊夢に追いつくことができたとして、自身に霊夢を止めることができる力が備わっているのかということ。

「博麗神社の神様が不明な最大の原因は霊夢だとしてもおかしくないと考えてしまうことが恐ろしいな……」

巫女の不始末は神の不始末だという霊夢の論理を当てはめるのだとすれば、霊夢の不始末は博麗神社の祭神の不始末になる。それを嫌った神が博麗神社から逃げる。

馬鹿げている理論である筈なのにもかかわらず、そう考えてしまうことに流司は恐ろしさを感じる。

「ほら、さっさときなさい」

「分かったって。今行くから」

急かす霊夢に流司は渋々といった様子で返事をする。横抱きにした早苗を起こさないように慎重かつ霊夢にどやされることのない足取りで階段を登っていくのだった。

頁百七十一、『優攻は儂き抵抗の末に』（後書き）

思っただ。

追いついたところで主人公に霊夢を止められる筈がないと。

というわけで舞台は最終局面へ。

絶賛気絶中の早苗でした。

頁百七十二、『御柱の墓場』 Dive in Lake (前書き)

『あゝ風の神よ 神湖の地に』

く霊夢との合流と思ひもしない再会を果たした流司は参道を登り『
守矢神社』を目指す。

そこで目にするは何か、そこで待つは何者か。
神湖の地で風が吹き荒ぶく

「流司、いつまで続くのよこの階段は？」

「もう少しだ」

傍らを“歩いて”いる霊夢に流司は淡々とした口調で答える。

「さつきからその言葉ばかり聞いているのだけど……」

「その“さつき”から数分も経ってないのだから当然だろう」

霊夢の文句にも流司は特に大きな反応を示すことなく、抑揚のない事務的な声を返す。

「ああ、もう飛べばいいところをどうして私たちは歩いているのよ！！」

「俺は人一人抱えて飛べはしないからな。どうもバランスがとれない。あと、怒鳴るなうるさいから」

霊夢の言葉にどこまでも素っ気がない様子で答える流司。

つい、数刻前とは全く二人の様子は変わってしまったといえる。

「なら、どっかその辺にでも置いてけばいいじゃない。敗者に情けは不要よ」

「本当に容赦がないな。生憎と裾を掴まれてしまって降ろすことも

できない。このままでいるほかないだろう」

早苗の右手は流司の服の裾を掴み動かない。

外そうとも流司の想像以上に強い力で掴まれており、その手はピクリとも動くことがなかった。

「そもそも、その娘、本当に気を失っているのかしら？」

ピクッ。

「どづいつことだ？」

訝しむような視線で流司の腕の中の早苗を見つめ続ける霊夢が言う。

「気絶というのは脳のお、お……オーバーフローによる情報処理のエラーよ。基本的には数分で意識は覚醒するはずだもの」

「そうなのか……つか、なんでそんなことを霊夢が知っているんだよ？」

霊夢が披露した意外な知識に流司は感心を見せるように頷くも、そのような知識を霊夢が有していたことに疑問を抱いて尋ね返す。

「前に紫に聞いたのよ。ほら、気絶した振りをされて敵を見逃すなんてことは避けたいじゃない？」

「……そこは戦わなくてすむことを喜んだ方がいいんじゃないのか？」

「む、そういう考えもできるわね」

気絶した振りをしてやり過ぎそうとした相手に嬉々として追撃を加えている霊夢の姿を思い浮かべてある意味霊夢らしいと思うが、同時にわざわざ手間を増やす必要もないのではと流司は思う。

霊夢もそのことには気付いていなかったのか、流司の返答に眉を顰めてぶつぶつと呟く。

「まあ、でも、見逃したことで背後から襲われる危険性を残すくらいなら、初めから芽を摘み取っておく方がいいわよ。流司なら分かるでしょ？」

「分からなくもないとだけは言っておく」

石橋を叩いて渡るような性格の流司である。霊夢の言葉に思うところがないといえばそれは嘘になった。だからといって、素直にその言葉を認めてしまってもいいものかといえばそれは別問題であり、流司の言葉はどことなく渋るようなものであった。

「それにしても長い階段よね。全く嫌になるわ」

「『博麗神社』も決して短くはないじゃないか……」

愚痴る霊夢に流司がさかさずつつこむ。

確かに『守矢神社』の階段の長さは嫌になってしまっほどに長いものであることは間違いない。

けれども、『博麗神社』の階段も“短い”とは口が裂けても言えない程度にはあるのだ。

「何を言っているのよ。例えるならそうね、『博麗神社』の階段は

紫の冬眠。この神社の階段は閻魔の説教よ」

「……………」

独自の例えを振りかざす霊夢に流司は口を噤むしかない。

言外に閻魔の説教の方が長いという霊夢であったが、流司はどちらもどっちで変わらないのではと感じていた。

無論として、両方とも短いものであるとは流司も考えていないあたり、霊夢も流司もさして思考に差はないのであるが。

「因みに白玉楼への階段は？」

流司は長い階段と言われたときに思い浮かべるもう一つの階段もついでというように引き合いに出して霊夢に尋ねる。

「白玉楼？あれは蓬莱人の寿命ね」

「もはや、“長い”ではなくて“永い”じゃないか……………」

さらりと答えて見せた霊夢に流司は呆れたようにしてみせる。

「そんなことよりも、私が言いたいのは本当にコレが気を失っているかということよ！」

ビシツという擬音が飛び出してもおかしくはないような勢いで霊夢は流司の腕の中の早苗に指を突きつける。

「流石に起きていたら自分で歩くだろうが……………」

流司は呆れの色を強めた視線で霊夢を見る。

もし意識が戻っていたとすれば早苗の性格を考えた場合、驚きで素直に腕の中で大人しくはしていないだろうと流司は思っていたからだ。

「でも、怪しいのよねえ……」

霊夢が疑うように目を細め早苗のことを見つめ続けるが、早苗の表情は一度たりとも動くことはなく彫刻のように固まったままである。

いくら、霊夢の勘が素晴らしく鋭いものがあるのだとしても流司には早苗が意識を取り戻しているようには思えず感じられない。

「ほら、馬鹿なことをしてないで前を見てみるよ。到着だ」

「まあ、いいわ。確かに着いたみたいだしね」

ふう。

流司らの視線の先には階段の終わりを示す鳥居がある。

霊夢は早苗へと向けていた視線を切り上げると猛禽のような笑みを浮かべる。

「ここが諸悪の根源のいる神社ね。博麗神社より広いだなんて生意気じゃない」

「諸悪の根源って……そりゃ、“外”でもそれなりに名の知れていた神社だ。これくらいの広さはあるさ」

鳥居をくぐり境内を眺めた霊夢が言う。

土着信仰の象徴たる存在である『守矢神社』の規模が“外”その存在すら疑わしい『博麗神社』と比べて小さいはずもない。

「それに湖まで。うちの神社も何か見所みたいなものが必要なのかしらね」

「見所って何さ？」

「温泉とか？あつたら便利じゃない。懐事情にも良くて一石二鳥よ」
「全く神社に関係ないな」

見事に欲にまみれている霊夢の発言に流司は呆れかえる。
巫女がこれでいいのかとも流司は思うも、一応が“博麗の巫女”としての役割は上手くまわってしまっているので口にする事はできないでいた。

「ま、ともかくここにやってきた神様はいるのでしょ。さっさと出てきなさい！」

「少しは神様を敬えよ……」

流司が残った力を絞り出すようにして口にした呟きが霊夢を止めることはない。

「我を呼ぶのは何処の人ぞ」

霊夢の言葉に呼応するかのように声が響く。
その存在感に溢れた声は姿が見えなくともそこに姿があるかのような強烈な威圧感を与える。

涼しい顔をしている霊夢とは異なり、あまりの存在感に流司は額から汗を垂らす。

湖を背景に林立した御柱の間からその姿は浮かび上がるようにして現し、

「つて、早苗！！？あつ、しまった！！」

その姿を流司と霊夢が確認する間もなく湖へと落下した。

「……落ちたわね」

「……ああ」

確認と首肯。

「これでこの件は解決でいいのかしらね？」

「それは霊夢次第だろ？」

疑問と疑問。

「つまりあれは掴みということなのかしら？
神様ね」

随分とフランクな

「いや、それは違うだろう　　たぶん」

靈山に秋の涼やかな風が吹き渡るのだった。

はい、オールクリア。
次エンディングです。

……

……

…

んなわけない!!

霊夢の不機嫌な気持ちも一瞬にして吹き飛ばす。

流石、風の神。

そこに痺れます。

早苗絶賛気絶中……？

「我を呼ぶのは何処の人ぞ」

「言い直さなくても結構。そんな姿で言われても威厳の欠片もないわね」

「……………」

全身から水を滴り落とし再び浮かび上がった神に霊夢は痛烈な言葉を浴びせる。

流司は無言であったものその沈黙は肯定と呼んでもいいものであろう。

「それでも神を立たせるのが巫女というものでしょう？まあ、いいけれど」

「あんたがこの神社の神でいいのよね？」

「そうさ。『八坂神奈子』、この『守矢神社』の神だ。そういうお前さんは麓の巫女でいいね？」

『守矢神社』が神、『八坂神奈子』は霊夢に尋ねながらも小さく呟く。

そして、風が吹いたかと思えば次の瞬間には神奈子の身体は完全に乾いている。

神である以上はこの程度のこと雑作もないと知らしめるかのような何気ない動作であった。

「そつよ。よくも喧嘩を売ってくれたわね」

「喧嘩？」

「その巫女が私に神社の営業停止を求めてきたわ」

霊夢が流司の腕に抱き抱えられている早苗を視線で指し示し神奈子へと訴える。

「早苗が？それは済まなかった、早苗も色々とあつて頑張り過ぎてしまっていたからね。ちょっと、空回りしてしまっていたようなんだよ」

「それに関してはどうでもいいの。もう、成敗はしたから。後は神であるあんたがどう責任をとるか、よ」

早苗のことを倒した今、霊夢の感情の矛先は既に神奈子へと向かっており、早苗のことなど脳裏にほとんど残っていなかった。

「加護でもあげようか？」

「そんな金にもならなければ食えもしないものいわないわ。こういつときは賠償金よ、賠・償・金！！」

霊夢の前に机があれば大きな音を立てていたであろう強い口振りで霊夢は訴える。

「欲にまみれた巫女だねえ。まあ、分かりやすく好感が持てるけれども。金なら賽銭箱や社務所にあるよ。尤も“幻想郷”^{こくわんきやう}で使えるかは分からないけれどね」

神奈子が言うように“外”の金は基本的に幻想郷では使うことができない。

それなりの価値のあるものとしては意味はあるかもしれないが、その通りの利益をもたらすということはない。

「な、そんなつ、そしたら私の計画は……」

神奈子の言葉に今日一番の衝撃を受けた霊夢はその場で固まり眩き始める。

「納得がいくまで悩んでいるといい。そして、おや、早苗を抱いているのは……」

流司へと視線を向けた神奈子は心底意外そうな声を上げる。

「初めましてというべきなのでしょう？」

「私が“私”として出会うのならそうなるだろうね」
どことなく気楽そうな口調で神奈子は流司の問いに答える。

そして、流司自身も初対面、更には神を相手にしている割にはその口調はそれほどまでに遜っているものではなかった。流司は神奈子のことを知っていた。

否、正確には見かけたことがあったと言っべきであろう。
事実、神奈子自身が口にしたように流司は神奈子のことを神として認識していたわけではない。

『守矢神社』を訪れる参拝客の一人であるとしか考えていなかったのだ。

「私が『守矢神社』を訪れるときはよく見かけてはいましたが、ま

さか神様でおられるとは……」

「それは私も同じことさ。まさか、姿を認識されているとは思って
もいなかったよ。流石に毎回のように頭を下げられればいい加減に
気付くというものではあったけどね」

神奈子は力の強い神ではあったが、過去であるならいざ知らず、
信仰の薄れていつている“外”でその姿を視認することは通常であ
ればできるはずもない。

それを当たり前のように流司は認識しあろうことかただの人間と
同様に考えているとは神奈子も思っていないことであった。

「考えてみれば私の姿を認識できたとしてもおかしくはないんだよ。
早苗よりも更に薄いとはいえ『神代流司』が神の血を、それも『龍
神』の血を引いているのだから。資質は十分にあった。そして、今
日、今更のように私のことを認識できるようになった理由もわかっ
たよ」

ようやく得心を得ることになったと神奈子はしきりに頷く。

「“幻想”に近い場所にいたんだ。見えるようになって当然だ」

流司は確かに神の血を引いてはいたが、その起源は『神代家』に
おいてもその真偽を確かめることができないほど前のことであった。
その為、流司自身の身に流れる神としての因子は限りなく零に近
いものであり、よっぽどのがない限りはその血の影響が流司に
現れることはないはずであった。

しかし、その“よっぽど”にあたるのが流司の身には起こった
のだ。

『博麗神社』への派遣。

それが流司に微かに流れていた血の覚醒に繋がった。

『博麗神社』は“幻想郷”でもなく“外”でもない。それは外の側に面している『博麗神社』でも同じことがいえる。

そしてそれは同時に“幻想”でありながらも“現実”であるということであつた。

それは徐々に流司の中に眠る血を呼び起こし、流司自身を幻想に近付けていくという結果になった。

それ故に流司は神奈子の姿を見ることができるようになっていたのだ。

「早苗よりも……？」

だが、流司が意識を取られたのは神奈子の納得とは異なる部分であつた。

「早苗は現人神だ。お前さんと同じように神の血が流れているのさ」

現人神。

この言葉には大きく分けて三つの意味がある。

一つは“人間の姿をとって現れた神”という意味であり、一つは“生きた人間でありながらも神である”という意味である。

残る一つは“神の末裔”としての意味だ。

流司、そして早苗は最後の意味での現人神であつた。

「勿論、信仰を集めるという意味ではまだまだ未熟だけれどね。それに早苗の立場上、神よりも人間よりではあるからね」

あまりにも身近にいた自分と同じ境遇にある存在に流司はしげしげとした様子で何故か表情が赤らんでいる早苗の顔を眺める。

「ところで、だ」

「？」

わざわざ前置くようにして口を開いた神奈子に流司は首を傾げて視線を向ける。

「どっしてさ」

ギロツ。

「いや、何でもない」

「はあ……」

口を開いて流司に何かを尋ねようとしたものの結局何も告げることのなかった神奈子に流司の疑問は深まる。

「ああーッ！！もういいわ。とにかく、一発殴るくらいのことをしないと気が済まないわッ！！」

霊夢が全ての会話を断ち切るようにして叫び声を上げた。

「というわけだから、あんたは大人しく私に痛めつけられなさい！！」

「全く随分とおっかない巫女だこと。まあ、いいだろう。暇潰しにはもってこいだ。それに神社の意味をしっかりと教えてやらねばならないことには変わりがないようだからね！！」

霊夢の戦線布告に今度こそ神奈子は神たる存在感で答えてみせる。

「そういうことだから流司、あんたは少し下がってなさい。私はこの神を懲らしめるから」

「勝手知ったる神社だろう。社務所の方へ行っているといい。この巫女に神社の在り方を教えたら改めて会いに行くのでな」

「……………分かりました」

もはや、霊夢と神奈子の対決を止めるといふ本来の目的が果たせぬだろうことを完全に理解した流司は諦めたように頷くとすくすくと社務所の方向へと歩いていくのだった。

ちよつと補足回。

主人公は撤退です。

霊夢と神奈子は神遊びです。

早苗絶賛気絶中……なのか？

ああ、300万PV達成してました。

ありがとうございます。

何か番外編でも書くかな？

風神録までで出していないキャラもまだ若干いるし。

まあ、本編が先ですが。

頁百七十四、『明日アメの日、もの今日』（前書き）

『愉快な日本の神様』

く戦いを始めた霊夢と神奈子を背に早苗を抱えた流司は社務所を指す。

既に日は暮れかけ、空は茜に染まる。

厄深まりし今日は昨日になり、明日は何が訪れるのかく

頁百七十四、『明日アメの日、もの今日』

怒号。

流司は背後に感じる凄まじき轟音と気配に一度も振り返ることなく歩き続けていた。

流司の耳に届くは教えという名の爬羅剔抉はつてつてつと怒りという名の罵詈訾ののしり。
讒谤ざんぼう。

平たく言ってしまうえば悪口の応酬が流司の背後では繰り返されていた。

「子供の喧嘩かよ……」

流司の言葉を誰かが耳にしていたかどうかは定かではない。

しかし、音だけを耳にすれば流司がそう呟いたのも頷けるという話であろう。

知性の欠片も感じることでできない罵り合いはそれが片や巫女、片や神の言い争いだとは誰も考えることは有るまい。

それほどまでに幼稚と考えてしまうほどであった。

「けど、戦い自体は馬鹿にできないから性質たちが悪い」

そう、飛び交う言葉とは裏腹に霊夢と神奈子の攻防は互いの技術の粹極めたもので、しのぎを削りながらもぶつけ合う、まさしく神の域での戦いであった。

流司の実力では介入ができないことはおろか、近づくことすらも危ぶまれる。

そのような意味では早苗を抱えている流司が振り返ることもなく社務所を目指して足を進めていることは正しいことであった。

「さて、膝掛けの一枚でもあるといいのだけど……」

流司にしてみれば、目を瞑ってでも歩くことのできる守矢神社の境内であったが、流石に全ての状態を把握しているようなことはない。

社務所へと無事に辿り着いた流司は早苗を横にできるような場所と物を探してみるも、生憎にも社務所の内部は幻想入りして間もない所為もあってか乱雑に物が広がっておりとてもではないが一人を寝かせることのできるようなスペースはなかった。

「仕方がない。母屋の方へ行くか……」

勝手知ったる場所であると神のお墨付きを得ている流司であるも、他人の家に無断で上がることには気が引けていたために口にしたもののその表情はそれほど乗り気ではない。

けれども、腕の中の早苗を何とかしなくてはならないという方の思いが勝っていた故のことである。

幻想郷、博麗神社を訪れてから精神的忍耐力の成長だけでなく、身体的忍耐力にも磨きのかかった流司であっても妖怪の山を登り、参道の階段から早苗を抱えていたのでは体力き限界も近付いてきてしまうというものであった。

流司は社務所を後にして一路母屋へと足を向ける。抱きかかえられている早苗の表情はいい夢でも見ているのか、綻び破顔一笑であるが慎重に歩く流司がそれに気付くことはないのであった。

「弱った……」

母屋に辿り着いた流司が呟く。

何もそれは彼方で聞こえる轟音が激しさを増しているからではない。流司の脳裏にはむちゃくちゃになってしまっている境内の様子がはつきりと思い浮かんでいたが、神奈子が一瞬にして服を乾かした姿も思い出し大丈夫だろうと自然と頷く。

戦闘中の神と人間の心配をするでもなく損害の状態を心配する流司のどこかズレている豪胆さを感心すべきか、別に自分が片付けなくてはならないわけではない被害まで心配できる流司の人の良さを感心すべきかは分からない。

ただ、流司はあくまでも流司であるということである。

「早苗を抱いたままじゃ、扉を開けられない。そもそも、鍵も閉まっ
つているだろう」

妙なところで抜けているのもまた流司であった。

母屋の扉を前にして流司は途方に暮れる。

仮に早苗のことを一度下ろしてから扉に手をかけたとしても開いている保証は何一つない。

その必要のなさから鍵という存在の少ない幻想郷に流司は染まっていたが為に失念してしまっていたのだ。

「縁側ならなんとかなるかもしれないか」

流司は扉を回り込むようにして縁側のある庭へと歩く。

幸いにも縁側と母屋を仕切る戸は閉められてはおらず、夕日の差し込む縁側には早苗を寝かせてもなお余りある面積があった。

「さてと、どう降ろしたものが。いつの間にか裾の他に袖も握られてるし……」

早苗を引き剥がすことはできないことではない。
だが

「幸せそうな顔で寝やがって。少しはこっちのことも考えろよな」

気持ちよさそうに瞳を閉じている早苗の顔を見てしまえば、流司がそれを無碍に扱うことなどできるはずもない。

流司は早苗を抱き抱えたまま縁側に腰をかけると、早苗の手を振り解かないような形で縁側に寝かせ頭を己の膝に乗せる。

「寝心地は勘弁してもらいたいところだな」

所謂ところの膝枕。

性別が逆のようにも思えなくもないが、これはこれで様になって
いるだろう。

尤もそれは微笑ましいという感情が先行することになる光景では
あつたが。

「にしても、まさかこんなところで出会うとはな。まあ、確かに遠
いところではあるか」

幻想郷で早苗と出会うことになるとは考えてもいかなかった流司で
あつたが、実際出会ってみれば色々と納得するようなことも多々あ
つた。

神奈子の話によれば早苗もまた“外”で神を幻想を認識すること
のできる存在であつた。

それだけに信仰の減少という問題をより身近に感じていたのだ。
そして、不可解としかいいようがない『守矢神社』の管理の移譲。
確かに“幻想郷”に行つてしまえば、まず戻ることはできない。

だからといって、行き先を伝えるわけにもいかないため早苗はあのような形をとったのだった。

「それは皆、取り越し苦労だったわけだが、あくまでも結果論か」
真実からしてみれば、隆斗は幻想郷の存在を知っており、流司に至っては幻想郷に居を移していたことになるのであるが、早苗がそのようなことを知るはずもないのでお互い様と呼べることであった。

「にしても、早苗だけなら幻想郷までついてこずともいいだろうに……」

「それは私たちも言ったんだよ。“早苗には早苗の生活が外であるんだからついてこなくていい”ってね。でも、早苗は頑固なところがあるから。“ついてくる”って聞かなかつたんだよ」

流司の呟いた疑問に答えるようにして流司の背後から声が降りかかる。

早苗は現人神である。

喩え、信仰が失われ神としての部分が死を迎えても人としての部分が残るため早苗が死ぬようなことはない。

そのため、早苗までもが幻想郷を訪れる必要はないのだ。

「貴女様は……」

「『洩矢諏訪子』。このもう一柱の神だよ。詳しいことは流司には説明する必要がないよね？」

「ええ、まあ。はじめまして、でしょうか？」

「そんな固くならなくていいって。早苗同様、こゝんな小さなとき

から知っているんだから。ここ数年までは一方的だったけどね」

流司の前に姿を現した『守矢神社』がもう一柱、『洩矢諏訪子』は自分の胸よりも下に手を当てる流司に話しかける。

「それもそれで気恥ずかしいんですけど……」

「ほらほら勝手知ったる神社の神なんだから敬語なんていいって。

“外”じゃないからそんなに敬わなくても大丈夫だからね」

「そこまで言うのなら……こんな感じでいいか？」

「うん。いいよ。早苗はどうしても私たちに対しての敬語がとれなくなってるね。少しでも敬うことで信仰の減少を避けようとしてくれたんだろうけど、やっぱり壁があるみたいで寂しかったんだよ」

敬語を崩して諏訪子に話しかける流司の様子に諏訪子は嬉しそうに声をあげる。

諏訪子らに対する信仰が減少し続けている“外”では諏訪子たちは己に仕える早苗からの信仰を頼りにしなければならぬほどに大変な状態であり、早苗の諏訪子たちへの敬語はその一環でもあった。

「そんなことはないだろうよ」

「えっ？」

「壁なんてあるわけないってことだよ。“外”での生活を捨ててまでついてきているんだ。早苗にとってはもう“家族”のようなものだったんだろう？諏訪子たちが幻想郷に行くということは本当の意

味で早苗は『守矢神社』に一人になってしまおうということだからな」

早苗の両親は既に他界している。そんな中、『守矢神社』の神である諏訪子と神奈子は早苗にとっては残された肉親のような存在でもあった。

神奈子や諏訪子の存在があったからこそ、早苗は今まで一人でも『守矢神社』を守ろうとしてきたのだらうと流司は思い確信があった。

「……そっか」

「まあ、敬語に関しては……瑞穂さんは結構というか、かなり礼儀作法には厳しい人だったから」

「そういえば、私たちと初めて早苗が顔をあわせた時、早苗が馴れしく話しかけたからといって拳骨を落としていたっけ？」

流司は若干己のトラウマに引っかけかけている話題を諏訪子に振る。

早苗の母である瑞穂は礼儀作法に関しては酷く厳しい人であり、流司もその身に受けて厳しさを理解していた。

諏訪子もまたそのことはよく分かっており、懐かしむように呟くのだった。

「そういうことだから、早苗にとって諏訪子たちが大切であることは違いないはずだよ。それこそ、自分を犠牲にしても幸せになつて欲しいと思えるほどにな」

流司は早苗の髪を指で梳くようにしながら言う。

「それは私たちも同じなんだけどね。まあ、結果オーライかな？
“今”の早苗は幸せそうだし」

「確かにいい顔で寝ているよ」

諏訪子がいうように早苗の顔はこれ以上ないというほどに幸せそう
な笑みを浮かべている。

「でも、ね。折角なんだから私も少しは楽しんでいいと思うんだ」

「？」

諏訪子の突然の言葉に流司は首を傾げる。

「神奈子の奴、あんなに楽しんじゃって絶対私のこと忘れてるよ。
早苗も早苗だし。これじゃあ、この『お祭り』は私だけ除け者じゃ
ない」

諏訪子は未だに轟音の続いている方向の空を見上げて不満げに呟
く。

「だからさ。少しだけ付き合ってよ、流司。楽しい楽しい『神遊び』
にさ」

そう諏訪子は夕日を背に愉快げに笑うのであった。

頁百七十四、『明日アメの日、もの今日』(後書き)

ほら、ノーミスでクリアしちゃっから……

いざ、逝かんextraへ。

夕焼けだと明日は雨らしい。

早苗絶賛気絶中……………なんだってば!!!

頁百七十五、『プレイヤーズスコア?』

「つまりは弾幕で一戦しようか?」

「そう。こんなことを考えるなんて幻想郷は本当に興味深いよ。これならまさしく『神“遊び”』と言えるでしょ?」

恐る恐るといった声色で尋ねる流司の言葉を諏訪子は即座に肯定する。

「いや、けど……」

「大丈夫。あくまでも“遊び”。でも、全力で戦ってもらえると嬉しいけどね」

渋る流司を諏訪子は後押しするように言葉を重ねていく。

「いや、そういうことじゃなくて……」

「ん?」

だが、流司が諏訪子に伝えたい意図は違うものであった。

安全が保証されているのであれば、流司自身諏訪子の相手をすることはやぶさかではなかった。

しかし

「この状態じゃ、動くこともできないのだが」

流司は心なしに先程よりも強く握られているような早苗の手を諏

訪子に示し、自分が思うように動けないということを訴える。

「ああ、それ？流石に早苗を抱えながらとは行かないもんね」

「まあ、それは……」

「そっか、それじゃあね」

諏訪子はニヤニヤとした笑みを浮かべながら時折早苗の顔へと視線を向ける。

早苗の寝顔はそれを察してか幸せそうな顔から一転してどこことなく不安げな表情になっている。

「うん。こっしよう！ー！」

諏訪子は手を叩くと流司の傍まで歩いていき、耳を貸すようにと手招きする。

「？」

流司は首を傾けながらも早苗を落とさないように気を付けながらも諏訪子の口元へと耳を近付けていく。

「流司がね、こっしようよ」

「ハッ？何で！？」

「別に驚くようなことじゃないでしょ？前にしたことがないわけじゃないんだし」

「いやいや、その時とは年齢も違つし色々と問題だろ!？」

諏訪子の囁きに流司が珍しくも狼狽し慌てて抗議する。

けれども、諏訪子は何で流司が慌てているか理解できていないよ
うで、首を流司以上に傾げてしまっていた。

「大丈夫だって。神様のお墨付きだよ？それに早くしないと祟つち
やうぞ」

諏訪子の決して冗談には聞こえない言葉に流司は背筋を凍らせた
かのように固まる。

「わかった」

せめてもの抵抗と言うかのように沈黙を置いた流司であったが、
結局のところ口に出した言葉は恭順の意を示すものだった。

「なら、さつさと済ませちゃおう！」

暗い雰囲気を帯びる流司とは何処までも対称的に明るかった。

溜め息を吐き出すことですらも苦痛であるような重々しさを流司
は諏訪子の言葉を実行に移さんと行動を起こす。

行動と称したものの流司の動きは些細なものであった。

上半身、強いては頭を動かすたったそれだけのことだ。

問題があるとするれば、その動きの方向くらいなものであるう。

流司の頭は緩やかな下降をする。その先にあるのは当然のように
早苗の顔であった。

距離にして一尺足らず。

いくら早苗の頭が流司の膝の上にあるとはいえ覗き込んでいるに
は少々近すぎる。

半尺。

もはや、その距離は吐息がかかることですからも容易な距離であり、赤の他人に与えられるような距離感ではない。

気付かぬうちに流司の片手は早苗の頬を撫でるかのように添えられており、完全に赤らんではいるもその姿は目覚めを待つ眠り姫のようでもあった。

その距離は一寸。

ふとした動作で間違いが起こってもおかしくはない距離である。

それでもなお流司の顔は早苗の顔へと近付いてゆく。

そして

フウー。

「ふにゃああああッーーーー！！！！！！」

添えていた手のひらを器用に使うと流司は早苗の耳にそっと息を吹きかけるのだった。

「ほら、起きたでしょ？」

文字通り飛び上がるようにして起き上がった早苗を見て諏訪子は得意げに言うのであった。

人には弱点というものがある。

それは全ての人に必ずしもあるというものではないが、大抵は存在していると考えていいものだろう。

偏に弱点と言えども多種多様にわたる。流司の爬虫類嫌いのように特定の存在を苦手とする人もいればそうではない人もいる。

そして、早苗は後者の弱点、身体的部位の特異的なら刺激を苦手としている人間であった。簡潔に言ってしまうえば、早苗は耳に関する刺激を苦手としているのである。

「相変わらず苦手なんだな……」

顔から首までを茹で蛸のごとく真っ赤にし目元には涙を浮かべる早苗を見て流司は呟く。

俄かに着崩れた巫女装束に蒸気した頬に潤いきった瞳、腰が砕けてしまったかのように横座りにへたり込む早苗の姿は見るものによつては嗜虐心をそそるような姿であった。

しかしながら、少なくとも流司にはその気はなく朗らかな微笑みを早苗に向けるだけである。

「い、いい、いきなり何をするんですかッ!？」

「いや、諏訪子が手っ取り早く起こすにはこうだと……」

どもりながらも涙目で訴える早苗に流司は全身から申し訳なさを示すようにして答える。

実を言えば、諏訪子が流司に囁いた言葉には、

『ああ、甘噛みでもいいよ?そつちの方が効果は大きいだろうし』

というものがあつたが、流石に流司もそれは避けた。

そして流司のその判断は正解であり、もしそれを実行していたのであればもたらされた結果は逆であつた^{せむし}だろう。

「す、諏訪子様あ〜?」

「だって早苗がさあ、”いつまでも”起きないからね。折角だし、“起こして”あげようかなくて？会えるはずのない流司と再会できたというのに“いつまでも寝たまま”というのは可哀想だからね」
「うう……」

諏訪子の傍目には早苗のことを思い、実際にはちよつとした意地悪な言葉に早苗は反論することができない。

「で、でも、あんな方法で起こさなくても!!」

「だって、早苗って結構寝起きが悪かったりするし、手っ取り早く起きてもらうにはこれかなあ〜ってね。それに」

早苗がやつとの思いで見つけ出した抗議の言葉も諏訪子は簡単に交わしてみせる。

そればかりか

「(わ・る・く・は・な・か・つ・た・で・し・よ?)」

と声には出さずに口の動きだけで諏訪子は早苗に伝える。

「ッ!!!!!!!」

そんな諏訪子の言葉に早苗は今以上に顔を赤くする。その赤さは高熱があると言われても疑うことはないだろう。

「早苗？顔が真っ赤だが、そこまで嫌だったか？」

かつて流司らがまだ幼かった頃に同様のことがあったが、そのと

きは早苗が泣き出してしまったほどで、それ以来早苗の耳に対してのちよっかいはタブーであったのだ。

「いえ！全く！！むしろ、バッチコイというか、歓迎というか……」

「……はっ？」

「えと、えつとですね。いい加減私もこの弱点を治さなければいけないと……」

「まあ、確かに少し過剰な反応ではあるな（耳掃じとか大変そうだよな……）」

見当違いな推測を勝手にして流司は早苗の言葉を鵜呑みにして信じる。

尤もこれを早苗が喜ぶべきかは定かではないが。

「そ、それですね。どうして流司さんが“幻想郷”に？」

「ああ、それは「ストロップ！！」」

「その話って絶対長くなるよね？何の為に早苗を起こしたか忘れてない？」

早苗が兼ねてからの疑問を口にして流司がそれに対して答えようとしたところで諏訪子がそれを遮る。

その表情には早苗を見ていたときのような笑みはなく、不機嫌そうに目が据わっている。

「日が暮れてしまう前に“遊んで”くれないと。じゃないと本当に

祟っちゃござ
「

」「勘弁してください」「

お茶目と言う諏訪子の本気に流司と早苗は同時に頭を下げたのだ。
った。

頁百七十五、『プレイヤーズスコア?』（後書き）

崇っちゃうぞ

大事なことな（ry

あれ？

今頃は主人公、諏訪子と激動を繰り広げている筈だったのに……
どうしてこうなったんだろう？

というわけで、早苗ゲームオーバー（プレイヤーズスコア）な回。
いや、ある意味勝利か？それもまたプレイヤーズスコアだな。

次回こそは諏訪子と……

縁側から距離を置いた空では満面の笑みを浮かべた諏訪子が戦いが始まる瞬間を今か今かと待ちわびるように佇んでいる。

戦いという言葉に目を瞑り、その姿だけを見たのであれば年相応の少女にしか見えないことだろう。

流司はその姿をみると相手をせんと地面を蹴りだそうとして、その手を取られる。

「流司さん！！本当に諏訪子様のお相手をするんですか！？」

流司の手を取ったのは当然のように早苗であった。

一切の躊躇いもないように空へと飛び出そうとした流司に驚いたからこその行動である。

「まあな。早苗だって祟られたくないだろう？」

「それはそうですね……」

先程の諏訪子の目は間違いなく本気であり、相手をしなかった場合は本当に祟られてしまうであろうと流司は思っており、それには早苗も同意できるところであった。

「どうやら俺は厄神様の太鼓判を押されるほど“厄”に好かれるみたいだな。わざわざ回避できる災難を受けるようなことはしたくないわけよ」

出会って早々に「厄い」と言ってみせた厄神の姿を思い出して流司は言う。

その場で厄を引き取ってくれたはいいが、折角引き取ってくれたのだから自ら災難に向かうような真似は極力流司は避けたかったのである。

「それに諏訪子も“遊び”だって言っているんだ。問題ない。仮に問題があっても命まではとられるようなことはないからな。それだけ気が楽だと言える」

スperlカードルールに乗っ取った決闘である上に、諏訪子自身が“遊び”であると割り切っている。

多少の怪我の危険性はあったとしても命が危ぶまれるような心配がないと分かっているだけ、いつにもまして流司の気は楽なものであった。

「死ぬことはないと分かっているながらも死んでしまうような錯覚を受ける訓練でも、半分が八つ当たりという名の特訓でもないからな。よく考えたらこんなことで祟られるのを回避できるなんてついているな。やっぱり、厄を引き取ってもらった影響か？」

同じ命の危険のない弾幕ごっこでも遠方から聞こえてくる轟音の要因の半分を背負っている巫女以上に大変であるということは流司には考えられなかった。

だとすれば、諏訪子の相手をするので祟られないのであればそれは流司にとっては十分に幸運なことであるといえた。

「そういうことだから、ちょっと諏訪子の相手をしてくるよ」

そう言つと流司は早苗の手を振り解いて諏訪子と対峙するように空に躍り出る。

そんな流司の背中を見つめ早苗は呟く。

「諏訪子様の相手をしなければならぬ時点で十分に災難であると思う私の常識は間違っているのでしょうか……?」
既に多くの思考が手遅れ気味の流司であった。

「きたね〜、遅いよ」

「こつちも色々あるんだよ」

既に臨戦態勢の整っている諏訪子の文句を流司は口を濁すようにして受け流す。

「まあ、いいけどね。相手をしてくれるならそれだけで十分だし」

「期待にそえるかは分からないがな」

それが全てだともいうように口を開く諏訪子に対して流司は静かに首を左右に振った。

諏訪子の実力は未知数である。

だが、その実力が早苗以下であるということは有り得なく、最低でも神奈子と同等の実力は有しているだろうと流司は考えていた。

一方の流司の実力といえば、

「（早苗にも負けそうなんだよな。情けないことこの上ないけど）」

流司は内心密かに苦笑う。

実際、早苗と霊夢の戦いを垣間見た印象では流司は自身が早苗に勝つイメージをすることはできなかった。

であるならば、その実力が必然的に早苗よりも勝っている諏訪子に流司が勝つことのできる可能性は小数点以下を何桁も探らないと見つけだすことはできない。

「（それでも、俺の力を知らない分まだなんとかなるかな？）」

それは楽観などではなく一つの事実としての流司の確証である。

諏訪子が流司の能力に関しての知識を有していないからには流司のその力は少なくとも意表をつく程度のことであればできることは間違いなかった。

いくら諏訪子が神であり実力が高いものであったとしても初見である以上は先の流司とにとりとも対決のような結果を招く可能性は低いといえた。

「細かいルールはどうするの？」

「これで」

流司は一枚だけスペルカードを掲げてみせる。

つまりは一発勝負ということであった。

「ええ、それだけ？」

「向こうもどうも落ち着いたみたいだな。あまり長々とやるわけにはいかないさ」

彼方から届く音は既に消えている。

それは一つの戦いの終わりを告げていた。

「仕方ないか。でも、それだけが理由には思えないんだけどな」
「さてね」

諏訪子の言葉は的を射ているものであったが、それを顔に出す流司ではない。
首を竦めてみせる流司の表情はどこか諏訪子のことを挑発しているようにも見えらるだろう。

「ふーん、でも一枚勝負ってことはこちらもとっておきを使っつてことだよ。こっついう風にねッー!!」

諏訪子は先手必勝というようにスペルカードを取り出して発動させる。

流司が動く間もない一瞬のことであった。

「『諏訪大戦』と土着神話 VS 中央神話」

「?」

諏訪子がスペルカードの宣言をした後の流司の真つ先の反応は驚きではなく疑問であった。

スペルカードは間違いなく発動していた。
そうであるはずなのに流司の視界に映る景色は全くの変化がなかった。

強いて変わっていることをあげるのだとすれば、諏訪子が笑みを浮かべて流司の背後を指差していることぐらいであった。

「ッー!？」

既に遅い　　などということにはなかったが、飛び退くように振り向き流司が目にしたのは鳶のように伸びてくる弾幕であった。絡め捕らんとつねり伸びる弾幕に流司は動きを制限される。差し詰め、それは鳶の檻とでも呼べるだろうか。動きを制限された流司を取り囲むようにして、鳶はばらけ粒となり襲う。

それだけではない。流司の視界に新たな弾幕が映り込む。鉄輪。チャクラムと称した方が馴染みの深いかもしれないだろう。それを模したであろう弾幕が諏訪子の手元より放たれる。バラける鳶と放たれる鉄輪。それら二つが組み合わさった光景は鳶を鉄輪が刈り取っているようであった。

「全く背後をつくのは俺の専売特許だつてのにッ！！」

出鼻を完全に挫かれてしまったことに流司はぼやきながら弾幕をかわしていく。

見るからにその様子はギリギリで先程から幾度となく、光弾は流司の身体を掠めていた。

「ああ、嫌になるったらありゃしないっての。やっぱり、受けるんじゃないかった」

その言葉は何処までも後向きの言葉である。

しかし、その言葉を口に行っている流司からは違和感を拭うことができない。

「めんどくせえ。帰りたい」

一つはその言葉があまりにも流司らしくないということ。

そして、もう一つは流司の表情が前向きを体現しているかのよう

な笑みを浮かべているからであつた。

「さつさと終わらせたい。だからさあ」

のらりくらりと傾くように動く流司は懐からスペルカードをかつたるそつに取り出す。

「終わりにしようか……転逆『天邪鬼の戯言』」
転逆。

頁百七十六、『ネガティブフェイス』前編（後書き）

次回へ続く。

いっぺんに書こうと思ったけど無理だった。

だってバイトなんだから。

因みに明日も明後日も。

その上、明後日から旅行です。

それでも更新は途切れさせないようにしたいなあ……

『神代流司』という人間を言い表した場合、当てはまる言葉は幾つかある。

まずは真面目であるということ。

これは誠実であるという言葉にも置き換えることができるであろう。

やることはしかと行い、約束を破るということは特別な事情がない限りは絶対にならない。

次に人が良い。

流司とて人間であるからして不平不満というものは存在する。しかしながら、文句や愚痴を言っても結局のところ流司は何かと引き受けてしまうことが多く、大抵の場合は二つ返事で了承してしまう。ある意味では甘いとしか言いようがないことではあるも、これもまた流司の美点と呼べるものであった。

他にも『神代流司』を示す言葉は多々あるが、この二つが主なものであると言えるだろう。

端的に示すとなれば、完璧完全ではないも、『聖人』と呼んでも差し支えはないと言える。

「流司……さん……？」

それだけに幼少の頃より流司のことを知り見てきた早苗はその流司の姿に戸惑いを隠せなかった。

つい数瞬前まで、諏訪子の弾幕の猛攻にさらされ不安で一杯であった早苗の胸にある思いもすっかりと塗り変わってしまった。

姿といっても外見的な姿が変貌したということではない。

では、何が変わったというのか。

それは

「ほら、『右』から行くぞ？ああ、『左』だったか。まあいいや、『両方』で……」

流司のまとう雰囲気であった。

既に攻守は転じていた。

否、「守」と呼ぶにはその光景は些か首を傾げざるを得ないであろう。

弄ぶ。

という言葉が一番近いといえた。

諏訪子は前後・上下・左右、全ての方向から代わる代わる迫る弾幕に翻弄され続ける。

被弾こそしてはいないものの、それは諏訪子をもってしても非常に避けづらいものであった。

弾幕としては単純なものだ。

“大小”の光弾を流司は放っているだけである。

にもかかわらず、諏訪子が回避しづらいレベルにまでその弾幕昇華しているのは流司の“声”であった。

「次は『上』からにするかあ。いいや、めんどい、『下』にしよ

流司らしからぬやる気を一欠片も感じさせない気だるそうな声で
眩きながら流司は諏訪子の頭“上”より光弾を降り注がせる。

「って、結局、『上』からじゃないか!!?」

『下』からと言いながらも『上』から弾幕を降り注いだ流司に諏訪子は文句を言つても流司は全く気にする様子をみせない。

そればかりか、

「そんなこと言ったかな？ いや、言ったな。うん、じゃあ今度は『後』からで」

へらへらと笑うように流司は諏訪子に答えると諏訪子の背“後”から光弾を襲わせる。

「今度は本当ッ！？」

流司の言葉通りに己の後ろから襲いかかってくる光弾を諏訪子はかわす。

どれもこれもが単純かつ単調な攻撃であった。しかし、たった一言。流司のたった一言がそれを複雑怪奇ものへと変質させてしまっていた。

その言葉に惑わされなければよい。

確かにその通りだ。

流司の言葉に気を取られなければそれは単純な弾幕にしかすぎない。諏訪子ほどの実力があれば避けることなど容易である。

だが、聞こえてくる言葉に気を取られないことなどできるというのか？

それは不可能と見えよう。

言葉を耳にした時点で“知覚”しているのだ。知覚したということとは“意識”を割いたということだ。

意識を割いたということはそこで反応が鈍ることになる。

仮に流司の言葉が嘘だと認識したとしても認識するというということに意識を傾け隙を作り出すことに繋がるのである。そして、真の意味で厄介であるのは流司の言葉が真実であるかもしれないという点であった。

全てが嘘であるならそのように割り切ったの行動も可能である。けれども、流司の言葉には真実も含まれており、飛び交う弾幕は

それを体現するかのように突如として移ろうのだ。

『右』から飛来したかと思えば、瞬きの合間に『左』へと転じ、再び『右』、そして『両方』から迫る。

これではどこに意識を裂いていいものか判断できようもない。

まさに『天邪鬼の戯言』。

天邪鬼とは“鬼”の字が示すように大陸では確かに鬼の一種である。

しかし、この国古来の説話などでは少々異なっている。

“鬼”という字は妖怪としての鬼を表しているのではなく、悪という存在としての意味合いが強いのである。

天邪鬼という羅列を省略することなく書き表してみれば分かるように“天の邪魔をする鬼”、捉え方を変えてみれば“天”“神”の邪魔をする者とも考えることができるだろう。

そして、妖怪としての天邪鬼は相手の意図を知らながらもその言動で相手を惑わす妖怪であるという。

まさしく、二つの意味で諏訪子の前に立ちふさがる流司は天邪鬼であった。

言葉としての意味では“ひねくれ者”というものである天邪鬼という言葉。

であるならば、天邪鬼の語る“ホント真実”は“ウソ虚構”となり、“ウソ戯言”は“ホント現実”となるのだ。

転逆『天邪鬼の戯言』。

そのスペルカードの正体はありとあらゆるものの同時転逆である。それは弾幕の軌道、位置、大きさに限らず、流司自身の言葉や振る舞い、性格にすらも至る。

故に早苗が感じた違和感はある種正しいものであった。

今の流司はいわば流司自身と対極に位置している存在であるのだから。

「次は……いや、考えるのも面倒だし……」

流司が雑多に腕を振るうと諏訪子の背後と足元から攻めいるようにして新たな弾幕が形成される。

大小の弾幕が緻密に組み合わせられた弾幕は到底面倒であると言いつつながら作り出されたものであるとは思えない。

攻めいる方向が頭上と前方に移り変わった今であっても、避けるスペースが針の穴のように細かであるのが何よりもの証拠であった。

「何で当たらないッの!？」

諏訪子が流司の弾幕をかわしながらも焦るように言う。

流司はスペルカードを発動した。だが、諏訪子のスペルカードを打ち破ったわけではない。

つまりは現在進行形で流司は諏訪子のスペルカードの猛攻に晒されているはずであり、確かに晒されているのだ。

尤もそれは晒されているだけであり、諏訪子が言うように一発たりとて命中はしていない。

「いや、だって当たると痛いしねえ……」

諏訪子とは対称的にのんびりとした口調で流司は答える。

その間も流司は絶え間なく襲いかかってくる諏訪子の弾幕を避け続けている。

いや、弾が勝手に避けていると表現した方が正しいかもしれない。種は単純に流司の能力の発現にすぎなかった。“当たり”を“外れ”への転逆。

単純。単純であるがこの上もなく反則級の所行であった。

しかし、それは今の流司にしてみればノーリスクでできるようなものでもない。

流司の能力の使用には常に“代償”が求められているのだから。故に

「ここまでか」

不意にその存在感を普段のものと変わらないものに戻した流司が呟いた。

「どづいつこと?」

諏訪子は怪訝そうに流司のことを見つめる。

「ああ、すまないけど、後のことは任せてもいいか?」

「私には何を言っているのかさっぱりなんだけど……?」

頬をかくようにして口を開く流司に諏訪子の疑問は増すばかりであった。

傍目から見たとしても現在の状況は流司の圧倒的な優勢で、正直な話、諏訪子には悠長に会話している余裕などなかったのだ。

「いやな、時間切れ終わりつてこと」

瞬間、流司の全ての弾幕が掻き消える。

spell break!!

これだけのスペルカードの発動を流司が長期的にできるかと問われれば、その答えは“否”である。

“練度”という意味合いでもあるが、何よりも能力の“代償”という点で不可能であった。

よって、流司に求められていたのは短期決着であった。にとりを相手に使用した際は一瞬にして片がついた。

しかし、諏訪子の場合はそのもいかなかった。

基本的に初撃が全てであるという流司のスタンスは自身の持つ最高スペルであるこれでも変わらないのだ。

他のスペルカードとは異なり種を明かされてしまった途端に容易になってしまうということはないものの、行っていることが単調であるために避けづらくとも発展性はなきに等しいのである。

スペルカードの終了した流司に残されたのはその代償のみ。つまるどころ

「正直、もう浮いているだけで精一杯なんだよな」

敗北であった。

参ったと言うように乾いた笑みを浮かべる流司に諏訪子のスペルカードによる弾幕が襲いかかる。

為す術のない流司は眩い閃光に包まれて意識を闇に落とすのだった。

頁百七十七、『ネガティブフェイス』後編（後書き）

敗北。

まあ、一回でextraクリアはできないでしょ。

転逆という字がついているように流司の持つスペルカードの中では一番強いです。切り札です。

一応、耐久スペルだけど、耐久と呼べるほど持たないのが難点。しかも、耐え抜かれると敗北が確定するというある意味ラスペ仕様。今更だけど、強いのか分からなくなってきた。

これにて残るはエンディング？

つか、これからが修羅場（本番）か？（笑）

「この部屋で目を覚ますのも随分と久しぶりだな」

意識を取り戻した流司を迎えたのは見知った染みのある天井であった。

『守矢神社』が母屋の一室。一時期は流司にはそれこそ毎日のように眺めたことのある見慣れきってしまった天井であった。

「んんっ」

凝り固まった身体を解すかのように流司は上半身だけを起こした体制で伸びをする。

その動きはどことなく重い。スペルカードを限界まで使用してしまっただが故のことであった。

流司は自身の能力を精査していく間に一つのことができるようになっていた。

“代償”として差し出さなければならぬものの選定である。

依然の流司は能力の使用をした場合、その代償が自動的に反映、肉体にフィードバックしていた。それ大きな能力の使用はそのまま大きな損傷として流司の身体に現れてしまうことがほとんどであった。

しかし、現在ではそれは異なっていた。否、正しい状態へと至っていたというべきかもしれない。

今の流司は等価という条件を反故にするようなことさえなければ、自身のどのようなものをも代償にすることが可能であった。

流司がスペルカードを使用する際の能力の代償として支払っていたものは己の肉体に関する極端な疲労である。そのため疲れが溜まっている状態では使うことができず、そのスペルカード自体にも使

用するための制限が備わっていたのである。

「まあ、怪我するよりかはマシだからな」

病み上がりのように重い身体を引きずるようにして流司は立ち上がる。

確かに極度の肉体的疲労に襲われたとしても五体満足でいられる方が余計な怪我をするよりかはマシであるといえるだろう。

「外はやはり暗いか。深夜でなければいいのだけれどな」

既に夕方であったことに加え、疲労の度合いから考えて外が明るい間に目を覚ますことができるとは考えてはいなかった。下手をすれば翌朝になってしまふ可能性も決して低いものではなかったため、流司にしては十分に良いということのできる結果であると言えるよう。

「空腹は……あるな、そういえば昼間から何も食べていなかったし」

肉体的疲労は様々な形をもって流司に現れる。空腹感もその一つであった。

とはいえ、深夜であった場合のことを考えると自分の家であるならいざ知らず、他人の家を食べ物求めてさ迷い歩くことは非常に気の引けることであった。

「ともかく、今がどれくらいであるかを確かめるか……」

そう呟くと流司は部屋の外へと出て行くのであった。

廊下は静寂に包まれていた。足音を殺しているというわけではないもののそこには足を進めるごとに軋む木の音すらない。

これで辺りが完全なる闇であったのなら流司はこの世に一人だけ残されてしまったと思ってしまうたかもしれない。

「少なくとも深夜ではなさそうだな」

流司の呟きは全くの勘によるもの。しかし、そこにはある程度の確証が含まれていた。

外から感じる雰囲気のが深夜とはまた異なるものであるというのを流司は察していたからだ。

廊下もまた完全な闇というわけではない。使い物にならなくなっている蛍光灯の代わりに灯された蠟燭の朧気な光が微かに辺りを照らし出していた。

そのような薄暗い廊下の一点に流司にとっては馴染みの深い、否、今となつては懐かしさを感じる人工的な光が流司の目に見えた。

紛れもなくそれは白色の温かみの少ない輝きであり、幻想郷では見ることのできない光のほずであった。

「あそこは……台所、か？」

最近ではほとんど訪れることはなくなっていたが、幼少の頃はそれこそ毎日に近い頻度で過ごしていた家である。

その記憶は今なお流司の脳裏に鮮明に残されており、そこがどのような部屋であったのか流司は一目で見抜くことができていた。

更に流司が歩みを進めたところで台所の前に二つの影があることに気が付く。

「あれは……」

流司はその影らに声をかけようと口を開こうとするが、先に口を開いたのは影の方であった。

「神奈子！救世主だ、救世主がやってきたよ！！」

「何を馬鹿なことを……ッそうか起きたのか！！これで助かった！！」

そこにいたのは『守矢神社』が神、『洩矢諏訪子』と『八坂神奈子』であった。

流司が現れた途端に神奈子と諏訪子の背負っていた陰鬱という他ない空気が風の前の地理のごとく一掃される。

「さあ、流司。早苗が料理をするのを止めさせるんだよ。このままだと死人が出る」

「はっ？」

台所の前にまで歩いてきた流司と対峙して早々に神奈子は口を開いた。

全くもってその言葉の意味が理解できなかった流司は神の御前であることも忘れて間抜けな声を上げてしまう。

「何してるの！！早くしないと完成しちゃうよ！！」

「完成しちゃうって……別に早苗の料理は食えないなんていう代物ではないだろう」

流司を急かすように早口で話す諏訪子に流司は首を傾げたまま呟いた。

早苗は料理が上手である。それは流司が実体験をもって理解できていることであった。

無論、料理店で提供されるような上手さや美味さではないが、一般家庭の食卓で出される食事として十分すぎるものだ。

「それは私たちも理解している」

「けど、“今の”早苗の料理は駄目なんだよ……」

何処までも真剣な表情で神奈子と諏訪子は言う。

だが、神奈子や諏訪子が真剣であれば真剣であるほど流司の混乱は増していくのだった。

「神奈子、私は嫌だよ。折角、幻想郷に来たつてのにこんな形で消えるなんて……」

「私だって嫌さ。これなら、外で消えた方がまだ神らしいよ……」

切実。

現在の神奈子と諏訪子の二人に当てはまる感情はその一言に尽きる。

両者の瞳には冗談ではなく涙が浮かんでいた。

「だから……」

「早苗を止めてね」

ドンッ。

神奈子と諏訪子は流司を突き飛ばすようにして背中を押す。

それは流司に痛みをもたらすような乱雑な動きではなかったが、流司のことを思ったものであるから定かではない。

「一体な　ッ!？」

流司は神奈子と諏訪子に対して抗議をすることも叶わず口を閉ざした。口を閉ざさずにはいられなかった。重い。

その言葉しかない。

流司の疲労感や倦怠感を遥かに上回る重さが台所には満たされていた。

その発生源は言わずもがな、

「……………早苗？」

恐る恐る流司は口を開く。

包丁を握っている早苗の周囲が歪んで見えたのは決して流司の目の錯覚ではない。

神奈子と諏訪子の姿はもはやない。

流司はただ一人世界に取り残されたのだ。
いや

「流司さん。目が覚めたのですね」

もう一人いた。

そのもう一人である『東風谷早苗』はゆっくりと振り返ると底知れぬ笑みを浮かべるのであった。

頁百七十八、『神は恐怖の雨を降らす』Gods Tears』（後書き）

サブタイ。ちよつと前後します。

前者の神は早苗。

後者の神は神奈子と諏訪子。

うん、切実です。

黙々と箸を動かし料理を咀嚼する音だけが部屋には響いていた。

「（お、重い……）」

流司には手にしている空の茶碗がダンベルのような重さに感じられた。

勿論、その茶碗が合金製であったなどということはなく、単なる陶器でできた一般的な茶碗である。

「流司さん。おかわりをよそいましょうか？」

「あ、ああ……」

流司の手にある空の茶碗に気が付いた早苗があくまでも“自然な様子で流司から茶碗を受け取り櫃ひつからまだ湯気の上がる白米をよそう。

「どうぞ」

「ありがとう」

笑顔で茶碗を渡す早苗に流司は礼をする。その茶碗の重さがよそわれた白米の重さ以上に重くなったように流司には思えた。

その風景だけを目にしたのであれば、実に中の睦まじい穏やかな一幕である。

だが、この風景が繰り広げられる部屋に一步でも踏み込むことになれば一瞬にしてそのような感情は払拭されてしまふはずである。

ここは『守矢神社』が一室。

部屋の中央には料理の並べられたテーブルが鎮座している。並べられた料理は多種多様に渡り、一人で食べることを想定にしていた量ではなかった。

それを証明するように部屋には複数の気配が存在している。

一人は固い表情を一向に解すことのできない『龍神』が末裔、『神代流司』。

一人はそこはかたなく浮かぶ笑みを絶やさずに流司を見る『守矢神社』が風祝、『東風谷早苗』。

一柱は沈黙を保ち神としての威厳や存在感など無限遠の彼方へと放り投げ出来る限りでその存在を空気と同一のものとしている軍神『八坂神奈子』。

一柱はその小柄と呼ぶことのできる身体を更に小さく縮こまらせ小刻みに震える土着が最高神、『洩矢諏訪子』。

ここまでが良い。

流司はともかくとして元々『守矢神社』に住まう者たちである。

『守矢神社』が一室での食卓についていたとしても問題はない。

だが、この部屋にある気配はこれだけではなかった。

「あつ、私もおかわり。大盛りでいいわよ」

流司が早苗に茶碗を差し出したのを見るやいやや自らも茶碗を差し出すのは楽園の巫女たる、『博霊霊夢』。

「まあ、及第点ね」

まるで姑のごとく箸を動かし料理を口に運んでいって評価を下す完全に瀟洒なメイド、『十六夜咲夜』。

「ただより上手い飯はないぜ。私もおかわりだぜ」

豪快にといつても差し支えないような勢いで皿を綺麗にしていく普通の魔法使い、『霧雨魔理沙』。

この自身が他人の家にいるとは微塵とも考えてはいないほどに図々しい三人のためにこの部屋の一部の空気は氷点下を下回っていた。「（美味くない……）」

料理の美味しさは何に起因するか？

当然のこととしてその質によって美味しさは変わることだろう。

だが、それだけではない。

食事の美味しさとはそれを食べる環境によるところも非常にありといえるだろう。

故に故にだ。

喻え流司がギリギリのところでは早苗の料理を暗黒物質ダークマターと化すところを食い止めることができたとしてもこの結果は当然と言えるものであったのだ。

「……………」

痛いほどの沈黙が居間を支配する。

流司は無言で顔をひきつらせ、神奈子は極力存在感を薄れさせ、諏訪子はもはや言葉すら発しない。

一方の霊夢、咲夜、魔理沙の三人は全く気にしておらず食を進める。

その様子を見て早苗の気配はより禍々しいものへと移り変わっていく。

一言で表そう“混沌”カオスであった。

「一言いいでしょうか」

早苗の言葉に部屋が凍りつく。
それは着の動きも止まってしまうほど冷たい声であった。

「何よ？今は忙しいんだから手短かくな」

「人の食事の邪魔をしてはいけないと習わなかったのかしら？」

「よくないぜ」

凍りついた空気を砕くのはやはり霊夢ら三人であった。

「……何でここに貴女たちがまだいるのですか？」

「流司が意識を失っていたのだからしょうがないじゃない」

「私も流司に用事があるのであってここには用はないわ」

「なんとなくだぜ」

三者三様の返答は早苗の神経を逆撫でるには十分すぎた。

それでも流司のいる手前か早苗の表情は変わることはなく、無表情が貫かれる。

だが、居間の中の空気はより冷たく重くなる一方であった。

「早苗」

「流司さんは黙っていてください」

ぴしゃりと流司は早苗に言葉を封じられる。

早苗には本能的に理解できていた。

この三人のうち少なくとも一人は己の敵になるだろうということに敏感に察することができていたのだ。

「（彼女は違いますね）」

魔理沙に視線を向けた早苗は直ぐに判断する。
時間にして零コンマ一秒にも満たない。

「（残るは二人ですか……）」

魔理沙から視線を外した早苗は霊夢と咲夜を見比べるようにして視線を向ける。

「（どちらも差し当たっての明け透けな好意は見られないようですけど……いえ、彼女は……）」

そう思い早苗は咲夜に視線を絞るのであった。

頁百七十九、『混沌の神社』 序（後書き）

今回は短めです

頁百八十、『混沌の神社』 発

「（見られているわね）」

視線を合わせることはなかったが、咲夜には己に視線が向けられていることを理解していた。

「（まあ、どうでもいいけれど）」

一定量の殺意の込められている視線であったが、咲夜の表情は涼しいものである。

ベクトルは異なるとはいえ殺気慣れている咲夜であれば、早苗程度の視線など気にするまでもないものであった。

「（とは言ってもこう見られて続けているのも癪よね……）」

気にするような類の視線ではなかったとはいえ、そのままに甘受していることも咲夜は癪に感じていた。

一つの抵抗も見せないということは自身が早苗に屈してしまっているように感じられたからである。

これといって過度なプライドを持っているわけではない咲夜であるが、全くの矜持を有していないなどということはない。

幻想郷に生きる存在の一つとして戦わずして負けるなどという選択肢は咲夜にはなかった。

「さつきから私のことを見ているようだけど、何かようでもあるのかしら？」

故に咲夜は早苗に声をかける。更に張り詰めることとなった部屋

の空気にとある三人は一瞬身体を大きく震えさせるが、そのようなことを気にする咲夜ではない。

「名前を伺ってもいいでしょうか？貴女のこととはまだ耳にはしていないのです」

丁寧な口調ではあったが、早苗の声色には棘を感じることができた。

「十六夜咲夜。紅魔館でメイドをしているわ」

だが、咲夜とて負けてはいない。

早苗の声色の意味を正しく理解していながらも表情を変えずに答える。

この瞬間、咲夜と早苗の二人は正しくしかと認識する。

「（彼女は“敵”です／＼）」

咲夜がそれに気付いたのは比較的最近のことであった。自身の流司への感情。

特段、咲夜が鈍いわけでも否定していたわけでもなかったが、それを正確に認識するようになるには初めて流司と出会ってから多くの時間を要していた。

それも仕方がないことであつたと言えよう。

咲夜が普段生活している環境はそのような人間らしい感情とは無縁の場所であるのだから。

咲夜が暮らしているのはかの『紅魔館』であり、仕えているはかの『レミリア・スカーレット』であるのだ。

咲夜が人間であつたとしても人間の尺度で物事を計ることはでき

ない。

紅魔館で暮らすものはそれぞれで人間とは異なった価値観で生きているのだから。

よって、咲夜が人間でありながらも人間と同じような感情、感覚を持ち合わせることはほとんどないと言え、まずあり得ない。

だからこそ、咲夜がそれに気付くには普通以上に時間がかかった上に、奇跡とも言えなくはないことであつたのだ。

端的に示せば、『十六夜咲夜』は『神代流司』に好意を持っている。

それも一人の人間としての意味でだ。勿論のこと、その程度というものは全てにおいて優先をしてしまうようなものではない。

だけれども、みすみす他人に奪われるなどと言うことを不快に感じる程度には好意を感じているといえた。

『できることであれば、己が奪ってしまいたい』
そのような思いを口には出さずとも自分の意志であると認められるほどに咲夜は自身の感情を理解していた。

で、あるから早苗が自身と同じ、少なくとも自分と同等以上の感情を抱いているということも本能的に知ることができていたのである。

そして、それは早苗もまた同じことであつた。

「（少なくとも、引いてしまえるほどの感情ではないということですか……）」

臆することもなく答えてみせた咲夜の表情にシンパシーを感じた早苗は自身の勘が間違つたものではないということ把握する。

だが、それだけのことである。

一度は諦めた思いが再び抱くことが可能になつたのだ。

手を引くことなど言語道断であり、一度諦めたことが幸いか災いしてその思いは更なるものへと昇華していた。

「実は一度だけ“外”で見かけたことがあるんですよ」

（一度、買い物に付き合ってもらったからといって調子に乗らないでください）

「そうなの。“幻想郷”とは違ってまた新鮮な経験だったわ」

（幻想郷での買い物“とは”違って楽しかったわ）

「なるほど、こちらでは経験することは難しいでしょうからね」

（貴女にはもう難しいはずです）

「確かにね。でも、こちらはこちらで楽しめるはずよ」

（幻想郷では貴女に分があるとは思えないわ）

笑みを浮かべて笑い合う早苗と咲夜であつたが、その目には笑みなど一つもない。

また、親交を深めようと交わしている会話もその言葉裏では牽制と激しい攻防が繰り広げられている。

「ええ、楽しみにしておきますね」

（そんなことはありません）

「何か困ったことがあれば助けてあげるわ」

（だから、余計な真似は不要よ）

「その時はお願いします。でも、だいぶ慣れてきたので自分でもなんとかできると思います」

（心配は無用です。個人的には黙っていただけで嬉しいです）

「まあ、そういうことなら。でも、遠慮はしないでいいわ」
(それは無理な相談ね)

一件すればそれは流司や神奈子、諏訪子が望んでいた殺伐としていない穏やかな光景である。

しかし、一向に居間は温度を取り戻すことはない。
存じぬところで話の中心となっている流司。

鈍感であるのか敏感であるのか非常に判断することのできない流司の思考は今口を開くべきではないという結論を求めており、それは正解であったといえよう。今、流司が口を開くことは火に油を注ぐことであるといっても過言ではなかったのだから。

「ああ、一つだけアドバイスをしてあげるわ」

(折角だから一つ言っておくことがあるわ)

「アドバイス、ですか？」

(なんですか?)

「手助けしてくれる人は他にもいると思うわ。まあ、その巫女は別でしょうけど」

(敵は私だけではないわよ。少なくともその巫女は除いてね)

「分かりました。心に留めておきます」

(一応、教えてくれたこと、感謝しておきます)

咲夜の言葉に早苗は頭を下げてみせる。それは一つの会話の終わりを示しているのだった。

頁百八十、『混沌の神社』発（後書き）

というわけでフラグ確定。

まあ、次の次の幕からは分岐を始める予定なのでそろそろね。

ジャブの打ち合いで今回は終了。

今回はね。

昨日もそうだが、旅行先でも更新って何やってんだ、俺……？

頁百八十一、『混沌の神社』泣

「それじゃあ、流司。確かに渡したから、丁寧に使ってくれるのなら返すのはいつでもいいそうよ」

流司に辞書とまではいかないものはかなり厚めの本を手渡した咲夜が立ち上がりながら言う。

「帰るのか？」

「ええ、お嬢様たちも事情は察していてくれるとは思いますが、私がいつまでもこうしているわけにはいかないでしょう？」

既に宵闇に包まれている夜は後は更けていく一方であり、吸血鬼の主に活動する時間が夜からであるとはいえ、紅魔館のメイドである咲夜が余所で時間を浪費してしまうことは好ましいことではなかった。

「そうだな」

「それに流司にも色々と話したいことがあるでしょうから。今日くらいは大人しく帰ることにするわ」

大人しくという言葉に並々ならぬ疑問を抱いてしまう流司であったが、“口は災いの元”、一つも声を漏らすことはなく頷いていた。実際、流司自身、早苗らと話したい、話して置かなければならないと思っていることは多々あった。

その内容次第では咲夜たちがいることは好ましくはないといえよう。

故に咲夜が帰るといっているのであればそれは渡りに船といえる話であった。

尤もそこは流司とでも言うべきか、咲夜の言葉の意図は理解できていても裏までは分かつてはいなかった。

一方の早苗はその言葉を正しく悟っていたので、見るからに警戒を見せるようなことはしないものの若干の含みを持った視線で咲夜を見ると軽く会釈をする。

そんな早苗に咲夜も無言の視線をもって返事をする文字通り音もなく忽然と姿を消すのだった。

「私も帰るぜ。昼間、キノコを山で見つけたから戻って効果があるのか確かめたいから」

「そういうことなら私も帰るわね。一応、気は済んだし、これ以上いても邪魔のような上に意味もないから」

咲夜が姿を消したことを見受けると魔理沙と霊夢も席を立ち、『守矢神社』を立ち去る意思を示す。

さんざんに居座っておいての発言であったので、流司がありがたいと感じることは僅かとしかしいようがないものの、同時に意外だと思っていた。

このまま酒盛りを始めるといふ展開も考えていた流司である。少し拍子抜けしてしまっていた。

「それじゃあね。ああ、今日は帰ってくる必要はないから。ゆっくりしていなさい」

「面白い効果が出たら試してあげるから、楽しみに待っているといせ」

片や普段はあまり見せることのない優しさのこもった言葉を、片や物騒で危険きわまりない言葉を残して居間から出て行く。すぐにも霊夢と魔理沙気配が遠ざかっていく雰囲気を流司は確認することができ、言葉通りに帰って行ったということを理解した。

「……………」

「……………」

嵐が過ぎ去るといふのはまさにこういうことであるのだろう。

散々に引つ掻き回していった三人は呆気にとられてしまつほどに一瞬で帰って行った。

居間に残された早苗と流司と二人はどう言葉を紡いでいいのか分からず、先ほどまでとは対称的に穏やかな沈黙が流れる。

そう、二人だ。

いつしか神奈子と諏訪子の二人は居間から姿を消してしまつていた。

その場にいた誰もが気付くことができないほどひっそりとした消えかたは到底力のある神のようには思えない。

その上、姿を消した理由も理由であるので何とも言えないだろう。それは神奈子と諏訪子が神の沽券など気にはいられないほどに切実な思いを抱えていたということでもあるのだが。

何はともあれ、今の居間にいるのは流司と早苗の二人だけである。

二人に言葉はない。

今まではその場の雰囲気や勢いもあって、簡単に話すことができていた流司と早苗であったが、こうして二人つきりになってしまつと互いに思うように言葉を出すことができなかった。

食卓の上の料理もその全てがなくなり、料理を口に運ぶという方法で場を繋ぐこともできない。

「こうして、話すのは向こうで別れて以来だから、数日ぶりか。思っていた以上に早い再会だったな、早苗」

先に口を開いたのは流司であった。

あれだけの別れ方をしたというのに数日後に再び話しているという、普段流司が“外”に戻り早苗と会うよりも早い再会に流司はどうとも呼べぬ笑みを浮かべる。

「私だってこんなに早く会うことになるなんて思ってはいませんでした。それこそ、私は一生の別れのつもりだったんですから」

流司の笑みのこもった声に早苗はうつすらと恥ずかしながらも拗ねたように言葉を紡ぐ。

早苗にしてみれば、折角固めた覚悟を一週間もせずに完膚なきまでに碎かれてしまったのだから拗ねもしたくなるというものであった。

「ということはやっぱり“幻想郷”には……」

「はい、神奈子様ご提案で移ることにしました」

「そうか……」

事前の行動といい、早苗の覚悟といい、この幻想入りが意図せずのものであれば全く不要であったことである。

つまりは『守矢神社』の幻想入りを早苗は事前に知っていたということだ。

神奈子に話を聞いていた流司には既に分かっていることであったが、早苗の口から直接聞くとまた違う印象を受けるものであった。

「流司さんこそどうして……?」

「俺はまあ、神隠しというやつだ。朝起きて目を覚ましたら幻想郷だった」

「えっ、でも……先程の十六夜さんもそうですけど、“幻想郷”から“外”へは行けないはずですよね?」

早苗が戸惑ったように流司に尋ねる。

“幻想郷”から“外”へと行くことができないからこそ早苗は並々ならぬ覚悟を持って神奈子や諏訪子と共に幻想入りしたのだ。

以前、“外”で見た咲夜の姿や明らかに自分よりも長く幻想郷で過ごしている様子のある流司の存在はそんな早苗の知識を否定するものだった。

「あの時は偶々だったし、俺の場合は色々と特殊な事情があつてな。父さんたちも俺が幻想郷にいるということは知っているんだよ」

「そんなっ……ほんと、私がした言い訳はなんだっただんですか……」

無理のある言い訳を考えてまで『守矢神社』のことをお願いした早苗は流司の言葉にショックを受ける。

これであつたのであれば、隆斗に苦しい説明をする必要などなかったからである。

「それは仕方がないさ。“幻想郷”のことを話すわけにはいかないし、話したところで普通は無駄であるからな」

「それはそうですけど……（私がどんな想いで決めたと……）」

流司の説明に理解は示していた早苗であつたが、いま一步納得は

できていなかった。

単純に“外”への未練以外にも抱えているものがあつた早苗にしてみれば、流司が幻想郷にいたということは喜ばしくも簡単に納得できることではなかったからだ。

「色々と話したいことはあるんだけどな。時間も時間だしまた後日にしないか？」

「えっ？」

二人つきりで話すことのできる状況になつたとはいえ、時間はゆつくりと話をしているような時間ではない。

妖怪の山の下山が待ち構えている流司にしてみればこれ以上夜が深まる前に戻っておきたいところであつた。

「霊夢がああ、言ったとはいえそういうわけにもいかないからな。明日にでもまた来ることにするよ」

早苗に声をかけ流司は立ち上がる。

“帰つてこなくてはいいい”と霊夢は言っていたが、しばらく“外”いて帰ってきて早々に今回のことだ。

正直、流司はすぐにでも『博麗神社』の状況を確認かめておきたいところだつた。

「ちょっと、待つてください」

そんな流司を早苗が呼び止める。

「ん？」

流司は顔を俯かせる早苗に視線を向ける。

そして、再び感じる背筋を凍らせるような寒気。

「霊夢さんの言っていた“帰って”とはどういうことですか？」

嘘は許さないという早苗の視線に流司は数刻以内の帰宅を諦める
ほかないのであった。

頁百八十一、『混沌の神社』泣（後書き）

えっ、あっさり終わるわけじゃないじゃないですかあゝ

霊夢ら帰宅。

神奈子様と諏訪子様は逃走。

あれ？これ詰んでね。泣いていい？
的な。

「はあ」

それはとてもとても深い溜め息であった。

秋めく晴れ空には似つかわしくないほどに重々しい。

まるでこの世の憂いを全て掬い上げているかのような溜め息だ。

到底、二十にも至らぬ青年が口にするようなものではないだろう。溜め息が拡散していく空には白い雲が浮かんでいる。行き先も分からず流れていくそれは酷く儂い。

形を保つことはなく、常に流動し変貌し掻き消える。そこにあるのは一つの摂理であったと言うべきだろう。

空に浮かぶは雲だけではなかった。

色とりどりの光の弾。

見る分にはきらきらと輝くそれらは空に散りばめられた宝石のようであり、目を奪われてしまうほど幻想的な光景であったというほかない。

だが、その実を知ってしまったている流司にはそのようには感じる事が全くとしてできなかつた。

「はあ」

再び流司は大きく溜め息をつく。

何度、顔を俯け上げても変わらぬ空の状態が流司の心を陰鬱にさせていく。

尤もその光景が作り出されること自体がそろそろ数えることが億劫になるほどであり、流司の溜め息は絶望というよりも諦めという意味の感情が含まれている割合が遥かに大きいものであった。

「今日こそは勝たせていただきます!!」

空に浮かぶ二つの人影の家の一人が高々と宣言する。

「私に勝とうなど一万年早いわよ。いい加減に諦めなさい!!」

残る一人もその宣言に真っ向から向き合うかのように声を張り上げる。互いの言葉がぶつかり合ったことに口火を切り、交錯し合う光の数々。

秋晴れの空ははや戦場と化すのであった。

「はあ」

それを見て再度流司は深く溜め息をつく。

自分には止めることのできない事実だと理解していても零れる溜め息を完全になくすことができるというものではなかった。

「そんな景気のない溜め息をついてどうしたというんだい？」

「いつの間に……来てたのか。理由なんて分かっているだろう？ だったら止めてくれよ」

ふと聞こえた声に流司が振り向くとそこには神奈子の姿がある。気付かぬうちに姿を見せていた神奈子に流司は刹那目を見開いて驚きを示すが、すぐに肩を落として口を開く。

「いやだよ。馬に蹴られるとかいうレベルじゃないんだから」

「諏訪湖も……正直、歓迎するような気分じゃないんだが……」

神奈子の背後からひょつこりと姿を表した諏訪子が流司の頼みを断る。

神二柱の来訪に普段の流司であれば茶の一つでも出すところであったが、今の流司はそのような気分になることは到底できなかった。

「気にすることはない。今日はあれの出来映えを確認しにきただけだからね」

神奈子は視線を『博麗神社』の一画に向ける。

そこにあつたのは一見すれば鳥の巣箱のようなものだ。

勿論、それが鳥の巣箱であるはずはない。何かと利益のある鶏であるならともかくただの穀潰しの鳥を霊夢が飼うことなどあるはずもないだろう。

その正体は『守矢神社』の分社であった。

神奈子の『博麗神社』の乗っ取りは霊夢の活躍もあり未然に終わった。（本当にそのつもりがあつかは定かではないが）

とはいえども、『博麗神社』の参拝客の少なさが解消されたわけではない。

そこで妥協策として『守矢神社』の分社が『博麗神社』の一画に建てられたのだ。

神というものは案外融通の聞くもので分社という形であれば、乗っ取るまでもなく信仰を得ることは容易であった。そして、分社目的で参拝客が訪れてもそれは『博麗神社』の信仰を集めることにも一役買うことになるのだ。

「ちょっと小さいけど、しっかりとできてるよ。ちゃんと移動もできたしね」

「そりゃ、慣れないことをした甲斐があつたよ」

諏訪子の感想に流司は顔を綻ばせて答える。

『守矢神社』の分社を『博麗神社』の一画に造ることを決めたのは霊夢であったが、霊夢が分社を造るなどという面倒なことをするはずもない。

結局は流司がそれを造ることになるのは当然の摂理であった。

「いや〜それにしても派手だね〜毎回のようになっちゃうの?」

「……まだ今日はマシだ。熱中されると見境がなくなるからな」

空を舞う二つの人影。

早苗と霊夢の姿を見た諏訪子が感心したように声を上げる。

そんな声に流司は疲れたように声を漏らした。

「いいじゃないか。二つの神社に必要とされるなんて神主冥利に尽きるというものだろう?」

「……明らかに俺の人権を無視しなければ素直に喜ぶこともできなくはないのだけどな」

神奈子の言葉にもそのまま疲れたように答えると流司は空を見上げて言う。

「今日こそは流司さんを『守矢神社』の神主とさせていただきます
!」

「分社を建ててあげた上に図々しいというのよ!〜!〜どうしてもというなら、私を倒してみなさい!〜!」

「勿論、そのつもりです!!」

そこで繰り広げられている会話は確かに神主冥利に尽きるものであったが、流司個人のことを考えているかといえば果てしなく微妙といえるだろう。

何故、霊夢と早苗が争うことになっているのか？

事の発端まで戻ればそれは流司と早苗が再会を果たし、霊夢らが帰ってしばらくした時まで遡る。

…

…

…

「霊夢さんの言っていた“帰って”とはどういうことですか？」

「いや、えと、それはな……」

早苗の有無も言わせぬような気迫に流司はたじろいでしまう。

「(なっ!?)」

助けを求めて動かす視線に映り込んだのは居間の外で手を合わせる二柱の神の姿。

ちゃっかりと逃げおおせているその姿に流司は台所での一件を思い出して内心で息を飲む。

「(謀ったなッ!!)」

ひっそりと居間から姿を消したのは流司と早苗の空気を読んだのではなく、ただ単にその身の保身である。

申し訳なさそうに手を合わせているが、そこにその姿通りの気持ちが入められているかといえば甚だ疑問であろう。

「流司さん!!」

「はいッ!!」

早苗の声に流司は教官の前の兵士さながらに背筋を伸ばして直立不動の姿勢をとる。

既に安全圏へと逃げだしていた神奈子と諏訪子の姿はなく、流司を助けることのできるものは誰一人としていなかった。

「ど・う・い・う・こ・と・で・す・か？」

「ええっと、ですね。さっきの言葉は……」

「さっき言葉？」

「私が『博麗神社』に居候しているからであると思われませう。はい」

思わず流司が敬語で話してしまったのも無理はない。

今の早苗は正しく神すらも逃げ出してしまうほどである。

流司が逃げださないことだけでも対したものであるろう。尤も逃げだすことができないからということでもあるのであるが。

「なっ!?!? そんな羨ま　ごほん、不謹慎なことを……」

「不謹慎って……」

「いいえ！！『男女七歳にして席を同じゅうせず』、一つ屋根の下で寝るなど言語道断です！！」

「一つ屋根の下って……同室なわけではないのだから」

流司が『博麗神社』に半強制的に居候になつてゐることを好ましく思つてゐるかということは別問題として、流司が『博麗神社』での同居を特に問題してゐないことは事実であつた。

霊夢もまた別に思うところがあるというわけでもなく、他のものも一部を除いては問題視するようなことはなく、むしろ流司が外の『博麗神社』の神主代行であつたこともあつて巫女である霊夢とはセツトで考えられることの方が普通であつた。

「行きますよ」

「はっ、どこに？」

「博麗神社です！！流司さんを魔の手から救い出してみせます！！」

そう叫んで居間を飛び出していく早苗。

流司はあながち魔の手という表現も間違つてはいないなあと呑気なことを考えながら早苗の後に続くのだった。

……

……

…

「それがどうしてこんなことになってるかなあ……」

流司の思いも尤もだ。

一体どのような経緯を辿れば流司が『博麗神社』、『守矢神社』、どちらの神主であるのかを巡っての対決へと発展するのか流司にはさっぱりであった。

早苗の言葉を借りるのであれば、流司が『守矢神社』の神主になっても『男女七歳にして席を同じゅうせず』という言葉に反することになるのであるが、それが早苗の耳に届くとは流司は思えなかった。

「そもそも、仕える神様がそんな簡単に変わっていいものなのか？」

「神というのは案外適当だからな。別にいいと思うね」

「私は歓迎だよ」

「そうですか……」

流司の疑問に神である神奈子と諏訪子が答える。

これにて『守矢神社』の神二柱からは許可がでたことになる。

流司は疲れきった声で呟くしかなかった。

「……また負けました」

「当然よ」

流司が溜め息をついているうちに勝負の決着がつき、肩を落としたり早苗と悠々と歩く霊夢が姿を現した。

「うう……流司さん、よく霊夢さんに勝てましたね……」

「勝ったとはいえ、一度だけ。それも不意をつけたからであって本当の実力とはいいいがたいからなあ……」

恨めしく霊夢のことを横目で見ながら流司に早苗は尋ねる。

そんな言葉に流司は困ったように答える。

確かに流司は霊夢に一度とはいえ勝利したことがある。

とはいえ、霊夢の意表をつくことができたがらこそそのことであり、一度きりの勝利であった。

「まあ、真つ向から勝つのは無理だよなあ……」

「真つ向から……なら……」

流司の言葉はその通りで、純粋な弾幕勝負で霊夢に勝つことは難しい。

搦め手を講じてようやくと言えるほどに霊夢の技量は高いのだから。

「霊夢さん……!」

「何よ。今日はもう終わりよ。むしろこれつきりにして欲しいわ」

「それは無理です。ですが」

早苗は訝しむ霊夢の耳に「にょにょにょ」と囁きかける。

時折、渋い顔になっては霊夢と互いに囁き合い、最終的には固く手を握り締め握手を交わしていた。

「きつかり一日よ。それ以上は鏝一文も負けないわよ」

「分かっています。いずれは勝ってみせますので」

霊夢の言葉に早苗は聞くまでもないというように頷くと流司のもとまで歩いていきその手をとる。

「流司さん。帰りますよ、『守矢神社』に!!」

「はい?」

「今からきつかりきつちり一日の間、流司さんの貸し出しを霊夢さんに許可いただきました。ということで帰りましょう」

「いやいや、何がということだか分からないから」

「?」

慌てたように首を振る流司の姿に早苗は首を傾げる。

「おい、霊夢。いった なっ!!!??」

霊夢に説明を求めようと流司が視線を向けるとそこには衝撃的な光景があった。

恍惚の表情で手元金を数える霊夢がいたのである。

「(買収されてる!!!?)」

確かに霊夢に対してはこれ以上ないほどの搦め手である。

だが、いくら真っ向勝負でまだ勝てないとはいえ、このような形

で実を手に入れるとは流司は思いもしなかった。

「さて、いきますよ」

「ちょっと待った、早苗！クソッ、霊夢覚えていろよ」

ドブプラー効果を残して早苗と流司は妖怪の山へと飛んでいく。

「うんうん、早苗はやっぱり笑っている方がいいよ」

「さて、私たちは先回りしておくか」

笑顔で飛んでいく早苗の姿を見た諏訪子と神奈子の顔もまた笑顔。よく晴れた幻想の空には新たに奇跡の風がそよぐのであった。

頁百八十二、『かくして異常は日常へと至りて』（後書き）

これにて風神録編終了。

欄外はさんで次幕です。

結局、早苗は早苗、霊夢は霊夢。

主人公の苦勞は変わらないという事ですな。

欄外、『風に靡く花の音』

幻想郷に新たな住人が増えてしばらく、秋めく季節も徐々に終わりを迎え始めている。

新たに住人が増えたのが曆上の晩秋であれば、今は季節的な晩秋と呼ぶことができるだろう。

「ふあつ……」

「きゅ〜？」

「ああ、大丈夫だよ。ちょっと眠いだけだから」

大きく欠伸をした流司のことを首もとの朔が心配するように鳴き声を上げた。

流司が欠伸をしたのは単純に読書による寝不足。

燈台に灯をともして虫の音を耳にしながらする読書はついつい夜が更けていくのを忘れ去れる。

流司も目には悪いと思っていながらもなかなか止めることができずにいた。

これが『博麗神社』であれば蟬がもつたいたいないと霊夢に灯を消され、『守矢神社』であれば目を悪くするも早苗に本を取り上げられてしまうのだろう。

だが、しばらくぶりに人里の自身の家に帰っていた流司を邪魔する者は誰もおらず、度々欠伸をしてしまうほどに寝不足と流司はなっていたのだ。

「う〜ん、このまま昼寝と洒落込むのもいいな……」

縁側に差し込む程よい暖かさの日差しは流司の眠気を誘発するに

は最適で、朔もまた流司の首もとから膝の上へと場所を移して丸く
なっていた。

「そういうことでしたら、子守歌代わりに一曲いかかですか？」

欠伸を抑えようと手を当てた流司の耳にやや高い声が届いた。

その声のもとを辿って流司が顔を動かすとそこには二胡を抱えた
少女の姿があった。

「麟、か……久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです。神代さん」

『冴月麟』。

それが二胡を抱えた少女の名である。

流司が視線で麟のことを招くと麟は軽く会釈を見せ、流司の座る
縁側の傍らに腰をかけた。

「前に会ったのは春頃か？」

「そうですね。桜が散り始めていた頃ですのでそれくらいでしょう」

少し思い出すように間をおいた流司の言葉に麟は微笑むようにし
て返事を返す。

流司と麟は決して深い仲というわけではない。

それこそ、霊夢や早苗たちと顔を合わせるようなほどではない。

麟の所在が不明であることもあり、季節に一度出会うか出会わな
いかといったところで、一月に一度出会えば多いといえた。

「なかなか大変そうな毎日を送っているようですね。風の噂にう

かかっています」

「怠惰な毎日よりはいいといえるが偶にはゆっくりと休ませてもらいたいというのは贅沢かな」

麟の言葉に困ったふうに笑い答える。

『守矢神社』が幻想入りを果たしてから幻想郷は更に賑やかになった。

無論としてそこには“流司の”という接頭詞がつけられるわけだが、程度はあるとはいえ流司はその状況を決して疎ましくは思っていないかった。

「咲き誇る花もいつかは散ってしまうというものです。今を楽しめるということは大切なことですよ」

「確かにな」

言外にじきに落ち着くことになるから、今のうちに楽しんでおくと告げる麟に流司は静かに頷く。

「そついう麟は最近はどうなんだ？」

「私ですか？そつですね……」

流司に尋ねられた麟は虚空を見上げるようにして物思いにふけ始める。

そんな様子の麟の横顔を流司は黙って見つめる。

しばしの無言。

流司の膝の上の朔も意識はあるものの場の雰囲気考えたのか、鳴き声をあげることはおるか身動き一つ見せはしなかった。

「いつも通り、でしょうか？」

「なんだ。それだけ考えいるものだから何かあったのかと思ったのにな」

しばらくの沈黙を置いたにもかかわらず、何も目立ったことはなかったと言う麟の返答に流司は肩透かしを食らい拍子抜けしてしまった。

「誰もが神代さんのように波乱万丈な日々を送ってはいませんよ。私の毎日は季節と共にその身も移ろい旋律を求めるものですので」

「それでも、一つくらいは何かあってもおかしくはないだろう。昨日今日に会ったということではないのだからさ」

「しかし……ああ、山に新しくできたという神社を訪れてみました」

「ほう、それで？」

麟が『守矢神社』を訪ねているとは思ってもいなかっただけに流司は少し驚いたように続きを麟に促す。

「いえ、それだけです」

「……うん、麟はそういう奴だったよな」

がつくりと肩を流司は落として苦笑する。

「何かおかしいことでも？」

「いや、そこでどんなことがあったのかを聞きたかったってこと」

「ああ、そういうことですか。それならそうと始めから言ってくれればいいものを」

「普通は言わなくても理解できると思うのだがな」

精々意図が伝わらないのは妖精くらいなものであるう。

麟の正体を流司は知らなかったが、少なくとも妖精でないことくらいは理解できていた。

それ故に麟の返答は素の性格によるものであった。

「いい場所でしたよ。特に心地よい風が吹く場所でした。まあ、この巫女に信仰しないかと勧誘されたのには丁重にお断りしましたが」

「何だか迷惑をかけたようだな、すまん」

「神代さんが謝ることはありませんよ。信仰を失い幻想郷へと来たのです。信仰の回復に躍起になるというのも領ける話ですから。盛者必衰とはいいますが、虚しいものです」

どこか遠い目をして麟は言う。

「だが、どういう形であれまだ必要とされる場所にやってこれたんだ。良いことではあるだろうさ」

その言葉に対して言う流司の顔は晴れやかであった。それは『守矢神社』にとって幻想入りしたことは紛れもなく良いことであると確信しているからである。

「確かに神代さんの言うことも尤もですね。必要とされる、実に良いことですよ……」

「り、ふぁっ」

「おや、やはり少しお休みになられた方が良いのでは？折角ですので、一曲披露させていただきませうよ。横になられてください」

「あぁ……」

吸い込まれてしまうほどに遠くを見ていた麟の名を呼ぼうと開いた流司の口はその眠気によって声を最後まで発することなく閉ざされる。

その欠伸に気が付いた麟が口ばやに流司のことを横にさせる。

「では、一曲」

~~~~~

緩やかに二胡の音色が奏で始められる。

空気に染み込んでいくような響きに流司の瞼は次第に重くなつてゆく。徐々に身体を支配していく睡魔にあらがうことなどできるはずもなく、

「よい夢を」

麟の囁きを最後に流司は意識を闇へと落とすのであった。

欄外、『風に靡く花の音』（後書き）

二次でも登場することが極めて稀な『冴月麟』さんの登場でした。イメージは一応サークルカットで。

準というか、ほぼオリキャラという。

女性であることはまあ間違いないでしょうが。

サークルカット云々は置いとくとしても、モチーフにしているだろうのは当然『麒麟』。

麒麟は伝説上の生き物では珍しくはつきりとした性別があり、雄を『麒』、雌を『麟』と呼ぶそうです。

逆の説もあるようですが、恐らく意図しているだろうと私は考えています。

さて、どれだけの読者が知っていたのでしょうかね。

頁百八十三、『巫女ありき、巫女おらずして旅は始まる』

秋も深まりを終え初雪も過ぎたある日、

『ちよつと、月まで行ってくるわ』

と流司に言い残し霊夢は幻想郷から姿を消した。

「……………寒っ、落ち葉をかき集める必要がなくなったのはいいが、こ  
うも寒いのはな」

うつすらと雪の積もった『博麗神社』の境内を歩きながら流司は  
呟く。

特徴とも呼べる着流しの上に襦袍を羽織り手を擦り合わせている  
流司の姿は実に寒そうであった。

「今でこれだけ寒いことから、本格的な冬が始まったたらたまつたも  
のじゃないな。まあ、それでもだいぶん慣れたんだが……………」

未だ晩秋と呼んでも差し支えはない季節。

冬としていうのであれば、初冬とも言い難いほどの時期である。

これから間違いなく寒さはその厳しさを増していくのであり、流  
司の吐露は誰もが思うことであろう。

“外”とは異なり寒さを和らげることのできるものも限られてい  
る。

ストーブやエアコンといった文明の利器を象徴する道具は一部を  
除けば幻想郷には存在しないものだ。

基本的には囲炉裏と湯湯婆、炬燵などで寒さを凌しかない。

「朔、こつちへおいで」

「きゅっ！」

まるで犬のように降り積もった雪にはしゃぎ飛び回っていた朔に流司は声をかける。

流司の声にすぐさま反応を示した朔は真っ直ぐに流司のもとへと近付くと、一年を通して定位置と化してしまっている流司の首に巻きつく。

「よしよし」

「きゅきゅっ」

流司が朔の長い胴を撫でると首を左右に揺らすことで朔は喜びを示す。ふかふかとした朔の金色の毛並みは天然のマフラーとなつて流司の首元を急速に温めていくのであった。

「いつまでも外にいることはないよな。早く中へ戻ってしまおうか？」

「……きゅっ！」

朔は名残惜しそうに雪の方へと顔を向けるが、それも一瞬のことでありすぐに流司の言葉に返事をする。

流司はそんな朔の様子に満足げに頷くと境内を後にすべく足を本殿の方へと向ける。

「流司さん!!」



「ん？」

動き始めようとした流司の足を止めるように流司を呼ぶ声が響く。流司が振り返った先にいたのは白い息を吐き出しながら飛んでくる早苗の姿であった。

「こんにちは、流司さん」

「んっ？早苗か」

しゃりっという雪を潰す音と共に早苗が『博麗神社』の境内に降り立つ。

「何か用か？」

「いえ、そういうわけでは……お邪魔でしたか？」

「いや、そんなことはない。むしろ、することもなかったから暇なくらいだ」

「それはよかったです」

心配そうに見上げてくる早苗に流司は笑顔で首を振る。

こども寒いとなるとただでさえ参拝客の少ない『博麗神社』に参拝客が訪れるということは限りなくない。家事に関しても霊夢が不在であることによって、自身のものだけを済ませればいいのであって長くはかからずに流司は終わらせてしまっていた。

よって、流司のすることは全くなく、強いていうのであれば昼食を作り始めようと思っていたことぐらいであった。

「寒い中、立ち話というのもなんだ。昼くらいはご馳走するよ」

「そんな、私が……」

「早苗はお客様なんだから待っててくれればいいさ。俺の腕はもう知  
っているだろう?」

「まあ、それは……」

流司の言葉に早苗は若干歯切れを悪くして頷く。

当たり前であろう。知らぬ間に料理をはじめとする家事全般の腕  
が流司に追い抜かれてしまっていたのだから。

流司の手料理を食べることができると自信の女としてのプラ  
イドを天秤にかけた場合どちらに傾くかは果てしなく微妙といっ  
たところであった。

「これだけ寒いからな。身体のコまで温まるような味噌煮込み」

「きゅっ!?!?」

流司の言葉に朔が真っ先に反応を示す。

それはもう飛びきりの反応をだ。

「ぐえっ。さ、朔、落ち着け。味噌は逃げないから」

「きゅっきゅっきゅっ」

「さ、さ、朔ちゃん!落ち着いてください!!!流司さんが死んでし  
まいます!?!?!」

可愛らしいなりをしているとはいえ朔は立派な妖怪。

流司一つを引き摺ってしまつことのできる力などは容易にある。

朔が喜び流司を台所へと誘おうとしていくほどに流司の首は強力な力で締め付けられる。

もはや、流司の声も早苗の声も朔の耳には届かない。

流司に残された手段は一刻も早く台所へと向かうことだけであつた。

「御馳走様でした」

「お粗末様」

箸を置いた早苗に流司が答える。

食卓の上には空になった取り皿と洗つてもいないのにピカピカに光り輝く土鍋、その中で丸くなる朔がいる。

「ふふっ、よく寝ています」

「寝るのはいいが、そんなところで寝なくてもいいと思うんだけどな」

丸くなって眠る朔を見て笑つ早苗。流司も文句を言つてはいるもその表情は綻んでいた。

「それにしても月か……ロケットの完成披露パーティーに行ったときは本気かと思つたんだがな」

「あれではロケットというより空飛ぶ家ですから」

「あれで月に行けるならアポロが泣くぞ」

「確かに“外”から来た身としては信じられませよね」

人類の夢、『アポロ計画』。

一般的には人類発にして唯一月面に着陸することができた計画である。

当時の技術の粋を結集して作り上げたロケットは二桁までにのぼり、草案も含めたとすれば優に三桁はくだらないであろう。

だが、その中で月面に至ることができたものは片手で足りてしまふ。

それだけ月に行くことは困難であるのだ。

到底、一個人の手によって成し遂げることのできるものではない。

「だが、実際には行ってしまったと。事實は小説よりも奇なりとは言っただけのものだ」

「確か咲夜が往復で半月はかかると言っていました」

「それはまた大層な……」

流司は何人がかりで月を目指しているのかという詳しいことは知ってはいなかったが、少なくとも幻想郷で姿を見かけない者の数を数えると四人は最低でも月を目指してロケットに乗り込んでいたということは分かっていた。

「まあ、大丈夫だろう」

ロケットがどの程度信頼のおけるものであるかは流司は分からない。  
い。

しかし、流司はこと霊夢らの安全に関しては特に心配をしてはいなかった。

それは本当の意味で問題があるのであれば、いの一に計画を阻止するだろう存在が表立った行動をしてはいなかったからだ。

「それにしても、早苗が咲夜のことを呼び捨てにするなんてな。仲間がいいだな」

「いえ、まあ、いいか悪いかといえば比較的にはいいといえるのかもしれないけど……親友とかそういう感じの仲の良さでは間違いないです」

早苗が他人に対して敬称を外すことはあまりない。

本当に打ち解けている相手でもないかぎりには必ず敬称を付けている。（流司に対してはまた違った理由で敬称を付けているのだが）  
流司の言葉に早苗は難しい顔をして歯切れを悪くして答えるも、それなりに打ち解けていることは長い付き合いの流司には一目で分かった。（尤も本当の真意に気付くことはできていないが）

「仲が悪くないならいいさ」

「ほどほどですけれどね」

安心したように呟く流司に早苗は苦笑して答える。

「そ「すみません」……誰だ？」

流司が口を開けようとした瞬間、『博麗神社』の境内より声が響く。

霊夢が不在であることは周知の事実であったので、今の『博麗神社』を訪れるということは早苗のように流司に目的があるものに限られた。

「少し見てくる」

「はい」

早苗を残して流司は席を立つ。

それが旅の始まりだとはその時の流司は知る由もないのだった。

頁百八十三、『巫女ありき、巫女おらずして旅は始まる』（後書き）

儂月抄編開始です。

霊夢は既に旅立ってます。

外から来た二人にはさぞかしあのロケットで月に行けることが驚きでしょう。

さし当たっては誰がやってきたのかというところでしょうかね。

ではでは

頁百八十四、『思わぬ招待』

「あつ、いらしてたんですね。良かったです」

「妖夢か？」

「ご無沙汰しています」

外で待っていた人影が思わぬ存在であったことに流司は少し表情を驚いたものへと変化させる。

外へと出た流司のことを待っていたのは白玉楼の庭師である『魂魄妖夢』であった。

流司と妖夢は決して知らぬ仲であるということとはなかったものの、普段から顔を合わせる間柄というわけではなかった。

精々が人里に買い物に來ているときに出会い、一言二言言葉を交わす程度である。

そんな妖夢がわざわざ『博麗神社』までやってきたということはそれなりの用事があるということであった。

「何か用事があるから來たのだろうか、どういった用件だ？」

単刀直入に流司は尋ねる。

というのは妖夢が醸し出している雰囲気余計な会話を望んではいないように流司には感じられたからである。

「はい、幽々子様より白玉楼へお呼びするようにと伺っています」

「幽々子が……？」

妖夢の口から告げられた言葉は流司としてはまたしても意外なも



のであった。

確かに幽々子からの伝言を伝えるという意味では妖夢は適任であったが、幽々子からの呼び出しともなればいよいよきな臭い話であった。

自然と流司の眉間にも皺がよる。幽々子の性格を若干ながらも理解していた流司には幽々子が何か企てているようにしか思えなかったのだ。

「詳しい内容に関しては……」

「伺ってはいません」

薄々は察していたが、妖夢は然とした態度で流司の言葉に答える。仮に妖夢が幽々子が流司のことを呼ぶ理由を知っていたのであればはじめから流司に説明していたであろう。

「ちなみに妖夢個人としての意見は？」

「……」  
「ご愁傷様です」

「なるほど……」

その言葉が全てであった。

間違いなく幽々子は良からぬことを考えているのだからと流司は悟る。

「えっ、と、無理なようでしたらくる必要はありませんよ？幽々子様には何とか言っておくので……」

今にも遠くを見つめだしてしまいそうな瞳を浮かべる流司に妖夢は申し訳なさを全身で表し口を開く。

「いや、いい。すぐにも向かうよ。逃げたところで無駄だろうしな」

「すみません」

「ただ、今はちょっと来客が来るところだったからしばらく待つてもらえると助かるんだが……」

「それもう！！私としては来てくれるという言葉だけで十分ですから！！」

流司の言葉に妖夢は両手と頭を恐縮するように左右に激しく振る。

一応は庭師という立場である妖夢であるが、主人である幽々子の言葉を反故にすることなどできるはずもない。だからといって、一部分を除けば比較的流司に近い意味での常識を有している妖夢に無理矢理に流司を白玉楼に連れて行くなどという真似ができるはずもなかった。

なんとも苦労性の庭師である。

尤も、幻想郷で何者かに仕えている者は皆、その主人の癖に多かれ少なかれ苦労していることが多いのだけれども、特に妖夢と九尾の女性はその苦労話が尽きないというものであった。

「流司さん？」

「ああ、早苗。ちょうど良かった」

流司が室内へと戻ろうとしたところに早苗が朔を胸に抱きかかえて姿を現す。

「はい？」

「少し出掛けてくる。呼び出しを受けてしまったんでな」

「すみません。どうやら、邪魔をしてしまったようで」

ペこりと頭を下げる妖夢の言葉には他意はない。

そもそも妖夢は早苗のことを詳しくは知らず、単なる流司の客であるとしたか考えてはいない。

流石の幻想郷も誰もが咲夜のような反応を見せるほどまでに混沌とはしていなかった。

「すぐに……戻れるかは分からないが、命はあるはずだから。それまで、良ければ朔のこと」

「きゅ〜!〜!」

置いていくなと訴えるかのように朔が流司の言葉を遮って飛びついた。

何かと置いていかれることが多い朔なりの抵抗であった。

前回の妖怪の山での一件では流司が朔に顔を見せる前に行動を始めてしまったこともあり、朔は大変に立腹であったのだ。

「ついてくるって？」

「キュッ!〜!」

既に流司の首にしっかりと巻きついた朔は流司の問いに力強く頷いた。

「んで、早苗はどうする？別に俺が留守にするからといって『博麗

神社』にいる必要はないからな。何か盗みを働こうとする者もいなければ、何か盗めるような物もないからな」

流司自身、後半の部分は言っていて何とも言えないような感情に襲われてしまっていたが、事実を言ったままであったのでどうしようもない。

「え、えと、すぐには終わらない用事なんですよね」

「いや、まあどうだかは分からないんだがな」

流司は妖夢に視線で尋ねてみるが妖夢も目を伏せて首を振る。やはり、流司を呼ぶということ以外のことは幽々子から知らされてはいないようであった。

「それなら、流司さんが戻ってくるまでいることにします」

「無理はすることないぞ？ 『守谷神社』には神奈子や諏訪子もいるんだし……」

「いえ、仮にも分社のある神社ですので。神奈子様や諏訪子様には一言言っておけば問題はないでしょうから」

流司の気遣いにも早苗はきっぱりと理由のある否定を示す。

「なら、頼むよ。台所の食材に関しては自由に使ってくれて構わないから」

折角、留守番をしてくれるというのであれば流司に早苗を止める理由などあるわけもない。

長期的にとまでは言わなくても、一日や二日『博麗神社』を無人

にってしまうことになれば、用意してあった食材のいくつかが駄目になってしまう。

ならば、留守番をしてくれるという早苗に自由に使ってもらえれば良いということからの言葉であった。

「お話はまとまりましたか？」

タイミングを計っていた妖夢がおずおずと口を開く。

「ああ、それじゃあ、頼んだよ、早苗」

「きゅー！ー！」

「はい、気を付けてください」

早苗に見送られるようにして流司と朔は『博麗神社』を後にするのだった。

頁百八十四、『思わぬ招待』（後書き）

「行っちゃいました……」

流司らの消えていった空を見上げてぽつりと早苗は呟いた。

ただ、流司の様子見に來ただけであつたのに『博麗神社』の留守番をすることになるとは早苗自身考えてもいなかつたことだ。

「しかし、流司さんをお願いされたのですから、しっかりと務めを果たさなければなりません!!」

本来の務めを放り出して留守番をすることを決めた風祝とは思えないほどの力のこもつた声で早苗は宣言をする。

確かに『博麗神社』には『守矢神社』の分社があるが、本社を蔑ろにして分社の管理をしようとする巫女はどこにもないであろう。

「……待ってください。今の『博麗神社』は私一人だけなんですよね」

早苗は確認するように呟く。

「つまりは流司さんの家に一人で待っているということに!!」

正確には流司も居候という身なのだが、流司が“外”の『博麗神社』で使用していた部屋がそのままあることには変わらないのである意味は間違っていないといえなくもない。

「……ちよつとくらいなら大丈夫ですよね？」

誰に言うのでもなく尋ねた早苗の足は自然と動いていく。その顔にはそこはかたない好奇心が浮かんでいるのであった。

『早苗のドキドキ留守番録』

……始まるのか？

という事で早苗さんは留守番です。

迎えに来たのは妖夢。

本当に呼んでいるのは幽々子ですけどね。

流司と朔は白玉楼へ。

久しぶりにがつつり登場する朔です。

頁百八十五、『喰うもの食われるもの』

涼やかな静寂にそこは包まれていた。

雪が白を体現しているでもなく、花が風に舞い地を染め上げているわけでもない。

『白玉楼』。

冥界に座す霊たちの楽園は今日もまた厳かな空気に包まれているのであった。

「待ってたわ〜良かったわ、来てくれて」

張り詰めていた空気を乱すようにして妖夢の後に続き白玉楼に降り立った流司に声がかかる。

『西行寺幽々子』。

それはこの白玉楼の主たる存在の声であった。

「来ないとどうなるか分からないからな」

「そんなことはないわ。ちよ〜とだけ『死』に近付いちゃうかもしれないけど」

「…………冗談だよな？」

「さて、どうかしらねえ〜」

あくまで笑みを浮かべて笑っている表情を崩すことはなく幽々子は流司に話す。

内容が内容であり、幽々子の能力が能力であることも災いして、冗談かと確認する流司の表情もひきつってしまっているものであっ



た。

しかし、そのような流司の表情にも幽々子は笑うばかりで笑みを崩そうとはしていなかった。

「ほら、流司もこっち来なさい。いい風が吹いているわよ」

「俺としては早く呼ばれた理由を知りたいんだがな……」

幽々子は自分の隣をぺちぺちと叩くようにして流司のことを手招きする。

秋の終わりを告げる冷やかな風は身を軽く刺すように流司にそよぐが、幽々子が言うように十分快く感じることのできるものであった。

「そんなことは追々話せばいいわ。妖夢、適当な茶菓子とお茶をお願いね」

「なんで私に頼むのですか……他の霊にでも頼めばいいでしょう？」

「だって、妖夢に頼んだ方が美味しいし確実じゃない」

ニコニコと笑い幽々子は妖夢に言う。

確かに妖夢の本来の役目を考えれば、幽々子のお願いはお門違いというものである。

だからといって、妖夢に幽々子の言葉を突っぱねる気概などなく、小さく頭を下げるとその場から姿を消していった。

「それじゃあ、妖夢が戻ってくるまで世間話でもしましょうか」

「拒否け」ないわよ」……せめて最後までいわせてくれ」

本題の話が始まる前だというのに疲れきった顔を見せる流司が幽々子の隣に腰をかける。

流司はどちらかという幽々子のことを苦手になっている。

それは好き嫌いという意味での苦手ではないが、どうしても幽々子の前でだと調子が狂ってしまうのだ。

無論としてそれは経験の差による巧みな話術の所為でもあるのだが、それを言ってしまうえば流司の知り合いで流司よりも経験で劣っているものなどほとんど存在していない。

現に経験というものではこれ以上ないもののある紫に対しては流司は幽々子に対するような苦手意識を持ってはいない。それが対等であることを示しているとは思えないが、一方的に流司が調子を崩してしまうという事はなかった。

流司が幽々子のことを苦手としていること。

単純にそれは流司があまり幽々子のようなタイプの相手と対峙したことが少ないことによる。

紫のように初めから何を考えているか判断の付かない胡散臭さを感じさせる相手であれば腹の探り合いということになり、流司も経験が少ないとはいえども全くないというわけではない。

しかし、幽々子はただ話しているだけでは胡散臭さを感じることはないが、何を考えているのか悟らせるということもない。

のほほんとした幽々子の雰囲気は警戒心を持つとも、その警戒心の外から本心をかすめ取られてしまうような印象を流司は感じていたのである。

だからこそ、流司は幽々子を苦手としていた。

一切の考えもなしに話をするのできるような相手では幽々子はないが、考えに囚われることもまだ無駄のように思えて流司は仕方なかったのだ。

これが紫ほどの経験があれば一周回って自然体で接することができるのだろうが、年若い流司にそれを求めるといっては酷という話

であった。

「最近、幻想郷では面白いことがあったようね」

「知っていたのか？」

「紫が悲しそうな声で嬉しそうに話していたわ」

「それはまた器用だな」

矛盾していた幽々子の言葉に流司は少し感心したように呟く。

紫がどのような思いで幽々子に話していたのか察することのできた流司だからこそ、その矛盾を疑問に思うようなことはなかった。

「色々と大変だったようねえ……私も様子を見に行けば良かったかしら？」

「勘弁してくれ。收拾がつかなくなる」

ただてさえ流司の手には一杯一杯だったところに幽々子まで参戦してきたとなれば、もはや流司に残された手段は匙を投げることであっただろう。

流司としては考えるだけでも背筋が凍ってしまつような話である。

「そお〜？でも、今度何かあったときは私も参加してみようかしらね？最近、暇で暇で仕方ないのよ。ね〜、朔」

「きゅ……」

幽々子は朔にも同意を求めるように声をかけるが、一方の朔の反応は鈍い。

むしろ、小刻みに震え流司にしがみつくかのように巻き付いている。

見るからに朔は幽々子のことを怖がっていた。

「どうして朔は私のことを怖がるのかしらねえ……私は何もしていないというのに……」

「いや、それは」

「それは幽々子様が以前、朔さんのことを“食べよう”としてしまったからに決まっているじゃないですか」

流司の言葉を継ぐようにして湯飲みや茶菓子をお盆に乗せた妖夢が呆れたように呟いた。

「あれは偶々よ」

「どこに偶々管狐を丸呑みにしてしまうような人がいるというのですか」

「ここよ。それに私は“人”ではないわよ？」

「すみません。流司さん、少し用意をするのに手惑いました」

幽々子の理屈に妖夢はもう何も言うまいと流司にお茶の注がれた湯飲みと茶菓子を差し出す。

「朔さんには味噌を使った何かをとも思ったのですが、すぐには用意ができそうもなくて……これで我慢してもらえますか？」

「きゅっ!」

妖夢は朔にも同様に茶菓子である羊羹を差し出す。

朔は構わないと返事をするように鳴き声をあげると、流司の首から離れて羊羹の乗せられた皿を取り囲むようにして丸くなる。

「妖夢、私にも、はやく」

「幽々子様……」

どこまでも自由奔放である幽々子の様子に妖夢の表情に浮かぶ疲れは急速にその影を増していく。

「幽々子様。茶菓子を食べ始める前にちゃんと流司に話をしてくださいね」

忠告をしつつ妖夢は幽々子の前に茶菓子を差し出す。

「ありがとう、妖夢。でも、これを食べてからでも私はいいと思う  
「幽々子様」……む、わかったわよ」

「流司さんも際限なしに時間があるというわけではないのです。お呼びだてしたのですから、用件をいつまでも話さないのは失礼ですよ?」

「分かっているわよ。全く妖夢はせっかちなんだから……まあ、確かに時間がないって意味ではこちらと同じだからね」

妖夢の言葉を本当に理解しているのかいないのか幽々子は羊羹を黒文字で切り分けながら呟く。

「流司、貴方は月へ行くつもりはあるかしら？」

「は？」

「ん〜っ、美味しいわ〜」

流司の疑問も早々に羊羹を口にした幽々子は至上の笑みを浮かべるのであった。

頁百八十五、『喰うもの食われるもの』（後書き）

「流司さんの部屋に潜入しました安価で行動します……っしまった！ついでにいた頃の癖で！！」

人気がなくなった『博麗神社』、既に『守矢神社』にいる神奈子と諏訪子に連絡をとった早苗を止めるものはいなかった。

誰もいないにもかかわらず、某蛇を彷彿とさせる存在感の薄さで早苗は流司の私室へと潜入した。

「うーん、思っていたよりもすつきりしてますね。流司さんほどの男の人の部屋つてもっと混沌June 11, 1964としているものかと思っていたのですが……」

早苗の目に映ったのは綺麗に整頓されて清潔感の溢れている如何にも流司らしい部屋であった。

見当たる家具は棚に筆筒、机といった部屋として必要最低限のものばかりであり、娯楽の“ご”の字も感じることはできない。

それもそのはずである。

元々、“外”でも電化製品の全くない『博麗神社』の一室が幻想入りしたものである。

流司の性格のこともあり、文房具などの一部に文明を感じさせるところ以外は青年どころか現代人らしさも感じられない。

更に言うのであればたださえ、流司の周囲が混沌としているためにせめて自分の部屋だけはと流司が整理整頓を欠かしていないことも部屋が整然としている要因の一つでもあった。

「でも、流司さんも男の人ですし、口には言えないものの一つや二つはあるはずです！！」

妙な確信を持った声で早苗は断言する。

一週間も前は現役の高校生であった早苗の耳にはそれなりに情報も入ってくる。

男子生徒の会話などが主なところだ。

名も知らぬ男子生徒の名誉のためにも言うが、何も男子生徒たちが開けつぷりげに会話をしていたわけではない。

しかし、人の声とは案外遠くまで届くもので、一度意識を傾けてしまえば意外と騒音の中でも聞こえてしまうのだ。

その上、早苗は現人神、地獄耳とまではいかないも一般人よりは身体能力も優れている。盗み聞き程度はお手のものであった。

「ちょっと、だけならセーフですよ、ね……？」

他人の私室に入っておいてセーフも何もあるわけはなく、加えて家捜しをしようとしている時点で完全無比にアウトなのだが早苗を止めるものは幸いなのかどうか誰もおらず、くる気配もない。

「まずは……」

1、箆笥

2、棚

ということアンケート。

安価はしにくいですね。

お暇な方だけお付き合ってください。

v i p p e r な早苗さん。



実はコテハン持ちだったり……  
あるあ……ねーか（笑）

本編では朔、頑張れ……  
以上！！

頁百八十六、『裏で語る者たち』

「流司を月に？」

「ええ、そう」

遠く夜空に浮かぶ月を仰ぐようにして紫は幽々子の声に応えた。

その顔に浮かんでいる表情は相変わらぬ胡散臭さであり、何を考えているか全く考えが及ばない。

長い付き合いの幽々子をもってしても今回ばかりは紫の考えを読むことはできなかった。

「嫌よ」

意図を一つとして読むことができなかったからか、幽々子は紫の頼みにきっぱりとした拒否の意を示した。

「あら、どうしてかしら？」

紫とて理由も語らずして幽々子がすぐに了承の返事をするとは思ってもいなかった。

だが、即答をもって拒否を示されるとはなおのこと考えてはいなかった。

渋り訝しみながらも幽々子は引き受けてくれるであろうと紫は考えていただけあり、幽々子が即答で拒否を示したことは紫に驚きを与えるには十分すぎるものであった。

「死んでしまいわよ？流司が。月の民の強さは紫もよく知っていることでしょう？」

かつて、地上の妖怪が月へと乗り込んだことがあった。しかし、月の民の力はあまりに強力でただただ敗北を受け止めることしかできなかった。

そのことを知っているからこそ幽々子は冷静に言葉を返した。

「他の実力者ならまだ分かるはギリギリ生きて幻想郷に戻る程度の力はあるでしょうから。でもね、流司にはそれだけの力がない。穢れを嫌う月が殺生を好むかは置いておくとして、そんな不確定要素の多い場所に幻想郷で役目を負っている流司を連れて行くなんてことをすると思うの？」

「無理ね」

幽々子が言うように流司を月へと連れて行くことは極めてリスクが高いと呼べることであった。

現在の流司が幻想郷でおかれている立場というものは曖昧とも称することができものである。

当初の目的である“龍神信仰の象徴”、つまりは『神代』という存在意義での役目は流司が幻想郷に住み時間が経ったことでその目的はほぼ達成されていた。

仮に流司が幻想郷からいなくなったとしてもしばらくは『龍神』に対しての直接の信仰が薄れてしまうということはない。

そういった意味では流司は既に幻想郷には必要のない存在であると言えた。

だが、『神代』ではなく『流司』という一人の人間を見た場合はどうかというと、決して必要ないといえる存在ではない。

事実、『神代流司』という存在は幻想郷のあらゆる部分に根を張り、幻想郷の一部として認められているからである。

明日、突然その姿がなくなったとすれば幻想郷という“存在”に

は問題はなくとも幻想郷という“地”には問題があることであつた。こつこつといった意味では流司は必要な存在であつた。

尤も切り捨てることができなくはない存在ではあり、月に向かわせ不測の事態が起きてたとしてもどうということにはなる。けれども、全くの理由もなく向かわせるといったこともする必要はないのである。

それ故に紫は幽々子の言葉に対して無理という返答をしたのであつた。

「らしくないわ。普段の紫であれば私に直接指示を出すなんてことはしないでしょうし」

幽々子も紫が何かを企てていることは理解している。

その一見すれば何も考えていないような表情の裏側には権謀術数が隠されているのだ。

だが、紫であればその権謀術数すらも計算に入れた上で企てを起す。

よつて、直接に何かを指示するということは通常であればないとであつた。

「それほどまでに流司を月に連れて行くことに意味があるのかしら？」

「……………」

幽々子のやや細められた視線に紫は無言で微笑みを返す。

「話すつもりはないようね。まあ、いいわ。引き受けてあげる」

紫の微笑みを見た幽々子は諦めたように言葉を受け入れる。

依然として何を考えているかは分からないが、紫が行動を起こす以上は“必要な”ことであると察していたからのことであった。

「ありがとう。ついでに一つ聞かせてもらっていい？」

「何かしら？」

「どうしてそこまで流司を守るようなことを言ったのかしら？幽々子には関係のないことでしょう？」

「……………」

そう、冥界に住まう幽々子にしてみれば幻想郷は切り捨てることのできるものだ。

無論、楽しみが減ってしまうという懸念はあるもそれでも極論では幽々子とは無関係な場所になるからだ。

故に流司のことを擁護する必要はない。これが幽々子と流司が比較的親しい間柄でもあれば別問題だが、幽々子と流司は顔を会わせただ回数でさえ両手で足りてしまう程度の間柄である。

到底、幽々子が古くからの友人である紫の言葉を即断するほどの理由にはならないはずであった。

「私にすればさっきの貴女のセリフの方が“らしくない”のよ、幽々子」

「そうねえ…………正直に言えばなんとなくといったところ。確かに関係はそこまでない、ないはずなのだけだね。流司を死なせるようなことがあってはいけないと思うのよ。二度と……………」

「ッ、二度とって、あたかも流司が一度死んでしまったみたいじゃ

ない？」

「でも、何度も死にかけているようだしいんじやないかしら？ 近いうち本当に冥界（ミカド）の住人になってしまおうよ？」

「…………それは冗談とも言えないことね」

幽々子の冗談には聞こえない言葉に流石の紫も表情をひきつらせるしかないのだった。

……………

……………

…

「（そういえば、あの時、紫は一瞬表情を変えたけどなんだったのかしらね）」

呆気にとられた様子で口を開けてしまっている流司の様子を窺いながら幽々子は紫との会話を思い出していた。

引き受けるという意は最終的に示した幽々子であったが、最終的な決定権は流司にあるという条件のもとであった。

紫も構わないとのことであり、こうして幽々子は流司に提案を投げかけたのであった。

「月って、あの月だよな？」

「そう、お月様よ」

脳裏に浮かべていた紫との会話の様子など全く見せない。何も考えてはいない自分を装い幽々子は流司に答える。

「息とかできるのか？」

「……つく、ぷっ、ふっふっはっはっ!!」

「な、何だよ？別におかしくはないだろうが!!」

流司の真剣な表情での問いがあまりにも幽々子にとって予想外過ぎたことで幽々子は笑いを堪えることができず腹を抱えて笑い出す。

「いえ、何を真剣考えていると思ったらそんなことを聞くものだから」

「でも、あの月なんだろう？」

「そうよ。でも、月は月でも私たちが行くのは“裏側”」

「裏、側……？」

流司は月という“天体”のことは理解していたが、月という“存在”に関して正しく理解しているとはいえなかった。

「そう、で、流司は行くつもりがある？」

「いや、俺は」

「クオンー!!」

「朔?」

既に羊羹を食べ終えていた朔が名乗りをあげるように鳴く。

「あら、朔は行ってみたいようね」

「きゅっきゅー!!」

無視をするはずの幽々子の言葉にも朔は応え、流司をその長い胴で促す。

「でもな、朔……」

「きゅうう〜」

流る流司にも朔は梃子でも動かない。

それは珍しいことであった。

基本的に流司の言葉には素直に従う朔がここまで「ねるといって」とは滅多にないのだ。

「これは行くしかないみたいね」

「仕方ない、か……」

幽々子の言葉に流司は諦めたように頷く。

尤もその頷きは慈しみに満ちていたものであった。



頁百八十六、『裏で語る者たち』（後書き）

「まずは箆笥を……」

早苗は部屋の隅に置かれていた箆笥へと足を忍ばせる。

大きさとしてはさほど大きなものではない。子供の身長もないほどの高さで多くのものをしまふことができるような容積はないであろう。

足を忍ばせた早苗は横開きの扉に手をかける。

「失礼しまーす」

誰に聞かせるわけでもないのに囁いた早苗はゆっくりと扉を開く。

「……あるのは普段着ている着流しだけですな」

覗き込んだ早苗を出迎えたのは紋様違いの着流しが何着が折りたたまれているだけであった。

そのいずれもが皺がなく、流司の几帳面さが窺える。

「つまらないです」

今までの何処か好奇心に満ちていた表情を無表情なものに変化させると早苗は扉を閉じる。

他人のプライベート空間に堂々と立ち入り箆笥を漁っておいておきながら、ずいぶんなものいいだが、流司の違った一面を求めていた早苗にとってはつまらないものであったことには違いはなかった。

「他は……」

早苗は残りの引き出しも順に眺めていくが、どれも流司の性格を裏付けるようなものがあるばかりで早苗の興味をそそるようなものは一つとしてなかった。

中には流司の下着もあることにはあったのだが、一瞥もくれずに引き出しを閉じた早苗が胆力が強いというか、一体流司の何を求めるのか甚だ疑問になるといえるだろう。

「次は机ですね……」

早苗はまるで猛禽のような鋭い視線を机へと向けるのだった。

ちよつと、整理かつ以降への伏線回。

早苗はじわじわと……

ただ、感想の歪みなさすぎるwww

最初からその路線で暴走させたら流石に収拾がつかなくなるからwww

「私たちはどこに向かっているのです？」

妖夢のその言葉は流司の思いを代弁している言葉でもあった。

最終的な目的地は流司、妖夢共に理解している。

夜空、遙か頭上で輝く黄金。

月、そこを指しているのである。

だが、どのようにして？

上へ上へと飛んでいけばいいのか？

全く無理であるという話ではないだろう。彼方、上方を目指していけば重力に囚われることはなくなり、少なくとも『地球』より脱することはできる。

極論を言えば、それがロケットが月を目指すことのできる原理であるのだから。

『月』を常に視界に入れて目指せばいつかは辿り着くことができるであろう。

しかしながら、それはこと幻想郷においても“非常識”極まりないことであった。

限りなく確実な不確実とでも言えようか、辿り着くことはできてもあまりにもそれは優雅ではない。

故に

「もう、着いたわよ」

幽々子が足を止めたのは湖の畔であった。

普段、湖を包み込んでいる霧の姿はなく、空の黄金を遮るものは何一つとしてなかった。

そう、雲一つない静かな闇夜であった。

「此処つて、湖ですよ？何でわざわざこんな所に？」

妖夢は首を傾げ幽々子に尋ねる。

月という頭上にあるものを目指しているはずであるにもかかわらず、その足は一度として大地から離れることはなかった。まるで、上を目指すつもりがないかのようである。

「鏡花水月」

「はい？」

幽々子はスウーと手に持った扇子で湖面に映りこんでいた月を示す。

ほとんど風もなく、波のない湖面にははっきりとした姿を月が見せていた。

「鏡に映った花に、水に映った月か……」

「共に見るだけで取ることのできないものですね」

「ええ、そう。それが転じて詩歌などには表せない、幽玄な味わいのことを示す言葉よ」

流司と妖夢の続いての呟きに幽々子は微笑んで言った。

「いわば、水面に映った月は幻の月。掬えども掴むことはできない夢の存在」

幽々子は湖の水を手に掬いそこに月を映してみせるが、当然としてそこには月はない。

空に水を散らせるようにして幽々子は水を零して再び口を開く。

「でも」

「幽々子様？」

幽々子は一步湖面へと足を踏み出す。僅かに波紋を生じさせながら幽々子はゆっくりと湖の上を歩いていく。

その姿に習い、流司もまた幽々子の後に続くようにして水面を歩いていく。

三人の中で唯一水面を歩くことのできない妖夢は慌てて宙に浮かんで幽々子と流司の後を追う。

「湖に映った満月を見て」

幽々子に促されるように流司と妖夢は視線を動かす。

「……あの満月は変ですね」

「ああ、割れているな」

そこに映し出されていた満月は不自然であった。

円として映し出されているはずの満月は二つの半円として水面にある。

微かな風に波立った湖面の所為ではない。歴然たる事実として二つに分かれていた。

流司と妖夢は空を見上げ月の姿を確認するも当然頭上の月が割れているなどということはない。

「水面に映った月は幻。では、本物との違いはどこにある？その境目を消してしまえば、幻は本物となりえるかしら？」

「ひょっとして……」

「まさか……」

幽々子の言い回しに妖夢と流司は同時に脳裏に閃くものがあった。

「紫（様）が……？」

「正解」

流司と妖夢が同時に導き出した言葉は真実であった。

「そう、紫が幻の月と本物の月の境界を失わせたのです。だから

「

幻の月の上まで歩いていった幽々子をぱっくりとした穴が飲み込んだ。

「あー！」

「なるほどな」

驚く妖夢に納得する流司。

しばし、思案顔で考えを巡らせた流司も、

「先に行くな？」

幽々子に続くようにして穴へと飛び込む。

「ちょっと待ってくださいよー！」

取り残された妖夢もまた慌てるようにして大穴へと飛び込んでいくのだった。

水面は四方から打ち寄せる波で複雑な凹凸を見せていた。

それはそこが幻想郷ではないということを実に示している。

「ここが……？」

「そう、ここが月の“海”よ」

磯の香りがするなどということを感じることにはなかった。

それ以上に月に海があるということが流司にとっては衝撃的な事実であったからだ。

流司のイメージしていた月は砂と石、岩だらけの荒廃した大地。

重力は地球の六分の一で、大気はない。そんな場所であった。

しかし、流司がいる場所はそのようなイメージとはかけ離れた場所であった。

見渡す限りの水で覆われた水平線はその場所が地球ではないかという疑念を流司に抱かせる。

けれども、その疑念は夜空に浮かぶ黄金が蒼穹に変わっていたことで払拭される。

blue marble

まさしく、そこにあったのは他ならぬ『地球』の姿であったから

だ。

そこまで、思考を働かせたことで流司はようやく幽々子が“裏”といった意味に気付く。

そして、月という場所の本当の姿も理解し始めた。

月に文明があるということは輝夜や永琳を通して流司も知っていたことだ。

しかしながら、そのイメージというものは所謂ところのSFの中での月面基地のようなもので、それを幻想郷のように外から視認できないようにしているのだと考えていたのだ。

その考えは間違っているものではない。ただ、その程度を低く流司は考えすぎていただけであった。

「さて、妖夢も来たことだし、ここから先はどうしたものかしらね？」

流司に続き妖夢も穴を抜けてきたことを幽々子は確認すると悩ましげに呟いた。

「な、何も考えていないのか……？」

「だって、紫には“月に行ってくれない？”としか言われてないもの。ここからは自由時間よ」

「……………」

あっけらかんとした様子で話す幽々子に流司は黙るしかない。

流司の浮かべている表情は宛のない旅に付き合わされている人のようなものであった。

「ならば、ここからは別行動じゃ」



「「「!?!?!」」」

幽々子の問いに答えたのはいるはずのない四人目の声。

否、いるはずのないという言葉は誤りであろう。

それは初めからいたのだから。

あまりにも自然に幽々子、妖夢、流司に続く四人目として存在していたのは銀の長い髪を柵引かせた女性。

「望<sup>ねしみ</sup>……」

“朔”の本来の姿たる“望”の姿がそこには悠然とあるのだった。

頁百八十七、『幻から真へ』（後書き）

「筆にペン、メモ帳に半紙ですか……」

標的を机へと変えた早苗を待ち受けていたのは何の変哲もない文房具の数々であった。

机という場所を考えればあって当然なものであるだけに早苗は淡々と手を動かしていく。

引き出しの一部には本などのものもあり、その一部の中には早苗を送った手紙も丁寧に保存されており、自然と早苗の表情は喜色満面になる。

だが、早苗が求めているものそんなものではない。

いくら、自身が懸想している相手が自分が送った手紙を大切に保存しているからといって、それが早苗の探索の手を休めることにはならない。

具体的に何を求めているといったようなものは存在してはいなかった。

しかし、こんな程度のもものでは早苗が満足していないのは確かである。

「むう、手強いですね」

まるで夫の浮気を調べる手付きで流司の机を探る早苗が言葉を漏らす。

早苗の気分としては当たらずも遠からずといったところであるので、流司にしてにれば知らぬが仏といったところか。

尤もどちらも神職者であるが。

「それにしても何も無さ過ぎです。それでも流司さんは男ですか！

「！」

この巫女、本人がいないことをいいことに言いたい放題である。むしろ、好きな相手がそうだったもの（……………）を持っていることを喜ぶべきであろう。

だが、早苗の思考は想像の斜め上の更に上をひた走る。

「まさか！？不能！？」

もう一度言おう。

本人がいないからといって言いたい放題だ。

その上、年若い乙女が言う台詞ではない。

「いえ、女性に興味がないという可能性も……………そういえば学校では浮いた話の一つもなく。燧希さんとはかり……………」

早苗の思考は止まらない。斜め上どころか、既に地表に出ているか怪しいアンダーグラウンドである。

「……………あれ？開きませんか？」

引き出しを開こうとした早苗の手が止まる。

ピクリとも動かない引き出しを訝しむように早苗は覗き込む。

「怪しいです……………でも、鍵らしきものは何もありませんし……………」

そこに何かがあることは間違いない。

早苗の勘がそれを訴えていた。

けれども、それを開く手段が一つとして早苗にはなかった。

「流司ー、いるー？」

「えっ？誰が……？」

アンケート!!

誰が来た？

どういう回答が空気を読んだことになるのでしょうか？

まあ、回答なくても突き進みますけどね（笑）

ああ、本編？

取りあえず、温度差が激しいってことで。

頁百八十八、『知るものと知らぬもの』

「望、か……？」

「うむ、久しいのう。御主人」

流司は今更ながらに首もとに手を伸ばしてみるが、案の定そこには朔の存在はなかった。

それは紛れもなく目の前にいる女性が“朔”<sup>みつき</sup>であるという証明である。

「なんで……？」

「なんでとはまた酷い言い草じゃのう。まるで我が出てきてはいけないみたいじゃ……」

流司の呆然とした様子に望が耳をへたりと垂らして落ち込んだ姿を見せる。

折角、姿を現したというのにそのような反応を主人である流司に見せられたのであればそれも当然の反応であったといえるであろう。

「いやいや！ー！そういうことじゃなくてな！？滅多に出てくることはないって言っていたからさー！」

見るからに落ち込んだ望に弁明するように流司が声を上げる。

流司が驚いてしまったこともまた無理もない。

以前に望が姿を現したときに余程のことがなければ姿を現すことはないと言っており、流司はこの程度のことまさか姿を現すことになるとは考えてもいなかったのだ。

「ふふつ、冗談じゃよ。ただのう御主人、このような場所に来ておいて余程のことではないと思えるなんぞ、随分と心臓が毛深くなたようじゃのう……」

狐なだけあり、騙すことはお手の物であるのか、落ち込んだ表情を一変させた望が笑う。

続く言葉はしみじみとした関心が含まれているもので、流司の常識が徐々に変貌しつつあることの表れでもあった。

「ん？それはどういう……」

「まあ、その辺りは追々でもよかるうて。今はまず、主らの警戒を解いてもらいたいんじゃが……」

望はそういうと幽々子と妖夢のことを流し見る。

幽々子の表情は変わらず笑みを浮かべているものではあったが、妖夢は剣に手をかけており明らかな警戒をしていた。

「……どことも知れぬ奴に気を許すつもりはありません」

「あれだけ可愛がってくれたというのに、この姿になった途端これかのう……全く、愛らしさに勝るものはないというのかのう……」

妖夢の研ぎ澄まされた刃のような言葉に望は首を竦めながら呟く。

「幽々子、妖夢。警戒する必要はない。俺の知り合いだ」

「……月に知り合いがいるようには思えないし、私にも気配を悟らせずに姿を突然現した人を信用しろと言われてもねえ……」

幽々子は流司の言葉を受けてもなお、潜められた警戒心を和げることがなく呟く。

幽々子の言葉にも確かに一理あり、望に対しての警戒を緩めないのも仕方のないことであつた。

だからこそ、流司はそれを払拭させるべく口を開く。

「いや、そいつは“朔”なんだよ」

「うむ」

「えっ？」

「なるほどねえ……」

続いた流司の説明に望、妖夢、幽々子の三人は三者三様の反応をみせる。

「って、信じるんですか！？幽々子様！？」

言葉には出していなかったが、妖夢の叫びは流司の気持ちでもあつた。あまりにもあつさり流司の言葉を飲み込みすぎているだろう。

「でも、それなら説明がつくでしょう。最初からいたんだから気配も何もあるわけじゃないし。ほら、耳もあるんだから」

「で、ですが……」

妖夢も幽々子の言葉的を射ているものであるというとは理解できていた。

だが、納得できるかはまた別問題なわけで、その視線と声には未だ疑いが残っている。

「妖夢、そう疑ってばかりでは信じる事ができるものも信じられないわ」

「はい」

幽々子の真剣な表情での言葉に妖夢は顔を引き締めて頷く。

それは主とそれに付き従う者の差を示しているようであり、幽々子の主たる姿と呼べるものであった。

「まあ、確信は私もないんだけどねえ」

「ゆ、幽々子様……」

次の瞬間には気の抜けてしまうような発言をするのもまた幽々子が幽々子たる所以であるのかもしれないが。

「ともかく、この場は貴女が敵ではないということに納得しておくわ。正体がどうであれね」

「嘘は言っていないのじゃが……」

「私も疑っているというわけじゃないわ。でも、今はそんなことを論じている場合ではないのでしょうか？」

「然り。主がそれでいいと言うのなら、我もこれ以上は言わん」

再び真剣な色を取り戻した幽々子の言葉に望は頷きを返す。



幽々子と望の二人には今がそのようなことを話し合っている場合ではないという共通の認識があったのだ。

「それで“別行動”とはどういうことかしら？」

「どうもごうもそのままの意味じゃよ。主たちは主たちで、我は御主人とこれからの行動を共にするということじゃ」

流司の意思を無視して幽々子の問いに望ははっきりと述べる。

「それはどうしてかしら？」

「そのようなこと言わずとも理解しておろう。主や小娘、我とは御主人は違うからう。小娘ならともかくとして、御主人では無理じやて」

「……そうね」

望はこの場にいる全員の様子を見比べながら言い、その言葉に幽々子もまた同意を見せる。

「主らにも目的はあるう。その傘が示しておるようにな」

と望が指を指した場所には不自然に折れ曲がっている傘の姿がある。

「これは……」

「紫のか」

「そういつこと、私の役目はここまでということ」

驚く妖夢と流司を後目に幽々子は一人その傘に納得を示した。

「望………といったかしら？ここからは貴女の役目ということなのかしら？」

「さてのう。我は偶々（・・・）ここにきて偶々（・・・）それを見つけたにすぎない。尤もこの言葉をどう解釈するかは主に任せるがのう」

「なら、そういつことにしておきましょう」

幽々子は広げていた扇子を閉じると折れ曲がった傘を持っている妖夢に近付き、じつと傘を見つめる。

「妖夢、行きましょうか」

「えっ、どこにですか？」

「それは傘それが教えてくれるわ」

「はあ………」

妖夢は手元の傘に視線を落とすが、折れ曲がっていることいがい  
はなんの変哲もない傘に首を傾げるばかりである。

「御主人はこっちで我と一緒に行動じゃからな」

「ああ………」

手招きする望の傍に流司は妖夢同様首を傾げながらも寄っていく。幽々子と望が一体何を知っているのかは分からないが、自身の判断で行動するよりはマシであるうということ流司は理解していたのでその動きは素直であった。

「それじゃあ、流司。また後で会いましょう?」

「ああ、後で」

幽々子は妖夢を伴って水面を歩いていく。

「紫が何を考えているのかは分からないわ。でも、流司にもしものことがあるようなら貴女のことを………殺してしまうかもしれないわ」

「我とて意味もなく御主人を危険に晒すような真似はせん」

「………そう。尤も私もどうしてこのようにことを言っているのか分からないのだけど」

「………亡霊とて心はある。むしろ、心があるからこそその亡霊じゃ。その心に素直に従うのも時にはいいじゃろっ」

「覚えておくわ」

すれ違いざまに交わした会話を知るものは幽々子と望の二人だけであり、背中合わせになった両者が再び向き合うことはない。

そして、交わされた言葉の真意を知るものもまた二人しかいないのだった。

「……………」

「……………」

そこにあつたのはただの無言だ。

それ以上でもなく、それ以下でもない。

ただただ、張り詰めた空気だけがそこには広がっていた。

その空気を作り出している両者が互いに互いを嫌いあっているか  
といえはそのようなことはないだろう。

そこまでの顔見知りではないので、明確な感情が芽生えているか  
も怪しいと言える。

だが、互いに敵であるかと問われればそれは限りなく否定に近い  
も確実なる肯定となる。

彼女と彼女はある意味で歴然たる敵同士であった。

彼女らが互いにこの場、『博麗神社』に足を運ぶことはほとんど  
ない。

それ故にそこでの遭遇はまず有り得ない、有り得ないはずであつ  
た。

しかし、現実時は時として面白く、三つ目の有り得ない……………  
（がそこには加わることとなる。）

トットットットット。

『博麗神社』の中から聞こえる足音。

それは今であればただ一人のものでしかないはずであった。

けれども、今であったからこそその一人のものではなかった。

「はい。どな」

言葉が最後まで告げられることはない。  
代わりに作り出されるは沈黙。

「……………」

「……………」

「……………」

ただし、先ほどまでとは異なり沈黙それを作り出す要因は二つから三つへ、いや二人から三人へと変わっていた。

「……なんで貴女たち（お前たち）がここにいるんだ（のよ）（で  
すか）！？」「……」

奇しくも彼女たち、『藤原妹紅』、『アリス・マーガトロイド』、  
『東風谷早苗』の言葉は寸分違わず重なり合うのだった。

一人に決まらなければ二人とも出せばいいじゃない。  
つうことで、登場も妹紅にアリス。  
下手をすれば緋想天前に崩壊しそうな『博麗神社』。  
うん、ヤヴァイ。

本編は後書きとは違った意味で張り詰めています。  
まあ色々。

ヤヴァイといえば台風もヤヴァイ。

西日本にお住まいの方でどれだけの方が読んでくださっているかは分かりませんが、お気をつけください。

特に四国と中国地方、近畿の西側の方にお住まいの方ですね。

巖島は大丈夫だろうか……

頁百八十九、『月見え無き夜に語る』

静寂。

虫が鳴くこともなく、妖怪が蠢くでもない。そこには静かな闇に包まれた夜があった。

「綺麗な月ね」

「ほう、姿も見えぬ月を見るとはのう」

空には月の姿はない。闇夜を照らすのは幽かな星の瞬きだけである。狂おしく輝き、他を狂わせる輝きは影しかなかった。

「あら、“無月”という言葉があるじゃない。無いものを在るものとして楽しむのもまた風情というものよ」

金の髪を夜に映えらせた紫は詠うように呟いた。  
天を仰ぐその瞳にそこにあるはずの月の姿が確かに映っているよ  
うであった。

「“雪月花”を愉しむか……今一時にしかできぬことかもしれんのう」

雪が積もる頃には花がなく。

花が咲く頃には雪がない。

月は何時の夜もあれども美しきときあり。

雪月花という言葉の全てを満たすことのできる季節は酷く短く、  
時によっては満たすことのない場所もあった。

「皮肉として受け取って貰っても良かったのよ？」

「御主人から授かりし名じゃ。そのようには思えんよ。それにしても、どのような用じゃ？わざわざこのようなことをして？」

そう言つて、“望”は“朔”の身体で呟いた。

細い体躯の管狐の姿。

望としての意識が現れるはずのないその姿で望は言う。

「それは勿論貴女に話があったからよ。“朔”のままでは聞くことはできても話すことはできないでしょうし。尤も意識の境界を弄ることで貴女の意識を表に出すことが精一杯だったのだけど」

「仕方あるまい。あやつがしたことじゃ、妖怪である主がどうこうできるものではあるまい。我の意識を引き出すだけでも十分に規格外じゃよ」

「誉めてくれるのかしら？」

「何をどうすればそうなるというのじゃ。御託はよい、疾う用件を話さんと時間がなくなる」

管狐らしからぬ威厳をまとつて望が言う。

紫も一瞬だけ残念そうな表情を浮かべるもすぐに遊びの全く感じられない顔に変貌する。

「そうね。そうしましょう。今度、月へ行くわ。目的はちよつとした仕返し。貴女は知らないだろうけど、昔に痛い目をみてね。そのお礼をしようと思うの」

「ほう、それで？」



感心してみせたものの望にはそれほど興味はないことであった。  
なにしろ自分が寝ていた間のことだ。直接目にしたわけでもなく、  
直接関わったことでもない。

「ついでに流司を連れて行こうと思うのよ。いえ、こっちが本命。  
さっきのは隠れ蓑。どちらも私が望んでいることには変わりはない  
のだけど……」

「うむ、で？」

望はその先にある真意を紫に尋ねる。

着飾った言葉になど興味はなく、求めるのは果肉ではなく種であ  
った。

「で、って……月がどのような場所であるかは貴女も知っているの  
でしょう？」

「遠く昔に大地を捨てた者たちの住む場所じゃろう？我がまだ名も  
なき妖狐だった頃にそのような人もおった気がする。穢れなき地か  
……元はといえばそこに住む者たちも所謂“穢れ”のある者であつ  
たというに。む、話が逸れたのう、それがどうしたというのじゃ？」

遙か昔に思いをはせるようにした望がしばし語ると紫に尋ねる。

「そこまで話していながら分からないの？寝過ぎてボケたんじゃな  
い？」

「戯け。主こそ、いちいち回りくどいのじゃ。少しは簡潔に話すこ  
とを覚えたらどうじゃ？」

「秘密は女を美しくするのよ」

「……………主のはただ胡散臭いだけじゃろつが」  
罵り合う美女と管狐。

それだけでもシユールな光景であるといつのに互いの表情が真面目であるところが更にそれを助長している。

「ごほん、貴女が言ったように月は穢れのない地よ」

「（自覚はあるようじゃの……………だから、それがどうしたといつのじゃ？）」

内心で狐らしい笑みを浮かべた望はそれをおくびにだすこともなく紫に訊く。

「此の地から彼の地へ行く。まだ分からない？」

「ッ！？そついうことが……………しかし、それは」

「ええ、分かっているわ」

息を飲んで望は器用に管狐の身体で驚きを示して口を濁らせる。  
紫も望が言いたいところは理解しているの言葉を遮るように頷きを見せた。

「ならッ」

「それでも私はなさねばならないのよ。だからこそ、貴女にお願いするのよ」

「むう……」

紫の真摯な声に望は唸りをあげて黙り込む。

もし、その姿が管狐でなかったのなら腕を組み眉間に皺を寄せていたことだろう。

「お願いできるかしら？」

紫はその“お願い”の内容を口にするのではない。

口にせずとも望には理解できていることであつたからだ。

「委細承知とは言えん。それに我が御主人を連れていくことは難しい。その分だと主が連れていくことも難しいのじゃろう？」

「ええ、まあ。でも、そつちはあてがあるから大丈夫よ。軽く“朔”としての深層心理に働きかけてくれるだけでね。それで引き受けてくれるのかしら？」

「できるだけのこととはしよう。少なくとも御主人が死ぬようなことは極力避けるようにするのじゃ」

「絶対とは言ってくれないのね」

目を伏せて紫は言う。

「時期尚早というのが我の本心じゃ。確実性を求めるならもう少し時間を置くべきじゃ」

「……そうね。でも、お願いするわ」

伏せていた瞳をあげると紫は望に頭を下げる。

「分かっておる。じゃが、何故……？」

「“約束”なのよ……」

……

……

…

「（“約束”の相手は私の知るものなのかは分らんのか）」

「望」

「なんじゃ？」

流司に声をかけられたことで望は思考を打ち切り顔を流司の方へと向ける。

「俺たちはどこに向かっているんだ？」

「そうじゃのう……向かっていると言えばそうなるし、そうではないといえばそうなるしのう……」

流司の問いに望はどこかはぐらかすようにして応える。

「意味が分からないだが……」

「まあ、じきに分かる。ほら、噂をすればの……」

望は歩みを止めて呟いた。つられるようにして流司も足を止める。

「まさか、まだ鼠が潜り込んでいるとは思いませんでした。両方とも囿だったとは……」

そこにいたのは帯剣した女性。

その視線は鋭く流司のことを射抜いている。

「ですが、人選は間違えたようですね。疾く立ち去りなさい。なれば、容赦はしません」

凜と宣言しその少女は流司へと切っ先を突きつけるのだった。

頁百八十九、『月見え無き夜に語る』（後書き）

「どうしてここに？」

そう、口火を切ったのは誰であったか。

少なくともその場にいる三人の共通認識であったことには変わりないだろう。

「私は少し流司に話があったからよ」

とまずアリスが口を開き、

「私も似たようなもの」

と続いて妹紅も口を開く。

「私は流司さんの留守を預かっているだけです」

と早苗は真実でありながらも嘘を語る。

三つ巴かつ三竦み。

互いが互いを牽制し合う緊張感からか肌を刺すような視線の応酬が繰り返される。

もし、この場に流司の姿があればキリキリと痛む胸を押さえて早々に撤退することになっていただであらう。

そういった意味では流司不在の状況は流司にとっては幸運であったかもしれない。

尤も流司が不在であったからこそこのような事態になったという捉え方もできるのだが。

「止めましょう。こんなことしていても不毛です」

真っ先に現状からの進展を目指したのは意外なことに早苗であった。

軽く息を吐くようにして早苗は首を振る。

「そうね。確かにその通りよ」

早苗の言葉に同意したのはアリス。

アリスもまたここで牽制し合っていることが、無駄なことであると十分に理解していた。

「ですから、“お茶漬け”でもどうですか？」

「全然、止めるつもりなんてないじゃないの」

早苗の言葉の意味を正しく悟った妹紅が表情を堅くしたままで呟いた。

「チツ」

「何か言った？」

「いえ、何も」

鋭く睨む妹紅に早苗は首を振って笑顔で答える。実に猫を被るのが上手である。

「でも、流司がないんじゃないかここにいる意味は確かにないわね」

アリスは仕方がないと自身に納得させるように呟く。  
それもまた事実。

流司を目的としていただけに、その流司がいなければアリスにも妹紅にも『博麗神社』には用はなかったからである。

「では、早くお帰りを。私は探索の続　しまっ……………」

「へえ、何をしているのか、是非とも教えていただきたいわね」

「私も」

早苗の失言によって事態は進展を迎える。それが良い方向であったかは定かではないが。

どちらも混迷窮まる展開です。

後書きはおいておくとして本編はこの幕で主要な伏線はしききる予定。

シリアスな展開が続きます。

後書きはカオスな展開に至るかもしれません。



「殺<sup>や</sup>る満々じゃのう……」

「果てしなく字が気になるんだが……」

刃を向ける少女を眺めて望が口を開いた。

その眩き通り少女の敵対の意思は揺らぐようには見えない。

流司に向けられている刀は紛れもない真剣であり、背筋が徐々に凍ってくるような空気に流司はもはや馴染んでしまっているデジャヴを感じていた。

「気にするでない。どの道結果は変わらんじやろつて」

「その結果を是非とも変えていただきたいんだけどな」

「無理じゃ」

「だよな……」

望の即答に流司は諦めたように肩を落とす。

過去に一度としてこれと似たような状況に遭遇して、何事もなく脱したことはない。

ただで終わることはないということは願わずとも流司の胸の中に確信があった。

「まあ、諦めることも大切じゃ。潔く斬られるのも男らしいとは思わないかのう、御主人？」

「他人事だと思つて……」

「実際、他人事だからのう」

「はっ？」

望のその一言に流司は目を点のよつにする。  
それだけ衝撃的な一言であつたからだ。

「だから、他人事じゃと言つとるんじゃ。のう、そのの娘？」

「娘と呼ばれることは些か遺憾ですが、その通りです。私が用があるのはその人間だけです」

望の問いかけに少女は流司へと向けた刀の切っ先をぶれさせることなく答えた。

「なんで!？」

「……ほんと、何も知らんできたのじやのう、御主人」

驚く流司に望は呆れているようで同時に憐れむような視線を流司に向けて呟いた。

「月に行くことになつて一日も経っていないからな、俺は」

「まあ、普通は関わることの方が珍しいの。仕方のないことかもしれんか」

流司の言葉に望は無理もないことであつたかと、自身を納得させ

るように呟く。

「御主人、月がどのような場所か知っておるか？」

「幽々子様！！」

「なに？妖夢？」

どこか焦りを含んでいる妖夢の声に幽々子はのんびりとした口調で声を返した。

「良かったんですか？流司さんと別行動になってしまっても？」

「いいのよ。残念だけど一緒にいても邪魔になるだけだから」

「邪魔、ですか？」

「そう、邪魔」

幽々子ははつきりと妖夢に答える。

月で幽々子が行動をするにあたって流司の存在は邪魔である以外のなにものでもなかった。

それは何故か？

「妖夢、貴女は月がどのようなところであるかは理解しているわよね？」

「えっ、と……穢れない地でいいんですね？」

「そうよ。穢れないところ。それが月」

妖夢の答えに幽々子は満足そうに笑みを浮かべた。

「なら、この“穢れ”とは何のことか分かるかしら？」

「“穢れ”ですか……？」

続いて尋ねられた妖夢は先ほどとはことなり幽々子の言葉に即座に答えることができない。

「“穢れ”といっても捉え方は様々よ。単なる汚れもまた“穢れ”ではあるしね」

「はあ……」

「でも、ここで言う“穢れ”は別の物。『服喪』や『産穢』さんえといったものこと」

“穢れ”という言葉にもまた様々な意味の捉え方が存在している。単純な汚れから名誉を傷つけられることなど、その意味は実に幅広い。

その中でも特に月でいわれる“穢れ”というものは生命に伴うことで生じるもの。

即ち、『寿命』のことを示している。

「既に浄土の存在である私に“穢れ”という概念はない。妖夢は半分は人だけど、隠せないこともないでしょう。そして、あの狐は神、

彼女もまた“穢れ”という概念からは外れている存在よ」

「えっ？ちよつと待ってください。あの狐は神なんですか！？妖怪じゃなく……？」

「あら？気付かなかつたの？元々は妖狐であつたのでしようけど、彼女は紫のこの式よりも存在としては格上の存在よ」

「全く気付きませんでした……」

妖夢は愕然として落ち込むが、それもまた無理のない話である。幽々子や妖夢の知らぬ話であつたが、望は巧妙に自身が“空狐”という存在であることを隠している。

正確に言えば隠さなくてはならない境遇にある。その為の朔という管狐である仮初めの身体を持っているのだ。

それは一時的に本来の姿を取り戻した時でも変わらず、その神性に気付くのは難しいと言えるものであつた。

「話を戻すわ。でも、流司は違う。流司は人間よ。“穢れ”の多く孕んでいるね。その存在は“穢れ”に敏感な月ではすぐに見つかつてしまう。だからこそ、邪魔なのよ」

そう、唯一人間である流司だけが穢れのある存在であつた。

そして、それは同時に潜入したことを露呈させる最大の要因でもあつたのだ。

「でも、それって……」

「そう、今頃はもう遭遇しているはず……月の防人と……」

「つまり、神としての性質のある望は“穢れ”がないから排除される要因が無く、人間である俺は“穢れ”で溢れているから排除されると……?」

「然り」

「因みに帰ることはできないのか?」

「我には道を創ることはできんのじゃしな、不可能じゃ」

望からの話で全てを知った流司は冷や汗を垂らしながら尋ねるも望は首を振って言うだけであった。

「さて、理解していただけた?」

痺れを切らしたかのように少女が言う。

「まあ、どうしようもないということ。この場を切り抜けられればなんとかなるのか、望?」

「少なくともこの場を切り抜けられなければどうにもならないということは間違いないのう」

「確かに。望、いけるか?」

流司の呟きは戦いの幕を上げる為の確認の烽火。

当然、望もその言葉に

「すまん、無理じゃ」

「はい？」

頷くことはしなかった。

流司が拍子の抜けた声をあげて振り返る。

そこには首に扇子を当てられた望が両手をあげている姿がある。

「すまないのう、御主人。些か油断しすぎていたようじゃ」

「望……」

「余所見とは随分と余裕があることね」

斬ッ。

咄嗟に振り返り一歩退いた流司の目の前を剣閃が走る。

ハラリ。

と数本流司の髪が水面に舞い落ちる。

「ちょっと待っては」

閃。

「だよな……」

剣をもって返された返答に流司は深く納得の溜め息をつくのだった。

「そう、これが……」

「確かに鍵穴らしきものはないわね」

「絶対怪しいです」

「……気になる……」

世の中、何が起こるか分からない。

今の状況はまさにそれを示していた。

今の今まで三竦みの状態で互いに牽制し合っていたアリス、妹紅、早苗の三人は流司の机の開かずの引き出しの前に一致団結していた。一転しての“三人寄れば文殊の知恵”状態。

全くもって世の中とは度し難いだろう。

その経緯は単純なものだ。

早苗が全てを話しアリスも妹紅も駄目だと理解しながらも興味を抑えることはできなかったというだけ、それだけの話である。

止めたところで早苗が言うことを聞くはずもなく、であるならば自分たちもというアリスと妹紅の参戦。

集団意識とは恐ろしく、既にアリスと妹紅の心にはその引き出しをどうすれば開けることができるのかという疑問しかなかったのだ。つた。

「力づくで開けることもできなくはないけど？」

妹紅が指先に火を灯しながら言う。

妖怪退治などで培った技術をもってすれば引き出しの壁面だけを



燃やすことなど妹紅にとっては容易なことであった。  
全くにして力の無駄遣いであるが。

「それは流石に駄目よ。机が無償で引き出しを開けないと。鍵穴でもあれば簡単なんだけど……」

引き出しを開けること自体が駄目であるということにはもう気付くことができているアリスが妹紅に言う。

鍵穴があれば……

アリスの手先の器用さであればピッキングも簡単であった。人形遣いとしての実力はそのまま手先の器用さにも直結する。

妹紅同様に力の無駄遣いであることには変わらないが。

「鍵穴がないのだから仕方ありません。こうなったら私が奇跡を……」

早苗の血によるその能力による開錠。

最も自然な形で引き出しを開けることができるかもしれないが、三人の中で一番の力の無駄遣いであろう。

「ちょっと待って。ここに何か彫ってあるわ」

早苗の行動を止めてアリスが机の隅を指で指し示す。

「これは『霖』の字？」

「一体どういふことでしょう？」

「なるほど……」

首を傾げる妹紅と早苗とは異なりアリスは一人納得した声をあげる。

「開け方が分かったのですか!？」

「いいえ、でも、開け方を知っているだろう人は分かったわ。『森近霖之助』、魔法の森の入口にある『香霖堂』の店主よ。恐らくこれはその店主が作った机ね。流司もそれなりに親しい間柄だったはずだから」

「これは銘だったってことね」

アリスの説明に頷きながら妹紅が呟いた。

「分かりました。その人が諸悪の根源なのです。今からしよつぴいてきます!!」

そう言つと早苗は目にも止まらぬ速さで部屋を出て行く。

この一時の速さだけはかの烏天狗すらも上回るほどであった。

ミイラ取りがミイラになった。

ちよつと違うな、朱に交われれば赤くなるかな？

仲間を増やしていざ“引き出し”<sup>ラスボス</sup>へ。

と思つたら早苗は戦線離脱。留守番のはずだよ、ね。

こーりん逃げてくな回。

本編では逃げられなくなった主人公。

ただの人間ですもの当然見つかります。

トッ。タッ。

複雑に凹凸を作り出している水面に新たな波紋が二重、三重に広がっていく。

文字通りの意味で水面を跳ねるようにして剣戟を交わしていく流司。

ながもの長物を振り回す少女はそれを追いかけて続ける。

動きを遮ってしまうような障害物は四方にはない。ただ、見渡す限りの水が続いているだけであった。

それが流司と少女、どちらに大きな利があるのかは定かではない。ほぼ自由に避けることができるが、盾とする物もない流司。

ほぼ自由に刀を振るうことができるが、相手を追いつめることのできない少女。

この場の環境は流司、少女双方に利と害をもたらしていると言えよう。

条件は同じ。

であれば、戦いの優劣を決めるのは純粹なる技量、力の違いだ。それは戦いが拮抗するほどにじわりじわりと清水が湧き出すように露わになっていく。

キンッ。

「（力加減を間違えると簡単に折れそうだッ！）」

流司の鉄扇と少女の真剣がぶつかり合い、金属同士の固い響きが弾ける。

即座に込めていた力を抜き受け流すような形で刃を弾いた流司が心で叫ぶ。

鉄扇というものは薄い鉄板を重ね合わせた物だ。束としてみた場合は強度はある程度の保証であればあるが、それぞれの骨は比較的容易に折れる。

決して、そうなど刀を受け止めることのできるようなものでなく、護身という観点であれば懐剣でも忍ばせていた方がよっぽど有効であろう。

「（これはもう使い物にならないかもな）」

剣戟を受け止める流す度に歪み骨に亀裂が入っていく鉄扇を見て流司は思う。

妖怪の山で使用して以来、手入れをする間もなく連続しての使用。それも本来、一時の時間稼ぎのために使うものを主の武器として用いているのだ。寿命がきたとしてもおかしくはない。少なくとも、衝撃で歪に曲がった鉄扇が再び開くということは有り得ないことであつた。

「おい！！！」

「なんですか？」

持てる技量を駆使して己の身を守り続ける流司が叫ぶ。

少女は攻勢の手を休めることはないが、律儀に流司の声に反応を示す。

「お前たちは“穢れ”を嫌うのだろうか？なのに俺を殺していいのか？」

流司の問いかけは尤もなものであつた。

“死”は最も忌避されるべき“穢れ”の一つである。

月という場所が“穢れ”を嫌う場所であるのならば、命を殺めることは生命が月に侵入することよりも避けなくてはいけないことであるはずである。

「確かに月で殺生を行うことは好ましくはありません」

「ならっ!」

「ですが」

閃ッ!!!

「一度の過ちから学べぬ愚者には痛みを持ってその愚かさを理解してもらわねば。ようは死ぬことがなければいいのです。腕の一本や二本はなくとも変わりないはずです」

横薙ぎに振るわれた刃はあまりにも簡単に流司の袖を切り裂いた。流司と少女の距離が少しでも近ければ、その閃きは流司の胸をあっさりと開いていたことであろう。

「二本も腕を落とされたら出血多量で死ぬっての!!」

「死ぬときに月にいなければよいのです。後のことは私が知ることではありません」

月での死を迎えないのであれば、流司の命の灯火が潰えることになろうとも少女の気にするところではない。

死ぬ前に流司を地球へと送り返してしまえば良いのだから。

「（説得は無理か……）」

月という場所を考えての自身の命を張った説得が失敗に終わったことを流司は悟る。

少女は実際、流司の腕を落とす程度の傷を与えて流司に痛みを刻まない限りはその攻撃の手を止めることはないであろう。

「（いつそのこと、大人しく一太刀浴びてしまうか？）」

思考。

「（何を馬鹿なことを。言っていたじゃないか、あくまでもここで死ぬことがないだけだ）」

棄却。

「（ならば、倒すか？能力を使えば……）」

思考。

「（いや、無理だ。技量はどう見ても高い。下手な奇襲など通用するはずない）」

棄却。

「（望を助けて二対二の状況に持ち込むか？）」

思考。

「（だが、望を抑えている相手がどれだけのものか。それに助けるといふことは注意を望へ傾けるといふことだ。そんな隙を見せられるほどの余裕はない）」

棄却。

思考と棄却の繰り返し。

現状を打開すべく流司の思考は加速する。

だが、その全てが棄却され、解決策が決まることはない。

「余所見ですか？随分」

「余裕なんてない！！」

ダンッ。

それは水面を踏みしめた音ではなかった。

されど、流司の足下にあるは水のみ。

流司は水面を大地のように踏みしめた。

震脚。

もし、足下に広がっているのが地面であれば、生じた衝撃は少女の動きを止めただろう。

だが水は衝撃で大きくうねりをあげ、流司を中心に水塊の壁を作り上げる。

「その程度の目眩ましなどッ！！」

少女は迷うことなく刃を振り抜いた。

その選択は限りなく間違いではない。

壁を作り出しているとはいえ、所詮はただの水。切り裂くことができないはずもないのだから。

その上、流司を中心に行っているということはそこに流司がいる証明でもある。

少女の力をもってすれば流司がそこより退くよりも早く刀を振り抜くことも容易であった。

だからこそ、少女の行動は間違いではない。しかし、それはあくまでも限りなくという制限がつき、その一時に関しては間違いであった。

「えっ？」

吸い込まれるように伸びていく刃を水の壁に隠れた流司は受け止めるでもなく、受け流すでもなく、絡め取った。

流司の初めての行動に少女は声を漏らす。

既に遅い。

勢いを殺すことなく腕をとられた少女の身体は声を漏らしたときには既に天地が逆転し、視界に映るは底の見えない海であった。

制動をかけることもできずに加速していく少女の身体は水面に近づく。

自身が投げられているという感覚は少女の中にもあった。

とはいえ、下に広がっているのは水。受け身をとることができなくともさほどダメージを受けることはないという思いが少女にはあった。

「カツ、ハッ！！」

それが二度目少女の間違いだった。

確信のあった油断を抱きながら少女は硬い水面へと叩きつけられ声にならぬ声をあげるのであった。



「えっ、と、どうする？」

早苗が消えていった方向を見て妹紅が口を開いた。

流石の妹紅も流司の部屋にアリスと二人取り残され、これからの行動を独断で決めるようなことはできなかった。

流司と関わるようになって比較的性格も社交的になりつつあることも、妹紅がアリスに声をかけた要因の一つであった。

「待つしかないでしょ。あの勢いだったら、最低でも開け方はきちり調べてくるでしょうし」

妹紅の問いにアリスは首を振って答える。

今更、帰るなどという選択肢は存在していなかったため、待つというアリスの言葉は訊くまでもないことではあった。

「……で、何してるの？」

「何って片付けよ。色々と散らかしてしまっているし……」

散乱というほどではないが、机の周りは手をつけたことで少々汚れていた。

アリスが片付けを必要だと思ったのも納得ができよう。

「そう言いつつ棚に近付いていくのはどうしてかしら？」

「ッ！？そ、それはそうよ。ちょっと、不要なものをしまっただけよ。決して、少しくらい見てもいいかななんて

思ったわけではないわ」

妹紅の指摘に明らかに狼狽えて声をあげるアリス。

あまりの狼狽えに自身で墓穴を掘っていることにすら気が付いていない。

「……………」

「ぐっ…………、つう……、ええ、そうよ。気になるからこっそり見てしまおうかなあ……なんて、思いもあつたわよ!!」

妹紅のじとつとした視線にアリスは顔を赤くして声を張り上げる。聞き直ったとも言えよう。

「そういう、貴女だってさっきからチラチラと柵の方を見てるじゃない!？」

「そ、そんなこと……………」

「完全に泳いでいる目で言われても説得力は皆無よ!」

「ッ……!？」

お返しとでも言うようにアリスは妹紅に言い返す。

あえて言おう、“どんぐりの背比べ”であると。

「……………」

「……………」

互いに黙り込み沈黙が流れる。

「……大丈夫よね？」

「……たぶん」

どちらともなく頷き妹紅とアリスは棚へと近付いていく。  
二人を止める者もまたその場にはいないのであった。

『早苗のドキドキ留守番録』

『早苗 + のドキドキ探索録』

にタイトル変更した方がいい気が……  
既に留守番など誰もしていなくて、早苗においては『博麗神社』に  
いません。  
どうしてこうなった。

本編は実は鉄扇ってそこまで使えないという……  
それでも先手を取りましたが、本気ではないからなあ……

「何を!？」

一瞬意識が揺らいだことで生じた視界の霞を振り払いながら少女は声をあげた。

その身体は既に流司から大きく距離をとっており、流司を睨む視線は警戒心の高まりを示している。

予想もしていなかった現象を己が身をもって経験したのだそれも当然のことであった。

「軟らかい”から”硬めた”。ただ、それだけだ」

そんな少女の様子に流司は悠然とした口調で答えて見せる。

その姿が少女 『綿月依姫』の警戒心を更に高める。

一方の流司といえば、その悠然さはただの見せかけに過ぎなかった。

「（意識を刈り取りきれなかったか……）」

流司は依姫に気付かれないように歯軋りをする。

依姫が油断を見せていた先ほどまでが、先の一撃が流司にあった最初最後のチャンスであった。

そこで依姫の意識を奪うことができなかつたということは流司にとってあまりにも大きな損失であるといえた。

長い時間依姫の意識がない必要は全くない。

一瞬でも流司が依姫から意識を離すことができればそれは望の解放をもたらすことができる可能性が大きく高まることになるからだ。しかし、逆にこの一撃で流司が依姫の意識を刈り取ることができ

なかったということは流司が更なる劣勢に追い込まれるということに他ならなかった。

依姫には油断があった。それは紛れもない事実であった。

それは依姫が先程まで対峙していた相手と比べて流司の技量が数段劣ることを見抜いていたからである。

だが、流司の先の一撃はその目測を改めるには十分であった。

こうなってしまうえば、流司に付け入ることのできる隙など依姫が作り出すことはなく、仮にあってもそれは完全なる罠でしかない。

即ち、流司に残された術は事実上ないと断言できるものであったのだ。

「（後は望がなんとか切り抜けてくれることを願うしかない、か…  
…問題はそれまで俺が時間を稼ぐことができるかということところか）」

背後をとられピクリとも動いていない望に視線を向け流司は考える。

望の背後をとっている相手がどれだけ力を持っているのかは流司には分からなかった。

少なくとも容易にどうにかできる相手ではないことは確かであった。それは望が動けずにいることがなりよりもの証拠である。

空狐である望の力は大抵のものが肩を並べることができるような括りには組みしていない。

幻想郷で最高位に属している『風見幽香』を簡単にあしらったことからそれは窺えることであろう。

だからこそ、その望が動かないということはそれだけの理由が存在しているということである。しかし、望がそのままなすがままになっていることはないだろうということも流司は分かっていた。信じていたと言えよう。

流司は望が必ず窮地を脱してくれると信じていた。

そう、だから、流司は“それ”に気が付くことなく視線をすぐに

依姫へと戻した、戻ってしまった。

もし、流司が“それ”に気付くことができなければ、今後の展開が変わっていたかと問われれば明確な答えを出すことはできないだろう。

けれども、流司が“それ”に気が付くことができなければそこで戦いは終わっていたことだろう。

それほどまでに“それ”、望が感情を見せない表情で流司の戦いを眺めていた』ということには大きな意味があったのかもしれない。

「分からないわ」

「何がじゃ？」

望の背後を現在進行形でとっている少女 『綿月豊姫』は呟いた。

「貴女がこうしている理由です」

「それは主がこうして後ろにおるからじゃろう？ 我に突きつけているその扇子、単なる扇子ではあるまい？」

豊姫の呟きに望は振り返ることなく答えた。

確かに豊姫が持っている扇子は月の最新兵器であり、単なる扇子ではない。

そういった意味では望の警戒は正しいものであった。

「いいえ」

だが、豊姫は静かに首を振った。

「私では貴女には勝てない。絶対なる事実としてね」

「……………」

「神に勝てないなんてことは言わない。下級の神や神獣であればどうにかできるという自負もある。でも、貴女はそういう存在ではないでしょう?」

「……ほう、それなり眼力はあるようじゃの」

豊姫の目には望の顔は映ってはいなかったが、望の感心したような声からどのような表情をしているかは予想するに容易いものであった。

「お褒めいただき恐悦至極。ついでに私の疑問に答えていただけると嬉しいのですけど……」

「我が今の状況に甘んじているわけか? まあ、確かに今の我でも主に勝つことはできるじゃろうな。　こんな風にのう」

「ッ!?!?」

刹那。

豊姫が知覚したときには既に望は豊姫の手から扇子を奪い、その背中に突きつけていた。

一瞬という言葉すら生温い出来事に豊姫は背筋が凍りつくことを

感じていた。

「まあ、主程度であれば赤子の手を捻るくらいで済む。不意をつけば今のようじゃ」

望は豊姫の手に扇子を戻しながら笑う。

「……………」

豊姫は扇子を望より受け取りながらも無言で望を睨む。

警戒したところで無駄であろうことは身を持って経験したが、それでも警戒しないなどということとはできなかつた。

「何故助けぬか、じゃたかのう？御主人は確かに我が護るべく存在で護りたいと思う人じゃ。しかしの、あの小娘と戦ったところで御主人が死ぬことはないじゃろう？ならば、我が手を出すことではなからうて」

再び豊姫に扇子を突きつけられながら望は依姫の攻撃を避ける流司を眺める。

「…………意外と非情なのですな。あくまでも死ぬことはないというだけですよ？」

「これも一つの忠義の形じゃよ。主も他を率いる存在であるならば覚えておくがよい。助けるばかりが従者の役目ではないということをのう」

「私であれば、主人の危険を放っておく輩を従者にはしません」



豊姫の皮肉にも望は全く揺らぐことはない。  
ただ静かに流司のことを見つめるだけであった。

「死ぬことはないと言いましたね？」

「それが？」

「でしたら、その考えは改めた方がいいかもしれませんよ」

「………というと？」

低く冷たく言う豊姫に望は少しだけ目を見開いて尋ねた。

「あの人間は紛いなりにも依姫に一撃を入れた。勿論、あの子にも油断はあったのでしようけど、結果としては変わることはない。だから、あの子にはもう一分の油断も隙もない。その力をもって、一殺してしまうかもしれない《……………》程度で戦うでしょう」

「つまりは御主人が死ぬと？」

「さて、どうでしょう？幸いにしてここはまだ都からは遠い。不遇の事故が起きてしまっても影響は少なくて済みますので」

豊姫は表情から限りなく感情を消して言う。

それはある種の死刑宣告にも似た響きがあるのであった。

苛烈にして果敢。

依姫の攻撃の手が休まることはない。

何時にも増して流司の動きは防御と回避に専念される。

守ることに關しては長けているはずの流司でもやっとの思いで戦いを続ける。それほどに依姫の攻勢は強まっていた。

基本的に攻勢に移れば移るほど防御というものは疎かになりがちである。

依姫はそれを極端に攻撃に偏ることで補った。

圧倒的な攻撃は時として圧倒的な防御ともなりうるのだ。

「（まだいける。だがもうそろそろ武器の方が……）」

流司の手の鉄扇は既にいたるところに亀裂が見られ少しでも力の逃がし方を間違えるだけで碎け散ってもおかしくはない。

そのような武器でありながらも依姫の剣戟を受け流し続けることができるのは偏に流司の修練の賜物であるだろう。

「驚きです。ここまで耐えられるとはどうやら貴方の本分は守ることにあるようですね」

流司の防御は素直に依姫を感心させるほどであった。

それは流司の戦いが既に勝ちを捨てているものであったからだ。

守りに徹すれば格上の相手であっても時間を稼ぐことはできないことではない。

勝つという欲を捨てることで余計な労力も隙も作り出すこととなるからだ。

それは流司が望のことを信頼していたからこそとることのできた戦法だ。

ただひたすらに時間を稼ぐ。

それが如何に無駄なことであるかも知らずに流司は依姫の攻勢か

ら身を守り続ける。

「それに先ほどから妙な感覚が……力を逸らされている？それが貴方の能力なのでしょうか？」

依姫の問いに流司が答える気配はない。

口を開く余裕などとつくに失われていた。

仮にその余裕があったとしても流司が己が手を明かすことはないであろう。

喩え、それが依姫の指摘通り能力によるものであったとしても。

「答える気はない。いえ、既に答えることもできないのですね。なら、もう終いにしましょう」

依姫は攻撃の手を休め流司から距離をとった。

肩で息をして無心に近い状態で守っていた流司にはその場で留まることができなかった。

「『瓊瓊杵尊』よ。三種の神器の一つ、天叢雲剣の靈威を今再び見せよ……」

迫る。

流司は時間が長く引き延ばされることを感じた。  
迫る。

依姫が一足飛びに自らへと迫ってくる姿もまるでコマ送りのよう

に捉えることができていた。

迫る。

足を動かしてその場から逃げ出すことはできなかった。

迫る。

もはや、鉛のように重い両脚は倒れそうになる身体を支えることで精一杯で、気を抜けばそのまま水中へと飲み込まれてしまうだろうという確信が流司にはあった。

迫る。

だからこそ、流司は腕を動かした。振るわれる凶刃から身を守るべく鉄扇を翳す。

迫る。

受け止めることはできない。下手をすれば子供が握っただけでも砕けてしまいそうな鉄扇にそのような真似はできるはずもない。

迫る。

ならばなすのは受け流すこと。その刃が鉄扇に触れると同時に軌道を塗り替えるように誘う。

迫る。

能力を発動させることも忘れない。できるだけ最小限の力で動き

をなすために反発させ軌道をずらす。

迫る。

依姫が。

迫る。

凶刃が。

迫る。

死が。

迫る。迫る。迫る。

流司の動きは完璧であった。

刃が鉄扇に触れたと同時に能力の発動も見事に成し遂げた。

はつきりとした意識があるかどうか分からない状況下で行えたのは神業ともいえた。

間違いなくその一撃を防ぎきることのできる動きであった。

であった。

流司の動きが神業であったのであれば、依姫の技もまさしく神業であった。

そう、ただそれだけ。

それだけが流司の計算には含まれてはいなかった。

完璧な位置、角度、力加減で流司の鉄扇と依姫の刀は触れ合った。

そして、次の瞬間には刀は鉄扇を断ち切っていた。

砕くのもなく、割るでもない。

斬鉄。

寸分の狂いもなく、そこに鉄扇がなかったかのように刃は振るわれた。右上から左下へと。

流司の胸を深々と袈裟切りにするようにして。

赤い。緋い。紅い。

鮮血が舞う。跳ねる。流れ出す。

流れ落ちた血は月の海を穢す。

赤く。緋く。紅く。

流司の脚から力が失われる。

それは即ち、

チャポンツ。

人が一人倒れたにしてはあまりにも軽すぎる音であった。

それはまるで流司の存在の希薄さをそのまま表しているようで、

命の儂さをありありと示しているようであった。

沈み飲み込まれる。

流司の身体は命なき海へと吸い込まれる。

その水を紅く穢しながら深く深く深淵へと墜ちていくのであった。

頁百九十二、『一太刀』（後書き）

後書きは休み。

流石に余韻に浸ってもらいたいので。

明日をお待ちください。



「流司？」

気付けば、ふと、ぽつりと眩きが漏れていた。

空は青く、その先に浮かぶ星もまた蒼い。

仰ぐように見上げた少女眩きは儂くも消えていく。

「何してるんだ、霊夢？」

「いや、いつまで私たちはこうしてればいいのかと思って」

声をかけてきた魔理沙に霊夢は少しだけ不機嫌そうな表情を浮かべて答える。

「『少し用ができた』とか言っただけで行ったまま帰ってこないもんな。逃げてもいいと思えてきたぜ」

「止めときなさい。どうせ、逃げられるはずもないわよ。それにどうやって幻想郷に戻るといふのよ？帰してくれるといふのだから、大人しくしているのが得策というものよ」

「ううっ、確かにそうだぜ……」

霊夢の正論に魔理沙は声を詰まらせながらも頷く。

「まあ、そのうちに戻ってくるでしょ。のんびりとしてればいいわ」

霊夢は地面に座り込んで再び空を見上げる。

「（また厄介なことに巻き込まれてないといいのだけど……）」

その先の蒼に思う願いがどれだけ儂く意味のないものであるかは  
霊夢に知る術はないのだった。

「だから私は言ったというのに……」

沈み逝く流司の身体を眺め豊姫は極めて淡々とした声で呟く。  
それは知っていた知識を確認するような、当たり前前的事实を再認  
識するような声であった。

「こんなに穢よじしてしまつて……でも、海で良かったのかもしれない  
わ。海の底は穢れを集める場でもあることですし」

赤く染まつた水面を見つめて豊姫は言う。瞳にあるは確かな嫌悪  
の感情と僅かばかりの嘲笑であった。

「愚かね。何かしようと思つていたようだけど、所詮は地上の人間  
が考えること愚策にしかすぎなかつた」

流司の策が果たして愚策であつたかは定かではない。

ただ、現実としてその策がなされることはなく敗北したという事  
実があるだけであつた。

なれば、豊姫の言葉も正しいものであろう。

“戦い”の敗者は全てを奪われ勝者は全てを手に入れる。それが“戦い”というものである。

流司と依姫の間にあったのは“闘い”ではなく“戦い”。

その敗者である流司に何もいう権利などはない。尤も何も言うことなどできないかもしれないが。

「愚者、愚策にてその身を滅ぼす」

「？」

望が朗々と謳うように口を開いた。

悲しんでいるのか。 慈しんでいるのか。

憂いているのか。

あるいはその凡てか。望の謳うような言葉の旋律は豊姫に得体のしれない感情をもたらす。

「賢者、賢策に溺れその身を糞す」

望の言葉にとめどない疑問を感じる豊姫。

“疑問”であるからして“不可解”であり、“得体のしれない”ことでもあろう。

だが、そうではない。望の謳う言葉の意味であれば悩まずとも理解のできることであった。

目の前でその主人が鮮血を散らしながら海へと沈んでいながらも動き出すことはおろか、悲痛な叫びをあげることすら望はしない。

シヨックで言葉も失ってしまっていたというのであればまだ理解できよう。

けれども、望は淡々と謳うように言葉を紡ぐだけであった。

その姿に豊姫は怖気にも似た寒さを背に感じた。

「愚者は愚者であるが為に愚かな策しか講じることができずに死に絶える。賢者は賢き策を過信して更に賢い者にそれを看破される」

「それがどうと……？」

豊姫は気丈を装い望に尋ねる。

「主が言ったとおりの。御主人の策があの小娘の策を下回っただけのこと。愚者と扱われたとしても仕方あるまい」

望は紅い海を見つめながら冷たく言い放った。

「本当に従者なのか？」

といった思いが豊姫の心を埋めていく。

その様子は酷く似ていたのだ。

その結果が当然であろうと思っていた豊姫と望の様子はあまりにも酷似していた。

「では、愚者が賢策を考えることはできるか？」

「えっ……」

「否。愚者の賢策など所詮は愚策にしか過ぎぬ」

望は静かに首を振って自らの言葉を否定する。

「なれば、賢者の愚策は更なる賢者に見抜けるか？」

「……………」

「否。賢いからこそ賢者は愚策を考えぬ。故に見抜けるわけなからうて」

再び首を振って望はその言葉を否定する。

「何が言いたいというの？」

豊姫は望に問う。

何故、このタイミングで望がそのような言葉を告げているのか、全くして豊姫は理解することができなかった。

「分からぬか？分からぬじゃろうな。主らは賢い。その師は更に上をいくじゃろう。だからこそ、理解などできまい。これは愚かな実に愚かな計略じゃ。成功しても得るものはほとんどなく、失敗すれば全てを失う。そのような策、主らが想定するはずもない」

豊姫も依姫も共に賢者と呼ぶに相応しいだけの頭脳を持った月人である。

そして、その師は比べる者がいないほどの賢者であった。

それだけに地上の賢者の賢策を見抜き、対策を講じてみせた。

だが、賢者の愚かな願いにまでは気付くことはない。気付くことができるはずもなかった。

「主らはのう。賢者の我が儘に知らずのうちに付き合わされておっただけなのじゃよ」

「“終わり”とは“始まり”でもあるわ」

「紫様……?」

『八雲紫』の式、『八雲藍』は主人の唐突な呟きに首を傾げた。完敗であった。

吸血鬼の造り上げたロケットを囿とし、月の都へと侵入するといふ計画は月人にバレており抵抗などでできずに紫と藍は拘束されていた。地上の賢者の策は月の賢者の策によって完全に打ち崩されてしまったのだ。

「さて、藍。帰りましょうか?」

「えっ、ええっ!?!」

紫は何事もなかったかのように立ち上がると藍に微笑みかけた。その様子に藍は驚愕に顔を染める。月人が絶対の自信を持ってなした拘束を意図も容易く何気ない素振りですべて脱してしまっただからだ。

「どうしたの、藍?そんなに驚いて?」

「どうしたのじゃありませんよ!?!何でこれを外せているんですか!?!」

藍は己の手に結ばれている紐を紫に見せるようにして訴える。フェムトファイバーの組紐。絶対に切れることがないと言っていた紐で紫も藍と同様に手を縛られていたはずであった。

しかし、紫の手にはそのようなものは影も形もない。

「それ、切ってしまったわ」

「へっ？何を……？」

「藍も力をいれて御覧なさい。簡単に切れるわ」

「そんなこ」

ブチッ。

「えっ……」

「ほら」

あまりにも簡単に切れてしまった組紐に藍は啞然と口を開けてしまふ。

「何をなさったのですか？紫様？」

「ちよつと境界を弄っただけよ」

尋ねる藍に紫は平然と答える。

「そん」そんなことできるはずがない、かしら？」「……はい」

紫の答えに藍は声をあげようとするも紫は先に藍の思いを口にしています。

「馬鹿ね、藍。あの月人はこう言ったのよ。“認識できない細さの繊維で組まれた組紐は限りなく連続した物質に見えるでしょう”とね」

「はあ……」

「ならなんの問題があるというのかしら。限りなくということとは“絶対”ではないの。“絶対”でなければそこには“境界”が存在するわ。認識できない？それがどうしたというの？認識できないということを知覚してしまった時点でそれは認識できたことになるわ。喩え、その目に捉えることができなくとも、境界があるということさえ分かっていたれば能力を使うことなど簡単でしょう」

さも当然のことを語るかのような様子で紫は藍に説明する。

『境界を操る程度の能力』。その力は“絶対”ではない万物を操ることができると言っても過言ではない。

それだけの力であるのだ。

「藍。帰りましょうか？」

「ですが……」

「どの道次の満月まで月へと繋がる隙間を開くことはできないわ。それにもう、“終わっている”から……」

「紫様？」

月を仰いで紫は言う。

「地上から見上げる月は地上を見下す存在。でも、月ではそれが逆となるわ。そう、物事は常に表裏一体。絶対である存在など一つしか私は知らない」

月は常に地上を見下すが、地上もまた月を見下す。



それは賢者と愚者が表裏一体であるかのようにあろう。

「現と夢は紙一重。故に“幻想”と“現実”も背中合わせ」

“外”のすぐ傍に“幻想郷”があるようにそれは気付かぬだけで限りなく近くに存在していた。

「一度目の転ろいは彼の“現実”を“終わり”にし“幻想”を“始める”」

紫は手を伸ばす。

高く高く何かを求めるかのように。

「“不浄”と“清浄”もまた紙一重。“清浄”が“不浄”へと至ることも“不浄”が“清浄”へと至ることも時として容易い」

紫の掌の先にあるは眩き黄金。

届けども届かぬ遙か彼方の輝き。

それでも紫は手を伸ばす。

狂おしく。

愚かしく。

浅ましく。

鳥澁がましく。

「二度目の転ろいは彼の“清浄”を呼び起こす。未だに目覚めには至らぬでしょう。でも、それで“正常”、それが“正常”。あるべき姿であってはならない姿」

紫の手がゆつくりと下ろされる。

それは諦めたかのようにであり、そうではないようでもあった。

“ 継続 ” と “ 挫折 ” 。

繰り返すことが命の紡ぎでありながらも、決して並び立つことはない二つ。

だが、紫はそうではない。

その二つを同時に孕み身を動かす。

願いながらも諦めて……

愚かな祈りをひたむきにただただ……

それが自身の在り方とでも暗示するかのようにただただ……

「 貴方は諦めてもなお願った。だから、私は願いながらも諦めたわ。だって、それが “ 約束 ” だもの。ねえ、そうでしょう 『 琉嗣 リュウシ 』 ？ 」

その日、『森近霖之助』の一日は平凡に始まった。

そして、その一日は平々凡々のままに終わる予定であった。

「月が一体どのようなところであるかは気にならないが、“ロケット”はやはり興味深いね。こんなことであれば、吸血鬼主催のパーティーに行くべきだったか……」

“外”から豊富に流れてきたロケットに関する資料を閉じた霖之助は呟く。

「流司が言うには馬鹿げた造りだったようだが、それでも幻想郷産のロケットだ。見に行くべきだったか……」

吸血鬼が造り上げたロケットがどのようなものであったかは霖之助は流司から耳にしていた。

元々、“外”の人間である流司からしてみれば、冗談にしか思えないようなロケットであったようだが、生粋の幻想郷の住人である霖之助にしてみればよくできたものであったのだろうということが流司の話からも窺えていた。

「メイドに渡した資料ではあそこまでのものを造り上げることはできないと思うのだけど……何者かの手が加わっていたのかな？」

“現実”のものを“幻想”風にアレンジをする。言葉では簡単だが、為すには果てしない労力が必要となる。

何しろ、“現実”の知識に豊富でありながら“幻想”の常識で物事を考えなくてはならないのだ。

二律背反であるこの二つを成り立たせることができるのは今の所、“外”から流れてきたものに囲まれて生活している霖之助か妖怪の賢者ぐらいなものであった。

流司もだいぶ幻想郷に染まってきてはいるが、まだ二つを同時に考えるようなことはできないだろうと霖之助は考えていた。

「ロケット云々のことはまた今度流司が来たときに聞くことしよう。今ではもつと凄いものがあるとか漏らしていたからね……」

これ以上考えても無駄であると霖之助は資料を棚へと戻したそのときであった。

バンツ！！

「たのもー！！！」

吹き飛んだのではないかと思ってしまうような声と同時に『香霖堂』の扉が開け放たれる。

「やれやれ、看板は非売品なんだけど……全く、まともに入ってくる人は幻想郷にはいないのかね」

霖之助は疲れたように声を漏らして客を招くために立ち上がった。

その選択がいかに愚かであったか霖之助が知るはずもない。

世は常に非情なり。

前回は余韻とかいいつつ後書き書かなかつたら、感想もなくなった空ノ鎖です。

どれだけ後書きに支えられていたか理解しました、うん。

くるーきつとくるーな『香霖堂』。

もう逃げ道はないけど……

霖之助の言っていた凄いはスペースシャトルのこと。月には行っていないけど……

シャトル計画が終了したのでその内幻想入りすることでしょう。

主人公、海の底なのにサブタイという本編。カタカナなのでそこは違う意味もありますけど。

本編はこれで大体の伏線は終わりです。

次で完璧に終わりかな？

忘れていたら後付けされるかもしれません(笑)

あからさまなところから、こんなところも言ってもいいほど伏線だらけです。

いや、個別つくとか言ってしまった手前、ネタがなくなっちゃうのよね、残念なことに……

今回の紫のセリフで主人公がどのような存在であるか分かった人も多いはず。

まあ、ただの末裔ではないということは分かっていたでしょうが。

所謂ここがターニングポイント、折り返し地点でもあります。

これより物語は終息へと向かいます。

つか、200話超えてまだ半分とか……

いや、個別的にはそうじゃないけど、全体でみたら半分で済むのか……？

「流司」

月に至り黄昏る巫女は心配するよつに呟いた。

その声が届くことはない。

「流司？」

主に従い傘を翳すメイドが海の彼方に視線を向け呟いた。

その声が届くことはない。

「柳、祇……？」

月の都に悠々かつ密かに忍び込んだ亡霊はふと無意識に呟いた。

その声が届くことはない。

「流司……」

永遠を生きる少女は窓の外の空を眺めるよつにして呟いた。

その声が届くことはない。

「……流司？」

人形を遣う魔法遣いの少女は傍らの少女につられるよつに呟いた。

その声が届くことはない。

「犁次」

地へと落ちた賢者は過去を懐かしむようにして誰にも気づかれることなく呟いた。

その声が届くことはない。

「流司さん」

森へと駆けていた風祝は唐突に立ち止まると呟いた。

その声が届くことはない。

「笠紫……」

永遠を夢見た乙女は眠りの中呟いた。

その声が届くことはない。

「劉治」

意なる世に縛られし慈母は夢に呟いた。

その声が届くことはない。

その全てが届くことはない。

それでも……

「のう、『立祠』よ……」

水面見つめる空狐は望郷の念が込められたかのように呟いた。

その声が届かぬと分かりながら。

……

……

…

赤い。

瞳に映ったのは自らの身体より流れる帯状の赤であった。

紅い。

水に薄まりながらも止めどなく身体より伸びる紅は幻想のようにも思える。

痛い。

身を割るような痛みはそれが幻想ではなく、現実であることを知らしめる。

疼い。

その身の疼きが徐々に鎮まっていくなことを感じる。

暗い。



瞳に映る色が消えて暗い黒が段々とその身を包み始める。

昏い。

瞼は重く閉ざしてしまえば昏い永遠が待ちかまえている。

恐い。

確かにそつだ恐ろしい。

怖い。

だが、同時にそれは安らかでもあった。

「（このまま溶けてしまうのもいいか……）」

流司は果てしなく続く闇に身を任せながら思う。

夜のような闇だ。恐ろしくもあったが、慣れてしまえば何処か心地よく何時までも浸っていたいと流司に思わせるような闇であった。

「（これが“死”か……悪くないな……）」

既に四肢のほとんどの感覚を流司は感じる事ができなかった。痛覚ですらもはや感じられない。

そこにあつたのは確かなる終わりであった。

生きたいか？

「まだ、生きたいさ」

自らの声で己の意識に問う。

諦めるのか？

「まだ、諦めてはいないさ」  
血の流れを食い止めるべく能力を使用する。

何故、死を受け入れる？

「足掻いた先に待つものが常に幸運だなんてことは考えていないからな」

足掻けばそれに見合った幸運が訪れるなどということは流司は思っ  
つてはない。

諦めるのと何が違う？

「自己満足。やることだけやれば未練は少なくて済む」  
心残りなく死ぬことができる存在など一握りでしかない。  
大半は未練を残して死んでいく。差異があるとすればその多さく  
らいなものである。

死にたくはないか？

「ああ」

自問自答の再認識。

ならば、反故しろ

「反故……」

流司は自身が知らぬことを自身で問いかける。

思い出せ、己の力を

「もう使っている」

能力の使用はもう限界であった。これ以上に使ったところで死が近くなるだけであった。

違う

「違う?」

否定。

そっだ、違う

「違うのか」

肯定。

転逆せよ

「何を?」

疑問。

を

「何を?」

解答。

反故しろ。その力の使い方はそうじゃない

分からねば、今一度その身に刻め

反故しろ。自身の系譜を

知らねば、今一度その身に刻め

転逆せよ。を

できねば、今一時その身をせ。カミシロリュウジ

汝はそれが為の……

瞬間、流司の意識は他ならぬ自身によって奪い取られ暗転した。

「え？」

その声を漏らしたのは誰であったか。

依姫かそれとも豊姫か。もしや、それはその場の全ての者が発した声であったのかもしれない。

それは唐突な出来事であった。

一切の前触れもなく、刹那の間にその現象は引き起こされた。

無がそこには無が広がっていた。

あるのは空間だけ、その中を満たすものはなく、中心に一つの人影が存在しているだけである。

かのモーセの奇跡は海を割った。

されども、そこにある現象は違う。

割ったのではなく、切り取られたというべきであろう。

そこにあつた水は海は跡形もなくなっていた。無論、全ての水が掻き消えていたということではない。一つの人影を中心に円柱状に抜き取られている。

半径にして100m弱か、それを多く見るか少なく見るかは人によつて異なるだろう。

だが、切り立った崖のような水の壁はあまりにも異様な光景であつた。

「……………」

水の掻き消えた海の中で佇む人影は自身の胸元を無言で見つめる。

切り裂かれた胸からは今もなお赤い雫が底の見えない海底へと向かつて滴り落ちていく。

ゆっくりとゆっくりとした動作で人影は鎖骨から腹まで伸びる傷跡を撫でる。痛みに顔を歪ませることもなく、手のひら一杯に広がる血に構うこともなく、そうすることが当然であるかのような何ともない動きであつた。

「ッ!？」

怪訝そうにその様子を窺っていた依姫が表情を一変させ驚愕に息をのむ。

その動きが終わつた瞬間には傷跡が跡形もなくなっていたからである。そればかりではなく、切り裂かれた着流しも元に戻り、血で赤に染まってしまうていた色も元に戻っていた。

まるで、怪我をしたこと自体が無かったことであるように。

「馬鹿な……」

それは馬鹿げたことであった。

瀕死の傷を治すことぐらいは月の技術をもってすれば訳もないことである。

だが、それは相応の道具があつてこそそのことであり、傷を撫でたからといってできるようなものではない。

傷を治す能力でも持っているのかという自身の考えを依姫は即座に否定する。そうではないことは先の戦いで依姫は理解していたからだ。

「……………」

無言のままにその人影、『カミシロリュウジ』は浮かび上がる。

その高さが水面を超え、依姫と等しくなつたとき水壁は支えを失つたかのように崩落を始め、水の無かつた海は再び水の有る海へと変わる。

相対する流司と依姫。だが、先ほどまでと異なりその様子は逆転していた。

流司はただ浮かんでいるだけだ。何かを語ることもなく、動きを見せることもなく、睨すら開けていない。

にもかかわらず、依姫は圧倒されていた。

姿形は寸分の変わりもない。自身が絶対の自信を持って切り捨てた人間であつた。

それでも、依姫は手のひらから溢れ出す汗を止めることはできず何度も剣を握り返す。

「（一歩も動けな……動けない……？）」

そこで依姫は自身の身体の違和感に気が付く。  
動けないのだ。

竦んでしまった、怯んでしまったというわけではない。  
文字通り身体が全くとして動かない。金縛りにあっているのと  
はまた違う。

束縛されてしまっているような感覚は一つとしてない。思考に  
対して身体が一切の反応を起こしていないのだ。

身体は電気信号のやり取りで動く。

脳は四肢に電気信号による命令を出し、それに反応した四肢が動  
いたという結果の電気信号を反射することで返す。

それによって肉体は動きを得るのだ。

では、四肢に脳からの電気信号が伝わる前に反射してしまえばど  
うなるか。

四肢は動いていないにも関わらず、脳は動いたという錯覚をして  
しまうのである。

尤もそれを依姫が理解していることはない。

そして、流司もまた理解して為したわけではない。

「（何）（）」

くたりと依姫の身体が力を失う。

依姫は何一つとして理解をすることもなく意識を失う。

そして、流司もまた身体から力を失い身を落としていく。

その戦いは唐突に不自然さと不可解さだけを残して完全な終わりを  
迎えたのだった。

頁百九十四、『カミシロ流司』（後書き）

「貴方がここの店主ですね」

「そういう君は最近幻想入りしたという巫女だね。流司から話には聞いているよ」

物と物の間から溢れ出るかのように姿を早苗の前に現した霖之助は言う。

「えっと、流司さんがですか？」

「ああ、君が幻想郷にくる前からちよくちよくとね。こつやって実際に会うことになるとは思ってもなかつたけれども……」

「そうですか……」

頬を綻ばせ実に分かりやすい反応を見せる早苗を霖之助は無視を決め込む。

霖之助の経験上、これ以上に踏み込んで話題を展開した場合に收拾がつかなくなるだろうということはほぼ確定した未来であったからである。

魔法遣い然り、メイド然りで得た経験則は霖之助を確かに高みへと導いていた。

「それで今日はどんなものをお求めかな？」

「そうでした。以前に流司さんに机をあげませんでしたか？」



「ああ、確かにあげたね。まあ、しっかりとした等価交換であったのだけど」

早苗の言葉に霖之助はいつだか、流司にあげた机のことを思い出す。

元々あった机に少しだけ手を加えたものであったが、なかなかの出来映えであったことを霖之助は覚えていた。

「では、引き出しの鍵のことも？」

「あれは自信作といえる出来だからね。恐らく開けることができるのは流司と製作者である僕くらいなものさ。防犯性は完璧だよ」

「なるほど、なら失礼して」

ガンッ。

「何、を……？」

いきなり頭に感じた衝撃に霖之助は意識を朦朧とさせる。

「目が覚めたらキリキリ働いてもらいますのでしばしのおやすみを」

霖之助が意識を失う直前に目にしたのは怪しく微笑む早苗の笑顔であった。

早苗さん絶賛暴走中。

平和的に解決する思考は無かったのだろうか？

本編の歯切れの悪い終わり方は仕様です。

これで大体の重要な伏線は終わり、あとは個々で少しずつ補完していくぐらいです。

それにしても、気絶しすぎですね。

閑話休題。

全く関係有りませんが、国立天文台がブラックホールの正確な位置を特定したそうです。

驚きです。

これで実在が本当に証明されたわけですが、いやはや……

今後はブラックホールの撮影を試みるそうですが、個人的には胸が熱くなるニュースでした。

国立天文台行ってみようかなあ……

頁百九十五、『カミシロリュウジ』

「依姫ッ！！」

豊姫は突如として意識を失った依姫の身体をその能力で手元に引き寄せると静かに水面に寝かせる。

「おっと、こちらじゃ」

望もまた力なく落ちてきた流司の身体を優しく抱き寄せて水面に立つ。成人男性一人を軽々と持ち上げて見せる望はいくら人と容姿が似てようとも別の存在であるということを示しているだろう。

「……何をしたの？」

豊姫は普段のほんわかとした雰囲気を払拭させ、鋭い視線で望を睨み付ける。

そこにあるのは敵愾心のみ。戸惑いなど他の感情を全てなくしてしまったかのようにであった。

「知らぬ」

「そんな言葉が通用するともっ！？」

素っ気ない言葉で答える望に豊姫は激昂する。

何らかの要因が依姫の身にあったことは豊姫の目から見ても確実であった。

だが、その何かが全くとして分からない。

それもそのはずだろう。第三者に依姫が感じていた困惑を悟るこ

とは不可能だった。

海の水が掻き消え流司が姿を現したと思えば次の瞬間には流司と依姫、その両者が気を失い落下した。

不可解という言葉で片付けることも難しいだろう現象であった。そんな光景を目にして唯一冷静である望。その言葉通り何も知らないなどということは有り得るはずもなかった。

「知らぬものは知らんのじゃ」

それでも望は豊姫の訴えを首を振って否定する。

スウー、ハアー。

豊姫は深呼吸を一つ、血の上っていた頭に酸素を送り思考を落ち着ける。

嘘ではない。

望が嘘をついているようには豊姫は思えなかった。

「……なら、尋ね方を変えるわね。貴女は何を知っているというの？」

だからといって、望が何も知らぬはずもないということの一つの確信として持っていた豊姫は質問の仕方を変えて望に問う。

「何も知らぬ」

「クツ!!」

望の変わらぬ返答に豊姫は再び頭に血が上っていくことを感じた。

「主は我が何かを隠しているように思っているようじゃが、全くにそれは間違いというものじゃ。我は嘘は言っておらん。何も知らぬ

ということとは真実じゃよ。そうじゃのう、主の知りたい内容に関しては何も知らぬと言った方が分かりやすいかの」

「……どういうこと？」

表面上で冷静さを取り戻した豊姫が望に補足を求める。

「主が知っていることと我が知っていることはさして変わらぬということじゃ。その小娘をそうしたのは紛れもなく御主人じゃろうて。それは保証できるのう。じゃが、一体何をどうしてそうなったかまでは分からぬ。それは主の求めておる答えではなかるう？」

「ええ」

望の言う通りもし望が豊姫の問いに対して、「御主人が為したのじゃよ」などといった答えを返したところでそれは分かりきったことであり、納得するはずないということは豊姫自身がよく分かっていた。

「ならば、我を責めるといふのはお門違いじゃて」

「だったら、更に質問を変えるだけよ。その人間は一体何者？」

首を竦める望に豊姫は更に質問を変えて尋ねる。

対して望の返答は

「答えられぬ」

明確な拒絶だった。

「ふ「待つんじゃ」……何？」



豊姫の耳にはその言葉は言葉としては伝わっていなかった。  
発音のすることのできない言葉という次元ではない。

むしろ、逆である。言葉であるはずなのに言葉としてそれを豊姫は理解することができなかった。

「言うておくがふざけてなどおらんよ？これも契約での御主人の正体を他人に知らせることはできんのじゃ」

諦めてくれというように言う望に流石の豊姫もそれ以上言葉を重ねることはなかった。

「我としても、勝手にこつちの都合に巻き込んでしまったがゆえのできれば教えてやりたいのじゃが、契約は契約での」

「巻き込んだ……？」

「言ったじゃろう？主らは賢者の愚かな願いに付き合わされただけじゃと？まあ、僅かばかりの復讐の意味もあるじゃろうが、他は皆隠れ蓑じゃよ。自身すらものう……」

「あの妖怪にとっては貴女たちを“月”<sup>（こ）</sup>に送ることが目的だったというわけ？」

豊姫は今は地上で拘束されているだろう妖怪を頭に思い浮かべて望に尋ねる。

「半分はといつたところかの。ただ来るのも良かったのじゃが、その小娘と御主人が対峙したことは嬉しい誤算じゃったよ。あやつはそれすらも計算の内かも知れぬが」

「嬉しい誤算？死にかけたことが？」

今となつては傷すら見受けることのできない望に抱かれる流司に視線を向けて豊姫は言う。

「死にかけるもなにも殺すことが目的だったからのう」

「正気？いえ、それが本当なら貴女が何もしなかったことも納得できるわね」

望の発言を豊姫は疑うように言葉を返すが、すぐにそれまでの望の行動を思い返して言葉の整合性がとれているということを理解した。

「けど、結局は生きたまま。やはり、主を殺すことなどできなかったということかしら？」

落下する流司を望が抱き止めたことから、結局望に流司を見殺しにすることはできなかったのだと思い豊姫は言う。

「くっくっく」

「何がおかしいのかしら？」

そんな豊姫の言葉に望は腹が痛いと言いたげに笑いを漏らした。

「何、主があまりにも異なることを申すのです。笑ってしまっただけじゃ」



「何を……」

「主の目は節穴かの。もう、御主人は死んでおるじゃろう?」

「そんなことは……ッ!? そういうこと。なるほど、本当に私たちはまんまと利用されたということね」

豊姫はようやく気が付く。今までは望に注視していた所為で気が付くことはなかったが、そこで初めて流司に目に見えての変化があったことに気が付いた。

そして、同時に自分たちが戯言などではなく本当に利用されていたのだということにも気が付いたのだった。

「さて、主も気が付いたようじゃしの。我たちはそろそろ退散させてもらおうかの」

「逃げられるとでも?」

「主に我が止められるとでも?」

豊姫の言葉に望は挑発するように声をあげる。

「……無理ね。初めから勝てないことは分かっていたのも。ましてや、依姫を守りながらなんて不可能よ」

「賢明じゃ」

「けど、一体どうやって帰るといつのかしら?少なくとも次の満月まではあの妖怪は月と地上を結ぶことはできない。それとも私を脅す?」

紫が作り出した月と地上を結ぶ隙間は既になくなった。

後は豊姫に能力を使わせることぐらいが、手っ取り早く地上に帰る方法であるといえる。

「これ以上、主の手を煩わせはせんよ。今なら私の能力が使えるのでのっ」

「貴女的能力も私やあの妖怪に類する能力ということかしら？」

「似てないとは言えんの」

望は首を左右に振りながらも言葉では肯定するという器用な真似をしてみせる。

「『一と全を纏める程度の能力』。それが私の能力じゃよ。置き土産じゃ覚えておくといい。尤ももう会うことはないじゃろうが」

望が手を翳した先に一つの点が浮かび上がる。徐々に大きさを増していくその点はやがて面となり、そこには地上の幻想郷の風景が映し出されているのだった。

「そうね。有り難く覚えておくわね。確かにもう会うようなことはあつて欲しくはないけれど」

「辛辣じゃのう。でわの、世話になった」

次の瞬間には面に望は流司を抱いたまま飛び込み、即座に面は点へと回帰し望と流司の存在は月から完全に消え去った。

「こちらは望んでないかったわ」

豊姫の眩きは穢れのない風に乗り彼方へと運ばれていくのであった。

「うっ……」

「あつ、目が覚めましたか？」

差し込む光に霖之助は朧気な意識を覚醒させていく。

「（確か、僕は……）」

回転を始めた霖之助の脳は意識を失う直前の状況を鮮明に映し出した。

「はっ!？」

ガバツ、ズサツ。

完全に意識を取り戻した霖之助は視界に映る早苗の顔を捉えると、即座に身体を起こして限界ギリギリまで後退りする。

この間、実に0コンマ1秒。

烏天狗も驚きの速さである。

「そ、そんなに避けなくても……」

「いきなり意識を失わせた相手から逃げるのは生き物として当然だとおもっただけだね」

軽くショックを受ける早苗に霖之助は尤もな言葉を浴びせる。

自身の身体を見渡して四肢が無事であることに安堵する霖之助。

早苗を一体何者であると考えているかありありと分かる行動であ

った。

「で、ですが、この程度のことだめげません！！ガ　ーさんも目的のために屈辱に耐えたのですから！！なんとしてもあの引き出しをあけてみせます！！」

健気な様子を見せる早苗であるが、その目的は実に欲にまみれている。

むしろ、こんなものと比較にされたガ　ーの目的が哀れである。

「あつ、起きてる」

「ほんとね」

「妹紅さんにアリスさん」

そんなところへ姿を見せる妹紅とアリス。そして、二人へ声をかける早苗。

その様子は初めの出会いが一体何であったのかと疑問に思わせるほど和気藹々としている。

「ゆっくり休んでくださいとはいいましたが、まさか一日寝られるとは思っていませんでした」

「それは早苗が強く殴りつけて所為でしょ？もっと軽くで良かったのよ」

「そもそも、気絶させる必要があったのかも怪しいわね。縛って引き摺ればいい話でしょ？」

早苗の呟きに即座に突っ込みをいれる妹紅とアリス。  
早苗を責めているようできて、実際言っていることは早苗が行ったこととさほど変わっていないのだから驚きであろう。

「まっ、いいじゃないですか！！ともかく、目が覚めたんですから  
「そうね。さつさと開けてもらうことにしましょう。時間もあまり  
ないかもしれないし」

「だから、軽く炙るかって訊いたじゃない」

寝ている間に死にかけていたかもしれない霖之助。  
尤も目覚めたことが幸せかどうかは分からない。

「（死ぬかもしれない……）」

獲物を発見した肉食動物のような六つの眼光に晒された霖之助は  
思う、「喰われるかもしれない」と。勿論、性的な意味ではない。

だが、神は霖之助を見捨ててはいなかった。

「む、主ら一体こんなところで何をしておるんじゃない？」

「「「「はっ？」「」「」

突如として、半家主を抱えた神が部屋の襖を開けたのだった。

まさか、本編と後書きが繋がるとは思っまい。

九死に一生を得た霖之助。

確かに神に助けられました。

望の能力は『本編と後書きを……』ではなく、『一と全を纏める程度の能力』。

まあ、えらく抽象的な能力です。

尤も早々というか、しばらくはできません。

空狐に恥じない能力ではあるかなあと……

そして、色々ある本編。

ああ、流司は生きてますよ。しっかりね。気絶しているだけです。

望と豊姫の会話の意味は分かっている人には分かってもらえるかと思いません。

さて、今幕も残すはエピローグのみ両方ともね。

頁百九十六、『神代流司』

「…………ん」

誰かが呼ぶ声が届く。

『今は眠れ。また、な…………』

『　　ッ！…！』

「…………ん…」

誰かの呼ぶ声が届く。

『どう思う。いや、答えなくていい』

『なら訊くな！…！』

「…司…………」

誰かの呼ぶ声が届く。

『目が覚めたか』

『お陰様で、ここは？』

「流……………」



誰かの呼ぶ声が届く。

『貴方は暇なのですか？』

『んなわけない。毎日忙しいよ』

「……さん」

誰かの呼ぶ声が届く。

『風流だねえ』

『いい花だろっ？』

「流司……」

誰かの呼ぶ声が届く。

『いつか、私という存在が』

『ええ、分かったわ』

それは泡沫であつた。遙か彼方の夢幻。  
無限に連なる一時の欠片。

忘れるな、カミシロリュウジ

誰かの呼ぶ声が届く。

汝は であるということ

誰かの呼ぶ声が届く。

そして、再び反故せよ

……

……

…

「流司さん」

「うつ、くつ……早苗、か……？」

流司はゆっくりと顔をしかめながらも瞼を開けた。

眩い光に慣れると同時に流司の瞳に映ったのは見慣れた染みの点々としている天井と目元に涙を浮かべた早苗の姿であった。

「っ！ー！良かった！ー！流司さんッ！ー！」

「ちよっ！？早苗！？」

早苗と目が合った瞬間に抱きつかれる流司。

訳が分からない。

それだけが流司の頭を支配する言葉であった。 今こうして自分

が寝ている状況も、早苗が涙を浮かべていることも、抱きつかれてしまっていることも全てが流司には理解のできないことであった。

「良かった……良かった……」

「いや、何が良かったのか俺にはさっぱりなんだが……」

泣きじゃくる早苗の背を撫でながらも流司の困惑は加速する。

「「流司！！？」「」

そこへ飛び込んでくる三つの影。

「妹紅にアリス、それに咲夜か……？」

姿を現したのは妹紅にアリス、咲夜の三人であった。

早苗ほどではないもののそれぞれが皆、心配そうな表情を浮かべており、流司に声をかけられた途端に見るからに安堵に顔を綻ばせる。

「はぁ……全く何度死にかければ済むの……」

「本当よ。何か持っているんじゃないの？」

「もう一度、厄を落とした方がいいんじゃないの？」

安堵の表情を浮かべたそれぞれは口々に言う。

「はっ？死にかけた？何を？それに咲夜は月に行っていたんじゃないのか？」

流司はその言葉に驚いたように顔を見比べて、最後に咲夜に尋ねる。

「覚えていないのですか……？」

そんな流司に早苗がぼつりと尋ねた。

「覚えてって何を？」

「それは……」

尋ね返した流司に早苗はどことなく目を泳がせる。  
妹紅、アリス、咲夜の三人もまた同じであった。

「流司が月へ行っただということよ」

「幽々子？」

「お邪魔しているわね」

ふらりと姿を現して流司の言葉に答えたのは幽々子であった。

「月？ああ、そういえば……でも、幽々子はあの時分かれたはずじゃ……」

幽々子の言葉に流司は湖から月へと向かったことを臆気に思い出す。

「仕方ないかもしれないわね。一度しか言わないからよく聞いておきなさい」

「霊夢……?」

幽々子に続いて姿を現したのは霊夢。  
腰に手を当てていかにも疲れたような表情を浮かべている。

「流司、もうそろそろ今年も終わるわ。この意味が分かる?」

「はあ……まあもう今年もそんなに残ってないはずだが」

秋が終われば冬になる。

既に初雪も降っており、長かった一年もじきに終わりを迎えるということは流司も理解していた。

「いいえ、そうじゃないわ。あと、数日もすれば今年が終わるのよ。

一月。あんたはこの一月寝たきりだったの」

「えっ、はあああ!!?」

霊夢の嘘の见えない告白に流司の驚愕の叫びが雪の深まった幻想郷に響き渡るのだった。

部屋は再び意識が朧気になってしまいそうなほどに暖まっていた。  
中央に鎮座するはこじまりとした炬燵。冬の代名詞たるそれを占領しているのは一つの存在であった。

「望」

まるで亀のように炬燵から首から上だけを出している神獣に流司は声をかけた。

「起きたようじゃな。うむ、無事でなによりじゃよ」

首を回して流司と目を合わせた望はそのままの体勢で流司の無事を確かめた。

「やっぱり助けてくれたんだな」

「まあ、落ちるところを助けただけじゃ」

その言葉が噛み合っていないことを流司は知らず、望は知っていた。

だが、望には真実を語るつもりはない。

それが自身のためであるのか、流司のためであるのかは定かではなかったが。

「一応、訊いておこうかの。主は『流司』か？」

「何言ってるんだ？どう見ても俺は俺だろ？望みたいに姿が変わったんじゃあるまいし」

「かかつ、確かに御主人は御主人じゃの。詮無きことを訊いた（まあ、早苗が付きつきりじゃったしの。当然の帰結かのう……）」

流司の流司らしい返答に笑いながら答える望のその言葉の後半は胸に潜められたままだった。

「それにしても、一月も寝たきりになっているとは思わなかったよ。あれだけばつさりと斬られてしまえば当然とも言えるかもしれないけどな……」

「済まぬの。すぐには動けぬわけがあったのじゃ……」

「こうして生きてるんだ。構わないさ。驚いたことに傷も全く見えないからな」

耳を垂らして言う望に流司はそれほど気にした様子を見せることなく答える。

人が良いというにもほどがあるというものだろう。

尤もそれは流司の覚えている記憶に所々の欠落がある所為で具体的に責める理由が見つかりにくいためでもあった。

その上に斬られたことでできているはずの傷も影も形も残っていないこともあり、下手をすれば全てが夢であったと言われても信じてしまいそうなほどであっただろう。

「体調は万全のようじゃの」

「流石に一月も寝てしまえばな。身体が鈍ってしまっているという意味では万全ではないだろうが。体力は有り余っているさ」

「それは僥倖じゃ」

呟く望に流司はどことなく違和感を感じる。

それは流司であったからこそ気付くことができたものであるのかもしれない。

「望………?」

「なんじゃ、御主人？」

「そういう望こそ何処か具合でも悪いんじゃないのか？」

「そんなことはなかるうて。これほど長い間、元の姿を取り戻したままであることも最近ではなかったでの。少々疲れてしもうただけじゃ」

心配は無用と望は流司に微笑んでみせる。

「そついえば……俺が寝ている間、ずつとか？」

「うむ。まあ御主人が起きたでのもう良かるう」

頷く望の輪郭が徐々に曖昧になっていく。

「望にとっては俺は寝ていた方が良かったのかな？」

「馬鹿なことを言うてない。御主人が壮健である方がよいに決まっておる。それにの」

「ん？」

望は炬燵から起き上がると流司の傍に寄り

「次の再会はそれほど遠くはないかもしれん」

少しだけ背伸びをし流司の額に唇を落とす。

「ッ！？な、なっ、なな、何を！！？」



「くくつ、慌てすぎじゃ御主人。ちよつとした詫びと加護じゃよ。今回は御主人をしつかりと守ることができなかったでの。なに、狐に化かされたとも思ってくれば良かるうて」

「そ、そついう問題じゃ……」

流司は顔を赤くして言う。

「初心じゃのう。本当は唇の方が御利益はあるんじゃが、後が怖いでの。これで我慢しておくとするのじゃ。ではまたの」

その言葉を最後に望は朔へと姿を変える。

残されたのは唾然としてしまっている流司と凍てつくような視線の群れだけであった。

「寒いな……」

夜更け、ふと目が覚めた流司は縁側に出ていた。

襦袍を羽織ってはいるも、幻想郷の冬は病み上がりの身体には若干厳しい。

「さつさと寝てしまうのがこついつときはいいのだろうけど、すっかり目が覚めてしまったからな」

身を刺す寒さで流司の意識は既に完全に目覚めてしまっていた。

今まで一月もの間寝てしまっていたこともあり、そう簡単には眠りにつけそうもないだろう。

「なら、少し話しましょう?」

「紫か……」

招いたわけでもなく、いつの間にか縁側には腰をかけている紫の姿があった。

「目覚めたようで何よりですわ」

「そういう紫はこれから冬眠じゃないのか?」

軽い言葉を交わしながら流司は紫の隣へ腰を下ろした。

「ええ、でもその前に一目見ておこうと思って」

「それは光栄だな」

「でしょう?」

流司の皮肉も紫は笑顔で受け止めてしまう。

それが『八雲紫』であった。

「どうだったかしら? 月への旅は?」

「さてな、一瞬のことで何も覚えてはいないよ」

月を仰ぎながら言う紫に流司は首を振って本心を伝える。

「それでも何か一つくらいは覚えていることがあるんじゃないの？」

「いや、何も。本当に彼処へ行ったかも怪しいくらいだよ。まあ、行ったことは確かだろうけどな」

流司もまた月を見上げて呟いた。

今の流司に分かることといえば、確かに月に行ったのだという事実ぐらいなものであった。

「そう、それは残念ね」

「ああ、折角の経験だったんだがな」

紫の呟きに流司は頷いて肯定を示す。

死にかけて寝ただけの流司にしてみれば、正真正銘の骨折り損の草臥れ儲けでしたなかつた。

「でも、行ったことは無駄ではなかつた。何となく、本当に何となくなんだが、そう思うんだ」

仰いでいた月から視線を紫へと移して流司は言う。

「そう……そう思うならそうなんでしょうね。私もそう思うわ」

紫もまた視線を流司へと向けて応える。

「なんだよそれ？」

「だって、私には貴方の気持ちは分からないもの。そう思うとしか

「言うことはできないでしょう?。」

「確かにな」

紫の言葉に流司は頷く。

「そんな貴方にお土産よ」

「お土産?」

そう言つて紫が隙間から取り出したのは一本の壺であつた。

「月のお酒。幽々子が持つてきてくれたのを残しておいたの」

徳利に注がれる酒は実に清らかで確かに穢れのない月を思わせるように澄んでいた。

「いいのか?」

「いいのよ。どうせ、残っているかどうか分からないものを取り返しになんてこないでしょうし」

二つの徳利に注ぎ終えたところで壺は空になる。

「月を見ながら月の酒を呑むか……なんとも皮肉なこと」

「酒は飲むためにあるの。いつまでも寝かせていたって仕方がないわ」

徳利を傾けて流司は言う。

酒の味など詳しくは分からない流司であつたが、口に広がる味に

は思い当たる節はなく、結局見ることはなかった月の都に思いを馳せる。

月を仰ぎ見ながら杯を傾ける二つの影。

その二つはどうしようもなく近く、どうしようもなく遠いのだっ  
た。

頁百九十六、『神代流司』（後書き）

「そつだ早苗」

「はい？」

普段の着流しに着替えた流司が早苗に声をかける。

「そこの机の引き出しなんだけどさ」

「ひ、引き出しが、ど、どうしたんでしょうか？」

「?どうした?そんなに慌てて？」

「い、いいえ!何でもありません!!ありませんとも!!」

流司の言葉に戸惑いを隠せない早苗。

自分+ のしたことがバレたのではないかと部屋の外にいる二人を含めて気が気ではいられなくなっている。

「まあ、いいわ。一番上の右側の引き出しを開けて中の物取ってくれないか？」

「えっ、一番上の右側ですか……?」

「ああ」

早苗は流司の示した引き出しへと目を向ける。

そこは結局最後まで開けることの叶わなかった引き出しであった。

「でも、そこって鍵がかかっていますよね」

「鍵？ああ、そういやそこは簡単には開かないようになってたんだ。よく知っていたな」

「い、いえ、まあ……」

冷や汗の絶えない早苗。

そんな気も知らない流司。

非常に温度差のある二人であった。

「そこはな。まず隣の引き出しを更に押すんだ」

「押すんですか？」

「そう」

早苗は首を傾げながらも流司の指示通りに件の引き出しの隣の引き出しを押す。

ガツコツ。

少し力を込めると何かにはまったように引き出しが一回り奥にズレる。

「そしたら、右側の引き出しを左にスライドさせればいい」

「……………」

あまりの開け方に早苗は啞然とする。

まさか、引き出しだからといって横に引き出すなど考えてもいなかった。

それも隣の引き出しがストッパーになっているなど想像もできるはずがない。

「どうした？中のものを渡してくれると助かるんだが……」

「あつ、はい。今すぐー！」

生唾を飲み込むようにして恐る恐る手を入れる早苗。

部屋の外からも固唾を見守る気配がひしひしと感じられていた。そして……

リンツ。

「鈴と……根付け……？」

早苗の手に握られたのは流司が常日頃から身につけている鈴と根付けであった。

「いや、月に行ったときはそれを忘れていてな。だからかな、罰が当たったのかもしれない」

早苗から受け取ったそれをいそいそと付ける流司。

そんな流司の様子にどつと疲れたように座り込む早苗と他二人。

「本当にどうしたんだ？」

「いえ、何でもありません。全て私がいけなかっただけですから……」

……

「？」



早苗は心配する流司にぎこちない笑みを浮かべて答えるのだった。

完。

「さて、「転逆」と」

妖怪すらも寝てしまった深夜。  
蝋燭の光に影が映しだされる。

「どつちら無事みたいだな」

自身の能力に反応し畳の上に木箱が現れたことに安堵の息を漏ら

す。

「流石に床下に隠しておくにも限界があるかもしれないな」

腕を組み悩み声を上げるのは他ならぬ流司であった。

「だからといって、“外”に置いておいて見つかった時はなあ……トメ婆なら見て見ぬ振りをしてくれるだろうが、その心遣いが痛い」

目の前の木箱の中身を思い流司は頭を悩ませ続ける。

「だが、こちらで見つかった場合、待ち受けているのは………死だ。今日、確信した。あれ以上に冷たい視線を四方から浴びせられて生きていく自信はない。むしろ、物理的に死にかねない」

望との一件の後、しばらく鳥肌が治まらなかったことを思い出し流司は身体を震えさせる。

「そもそもが燦希が俺に預けるのが悪い。確かに“外”の『博麗神社』であったときは安全だが、今は違う。地雷原より危険だ。人里の家には隠せるような場所などないしな……」

田舎という言葉すら生温い“外”の『博麗神社』であれば、スイス銀行レベルの安全が確保されていただろうが、今では全くの逆である。

「そもそも、しまうところがないからって俺に渡すなよな……」

流司自身興味がないといえば嘘になる。

何度かチラチラと見たこともあるが、好き好んで見ることはなく、

死地に踏み込むつもりもなかった。

「“巫女”ものに“メイド”ものとかマジで洒落にならん。燧希、悪いが処分させてもらおう。俺も命が惜しい」

人知れず木箱の中身の処分を決める流司。

この後、処分方法に流司が朝まで頭を悩ませたのは語るまでもないことだろう。

今度こそ完！！

今幕、儚月抄編終了。

といっても原作にはほとんど関わってないんですけどね。背景は同じということでご了承ください。

まあ、いい感じに謎も残せたかなあと思います。

本編と後書きが一緒になる予定はなかったんですけどね。オチはついたでしょう。

次は欄外を挟んで緋想天、前々から宣言していることの実現ですかね。

もしかしたら、欄外はないかも。

でも、そうすると虹川や夜雀、Gの出番がないんですよ……  
うん、強く生きて……

最近というかしばらく前から『絶対霊域』という漫画にハマってます。

地味に面白いです地味に。

読者の皆様は密かにハマっているマイナーかなと思っている漫画な

どあるでしょうか？  
以上、他愛もない疑問でした。

頁百九十七、『その日、博麗神社』

その日、幻想郷に激震が走った。

「……………」

「……………」

沈黙が痛いほどの沈黙ばかりがその場を支配していた。

黄昏る二つの影。

尤も時刻はまだ黄昏時には甚だ遠い。

それでもその二つの影は黄昏るばかりであった。

黄昏るだけであるならまだいい。その姿はそれ以上であったとも言えるだろう。

茫然自失。

二つの影からは生気が失われてしまっているといっても過言ではない。目を皿のようにして見てみれば、その二つの人影の口からは魂がはみ出しているように見えるかもしれない。

「どつするよ、霊夢……………」

「どつしたらいいのよ、流司……………」

その二つの人影、『神代流司』と『博麗霊夢』は全くの寸分の狂いもなく同調していた心で呟いた。

足を腕で抱え込み、死んだ魚の瞳のような目でしゃがみこんでいる。

その姿は途方に暮れてしまった迷子の子供のようでもあり、人生を諦めてしまった自殺志願者にも近い様子である。

果たして、一体何が流司と霊夢をこのような状態にしまったのか。

その原因は流司と霊夢の視線の先にあった。

“あつた”。

その表現は言えて妙なものであり、ある意味でも普通の意味であっても正しい言葉であつた。

そこには正しく原因となるものが“あつた”のである。

『博麗神社』。

その場所には小さいながらも、長き歴史を刻んでいた神社が“あつた”。

神社という神聖な場所であるのに参拝客より妖怪方が多く屯っている場所が“あつた”。

日々を縁側で日を浴びて穏やかに過ごすことのできる場所が“あつた”。

そう、“あつた”のだ。

そしてそれはつまり今は“ない”ということである。

『博麗神社』の“あつた”場所に“ある”のはただの瓦礫の山。かつて建物であつたものがそこには広がっていた。

神社を失った神主、『神代流司』。

神社を失った巫女、『博麗霊夢』。

晴れて“無職”になったこの二人であるが、そうなってしまった過程を知るには少々時間を遡らねばならないであろう。

時は数時間前まで遡る。

.....  
.....

…

「暑いわねえ……」

「ああ、暑いな……」

空は快晴。

雲一つ見えない空は夏を象徴する茹だるような日差しを燦々と照りつける。

「流司、扇いで……」

「自分でしろよ。正直、扇ぐことすら面倒なんだから」

霊夢の要求に流司が答えるつもりは全くしてなかった。

団扇を持った流司の右手は力なく動き、囁かな温風を流司に送る。何一つとして涼むことのできない動きであろう。

「扇ぎなさい」

「嫌だ」

「扇げ」

「ふざけるな」

互いに互いが一步も退くことのない攻防。

喻え、譲ることのできないものがあるのだとしてももう少し何とかしてほしい。

まるで小学生の言い争いを彷彿とさせる言葉の応酬であった。

「いいじゃないの。ケチらなくても。一人ぶん扇ぐのも二人ぶん扇ぐのも変わらないでしょうが」

「料理じゃねえんだ。労力はだいぶ変わるっての」

霊夢の言い分に流司は投げやりに答える。

事実、一人にだけ届ければよい風を二人に届くように扇ぐのでは労力はだいぶ変わる。

それが頭合わせに寝転がっていたのだとしてもその事実が変わることはない。

「暑い……」

「そうだな……」

ジリジリと照る直射日光を浴びているわけではなかったが、湧き出す汗は止めどなく途切れる様子は全くない。

霊夢の言葉に対する流司の反応も当初より幾分も鈍いものになっており、どれだけ億劫に感じているか知るに容易いと言えるだろう。

「流司、あなたの能力でなんとかならないの？」

「俺が疲れるから嫌だ」

「私は涼しいわよ」

暴論である。

「そもそも、俺の能力だと逆に寒くなるだけだぞ？」



うんざりとした表情で流司は納得のいつていないような顔をして  
いる霊夢に言う。

流司の能力は基本的に逆の状態に変質させるものである。“暑い”  
という状態は感じる人によって具体的な数値は変わるものである  
が、その逆が“寒い”という状態であることには変わりはない。

気温を具体的な数値を基に転逆したとしても、転逆の基点となる  
部分はセ氏でいうところの零度であり、気温が氷点下に至るとい  
うことになってしまう。

現在の気温が氷点下であるのを転逆するならまだしも、真夏の気  
温を転逆したとして得ることのできる結果は灼熱から極寒に変わる  
というどうしようもない結果であった。

「使えないわね……」

「へいへい、どうせ俺の能力は使えませんよ」

霊夢の理不尽な言葉にも流司は大きな反応を見せることはない。  
言い返すだけ体力の大きな無駄でしかなかったからであろう。

「氷精か幽霊でも捕まえてこようかしら？」

「前者はパス。下手をすれば余計に暑くなる。最悪、もつと面倒に  
なる」

「確かに同感。じゃあ、流司、早速幽霊を捕まえてきなさい」

「いや、霊夢が言ったんだろ。なら、霊夢が行くのが筋だろう？」

互いに風景を逆さに映しながら微動だにせず擦り付けあう流司と

霊夢。

駄目な人間の権化ともいえる光景である。

これで共に神に仕えているというのだから世の中分かったものではない。

「流司、ちよつとそこに直りなさい」

「は？」

「いいから、早く」

「はい、はい……」

霊夢の言葉に流司は起き上がり正座の姿勢をとり、霊夢はその前に仁王立ちになる。

「いい、流司？今から私がありがた〜い、説法をしてあげるからよく聞きなさい」

「説法つて……俺たちは神職者だろ……」

「そんなこと些細な問題よ。黙って聞けばいいのよ」

自身の役割を些細なことという言葉で片付けてしまう霊夢に流司は苦笑をせざるをえない。

尤もそれ以上、何かを言ったところで暖簾に腕押しになることは経験上理解していたので流司は大人しく霊夢の声に耳を傾ける。

「確かに私が意見を出したわ。それは紛れもない事実よ」

「まあ、そつだな」

提案をしたのは霊夢で間違いなかったので、流司もその言葉に異議はなく頷く。

「つまり、私はしっかりと残り少ない体力と気力を使って画期的な意見を出したの。その上、私に実行させるだなんて非人道的にもほどがあるでしょ？人間皆平等であるべきよ。分かる？」

「言わんことは分からんでもない。で、要約すると？」

霊夢が何を言いたいのか流司は察することができていたが、実のところを引き出すために更に流司は尋ねる。

「面倒くさい。さっさと行け」

「少しはオブラートに包んでくれ……」

「そんなもの食べてしまえば一緒よ」

身も蓋もない霊夢の本音に流司は呆れかえる。とはいえ、霊夢の言葉を突っぱねることが流司にできないことは事実であり、渋々ながらも流司は立ち上がった。

「ちなみに幽霊ってどうやって捕まえればいいんだ？」

「卒塔婆でも背負って冥界を歩けば勝手についてくるわよ」

「んな、馬鹿な」

流司が霊夢の言葉を笑い飛ばそうとしたその瞬間、足下から突き

上げるような振動が流司の言葉を遮った。

「じ、地震!？」

驚いた流司が声をあげつつ天井を見上げるとそこは……

びしっ。

「なっ!？」

見上げた天井は木目とは別の筋ができていた。

「亀裂ツ!？逃げるぞ!！」

「へっ?」

その光景に意識を奪われる前に流司が行動に移ることができたのは日々の経験があったからこそのものであった。

本能と理性の両方で危険を悟った流司は霊夢の腕をとって駆け出す。

『博麗神社』が倒壊を迎えたのは流司と霊夢が外へと飛び出したのと同じことであった。

頁百九十七、『その日、博麗神社』（後書き）

欄外はなく、緋想天に突入です。

妖精大戦争を飛ばしているのですその内何らかの形で書くかもしれない  
せんが。

ということで、博麗神社の倒壊からです。

ただ、『博麗神社』の倒壊の原因って地震でしたっけ？

違う場合はこの作品ではということでお願ひします。

うーん、緋想天やり直さないとなあ……

でも、神霊廟委託始まったし……

どうしたものか。

まあ、ともかく晴れて職を失った主人公らの活躍にご期待ください

（笑）

頁百九十八、『その日、神代流司』

「異変よ」

わなわなと肩を震わせて霊夢は呟いた。

「はっ？」

一方の流司は瓦礫の山と化してしまっていた『博麗神社』から目を霊夢へと向けて声を漏らす。

その表情には何言っているんだという感情がありありと感じられ、怪訝そうに眉間に皺を寄せていた。

「これは異変だって言っているのよ!!」

「異変って……自然現象じゃないか。まあ、かなり大きい地震ではあつたけどな」

霊夢の訴えに流司は呆れた反応を見せる。

確かに“異変”ではあるだろう。

だが、霊夢の考えている“異変”と流司の考えている“異変”という言葉には海よりも深く、山よりも高い隔たりがあるに違いない。

地震を流司が幻想郷で体験したことは初めてであり、『博麗神社』が倒壊したというその大きさからいって“外”で起きたのであれば相当の被害が起きたものであろうということを流司は理解していた。

それは通常に対する異変ではあることに間違いはない。

しかし、霊夢の言う“異変”は自然現象とは違う何者かによる“異変”のことであつた。

「いえ、地震の原因は大ナマズよ。間違いない・へ・んよ!！」

「それは迷信……とも言えなくはないのか……?」

確信を持った口調で言う霊夢の言葉を否定しようとして流司の口から出たのは疑問の言葉であった。

“外”にいた頃であれば笑い飛ばしていたような霊夢の言葉であったが、“幻想郷”の住人としての感覚はその言葉が真実であるのではないかという思いを流司に感じさせていた。

「捕まえて蒲焼きにして復興費にしてあげるわ!！」

そう言うなり空へと霊夢は飛び出していく。

「おい、霊夢!？」

流司の制止の声など聞くはずもなく彼方へと消えていく霊夢。伸ばされた流司の手は虚しく空を切るばかりである。

「行っちゃまった……」

「そっね」

「どっしる　　って紫ッ!？」

いつの間にかに流司の隣へと姿を現し返事をした紫に流司は飛び上がるように驚いた。

「ご機嫌はいかが?流司?」

「……どう見えるよ？」

「リストラ宣告を受けた中年男性みたいかしら？」

「……非常に反応しづらいコメントをありがとう」

「どういたしまして」

げっそりとした流司に紫は微笑んで応えてみせた。

「野次馬なら勘弁して欲しいんだけどな」

「まさか！？そんなことを私がするとも思っているの？」

「ああ」

流司の言葉に驚愕の色を見せる紫に流司は淡々として声で返事をする。紫の言葉を何一つとして流司は信じてはいなかったからである。

「ひ、酷いわ……私がどれだけ……」

「紫？」

目元に涙を見せ始める紫に流石に流司も困惑する。

「まあ、状態はこれくらいにして」

「紫……」

尤も次の瞬間には紫は笑顔で、流司はうんざりとした顔へと変化



したが。

「今回、心配しているのは本気よ。紛れもないね」

紫は真剣な表情で目を細め倒壊してしまった『博麗神社』をじっと見つめる。

「流司。貴方は『博麗神社』がどのような場所であるか理解しているわよね？」

「“外”でもなく“幻想郷”でもない場所だろ？だから俺がこっちに来れたようなものだしな」

“外”にも“幻想郷”にも属していない『博麗神社』。

だからこそ、流司は“外”から“幻想郷”へとやってきたのだ。

『博麗神社』がどのような場所であるかは流司自身が実体験として理解しているだろう。

「そう、だから『博麗神社』は不安定なの。『博麗神社』にもしものことが起きたら“幻想郷”がどうなるかは分からないわ」

「もしものことって……」

流司は紫につられるように視線を向ける。

そこにあるのは“もしものこと”が起きた『博麗神社』であった。

「少々、おいたがすぎたようね。私は犯人を懲らしめに行くことにするわ」

「犯人って、これは自然現象だろう？」

「さて、どうかしらね？」

「どうかしらって、おい！！どいつもこいつも……」

意味深な言葉を残して紫もまた流司の前から姿を消した。

霊夢のときと同じ様に流司の腕は力なく垂れ下がることしかできない。

「犯人がいるのか……？」

流司は紫の言葉を吟味するように首を捻る。

『八雲紫』が動いたということは幻想郷にとって無視することのできない問題が起きている。もしくは起ころうとしていることとである。

その点では紫の言葉は十分に信用に足るものといえる。

つまりは十中八九で『博麗神社』を倒壊に至らせた地震は人為的に引き起こされたものであるということであった。

「まあ、人でないことは確かだな」

流司もよもやこれほどのことが人間に引き起こせるとは考えていない。

相当の力を有している存在であることは間違いなかった。

「まさか、本当に大ナマズが引き起こしたとでもいうのか……？」

紫との遭遇で信憑性の増した霊夢の考えに流司は旋律する。

暴論とも呼べる考えのもとで行動始めたというのに、結果としてその行動が的を射ていることがほとんどであるというのだから霊夢の勘は底が知れないといえる。

「ともかく、ここにいたところで仕方がないか……元に戻すことができないこともないが、俺がただでは済まないからな」

流司の能力をもってすれば倒壊してしまった『博麗神社』を元の姿に戻すことができなくはない。

ただし、神社一つを元に戻すとすれば尋常ではない代償が必要となることは明らかであり、現実問題として流司にできることは何一つとしてなかった。

「たぶんこれくらいだと一週間の昏睡としばらくの筋肉痛だな」

崩れた『博麗神社』の状態を確認して必要となる能力の規模を考えた流司は呟く。

直すつもりは流司にはなかったが、知らずのうちに考えを巡らせてしまっていたからであった。

「一度、人里に行こう。あれだけの地震だったんだ。向こうの家が無事だとは限らないしな」

一瞥し流司は人里へと空を駆るのだった。

頁百九十八、『その日、神代流司』（後書き）

苦勞だけなら世のお父さんにも負けてはいない主人公。  
頑張れその未来は輝いているはず……

輝くといえは今夜は中秋の名月。

更には満月でもあります。

高気圧が頑張っているの、北海道と東北の北以外は雨月にもならないように、絶好の月見日和ですねえ……

月を見ながら日本酒をちびちびしたいと思う私は年なのかなあ……

頁百九十九、『その日、人里』

「ん？」

人里へと降り立った流司は疑問の声をあげた。

流司の目に飛び込んできたのは普段と変わらぬ穏やかな生活を送っている人々の様子であった。

とてもではないが大地震を経験した後の様子には流司には見ることができず、人里の家々にも目立った損傷を見ることはできなかった。

「これは……」

「どうかしたのか、流司？このような通りの真ん中で呆然と立っている？」

「ああ、慧音」

道の中心で何をすんでなく立ち尽くしてしまっていた流司に声がかかる。

『上白沢慧音』。

人里の守護者かつ寺子屋の教師でもある半妖の女性だ。

「ああって、少しは気の利いた返事はできないのか？久しぶりの晴れなんだしな」

「久しぶり？連日、茹だるような日差しと暑さじゃないか」

気の籠もっていない流司の返答に慧音は呆れたように言う。

折角の晴天の空の下での返事には似つかわしくないほどに流司の声には覇気がなかったからだ。

一方の流司は慧音の言葉に首を傾げてしまう。

夏らしいとはいえ、連日の鬱陶しくもなる日差しに流司は嫌気が差し始めていたというのに、慧音にとっては久しぶりの晴れだと言っからである。

「暑いことには暑い日が続いていたが、こつも晴れることは数日は少なくともなかったはずだが？」

「博麗神社は毎日嫌になるほど天気だったぞ……」

慧音に流司は夏バテを思わせるような疲労を浮かべた顔で答える。実際、夏バテギリギリまで流司の体力は削られていたといつても過言ではない状態であったのでその表情が全て間違いということはないだろう。

「そんな話が……人里と博麗神社はそれなりに距離があるとはいえ、局地的というならば同じ括りになるはずだが？」

「それは俺も思う。だが、実際に晴れは晴れであったからな。それよりも、だ」

「？」

慧音の言葉に同意を示しながらも流司は本来の目的の為に話を区切る。

「地震は大丈夫だったのか？」

大きな影響がなかったことは流司の目から見ても明らかであったが、確認のために慧音に尋ねる。  
だが

「地震？一体なんの話だ？」

慧音の反応は流司の予測から大きく離れているものであった。地震の規模ではなく、地震そのものの存在を慧音は知ってはいなかったのだ。

「本気か！？あれだけ大きかったのに！？」

「大きい？そもそも地震なんて幻想郷の歴史でもそう起きたことのあるものではない。地震があつたのか？」

「ああ、博麗神社が倒壊してしまうほど大きなものがな」

「なっ！？」

流司の言葉に慧音は口を大きく開けて表情を一変させる。その顔は信じることができないという感情がありありと示されている。

「言っておくが嘘なんかではないぞ。実際に見てもらえば分かるだろうけど、これ以上ないというほどに跡形もない」

「いや、流司の言うことを信じていないというわけではないんだ。ただ、現実味を持ってなくて、な……」

真面目な声色で言葉を付け足す流司に慧音は未だ驚きから立ち直

れてはいない様子で呟いた。

「それは仕方がないさ。俺だってまだ信じられないというか、信じたくないという思いがあるからな」

流司も慧音の様子を責めるようなことはない。

流司自身、『博麗神社』が倒壊してしまったという事実をいまいち飲み込み切れていない部分があったからである。

「それで無事なのか？」

「見ての通り五体満足だ。霊夢も健康そのものさ」

驚愕から流司の身を案じるようなものへと表情を変えた慧音に流司は手を広げ微笑んでみせる。

「……朔の姿が見えないようだが？」

「朔は今守矢神社の方に行っているんだよ。心配しなくていい」

流司の全身を見た渡すようにして呟いた慧音を安心させるように流司は説明する。

普段であれば流司の傍に常にいると言ってもよい朔の姿は今は『守矢神社』にあった。

『守矢神社』が幻想入りをして以来、朔は時折ふらりと流司の傍から姿を消して『守矢神社』にいたことがある。

早苗などが迷惑している様子もないので、流司がこれといって咎めることはなく、今回の地震に巻き込まれることがなかったのは幸いであつたと言えるだろう。

「そうか。ともかく、誰にも怪我がないのであれば一安心と言える



だろう。起こってしまった事態を考えると樂觀していることはできないけれども……」

「慧音もそう思うか……」

深刻そうに言う慧音に流司は呟く。

「それはそうだ。博麗神社の意味を考えればそのままに置いていい問題ではない。恐らくは流司のいう地震は博麗神社のみで起きたものだろうからな」

「やはり……」

慧音の言葉は流司も薄々は感じていたことではあった。

『博麗神社』を倒壊させるだけの地震であったにも関わらず、人里には何一つ影響なかったということはが地震が『博麗神社』を狙いすまして引き起こされたものであるということのこれ以上ない証明でもあったからである。

「結局は霊夢の勘が正しかったということか……」

「というと既に動いているのか？」

「霊夢だけでなく、紫もな。そういった意味ではあまり心配はしていない。ただ、どちらも怒り心頭だったから犯人の安全は保証しないが」

「まあ、それだけの事態ということだ。流石にしてもいいこととそうじゃないことがある。今回は後者であったただけだろう」

異変を起こすことは誰にでも与えられている権利であるようなも

のだが、限度というものは確実に存在している。

『博麗神社』の倒壊という一歩間違えれば“幻想郷”の存在が危ぶまれてしまう事件は異変という言葉で片付けるには少々度が過ぎたものであると言えた。

「自業自得か……」

流司は顔も知らぬ犯人を思い空を見上げる。

「ん？虹か？」

「虹？本当だ。雨なんか降ってないよな……？」

流司と同じように空を見上げた慧音が虹がかかっていることに気がつく。

雨が降った気配はなく晴れの空に突然現れた虹は酷く浮いて見える。

「おかしな天気だな。これも異変の一端かもしれないな」

「虹がか？吉兆だといいたが……」

確かに慧音の言葉には思うところも流司にはあったが、虹だからといって吉兆であると断言できる自信は流司にはなかった。

「ところで、これからはどうするんだ？博麗神社が倒壊してしまっただという事はしばらくはこちらの家にいるのだろうか？」

「まあな。ただ、俺なりに今回のことを調べてみることにする。これでも腹が立っているんだ」

「ほどほどにな。どの道、巫女と賢者が動いているのだからすぐに解決するのだからうからな」

「分かってる。不相应な真似はしないよ」

慧音に苦笑してみせて流司は虹を臨むようにして再び空に上がる。穏やかな表情の裏に怒りを潜めて流司もまた犯人を求めていくのであった。

頁百九十九、『その日、人里』（後書き）

緋想天といえぱっぱりこれです。

まあ、流司ということなので……

これは非想天則の方であの方がたと前は思っていたのですがね。  
憐れ……

見た目の方で繋がられましたね……

実は避難していた朔。

忘れていたわけではありませんので、あしからず。

前半何言っているか分からない？

大丈夫、皆様なら理解できているはずですよ。

頁二百、『その日、迷いの竹林』

「あの虹、いつになったら消えるんだ……？」

流司は竹の間の空に見える虹を見上げながら呟いた。

鬱蒼と茂る竹によってその全貌は流司の目に届くことはなかったが、空には未だに虹の姿が残っていた。

虹というものは本来短時間で消えるものである。

というのは虹を形成しているプリズム代わりの空気中に漂っている水滴がそれ程長い間止まることができないからである。

逆に言えば、水滴が常時空気中に浮かんでいることができれば、半永続的に虹を形成し続けることができるのであって滝壺などで太陽光があれば基本的に虹を見ることができるとはそういう理由からである。だが、空にかかる虹の場合は滝壺と同じように断続的に空気中に水滴が供給されることと太陽光が当たるといった状況を両立させることは難しい。

空気中に虹を作り出すだけの水滴を漂わせるには雨の存在は欠かせない。

断続的に雨を降らせるためには規模の大きい雲の存在が不可欠である。

だが、太陽光を当てるためには空に雲のような光りを遮ってしまうものがあることは非常に好ましくない。

よって、これらのことが並び立つことがない以上、虹が自然現象として形成され続けることは極めて困難なことであるのだ。

「やはり、慧音が言ったようにあの虹も今回のことに関わりがあるのか？」

不自然に浮かぶ虹を眺め竹林を歩きながら流司は呟く。

何故、流司が竹林にいるか。

言ってしまうえば、それは勘でしかない。

結局のところ、“異変”を解決するといっても流司に手掛かりなど何一つとしてないのである。

なれば、その行動は自ずと自身の直感に頼る部分が大きくなってしまう。

だからといえ、流司は勘に頼って行動するばかりの性格ではない。まずは情報を集める。

その目的がために竹林を訪れていたのであった。

「妹紅、いるか？」

迷うことなく竹林の一画にある小屋へと辿り着いた流司は戸を叩いて声を上げる。

しばらくして……

「流、司……？」

「も、妹紅？どうしたんだよ！？その隈は！？」

ゆっくりとした動きで開かれた戸から顔を出したのは目元にくつきりと隈を作った不健康そのものな妹紅であった。

「取りあえず、入ってよ……説明はするから……ともかく、太陽は見たくないの……」

空に浮かぶ太陽を恨みがましく一瞥した妹紅は流司を小屋の中へと招き入れるのだった。

「日が沈まない……？」

「そう、ここ数日かな？夏だから日が長いとは思っていたけど、それでも不審に思ってた夜中まで起きていたんだけどね。そしたら、太陽が沈まずにまた昇り初めてたのよ……」

げっそりという言葉だけでは済まされない妹紅の声に流司は首を傾げると妹紅は重々しい口調で説明した。

「まるで『白夜』だな……」

「『白夜』……？」

流司の漏らした呟きに今度は妹紅が首を傾げる番であった。

「自然現象の一つだよ。地球の自転軸が太陽との公転面に対して平行じゃないことで、極地に近い一定の区域で一日中太陽が沈まないことがあるんだよ」

『白夜』とは北極圏、もしくは南極圏の一部で観測することのできる太陽が見かけ上沈まない現象である。

地球は太陽との公転面に対して、自転軸を傾けて公転し自転している。

その為、季節によって日の出ている長さが変化するのである。

これが仮に公転面に対して自転軸が平行に公転と自転をした場合、季節による日照時間に変化が生じることはなくなる。そればかりか根本たる季節を形成する要因が地軸の傾きであるため、季節そのものがなくなってしまうだろう。

「?????」

そうは言えども、幻想郷で暮らしている妹紅に流司の説明が理解できるというはずもなく、頭上には幾つもの疑問符が浮かんでしまっていた。

「ともかく、自然に妹紅が言っているようなことはあるってことだよ」

「そう、いつこと……」

「ただ、この国では絶対に起こらない現象なんだよな……」

現象としてならば、太陽が沈まないということは起こらないものではない。

だが、立地条件としては極めて限られた場所でしか起こり得ないものであった。

“幻想郷”は“外”と二つの結界により隔絶されている土地ではあるが、陸続きであることには変わらない。

幻想郷が本来ある場所の緯度では『白夜』は発生することはない。即ち、妹紅の体験している『白夜』も何者かの仕業で引き起こされている可能性が非常に高いのである。

「そ、う……なの……?」

唸り声をあげながら考えを巡らせる流司とは裏腹に妹紅はうとうとと船を漕ぎ始めてしまう。

「眠いのか?」



流司は妹紅に尋ねながらも無理もない話だと内心で思う。

人間というのものは太陽の光で体内時計を調整する。

日が昇り明るくなり、日が沈み暗くなることで生活のリズムを整えるのである。

特に“外”とは異なり人工的な光の乏しい“幻想郷”では太陽の光とはそれだけ重要だ。

それが一日中輝きを失わず闇が訪れないともなれば体調を崩してしまってもおかしくはない。

眠いだけであるのならばまだマシな方であると言えるだろう。

「そん、な、ことは……」

「無理をするなって。これだけ締め切っていたってことは寝るつもりだったのだろう？」

「流石に、ね……この際、暑いのは、我、慢しよって……」

真夏であるというのに小屋は閉め切られており、外の光は開けっ放しにしてある入り口の戸からしか差し込んではいない。それは戸を閉めてしまえば完全な闇になってしまふということでもあるが、同時に部屋の中が蒸し風呂状態になってしまふということでもある。

それだけに流司には妹紅が並々ならぬ覚悟を持って寝ようとしていたことが分かった。

「いいからもう横になれ」

流司は立ち上がると既に脇に用意されていた布団を敷き妹紅を横にさせる。

不老不死の妹紅であっても、あくまで老いず死ぬことがないだけ

であり、体調を崩すことはある。

妹紅の状態は流司の目からしてどう見ても限界であり早急に休ませることが必要に思えていた。

「でも、悪い……」

「別に俺が勝手に来たんだ。妹紅が気にすることはない。ゆっくり休めつて。それに俺がここにいる意味もあるだろうしな……」

「？」

囁かな抵抗を見せる妹紅を制して流司は呟く。

そんな言葉を妹紅は訝しみ流司を見上げるが、流司は微笑んで見せるだけであった。

「こういうこと」

瞬間、部屋が闇に包まれる。

無論、まだ小屋の戸は閉じてはいない。

単純なことであった。

流司が小屋に差し込む光を反射させたのだ。

「しばらくはこうして奥から休め」

流司は妹紅に語りかける。

「ありがとう、と……」

そととくに疲れがたまっていたのか、最後まで言葉を紡ぐことなく妹紅の意識は途切れる。

「無理をするなどいっても仕方がないか。思った以上に今回の異変は広範囲なものかもしれない……」

安らかな寝息を立てる妹紅をほっとした表情で見つめながらも、今回の“異変”の厄介さに流司は再び思考を深めていくのであった。

頁二百、『その日、迷いの竹林』（後書き）

ということでも妹紅の気質は『白夜』でした。

まあ、不死を示すにはぴつたりかと……

ただ、現実問題としては非常に面倒。

妹紅の周りだけ常に昼です。

辛すぎます。

季節の成因には高圧帯や低圧帯、風なども影響してきますが、それも全て地軸が傾いていることの影響を受けているので、地軸が太陽に対して真つ直ぐだったら、緯度によって常に暑い、暖かい、涼しい、寒い地域に分かれることになります。どこまでが一般常識かは分かりませんが、まあ、地学や地理を勉強したりしている人にとっては説明することでもありませんね。

良かったね、地球が素直じゃなくて。

『白夜』があるということはその逆で一日中昇らない現象もあります。

これを『極夜』といいます。

どちらも英語に直すと『white night』に『polar night』と捻りも何もありません。

ちなみに地球儀などで太陽との位置関係を考えてみれば分かりやすいのですが、極点でいえば『白夜』、『極夜』ともに発生する期間は春分から秋分の6ヶ月ほどでその後逆転します。

つまりは一年の内半分は一日中明るい暗いという仕様になっています。

まあ、薄明かりであったりと完全な光でも闇でもない日も含めてで

すが。

それ以外の場所だと、太陽に対して地軸の傾きが大体23・4度です。それを90から引いた南緯、北緯共に大体緯度66・6度以上の地域であれば『白夜』と『極夜』は観測することができます。緯度66・6度の地点では夏至と冬至にどちらかが観測できるということです。

人が実際に住んでいる地域では2ヶ月ほど夜であったり昼であったりする場所があったはずですね。

書いた後、妹紅もう少し頑張れよと思ってしまった……  
それでも慣れない人間にとっては辛いかもしれませんね。

頁二百一、『その日、永遠亭』

「睡眠薬？自殺するならもっという薬があるわよ？」

「なんでそうなるんだ……鈴仙も柵から取りだそうとしなくていいから……」

「そうですか……？」

永琳の指示に素直に従う鈴仙に流司は疲れたように呟いた。

師匠の言葉に素直であることは美点かもしれないが、時と場合を考えて欲しいと流司は思う。

「今、起こっている異変で寝不足の奴がいてな」

「なるほどね。でも、今起こっている異変ってアレでしょ？」

流司の説明に永琳は納得を示したように頷くも窓の外を指差した。

「ああ、ここではアレなんだろうな」

「……………」

流司、そして鈴仙もまた永琳と同じように窓の外の空へと目を傾ける。

その空は暗い。

しかも、その暗さは雲や霧によって光が遮られてしまっているなどという程度のものではなかった。

その静寂を作り上げてしまうような張り詰めた闇は間違いなく夜を示している。

壁に掛けられていることなく無骨さを感じさせる時計の単身は未だに頂点を指し示してはいない。

今日という日を迎え、下った後にまだ上りきってはいないのである。

つまりは時刻はまだ昼の12時を迎えてはいないはずであるのだが、外の様子は完全に深夜を思わせる闇夜であった。

「『幻月』か……全く節操がないというかな……」

「珍しい現象であるとはいってもこうも一日中見えると新鮮味もなくなってしまうわね」

空には二つの月が輝きを放っている。

『幻月』。

空気中の氷晶によって月光の屈折が繰り返され、とある一点でその光が最も強くなり、月が二つに見えるという現象である。

永琳が口にしたように易々と見ることができるといえるような現象ではない。

少なくとも、虹以上に珍しい現象であることは確実であろう。

「今回の“異変”は誰かが自然現象を操っているってことなのかもしれないな……」

流司は今までに体験した不可解な天気の数々を思い出しながら言う。

確かにそうであれば、『博麗神社』を襲った地震から『永遠亭』の幻月まで全ての事柄に対して説明がつく話であった。

「あら、“異変”に関して調べているの？」

「ああ。と言つても、情報を集める程度だけだな。今のところは」

流司の呟きに永琳は意外そうな表情を浮かべて呟いた。

「まあ、頑張りなさい」

「全く余裕だな。現在進行形で巻き込まれているというのに」

「直接、被害を被つてはいないもの。原因さえ分かれば犯人には興味はないのよ」

「永琳らし はっ？」

永琳らしい言葉に流司は笑おうと口を開けた状態で固まる。

聞き流してはいけないような言葉を簡単に言われたような気がしたからであった。

「……いや、今、原因が分かったとか何とか言う言葉を耳にした気がして」

「ええ、この異常気象の原因であればもう分かっているけど、知らなかったの？」

「だからこそ、調べているんだろ？」

「てっきり私は原因はもう分かっているもので、犯人を探しているのだと思っていたわ」

流司の言葉に永琳は先程以上に意外な表情を浮かべて呟いた。



「永琳ほどに俺は賢くはないよ……」

一を聞けば十を理解できてしまうような永琳に流司の洞察力は遠く及ばない。

故に現時点で流司に理解できたことは各地で起こっている異常気象が“共通した異変”であるということだと知るのが精一杯であり、その原因が何であるのかなど知る術すらなかった。

「鈴仙はどう思つかしら？」

「わ、私ですか！？確かに少し前から変な感じはしてましたけど、私が薬を売りに行くときは空が少し霞む程度だったのであまり気にしてはいませんでした」

突然の永琳の問いかけに鈴仙は驚くも、思い出すように目をさまよわせながら答える。

「そう……」

鈴仙の答えに永琳は呟きを漏らして考えに耽る。

「流司はこの異変を解決したいのね？」

「解決というか、犯人を見つげるくらいのことではしようかなとは思っているが？」

「だったら、手掛かりをあげましょうか」

「どうせなら答えを教えてくださいでもいいと思うのだけど……」

永琳の微笑みに流司は少しだけ不満を覚える。

流司の表情の変化にも微笑みを崩すことのない永琳がこの異変解決の糸口になりえることを知っているということは流司には分かっており、それを流司に対して教えるつもりがないということも流司には分かっていることであつた。

そして、そのことが原因で流司が不満を覚えるだろうということもまた永琳は理解しており、その上での“手掛かり”という言葉であつた。

「それでは流司ではなく私が解決したことになってしまつわ。で、手掛かりは必要？」

「……是非とも」

「初めから素直にそう言えばいいものを。まあ、いいでしょう。流司は各地で異常気象を観測したのでしょう？」

「そうだな。異常といえるものはこの『幻月』と『白夜』、後は『虹』くらいだが、博麗神社の周囲はやたら晴れていたし、逆に人里の周囲はそうでもないとは聞いているな」

流司は今まで実際に経験したことや話に聞いたことなどを思い出しながら永琳に答える。

「その天候の違いが“異変”に関わりがあるということは間違いないわ。だから、今度は“相違点”ではなくて“共通点”を探してみれば新しいことが分かるはずよ」

「共通点……？」

永琳の言葉に流司は顔をしかめてしまう。

永琳が嘘を言っているようにには流司には考えられなかったが、今までの異常気象に“共通点”があるとは思えなかった。

『白夜』と『虹』であれば太陽という共通点がある。

だが、『幻月』と太陽では共通と言えるほどの接点があるように流司には思えなかった。

月の輝きも太陽光の反射であるが、それを言ってしまうえば大抵のものが太陽という共通点で結ばれてしまう。

流石にそれが解決の糸口となるような共通点になるとは流司も考えてはいない。

「（もつと何か、明確なものがあるんだと思うんだが……）」

記憶を探りながら流司は考えるが答えが出る気配は一向になかった。

「じつと悩んでいるよりは他の場所へ行ってみるといふことも一つの手よ。情報が多ければそれだけ答えには近づくことができるでしょうからね」

「そうするか……あつ、でも……」

「薬ならこちらで届けておきましょう。お代は貰っているし、送料はサービスにしておくわ」

「なら、お願いするよ。他の場所もどうか気になっていたしな」

軽く会釈を交わすと流司は新たな場所を求めて昼の夜空へと飛び出していくのだった。

頁二百一、『その日、永遠亭』（後書き）

『幻月』という言葉に自然現象を思い出した貴方、天文もしくは氣象マニアですね。

普通はそんな発想しません。つか、知りません。

『幻月』という言葉にかわいいを思い出した貴方、東方歴が長い、もしくは勉強を欠かしていませんね。

素晴らしいです。ですが、姉妹と呼べる現象は『幻日』ですのであしからず。

『幻月』という言葉にエキストラを思い出した貴方、選り好みしない東方ファンか、動画サイトの常連です。

いいですねえ、何でもとりあえず見てみようという姿勢は私も同じです。

『幻月』という言葉にトラウマのある貴方、一体何歳ですか、それとも金持ちですか。

流石にプレイは私はしたことはありません。あのちっちゃいのは避けられないなあ……

全部当てはまる人はどれだけののだろうか……？

頁二百一、 『その日、魔法の森』

仄暗い森にはどことなく冷ややかな空気がそよいでいた。

空は漆黒から鮮やかな水色を取り戻し、陽光は天高くから降り注ぐ。

陰鬱な森にはその日差しはほとんど届くことはなく、肌に張り付くような湿気の多い空気はじわりじわりと全身から汗を呼ぶようである。

『魔法の森』。

そこは四季を通してその環境を大きく変えることはない。

一年中、風花のように舞う茸の胞子はことごとくして立ち入ろうとするものを拒んでいく。

人間、妖怪、分け隔てなどなく。

「ここは大丈夫なのか？」

落葉が腐葉土と化した柔らかい大地を踏みしめながら流司は呟いた。

流司の目で見たところ『魔法の森』には特に異常気象と呼べるような現象は起こってはいないように見える。

元から正常と呼ぶには難しいかもしれない場所ではあったが、拍車をかけるような状態には一見して見れば至ってはいないだろう。

「強いていえば、少し湿気が多いか……？」

流司の肌にまとわりつく空気は心なしか通常よりも鬱陶しく感じるものであった。

からりと夏の容貌を見せる空の下であれば、『魔法の森』とは言えども、もう少し乾燥していてもおかしくない。

だが、流司にはまるで雨上がりのような湿気の多さに感じられた。無論として、周囲を見渡したところで雨が降った様子は何一つと見受けることはできない。

不自然な蒸し暑さが流司の頬を撫でるばかりであった。

「ともかく、アリスにでも話を聞いてみることにするか」

その場所のことはその土地に住まう人に尋ねるのが一番である。

『魔法の森』に住んでいる人で流司と関わりがあるのは入り口を含めて考えれば三人。

『霧雨魔理沙』、『森近霖之助』、そして『アリス・マーガトロイド』の三人である。

内、魔理沙に関しては聞いたところで無駄に終わることは目に見えている。

仮に『魔法の森』にも異常気象が襲っていたとして、興味を魔理沙が持つことはあってもそれ以上に掘り下げようとはしないだろうことを流司は察していたからである。

霖之助は『魔法の森』の入り口に店を構えているのであり、内部の状況に詳しいということはない。

故に今回の件に関して尋ねるのはお門違いであろうと流司は判断していた。

よつての消去法によって流司はアリスの洋館を目指して足を進めていた。

喩え、異常がないという結果を得ることができたとしてもアリスであれば、何か手掛かりになるような意見を出してくれるかもしれないという囁かな期待もあつての行動であつた。

「見えた。っん？」

アリスの住まう洋館が見えた瞬間、流司の視界に見慣れぬものが

映り込む。

「緋色の雲……?」

アリスの家のちょうど真上と言える場所に緋色の雲が浮かんでいた。

夕焼けに染まっているというわけではなく、そもそもが夕焼けにはまだ早い時間である。

それは雲自体が緋色であったというのが正しい。

まさに異常と捉えるには十分すぎる光景であった。

だが

「緋色? 『彩雲』ならまだしも緋い雲なんて自然現象はあったか?」

流司はその雲に首を傾げる。

今までは異常気象とはいえ、天候、現象としては『虹』なり『白夜』なり『幻月』なりと観測されたことのあるものばかりであった。けれども、『彩雲』と呼ばれる雲が虹のように七色に輝く現象であれば流司の記憶にあったが、緋い雲を作り出す現象に流司は心当たりがなかった。

勿論、単に流司が知らないだけであるという可能性も捨てきれないものではないだろう。

しかし、そうこうと流司が足を進めているうちに、

「消えた?」

緋い雲は水が退いていくような様子で跡形もなく掻き消えてしま

う。

代わりに、

ぼつッ。

「ツ?! 霰? いや、雹か」

流司の肩に親指ほどの大きさの氷がぶつかる。  
その正体にすぐに流司は気付きはしたも、

「っ、ツ!?!」

次々と降り注いでくる雹に慌てて駆け出す。

親指ほどかそれ以下の氷であるので、痛いで済んでいたが、これ以上に大きいものが降ってくるようであれば、最悪命も危ぶまれかねない。

ドンドンドン。

アリスの家の扉の前まで流司は駆け寄ると乱暴にドアをノックする。

「はいはい、どちら様　　って、流司ツ!?!」

「悪いがともかく入れてくれ! 痛くて仕方がない」

「え、ええ」

乱暴なノックに不機嫌そうにドアを開けたアリスであったが、流司の切羽詰まった声にその表情をすぐに変えて部屋へと招き入れる。

「ふう、助かった……」

「助かったって……こんな天気の外に出るだなんてどうかしているんじゃない? まあ、丁度そっちに向かおうと思って良かったからいいの



「だけど……」

安心したように一息ついていた流司にアリスは呆れた表情でタオルを差し出しながら言う。

「こんな天気と言っても、雹が降り出したのは今だぞ？」

流司はタオルを受け取りながらアリスに抗議をするように応える。

「嘘……？連日降り続けていたじゃない？」

「ああ、なるほどここでは『雹』ってことか……」

流司の返答に首を傾げてしまうアリスの様子に流司が逆に納得した表情を浮かべる。

雹が降る季節は積乱雲が発達する夏に多いことから雹が降ったことに疑問を流司は思っていないが、“連日”という言葉にここでの異常気象が『雹』であるのだと理解したからであった。

「何を一人で納得　って、そうよ！！地震！地震は大丈夫！？」

「ん？ここでは地震があったのか？まあ、この通りさ。怪我はない。尤も博麗神社は倒壊してしまっただけだな」

「ああ、間に合わなかったのね……でも、無事なら良かったわ」

流司の返答にアリスは落胆の色を見せながらも安堵の声を漏らした。

「間に合わなかった？地震が起ることをアリスは知っていたのか？」

「ええ、まだ調査中ではあったのだけど……緋色の雲や降り続ける雲は地震の宏観前兆なのよ」

問い掛けにアリスは目を若干伏せながらも説明する。

「宏観前兆。つまりはこの異常気象は全て宏観異常現象だったということか？でも、緋色の雲が『地震雲』だとして、『雹』や『虹』はまだしも『白夜』や『幻月』はそんな言葉じゃ片付けられないな……」

“ 宏観異常現象”。

地震の予兆となる知覚できたり発生する現象のことを生物性、物理性など一つにまとめて指し示す言葉である。

地震雲や動物の異常行動などがこれに当てはまっている。

だが、異常とはいえ限度はある。

流星に地軸の傾きや昼夜の逆転まで引き起こせるようなものではないことは間違いない。

「待つて。何よ、その天変地異は？そんなことが幻想郷のあちこちで起きているというの？」

「あちこちというか、極めて局地的な。この雹だつて、アリスの家の周辺だけだしな。ああ、『虹』はどんなところでも見えるか」

「あり得ないわ。調査のために少しだけ外を出歩いたけど、少なくとも魔法の森の中では『雹』は降り続けていたわ。『虹』なんかは見えたことないし……」

「何言っているんだ？今も見えてるじゃないか」

流司は窓の外にある虹を指で指してアリスに言う。

「嘘……さっきまであんなところに『虹』なんてなかったのに……」

窓の外に見える光景を信じることができないのかあんどりと口を開けてしまっている。

「ほらな、俺は行くな？アリスのおかげで新たに手掛かりも手に入れられたしな」

「手掛かり？」

流司は笑みを浮かべるが、アリスにはその心当たりが全くとしてなかった。

「ちょっとした心当たりができただけだ」

「なら、私も……」

「ああ、アリスはここでこのまま調査を進めておいてくれないか？あてが駄目だったときにまたくることになるだろうから」

「……………そういうことなら」

流司は少しだけ苦い顔をしてアリスの申し出を断る。

その言葉は真実半分、嘘半分といったところである。

それを分かってかアリスも渋々といった様子で頷くのだった。

「じゃあ、任せるよ。タオル助かった」

流司は羽織っていたタオルをアリスへと渡し、再び外へと出る。

そこには虹が涙を流すように雷が降り続ける不思議な世界が相変  
わらず広がっているのだった。

頁二百二、『その日、魔法の森』（後書き）

タオルはその後、スタッフが美味しく頂きましたとさ。

主人公、これでも設定中卒が最終学歴なんだぜ……

宏観異常現象という言葉を知っている高校生がどれだけいるか、大  
学生でも知らない人が多いでしょうしね……

今更ですが、今幕は基本的に一話完結。

しかも、到着 出発という流れで進めています。

「それで私のところへ来たの。なかなかの推察ね。確かに“気質”は魔法使いにとって重要なファクターの一つよ。私が今回のことに関して知っているという考えは間違いではないわ」

「（“緋”“紅”という単純な考えでここに来ただなんて言えない……）」

手元の本から視線を逸らすことはないも、感心したように口を開く『パチュリー・ノーレッジ』に流司は内心で冷や汗を垂らす。

パチュリーが感心したような内容ではなく、『緋色の雲』にかつてあつたと聞く『紅い霧』を連想したがために流司は紅魔館を訪れていたからである。

「えっと、その“気質”ってのは何なんだ？言葉通りの意味ではないんだらう？」

“気質”とは一般的に感情的な反応や傾向に関係している人格、つまるところのパーソナリティ、個性の一つの側面を示す心理学的言葉である。

すなわち、個人の性格の基礎を成すものといえる。

「意味合いとしては当たらずも遠からずといったところ。個性が表れるものでも認識していれば十分なはずよ」

「はあ……それが今回の異変の原因ということでもいいのか？」

「少なくとも、色々な場所で起こっている天候の変化は気質が原因

であるわ」

「全く分かん」

流司の問いかけにパチュリーは肯定を示していたが、流司には人の個性を表すものがどうして天候に影響を及ぼすことになるのかさっぱりであった。

「気質を萃めているものがいるのよ。その過程で漏れ出してしまう気質が天候となって現れているの」

「それじゃあ、幻想郷のあちこちで異常な天候になっているんじゃないかって……」

「人のいるところで異常な天候になっているのよ。尤も多くの人がいる場所では気質が混ざり合って変な状態になったり、より強い気質の影響を受けた天候に変わってしまうけれどもね」

「それで……」

パチュリーの説明によやくに流司は天候の謎を理解する。

『博麗神社』の連日の日照りは霊夢の気質によるもので、妹紅の周辺の『白夜』も同じである。

『永遠亭』の場合は夜を作り出す気質に『幻月』、そして霞を作り出す気質が混ざり合っただけの状態であったのである。

「理解してもらえたようね。そういえば、貴方の気質はなんなの？」

「天候として現れている気質であれば『虹』だな。恐らくは……」

流司は常につきまとうようにして空に浮かんでいる七色のアーチを思い出して言う。

「『虹』、『虹霓』、間違いなくそれね。ぴったりじゃないの」

「まあ、な」

パチュリー共々流司は自身の気質に対して納得の表情を浮かべる。

『虹霓』は古来より蛇や龍に例えられることが多くあり、『龍神』の末裔の家系である『神代家』の人間である流司の気質を示すにあたってこれ以上に相応しいものはないといえるだろうと言えるからである。

「なら、博麗神社で起きた地震も何者かの気質が原因ということでもいいのか」

「それは間違いだわ。確かに気質を萃めたことで発生する『緋色の雲』はその濃度に気質よっては宏観前兆となり得るけど、今回はそうではないわ」

「どづいうことだ？」

きつぱりと断言するパチュリーに流司は疑問を口にするとしかできない。

折角、異変解決の糸口ともなり得る事実を知ることができたというのに振り出しに戻されてしまうような言葉であるのだから当然と言えるだろう。

ここで初めてはパチュリーは目を落としていた本から顔を上げると流司の方へと視線を向けた。



「気質を萃めることで漏れ出してしまった気質は幻想郷の天候の異常には関わっているわ。でも、その気質によって地震が起こったわけではないの。天候の異常は精々が撒き餌、そして地震は餌のついた釣り針と言えるわね」

「撒き餌に釣り針？誘っているということか？」

「当然でしょう、“異変”なのだから。ただの暇つぶしでしょうね、異変を起こした犯人からしてみれば」

「暇つぶしで人の住居を壊してもらいたくはないのだが……」

流司の吐露も尤もであるが、パチュリーの言葉もまた正しいものである。

意図して引き起こされた異変は暇つぶしという意味を含んでいることは多少なりともある。

それがある種、“異変”として正しい姿であるからだ。

「それはご愁傷様とでも言うておくわ。犯人にでも直してもらおうとね」

「因みにパチュリーは犯人を」

「知っているわよ。会いもしたし」

流司の言葉を先読みするようにしてパチュリー答える。

「だっ「教えるつもりはないけどね」……何故？」

「私が貴方にそこまで協力する理由がないから。魔法使いは基本的

に等価交換で動く存在よ。今までは貴方の気質を調べさせてもらうという報酬があっただけど、これ以上のことは等価ではなくなるから。それに私の興味は既にこの異変にはないの。紅魔館に属している私が異変を解決する手伝いをするわけにはいかないのよ」

パチユリーは津々浦々と言葉を重ね説明を終えると再び本を開いて視線をそちらへと落とし始める。

「それなら仕方がないか……」

流司もパチユリーの言葉の全てに全て納得していたということではないが、パチユリーの態度は仕方がないと流司に思わせてしまうには十分なものであった。

「まあ、気が向いたら咲夜にでも頼むから。しばらくは一人で頑張ってみることね」

「手厳しい。手掛かりもなく頑張っているんだがな」

「そういうものなのだからどうしようもないでしょう。でも、そうですね。まだ行ってないのなら“冥界”に行ってみるといいわ」

「冥界に？」

首を竦める流司にパチユリーは声をかける。

「あそこの亡霊が私よりも前に動いていたようだから。ヒントぐらいいは手に入るんじゃない？」

「なるほどな。幻想郷以外がどうなっているかも手掛かりにはなるかもしれないな。行ってみるよ」

流司はパチユリーに声をかけ、図書館を後にするのだった。

頁二百三、『その日、紅魔館』（後書き）

主人公の気質は『虹霓』。

美鈴とかがそうなりそうだと思っただけでしたが、黄砂という……  
もう、中国路線なんですね……

ということ次で次の目的地は冥界に。

まあ、物凄い避暑地にはなっていますね。

深々と空から天使が舞い降りてくるような光景であった。

手を伸ばせば届いてしまうようなそれであったが、手を伸ばすこととははばかれる。

流司は開いていた手のひらでそれを握りしめることはせずに閉じた。

そうしてしまえば殺してはいけないものを殺してしまうように思えたからだった。

ゆっくりとゆったりと流司は息を吐く。

心をそのまま吐き出してしまっているかのように深い息は白い。そして

「寒いわッ!!」

偽りようのない本音の叫びを上げた。

流司の視界に映ったのは庭園一帯に広がっている白、降り積もった雪であった。

季節は言うまでもなく夏。

流司の頭上の蒼天は間違いないく、夏を表している空であった。

そんな空から雪が降り注ぐ、雲がこぼれ落ちて来てしまった方が正しいのではないかと思ってしまうほどに異様な光景であった。

流司自身、寒いとは言ったもののそれは降り積もった雪で冷やされた地表付近だけの話であることは理解していた。

照りつける日差しは変わらず夏のものであり、溶けた雪の表面が光を乱反射して目が痛いほどに眩いている。

「見て見て流司!!雪だるま!!」

雪に染まった庭園で手を振る声の方へと視線を向けてみれば、自身の身長の二倍はある雪玉を重ねあげて満面の笑みを浮かべている『西行寺幽々子』の姿があった。

尤もその傍らでは息を上げている『魂魄妖夢』の姿もあったので、幽々子自身は一切の労力を働かせてはいないのだろうということは一目で流司は窺えた。

精々が仕上げというように挿している枝や被せているバケツを探したり運んだことくらいなものだろう。

「どんな天気だろうとも驚くつもりはなかったけど……ここまで割り切っているとは思わなかったよ……」

苦笑いをしながら流司は呟く。

気質のために生じた天候の異常に驚くつもりは全くなかった流司だが、その異常をこれ幸いと楽しんでいるとは流石に考えてはいなかった。

「折角の夏に降った雪だもの。楽しまなかったら損でしょう？」

「……他の楽しみ方をしてやれよ。妖夢の奴だいぶへばっているぞ？」

流司の呟きに答えてか、雪だるまの仕上げを終えた幽々子が流司に笑いかける。

そんな幽々子に流司は苦笑した笑みを崩さないままに妖夢の方へと視線を促す。

「だらしないわよねえ」

「いや、まあ、あれだけの大きさだしな……」

だらしがないと妖夢を酷評する幽々子に流司は妖夢をフォローするように相づちをいれる。

幽々子の身長を優に越えている雪だるまである小柄な妖夢と比べると更にその大きさは際立っている。

それを一人で作り上げたのだから息が上がるのも当然のことであるといえる。確かに剣士である妖夢にとっては不甲斐ないと思われるも仕方のない様子にも見えなくはない。

だが、それとこれとでは大幅に勝手が異なるだろうことも流司は理解できていたので、妖夢へと向ける視線は憐れみを持った視線であった。

「本当は三段にしようと思ったのに妖夢が反対したのよ？」

「勘弁してください、幽々子様。何で私がこんな事を……」

よろよろとした妖夢足取りで歩いてきた妖夢の訴えも尤もである。  
う。

もし、幽々子が三段の雪だるまに固執していた場合、今頃妖夢は下が雪であることも構わずに倒れこんでしまっていたかもしれない。

「だって、妖夢はこの庭師でしょう？」

「普通の庭師は雪が降っても雪だるま作らないと思います」

「確かになあ……」

さも当然のことであるかのような疑問を感じさせない幽々子の言葉に妖夢は冷静に反論して、流司もまた妖夢の言葉に同意するように頷いた。

「ここは普通じゃないでしょう。ほら、解決〜！」

それでもその言葉は幽々子には馬耳東風であり、ぼんと手を叩き笑顔で言う。

それに対して、

「「はあ……」」

流司と妖夢の溜め息が重なったのは言うまでもないことであろう。

「で、流司はどんなようがあったの？それとも私に会いにきてくれたのかしら？」

「両方だ。用があつて幽々子に会いに来た」

口ものにやんわりと浮かべている笑みから自身のことを幽々子がからかっているということを感じていた流司は淡々とした口調で答える。

「つれないわねえ……まあ、差し詰め、このおかしな天気のことについてでも聞きに来たってところね？」

「話す手間が省けて助かる。単刀直入に尋ねるが、幽々子はこの異変を引き起こしている相手に心当たりはあるか？」

訪ねてきた理由に関して幽々子が分かっているということを知った流司は率直に飾り気もなく核心を尋ねる。

「知っているわ。教えてあげてもいい。たぶん、流司が行っても満



足でしょうから」

「ならっ！..！」

「でも、ただで教えてあげるほど私は優しくないわ」

「.....何が欲しいんだ」

にやにやとして言う幽々子に流司は焦る気持ちを飲み込んで訊く。

「そんな怖い顔をしなくてもいいわ。ちょっとだけご飯を作ってくれるだけでいいから」

と幽々子は流司に告げると軽やかな足取りで白玉楼へと跳ねていくのだった。

「お腹のいい具合に膨れたことだし、話の続きといきましょうか」

食卓に乗せられたらものが、大量の食器だけになったところで幽々子が声をあげた。

「いい具合って.....まあ、話してくれるなら文句はないけどさ.....」

一人前どころか三人前は易々と超えてしまっている量を食しておきながらいい具合とのたまう幽々子に流司は呆れを隠せないが、話をしてくれるというのであれば流司に不満はなかった。

「流司は今回の異変に関してどこまで知っているのかしら？」

「そうだな。天候の異常は気質によるもので、その気質を集めている奴がいてそいつが犯人つてことと。犯人は気質を集めるだけじゃなくて、地震も引き起こすことができるつてことだな。後、犯人には暇つぶし程度の意味しかないつてことか」

流司は頭の中で情報を整理しながら幽々子に話す。

「へえ……思ったよりも知っているのね」

「それなりに色々な場所を巡ったからな」

流司の言葉に対して幽々子が示したのは純粹な感心であった。

幽々子が思っていた以上に流司が異変の正体に気がついていたらである。

「それなら後分らないのは“誰が”と“何処で”つてことくらいなのね」

「そういうことになるな」

「うんうん。なら、“何処で”でのヒントを教えてあげるわ」

「また、ヒントなのか……」

朗らかに笑いながら言う幽々子に流司は肩を落とす。

「なんでもかんでも教えてもらえるほど世の中甘くはないもの。そこまで分かっているなら、あと一息なもの、頑張ってみた方が流司

のために決まっているわ〜」

「とか言いつつ本心はそうした方が面白いとかなんだろ？」

「当然じゃない」

流司のじとりと瞼を落とした問いに幽々子は誤魔化すことなどせず上機嫌で答える。

「で、ヒントってのは何なんだ？」

「ヒントといっても少し考えれば分かることなんだけれどね〜“犯人は雲の先にいるわ”」

「雲の先？」

「そうよ〜」

黒文字に挿した葛餅を揺らすようにしながら幽々子は流司に頷く。

「雲、『緋色の雲』ということだよな。先というと空ってことか…  
…?」

「正解〜!〜まずは高いところにも登って見るのがいいんじゃないかしら?」

流司が瞳をさまよわせるようにして求めた答えを幽々子は笑顔で肯定する。

「高いところ、ね……」 空を飛ぶことができる流司にしてみれば

高いということに関してはあまり上限があるということはない。  
それをわざわざ“登る”と幽々子が表現したことには当然のよう  
に意味がある。

「登るか……その先に犯人がいるんだよな？」

「嘘は一つも言っていないわよ」

幽々子は笑みを絶やさずに言う。純粹無垢な笑みには流司には見えなかつたが、どこかの誰かのような胡散臭さもまた感じない笑みであつた。

「じゃあ、向かいますか」

含みがある笑みであることは重々に流司は承知していたが、幽々子の言葉を信じる以外に流司に術がないこともまた事実であつた。それ故に流司は腰をあげて新たな目的地を臨む。

「気を付けなさい。力だけを見れば、幻想郷の一角に連なるわ」

笑みを殺して幽々子は立ち上がった流司に告げた。

「……御忠告、感謝するよ」

襖を開けて流司は幽々子の前から姿を消す。

外から入り込んだ冷やかな空気はまとわりつくように幽々子の頬を撫でるのであつた。

頁二百三、『その日、白玉楼』（後書き）

雪だるまを作らせ、料理を作らせご満悦の幽々子様。  
既に異変の真相をしているが故の余裕かはたまた。

まあ、知らなくても楽しみそうですよ。

主人公も徐々に近づいてはいますね。

頁二百四、『その日、守矢神社』

「山の天気は変わりやすいと言うが、途中までは暴風だったのに境内に着いた途端これか……」

風のない穏やかな境内にしとすと降る雨に打たれながら流司は呟いた。

『守矢神社』に着くまでの道中、妖怪の山の中腹付近では来るものを拒むような暴風に見舞われていたというのに境内に立ち入ってしまうと風が訪れているというのだから流司が溜め息をつくように呟いてしまったのも無理はないだろう。

無論として、流司もこれが単なる山の天気の問題ではないということも理解している。

道中吹いていた風は嵐などという言葉で数えることができるはずもなく、山の上で全くの無風状態になることなど有り得ない。

そもそもが幻想郷には海がなく、厳密な風が引き起こされるといふことはなかった。

「緋色の雲も見かけたしな。この先であることは間違いなさそうだな」

流司は『守矢神社』の境内に立ち入る前に緋色の雲を見かけていた。

それは確実にこの先に気質を集め異変を引き起こしている犯人がいるということの証明である。

「それにしてもこの先に本当に何かあるというか、犯人がいるのか？」

疑問を口にしつつ流司は空を見上げる。落ちてくる雲に時折目を瞬かせながらも、その目に映る光景は分厚い雲が空を覆っているものだけであった。

幽々子の言葉にはある程度の信用はしている。ただ犯人がいることは間違いないことは理解していても、心の一部では納得のできるものではない。

冥界への入り口のような門があるというわけではないのだから。当然、空を覆っている雲が姿を消せば似たようなものがないという可能性は流司も考えてはいる。

けれども、流司の記憶の中には晴れた日に『守矢神社』から空を眺めた風景も刻まれていたが、らしきものの影すらも見た記憶はなかった。

「さて、行く「クオン」！」「……朔？」

天を臨み飛び上がるようにする流司の出鼻を挫くように雨に毛を濡らした朔が飛びついてくる。

「朔ちゃん！何処に……って流司さん！？こんな天気にも傘もささずに何しているんですか！？」

朔の後を追うようにして姿を表した早苗が雨に打たれている流司の姿を見て驚きの声を上げる。

「いや、こんな天気と言われてもな……」

流司はどこか歯切れを悪くして早苗に答える。一日で様々な天候を経験してきた流司にしてみれば雨程度はこんな天気とは思えなく、まず第一にほんの数分前までは一切の雨は降ってはいなかったのだから流司の反応が鈍いのも仕方がない。

「いいから、まずは傘に入ってください！！風邪を引きます！！すぐにお風呂も沸かしますから」

「いや、そこまでするほど濡れてはないから……」

慌てて自分のさす傘の中に流司を入れた早苗はまくし立てるよう  
にして言う。

だが、流司が答えたように雨に打たれているとはいえ、流司の身体はびしょびしょに濡れてしまっているということはない。

どの道、この場を立ち去ってしまったえばこの雨とは別の天気になる  
だろうことは流司も分かっていたのでそれほど雨に打たれることに  
関心を寄せてはいなかったのだ。

「まだ、あれから一年も経っていないんですよ！？少しは御自愛し  
てください！！」

「いや、うん……」

昨年の冬、月から戻り一月もの間昏睡状態にあつたことを引き合  
いに出されてしまうと流司も言い返すことができない。

命に別状はなかったのはいえ、早苗を筆頭に多くの人に心配をか  
けてしまった以上は強く言うことが流司の性格上できるはずもない  
のだ。

「ともかく。今は家の方に入ってください！！」

「あ、ああ、分かったから押すなって」

早苗の強い姿勢に逆らう術を持っていなかった流司はなすがまま  
に背を押されていくのであった。



「駄目です!!」

「早苗に反対される謂われはないと思うのだが……」

私怒っていますとありありと示すように言う早苗に風呂上がりの流司は困ったように呟いた。

「いいですか、流司さん？あれから一年も経っていないんです。“異変”の解決ですか？どうしてそんな真似をするんですか!!」

「まあ、居候とはいえ住まいであった博麗神社を壊されたし、色々と良くない影響もあるからな」

博麗神社を壊されたことは流司の心の中で静かな怒りとしてくすぶっており、無視をし続けることのできるものではなかった。

その上、幻想郷の各地を巡り良くない影響も少なくはないことを知った流司が“異変”の解決を目指すことはある種当然のことであった。

「居候先がなくなったからどうというんですか。なら、ここに居候すればいいだけです」

「いや、別に住む場所には困ってないから」

「とにもかくにも、そんなもの霊夢さんに任せとけばいいんです！」

「！」

「それもそうなんだがな……」

「早苗の言葉に一理があることは流司も十分すぎるほどに理解している。」

「霊夢に加え紫も動いている以上、犯人に逃げ場はないようなものであり、流司も行動は無意味なものである可能性も決して低いものではない。」

「また、怪我したらどうするんですか!？」

「早苗……」

涙ながらに訴える早苗に流司も上手く言葉を紡ぐことができない。どれだけ早苗が自身のことを心配しているか、流司には痛いほど分かっていたからだ。

「そもそも、私にも勝てない流司さんが“異変”解決なんて片腹痛いです!!」

「……………」

事実。

そう、確かに早苗の言葉は紛れもない現実であった。

早苗が流司の能力に関して知っていることも影響しているが、早苗との弾幕対決で流司は勝利を収めたことがなかった。

時として絶え間ない努力が才能を凌駕することがあるが、天然はそれすらも上回るのだ。

「だからですね」

「……………」

ゆらり。

「きゆう………?」

目をつぶり腰に片手を当てて、片手の指を立てて説教をする早苗は流司が幽鬼のように立ち上がったことに気がつかない。

流司の膝の上にはいた朔が転がり落ちてその流司の様子に首を傾げただけである。

「……朔」

「クオン?」

酷く冷めた声で流司は言う。

「やってよし」

「キユツ!!」

流司の短い言葉、朔がその言葉の意図を察するにはそれだけで十分であった。

許可を得た朔はすぐさま行動に移る。

「流司さん。聞いて　キャッ!!」

流司が立ち上がっていることに気がついた早苗がまだ話の途中であると声をかけようとすることもそれは自身の上げた甲高い声によって

遮られることになる。

「きゆうづつう……！」

「え、あつ、朔ちゃ、っん……くすぐったつ、いで、す。あつ、止め」

早苗が甲高い声を上げた原因は脇から服の中へと潜り込んだ朔であつた。

朔の巻きつき癖に並ぶもう一つの癖である服に潜り込む癖だ。

煙管入れの中に住んでいるだけあり、朔は狭く包み込まれるような圧迫感がある場所を好む。

服の中はその最も最適な場所であつた。

しかし、流司は朔にそれをすることを禁じている。

服の中を動き回る朔はこれ以上なくくすぐりたいからであつた。

「止め、んっ、止めてくだ、さいっ。り、流司、さんっ」

顔を蒸気させ、目元に涙を浮かべるようにして助けを請う早苗を流司は冷ややかな視線で見つめるだけであつた。

流司とて男だ。

一端のプライドはある。

それを早苗は少しだけ傷つけてしまったのであり、それに対しての罰を流司が与えただけ。

ただそれだけのことであつた。

「そんなところ……いやあつ、あつ……」

「キュッ、キュッ」

流司のお墨付きを得た朔は水を得た魚もとい味噌を得た管狐のこ

とく早苗の服の中を縦横無尽に動き回る。

日頃の欲望を吐き出すがごとく早苗を攻め立てる朔に手加減などはない。

身体という体の全てを貪り尽くされる早苗の服ははだけ扇状的であり、見ようによつては酷く卑猥だったが今の流司はその程度では心が動くことはない。

「そ、んなつ、流司さん、止めっ……」

流司は早苗の訴えを一瞥するだけで無碍にすると部屋を後にする。その部屋からはしばらくの間、妙に艶やかな声が絶えなかったのは語る必要のないことだろう。

頁二百四、『その日、守矢神社』（後書き）

しまった!!!

『サービスカット流司の入浴シーン』 忘れた!!!

えっ、後半？

サービスだと思ってしまった人は心がもう純粹無垢な清らかさはないんです。

諦めるか、開き直るかしてください。

それによってこの後の展開が変わりま……………せんので安心してください。

流司の視界に映るのは完全な白ではない。限りなく白に近い他の色。鼠色ではなく灰色の灰の世界であった。

全面を厚い雲に覆われた中での流司の視界は無きに等しい。

それだけに流司はただ上に向かって進んでいるという勘だけを頼りに進む他なかった。これがもし地上であれば、上昇以上に真っ直ぐに進むことは難しかったことであろう。

「（まだ、抜けないか……）」

上昇を続ける流司は未だに終わりの見えない雲を見つめて思う。

流司が上昇を始めてから既に短くはない時間が流れている。上昇する速度も速いと言うことはできないが、決して遅い速度ではない。

事実、流司は能力で自身の周囲の酸素濃度を高めなければ、呼吸をすることすらも難しい高度まで上昇していた。

それでも、終わりが見えないということは流司のいる雲は積乱雲クラスの大きさを誇っているということになる。

「（にしても穏やかだな。まるで霧みたいだ）」

流司の抱いた疑問は当たり前のものであった。

地上から見上げる分には雲は静かに空に浮かぶだけのものに見えるだろう。

だが、通常の雲ならばまだしも、積乱雲ほどの大きさになっていく雲の内部が見た目通りであるはずもない。

積乱雲に限らず雲というものは皆、空気中に浮かぶ水滴の集まりである。尤も水滴はその自重で常に浮かび上がっていることは難し

く落下をしてしまう。

これが地上まで辿り着いたのが雨であり、結晶状態や氷球として落下したものが、雪や雹である。

つまりは水滴の集合体である雲が発達するためにはそれだけ水分を含んだ空気が必要となる。

そこで大きく関わるのは大気のパランスであり、それが穏やかである限りは巨大な雲が形成されることはなく、逆に積乱雲のような巨大な雲が形成されているということはそれだけ大気のパランスが不安定であるということであるのだ。

雲の頂上が対流圏と成層圏の圏界面（地上約11km）を越えることもある積乱雲の内部は当然非常に大気は不安定であり、上昇気流と下降気流が常に吹き荒んでいることになる。

それだけではない。

高度が高くなるということは気温の遞減率により気温は下降していく。それは空気中の水分が凝固することを示す。

凝固し氷となった水滴は風によって激しく昇降しぶつかり合い摩擦分裂を起こし帯電する。

それを繰り返し最終的には生じた電位差によって、より電気を通しやすい空間を電気が走る。

すなわち、落雷が引き起こされるのである。

まとめてみれば、巨大な雲の中は無数の氷がぶつかり合う気流が渦巻いている上に、雷が進る空間であるのだ。

到底、人間が単身飛び込んで無事に住むような場所では全くとしてない。故に流司の感じた疑問は正しいものであった。

ほとんど風を感じることもなくただ流司の視界を遮るだけの分厚い雲は雲というよりも濃霧と称した方が相応しいと呼べるものであった。

「雷の一つや二つ、あった方が自然なんだがな……」



煌ッ！！！！！！

突然として視界の開けた流司の目に映ったのは天を走る光の亀裂。その轟きは輝きと共に炸裂し流司の聴覚を一瞬にして奪い去った。嘘から出た真。

そこにあつたのは無数の雷が縦横無尽に交錯する雲海であつた。だからといって、流司が雲を完全に脱したというわけではなかつた。

流司が見上げた先には再び分厚い雲が待ち構えており、足下にも今まで突き抜けてきた雲が海のように広がっている。

「ここが終点つてことはなさそうだな」

雷の輝きに時折、目を細めながらも流司は呟いた。

この玄い雲海が終着点ではないということ流司は直感的に感じ取っていた。

一切の保証も確証もない勘であつたが、自然と流司はここではないという感情を抱いていたのだ。

否、正しくは……

「（ここにはいてはいけない）」

流司は無意識に感じ、再び上昇をし始める。

天頂を覆う雲は流司が見る限りでは穏やかな様子であり、飛び込んでしまえば再びこれまでと同じ濃霧のような雲の世界が続いているだろうということが容易に理解できるものであつた。

「今度、雲を抜けるときは終点であつてくれるといいんだけどな」

愚痴りながらも流司は雲へと飛び込む。

煌ッ！！！！！

その瞬間、轟いた輝きによって流司の瞳に雷の中を優雅に泳ぐ人影が捉えられることはないのであった。

徐々に薄れていく雲。降り注ぐ日差しは強さを増しながらも優しさを忘れることはない。

それはこの先に確かに違う世界があるということ流司に予感させるものであった。

「（雲から抜ける……！！）」

水の中から飛び出すようにして遂に流司の身体は日差しを遮るものがない空間へと躍り出る。

「……」

流司にできたのはその三文字程度の言葉を口にするこただけであった。

流司はその風景に見とれてしまっていた。

ユートピア。

無何有の郷。

アヴァロン。

エデン。

イーハトーブ。

カナン。

エリュシオン。

そこにあつたのは楽園であつた。  
何をもって楽園としたのではない。  
そこにあるから楽園なのでもない。  
ただ、その全てが楽園というに相応しき存在感をもってその世界は存在していた。

「非想非非想天……」

ぼつりと流司は呟く。

流司がその言葉を知っていたのはある意味当然で、思い出したのは偶然であつた。

“非想非非想天”。

またの名を“有頂天”という。

あらゆる世界の頂点に存在するその世界はまさに世界の果てと言ふべき高みにあるといえよう。

「……………」

流司は無言のままにその地へと舞い降りた。

何処からかそよぐ風には桃の花の香りが漂い流司の鼻を攪る。

自然美の極地。

流司はただただそれに魅せられるばかりであつた。

「~~~~~」

そよぐ風に乗り流司の下に届いたのは桃の香りだけではない。

何か音が聞こえてくる。流司は立ち止まるとその音に耳を傾ける。

「~~~~~」

その音が聞こえてくる方向は流司にも辛うじて知ることができた。ただ、それが何の音であるのかは分からない。

けれども、その音をもうしばらく聞いていたいという流司の欲求は増すばかりで流司がその場から動き出す様子は全くとして見られないのだった。

頁二百五、『その日、天界』（後書き）

ニア 「これは詠、か……」

「こんな場合じゃなかった早く犯人を……」

頁一、『初めの再会』(前書き)

ニア 『これは詠、か……?』

頁一、『初めの再会』

「これは詠、か……？」

流司はその音、漸く“詠”として認識ができるようになった何者かの声に誘われるように歩く。

「……や……い……」

ただの音として聞こえていた声は流司が近付いていくにつれ、途切れ途切れにも聞こえるようになる。

その瞬間であった。

「ぐっ、あ、あ……」

万力で頭を締め付けるようであり、脳をかき回されているような頭痛に襲われた流司は片膝をつくようにしてしゃがみこむ。

額には一瞬にして滝のような汗が浮かび、顔面は蒼白と化している。痛みに歯を食いしばっていなければ、その歯はがちがちと音を鳴らしてしまう。

意識を失ってしまいたい。

そつとさえ感じてしまふほどの頭痛であった。

だが、あまりの痛みに流司は気絶してしまふこともできず、ひたすらに破裂してしまいそうな頭痛に耐えるしかなかった。

『いい花だろう？死ぬときは是非ともこの下で死んでみたいものだ』

『縁起でもない。今にも自分が死んでしまうような言葉だな』

『人は死ぬ。それが宿命というものだ。あいつのようにはいかんというものだ。私もお前な』

『分かっているさ。だが』

『ああ、そうだとも。であるからこそ、人は美しい。散る花が美しいようにな』

『穏やかな顔で逝きやがって……』

『旦那様』

『そんな顔をしたところで仕方があるまい。お前とて多くの者を見てきたのだろっ？そして、これからも看取らねばならないのだから』

『……』

『……そうか』

『……どうするの？』

『後は任せるさ。悪いが私にはもう会うことはできんよ』



『でも、 はっ！！』

『分かっている。だが、私には を として見ることはできない。 ほど私は強くはない』

『柳祇……』

「ハア、ハアツ、ハア……今は……」

荒い息をあげ、額の汗を拭う流司の口から出たのは疑問の声であった。

既に流司の頭痛は跡形もなく消え去っており、残っているのは全身に帯びる倦怠感だけである。

今のはと流司は口にはしたもののその正体には気が付いていた。突然のことに半ば反射的に口にしてしまった言葉にすぎない。

「久しぶりだな……しかもこんな頭痛を感じることはなかったし……」

ゆっくりと深呼吸をして息を整えた流司は立ち上がり呟いた。

「まあ、当然なのか？今回は人一人分のほとんどの記憶を思い出ししているみたいだしな。思い出すという言葉が正しいかは分からないけど……」

流司は自身の中に“流司”ではない“リュウジ”の記憶が混じっ

ていることに気が付いていた。

尤も、知らぬ記憶を思い出すことは今までにも何度かあったことなので、流司が特別驚いてしまうことではなかった。それでも、今までのものはデジャヴを感じる程度の些細なものであり、他人の記憶のほとんどを思い出すようなことはなかった。

人の一生のほとんどを思い出すわけだから張り裂けそうな頭痛に見舞われるのも当然といえるであろう。

「俺は『神代流司』だ。それ以外の何者でもない。よし、大丈夫だな」

流司は自身に暗示をかけるように確かめる。

他人の記憶を思い出した時に流司が常にする作業であった。

記憶が人格を形成する一因であるとは否めることではない。経験が人を成長させるのだから、そのログである記憶はその個人を作り上げる因子となっている。

それだけに流司が“流司”として在るためには“流司”としての記憶を主体に持つてこななければならない。

あくまでも、思い出した記憶は“経験”ではなく“知識”としての記憶としなければ、流司と他のリュウジの記憶がせめぎ合うことになってしまう。

それに気付いた流司は何かを思い出す度に自身が何者であるかを確認しているのだ。

「それにしても『柳祇』か……一度、戻って調べないと」

これもまた流司が“流司”であるために必要なことであった。

“流司”として他の“リュウジ”のことを調べることは“流司”として自身が存在していることの証明に繋がるからである。

とは言うものの、流司はこのことをそれほど深刻に考えたことは

ない。

今までとて、自身の存在が揺らいでしまうようなこともなければ、性格が変わったと思うこともなかった。

無論、流司が気付くことなく変異してしまっているという可能性はあったが、であるのならば考えるだけ無駄なことであろうと流司は開き直っていた。

「ともかく、この詠がきっかけになったことは間違いないな」

耳に未だに届く詠が『柳祇』の記憶を呼び起こしたことは間違いない。

実際、流司には既にこの声の主がどのような人物であるかを察することができていた。

「さてと、顔合わせといきますか。ある意味で再会とも呼べなくはないけれどな」

笑みを零して流司は声を辿るのだった。

流司が辿り着いたのは流司が降り立った場所とはまた違う天界の淵であった。

周囲には桃園のように桃の花が咲き乱れて流司の季節感を狂わせる。

その中心にある岩の上に人影があった。

「やはり花はいい。桜が一番であるというのは変わらないけれども

な

その人影は流司が近付いていたことに気が付いていたのか、まるで語りかけるように呟いた。

「それは散り際がこの上なく美しいと思えるからか？」

「その通りだ。ここに住んでいると命の存在を死神を追い返すようなことでしか感じない奴しかいなくなっていくかん。まあ、こうして詠ってられることはありがたいのだが……」

駄目だとその人影は流司の問いに首を振る。

「さて、いつかは来ると思っていたが、随分と遅いじゃないか？何百年という話では済まなかったようだがな、『柳祇』？」

そう言いながら振り返った男性の顔に流司は見覚えが“なかった”。

歳は壮年に近い。

とはいえ、天界に住んでいる時点で寿命という概念は失ってしまっているので実際に感じてきた時は全くとして異なる。

男性の顔に覚えがない流司。

そして、それは男性も同じことであったのか、自分の感覚を確かめるようにしきりに顔をしかめさせている。

「残念ながら俺は貴方の思う『柳祇』ではない。何代も後の『神代』だ。」

「成る程、確かに生きているようだ。不自然なく人間として。気配が似ているのはその為か。ただ、それだけには思えないのだが、は

て？」

「そこは込み入った理由があるんだよ」

首を竦めて流司は言う。

「まあ、初対面であるということには変わらないだろう。名乗りをあげるなら私が先でいいだろう。少なくとも、何者であるかは聞いたことだしな」

男性は岩の上から飛び降りる。

元々子供の背丈ほどしか岩がなかった上に、地面に茂る草の所為か着地を感じさせる音は全く起きなかった。

「法名は円位。西行などとも呼ばれてはいたな。まあ、義清とでも気楽に呼んでくれるといい。『神代』の血脈よ」

『幽幻の詠、墨咲きの桜』

頁一、『初めの再会』（後書き）

ということでも個別に分かれます。

まあ、誰の かはわかるでしょう。

隠すつもりありません。

衣玖さんのいかにも関わってきそうな雰囲気には隠れていましたが、知っていましたか？

幽々子の父親は死後神格化されて天界に住んでいることになっています。

まあ、西行という明記はない上に、『幻想郷縁起』の内容なので完全な確定の情報ではないのですがね（『幻想郷縁起』はあくまでも『稗田家』の調べによって書かれているものなので全てが全て正しいとは限らない）。

ですが、私の作品では採用ということでは。

色々と作品上で改変するところなのでできますが、その辺は割り切っていただけだと思います。

今後の展開の仕方はもう決まっていますのですが、どのくらいの長さになるかはまだわからないという……

お付き合いいただければ幸いですね。

所謂、マルチエンディングですが、全てを見ないと本当の意味で謎が解けないという感じにしていくつもりなので。話としてはしっかりと決着はつけますが。

さて、怒涛の展開が待っていないくもない個別。

つか、ここまでこれたことが奇跡のような……

因みに前回のもう一個の選択肢だと共通ルートが続きます。

では、お楽しみに。

頁二、『動く天人』

「ああ、つまりはなんだ？お前は俺の知っている『柳祇』の記憶を持ってはいるが、人格としては全くの別人であると」

「概ねそれであっている」

「しかし、奇っ怪なこともあるもんだ。まあ、死んだはずなのにこうして話をしている俺が言うことじゃねーがな。ハツハツハツ」

先程までのどこか神妙な雰囲気はどこにしまい込んでしまったのか、義清は豪快に笑い声を上げる。

「それにしても口調や雰囲気が変わりすぎじゃないか？」

義清のあまりの雰囲気の違いに流司はどことなく表情をひきつらせて言う。

「あんな気取った話し方を年がら年中してたら疲れるだろうが。んなもん、真面目に話したい時だけ使った方が減り張りがあるってもんだ。つか、『柳祇』と話していたときもこんな感じだっただろう？」

「いや、どうもまだ完全に思い出した訳ではないみたいなんだよ」

「はあ？お前……あー、いつまでもお前と呼ぶのもいけねえ。勝手に流司って呼ばせてもらうわ。流司はさっき『柳祇』の記憶を全て覚えているって言ったじゃねーか？」



義清が言うように流司の言葉は流司自身の言った言葉を否定する  
ようなものであった。

「いや、何とというか。覚えているってことは分かるんだが、どう  
も上手く出てこないというか……」

「それは覚えてないってんだよ。となると流司の言ったことも疑わ  
しく思えるな。まあ、俺としては忘れたままでいてもらった方がい  
いことも多いんで助かるんだがな」

「ああ、酒樽単位での貸しは覚えているぞ。金も返さないまま死ん  
だろ？」

「……チツ、余計なことばかり覚えていやがつて。まあ、記憶があ  
るっのほ本当みたいだな」

不機嫌さを隠そうともせず義清は舌を打つ。

「そもそも、嘘を着いたところで仕方ないだろ……」

「そんなことはないだろう。第一印象は良くなるだろうさ」

流司が呆れたように呟いた言葉に義清は気楽な口調で答える。

「俺が感じていた第一印象は既にズタズタだけだな」

「俺と初めて会ったときのあいつも似たようなことを言っていたな。  
騙されたとは酷い言いがかりだったの」

「無理はないってか当然だ」

本当に目の前の男が後世に名を残し、後の歌人にも多大な影響を与えた西行本人であるのか少なくとも『流司』には俄かに信じることはできなかった。

だが、『柳祇』の記憶はこの男が紛れもない西行の雰囲気をまとっているということを訴えかける。

「その様子だと俺が円位だと信じてねえな？仕方がないか、『柳祇』の記憶の中の俺はもつと年がいつていたからな」

『柳祇』の記憶の中の義清はとてもではないが、壮年と呼ぶことができるような姿はしていなかった。確かに元気でもありまとう雰囲気は流司が思う限りは目の前の男と寸分も変わりはないのだが、それだけに見た目の違いというものが流司の中で強烈な違和感として渦巻いていたのである。

「ええつとな、俺もよくはわかってねーから一度で理解しろよ、流司。天人つてのは二種類いてな、一つは生きながらして天人となる奴と俺みたいに死んでから天人になる奴がいるらしいんだわ」

「ふむ」

「んで、生きながらって奴は当然自分の肉体を持っているわけだ。けど、死んだ奴はそんなことはねえ」

「確かにしつかりと埋葬した記憶はあるな」

願望通りに桜の木の下で死んだ義清を埋葬した記憶は確かに『柳祇』の記憶の中にあり、肉体がないことは流司もよく理解できることであった。

「ようはこうして話している俺に肉体はない。言ってしまうえば幽霊みたいなもんだわな。とは言え、こうして物を持つことはできるし、食い物を食うこともできる。あくまでも天人だからな」

義清は足下の草を筆って見せると風に流す。

「でもまあ、成仏したってことは変わらないんでな、どうやら現界に行くには」

義清はぐいと流司の方へと身体を傾けるとそのまま姿をかき消してしまう。

「「こうやって他人の身体を借りなきゃならん」」

「（!?!）」

義清の続きの言葉が発せられたのは流司の口からであった。

溜まらず流司は驚きの声を上げようとするも、その身体の自由はきかず心内で驚くに留まってしまう。

「「身体を借りている間は完全にこちらの支配下になる。今は意識を表層に表したままだが、深層に落とすことも簡単ってことだ」」

「（何だか、妙な感じがするな……）」

「「そりゃ、一つの身体に二つの人格があつてどちらも表層に出ているからな。普通は反発し合つて上手くいくわけなんてないんだが、流司は神職家系だけあつて親和性が高いみたいだな」」

流司の顔と声で感心する義清。第三者から見たら不審者であるこ

とこの上ない。

「つう、ことで今の俺は肉体のない魂のみによる存在ってことだ。分かったか？」

「ああ、体感をもつて」

流司の身体を解放して再び流司の目の前に姿を現した義清に流司は頷いた。

「そんだから、俺の姿は俺が一番しっくりとくる姿になるんだわ。正しくは魂の強度とか意識との共鳴とはよーわからんことがあるみたいだけどな。知る必要もねえし、知りたいとも思わねーから説明はできないわ」

「それで若いつてことか」

「全盛期つて感じだな。ずっとじーさんの姿ではいたかねえしな。それに姿を変えることぐらいはできる」

と、次の瞬間に流司の目の前の義清は『柳祇』の知る義清の姿になつていた。

「それは……？」

「ああ、仙術つてやつだ。暇だから覚えた。時間は無駄にあつたからな。歌を詠むことは好きだが、流石にそればかりじゃ時間は余つて仕方がない。尤もこれを覚えたのも何百年と前の話だ」

元の顔に戻した義清は流司に大したことじゃないというような態

度で説明する。

「で、だ」

「？」

「流司は何で天界などに来たんだ？此処はそんな簡単にこれるような場所ではないし、何か理由があるんだろ？」

「ッ！？そつだ！！異変！！」

義清の問いかけに流司は本来の目的を思い出す。

「異変？何だそれは？」

「ああ、ちよつと俺が住んでいるところで面倒な起きているんだよ。義清は『気質』を集めている奴に心当たりがないか？どうやら、この辺りにいるみたいなんだが……」

「……………ある」

「本当かッ！？」

義清の間を置いての返事に流司は身体を大きく義清の方へとのりだすようにして声を上げた。

「ああ、間違いなくアイツだな。最近また良からぬことを考えていると思つたら下界に手を出していやがったか。『気質』というと天気でもおかしくなったか？」

「あと、地震で俺のお世話になっている神社が倒壊したな」

「……あの不良天人が。ついてこい、流司。犯人のところに案内してやる。ちよつくら、灸を据えてやらなきゃいけないようだからな」

立ち上がった義清は流司もそして『柳祇』も見たことのないような不敵な笑みを浮かべて流司を誘い歩き始めるのだった。

頁二、『動く天人』（後書き）

秀囲気がガラッと変わった義清さん。  
実際どんな人かは知りませんがね。

いいんですよ、どうせ二次です。

私の思うままに進みます。

そもそも西行が活躍する二次とか見たことないし。

そして、カウントダウンが始まったもう一人の天人。

義清は結構武闘派です。

出家する前は武士的な人でしたしね。

### 頁三、『要石』

「流司、天界が何の上にあるか分かるか？」

義清は歩きながら唐突に流司に問いかけた。

「何の上って、雲の上なんて答えは求めちゃいないのだから？」

「まあ、間違っちゃいねーが、確かにそう言う意味で聞いたんじゃないかねえ」

天界は“天”と言うだけあり、空高くに存在している。

それは雲の上にあるということが間違いではない証拠でもある。

だが、その質問に求められていた解答が異なるものであることは流司自身が尋ね、義清が頷いたように互いに分かりきったことであつた。

「天界はな。“要石”の上にあるんだ。いや、“要石”が抜かれたからこそ天界ができたらしい」

「“要石”！？」

流司は驚いたように草の茂る足下へと視線を向ける。

“要石”は神職に関わる流司と決して浅い関係のものではない。むしろ、深いという方が正しいと言える程であつた。

『神代家』が代々仕える『神代神社』。あくまでもそれは通称や俗称にすぎない。

正しくは『鱗龍神代神宮』という名称であり、『神代』という苗字がこの名から借りたものであつた。



『神代神社』のある『鱗龍』という地域の名もまたこの名から付けられたものである。

数ある神社の中でも神宮の名を称する神社は少ない。それは神宮という名がその神社の格式が高いことを意味しているからである。

現代でこそ神宮の名を称する神社はそれなりの数があるが、それは近世になり改称をさせたことによるものであり、初めから神宮の名を持って作られた神社というものは片手で数える数しかない。

『伊勢神宮』。

『石上神宮』。

『鹿島神宮』。

『香取神宮』。

『鱗龍神代神宮』。

この五つの神社のみが建てられた当初から神宮の名を冠し、尚且つ千年以上の歴史を持つ神社であった。

内、『鹿島神宮』と『香取神宮』の二社の境内には“要石”とされる石が祭られている。

そして、『鹿島神宮』の祭神に至っては要石を大地に突き立てたとされる武甕槌<sup>タケミカヅチ</sup>大神であり、同じ神宮である『神代神社』に影響がないといえは嘘になってしまうだろう。

「流石に驚くか？まあ、“要石”っていやあ、『神代家』にとっては眉間に皺のよる代物だろうしな。何せ、龍を抑えつけているってんだからな」

「今じゃ、大鯰だけだな」

要石は地下の大鯰が暴れることを抑えつけるために打ち込まれたとされるものである。

だが、その伝承の起源は江戸時代であり、さほど古くから伝わっているものではない。

それよりも以前は要石が抑えつけているものは龍であるということが伝えられていた。

「何？ そうなのか？」

「それに『神代神社』で祭っているのは『龍神』様であって、龍じゃない」

驚いたように言う義清に流司は冷静な表情で答える。

「俺にしてみりゃ一緒だったの」

カラカラと笑うように義清は流司の言葉に返す。

「で、天界が要石の上にあることは分かったがなんでそんなことを」

「いや、何となく知識をひけらかしたかっただけだ」

「……………」

何気ない様子で言う義清に流司は冷ややかな視線を無言で送る。

「いやいや、冗談だからな」

「だったら、早く言えよ。ああ、そうだったお前はオンオフが激しかったんだよな」

「思い出してきたか。まあ、それは置いてくとして。別に酔狂で話

した訳じゃねえ。ちゃんと意味はある。恐らく、いいや間違いない  
流司の言う異変の犯人と要石には関連があるってえことよ」

疲れたように息を吐く流司に対して義清は比較的真面目な表情を  
して補足を加える。

「それは“要石”だからか？」

「そうじゃねえ。異変とやらに天界の要石は関係ねえよ。この要石  
に何かあるようなことが起きればただじゃすまねえからな。俺が予  
測している犯人は要石を操れるのよ。それに加えて『大地を操る程  
度の能力』なんつうけつたいな能力まである。どだ、犯人にびつた  
りだろ？」

「確かに……」

「『気質』を集めている方法にも心当たりはある。おっと、とか言  
ううちに見つけた。流司、アレが犯人だ、恐らくな」

義清の指差す方向にいたのは一人の少女。

桃のついた帽子を被り、空色のロングスカートと長い髪を風に揺  
らしている。

それだけを見ればただの少女のようにも思えるが、手にしている  
剣は異質な存在感を纏っている。

燃えているというようにも見える揺らめく緋色の刀身。それが『  
気質』を集めているのだということは流司でもすぐに理解ができる  
ほど濃密な威圧感である。

「やっぱり、勝手に持ち出していやがったか。『緋想の剣』は天界  
の宝だつてのに」

「『緋想の剣』？」

「ああ、あの剣のことだ。詳しいことは忘れたが、『気質』を力に変えることができるはずだな」

「それであんなに威圧感があるのか」

義清の説明に流司は得心がいったと言うように頷いた。

「おい、比那名居の嬢ちゃん」

「げ、歌馬鹿……」

義清が少女に声をかけると少女は苦虫を潰したように顔を歪ませて義清の方へと顔を向けた。

「随分と面白そうなことをしてるじゃないのよ」

「そうでしょ？あまりに暇だから下界で地震を起こして『緋想の剣』で『気質』を集めて異変を起こしたのよ」

「説明御苦労。だが、いかんでしょ？こうして、抗議に天界までやってきなさっているだからねえ」

少女の頼んでもいない告白に義清は流司のことを指差して諭すように少女に語りかけた。

「どごっ！？って神主の方じゃない。巫女にきてほしかったのに……まあ、巫女が来るまでの暇つぶしになるかしらね。その人間！

！異変を止めて欲しくば、私とたたか。阿呆か！！この不良天人が  
つ！！」何、邪魔しないでよ歌馬鹿！！」

「下界にちよっかいをかけた上に『緋想の剣』まで持ち出して少々  
悪戯がすぎるぞ」

「歌を詠むことができれば十分なあなたと違って私は暇なの。だから、  
異変を起こしたというのに」

「また親父さんに迷惑かけるんか。少しは大人しくせい。全く流石に  
今回ばかりはお咎めなしとはいかないがな」

少女のわがままのような訴えを義清は呆れたという表情で受け流  
す。

「何？あなたが私を止めるとでもいうの？歌ばかり詠んで運動なん  
てしてないくせして」

「おーおー、言ってくれるねえ、”地子ちゃん”」

「私は“天子”よ！！」

既に説得するつもりなど全くないのか、義清の口調は完全に少女  
をからかうようなものになっている。

「んじゃ、まあ、世間知らずな小娘に灸を据えてやるとしますか」

「何言ってるのよ。本当はじじいの癖して。無理をすると腰を悪く  
するわよっ。」

いがみ合う義清と少女。

会話に入ることのできていない流司は一人蚊帳の外であった。

「って訳だから、ちと離れていてくれるか、流司？ここまできておいて悪いんだが、ちよつと天人として見過ごせないでな」

「構わないけど……いいのか？あの剣の存在感は半端ではないし、相手は地震を起こせるような奴なんだろ？二人がかりの方が……」

義清の言葉に流司は一度は頷いてみせるが、やんわりと抗議の声も上げる。

「剣なんてものは使いこなせなきゃただの長物。それに俺も天人、泥船にでも乗ったつもりで安心していな」

「安心できないからな、それ……」

軽い口調で言う義清に流司の不安は高まる。

だが、当の義清は、

「何、泥船が沈むほどの時間はかからんさ」

と手をひらひらとさせて少女との距離を詰めていくのだった。

頁三、『要石』（後書き）

『鱗龍神代神宮』以外の神宮は実在しています。

『石上神宮』以外は私も参拝したことがあります。

要石ってちっちゃいんですね。

タケミカヅチが要石を打ち込んだというのは記述ではありません。  
後の人の後付け設定ですね。

マジ、アグレッシブは義清さん。

ここまできといて戦わない主人公。

そんなもんです。

先に動き出したのは天子と呼ばれた少女の方であった。

歩み寄っていく義清の出鼻を挫くためか、一足飛びに飛び出した天子は剣を大きく振りかぶる。

だが、風を切り裂いてしまうような勢いがありながらもそれは寸前のところで義清にかわされてしまう。

結果だけを見てしまえば、義清がギリギリで避けたような形ではあつたが実際はそうではない。

天子の太刀筋を完全に見切った上での動きであつた。

現に義清の顔に張り付いている表情は余裕といったものであり、焦りは全くとして感じることはできない。

「どうして当たらないの、よッ!」

「そりゃ、太刀筋とも呼んでいいか怪しい攻撃など当たるわけないつての」

一方の天子は二の太刀、三の太刀と避ける義清に苛立ちを隠せずにいる。

まさか義清がこれほどまでに動くことができるとは天子は想像すらもしていなかったからである。

しかし、それは天子の思慮の浅さが招いた事態であると言わざるをえないだろう。

義清は若き頃には実際に戦場を知っているという経験を持っている。

逆に天子の生家である『比那名居家』は『名居家』に仕えていた家にすぎず戦いというものを知ることができるような環境ではなく、天子も戦いというものを知ってはいない。



義清と天子を比べた場合に義清に一日の長があることは明白であった。

喩え、天子が義清の経歴について知ることができなくとも、義清が天人であるからには身体能力的なポテンシャルに差がないということに天子は気が付くべきであった。もし、気が付いていたのであれば、もう少しでも注意を払っておくべきであったのだ。

そして、天子が剣を使い慣れていないということも大きな影響があることであろう。

『緋想の剣』がいかにも特殊な力を備えている剣であったのだとしても、それが剣の延長戦である以上はその扱い方に根本的な差は生まれない。

断つ、薙ぐ、突く。

剣の基本的な動作もままならない天子が『緋想の剣』を使いこなせることはまずないと断言できることであった。

天子の太刀筋がなっていないことは流司の目からも明らかかなことでもあった。

力任せに振るっではいるも、全身の力が剣には伝わっていない。一つ一つの動作が途切れ途切れになっており、動きの連続性が皆無である。

動きが単調すぎて太刀筋を考えるまもなく読むことができる。

第三者の目である流司からしてみても未熟であると分かるほどの隙であれば、実際に対峙している義清には手に取るように分かるものであるろう。

「当たれ。当たりなさい!!」

「当たらんで。まさしく宝の持ち腐れだな」

天子をあざ笑うかのごとく義清は天子の剣閃をことごとく寸前を

見切つて避けていく。距離にしてみれば一寸もないにも関わらず、その距離はあまりにも遠くに天子は感じられていた。

「避けてばかりじゃ。決着なんてつかないわよ？」

「そちらは剣を持っているというのにこっちは無手なんだがねえ。生憎と俺は無手での戦い方はあまり知らんのよ」

天子の挑発にも義清は飄々とした反応をみせるばかりで乗るつもりはないようであった。

そればかりか、口調とは裏腹にその瞳は獲物を狩る瞬間を待ち構える肉食獣みたいに細められている。

「という訳だから、その剣、ちょっと貸してくれや」

「ッ!？」

次の瞬間には『緋想の剣』は天子の手を離れ高々と空を舞っていた。

あまりの早技に天子は驚きを示すだけで何が起こったかも理解できず、流司にも辛うじて義清の動きを捉えることができる程度であった。

義清の行った行動としてはたった二つの行動しか行ってはいない。手による払いと蹴り上げ。それだけである。

だが、その行動を行うタイミング、角度、力加減。その全てが熟練されていた動きであった。

天子の横薙ぎに合わせて、義清は剣の軌道を天子の狙いよりも下方に塗り替える。そして、剣を可能な限り引きつけたところでその柄を鋭く蹴りつける。

これによって天子の手を離れくると回転しながら空を飛ぶ『

緋想の剣』はそのままに義清の手に収まるのだった。

「あっ、私の」

「私じゃなくて天界のだ。勝手に自分のものにするでない」

「いいじゃない。どうせ誰も使わないんだから。剣だって使われた方が幸せよ」

「下手な持ち主に使われるよりは閉まっておいた方が幸せだ」

義清は『緋想の剣』の握りを確かめるようにして天子に答える。

「これで形成は逆転だ。さっさと諦めた方が無難だぞ？」

「『緋想の剣』を奪ったからといって調子にのらないでちょうだい。私にはまだこれがあるのよ」

そう言っただけで天子は背後に注連縄のついた子供大の大きさの岩を浮かび上がらせる。

「“要石”まで使われると俺も手加減などしてはられないか？」

「その減らず口、今にも黙らせてあげるわ!!」

天子は要石を投擲するように義清の足下へと放つ。速度も対したことはなく、距離も十分にあつたために義清は易々と要石をかわす。けれども、

震ッ!!

要石が地面へと突き立てられた瞬間に地面は鳴動しせり上がる。

大地から生えた円柱を義清は時に蹴るようにして左右に避け、時に大きく上空に逃げるように飛び上がり、最終的にせり上がった円柱の上に剣を肩に担ぐようにして降り立った。

「あゝあ、こんなにしちゃって。あとでしつかりと元に戻せよ？」

義清はもはや平坦であると言える場所の方が少なくなってしまうた周囲の地面を眺めて言う。

「言われなくてもあんたを倒したら元に戻すわよッ！！」

「それだと困るのよ。俺が負けるわけにはいかないからなあ……この戦いが終わったらにしてくれないと」

飛来する要石をかわしながら義清はせり上がる地面の上を駆けるように移動する。

中には円錐状に先端が鋭く尖っているものもあったが、義清は構うことなくそれすらも飛び乗るほどであった。

「いいわよ、勝てるつもりか知らないけどこの戦いが終わったらしつかりと元に戻すわよ」

「言質はとつたからな」

天子の言葉に義清は動きを止めて天子を見据える。

「だから、さっさとやられなさい！！」

「そついでつこと言うと負けるように世の中できているんだがな」

足の止まった義清に向かい天子は今までの比にはならない速度で要石を放つ。

「本当は二刀でなきゃならんかなんとかなるだろ。間合いの分はこれなら大丈夫そうか」

義清は既にかわすのは難しく思える範囲にまで要石が迫ってきているにも関わらず、気楽な雰囲気崩すことはない。

「さて、妖忌のようにはいかないだろうが。頑張ってみますか」

ゆるりと整然とした動きで義清は『緋想の剣』を構える。

一見不自然にも見えるその構えは本来が二刀で行うところを一刀で再現しようとしているために浮き彫りになってしまった違和感であつた。

そして、

斬。

何も音はなく。

何も起こりはしなかった。

ただそこにあつたのは結果だけであつた。

両断されて大地に転がる要石。

ぱらぱらと舞う青い髪。

ふわりと流司の足下に舞い降りてきたのは片側の鍔が不自然に途切れた帽子であつた。

「妄執剣『見様見真似斬』なんてな」

頁四、『斬下』（後書き）

天子ちゃんマジ噛ませ犬。

ファンの皆さんごめんなさい。

天子は強いよ？天人だし。

でも、経験はないよね。

義清さんマジヤバイ。

要石斬っちゃいました。あんまり切れないものはないはずだからオ  
ーケー。こんにやくも切れます。

まあ、ちゃんと理由はありますってか、最後にちよろっとでてきま  
したね。

次で緋想天の残りみたいのが終わる予定。

オチはしっかりつきますよ。

個別とはいえ、本格的にはこのあとからですのですねえ。

## 頁五、『異変の結末』

「ふう、まあ、なんとかなっただろ」

その姿を天子の背後まで移動させていた義清は血を拭うかのごとく『緋想の剣』を振るい腰元に納めた。

所謂、残心。

『緋想の剣』に鞘は存在していなかったが、流れるような動きは義清の腰に鞘があるかのように幻視させるほどであった。

何が起こっていたのかは流司にも目に捉えることは難しかった。

要石が音もなく断ち切られる瞬間を目にするのがやっとなであり、義清が剣を振るう瞬間は目撃することができなかつたのだ。

まるで、時を後に残しての斬戟。天子が茫然自失というように棒立ちになってしまっていることも致し方のないことであろう。

流司とて先の義清の一撃を避けることができるかと問われれば首を左右に振らざるをえなく、直接その身に受けてわけではないというにも関わらず啞然としてしまっている。

であれば、当事者である天子の衝撃は計り知れないものがある。

ただでさえ、天子は義清の実力を軽視していた節があるのだ。

あるうことか、絶対の確信を持って放った一撃を防がれた上に、要石を両断されて帽子まで切り裂かれることになったとなれば天子も義清の力を認めざるをえない。

天子とて決して弱いと言われてしまうような存在ではない。

天子としての身体能力、要石を操ることのできる力、そして大地を操る能力はいずれも一級品といえるものである。

仮に流司と天子が戦った場合、スペルカードルールでの決闘でなにかぎり流司の勝利はまずあり得ない。スペルカードルールでの決闘であったのだとしても善戦こそすれども確実に勝ちをもぎ取ることができるといえることは言えないだろう。

言わば、義清の強さ、技量の高さがそれだけの高みにあったという証明に他ならないのだ。

「なんとかって十分すぎるだろ……」

ようやくに我を取り戻した流司は義清に近付いて言う。

「だが、本来の技だったなら両断どころか細切れだったはずだしねえ。長らく戦うことがなかったのは確かだったもんで、どうやら身体が鈍っているわ」

肩を回しながら義清は笑う。

「鈍ってるって……」

それには流司も驚きを通り越して呆れてしまう。義清の自然体な様子にはその底の知れなさが滲み出ていた。

「さて、嬢ちゃん。大人しくお縄につくこつた。今ならまだ説教だけで済むだろうからな」

義清は天子に語りかける。

わざわざ義清が天子と対峙したのには天人の間だけで今回の騒動を治めようという思いがあったからでもある。

既に下界から流司のように異変を追ってやってくる人間などがいるが、本来天界にはそう簡単に立ち入れるようなものであってはいけない。

異変が解決され犯人にも処罰が与えられたとなれば、大義名分はなくなるので少なくとも必要以上に天界に他者を誘い込んでしまうことはなくなるのである。



「か、要石が……」

だが、天子は綺麗に割れた要石を呆然と眺めるばかり義清の声に全くといって反応をみせない。

「おい、義清。流石に要石を斬ったのは不味かったんじゃないか？」

「いや、武器にするくらいだし大丈夫だと思ったんだが……やっぱり不味かった……？」

天子の様子や流司の耳打ちに義清はどことなく不安そうな表情をし始める。

「あの様子はただ事じゃないと思うんだけど……」

「けど、あの時は斬ってしまったのが一番手っ取り早く済んだんだよなあ……」

「避けることはできなくとも受け流すとかもできただろう？」

「それだと、攻撃に移るまでに工程が一つ増えるじゃないか」

こそこそと話し合う流司と義清の二人。

まるでちよつとからかったつもりであったのに本気で泣いてしまった女子を目の前にしている男子のようである。

「よし、義清。ここは謝っつけ」

「俺がか!？」

流司の囁きに義清は驚く。

「ごういうときは基本的に男が悪いって相場は決まっているんだよ」

「いや、騒動を起こしたのはあの嬢ちゃんだろうが」

「それでもだ。どんなに理不尽でも男が悪いときなんでざらにあるんだよ!」

「……………なんでそんなにも実感が籠もっているんだ……………」

義清の両肩に手を乗せていう流司の妙な気迫に圧され義清は表情をひきつらせる。

「それにはな、聞くも涙語るも涙の深くいわけがあるのさ。いいから謝れ」

「あ、ああ……………」

念押しする流司に義清は頷き天子に近付き、

「え、えと、な、さっ」

「か、要石があ……………ぐすっ……………」

「う、おおいい!」

音速の勢いで流司のもとまで戻ってきた。

「ああ、泣かせたな。駄目だな。こりゃ、義清は完全に悪い」

「いやいや、俺は異変の犯人を懲らしめたただけだろ!？」

「義清、正当防衛も度が過ぎれば過剰防衛となるんだぞ」

流司は優しく諭すように義清に生暖かい瞳で語りかける。

「俺が悪いのか？俺は流司の目的を果たしたようなものなんだぞ！」

「まあ、俺も今回のことにはそれなり腹が立っていたけどさ。神社も壊されたし……」

「だ、だろ!？なら」

「けどさ、いくら犯人でもそいつの大事なもの壊したら同じ穴の貉だろうが」

流司の全くの正論に義清はぐうの音もでない。

「嬢ちゃんの親父さん。親バカの上に物凄くおっかねーんだぜ？」

「ご愁傷様。俺は帰ることにする。後は天人同士仲良くしてくれ」

「待て」

踵を返そうとする流司の腕の義清はがっしりと掴む。

「何だよ？」

天人の力で掴まれてしまえば人間である流司に逃れることはでき

るはずもなく、渋々と嫌な顔を隠すこともなく流司は立ち止まる。

「せめて、嬢ちゃんが泣き止むまでいろ」

「……お前が謝るんだぞ？」

「分かってる」

「仕方ない」

流司はブスツとした顔で腕を組み義清の言葉を聞き入れる。その視線は早くしると義清をせかすものであったが。

「ああ、嬢ちゃん」

「んっ、何よ？私が悪いんでしょう？分かっているわよ。自業自得と笑えばいいのよ」

話しかけた義清に天子は半ば自暴自棄になったような様子で声を上げる。

「まあ、いや、確かに嬢ちゃんがしたことは天人として少し、あくどいぶ拙いことではあったんだがな。俺もやりすぎてしまったわけだ、悪い」

「いいわよ。要石が元に戻らないのは分かっているんだから」

天子の視線の先には二つに割れた要石。

接着剤をつければ元に戻りそうなほどに平らな断面であったが、ただの石ならともかくとして要石ではそうもいかないだろう。

「そこでだ。アレを何とかしてみようと思っただが……」

「……直せるの？」

要石だったものに指を向ける義清の言葉に天子は顔をあげる。

「ああ、直せる。バツチリと元の形に直せる。アイツがな」

「はいっ!?!」

満面の笑みを浮かべて指先を流司へと変え、義清は自信をもって言い切った。

寝耳に水の流司は素っ頓狂な声を上げて目を見開いてしまう。

「後は任せた」

「ばっ、何言ってるんだよ!?!」

「お前の能力なら簡単だろ。なんてたって、『元に戻す程度の能力』だもんな」

「いや、そ」

「んじゃあ、俺は『緋想の剣』を戻してくるんでな」

と言いたいことだけを全ていって義清は目にも止まらぬ速さでその場を去っていった。

残されたのは冷や汗の吹き出した流司と瞳を潤わせて流司を見つめる天子だけである。

「（言えねえ！！今更、直せないとか言えるわけがない）」

女の涙に流司がとりわけ弱いということはないがあれだけ自信満々に言っておきながら（本人にあらず）訂正などできるはずもないだろう。

「（ええっと、ただくつつけるんじゃ駄目だろうしな）」

二つに割れた要石の前にまで歩いてきた流司は要石の状態を確かめるようにして二つの要石を見比べる。

「（うわぁ、見られてる。めちゃくちゃ見られてる）」

背中に感じる視線に流司は更に冷や汗を流す。

「（まあ、ひとまず、分かれたものをくつつけて、それからその後のことは考えるとしよう）」

方針を決めた流司は要石を見据え能力を使用。

次の瞬間には二つに割れてしまっていた要石の外観は元の状態へと戻っていた。

「（本番はこ）」

「ありがとう！—！」

「へっ？」

流司が気を引き締めようと心構えを新たにしようとしたところで、天子が飛び出すように元の外観を取り戻した要石に駆け寄る。

そんな様子に流司も思わず驚きの声を上げてしまった。

「それ、直っているのか……？」

「完璧。冗談かと思ったけど本当に直ってる！！ありがとう！！」

「ああ」

恐る恐る天子に尋ねる流司に天子は花のような笑顔を浮かべて答える。

その様子に流司は嘘は感じられず真正銘に要石が直ってるのだと理解せざるをえなかった。

「（ただ、くつつけたただけだよ……？）」

自身の状態を確かめても特に目立った異変を流司は感じることはできなかった。

感じるのは要石をくつつけるために能力を使用した代償としての軽い疲れだけである。

「（二つに分かれても特に要石としての力は変わらなかったということか？だから、くつつけるだけで元に戻った）」

「ねえ」

「（でも、それなら直す方法なんていくらでもあるんじゃない。ただくつつけるのでは駄目で、元に戻すことが重要だったということか）」

「ねえってば……！」

「あつ、ああ」

耳元で聞こえた天子の声に流司は飛び上がるようにして思考の海から浮かび上がる。

「貴方、神社の神主だったわよね？」

「まあ、一応な」

「今回のことは反省したわ。確かに暇つぶしとはいえ、少しやりすぎちゃったから。ちゃんと神社は建て直すわ。それで許して貰える？」

申し訳無さそうに眉を下げて天子は言う。

「『気質』に関しては何とかしてくれるよな？」

「それなら『緋想の剣』が私の手を離れた時点で解決しているわ。私には『気質』をどうこうする力はないから」

「それならいい。後は今度異変を起こすときはもう少し迷惑のかわらない異変にしてくれ。矛盾しているような感じもするけどな」

「分かったわ。準備ができたらすぐに向かうから貴方は神社に戻ってて。要石、本当にありがとう!!」

天子は笑顔でその場を去る。流司にはその姿は外見相応の少女のようには見えなかった。

「ともあれ、これで異変は解決か。素直に神社に戻るとしますか。」



ああ、疲れたあ」

緋色に暮れた空を見上げて流司は呟く。

天界を後にする流司の胸には今度、義清をとっちめるといつ固い決意が秘められているのであった。

頁五、『異変の結末』（後書き）

異変の解決つと。

所謂、起承転結の『起』の部分が終わったことになります。これから、ある意味このルートの本番になりますね。

なるべく、ノンストップでいきたいものです。

## 頁六、『日常』

「流司、好きよ」

柔らかな笑みを浮かべて幽々子は告げる。

その温かな微笑みは見るものを全て魅了してしまうような愛に満ち溢れており、儂げな美しさも兼ね揃えている。

そのような愛情がただ一人に対して向けられる。それも異性である男性にだ。

幸か不幸かといえは間違いなく前者に当たる。もし、不幸だという者がいるのだとすれば、それは特殊な性癖を持っているか、この上ない愚か者であろう。

そう間違いなく言葉を幽々子から告げられた対象である流司は幸せというものを受け取っているはずである。

だが、流司の表情はあまりにも優れないものであった。

具合が悪いということではない。流司の顔色は血色も良く、健康そのものであるからだ。

どちらかといえば、幽々子の言葉に対してどう反応を返していいか頭を悩ませてしまっているといった顔色の優れなさだ。

突然の告白だ。流司が時を止められたのごとく動きをなくしてしまったのも無理はない話であろう。

持て余すという言葉は聞こえが悪いだろうが、流司は間違いなく幽々子の告白に反応ができずにいた。

無論として、流司に特殊な性癖があるということはない。

どこかの誰かが『魔法の森』の入り口に店を構える半妖の男性と流司のただならぬ関係を疑ったり、天界で旧知の友のように仲良く語り合う歌人と流司に天人たる少女がちょっかいをかけたりしていたりするが、断じて流司に特殊な性癖はない。

だからといって、流司が特定の人物に好意を抱いているというこ

ともなかった。

人間に関わらず、流司と一定の間柄である女性は少なくはない数いるが、あくまでも“一定”であり、親しい知り合いや友人といった範囲から飛び出すものは誰一人としていなかった。

“一定”を越えたいと密かに思いを抱いている存在がないこともなかったが、流司の能力とは裏腹にその矢印が“反”射するということもまた誰一人としていなかったのである。

では、何故流司が幽々子の告白に対して渋い表情を崩さずにいるのか。

確かに『神代流司』のいう人間の性格を鑑みれば愚直すぎるほどに真面目な部分もあるために物事を真剣すぎるほどに真剣に考えるということもあるであろう。

告白を受けたからといって、じゃあ付き合ってみるなどという単純な性格を流司はしていない。

相思相愛でなければ付き合うことがないと断言できてしまうような、前時代的とすらも言うことのできないような感情に縛られていることは間違いないだろう。

今時では絶滅危惧種にも近い考え。大抵の男であれば諸手をあげて飛びつくような状況でもその真面目が変わることがない。悪く言えば、夢を見過ぎといったり、へたれているといったり、数は知れない。

けれども、そのような愚かしい誠実さも流司の魅力であることは確かであった。

#### 閑話休題。

幽々子の告白という夢にも見ない状況と遭遇してしまった流司は依然として一切の反応を示すことはなく口を閉ざしたままであった。真剣でありながらも優しげな表情で流司を見つめ続ける幽々子。

幽々子の瞳を見つめ返しながらも眉間に皺を寄せて顔を歪ませ続ける流司。

穏やかながらも張り詰めた空気がそこにはあった。

流司が幽々子のことをどのように思っているか。少なくとも嫌っているということはない。

流司が顔を合わせる相手の中でも幽々子は比較的回数が多い方である。

取り分けて流司が月へと行ってからはその回数は各段に増したといえるであろう。

具体的な回数にして最低でも週に一回は顔を会わせている。幽々子の居が冥界であることを考えればかなり多いといえる回数だ。

尤もそのほとんどは流司が冥界に呼ばれるという状況であるのだが。

生者が冥界に入り浸ることはあまり好ましいことではない。

死者の世界である冥界に行くということは“死”に近づくことであり、それはそのままに生者の死に繋がる。

それは流司も理解している。それでも流司は嫌な顔一つすることなく冥界を訪れていた。

幽々子のことを嫌っていればまず有り得ることではないだろう。

しかしながら、流司のそれが幽々子に対しての好意に繋がっているかといえば、それは違うと言えることである。

好意であることは確実であったが、それは家族への情愛とやはりベクトルを同じくしたものであった。

流司の心情としては我が儘な姉の要望を聞く弟と言ったところか。

同居人の無理な要望にも日々耐えてきた流司だ。週に一度のペーすで冥界に呼ばれることなど他愛もない話であろう。

端的に言ってしまうえば、苦労性だということだ。

そんな幽々子の呼び出しがもう日常化した秋。

毎度のように冥界の白玉楼へと馳せ参じた流司への突如の幽々子

の告白。

未だに声の一つどころか動く気配すら見せることのない流司。

それは流司の驚きの大きさを示しているようにも見えることだろう。永遠のように続く無言に静寂。

僅かに聞こえる呼吸音さえもが場を乱す騒音にしか聞こえなかった。

「……………幽々子」

一体どれだけの時が流れ去っていたのか。

もはや、開くことはないと思えてしまうほどに固く閉ざされていた流司の口が開かれた。

「何かしら？」

流司が呼んだ自身の名に幽々子は少しだけ首を横に傾けて柔和な笑みのまま返事をする。

それは今か今かと流司の返事をまちわびているようでありながらも、流司のことをそっと促すような慈しみに包まれていた声であった。

余裕ということではない。幽々子の手にはじんわりと汗が浮かび上がっているからして、いつものような掴み所のない柔らかかな余裕はないといえた。

それだけ幽々子の思いは真剣であるのだ。

この思いだけは誰にも負けることはなく、譲るわけにはいかない。そんな幽々子の感情がありありと示されていた。

ゆつくりと流司の口が開かれていく。

滲み出た汗は滴ることはなく引いていく。

口を開けるという一瞬で終わるような行動がいつまでも終わらないような錯覚を幽々子は受ける。

が、錯覚は錯覚。

そんなものは幻想にすぎない。

開かれていく流司の口が再び固く閉ざされるころには幽々子の抱いた思いには決着がついてしまっているのだ。

その思いが遂げられてはいるかないかに関わらず。

ふと、幽々子は恐怖を感じる。

もし、この告白が叶わなかったときに今までと変わらぬ日常を続けることができるのか。

難しいかもしれない。

手に入れるという可能性には常に失うという可能性も含まれている。

物事の二面性はどのようなものにも備わっているのだ。

故に幽々子の告白が失敗した場合、それは日常の一つを失ってしまつことでもあるのだ。

口にしなければ今まで通りの日常が続いていた。

しかし今更のことである。

既に賽は投げられた。後はその目を待つことしかできないのだ。

だからこそ、幽々子は己の神経を研ぎ澄まして流司の言葉に耳を傾ける。

「お望みなら毎日でも飯は作ってやるから。紛らわしい告白はやめてくれ」

「そう？なら、早速お願いね、流司」

それは幽々子の思いが叶い、流司の日常に新たな項目が刻まれた瞬間であった。

勿論、その項目は『白玉楼の食事の準備』である。

頁六、『日常』（後書き）

胃袋をおさえてしまえば後は……

それは女が男を落とす方法だって？

そんなことはない。

主夫も今時多いですよ。

まあ、手料理は憧れるものです。何故かなあ。



頁七、『提案』

コトコトコト。

トントントン。

鍋の蓋の揺れる音と軽快なリズムを刻む包丁の音が白玉楼の台所に響き渡る。

包丁を握り調理に勤しんでいるのは当然のこと流司である。その動きには一切の淀みを感じることはできない。

流司が料理に手慣れていることはともかくとして、博麗神社や流司自身の家での調理であるならまだしも、そう立つことはない白玉楼の台所での動きにここまで鈍りが無いのは少々おかしな話に思えるだろう。

勿論、何もおかしな話ではない。

最低でも週に一度は流司は白玉楼でその腕を振る舞っていたのだから、白玉楼の台所にも慣れるというものであった。

そう、流司が冥界へと呼び出される理由は十中八九にして徹頭徹尾、『料理を作ること』であった。

「すみません。何だか御迷惑ばかりお掛けしてしまって……」

鍋の様子を窺う小柄な少女が呟いた。

「まあ、構わないさ。どの道、妖夢でもこの事に関しての幽々子は止められないだろ？」

「申し訳ないです」

包丁の動きを止めて流司は気にしてはいないと少女 『魂魄妖夢』を慰めるように答える。

そんな流司の様子にますます妖夢は恐縮してしまい身体を縮こまられる。

流司が言うように幽々子の半ば付き人のようである妖夢であっても、こと幽々子の“食”に関しての欲求を抑えることは難しい。

流司が明言することはなかったが、むしろ妖夢が幽々子のことを食い止めることが何か一つでもあったかどうかですら怪しいものであると言える。

何かと苦勞の多いもの同士、流司には妖夢の心情を比較的りかいしやすかったのだ。

「だから、気にするなって。妖夢も負担は減るだろう？」

「ですが、流司さんは博麗神社でも仕事がありますよね？幽々子様は本当に毎日作らせるつもりですよ？確かに私の負担は少し減りますが……」

本来の仕事は白玉楼の庭師兼剣術指南役である妖夢だが、その仕事は雑用一般と幽々子の得手勝手に付き合っているために本来の役目からかけ離れたものになってしまっている。

料理をする幽霊が白玉楼には他にしっかりといるにも関わらず、鍋の様子を時折確かめる妖夢の手が手慣れているのはそのためである。

流司が幽々子に毎日料理を振る舞うのであれば、料理に関しての妖夢の負担はなくなるも同然であり、少なくとも今までに比べ各段に少なくなることは間違いなかった。

だが、それは流司の負担が増えるということと同義である。

冥界と幻想郷の行き来はしやすくなっているとはいえ、それなりに時間も労力もかかることは仕方のないことである。

毎日、毎食、白玉楼で料理を振る舞わなくてはならないともなれば通い妻も吃驚の往復を流司は行わなくてはならない。それも居

候をしている博麗神社での仕事を疎かにすることなくである。

「冗談では済まされない仕事量になることは確実であり、それを危惧しての妖夢の言葉であった。」

「ああ、それなら大丈夫だ。最近はまだ博麗神社では暮らしていないからな」

「そうなんですか？」

「何でももう十分に幻想郷に慣れたから大丈夫だろうってさ」

「それはまた突然のことですね」

それは妖夢が驚きに呟いたもの無理はないことで、流司もまた未だに驚きを覚えることであった。

「この前の異変を霊夢より先に解決したことが影響しているかもしれない」

流司が博麗神社で生活をしなくなってから久しいと言える。

夏に流司が異変を解決して以来流司が博麗神社で生活をすることはなくなっていた。

当初は博麗神社の再建もありどうしようもないことであったが、建て直しが叶った現在であっても流司は人里の自身の家で過ごすことが毎日となっていたのである。

本来そうあるべき状況だとはいえ、博麗神社に流司がいることが自然と定着してしまった今となつては十分に驚きに値することであるだろう。

「もう一人前ということなのでしょうか？」

「さあな？霊夢が考えている意図が分からないこともあるし、気分屋な部分もあるからな。俺には分からないよ。少なくとも、負担という意味では料理を作る場所が変わっただけだからそこまで大変というわけではないさ」

妖夢が口にしたように異変を解決したことで流司の実力が霊夢が妥協することなく認められたという可能性が流司が博麗神社での居候を止めることになった理由としては最も有力なものであった。

理由は定かなものではないとして、幽々子と流司が顔を会わせる頻度が多くなっただけとは対称的に霊夢と流司が顔を会わせる頻度が大きく減ったことには間違いがない。

それまでは生活空間を共にしていたのであるから当然と言われれば当然のことでもあるのだが。

「ですが、やはり博麗神社と冥界ではわけが違うと思います」

それでも妖夢の懸念はそこに帰結する。

大まかに分類すれば博麗神社は幻想郷に区分されるが、白玉楼は冥界であり別の世界である。

結界が弱まった今では容易に行き来が可能だとはいえ、労力としては博麗神社を訪れるよりも上に違いない。

「その辺は仕方ないって」

「なら、白玉楼で生活すればいいのよ」

「はい？」

突然の提案に流司と妖夢は揃って頓狂な声を上げて振り返る。

そこにはニコニコとした笑顔を浮かべる幽々子の姿があった。

「ん〜いい匂い。間に切れなくってきちやっただわ」

「幽々子、今なんて言った？」

「ん？いい匂いで待ちきれなかったって言ったのよ」

火にかけられた鍋をのぞき込むようにしている幽々子に流司は尋ねる。

「そうじゃない。その前だ」

「ああ、流司が冥界に一刻来るのが大変なら白玉楼（じゆりゆう）で暮らせばいいって言ったのよ。どうせ部屋も沢山余っているもの」

「そういう問題ではないだろ……」

「そうですね、幽々子様！！ここは冥界なんですよ！！？」

幽々子の暢気な口調で告げられる驚愕の提案に流司は呆れ、妖夢は正気かと確認するかのように声を荒げる。

「妖夢。私を何だと思っているの？ここが冥界だということが分からないほど、私はボケてはいないわ」

「そういうことではなくてですね。流司さんは生者、冥界に長く留まることはそれだけで危ないことなんですよ！？」

妖夢の慌て方は些か度が過ぎるものでもあるが、妖夢の訴え自体には間違いはない。

生者である流司が長い時間、冥界に留まることは推奨されるようなことではなく、ましては白玉楼で寝食を共にすることなどはあってはならないと言えることでもあるかもしれない。

「そうねえ〜……でも、大丈夫だと思うわ」

「何か確証でもあるのか？」

顎に人差し指を当てて幽々子は悩み声を簡単にあげるもすぐに心配はいらないと言っ。

「ないわね。強いて上げるとするならば勘ね、勘。女の勘って奴になるかしら？」

「勘って……幽々子様……」

「まあ、今は先にご飯にしていましましょう。この話は後でも十分よ」

ぼんつと手を合わせて幽々子は新たに提案する。  
そんな幽々子らしい姿に流司と妖夢は更に呆れ、肩に疲れを感じながらも食事の用意を続けるしかないのだった。

頁七、『提案』（後書き）

Out 博麗神社

in 白玉楼

我が道を行くゆゆ様。

流司と妖夢の苦勞が半分になるかは定かではありません。

## 頁八、『出会い』

「んあつ、ここ……そういえばそうだったんだな……」

眠りから覚めた流司は見慣れぬ周囲の様子に一瞬戸惑いを覚えるが、すぐにそれが不自然ではなく当然であることを理解する。

流司が目覚めた場所は人里にある己の家でもなければ、“外”から共に移ろい数年に渡り過ごしてきた博麗神社の一室でもない。

質素な雰囲気を保ちながらも品を崩さない程度に調度品の飾られた趣のある部屋。

白玉楼の一部屋であった。

結局、幽々子に圧されるがままに白玉楼での生活を流司はすることになっていった。

無論のこととして、流司の身に異常をきたすような場合になったときはすぐさま中止になることであるが、幽々子は元よりそのような心配はしていないのかこれで毎食流司の料理が食べられると朗らかに笑うばかりであった。

流司も流司で日頃の経験から諦めの極地に至るまでにかかる時間は僅かなものであり、なるようになるだろうと早々に幽々子の言葉を受け入れていた。

残る妖夢も自身の主たる幽々子の提案で当事者である流司が了承してしまっているからには認めざる得ないのだった。

装いを改めて部屋を流司が出れば、ひんやりとした空気がその頬を撫で意識をよりはつきりとした覚醒へと誘う。

手入れの行き届いた広々とした庭に登り始めた日差しを反射し光る人影が一つ流司の視界に映り込む。

張り詰めた曙の静寂しじまを断ち切るような鋭き光の軌跡。

野分のような激しさを持った動きでありながら、澄んだ清流のよ



うな穏やかな兼ね揃えている動き。

無駄を悉くに省いたその動きはまさしく命を切り詰めるために技にまで昇華された美しさであった。

「あつ、流司さん。おはようございます」

「ああ、おはよう」

流れるような動きを止めた妖夢が残心をとリ息を吐き出したところで流司に声をかけた。

今初めて妖夢が流司の存在に気付いたというわけではない。型を確認する動きの途中で刹那、流司へとその意識が向けられたことに流司は気付いていたからだ。

「すみません。気付いてはいたんですけど……」

「いいさ。俺の方が邪魔をってしまったみたいだしな」

「いえ、そのようなことは……」

申し訳なさそうに言う流司の言葉を妖夢は首を振って否定する。

「それにしても見事なものだな。剣の切っ先にまで意識が行き渡っているのが分かったよ。それも二本ともなんだから驚きだ」

流れる川を思わせる妖夢の動きは手にしている刀を己の身体の一部のように操っているからこそのものである。

それも左右で別々の動きを行うためには並みの集中力では叶うことはない。それでありながらも、周囲へと警戒を怠ってはいないということとは妖夢の技量の高さをうかがえるというものであった。

「短時間の間に、それも見ただけで分かる流司さんも流石ですよ」

「まあ、見ることに避けることに関しては皆伝レベルではあったかな」

『神代家』の御庭番である『白雲吏妖』の指南というあの扱きにより幻想郷を訪れる前から流司の動きは一般人と比べると色の付いた程度ではあった。

その吏妖からとりあえずの皆伝をいい渡される程度には見ることと避けることの二点については十分な実力を流司は備えていた。

結果、流司に必要な護身用としての意味での体術の習得は叶ったために吏妖による指南はなくなったので、幻想郷に来た頃の流司は防御の精度とは対称的に攻撃方法をほとんど持たないというアンバランスな実力を持っていたのだった。

今でこそ、それなりの攻撃手段を持ち合わせている流司であるが、その手段の多くが相手の気をてらうものであったり、カウンターのようなものであることから、流司の根本にあるものが防ぐことであることが窺えるだろう。

「私はまだそれほどまでではありません。そればかりか、途中で祖父、師が失踪してしまったので……」

苦い笑みを浮かべて妖夢は言う。

「それはまた……」

流司もその言葉には苦笑いを浮かべることしかできない。

「その内、帰ってくるでしょうし、心配はしていませんが」

「そうなのか？」

「正直、突然帰ってこられても扱いに困るといっか……ある意味幽々子様よりも面倒な気がします……」

「失踪中の身内に対して言う言葉じゃないよな」

予想外にも痛烈な言葉を呟く妖夢に流司は顔を更にひきつらせたものにする。

「もし会うようなことがあれば分かります。会うことがあることが幸運かは分かりませんが」

「（一体、どんな奴なんだよ……）」

手加減のない妖夢に流司の驚きは感心に近いものにまでなってしまうていた。

「それじゃあ、俺は朝食の準備をするかな」

「あ、すみません。引き止めてしまったみたいで……」

「そんなことはないさ」

「私も軽く汗を流したら手伝いにいきますから」

「別に大丈夫だが……そういうことなら、風呂の竈の火を少し強めておくよ。向こうで良かったよな？」

流司は屋敷の裏手の方角を指差して尋ねる。何度か白玉楼の湯に浸かったことのある流司であったが、竈の位置までは確認していな

かったのでその方角は推測にすぎない。

「は、はい。軽く火は入っていると思うので少し薪をくべていただければ……」

「了解。それじゃあ、台所で。そこまで急ぐ必要はないからな」

「ありがとうございます。すぐに向かいますから」

言葉をしっかりと聞いていたのか分からないような妖夢の返答に流司は軽く笑うと確認した竈へと向かうのだった。

「お、あれか」

白玉楼の裏手にまで回り込んだ流司は細く煙の上がる竈を見つけ  
る。

「まあ、これくらいでいいかな？」

竈の前にしゃがみこんだ流司は慣れた手つきで竈に薪をくべてい  
く。

数年に渡り霊夢の要求する厳しい湯加減に答えてきた流司だ。その動きは流れるようであり舞うようでもある美しいものであった。到底、ボタン一つで風呂を沸かすことのできるような“外”から来た人間には思えないだろう。

「あとは好みになってしまっただが、流石に訊くのもどうかと思う

しなあ……………」

いくら妖夢が半人半霊でその見た目とは裏腹に流司より年上であるとはいえ、年上だからこそ尋ねることに流司は抵抗があった。

「霊夢ならずけと文句を言ってくるから楽なんだがな」

その日の気分で湯加減が変わる霊夢は毎日のように流司に要求をしていたので、ある意味では湯加減を調整するのは楽であった。

「えっと、流司さん、いますか？」

「おう、湯加減は大丈夫か？」

微かに反響した妖夢の声が流司の頭上から降りかかる。

「少し、熱めなので、もうくべる必要はないです」

「了解」

流司は竈から薪を書き出して火を弱める。

そして、立ち上がり……………」

「ふむ、小柄ながらも程よく引き締まった健康的な体躯。色気はないが、可愛らしさは十分か。ただ、いくら半人半霊で人間よりは寿命が長いとはいえっても些か発育がな……………」あれでは空気抵抗の欠片もないの、そうは思わんか、その御仁？」

「……………」貴方は何者ですか？」

格子に捕まるようにして風呂を覗く男に呆然と尋ねた。

「儂か？儂は」

ザバツ。

「熱ッ！！！！！？」

「流司さん。今のうちに捕まえてください！！言っておきますが、手加減は無用です。むしろ、手加減をしたら捕らえられません！！」

風呂から熱湯が降りかかり男が悲鳴を上げ、妖夢が声を荒げて言う。

「お、おう。って、こいつが誰か知っているのか！？」

妖夢のまるで男、熱湯にのたうち回る老人が何者であるのか知ったような言葉に流司は尋ねる。

「……………それが祖父です」

「はい？」

妖夢の絞り出すような声に流司は足下で転がる老人に視線を再度向けるのだった。

頁八、『出会い』（後書き）

妖忌登場。

イメージを壊した人は申し訳ありません。  
どうもオリキャラや半オリキャラは皆、ぶっ飛んだ性格に……

頁九、『変態』

流司の目の前には一匹の芋虫もといシャチホコが転がっていた。

「ぶじっほおじっ」

口には当然のように猿轡が噛まされており、全身を拘束する縄の縛り方は亀甲縛り……ではなく逆海老、それも踵が後頭部についてしまうのではないかと思えるほどの見事な反りを見せている。

まな板の上の鯉よろしく地面を跳ねる老人を縛りつけたのは流司ではなく孫である妖夢であった。

流司に老人を捕まえるように声を妖夢にかけてから瞬く間もなく、妖夢は完全武装の上で姿を表した。

帯剣していた刀を引き抜くと鋭い峰打ちを老人に浴びせ、動きが鈍った隙にどこからともなく取り出した縄で緊縛師顔負けの早技にて老人を拘束したのだった。

無表情に無慈悲に老人を縛り上げる妖夢の慣れた手つきに流司は底の知れぬ戦慄を覚えたが何とかして胸の内に潜めておけたことは流司にとって全くの僥倖であったことだろう。

「……………」

「えっ、と、妖夢……?」

汚物でも見つめているような視線で老人を見下ろす妖夢に流司は恐る恐る口を開く。

妖夢の放つ骨の心から凍り付いてしまいそうな視線は流司も見ただことはない。

流司のことを侵入者だと勘違いして襲いかかってきたときに向け



ていた視線を遥かに超えるものだ。

流司と初めての邂逅のときに妖夢の向けていた視線が敵愾心を最大まで高めた冷たい視線だとすれば、現在妖夢が祖父たる老人に向ける視線は人を人として見ないゴミを見下すようなものであった。

「……………なんでしょうか？」

「……………何か話したいみたいだし、猿轡を外してあげたらどうかと……………」

声にならぬ声をあげのたうち回る姿を見ると流石に微かながら同情心も湧いてくると言うものであった。

いくら身内であるとはいえ、風呂を覗いたのだからこの上ない自業自得であろうとは流司も思っていたが、このままでは事態が進展を迎えることがないだろう。謝罪をしようにもできないというものである。

「……………仕方がありません。流司さん、猿轡を少し緩めてもらっていいですか」

「ああ」

依然として怒りが治まるようなことはないのか、妖夢が出した答えは“外す”のではなく“緩める”と言ったものであった。

流司は老人の猿轡に手をかけて聞き取ることのできる声を発せられる程度に猿轡を緩める。

「実の祖父になんということを。それに縄で縛るなど言語道断！縛るなら見た目の麗しい女子おなこにせい。こんな老人を縛り上げても気持ち

「流司さん」

「分かった」

「ふじっふじっほぎおっ!!?!?」

絶対零度すらも下回ってしまっているのではないかという妖夢の  
声に流司は即座に意図を察し素直に従う。

先程までよりも固く縛り付けられる猿轡。辛うじて空気を流すこ  
とのできる程度にまで強く縛られることになったため老人の声は大  
人しいものとなる。

「……誠に遺憾、ほんとーーーーーにお恥ずかしいのですがそ  
れが私の師であり祖父でもある『魂魄妖忌』です。因みにあらゆる  
意味で変態です」

「ああ、まだ出会って間もないが十分に理解できた」

流司は妖夢の言葉にしみじみと頷きを返した。

猿轡が強くなり声を出すことが無駄だと理解したのか、妖忌は大  
人しくシャチホコのように胸で身体を支え静止している。

いくら逆海老に縛られているとはいえ、見た目には有り得ない背  
筋である。

「突っ込んでダメですよ。思うつぼですから」

「あ、ああ……」

何故、わざわざ体力を使うような姿勢をしているのかと非常に気

になっていた流司であつたが、妖夢の忠告にその言葉を押し止める。

「心配する必要はありません。私と同じ半人半霊、見た目以上に元気ですから」

「……………」

確かに静止し続けている妖忌の顔には疲労という言葉は見られず、むしろどこことなく誇らしげな表情さえ浮かんでいる。

妖夢が言つように心配される要素は欠片としてなかつた。

「あら、妖忌じゃない〜久しぶりね〜」

「「幽々子（様）！？」「」

その場の冷やかな空気を払拭するようにのほほんとした幽々子の声が響く。

「ふぶほおはあばあ、ふおう、いはあぶうふおぼつ、いばふ」

「何を言っているのか全く分からないわよ〜妖忌」

懸命に猿轡の間から声を漏らす妖忌のもとに幽々子はおかしそうに笑つと鮮やかな手つきで猿轡を取り払う。

「幽々子様、お久しゅうございます。相変わらずの立派なも」

ゲシッ。

「ぐおおおっ！！腰が、腰があっ！！」

妖夢が鞘で妖忌の腰を突く。一切の手加減はない。

「相変わらずねえ、妖忌も、元気そうで良かったわ」

「元気も元気、今か」

ゲシ、ゲシッ。

「今度はッ、背骨ッ」

二連突き。

妖忌の身体を地面に押さえつけるかのように背骨を貫く鞘。容赦はない。

「少し大人しくしててくださいッ」

「や、やめい。次腰に当たったら流石の儂もヤバい!!」

「あらあら」

「……………」

抵抗のできない妖忌を攻め立てる妖夢。

全身を拘束されているにも関わらず妖夢の突きをかわす妖忌。

そんな二人の様子を止めようとはせずおおからに笑う幽々子。

そして、状況について行くことができるに沈黙する流司。

その場がこの上なく混沌としていたのは語るまでもないことである。

「久しぶりに姿を見せたと思えば、変わらずですかッ、御爺様ッ！」

「！」

「実の祖父が変わらず息災なのだから、どこに文句があるというのじゃ？」

既に鞘から抜かれている妖夢の刀を軽やかな足取りではなく跳ね具合で避けていく妖忌。

腕も脚も縛られているにも関わらずだ。

「少しは幽々子様に仕えるものとしての自覚を持ってくださいということうです……！」

「素直に従うだけが仕えることではないと教えたのを忘れたようじやの」

「御爺様のは無礼がすぎるんです……！」

「小さい小さい。幽々子様がそんなことを気にする器ではあらん。だから、色々と小さいままなのじゃて」

「なっ……！！……！」

激しさを増す妖夢の剣戟を妖忌は易々とかわす。とてもではないが、縄で全身を拘束されている人間の動きではない。

「懐かしいわね」

「な、懐かし、い………？」

激しい（非常識な）戦いを繰り広げる妖夢と妖忌の様子を眺めな

から幽々子は穏やかに笑う。

「そうよ、妖忌がいたところは毎日こんな感じで賑やかだったのよね」

「ま、毎日……」

流司の視線は再び妖夢と妖忌の戦いに戻る。

いつ死人が出てもおかしくないような戦いに流司は顔を盛大にひきつらせていく。

「大丈夫よ、流司。ここで生きているのは貴方だけだから。でも、妖夢と妖忌は半人半霊だし、足せばもう一人になるのかしら？」

「（そういう問題じゃないだろ！！！！）」

流司の心を読んだかのように言う幽々子に流司は内心で突っ込む。流司が幻想郷に来てからとだいぶ常識が崩されたという感覚は流司自身にもあったが、ここへ来て更にその常識が壊されていく感覚を流司は覚える。

「ここは冥界だもの。それよりも流司、そろそろ朝ご飯が食べたいわ」

「あ、ああ、用意するよ……」

ニコニコと笑う流司は身体を反らせながら跳び回る妖忌の非常識さ、殺さんばかり勢いで刀を振るう妖夢の苦勞、このような状況でも我を曲げることはない幽々子の大きさを認識する。

「妖夢、妖忌、朝ご飯までには戻るのよ」

「「分かりました（心得た）」」

幽々子の声に同時に返事を上げる妖夢と妖忌。

「（ああ、もう変態でいいか）」

流司は妖忌という存在に対しての思考を打ち切ると笑顔の幽々子を伴い、朝食の献立を考えながらその場に背を向けるのだった。

頁九、『変態』（後書き）

じじい×変態Ⅱチートの法則。

はい、ありとあらゆる意味で“変態”と化してしまっているじじいこと妖忌です。

どうしてこうなった……

美男子や美女ならまだしもじじいの亀甲縛りなんて需要はない……

……はずですよね？少なくともこの作品を見ている読者にはないと思います。

需要があるなら書きますけど、事細かく妖忌の緊縛を。いらないよね？

それとPVが400万、お気に入りが1700件、感想が900件を超えました。

本当にありがとうございます。

何よりも感想が1000件の夢ではないという事実には驚愕です。

これからも是非ともよろしく願います。



「先程は大変見苦しいところをお見せ申した」

と朝食を終え一息ついたところで妖忌が流司に深く頭を下げる。その姿は武骨な武人を思わせるかのように洗練された存在感を醸し出している。

流司にはこの老人が先程まで妖夢との激動を繰り広げていた存在と同一の存在にはとてもではないが思えなかった。

身なりを整えれば品の良い和の趣を体現しているような翁である。それだけに先程のことが流司には夢のようにしか思えなかった。

因みに妖忌は自力で緊縛から抜け出したということ流司は疲労困憊の様子で居間に現れた妖夢から聞いていた。当然の妖忌は掠り傷一つ負ってはいない。

もはや“化け物”を超えて、まさしく“変態”であろう。

「分かっているのなら始めから馬鹿な真似はしないでください!!」

「なっ、久しぶりに孫の元気な姿を確認しようとした僕の思いが“馬鹿な真似”じゃとツ!？」

「久しぶりに帰ってきて早々に孫の入浴を覗く祖父がいますかツ!」

「(まあ、いないわな……)」

怒り心頭に言う妖夢の言葉に流司は胸の内を頷きをあげる。

世の中には年頃になっても父親などと風呂に入る娘もいると流司は耳にしたことがあったが、妖夢がそうであるとは思えなかった上

に、喻えそうであつても覗かれて気分がいいなんてことは余程でもないかぎりないだろうとは考えるまでもないことであつた。

「昔は“おじいちゃんと呼ぶ”などと言って後をとてとてとついできたというのに……」

「そんなこと一度も言っていないから。誤解を呼ぶ、ほら流司さんが納得したように頷いてしまつていきますから!!」

「いや、別に子供の頃ならいいんじゃないか？俺だって、母親と入つた記憶はあるし……」

「それとこれとでは話が違います!!」

かつてを懐かしむように語る妖忌に妖夢は猛烈に抗議をする。流司としては昔であれば特に目くじらを立てる必要もない普通のことであると考えていたが、妖夢にとってはそのようなことはなく流司にも妖夢は気迫を持つて抗議するのだつた。

「どこで育て方を間違えてしまつたのか……」

「初めからまともな育て方をされた記憶はありません。反面教師として見習えたのがせめてもの救いです」

妖夢の真面目な性格には幽々子だけでなく妖忌の影響も大きいのだと流司は思う。尤も「取りあえず斬ってみれば分かる」などどズレた考えも持っている妖夢である。全てが反面教師だとはいえないだろうことも同時に流司は理解できた。

「ふん。そんな細かいことを気にしているから大きくなれんのじゃ、

“色々”とな。それに将来禿げるぞ？幽々子様を見てみあの変わらない“色々”と器の大きいお姿を。そう思わんか、お主も？」

「ここで俺に振るのか！？」

何気ない様子で流司に問いかける妖忌に流司はどう答えていいものか分からず驚きの声をあげる。

妖忌が何を言わんとしているかは流司にも理解できる。

だが、それを素直に答えようものなら命がないという言葉も過言ではない。

だからといえ、答えないという選択が許されているような状況ではない。

絶対絶命。

少々どころかだいぶ間抜けともいえるような理由ではあったが、流司が絶対絶命であるのは明確な事実であった。

「ま、まあ、幽々子は亡霊なんだし変化がないのは当然じゃないかと……」

「そおねえ、流司の言う通りだと思っわあ」

流司が頭に頭を働かせて導き出した回答に幽々子はゆったりとした口調で賛同する。

求められていた答えから大きく外れていた答えであることは流司も重々に承知している。

それでも、この緊迫しながらも穏やかな空気が流れているという矛盾した環境下でその角のたたくい回答を導き出せた自身を誉めてあげたい思いで流司は一杯であった。

「差し当たりのない答えを返しおって、つまらん。ところでお主は

何者かの？僕の記憶ではお主のような御仁を白玉楼で見た覚えはないのだが。ああ、僕は『魂魄妖忌』先代の庭師であり妖夢の祖父じゃ、怪しいものではない」

「御爺様、今更すぎます……」

妖夢の呟きは妖忌がとってつけたように自己紹介を شدしたことか、最後の“怪しくはない”という言葉に対してか。

恐らくは両方であろうとあたりをつけた流司はぎこちなくではあるも妖忌に応える。

「『神代流司』です。今はここで料理人みたいなものを……」

「……神代、……リュウジ……？」

瞬間、妖忌の瞳が細められ流司のことを射抜くような鋭利な視線へと変貌する。

それは明らかに流司の正体を探るような色を含んだものであった。

「御爺様？」

そんな雰囲気を変えた妖忌を妖夢は不審に思ったのか、首を傾げるようにして声をかける。

「ああ、すまんの。神代殿、お主は霊体ではないの？」

「流司でかまいません。はい、ご覧の通り私は人間です」

妖忌の言葉にふざげがないということに察した流司は丁寧な言葉を返した。

「では、流司とやら、料理人みたいなものと言ったが、ここで暮らすことの危険性は承知の上かの？でなければ、疾うに去るといい」

「御爺様ツ！！」

妖忌の冷たく突き放すような言葉に思わず妖夢は声を荒げる。

「妖夢。勿論、理解した上です。妖夢にも散々に言われたことですので」

妖夢を手で制し、流司は真っ直ぐに妖忌を見つめ返して答える。

「理解した上で、か……まるで自殺願望があるみたいに聞こえるの」

「そんなことはありませんよ。ただ、幽々子が大丈夫だと言っていたのでそこまで気負ってはいないだけです。それにまだここで暮らし始めてからは一日と経っていませんので」

「そうよ、妖忌。流司がここにおいても大丈夫なことは私が保証したの。冥界を管理する私がね」

「ふむ、ですが、幽々子様のことですから。その保証とは恐らくは“勘”であるっ？」

妖忌は瞼を閉じ一呼吸おくと流司から幽々子へと視線を移して問いかける。

「よく分かったわね、妖忌」

「当然じゃよ。何年ここで庭師を務めていたと思うのですか？」

「三百年」

「……………然り。それだけの時間があれば幽々子様のことを察することは容易というものです」

幽々子の答えに妖忌は鈍く答える。

「流司殿、幽々子様が言った言葉とはいえ、勘にしかすぎぬ。外れることもあるう、なれば取り返しのつかぬことにもなるう。引き返すなら今の内、それが賢い選択というものではないかの？」

妖忌が声を低く告げる事実は流司のためを思ったこと。

当初、妖夢が流司や幽々子対して言った言葉と内容は変わらずともその深みは大きく違うものであった。

「確かにその通りです。人間としての理性ではここに長居することは間違いです。ですが、私個人としては幽々子の言葉を信用していませんので。妖忌さんも幽々子の言葉は信用するでしょう？」

流司は妖忌の言葉に人間という部分で深く賛同しながらも、個人という部分でそれを否定する。

信用。

文字にしてみればこれほど陳腐な言葉もないだろう。

だが、流司のその言葉には確かな重みが含まれていた。

「信用か……カッカッカッ、確かに儂とて仕えるものとして幽々子様言葉を信用しないなんてことはありえんの。これは一本とられたの。ハッハッハッ」

笑みを浮かべていった流司の返答に妖忌はしてやられたと笑い声をあげる。

「なれば、儂にもう言うことはあらんよ。どのみち、幽々子様が決めたのであれば強く反対などできんしの。にしても、やはりお主も根本は仕える身と言うことかの。これは愉快」

「まあ、神職ですので」

笑い続ける妖忌に流司も張り詰めていた気を緩める。

雰囲気に当てられていた妖夢や幽々子の様子も普段と変わらぬものに戻っていた。

「じゃが、一つだけ言わせてもらおうかの」

笑いを引つ込めた妖忌が今までにはなく真剣な顔持ちで呟く。

その様子に流司だけならず、妖夢、そして幽々子までもが生唾を飲み込むようにして押し黙る。

妖忌の姿はまさに歴然の雄姿を感じさせるものであり、何人であろうとも屈さない力強さがあつた。

「妖夢が欲しくば儂を倒し」

「御爺様っ！！！！！！」

「なっ、儂は妖夢ための思つての、は、白楼剣まで持ち出して儂を殺す成仏する気か!?!」

「今日という今日は一太刀いれて……」

顔を赤くした妖夢に追いかけられ慌ただしく居間を飛び出していく妖忌。

「待ちなさい!!」

「待つものか!!それで一太刀入れられたら洒落にならんわい。せめて、楼観剣にせい。そっちなら耐えられる!!」

「た、耐えられるのか……」

「あらあら、また賑やかになりそうね」

流司はこれからの毎日に果てしない不安を覚えながら呟いた。  
今日の白玉楼もまた平和な時間が流れるのであった。



頁十、『食後』（後書き）

つくづくバグなじじいです（笑）

白楼剣は成仏するからヤバいけど、楼観剣なら意外と耐えられます。  
一振りで幽霊十匹は殺せるんだけどなあ……

妖忌が出てきてからの感想がヤバい。

そついや、前に更妖とか出したときもだなあ……

これはおにゃのこよりもじじいを出した方がいいのか……

これからは良くあるポテチやドリンクのロング缶のように『じじい  
20%増量!!』とかいう謳い文句が必要なだろうか……？

イヤだなあ……

ずずずうつ。

お茶を啜る音が縁側に響く。

意地汚いと思うかもしれないが実際はそのようなことはないかもしれない。

蕎麦や味噌汁をはじめとして地域、風習によっては物静かに食するよりも音を立てた方がよいとされるものは多くある。

お茶もまたその一つだろう。

テーブルマナーの徹底した地域であっても、正しくは食器をぶつけ合う音が好まれないのであり、食事そのものが立ててしまう音には多少の目は瞑られる。無論、音を極力立てないことにこしたことはないだろうが。

では、ここ白玉楼ではどうか。

その答えは音を立ててお茶を啜っていることに流司が目くじらを立てていないことから容易に察することができるだろう。

むしろ反対に静かな食事風景とは無縁の場所であるといえる。

毎回のように騒がしくなる人二人と霊二人 正しくは人間一人と半人半霊二人、亡霊一人が集まって食事をする光景は静かとは到底言い難いものではあるが、“団欒”という言葉を当てはめるのだとすればこれ以上なく正しい光景ともとれるであろう。

その料理を用意している流司の考えとしても、美味しく食べられることこそが料理のあるべき姿とまるでその道を極めたような考えをもっているのです。余程のことがない限りは文句を言うことはない。尤も余程のことが合った場合は文句が流司の口から出ることはなく、別の形として表れるのだが。

具体的には特定の人物の食事がその人物の苦手とするものだけで構成されたり、極端に量が少なくなったりするのだ。

実例による最大級の制限は三食シラス一匹という生き仏にでもなるのかと思ってしまうほどのものである。

それよりしばらくの間、白玉楼に静寂が訪れたのは言うまでもないことであろう。

白玉楼で最も大きな力を持っているのは誰であるか。

権力という意味では当然、主である幽々子が最も大きな力を持っている。

武力という意味では妖忌も無視はできない。おかしなところは多々あれどもその力は馬鹿になど到底できるものではない。

妖忌に対する最終兵器という意味では妖夢も忘れてはいけない。妖夢がいるからこそ妖忌の奇行は白玉楼の中で済んでいるのだ。一振り幽霊十匹を葬るといふ楼観剣で切られても気絶で済むような化け物をまともにも相手にできる存在などそうはいない。

だが、かつての偉人は言った「兵糧を征したものが戦を征する」と。

則ち、秋の深まり始める頃には白玉楼の食糧事情を完全に掌握しきってしまった流司こそがある意味で白玉楼最強の力を誇っていると  
言えるであろう。

「流司、この練り切り本当に柿の味がするのね」

幽々子は子供の手のひら程の柿の造形をしてある練り切りを口に運びながら流司に尋ねる。

「ああ、柿餡を使っているからな。形に関しては才能がないからそのまんまだがな」

練り切りは和菓子の中でも作ることであれば大した労力を必要とするものではなく、難易度も難しいといえるようなものではない。

問題はその後である。

練り切りはどちらかといえば味自体に創意工夫がされるものではなく、その造形に職人の力が注がれるものである。

花などの植物を形作ることと四季の趣を表すのだ。

和菓子職人の腕が遺憾なく発揮される和菓子と言えるであろう。

流司は勿論のこと、和菓子職人ではない。

白玉楼の食糧事情を掌握した現在では菓子作りまで風呂敷を広げているが、その本業は全くとして関係のないところにあることを忘れてはいけない。

そんな流司に和菓子職人さながらの造形技術を求めるとというのが間違いである。

「そんなもの気にしないわ。私は美味しい和菓子が食べられるだけで十分なもの。それにこの造形も嫌いじゃないわ」

練り切りの柿を口に入れながら幽々子は言う。

実に幸せそうなその姿は口になっている言葉に嘘がない証拠であった。

「ありがとう。そう言ってもらえれば作った甲斐があったというものだよ」

幽々子の言葉に流司は微笑む。

何であれ、作ってくれたものを喜んでくれるということは作った人にしてみれば嬉しいものであろう。

「それにしても、流司もだいぶここに馴れたんじゃない？」

「麻痺したとも言えるかもしれないけれどな」

視界の隅で走り回る二つの人影に流司は幼き頃に見た外国のアニメの猫と鼠の姿を彷彿させながら呟いた。

最初こそ気にしてはいたものの毎日と繰り返されていけば流司のスキルも高まるというものである。

今では目の前で戦いが勃発しようとも即座に食器などの被害が被っては困るものを片付けられるほどにまで流司は成長していた。

「ふふっ、そうね。妖忌が戻ってきてから毎日が賑やかで楽しいわ。こんなところだから、普通は騒がしくするような人はいないもの」

「冥界じゃなくてもいないとは思うがな」

心からの喜びを見せるように呟く幽々子に流司は苦笑を見せる。

冥界という場所を考えれば、騒ぎを起こすような真似をする存在は極めて希有である。

幽霊を管理するだけという惰性の延々と続く日常。そこにあるのは緩やかすぎる進行で変化はほとんどありはしない。

それをぶち壊してしまうような妖忌の行動は幽々子の表情を生き生きとしたものに変えていた。亡霊である幽々子が生き生きというのは妙な話であり、騒動の原因を考えれば進歩はなく同じことを繰り返していると言えなくもないが。

「本当に楽しそうだな」

そんな幽々子の姿が不思議と流司にはこの上なく喜ばしく感じられた。流司のそれはまるで手に入れることの叶うはずのない宝物を手に入れることができたかのような喜びであった。

「秋になると悲しくなると言うけど今年は大丈夫そうね。芥子も植え終わり、藤袴も咲き始めたけど、こんなにも楽しいもの」

幽々子の視線につられるように流司も庭の一部に咲く淡紫色の花に視線を落とした。

「秋か……あつという間だな……」

「そうね。あつという間」

「俺はいつまでここにいるんだろうな」

空を仰ぐようにして流司は呟いた。

「あら、いつまでもはいてくれないの？」

「そりゃな、実際問題として人間である俺が冥界に留まり続けることは問題だろう。喻え、俺の身体に異変がなくなるとも、冥界を管理しなければならぬ幽々子の体裁としても、な」

流司の身体に異変がないのであれば、いつまでも流司が冥界で過ごしていいということにはならない。

幽々子は冥界のするという名目で白玉楼を構え冥界に留まり続けている。

生きた人間である流司が冥界にいるということはそれだけで幽々子の管理が行き届いてはいないということにも繋がってしまう。

故に流司はどの道、幻想郷に戻ることになる。

それは流司だけではなく、妖夢や妖忌、白玉楼に住まうもの全てが知っていることである。当然、幽々子もだ。

「……また、帰ってしまうのね」

「仕方がないことだ」

幽々子の表情を暗くした呟きに流司は予め知っていた答えのように自然と首を振る。

「できれば、流司にはずっと傍にいて欲しいのだけど……」

「朝昼晩と食事が食えなくなるからか？」

「ええ、それもあるわ」

からかうように言う流司に幽々子は頬をそっと綻ばせて答える。その微笑みはとても澄んだもので、吸い込まれてしまいそうな深みがあるものであった。

「ま、まあ、ここで暮らさなくなっても前みたいに週に一度ぐらいなら作りにくるさ」

「週六回ぐらいにならないかしら？」

「それじゃあ、今と大して変わらないじゃないか」

全くとして譲歩の感じられない幽々子の問いかけに流司は呆れてしまう。既にそこには吸い込まれてしまいそうな魅力はなく、普段通りも儂くも芯のある幽々子の笑みがあるだけであった。

「その辺りのことはまたその時になったら考えましょう。流司、当然おかわりはあるのでしょうか？」

「はいはい、今お持ちしますよ」

幽々子の手渡す空の皿を流司は受け取り立ち上がる。

「お茶もよろしくね」

「分かってるよ（雪が振る頃には、な……）」

幽々子に返事をしながら流司は密かに胸に日常の終わりを決めるのであった。



頁十一、『和菓子』（後書き）

思ったんだ……

じじいが目立ちすぎてこのままでは誰ルートなのか分からなくなってしまうのではないかと。

ということと補充、兼次への展望的な。

この話に隠された表現を全て察することができた凄い。

色々な意味で。（稚拙な文というのもあるし）

茨歌仙で管狐が出てきていたという驚き。

原作での管狐はこういった解釈のようですね。

正当な妖怪と出ているようです。

まあ、うちのはマスコットだし、そもそも管狐じゃないし、いつか。

「流司、ちょっとそれを取ってきてくれる？」

「ああ、これだな」

「そうよ、あっ、ついでにあれも取って頂戴」

「あ、これか」

流司は次々に幽々子から頼まれた物を手渡していく。

あれそれと言っている幽々子だが何かを指差して流司に尋ねているのではなく。唐突に言葉を発している。

にもかかわらずに流司は間違い一つ起こさずに幽々子の頼むものを手渡していた。

「……最近、仲がいいですね。幽々子様と流司さん」

そんな二人の様子を見て妖夢はぼつりと呟きを漏らす。

「そうか？」

「そうかしら？」

ぴたりと動きを止めて流司と幽々子は互いに顔を見合わせて首を傾げる。妖夢の言葉がよく分からないといった感じであった。

「そついうところが仲がいいと言っんですよ」

「別に私と流司は仲が悪かったなんてことはないわよ〜妖夢？」

「確かに、特段仲の悪いなんてことはないな」

幽々子の間延びした言葉に流司もまた同意を示す。

流司と幽々子の関係はこれといって悪いものであったということ  
はほとんどない。

第一に流司の性格が基本的には温厚であるためにそりが合わない  
相手はいたとしても、特別嫌悪するような相手は流司にはおらず、  
幽々子にしても理由は流司とは異なるが似たようなものであった。

むしろ、誤解だったとはいえ、初対面で切りかかった妖夢の方が  
流司の心の中での印象は悪かっただろう。

「ま、まあ、そうなのですが。以前にも増して仲が良く……いえ、  
息が合うようになったという表現が一番合っているかもしれませぬ」

素の顔でまるで妖夢のことを心配するかのような口振りで言葉を  
返してくる幽々子に些か言葉を詰まらせながらも妖夢は答える。

「俺が白玉楼での生活も慣れて、幽々子の考えも何となく理解でき  
るようになったと言う意味では息が合うようになったかもしれな  
いな」

「そうね〜、欲しいと思った頃にはご飯もできているし、手難いと  
ころに手の届く存在よね、流司は。ほんと助かるわ〜」

「ありがとう。暗に使い勝手がいいと言われている気もするけどな」

「そんなことはないわよ〜」

流司の皮肉を込めた返しにも幽々子は飄々と笑顔を振り撒くばかりである。

普段と変わらぬ光景と言われれば頷くことも簡単な光景であろう。

「いえいえ、普通、あれやそれと言っただけで求めているものを渡すことなんてできませんから!!」

「そう、なの、か……?」

妖夢の訴えに愕然とした様子で流司は口を開いた。その様子はまさに己の常識が丸々ひっくり返ってしまったかのような驚きようである。

「驚くようなことではないと思うんですけど……」

「いやな、外の実家じゃ。アレって言うだけで大抵のものが出てきていたからなあ……」

「どんな家なんですか、流司さんの家は……」

「ここより騒がしいのは確かだろうな」

流司は久しく戻っていない家を家族の顔と共に思い出しながら言う。

「それは楽しそうね」

「まあ、話題には事欠かないんじゃないかな?」

幻想郷の面々にも勝るとも劣らない個性を持つものたちである。探さなくとも話題は勝手に溢れてくるというものだった。

「そうか、やっぱりトメ婆がおかしいのか」

「トメ婆？」

「外の家に住えているお手伝いだよ」

幽々子が首を傾げたのを見て流司は説明する。

「どんな人なのですか？」

「どんな、どんな、ねえ……」

妖夢の問いに流司は腕を組んで唸り声を上げて悩み始める。

それは思い出せないために悩んでいるというわけではなく、表現の仕方が分からないためのものであった。

「お手伝いの鑑ってのが一番的を射ている表現になると思う」

「鑑ですか？」

「ああ、さっき幽々子が言われる前に欲しいものを差し出してくれることもあると言っていたよな？」

「言ったわよ。それがどうかしたかしら？」

相手の欲しいものを即座に察し頼まれる前に差し出す。

これは相手のことをどれだけその人が知っており、気を使うことができるかということにかかっている。

流司ができるのは精々がこのレベルである。とはいえ、これでも十分であると言えるだろう。

「トメ婆の場合だと差し出されたものが後々必要な状況になる。例えば傘を渡されれば、絶対に外出先で雨が降ることになる」

「……………」

幽々子と妖夢は押し黙る。

流司が嘘をついているようには幽々子も妖夢も思えなかった。

だが、鵜呑みにして信じ切ってしまうには難しい言葉であることもまた事実である。

結果、幽々子と妖夢は言葉を発せずにしたのだ。

「嘘じゃないからな？」

「分かっているわよ。こんなことで嘘をついても仕方がないものでも、ね？」

「はい。信じられないといいますが、その方は未来予知ができる能力でもあるのではないですか…………？」

妖夢の言葉は幽々子も思いを同じくするものであった。

「トメ婆曰く“何事も経験”だそうだ」

「……………経験による推察を遥かに超えている気が……………」

「経験というなら幻想郷には遙かな経験を積み重ねて存在がいるものね。その言葉を信じたら幻想郷は予知能力者で溢れてしまっわ」

多種多様の経験を積み重ねてきただけの時間を生きてきたとはい

つても、トメ婆が人間であることは変わらない。

たかが、百年にも満たない経験で予知にも近い予測ができるようになるというのであれば、幽々子の言葉通り幻想郷は予知能力者で一杯になってしまっただろうということは流司にも理解できた。

「もう、『トメ婆』だからということ片づけちゃっているんだけどな」

「賢明だと思うわ。無駄なことを考えるためには人の一生は短すぎるもの」

幽々子の確かな重みのある言葉は亡霊であるからこそそのものであった。

「つか、なんでこんな話しているんだっけ？」

「私たちの息があっているからって妖夢が嫉妬してたのよ」

にこにこ笑いながら幽々子は流司の言葉に答えるように口を開いた。

「なっ、何を「そうだったのか、妖夢。儂はいつまでも黙っててください」

「ガハッ」

幽々子の言葉に顔を赤くし口をパクパクと開き閉じする。まるで酸欠の魚のようである。

流司の視界に一瞬人影が映ったのは気のせいであろう。

「そうだったのか……」

「違いますからッ……!」

「大丈夫よ、妖夢、私が貴女を見捨てることはないから」

依然として顔の赤い妖夢を幽々子は慰めるように抱きしめる。その動きがまたわざとらしく見える。

「さて、俺はそろそろ準備かな」

じゃれ合う幽々子と妖夢を残して流司は立ち上がる。

「あら、今度は流司が拗ねちゃったの？大丈夫、流司のことも好きだからね」

「はいはい、俺もだよ」

幽々子の軽口にも慣れたもので軽く手を振って台所へと下がるのだった。



頁十二、『言葉』（後書き）

何だか、妖夢が突っ込み役に……  
展開は決まっているけどなかなか筆が進まない日々です。

### 頁十三、『心の洗濯』

かぼーん。

「ふぁっ、生き返る〜」

柔らかな温もりに包まれた流司は欠伸を大きく一つ。風呂の縁に頭を預けて全身の力を抜く。

「冥界の風呂で生き返るなんて言葉もおかしいけどな」

苦笑する流司の言葉は尤もなものである。

もし、風呂に入ったくらいで生き返るのであれば冥界の風呂は常に満員御礼となってしまう。

風呂で生き返ることのできる特権は生きているものみに許されたものなのだ。

「まあ、風呂は心の洗濯とも言っし、魂が洗われて転生するっっていうなら正しいのかもしれないが」

ぼつりと呟いた流司の言葉がある意味での的を射ているものである。心。それは時として魂と同義にみられることもある。

洗濯とは清らかにすることであるので、心の洗濯は魂を清浄にするという考えにできないことはない。

即ち、転生の下準備という観点では心の洗濯は実に言えて妙な表現であった。

「っなんてな。だとしたら、前世に似た記憶を持っている俺は何だっつてんだ。洗い残しだらけじゃないか」

自身の考えを流司は極めて軽い口調で一刀両断、否定する。  
他ならぬ、『神代流司』という存在がそれを完全否定してしまっ  
ているのだから無理もない。

「けど、阿求が言うには前世の記憶を持つての転生は色々無理が  
あるみたいなんだよな」

流司の脳裏にふと浮かんだのは完全ではないものの前世の記憶を  
持つての転生を繰り返してきている少女のことであった。

「それに『神代家』が特別短命ってことはないからなあ……」

記憶を有した転生を行うためかその少女 『稗田阿求』ないし、  
『御阿礼の子』は総じて短命であった。

前世の記憶の一部を有しているだけでそれほどまでの影響がある  
だが、『神代家』に特別短命であったという人間は少ない。

多少は早く死を迎える当主などもいたが、あくまでも比較的とい  
う括りから外れることはない。

「穴だらけだし別に大丈夫ってことなのか？全部思い出したはずな  
のに中途半端に掠れている部分も多いしな」

流司が脳裏に巡らせるのは“柳祇”の記憶。

天界での頭痛の後、その一生のほとんどの記憶を思い出していた  
が、こと人物に関してだけその顔にモザイクがかかってしまってい  
るかのように思い出すことができずにいた。

「それにそもそもだ。俺以外にこんなことになっていた人がいるの  
か……少なくとも父さんは違うみたいだし……」

流司の父である隆斗は流司のように前世、先祖の記憶があるようなことはなかった。

隆斗の父、つまりは流司の祖父もまた同じである。

「も、もしかして、俺だけ短命なのか……？ いやいや、そんなことはない、よな？」

自らに問いかける質問には当然のように答えは返ってこない。

得体の知れない不安は流司の心臓を愛でるかのように撫であげる。

「ツウ！！？」

バシャツ！！

流司は胸にある不安を払拭させるために半ば顔を叩きつけるような形で顔を湯船の湯で洗う。

「死ぬかもしれないなんてことを考えるなんて馬鹿げているか。死にたいわけじゃないんだから」

「死にたいなんて考えるなんて馬鹿げている。死ぬなんて言うんじゃない」

「ッ！！」

顔についた水滴を払うようにして首を振った瞬間、鮮明なビジョンが流司の脳裏をよぎる。

「あれっ？ 今のは……」

“柳祇”が語りかけていたのは義清ではない。だが、刹那に流れた記憶で語りかけている人を流司は知っている気がする。

ガラッ。

「ちっ、もう分からない。言葉は分かるんだが、顔がどうしても出てこない」

ピタ、ピタ、ピタ。

流司は苛立ちを隠そうともせず眉間に皺を寄せ顔を歪ませる。それだけに風呂に新たな人影が増えたことに気付いていながらも気にすることはなかった。

「妖忌、今はちょっと話しかけてくれるなよ。もう少しで思い出せそうなんだ」

ちゃぽっ。

流司が気にしなかったのも無理はないだろう。

現在、流司が入浴中であることは白玉楼で暮らしている全員が知っていたことであり、そこにわざわざ入ってくるのは同姓である妖忌ぐらいなものであったからだ。

白玉楼の浴場は二人程度では狭くはならない大きさであったこともあり、流司が気を払うことが全くなかったのだった。

故に、

「残念。私でした」

「へっ？」

何食わぬ顔で隣に浸かっている幽々子の姿を捉えたとき流司が間抜けな声をあげてしまったことは当然であり、

「はいいいいいッッ!!!!!??」

「ザ、ぼーんっつっ!!」

流司が驚きに飛び退き風呂の中でひっくり返ったことも当然であった。

「落ち着いた？」

「落ち着く訳がないだろう」

幽々子と人二人分の距離をとって湯に浸かる流司が顔を赤くして言う。

勿論、流司は逆上せたわけでも酔っ払っているわけでもない。むしろ、流司の心情としてはどちらかであった方がよっぽど楽であったと言えるであろう。

「そんなに離れる必要はないじゃない？別に見られて困るようなものではないのだから」

「ちゃぽ。」

幽々子が一步、人一人分流司との距離を詰めるように動く。

「喻えそうだとしても、見るのに困るんだよっ!!」  
「ちゃぽ。」

流司は幽々子が詰めた距離を元の間隔に戻すために一步下がる。結果として二人の間は依然として人二人分という近くもなければ遠くもない、何とも形容しがたい距離が保たれていた。

「だいたい何で入ってきたんだよ。俺が入っているのは知っていたらろう？」

「何となく？」

「何となくで異性が入っている風呂に入ってくるなよ……妖忌じゃないんだから……」

げっそりと肩を落として流司は言う。

勝手に風呂に上がり込もうとするのは妖忌だけで十分に流司は思っていた。

尤も妖忌のその行動は全て妖夢により阻止されているが。

「あら、ちゃんと私は一声かけたわ」

「聞こえていないんだが」

「奇遇ね、私も返事は聞いていないの」

「いや、奇遇でもなんでもないからな」

顎付近まで湯船に浸かりきった流司は言う。

「無言は肯定と見なすのが世の常でしょう？」

「否定したいところなんだけどな……」

流司の本心としては幽々子の言葉を否定したかったが、理性では幽々子の言葉はある種の理であることを認めていたので否定することが流司にはできなかった。

「それで、入ってみたら何だか悩んでいるようで、私に気付いた途端にひっくり返って、今に至るのよ」

「……まあ、気付かなかった俺に否があるか。もう十分に温まったことだし上がるとするか」

そう言い、流司は傍らのタオルを手に取り立ち上がろうとするが、

「流司、少し待ちなさい」

凜とした幽々子の声が流司のその動きを妨げる。

「……どうした？」

少しの沈黙を置いて流司は幽々子に応える。

「風呂は心の洗濯よ。悩みは全て流してしまってしまいなさい。ちょうど、聞き手もいるのだからね？」

幽々子は流司の心を見透かしたように優しく微笑むのだった。



頁十三、『心の洗濯』（後書き）

好感度によって入ってくるキャラが変わります!!  
風呂イベントを繰り返すことで幻のじじい に……

はありません。

ただ、ギャルゲーとかだとそんな感じですよね……

最近、GREEに嵌る日々。

基本的に聖戦ケルベロスとナイツオブクリスタル、ガンダムマスターズに入り浸っています。

つか、聖戦が面白い。

課金はしないけど……

ハンドルネームは同じなので見かけたら気軽に声かけてください。  
友達、戦友共に募集中ですので（笑）

一言入れていただければ登録しやすいですね。

「そう。そんなことは初めて聞いたわね」

幽々子は流司の告白を茶化すわけでもなく淡々と耳にして流司の話が終わると少し驚いたように呟いた。

「といつてもそれは言葉の上に若干見えるだけの驚きでしかなく、幽々子は極めて落ち着き払っていた。

それを証明するように常日頃はまもつているようなほんわかとした幽々子の雰囲気はなりを潜めて微塵も感じられなかった。

「他人に話すような。話でもないからな」

幽々子の言葉に流司もまた淡々と言葉を返した。

自身以外の記憶があるなどということはそう易々と話すようなものではないだろう。

第一に信じてもらうことができるかが怪しく、最悪の場合は気がふれていると思われるもしかたがないことであろう。

実際、このことに関して流司は父親である隆斗以外には吏妖にも乙女にも話してはいない。

唯一、話を聞いている隆斗にしても初めは信じてはいなかった。先祖にあたる人間の記憶があるとはいっても流司のそれは断片的なものではなかった。

『神代家』は歴史があり、しかも明確な記録の残る家系である。そのことが悪い方向へと影響してしまった。

流司の語る断片的な記憶程度であれば、貯蔵している書物などを少し調べれば分かることであつたのだ。

それだけに実の息子が真剣に話しているとはいっても隆斗にはすぐ信じることのできるような話ではなかった。

今でこそ、流司の記憶に関して隆斗は信じていたが、突然話されたからといって信じることができるような話でないことは変わらな  
い。

ましてや、赤の他人では話されたところで反応はしようにもどう  
していいか分からないというものだ。

「確かにその通りかもしれないわ。それを知ったところで気の利い  
た言葉を言えるなんてことはないもの」

流司が話すことがなかったことを幽々子は責めるつもりなどない  
し、そんな資格があるとも思っていない。

むしろ、

「こうして話してくれたということは私はそれなりに信用されてい  
るということでもいいのかしら？」

流司が少なくとも幻想郷では誰にも話していないことを自分に話  
してくれたことにささやかな喜びを覚えていた。

「よく言うよ。話さなきゃ逃がしてくれそうにもなかったじゃない  
か」

胸の内を吐露したために気が楽になったのか、流司は先程までよ  
りも幾分か軽い口調で幽々子に文句をいう。

「無理強いするつもりはなかったわ。流司だって逃げようと思えば  
できたでしょう？」

「……………そうだな」

確かに流司が形振り構わず逃げようと思えば逃げることは簡単で

あつた。

幽々子はただ呼び止めただけであつて、実際に話をしようと思ったのは他ならぬ流司自身の意志であつた。

「少しは気が楽になつたかしら？」

「ああ、だいぶな」

「それは良かったわ。貴方は基本的にため込みやすいから偶にはこうして気を抜くことも大切なのよ」

血色の良い笑みを浮かべる流司に幽々子は諭すように言う。

「何だか、慣れているような口振りだな」

「妖夢も同じだもの。あの子もそう、真面目ではあるのだけど気の抜き方が下手なの。そういう意味では妖忌が帰ってきてくれたのは僥倖だったわ」

妖夢と流司は性格的な意味では似ている部分が見られる。  
それだけに妖夢にいえることは流司にいえることもなくはないのだ。

「あれはあれで疲れるだろう？」

「それでも発散しているだけ健康的でしょう？」

「かもしれないな」

疲れることには疲れるだろうが、その疲れが悪影響を及ぼしてしまつようなものではないだろうと流司も幽々子の言葉に頷いた。

「ねえ、流司。亡霊ってどうやって誕生すると思っ？」

「何だよ、突然？」

「ん？流司が折角話してくれたのだから私のことも話してあげようと思っ。で、なんだと思っ？」

唐突に話し始めた幽々子に流司は怪訝そうな顔を向ける。

「別に頼んではないんだが……まあ、あれだろ、死んだことに気が付かないか、強い未練があると亡霊になるとは思っなかったか？」

「そう、一般的な亡霊はそうやって誕生するわ」

流司の答えに幽々子は軽く頷く。

「一般的ってまるでそうじゃない亡霊がいるみたいじゃないか？」

「いるから話しているのよ、流司」

「……それって」

何時になく真剣に流司を見つめる幽々子の視線に流司はそれが何を意味しているのかを悟った。

「だから、言ったでしょう？“私”のことを話すって。私はね、流司。生前の記憶がない亡霊なのよ」

「なっ、そ、そんなこと」

「そんなことは有り得ない？でも、実際に私に生前の記憶はないわ。どうして死んだのかも、何が私を引き止めているかも、私が本当に『西行寺幽々子』であるのかも分からない。そう、流司とは反対ね」

流司の言葉を遮るようにして、つらつらと語る幽々子に流司の言葉はない。

反対。確かにそうであった。

自身の知り得ない過去を知る流司。

自身の知り得る過去を知らない幽々子。

この二人の関係はまさに対極のものであった。

「辛く」

「辛くはない？不安ではない？恐ろしくはない？そうね、確かにそう思ったこともあったわ。だって、気付いたら亡霊なんかも。まだ、記憶喪失の方が気が楽だったと思うわ。でも、そう思っていたのも昔の話」

再び流司の言葉を遮るように口を開いた幽々子は遠くを見つめるように語る。

「怖かったですでしょう？」

「ッ！！！？」

心の隙間に潜り込むような幽々子の言葉に流司は息をのんだ。

脈絡もない突然の言葉であったが、流司にはその言葉がどういった意味を込めて投げかけられたか理解できた。

「流司。貴方と私は正反対の存在よ。生者と死者。男と女。知る者と知らない者。けれどもそれは全く違うということじゃない。似て

非なる存在ということ」

流司は幽々子の声に耳を傾ける。  
ただそれだけにしかできなかった。

「流司も私も不安定だった。私は無いがために“自分”という存在に“自身”がなく、流司は有りすぎるために“自分”に自信がない。そうでしょう?」

自分の頭の中に他の人間の記憶があつて平静でいられるか。そのようにはあるまい。

いられないからこそ流司は時折自己暗示のような動作を必要としていたのだ。

その上に他人には理解できないような内容である。

流司が“自身”を保つだけでも大変であるかもしれないというのに“自信”までも完全に持ち得ることなどできやしない。

「貴方は『流司』なの?それとも別の誰かなの?『神代流司』とは一体誰を示す言葉なのかしらね?」

「俺は……」

幽々子の言葉に流司は言葉を詰まらせる。

答えることなどできなかった。

「大丈夫よ」

流司を温もりが包み込んだ。

「ゆ、幽々、子……?」

流司が掠れさせながらも声を漏らす。

「大丈夫、大丈夫だから」

二度目、三度目と囁かれる幽々子の声はこそばゆく流司の耳元を撫であげる。

春を思わせるようなふんわりとした幽々子の桜色の髪は流司のすぐ目の前にあつた。

「な、なな、な、何してるんだよっ!？」

「何って抱き締めているだけよ？」

湯船に浸かっている流司に覆い被さるようにして幽々子が流司の背に手を回していた。

「だから、それが」

「大丈夫。そう思う気持ちは誰でもない。流司、貴方だけのものだから。流司、流司は流司よ。ちゃんと貴方は貴方だから。安心していいのよ」

「幽々子……」

動揺していた流司から熱が失われる。

溶け込むように流司の全身へと渡る幽々子の言葉は確かに流司に安らぎを与えていた。

「それでも不安なら私が貴方が貴方であるという証人になってあげるから。流司、自信を、確固たる自身よ貴方は」

流司の背を撫でる幽々子は我が子を慈しむ母のようであり、また



違うものでもあった。

どちらともにいえることがあるのであれば、そこには確かな『愛』と言える何かがあることだろう。

それが、『愛情』なのか『親愛』なのか、別のものであるかは定かではない。

だが、『愛』と呼べる何かがあることは間違いがなかった。

「さて、私はもうあがるわ」

流司の表情が落ち着いたことを確認した幽々子は何事もなかったかのように流司から離れる。

タオルを抱いて歩いていく幽々子の歩みは変わらず自然体であった。

「幽々子!」

「？」

流司は脱衣場への戸に手をかけた幽々子の背に声を投げかける。

「あ、いや、なんだ……俺も、幽々子が他でもない『西行寺幽々子』である証明なるから。ああ、ありがとう。とても気が楽になった」

「どういたしまして。お礼は美味しいご飯でいいわよ」

そう微笑んでみせると幽々子は風呂を後にするのだった。

頁十四、『抱擁』（後書き）

きやーゆゆ様大胆な回。

サブタイトルと場所からピンクなイメージをした方は出頭してください。

映姫様に白黒つけていただきましょう。

私、完全に純粹な黒でしたが何か？

もしこれが今どき適正年齢どおりやる奴がいるか分からないようなゲームなら、ノクターンな展開でしょうが。

ここではそんなことはない。

まあ、出頭人数によって変わるかもしれないけど。

つか、話の展開上必要だと思えば躊躇い無く書きますよ。

上手い下手はともかくとして。

だって、一番分かりやすい繋がりますから。

因みに個別ルートの一つは少なくともそういう描写を匂わせる程度のことは決めてます。

とまあ、紳士の会話はともかく。

今回の話が幽々子 を作るうと考えた根本にありますかね。

ここで折り返し。

今までが『起』から繋がる『承』であったのだとするならば、ここからが『転』へと繋がる『承』となるといった感じですよ。

さて、頑張りますか。

最後に総合評価が5000を超えました。

誠にありがとうございます。

「結局、一睡もできなかった……」

臆気に明るくなり始めた障子の向こう側を思い眼のしたにはつきりとした隈を作った流司は呟いた。

原因は考えるまでもなく昨夜の風呂場での一件である。

幽々子との会話で流司が長年胸に抱き続けてきた不安はほぼ完全に払拭されていた。

考えてみれば流司の悩みとは単純なものであったのだろう。

自分に自信がない。

文字に書き表してみれば、レポート用紙の一行にも満たないことだ。

人によつては笑い飛ばされてしまったとしてもおかしくはない他愛もない問題であろう。

だが、単純であつたがこそ、それは流司を長年に渡り苦しめる原因となつていたので。

単純であるということはそれだけ解決する手段が限られているということでもある。つまりはそれが見つからなければ、一生問題は解決しない。

分かれ道で異なる道を選んでも遠回りになるだけで最終的には同じ目的地に至る可能性はあるが、一本道を反対方向に歩いていたのでは何時までも目的地に辿り着くことはない。

流司の悩みは後者のようなものであったのだ。

自分に自信がない。その解決策を自身の中に求めることは半分しか正解ではない。

個人を形成するのは自己の意識だけではない。

個人とは別の存在、他人が居るからこそ、個人は個人であることができるのだ。

流司は自分が自分であることを自身の内側のみに求めていて、他人から見る『神代流司』という存在を考えてはいなかったのだ。仕方がないと言ってしまえばそれで終わりだろう。

もし、不安に駆り立てられて誰かに縋るようなことがあれば、もっと早くに解決していたかもしれない。

だが、流司は不安を抑え込み自分を律する程度に強かった。強くあってしまったのだ。

それだけに流司は限界まで不安を隠し通してしまったのである。今まではデジャヴ程度に収まっていたものも天界を訪れて以来、所々に欠落があるとはいえども『神代柳祇』という一人の一生に当たる記憶が『神代流司』の記憶の中に混在することになったのだ。流司に限界が訪れてしまったのは当然のことであった。

流司があっさりと幽々子に話をしてしまったのにはこのような背景があったのだろう。

幽々子に話をできたということは流司にとっては僥倖という他ないであろう。

幽々子が流司とは全くの対極にありながらも、全く同じ悩みを持つていたことは偶然であった。

幽々子が流司が入浴しているところに入り込んできたこともまた偶然であったのだろう。

そのタイミングが流司が頭悩ませているときであったことも偶然である。

幾重もの偶然が重なり合った結果が昨夜の事態を引き起こした。

幽々子の言葉は間違いなく流司を救った。幽々子が流司のことを『流司』として認識し続ける限りは流司は流司でいられることだろう。

だが、幽々子は流司を救ったと同時に流司に新たな悩みを植え付けてしまった。

それがこうして流司が寝不足のままに朝を迎えることになった原

因であつた。

「冷静に考えてみるとなんてことをしてたんだ……」

上半身を起き上がらせて流司は片手で額を押さえる。

流司がそのことに気付いたのは幽々子に遅れること数分、風呂から上がり気持ち良く寝入ろうと横になった時であつた。

抱き締められたという事実はある意味仕方のないことであろう。問題はその姿だ。

場所は風呂。

タオルを手にしてはいたが、白玉楼に湯船にタオルを巻いたまま浸かるなどという野暮な真似をする人間はいない。

即ち、抱き締められたられたとき、流司と幽々子の間を遮るものなど何一つとしてなかつたのだ。

流司には抱き締められたときの温もりだけならず感触までもが鮮明に思い出せてしまう。

忘れようにも幽々子の言葉は流司が忘れられるようなものでは当然のようにない。

故にその言葉を思い出す度に付随してその言葉を耳にした状況をも思い出してしまうのだつた。

更に悪いことに流司が自身のことを自認する度に脳裏に光景がどつしても過ぎつてしまう。それはもう言葉が言葉であつただけにどつしようもないことであつた。結果、流司は青少年らしい悩みに一晩中悶々とする羽目になつたのだ。

「つか、なんであの時すぐに大人しくしたんだよ俺は……」

全くである。

確かに抱き締められたときは抵抗を見せていた流司であつたが、すぐに大人しくなり幽々子のなすがままになつていた。

あの状況下、流司の心身を考えればどうしようもなかったことではあるのだが、冷静になった今、流司の心にあるのは後悔ばかりであった。

後悔と同時に言んでいる自分も僅かにいることが流司の良心をこれ以上ないというほどにせめあげていた。

仮にもこの状況がずっと続くのであるとすれば、まだ先の悩みの方が流司にとって楽であったとこだらう。

「……幽々子とどう顔を合わせていいか分からない」

まだ日も顔を見せ始めたばかりの早朝。  
流司の辛い一日が幕を上げるのだった。

頁十五、『不眠』（後書き）

すみません短いです。

少し忙しくて……

明日はいつも通りの量にしたい。

というわけで悶々としたまま夜を明かした主人公です。

出頭ですね。

頁十六、『起床』

そこにその人影が現れたのは日も順調に登り、辺りがすっかりと明るくなった頃合いであった。

「おはようございます。幽々子様」

姿を現した己の主に妖夢は頭を下げる。

朝の鍛錬はとつくに終えており、汗を流した火照りの余韻さえももう見ることはできない。

「おはよう、妖夢。今日も早いのね」

「私が早いのではなくて幽々子様が遅いのですよ。もう昼時になりますよ？」

手にしていたはたきを置いた妖夢が呆れたように腰に手を当てて呟いた。

完全に日が昇りきるまでにはまだ少々時間がかかるだろうが、妖夢が言うように昼時に差し掛かっているのもまた事実。

少なくとも、朝という時間でないことだけは確実であった。

「あら、本当……」

「本当、じゃありませんよ。どうしたのですか？幽々子様が寝坊だなんて珍しいですよ？」

幽々子が特別早起であったということはなかったが、昼に近くなるまで起きてこないということもまたない。



というのも、朝早く起きすぎれば朝食までの時間が長く、寝坊をすれば朝食に間に合わなくなってしまうので、幽々子は極めて健康的なリズムの生活を刻んでいたのだ。

「私だってこういいうときはあるわ」

「また、雪を降らさないでくださいね？」

「あれは少しだけ利用しただけ。私が降らせた訳ではないわ。珍しいといえば妖夢もよ？掃除なんかしちゃってどうしたのかしら？」

真夏に降った雪のことを思い出したのか、げっそりとした顔をしている妖夢に幽々子は尋ね返した。

手拭いを頭にはたきを傍に置いた妖夢は誰がどう見ても掃除中と叫ぶものであった。

妖夢の傍には他にも水の入ったバケツや雑巾などもあり完全装備と呼ぶことのできる状態であるだろう。

「流司さんが来てから食事や買い出しは流司さんの役目になりましたし、御爺様が庭の手入れをしてしまうので私の仕事がないんですよ。だから、何かと思って掃除をしているんです。これだいたい前からなんですけど初めて知ったのですか？」

「そつなの……偉いわね、妖夢は」

「幽々子様が剣の訓練をしてくだされば本来の仕事はあるのですが……」

妖夢は少し含みを見せた声で幽々子へと声をかける。

「いやよ。別に必要ないもの」

しかし、幽々子はそんな妖夢の言葉をまるで相手になどしてはいなかった。

妖夢の本来の役目である庭師、そして剣術指南役。

この二つの内、主に機能していたのは前者だけだ。

後者の剣術指南役に関しては先代である妖忌から全く実の伴っていない名前だけの張りぼてのようなものであった。

理由は単純明快で幽々子に欠片もやるきがないからである。

それもまた無理のない話だろう。いくら幽々子が物理的干涉のできる亡霊であるからとはいえ、その性質は基本的に“霊”である。努力をすれば壁をすり抜けることも可能であるし、怪我などという概念はなきに等しい。

そんな存在である幽々子が剣術を学ぶことに意味があるのか。恐らくはないであろう。

ある意味で絶対的な防御力のある幽々子は流司のように体術などには必要ない。

攻撃手段にしたところで弾幕の技量があればよく、その上に幽々子の能力は『死を操る程度の能力』。

その気にさえなれば他社を殺すことなど幽々子にとっては赤子の手を捻るようなものであった。よって、幽々子にすれば剣術を学ぶということは時間と体力の浪費にしかないのである。

剣術を学ぶことの全てが全て無駄であるということは幽々子も理解してはいる。

当初、妖忌が幽々子のことを主とし白玉楼に任せ始めたことは幽々子も素直に剣術を学んでいたという過去もある。

だがそれも一週間にも満たない数日の話だ。

剣術を学ぶことで得ることのできる経験に比べ、やはりかかる時間が多く無駄の方が多かったのである。

尤も無駄を無駄としてきっぱりと切り捨てることのできる判断力は剣士らしいとも言えるだろう。

「ですよ。だからこうして掃除をしているんです。何もしいないなんて居心地が悪いので」

これがどこかの巫女であれば喜んでだらけるだろうし、メイドであれば他人に仕事をさせてしまうような隙を見せることはない。

何かできることをと掃除をすることに行き着いたことは妖夢の真面目な性格を端的に表しているだろう。

「ところで、妖夢」

「はい、ちゃんと流司さんが作っておいてくれたので少し待っていてください。温めてきてしまいますから」

幽々子の言葉を読んだ妖夢は幽々子が言い終わる前に言葉を重ねる。

「本当！？ありがとう、妖夢！」

「お礼なら後で流司さんに言ってください。幽々子様がいつ起きてもいいように朝に食べても昼に食べてもいいものを作っていましたから」

手拭いを外して妖夢は幽々子の言葉に応える。

「そういえば、流司の姿が見えないわね。買い物かしら？」

「はい。目の下に隈を作って見るからに体調が悪そうだったので、何だか料理を終えて早々に飛び出して行ってしまいました」

「特売でもあるのかしらねえ……」

幽々子は顎に手を当てて呟いた。

「否定できないところが何とも……」

引きつった笑みを浮かべて妖夢は言う。

「今日の晩御飯は期待してもいいかもしれないわね」

「まだ、朝食も食べてないじゃないですか……」 昼食どころか朝食も食べていないにも関わらず夕食の献立に思いを馳せる己が主に妖夢は仕方なくため息をつくしかないのであった。

頁十六、『起床』（後書き）

作者、多忙の為、二日間お休みでした。  
待望だと嬉しいですが再開です。

今回も短め、ゆゆ様の起床のみ。

幽々子、寝坊。

妖夢、要望。

流司、逃亡。

の三本立てでした。

妖忌？

勿論、野望、無謀、死亡の三本です。

「で、おめおめと逃げてきたと？」

「おめおめって、俺はそんなつもりじゃ……」

嫌らしくニヤニヤとした笑みを浮かべた義清が流司に痛烈な言葉を浴びせる。

勿論のこと流司は義清に反論するもその言葉には心なしか覇気も力強さも無い。

それは義清の言葉を流司が心のどこかで凶星であると思っていたからであろう。

「そりゃ、風呂で抱き締められた程度で顔も合わせられなくなるなんて……今時、いねーだろ？男が清纯派を語っても気持ち悪いだけだぞ？」

「程度じゃないだろ……」

追い討ちをかけるように義清は言葉を続ける。

確かに流司の年齢を考えれば有り得ないほどの初心さであり、義清が呆れかえってしまったのもおかしい話ではない。ものが言えなくなっていないだけいい方であろう。

「程度だつての。その先があつたわけじゃねーんだろ？」

「そ、その先って……」

どもりながら流司は一瞬にして顔を赤らめる。義清の言葉に思わ

ずその“先”を考えてしまったからであつた。

「ああ、顔を赤くするんじゃないよ。気色悪い。乙女かお前はその歳、男にして思春期に入つたばかりの少女か!？」

顔を赤くして俯ける流司に義清は容赦なく言葉を浴びせ続ける。そのあまりの手加減のなさは本気で流司が照れている様子を嫌がっているようであつた。

「いや、でも、な……恥ずかしくないとかおかしいだろ……?」

「おかしいわ!!男なら自己発電しろよ。寝られないとか、アホだる阿呆」

「ば、馬鹿。なんつうことを……」

ある意味で男らしい義清の言葉に流司の顔は赤いままで元に戻る様子は一向にない。

「だから、照れるな。喻えその姿が可愛らしくても俺に男色の気はないんだ。安心しろ、因みにお前のは可愛らしくもないからな」

「……安心しておく」

義清のくだらなく、かつどうでもよい宣言に流司の火照りもようやく治まる。

「まあ、実際問題としてだ。流司、お前はどう思っているんだ?」

「どつ、とは?」

「とぼけるんじゃないねえ。分かっているんだろ？」

「……………」

義清は今までのどこかふざけを含ませていた声を一掃して真剣に流司に問い掛ける。

そこにはもう何一つとして遊びが許されないような張り詰めたものがあつた。

「流司、お前も分かっているんだろう？異性の入っている風呂に入り込むだなんて真似がそう簡単にできるもんじゃねえ。その上、一糸纏わず抱き締めるなんてことが容易なわけないよな？」

「……………ああ」

「んまあ、だ。抱き締められたのはその場の流れだとしてもだ。“好意”のない相手にするようなことではないだろう？」

義清は的確に話の裏に隠されていた真意を表していく。

つまりは『西行寺幽々子』が一定上の、少なくとも共に風呂に浸かっても嫌悪感を抱くことはない程度の好意を『神代流司』に持っているということである。

義清は流司が名前を伏せて話した為に流司に対してそのような行動をとったのが誰であったのか知ってはいなかったが、流司の説明を聞いた上で流司がその存在にとってそれなりに気心の知れて好意を抱いているだろうということは分かっていた。

「そうだな……………」

流司は義清の指摘に小さく首肯する。



流司は感情の機微を察することに取り分けて秀でているなどということはなかったが、これほどのことをされて何も思わないような鈍さも持ち合わせてはいない。

故に自身が幽々子にどう思われているか、薄々ではあるも気付いていた。

「だったらよお」

「だが、その好意がどういうものかは分かんないんだよ。家族に向けられるようなものであるのか、それとも男女の間に芽生えるものなのかはな」

義清の続く言葉を遮り流司は言う。

「んなつ、馬鹿な話が……」

「そんな馬鹿な話の通用する相手なんだよ。それに俺自身が気持ちを整理できていないってのもあるからな」

流司は少しだけ微笑む。

幽々子が流司に向けている情愛がどのようなものであるのか流司には分からなかった。

家族のように接しているのか、それとも別の意図があるのか。

海千山千の幽々子に流司が勝てるはずもなく、その真意は依然として幽々子の胸の内に隠されたままであった。

もしくは幽々子自身も完全に理解してはいないのかもしれないとも流司は考えていた。

どちらにせよ、分からないものは分からない。

そして、分からないのは流司が思う自身の気持ちでもあった。

「（俺が幽々子をどう思っているか、か……）」

その思考は流司が初めて抱くものであった。

「（まさか、初めてこんなことを考える相手が亡霊とは思わなかったけれどな）」

思わず苦笑を漏らす流司。

自身が初めて考える“女性”に対しての感情を抱く相手が既に死んでいる相手なのだから、「冗談にしてもいいところであろう。

「何考えているんだか知らないが、楽しそうじゃないか？」

「そうか？」

一人笑みを漏らす流司に義清は言う。

「ああ。結局は自分の気持ちを素直に大切にする事だな。相手がどう思っただろうが、自分の気持ちに踏ん切りがつかないと恋愛なんてものはできねえーよ」

「流石は聖人というところか？」

「ただの先人の経験さ」

流司のからかいのある声に義清は首を竦めて答えた。

「なら、信用できるか」

「おう、信用してくれ」

経験以上に物を言うものはない。実際に所帯を持っていた義清が言うのだから間違いはないだろう。

「んじゃあ、もう戻るとするわ。悪かったな、突然」

「気にするな。俺も毎日暇してたからな」

会話に区切りをつけた流司が立ち上がり言う。

「そっか、ならまた来るとするよ」

「待ってるぜ。じゃあ……ってそっだ、訊きたいことがあったんだわ！ー！」

流司の背を見送ろうとした義清が唐突に声を上げた。

「訊きたいこと？何だ？」

「流司、お前は“柳祇”の記憶が有るんだよな？」

「ほとんど、な」

流司は確かに“柳祇”の記憶がある。

死ぬ瞬間の記憶もあるからして一生と言っても差し支えはないほどのものだ。

だが、欠落がないというわけではない。

それ故の“ほとんど”であった。

「なら、俺の娘がどうなったか分からねえか？」

「娘？」

義清に娘などいたのか。

という疑問が流司の中に生まれる。

「おいおい、今更とぼけるなっの、幽々子だよ、『幽々子』。ちやんと往生したか？」

「ゆ、ゆ、こ……ッ！……！！！！！！！！」

瞬間にして流司に衝撃がはしる。

驚きではなく、文字通りの衝撃のような激しい頭痛。

「おい！！どうしたっ！？」

流司の膝が落ちる。

もはや立っていることなどできもしなかった。

『……、……幽々子！』

『……んで……！！……鹿な……ッ！』

『……は……方ほど………はない、』

それは暴力であった。

強烈な記憶の奔流が流司の頭を犯す。

「お……、流……！？………」

義清の声が微かに届く。

だが、流司はそれを聞いてはいられない。

『いい桜だろっ?』

流司の知らぬ、義清の声を最後に流司は聞へと飲み込まれていくのだった。

頁十七、『追憶』(後書き)

流司、相談。

義清、恋愛を語る。

そして、蜂起。

次回より過去編です。

頁十八、『想起へ始まり』

花は幽玄に咲き誇っていた。

大輪では決してない。その花の一つ一つは指先に乗っかってしまふ程度の大きさしかない。

だが、塵が積もれば山となるように、小さき花も多量に咲き誇れば、それは大輪と化す。

ひゅー。

一陣の風が吹き抜けた。

文字として書き表してしまえば、どれだけ陳腐な言葉であるのだろうか。

風に袖を揺らした男性はそんなどうでもよい考えの為に頭を働かせていた。

青年、と呼ぶにはその男性は些か成長してしまっているだろう。

それは肉体的という意味でも間違っていないが、漂わせる落ち着いた雰囲気から成熟した大人としての貫禄とも呼べるものを感じる事ができるだろう。

貫禄を感じるのには当然といえることであつた。

男性の名は『神代柳祇』。

何代も続く神職としての家系である『神代家』の当代の当主なのだから。

柳祇が『神代家』の当主となつてからは既に久しいと言えるだけの時間が流れている。

柳祇が『神代家』の当主となつたのは十の半ばのことであつたため、柳祇が当主となり十幾年が経つた現在でも柳祇の姿は十分に若々しかった。

何故、柳祇が十の半ばという若さで由緒ある『神代家』の当主となつたかといえ、それは何の取り留めもない理由、柳祇の父、先代の『神代家』の当主が死去したことにあつた。

先代の当主が特別病弱であつたために年若くして死んだということはない。

死んだと表現したが、詳しく言うのであれば“殺された”というのが正しい。

確かに『神代家』には敵がないこともない。

神社というものは権力者との結びつきがどうしても生まれてしまう場所であり、その名の広く知られた『神代家』は望まずとも多大な影響力を持つており、それを思うがままにしたいとまたは疎ましく考える人間は少なくはない。

それを鑑みて『神代家』にも最近になり用心棒がつくようになった。

代々剣客の血を引いている家系の人間を臣下として迎え入れたのである。周辺を警護するものがあることを公にしても仕方がないために普段は建て前としては庭師という隠れ蓑を着ている人間であつた。

尤も、柳祇の父親の死因はそのような刺客による他殺ではない。

否、他殺であることは事実である。

だが、その犯人は人間ではない。

人外、“妖怪”であつた。

妖怪退治。

それは世に名高い陰陽師の役目。

であつたのは都が栄えていた頃の話である。

今や緩やかな衰退も極まり寂れ始めていた都には陰陽師の姿はない。

それに反して妖怪は度々都に現れては人を襲い喰らっていた。

人が怯え、消え、去っていく。



負の螺旋とも呼べる循環により瞬く間に都は寂れていった。かつての栄華など夢のまた夢であった。盛者必衰。

まさしく、それはこの世の理であった。

柳祇の父もまた同じである。もとより戦いの強かったわけでない柳祇の父親が妖怪を退治しに行き敗れ死した。

ただそれだけのことであった。

無論、柳祇とて悲しみはした。

だが、いつまでも悲しみに暮れていられるほどに世の中は甘くない。

年若くして『神代家』の当主となった柳祇を待っていたのは安らぐ暇もない激動の毎日であった。

とはいえ、それすらも柳祇にとってはもはや過去の話である。

今となつては柳祇は『神代家』の当主たる風格を備え、最盛期を過ぎ始めた現在でも妖怪を退治することのできる力を持っていた。

今とて都に現れたという妖怪を退治とまではいかぬものの追いついた帰路に柳祇あった。

しかし……

「もう、あの妖怪もくることはないだろう」

柳祇は確信を持ったように呟きを漏らした。

それは自身が妖怪を追い返したことに絶対の自信があったからという訳ではない。

徐々に人の消えていく都には妖怪が現れる理由もまたない。

理由もなく姿を現す妖怪に心当たりのないわけでもない柳祇であるが、結局最後まで正体のつかめぬままに終わった妖怪がそのような存在ではないだろうということは柳祇の経験則による感情が訴えるものであった。

怯える人間の少ない地に妖怪が留まる理由もまたないのだ。

「さて、そろそろ寢床を確保せねばならないな」

都から『神代神社』のある地までは柳祇の健脚をもつてしても一日やそこらで辿り着けはしない。

宿があれば泊まるだけの余裕のある柳祇ではあるが、基本的には旅の間は野宿である。

それに今回は家には黙って抜け出し、護衛も着けずにいるお忍びであったのだ。

「今が春で良かった。これが冬であれば些か堪える夜だからな」

実際のところ、柳祇の見るからに軽装備な姿では堪えるどころか死にかねないのだが、柳祇は全く心配など見せてはいなかった。

「では、あの木の辺りを」

再び春の暖かな風が柳祇のことを撫でるように吹き渡る。

そこにひらひらと舞い降りる一枚の花弁。

「桜か……」手を添えるようにして掴んだその桜の花びらに柳祇は周囲を大きく見渡した。

すると、遠方に桜色の山が見える。

「どうせなら、夜桜と洒落込むことにしよう」

柳祇は改めて寢床を決めると桜色に向かい歩く。

その決定が一つの出会いをもたらすとはまだ柳祇は知らないのだ。  
った。

頁十八、『想起へ始まり』(後書き)

区切りをよくしたら短くなった……

過去編、もとい柳祇編の始まりです。

そこへ辿り着いた瞬間、柳祇は思わず息を呑んだ。

桜。

柳祇の目の前にあつたのはただそれだけであつた。

それ以上でもなければそれ以下でもない。

一本の桜の木がその枝全体に花を咲き誇らせているだけである。

それはありとあらゆるものを惹きつけてしまうような妖艶かつ甘美な美しさであつた。

柳祇もまたその一人だ。

物言わぬ大樹にものを言えなくさせられていた。

「いい桜だろう?」

ふと、柳祇に声がかかる。

問いかけるその声に初めて柳祇はそこが何者かの家の敷地内であるということに気がついた。

そればかりか、そこに自分以外の存在があつたことにすら今まで気がついてはいなかった。

“いい”、そこにどのような意味が込められていたかは柳祇に伺い知ることはできない。

絢爛であるか、趣があるか、それとも別のものであるか。

もしかしたらそのいずれでもあるのかも知れなく、そのいずれでもないという可能性も考えられた。

だが、そのような不確定さも飲み込んで納得してしまう。

有無をはじめとする言わせぬ美しさがそこには体現されていたのだから。

「それでいつまでそうしているつもりなのかね？」

「ッ！？今すぐ」

柳祇に問いかける声にどこか呆けていた表情を一変させて柳祇は慌てて声を漏らした。

敷地内、つまり柳祇がしたことは不法侵入以外の何ものでもない。これが身分の高い人間の屋敷であるならば、下手をすれば問答無用で殺されておかしくはない。

実際、神代神社に参拝以外の不純な目的で立ち入ろうとすれば、忽ち御庭番の手によって捕らえられてしまう。

身分でいえば、ある意味相当な位にある柳祇ではあるものの、この場においてはただの侵入者に他ならない。慌てて立ち去ろうとするのもまた頷ける話であった。

「ああ、そういう意味で言った訳じゃない。いつまでもそのようなところで立っていても疲れるだけだと思ってな。ここに来たらどうかな？」

だが、その声の主は柳祇を咎めるようなことはせず、落ち着き払った声色で柳祇のことを招き入れるように呼ぶ。

深みのある声はその声の主をよく表しているだろう。

その顎に髭はなかったが、髪は白く、顔には少なくとも皺が見られる。

柳祇に声をかけたのは、あえて言うのであれば盛衰における“衰”を迎えている老人であった。

だからといえ、もはや寝たきりの生活を送らなくてはならないほどの状態ではない。

縁側に腰を下ろし満開の桜を眺める様子は穏やかに老いを重ねていつている充実さに溢れている。

「なに、遠慮することはない。こんなところだ。来る人など限られている。これも何かの縁だ。少し話し相手になって欲しいものなのだが……」

なかなか口を開かない柳祇に老人は努めて優しげな口調で言葉を重ねていく。

確かにこの家があるのは人の訪れることが少ないだろう山の一角。都が栄えていた頃であれば行商人や旅人など人が行き交うことも多かっただろうが、今となってはそれを望むことはできないことは柳祇も悩むまでもなく理解できることであつた。

「……………」

だが、柳祇は黙つたまま動こうとはしない。

むしろ、老人の言葉に警戒心を上げ、些細な動きでさえも見逃しはしないという敵に対するような様子を見せていた。

何故か？

それもまた無理のない話であつた。

このような場所に家があることは間違いなく不自然なことであつた。

となれば、その住人が必ずしも真つ当な人間であるかは保証できない。

うかうかと入っていったら山賊の住処であつたとしても不自然ではない。

そして、それ以上に……

「（妖怪か……？）」

柳祇が油断を見せない最大の要因はそこであつた。

身振りの節々から品の見える老人が山賊などという輩ではないこ

とはうかがえる。

けれども、不自然であることは変わらない。

そこで柳祇が行き着いた推測は老人が人間ではないというものであった。

旅人を家の中に招き入れて食らってしまつなどよくある話である。

もし、老人が妖怪であるのならば見た目など全く安心できる要素にはならない。人間と妖怪の身体能力など比べることすら烏滸がましいのだから。

「（妖力は感じられないか……本当に人間なのか？ 違う場合は厄介だな……）」

じつくりと老人の様子を窺う柳祇には老人から妖力を感じ取ることはできなかった。

だが、それもまた柳祇が安心できる要因とはなり得ない。

上位の妖怪ともなれば自身の力を隠すこともお手のものであり、高名な退魔師であっても気付くことができないなどということもあつたからだ。

故に柳祇は気を抜くことがない。妖力を完全に近いレベルまで隠すことができる妖怪と戦い勝つことができるかといえば、柳祇にそのようなことはできない。

これが行きであれば何とかなる可能性はあつたが、帰りとみなれば柳祇の手元に残っているものは簡単な護符程度のものでしかなかった。

「はて、そこまで警戒する理由など……もしかや正体を疑っている…

…?」

「……………」

「……正解、のようだ。だが、しかし困ったものだ。このような場所ので隠居しているのが悪いのだがな。違うといっても信じてはもらえないのだからな」

老人の呟きに柳祇は警戒を高めることで回答とする。

老人が呟いたように“違う”と言ったからとはいえ、“はいそうですか”と信じることなどできるはずもない。

「これは弱ったな。名乗ってもいいのだが、その後のことを考える  
と……」

腕を組んで老人は首を傾げ悩み始める。

「名乗りが貴方の証明になるとは思わないのだが？」

口を開いた柳祇の言葉は尤もなものであった。

名乗ったところでそれが証明になるということは余程のことではない限りはない。

そもそもが、老人の言葉を信じることができないのである。それは無理というものであった。

「それでも、それなりに名は知られているはずなのだがねえ……」

「そんな人間こそこのような所にいるとは思えないが」

「“人間”には色々な人がいるだろう？」

“人間”の部分を強調して老人は言う。



「同意はできるが。貴方を信用する保証にはなり得ないよ」

「なら、私が保証しましょう」

凜とした声が響いた瞬間に柳祇と老人の間に一人の女性の姿が現れる。それは柳祇の知る女性の姿であった。

「あの人は間違いなく人間よ。この私が保証するわ」

「紫……」

金の髪を揺らし上品に微笑んで女性 『八雲紫』は柳祇に告げる。

「また来たのか……」

「あら？いけなくて？」

「いや、娘も喜ぶ。だが、少しはまともな現れ方をできないものか？」

「これは私のアイデンティティよ」

老人は老いが急速に進んでしまったかのような疲れを滲ませた声で紫に問うが、紫はしれつとした態度で答えるだけである。

「あい、でんててー？またよく分からないことを……で、彼に私の正体のことを証明してくれるかね？」

「そうね。柳祇、大丈夫よ。この老いばれは人間だから。よっぽどことがなければわざわざ老いた人間の姿をとる妖怪などいないわ」

「中身は婆の癖に」

とすつ。

「何か言ったかしら？」

ぶんぶんッ！！

紫の冷たい笑顔に老人は大きく首を振る。

その傍らには大振りの刀が突き立てられていた。

「分かったかしら？」

「ああ、分かったよ（紫以上に怖い妖怪はいないということがな）」

「……まあ、いいわ。分かったならいつまでもそんなところにいる必要はないわ。上がりなさい」

「「お前の家ではないだろうに……」」

思わず老人と柳祇の声が重なる。

「勝手知ったる友達の家よ」

やはり、紫は二人の眩きを気にすることなどない。

「いいだろう。さて、久しぶりのまともで対等な客人だ。出来る限りもてなすでしょう。あがるといい」

老人は立ち上がると柳祇を招くように言う。

「貴方は……？」

「そういえば、名乗ろうとした途中であつたか」

柳祇の言葉に老人は眩く。

「私は『佐藤義清』。人は『西行』などと呼ぶが、しがない歌人だ」

頁十九、『想起へ出会い』（後書き）

お久しぶりですー!!

保険を使って同じ型、同じ色の携帯が届いたら、「私は三番目だから」というように登録していた単語が全くない相棒に四苦八苦している空ノ鎖です。

登録していた単語までは移すことはできないようです。

更新再開です。

ただ、ペースは少しだけ落ちる可能性が。

というのはそろそろ学園祭なのですよ。はい。

サークルの方の準備で忙しい可能性があります。

なるべく、連日を目指しますがね。

というか、連日でしないと終わりが見えないんですよ、これ。

後、五人いるんだぜ？

その上、共通もまだ……

つうことで頑張らせていただきますー!!

ファンが大きく減ってないといいのですが。

たくさんの励ましの言葉（笑）ありがとうございますm（）（）m  
これで作者はまた戦えます。

では

追伸

じじいが舌足らずに「あい、でんててー」などと叫んでも全くときめかないものですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2652q/>

---

とある神主の幻想録

2011年10月20日23時06分発行